三田村鳶魚著

滑稽本名作集

大日本雄辯會講談社版

評釋
江戸文學叢書
月報

昭和十一年二月十五日印刷
昭和十一年二月二十日發行
東京市小石川區音羽町三ノ一九
大日本雄辯會講談社
編輯發行人　川村新次郎
東京市小石川區諏訪町五六
印刷所　常磐印刷所
印刷人　奈良直一

菊池寛氏曰く——

講談社から出てゐる「評釋江戸文學叢書」は、中々いゝものである。藤井乙男博士の「西鶴」の評釋など殊にいゝ。樋口慶千代氏の「傑作淨瑠璃集」も親切ないゝ本である。云々（「文藝春秋」所載）

江戸時代の文學に就て（承前）

——滑稽本の管見——

◇初期の滑稽本

滑稽本とは其の名の如く滑稽諧謔を主とした特殊の小說書の稱であつて、寶暦頃に流行した談義物や、洒落本から轉化したものであります。その初めがどの邊であつたかについては、本卷の概說で詳述されてありますが、所謂、滑稽本らしくなつて來たのは、寶暦頃の風來山人のものからであります。

風來山人（平賀源内）は名を國倫、字を士彝、號は鳩溪、福内鬼外、天竺浪人などと稱し、讃岐志度の足輕の子であります。本草學や物産學に長じ、火浣布、金唐革、源内櫛などを作つて資を得ようとしましたが、山師と見做されて思ふまゝにならなかつた上、自恃する經史の學は一顧をもされず、その不平不滿が發して幾多の奇矯な戲作を書くやうになりました。風來山人の作に「根南志具佐」（寶暦十三年刊、後篇は明和六年刊 江戸版）があります。書名は根無し事の架空談の義で、「當世下手談義」（半紙本五冊、寶暦二年刊、本卷參照）の滑稽教訓から脫して、單に滑稽を盛つたものでありますが、當時素晴らしい評判を得て三千部を賣つたといひます。

◇洒落本の過渡期のもの

洒落本の中でも非本格的のものは、遊里遊女を背景とせず、多少趣を異にして居ります。「變通輕井茶話」（山手馬鹿人（大田南畝）撰、勝川春章畫、安永年間刊）はその例でありますが、嘉兵衞といふ商人が、伊介といふ下僕を連れて、中山道を江戸へ下つて來る。その途中、追分・沓掛の宿を越し、輕井澤の津川屋に一泊して遊女を招いた。所が土地の風俗や方言等が異つてゐるので、その會話の間が合はない。そこに可笑味を求めたもので、當時この趣向は讀者の意表に出たものでありました。

この作の影響を受けたものに、「田舍芝居」（萬象亭撰、天明七年刊）、「田舍談義」（竹塚東子撰、寛政二年刊）、「面美多勤身」（郭通交、郭集交撰、寛政年間刊）などがあります。

「田舍芝居」は、越後國大沼郡南鐙坂村で豐年踊曾我田植といふ芝居が興行される。其折の田舍の觀客の野趣に滿ちた素朴な樣を描寫して、それに村の若い男女茂作・おさじの甘い戀を織込み、越後方言を用ひて可笑味を添へたものであります。その序文に、

「洒落本の洒落を見て洒落る洒落は、洒落れた所が洒落にもならねば、たゞ可笑しきを專

らとすべし」

と言ひ放つて居りますが、山東京傳はこの文を讀んで怒り、著者の萬象亭と義絶したと言ひ傳へられて居ます。今迄はほんのつまにしか用ひられなかつた田舍言葉が、こゝでは全篇の興味の中心となりました。そして吉原・深川等の通の世界ではほんのちよつとばかり描かれてゐた田舍客の遊びが、全篇の主材となつてゐます。即ち洒落本の本格的なものからは餘程離れて來てゐるのであります。

「田舍談義」は、江戸の郊外千住附近金田村の寺で談義説教がある。其處へ集る村人の世間話や、説教場の光景を寫し、田舍生活の狀態や、後家のただれた戀を織込み、田舍言葉を用ひて可笑さを現したものであります。

「面美多勤身」は、江戸深川の花村屋の客、巳之介・辰五郎の兩人が遊女を相手に、伊勢遷宮を參拜した話を語り、其の道中の街道筋にある旅籠屋、茶屋女の評判や、名所名物、芭蕉塚・芭蕉の句などを說いてゐる。其の隣室には客の花香が遊女と對坐して、其の話を聞きながら、洒落に富んだ會話を交はしてゐる。さうした間の可笑味豐かな情景を描寫したものであります。

以上述べましたものなどは、全く洒落本と滑稽本との差別のつき難い、其の過渡期のものであります。嘗ては紅燈綠酒の巷に通つて、寛濶な心になる、其の通、其の粹、其の洒落を描寫したものも、行詰つては讀者を面白がらすに足らなくなりました。ここに於て不粹な田舍者を拉し來つて、讀者を面白がらさうとした、それが展開して後に滑稽本となつたのであります。

◇「東海道中膝栗毛」

十返舍一九は、以上の如き趨勢を見てとつて「東海道中膝栗毛」を作りました。一篇出づる毎に讀者は待ち構へて買ひ、非常な好評を博しましたが、これは滑稽の上に新機軸を出したのが、一般に喜ばれたのだと思ひます。ただし、その滑稽は深い人生の探求から泌み出たものでなく、極めて概念的なものであります。又古い狂歌や、落語をその儘襲用して事件を作り上げた所も少くなく、地口や語呂や又はそれ等の聯想からなる洒落が大部分を占めてゐるので、鼻の先の笑ひに止ることが多く、深みがありません。わざ〳〵宿場女郎の話や、「ふんどし」「きんたま」などの下卑た言葉を連發して、反つて醜惡な感じを起さすやうな處も相當にあります。然し「膝栗毛」

西鶴名作集を讀む

名古屋醫科大學教授　石田元季

（前略）博士の研究は手堅さを極めたものである。しかも本書の序言において、博士は五人女が明治二十三年に始めて神田の本屋から活字になつて出たことを述べられて居るが、その頃から四十餘年の研鑽を西鶴に積まれた博士である。本書が細に入り微を穿つてゐることは言ふ迄もない。まづ最初の三十五頁を占める解題年譜、それは博士にして描き出し得る西鶴の全貌であり、今日までの西鶴研究の輯要でもある。次に本書に採收せられた好色一代男、同五人女、同一代女、日本永代藏、世間胸算用各書の本文と頭註とであるが、校訂の精微さは博士一流の克明なもので、固より絶對的の信用を置くべきもの、これ迄の飜刻書の誤讀を訂された所も少くない。

その頭註も行屆いたものである。さうして細字百二十頁に亙る追考に至つては、右の代表的な鶴翁の五書の語句を詳解して剩さざるものである。たとひ假初の一語でも引詳擧例要を盡さざれば止まれない點は、涙ぐましい程の深切である。例へば如何が書くべしといふ語格に就いて、うなゐ松、擧白集、犬つれ〴〵、不忍が池物語等を擧げ、梟の赤頭巾に就いて、日次紀事、兩吟一日千句、西鶴名殘之友、和漢三才圖會、大阪獨吟集、蔭の實、

が、それ以前に我等の祖先が持つてゐた多くの滑稽味を、集大成したといふ功績は認められると思ひます。

この書は、古くは「東海道名所記」（淺井了意作、萬治元年刊）、近くは「面美多勤身」（おもひたつみ）などによつて著想したもので、東海道の旅行記とも名所案内とも見えるのですが、其の中に先人によつて表はされた滑稽趣味の總てを織込み、名所・風俗・方言を寫すにも、可笑味を構成するための材料としてゐる觀があります。

◇一九の逸話

一九の傳記に就ては本巻に詳述されてありますから略しますが、無口であつた割合に奇行のあつた人で、嘗て江戸居住の折、或夏の朝早く起き出て見ると、殘月が殊の外面白かつたので、それを眺め〳〵て日本橋まで歩き、興に乘じて家に歸るのを忘れ、遂にその足でその儘京・大阪まで旅をしてしまつた。三ケ月餘りも遊んで家へ歸つて見ると、その家の中の亂雜な樣子は舊のまゝ少しも變らないでゐたといふ珍談もあります。

「東海道名所記」挿繪

寛政六年の秋江戸の通油町の書肆蔦屋金三郎の食客となり、錦繪に用ひる奉書紙にドウサなどを引く仕事をしてゐましたが、その蔦屋の望によつて黄表紙「心學時計草」三卷を作り、寛政七年に出版したといふことであります。彼には又小咄集十數種の作もあります。「落咄風の神」「落話三番叟福種蒔」「新作口合はなし鰻」「百の笑」「落噺見世開」等がそれであります。

◇「浮世風呂」と三馬

式亭三馬は、前述の「東海道中膝栗毛」の趣向を風呂屋や床屋の場面に應用して、「浮世風呂」「浮世床」を作りました。彼はまた、一夕歌川豐國の許で三笑亭可樂の落語を聽き、其の錢湯の笑話に趣向を得て、「浮世風呂」を作つたと言はれて居ります。

「浮世風呂」は、風呂に來る男女百五十人程を取扱ひ、當時の世態・人情・風俗を明快に活寫したものであります。結構や文句の悉くが三馬の獨創であるとは斷言出來ませぬが、會話で綴つた中に、人々の心の動きを現す語

五元集を引き御町といふことに就いて、花柳古鑑、寛永明暦筆記、吉原戀の道引、新吉原つれ〳〵草、置土産を抄出するが如き類で、必要な限り種々の書から畫圖を拔いて夥しく挿入して居られる。博士の熱心なる、これに追々考といふものさへものして、その次の配本に附錄せられた。

博士は今や京大の名譽教授として洛北の閑居に悠々研究を樂しんで居られるが、現に同大學で江戸文學を講じて居られる潁原學士の綿密を極めた實證的な研覈は學界の聲を齊しうして推稱する所である。博士も亦た善き後繼を得られたものと思ふ。

この「西鶴名作集」には學士の考說も紹介せられてゐるのである。またこの書の資料の捜索や蒐集等で博士を助けられた野間文學士は、藤井潁原兩先覺の衣鉢を受け、堅實な研究を以て立派な業績を擧げて居る方である。本書の價値の高さは勿論であつて、このうはしさまで添つてゐることが堪まらなく嬉しいのである。云々

我國最初の歌舞伎脚本研究書

（都新聞評）

（前略）河竹繁俊氏の近業「歌舞伎名作集」は我國最初の歌舞伎脚本研究書とも名づけ得らるゝ名著ではないかと思ふ。內容は各時代

氣の微細な點まで、充分書けてあり、其の間に限りなき變化を見せてゐます。また中には自分の店に賣る薬品の功能などをも述べてあつて、彼が商賣にもなか／＼抜け目がなかつたことがよく判ります。

三馬は少時から書店に奉公し、その間に好きな道である稗史、小説、戲曲を耽讀したので、天禀の文才は遂に彼をして戲作者たらしめました。その處女作は黄表紙「天道浮世出星操」で、これに次いで「人間一心覗替操」を著はしました。寛政六年二十歳の時であります。

三馬の號は、唐來三和の三と、烏亭焉馬の馬とを取つたのだといひます。彼は唐來三和の文を慕つて更にその長所を發揮しました。曲亭馬琴はその著「物之本江戸作者部類」に、三馬の無學を嘲つて居りますが、馬琴ほどの物識りではなかつたけれども、廣く群書を渉獵し、且才子であつたから、之を活用して二分三分の學問を七分八分のものに應用することが出來たのであります。

彼は癇癖で、酒癖も惡かつた。そのために度々人と衝突しました。殊に馬琴の物識り振つたしかつめらしさは、三馬の最も嫌つた所で、屡ゝ得意の熱罵を浴せました。彼は敵討物の流行を憤慨して、

「高が草雙紙の作者だから腹は知れてゐやす。餘り白癡おどしに、ちんぷんかんぷんはやめなせエ。夫れだから敵討に世を奪はれた。喜三二・春町・全交・三和と、此の大家を調合して書いて居れば間違ひなしサ。大きに御世話だといふだらう」

といつてゐますが、その目指す當の敵は實に馬琴でありました。

又或時は鳶人足の爭闘があつたので早速それを題材として、寛政十一年春「夫南木是嘘木俠太平記向鉢巻」を著はした所、よ組の鳶人足を誹謗したといふので、その正月五日、三馬及び書肆西宮新六の家は、彼等の爲に破壊されました。そしてこれが公事沙汰となり、鳶人足は入牢し、新六は過料に、三馬は手鎖五十日に處せられました。併し禍却つて福となり、此の處刑のために三馬の名聲は反つて高まつたのであります。

滑稽本には前述の外に「舊觀帖」「八笑人」など、特色ある數々の名作がありますが、それは紙面の都合上本巻に讓ります。

◇滑稽本の刊行と形式

滑稽本の刊行は、寶暦頃から起つて次第に

の代表者五人のその代表作五篇と併せて參考として繪入狂言本の「源平雷傳記」と「けいせい佛の原」の二篇を添へてゐる。

しかもこれらの作品は、先づその作者の生涯や、史的位相や前後の情勢やを詳しく述べ、先に云つた時代の背景を明らかにし、次いで本文に入つて、それには篇中の難解な字句、例へば劇場専門語、或は當時の俗語や流行語等、耳遠きもの一切に詳細なる註解をほどこし、別に舞臺面見取圖の他、古版畫其他を豊富に挿入して、これも前に云つた演出方面の事柄を痒いところへ手の屆くやうな親切さを以て説明してゐる。

殊に本書に於て興味深いのは繪入狂言本二册で「源平雷傳記」は初代團十郎の荒事であり「けいせい佛の原」は坂田藤十郎の傾城買ひの芝居の中でも有名な梅永文藏である、此元祿期の東西二名優の芝居をこゝに髣髴として見せたのは、歌舞伎研究に志すものにとつて、正に旱天に雲霓を望むの喜びである。尙前に書き漏らしたが、他五篇また悉く歌舞伎根生えの作品のみで、淨瑠璃に出發した所謂「竹本物」を一篇をも加へてゐないのも歌舞伎名作集の名にふさはしく、この道の後學者に示唆するところ頗る多い、前回の藤井博士の「西鶴名作集」に次いで、更にこの名著を贈つた大日本雄辯會講談社の「評釋江戸文學叢書」は、いよ／＼その眞價を發揮したものと云へる。

流行し、化政頃に至つて其の全盛期に達し、天保以後から漸次衰微してしまひました。

今その刊行されたものゝ中から若干を拾つて見ますと

○當世下手談義　五　靜觀房好阿　寶暦二年
○教訓雜長持　五　伊藤單朴　同
○下手談義聽聞集　五　臥竹軒　同　四年
○返答下手談義　五　自他樂庵儲酔　同
○教訓里諺錢湯新話　五　伊藤單朴　同
○當世花街談義　五　北巌坊　同
○花菖蒲待乳問答　五　柳堤居背阿　同　五年
○教訓反故溜　五　守獣齋南樂　同十一年
○根無草前編　五　風來山人　同十三年
○風流志道軒傳　五　風來山人　同
○楚古良探　五　單朴遺稿　明和五年
○當世阿多福假面　二　粥腹得心　同
○指面草　一　山東京傳　天明六年
○小紋雅話　一　山東京傳　寛政二年
○田舍芝居　四　萬象亭　享和元年
○東海道中膝栗毛初編　一　十返舍一九　享和二年文化六年完結
○有喜世物眞似舊觀帖初編　一　感和亭鬼武　文化二年
○住吉街道綾繰戯　二　桃尻山人　文化三年
○譚話浮世風呂前編二　式亭三馬　同六年同十年完結
○市中滑稽蛙のあゆみ　二　一鶏亭美山　文化六年
○切抜繪本浮世七枚早替胸機關　式亭三馬　同　七年
○柳髪新話浮世床初編　三　同　同八年文政六年完結
○花江戸芝居客者評判記　三　同　文化八年
○人間萬事虚誕計　一　同　同十年
○假名手本藏意抄　一　三馬補綴萬壽亭正二編　同
○例之酒癖一盃綺言　一　式亭三馬　同
○古今百馬鹿　三　同　同十一年
○花暦八笑人初編　二　瀧亭鯉丈　文政三年
○滑稽和合人初編　三　瀧亭鯉丈　文政六年
○魂膽夢輔譚初二編六　一筆庵主人　弘化二年
○妙竹林話七偏人初三編九　梅亭金鵞　安政四年

次にこれらを板式の上から考へて見ますと半紙本形も小本形（半紙二つ切り）もあります。が、只管笑ひを誘ふを旨とした滑稽本として完備したものの初は、十返舍一九作の「東海道中膝栗毛」で、其の書は中本、即ち糊入みよし紙二つ切りの大きさであります。それから後の滑稽本はいづれも此の中本の形を取るやうになりました。挿畫は當時の浮世繪師の筆に成つたものが多いのであります。

◇滑稽本の内容と其の價値

(1) 滑稽本は、人の笑ひを招く人物を取出して、それ等の人々によつてなされる非常識な行爲、奇矯な言動・性格、失敗錯誤などを描寫したものであります。

(2) 巧みな詭辯、物事の曲解、皮肉、頓智氣、揶揄、愚弄、諷刺、見當違、穿違、不合理な辯などが利用されてゐます。語句の上に於ても、地口、語呂、縁語、兩用言葉などが用ひられ、またそれ等の聯想から來る洒落なども利用されてゐます。

(3) 滑稽味を豐富にするために狂歌を澤山に應用して居る。これを「膝栗毛」に見ても、正・續・續々編を通じて三百五十餘首の狂歌が含まれてゐます。

(4) 色々な階級の人物を色々な場面に配し、それ等の個性や性格を、作者が一々説明する事なしに、その行動や身振や、身分の相違によつて異る色々の言葉や、乃至は、各地方の方言國訛り等によつてこれを知らせようとし、更に其の語調語氣の中に躍動する心の感觸を見せようとして、精細を極めた寫實を試みてゐます。これは滑稽本に於ける人物描寫の特徴であつて、歴史的人物や浪漫的架空事件を描寫する馬琴などの讀本とは、全然態度を異にして居ります。

(5) 前述の如く、滑稽本は實社會の一面を其の儘に描寫したものであります。それには往々誇張した所があるとは言へ、概して寫實的で宛らその時代に生活して、目の邊り知人に接

するやうな親しさを感ずるのであります。滑稽本の長所は、此寫實的で精細な描寫の中に生活上の性癖短所習癖等を穿ち、それによつて讀者を笑はせる處に存するのであります。

(6)滑稽本は小話を集成したものであります。そしてそれ等の小話が、「膝栗毛」に於ては同じ主人公、「浮世風呂」「浮世床」に於ては浴客及び理髪者といふ同じ點に於て、種々な人物や、それ等に關する事件が纏められてゐます。從つて西鶴の浮世草子に見るが如く、筋の取扱に重きを置かないで、それ等の人々の異つた個性・言行・事件等の上に變化を求めたものであります。ですから筋を複雜にして其の上に重きを置く讀本とは、その行き方が非常に違つてゐます。

(7)滑稽本には前人の作に成るものから焼直しをしたものが隨分多い。即ち「東海道中膝栗毛」第五編に、彌次郎が宙に虎といふ字を書いて、已れに吠えかかる犬に見せた條は、「東海道名所記」に、樂阿彌が虎といふ字を書いて、已れに吠え付く赤犬を退けた條から得たものであり、また三島宿の條は、「變通輕井茶話」の遊女の可笑味に據つたものであり、古市の對話は、「面美多勤身」にある深川遊廓の會話に據つたものであります。これ等は其の一例を擧げたに過ぎないが、又古い落語や能狂言などから趣案したものも往々あります。三馬はまた、九の「膝栗毛」を學んで考案し「浮世風呂」「浮世床」を作りました。「東海道名所記」「[illegible]」「錢湯新話」（山東京傳作、享和二年刊、三冊）などの焼直しも見えてゐます。要するに滑稽本作者も亦多くの書物を讀んで、その面白い處をとつて實社會に應用し、可笑味をもたせたので、その文才と價値とは充分認めることが出來ませう。

に若くは滑稽本を研究する事に於て、其の時代の種々相や、生活狀態などを如實に窺ひ知る事が出來ますが、たゞ甚々誇張に誇大された作の物語であつたり、方言國訛りも單に滑稽的に用ひたものであつて、必ずしも其の地方等を示せるものではないといふ事にも留意せねばならないのであります。

要するに滑稽本を讀んで可笑しがるのは、現時に於ける落語を聞いて可笑しがるやうなもので、其の價値も亦殆んどそれに等しいと思ひます。然しさうしたたわいの無い感興であるとは言ふものゝ、それが何年となく續々と出版され、讀者も亦倦くことなしに面白がつて之を愛讀した滑稽本流行時代は、洵に羨むべき寛濶泰平な時勢であつたと云へませう。

俳諧名作集

（大阪朝日新聞評）

江戸文學、特に俳諧文學の研究に造詣深い穎原退藏氏が、今度「評釋江戸文學叢書」の一册として表記の著作を公刊した。いふまでもなく江戸文學の研究に志す人々のために俳諧の歴史的發達の跡をたどりつゝ諸家諸派の作風とその各々の特色を窺ひかつその代表的作品を鑑賞することのできるやう十分の用意をもつて編述され、俳文學入門の書であるから、その大部分は貞門談林以來徳川末期に至る六十五名家の名作句を選んで評釋し詳しい頭註を附してあるが、單に俳句の內容や表現についての評釋のみにとゞまらず、それぞれの人物とその作風の特色を簡明に紹介してあるうへ、更に俳諧の本領ともいふべき連句についても一わたりの知識を與へるためにその一般概説を添へて初學の參考とし、芭蕉の連句「[illegible]」「[illegible]」蕪村の連句「[illegible]」などの作を選んで詳細に評釋し、なほ俳文も代表作三十六篇をとつて詳解してある、思慮極めて綿密な穎原氏であるからその一言一句も忽せにしない忠實な研究の態度はいつものことであるが感ずるの外はない。

芭蕉の「奥の細道」の行程を辿らはした地圖を添へたり、篇中難解に古俳人の肖像や筆蹟や俳書の內容版式等をあらはした參考圖版を數多挿入してゐることも、また著者の用意が至れりつくせりであることを示してゐる。

編輯雜記

○我が「評釋江戸文學叢書」が、全くの未開地であつた江戸文學の廣野に一歩を踏み出して以來、その足跡はクッキリと印せられて、學界における驚嘆の的となり、講談社がよくもこの至難な事業に手を染めて呉れた、よくも立派なものを出して呉れたと、賞讃され感謝されて居ります。

○先日、高野辰之博士よりも「あれは大變良いものだから、どんな犧牲を拂つても是非完結して呉れるやうに」とのお話がありました。

文壇の大家菊池寛先生も本社員に對してあれは良い本だから文藝春秋へも書いておいたと言はれて居りました。

又製本裝幀についても、品位と永久性とを持つた近頃にない出色のものだと各方面から賞讃されて居ります。

○かうして到る處賞讃と有難いお褒めのお言葉を頂いて居りますが、これも偏に著者先生方の御熱誠の賜物であると共に、讀者諸賢の御聲援の結果であると存じます。

先生方の御苦心は實に想像以上その御努力に對しては、全く敬服感謝の外ありません。

○「傑作淨瑠璃集」の著者樋口先生は、三年も四年もの間殆んど徹夜又徹夜といふ超人的努力を續けられ、一つの語を考證する爲に半月一月も考へられたと云ふやうな事も屢々であります。校正の如きもあの厖大な九百頁の大冊を、初校再校は勿論、六校、七校までも一一目をお通し下さいました。全く頭が下るのみであります。

○「西鶴名作集」の著者藤井先生亦然りです。先生の學者的良心は學界に定評あるものですが、宿痾神經痛に惱まされながら、敢然として徹底するまでやり遂げねばおかぬ御熱心さ、是でこそ眞に不滅の良書が出來るのだと思ひます。今や「浮世草子名作集」の爲に、日夜御精進下さつて居りますが、その御原稿を拜見すると、その丹念さがハッキリと目に映るやうであります。一字々々實に克明に、實に精細に、流石大判の原稿紙も欄外さへ餘白なきまでに文字で埋められて居ります。「西鶴名作集」のあの評判、あの名聲も決して偶然ではありません。

○「歌舞伎名作集」に於ける河竹先生も亦申すまでもありません。先生は今迄全く省みられなかつた歌舞伎脚本の評釋をするのであるから、何としても疎かには出來ないと、早大演劇博物館長として又、學校、劇界等各方面の交渉を持つあのお忙しさの中で、寸刻も惜しんで執筆して下さいました。下巻も遠からず公刊されますが、今度は梗概による拔萃主義から一歩を進めて、全文評釋を以て進んで居られます。かうして先生一流の考證、先生ならではなし得ぬ研究が大成されるのであります。實に有難い事であります。愉快の極みであります。

「今度は上巻以上に實のあるものが出來る積りだ」とは折にふれて度々洩らされた所でありました。何卒充分御期待を願ひます。

○穎原先生の「俳諧名作集」、あの流暢な高雅な名評釋、あれ迄に至

第七回配本
讀本傑作集
文學博士 和田萬吉著
南總里見八犬傳
雨月物語

る先生の御苦心も並大抵ではありませんでした。二年も前に既に原稿が完成しながら、更に練りに練り、訂しに訂して、凡そ半分以上も書き直されたのであります。一旦出來た原稿を又半分から書き直すなどといふことは本叢書の先生方なればこそ出來る事なのであります。此の御熱心、この御誠意あつて始めて、本叢書が燦然として天下に光りを放つに至つたのであると信じます。

○「洒落本草雙紙集」の著者潁原博士は、屈指の江戸通であられることは申す迄もありませんが、あの粋語の多い至難な「洒落本」を快刀亂麻を斷つが如く縱橫に解きこなされる鮮やかさには只驚嘆あるのみ。皆樣にとつても亦、愉快な想像であらうと思ひます。

○最後に殿りをつとめる「總索引」これは本叢書に出た重要な語句を盡く取り入れて、正確に列擧し、江戸文學の重要なる研究材料として天下にお目見えする筈であります。既に稿を急ぎ、折角編輯中ですから、必ずや諸賢の御滿足を得られることと確信して居ります。

○本叢書も峠を越して餘す所三卷これからは更に一段と實のあるものをお目にかける事が出來ます。

そして此の有意義なる、不滅の大文獻をして有終の美を濟さしめたいと一同大童になつて居ります。尚一册定價四圓八十錢にて分賣して居りますから御知己にも是非お奬め下さるやうお願ひ致します。

樋口慶千代教授の 傑作淨瑠璃集 下

早稻田大學講師　岡　一男

淨瑠璃は江戸人の最大の苦惱であつた、封建社會の重壓と個人我の衝突、義理・人情の葛藤を最も深刻に表現した文學で、その題材は神話・傳説・國史・市井の事件と古今に亙つてをり、人物はあらゆる階級の男女を網羅してゐて、國民文學的色彩が頗る濃厚であり詞章麗しく京傳・馬琴らの讀本に影響を與へ、劇としては國劇最初の完成した技巧を示し、歌舞伎の飛躍發展の重要なる原動力の一となり、今なほ劇界、樂壇に偉大な勢力あることは周知の如くである。しかし、淨瑠璃はもと操の臺本として綴られたために、机上の讀物としては理解に困難が多く、先行の諸曲、當時の俗謠・巷説に精通してゐないと、わからない故事熟語が少なく、筋立が複雜をきはめ、坪内博士の所謂夢幻劇で荒唐無稽なのと、劇の解決が社會的義理のために個人我を犧牲にするので終つてゐるので、現實主義的、個人主義的洗禮をうけた近代人には共鳴されにくゝ、加之言葉が非常に耳遠くなつて來て、我々は最早江戸人のやうに全身全靈的に淨瑠璃に陶醉できなくなつてゐる。處が樋口慶千代教授の半生の努力になれる「傑作淨瑠璃集」二卷(講談社、「評釋江戸文學叢書」所收)は、現代人が淨瑠璃を理解するに困難なあらゆる障害を除去して、恰も映畫を見るが如く、容易く、面白く淨瑠璃の美に陶醉させてくれる。我々に耳遠くなつた江戸語は語原から新しく説明して、語義ばかりでなく、語感をも味はへるやうに詳説し、必要に應じては當時の經濟・社會・地理・風俗を精述し、江戸人の生活、心理に通曉共鳴させるやう苦心し、梗概によつて複雜な筋を簡明にし、評釋によつて操劇の特質、技巧の巧拙、作者の精神を明らかにしてゐる。本文の覆刻、各曲の解題、作者の傳記等、非常に親切で、又充分學術的で、分り易く、教授の發明少なくない。

今回配本の「傑作淨瑠璃集」の下卷は、上卷の近松時代の後をうけて、操全盛時代の代表的名作を悉して「ひらかな盛衰記」以下二十一篇を收め、「假名手本忠臣藏」の如きは全釋し、他は今日上演される場面を撰んで精釋してあるが、何れも全曲に對する詳細な梗概が附してあるので、我が國名作戲曲の鳥瞰に便し、撰釋かへつて全釋にまさる効果を與へてゐる。

(後略)

副書

如何にもお恥しいもので、大方の御覽に入れるのに忍びない心持もいたしますが、その心持を押切つたのは、拙を藏し、醜を掩うてゐたのでは、何時までも固陋を脱れることが出來ません、明日以後の進境のために、今日の懷抱を擧げて、天下の先覺に請益いたしたく存じます、若し淺劣を棄てず、困學を憐んで高教を得るならば、これ程な仕合はございますまい、又世間には未だ中本一冊讀まないお方もありませう、さうならば、爰で申述べますほどのことでも、滑稽本といふものが如何なるものであるかを御承知になる御用に立ちたく存じます、爰に述べましたことは、覆藏なく存じ寄りのまゝに、或は申過したり、云ひ足らなかつたり致しても居りませうが、悉く自ら信じた所なのではございましても、決して安心は出來ません、皆樣が此方面へ御着手になりまして、段々御研究になるならば、假令爰で申述べましたことが間違つて居りましても、隨分數多い問題が此中に提起してございます、大小輕重いろ〳〵ではあつても、まだ其他に問題はあるにしても、畢竟提起してある諸問題は是非御吟味にならなければならないものと存じます、其處では問題集のやうな氣味もあらうか。

研究などとは身に顧みて憚り多い、才識共に缺けた私が人並みに云へたことでない、自己相應に勉めないではないにしても、捜羅訪求の不足から、見たいと思ふもので見られないものも澤山ある、岐路に入るのを避けて省略したのは格別のこと、決着すべきことであつて其處に行屆かないことも尠くない、殘念ながら成績らしいものはなく、專ら今後の精進に期待する次第でございますが、爰で述べました處は、

滑稽本といふ分類について、何が滑稽本であるか、滑稽本の疆域、それに三説あり、

第一説について、談義物出現の來由、吉宗將軍の奬學方策、三教の一致點、享保の世態、中人以下の指導、近世文學の二大截、勸懲と賞罰、談義物は江戸文學の祖なり、

第二説について、享和以來の中本、泣本、人情本、をかしみの違ひ、滑稽本の四變、

第三説は顧られず、平賀源内、森島中良、三馬の婆婆ッ氣、江戸文學の浴せる辯舌の恩惠、

此大體を説き、それに附隨した件々を話したのですが、刊出に際して講談社は本文の上頭に標記を加へました、それが稍々細いので、讀みながらの目印にもなりませう。

此一册へ一九の東海道中膝栗毛、鬼武の舊觀帖、三馬の浮世風呂、鯉丈の八笑人を收載する豫定であつたのですが、餘り紙數が嵩むので八笑人が入れられません、それ故に概説で八笑人を節抄する處を、其一二卷の全文を出して、鯉丈の滑稽の風味を大概に看取されるやうに致しました。

語釋は博覽强記の殊に根機のいゝ人のすることで、我等の堪へられることではないのです、先年知友先輩に從つて東海道中膝栗毛輪講をやつて以來、目にも耳にも貧乏で、其うへ根機の弱い我等は、方々のお說によつて用を辨じて居ります、今度も知友先輩の指敎に待つ所の多いのは、二十年來の定例でございます。

此の上に讀者に願つて置きたいのは、書くこと、云ふことに下手な我等が、成るべく簡明にしたい心持から、勉めて短くいたしましたので、意を推して讀んでお貰ひ申さないと徹底しないやうにもなりませう、讀んで字の如しでは心持が通らないかも知れません、一體話下手は聞き上手な人を向へ廻さないと物にならないものです、云ふまでもなく皆さん、お聞きなさるのがお上手でしたネ。

昭和十一年一月、南檐日暖に盆梅盛に開く、頗る平常な有樣に對して、

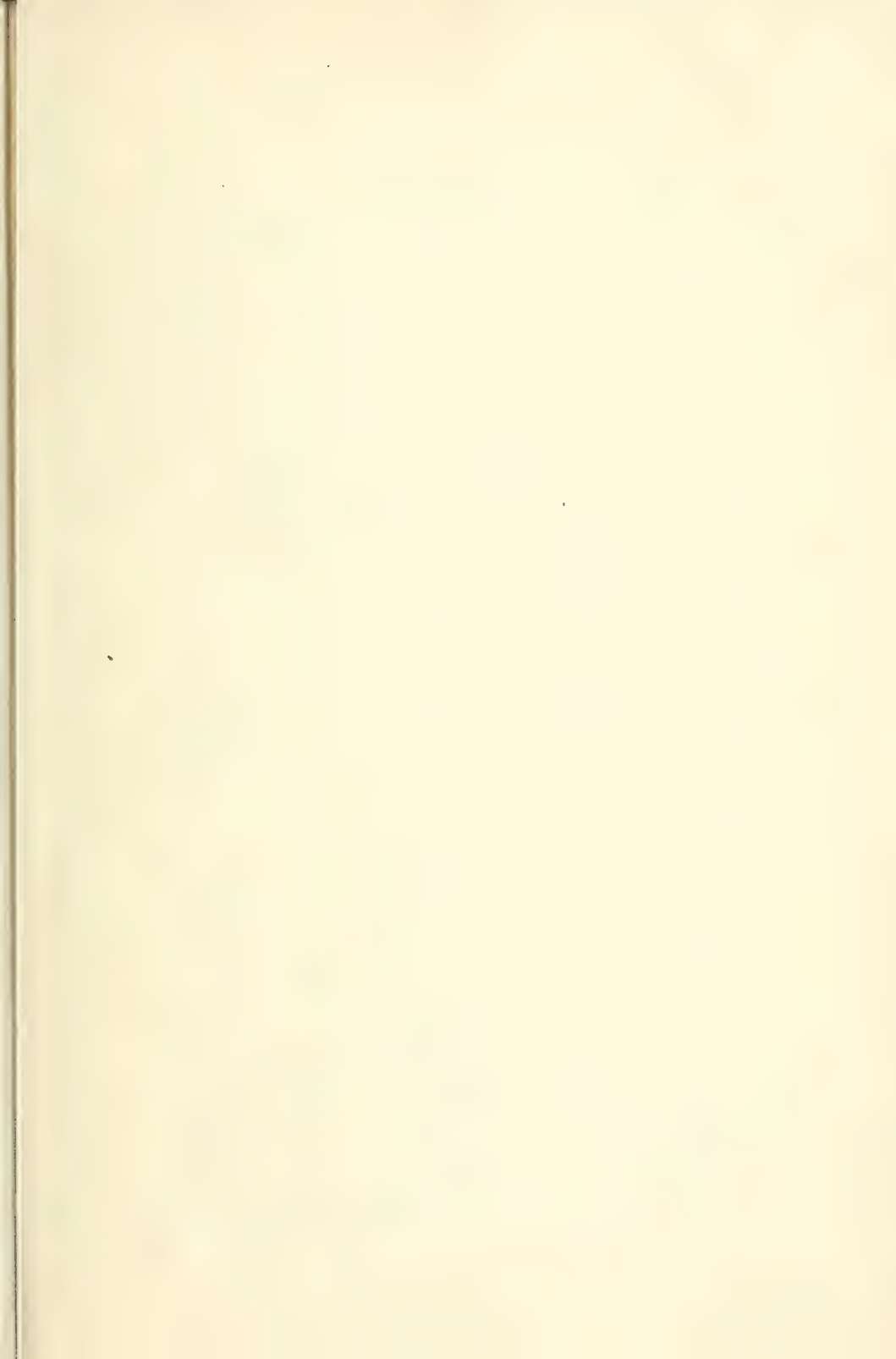
鳶魚幽人割

滑稽本名作集

目次

滑稽本概説……一

東海道中 膝栗毛

解題……二四六

發端（彌次郎兵衛北八江戸出立の由來）……二六四

初編（江戸發足品川を經て箱根に至る）……二八四

二編……三一〇

上（箱根より三島を經て蒲原に至る）……三一三

下（蒲原より府中を經て岡部に至る）……三三〇

三編……三四八

上（岡部より大井川を過ぎて日坂に至る）……三五〇

下（日坂より濱松を經て荒井に至る）……三六五

四編……三八三
上（荒井より吉田を經て赤坂に至る）……三八五
下（赤坂より宮を經て海上桑名に至る）……四〇一
五編……四一九
上（桑名より四日市を經て參宮道に入る）……四二一
下（追分より津を經て山田に至る）……四三七
追加（伊勢參宮）……四六〇
六編……四八六
上（伊勢より直に伏見を經て京に入る）……四八八
下（京大佛より清水五條新地など巡覽）……五〇五
七編……五二五
上（五條橋より祇園四条を經て三條大橋に至る）……五二七
下（三條より堀川千本通島原を過ぎ淀の大橋に至る）……五四三
八編……五六四
上（大坂八軒屋より高津天滿座摩神社順拜）……五六六
中（座摩社より道頓堀新町を經て長町に赴く）……五八二
下（長町住吉を巡り大坂出立）……五九六

解題……六二〇
初編……六二八
馬喰街寓居之条……六二九
戯場一見併老婆説話之条……六三八
愛宕山眺望之条……六四五
二編……六五一
上……六五三
下……六七二
三編……六八八

諢話浮世風呂

解題……七〇六
前編……七一六
上　男湯……七一九
朝湯の光景……七二一
晝時の光景……七二五

下……………………………………………………七三八

　午後の光景……………………………………七三八

二　編……………………………………………七五八

上　女中湯之卷…………………………………七六〇

　朝湯より晝前のありさま……………………七六〇

下　女湯之卷……………………………………七八二

三　編……………………………………………八〇四

上　女中湯之遺漏………………………………八〇六

下　女中湯之遺漏………………………………八二七

四　編……………………………………………八五〇

上　男湯再編……………………………………八五一

　秋の時候………………………………………八五一

中　男湯之卷……………………………………八七一

下　男湯之卷……………………………………八八六

題簽　安田靫彦

裝幀　小村雪岱

滑稽本概說

滑稽本概説

滑稽の字義から

江戸文學の中で滑稽本といふ部類分けはごく新しいことで、從來は云はれて居らなかつたことであります。滑稽本、滑稽物といふのはどんなものであるかと云ひますと、滑稽といふ字は昔から戲作の或物に呼ばれて居つた言葉である。「史記」の滑稽列傳の中に、「談言微に中る、亦以て紛を解くべし」とあり、それに續けて淳于髠のことを「滑稽にして辯多し、數々諸侯に使して未だ嘗て屈辱せられず」と書いてある。その註に、滑といふ字は亂れることである、稽といふ字は同じといふことだから、辯捷の人であれば非を云つて是の如く、是を云つて非の如くしやべり立てた、よく同じものと異つたものとごちや／＼にしてしまふ、といふ意味のことが書いてあります。滑稽といふことは專ら語言の上から云はれて居ります。

又「滑稽は俳諧の猶し」と解釋され、「諧語滑利其知計疾く出づ、故に滑稽と云ふ」ともあつて、丁度日本で云へば輕口とか地口とかいふ工合に、ひよろ／＼とうまいことが出て來る人の樣子を云つたのです。この意から見ると、無言の滑稽といふものは無い。滑稽は必ず言語を俟つことでなければならない。戲作者が好んで滑稽といふ語を用ゐるけれども、これは元來筆よりも口にあるべきことだと思ひます。

滑稽本の意味

以上は滑稽といふ文字に就ての話でありますが、今滑稽本として類別されてゐるものを見ますと、笑はせるもの、面白をかしいもの、といふ心持のやうであります。だが笑はせるといふこと――江戸の言葉で云へば「笑はせやが

ゐといふことは、馬鹿にすること、愚弄することにもなる。滑稽本といふのは面白い、をかしい讀物、といふ意味に見たらよからうと思ひます。そこで一九などは滑稽といふところへ「串戲」といふ字を使つても居ります。

名義のことは大凡そんなことにして置きますが、滑稽は筆よりも口の方に因緣が多いといふことは、日本に於ても支那と變りが無いやうに思はれます。

滑稽本の範圍

滑稽本として類別されるのは何處から何處までであるか、その幅—範圍といふものを尋ねて見ますと、先づ三通りあるやうであります。即ち第一は寶曆度に出版されました「下手談義」以來のものとする說、第二は「膝栗毛」この方とする說でありまして、第一說に從へば談義物と稱せらるゝ種類のものからといふことになり、第二說は中本からといふことになります。第三の說は式亭三馬の連中が專ら唱へる說で、前の二說のやうなものではなく、風來山人から系統を引いたものとするのであります。

滑稽本の類別三通り

三馬の「狂言綺語」といふ自著の序文には、

彼風來山人が飛花落葉の嘆を拾ひ、日牛門先生の四方のあかの粕を嘗れど、原來是は及ばぬ事なり、

と書いてあり、又、

故人風來、紙鳶堂の口調に傚ひ、月池先生が風調を慕ふ、

ともあります。この文で見ますと、式亭三馬は風來山人、蜀山人、月池先生といふのは森羅萬象、風來の弟子の森島中良のことですが、此等の人の文法を學んで書いてゐる。自分の淵源を其等に求めて居るのであります。それから小三馬の書いた「潮來婦志」後篇の題言には、三馬のことを「實に風來が戲作の正統」と云つて居ります。

三馬を風來の後繼とす

又鯉丈の「和合人」初編の序には、

> 抑滑稽著述の正統は天竺浪人、大和町の翁、株を本町にゆづり、欣求浄土の戯作者となりしより、延壽丹主人、世界の人情を悟り、癖を集、口取となし、拔俗て、浮世のあなを臍の下にほり、

と云つて、やはり風來山人から引續いてゐることを繰返して居りますし、春水の「牛嶋土産」の序文にも、

> 滑稽地に墮て戯作者棚へ揚られ、風來の塵吹飛で、自墮樂の奇草、紙魚の巣にならんとせしを、式亭三馬再び浮世にもて遊ばせ、

とあつて、風來山人や自墮樂先生――これは「勞四狂」や「昔の反古」などの著書もある山崎浚明のことですが、此等の人の跡を三馬が繼承したやうになつてゐる。三馬及その一派の人々の主張は、三馬の著述はかういふ人達の引繼であるといふので、慥にさうであるか、ないかは別問題として、さういふ主張を持つてゐたことがわかります。一體戯作に系統を立てゝ論ずるなどといふことは、此時分、他に類例の無いことで、滑稽本に就てのみ斯ういふことがあるのは、大に注意すべきことだと思ひます。

「下手談義」からといふ説

そこで先づ第一說から申して參ります。これは「下手談義」からといふのでありまして、亡友朝倉無聲氏の「日本小說年表」に滑稽本といふ種目を立てゝ、第一に「下手談義」を擧げてあるところから申すのでありますが、それに就ての委しい說は聞いて居りません。

この「下手談義」なるものは、同じ類のものを一括して談義物と稱せられてゐるのでありますが、江戸の文學、讀物と申すものは、もと〳〵子供向の繪本からはじまつたもので、見るもので繪が主になつてゐる。それが大人向の

讀むものに變つて來たから、寛政度になつては讀本といふものが出來、讀本といふ部類分けもして居ります。併しながらこれは必ずしも寛政を待つての話ではない、寶暦の「下手談義」が當時に於て讀本と云はれて居つたのであります。寧ろ談義物といふ方が新しい言葉で、當時は讀本と云はれてゐたのです。

讀物から談義物分かる

寺で坊主達がやる談義說教、其等のものも讀物と云つてゐる。これは謠の中でもよくわかりますが、問答にはフシがなく、ロンギにはフシがある。フシの無いものが讀物で、フシのあるものが謠物といふことになる。そこでフシの無い談義說教の類を讀物と申したのでせう。けれども讀物といふと幅が廣くなりますから、その中で又種類を分けて、談義物といふ名が出て來たのです。これは寛政に起つた讀本と立分れてゐる爲に、談義物と云つたのではない。それより前に讀本といふ言葉があつて、談義物が既に讀本と呼ばれて居つた。この事は斷つて置かなければなるまいと思ひます。

談義物

近世文學の部類立は大分困難なもので、或は內容から申すこともあり、又本の體裁から分けて行くこともある。體裁といふことは書き方といふことからも云へないことはありません。談義物などになると、內容からも申すことが出來ますが、それより前に書き方の方から申さなければなるまいと思ひます。

布教の言說に倣ふ

談義物といふのは、その名前も體裁も、何方も坊さん達の布教の言說に倣ふことから起つて居ります。布教の言說といふことも、山寺と町寺と、寺にも二通りありまして、江戸以來町寺といふものが頗る繁昌して居る。町寺の宗旨もいろ〳〵ありますが、主として淨土宗と日蓮宗が多かつたのであります。江戸以前に盛であつた天台、眞言等の寺院は、多く山寺でありますが、山寺であつたところの宗門は、必ずしも天台、眞言ばかりではない。禪宗な

どもありますけれども、江戸時代になると町寺が流行るから、自然町寺の方が多くなつて來る。早くから町寺の多かつた淨土、日蓮の二宗旨といふものは、町人百姓の信徒をあてにしたもので、この方面に檀徒、信徒を多く持つて居つた。それが又町寺の盛になつたわけでもありますが、この町寺の布教が概して談義と云はれて居つたのです。それも淨土宗に限つたわけではないのですが、町寺が盛であつた爲に、談義といふことは淨土宗の僧侶の說教を專らいふやうに覺えられ、それに對して日蓮宗の方は、說法といふものと覺え込んだ位でありました。

談義とは主に町寺の布教をいふ

布教上の爭

日蓮、淨土兩宗の爭

日蓮宗と淨土宗との爭は、いろ／＼な事の上に現れて居りますが、布教の上に最も著しく現れて居ります。町人若しくは百姓相手のことですから、あまりむづかしいことを云ふよりも、卑近な、平易な言葉で布教することになつてゐる。さういふ布教ぶりが又盛になつて、日蓮宗や淨土宗以外の宗旨も、これに倣ふやうになる。それに町人の景氣が元祿以來よくなり、殊に享保以來は益〻資力が民間に集るやうになりましたから、町寺が盛になると共に、布教も隨分猛烈になつて居ります。さうして互にその信徒を奪ひ取らうとする、この爭奪がだん／＼烈しくなつて參ります。その模樣は浮世草子や當流淨瑠璃の上にも出て居りますが、享保以來特に烈しくなつた有樣は、享保八年に淨土宗の坊さん達によつて惡對說法が盛に行はれた、その樣子が「享保世說」（八年五月）の處に書いてあります。

惡對說法

同年同月之頃、伊皿子から雲寺ニて、四十八夜諦道說法之處、其向ニ長應寺と申候日蓮宗の寺ニて候、此向之寺ニては赤犬を殺し、旦那方ニも振廻、住持を初坊主共迄給候、其上博奕を致し候など、盜人坊主のどろぼうなどゝ、あらゆる惡口を被レ申候故、兼てから雲寺長應寺兩住持心安知人ニ候得ど、餘り成事共を被レ申、所化衆堪忍難レ致故、長應寺より以二使僧一

有之通之雜言は頗ニ用捨一度被ニ申込一候へば、から雲寺ゟ其段は高座の上にて口拍子に申事に候得ば、成程致ニ承知一候との返答は仕でのたき由被ニ申送一候付、長應寺殊之外腹立、增上寺へも斷なく直ニ御用番之寺社奉行牧野因幡守殿に被ニ相斷一候へば、因幡守殿被レ仰候は、惣て宗論は取上無之事、其上子共いさかいの樣成事を一宗の觸頭をもいたし候出家に不ニ似合一事を被レ申候、乍レ去承屆置申候、此方ゟ大談儀止メ申儀は不ニ罷成一候間、左樣御心得被レ歸候樣被ニ仰渡一、長應寺被ニ罷歸一候、扨因幡守殿に增上寺之役者を被ニ召呼一、伊皿子かうん寺ニて四十八夜有レ之由、就レ夫かやう〳〵之事、長應寺被ニ申出一候、右四十八夜從レ是止メ不レ申候、有筋之儀は遠慮有レ之可レ然旨被ニ仰渡一候由ニて、まづ說法相止申候由、其後增上寺より長應寺へは、此方に一旦之屆もなく直に寺社奉行に被ニ召出一候事不屆之由、公事申懸られ候由。

圓隨の說法

それから同じ本の十四年のところに、圓隨の說法と云つて、江戶中鳴らした說法の模樣が書いてある。これは罵詈讒謗を重ねた、聞くに堪へぬものですが、坊主達の行も隨分甚しいものであることがわかる。江戶の出來事ですから、これも一例までに擧げることにします。

八月四谷邊馬場下淸岩寺四十八夜圓隨說法之節、日蓮宗の僧不審書を出し候ば、則返答書を致し高座にて役者の聲色にて讀申され候由、

參詣の衆はひよんな書付が出て牛若なりしやとおもふまいものではないか、たとへ平家物語盛衰記程書付來ればとて、ちつとも源九郎な事はない、此方大將は學文ぶよしつねじやさかいで、元だてきゆへ、袈裟衣は武藏坊なれ共、說法の辨慶は八十四人がちから、法問談儀何にても七ツ道具のたらふた坊主、自然きゐの衆はいや〳〵法の師匠は侍の主君と同事、もしむかふから能登守がやうな强矢をいかけられたら、なんと四郎兵衛次信かやうに身がはりにもいたさずばなるまいかとあんじまい物でもない、それは氣遣せぬがよい、こちにりけんそくぜ彌陀がふとといふつるぎが有る、依て縱幾千萬法問の矢を射かけられても、草なぎの劍ならねど己とぬけ出し、切はらふさかいであぶなげはないほどに、忠信〳〵と龜井片岡廣くして、

伊勢の三郎がよい、法もんはいつでも勝に駿河次郎、百舌鳥にあらねども辯舌の舌は熊井太郎、こんな事の有が寺の爲には金賣吉次、あい手になる法師なし熊坂の長範、それはなぜにといふに、をれは學文がきよふもりじやと思ふが、こちから見れば智恵は宗盛にさへ無官のなりをして、大勢の中へ書付を出たしとは、つらの皮のあつもり友盛でも有かと思へば、たつたひとりゆふれいのやうにさんけい中へ見えつかくれつ、此やうな事を重盛にしやつたら、さいそうの浪にしづみやらうが笑止、談儀の邪魔になるは惡七兵衛なれど、圓隨說法のしころに取付ふとは寄特千萬、むかしの錣は切レもしたらふが、圓隨が智恵のしころはおもひもよらぬ事、日本一の功のものとたのむ判官が、森口漬の世話をやく納所坊主や上總屋の五郎兵衛、越中屋の軍司兵衛がきても、中〳〵圓隨が衣の袖にも取付せぬ、不レ入事云出し寺をば六原はれ、一の谷に迯、段の矢嶋の旦方のさわぎしやらうゝ、やめやつたらよからう、それ共にぜひと思はゞくわんけ出しての事、

その他にも例は澤山ありますが、さう擧げる必要もあるまいと思ひます。

談義の惡對ぶり

それですから田中丘隅の「民間省要」の中に、

大學の一卷も知らず、大藏名目の上卷だに更によまぬ程の若僧等、何事を云やら、上手下手の評判を專らとし、其心佛法にあらず、偏へに狂言役者の色言、其身ぶりを覺へて、是を賣る事のみ修行す、

近年の談義說法は偏に佛法の理に構はず、只商事に似て、兎に角利の有事をのみ工夫す……只此商の爲に其家々の學問に疎く、小僧よりひた物此事のみを心として、かな書の談義本、色々の口車のはなし本など買集め、町々油見世の言立て、役者の口上を學問の第一と下心に閑習ひ、是を修練すると弘通者說法者抔とよばれて、濟ものをと目あてとするこそ口惜けれ、

と書いてあることも、決して譃でないのが呑込めるのであります。これは享保度の話でありますが、寶曆度に書き

ました「武野俗談」の中に、淨土宗の曇海と日蓮宗の鐵城との爭、それから町坊主の秀天の四十八夜の說法と云つて、江戶中で大評判だつた者がある。その相手が日蓮宗の要傳寺といふ毒々しい口を利く坊さんで、大に醜い爭をした話が出て居ります。寶曆度の兩宗の爭を、然も當時の書き物に記してゐるのですから、その文を出して置きます。

曇海と鐵城の爭

增上寺の塔中の所化に曇海和尙と云は當時談義勸化の名高き人なり、大坂の了海坊眞長が日蓮禁談義抔云は日蓮の法花經なり、大に破さんと色々誹謗の言葉のみ多し、彼了海坊は法義の節は高坐の上へ日蓮なりとて人形を上引下し、是めが〳〵と惡口し、さん〴〵に打擲し、我慢の惡僧なり、故に命終る節は其骸六疊敷一ぱいに頭は八ツに腫れたりとかや、陀羅尼品の頭破作七分如何梨樹枝の經文的中たるべしと見る如く、高坐にて日蓮を惡口し、其談義といふは經文釋書はみぢんも說ず、尤知るまじ、只地口秀句畢竟衣を著したる豆藏と謂べし、世の人彼にたぶらかさるゝはいか成る惡緣成事ぞや、されば曇海、日蓮をそしる言葉に日蓮はせんだいの家より出たり、自死の鹿皮をはぎ衣とすと身無抄の書に日蓮自筆にて書れたり、然れば日蓮は穢多の子なり、せんだいとは穢多の事を申なり、ゆへに鹿の皮をはぎて衣とすると書たるは穢多に極れり、夫にふとい奴は廣宣流布と長房を提て、長點の髭題目曼陀羅とは何事、日蓮と云せんだいの子ゆへまんだらを書たが髭をぬいてやらう、此曇海は尾張の名古屋生れなり、毛ぬき鋏のきつい切れものと、每座右の通惡口し誹謗し、經文の如くならば其人命終入阿鼻獄たるべし、此節酎にまし酒鹽とて、日蓮宗中村檀所の鐵城と云所化、其返答談義とて曇海の談義の近所の日蓮宗の寺へ出で說法して、釋經の本文天台の三大部妙樂の注釋、學文の底をたゝき返破するに依て、こんがの流るゝ如く、鐵城の申給ふは、曇海の惡僧日蓮が髭をぬかんとはきつい世話な奴、名古屋の切ものならば日蓮が髭を五百年來ぬかれぬは、其方の祖師法然は藤井元彥と俗名を付、還俗し配流の身となれば、我等が祖師法然が額をたばこ庖丁のやうにぬいてやれと、同敷あふ鸚返しに談義して、每座曇海を云詰し故、曇海坊に鐵城と鯨に鯱と世上にて云ける故、大に鐵城を恨み增上寺にて呪咀調伏の法を行ひ、衆僧を集て鐵城を祈けるとなり、其邪術一旦のしるし有て、鐵城は亂心して說法成がたき時、日蓮宗萬

山の所化、法華經を以て祈禱して鐵城本心となり、今は倫根村安穩寺の住僧と成る、曇海も三縁山の一文字なりければ、互に其爭ひも差止けり、いま天台沙門秀天と云邪僧あり、其身不身持にしてあちこちと談義にやとはれあるき、弁舌にまかせ多くの人の氣を取る事なり、依之秀天を頼し寺は大きに勸化に德付ける、ゆへに四十八夜、何の回向、彼修行と云は一七日が中、金銀何程と直段を極めて雇ひ談義說ける事なり、此秀天は町坊主にて本所中の鄕荒井町と云所に大屋文兵衞と云豆腐屋の店を借宅し居るなり、則女房を以て妻の名はお品と云、女子一人おくめとて十一歲、男子松次郎九歲、誠に願人坊主、談義坊主とて此類多し、されば學文は微塵もなし、若此書を見て口惜しくば馬文耕を尋ね來るべし、能教化してくれん、彼邪僧高座の上にて平生說處は地口秀句のみ、又は軍書のはし熊谷が先陣問答など、さりとは不便なる器量なり、彼ものが心は日蓮は妙法蓮華經を弘むは妙は女に少しといふ字義、女に少しほうれんげきやうとはいやなやつなり、前は佐次兵衞、後は權兵衞とは何の事なるぞや、子持のかゝさま達、何程乳が出ぬとて雜司ヶ谷の鬼子母神米を借て粥にしてまいる事は入らぬ、天竺の山姥で仲と太鼓をたゝひて題目を申は、あれこそ地獄の鹿嶋踊なりと地口の惡口を嬉しがり、聞人いかんぞ心不仁不義ならん、されば此秀天には日蓮宗坂下の要傳寺と云西檀所の所化、正道の說法にて打伏して、秀天が廻る先へは此要傳寺向て破する事なり、今專ら江戶中の氣を寄る所なれば爰にかれが傳をのせたり、

秀天の惡說法

當時の說敎は朝談義、晝談義、夜談義といふ風に、一日三回に分れて居りました。朝は朝參りの人に話すので、これは用事の少い老人が多いから、稍ゝ穩當に話をする。晝談義の聞手は多く女なので、少し碎けた談義にする。夜談義になりますと、現在働いてゐる者が皆聞きに來ることが出來る。云はゞ若い者向ですから、面白くなければ聞いてゐない。そこで隨分飛んでもないことを云ふやうになります。秀天などは夜談義を多くしたから、ひどい說法の仕方をしてゐるのであります。

談義物の由來

さういふ風でありまして、當時の説教といふものは、隨分ひどいものでしたが、それが大變に民間に喜ばれたものでもあつたのです。だから又大きな流行にもなつて、談義僧であるとか、説法者であるとかいふと、一個の立派な商賣になるやうな有樣でありました。談義物なるものもこの流行について起つて來たものであります。

談義物の作者

併し談義物の作者といふものは、所謂戯作者とは違つて居ります。賣文業者でなしに、いろ／＼な方面の學者、若しくは學者でない篤志家、と云つたやうな人達もある。談義物の作者の中には、後も先もない、たゞ談義物だけを書いた人もある位で、一種變つた小説家だつたのです。

談義物の出たわけ

この變つた談義物はどうして出て來たか。當時の言葉でいふ戯作者ならば、流行を追かけて人氣に投ずることに骨を折るから、自然新奇な流行物に目をつけて、それになぞらへることもあるわけですが、戯作者以外の人がどうしてこんな物を書いたか。現に「下手談義」の著者の如きは、あの行き方のものの外に何も書いて居りません。それはどういふことであつたかと云ひますと、安永年中に出た談義物の一種で「太平國恩俚譚」といふものがある。これは加藤在止といふ旗本の御隱居樣が書いたものとか聞いて居りますが、その中にかういふことが書いてあります。

今の御代、仁政を事とし玉ゐ、先も申ごとく、下々のいやしき文字もしらぬ者迄、人倫の道知らせたく思召し、六諭衍義の大意を板行して、諸國に流布すべき旨、仰付られたれば、少も志し有者は我も／＼と假名書の教訓書を著述し、書林も是を刊行して賣弘る事に成たり、其品數多有中に何人の作か下手談義と外題せる本有、能人情を畫て當時の姿を諷諫せり、人、木石にあらず、此諷諫にけおて下賤の輩の法外の行跡は、いつとなく直りしと言人も有、是皆上の好み玉ふ餘澤、有難き事ならずや、

「六諭衍義大意」に倣ふ

つまり吉宗將軍が「六諭衍義大意」といふものを發行して諸國に流布させた、その結果としていろ〳〵な人が假名書の教訓書を出すやうになつたが、その中に「下手談義」といふものがあつて、誰が書いたかわからぬけれども、よく當世の姿を諷諫した書物だ、といふのです。談義物の作者は「六諭衍義大意」の意旨に倣つて、同じやうな目的を以て著述したものだといふことになる。實際「六諭衍義大意」が發行された頃には、儒者の方の畠では、陽明學の人も、朱子學の人も、徂徠學の人も、闇齋學派の人も、殊に老莊の學をやつてゐる人までが、皆假名書の本を出して居ります。これは皆「六諭衍義大意」の行き方を學んだものであるやうに思はれます。

「六諭衍義大意」

支那の「六諭衍義」

そこでこの「六諭衍義大意」といふのはどんなものであるかと云ひますと、これは吉宗將軍が松平薩摩守吉貴に對して、琉球の政事文學の事を御尋ねになつた時に、琉球の程順則といふ人が支那の「六諭衍義」を覆刻してゐることを申上げたものですから、早速それを御取寄せになつた。「六諭」といふのは康熙帝の教育物語ともいふべきもので、それを范鋐といふ儒者が俗語で敷衍したのが「六諭衍義」なのですが、その終に法律がついて居ります。この法律をつけてゐることが、最も吉宗將軍を動かしたらしい。普通ならば在來りの例話として、修身倫理の實話を書くだけのものなのに、この本だけは法律の拔書がしてあるのです。

六諭と申しますと、孝順父母、尊敬長上、和睦郷里、教訓子孫、各安生理、毋作非爲、の六箇條であります。吉宗將軍はこれを御取寄せになつて御覽になつて、大變御氣に入つた。それより少し前、時で申せば享保六年春のことですが、吉宗將軍の御側に居る者が、室鳩巣の昔書いた「明君家訓」といふ本を讀んでゐるのを見られて、これは大變いゝものであると云はれた。それから急に「明君家訓」が流行り出して、續々と版にする者がありました。さうい

ふところへ「六諭衍義」覆刻のことを聞かれたので、取寄せて讀んで御覽になると、なか〳〵結構なものである。そこで享保六年九月十二日には、徂徠に命じてそれに訓點をつけさせて本にされた。のみならず又室鳩巣に命じて、「六諭衍義大意」といふものを假名書にして一册の物に拵へさせ、これを方々へ頒けるといふことになりました。丁度明治天皇樣が「幼學綱要」を府縣の各學校へ御下附になつたのと同じやうな意味のことだつたのです。この本は後に「六諭衍義大意抄」といふ名になり、繪入本になりまして、邦人の孝子とか、忠僕とかの話を添へ、附錄共に三册にしたのが澤山出て居ります。さういふ本が出たのは後の話でありますが、吉宗將軍はこの外にも「五倫解」、「五常解」といふものを鳩巣に書かせて居られる。これはごく平易に手短に書けといふことで、鳩巣が書いた上に將軍自ら筆を入れられたといふことであります。

「六諭衍義」を一般向に

吉宗將軍の法律觀

今「享保度法律類寄」といふものが殘つて居りますが、これは享保九年に吉宗將軍の御手許へ差出したもので、江戶で法典を取纏めた最初であります。十四項、八十六條に別れて居りまして、南町奉行所の與力加藤又左衞門、小林勘藏といふ兩人が書き集め、大岡越前守の手を經て御覽に入れた。この類寄を拵へる時分に、どういふ風にしたら宜しいかといふことを伺ひましたところ、「六諭衍義」の趣向に從つて部類分を立てよ、と命じて居られます。「法律類寄」の部立は六つではない、十四になつて居りますが、とにかくさういふ方針によつて類別されたのであります。

「六諭衍義」の心をとる

尤もこの類寄を眺めましただけでは、將軍の希望せられたやうにうまく出來ては居りません。これは後々改正を經て、元文律となり、寬保律となり、寬政律となりして居りますが、法律を拵へる時でも、吉宗將軍には「六諭衍

義」の心持がよほど入り込んでゐるやうに思はれる。吉宗將軍のみならず、さういふ心持を持つてゐる人が大分あつたのです。

清朝の王德明といふ人に、「春秋無象之刑書、律威用之讞經」といふ言葉がある。春秋の筆法といふものは、亂臣賊子懼ると云はれてゐる位で、形のある刑罰は加へられて居らぬが、それよりももつと嚴しい制裁である、律卽ち法律の方は、覿面に有形の刑罰のある春秋である、といふ意味でありまして、これは吉宗將軍の最も希望されるところに叶つた言葉でありませう。平山兵原先生などは、この二句をひどく賞揚して喜んで居られます。

彝倫道德を主とす

けれども支那の法律流儀は、皆王德明のやうな見解ではない。法律は恐くが彝倫道德の現れである、と解してゐる者ばかりではないのです。が、吉宗將軍は常にさういふところに心を用ゐて居られましたから、どうか誰彼の差別無く、彝倫道德が呑込めるやうにしたい、それに力を與へるやうに法律を拵へたい、といふ御考でありました。それですから假名書の教訓書を大變多く集められて、常に座右に置かれた。「愼思錄」でありますとか、「農業全書」、「八訓」でありますとか、「和漢事始」でありますとか、「名數」でありますとかいふやうな貝原益軒の著述、「集義和書」とか「外書」とかいふやうな熊澤蕃山の著述、あゝいふ類の書を集めて、自らも讀まれたし、側近の者にも讀まして居られたさうです。

忠孝の二道

長いこと將軍の御側勤をして居つた澁谷隱岐守の書いた「夜話の書留」を見ると、「常に仰せられしは人の生涯勤むべきは忠孝の二道なり、聖賢の千言萬語も皆このためなり」と最初に書いてあります。吉宗將軍の肚の中は、この書出しの文字で盡してゐるやうに思ひます。

學問的より常識的

それですから鳩巣などは度々進講してゐる。林信篤などもよく吉宗將軍の前で講釋をつとめて居ります。けれど

も鳩巣は、上は學問が御好なのではないと云つてゐる。それもその筈で、吉宗將軍は人間としてはどうすればいゝかといふことを、手短に知らせて行はせるやうにしたい、學問はその爲のものだ、と思つて居られる。理氣の話だとか、致知格物の話だとかいふやうな、高遠な思索は必要なものとは思つて居られない。それよりも理窟要らずに、必要な事だけ手短に呑込ませて、實行させたいと思はれた。實は甚だ困難なことなのですが、將軍の心持としては學問的でなく常識的に、會得させたくもあり、行はせたくもあつたのです。

手短に知らせ行はせる

そこでどうしても理窟ばかりで實行の伴はぬものは許されなくなるから、この心持からして、後來儒者連中に異學、實學といふことが唱出されるやうになつた。吉宗將軍は社寺からお札や御符を持込まれることが大嫌で、幕府の財政が苦しいから儉約したのではありますが、増上寺の法事を縮めて見たり、寺社の普請を止めて、上野の宮樣との間が面白くなくなるやうなことがあつても、貪著なくやられた。といふのはやはり常識的なのです。むやみに澤山經を讀んで何になる、立派な寺を立てゝ何になる、といつた風の考でありましたから、儒者達が進講するにしても、道理の簡明な講義をしない人は嫌であつた。さういふわけから「明君家訓」を讀んで氣に入られたり、「六諭衍義大意」を鳩巣に短くわかりよく書かせたし、御自身も手入をなすつて頒たれるやうなことになるのであります。

理窟より實行

或時葛西の方へ鷹狩に出かけられて、嶋根村の醫者で手習師匠をやつてゐる吉田順庵といふ者のところで御小休みになりましたが、その時順庵が子供に與へてゐる手本が御目についた。それは代々の法度書を書いて手本にしてあるのです。順庵に御尋ねになると、先づ何よりも國法を重んずることが一番先だと考へますので、書いて與へるものは、いろ／＼ありますが、この法度書を與へた方が宜しからうと思ひまして、斯樣にはからひました、と御答申上げた。かね／＼假名書の書物の效果、一般の教化といふことが將軍の心を動かしてゐる時でありましたから、この順庵のしたことも非常に感動されて、褒美を與へられました。それから「六諭衍義大意」の版になつてゐるのを、

江戸市中の手習師匠八百人餘に與へて、これを手本に書いて子供に習はせるやうに、といふことを命じて居られます。

實效本位の學問教育

庶民教育の振合が變る

この頃はもう一般に手習師匠になつて居りましたが、寺子屋教育のまゝで傳はつて來たのが、こゝで振合が變ることになりました。往來物の中にもいろ〳〵變つたものが出來るやうになり、庶民教育の振合が大分變つて來た。昔からの坊主教育を全く取替へたといふほどでもありませんが、七八分通りまで變つたと云つていゝでせう。常識的になつたのです。常識的になつたのは吉宗將軍の心持で、それは儒者の學問が表に出たものであります。

そこでこの時も在々所々の町人百姓の爲といふことを、懇に達して居られますが、それと共に旗本御家人なども、是非一通りの辨へが無くてはならぬ、といふことになつた。こゝまでは庶民教育ですが、その上に士人教育の方です。別に博學になることは望まない、どうか四書と小學の素讀だけ出來るやうになつてくれゝばいゝ、それがうまく行はれる方法は無いか、と云つて儒者達に御尋がありましたが、儒者達の方としては、幕府から直に強制されるより仕方はございますまい、といふ御答をした者が多かつたらしい。

學問にて武士を德化

この頃の武士は貧乏してゐるから、それが爲に風儀が惡くなつたのです。恆產が無ければ恆心が無い、といふ言葉がある、つまりその狀態であつた。併し將軍が求めらるゝ所のものは、いくら貧乏しても一定の操守を失はせぬやうに學問がさせたかつた。士といふものは恆產が無くても恆心が無ければならぬ、と思込んで居られたのです。この風俗矯正の爲に學問するといふことに對し、當時の儒者共は、士の風俗が惡いのは貧乏の爲であるから、これを直すことは法律の力ではいかぬ、學問によつて德化しなければ效が無い、といふことを上申して居るのでありま

ます。

實效を現す學問の奬勵

そこで吉宗將軍は、理論よりも實效を現す學問を一般に引立てられた。劍術、鎗術、大筒、弓馬、兵學、といつたやうなものは、習へば直に效力が出て來るわけですが、その他有職故實、國書、醫學、本草、物産、數學、天文、法律、經濟の如きに至るまで、皆大勢の學者を新に見出して、それ〴〵取立てられました。吉宗將軍の引立てられた學者は、いづれも皆實效ある學問をしたものでありまして、吉宗將軍の流儀といふものが何處までも常識的であつたことは、これでよくわかります。

實效ある學問と限られては居りますが、この將軍の遣方に影響されて、一般の學問にもいろ〳〵なものが盛になつて參ります。殊に神道家といふものがこの頃からひどく頭を持上げて來ましたし、佛教の方も大分異つた行き方になつて來た。各宗の中でも少し勝れた坊さんは、信仰による實蹟を示す、證據を見せる、といふ傾向を示すやうになり、遂にはそれが道教といふ方面にも及んで、その效果を見せようとして居ります。

民間に人材出づ

それもその筈で、實效ある學問を引立てようとすれば、將軍の思ふやうに人が得られたので、種類も多いが人も多い。殊に驚くべきは公卿や僧侶以外に、いくらも必要とする學者を見出し得たことで、それほど民間に人材が多くなつてゐたのであります。尤もこれは民間一般の話ではない、特殊の人の話ではありますが、とにかく享保度にはさういふ人材を求めて得られるやうになつてゐた。それは江戸の初から幕府が學問に注意した爲でもある。元祿時代には綱吉將軍の物數寄からではありましたが、際立つて學問ばやりになつて來たのです。と云つて一般に均して見れば、それは學問が普及したといふわけではない。が、特殊の人ではあるけれども、勝れた者があつた。但その勝れた人達といふものは、めい〳〵主とする所がありますから、持つてゐる知識も實效もまち〳〵でありまして、專修してゐる爲に偏倚になる。行き過ぎてゐるか、及ばぬかといふやうなものが多い。從つて常識を離れて、中心

の取りにくいものが多かつた。要するに學問を尊重する爲に世間離れしてしまふ人間や、功名利祿の爲に學問するやうな者が多かつたので、もうこの時分にもさういふ弊害が十分あつたのであります。

人たる道を知るための學問

それですから一般の教育といふことを吉宗將軍が考へられる時分には、あらゆる理窟を行に約して、人の人たるべき道を知る、それが學問であるといふことにして、一流の實學主義を立てられた。これが自分の物數寄で、何でも構はないから廣く高尚なことを習ひ覺えようとする綱吉將軍の學問好と、吉宗將軍の常識的學問好との大きな差でありませう。いづれにいたしましても功名利祿のために學問をするのでないのですから、醫者は一はい、儒者喰はずと申す諺がありました。儒者は初めから貧乏で暮す積り、勿論喰へないものと覺悟してゐたものです。明治の初までも學問は人たるもの、缺くべからざる知識を得るためにすると思つてゐたのです。學問が喰ふためのものになりましたのは、明治の半を過ぎた頃からでせう。江戸時代には飯の種は他に持つてをりました。學問を喰ひ物にしたものはありません。

民間の學問の模樣

民間の學問尊ぶ

享保から元文となり寛保となり、延享となり、寛延となり、寶暦となり、だん／＼時を經て參りますと、民間の學問が益々賑しくなつて參りまして、當時の言葉で申せば中から下の、假名書の本によつて知識を得るといふ人も次第に數が多くなりました。その代り又學問をするのが結構なことであるといふ立前から、讀めもせぬ無點の本を見てえらがる、といふやうな風も生じて來る。享保の當時としても、目安箱といふものを吉宗將軍が出されて、上書したい者はこの箱に入れろ、といふことを達せられた。その中には謙信流の軍學を修めた山下幸内の上書などといふものもありましたが、伊奈半左衛門の支配地の何處の村でありましたか、或百姓の出した訴状は漢文であつた

と云ひます。小梅村の百姓庄藏なる者の出したものには、大に神道の議論が書いてあつたとも云ひます。その位民間の篤志なものは學問があつたのです。

幕府と民間の講堂

けれども幕府は林家の昌平坂での講釋の外に、木下寅亮、土肥元成、荻生觀、服部保庸などといふ人達を集めて、高倉屋敷で講義をさせましたが、何時もあまり聞手は無かつた。佐藤直方の門人に菅野兼山といふ人がありまして、これが大橋向へ講堂を拵へましたが、儒者の先生達を揃へてやる、昌平坂や高倉屋敷のえらい儒者の講義にはろくに聽衆が來ないけれども、菅野の講堂へは大分人が聞きに來た。この人は坊主を縛つてぶん撲つてゐる圖などを講堂へ掲げて講義をしたさうで、恰も淨土宗と日蓮宗の坊さんが悪口を云合つた模樣に髣髴たるものがある。**さういふことをすれば人が來るのです。**

民間の普通の人は本當に學問をする氣が無いから、かういふ風にしなければ人が集らない。この菅野のやりましたことが大坂へ影響して、後の懷德書院になつてゐるのですが、その最初は三宅石菴といふ人で、これが菅野の影響を受けて鄕校を開いたのです、菅野兼山は鳩巢なども人物がいゝと云つて褒めてゐますけれども、尙日蓮宗、淨土宗の悪對說法の眞似をしたことは歎息して居ります。歎息はするものゝ、さうしなければ人を集めて聞かせることが出來なかつたのであります。

神道講釋から出た增穗殘口

實効が主の神道講釋

その時に神道者の景氣が立つて參りました。後々まで神道講釋といふものはありましたが、辯舌のいゝ、通俗的な話し方をするので、事柄は目前の事、現代の事を盛に取入れる。一般の人達は、儒者の堅苦しい理窟や、坊主の難有がりだけでは、もう說教ずれがしてしまつて效果が乏しい。そこへ實效を主にした神道家が出たので、今日な

ら胸にピンと來るといふやつだ。隨分をかしなこともありますが、今日の事を取交ぜて話すので、面白いだけでも效果がある。平田篤胤などは後に俗神道だと云つて、この連中を惡く云つてゐますが、篤胤の遣方も亦この神道講釋の遣方であることは、その著書を見ればよくわかると思ひます。

最も拙でた増穗殘口

この神道講釋をやつた人達の中で、最も拙でたのが增穗大和、殘口と申した人であります。殘口はこの時分の神道講釋の第一人と申したい人でありますが、それも殘口からはじまるのではありません。先輩に橘三喜といふ人がありまして、靑木某といふ人と共に全國を廻つて神道講釋をやつた。これが神道講釋では早い方だと思ひます。殘口には殘口八部の書などといふものが殘つて居りますが、誰にも知られてゐる點からいへば「艶道通鑑」が第一でありませう。この人のことは「實耳錄」といふ本に手短に書いてある。

殘口翁最中は元谷中感應寺の所化にてありける、常憲院樣の御代、感應寺や四谷千本木の實光寺やなんど流罪にあひし時、銀座の大黑屋長左衞門と同道にて京へ上り、大黑屋寄宿の中、艶道通鑑を作る。

これで見ると殘口は谷中の感應寺の坊主だつたので、感應寺は日蓮宗ですから、殘口がとかく日蓮宗を褒める傾があるのはその爲かも知れません。元祿四年七月、感應寺が不受不施一件で上野の支配になつた後、殘口は京へ上つたらしい。「艶道通鑑」に正德五年四月八日の序がありますが、出版は享保四年になつてゐます。殘口は十何年も京にゐる間に、さういふ著述をはじめたものでありませう。

殘口の講釋の模樣

殘口は辻講釋をやつて名高くなつた人で、トホカミエミタメを上方にはやらせたのも、この人の力なのです。その講釋する模樣は、その著書「直路の常世草」の自序に書いてありますので、大體どういふ風に當代に向つて評端を開いて行つたかといふことも、これでわかるやうに思ひます。その文章を全部こゝへ出して置きます。

國太平に歸し　民腹を鼓するは余情。文園に遊て花の脣を潤。學林に馳て蘭の舌を振。法によりて聖理を鼻端にかけて。

已領するあれば、佛意を耳底にとゞめて。我獨と思も有て。一嚼に萬卷を梳。片手に千論を握る者。世に幾億人か。强記に誇。博覽に牝る。故に傷弱の虚蓬をにくみ。賣僧の舐言をいやがる。いづれ公の政事正しければ。奸邪下に立がたきためしなれば也。しかるに此便宜をよしとして。道の道を瀆ずる者あり。多先見の執慮にひかれ。儒を以て日本を掟てんとし。佛を以て和國を捌かんとす。我朝本より淳素にして正直を躰とする風化なれば。此神訓を儒に附會し。佛に習合し。彼を是。此を非。異論しきりなり。しかも儒に附會し得たれば。支那の掟に落し。佛に習合し得る時は。和朝が天竺に成事を願ず。是鹿を追て山をわするゝの者にして。還て國學に遠かる所なり。しかるに此國の神に役徒。兩部家の甘口にし。人を欺かし。愚俗群を成て繁昌なるをうらやみ妬て。多は儒士の佛僧を折毀事を氣味よく覺て。是に組して。聖德太子を罪人とし。吉備堂公をそしり。役の優婆塞をはじめ。日の本の神に忠有名匠碩師をあざける。是等宋儒に習て涎を甜。文字章句の學に泥で。我國先哲の意味の深を採らず。毛唐人の書捨を依怙し。日の本の恥を外國へさらさんとする。今時の賣僧の習合僞巫の浮言の不法を禁じ。その埒に迯しを折事は佛を穢科。神を誣罪あれば。是を制するは法にかたい。彼を摧は道に中れり。それに本緣を正さずして。我國に忠有人を一槪に僞巫とし。賣僧と纏にする條。沙汰を明らめざるより僻案に穴あり。和國上代の明君をさみし。攝錄。補佐の賢臣を愚なりとかたるは。日本人にして支那へ降參せし心根ならずや。神をかたりて却て神の心を殺さんことぞかなし。佛も神も聖も天地一般の理處は明白。兩部習合もすこず。理當心地も削ず。唯天竺魂に成。支那根性に流人やからが。此神のまに〳〵を。我まに〳〵と溺沈。是ぞ我任もつとて此國の捨草ぞかし。然レハ神路をふさぐ荊棘を苅斷。八岐を狹むる根無佳を引捨て。此蘆原の蘆芽あつ。あなかしこ根と底ふかく。神の御國の昔代には。八ツ穗の稻の面足て。五百井千井種たり。公貢に豊秋津。衆人口に甘露に。十日の雨のしよぼ〳〵に。五日の風はそよ〳〵と。此言艸の莖長。千代も榮て萬代も。かわらぬ色に繁かしと。扨こそ直路の常世草となん名づけ侍る。

趣の違ふ三教一致

儒佛の爭と神道講釋

儒佛が御互に排斥して居りますうへに、儒者は儒者の內輪だけの爭があり、佛者も亦佛者の內輪だけの爭があつて、儒佛の爭といふものに搦てゝ加へて、儒々佛々の爭といふ工合になつて、こんがらかつて居ります。そのこんがらかつて、ちよい〳〵と何處のところだかわからなくなつて來たところへ、神道講釋といふものゝ出て來る場所があるやうに思はれる。そこが缺陷であるといへば缺陷でもありませうし、そこに自覺があると云へば、さうも云へるでせう。どうしてもこれは餘所から持込んだもので、此方に持つてゐるものはこれだといふ心持を作り出したのは、却つて儒々佛々の爭が甚しかつた爲だと思ひます。それにもこれにもかゝり合つて見ると、はじめて自分自身といふものに氣がつく、といふ風になつて行く。一體神道といふものゝ研究の仕方にしても、儒によつたところもあれば佛によつたところもあつて、だん〳〵と研究をつゞめて來ると、三教がごちや〳〵になつてゐるやうに見える。ですから儒佛を羽翼として、神道の研究が起つて來たのです。

神道講釋などと云つて始めてゐる人の著書を見ますと、どれでも儒佛の意味を取入れてないものは無い。爭の起つたのは、儒にも佛にも我勝になつた有樣から來たのですが、殊に吉宗將軍の新教育が、儒といふものを主として發生しましたから、佛者が負けぬ氣になつて儒者に抵抗するやうな風も見える。それから一つには、儒者の學問といふことから儒者が威張り出したのみならず、それについて廻つて、儒者の近邊に立つてゐる、僅に素讀を了へたか了へぬかといふ程度の者までも、大に幅の利く心持になつて力み出して來たのも、この爭を大きくしてゐるやうに思はれる。さうして御互に排擊しますから、どこのところといふきまりも無く、たゞひろがつて參ります。どこに安心立命の場所があるのか、どこに立止れるだけの場所があるのか、わからなくなつて來て居ります。

従來三敎一致といふことは云はれて居らぬこともありませんでしたが、享保以來の三敎一致は、それ以前のものとは趣を異にして居る。卽ち決着を見せる。理論だけでこゝに一致すると云つて、理窟だけつばめたものではなくて、一々行の上で捌いて行く。又言ひ換へれば效能とでも云ひますか、效能によつて證據立てゝ行かうとするやうな風になつて來て居る。行に約し效能を見るといふことになると、修身といふことにつばまつて來るわけですが、さういふ方としては、享保十三年に出た「田舍一休」などが、先手を打つてゐるやうに思ひます。

行に約し效能を見る

「田舍一休」の行き方

この本は佚齋樗山といふ人が書いたので、この樗山は「寐ぬ夜のすさび」によれば、總州關宿五萬八千石、久世大和守重之の家來で、三百石を領し、旗奉行を勤め、丹羽十郎左衞門忠明といひ、隱居して可溪といつた、寛保元年四月九日、八十三歳で歿したといふ。そこでこの「田舍一休」といふものは、どういふ風に書いてあるかと云ひますと、三敎の一致點を自性といふことにして居ります。亭主が淨土宗、女房が日蓮宗である夫婦が、各〻自分の歸依してゐる坊さんを自宅へ招待して法話を聞く、そこで兩宗の宗論が起るところへ、禪僧が出て來て裁斷する、その裁斷したところのものは、倅が始終云つてゐる、儒者の方の心法と同じものになる、といふ行き方でありまして、その中に面白をかしく無駄を入れて書いてあります。三敎一致といふことによつて、どこからどう入つて來ても、その人の安心はこゝである、といふ指定をして、はつきりわからせるやうにし向けた、こゝの手際といふものは、談義物と云はれてゐる「下手談義」その他よりも、明白に說いてゐるやうに思はれます。

三敎の一致點は自性

この遣方は禪宗臭い匂のするもので、これを支那の方のもので見ますと、明の末の頃の人と思ひますが、林兆恩といふ人があつて、これが三敎一致を唱へてゐる。この人の三敎一致は儒、佛、老の三つでありまして、「林子全書」

といふものが日本にも來て居りますから、それを見ればわかる話ですが、やはり禪宗の匂ひの大分強いものであります。さういふやうな捌きをしてゐる「田舍一休」の中に、當時の神道講釋の模樣が書いてありますから、その文章を少しこゝへ出して、享保度の神道講釋なるものが、どんな風に見られて居つたか、といふことを眺めたいと思ひます。

神道講釋の模樣を述ぶ

近き比神道者と名乘、社人のはてと見えて、我等が近在に來り、談を少し云て、そのあとに百姓の身持、人情の變化、親族朋友の交り、下人の使ひやうまで神道に引かけて其情をよく云ひとけ、如此なれば神の御心にもかなひ常に守り給ふ、神明は邪をはらはしとて嫌ひ給ふゆへに、邪欲の心にてはいか程祈りてもかつて見給はずと、至極口あひにてむだことまじりに說ども、いふところひとつとしてあしき事なく欲がましきこともなし、故に村里の野人感化して、猿のやうなるあらゑびす邪心やはらぎたる者おほし、弟子に成て神秘を受度といふものあれば、只正直にして慾心をさることを語る、ところの代官名主等迄喜ぶこと限なし、おしき事には學問もなく平生の身持凡人なり、彼等實にして行粧正しくば人の信もいよいよ篤かるべし、いまの談義もせめて彼神道者ほどの徳あらば人も侮るべからず、功德も大成べし、人皆佛性をそなへたる者なれば善に感化せずといふことなし、をしへやうあしく手前の欲を先に立るときは人信ずることなし、人も亦賢明あり、

神道講釋の行はれる譯は是で知れるやうに思はれます。

「六道士會錄」の眼目

それから同じ人のもので「田舍一休」の翌年、即ち享保十四年に書いて居ります「六道士會錄」といふものがあります。これは儒生の地獄めぐりの趣向になつてゐる。地獄めぐりの話は隨分古い趣向で、前方にもあつたのですが、この本の特色はやはり三教一致といふ方へ働きかけてゐるところが値打のやうであります。

倶生の地獄めぐり

「六道士會錄」の倶生の地獄めぐりは、視目は眼病に罹つて目が見えなくなる、嗅鼻は風邪を引いて鼻が利かなくなる、淨玻璃の鏡も曇つてしまふ、業の秤も針口が狂つて、極樂の方へいゝ加減な者が澤山入り込むやうになつたので、御釋迦樣から咎められた、といふことになつて居ります。これはどうしたらいゝかといふことになつて、倶生神の口を藉りて、さういふ風になるのは畢竟閻魔大王の私心の業であるから、自分が先づ公明正大にならなければいけない、と云つてる。それに就て孔子は「吾道一以貫レ之」と云つた、その一といふのは心體の大理である、一心體の妙用、それが天地萬物を貫くわけである、佛の云はれた「三界唯一心、心外無別法」などといふのと同じく、一の心體を以て、それを天堂ともすれば地獄ともするのであるから、自分の心のしらべが何より大切である、といふ諫言をする。

學問の大本は心體の誠

そこで閻魔大王が、自分もこれから學問しなければならないと云つたのに對して、學問の大本といふものを御存知なしに、たゞ本を讀むばかりを學問と心得てゐる世間の誤りに從つて學問をなされるなら、それは何の役にも立たない、堯舜の時までは讀むべき書物も無かつたが、たゞ心體の誠を失はず、情欲に牽かれることの無いのを學問としたのである、と倶生神が云つてる。學問をしようと云ふ閻魔さんに對して、かう云つた倶生神の言葉は、前の言葉と共に、儒佛の道が別なものでないといふことを示したのみならず、儒者がたゞ本を讀み字をおぼえるといふ行き方に墮してゐるのを叱つたのであります。

法を信ぜず善言をとる

先づ大體かういつた行き方でありますが、楊山は又「予佛におゐて惡むことゝなし、善言あらば何ぞとらざらんや」と云ひ、又「予は其至情に感ずるものなり、法を信ずるにはあらず」とも云つて居ります。佛法を信ずるわけではないが、その中に適切なところがあればその意味は採る、といふのです。けれども全體の匂を嗅いで見ると、「田舍一休」を書いたのと同じ氣持から來てゐるので、禪宗の匂のすることも同樣であります。たゞ儒を表にしてゐるのは、世間に對する去嫌から來てゐるやうにも見える。心を磨く、心の姿を見る、といふ方に力を入れてゐるのだか

ら、佛家で云ふ修證の方の事に熟してゐる人でありまして、やはり修證といふことを勧めてゐるやうに思ふ。佛は佛、儒は儒といふ風に分けないで、それを一緒にしてゐる。そこに儒佛の融和が考へられてゐるといふことが、この本の上から大に注目されるやうに思ひます。

儒佛の融和を考ふ

「下手談義」との違ひ

この手近い樗山の心遣ひといふものは、坊主や學者のする説教、講釋の現状を見て、なるべく人に入り易いやうに聞かせようといふ心持から、自分でも例の戯談をまじへて小冊として之を與ふといふことを書いてゐる。むづかしく面倒に手遠い事を云はず、卑近に聞入れ易いやうにしようとした心持はよくわかります。教訓とか垂誡とかいふものを、むつらしい顔をして云はず、又書かずに、面白をかしくやつてのけるといふ遣方は、同じ通俗といふことをめがけて進んでゐる貝原益軒の假名本、この類には三教とも隨分いろ／＼なものがありますが、それらでも面白をかしく聞かせるところまでは行つてゐない。併しその志す所に至つては、益軒先生等と別に違つてゐない、同じ心持だと思ひます。

戯談を交へて卑近に

これが後に出る「下手談義」の先驅をなすものでありますが、どこが「下手談義」と違つてゐるかと云ひますと、この樗山のやりましたものは、ものを一つ摑んでゐる。常識論から押して行く「下手談義」との違ひはそこに在るのです。樗山の書いたものは、外にも「田舎莊子」その他いくつかありますが、何の藝から行つても、何の學問から行つても、自性といふことが中心になつてゐる。自性を摑んでゐる。この自性のしらべといふことは、世間一般の常識論から行かれるものではない。行かれる筈で行かれないのです。

自性が中心

どうしてかういふ風に前例も無い高遠な事を卑近な言葉で云ふのみならず、をかしみを加へ、滑稽な味をつけて

世間の沈滯と談義物の出現

人に賞翫させる人が現れたかと云ひますと、それは享保以來年毎に世間が硬化してしまつて、どうも活潑でない。沈滯勝になつてゐる。これは制度と經濟との關係から來たことでありまして、その結果としては不安、不足、倦怠といふやうな現象が出て來る。この不安、不足に對して、樗山が先づ現れたわけで、それに續いて好阿の「下手談義」をはじめ、所謂談義物が出て來たわけであります。

尤もその前に奇談、珍話といふやうなものを書集めて出すことがはやつた。人によると奇談派の著書と云つて、一の部類にしてゐる人もある位です。それから實錄體小說、これは奇談、珍話に對して新しい話、本當の話といふ心持である。新しいのは慥ですが、本當であるかどうかはわかりませんが、とにかく實錄體小說なるものが出て來た。これは倦怠といふことに對して出たものと思はれます。

享保度の特徴

制度上の行詰り

さういふ風になつて參りましたのは、法律制度が整つて來て、人間の進路が狹くなつた爲で、役人衆の手柄にしても、分限がやかましく立つてゐるから、新しく手柄を立てる者と云へば、財政經濟の方面より外に無い。さもなければ年功で行くのですから、幕府の人事としても飛放れたことは先づありません。おまけに儉約で人減しをする關係から、新しく登庸することが無い。その外に新しく出世するのは君寵によつて頭を擡げるだけである。それは將軍の側近の者に限られてゐるから、ごく少數のことで、一般の話にはならない。これは制度法律の上から來る、享保時代の特徵に相違ありません。

又享保三年この方、儉約政治を振廻して、通貨をだん／＼幕府の手許に蓄積するやうになつて來た。政治費用といふものは、いつでもその國で一番大きい動きのものでありますが、それを何より先に集めることは集めても、散

資本の片寄り

することをせぬ行き方をするから、そこに資本の片寄りが出來る。これが不景氣の根本をなすもので、これが享保時代の特徴でもあり、困つた事でもありました。さうなると民間でもやはり通貨の蓄積が盛に行はれますから、資本は愈〻片寄りになつてしまふ。商賣は株式になつてかたまつて來るから、自由に營業することがだん〳〵困難になつて來る。資金が全般に行渡つてゐないから、投機と云つても元祿度に行はれたものとは違つて、今度は買占め賣といふ風になつて來る。どうしても前から資本を持つてゐるものが勝つので、新しく資本を得ることが出來ないわけであります。

理惑と行驗

それから學問かぶれをして、誰も彼も理窟に募つて來る、それもかうだ、あれもあゝだといふ風に、いろ〳〵と理窟を考へるから、理惑と申して理窟の迷を生ずる、歸著するところが無いわけです。何方へも理窟はつくものだといふことになるから、不安、懷疑といふ方に傾いて來る。平安朝時代にあつた御祈禱の坊さん、山伏、さういふもので直ぐ御利益のある人のことを驗者と云つた。それと同じやうに、享保度でも不安、懷疑といふものに對しては、一々に證據を立てゝその效果を出して行く。それからその行に信仰を結びつけて眺めることになる。信仰とはどんなものか、胜の中にある間はわからないが、行に現せばわかる。又行に現すからその效果が誰にも明白になるので、これも享保時代の特徴であります。

神儒佛のいろ〳〵

神道の各派

神道の事にしても、無論從前からあつたので、神道講釋が盛になつて來たと云ひますけれども、何もこゝで急に降つて湧いたわけではない。儒も佛も同樣であります。神道には白川家のがあり、吉田家のもある。山王、兩部の神道もあり、垂加神道もある。それから儒佛といふものは一體輸入されたものであつて、日本には日本の敎がある、

道もあるといふので自覺して、それらのものを包容しよう、羽翼として働かうといふ見地から押立てられたものに、理當神道といふのがあります。垂加神道の如きも、理當神道の一種と云へないことも無いと思ひます。

扨てそれがどういふ風になつてゐるかと云ひますと、山王神道といふのは天台宗から出たものです。その山王神道の中でも、享保、明和のところに依田偏無爲といふ人が、この方面に現れまして、從來よりも尙綿密な說き方を始めて居ります。又阿會神道といふものも山王神道から出て來た。これは戶隱の御別當をつとめて居りました乘因といふ人の始めたもので、これは老莊を加味してある。兩部の方では葛城の慈雲尊者が、雲傳神道といふことを始められたのも、やはり此程の事です。それから妙心寺に傳はつてゐた玉鳳流といふ神道、これは花園天皇樣から始まつたことになつて居りますが、それもこの頃になつて、東嶺和尙が新に運動を起して居ります。

儒學の流派

儒學の方でも從來は漢唐の古註を用ゐるものと、程朱の新註を用ゐるものと、陽明學と、大體この三種でありましたが、中江藤樹、熊澤蕃山などといふ人によつて、備前の池田家を中心に心學といふものが盛になつた。宋學の方には惺窩や羅山のやつて來た續きがあります。山崎闇齋もあれば、木下順庵もあります。伊藤仁齋もあれば、荻生徂徠もあります。さういふ工合であつたのが、こゝのところになりまして、古註と新註とを折衷する學派、卽ち井上金峨の折衷派なるものも出て參りました。

佛教の各宗

坊主の方は勿論八宗九宗で、てん／＼に爭つてゐる。各〻異端外道として御互に排斥し合ふので、それが新しい證據を擧げるとか、一々行法から眺めるとか、修證から行くとかいふことになる。儒者にも儒者の行が無いし、僧侶にも僧行がない。それが從來のものゝ威力を疑はしめることにもなる。ですから儒者は儒者、僧侶は僧侶といふことを立てゝ、めい／＼自分の事として行できめて行く、といふ遣方になつて來た。それが今まであつた神道諸派や、儒者の學問ばかりでなく、佛教の上にも現證を求めなければならなくなつたのです。目前の證據を求める。現世利

公となり、又慈雲飲光といふことにもなり、戒律の議論も起つて來る。儒者の方にも尊王運動が起る。垂加神道の方で花讀、享保の間に正親町神道といふものが生れたのも、淺見絅齋先生が關東の土を踏まぬと云つて力瘤を入れられたのも、皆こゝのところから來てゐるのであります。

目についた事柄

こゝで私どもがちよつと見ても氣のつくことを、享保以來明和度までのところをずつと眺めて見る。そこにはどんな事があるかといふと、享保三年七月に三鳥派の祖恵といふ坊さんが島流しになつてゐる。これは日蓮宗の坊さんですが、十四年になると、日妙といふ坊さんがあつて、これが日蓮上人の生れ代りだと云つて、いろ〳〵な靈驗を示した、といふ事實がある。又この享保十四年といふ年には、心學の祖である石田梅巖が、了雲禪師の手許で心學の基礎となるべき事柄を得て居ります。その孫弟子である中澤道二が江戸に心學を弘めたのは、寛政三年の事でありますが、この人も東嶺、蒙源二人の禪智識に就いて修行し上げた人で、心學の一流は後でも申しますけれども、禪を背負つたものなのであります。

享保年間　享保十八年には不二行者の身祿といふ、不二講の大先達が死んで居ります。此の人から不二講は盛になつて來たのです。不二講には貞享頃から先達といふ者があつて、だん〳〵盛になつて來てゐたのですが、この身祿の時に八分通りまで出來上つたと云つてゐゝでせう。この年には又不受不施派の日蓮宗の人達が、上總で盛な布教運動を起し、それが時の法度に觸れて處分を受けて居ります。

元文年間　元文四年には老莊學者であつた自墮落先生が生どむらひをしてゐる。それから寶暦二年になりますと、天台宗の

寶暦年間　方に安樂律の廢止といふ事が起りまして、これが中々の大きな騷動でありました。

寶曆六年には今弘法といふ行者が現れて、下總に弘法水といふ水が湧出すといふので、大變な事でありました。又その年に竹内式部の追放事件がある。この人は闇齋學派の人で、又正親町神道の起る因緣をなした人でもあります。

寶曆九年には法忍といふ淨土宗の坊さんが、拜伏念佛といふものを起して、非常に流行つて居ります。十一年には託龍といふ、これも淨土宗の坊さんが、佛を見たといふことで、厲聲念佛が大變盛になつた。それから目黒の長泉律院が出來ました。長泉律院の普寂律師は、本願寺宗に生れられたのですが「みにかけし法の衣は同じきも身はばあはねばぬぎすてにけり」といふ歌をよまれて淨土宗に改められました、臨終の教誡にも、吾門下の士、多く義學を執して、動すれば事相を輕んず、是汝等の罪なり、義學は目の如く、事行は足の如し、目足相扶け、能く至る所あり、たとへ義學ありとも、苟しくも事行を缺かば、安んぞ淸涼地に到るを得んと云はれてあります。享保の特徵は斯る世外の人にも現れて居ります、誠に時世は恐しいものです。

寶曆十三年には安樂騷動の持越で、上野の學頭、執當が打揃つて失職してゐる。それから明和二年になりますと、安樂騷動がまだ靜まらず、兼學派の者が七人も追放の處分になつて居ります。

明和年間

明和三年には例の御藏門徒の事件が起つて居ります。本所の出山寺の和尚が邪法を行つたといふので、處分されたのも、この年のことです。

明和四年には山縣大貳の事件があり、藤井右門と二人が勤王の魁となつて殺されてゐる。又上野で十二人、退院いたし、兼學派の者が七人、重追放になつて居ります。

安樂騷動の兼學律のことは、說明すれば長くもない、面倒な事にもなりますが、要するに律儀の上の爭であつて、この戒律の上の爭を生じたといふことが、享保時代の特徵なのです。竹内式部や山縣大貳のやうな人が出て來るの

ら、たゞ議論だけではいけないから、效能、效果を示す。實效を見せるといふところに力が入るので、かういふ事が出來るのであります。信ずるに足らぬをかしな話でありますが、下總の弘法水といふやうなものでも、それをつければ病氣が癒る。所謂驗といふやつで效能がある。佛樣の靈驗で、さういふものが現れたとする。こゝに出て來た事柄といふものは、皆神なり佛なりの靈驗を現したもので、靈驗は實際に斯の如くあるものだといふ心持から、かういふことが出て來て居るのです。まだこまかく調べたら、他にも澤山の例があらうと思ひます。

經濟から見た變りやう

そこで「飛鳥川」の序などを見ると「享保半までは昔の形も少しは殘りしが、寶暦に及び、凡三四十年以來風俗變化す」と書いてある。その寶暦度が際立つて見えたといふことは、制度と經濟の變化から說明すべきことでありますが、とにかく時世の移りかはりかけたことはこれでわかる。明和四年版の「役者名物袖日記」の序には「元祿時分の事を當世になぞらへては拔群の相違、風俗から僞仕から三遍ほども變ぜしこと」とある。これは享保で變つて、又寶暦に變つたことを云つてゐるのです。これを經濟說明といふよりも、もつと手近に通貨の變化で說明しても宜しい。即ちこの間に元字金、新金、文字金と三度通貨が變つてゐる。さういふ風に通貨が移り變りする時なのです。

通貨が度々變る

享保の末から元文まで、新金から文字金の出るまでの間は、徂徠は例の「太平策」の中で、「ナマジヒノ了ヲセムヨリハ老氏ノ道ヲ行ヒ、文帝ノ治メ、聖人ノ次ナリト知ルベシ」と云つて、何もしないで成行に任せるより外に無い、といふことを書いてゐる。太宰春臺の「經濟錄」にも、「無爲ノ時節ナリ」といつて、やはり見送ることを主張してゐる。この時の經濟狀態は、經濟史料に引當てていたゞけばよくわかることゝ思ひます。もつと手短に云へば

無爲の時

「三貨圖彙」か何かを眺めていたゞいてもわからうと思ふ。「我衣」などは概括して、

享保三年御公儀御儉約嚴しく仰出され、依ㇾ之自然と公儀へ御金納て出ず、自然と金銀逼迫して皆商ひも薄く、年々せまり、次第々々に金をへらし、一年々々と見合す内、元手もなくなり、さて俄に儉約すれども及ばず、これによつて買べきものも調へずして間に合せる時代なり、

と云つて居りますが、よく盡して居るやうであります。

諸大名の窮迫

成程、蓮池の御金藏や吉宗將軍の御遺金のやうなものがあり、「諸聞集」などを見ると「公義に金が多集つて天下太平、金なくば天下不ㇾ治」と云つてゐる。諸大名が窮迫して、借金の爲に家老や重役が町人に頭が上らなくなつたのも、やはりこの時からの事です。一般の者は片寄りした資金の爲に手も足も出ず、たゞ御間に合せといふことになり、町人達は儲からぬ時節だと云つてゐる。この間に何分か違つた儲が出來て、金持になれるといふのは船商、廻船業ばかりです。この時には大分我國の海運を刺激しまして、だん／＼船廻しの商賣が多くなり、海邊に金持が出來るやうになつた。けれどもこの頃の海運業といふものは、まだ／＼御話になるものではない。今日とは莫大な差違があるわけで、先づ日和を僥倖して渡海する有様ですから、全く冒險的の仕事なのであります。中には國法を犯して密貿易をやつた者もある。格別に勇猛な人間が、一か八かでやつてのけるのでなければ、この方面ではどうもならない。たゞ稼ぐとか、溜めるとかいふことなら、一般の町人と同じく、儲からぬ、溜らぬ時節だつたのです。

農村の行詰り

農村の方は如何だつたかと云ひますと、元文頃から關東方面では所々に機業が起つて、工を兼ねるやうになつた。さういふ副業を持つた農村は繁昌するけれども、機業の無いところは一向繁昌しない。「寛延曆世說」などは、一般の狀態を申すのですから、「百姓作てもたらず、町人渡り兼る」と書いてあります。さういふ勢でだん／＼押詰つて參りますから、明和七年には徒黨法度を出さなければならぬやうになつてゐる。天明七年には江戸で實際に打壊騷

ぎが起つて居ります。明和以降のところで、關東方面では農民の暴動が多く「應思國思編」、「諸國百姓一揆」などといふ本が出て居る。それに先立つて、一般の状況は或人達にはわかつてゐましたから、寶暦に入つた頃からもう成行を心配する者が出て來た。かう不安、不足で、倦怠してゐては、この結果がどうなるだらうか、といふことを案じる者が澤山あつたのであります。

すべて勸懲實效

その結果として談義物が出て來るわけなので、それを考へて見ますと、吉宗將軍が「六諭衍義大意」を拵へて頒布されてから、もう二十餘年たつてゐる。然るにこの新教育の意義は一向徹底しません。さうして一方ではたゞ知識欲を募らせて、益々不安、懐疑のみを惹起す、理惑のみが高じて參ります。そこで是非とも教訓誨諭といふやうなことをしなければ、世道人心をどうするか、と憂へる立場から、早くしては槙山、降つては好阿のやうな人も出て來るのであります。

「下手談義」の勸懲の說

この人達は如何に面白く讀めるやうに教訓書を拵へても、寛政の改革に怯えて、俄に教訓書を拵へた戲作者等とは違ふ。自分の著作が行詰つたから、教訓書に轉じたのではない、深い憂を懷いて著作する人達なのですから、これは違ひさうな話です。「下手談義」は寶暦二年、三年と續けて、正篇と續篇を出したのですが、好阿はこの本に於て、三說法も談義も勸懲といふ志に變りはない、坊主であつても、儒者であつても、勸善懲惡の心持は同じである、三教ともそこに違ひは無い、從つて教化といふことから云へば、貝原のやうな碩儒も、面白をかしく筆を執る、戲作者のやうに出かけてゐる者も、その志は別でない、といふことを眞先に云つて居ります。そこで去嫌をなるべくしないつもりで、「御法度之切支丹又は不受不施にてさへなくば、其餘寺御建置被レ成候程の宗門、いづれにても苦から

祈らずとても神や守らん

す候、必々宗旨に賴託有間敷候」「何の宗旨でも宜しい、法律で禁じてゐるものでさへなければ差支無い、何にしても勸善懲惡の外にはないのだから、そこから云へば何でも宜しい、といふ風に建前をきめてかゝつてゐる。

それですから「教といふものも、勸善懲惡といふことにつゞめて居ります。坊主同士の爭、さし當り淨土、日蓮兩宗の爭にしたところが、その人達の說くところのもの、卽ち敎化する目的は、勸善懲惡といふことに外ならぬ、僧行が衰へて、德義が無くなつてゐることは殘念であるが、云ふところの事は勸善懲惡なのだから、聞いていゝことだ、といふ風に片づけて居ります。

又かういふことも云つてゐる。

詩作が達者でも無點が讀ても、酒色に溺れ驕りかざつて名聞ばかりの學問では、聖人の罰もあたりそふなもの、

それに續けて、我國の事を知らずに唐贔屓をしてゐるやうなのは何事だ、自分のうちの事を知らずに、隣の事を知つてどうする、理窟で十分に說いて行く、その理窟の面白さに耽つて、何の實效も無いやうでは、折角理窟を覺えても仕樣が無いぢやないか、と云つて、徂徠一派が行狀をさし措く風のあることを指摘して居ります。さうして闇齋や益軒のは實效がついてゐる學問だから、實學だと云つて褒めてゐる。寬政の改革の時に、例の三博士――柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里――が頻に實學といふことを云つて居りますが、それに先立つて、かういふ通俗な書の上で、實學といふことを已に云つて居るのであります。

これは無論實效、實用といふことで、たゞ理窟に耽つたり、知識を喜んだりするのは、道樂だと見てゐるのですから、「國恩に背ば神佛も守らしやる事じやない」と云つてゐる。篤實にやつて行けば、それでもういゝのだ、といふ意味で、「愚なるかな罪を天に得れば祈るに所なし」と云事一向合點なし」とも云つてゐる。これは「下手談義」流の本の中に、屢〻「祈らずとても神や守らん」といふ菅公の歌を持出して來る、その地をなすものだと思ひます。その

證據として、「御法度の旨を守りて朝夕忘れざれば疑なくその身は終り候」と云つて居りますが、その身がよく修まつて行けば家もよく齊ふ。それが勸善懲惡の效能であつて、神佛を頼まずとも、理窟三昧にならずとも、それで宜しい、といふのです。かういふ心持はこの本の一番しまひに回向文があつて、

願以二此功德一、平等世間の衆、同發二至誠心一、常住二安穩國一。

と書いてある。坊さん達のは菩提心とあるのですが、それをこゝで至誠心と云つたのは、誠心誠意で行へば、それが自然に勸善懲惡の本意になる、それで行きさへすれば何の事も無いのだ、といふことを現す爲に、至誠心といふものを土臺にして、勸善懲惡で陶冶して行く、といふ風に說いたのであります。

至誠心を土臺にす

それから「愚僧が談義は皆町人の教化のみにて一字も武家の政を說ぬ」といふことを斷つてゐるのは、吉宗將軍が「六諭衍義大意」を刊行された趣意を奉じてゐるのです。むづかしい事や妙な文句を云はずに、常識的に結成させようとするのが「下手談義」の趣意である。そこから申しますと、談義物といふものは、體裁だけ談義、說法に學んだのではない、内容にも特殊なものを持つてゐるのであります。

似たやうで違ふ諸作

たゞ談義、說法の型式だけ受けたものとすると、自笑の「傾城禁短氣」といふものが、寶永八年に出てゐる。享保の末には其磧の「渡世身持談義」といふものも出てゐる。此等はいづれも說教坊さんの調子合ひを學んだもので、體裁から云へば談義物と區別は無いやうですが、體裁ばかりでなしに内容から考へると、とても一緒にすることは出來ない。「下手談義」とは別扱にしなければならぬものなのです。三教の一致點を勸善懲惡といふことにして、その中心をなすものは誠心であり、一々の行跡に試して行く。かういふ風に說き立てる心持は、一般の教化といふこ

「傾城禁短氣」「渡世身持談義」

とを考へてゐるもので、それは憶に吉宗將軍の新教育方針を維持する心持であります。上方にも江戸にも教訓ものは前來ないではありませんが、享保の新教育方針を支持するものはない。ないのが當り前です。享保以前のものは勿論取除けにならなければなりません、享保以後のものでも吉宗將軍の意圖に遵由して、世道人心を維持したいといふ心持の物だけを類別するのであります。

馬琴の勸懲

かういふ心持があるのだから、どうしても其磧、自笑あたりとは一緒にならない。後には勸懲と云ふと、馬琴一人のものゝやうになつて居りますが、馬琴が勸懲を振廻すのは、寶曆度に談義物があつて、勸懲を振翳して居つた、その延長と見なければなりません。

栲山の作物

「下手談義」と同じ志である栲山の作物、これは心持に於ては「下手談義」以下の談義物と同じでありますが、この方は儒佛一致として、更に神道者を出して來てゐる。けれどもこの總意は自性論に在るので、儒を表にしては居りますが、身を修める爲に心を修めることを勸めて居る、大分禪の匂の强いものである。從つて常識的な談義物とは、いさゝか相違が無ければならない。同じ扱にしてもいゝやうなものでありますが、この內容の差違から、やはり別にすべきものだと思ひます。

「大進夜話」「花間笑語」

又「大進夜話」、「花間笑語」などといふものがありますが、これは淨土宗の老僧の法話で、諸宗に亙り、儒老莊に出入して、大分幅の廣いものである。けれども決して手前を忘れるやうなことは無い。自分の立場を知らぬやうなものでない。自分の立場をさし措いて著作しては居りません。これも常識本位のものとは違ふ。常識で云ふから勸善懲惡になるので、佛とか儒とかを專らにせずに濟むのが談義物の本質なのです。だからこれも別にしなければならない。

「名無草」「都老子」

「名無草」、「都老子」といふやうなもの、これは自然、無爲といふことを主にしたもので、神老佛儒の極意は自然、無爲であるといふことにしてゐる。ですからこれも談義物と同じではない。たゞこの內容を翫味して行くと、神道

家である本居宣長などの神道論が、とかく老子の匂がするといふことは、本居の工夫、發明といふよりも、前からの引續であつたことが考へられます。

教訓とか教化とかいふことから申せば、前にも申した石田梅巖等のやつたもの、これは澤山あります。梅巖の弟子の手嶋堵庵や中澤道二のみならず、その御弟子達もいろ〳〵書いてゐる。それには又本心免許といふことがあり、策問了畢といふこともある。石門百則なんていふものもあります。この畠で申しますと、神儒佛共に悟るところは心である、心といふことを悟るより外に道は無い、だから神儒佛共に格別の違ひは無い。この心といふことから、心學といふ名も起るのですが、そこから神儒佛を一つにしてゐる。これも談義物とは違つて居ります。志すところは同じでも、組立に於ての違ひがあるのです。

體裁よりも内容

さういふ風に見て參りますと、澤山取捨すべきものがありますが、「下手談義」をはじめ談義物の系統は、内容と體裁の兩面から立てなければならない。そこで似寄のものを選分けると、どういふことになるか。「教訓不弁舌」の跋に、

教訓の二字有、いづれ便に成なんと開き見れば、其旨趣其積が形氣物の趣意に似たりしが、文章に當世の章とも在し、

とあるのは、「下手談義」を評した言葉なのですが、「下手談義」の方でも、

自笑其碩が娘形氣息子形氣は表に風流の花をかざり、裏に異見の實を含、見るに倦ず、聞に飽ず、

自分達と同じ心持のものだと云つて褒めて居ります。さうすると「不辯舌」の云つたところも、尤もらしく聞えるのですが、「下手談義」のは自らへり下つた言葉でありまして、その内容を點檢すれば、其碩などには三教一致も無

し、享保の獎學方策の維持も無いのです。

風來山人などは早く氣がついてゐたので、「根無草」などを見ると、如何にもよくそこを承知してゐることがわかる。その跋文に、

眞赤な赤味噌に神儒佛のざく〳〵汁、教のはしくれにもならんかと、いらざる世話を燒味噌に微意あることを記せども、牛の糞やら胡麻味噌やら、そのわかちなき人々には味噌を敷たる灸のごとく應ると少なからん、

と云つて居ります。あまり三教などに構ひさうもない人が、かういふことを云つてゐるのは、談義物の心持がどういふものだといふことを、知つて居つたものと云へると思ひます。

風來はもう一つ斯ういふことを云つてゐる。

儒を以てすれば彼曰聖人、物を食せざりしや、神道を以てすれば、またいはく貧にして正直なりがたし、佛法を以てすれば、又曰未來より現在なり、貴くはまづ釣と纏とを賜へ、家内の口を天井へつるして而後教を受べし、

これもやはり三教に引かゝつてゐるので、三教といふものは、もつと手近な實際から云つて、どれだけ役に立つものか、といふ悪口です。風來はさう云つてゐますけれども、喜三二は「古朽木」の自序の中で、

下手談義下手にあらず、根無草根無きにあらず、共に根の有る上手の作にして、赤賣曆始終の華也、

風來の思ふ所は實效

と云つて褒めてゐる。これは一箇の小說として見たら、何方も上手だといふ心持で、さう見たのかも知れませんが、それでは可哀さうです。その志から考へて見ると、なか〳〵そんなわけのものではない。早くから談義物が誤られ易いものになつてゐた三教の扱方、風來山人の思ふところは、どうしても何度か申したやうに實效の方である。聖人が取すましても物を食はずに居られるか、正直であろと云つても、貧乏ではそれが出來ない、未來々々と云ふけれども、現在の方が大事である、といふので、この節の人には氣に入りさうなことですが、これも譃ではない。かう

云はなければならなかつた事情も、考へて見なければならない。つまり當時の三敎が敎化力に乏しくなつたからのことですが、どうしてそれほど力が乏しくなつたか、效用を現すことが出來なかつたか、時世の不安、不足、倦怠が目に立つことは、その時已に著しいのですが、三敎を以て常識に對せず、常識を以て三敎に向つて行く。こゝで談義物の體裁が談義、說法を模擬したといふよりも、內容の方が明白に異つたものであつて、それで區別出來るといふこともわかるのですが、敎化力の乏しかつたのはどういふことか、これに就ては自ら別の問題になつて行くと思ひます。

常識を以て三敎に向ふ

伊藤單朴の心持

談義物の系統

假に系統を立てゝ見ますと、

敎訓雜長持	五冊	伊藤單朴	（寶曆二年）
當風辻談義	五冊	嫌阿	（同　三年）
下手談義聽聞集	五冊	臥竹軒	（同　四年）
返答下手談義	五冊	自他樂菴儲醉	（同　　）
敎訓不弁舌	五冊	一應亭染子	（同　　）
敎訓反古溜	五冊	守默齋南樂	（同十一年）

これだけは先づ眞直な系統らしく思はれます。

伊藤單朴といふ人は、この外にも「敎俗里談」、「錢湯新話」、「敎訓差出口」、「楚古良探」なんていふやうな同じ種類のものを、この後に續けて出して居ります。この人は興味あるやうに書いて行く點からいふと、好阿よりも大分

落ちる。が、その心持は好阿と同じことで、實に同志同感の人であつたと思ひます。

單朴の心は好阿と同じ

六諭衍義の大意、同小意とて中村氏が作、甚よいものじや、すゝめてよませよ、貝原の書は下手談義にさへすゝめてある、必つねにおこたらずよませよ、其外町人袋、百姓袋、冥加訓の類、分量記の前後二篇、此類の草紙、皆平假名で讀やすく、其理さとりやすく、いづれもよい書じや、あづけて讀せよ、女子には女大學、大和小學、女子訓の類、どれもよろしひ物じや

「六諭衍義大意」を支持す

盛に「六諭衍義大意」を支持して、その羽翼となるつもりで、努めて書いてゐる。その氣持は却つて好阿より餘計出てゐるかと思ひます。人の人となるやうに、といふ心遣ひは十分に認められる。「醫者も儒者も僧俗共に身上の治かたが一大事」と云つて、重きを修身に歸してゐるあたりは、大に「下手談義」を助けてゐるところが見えます。

この單朴といふ人の經歴は一向わかつて居りませんが、その名は伊藤半右衞門、江戸の麹町から多摩郡の青柳村へ引込んだ人で、寶暦八年の八月四日に七十九で亡くなつて居ります。その村の養福寺といふ寺に墓もある。どういふ身柄の人かわかりませんが、同じ村の權次郎といふ者を養つて子としてゐる。さうして老後をこゝに送つたので、今は苗字が變つてゐるが堀江銀造といふ人がその後です。只今でもその家はありますが、遺物と云つては何も無い。先年私はその家に參つて、いろ／＼取調べて見ましたけれども、殘つてゐるものは手拵の繰位牌だけでありました。この位牌に書きつけたのは皆自筆で、父母、親戚、故舊等の名が書いてありますが、殊に驚くべきことは、この繰位牌の中に有德院殿の位牌がある。

左大臣任　　辛未閏六月
廿日　　有德院殿將軍吉宗公寬延四歳

と自記してあるのです。どうして吉宗將軍の位牌を作つたかと云ひますと、前に書いたものに照合して、「六諭衍義大意」を拵へて天下に頒布された、その思召の難有いことに感激して、拵へたものでありませう。單朴が老後になつ

て書いたもの、心持は、この位牌を拵へた心持に現れてゐると思ひます。
單朴は七十三歳の時、はじめて「雜長持」を著したので、「楚古良探」の如きは遺稿として世に出て居ります。四種の著書があつたわけですが、その意味はいづれも同じである。その他に何の著述もなく、たゞこれだけの事に専念して居つた單朴の心持を考へますと、實に篤實なものであります。今日もかやうな心持を以て著述する人が果してあるかどうか。著述しないにしても、さういふ心持の人があるかどうか、と思ふ位のものであります。

談義物に對する誤解

好阿の心持に本づいて、いろ〳〵教訓書を書いた人達には、教訓書以外のものを著作せぬ人が多い。だからその經歷も愈ゝ知れぬやうになる。他のものは書かぬが、これだけは書くといふ心持は、まことに忝いものであると思ひます。比較することは何とも畏多い話でありますが、明治年間に「幼學綱要」を御拵へになつて、各府縣の師範學校へ御頒賜になつたのでございます。それは明治十五年十二月の事、教育勅語を御下げになつたのは、明治二十三年十月の事でございました。吉宗將軍は享保年間に「六諭衍義大意」を拵へて、市内の手習師匠に頒け與へられ、更にその板木を全國へ頒け與へられたのです。吉宗將軍は別段諭告は出して居られません。けれどもその心持といふものは、「六諭衍義大意」を頒たれたといふことで、よくわかつてゐると思ひます。その心持を支持して參るといふことは、まことに忝いことであると考へます。

「當風辻談義」

●やはりその心持と違はぬやうに思はれるのは、嫌阿といふ人の書いた「當風辻談義」であります。これは嫌阿といふ名前が已に好阿と反對してゐる如く、大體逆に話を進めてある。「下手談義」にある惣七引札の話や、相傳賣の浪人の話などの趣向も、逆に使つてあります。つまり反對に云つて同意に落ちるやうに書いてあるので、逆に〳〵と

持つて行くものですから、思はず知らずをかしみが出て來る。さうして成程と合點する氣持になる。それが洒落、地口、落咄などに似た味ひを持つて居り、又黄表紙などにも影響を與へてゐるやうに思はれます。

穴といふ語

「辻談義」の中に古風と今様とを對立させて話にしてゐるのがある。古風といふのは五十年前の日を以て、今の世の姿を見てゐるので、今様と古風との隔りは五十年です。寶永、正德から享保を跨いで、寶暦といふ世界、それを釣合して見て話をしてゐるわけですが、その中に、世の中の穴を知つたやうで知らぬ書きぶりだ、といふ言葉を使つてゐる。これは「下手談義」を逆に云ふ爲に、かういふ言葉が出て來たのです。「下手談義」に穴といふ言葉は出て居りますが、こゝではそれを、穴を知つたやうで知らぬ、といふ風に云つてある。穴といふのは今日も云ふ言葉ですが、これはどうも芝居の通言らしく思はれる。つまり樂屋から出た言葉なので、芝居言葉としては、土間や棧敷などに明きのあることを穴と云ふのです。だから芝居の出方のことを河童と云ふ。穴へ引込むといふところから、さういふ諢名が出てゐる。この穴といふことに就て、西澤一鳳などは「始終に連續せざることを雜劇通言に穴と云」と云つて居りますが、この言葉が一轉して世間の言葉になつたやうに思はれます。

穿つといふ語

缺陷とか、虧隙とかいふ心持で、穴といふから、穿つといふ言葉が出て來る。風來山人が「淨觀房が筆力はどふらく者の肝先にこたへ」などと云つて居りますのは、「下手談義」の穿ちのことを申すのです。肯綮に中るといふのは、さうしたことを云ふのでせう。灸所です。さう云はれて見ると、成程と合點する、思ひもよらぬことに氣がつく、はつとする、などといふやつで、この節の新しい處で申したら、ピンと來るといふことになるかも知れない。それですから「六々部集」にある「蛇蛻青大通」（天明二年）にも「惡穴をいはず、惡洒落を決してせず」などといふ言葉があり、明和元年に出來た「吉原大全」なども「はやりの談義風のあな事でも書たものであらふ」なんて云つてゐる。

談義物を穿ちの方にのみ見做す

談義物が出來てからさう間もない時に、もう談義物の深切な、眞面目な心持が間違へられて、「あな事」なんて云は

れてゐるのを見ても、穿ちといふ方にのみ見做してゐることがわかる。この穿ちといふことから、洒落本も出て來るやうな譯合になつて居ります。

宗教的安心は常識論の敵藥

それが又もう少し後になると、田舍源氏九編の序に「昔の田舍談義は狐の夜話、雜長持ともろともに流行、十方世界の穴を穿ち、一切衆生の頤を解く」と書いてある。この「田舍談義」といふのは寛政二年版、「狐の夜話」は明和四年版、「雜長持」は寶暦二年版です。前に云つた「吉原大全」が已に間違へてゐるのですが、その間違を更に間違へて、「雜長持」や「狐の夜話」などを、世間の御笑草の物、滑稽な物と解してゐる。表面は滑稽物のやうに出來てゐるけれども、あの眞意は決して滑稽ではない。けれどもだん／＼滑稽扱の方へ近づけて行くわけになつて居ります。

「辻談義」の三教一致論

それからこの「辻談義」の中に、釋迦の言葉に托して、少し三教一致論をやつてゐるところがある。

此方の道も孔子の道も、所詮は人を直にしやう計に世話する事、都て中から下の衆生には、たとへ善事でも、高上な事の格をはなれた事は知らせぬ法といふ物、莊老の道で御坐莊老と、手前勝手な滅法界を説、放蕩先生に從ふと、氣は廣々と成べきが、敎てさへゆかぬ者を邪々馬に導はづして置やうで、手に餘る時はいかにすべきや、

向上な事、格をはなれた事は知らせぬが法といふのは、法然上人の一枚起請に、これより奧深きことを知れば慈尊の憐みはづれといつた處を撫ぜたやうにも見えますが、「返答下手談義」に「肝心な所の安心はどふいたすがよからう」とあるのに酬いたのです。大體常識論で行くのでありますから、宗教的安心の沙汰は全くの敵藥である。そこに答へた言葉であります。一般に對して高遠な事を會得させることはとても出來ない。特別な研究に堪へぬ者に、

さし當り納得させる。それはどうしても常識の分別より外に仕方が無い。さうしてそこで落著をつけて、その落著をしるしとする。これは「論語」の「由らしむべく知らしむべからず」と同じ心持のやうに思はれます。これは反對說のやうにも聞えますが、ぐつと押詰めると決して反對說ではない。同意の說を同意に云つたのでは效果が少いから、效果を多くする爲に逆に說いたまでのものと眺められます。

好阿及一團の人々

この「返答下手談義」の著者である儲醉といふ人も、傳記が知れないのですが、この人は好阿のことをよく知つてゐる。好阿は大坂薩摩堀の醫者、積慶堂德孤子であつて、その變名が淨觀房好阿である、といふのです。淨土の坊主返りで、今は醫者だけれども、昔は坊主である。無爲庵といふ庵室を構へて、そこに住んで居る、といふ風に好阿の消息を傳へて居ります。これは「下手談義」にも、故鄕の大坂を出て諸國を行脚し、今京に住んでゐる、といふことが書いてある。又自序に「洛陽沙彌」と書いても居りますし、奥附には京の靜觀房とありますから、どうも京都に居つたらしいのですが、元來は大坂生れの人で、大坂に家があつたのでせう。「莘野茗談」には、兩國橋に泡雪豆腐で賣出した日野屋といふ店があり、かなり儲けてから株を人に讓つて手習師匠になつて、山本善五郎と云つたのが好阿のことである、と書いております。日野屋のことはやはり好阿の書いた「御伽空穗猿」に委しく書いてありますが、「莘野茗談」の話が間違無い話であるかどうか、慥めるほどのものも無いのです。けれども好阿自身が、故鄕が大坂で、方々歩いて今京にゐる、と書いてゐるのですから、それを信ずるより仕方がありますまい。勿論江戸にもゐたに相違ありません。大坂の薩摩堀の醫者だつたといふことも、かうなれば大分信用されるわけです。

好阿の經歴

儒醉と嫌阿

好阿の事ばかりではありません、寶曆四年の一月に板行された「返答下手談義」、これには自序があつて、三年五月と書いてある。この「返答下手談義」に就て、作者は江戸生れの恒原脇之進といふ者である、と云つて、餘計な事をするなと「辻談義」は書いて居ります。恒原脇之進といふのは、いづれ假名でありませうが、何にしても「辻談義」は三年九月に板行されたものでありますのに、それよりも後に出來た「返答下手談義」のことを知つてゐるのを見ますと、これは好阿と云ひ、何と云ひ、やはり一つの仲間であつたやうにも見られる。のみならず寶曆十一年に出た京版の「教訓反古溜」の自序に、「無爲菴の主人は方外の交わり也」と書いてある。して見ると「教訓反古溜」の著者と好阿とは、友達の間柄であつたといふことも考へられます。

「教訓反古溜」の著者南樂

時世を憂慮する人々

それですからこの「下手談義」を中心として、同じやうなものを書いた人々は、時世のことを憂慮し、吉宗將軍の遺旨を支持し、それを擴張して世道人心の爲に貢獻したい、といふ一團の人々であつたやうに思はれるのであります。

「下手談義聽聞集」の指摘ぶり

世俗について鋭く指摘

それから「下手談義聽聞集」、これは臥竹軒といふ人の書いたもので、寶曆三年春の跋文がついてゐる。これは逆說ではありませんで、補遺と云つたやうなもので書いてあります。これは作者から申しましたならば、「下手談義」の足し前のやうな氣持で書いたもので、作風は少々違つて、當時の世俗に就て指摘する方がなかなか盛になつてゐる。これは前の「下手談義」や「辻談義」よりも、もう少し鋭いところがあつて、盛に指摘してゐるのですが、大體の趣向は「下手談義」を襲つてゐると云つて差支ありません。鵜殿退卜のことを云つて、知道軒、これは志道軒を當てたのです――は後座に出ると云つたり、似顏の挿畫を入れたりして居りますが、「漢楚軍談馬鹿の初り」と稱し

穴をつゝく　て、世間の穴を盛につゝいてゐる。この行き方は、當時の講釋師馬場文耕が寶暦八年秋に書いた「愚痴拾遺物語」とよく似て居つて、なか〳〵きび〳〵と指摘してゐる。これも本文を對照する方がよくわかると思ひます。

是よりおなじみの知道軒。漢楚軍談馬鹿の初りを。扨事に申さるゝ筈と。座を下るれば。知道軒おかしひ顏色して。座に居替り例のたま物をトヽン〳〵。扨夜前より申ます漢楚軍談。今ばんは和らぎて。馬鹿と申處をおかしふ申ませふ。先いづれも御存で御座ろふが。趙高といふ婾氣者。いかにおのれが威をふるふとて。鹿を馬と無理に言せて。其鹿が。始終馬の代りにならぬものを。二世皇帝をたぶらかし。馬鹿といふはおのれが事。其後日本へ渡りて。今に馬鹿ものおほし。最前退卜殿の囃されし通り。惣躰近年女郎買の形がつまらぬ。操芝居の。足つかひのやうに。まつ黑に著なし。御納戸茶の。裏を夜著ほどにふきを出し。天窓は電光もうつり行ほどに光らせ。中拔草履で裾引摺てありく。此中拔草履といふは。歴〳〵の御方様の御はきなさるゝか。又は持草履にすべき物を。胝のきれた足にまで。やりばなしにはけば。何が蚰蜒のやうに。忽になるをも構はず。いかに當世ん。下直なる物なればとて損德を辨へぬ。それは兎もあれ下々ではくべき物にあらず、近頃はまた猫もしやくしも。御納戸茶〳〵と。女中も紅裏つけて著るのはまれなり。但し紅うらより。安くつく故か。木綿の單物にまで。御納戸茶と好んで。我こそ人からならぬと。おもふこゝろの氣のどくさ。惣じて今は。ひとへ物を引ときのやうにこしらへ、あつくろしひ形り。ひとへものなどは。すゞしきこそよけれとおもふに。高が五匁か六匁の物を。色〳〵に染を好むは。婾氣な事。但し木綿ものも。はれ著に成るかけしらぬが。さも物ほしそふな仕かた。中にも無理に人がら作る者は冬の取附より。黑羽二重に。御納戸茶の。うらのつゐた。ぼた〳〵する小袖に。おなじ色の綿入羽織。寒中にもそれ一色。春先に羊羹色に成た物を著つゞけ。漸〳〵更衣襲に取附けば。黑ちりめんの羽織一ツを。蜀紅のにしきと思ひ。肩の引けるまで著ながら。歴〳〵の衆と同じやうに。馬鹿つくして。其仕廻は。楠ぶせに成べきしがくになり。無理無躰に女郎と。心中などを仕かけ。業をさらす。其中にも武左といふ者は。扨〳〵きたなく。いやらしひ者で。壹分つかへば壹分五厘が遊びを仕たが

り。口をなめたりトヽンノヽ頬を嘗たりする故。女郎がアノ客衆は。武左かときくと。びつくりし。身を縮めていやがる。かりにも鯛を味噌煮にすれば。やれ武左を見るやうなの。屋形者の様なのと。口ずさみにもいやがる。傾城に限らず。野郎迄が。おなじくいやがる。其やうに思はるゝは因果な事、チト廿六夜を信心しらるれば能い。何がいけもせぬうなりぶしを。そこ爰と噛じかじり。語つて見たり。芝居でもする通り。生絹の頭巾を目まで被り。編笠をよろけながら山寺のやと謡ふは。武左に極つたり。先第一野暮の根元寔の武左からはじめての事。いかに不自由なればとて。しつこくせずに。どうかおもしろふあそびやうのありそふなもの。しかし武士の猛き心を和らぐるの同利で。ふさけて遊ばるゝでござろふ。又町人のやうに兎かくすいノヽと。誉らるれば。損のゆくも構はず。つかひ捨るも大嬌気トヽンノヽ。扨浄るりといふは。江戸浄瑠璃。土佐ぶしを始として。外記。半太夫。河東に至るまで。少しもいやみなく。堆き御方の御耳に入ても。なるほど賤しからぬふし附。中興上方より。義太夫ぶしといふを語り出し。今専江戸にてもはやるが。是は第一文句をよく作りし物。仁義釋教戀無常と大形におもしろふ作り。色々にふしを附て。今三ヶの津。操芝居は皆。此浄るりにとゞまる。又其後豊後節といふ。下作な浄るりを語り出し。酒屋の樽拾ひまでうなる様な。心易ひふしづけ。文句合は。其いやらしさといふ事が。仁義釋教戀無常と。揃ゆる事も叶はず。僅紙四五枚へ。泣き事を入て。しかも江戸浄瑠璃の中や。謡本の中から盗で。無理無躰に。文句をこじつけうならせるを。いやでならぬか。口をしきけ。それが當時の人の氣に。うつり込で。上がたぶしを浄るりとおもふ世と成し。此中もさる歴々の息子が。下手談議でも讀れたか知らぬが土佐ぶしを情出して稽古し。吉原へ行て。何が語り出したれば。女郎がいふにはおまへは。乞食の眞似をせずとも。ほんの浄るりを聞せなさんせと。一口にいひつぶす。土佐節も乞食ばかり。語るものと成しも。むかしと今とうき世ちがひ。せう事もない事で御座る。(下手談義聽聞集)

願の愚痴の弁

「愚痴拾遺物語」の指摘ぶり

徒然艸にいでや此世に生れては願しかるべきことこそ多かめれと書し、此世とさしたるは何國の事なるぞ、江戸などに生るゝ人、何不足あつて願はしかるべき、「目に青葉山ほとゝぎす初鰹」と自由自在の都にて、貴賤ともに事足らぬ事はなけれども、其繁花を見ならひ、身の上に足る事をしらず、及ぬ人の奢榮曜を浦山ゆへ、いろ〳〵ねがひは起れり、兎角聖人の教のごとく、己が身の上事を知るべし、

足る事を汁にぞ年の貝杓子、

此句市川海老藏發句のよし、貝杓子壹本調へて正月を待、是にて我は事足りぬと、至ておもしろく覺、しかるに當代の男女貴賤ともに心願絶る事なく、甚不仁不義の事朝暮心願して、日天月天諸神諸佛へ祈る事、己を人におもひ直してみるべし、至て恥しき事を神前佛前にて、いかに人はきかぬよふにいへばとて、心の底を神佛へ向、あるとあらゆるくらき事を、夫が中にも歴々武士弓取とも言るゝ身の、何卒立身出世加增役替、誰よりも私を先へといらぬ他人を引退、まん勝に我身を立んとは、人間さへ心有人はあいそふつかすべし、いはんや唯一清淨の御神を、己が邪心とひとつに、此願成就の後は何を奉らんなどゝ、當時の御役人さへ、よき人は小人のまゐないにふけるべきや、神佛何ぞ金銀のよくにかたぶき給はん、農工商皆々己ニ而得手勝手の願を起スこと、愚痴の甚といふべし、取分女のねがひ望程おかしき事はなし、平生はいと恥しき風情して、間近き親類にさへ顏を覆ひ、物言兼し身の、淺草雜司ヶ谷へ參り、長々と祈る口の內の願望、神佛に成てはさこそおかしき事多るべし、わがいたづら事、身勝手のとを數へ立て、密夫間男に思ふよふに逢たひの、厭はれぬよふに仕たいの、芝居を見たい、戀路をかなへ給への、無盡が取たい、金がほしいなど、いやはや埒もなき有様なり、凡神前佛前に奉納の繪馬は必神馬を牽事、日本の古實に輕き者は正眞の神馬ひかせがたきゆへ、白馬を繪書て額にして奉納す、よつて繪馬といふにあらずや、ケ樣の禮式にて神明も請納し給ふべきに、頃日の奉納を見るに、己があい方の傾城女郎、或は陰間役者の形を書、筆ぶとに大願成就などゝして指上しを、觀音鬼子母神悅び給ふや、神佛何ぞあげ卷宮古路のうかれ女に執心はなし、菊五郎富士郎贔屓は彼

成まじ、己が不儀を額に書て世上に業を晒といふべし、惣て名聞せはしく、神佛開帳場に奉納品々、町名を書事、甚愚痴の至りなり、嚴蜜頃日噂といふ書物に、薩摩の御守殿より石の手水鉢を献上被成度と有しを、吉林氏此度御異見有し事、扨々恭き事なり、當時開帳場寄進施法衆生奉納の額、皆々擣物にて正直の事にあらず、深川淨心寺の身延祖師開帳に、願主金五拾兩江村屋庄助と大きく札壹枚看板に上たり、是はへつつい河岸の上人庄助といふ馬鹿者也、纔五十兩指上けるやと眞を聞ば、金三兩にて五十兩の札を張てもらひけり、是等何の爲にする事にこそ、世人を迷はすの罪人なり、假初にも日蓮宗は四拾餘年未顯眞實、法花の行者は實悟にたよると、うそのない所を自慢あさる日蓮上人の前に、僞の札をして合點可レ被レ成哉、住持も同罪人也、淨土宗とてみそを上るほどあつて、一向宗などは毎年二三度づゝ、本願寺の賽錢箱の中に百兩包入てあり、勿論たれと名もなく町所もなし、施主しれず、よみ人しれぬ包金有事也、是名聞をはなれ眞實と可レ言なり、他宗の開帳回向院などとはきつい相違なり、當世神佛へ百度参りにさしを以て數を取、間數参る事、是なんぞ神慮に叶わんや、斯無禮の有様よろこび給はんや、女ははぎを顯し、男ははだかまいりなど無禮を極なり、神拜共禮服を着し敬ひ、愼み致すものなり、百度千度より只壹度眞實の拜禮こそ遙に增るべし、何事も淺ましく成行末ぞうたてけれ、其根元は住持無識無學より此頃初りたり、千垢離百萬遍などいかいたはけ也、父母病中に千垢離百万遍にてよきはよく、あしきはあしく、いづれとも片付るとて是を行ふ、父母枕元にてなまだ〳〵といふ、極重惡人ともいふべし、千代とも祈る父母の命を片を付て仕舞とはけしからぬ罪人なり、千垢離の行水を持來り、大病人へのませ、まじないとする事、今專らはやり物なり、十死一生の病人、大切の父母などへにどりの毒水を呑せなどしけるは、取も直さず仙臺の原田甲斐からつりを取物なり、近年俗の身にて大峯入レしてけさをゆるされ、何右衛門法印何兵衛僧正など名來る、大べらぼふなり、尤夫をゆるす本山金銀づくのはし、まづ本山よりして甚不埒不屆の事なり、文盲短才の俗人寄合て、さんげ〳〵六根淸淨一しゆらいはいなどゝ片言まじり、又言散す事同斷、若病人有時は寄合祈禱すると、いやはや片腹痛い、愚痴の甚しき也、さんげ〳〵とは先達而己が惡事をせし事、已來は決而致まじきといふと

なり、然るに石尊大山へ參詣して、言葉にはさんげ〳〵と言もはや惡しき事すまじきと言ながら、其歸には博奕或は遊女を買、何ぞ石尊のさんげ〳〵に可レ叶や、當世若き者大峯のけさをかけ、卷びんにて大廣袖の湯衣を著、皮厚の雪踏をはき、さんげ〳〵と唱ばかり、物見窓を覗き、流し目にて女子共をたらかし、何六根清淨の事あらん、切支丹門御制禁といえども、名の替りし計にてやはり其儘博天連の類にひとし、日蓮宗にてより祈禱といふ物仝恐しき事にて、中山正流傳授といへども是又不審也、當時祈禱者之者身持令はなし、凡祈禱と云物は、たとへば能きほくちと火打石のごとく、祈禱抄にも三色の内、一いろ惡しくても調ざる事也、祈禱を賴人信心祈禱の行法、扨經力と合躰して三ッ具足せざれば成就せずといへり、然るに其行者のほくちにしめり有時は、何ぞあかりを求めんや、是ほくちを糺し、ともし火をかゝぐべき事なり。（愚痴拾遺物語）

神は人を苦しめない

同じ指摘でも兩者の行き方に差異のあることは、この對照によつてわかりますが、その他に又かういふことを云つてゐる。世の中には厄病神だの、疱瘡の神だのといふものがあるが、神は人を苦しめる筈のものでない。

百姓どもが律儀に任せ、田の神のなんのと名づけ、田植唄にまで、來年參らふ、田の神よ、まかり申よ、田の神よなど〳〵とかく神に仕たがる、其樣に神が澤山とこゝろ安く出來るものか、（下手談義聽聞集）

といふのであります。

「下手談義」一派の持つ限界

神の有無の問題を外す

かういふことの指摘は、あまり御藥が强いやうにも思はれる。それは時世を憂ふるの餘り、そこに及んだものでありませうか。「下手談義」一流の行き方といふものは、さういふ思想を夢に托し、夢によつて神佛の言葉とか、神佛のなされ方とかいふものを取扱つてゐるのであります。これは神樣があるとか無いとかいふ問題を、避けるので

はない、外すのです。

そこで同じ筋目を追はうとした喜三二の「古朽木」の中などでも、菅公が「日本文字の方の親玉といひたて、日本の聖人といひたて、北野聖廟などと、歴々の儒者共も聖人あしらひ」にする、それは迷惑千萬なことだ、と云つてゐるのも、むやみに神様にされるのは、先様でも迷惑だといふことが、こゝに傳はつて來たのです。

よく了簡しても見よ、はえぬきの神ではなし、急に神がらを慎んで、神がましくしたいと思ては、中々苦勞のあることにて、人の願望など世話をやく隙はない、

こゝまで來ると、どうしても黄表紙になつてしまひます。教訓らしい教訓は聞手が無い。芝居に仕組んでも見物が無い。それを聞かせるやうにし、見させるやうにしたいといふ考から、面白味をつけた教訓、即ち「下手談義」一流のものが出て來たのでありますが、それもこゝまで持つて來ますと、心持も言葉つきも、をかしみになつてしまつて、本意が失はれて來る。ですから「下手談義」の一部の味ひといふものは、その味ひをどこまでも擴げて行くことの出來ぬものであると思ひます。

面白味をつけた教訓

殊にこの「下手談義聽聞集」の中でも、やはり時世のことを云つて居ります。それは凡五十年といふので、「辻談義」と同じやうに、寶永、正徳から享保を眞中にして、寶暦の現在、といふつもりらしい。さうして向うへ廻したものゝ幅はどうかと云ひますと、切落の客、棧敷の見物、といふやうに人の種類を分けて、中から下を覘つてゐる、といふ心持がよく現れて居ります。「下手談義」にも、町人を專ら覘つたといふことを斷つて居りますが、こゝではその町人といふこともそれより委しく、中から下といふことを云つてゐる。それが又「下手談義」一派の人の讀ませようとする讀者の幅だつたのであります。

中から下を覘ふ

これは「雜長持」にも、

先相應に假名書の草紙が讀れば、鼠の嫁入、金平本から、そろ〳〵と仕込、漸々に平假名の本をあてがふべし、

と云つてゐる。だん〳〵に引上げて來る。その引上げて來るといふことが、繪で見せる子供物を、讀むものにして大人に振向ける。そこのところが寛政になつて讀本といふものになつて現れた、そこに利いてゐるやうに思はれます。寛政の讀本といふものは、今日の言葉にしたら、通俗小說と純正小說とでも云ひますか、その區別を以て見るべきものであります。

勸懲で括る行き方

「返答下手談義」

それからその次が「返答下手談義」、これは寶暦三年五月の自序があります。返答と云ひますから、大に「下手談義」を駁正したものかと思ふと、さうでもない。その序の中に、

三教のわけもたわひもめつたやたら出るたまかせの長談義、

といふことが書いてありますが、それは「續下手談義」にも、

儒釋老莊どの道が、よいか、わるいか、どちらがどふかと、踏迷ひたる辻談義、

三教の埒外に立つ

と云つてありまして、何方にしましたところが、三教のどれを踏へてゐるといふことは決して云はない。その埒外に立つて、どれも同じやうに扱はう、といふ態度である。この根本の態度は「下手談義」も同じことであります。ですから「眞直にして三教にたがはずもありなんや」と云ひ、又「切支丹でさへなくば、ありふれし宗門、其得手かた〳〵にての事なれば、其儘にてもしかるべし、何にもせよ人を切害し、強盗せよとの教へにもあるまじ」とさへ云つて居ります。

さうしてどういふ風に括るかと云ひますと、この括り方も「下手談義」と同樣で、

只諸惡莫レ作、衆善奉レ行と勸善懲惡と申薬、

から云つてゐる。つまり勸懲といふことに歸するのです。勸善懲惡といふことは、「下手談義」の方でも手持のもので、三教をこゝで一致させる、ほめて行くのでありますが、「返答下手談義」の趣意も、大體に於て變つて居りません。たゞ時世に就ての斟酌をしなければならぬ、といふ建前でありまして、風俗の悪いのは時節、時世である、と云つて居ります。總じて物は人並が宜しい、世間並でなければいけない、何方へ片倚つてもよろしくない、變つた様子をしてはいけない、といふ建前であります。

三教を勸懲に歸する

時世や立場に就て斟酌

それだけの差がありますから、儒教などに對しても、之を表にするの、裏にするのといふことは勿論無い。

くどふなく手短なるは異國の風じや、理のはやくあきらかなるは唐より外にはござらぬ、日本にうまれて我國をきらひ、格物窮理も唐でなければならぬとおもひ、唐といふ字に大きななづみがついて、格物窮理の本をとりうしなひ、或は我國も天竺の出店と心得、とんでもない横丁へ這入て、跡へも先へも行かず、果は理屈のあぶれものと成て、我人のもてあましものとはなりぬ、

といふやうなことも云つてゐる。これは時世論ばかりではありません。自分達めいく〵の立場を考へろ、といふのであります。

大體さういふ風に偏頗が無いので、たゞ時世といふことに就ての斟酌を多くせよ、といふことでありますが、それも「下手談義」のやうに、肚に物があつても無くても出さないのとは違つて、多少は出してゐる。この本の一番しまひのところに、

なにもかも造化自然の一物、よきものとてもてはやし、あしゝとてそいですてるは、われにたをされたるたをれものと申ものにてあるべきにや、

と云ひ、それを結ぶのに、

池の面に月は夜な〳〵かよへどもすがたもぬれず水もあとなし、

といふ歌を以てして居ります。こゝまで來るともう常識論ではない。根ッ子を自然に托して、さうしてその餘を常識で行かうとする。そこのところを見ると、道教の見識のやうでもある。併しやはり勸懲で何も彼も片づけようとしてゐる。道教にも勸懲はありますけれども、道教の勸懲は「下手談義」の勸懲とは大分振合が違ひます。尤もこれは根ッ子の話で、こゝに擧げたのは終のところにある數行の文字に過ぎない。大體から云へば、「下手談義」と同じく勸懲的態度なのです。たゞ肚に物を持つか、持たぬか、三教のどれをも肚に持たぬのと、その中のどれかを肚に持つたのとの違ひが出て來る。かういふのを腹の違つた兄弟とでも云ふのでせう。

根を自然に托した常識

折衷式な「教訓不弁舌」

その次が「教訓不弁舌」、これになりますと、頭から序文に「穴」といふ言葉を持つて來て、

穴　今世間之時花詞、以レ是可レ爲ニ趣意一、

とさへ書いて居ります。だからこの本は盛に穴といふことを振廻してゐる。こゝでは寧ろ矛盾といふ意味に、穴といふ言葉を使つてゐるので、「人の仕落したる事をから名に穴と唱」と云つて居ります。それが又「下手談義」の心持を續けて行くものですから、修身といふことで押へてある。一々の行跡に就て、いろ〳〵矛盾したところを捉へて責立てゝゐるのです。

穴といふことを振廻す

矛盾を捉へて責立てる

例へば巫女と釜拂が賣色をする、それも捉へてゐる。老僧の昔語によつて、坊主の品行の惡かつた話も捉へてゐる。博奕と女郎買との比較を捉へた話もあります。吝なところと優長なところのある京生れの番頭と、贅澤で氣の

荒い江戸生れの番頭とを出して、土地自慢の爭をさせる。さうして之に對して主人がそこへ出て、二人の云ふことは御互の心得として、面々に云はれたことを慎むやうにしたらよからう、といふ折衷案を持出す。つまり雨落しの遣方で、悪いことを見ては戒め、いゝことを見ては奬勵するといふ、この折衷の仕方はちよつと面白い。今までにまだ云つてゐない新しい趣向だと思ひます。

雨落しな折衷の遣方

大體さういふ筆法のものですが、儒者の行などに就ては、なか〲面白いことを云つてゐる。

我身にて博學大才の身なりと思ひて、假にも日本のまさな事をせず、諸事唐風に仕立、唐人くさき身のまはり、月代剃もいやそふな皃付、

そんなに手數のかゝつた儒者氣質の人が、戀文の書き方を色男に教へて貰ふことが書いてある。大變高遠なことを知つてゐるやうでも、それは空想であつて實際になれば却つて詰らぬ事をする、それほどの氣取屋が世間の困りものである色男に、跪いて教を乞ふやうにもなる、と云つて冷かして居ります。

空言空想より實現實行

實現實行といふことから、空言空想を抑へて、

達摩大師の臀痛めて、直指人心、見性成佛の悟りより、親鸞上人の光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨は阿彌陀の大願、天地の間、卽十方世界の内なり、肉食妻帶も厭はず、是にても御助の御思得との勸、なまじひに五戒といふて表向を立、内證にて破らんより甚感有、老夫婆々の喜びによき宗旨ありなんと、ある書に記置ける、實宜なるかな、

といふやうなことも書いてある。達摩大師の坐禪の修行、さういふものよりは、誰にもし易いところの本願寺流の方がいゝ、表向に十戒などを振廻して彼是するよりも、はじめから文句なしに、戒などを持たずにやつた方がいゝ、といふのです。これなども味つて見れば、よほど味ひのある言葉でありまして、坊主の行の衰へてゐることを、極度に譏つたものゝやうにも思はれます。

それから又當時大流行であつた古賀の弘法水、噴出した水をつけると瘡が癒るとか、飲めば病が癒るとか云つて、一時大變賑かであつた話を云つて來て、

色々様々の不思議をいひ立、まさかの時は一ツも驗なく、行ウがあるやらないやらにて、仕廻には人の噓となりし事多かりし、

と評してゐる。當時江戸に行はれて居る種々の信仰が、根柢の無い、タワイの無いものであることを云つたので、これも常識の缺けてゐることを戒めたものゝやうに思はれます。そんなら冥信と冥信でないのとは何處を經界にして分けるか、其處までは決して踏み込みません、何としても常識で分別するに止めてゐるのが、談義物の持前なのであります。

議論勝な「教訓反古溜」

それから「教訓反古溜」ですが、これは寶暦六年の自序がある。この本は大分議論勝になつて、理窟を云つて居りますし、從つて又面白味をつける筈のところが乏しくもなつて居ります。心持は大體同じことですが、その肚合は「下手談義」とは少し違つて居るやうに思はれる。題目もよほど違つてゐて、ものゝ沿革や成行に就て議論する。茶ノ湯濫觴、酒の噂、忠臣の似せ物、妬婦の心得違、無學の醫者、節儉のまぎれ物、三味線の興廢、俗謠の贔屓、と云つたやうな項目になつてゐるのです。

この中で殊に目立つて見えるのは、「忠臣の似せ物」なんていふところでせう。孔子が「殷に三仁あり」と云つて褒められた事に就て云つてゐるのですが、比干は胸を剖いて死に、微子は三度諫めて去る、箕子はその國を去れば主の非を顯すことになるからと云つて去らなかつた、といふ話です。これを孔子はめいめいの志を褒めて居られるけ

れども、どれを眞似してもいゝといふ意味ではあるまい、さうした場合に切腹して死ぬといふのも心得違ひであらうし、そこを立退く、主人を見限つて他國する、といふのも武士道であるかどうか、その邊も考へて見なければならぬ、孟子の「君々たらずんば臣々たらず」といふ例の君臣論の如きも、君たる人には大變に有益な言葉であるが、臣たるものがそれを見て、その通りに考へたとしたならば、實に怪しからんことになる、あの本は人臣の見るべきものでない、といふ議論をして居ります。

日本流の君臣の道

尤もこれは儒者の行き方の批評のやうですが、唐の太宗などはそこを二種にして、帝範、臣軌といふものを作つて居られる。この唐の太宗も眞に王道を行つたのでない、といふ議論がありますけれども、とにかく孟子の云つたのとは違つた見方です。これは明かに日本流であると云ひますが、君道あり、臣道ありといふ行き方になつてゐる。王道が行はれるといふことは、王者は王者の道を行ひ、臣たる者は臣の道を行ふことなので、王者が王者の道を行ふのみならず、その家來までが王者の道を行ふ、といふのではない。君は君の道を行ひ、臣は臣の道を行ふのが王道なのです。それですから闇齋などは、湯武の禪讓放伐を許さない。それは臣として君を弑する、追ひのけるといふことになるから、餘所の話ではありますけれども、湯武の禪讓放伐を許さないのです。かういふ議論の出所は、闇齋派の議論によつて起つたところの見識だと思ひます。

岡田盤齋

岡田盤齋といふのは江戸の人で、山崎派の神道を傳へた名高い神道者ですが、闇齋の直門に跡部良顯といふ人がある。これは二千五百石貰つて居つて、御書院番をつとめた人です。闇齋先生の門人であつた佐藤直方、淺見絅齋、三宅尚齋などとも交際のあつた人で、江戸に於ける垂加神道の親方になつてゐる。やはり王教一致を唱へる人ですが、吉宗將軍は享保五年五月五日に、若年寄の石川近江守總茂をこの人のところへ遣されて、その習ふところに就て聽取らせたことがある位です。この良顯の唯一の弟子が岡田盤齋であります。其人の書いたものに「神學承傳記」

といふ本があつて、これは吉川惟足の傳記でありますが、その中に保科正之と吉川惟足との問答が書いてある。それを讀んで見ると、保科正之の警悟されたわけもわかるし、闇齋が神道に歸嚮されたわけもわかります。

正之と惟足との問答

其後會津左中將正之卿まみへられ侍る、世に大儒英才の名あまねかりし、問て曰、神學は五倫を本とする所は儒も同じかるべし、今日を本として守る所は何れの理ぞや、視吾堂答て曰、五倫は人道の當然に侍れば五倫の名目は儒も同くして其の內前後に用るかはり侍る、儒は孝を以て五倫の第一とし侍る、吾國は忠を五倫の第一とし侍れば君道を人道の最上と教給ふるゆゑに忠義を以て五倫の本とし居る、君の爲に親を捨るの道はあれども親の爲に君を捨るの道なし、かく忠義を重ずる時は君臣の道正しく志して臣として君をしのぎ犯さず、君臣の道正しき時は人道おのづから序ありて亂れず、今澆季に下る時といへども我國君臣の禮正きは伊弉諾尊天照大神の御教戒の異國にすぐれたる所以也、又日用本として侍る所は敬の一字也、尤敬は儒にも整齊嚴肅などゝも相見え侍れ共、其所作にかゝりて吾道の如く其理幽遠深厚に至らず、一生の學は此敬の一字に極り淺深の次第重々これ有て奧旨侍る、一往は放散の氣をしづめ〳〵て丹田に納るをつゝしみと云、日用心氣をしづめ〳〵て行ひ、物に應ずる時は事々物々の筋々明らかにして節にあたる、猶重々口訣侍りて一往にはもとめがたしとなん、正之卿甚驚き信仰淺からず侍りき、問答事多ければ皆事そぎ侍る、

これだけの事を見ましても、前の「下手談義」の行き方とは少し違つて、稍〻深く立入つてゐるやうに思はれる。この項目だけではなしに、すべてが深入してゐるやうに見えます。

婦人問題から淨瑠璃まで

夫婦の定道

その次に燒餠の事を項目の中で、かういふことを云つてゐる。

外國阿蘭陀などさへ、妻を持てば、たとへ妓女の類にもあふ事ならぬ掟にて、若他國へ行て、かくして掟を破る事、追て聞

ゆれば刑罰せらるゝ事なり、それにいかなる手前勝手かしらねども、古聖の定法なりとて、男は幾人妻を持ても、妾を置てもくるしからず、婦は一に終るなどいふて、二夫にまみへぬなどゝいふ事、和漢ともにかたをちなる事と云べし、

これは貞享版の「好色四季咄」の中に、

いつの代の掟にて男は心のまゝに、女は夫妻の外をいましめけるぞ、是程片手うちなる事はあらじ、

といふことがある。それから後の浮世草子の中には、盛に之を振廻して女の自覺を促して居ります。これなどもさういふ一つの見つけどころをして、更にオランダの例まで持込んでゐるわけですが、慥に一際踏込んだ云方でありまして、これが「下手談義」の本當の行き方であるかどうかといふことになると、さうでもないやうに思はれる。併しこの本はさうなつてゐるのです。

節儉のまぎれ物

又節儉のまぎれ物に就きまして、

朝暮錢金をためる事を第一と心得、一錢の事にもひづらをはり、他人はいふに不レ及、一門一家にうとまるゝは、大きなる僻事なり、

一人にて數百の金銀を貯置は、其下に貧困窮乏のものなくてならぬ道理なり、

と云ふことがある。さうして、

民間での窮民救恤

と云つて居ります。これは何もこの時代にはじまつたことではありませんが、殊にこの頃から目立つて金銀の片寄がひどくなつて來た。この時分に天災その他飢民窮民が出來ました度毎に御救といふことがありました。それまでは皆幕府なり藩主なりが、或場合に臨んで救恤する。といふことになつてゐたのですが、享保十九年に出た「仁風一覽」といふものを見ますと、上方筋、中國筋で甚しい飢饉があつたに就いて、富豪が金を出して救恤した、その人達の名前が書いてある。「仁風一覽」が出來た頃から、私財を以て世間の窮民を救恤することが盛になつたので、前

からも全く無いことはなかつたけれども、それを世間並にやるやうになつたのは享保の末からです。つまり金銀が片寄になつて、さうした働きがなければ世の中がうまく行かない。さういふ時世でありましたから、民間の救恤を奨勵して盛にするやうになつたのであります。

これは江戸時代の社會事項としては、注目に値する事實でありまして、從つて守錢奴と云つて、さういふ場合に金を出さぬ者は惡く云はれる。世間はどうでも自分さへよければといふ考への人は世の中から爪はじきされる。「反古溜」には限りません、「下手談義」二流の本では、大分この事を指摘して居りますが、たゞこの本で注意すべき事は、一人で金を溜めれば一方に貧窮な者が出來るといふこと、金は融通すべきもので、一人で握つてをるべきものでないと論じ立てたことであります。

金は融通すべきもの

淨瑠璃の變遷について

それから淨瑠璃の變遷のことを云つてゐるところが數行ある。

元來淨るりは、いやしきものなれば、とても貴人高位のもてあそびには、なりがたしと、色々の鄙言をわざと取入、中より下の人情に應ずるをもとゝし、一部の內、勸善懲惡は勿論、無常、神祇釋敎、何にて成とも見物聽衆の氣に入處、有やうにこしらへ立し故、今が今まで廢らずしてはやると、元祖義太夫が手がらなり、しかれば竹本も土佐ぶしも諸も、皆製作のよしあしによる成を、呂律にかなふの、かなはぬのと思ふは、いかひ內雪隱なるべし、

これは淨瑠璃といふものは勸善懲惡の用がある、といふことを論じたのです。淨瑠璃が勸善懲惡の用をすることを、この本では元祖義太夫の手柄にしてゐますが、淨瑠璃の勸善懲惡は主として製作上のことである。して見ると竹本座の淨瑠璃は近松の作つたものが多いのですから、その方から云へば、義太夫の手柄といふものはないのです。それも近松製作の時代には、この本が論じてゐるやうに、勸善懲惡の用はしてゐない。近松が筆を淨瑠璃に絕つたのは、享保九年正月の「關八州繫馬」が最後で、彼は九年の十一月に死んで居ります。今日でも大に喝采される近松

の世話物、殊に心中物といふものは、彼の晩年の筆でありまして、享保七年四月の「心中宵庚申」でしまひになつてゐる。どうしてこれがしまひになつてゐるかといふことは、これまで說明されて居りませんが、心中物を淨瑠璃にしてはならぬといふ法度が出たのは、享保七年六月五日で、「宵庚申」の翌々月の事であります。又「六諭衍義大意」を吉宗將軍が頒けられたのも、やはりこの六月の事です。

そこで近松が死ぬと同時に、その後は竹田出雲、西澤一風、紀海音といふやうな人達がやつたわけですが、もうこの時代になりますと、並木宗助の時代になつてゐる。この時代に淨瑠璃の作風が一變したといふことは、吉宗將軍の新しい仕向によつて起つた變化のやうに思はれます。義太夫は理の詰んだもの、悲しいもの、といふ風になつたのはこれからでありまして、さういふ風に義理張つた、堅いものになつてしまつたから、今度は心中物ばかり集めてやる豐後節といふものが出て來て、それが喝采を受ける筋道になつてゐる。こゝで淨瑠璃が勸善懲惡の用をなすものと見切つたところは、當流淨瑠璃の作風が一變したことを申したやうに聞けます。

かういふ調子で「教訓反古溜」は、すべて他の物よりは蹈込んだ云ひ方をしてゐる。若しこのまゝで進んで參るとしましたならば、「下手談義」の筋道のものは、大分理窟つぽくなつてしまつて、面白く讀ませるといふ最初の方法は、無くなつて行かなければなるまいと思はれます。

覘ひどころの相違

そこで最初の話に戻りますが、「下手談義」の作者である好阿は、元文五年に「御伽宇津穗猿」といふものを書き、寬延三年には「諸州奇事談」といふものを書いて居ります。これは何方も奇談珍話といふ部類に入るべきものでありますけれども、好阿は奇談珍話を世間が喜ぶから書いたので、その心持に至つては「下手談義」と同じものである、

「宇津穂猿」

「宇津穂猿」の中に、

祈らずとても神明の冥加ありて、災難病苦と云ふも敢て來り犯すことあるべからず、

といふことがありますが、これは例の菅公の歌を「下手談義」一流のものが常に持出す、その基をなすもの丶やうに思はれます。

「諸州奇事談」

「諸州奇事談」の方も、一々恠異の話を常識で片附けて行くので、何方も結局勸善懲惡に歸してゐる。志は同じことであつたのですが、「宇津穂猿」や「奇事談」では、世間が大喝采といふわけに行かなかつた。「下手談義」に至つて、はじめて成功を得たわけである。あとから續々類書が出て來たといふことだけでも、好阿の成功の大きかつたことはわかるわけで、よく時の好みに投じたことも十分想像出來ると思ひます。

「下手談義」

そこで「下手談義」といふものは、三教一致と申しましても、何れにしても皆勸善懲惡のもので、どれもこれによらぬものはないのだ、勸善懲惡といふことにすれば、何等選ぶところが無い、といふのが大旨であります。

「實理學之捷徑」

ところがこれはもつと早いところで、正保三年に刊行された、澤庵和尚の「實理學之捷徑」といふ本がある。この體裁は儒者の方に「性理字義」といふものがあつて、體裁はそれに倣つたもの丶やうですが、中味はさうではない、大に三教一致を說かうとしたものなのです。神と佛と一體であることを主張して、正直でさへあれば神樣は守つて下さる、神も佛も同じものなのだから、佛も亦守る筈である、と云つて、例の菅公の歌を出してゐる。坊さんの方でこの行き方をしたものは、此等が古いところだと思ひます。

「彝倫抄」

それから慶安年中になつて、松永尺五の「彝倫抄」といふものがある。これは三教の異同を云はない。別に一致とも云はないけれども、佛を排するといふやうなことは無い。我國の神道を行ふ上に、效用もあり働きもあるもの、といふ風に見てゐる。さうして、

今此國佛法繁昌なれば、佛法の教について儒道のいよ〳〵行ひやすき所ある義を申すべし、

と云つて、儒教の講釋をしてゐるのです。これより前に藤原惺窩の「假名性理」なんていふものがありますが、尺五の遣方は、已に佛教といふものがあつて、民間に行亙つて居り、皆も承知してゐるから、それをたよりにして儒教を說けば却つて呑込がいゝ、といふのですから、まあ利用するつもりらしい。ですから佛教を破するやうなことはありません。天台大師の禮義先闢、眞道後行を逆にしたもので、佛教が開けてゐるから儒道も開けいゝ、といふことになるのです。天台大師の方は、儒道が行はれてゐるから、佛教が入り易い、と云はれたので、それを逆にしたわけである。儒道には先づ三綱五常といふものがあつて、それが最も肝腎なものになつてゐる。三綱は君臣、父子、夫婦、五常は仁義禮智信ですが、それを一々佛教に引當てゝ講釋してゐる。自分の地歩も失はず、佛教を破するのでもない、といふ行き方でありまして、此等が大に「下手談義」の遣方の基をなしてゐるやうにも眺められます。

儒道を佛教に引當てる

かういふ見解を以て教化を擴めて行かうとすることは、この本ばかりではなく、いろ／＼なものがあるのですが、たゞさういふ風に云つて行くのでは、人を牽きつけて行く力が乏しい。讀みたい者は讀むけれども、讀む氣の無い者まで寄せつけて、無理にも讀ませるところまでは行つて居らぬかと思ふ。丁度この樣子が「教訓不弁舌」の中に出てゐますから、それをこゝへ出して置きませう。

ある雪の日。問來る人を待兼し振にて。双盤を友としてゐける。米屋の伴頭手代ずる助といふ四十にたらぬ男。雪の日の徒然に。時の風流本をそこはかとなく讀で。何やらん獨悅喜してゐたりし所へ。是も日頃此家へ來りし。外の伴頭能天屋の氣助といふもの。來かゝりしが。是は元より江戸生レのものにて。ずる助は京育なりしが。氣助云けるはイヤけふはわるい雪でどふも足駄へ雪がはさまつて步行かれぬ。ナニカけふは雪の日じやと思ふてすこし學文を仕やるかといへば。ずる助ヲヽサけふは餘り隙ゆへに風流物をとり寄せて見れば。中／＼氣散で面白ひといふに。氣助ナニ面倒くさひそんな氣の詰た事をしやるより。河豚汁で一盃呑んで暖つたがよいわさ。よしに仕やれといふにずる助そふいやんな。こふ又よんで見た所は。中

〱面白ひ。お身は江戸生じやによつて。こんな事は嫌ひじやろか。此本にも限らぬ。惣たいこんな事は江戸ものは埒不明ぬ。元がそふお身のやうに思ふによつて。こんな本に江戸の作はすくない。みな京誓願寺下ル町八文字やが板で。京作じやチト不性せずと面倒な思ひもしやれ。

この文にも見える通り、讀む者は讀むし、讀まない者は讀まない、といふことになつて行く。この中にある氣助に讀ませることは、どうも出來さうもない。やはりずる助の方だけが讀むやうになるのです。「下手談義」にしても後後の熊さんや八さんに讀ませることは出來ない。けれども當時流行物になつてゐた、俗談平話に悪口も入つてる談義説法の方は熊さん八さんまで聽衆にすることが出來た。誰も彼も牽きつけるやうにしたものである。これを奪つたものは八文字屋本の中にもありますが、それを踰えて最も穩當なる教化を擴めて行かうとしたものになりますと上方の教訓書の方には見ることが出來ない。殊にその覘ひ方が中から下などといふことは、上方のものにはないのです。

口語洒落地口を取入る

「下手談義」一流の書物には、口語をそのまゝ取入れたものが多い。それは上方のものにも全く無いことはありませんが、江戸よりは少いのです。洒落や地口といふやうなものを取入れて、耳障りをよくする、これも中から下を覘ふ爲に起ることであります。それにこの時分になると、江戸の言葉といふものが一つ出來てゐる。寶暦と云へば江戸も百六十年ばかりたつた都會になりますから、その方の加減もある。文章だけから眺めて行つても、口語を多く取入れてある爲に、上方のものとは大分振合が違つて來てゐる。この振合の違ふことが、江戸文學の成立つわけにもなつて行くのですが、又さういふ事柄が讀者の幅を擴げて行くことにもなるのです。

廣くなつた讀者層

江戸の草雙紙といふものは、一體子供が繪を見て慰むべきものであつたのですが、それが字を讀んで面白がる大人の物に移り變つて行つた。これなどもやはり新しい讀者を得る結果になつたと思ひます。元祿以降の文學といふものは、公家のでもなければ武家のでもない、町人の文學でありますから、平民文學と云はれて居りますが、江戸文學になりますと、町人でも中から下といふことになつてゐる。近世文學、寶曆以後から分けられた江戸文學なるものは、中から下の文學なのでありまして、それが前期の上方文學と大分違ふわけになつて居ります。

江戸文學は中から下の町民文學

この中から下といふことに就ては、少々解釋の必要があるだらうと思ふ。造作も無い言葉のやうですが、ちよつと迷ふ處が無いでもない。「辻談義」の中に「澤村訥子は中から上の氣に入る」とある、これは野卑なところや、しつこいところの無い、打上つた藝風ですから、中から下には向かぬことを云つたのです。又「下手談義聽聞集」は、切落の見物の氣にも入り、棧敷の客も面白がるのでなければ大入せぬ、といふことも云つてゐる。それから「返答下手談義」には「武家町人とも中人以上の人品」といふことがあり、「古朽木」は「中人に生れて金の澤山あるが前生の善果を得」と云つてゐる。ざつとかういふ事だけ眺めましても、中人といふこと、中より上とか下とかいふことは、身分とか、階級とかいふことばかりではない、人品といふことになるのは明かだと思ひます。

一口に中人と申したところが、その中に又貧富の差があるので、これはどうしてもその人の知識、趣味といふ方からも云ふことになる。前に擧げた二三の例に就て見ても、境遇や生活ばかりを云ふものでなしに、人品をも指してゐることは勿論であります。談義物の見て居ります中から下といふのは、物資に豐であるかないかといふ生活ぶりや、法律制度の上の階級からばかり眺めては居りません。町人にしたところが、地主もあれば名主もあり、又家主

もある。地借もあれば店借もあり、その店借にも表店もあれば裏店もある、といふことになつて來る。さういふ階級に捉はれて居れば、人品といふものは沒却されたわけでありますが、必ずそれに拘泥して行くのでもない。そこで中から下といふことは、人品を指して云ふもの、やうに思はれるので、知識も趣味も人並、世間並といふのを、中と見てゐるらしいのです。

滑稽本は一の細民文學

これを譬喩で説明致しますならば、俳句と地口との區別でも宜しい。文字のある者でなければ、俳句の方へは行かれないけれども、地口の方なら文字が無くても行ける。先づ俳句の方は中以上でなければむづかしいし、地口なら中から下でも行ける、といふことになるでせう。これは文字を押へて云ふやうになりますが、その人の趣味、知識も自然これに作ふことになつて行く。そこで道理を述べて、世の中の樣に照し合せて面白をかしくする心がけのもの、即ち「下手談義」二流のものは、地口を解する程度のところまでは行かうとするので、中から下を目がけることになつて行くのです。この中から下の覘ひといふことの爲に、それを切實にする必要がありますから、細民の狀態を餘計書出すことになる。それが又中から上の人には珍しく思はれる事柄なので、後來滑稽本の方に傳はり、滑稽本は一種の細民文學として、從來あまり見られなかつた特徴を持つやうになつてゐる。それが一種の興味となり、新しくも珍しくも見られましたから、中以上にも及ぶことになつて、讀者層が廣くなつて居ります。何れにしても熊さんや八さんを讀者にすることは出來ませんけれども、こゝで下へ伸びたばかりでなく、上へも伸びましたから、讀者層は大分廣がつたのであります。

上下の新な知己を獲得

談義物の教訓といふものも、極めて穩當な道理を說くのではありますが、今まで稗史小說とか、假名本とか云つて見下してゐた人達も、たゞ理窟ばかり云つて、空虛な議論に流れる傾のあつたものが、一々世の中の姿を證據にして教訓するので、それが重んぜられることにもなつた。上の方にゐる者は俯向いて見ることになり、下の方にゐる

る者は振仰いで見ることになつて、新な知己を獲得したやうに思はれます。

談義物の教訓、滑稽

教訓的意味を冠した書名

さういつたやうな按配で、黄表紙、洒落本、滑稽本、人情本、と云つた方面に影響し、交渉するところがあるやうになつた。「當世下手談義」は「當世」といふ字を「イマヤウ」と讀ませてゐますが、その續篇の方は「教訓續下手談義」となつてゐます。この時代に出來た類書を見ますと、「當世花街談義」、「當世坐持話」、「當世穴さがし」、「當世曾古左賀志」、「當世嘯吐談」、「當世滑稽談義」などといふ風に、「當世」といふ字を頭へ置いてある。「今様滑稽衣」といふやうに、「今様」と書いたのもある。又當世の風俗の善惡を云つてゐるから、「風俗」といふ文字を頭に戴いた「風俗八色談」、「風俗七遊談」、「風俗三世相」といふやうなものが澤山あります。

教訓の方になると、「教訓雑長持」、「教訓不弁舌」、「教訓反古溜」といふ風に、いくらもこの二字を冠らせたものがある。遂には全く畠違ひのやうに思はれる人情本までが「教訓」「筋道」、「教訓廓里の東雲」、「教訓女教艶色倶良倍」、「教訓娘かゞみ」なんていふやうなことになつてゐる。教訓といふ字を冠するのがをかしく思はれるやうなものまで、かういふことをするのは不釣合なやうでありますが、遠いながら筋目を追うてゐるので、この字をつけるやうになつたのです。

滑稽は談義物の特徴

又早い所で「興談浮世袋」などといふ風に、「興談」と書いたのがある。これは面白い話といふことで、狂歌の事も後には「狂」の字を使つて居りますが、古くは「興歌」と書いた集がある。仕形咄や落咄などに「興談」といふ字を用ゐてあるのも、面白いといふ意味から來てゐる。これも談義物の影響で、教訓とか、當世とかいふのと同じことなのです。

滑稽といふことなどもさうです。已に當世滑稽といふ字を冠ぶつた本さへあるやうになつてゐますが、この滑稽

の最も著しいのは「辻談義」で、逆に話を進めた爲に、大分をかしなことになつてゐる。「下手談義」でも滑稽の味はありますけれども、「辻談義」はそれを逆に行つたので、案外な滑稽を生じてゐる。それもあまり多過ぎると、遂には滑稽に趣つて本旨を取違へるやうになりますが、とにかく滑稽は談義物の本來持つてゐたもので、それが又談義物の特徴でもあるのです。

滑稽の中に含む教訓

この滑稽といふことに就て、面白い一つの例がある。寛政六年に出た「河童一代噺」、同八年の「通者茶話太郎」などといふものがありますが、此二つの本が各五冊宛あつて、一九は「膝栗毛」の材料に大分この中の話を使つて居ります。この本の行き方は、「茶話太郎」の中にある三十石船の中の宗論を見てもわかることですが、船の中で宗論がはじまると、法華坊主が皆を云負かしてしまつて、勝誇つて力み返つてゐる。それを茶話太郎が目まぜして、乗合一同に百萬遍をはじめさせた。皆が悉くその法華坊主を憎んでゐたところですから、一致して百萬遍を唱へる。法華坊主は一生懸命になつて、壽量品か何かを讀續けたけれども、多勢に無勢だからどうにもならない。たうとう讀み草臥れて、へと／＼になつてしまつた。一同は論には負けたけれども、百萬遍の勢で法華坊主を凹ました、といふやうな話がある。

この話ばかりではありません。似たやうな例はいくらもある。大坂の金持が大勢供をつれて、大力みで奈良へ行かうとする。それを今向うから來る中で、立派な著物を著てゐる人が、いゝ藥を持つてゐるから、袖に縋つてくれろと云へ、さう云つてもなか／＼くれなかつたら、構はないからしつこく遣んなさい、さうすると甘い藥をくれると云つて置く。これは鴻池の主人だつたらしいのですが、だん／＼やつて來ると、彼方の村からも、此方の村からも大勢の子供等が出て來て、口々に藥をくれろと云つてせがまれるので、大に弱つたといふ話がある。これは茶話太郎が先廻りして、村々の子供をおだてたのです。それらの事は皆奇行であるとして、たゞ滑稽な話のやうになつて居

りますが、決してそればかりではない。弱い者をいぢめて驕誇つた顔などをするのはよくない、金持だからと云つて仰山な行列などをして我は顔に押廻すのは、如何にも宜しくない、といふことを教へようとした、教訓の意味の事情なのであります。この河童といひ茶話太郎といふのは、船場の兩替搗米屋だつた河内屋太郎兵衛といふ人の事實譚でありまして、この人は天明八年に死んで居ります。

爭はれぬ談義物の系統

河童や茶話太郎だけではありません。「當世痴人傳」といふものがある。その附言に書いてあるところを見ますと、痴人といふことに就ての解説を持出して居ります。

さきに梓行せる畸人傳は、專ら貴紳より摘出せられたると見えて、天に奇なるをも、人に奇なるをもすべて蒐羅せられしなり、この書は彼の行状てふ側面に然まど愚痴なるものはなし、といへるにもとづきたれば、情に痴なるをも、世に痴なるを交て收たり、

つまり伴蒿蹊の「近世畸人傳」を引合に出して、それとも違つてゐることを辯じてゐるのですが、その次に、

鼓舗に出す痴人は寛延寶暦明和までの間に、みさかりに梓をつかひて、今はなき人の数にいりたる人をのみ載たり、

と斷つてゐる。この「近世畸人傳」や「當世痴人傳」の中に書いてあります事は、當時見て滑稽と思ひ、傳へて話しても滑稽と思はれて居つたのですが、實はその中を見て參りますと、一身を以て世間を教訓しようとしたものらしく思はれることが澤山ある。けれども後の人が書かれたものゝ上から見ると、奇行のあつた人の本意はどこかに失はれて、馬鹿々々しいとか、面白いとかいふことだけになつてしまつて居ります。

初期の奇人傳は教訓を含む

一體教訓とか、修養とかいふやうなものは、書物や談話ですべきものではない。讀んだつて、聞いたつて、讀ま

せたつて、聞かせたつて、それだけでどうなるわけのものではない。身を以て教へ、身を以て習はなければならぬ事柄であります。さうであるに拘らず、「河童一代噺」なり、「通者茶話太郎」なりの記載といふものは、皆役に立たなくなつてゐる。たゞその持味のをかしいところだけが、世間に興ぜられ、廣がつてゐるので、その本文の眞意を逃して、頭から尻尾まで滑稽なものになつてしまふことが多い。まことに口惜しい話でありますが、さういふ成行になつて居ります。

談義物の眞意は滑稽に非ず

ところが談義物の效果としては、やはり同じ道を辿つて、面白をかしいものゝ方になつてしまつたのですが、上方の「畸人傳」や「猫人傳」と違つてゐることがある。それは「滑稽和合人」、「六阿彌陀詣」、「夢輔譚」、「八笑人」、「古朽木」などの序文の類にも現れて居りますから、その中の言葉を二三こゝへ出して置きます。

○

頭は滑稽にして腹に勸善あり、尻は後編にゆづり(溪齋、滑稽和合人初編序)

○

聊敎諭のとばを滑稽にあてゝ、淺智童蒙をさとし安からしめんと、平生卑賤の言語應答をありの儘にあらはす事しかり、(串戲教諭六あみだ詣、一九自序)

○

善悪邪正夢也我也、夫は莊子、是は戲子の言葉串戲、異なりと雖、勸善懲惡の微意なき事あらず(敎訓滑稽魂膽夢輔譚、初編自序)

○

夢の浮世と悟ぬ時は唯假寐の夢の如し、克其夢を通曉に至れば、滑稽洒落の串戲も又是勸善懲惡の一端ならむか(同二編自序)

嗚呼いかにせん勸善懲惡の趣なく益の有無を辨ず（八笑人二編、自序）

○

頭は猿智恵に下手談義を學び、尾は口がましく根無艸を集ふ、是手にとらまへ所もなけれ共、先ヅ教訓のごとくにて、啼聲文盲ぐはあといふ化物、草帋にもあらず、咄本にもあらず、鵺質の上の御評判（古朽木の見返）

どれを見ても、滑稽の爲に書いたのでない、といふことを云譯してゐるらしく見える位ですが、それにも拘らず、繰返してゐることは、大に注意すべき事柄だと思ひます。申譯の爲にもせよ、本當に滑稽本になりきつた時にさへ、かういふことを云つてゐるのは、談義物の時にはそれだけ精神が入つてゐたからで、それが殘つてゐるのです。筋目といふことの爭はれぬことはわかりますが、それは親に似ぬ子だつたのであります。

一種の遍歷小說

教訓を地圖に仕立てる

黄表紙にも洒落本にも、乃至滑稽本にも、さういふ趣向が振切れずに居るものに、教訓といふ意味から、それを地圖に仕立てたのがある。當時行はれた道中記、道中細見繪圖、などといふものがありますが、さういふものに引當てゝ拵へたのです。これは寶曆六年の「善惡道中獨按内」といふものから始まるやうに思はれます。是は雄飛亭の作ですが「堀田甚兵衛記」などによりますと、一九の「膝栗毛」なども、此作から思ひついたやうに云つてゐる。信用するに足るほどの說ではありませんが、後々までおぼえられてゐたことの證據にはなる本です。

それと同じ時に、無々道人といふ人が「迷所邪正按内」といふ本を出してゐる。無々道人といふのは、澤田東江の隱し名で、早いところで洒落本の「北州異素六帖」を書いて居ります。寶曆十三年には風來山人の「風流志道軒傳」が出て、安永には「和莊兵衛」、天明に入つては「當世導通記」が出てゐる。この「導通記」の著者は森羅萬象、卽ち二代

目天竺浪人ですが、その自序に、

素より教の爲にもあらず、惡趣に導く種にもあらず、詰る所は初春のお笑のたすけにもと、堅いやつが見てはしかると云、

といふことが書いてある。併しこの時はもう疾くに滑稽になつてしまつて居ります。それから後には京傳の「悟道迷所獨按内」、桃栗山人の「大通獨按内」などといふものが出て居りますが、この道筋の遍歴小説とでもいふべきものゝ系統に、曲亭馬琴の書きました讀本の「夢想兵衛胡蝶物語」があるのであります。

遍歴小説

この中で、最初寛政六年に出た二つのものは、實際の地理ではなく、地理に見立てましたものでありまして、教訓の意志の明かなものでありますが、この外にもまだ眞面目に教訓の意味で道中記風にしたものが、いくらかあるやうです。洒落本の方で、遊里の穿ちや洒落を繪圖に仕立てるなんていふことも、やはりこの道筋から分れたもののやうに思はれます。

地獄遍歴の趣向

遍歴物といふうちにも、特に地獄を遍歴するといふ趣向、これは早くからある趣向で、丹羽桍山の作にもあることは、前に申した通りです。近いところでは風來山人の「根無草」なども地獄巡りになつてゐる。明和二年に出來た「小夜時雨」、これも地獄巡りでありますが、この本の序にかういふことが書いてあります。

西鶴が小夜嵐も文作洒落にして、兒女の耳には牛の前の琴なるべし、愚老が小夜時雨は野語鄙言にして、寺子樽拾の耳をつらぬき、金平地獄巡の後編と翫びなば幸ならん、

成程前に西鶴の地獄巡りの趣向で、「小夜嵐」がありました。これは元祿十一年版ですから、丹羽桍山より大分古い。が、それより古く金平淨瑠璃にもあるわけだから、これが一番古いでせう。「小夜嵐」には西鶴の署名があるので、こゝにも西鶴としてありますが、これは考證がありまして、署名はあるけれども西鶴ではない、といふことになつてゐる。水谷不倒氏は「小夜嵐」より一年前、卽ち元祿十年に「西鶴冥土物語」といふ同じ趣向のものが出てゐる、

併しこれは貞享版と思はれる「椀久一世物語」といふものがあつて、この方が又早い、「二世物語」の椀久を西鶴に振替へたのが「西鶴冥土物語」である、と云へて居られます。眞作である「小夜嵐」より前に、かういふ地獄巡りがあるわけで、その上にまだ金平浄瑠璃があるのですから、これが一番早いことになると思ひます。

閻魔堂と歌比丘尼

談義物の地獄極樂觀

さういふ談義は大略に致しまして、どうして地獄巡りといふことが談義物の中に出て來るかと云ひますと、儒者が佛教攻撃をして一番效果のあつたのは、地獄極樂などといふものは譃つぱちで、そんなものはありやしない、といふことでありました。地獄極樂は無いと云へば、誰にも呑込み易い話で、佛教はいゝ加減な事を云ふもの、譃を云ふもの、といふことの證據にはこれが一番いゝ、といふ風に說いてゐる。又これは相當效果がありましたらう。

佛教では勸懲の手段に

佛教の方では地獄極樂を說いて何にしたかと云ふと、勸善懲惡の爲にこれが一番役に立つからなのです。殊に關東方面などは、地獄極樂といふことが早くから手實に行はれて、それが勸善懲惡の用をなしてゐるやうに思ふ。昔といふほどでもない、吾々の少年の頃まで、人が必ずしも信じたわけではないが、譃をつくと閻魔樣が舌を拔くといふことを、子供に云つて聞かせもすれば、子供も云つた位であつた。上方の事は能く存じませんが、閻魔堂、十王堂は關東に殊に多いやうに思ひます。江戸時代のものはだん／＼減つて參りますが、それでも五十幾箇所か殘つてをります。只今になつて見れば、名高い閻魔樣は四五箇所しかありませんが、五十幾箇所に就て調べて見ると、それは何れも寛文以前のものである。寛文の頃までは閻魔堂が新しく建てられてゐたのであります。關東々北は佛教の開け方が遲かつた、人智も文化も上方よりはおくれてをりましたから、啓蒙的な布教が行はれました爲めに、寛文度までも閻魔樣が造立されたのでせう。

關東に多い閻魔堂

そこでもう一つ考へて見ると、歌比丘尼と云つて賣色をする比丘尼がありましたが、そのはじめは地獄極樂の繪解をして歩いたのです。それが悲しい聲を出して地獄極樂の繪解をしては錢を貰つてゐたのだけれども、だん〳〵人が聞いてくれなくなつたので、今度は歌比丘尼と云つて流行唄をうたふやうになり、遂に賣色をすることになつてしまつたのであります。その地獄極樂の繪解は、萬治頃までやつてゐたらしく思はれます。

さういふ風な事が盛に行はれた時代があつて、それがだん〳〵衰へて來ます時分に、儒者の攻撃を皆に聞かせることになつた。或時代には勸善懲惡の用をなしたものが、後になつては佛教の弱點であるやうに思はれる時が來て、それを責める道具にもなつたのです。勸善懲惡の效能があつたといふことを繰返す意味からも、地獄極樂が問題になりましたから、それが談義物の中に出て來ることになつたものと思はれます。

行き過ぎた「小夜時雨」

三教を上手に利用

ついでですから「小夜時雨」といふものに就て云つて置きます。この本の作者は若夢坊といふことになつて居りますが、傳記は傳はつて居りません。これは前の「下手談義」を敷衍したやうなものですが、たゞこゝで目につくことは、三教のどれにもよらぬといふことより、それを上手に使つて行く。「與聞流行て物知りの口利出來、神道儒道羽翼の如く並び行れ」といふやうなことを云つてゐる。けれどもその本旨は「いづれも勸善懲惡の教誡にて三教ともに一道なり」とあります通り、勸善懲惡といふことであれば、それが三教の一致である、といふ風に見て居ります。何が中心になるかと云へば、これは少し臺が大きくなつて居りますし、御藥も少し強くなつてゐる。談義物の正統ではありますけれども、行き過ぎてゐるところが無いでもありません。

「日本は神道、唐は儒道、天竺は佛道にて國を治め」といふあたりまでは、まださほどの事もありませんが、

神武天皇より代々の天子、神明を拜し、民百姓も敬ひ、其神道の教にて國家安全に治る、

といふやうなことを云つてゐるところがある。そこから更に一足跨ぐと、

佛像は夷狄の人の影像なれば、天照太神の子孫たる天子の崇敬すべき由緒なし、

といふやうなことにまで到るのです。これでは何方にも片寄らぬといふわけには行かない、大分取捨する氣味があるやうになつて居ります。その議論の當否よりも、かうなつて參りますと、どこへも閊へることが無い、何方へも片寄らない、といふ談義物本來の旨意は失はれてゐるのです。

談義物の本意は失はる

これは一體どうした譯けであるか。白隱和尚の弟子の書いた「[illegible]新發」といふものにも、

皇國は天照大御神の御國にて、皇統綿々として君臣父子夫婦の道も自ら備り、萬國に勝れて正しき道なれば、異國の教は無ても足なん、然るに神道の衰たること、我も又歎息する處也、嗚呼儒學者流の儒佛を惡むも宜哉、

と書いてある。佛者さへもかういふことを云つてゐるのです。これは一概に、佛教ばかり信じてゐる人では、とてもかうは云へませんが、前後左右を思慮するだけの餘地のある人なら、かういふことも云へるわけである、それから思へば「小夜時雨」の中に激語のあるのも據ない次第でありまして、それが又遠く廢佛毀釋の因緣をなすものと思ひます。

豆男隱形の趣向

それから遍歷といふことに就きましては、明和六年に出た「當世穴穿」の序文に、かういふことが書いてあります。

昔男禿頭巾きて、ならの京間な庵にしるよしして、かりに居にけり、かたちいと小さくて、印籠にも いるべければとて、字を豆男となんいへり、此男不測の行をなして、名を横本の五冊ものに上るといへども、今は了簡かへて徒も止ぬ。

穴探しが主

隱形の趣向が流行

もうこの本になりますと、敎訓といふことよりも、穴を探す方が主になりますから、大分本旨を失つて居ります。この中にも書いてありますが、趣向として豆男の趣向が取つてゐる。こゝにある「橫本の五冊」といふのは、寶曆五年に出た「榮花遊二代男」のことかと思ひます。二代男と申しますのは、貞享版の「好色四季咄」が、元祿六年に「浮世榮華一代男」と改題して行はれて居りますから、それに續けるつもりで、かういふ名をつけたものなのでせう。これは隱蓑、隱笠を得て、隱形の術を以て天下を橫行する、といふ趣向でありまして、「榮花遊二代男」もやはり隱蓑、隱笠で自分の姿を隱して、方々步くことが主になつて居ります。「當世穴穿」も同じ事です。まだこの外に半紙本五冊の「今樣和談色」といふものがありますが、これも隱形の術が趣向になつてゐる。この外にまだ私の見ないもので、「諸道豆介息才界」ですとか、「豆男榮花春」ですとか、「豆男江戶見物」ですとかいふやうなものがありますし、「古朽木」の中にも、隱蓑、隱笠による隱形遁身の事が用ゐられて居ります。又種彥の「好色本目錄」には、

好色四季咄　後年八文字自笑が作にて、世に行はれし榮花男まめしちといふは、此書より出るものなるべし。

といふ事が書いてある。私は「榮花遊二代男」の外、八文字屋物の豆男を存じませんが、かういふものがあつたのかも知れないのです。この時分には地獄巡りと共に、隱形の趣向が大分流行つて居つたので、これは豆男とも、豆右衞門とも呼ばれて居ります。その流行の趣向を取入れたので、これは又談義物を經て、その他のものに趣向を持越しても居るやうであります。

洒落本に持越した談義物

談義物の穴はそれを手段にしたので、目的ではなかつた。勿論探すやうなことはございません。穴探しの方は穴を探すといふことが目的なので、それによつて生ずるをかしみで行はれるものですから、敎訓とは自ら話が違つて

來る。穴探はなるべく委しく、綿密に行かうとするので、自然話の幅が狹くなつて來る。卽ち多方面な談義物が、遂には狹い一方面のものになつてしまふのです。又さういふ風にしなければ、穴探の方に巧妙な見せ場が出て來ない。目的が違つても、違はないでも、さういふ行き方でありますのに、況して目的を異にして居りますから、幅がだん〳〵詰つて來るわけで、それが洒落本といふものになつて行く順序であります。

穴探から洒落本へ進む

洒落本の三期

洒落本といふことになつて、教訓からは離れてしまつたのでありますが、大體それを三期に分けられてゐるやうです。洒落本の三期と申しますと、寶曆六年に「異素六帖」が出ましてから天明四年まで、この時代の重立つた作者は、夢中山人、田螺金魚、朱樂菅江、山手馬鹿人、蓬萊山人歸橋、などといふやうな人達でありますが、それもだんだんになくなつてしまひまして、天明三年には最後まで殘つてゐた歸橋も、遂に筆を絶つに到りました。が、その翌年の天明四年には京傳が出て參ります。この京傳の出るまでが第一期であります。扨その次は京傳の獨舞臺でありまして、寬政三年に洒落本が禁止されるまで、これが第二期になる。それから文化の末までで、この間の代表作者とでも申すべきものは、式亭三馬、十返舍一九、梅暮里谷峨、といふやうな人々が數へられる。これが第三期です。洒落本といふものは、大體かういふ風になつてゐると云はれて居ります。

洒落本の初期のもの

ところで談義物から直に穴事に移ると申しますのは、この三期に分けた第一期のはじまりのところ、卽ち寶曆度の事になりますから、まだ談義物は談義物で盛に行はれてゐる間の事なのです。この洒落本の眞先に出て來るものは何だと云ひますと、「魂膽惣勘定」といふもので、寶曆四年に出版されてゐる。著者は闇牛齋といふことになつてゐますが、自序には白鷗政植と書いてありますから、それが本名なのでせう。この人は傳記も何もわかりません。その次に出て來るのが例の「異素六帖」で、これが寶曆六年、その次が年は同じですが、大阪版の「聖遊廓」、それから八年に「水月無物語」が出て居ります。此等のものは何れも洒落本といふ部類の中に出て居りますが、「魂膽惣勘定」

などは平假名でありませんで、片假名で書いてある。「異素六帖」は平假名ですが、半分は會話體になつて居ります。「水月無物語」になりますと、本の形も違つて半紙本です。これは廓の諸分に就て書いたものですが、この水月といふ外題に就きましては、蜀山人がこんなことを云つてゐる。「諸分店處」といふ上方の廓の諸分を書いた本の中に、「二字論」といふことがある。里馴れた者を「水」と云ひ、里馴れない野暮なやつのことを「月」と云ふ。この水と月とに就ての話ですから、「二字論」と云つたのです。そこに「さとればぐわちもなかりけり」といふ文句がある。「水月無物語」といふ題名は、この文句によつて明かにわかる、といふのです。

三教一致を廓話に利用

この四種の本といふものは、何れも皆廓の話であります。洒落本の内容といふものは、どれもが廓話であつて一向他の事は書かない。もう少し委しく見ると、「魂膽惣勘定」などは、附錄に「華里通商考」があつて「花里萬國圖」などといふものがついてゐる。この「花里萬國圖」と申しますのは、遊廓の所在地ばかりを地圖に仕立てたもので、後には焉馬の「遊國圖」などと云つて、廓を見立てたものがある。各所の廓を一つの地圖に拵へる、といふことの濫觴をなすものであります。「魂膽惣勘定」などは面白いことに、三箇津のどこの遊びも同じであるといふところに、三教一致を利かせて「アソビノ本體ニナイテハ日ノ本ノウチハモロカ、コマモロコシノハラマデモ天地配偶ノ理リナレバ一モツテ是ヲツラヌクベシ」といふやうなことを云つて居ります。もうすつかり世界が變り、心持も變つてゐるのですが、それでも談義物の心持を讓り受けてゐることがわかります。

「異素六帖」になりますと、歌學者と、儒者と、佛教信者と、三人の者を出して來てゐる。

あやしのおのこ二三人ありて、ひとりは歌學者とみへて、一人は儒者なるやらん、今ひとりは浮屠の道にかしこきにて、口々爭つのり、心の浪たちさわがしきも、おつればおなじ谷川の流れの身の事とぞなりけるおかしさ、

二三行の短い文章ではありますが、そのしまひに「おつればおなじ谷川の流れ」といふことにして一致さしてゐる。

「聖遊廓」は孔子、老子、釋迦の女郎買といふことになつてゐる。「水月無物語」にしても、水だの月だのといふものは無い、といふので一致してゐる。妙に一致させたがる處、これは慥に前から持越してゐるのであります。

洒落本となる段取

　ところでかういふものがなぜ突然と體裁を變へて、後來洒落本と云はれる方に出て來るかと云ひますと、談義物の方でちやんとさういふ段取がついてゐる。寶暦四年の「花街談義」、六年の「八色談」、「七遊談」などといふものがそれです。「花街談義」などはその名の示す通りですが、「八色談」では五冊の中の一冊、二巻目を「愛染明王、遊女に異見の事」、「野水問答の事」に充て、尚ほ所々に粋と野暮とが論ぜられ、五巻目には萬治高尾の亡靈が出て、新吉原今非論を述べてゐます。「七遊談」といふのはどんなものかといふと、妾、娘、踊子、陰間、夜發、遊女、比丘尼といふ七種に就ての話を書いたので、だから「七遊談」といふのです。九年になると更に「著者談義」といふものが出て居りますが、とにかくさういふ風に、談義物の方もだん／＼幅が狭くなり、一方面に就て述べ立てゐる、といふことになつてゐる。時間で申せば洒落本の形を取つた方がいくらか早いやうですが、「花街談義」は「魂膽惣勘定」と同じ年の出版ですから、本の體裁は別として、これがひとりでに流れて行く筋道だつたやうに思ひます。

寶暦を界とする文學の分け方

洒落本の形式が整つた「遊子方言」

　洒落本の書き方と云ひ、本の體裁と云ひ、すべての形式がすつかりきまつたのは、「遊子方言」からだと云はれて居ります。ですから「遊子方言」が最初の洒落本だといふ傳へもある。これは全部會話體でありまして、この會話體といふことが、洒落本としては後々まで約束された形式なのです。又その世界が吉原であつたといふやうなことから、洒落本の一番先のものといふことになつて居りますが、刊年の書いた本が無い。洒落本に委しい人の說では、明和六年の出版だらうといふことになつてゐる。けれども「遊子方言」以前に洒落本のやうな内容を持つたものは、談義

物と變つたものでは「魂膽惣勘定」があり、同じ體裁のものでは「花街談義」その他があつたのであります。「遊子方言」はその版式からして小さいのですが、これは壕越二三治が當時狂言作者として名高い人で、いつも大當りの芝居を書く。そこでその臺帳の拔本が盛に行はれましたが、その拔本が小型で氣が利いてゐるところから、それが「遊子方言」に採用されて、後々までその體裁になつたのだ、といふ說があります。これは本の形に就ての話でありますけれども、洒落本の書き方としましては、會話體が多くなつたといふことを氣をつけて見なければならない。この會話によつて形がきまつたといふことは、大に考へなければならぬことでありまして、談義物の中でも「下手談義」の如きは、言文折衷體とでも云つたらいゝかも知れません。口語の處もあれば、文語の處もありますが、慥にそれで當時の江戸言葉が知れるので、これは浮世草子などの書き方とは違つて居ります。この點は江戸語を研究して行く上から比較すれば、よくわかるだらうと思ひます。

談義物は滑稽本だけの源ではない

さういふわけで、滑稽本といふ分類を致します時分に、その起原に就て「下手談義」からといふ說は、どうしても否定することは出來ません。併しながら談義物は單に滑稽本だけの起原になるものではない、その他のものゝ起原にもなつてゐる。近世の文學を二つに分けて、前期、後期などと云つてゐる人もありますが、それよりも上方と江戸とに分けた方がいゝやうに思ふ。又さういふ云ひ方をしてゐる人も已にあるやうです。それは一口に戲作と稱せられてゐる通俗文學のみのことかと云ひますと、こゝではその方面からのみ申すのでありますが、概觀すれば決してそれだけのものではない。廣い意味の文學に就ても、やはりそれが云へると思ひます。が、その廣い方は姑く措いて、今云ひかけてゐる方から申すことに致します。

上方文學と江戸文學

江戸文學といふものは何時からであるか、と云ふと、それは寶曆以後である。それ以前は上方文學であつて、寶曆以後を江戸文學とするのがいゝやうに思ふ。その寶曆以後は何からはじめるかと云へば、それは談義物である。

江戸ではそれ以前にも、吉原物と稱せられる遊廓關係の書物や、金平本とか、假名草子とかいふものも何分かありましたし、浮世草子になつてからも何部かある。それも江戸の作者が上方筋へ原稿を送つて、出版させるのではなしに、作者も書肆も江戸といふものが、多くはないにしてもいくらかあります。けれどもその當時は大體に於て上方の方が勢力があつたので、江戸は分量に於ても、作者に於ても比較にならなかつたのであります。

八文字屋の沒落

然るに上方の方は、元文元年に上方作者の最後のえら者であつた其磧が死んで居ります。それから延享二年には八文字屋自笑が死に、その跡繼をする多田南嶺も寛延三年に死んで、猶その後に殘つた者として、自笑の子の其笑、孫の瑞笑などがやつて居りましたが、勿論眇々として振はない。水谷君の書いたものによりますと、明和四年の正月に、八文字屋の板木全部を大坂心齋橋順慶橋角の升屋大藏といふ者に讓つた、これで百年來續いて來た八文字屋の家は絶えたのだ、といふことが書いてある。もうこの際は雲の如くに居つた浮世草子の作者は亡くなつて、僅に八文字屋だけが殘つて居つたのですから、その沒落によつて東西の形勢は振替つた。

東西の形勢振替る

これから作者が上方に無いことになつて、寶暦以前の江戸の有樣が上方の有樣になり、それ以前の上方の有樣が江戸の有樣になつたのです。これ以後江戸文學が盛になつて、近世文學を江戸のものにしてしまつたのであります。

意想外な談義物の筋目

さういふわけでありますから、江戸文學の先頭として談義物を擧げることになるので、滑稽本だけの起原といふわけには行かないやうに思ふ。のみならず直接談義物から筋を引いたものが、その後の江戸文學にいろ〳〵ある。

笑を覘つた江戸文學

山口剛君などは、江戸時代の通俗文學にして、笑を覘ひとせぬものがあるかと云はれたら、返事が出來まいがなあ、と云つて居られた。如何にも尤な話ですが、さうとすればどれが起原だといふことも云ひにくゝなる。かういふ見

方をする人もあるのです。笑はせることを餘所にして通俗文學は無いぢやないか、といふ見方もあるが、それよりも談義物の勸懲といふことです。これが又小說、脚本、丸本のどれにも行渡つてゐる事柄でありまして、若し勸懲といふことを押へて眺めたら、江戸文學の幅はよほど廣くなつて來るでせう。いろ〳〵なものゝ上に勸懲といふことが出て來る。それを皆引集めて談義物の筋目であるとしましたならば、小說、脚本、丸本位の話ではない、俳諧、狂歌、川柳、都々逸といふやうなものにまで廣がつて行くだらうとさへ思はれます。

そこで勸懲といふことがひどく廣がつて居ります爲に、作家が動もすれば勸懲に陷る。それが癖のやうになつて、勸懲が通俗文學の紋切型のやうになり、無理にもそこへ持込むやうになる。遂にはうるさがられて、それが排擊される、といふことにまでなつた。これは勿論明治になつてからの話でありまして、江戸時代一杯は勸懲の景氣がよかつた。この勸懲といふことは、三教の一致點として談義物に使はれてゐたのですが、こゝでもう一つ考へて見なければならぬのは、「蘐園談餘」といふ徂徠の話を書いた本がある。その中にかういふことがあります。

善ヲ勸メ惡ヲ懲スハ風俗ヲ正スノ道ニテ賞罰ハ國ノ大權也、ソレニ古ノ賞罰ト刑名法家ノ賞罰ト二派アリ、刑名家ハ信賞必罰トテ、下ヲヒヤウリテ世ヲ治メントスル也、功アルトキハ相違ナク信ニ賞シ、罰アルトキハ一寸モノガサズ必罰スル故、人々功ヲ勵ミ、罰ヲ恐レテ罪ヲ徒サズ、何事モスミヤカニテ成功ハヤシ、一段ヨシト見ユル、サレド惡ヲセザルハ罰ヲ恐レ、法ヲ遁ルヽマデニテ、不義ヲ知ル善心ニテナケレバ、法ニフレヌ惡事ヲバ用捨ナクスル也、又功ヲ勵ムモ忠義ノ心ニテハナク、賞ヲ得ンタメナレバ、一過ノ手ギハヲ專ラニシテ後ノ災、國家ノ大計ヲ省ミズ、論語ニ君子刑ヲ懷ヘバ、小人惠ヲ懷フト云ヘリ、上刑罰ヲ以テ下ヲオドシテ治メントスレバ、下ハ上ヲ欺イテ恩惠ヲ得ントス、互ニ敵ヲ計ル樣ノ心ニテヤスキ心モナシ、秦ノ國、刑名家ノ賞罰ヲ用ヒテ、一旦天下ヲ得タレドモ、幾程ナク亡ビタリ、後ノ世モ和漢共ニ此賞罰用ヒタルハ皆世運短シ、近クハ甲斐ノ信玄ナドモ學問モアリ、武村モアリ、サシモ强國也シカドモ、幾程ナクヤミ〳〵ト亡ビ、忠臣モ義士モナカリシ、

ヒヤウリテ治メタル故ニアラズヤ、賞罰モ此ノ如クナレバ、禍ニコソナレ、治メノ益ニハナラズ、聖賢ノ世ハ撫育ヲ先トシテ、罰ヲバ止ムヲ得ズシテソ用ヒラレシ、書ニ文王德ヲ明ニシ罰ヲ愼ムト云ヘリ、文王君德厚カリケレバ、誰モ明白ニ見テ知ル也、德ヲ明カニストハ是也、サテ大學ニ文王ノコトヲ引テ、君トシテハ仁ニ止ルトアリ、文王ノ御德ト申スハ仁ナリ、愷悌ノ君子ハ民ノ父母也ト云ヘリ、父母ノ心ニテ下ヲ治ムルガ君德也、父母ノ子ヲ育ツルニヒヤウリノ不實アルベキヤ、喜ブモ怒ルモ皆實心ナリ、サレバ仁君ヤムヲ得ズシテ行ハルヽ罰ハ恨ル人モナク、世ノ戒メニナル也、上父母ノ心アレバ下ニ子ノ心アリ、上下親子ノ如ク信實ノチナミアラバ、賞罰ヲ以テヒヤウリナルコトイルマジキ也、サテ罰ヲ愼ミ玉フコトハ、罰ハ凶德ナリ、我身ニウケテイヤナルコトナレバ誰モキラフコト也、キラフコトヲ表ニ立テ、下ニ臨ムハ下ニウトマルヽ道也、臣背キ民離ルレバ國亡ブ、故ニ罰ハ國家ノ大事ナリ、ツヽシムト云フハ大事ニシテ容易ニ行ハヌコト也、罰ヲ以テ治ムルハ毒藥ヲ以テ病ヲ治ムルニ似タリ、其病ハ愈テモ、毒氣遍身ニ廻リテ遂ニハ身ヲ亡ボス也、罰輕ケレバ上ヲオソレズシテ、國威立ジト思フハ淺シ、離心アル下々ヲ罰ヲ以テ治メントスルハ、杖ヲ以テ火ヲ打ツガ如シ、イヨ〳〵モユル也、上下父子ノ睦マシミアレバ、上ノ憂ヲ下ニモ憂ヘ、上ノ悦ビヲ下ニモ悦ブ、上下一體和合シテ吉祥コソアラメ、兇惡ハアルマジ、其中ニ道ヲ背キ、義ヲ忘レ、惡シキ振廻スルモノアレバ人共ニ惡ム所ナリ、其時コソ止ムコトヲ得ズシテ罰スベキ也、スベテ世ニ君子ハスクナク小人ハ多シ、賢者ハ少ク愚者ハ多シ、視ルニ隨ヒテ咎メナバ朝ヨリ夕マデ氣ノ休マリハアルマジキ也、小過ヲ宥シ、賢才ヲ擧ルトアリ、仁恕ノ心アラバ人ノ過ヲ視ルコト少ナカルベシ、サテ道ハ一ナレドモ、身ノ居ル所ニ就テ差別アリ、人ノ君トシテハ仁ニ止リ、人ノ臣トシテハ敬ニ止ルト云ヘリ、忠ヲ勵ミテ賞ヲ思ハザルハ臣ノ義ナリ、忠義ヲ悅ビ、勤勞ヲ感ジテ、褒賞ヲ賜ハルハ君之道ナリ、凡人情與フレバ喜ビ、奪ヘバ怒ル、得ルコトヲ好ミ、失フコトヲ嫌フハ、則生ヲ好ミ、死ヲ惡ムノ天性ニシテ、君子小人ノ差別ナシ、サレド君子ノ義不義ヲ憂ヘテ得失與奪ヲ顧ミズ、義ニ隨ツテ行フハ學問ノ力、禮義ノ德ナリ、ナベテ世ニモチヒガタシ、器量アレドモシラレズ、不肖者何ヲ以テハゲマンヤ、大德ハ大官大祿ヲ受ケ、小德ハ小官小祿ヲ受クルハ聖賢ノ道ナリ、

田祿財寶アタフル道ナクンバ王侯ノ寶ニアラズ、殷ノ紂王ハ身ニ寶ヲマトヒテ燒死シ、鉅橋ノ粟、鹿臺ノ財ハ皆人ノ寶トナル、王侯財ヲ好メバ必災ヲウク、仁者ハ財ヲ以テ身ヲ興シ、不仁者ハ身ヲ以テ財ヲ興ストイヘリ、又財聚ルトキハ民則散ジ、財散ズルトキハ則民聚ルトイヘリ、用ヲ節シテ人ヲ愛シ、財ヲ散ジテ民ヲアツムルハ保世ノ道ナリ、賞行ハレズンバ國必治マラジ、

徂徠が「太平策」や「政談」の立言の體を見るに、頗る思を吉宗將軍の施爲される處に致し、總べて執つて實行され易いやうに論じてあります、だが此末段の議論は享保の政治には苦い、吉宗將軍には耳が痛からうとも思はれる、だが古先聖王の賞罰と刑名家の賞罰と、賞罰に二樣あること、是は道德による政治と法律による政治とあるわけで、いづれにも賞罰は勸懲、勸懲は治世のためではあつても、其效果は二派二樣で決して紛れもない、この差違は吉宗將軍が法典編纂の時に一方ならない心遣ひをされた事柄で この二つの事を二つでないやうにしたい、と望んで居られたことなのです。「六諭衍義大意」の出來ましたのは、專ら儒教との諧和を考へられ、功利に墮ちないやうに心配されたのが知れます。

吉宗將軍の意圖を奉ず

談義物の作者等は吉宗將軍の意圖されたところを奉じて、之を他の神道佛道に擴め、當時三教の訌爭が人心を不安にする。その根本が、三教の差異にありと見て、其差異は枝葉であつて、極功に矛盾はなく、勸懲の効果に至つては同樣であるとし、更に現下の法律の賞罰も勸懲に外ならぬと斷じ、その精神を敷衍したところのもので、たゞ三教を勸懲で一致させるといふだけのものではない。その勸懲が廣まつて行つて、通俗小說を飛び超えて、幅廣く行はれてゐるといふことになりますと、談義物の精神は江戸文學の全部に廣がつて參りますから、江戸文學全體をその範圍にしなければならない、といふことになります。

それほど極論するにも及びませんが、談義物が滑稽本の祖であるといふことは、どうも直に感服するわけには行かない。若しさういふものであるといふことを知らないで、後から振返つて見ますと、あの不眞面目千萬な滑稽本や、誨淫の書である人情本の祖が談義物であるといふ、實に意外な成行になつて、到底想像のつかぬ話になつて參

通俗文學はすべて談義物を祖とす

ります。すべての通俗文學の筋目といふものが、談義物から出てゐるといふことは、ちよつと考へるのがむづかしい、信ぜられぬことのやうでありますけれども、それも決していゝ加減な話ではない。前申した筋目をだん〳〵質して行きましたならば、十分に慥めることが出來ると思ひます。從つてこの第一說は、江戸文學の全體に關係を及ぼす話でありまして、談義物は滑稽本のみの祖でない、といふことになるのであります。

中本の二種類

滑稽本は中本から

それから第二の說でありますが、これは「膝栗毛」からといふことになつてゐる。即ち享和以來といふことで、中本からといふことになるのであります。中本といふのは、水谷君の說でも、大本と小本との間といふ意味のやうです。大きさは美濃又は大半紙の二ツ切で、竪六寸の横四寸三四分、上方ではあまり行はれない形ですが、江戸ではこの中本が主として行はれた、金平本、吉原物、六段本、赤本、黑本、黄表紙、合卷、といふやうなものが、皆中型である。そこで半紙を二つに切つた小本、竪五寸の横三寸四五分の物が、蒟蒻本と云はれて、洒落本、咄本の形であつた。滑稽本は中本である、洒落本にも中本が少しあるが、それは大蒟蒻と云はれて居つた。と云ふ風に說いて、「作者部類」に、

洒落本既に一變して、浮世物眞似めきたるゑせ物流行す、其册子糊入のみよし紙を二裁したれば、中本物と呼做たり、又其作者に廣しからず、各方に任せてなすと雖、一九が膝栗毛にますものなし。

とあるのを引いて居られます。

大久保葩雪さんは滑稽本といふ部類を立てずに、中本書目といふことにして居られる。それは例言のところに、

繪草帋ならぬ滑稽作は皆此中本によつて梓行發市せらる、故に中本物といへば揷繪少き滑稽物たるを知るなり。

と云つて、中本と云へば直に滑稽物であることが、最初に斷つてある。さうしてその劈頭に擧げてあるのは何かと云ふと、寶暦六年の「善惡道中獨按内」でありまして、その類書が出たことをも書いて居られる。

後年の戯作物中、道中記の體裁に作述せしもの、例之ば天笠老人の導通記、山東京傳の悟道迷所獨按内、弘化年間より續出せし一筆庵の善惡道中記等の類は、皆本書を模擬せしものなりと云ふ、此種の作は此以前にあらざりしものと見ゆ、

併しこの類の作は、こゝに擧げられたのよりも、もつと數が多いのです。それに續けて所謂滑稽本を網羅してありますが、この雄飛亭の「善惡道中獨按内」は教訓物で、地圖仕立の横本ですから、中本を滑稽物と見ながら、これを入れるのは少しをかしいやうに思はれる。けれどもその内容から云へば、教訓物でもあるが、滑稽物でないことも無い。そこを捉へて談義物からの岐れ目と見られたものでせう。劈頭に此「善惡道中獨按内」を出されるといふことによつて、私の說が慥められるやうである。それは談義物から出てゐることが、これで知られるので、談義物はこの邊から、かういふ筋道で滑稽へ入つたもの、といふことが認められる。他に證とすべきものもありますけれども、これも慥にその一だと思ひます。

中本には滑稽本と人情本がある

だが中本といふものを直に滑稽本と解するのは如何でありませうか。中本の形として現れたものの内容を吟味すると、同じ形のもので滑稽本と人情本とに分れる。これは明かに書いたものがあります。文政八年に春水の書いた「三日月お專」の序文にも、

中本の當らん事を矢弓稻荷、

に禱るとあり、天保十年に三亭春馬の書いた「多氣競」の中にも、

中本一册手に持ながら入きたる、

と書いてある。これは何方も人情本で、後々までかういふ事を書いてゐるのですから、中本を直に滑稽本である

とするのは、少々困るやうに思はれます。

人情本の前の泣本

ところで人情本と呼ばれるものゝ前に、もう一つ別の名前のものがある。洒落本から直に人情本へ移つたやうに思ふ人があるかも知れませんが、その前に泣本といふものがある。これに就ては誰からもあまり云はれて居りません。淺野梅堂の書いた「寒檠瑣綴」の中に、ほんの二三行でありますけれども、かういふ事が書いてある。

一種泣本ト唱ヘテ、婦女子ノ心ニ感動シヤスキ情義ヲ書ツラネテ、泣カシムルモノアリシガ、爲永春水ノ梅暦、春告鳥ナド云モノ出、一變シテ淫蕩ノ情ヲ動シ、賤俚ノ風ヲ醸ス、

泣本といふ文字がこゝに出てゐる。新しいものでありますが、「孝女兩葉錦」の初篇に春水の序があつて、その中に泣本といふ事が書いてある。

川柳點の妙なるかなとは、古人三馬が妙なる序文、亦人情の三の切は、梅暮里谷峨の筆意にして、中にも當利は二筋道、ぬからぬ穿の廓の癖、能宵の程、程よくも三筋揃ひて滿尾はしたれど、厚味によつて喰たらず、未此次が有そふなと、思ひ付たる書屋の欲心、反古の中より撰出し、梓に壽く續編は、しかも新奇の愁歎場、眞僞は鑒定せざれども、近世流行泣本には遙に增る人情世態、實販元の彫出しもの、只をしむらくは草稿の文字、殊に麁漏にて、半分は紙魚の巢となれり、依之予に補綴を委ぬ、拙亭元來名を沽ず、數々徳を思ふをもて、前には五十餘年來星霜經て、いと久しき虎之卷の次篇を綴り、いさゝか書林に寛爾させしは、虎の威を借ゐせ作者、狐にあらで困窮の折節、筆採貧家の幕明、泣で發行か、沽ないで本屋が泣か、雨道に泣かせる案事の續編六冊。

泣本の流行

泣本が大變流行したこともこの中に出て居りますが、「二筋道」といふのは寛政十年、後篇といふ「廓の癖」が十一

年、三篇の「宵の程」が十二年に出て居ります。此等は大蒟蒻と稱せられるもので、「二筋道」は後に人情本の體裁に改板されてもをります。九重文里の件などは河竹默阿彌が芝居に仕組んでもをります。こゝに擧げた泣本といふものは、三篇とも皆梅暮里谷峨の作でありますが、春水は自分でそれに續ける、といふことを書いてゐるのです。

人情本と泣本との區別

泣本といふことは、この春水の書いたものでもよくわかる。人情本と泣本との區別に就ては、別に委しく話すべき事でありますから、こゝでは云はぬことにしますが、ざつとだけ申して置きたい。黄表紙は文化四年から合巻となり、洒落本は文政に入つて人情本となつた、と云はれて居りますけれども、果してさうであるかどうか。と云ふのは文化十四年に鼻山人の書いた「籬の花」、文化十三年に振鷺亭の書いた「寒紅丑の日待」などといふものは、形は洒落本の形でありますが、人情本と云はれて通用してゐる。それですから文政に入つて、洒落本が人情本になつたとは云はれません。況してそれ以前に泣本がある。更にそれ以前享和二年に洒落本として一九の書いた「廓意氣地」――の角書に「倡客眞話傳授之巻」とある本があります。これはなかなか嚴しいことで、凡例綱目がついてゐますが、その本文を見ると、

此書の發る所は傾城買虎の巻、二筋道等の糟粕を振つて書、故に文化共倣倣するに倖し。

とあつて、「傾城買虎の巻」とか「二筋道」とかいふものに續いたものとしてゐる。それから内容を説明した言葉、卽ち綱目といふことになるのですが、それは大體かういふものなのです。

第一回に娼妓の原を識をもつて、遊客是が爲に仁愛の心あらば、則大通とも大粹とも稱すべきの意味をしるす。

第二回に傾城の心を奪ふの行狀をあらはす、所謂跡に物を殘し、言を殘し、遺憾の情を懷しめ、その意を示すの卽妙を以てなり。

第三回に實情を施して相戀ふの意を起さしむ。

第四回にすべて人情愛著に逼るの趣きを述て卿その得失の弁をあきらめしむ。

第五回に通人化して野暮となり、娼妓愛じて愚にかへるの一條なる意気地の魂、手管を著し、義に因て實有の想にもとづく、其意味の深きを記す、畢竟是遊戯の中に、悉く巧拙を分ち、見る人の用捨に依て、興廃の差別あるを朗にあらはすものなり、

若九牛が一毛も好士是を得る事あらば、撰者が偶中の僥倖ならん歟。

つまり一九の云ふところによれば、泣本は谷峨と田螺金魚とを祖とするやうになる。この「廓意氣地」は泣本なのですが、それと同じ年に洒落本として刊行された、同じ一九作の「滑稽吉原談語」の凡例にも、かういふことが書いてある。

此吉原談語は余著す他の帖と其意味聊異也、書肆の注文に應ずるを以て、滑稽の詞を花とし、實情の其實を結て全體を濃にす。

濃やかな實情を述ぶ

他のものとは書振が違つてゐる、併し實情を述べるのを主意として書いた、と稱するのですが、これも泣本です。その後編に「夜騒行燈」といふものがあつて、文政十四年の跋がついてゐますけれども、刊年はわかりません。これも亦泣本なのです。

かういふものがありますから、泣本は寛政度のものかとも考へられる。さうすると谷峨より前に書いたもので、京傳の洒落本「傾城買四十八手」、その「眞の手」といふのは慥に泣本です。これが寛政二年。それから寛政九年に藍江といふ人の拵へた「廓通遊子」、その中に「夢遊篇」といふのがあつて、女郎の胡蝶といふのが、宗子といふ色男と別れるところがある。これも讀者を泣かせるものです。振鷺亭の書いた「玉の蝶」、これは刊年がありませんが、酒落本に委しい人達の説によると、寛政二年以前だらうといふことになつてゐる。仲町の女郎のお仲といふのが、せかれた色客と船宿で密會するところを書いたもので、これが又泣かせるやうに出來て居ります。その見本をこゝへ出

人を泣かせる泣本

して置きませう。

客「病氣だといつてよ、そんなら川もあるから、げいしやばかりでかへろらとかへるふりで、そつとかくれて三軒ながら、あがつて見て口をかけたが、あいつらも氣づいて、跡をつけて買ツてしまつたそうで、見番(けんばん)へ聞にはいつたが、病氣でひつこんで居なせいすと、どこもおなじそうばだから、名代氣どりの子をよんで、座敷ばかりですぐに糸藏がとこへよつて、譯をはなして見番へききにいつてもらつたら、これも病氣にちげいねへといふからの、よもや糸藏がいふ事に、おれにはうそもつくめいし、もしほんの内へでもいつたかとおもつたが、おふくろの病氣もぶさたにしておいたからいきにくし、とんだつまらねへ目にあつてかへつた、きのふぜひ〱こいといふ手紙を出して、よくつりよせやアがつたな、女郎「それでわかりやした、それじやア腹のたちなさるもつともだ、こういふわけさ、きつと今夜おまへがきなはるはづだからと、たのんで通(と)ふしておいた理くつさ、それにチヤントあいつらは水をさしやアがつた、わつちやアゆふべひまで、内にまつて居やしたよ、客「ウ、それでよめた、又お針のむね氣だろう、こんだの下まわし、(わか町はうはまわし下まわしとあり、)もゆだんがならねへぜ、女郎「きけばきくほどくやしくつてなりやせん、糸藏さんはげいしや衆のこつたから、中にたつてしにくいこともございしよが、なんぼ茶屋に居ればとて、あそこの女どもは、あんまりげんきんなやつらでございすわな、一頃わつちが心づけをしてやる時分は、ヲハイハイをしやアがつてから、客「いゝは、おれが都合がちつとなをれば、みんなにやつておいて、一番あらつて見る、女郎「アノあまめらは、(トうつくしい顔であくたいまじりで、みす紙に包であるバへこういさしものをさいて、)これをまげれば四枚ぐらゐ(總花は四枚なり。)は出來やす、そうしてからあすこの内へ、もふいきなさんな、わたいも茶屋壹軒はいりこまねへぶんのことさ、客「そうした所が、おれが顔がわるくられてゐるといふもんだから、外で手めへは出すめへよ、女郎「こつちへあいにきやすはな、いかにしてもあそこのやつらがにくふございす、ついぞせわをやかして、外の茶屋へかけ出しなすつた事もなしサ、是まで勘定日迄には、きつとはらつておきなすつたものを、なんの一トもの前やふたもの前おくれたとて、にんそうする事はねへ、おがんでいやアがつたがいゝ、

客「それはこつちの愚癡と云ふものだ、まだ舟宿が通りのいい千といふもので、うけこんでゐればこそ、帳場では不承知なはづだ、　女郎「ほんにねへ、舟宿衆といふものは、お爲ごかしばかりいふもんでごぜいすが、こつちの内では、そろつていやみがごぜいせん、けふおまへさんからもらつたぶんにして、お梶さんに祝儀をやつていきやすから、五兩ねだられたとかなんとか、かつこうよくいつておきなせい、わつちやア是から歸つて、年季を入て、なんでも檀那にかりやすから、濟すましけしなせいし、　客「そふ〳〵手めへの世話にばかりなつても、おれは本望にはおもわれへ、手めへそのいぢつぱりな氣が、身のふしやわせといふものだ、　女郎「なんの前じりをらる身で、出世しよふなどといふ氣は夢さらごぜいせん、わつちやアごきさらをさげても、すいたことなら本望だとおもつておりやす、かわいそふだとおもひなせいすなら、もしやの末迄かならず、あきてくんなせいすなへ、　客「今さらぐちをいふでもねへが、男見番でも女見番でも、みんなに評判された此おれが、おもへばはかなくなりはなづたぞ、　女郎「ほんにおまへさんの氣まへでは、さぞしがなくも思ひなさろふが、なまけたとつて色戀がなるものかな ト男の膝にとりついて忍なき　客「アヽ、もふ〳〵ふさぎはやめにしや、　女郎「モシ、こつちでこうしてあうも、氣がかわつていゝねへ、　客「それはそうと、傳間町の客はよくしておけばいゝ、　女郎「此相著はこしらへてもらひやした、お前の下著にてうどいい、おいてゆくから著てくんなせいし、　客「著て出ざア、傳間町のがやかましかろう、舟でかへるに風でもひいちアわるい、けふでなくてもいゝよ、　女郎「ナニサ、節句には丁字茶の方をうけやすからいゝよ ト黒じゆすのおびをといて、男の肌にきかへさせる。　客「てめへマア、けしからずやせたぞ、そしてまぶちがまつさをだよ、　女郎「ホンニおめへさんも、いつそ顔がむくんでいやす、氣がもめてもむり酒はよしてもくんなせいしへ、　客「こう苦勞をしちやア、氣でもちがうか死ぬだろうよ、なぜおれはこんなにつまらなくなつたしらん、　女郎「今さら氣でもかわんなさると、わたいはほつてもとりころさねへじやアおかねへによ、トはぎしりをして暮六ツの鐘ぐつとだきしめる　ゴヲン、亭主「汐さきだからふらねばいゝが。

かういふ風になつてゐるのですが、一方人情本は何時からといふことになつてゐるかと云ふと、「小說年表」では文政元年の「雛卵角談 晦日の月」(鼻山人)を一番先に置いてある。人情といふ字を頭につけたのでは、司馬山人の「人情其儘女大學」が天保元年。春色を頭につけたのでは、松亭金水の「春色戀浮身」が天保六年。これが一番早いらしい。が、「小說年表」によれば、「晦日の月」が一番最初といふことになるのです。

「晦日の月」からとの說

大久保葩雪さんの「人情本目錄」によりますと、文政二年に一九の書いた「清談峰の初花」から始まることになつてゐる。大久保さんは天保二年に出た曲山人の「娘節用」が大當りを占めたので、その翌年追駈けて春水の「梅曆」が出版された。つまり洒落本の變態で、世間が短篇に厭きたのを見て、長篇と出かけたのが人情本である、と云はれてゐる。

「清談峰の初花」からとの說

水谷君は又、遊里遊女を主にして書いたのが洒落本で、人情本は町家の風俗を寫したものである、人情本は讀本的な洒落本から生れたものだ、と云つて居られます。さうして「籬の花」の後篇である「廓字久爲壽」(文政元年)だの、「雛卵角談 晦日の月」だの、鼻山人の書いた「廓中餘情 由佳里の月」(文政元年)だのといふやうなもの、此等は洒落本としてゐるが、人情本として出たのは「清談峰の初花」が最初である、といふことになつてゐる。大久保さんも水谷さんも「峰の初花」を最初の人情本として居られるわけです。

洒落本が長篇になる

さうしますと人情本といふものは、文政二年を踰えることが出來ないものゝやうに見える。そこで短篇、長篇といふことから、洒落本を脫して人情本が出來たのか、といふことを考へて見る。洒落本には後篇、續篇を豫定したやうに書いたものが大分澤山ありますが、實現してゐるものはさう多くない。「魂膽惣勘定」の如き早いところのもの

でも、その拾遺として「通商考拾遺 六里一丁」といふものが、明和四年に出來てゐる。「聖遊廓」も二編の「列仙傳」が寶曆十三年に出來てゐる。さういつたやうなわけで、天明八年の「青樓五ツ雁金」も、寛政二年に後編として、「染抜五所紋」が出て居りますし、「二筋道」は申すまでもなく、寛政十、十一、十二と續いて居ります。「契情買言告鳥」(寛政十二年)も、享和元年に二編の「廓の櫻」を出し、「傾城買中夢の汗」は享和元年の出版で、後編の「妓情返夢解」が翌二年に出てゐる。「起承轉合」(享和二年)は後編の「滑稽遊治郎」が同じ年に出、續編の「青唐紙」は文政十一年に出てゐる。「仕懸幕無仇手本」が享和元年で、後編の「通新戯」が翌年に出て居ります。

それから「吉原談語」があるけれども、これは前に云つたから省きます。「辰巳婦言」が寛政十年で、二編の「船頭深話」、三編の「船頭部屋」が文化になつて出てゐる。「娼客窺學問」が享和二年で、後編の「青樓女庭訓」が文政六年。「潮來婦志」の前編は文政十二年で、後編が天保元年。「傾城買四十八手」は寛政二年に出て、後の巻と稱する「京傳居士談」が文化になつてゐる。この續ぎ方は作者の違ふのもあり、上方のが江戸になつたり、江戸のが上方になつたりするやうだ、板元の差もありますけれども、長篇にならうとしてゐる樣子はこれでよくわかります。が、それが皆人情本であるかと云ふと、さうでもない。たゞ長篇であるから、洒落本から離れたといふことは、どうも云ひにくいやうです。泣本になつたのには短いのは無い、長いのが多いのでありますが、その短いもの、洒落本一冊のものでも、その一部に悲しいことがあつて、それが爲に泣本と云はれたものがありはしないか、尙今後の研究に俟ちたいと思ひます。

寛政の末から

要するに泣本が前にあつて、それから人情本が出來たと思ふのですが、それが何時からと慥めて行く日になると、先づ寛政の末と睨んでいゝでせう。洒落本とも中本とも云はず、本の形にもよらず、泣けて讀める本を泣本と云つた。それが持越してゐますから、人情本になつても泣かせるところが往々ある。洒落本は御約束の世界で、廓か岡

場所ですが、その詰りはと云ふと、女が不實でない場合には悲しいことになる。廓の金には詰るが習ひ、といふやつで、どうしても賑かな事にはならない。泣本が出て來ることになりさうな話なのです。

人情本の稱呼の初め

そこで何時から人情本といつたかと申しますと、それは春水の書きました「由縁の梅」(天保元年)の序の中に、

中形の讀本を京攝にては粹書といひ、中頃東都にて洒落本といひしも、早晩の程にか呼換て、人情本と唱るも、その情態を穿鑿して、楮上に物云ふ面影の自らに顯れて見ゆるが如きゆへならんか、

と云つてゐる。この解説に就ては、まだ考へて見なければなりませんが、洒落本から人情本が出たといふことは、春水も當時の人だけに知つてゐる。けれども今日の人には或は窺ひにくいかも知れません。人情本といふ言葉は、こゝに春水が書いた前後からであつたらうと思ひます。

泣本と新内の世の中

さういふ風に泣本とか、人情本とかいふ名がついて居りますから、内容によつて泣本、人情本で通用しますけれども、さう選り分けずに型から中本と稱する時は、その中に滑稽本があることになりますが、泣本、人情本と呼んで取除ければ、中本と云ふと、只だ滑稽本だけになります。しかし人情本を取除けない前には、中本は滑稽物といふ譯にはいきません。天保五年に東里山人――これは鼻山人と同じ人です――が書きました「恩愛二葉艸」の序の中に

俊成卿の歌に戀せずば人の心のなからまし物の哀傷も是よりぞしる、此趣意を兼好法師は、よろづに賢才とも色好まざらん男は、いと躁々敷玉の巵に當なき心地ぞすべきと書り、寔に人のこゝろを和合、物の愁歎を知るは戀ぢに增ものはなし、殊に貴賤老少鳥獸の上までも生ある者の離れぬ業なれば、和歌の撰集にも四季の次に此題を、必ず詠侍る事になんありける、外の道にはいまだ聞へざれば、叙文に換るものならし。

戀は哀傷

と云つてゐる。これよりぐつと前のところの戀の扱ひは、戀愛ほど誠なことは無い、といふ意味になつて居りますが、こゝではそれが哀傷といふことになつてゐる。あはれを知る、悲しみを知る、これほど適切に感ずるものはない、と云つてゐる。これが泣本が人情本になつた説明としていゝやうに思はれる。

悲哀の情と新内の流行

　この悲哀の感情といふものは、戀愛が一番鋭く、慥に人を動かす力を持つてゐるといふことに就て、こゝで考へさせられることがある。たゞ泣本が行はれて、さういふ心持が出たのではない。文化の初頃といふものは、丁度鶴賀新内の二代目の時でありまして、この頃吉原の廓内に新内語りの入ることを禁じてゐる。あの流しは後々までもさうですが、夜が更けてから例の「天麩羅食ひたい」といふ三味線の音を聞くと、よほどしみ〴〵とした感じがする。前に豐後節の時にやかましく騷ぎ立てたけれども、新内もそれと同じもので、すべて悲しい調子でうたふ、事柄はと云へば、道行とか、情死とかいふものより無い。元祖の若狹掾の作つたといふものが百曲以上もありますが、どれも同じやうなものである。慥に豐後節と同じ行き方で、之に代つたものと見ていゝのです。豐後節に對して、悲哀ほど戀を募らせるものは無い、風俗上面白くない、と云つて論じたことは、又新内に移して云ふべきことである。新内の流行る世の中と、泣本の流行る世の中とが同時であつたことは、よく當時の世の中の姿を現してゐるやうに思はれます。

轉向した「田舍芝居」

洒落本が二分さる

　泣本といふものは洒落本の中に發生して、それが成長して人情本になつたのでありますが、その洒落本の一部にあつた滑稽はどうなつたかと云ひますと、天明七年に「田舍芝居」といふものが出て居ります。これは萬象亭の作で、これから始めて洒落本の中が二分れになつてゐるやうに思ふ。この「田舍芝居」といふものは、泣本のやうに際立た

ずに、ひとりでに流れて行つたものではなく、心づいてちやんと轉向したのであります。

馬琴が書いたと云はれてゐる「物之本作者部類」の中に、

田舍芝居といふ洒落本最行はれたり、其自序に今の洒落本は睾丸を顯はして笑はすが如しとあり、京傳聞して欣ばず、こは吾が事を云へるなりと思ひしかば、是より萬象亭と交はらずなりぬ、

といふことが書いてある。つまりこの本の爲に、京傳と森嶋中良とが絶交するに到つた、といふのです。併し褌をはづして睾丸を振廻さば、目を驚かし、片腹を抱ゆべけれ」といふ言葉は、「田舍芝居」の序文にありますが、自序ではなくて「風來山人門生無名子」といふ署名になつて居りますが、

先に遊子方言、辰巳の園の一書出てより、年々歳々其糟粕を嘗つて、似たり寄つたりの洒落本、

と云つて、洒落本の系統を述べてゐる。又穴とか、穿ちとかいふことから轉じて、悪穴、悪洒落に墮してゐることに就て、次のやうにも云つて居ります。

底の底を穿たんと欲して、八萬奈落の汚泥を掘出し、隅の隅を探さんと欲して、六萬坪の塵芥を搔出し、見ぬ事淸しの影穿鑿、くら闇の事をあかるみへ持出されて、娼妓の身の上には迷惑に及ぶ事少なからず、是見に異なく見らるゝに實あり、實に笑を求むるに失して苦笑を惹出すに至らしむ

極度に排斥したのですから、京傳のみならず、洒落本の作家としては默つてゐにくい事柄である。だから喧嘩をしたかも知れないし、少くとも厭な顏はしたらうと思ふ。

罪のない笑ひへ轉向

そればかりではありません。萬象亭の轉向した心持に就ては、無名子の序文は尚、

實を以て實の如く書成は戲作なり、洒落本の洒落を見て洒落も洒落さ、洒落た所が洒落にもならねば只可咲き事とすべし。

といふことを云ふあと、もう教訓も訓誨も忘れられてしまつてゐる。面白がりさうな事を書くといふならば、厭はしい

悪穴や悪洒落を書くよりも、罪の無い笑だけにしたらいゝぢやないか。といふ意見なので、これは戯作上の確論だと云つて褒めて居ります。「田舎芝居」は洒落本でなくて野暮本だけれども、誰が見てもをかしい、面白い本だと云つてゐる。悪穴や悪洒落よりも罪の無い笑の方がましだと云ふので、ごた〳〵した岡場所や遊廓の話を抛り出して、轉向してをかしいものに移つたのであります。

「田舎芝居」の新しみ

この「田舎芝居」といふ本は、越後へ廻つて行つた旅芝居が、とある村方で開演した時の模様を、面白をかしく書いたので、これから後に「田舎相撲」とか、「田舎操」とか、「田舎講釋」とかいふ風に、田舎といふ名のついたものがいろ〳〵出て居ります。そのうちで――といふよりは、それよりも先に、朱楽館主人の書いた「變通輕井茶話」といふ、輕井澤のおじやれの事を書いた洒落本がある。この本は刊年が知れませんが、安永頃のものだらうと云はれて居ります。もう一つは「娼註銚子戯語」と云つて銚子の事を書いたもの、これは信陽大飯喫の著で、天明年間の出版とされてゐる。この二つのものは「田舎芝居」の前に、田舎の事を書いたもので、田舎には江戸と比較して滑稽な事があるから、材料にして書いたのでせう。尤もこの二つは洒落本ですから、女の話が主になつてゐますが、「田舎芝居」はそこを振替へて、全く田舎で旅芝居の興行をするに就ての話を書いてゐる。そこが面目を振替へたところであります。田舎といふことは、必ずしもこれから始まつたのではないけれども、田舎の扱方は確に違つてゐるのです。

をかしみを覘ふ一九

をかしみの覘ひが當つた「膝栗毛」

それから「東海道中膝栗毛」の初編が享和二年に出まして、これが八編十八冊といふことで、文化六年に完結してゐる。「膝栗毛」は豫定されたのを屢〻變更して、十八冊の長きに及んだのでありまして、發端は却つて文化十一年

に出て居ります。最初の版で見ますと、東海道中ではなしに浮世道中となつてゐる。さうして二編のところも、二編と云はずに後編とありますから、その邊のところで一切り切るつもりだつたと見えます。ところがなか〳〵切らぬのみならず、文化六年には再版が出、文久二年には又改版して居るほど、これが賣れたのです。そればかりではない、追かけて膝栗毛といふ名のついた本がいろ〳〵出て居りますし、膝栗毛といふ名は使はないでも、膝栗毛の心持で旅行の滑稽を書いたものが、大分澤山出て居ります。

この作者である十返舍一九は、「小說年表」で見ましても、寛政九年に「心學時計草」といふ自畫作を出してゐる、これが第一作であつたらしい。この本は六樹園の「吉原十二時」から諷へられて、といふよりは寧ろ本屋の指圖と申した方がいゝかも知れません。それと同じ年に「奇妙頂禮胎錫杖」、「自由自在新鑄小判𨩃」といふ風に、黄表紙ばかり三種出してゐる。「戯作外題鑑」にもこの年のところに、

十返舍一九出る、作の體おかしみを專一とす、ゝ々に著述し、文化にいたる、又洒落本、膝栗毛大に名あり、

と書いてあります。一九の覘ひはをかしみといふことに在るが、何が一番當つたかと云へば、それは「膝栗毛」だといふのです。

幅の廣い作者

一體この一九といふ人は、實に幅の廣い作者でありまして、黄表紙ばかりでも今の「心學時計草」を第一として、百六十八種も書いてゐる。讀本の方は享和二年に出した「中古奇談双葉草」が最初で十六種、滑稽物になりますと、寛政十年の「當變卜十露盤占」がはじまりで二十四種、洒落本は享和元年の「恵比良之梅」以下十四種、人情本の方は人情本の最初と云はれてゐる「清談峰初花」(文政二年)と共に六種、咄本の方も寛政八年の「落咄風通神」をはじめ十八種ある。合巻物になりますと、これは又大變なもので、「復讎連歌怪譚」以下百九十七種といふのです。合計致しますと、四百四十三種書いてゐるわけで、多方面であり、且多作でもあつたことは、あまり他に例の無い人であり

ます。

その多方面な多作の中で、第一の當りを占めたのは「膝栗毛」で、一九あつての「膝栗毛」か、「膝栗毛」あつての一九か、わからぬ位のものである。この「膝栗毛」はをかしみを主にしたもので、それが當つたのでありますが、「膝栗毛」のみならず、一九はどの方面にもをかしみといふことを主とした作者でありました。「噺説年代記」などにも、「萬象亭、全交おかしみをおもにとる」といふことが書いてありますが、一九もそれと並んでをかしみを主とする作者で、觀ひどころはこの二人と違つて居りません。殊に洒落本といふものは、をかしくないものではないけれども、それを專らをかしみといふことに仕向けましたのは、「田舍芝居」の作者である森羅萬象で、この人も黄表紙を二十幾種か書いて居ります。芝全交は黄表紙作者と申してもいゝ位の人で、安永九年から寛政六年までの間に、四十種も書いてゐる。あまり多作とは云へないから知れませんが、決して數の尠い方ではありません。

黄表紙の筆禍は諷刺から

黄表紙の傾向

黄表紙といふものは、安永四年に戀川春町が大當りを取りました「金々先生榮華夢」から、といふことになつて居ります。この「金々先生榮華夢」が出て黄表紙は洒落になり、京傳の作で善玉惡玉でおぼえられてゐる「心學早染草」、市場通笑の「卽席耳學問」が出て、黄表紙が眞面目になつたと云はれてゐるのですが、京傳、通笑の二つの著書は、いづれも寛政であります。これは中澤道二が江戸で開教した年でありまして、それが又盛になつた爲に「心學早染草」なんていふ名もつけたのでせう。「心學」といふ字を頭に載せる著作は、中澤道二の江戸開教以來のものと思はれる。殊に通笑の如きは、洒落の喜三二に對して、教訓の通笑と云はれたほど、教訓ぶりの人でありました。尤もそれ以前に心學が江戸の方にさし響いてゐるないかと云ひますと、決してそんな事はありません。前にも申し

ました「魂膽惣勘定」の附錄になつてゐる「華里通商考」の中に、世間を地理に見立てゝ書いてある、それに、

本心國テシマリウ

といふのがあります。これは中澤道二の師匠である手嶋堵庵のことです。さういふものも出來て居りますが、道二の江戸開教によつて、その影響が强くなつて來た。その時恰も松平越中守の寛政の改革がありまして、洒落本の作者が處分を受けるやうな事實があり、それが從來の作風にさし響いて、黄表紙が教訓に傾いて來るやうになつたのです。それ以前の黄表紙を見ますと、見世物とか、流行物とか、當り狂言とかいふやうなものから、だん〱その時々の出來事を取入れて、その時世を諷刺するやうになり、遂には政治上の批判、諷刺といふことにまでなつて來た。

黄表紙の時世諷刺と筆禍

朋誠堂喜三二の「文武二道萬石通」などは、名高い黄表紙でありますが、この作者の喜三二は平澤平格と申して、秋田侯佐竹右京大夫義和の御城使でありました。武鑑にもちやんとその名が出て居ります。然るにこの本が樂翁侯の政治の批判をしたわけになつたので、將來に面倒を起すといかんといふところから、主命によつて黄表紙を書くことを差止めまして、この年以來筆を絶つことになりました。

戀川春町の如きも、「悦贔屓蝦夷押領」といふものを書いて、天明の饑饉に乘じて當路者が米の買占をしたことを諷して居ります。「鸚鵡返文武二道」といふのもありますが、これは前の喜三二の「文武二道萬石通」の後編です。更に甚しきに至つては、家齊將軍の私行をあばいた黄表紙のワ印、「遺精先生夢枕」といふものさへ書いてゐる。この戀川春町は、駿州庵原郡小嶋一萬石、松平豐後守信義の用人でありまして、倉橋壽平と申しました。これもちやんと武鑑に出て居ります。小石川春日町に藩邸があつたので、戀川春町といふ戲作名が出來たのだと申します。春町は寛政元年七月七日に四十六歲で切腹したと云はれて居りますが、それは著作の事に就て差障が起つた爲だといふ

ことです。

石部琴好といふ作者は、本所龜澤町に居りました御用達町人、松崎仙右衞門といふ者でありましたが、それが「世直大明神黑白水鏡」といふものを書きまして、江戸拂の處分を受けてゐる。まだその他にも、罰金とか、手錠とかいふ處分をされたものはいくらもありますが、寛政二年十一月になつて、草雙紙などに時世に關するものを書いてはならぬといふ達しがあり、版改の法令も出て居ります。已に處分を受けた者は勿論ですが、こゝで新に法令が出ました爲に、洒落のめしてゐた黄表紙のみならず、一般の戲作が敎訓めいて理窟に陷ち、眞面目なものになつて來た。それは軈て化物、怪談の趨向が多くなることにもなつて居ります。

狂歌と關連する滑稽

をかしみを覘ふ三馬等

さういふ變化が起りましても、萬象亭や全交は相變らずをかしみに力を用ゐて居りました。「戲作外題鑑」の寛政六年のところに、

式亭三馬出る、全交の趣を慕ふて、世俗の風を穿つことを得たる妙作多し、

と書いてありますが、式亭三馬が出て參りましても、やはり萬象亭や全交と同じことで、面白い方に目を著けて、をかしい方面の穴を行かうとしたものと見てゐる。三馬は寛政六年に、「天道浮世出星操」、「人間一心覗替繰」といふ二種を出して居ります。一九は自畫作でありまして、三馬より一年後れて黄表紙をはじめて居りますが、黄表紙の世界も、寛政七年に南仙笑楚滿人が「敵討義女英」が大當りを取つて以來、敵討物が盛になつて、每年敵討の作が澤山出てゐる。文化になりましては、どの作家も敵討を書くやうになりましたから、楚滿人は敵討物の中興と云はれました。一九は寛政八年に作物が最も多く、黄表紙四十九種のうち、二十種まで自作してゐる。又洒落本の方は

泣本が起つて居りますし、黄表紙は「金々先生榮華夢」で滑稽を盡したものが、教訓や怪談に傾いて洒落でなくなり、教訓めかした眞面目なものになつて居ります。況して敵討はをかしくない。その時になつて、をかしみを專らとした「膝栗毛」が出たから、目新しいので、そこへ人氣が寄るといふのもありさうな話です。

黄表紙の「金々先生榮華夢」以前のものは、澤山見て居りません。どの本も餘計に見ては居りませんが、殊に黄表紙は見て居らぬから、何とも申されませんけれども、「金々先生榮華夢」以後のものはいくらか見てゐる。それ以後のものに就て申せば、先づ洒落のめしたものといふのがいゝでせう。秀句、地口の固まりだと思はれます。さうなつて見ると、自然笑話との關係も考へられるわけですが、笑話の方には狂歌咄といふ一つの體裁がある。面白い話と狂歌との交渉がその間に在るので、それは秀句と云ひ、地口と云ふものと密接な係合を持つてゐる。

狂歌咄

江戸風の狂歌天明ぶり

狂歌の天明ぶりといふことは後々まで云はれて居ります。これが上方風の狂歌を一洗して、江戸風の狂歌がこの時から起るのですが、内山椿軒がその親方で、朱樂菅江とか、唐衣橘洲とか、大根太木とか、大屋裏住とか、平秩東作とか、四方赤良とかいふ人達が競ひ立つて、江戸風といふものが出來上りました。上方風の狂歌といふものは、この時分には已に風味を失つて居つた。たゞ鈍重で、輕快でないばかりぢやない。厭に理窟つぽいものになつて居つたのです。

それを一轉したのが天明ぶりであります。天明ぶりの特色といふものは、ごく大ざつぱに申しても大凡二つありませう。手近い蜀山人の作で申しますならば、

　　生醉の禮者をみれば大道をよこすぢかひにはるは來にけり。

といふのは心取です。

　　念佛を申すこゝろのやさしさは鬼も十八だんりんの僧。

といふのは、語路で行くのです。つまり心取と、語路で行くのつと二通りあるわけであります。

忘年の交を辱うしました山中共古先生の御話では、狂歌といふものは法則に拘泥せぬ、手爾波とか、仮名遣とかいふものは構はない、川柳は穿つのが主である、都々逸は人情に絡んで行く、発句は言外に味を持つ、歌は自然なところがいゝ、詩は轉句が働く、といふ風に各々その妙を発揮する場所がある、狂歌の妙は何処に在るかといへば同意異事、同音異意といふところに、巧妙なものがあつて、その利用によつて独擅の異を発する、要するに言語の妙用である、と云ふことでありました。この説には異論があるかも知れません。一概には云へませんけれども、軽快な事を求めるやうになりますと、どうしても諧謔で行く、同意異事、同音異意といふ方へ働くことになる。これもあまり働かせれば弊害がありませうが、それは秀句、地口の場所でありまして、一九が自分の狂歌のことを、

巻中に著す夷曲歌は俳諧地口を専にす。

と申したのも、山中翁の云はれたのと同じ考であります。「浮世風呂」にも、

戯作本には言語のよく廻つた地口はおかしくないゆえ用ゐ、各その道〳〵だネ、わざとこぢ付た地口を書くが、戯作本の意とする所、

とあるが、瀧亭鯉丈も、

言語の妙用　洒落、地口

此ごろはまた地口歌と名付て、相馬内裡のお公家さまのやうに、しきりに考へてゐるやうすだ、なんだか業首へ地口はやり唄、あくたいおんあぼきやでも何でも出たらめにこぢ込で、三十一字にこぢ付ておかしがつてゐる、

と云つてゐる。これは地口歌といふ名前でわかつて居る通り、山中翁の云はれた言語の妙用の方です。その妙用によつてをかしみを出すといふことは、やはりこれが洒落、地口といふことに落著くのであります。尤もかういふ方面は、発句の中にもあるやうに思ふ。手短い尾崎紅葉君の、

寒参りかけるちん〳〵千鳥かな。

なぞといふ句も、やはりその畠のやうである。發句にさへ――無論本筋ではないでせうが、さういふ事をやつてのけるものが珍しくない。秀句、地口といふものゝ幅は、そこまで廣がつてゐるのです。

洒落地口から來る小咄や黄表紙

地口の意味

秀句といふのは地口の前名であり、地口はもぢり口の略だとも云ひ、又地の口といふことで、上方の口合に對した言葉だとも云ひます。本歌、俳諧なら云ひかけ、狂歌ならもぢり、常の話では口合と云ふ。一句兩意のものと解せられて居ります。安永九年の洒落本「風流仙婦傳」の中に、

もろこしの滑稽と申は興宴のたはむれ事にて、今の世のしやれ、ぢぐちのやうなるもの也。

といふことがありますから、昔からかういふ風な解釋で、洒落地口は滑稽、滑稽は地口洒落、といふ風に取做されて居つたのです。

小咄に近い前期の黄表紙

黄表紙は最初は洒落を專らにしましたから、小咄とごく近いものでありました。安永七年に出た「杜選商」なんていふものは、當時の賣聲をつかまへて趣向を立てましたもので、一日師匠、辻供、冷飯買、縁談の世話、酒盛買、代句賣、借金の言譯、灸すゑ、といふやうな項目になつてゐる。丁度八つの小咄と見ても差支無いものです。その一つの例として、冷飯買といふのをこゝへ出して置きませう。

冷飯買

人の世はすべて冷めしなくて叶わぬもの也、べつして冬むき火事ざたしげきおりふしはたくわいおくべきこと肝要也、近火はさて置、遠火にて氣遣はなかばしなれども、おやぢ橋のおばきが處は風したにて大けんびき、筋かひばしまで行ずばなるまひとかけ出して、かつゑた處が、もはや夜の八つ時分にて、そば切うりも、ふつ〳〵見へず、せめて饅うりでもと言ふう

へは、れいのたくはへおきたる冷飯へ、ちや釜はしまつて薬くわんへうつしたぬる茶にてしてやると言ふてうしなれば、ひやめしなくては叶はぬこと也、さは言へ、夏の暑さのせつに冷飯のあまつたも、父なしせつなきものにて、明日の朝はおちやづけにして、おひるにたきやと、再義のさりやしても、もう一夜おくとすかし蓋の飯びつでもきかず、焼飯にするにもぐしやついてにぎれず、糊にするには天氣がわるしと、九間が八けんこまるもの也、よつて五月の末あたりより七月八月の殘暑の頃まで、大ばん切か飯櫃をもたせてあるき、

冷飯のあまりかを〳〵

とよびあるきて、ずいぶん安くかひとるべし、大かたすへて喰れぬをば、先々にてたゞもくれべし、非番もらつてどふする　買人「また捨るのさ、

これで小咄といふものと洒落、地口といふものゝ關係もわかり、從つて又黄表紙と二つのものとの關係もわかると思ひます。殊に「杜選商」などは、小咄として見ますと、落までちやんとついてゐる。それですから咄本である安永元年に木室卯雲の出した「鹿子餅」、同じ年に小松屋百龜の出した「聞上手」などに比べて見ても、まことによく似てゐる。たゞ長いと短いとの違ひがあるだけで、まことによく似た趣であります。

江戸風の小咄

この二つの本が大に行はれまして、咄本があとから續々出ました。江戸風の小咄の最初と申していゝ、この作者兩人は、何れも狂歌に名高い人達です。小咄と申しますのは、一分線香即席咄などと云つて、早く作り、短い言葉で用を足す、素話の拵へのものである。この時の小咄といふものを見ますと、狂歌と同様に上方風でない。理に墮ちない、江戸の面目をよく見せて居りますが、やはり語路が勝つてゐる。どうしてこの最初の咄本が小咄であつたかといふことを考へて見ると、江戸では地口、上方では口合ですが、何れにしても笠を嫌ふ。笠といふのは前置のことです。前の方で落へ行く段取をつけるのですが、長い段取をつけるのを厭がる。小咄になると、殆ど前置が無

いやうで、直に落へ持つて行くのをい、とした。黄表紙でも前に少しの文章、地の文がありまして、それに書込で洒落が入つてゐる。それらのところは大に參照するに足ることだと思ひます。

黄表紙は合卷になつたと云はれて居りますが、それよりも早く、一方咄本に出て行くべきものが稍〻遲れたのです。どうして遲れたかと云へば、咄本に行かなくても、まだその外に手腕を揮ふ場所が多かつた爲でありませう。

江戸の自尊心から來る言葉の吟味

田舍を舞臺とする戲作

そこで前にも云つた通り、洒落本の「田舍芝居」が出て、それから後に田舍を舞臺とするものがいろ〳〵出て居ります。寛政二年に竹塚東子の書いた「田舍談義」は洒落本ですが、文化元年には中本で、一九の「田舍草紙」が出てゐる。續いて文化五年には、七文舍卑笑の「田舍芝居樂屋雜談」、同七年には米花散人の「勸善田舍相撲」、棹歌亭眞楫の「下愚方言鄙通辭」、同八年には三馬の「狂言田舍操」があり、東里山人の「田舍通言野路の鈴」が出てゐる。同十年には三馬の「田舍芝居忠臣藏」、十一年には萬壽亭正二の「旅芝居田舍正本」、十二年には東里山人の「片言雜話田舍講釋」、といつたやうな調子で、それから後にもまだ澤山あるやうです。此等の趣向といふものは、都會と村落との比較に於て、田舍言葉がをかしく聞えるから起つたことであります。

江戸自慢

江戸と京と大坂が三大都會と云はれたのは、慶長以來のことでありますが、三都の中でも江戸を第一と思ふやうになつたのは寶暦度からの話です。江戸の人間は寶暦から土地自慢をする風が甚しくなつてゐる。さうして又その時分から、尊王運動が頭を持上げてゐるといふことも、まことに面白い事だと思ひます。京を花の田舍と見下すやうになつたのは天明年間で、江戸ッ子といふ變なものが出て來たのは文化度からです。江戸の自尊心と云つたらい〻か、己惚心と云つたらい〻か、何方であるかわかりませんが、その時は江戸の衰退を示す時だつたのであり

ます。

その時に江戸の者は何でも自分の住んでゐる所ほどいゝ所はないと極め込み、第一に江戸の言葉を結構なものゝやうに思つて居つたのですから、江戸自慢の眞先に出るのは江戸言葉で、從つて田舍言葉を僉議立するやうになつた。一九の「方言修行金の草鞋」、三馬の「大千世界樂屋探」などといふのがそれで、三馬はこの本の中で、熊谷敦盛の組打のところを、上方言葉と關東言葉に書分けて、口語體に書いて比較して見せる、といふやうなことをやつて居ります。それが大變面白かつたのです。

田舍言葉の僉議立

訛の多い江戸言葉

文化文政の江戸といふものは、最も成熟した都會の樣でありまして、江戸としては絶後とは云へませんが、空前の發達であつたらうと思はれる。だが江戸ッ子といふ者は歴史も時世も何も知らないから、江戸の日本であると思つてゐる。江戸が幕府の所在地で、政令がそこから出る爲に、江戸が馬鹿にえらく見えるのだ、といふやうなことは知つてゐない。たゞ自分達が住み慣れてゐるから、何處よりもいゝと思つてゐるので、彼等は實のところを申せば、江戸以外の何處も知つてはゐない。云はゞ世間見ずから來る獨合點に過ぎないのです。

世間見ずの獨合點

それですから他國の者が來て、土地不案内の爲にまごついたり、耳慣れぬ言葉を使つたりすると、頭から馬鹿にしてかゝる。田舍者とか、田印とか、ぶことぶが一ッの惡對になるのです。その癖さういふ江戸の者にしたところが、さう遠くない五里三里といふ土地へ旅に出ても、もうへこたれてしまふ。それどころぢやない、名主の玄關へ行つてもまごつけば、自身番へ連れて行つてもへどもどする。江戸の言葉は訛が多い、重言片言たらけのものなんだけれども、そんな事には一向氣がついてゐない。眞に江戸の言葉として、標準になるやうな言葉を彼等は使つてはゐる

訛の多い江戸言葉

ないのです。元來江戸ッ子なるものは、或經濟事情からこの大都會に生れた畸形兒に過ぎない。江戸生活を三階に分けるとすれば、彼等はその下階に居る者であり、五級に別けるとすれば、その第五級に居る者なのであります。

けれどもそんな知識も無ければ考も無いところの江戸ッ子どもは、外來人を貶しつけるのに一番手勝手のいゝのは、言葉の違つてゐることである。外には何も持つてゐない、持合せてゐるのは言葉だけですから、何處から來た者に對しても、言葉の違ふところから之を田舍者と云つて貶しつける。さういふ風がありますから、先に來た田舍者が少し土地に慣れると、自分は江戸ッ子でなくても、あとから來た新參者の方言や國訛に就て、前に自分がやられた通り、繰返して馬鹿にするといふことになる。その言葉咎をする江戸の人達は知るまいが、本當の江戸言葉はどんなものか、方言や國訛を離れた江戸言葉はどんなものか、といふことに就ては、三馬が「狂言田舍操」の中に書いて、これが正眞正銘の江戸言葉だと云つて居ります。その文句をこゝへちよつと摘出して置きませう。

正銘の江戸言葉

ハテ江戸訛といふけれど、おいらが詞は下司下郎で、ぐつと鄙しいのだ、正銘の江戸言といふは、江戸でうまれたお歴〳〵のつかふのが本江戸さ、これはマほんの事だが、何の國でも及ばねへことだ、然樣然者、如何いたして此樣仕りましてござる、などゝいふ所は、しやんとして立派で、はでやかで、實も吾嬬男、はづかしくねへの、京女郎と對句になる筈さ ちつとお談義が長くなるが、江戸は繁花の地で、諸國の人の會る所だから、國々の言が皆聞て通じるに順つて、諸國の言を江戸者に移らうぢやアあるめへか、そこそツレ、正眞の江戸言は、彙がただやら混雜になつたといふものさ、それでもお歴〳〵にはないことだ、皆江戸訛といふけれど、訛るのは下司下郎ばかりよ、江戸の中僅廿町も離つと直に違ふ、お前見被成たかトいふことた、おめへ見なつたかといふぞ、夫が常の人の言だ、一里も隔つとよつぽど異があるテ、江戸者の風をしたがる人もあるし、上方では關東者さへ見れば、江戸者だの、江戸兵衛だのと、一洞に覺て東扱ふから、愛で埒はねへ、

正しい意味の江戸言葉といふものは、所謂江戸ッ子の使つてゐるものとも違ふし、武家にせよ町家にせよ、第三階級の生活者が使ふものとは違ふ。都會人だとか、田舎者だとかいふ區別を、いきなりその使つてゐる言葉できめるのは間違で、自分達の使ふ言葉と違つてゐるからと云つて、直に貶しつけるのは宜しくない。けれども文化文政度は言葉の吟味の實に甚しい時代でありまして、何も彼も江戸を標準にしてやる。江戸ほど結構なところは無い、と世間知らずのやつが思込んだのですから、飛んでもない固陋なものになつてしまつて、どうにもならないのです。

田舎者を馬鹿げたものと見ることが、已に滑稽なことになり行くのですが、それをさうとも思ひませんで、馬鹿げたものは田舎者だと極めてしまふ。さういふ馬鹿げたものばかり聚合してゐる村落は是非とも滑稽なものでなければならぬ、といふ心持を持つて居りましたから、それを舞臺にして書出す風が、戲作者の方にも出て來ました。それは天明に萬象亭が「田舎芝居」を書きました頃よりも、享和に一九が「膝栗毛」を書きました時の方が、さういふ思ひ込み方が益々強くなつて來てゐる。實際江戸生活と村落生活との差隔も著しい、天明以來百姓の暮し方も大變立派になりはしたものゝ、江戸の暮し方は寛政以後急激に華美になりましたから、其隔りは夥しい、それ故に江戸ッ子のみならず、江戸に住む人達の心持がだん〳〵増長して參りましただけに、田舎を舞臺とする滑稽が大きくなつて來たといふことも、更に疑を容れぬわけであります。

樂でない昔の旅行

當時の旅行の苦痛

こゝで考へて見なければならぬのは、その頃までも旅行といふものは娯樂に不適當であつたことです。當時一番上等な旅行をする者は、諸大名の參覲交代の往來でありますが、それが何程殿樣達の苦痛でありましたらう。立派な乘物に召して、一足も御自身で歩かれるのではないが、箱詰になつたやうな狀態で、思ふやうに外を見ることも

出來ない。その窮屈さ加減といふものは、なか〳〵今日展望車などに乘つて居るやうなわけには行きません。駕籠の中に坐つて居られることが、十日も半月も續くのですから、さうやつて擔がれて歩くのは、隨分苦しくもあり、煩はしくもある。それが江戸時代の一番上等な旅行だつたことを思へば、供給不足のために駕籠にも馬にも乘らずにてく〳〵歩くのみならず、宿驛の旅店の設備が悪く、辨當まで背負はせられる一般の旅行は、なか〳〵容易でないのみならず、渡舟の船頭とか、雲助とか、護摩の灰といふやうなものに附纏はれるやうなこともあつて、油斷も隙もなるものでない。樂しみなどになるわけのものではないのです。

遊山旅の時代となる

上方の方と致しますと、寛永三年の「當世乙女織」に、金銀は地、行次第のゑやう旅」などといふことが書いてある。西鶴はそれより早く、三箇の津、五箇の津の遊里を經訪する浪費者を書いて居りますが、それには「ゑやう旅」といふ言葉を使つてゐない。それが寛永三年になつて、はじめて「榮耀旅」といふ言葉が出て來るのです。もつと早いところにあるかも知れませんが、私はまだ見て居りません。三箇の津、五箇の津の遊里を廻つて歩くのは、贅澤な旅行者に違ひないけれども、西鶴は榮耀旅とは云つてゐない。何程贅澤な旅行にしても、御大名の道中で知れるわけで、なか〳〵樂なものではないのです。それが寶暦四年の前句附になると、

ゆるり〳〵と〳〵
音曲の道具持たせて遊山旅。

といふ風に、遊山旅といふ言葉になつてゐる。こゝへ來ると全く旅行を樂しむ心持であつて、もう旅行の苦しくない時が來てゐることが知れます。興味本位の旅行が、この頃から出來るやうになつたのです。勿論今日と比較は出來ませんが、江戸時代としては、この頃から娛樂的な旅行をすることがはじまつたと云つていゝでせう。

それですから明和八年版の「教訓世間萬病回春」の中に、

近年わきて心得ぬは一ッ病あり、暇と金との自由にまかせて、湯治といひ立て、毎年登山旅をなす者多し、

とあるやうに、遊山旅もたまにするのではない、年々やる者さへ出來て來てるのです。これは宿屋をはじめ相當な設備が出來て來たから、旅が面白いものになつたのだ、と見なければなりません。もとは食事と宿泊とが別々だつたのが、元祿の頃から一緒になり、その旅籠屋でも寢具や蚊帳が備へてある、といふ風になつて參りましたが、それから六十年ほど立つて、遊山旅時代が來たのです。それには宿驛や旅店の變化の方からも見なければなりませんが、差當り「遊山旅」といふ言葉だけで、萬事を考へて貰ふことにして置きませう。

滑稽物に見える心持の違ひ

と政度に増えた旅行好

それから又文化文政には、旅費から眺めて參りましても、旅中に我儘が云へたらしい。隨分金は餘計にかゝつたやうですが、費用さへ惜まなければ、さう苦しくない旅行が出來たらしいのです。如何にも遊山旅らしいものになつて來たことは、當時の旅日記が殘つて居りますから、それからも考へることが出來る。又一方から見れば、さういふ旅日記が殘つてゐるほど、旅行好な人が殖えて來たのであります。

江戸から五里八里位先のところへ、一晩二晩泊りの見物に出かける小さい旅行には、女子供でも出かけるといふ有樣になりましたから、京大坂へ行つて見たいといふ人も、だん／＼多くなつてゐる。旅行に就ての苦しみは減つてゐますけれども、時間も多くかゝるし、費用も大變だから、さう思ひながらも實際京大坂へ出かけることは出來ない。が、さういふ希望を持つ者は段々多くなつたのです。

それですから面白づくに書いたことは同じであつても、「膝栗毛」と寛永の「竹齋物語」や萬治の「東海道名所記」、元祿の「新竹齋」などといふものとでは、實際の狀況も違つて居りますし、それを讀む人の心持も大變違つて來てゐる。

東海道には限りません、木曾路や奥州路に致しましたところが、遠い國で變つたところのあるのを見物したいといふ心持、面白く旅をするといふ心持が、人々にあつた時でありますから、「膝栗毛」が大變喜ばれたわけになるのだと思ひます。

滑稽から紀行へ

旅行も田舍巡りで、前に申した遍歷小說といふやつになる。これは地獄巡りも同じ事です。萬象亭は早く「田舍芝居」を書いて、うんとをかしみを述べたのですが、「膝栗毛」とは大分行き方が違ふ。さう時代が隔つては居りませんが、滑稽から紀行の方へ振向けて參りました文化四年の「馬士の歌囊」、旅行按內といふ心持の加はつた文化十年の「金草鞋」、といふやうなものもある。これは何れも一九の作でありますが、「膝栗毛」にしても、續篇の木曾道中には一々里程が書き込んでありますが、更に文久版になりますと、一々細長い圖をして、どこからどこまで何里何町といふことを標記して居ります。かういふ風に里程を書いて參りましたのは、實際の道按內の心持が入つてゐる。これは人が旅行したいといふ心持があるのに乘じて起つたことだと思ひます。

實感に導く小說

小說を實際の役に立てるまでゞなくても、實際に感ぜしめる。實感と云ひますか、さういふ方へ導いて行く心持が見える。作者の知つたことではないが、側がさういふ風に持つて行く。作者の思案の外に、讀者が「膝栗毛」をどう扱つたか、といふことが考へられる。「膝栗毛」の四編は文化二年に出たのですが、感和亭鬼武の「舊觀帖」もその年に出てゐる。「舊觀帖」の二編は、上編を鬼武が書き、下編を一九が書いて居ります。この本は文化六年に三編まで出て居りますが、三馬の「酩酊氣質」は文化三年に、「浮世風呂」の前編は文化六年に出てゐる。これらのものは何れもをかしみを覘つたのですが、その行き方は皆違ひます。それがどう違つてゐるかといふことに就ては、そこが滑稽物の調べの大切なところであらうと思ひます。

行き方の違ひ

俄うつしの一九

一九は新機軸を出しました。それは外でもない、俄うつしであります。をかしみを覗ふといふことになれば、三馬も鬼武も鯉丈も別に違つたところは無いわけである。それどころぢやない、それより前の萬象亭や森羅亭とも違ふところは無い。併し眼前で一九と、三馬と、鬼武と、鯉丈とを比べて見ますと、同じをかしみではありますけれども、皆違つて居ります。どこが違ふかと申しますと、先づ一九から云へば、それが俄うつしであつたからであります。

大坂俄

この俄は大坂俄と云はれて居るもので、俄の起原といふものに就ては、喜多村筠庭は「一代男」の中にある「末社らく遊び」といふ文段を引いて、あれらが先づ俄の起原であらうと云つて居ります。申すまでもなく「一代男」は天和二年の刊行物でありますが、西鶴は萬治、寛文どころの事を多く書いてゐるのですから、「一代男」刊行當時の話でなく、それよりも上つてゐると思ひます。けれども俄はもつと古くからあつたに違ひない。「一代男」の記載にしても、嶋原の幇間がその眞似をしたのでありまして、その時に創意したのではない。たゞ酒の座敷で、その眞似をして興を添へたまでの事である。眞似をしたのでありますから、それより前にあつたのは申すまでもない話であります。

大名俄、流し俄

この俄と申すものは、大別して申しますと、大名俄と流し俄との二つになるので、大名俄の方は座敷向のもの、流し俄の方は大道でやるものであります。いろ〳〵俄にも種類がありますが、先づ大別すると二つになる。それに就て二つの起原説があるのです。大名俄を起原とするものとしては、西澤一鳳の書いたものがそれでありまして、これは謠曲及狂言に根ざしてゐることになつてゐる。もう一つ流し俄がそのはじまりであるとするのは、濱松歌國の書いたものがそれでありまして、これは御祭禮行列――御祭の邌物から起つたといふことになつてゐる。この二

つの説が對立してゐるのであります。

歌國の書いたものによりますと、御祭行列の中にいろ〳〵邌物がある、その中に「笑」と名づけられたものが古くからあつた。無論御祭の行列の事ですから、屋内ではない、大道でやつたものである。その事に就て歌國はかういふことを書いてゐる。

俄といふもの三都に限らず、都て渡御のあとさき、神輿の通り筋、山鉾或は邌もの、荷ひもの、地車等の通る事、古代よりもありて、今も尾州津嶋祭、紀州和歌祭などにも、其古例おびたゞしく、美麗を盡せり、其間々に笑ひと名附て、老たる身に前髪かつらを著て、子供遊びの體をなして通り、又は女かつらなど著て、さがなき姑の體など、或は手習ひ子の姿にて、師に折檻にあひて逃行く風情、是等の類ひを、都鄙共に今も昔もかはらず俄といひ、今見る時は古雅なりとて賞翫なし……享保の頃住吉祭の參詣群をなせるうち、其歸るさ飲盡したる酒樽を、みやげの竹馬につゞり附て、灯籠の如くなし、銘々持添て、高く指げ、てうさや〳〵、千秋樂萬歳樂などといひて、通りたる醉すがたのおかしくも、又めづらしくも思ひしにや、同じ道なる人々、是に附て倶に踊りし事なん、其歸りしより存の外、人のおかしがりたるを自身も悦び、翌年ははや鬼おふくの面などを袂にして行て、歸るさを樂しみ〳〵たるが、いつとなく趣向をなすやうに成りて、今のすがたとなりぬ。

邌物の中の「笑」

これによると淵源は邌物の中の「笑」でありますが、それが享保以來盛になつて來た、といふことがわかります。さうして寶曆度からは御祭の行列の外にそれて、町の内若しくは遊女町などへ持出して、興を取るやうになつた、それが流し俄の筋道である、と云つて居ります。この祭禮行列の中の「笑」といふものは、何時頃からあつたといふことは云つてありませんが、大分古くからあつたことは明かなので、「一代男」の中で幇間がその眞似をしたといふことも認められるわけである。決してその時に起つたものぢやない。況して享保や寶曆にはじまつたものではない。たゞその頃になつて盛な流行を見たといふまでの事であります。

淨瑠璃に見えた「笑」の模様

そこで祭禮行列の中の「笑」といふものはどんなものであるか、これに就て委しく書いたものは古いところに見當らないのですが、私の知つてゐるので申しますと、並木宗輔の書いた「安倍宗任松浦簦」の大切に、下總の香取明神の祭禮の賑ひが取入れてある。これは古いものぢやありません。元文二年正月豐竹座の新淨瑠璃として興行されたものです。その最初の文句に「殊に當年は國守の御上覽に入れんため、浦里の野夫漁人ども、俄など申して頓作のねり物、囃子物にて神慮をすゞしめ宮人を致す由」といふことが書いてありますが、この中にある「頓作のねり物」といふのは、その場で直ぐ思ひついた事、座興とでも云ひますか、これが直ぐに俄といふ言葉の解釋になる。丁度歌國の云つたのに適當してゐると思ひます。頓作といふ言葉は卽席、當座の興といふやうな意味で、落語家の云ふたくらまぬ、お罪の無いところ、などといふのがそれに當る。この淨瑠璃を讀んで見ますと、「俄おや〳〵」といふのも無理はない、あまりたくらまずに、興を取るものであつたこともわかるし、どんな體裁のものであつたかもわかります。この淨瑠璃の中には、「笑」といふ邌物が四つ五つ書いてありますが、見本までに一つ二つ擧げて置きませう。

頓作のねり物

「笑」といふ邌物の例

跡もくわ〳〵石原を藥罐天窓に女形の鬘、引つる皺も喧しく、無殘なる哉雷殿は乳をあまして桑山のまれ、あせり跳いて腹痛はしや、尤しや。

これは假粧變裝したもので、地口の「はね」がついて居ります。

跡からとく〳〵と雨垂拍子に箱叩き、鳴物盡しの傳古の坊、鼻の怒るは御家老と見ゑて、顏は赤面吉野杮、まんまるこざる〳〵、十五夜の月の輪の如く、茄子は大根に心を合せ、一味の力は糠味噌桶の、又らく塩にゆられ〳〵、公家が物言はにゃ

名も立たぬ、悪い事工まば山猫にきつき、跡白浪とぞ通行く。

この方は山猫廻しに擬装してゐる俄で、これには「はね」が無い。こゝには二つだけ出して置きますが、他のも先づさういつたやうなものです。この淨瑠璃の中に「放免の役人どもには一献せよ」と國守の忠常に云はせてゐるところがある。「放免の役人」といふのは俄の世話方のことです。「放免のつけもの」は「徒然草」で御馴染のものですが、宗輔は俄の起原の遠いことを知つてゐたので、特に放免の役人などといつて、手遠いところに起原のあることを暗示したのではないかと思ふ。

放免の役人

俄の分け方

もと〳〵頓作の遺物は、御祭の行列から發達して來たものですから、ずつと後のものでありますが、天保三年版の「風流俄天狗」の中に、俄を分類しまして、

無言にての戯。

ものいふ事の始。

立止つてのおどけ。

の三項を一番先に置いてある。祭禮行列の中の頓作、それが最初は物を言はずにやつて居つたので、その次には物を云つて興を取るやうになる。それは享保年代の事であつたらうと思はれます。けれどもその時にはまだ立止つてやるのではなく、行進しながらやつて居つたらしい。「安倍宗任松浦簦」の中の「笑」を見ても、立止つては居りません。行進しながらやつて居る。その後になつて「立止つてのおどけ」が出て來たのだと思ふ。かういふのを稱して、古風な俄と云つて居ります。

古風の俄

寛保以後の流し俄

それでは古風でない俄はどういふのかと云ひますと、「南水漫遊」に寛保以後の流し俄を分けて、

口合俄。

あぶら俄。

なえこ俄。

出たらめ俄。

物眞似俄。

拍子違ひの俄。

といふ六つに類別して居ります。これは大概明和を經界として、又一つ變り出したやうに思はれる。寛保から明和までの間に於て、とにかく趣向を立てゝ俄をするやうになつた。さうして祭禮行列を離れて、廓や町内で俄をやる方が主になつたのですが、それと共に座敷で俄をすることが出來て來た。祭禮行列を離れて他の場所でやるといふことから、自然座敷でやるやうになつたので、俄の振合も大分變つて參りました。俄師といふものが出來て、俄を商賣人がやることになりましたのは、安永度の事でありまして、それまでの俄には玄人といふものは無い。思ひつきで誰でもやるわけのものだつたのです。

座敷俄と俄師の出現

大盡俄と大名俄の關係

丁度この變革の出來る前に、大盡俄と稱して、大勢末社を連れ廻して、得意に俄をやつて廻る人があつたのです。俄師が出來る頃には、もう絶えてゐたやうでありますが、この絶えた大盡俄と大名俄とは大分しつつこい關係があるやうに思はれる。大盡俄のはじまりは寛保、明和の中間に在りはせぬかと思ふのですが、俄の刊本としては古いと云はれてゐる「淸神祕錄」などは、大名俄の風を殘して居ります。それは概して狂言取りのものだつたのですが、例の太郎冠者あるか、是は大名でおぢやるの痕跡がまことによく現れてゐる。大名俄の盛だつたのは寶暦度であつ

たらしいのですが、それがだん〳〵衰へて參りますと、遂に俄師なんていふものが出て來る。揩間業であつたもの
が、それ専門の俄師に移り替つて行く時分には、本筋の大名俄はだん〳〵仕崩されて參りまして、身振聲色も多く
なり、又次の變化を生じて來るのであります。そこに又素人に出來ない、俄師でなければ出來ない處があつて、か
ういふことになり行くのですが、とにかく大名俄といふものは、三十年近くの間、俄の中で最も優勢なものであり
ましたから、それによつて俄が或規模を與へられたことは、顯著な事柄であつたやうです。その御蔭で藝らしくも
なり、恰好もついて來た。「笑」であつた時分から見ると、もの〳〵しくもなつて來たわけで、それが爲に狂言から
出たといふ說も起つて來るのであります。

「古今俄選」の箇條

併しながら、流しの俄の上に體裁を加へ、助長してくれたのは大名俄でありますから、輕視するわけに行かぬの
は勿論ですが、大名俄が無ければ、一般の俄は恰好を具へるに至らなかつた、といふのではない。たゞそれに就て
大に都合がよかつたといふまでである。御蔭で後も先も無いやうな「笑」なるものが、一般の俄として早く發達する
やうになつた處は大にあると思ひます。それですから能及狂言の影響を、全く無視することは出來ませんが、そこ
から出て來たといふ說は、どうも合點が行きかねるのです。

安永頃の俄

そこで安永四年に刊行されました「古今俄選」によりますと、俄は大體に於て寶曆前後に出來上つて居つたと見ら
れる。さうして「南水漫遊」に擧げてある寛保以後の形式に比較して、如何なる變革が加へられ、安永にはどういふ
俄が行はれてゐるかといふことも見せて居ります。

○口合、俄のはねなり、是はおよそかる口咄しのおとしの口合になりたる格多し。

○あぶら、是は其俄の始終のうちを、出放題にことばにて引張る事也、あぶらを乗といふ事なるべし。

○なゑこ、是は始終をおかしくせんため、舌をなやして、ことばをつかふ事をいふ。

○流し、是はかのひとり俄、又は大勢なるもあり、相手なく趣向したるをいふと也。

○身、是はかほも衣裳も、芝居の如く付たるをいふ。

○出たらめ、凡是ははだかにて出る俄に多し。

○はねをかまはず、かゝるあぶら多く、始終のみちゆき引張てあてるのなり、當流此體多し。

○丁寧にてはねを第一とするものあれども、此體當時すくなし。

○拍子ちがひ、是はシテ上るりにてせりふするを、アド能狂言、大黒舞などの拍子にて相手になるのをいふ、近年此類至て多し。

○物眞似、是もはねもなく、物まねばかりする也、畢竟ものまね自慢の人のする所也、俄師の好まざる所なり、風流會てなし。

この箇條を眺めまして、如何に取捨したかと考へれば、安永の俄がどういふ傾向（けいかう）を取つたかゞ知れようと思ひます。だん〳〵に座敷俄が專らになつて來まして、本來は大道でやつて來たものであるのに、流しといふことが主になつて居らぬ、といふ變化を見せて居ります。

「あぶら」

この中にある「あぶら」といふのは、江戸で申す「むだ」のことであります。あぶら俄が大變盛になつて參りますと、「はね」を丁寧にする遣方が鼻について來るのは當前の話で、一九が方言と書いてムダと讀ませてゐることは、大に考へなければならぬ事だと思ひます。一九は「方言修行金草鞋」といふものを拵へても居りますが、それは後の話で、先づこの言葉の違ふことを「あぶら」にしてやる。それに江戸者と田舎者との言語の差といふものが、拍子違ひにも當

るわけです。これは最初に一九の考へた事と、後に考へた事と違つてゐますが、いづれにも俄から離れては居りません。殊に「古今俄選」は文藝と俄との交渉が、どれだけ緊密(きんみつ)であつたかといふことを示してゐる。

文藝と俄との交渉

古代は物のかたちをとりて、はね、落しを付たり、元文の頃には輕口おとし噺より出たるも多く、大名俄は秀句狂言等の趣意に類す、おもふに近世の雜句、笠付、段々付などの付かた出て、たがひに俄も句になり、句又俄となる事多し。

又その出入の道噺がどんなであるかといふことに就て、次のやうな例も擧げて居ります。こゝでは文藝の方から出て來て、俄になつた一例を擧げたのですが、これを逆にすれば、俄から文藝になるといふことは、造作なく出來もすれば、考へられもするわけであります。

口合の俄には古今集俳諧歌の部に、素性法師、

山吹の花色ころもぬしやたれとへどこたへずくちなしにして。

と是を俄にいひなし、かたちを付て見るに「黄なる物着て揚つてゐると、（人品て）誰じや〳〵と問へど答へず、また問ふ、（後にかくの ごさくして）あいつくちなしじやさうな、如此にかたちを付る事、童の俄に間々此類あり、なるほどぬるく興薄けれども、口合もぢりの例、雲上にせばかくやらん、心を言葉にして、それにかたちを付る時は、何によらず自由也。

取集めた趣向

一九の作は色々な趣向の寄せ集め

この中に書いてある「かたちを付る」といふ事、卽ちさういふ働きをして行く形をつけるといふことは、いろ〳〵な趣向を集めて使つて行くことにもなるのですから、一九がいろ〳〵なものから趣向を取集めて書いたといふことも、大に考へて見なければならぬわけであります。一體「膝栗毛」のみならず、後の著作には寄せ集め物が多い。が、それは剽竊したとか、襲蹈(しふたふ)したとかいふことゝは、いさゝか氣持が違ふのです。

咄本の中に同じ咄が度々出て來る。他人の作つた話を自分の咄本の中へ入れるといふことは、剽竊のやうでもありますが、實演する場合、自分の得手を出して話せば、同じ咄でも別な味が出て來る。それが自分の藝なのです。他人の作物でも自分の腕で別な味にすることが出來るとしたら、咄本の中に同じ咄があつても、他人のものを取つたとばかりも云へない。それを自分の著作として平氣で出してゐると思ふから、をかしな事のやうにも思はれますが、實演する場合には味ひが違つて來るので、文藝對文藝の場合とは話が違つて來る。剽竊しても構はないといふわけではありませんが、そこは考へて遣る必要があらうと思ひます。

よい趣向は繰返し用ふ

そればかりぢやない、一九はいゝ趣向があると、あれにもこれにも一つものを繰返して用ゐて居ります。これは窮策であり、拙策であるに違ひありませんが、同じ物でも違つた味で、見せたり聞かせたり出來る、といふ心持からさういふ事をやるのです。俄の方で云ひますと、一つものを繰返してやるのは、「葉子谷俄」と云つて大變嫌ふのでありますが、全然同一の物を繰返してやることも無いわけではない。評判のいゝ俄でありますと、隨分その當時に繰返すのみならず、その後になつても幾度も繰返されて居ります。

俄うつしのナンセンス

一九の作物が俄うつしであることは、最初に云つた通りでありますが、この俄の心持でやつたといふことを知らないと、どうもうまく受取れないだらうと思ふ。俄の心持に就て厚薄があるといふことは、「古今俄選」も云つて居りますが、それには「後に思ひ出し見ても、とらまへ所もなきやうなるが厚き也」といふことが書いてある。笑つておしまひになつて、後も先も無い。一しきり皆の嬉しがつたナンセンスといふやつだ。

その一例を申しますと、「膝栗毛」の八編に「川童一代噺」の中の障子の日覆の話、大團の話を使つて居ります。これは河内屋太郎兵衛といふ畸行家の實話でありますが、この人には大に警世匡俗の意旨がある。キビ／＼と世の中にぶつかつて行くやうなところがあつて、大變滑稽なやうですけれども、その中に大に豪邁の氣が現れてゐる。併

しをかしみを覘ふ一九が、たゞ趣向としてそれを使ふ場合には、警世匡俗の意旨だとか、豪邁の氣だとかいふものは全く無くなつて居ります。同じ事をやつてゐるのに、たゞをかしいだけになつてゐるのは、やはり形をつける行き方なのです。一九には諷刺が無い、刺の無い薔薇だ、なんて云はれてゐますが、ナンセンスだから刺は無い筈です。さうしてそれは俄の本旨であらうと思ひます。

俄の「はね」の變り工合

「はね」の扱ひ方

「古今俄選」は更に「はね」を丁寧にしないのが當世風だと云つて居りますが、此時分のに「はね」の無い俄といふものはありさうもない。心取りに致せ、語路に致せ、いづれにもオチがあり、サゲがあるので、たゞその扱方がオチとか「はね」とかいふものに、餘計力が入るか、入らぬかといふだけのことであります。明和の半頃までも、俄のしまひ際になると、一番毎に「俄ぢや／＼」と云ふことをきつと云つて居りますが、それは「はね」の關係からなので、頓作であり、即席である、といふ意味からばかり、「俄ぢや／＼」といふ言葉を解するわけには行きません。その方の意味もあるにはありますが、これが「はね」即ちオチを强める働きをするのです。「思ひ出した、俄ぢや／＼」と云へば、見物が「何が俄ぢや」と問返す。そこで思ひつきを聞いて「はね」になる。見物の方から聞かせるやうに、先づ「俄ぢや／＼」と云つて、それからオチを云ふのは、つまり「はね」の效果を著しくする爲なのです。是は古い姿が殘つたのでせう。

　それから後になりますと、アドなりワキなりから「こりや何んぢや」と云はせて、シテが思ひつきを云へば、それが「はね」になる。こゝのところは俄と見物人とが立別れて來るので、流しでなしに座敷の方が主になつたから、さういふ工合になつて來た。勿論この方が效果もあるから、自然かういふ風になつたのです。初はたゞ「はね」と云つ

「くゝりのはね」

たやつを、後には「くゝりのはね」と云ひ、「落合」とも云ふやうになつてゐる。といふのは、一場の俄の結末といふ意味から云ふのです。「はね」は幕切れの要用になつて、興味の役目がなくなる、それが「はね」を丁寧にしないといふのでもありませう、畢竟「おぶらい」に興味を集めて、「はね」は御苦労様なものに成行きます。故に安永の趣向は俄に取つて希有な變革なのであります。

「はね」の效果を强くす

俄といふものは「はね」を大事にする、「はね」の效果を增大することによつて、發達して來たのでありまして、後には明和度の俄を古いといふやうになつた。その重立つた箇條として、後のはこの「はね」の工合がどうなるかと云ひますと、つまり「はね」を强くする爲に、「はね」を云ふ人の言葉を割る。例へば「おごり判官ぢや」と云ふべきところを、先づ「きつい」と云はせて置いて、「おごり判官ぢや」と云ふ。又「きさまがたはあんまり」と云ひ、「エヽ」と受けさせて、「くさいものありがたがる」といふ風にするのです。かういふ風に割つて二段にも三段にもする。さうして效果を大きくすることに骨折つて居ります。「はね」の效果から云ひますと、從前からある狂歌噺の往き方、オチを狂歌でする。これはきまりもよく、「はね」を大きくする效果があつたと思ひます。けれども噺にはよいが、俄には往けますまい。

「縫ひ俄」

それですから其邊の都合のいゝ「膝栗毛」は、狂歌で切り替へては小さい俄を、幾つも續けて行つたやうに見える。是が俄移しで書くについて、何よりの工夫であつたかも知れない、この時分の俄は大體小噺ほどの大きさで、ごく短いものですから、一晩のうちに十何回もやる、といふ振合のものでありました。そのうちに又「縫ひ俄」なんていふものが出來て參りまして、大體は眞面目な淨瑠璃で、「はね」だけををかしい滑稽なものにする。それだけ俄が伸びて來なければならなくなつたのです。

すべてが俄の心持

縱ひ俄が出來たのは化政度の事でありまして、一九が大坂に居りました當時にはまだありません。俄といふものはいろ〱に變化して來ましたけれども、俄の規模は大名俄の臭味の拔けぬもので、いろ〱形を振替へて使つて見ても、とかく狂言取りが忘れられない。「古今俄選」、「今様俄選」、「風流俄天狗」といふやうな、大坂俄のことを書いたものを見ますと、飛んでもないところに大名俄の臭味が殘つてゐる。これは俄をやる人達も、又見物の方にも、それが古雅であり向上であると思つてゐたらしいのです。

「膝栗毛」は俄の綴合せ

それですから一九の書きましたものには、狂言から取つた趣向が大變多い。これもさういふ風に考へて參りますと、一九は一つ宛の俄を綴り合せるのに、東海道といふものを一つの舞臺とし、彌次喜多といふ役者を以てして、元來ばら〱であつた趣向で「膝栗毛」を仕立てたのだといふことも、わかつて來ようと思ひます。若しかういふ目を以て本文を讀みましたならば、「膝栗毛」なるものは實によくわかるわけであります。

茶番と俄の差別

一口に俄茶番と申して居りますが——勿論後には兩方から落合つて參りまして、辨別がつかないやうになりましたが、まだ寛政度に於きましては、しつかりとその差別があつたのです。のみならず「膝栗毛」と「八笑人」とをつき合せて見ますと、俄と茶番とがどう違ふかといふこともわかつて來る。大坂の俄と江戸の茶番は、同じものを言葉を違へて云ふわけではないのであります。それが嘉永の頃からは、すつかりごちや〱になつてしまつて、わかりませんけれども、まだ化政度に於きましては、その間にちやんと差別がある。どういふ風にあつたかと云ふならば、それは「膝栗毛」と「八笑人」をつき合せて見ればよくわかると思ひます。

それから一九が如何にも多作であつたといふことも、俄を拵へるやうに、そこらにありとあらゆる趣向を勝手次

俄の心持で無造作に

第に取込んで、形をつけるといふ心持から考へましたならば、無造作、無貪著に筆が執れるわけでありますし、思つたよりも苦しまずに多作し得る、といふこともわかるのです。ずつと繋つたものゝやうですが、それは東海道といふ舞臺と、彌次喜多といふ役者とで取纒めて行くので、その役者の演ずる事は、前の幕と後の幕と、さう繋つてゐなくつても一向構はない。一番々々の俄の心持で居りますから、その間の矛盾などには貪著しない。これも俄うつしであることから考へますと、何にしてもナンセンスの親方なのですから、平氣でやれるわけなのです。

晩出の發端は文化十一年の刊行でありますが、同時に木曾街道の五編目のところが出て居ります。今まで彌次喜多兩人は江戸ッ子であつた筈なのが、發端が出て見ると、急に駿河の府中生れといふことになつて、戸籍がどうかなつてしまつた。そんな事をちつとも構はぬといふのは、俄うつしの人物であつて、一番々々の心持で居るから、はじめてやれる藝だと思ひます。そればかりではない、一度發端で駿河の府中生れにしてしまつたものを、文化十三年に出た續の八編、村井宿で駕籠舁と喧嘩をするところになりますと、大に喧嘩ッ早い江戸ッ子になつてゐる。その文章をこゝへ出して置きますが、かういふところは他にも二三箇所あつたやうであります。

駕籠舁も一盃機嫌の上なれば、きかぬ氣になり、息杖をふり上げるを彌次郎走りよつて息杖を引つたくり、くらはせると、一人の駕籠舁も武者振りつくを、喜多八突き飛して、のしかゝり、散々にくらはせる、喧嘩にかけては、江戸つ子の勢ひ流石の駕籠舁共、打れながら、叶はずして駕籠すておき、ほう〳〵と逃げて行。

たゞ江戸ッ子として書いてあるところは、前後に澤山ありますが、已に發端が出て、江戸ッ子でないことがわかつてゐるのに、まだ江戸ッ子を振廻してゐる。そんな事は少しも構はずに、その場〳〵で片づけて行く。これは度々申すやうに、俄の氣持だから貪著なくやつて行けるのです。「膝栗毛」として通じて見るべきものは、兩名の役者と、東海道なり木曾街道なりの舞臺だけで、趣向は一番々々に違つてゐる。若しその上に突き貫いたものを求めるなら

ば、それはをかしみといふ事より外に無いのであります。

變痴氣論の相手

連絡などは無貪著

それですから彌次喜多が道中で髮を結はないとか、旅費をどうしたとかいふやうな、一貫した考へ方をされると非常に困る。本人が江戸ッ子であるか、ないかといふことさへ貪著しない遣方なのですから、その他は萬事遣放しなのです。一晩に幾つ俄があつたにしろ、それが一々連絡してゐなくても、繼續してゐなくても、そんな事は少しも構はない。さういふ遣方のものであるのに、それを彼是云つて變痴氣論を持出す。さうすると又無貪著な俄の氣持で、その相手になる。今日の人ならば俄の性質論でもするところなんでせうが、一九はそんなことはやらない。先づ人氣次第で、相手にした方が得だと思へば、ずん〳〵相手になつて行く。

江戸の言葉と田舍の言葉とは、拍子違ひでもありますから、俄を進行させる上に、それが興味の多いものであれば、盛に使つて行く。所謂「あぶら」なんですから、それに就てむづかしいことを云はれては困るわけだ。けれども續の六編の再叙を見ると、信州松本の何某から忠告されたと云つて、かういふことを書いてゐる。

> 稿成て後、信州松本の何某より、予がかたにいひおこせたるは、去年五編の著述、殊に俚言の違ひたるよしを記して、土人の風俗癖あることまで、精く書おこせたるによりて、予猶去年初秋の頃より思ひたちて、信州善光寺に參詣し、所々に遊歴して、是彼を見聞せしに、松本の人のいひおこせたると符合するはなはだ多し、仍てこの次七篇には、目下予が聞おぼえたる儘を露すべしと今よりその理を述る事しかり。

變痴氣論の起る場合

實はこれも飛んだ半疊なのですが、一體變痴氣論といふものは、芝居の嫌な人からばかり出るのではない。又芝居の不景氣な時に起るものでもない。寧ろ芝居の景氣のいゝ時、芝居好の側から――本の場合ならば愛讀者の側から

起るのです。作者の方から申せば、何方にしても俄の氣持でやつてゐるのですが、若し眞に受けて見てくれる人があれば、その方が實感實況らしくなつて都合がいゝ。だから時にはさういふ風にもする。その邊は融通自在なものでありまして、現に一九は四編の序の中で、予が旅行の身の上にありし事、亦日下見聞たる事ども有の儘に、此編の趣向としことも云つて居ります。

尤も俄うつしといふ上から申せば、變痴氣論に引張られると、俄氣分が薄らぐやうなわけにもなる。それですから同じ「膝栗毛」でも、東海道より木曾の方が面白くない。最初の風味とは大分違つてゐるし、をかしみも薄くなつてゐます。これは實感實況といふことを考へて、愛讀者の變痴氣論の相手になつた爲でもあらうと思ひます。

總約したをかしみ

それは又それとして置いて、「風流俄天狗」を見ますと、

俄則彼の縮の如に有たし。

といふことが書いてあります。こゝで申す「彼」といふのは耳鳥齋の事です。この耳鳥齋といふのは、大坂京町堀の商家で、松屋平三郎と云つた人で、寛政度に死んで居りますが、この人は狂畫をよく畫いた。この人の狂畫といふものは、たゞをかしみだけを覘つたものではなく、それに或意趣がある。恰も河内屋太郎兵衛の畸行のやうなものでありました。

狂畫の覘ひ

併しその意を別にして、趣といふことから耳鳥齋の畫を見て行けば、慥にをかしみの多いものである。そこで「風流俄天狗」の著者が、耳鳥齋の畫を俄の姿として、それを規模にしようとしたのであります。それに次いでは、蕙齋の略畫式ですとか、文鳳の麁畫ですとかいふやうなものも、やはりさういふ覘ひ所であつたやうに思はれる。たゞ此

等の者になりますと、耳鳥齋のやうな旨は無くなつて、趣だけのものになつて居りますが、その趣も多少耳鳥齋とは違つて來る。殊に享和二年に出た茶良の「頓畫早稽古」などになりますと、狂畫と云はずに頓畫と云つてゐる。頓畫は意も到らず、筆も及ばず、覘ひ所がそこに在るといふだけで、つまらぬものになつて居りますが、この筋目が今日の漫畫の先蹤をなすものと思はれるのであります。

俄のをかしみと一九の持味

俄うつしといふことも、俄の精神は別としまして、姿とか形とかいふことになつて參りますと、それは體にあるのです。卽ち大盡連中のやる俄、太鼓持のやる俄、俄師と稱する連中のやる俄、此等はその心持に於ては、どうしたつて同じではないのですが、その姿から申せば、とにかくをかしみといふことでなければなりません。そのをかしみにも、めい／＼の得手勝手もあれば、その時代の好みもあつて、一樣に云へないことは明かですが、俄の貌、姿、音聲といふものが無ければならず、それを總約して見れば、をかしみといふことになる。をかしみを離れて俄はありません。そこのところを一九はつかまへたのであります。

それですから一九の書いたものには、やはり一九の貌、姿、音聲といふものがあるわけです。それが讀者層を擴げて行つたことは、著しい事實でありまして、又それが爲に、「膝栗毛」は誰が讀んでも面白いといふことにもなる。享和以來は遊山旅といふものがだん／＼多くなつて、實際に旅行することを樂しむ人間が多くなりましたから、實感實況も旅に就て多くなつて居ります。さういふ時世でありますから、自分で旅をしないでも、前のやうに旅を悲しいもの、苦しいものとは思はない。目新しいものを見聞して、それに興ずることが旅行の目的であるやうに、一般が考へるやうになつた。諸國名所圖會や廣重の風景畫などといふものが大變はやつたのも、亦さういふ意味合からであります。

俄小説の成功

そこで「風流俄天狗」の序を見ますと、こんなことが書いてある。

何とかいへる俳優の言に、都て狂言の趣向は婦女子の心に叶はざれば評判よろしからずといゝしは尤也、謔や俄など一時の興を催す事にして、貴賤男女に通俗にして、おかしみ有ざれば其かひなし。

この誰でも面白いといふもの、そこが一九の手に入れた事柄なのです。それに引比べて見ますと、「當世花街談義」の中に、談義物を褒めた、かういふ文句があります。

下手談義、雑長持はいかにもよく下情に通じ、若夫商家の子弟をはじめ示追こりやまたの耳にも入りやすく親切なる教訓。

談義物の方はどうしても幅が狹うございますが、それは談義物の性質から、讀者の幅が狹いのです。同様のことは黄表紙、洒落本、合巻などに就ても云へるわけでありますが、俳句よりは地口の方が幅が廣い。地口よりは又俄や茶番の方が幅が廣いといふことが云へませう。ですから二世一九が「奥羽一覽道中膝栗毛」の中で、

世に戯作の册子いと多しといへども、雅に過ぎ、俗に満ちて、親棚切落共にヤンヤといふは少なし、それが中に旦那もめで、お三も興ずるは膝栗毛なり。

と書いてゐるのは、全く間違の無いところでありまして、「膝栗毛」なんていふものは文字で書いた俄である。勿論俄ほどには行きませんが、先づ文字の讀める者なら、誰にも彼にも面白いといふことになるのであります。

「膝栗毛」は俄の丸呑

この俄の心持、俄丸呑の心持で行くことが當りましたので、「物之本作者部類」の著者などは、「膝栗毛」の成績を見て、

げに二十餘年相似たる趣向の册子の斯くまでに流行せしは前代未聞の事なり。

と云つて驚歎して居ります。もと〳〵これは俄の心持でやつたから行けた話なので、これ以前には俄をつかまへた小說、俄小說とでもいふべきものは無かつたのです。

新手の談義物

談義物の新手を考へる

ところが一九の書いたものに就て、更に一つの說がある。その說に對して少し云つて置かなければならぬと思ひます。

一九は文化元年に「化物太平記」を書きまして、手鎖五十日、過料十五貫の處分を受けて居ります。さうしてその翌年の「滑稽しつこなし」の中で、

私も今年から本とうの人間らしくなるつもり、そこでこれから洒落もむだもやめて、眞面目な本ばかり拵へませう。

と書いて居りますが、これは新手の談義物と出かけようと思つたのです。どういふ風に新手を出さうとしたかと云ひますと、俄と落語の間を行かうとしたので、動きの無い落語、臺詞ばかりの俄、それを「あぶら」で運んで置いて、教訓で「はねる」といふ行き方をしようと思つた。そこで文化六年には「江の嶋土産」、八年には「六阿彌陀詣」、九年には「滑稽諭言大師めぐり」、十三年には「堀の內詣」、文政四年には「雜司ヶ谷紀行」といふやうなものを書いてゐる。さうして文政三年の「善惡附込當座帳」、五年の「欲の川乘合船」といふやうなものになりますと、又振合を變へて居ります。

「守貞漫稿」などは新しいものでありますが、俄に就て「畢りに落といふことあり、特に一言の滑稽を以てす」といふことを云つて居ります。勿論そればかりが俄ではありませんが、一般に口合俄が喜ばれて居つて、俄と云へばそれだけのやうに思はれても居りましたから、さういふ時に談義物好みの文句などが飛出しては、とてもいゝ成績は

得られない。「はね」が役に立たないから、そこまで運ぶ「あぶら」の御蔭で讀者を繋いで行くのですが、これは已むを得ない次第だつたのでせう。一九といふ人は、享和二年に「落咄腑くり金」を出して以來、十三種の噺本を出してゐる位で、落咄といふものに就ても、相當心がけて居らぬことはない。けれども當時の江戸の落語は、又少し風味の違つたものでありますし、假うくしも江戸の當時の茶番とは違ふ。その違ふところが三馬鯉丈の頭を出すところでありまして、一九の手腕は作意といふ空中樓閣の建造ではなく、假といふものをつかまへて、「膝栗毛」を拵へた處に在るのであります。

然るにこの新手の談義物で行かうとしたに就て、「大師めぐり」、「雜司ケ谷紀行」といふ類のものは、各種の類型的人物をうつしてゐるものである、そこが三馬と比べて、一九の方は氣質物の性質が少い、けれども一九にも氣質物の性質はある、といふ說です。この說に就て辨じたい。

豆藏小說との異同

一體一九が談義物に新手を出したことは、「六阿彌陀詣」の序に、

聊敎諭のとば滑稽にあてゝ淺智童蒙をさとし安からしめん。

とあり、大意の中にも、

其人の思ふ所いふ所を形容にあらはし、末にくはしくするは、予が不才をもつて人を佯くにあらず、滑稽に比して只一興に備ふる而已。

と書いて居りますが、人物を型づけるといふことは、氣質物よりは物眞似の方が更に得意なことであります。一九にも氣質物を覗つた「通俗巫山夢」といふやうなものもありますけれども、新手で行かうとしたものは、これとも又

違ふのです。

「舊觀帖」は豆藏を寫す

文化二年に感和亭鬼武が「舊觀帖」を出しました。鬼武はこの序文の中で、

此に有喜世物眞似てふもの、能く人の心を慰め、樂しめ、腹筋を寄らせて、而世に行るゝ也久し。今其事によせて戯れ書せよと、榮邑堂主人の應需。

といふことを書いて居りますが、この「舊觀帖」といふものは、「膝栗毛」の初編が出た享和二年から數へて三年の後、「浮世風呂」の出た文化六年から申せば四年前に出たものである。そこで鬼武は何をつかまへて書いたかと云ひますと、「舊觀帖」は物眞似を覗つて書いたのです。即ち大道藝の豆藏を捉へたので、一九が俄小說なら、鬼武は豆藏小說であります。

「膝栗毛」との比較

「舊觀帖」の二編二冊のうち、上の方は鬼武が書き、下の方は一九が引受けて居ります。その下卷の後序の中で、一九はかういふ風に云つてゐる。

或人の曰、道中膝栗毛の書、續て此舊觀帖たるや、うきよもの眞似といへるものを、口うつしに書たるにて、彼書の書にはあらずといへり、されど膝栗毛は異なり。

さうして更に「膝栗毛」と「舊觀帖」の異同を辨じて、同じをかしみであつても、全く作意による滑稽と、豆藏の藝をうつしたまゝのものとは違ふ、といふことを仄めかして居ります。けれどもさういふ一九自身も、實は俄の描寫に過ぎないのです。同じ描寫であつても、俄と物眞似とは同じでないやうに、書いて行くことも自然違つて來る。それは云はずに、自分のは肚から絞り出したものゝやうなことを云つてゐる。一九は更に文句を續けて、

舊觀帖は既に其事を以て表題に顯し編たるなれば勿論の事也…… 凡てものゝおかしみを專とかくことは難がゆへに、是を編者稱し、舊觀帖は浮世もの眞似と、其意倖くして、筆に異なるおかしみあり、是鬼武子の奇才といふべし。

と云つて居ります。表題に打出してゐるほどであるから、鬼武が豆藏の描寫であることは勿論でありますが、その形容によつて別段のをかしみを見せたのは手柄だとか、豆藏を見出して文藝上の效果を收めたのは賞すべきであるとか云つて、暗に已は肚から絞り出したやうな事を仄めかし、「膝栗毛」の俄うつしであることを云はないのは、一九の狡猾な處であります。

鬼武は豆藏うつしでありましても、たゞそれを描寫して行くばかりではないので、「舊觀帖」を仕立てるに就ては、相當の作意もあれば趣向もある。一九の俄うつしにしても同樣で、描寫して行くばかりではない、やはり相當の工夫がある。又さうしなければ「膝栗毛」は成立たぬわけであります。御互に粉本があつてのことではありますが、それに就て工夫を要することも別に變りは無いのです。

一九の豆藏寫しは不振

粉本とか、モデルとかいふことになりますと、談義物には談義僧があり、風來山人は志道軒を標本にしてゐると云つた工合に、それ〲何かゞあります。が、人間には得手不得手といふものがあつて、一九の豆藏うつしは、とても俄うつしのやうには行かない。又それを思ひつくことも遲かつたのです。ですから「舊觀帖」二編の上下を比べて見ると、どうも一九の方が出來が惡い。そこは自分でも氣がついてゐたと見えまして、文化五年に出た「膝栗毛」の七編、祇園に參詣しましたところで、

其趣感和亭の著はす舊觀帖に事古りたれば、茲に略す。

といふやうな事を云つて、物眞似のことを避けて居ります。「舊觀帖」に書いたのは江戸の豆藏のことですから、遠慮は入らぬ筈なのですが、一九としては何だか湊はれたやうな心持がしてゐたのでせう。却つて少し間を置いた「大師めぐり」の中で、物眞似を利用して居りますが、これは甚だ拙い。往き方が下手なばかりでなく、寫し方もうまくないのです。併し一九はいさゝか遲れて物眞似を寫してゐるので、さう思つてこの「大師めぐり」等のものを眺め

ますと、その間の消息がよくわかつて來るやうに思はれる。氣質物から持つて來たといふよりも、教訓から云へば談義物の筋目であり、それ〴〵の人物の型を極めて現はすことは、もつと手近な物眞似からであつたといふことが、よくわかる筈であります。例へば落語に出て來る田舍者や權助、あの型は豆藏から奪つたもので、田舍者が變な理窟を捏廻す樣子は「舊觀帖」に書いてあります。色彩に少々の違ひはあつても、大體は極まつて動きません。

豆藏うつしの「舊觀帖」

「舊觀帖」の初編は一冊で、文化二年に出て居ります。丁度その時に「膝栗毛」は四編二冊を出して、荒井と桑名のところを書いてゐる。この時はまだ「膝栗毛」の類作は出來て居りません。「膝栗毛」の類作が出來ましたのは、文化四年に六編が二冊出た時分でありまして、「東國滑稽羽栗毛」ですとか、「播州廻り膝栗毛」、「身延道中滑稽華鹿毛」なんていふものが一時に出て居ります。が、「舊觀帖」の出た時は、「膝栗毛」は景氣がよかつたに違ひありませんが、類作が出る暇はなかつたのです。

兩書とも案內記の心持

ところで鬼武は「舊觀帖」を出して、それに新しい手段を用ゐました。つまりをかしみを覘つた本といふものは、一九によつて一變し、鬼武によつて二變したと云つてもよからうと思ひます。その翌年には「舊觀帖」の二編二冊、上を鬼武が書き、下を一九が書いてゐる。この二編にある鬼武の序に、

> 先に出せる目次には少しく違ふといへども、東都の街、神社佛閣、名だゝる所は殘りなく看取の趣向を追加せよとあるに、それも承知、是も承知と呑込、

といふやうなことがあつて、江戸見物の案內記といふやうな心持が見えてゐる。これは「膝栗毛」の方にも、さういふ傾向がだん〴〵出て來て居ります。鬼武の方は豆藏の藝を當込むのも、當座のをかしみでありますから、それが

連續して行くのには、よほどの工夫を要する。だから江戸見物案内記といふことで、取纏めて行く考だつたらしいのです。「膝栗毛」が後になるほど案内記といふ氣持が多くなつたのも、例の俄の一切々々を取纏めて行く。それには東海道とか、木曾街道とかいふ大きなものを押へては居りますが、もと〳〵一切々々のものですから、更に密接せしめる爲に、鎌倉の方をよくして行かなければならない。そこで案内記風な心持が加はつて來るので、これは兩方とも同じやうな意味であらうと思ひます。

鬼武が豆藏の藝當を覗つたといふ事、二編目は半分自分が書き、半分は一九が書いてゐるといふ事は、前にも申上げた通りでありまして、一九の後序にも「初編行はれて書肆次編二卷を索む、鬼武子、予に此下の卷を綴めよと乞ふ」とありますが、この事に就ては大に考へて見なければならぬと思ひます。「舊觀帖」の初編は大變評判がよかつたから、もつと景氣を引立てるつもりで、同じをかしみを覗つて當てた一九を加へた方が、尚の事景氣が立つだらうと思つて、本屋が一九を加へるやうにしたのかも知れません。併し一九と鬼武とでは、をかしみは同じだけれども、一方は俄うつしだし、一方は豆藏の藝で、その工合が違つてゐますから、一九に「舊觀帖」を書かしてもあまり榮えない。それは三編を又一冊にして、鬼武だけで書いてゐるのを見てもわかります。

一九のも創意ではない

「舊觀帖」が豆藏の藝を覗つたといふことは、何よりも書名の上に「有喜世物眞似」と斷つてあるので明かですが、一九の後序にもその事が書いてある。一九の說に從へば、鬼武のは豆藏うつしで、自分の書いたものは自分の肚から出たやうに云つてゐますが、彼が俄をうつして行つたことは、疑もないところでありまして、全く自分だけの作意のものとは認められない。一九がいくら己の作は創意に富んでゐる、本當の創作であるやうなことを匂はしても、それは彼が云ふだけの話で、その言葉通り許すわけには行きません。併しこの事は從來あまり氣がつかれてゐないやうに思はれるのです。

四編は鯉丈の繼足し

一九もさうは云ふもの〻、鬼武が京藏をつかまへて文藝上に效果を收めた働きは、賞讃すべきものだと云つて居ります。公平に之を見れば、一九は俄の形容に作意を加へて、一個の滑稽をなし、鬼武は京藏の藝を捉へ、それに作意を加へて一個の滑稽を仕上げたのである。已に大喝采を博した一九の滑稽といふものに一大轉換をさせて、自分の一生面を開いたといふことは、一九ほど大きな景氣は作り得なかつたのですが、目先の利いた働きとして、一九ならずとも誰でも賞讃しなければならぬことゝ思ひます。

目先の利いた働き

そこで京藏のをかしみを覘つて出した「舊觀帖」は、世間の受もよかつたのでせう、三編まで出して居ります。もつと早く出しさうなものを、稍ゝ遲れて文化六年に出してゐる。四編は鯉丈が書き繼いだのですが、これは文政五年になつて居りますから、大變間がある。今度は鯉丈の繼足した分は採りませんで、三編までを採用して置きました。この三編は二編より四年後れて出て居ります。初編の評判はよかつたが、一九と共同でやつた分は、あまり評判がよくなかつたのかも知れず、又他に事情があつたのかも知れません。何れにしても何の證據も無いから仕方が無い。たゞ十四年たつて鯉丈が繼足してゐるところを見ると、世間が久しく忘れなかつた爲に、繼足しを書くやうなことになつたのかと思ひます。三編目は鬼武一人で出したので、評判がよかつたのかも知れませんが、そこのところも無論わかりません。文政元年二月二十一日には、鬼武はもう死んで居りますから、その間にどんな病氣をしてゐたかも知れず、實際書けなかつたのかも知れないのです。何しろ世間の人が忘れなかつたことは、十四年後に鯉丈の繼足しが出てゐることでも、慥に云へると思ひます。

鯉丈の書いた第四編

鯉丈の書いた四編といふものはどんな評判であつたか。鬼武の書いた三編の序を見ましても、

大変は御退屈と作者も足を洗ひ、三編目は烟管を啣へ、引込思按の折から……二編に限り筆を止むると覺ふれど、三編目は淺草雨園看取の目次も出し、其儘に止なんも本意なし、善悪閑人の欠も不出やうに、半點十三編目の噺を書寫よとあ

といふ風に、倦きられない用心をしてをります。それにしても景氣がよければ、あとを出して行きさうなものと思ふが、或は前に云つたやうに、健康の關係とか、本屋の都合とかいふやうなものがあつたのでせう。

それとは違つて鯉丈の方は、四編の奥付に、

舊觀帖發端　奥州道中滑稽の記　十返舍一九作　全二冊
同　後編　同　作嗣出　全二冊

とありまして、發端を出すことを豫言して居ります。全二冊と書いてありますけれども、本が無いところを見ると、果して出たのか出ないのかわからない。況して後編なんていふものは、猶更疑はしいものだと思ひます。二世一九が嘉永元年から三年までに、「奥羽道中膝栗毛」五編十五冊といふものを出してゐるところを見ますと――若し前の發端や何かゞ出て居つたとすれば、さういふものはちよつと出さうにも思はれない。これは廣告だけで、實際は出なかつたのではないか、といふ疑を深くするのであります。

又それに續けて、

浮世物眞似　舊觀帖　初篇二篇三篇　瀧亭鯉丈作　溪齋英泉狂畫　全四冊
同　四編　同作同畫　全二冊
同　五編　追々出板　全二冊

といふことがあり、

此書は奥州山家の福介、婆々をつれて江戸見物、馬喰町に滯留中、相宿の甲州處後の瞿もろとも、案内者をたのみ所々見物

の道すがらの滑稽、言葉の間違ひ等、さま〴〵のおかしみを腹のかわをよりて感ぜぬはなかりしとぞ。

といふことまで書き添へてありますが、これも出てゐないやうに思はれる。四編を出す時分には、三馬の「浮世風呂」や「浮世床」もありますし、鯉丈の「八笑人」も三編まで出て居りますから、もう豆藏ではなかつたかも知れない。こゝまで來れば、もつと面白い新手に移りさうなわけでもあるのです。

聲色から出た物眞似

けれども豆藏の物眞似を中本の中へ持つて參りましたことは、あとにもまだあることで、慥に鬼武の働きでありあます。それでは鬼武より前に、誰か豆藏の藝を覗つた者が無いか、と云ひますと、前にはありませんが、直ぐ引續いたところでは、東民亭易米といふ者が文化九年に書きました「身振三十二相」といふものがあります。その序文に、

そも聲色は坐役者の口ぐせをまねぶ、其外浮世聲色は人眞似子眞似猫のまね、

とありまして、つまり聲色は三座の役者の口跡を眞似たもの、浮世聲色の方は一般の人の眞似をするもの、といふ風に說明してある。この本は一々繪入になつて居りますが、單なる身振の外に、後に百面相と云つた顏付の眞似までして居つたことゝ思はれます。

この「身振三十二相」の序によつて、聲色と浮世物眞似との相異はよくわかるのですが、役者の口跡を眞似る聲色といふものは、隨分古くからありますし、身振の方は新しいもので、寶曆以後盛であつたやうに思はれる。聲色の方は木戶藝者といふものから始まつたと云はれて居ります。正德年間に例の江嶋事件がありまして以來、芝居は一幕切になつて、一々見物を場外に追出し、次の幕に又入場させるやうになつた。從つて人足が散り易いので、木戶に立つていろ〳〵な話をして足止をする。それだけではまだ客足が落著かないといふので、賣藥の口上を云つてる

役者を眞似る聲色

た平治といふ者を雇つて、繋がせるやうにした。この平治は芳澤あやめの聲色が上手だつたので、木戸のところでそれをやらせますと、大に效能がありました。後には木戸で二人懸合に役割をよんで聲色を使ふことが、各座の定例のやうになつたほどであります。それが流行るにつけて、一般の聲色といふものが盛に行はれるやうになつた。役者の聲色を藝として——それには商賣人もあり素人もありますが、それ〲に競つて聲色を使ふやうになつたのだ、と云はれて居ります。

浮世物眞似

この聲色といふものは役者に限られて居りますし、身振と申しても舞臺の上の身振だけだつたのですが、浮世物眞似の方になりますと、一般の人の身振物眞似をするやうになつたのです。役者の方とすれば、團十郎にせよ、あやめにせよ、舞臺での身振聲色をするわけなのですが、浮世物眞似の方はさうではない、お上さんもあれば隱居もあり、小僧もあれば番頭もあるといふ風で、世間一般の人の眞似ではないのです。併し浮世物眞似といふものも、系統から申せば、役者の聲色の幅が廣くなつたものに相違無い。この浮世物眞似をする者を、早いところでは浮世師と云つて居りまして、浮世師を押へて洒落本の「遊子方言」を書いたといふことが、「莘野茗談」に書いてあります。

丹波屋利兵衛といふもの、浮世師といふもの〻ことをつくりて、遊子方言と題して、須原屋市兵衛方へ遣しけるを板行して大に行れたり。

浮世師

「遊子方言」は明和七年、「辰巳の園」と同時に出版されたもので、洒落本では早いところのものですが、「浮世師」といふ言葉は「浮世聲色師」の省略されたものです。その後天明六年に山東京傳が「客衆肝照子」を出しまして、それには「浮世師富藏」といふ名前で序文を書いて居ります。錄山人信普の寛政二年に出した「昔語勸善富藏雀」も、此富藏に當てたのです、この時分の浮世師の上手な者だつたのでせう。又「肝照子」には「尻焼猿人」の序文がありまして、その中に浮世師の有名な者の名前が幾つも擧げてあります。

猩々能言、不レ離二禽獸一、鶴市雖レ不レ異二中車一、素非人矣、頃山東京傳、寫二郭中遊人聲音行移一、轉爲二一卷一、殆迫二於眞一矣、蓋三樂一瓢及白兎富士藏如在等、不レ能レ出二其右一矣、

つまり京傳が其等の者の技術を奪つてこの本を拵へた、といふやうなことが書いてあるのです。

物眞似うつしの先蹤

「遊子方言」と「客衆肝照子」

「遊子方言」や「客衆肝照子」は何れも洒落本でありまして、出て來る者も廓の中の人物に限られて居ります。この序に擧げられた有名な浮世師のことは、三馬が文化三年に出した「酩酊氣質」の凡例にも、

予が幼少の頃聞及びし一瓢白兎三樂に等しき身振の達者、物眞似の名人也、

と云つて、その名が繰返してあります。身振の達者、物眞似の名人といふ者は、明和から天明へかけて大勢ゐたらしいので、浮世師もなかなか盛だつたと見えます。但し豆藏の藝といふものは、浮世物眞似ばかりではありません、他の藝もやる。手妻をするやつもあれば、曲藝をするやつもあるのですが、この時分に於ては、浮世物眞似は豆藏の藝の中でも、一番に勢力のある、評判のいゝものだつたのであります。

又西澤一鳳の「皇都午睡」にも、

今や豆藏講釋とて、戯場の狂言、身振聲色に類して、噺家に異らず、

とあり、

浮世物まね又輕口物眞似とて、性もなき馬鹿口をたゝき、頭をはづさせ、戯場俳優の物眞似をするを、東都にて豆藏聲色と云、浪華にて忠七の身ぶり物まねと云、

とも書いてあります。「客衆肝照子」の序には、

既有二役者氷面鏡之作一今又書レ之、而作二客衆肝照鏡一爾、

とありまして、京傳よりもう一つ前に「役者身振氷面鏡」といふものがあり、それによつて「客衆肝照子」を書いたといふのです。「役者身振氷面鏡」といふものは、明和八年の三芝居の狂言から選み出されたもので、著者は百亦齋とある三冊物ですが、これは浮世物眞似ではない、役者の身振です。それですからこれは措いて、浮世物眞似に早く手を著けたものは、やはり「遊子方言」と「客衆肝照子」で、その次は「舊觀帖」といふ順序になるわけであります。

豆藏の藝當

ここで豆藏の藝當といふものは、どんな事をやるのかと云ひますと、その中で當時一番名高かつたのは鶴市といふのです。この鶴市のことは「大抵御覽」「中洲雀」などといふ洒落本の中に、その模樣が書いてありますし、その他隨筆雜著の間にも見えて居りますが、山東京山の「蜘蛛の糸卷」に中洲の假宅の事を書いたところ、彼處に出てるのが一番簡明ですから、それをこゝへ擧げて置きませう。

夜見世の見世物も多かりし中に鶴市といふ非人、歌舞伎どもの身ぶりこわいろをなすに妙を得て、しかも美男にてありし故、婦女子にすかれ、流行もありしとぞ、扨其構をなしたるさまは、今の見世物芝居にかはらざれど、木戸錢一人前百銅なり、是にて鶴市が藝の妙を知るべし……始めは常なみの非人、手づま一つ二つなし、扨鶴市出でゝ、一藝をなし、是をひと幕として打ち出だす、

これは小屋掛ですから、一幕毎に幕を引いてゐる。さうでないのは見物が立掛りですから、藝をする者が替らないでも、見物は替つて行く。鶴市は小屋を構へたから、一々幕を引いて打出したのです。

後まである豆藏の影響

江戸の文藝の中に物眞似を取入れたのは、鬼武に始まるわけではありません。たゞ「遊子方言」や「客衆肝照子」が

をかしみだけを覗ふものでなかつたのは、洒落本だつた爲でありまして、「舊觀帖」は中本で、專らをかしみを覗つたものですから、その中へ物眞似を持込んだのが働きなのです。それが「膝栗毛」の大繁昌の中に、一際變つた模樣を見せることになつたのであります。鬼武は「舊觀帖」の自序の中で、浮世物眞似のことを書いて「世に行るゝ也久し」と云ひ、それだけ世の中に面白がられてゐるから、その事を一つ小說に仕立てゝ貰ひたい、と云つて頼まれたと書いて居りますが、「世に行るゝ也久し」といふ筈で、寶曆以降已に五十何年かたつて居ります。けれども化政度になりますと、もう浮世師といふものは無い。豆藏の藝は無いことはないけれども、浮世師などと云つて騷がれる者はゐなくなつてゐる。その藝があるのに、どうして浮世師が無くなつたかと云へば、それは寄席へ取られたからだと思ひます。

豆藏の藝は寄席に移る

それもその筈でありまして、「舊觀帖」三篇の後序にも、

　舊觀帖と云へる珍物あり、首は浮世物眞似に容造、体はおとし話にひとし、故人の糟粕を餌として、能口眞似す、

と書いてある。さういふ行き方のものですから、遂に寄席へ持つて行かれるやうになるのも、已むを得ない話であります。たゞ寄席へ取られて、寄席の人氣になつてしまふと、豆藏の藝をうつしたのがあまり冴えぬことになりますから、「舊觀帖」は一時非常に新しく見えたけれども、後には目立たぬものになるわけなのです。併し浮世物眞似が全く無いわけではない、その藝は依然として豆藏もやつてゐれば、寄席へ持込んでやつても居るので、人の興味を牽いては居る。從つてその藝を取入れることは、中本の傾向としては何時までも離れられぬことになるのです。

物眞似の一時の勢力

文化十二年に奧山四娟が「浮世名所圖會」を出しました時、その序文の中に、

　此四娟先生の作は其身振を學ぶにあらず、

といふことが斷つてある。これは「舊觀帖」のやうに、全部豆藏の藝を覗つたものは無いにしても、ところ〲鬼武

の眞似と同じところを覗つてゐるものが、他にいくらもあつたのでせう。だから特にかういふ斷り書をしたのです。この斷り書があるといふことも、物眞似が一時の勢力を占めたことを、證據立てるものゝやうに思はれます。

文化三年に出た一筆庵可候の「魂膽夢輔譚」——この本の序にも、

童蒙の爲に筆を採て、豆藏の所爲をなすものなれば……、

といふことが書いてあります。これも全部豆藏の藝を覗つたものではありませんが、ところ〴〵といふよりも寧ろ大部分、豆藏の穴を行つたものである。後でさへかういふ風でありますから、「浮世名所圖會」のやうに「其身振を學ぶにあらず」といふことを斷る本も出て來るわけなのです。

誇張された都鄙の對照

三馬の行き方

三馬は「舊觀帖」に一年後れて、「無而七癖酩酊氣質」を文化三年に出して居ります。その凡例の中から二箇條だけこゝへ出して置きますが、この「酩酊氣質」を讀む心持、讀方といふものに就ての誂へが書いてある。

自問自答の言語、所謂獨角戲の如し、されどおのづから傍に人ありて應對するが如く聞ゆ、看官假字のつかひぶりを克く心得て讀給ふ時は、よみくせありて、醉人の情殊に深かるべし、

此書は獨覽て嬉笑を生じ、頤を解く作文なれども、傍の人に讀て聞するには、贋物眞似の心なき人は、醉客の情薄く、興少き事もあるべし、しばらく宥たまへ、

これを見ますと、やはり豆藏の藝を覗つたものであることがわかりますが、その態度が違つて居ります。鬼武のは見物人の側から見た心持と云つたらいゝか、見物に見せる心持と云つたらいゝか、とにかくさういふ風になつてゐる。が、三馬の方は直に演者の心持になつてゐるのです。それからもう一つ添書をしまして、この「酩酊氣質」と

いふ本は、櫻川甚孝といふ幇間に與へたものだ、といふことが書いてあります。さうしてこれが又物眞似の名人であつたことを斷つてゐる。

此著作は素一夕の漫戲にて、櫻川甚孝に與へしを、書肆の需により小册とせり、希くは甚孝が身振にて見給へ、作意あらはれて含笑、又讀むに勝る、彼甚孝は慈悲成門人、居芝西應寺町予が幼少の頃聞及びし一瓢白兎三欒に等しき身振の達者、物眞似の名人也、余かれを愛する事久し、故に此書を授くといふ。

幇間の身振といふものは、天明年間に吉原の磯八といふ者が居りまして、この磯八以來の事である、それ以前には幇間の藝として、身振聲色をやる者は無かつた、といふことになつて居ります。けれどもこの磯八の藝は、浮世物眞似ではない、役者の身振聲色です。ところがその後になると、幇間の藝としても浮世物眞似をやるやうになりましたから、「酩酊氣質」のやうなものを書いて、甚孝に與へるやうなことになつたのです。猶三馬は凡例ばかりでなく、本文の中に於ても、その讀方と心持とに就て、一々にこまかい註文をして居ります。

大體さう云つたやうなわけでありまして、「舊觀帖」といふものは豆藏小說である、僞小說の後に出た物眞似小說である。それははじめて文藝に取入れられたのではないけれども、滑稽物の世界を轉換する働きとして、鬼武のやつたことは面白いと思ひます。それからもう一つ考へて見なければならぬのは、「舊觀帖」は滑稽物として、慥に新しい面目を現したものでありますが、「膝栗毛」は江戸の人が江戸の眼で、京坂その他を眺めたのであり、「舊觀帖」は奥州人、越後人、甲州人といふやうな者をつかまへて來て、江戸を見物させる。それも奥州人だの、越後人だの、甲州人だのゝ眼を以て、江戸の樣子を眺めたのではない。作者は固よりさういふ人達を了解して書いては居りません。その地方の眼孔を以て江戸を見る、といふほどの識力は無論無い。江戸の人の眼に映じた奥州人、越後人、甲州人といふ程度の淺薄なものである。さういふ心持から眺めて行くところは、やはり豆藏程度のものでありまして、

江戸の目で見た他國者

都鄙の差を無理に大きくして、田舍者のまごつくところを江戸の者が興ずる。それが押へ所で、叉豆藏の儲かる所なのです。

江戸自慢の相手に上方人は不向

だが京都では誰をつかまへても「お上りさん」とやつてのける。江戸ではどこの人をつかまへても、遠國者、他國者といふが、京都で「お上りさん」といふやうな扱をするわけには行かない。どこまでも江戸を誇つて行かうとする相手には、上方人は不向である。それですからこゝに一つの新手が出たわけで、これから後にも奥州の人や越後の人をつかまへて、江戸の人と向ひ合せ、それに對して江戸の自慢を存分にするやうになつたのは、こゝで轉換した思ひつきだと思ひます。

尤もこれも天明元年に萬象亭の出しました「眞女意題」といふ洒落本がありまして、忠七といふ若者が出入先の奥州侍を案内して、芝の神明の私娼を買ひに行く案内をすることが書いてある。この卷頭に奥州言葉に就て、長いこと註があります。奥羽人に對して江戸を誇らうとする趣向は、鬼武がはじめたわけではない。それより前に萬象亭が居るのです。然もこれはやはり江戸を誇るのに都合のいゝ相手、といふ意味でやつたらしいから、萬象亭の方が早いと云はなければならない。

談義物のところで云つた「教訓不弁舌」は、寶暦四年に出たものですが、それには上方から來てゐる番頭と、江戸で生れた番頭と二人で、土地自慢から喧嘩をするところが書いてあります。寶暦三年の「水灌論」、その中に花洛論といふ名で、江戸と上方とを比較して、雙方が自慢することになつてゐますが、この結末も兩成敗で、何方もいゝところだといふことになり、江戸ばかりがいゝといふことにはなつてゐない。「舊觀帖」が、江戸人の向うに上方人を立てず、奥州人や越後人や甲州人を立てるは勝手づくなので、何にしても上方には傳來の文化があり、盛な商賣もある。むやみに江戸と比較して誇ることが出來ないからなのであります。

自慢の相手に東北人

寶暦度に於て、京都のことを花の田舎などと云つて、相當惡口を利いて居る時でも、江戸の方が上方よりまさつてゐると云ふことは出來ない。「舊觀帖」の時代、即ち化政度の江戸といふものは、その時分より進歩もし、發達もして居りますが、猶且上方を壓倒するわけには行かない。出放題に江戸自慢をする相手には、どうも上方は不適當である。「膝栗毛」も惡對や痰火で上方巡りが出來なかつたのは、本文にある通りでありまして、上方へ行くと、江戸氣取の人間の方が却つてまご／＼する。安心して江戸自慢が出來る相手としては、東北人が一番いゝのです。これは抵抗する何者も持つて居りませんから、その後の滑稽物の中には、田舎者といふと東北人が選ばれるやうなことになり行つたのであります。

それに奥州や越後の人は、旅行をするなんていふことが少い。又江戸の人も、奥州見物をするなんていふことはあまり無い。信越の人は江戸へ多く來て居りますけれども、それは遊びに來てゐるわけではない、皆出稼です。東北の人にしても、旅行の興味の爲に、旅費を捨てゝも構はぬといふ狀況にはなつてゐなかつたのです。

遊山旅の興味と「膝栗毛」

尤も江戸の人にしたところが、寶暦以來だん／＼遊山旅が多くなつて、旅行の興味を感ずる人が殖えては來ましたけれども、上方に比べて話が出來るほどにはなつて居りません。江戸では遊山旅と申しても、數日といふ旅程が多いのでありまして、それは「墨之内詣」とか、「雜司ヶ谷紀行」とか、「江嶋土産」とか、「大山道中栗毛後駿足」とか、「箱根草」とかいふ本が出てゐるのでもわかつたことです。併しそんな短い旅でありましても、旅といふものは毎日々々環境が變つて參りますから、興味を新にすることが出來る。それが愉快であるといふことは、江戸の人にもわかつて來たのです。それですから、假から取立てた小說である「膝栗毛」も、この興味が變るのに引張られて、

ちぎれ〳〵であるべきものを長く續けたのであります。

旅行するといふことと、又それに對する興味は、上方の方に早く發達して居りましたので、旅に關する話も上方の方に多い。その話も、當時としては大きな旅行――半月乃至一月もかゝるやうな旅行の話が珍重される。だから「膝栗毛」がうまく行つたのです。そこへ行くと、「舊觀帖」は割が悪いといふことは、申すまでもない話であります。上方の人は旅行を多くするし、旅行の興味も多く解する。それだのにどうして「膝栗毛」のやうな作が上方に出てるなかつたかと云ひますと、古いところの浮世草子の中には、全國の遊女町を廻つて歩くやうな趣向もあり、旅の模様を書いたものが無いわけではない。たゞその後にどうして出來ないか。「膝栗毛」のやうな滑稽なものが無ければならぬのに、それが無いのはどういふわけかと云ひますと、上方文學の衰微が何よりの理由でせう、上方人は江戸者よりも旅行の興味を多く知つてゐる、上方の噺家小春團次の書いたものを見て、成程と合點したわけでありますが、小説なんぞよりもずつと手ツ取早い、書物でなしに耳へ聞く落語として、數多い旅の話が上方には行はれてゐたのであります。

大阪固有の旅の落語

大阪落語には大阪固有の旅の落語があります。之は前座に限られて居ります。東京の前座と大阪の前座と違つた點は、大阪は見臺（講釋師の前に置くシヤク臺様のもの）を置きます。これを七五三にガチヤ〳〵と叩き作ら落語を演るのです、そしてこの旅の落語の外は、どんな落語も演る事が許されないのです、それだけまた旅の落語も數十種ありまして、一通り覺えるには先づ三四年はかゝるのです、東京落語の様に成つて居る「萬金丹」「運付酒」「三人旅」等は、大阪の旅の落語から來て居る事は確かです。大阪落語の大物に扱はれて居る「三十石」も勿論旅の落語の部類ですが、之は初代桂文枝が明治三年頃京都に出演中、旅の落語京名所の後編として創作されたもので、「三十石夢の通ひ路」として其頃京阪間の交通機關である三十石の船中を仕形身振り面白く巧に描寫をして當時大變な好評を博し、其後歴代大家が手がけられて大阪落語の代表的なもの〻

一つとして、今日殘されて居ります。ナゼ前座に旅の落語而已を演らせるかと云ふのは、時間の伸縮が自由であるのと、どの箇所も面白くて無駄がなく、その中に爺も婆も女子供も、武家も百姓も若衆も種々な人が出るので、言葉のメリハリ調子の高低、それ等の練習が充分出來るのです。そして見臺を叩き乍ら其の音が聽衆の耳ざはりに成らないやう、話す事が聽衆によく判る樣に演れるなれば、最早落語家として第一歩を踏む事が出來たのだと云ふのですが、イヤハヤ長い講釋です。口と手を働かすのですから、最初のうちは中々人に聞かせるどころか、喋るさへヤットである。昨日師匠に習つた處を壁に向つて膝を叩き乍ら嚴粛(げんしゆく)な面持で繰返し〱喋つて居る前座さんを子供心に覺えて居ます。この旅の落語を初歩の落語家に專ら演ぜしめた、往昔の先輩師匠達の名案である事がうなづけます。大阪固有の落語であるに拘らず、前述の理由にて在來の寄席では入込と稱して聽衆の揃はないうちに終つて居た爲、一般に餘り認められて居ないのは實に惜しいものです。先づ東の旅と云ふのも幾編にも區別されてあつて、奈良名所、野邊歌、煮賣屋、七度狐、法會、輕業、曲馬、地獄八景、コレコレ博奕、牛かけ、運付酒、高宮川、三人旅、尼買、深山隱れ、百人坊主、鳥居坊主、嶋巡り、義太夫、播州名所、兵庫船、鱶の身入れ、明石船、小倉船、桑名船、茗荷宿、大津の宿、擂辨天、京名所、伏見の人形買、三十石の下り、同上り、其他月宮殿、宿屋仇き、等々、隨分有るものです。

旅に關する落語と戲作

旅行の興味が小說とか、草雙紙とかいふものになつて樂しまれるといふこと、、落語になつて樂しまれるといふことに就ては、大分考へて見なければならぬことがあると思ひますが、上方の落語の中でも、旅に關するものは如何にも面白い。筆に書いたものとは又違つた面白味が、慥にあつたと思はれる。上方で旅行の興味が遺棄されてるたのではありません、江戸に「膝栗毛」があるのは、江戸文學が盛んであつたからだと思ひます、是は滑稽物だけではない、近世文學一般にも云へると思ひます。中本の澤山あることも、「膝栗毛」等のあることも江戸の自慢になることに相違ない、その「膝栗毛」にしたところが、東海道だけは面白いけれども、木曾街道になると、さう面白味は

無い。これは何の罪であるかと云ひますと、やはり趣向にさう多くの變化を持つてゐない、俄取りであつたからでせう。それではどうしても同じやうな趣向が繰返されることになるから、二番煎じになるのは已むを得ない次第であります。それは豆藏小說にしても、落語小說にしても、茶番小說にしても、附いて廻ることで、長く續けるのに孰れの作者も、目先の變化を氣支にして、何時も讀者に倦れはしないかとビク〳〵ものでゐる譯柄だと思ひます。

寄席の高座から來た「浮世風呂」

第三の變化は落語小說

更に面を替へて出て參りましたものが、三馬の「浮世風呂」で、これは文化六年の板行であります。「膝栗毛」の初編が出た享和二年から勘定すると、七年たつてゐる。「舊觀帖」の初編が出たのは文化二年ですから、「浮世風呂」より四年前になります。それから「浮世風呂」といふ湯屋の話に就きましては、寶曆四年に出た伊藤單朴の「里俗教訓錢湯新話」があり、享和二年には山東京傳の「賢愚湊錢湯新話」といふものも出て居ります。が、三馬の「浮世風呂」といふものは「譚話」を土臺としたもので、中本のをかしみといふものが、これで二度變つたわけになつてゐる。卽ち落語小說とでもいふべきものになつたのであります。

「浮世風呂」の卷頭には、三笑亭可樂の落語を聞いて、それを潤色したものだ、といふことが斷つてある。

一夕歌川豐國のやどりにて、三笑亭可樂が落語を聞く、例の能弁よく人情に通じて、おかしみたぐふべき物なし、惜かな其趣向、僅に十分が一を述たり、傍に書肆ありて、吾とおなじく感笑して居たりしが、忽ち例の欲心發り、此錢湯の話にもとづき、柳巷花街の事を省きて、俗事のおかしみを增補せよと乞ふ、則需に應じて前編二冊、まづ男湯の部こゝろむ。

これは明かに自分で書いてゐるので、可樂の噺をそのまゝ高座から採つた、といふことが明白に知れるやうになつてゐます。このやり方といふものは、一九が大坂俄から採つて來たことを云はずに、すましてゐる仕方とは違つ

て、鬼武が豆藏の藝から持つて來たことを明言してゐる行き方に倣つたもので、出所を隱さずに、表題にも「評話」といふことを現してある。「浮世風呂」といふものは、依體の知れないものではない、出所がちやんとわかつてゐるので、それは在來の咄本とか、黃表紙とかいふ類のものから採つたのではない、寄席の高座から採つたものであることがわかります。續いて二編二冊、三編二冊が女湯で、四編三冊が男湯、都合九冊が文化十年までに出來て居ります。

物眞似からの方向轉換

落語小說の先進

評話物とでも申しませうか、噺を取立て、小說に拵へる、落語小說とでも云ひますか、それには早いところで、安永七年に長川幸慶子といふ名前で「杜撰商」といふのが出て居ります。これは小咄をそつくり取立てたものですが、續いて東里山人の「田舍通言驛路の鈴」(文化八年)でありますとか、東西庵南北の「頓懸註文帳」(文化十四年)でありますとかいふやうなものが澤山ある。殊に鯉丈などになりますと、文政七年に「牛嶋土產」といふものを出して居りますが、これは評話といふうちにも、寄席の高座の工合をそつくり持出してゐるやうに見える。一九にもやはりさういふ作品があるやうであります。

三馬と致しましては、文化八年に「四十八癖」、文化十年には「人間萬事虛誕計」、「一盃綺言」などといふものを出して居ります。此等のものは物眞似の方を覘つたのでありますが、殊に文化三年に出しました「酩酊氣質」などは、幇間の櫻川甚孝に與へた、といふことさへ書いてあります。三馬は相當に物眞似の方へ力瘤を入れて居つたのです。その頃卽ち文化度の落語といふものは、もう小咄の體裁ではありません、物眞似といふものを大分取入れて居ります。仕形咄といふものと、物眞似の畠から出て來た豆藏の落咄といふものと、これは野天であると、高座であるとの違

ひだけで、同じ形のものである。たゞ悪ふざけをしない、いくらか御品がいゝといふだけの違ひがある。これは天明八年に出來ました蒟蒻本の「一目土堤」の中にも「仕方咄は吉原の磯八か身ぶり」といふことがあります。磯八のことは前にも云つたおぼえですが、磯八以前には太鼓持でも、さう豆藏の藝などを眞似るやうなものは無かつた。それがだん／＼落語の方へ入つて來るわけなので、三馬も最初は物眞似を覘つたのですが、諢話の方に目を著けて來た。三馬は「浮世風呂」を出すに當つて、可樂の高座の噺から採つたといふことを斷つて居りますが、どうしてさういふ風になつたかと云ひますと、寄席の勢力がなか／＼盛になつて來て、そこに人氣のあることを知つたので、今までやりかけてゐた物眞似の方を拋り出したのです。さうして諢話を捉へるといふこと、それには實演される笑話でなく、寄席の高座の落語を捉へる、といふことから出直した。それが又「膝栗毛」や「舊觀帖」とは風味が違つて、目新しいわけだつたのであります。

高座の落語を捉へる

そこでこの仕形咄とか、狂歌咄とか輕口とかいふものは、諢話の江戸以前からの恰好でありまして、概して眺めて見ますと、萬治二年に中川喜雲の「私可多咄」といふものが出て居ります。これはどの位身振聲色の入つた仕形咄であつたか、委しいことはわかりませんが、寶曆十一年の江戸版「源平浮世武壽子」の中に、仕形咄のことが出てゐる。これは「源平盛衰記」をもぢつて、八文字舍風に仕立てた小說ですが、高砂尾上之丞といふ者が、御馴染の常盤といふ妓を、源金屋の義兵衞といふ者に取られたといふ仕組になつてゐるのです。

「源平浮世武壽子」中の仕形咄

はづかしながら尾上之丞、過にし諸分のあらましをかたり聞せんきかせよと、しかた咄に、抑汝もしるごとく、我父上は播磨なる曾根の松翁長閑とて、志賀に御館を居たまひしを、千代のよはひも過ぬれば、次第に老木の御姿の、世をのがれたき御心、さいはひ我をおめがねにて、しがの都をおさめよと、御跡式を下さるゝ、其とき亜相の御こと葉に、禮樂射御書數迄、何くらからず、志賀幸崎と名に高く、暮てぞ雨の一景も父に負ずに保べしと、松の太夫の御位をゆづらせ給ふも有難く、千歳の

枝の手を伸し、いたゞく霜や初時雨、偶琴のつれ〳〵に、ころしも春の夕べ、又月毛の駒は、地主のさくらにかくれし音羽の瀧の糸、長き羽織に三ツ巴の紋付し、都すりからしの率頭二三人、いづくの打もらされ共わかち難く、商賣とてたゞなれ〳〵敷、身が事を殿御盃の御ながれをゐたゞきたしといふ中に、小づくりなる男、わがうしろへ立まはり、何やら黒藥をふり掛、てう〳〵と拍手をうち、此樣な事してまじないをするかと思へば、我心まど夢のごとくに覺へ、絡ぎをん町の藤屋が見はらしへ通し、幸ひ此頃封の切たて新上白娘に、常盤殿と云ては、兎の毛でついたほども、申分ンなき御器量、此君われら働てつかんで參らんと、いふよりも早し、今より若きときはなれば、推量して見や、其うつくしさ〳〵しばらく絶入せぬばかり、是を軍のはじめとして、太夫も我事あけくれに、戀の幾瀨と種まきて、野路の雉子のつまこふも、われを待夜の實より、通ひ〳〵てのぼりつめ、急に根引て其上を、壬生の花に詠んと、談合の手をつくせ共、はや内證は金虛の體、世をうらんでもぜひもなふ、秘佛で置し揚代も　十千萬兩ほどたまりぬる、可愛や常盤を折〳〵は見せへ出さんと、親方めが太夫が耳をこするやら、折こそあれに朝といふ大盡、ふと三河やのかゝ樂の能手引にて、初會にとんと雨氣付　ばた〳〵〳〵身うけして、諸埒も急に明る日は、大夫の常盤はわが妻と、いそ〳〵廻の矢の使、我とはふかき事なれば、しらせの率頭打ぬれど、何分ン根引のちからなく、あはれなく〳〵生わかれ、さき白河と遠ざかる、又此跡も語べし、暫くたばこに仕らふ、茶を一ツたも、

芝居へ入つた仕形噺

この文を見ますと、芝居で仕形噺をやつてるる。芝居の方へ仕形噺が入つて行つたといふことは、大分古いことだと思はれます。あの「嫗山姥」のしやべり、新しい方では「太功記」十段目に出て來る手負の十次郎なんていふもの、あれが仕形噺でありまして、仕形噺が操へ入つたのが先であるか、歌舞伎へ入つたのが先であるかといふことは、大に研究を要する問題でありますが、已に物眞似狂言盡といふ名前で興行して居ることから見れば、隨分古くからあつたらしく思はれます。

落語に入込んだ仕形咄

それがどんな按配であつたかといふことは、委しく見ることが出來ません。幸に「源平浮世武壽子」によつて、どの程度までやつたか、大體のところは見える。勿論仕形咄ですから、文字に書き現す場合には、十分に書けるものではありませんが、それによつて考へ得る程度のことはわかります。この仕形咄が歌舞伎の方へ入つて來ますと、自然その人になつて話す、さうしてその人の動きを見せる、といふ兩方面に引かゝつたことになつて參りまして、これは誰でもと身振聲色といふものがついて參ります。それが又話の模樣を大變に變へるものでもあつたのです。これは誰でもわかることですが、文字に書いたものは、字の讀める者でなければわからない。仕形咄の方は文字に引かゝりませんから、ずつと幅の廣い玩賞に適することになるからであります。

振合が違ふ「廓の大帳」

それからその後になりまして、京傳作の「廓の大帳」、これは寛政元年の板行であります。この話はそのまゝといふわけではありませんが、殆どそれに近い姿で「三人片輪」といふことになつて、今日の落語界にも殘つて居ります。「浮世武壽子」と「廓の大帳」とでは、振合がよほど違つて居りますが、これは寶暦から寛政に至る二十九年の間に、それだけの變り方をしたと申すよりも、舞臺と舞臺でないといふことの違ひの方が多いやうに思はれる。

妙なはなしがござります、さる所にせむしで、金の蒲とある、客人がござりますのさ、その客人にきにいりの江戸がみがあつた所が、とんだいゝ男で、三味線をよくひいて、聲がよふござりやす、ある時にかの大じんの趣向で、その色男をかさかきの樣子にしたてゝ、額へ膏薬をはり、著物もむさいなりをさせて、さるうちへ初會にいつた所が、すつぱりくつて、女郎も皆々坐敷の内からきたながる樣子、こいつはしめたと、大じんは心の内でおかしく、興に入つて見ゆれど、かの男は段々安く取扱はれる故、すこしいま〳〵しくなつて來て、豚がおさまるやいなや、禿をよんで手拭をしめして貰ひ、膏薬をと

つて、ぐつと顔をふき、うへのぢゝむさい著物をとれば、下には八丈の裏襟、かべちよろの帶を前ではさんで、初に引替りていきな形になり、見世三味線を借りて、三つ蒲團の上にあげあぐらで、何か亂れ鳥とかいふやうな、めりやすのうまひ所、藤二がふしに藤吉が聲といふはだでうたひかけたれば、相方の女郎は隣坐敷に、今夜の客のぢゝむさを、思入れ惡くいつて遊んでいたが、その歌を聞つけ、屏風から覗けば、相方の客、坐敷の時とは打て替りし色男、ことにあだな聲で、ひきうたつて居るゆへ、くやしいね、すつぱりとだまされんした、こんならまらねへ事はおつせん、も一つどふぞきしやうをお聞せなんしなどゝ大もてにて、段々朋輩女郎も、是を聞て寄集り、此客を取まいて、わつちや松風がいゝ、イヤもん太郎が名殘りを聞きたいのと、らんをいれる處へ、廊下をかのせむし大じんの相方の女郎通る故呼び、もしへ此客人にすつぱりかゝれやした、くやしいねといへば、ほんにかへ、そんならわつちが客楽も、そんな事でおつしやうと、手前の坐敷へ馳けてゆき、牀の内によく寐てゐるせむし大じんを、無理無作に引起し、背中を握り拳で喰はせながら、此中のものをお出しなんし〳〵は、どふでござりますトしかたではなす

精密になった仕形咄

只今でも「三人片輪」は、別に仕形咄とは思はずに、落語としてやつてゐる。聞く方でも、仕形咄だと思つてゐる者は一人も無い。けれどもさういふ例として、特に「三人片輪」だけを擧げるのではありません。その他の咄にしたところが、今日の人はやはり仕形咄として聞かずに、普通の落語だとばかり思つてゐる。その點は前にあつた仕形咄と比べて見ますと、仕形といふものが、それだけ落語の中へ入り込んでしまつてゐるのです。それも又極めて精密になつてゐる。これは歌舞伎といふやうなものを經過した爲もありますけれども、それよりももつと近く、浮世師の藝を落語の中へ取入れたからさうなるのであります。

江戸以前からある譚話

ところでこの浮世師のした事と、噺家のした事とをおつゝけて見ますと、噺家の藝といふものが、大變にこまかくなつても居り、上手になつても居ることがわかります。その噺家が寛政以後に於て著しく上手になつたのは、巧者に物眞似を取入れたからではなからうかと思はれる。「聞上手」二編の序、これは安永二年の板行ですが、その中にかういふ事が書いてあります、

落語は滑稽に起り、中頃流行して廢れ、近世又盛也、古風の話は迂遠にして理を備へ、近頃は洒落過て味なく、仕形咄は昔く事ならねば先づ置きぬ、當時の咄は只たはけの阿堵(あと)を盡すのみ、つまんで咄すはなしあり、餘勢をかりて流を採る咄あり。

江戸以前の譚話

この頃には仕形咄といふものは數へられて居りますけれども、まだ浮世師の藝を取入れられたといふことはありませんから、それほど巧妙なものにもなつて居りませんし、仕形咄にしてもそれほど重く見られてはゐない。自體譚話といふものは江戸以前からあつたので、誰でも知つてゐる通り、信長、信忠には野間藤六があり、秀吉には曾呂利、秀次には伴内といふやうな人がついて居ります。大抵な武將には御伽衆、御話の衆などといふものがあつて、よく座の興を添へるといふことがあつたのです。その後は京の嶋原の揚聞の藝になり、續いて各所の遊廓に行はれるやうになりましたが、更にそれがひろがつて、作り咄の點取勝負が行はれるまでになりました。

辻噺

それが延寶、天和になりますと、今度は譚話といふものが下落して來て、辻噺といふものになつた。卽ち大道藝で、その祖と云はれる露五郎兵衞は、祇園の眞葛ヶ原とか、北野とかいふところへ出てゐたと云ひます。これは後の豆藏でありまして、生玉の又八、彥八なんていふ者が出て來るわけになる。西鶴の書きましたものをはじめ、浮世草子の中などに出て來るのを見ても、隨分作り咄を得意にしてゐた者のあつたことがわかります。「江戸圖鑑」と

いふのは元祿二年のものですが、その中に「座敷仕方咄」として、

鹿野武左衛門、横山町休慶、中ばし伽羅小左衛門、四郎齋、

なんていふ者が擧げてありますから、江戸にもさういふ諢話をする者がゐたのです。けれどもこゝに「座敷仕方咄」と斷つてありますから、これは大道藝ではない。御座敷藝でありまして、大名以下の武士や、町人としても大きなところを相手にしてやつて居つたものらしく思はれます。「輕口」でなしに「仕方」と斷つてもあるし、殊に「座敷」とまで斷つてあるところを見ますと、一方に辻噺といふものがあるので、それと紛れぬやうにしたのでせう。

座敷仕方咄

江戸前になつた咄本

この中で鹿野武左衛門だけは、慥に大坂生れでありますが、その他は何處の生れであるかわかりません。たゞ當時の諢話として殘つてゐるものは、どれも上方言葉のひどいもので、江戸語にはなつてゐない。この時分のものでも、石川流宣の拵へました「枝珊瑚珠」などは、元祿三年の江戸版ですが、この「枝珊瑚珠」とか、續いて元祿七年に同じ人の出した「正直咄大鑑」とかいふものを見ても、やはり上方の訛が多い。この「枝珊瑚珠」の方は、一つ一つに作者の名が書いてありますが、御道樂の作り咄ではなからうと思はれる。それから正德二年の「新話笑眉」、これなども江戸版でありながら、上方訛の非常に多いものです。まだ外にも澤山ありませうが、さう精しくは見て居らないので存じません。たゞ大體そんなものから考へても、江戸の座敷仕形咄といふものは、上方言葉で行はれてゐたのではないかと思ふのです。

江戸の仕形咄に上方訛

そこで斷然面目を取替へて、江戸の言葉、江戸の調子になつて出て來た咄本といふものは、安永元年に出た木室卯雲の「鹿の子餅」でありまして、江戸版の咄本としてはこれに第一指を屈すべきであらうと思ひます。流宣の咄本

江戸風の咄本

は半紙本でしたが、「鹿の子餅」は半紙半截本で、內容も小咄に限られてゐる。上方の譚話といふものは、さう長くはないにしても、どうもだらだらんまりしてゐるないのですが、「鹿の子餅」は簡淨明快なもので、實に手つ取早い行き方であります。單に話が短いばかりでなく、その調子も江戶人の口つきになつて居ります。

尤も江戶の言葉といふものが、特別に一つ出來上りましたのは、寶曆前後の事ですから、この變り目によつて、上方の咄本や、上方臭い咄本との間に、大きな區りが出來た點もありませうが、兩者を比べて見ると、第一に趣向からして違ふやうに思はれる。江戶前の譚話といふものは、落咄の精粹でありまして、落が咄の一番おしまひにあるばかりぢやない、その落によつて咄が出來てゐる、と云つていゝのであります。

注目すべき林君の說

訓譯本の影響

こゝで林若樹君なんぞは、卯雲の「鹿の子餅」より二十一年程前、寶曆元年に岡白駒が「開口新語」を出してゐる、これは譚話を漢文で書いたものでありますが、明和五年になると「笑府」といふものがあつて、支那の譚話に訓譯をつけて出版してゐる、さういふものゝ影響を卯雲が受けてゐるんぢやないか、といふことを云つて居られる。これはまことに面白い眼の著け方であると思ひます。

「笑府」と「開口新語」とは裏と表になつて居りまして、「笑府」は支那の譚話に訓譯をつけたのだし、「開口新語」の方は日本の譚話を漢譯したのである。この時分には「笑府」ばかりではありません、その他にも色々な訓譯本が出て居ります。訓譯本といふのは、普通の返點や句讀の外に、片假名を脇へ振つてあるので、今日のルビと似たやうなものですが、極めて平たい言葉で、漢字の意味が書いてある。このやり方は禪宗坊主が祖錄を讀むやり方と同じなのです。禪宗の祖錄といふやつは、宋時代の口語の儘に高僧の言葉を書きつけたもので、それ以來禪宗の書物といふと、俗

語で書く例になつて居ります。「碧巖集」とか「虛堂錄」とかいふ類が、皆俗語で書いてありますから、普通に四書五經を習つた人が讀みにかゝつても、到底讀めない。どうしても別に支那の俗語を研究してかゝらなければならないのです。そこで祖錄には鈔といふものがあつて、その意を傳へるやうにしてある。これは五山の連中が拵へ出したので、眞によく支那の俗語を日本の言葉に讀み取つてあります。これは坊主の方の話ですが、儒者としても宋學をやつてゐる人達、王學をやつてゐる人達の間では、「朱子語類」を初めとして、皆俗語で書いてある。それを讀みこなすには、先づ俗語に通じなければならぬ、その扱方は訓譯本のやうに行かなければならぬ、といふことになるのです。

さういふ訓譯が儒者の方でも盛になりまして、それが爲に支那の小說雜著の類を讀む風が起つて來た。さうなると支那の俗語を自由にこなすことが味噌になつて來て、自分の文章の手際のいゝことを自慢する爲に、日本の俗語を漢譯して見るといふことが、儒者の中でも氣の利いた顏をしてゐる連中に多くなつた。又自然さういふ著述が出る。岡白駒の後にも、同じやうに諢話を漢譯したものが、いくつか出て居ります。支那の俗語が十分扱へて、小說雜著が自由に讀める、飜譯種の多い讀み本、お蔭がなければ讀み本は出て來なかつたらうと思はれる。又山口剛氏が唐來參和の「和唐珍解」(天明五年版)に長崎丸山の光景を叙して、唐人と通詞との言葉を支那語で書いて訓譯してある、それは明和八年の大坂版、亭々々逸人譯、堂々々主人訓、「四鳴蟬」を粉本としたのであらうと云つた、その直前に「開口新話」、「笑府」のあるのを逸し難い、更に訓譯の流行は洒落本作者を刺戟してゐるのも見遁せますまい。

一體禪宗坊主の扱ふ祖錄と、支那の諢話との間には引かゝりがあるので、これは當話と申します。或一つの間に向つて、それに突かけて顏面にわからせるやうにして行く。よく云ふ禪問答といふやつ、あれが當話の重立つた形です。さういふ仕癖が民間に移つたものと見えまして、早いところでは謠曲の中に當話を用ゐたところがあり、芝居の役者も舞臺で盛にやつてゐる。當話がいゝと云つて、評判記で褒めるやうになり、遊女の評判記の中にもそれ

があります。勿論當話は一つではありません、いろ／＼な形があるのですが、この當話といふものと、落語といふものとは、落の工合が機轉で行くので、そこによく似た處がある。支那語の事ですから、翻譯しては語路が役に立ちません、どうしても心取りでなければならぬのですが、漢譯でない方、即ち「鹿の子餅」のやうに日本文で書くものは、氣持に於て支那の譚話――當話から系統を引いてゐるものに近いところが、よほどあるやうに見受けられる。こゝに林君の氣がつかれたことは、甚だ面白いと思ひます。

江戸前落語の實演

その時分、安永二年に「地口須天寶」といふものが出て居ります。これは語路落の方の見本とすべきものなのですが、それから引續いて、天明の初までにいろ／＼な咄本が出版されてゐる。大方三四十もあらうと思はれますが、どれもこれも小咄といふやつで、後には一分線香即席咄などと云つて、線香が一分燃える間に落咄がいくつ出來る、といふ風に、當意即妙の早いのを喜んだのさへあります。

江戸流譚話の先驅「百人一首虚講釋」

それから林君はもう一つ、「鹿の子餅」が出る前年即ち寶暦十三年に、睾幹子といふ人の著した「風流戯註百人一首虚講釋」といふものを擧げて居られる。その中の一つは、今でも「ちはやふる」といふ名で噺家がやつてゐるもので、或は「無學者論に負けず」なんていふことにもなつてゐます。安永五年に出た「鳥の町」といふ咄本の中には、「講釋」といふ題になつて、この「百人一首虚講釋」の中の一つを、小咄に仕立てゝ書いてある。ところで「百人一首虚講釋」に「右此一首の戯註は一トむかし先の夜話に予弘メ置たり」とありますから、その十年前なるものは寶暦の初になります。睾幹子といふのは誰だかわかりませんが、この人は江戸流の譚話の開祖と云つてもいゝ、といふことを林君は云つて居られるのです。

尤も「百人一首應講釋」は小咄ではありません。かなり長い話も載つてゐる。若し孝嗣子が自分でこれを實演したものとすれば、長い話は何も寛政を待つまでもないわけである。が、これは耳新しい林君の說でありまして、一般には知られて居りません。一般に知られて居りますのは、天明六年四月二十一日に、向嶋の武藏屋權三方で烏亭焉馬が咄の會といふのを催した。これが江戸前落語の實演の最初のものと云はれて居ります。

向嶋の咄の會

天明年中に及んで、談洲樓焉馬と云者、武左衞門が一流の世に癈れたるを歎て、其頃江戸に流行しける狂歌師戲作者の類をかたらひ、落語を再興しける、此輩初めは連中の宅に集り、戲談秀句など演て慰としけるが、耳新らしく興あるとなりとて、後には祝儀の坐席、日待の遊興などに招かるゝことゝなりける、此頃は前句の開巻、狂歌の賞切といへば、必ず落語をすることにて、追々其道も開けて、連中に加はるもの多かりしかば、始めて牛嶋の武藏屋に於て、話の會を催しける、此時鄰松が畫ける桃太郎の畫像を床にかけて、桑楊子を備へたりしといふ、兩日會合して戲談をなしける輩は、木魚亭魯石、櫻川慈悲成、通亭文馬後の石井宗叔、京屋可樂、龜屋壽樂、朝寐房夢樂也、此日老若群集して夥しく賑ひけると也（名なし隨筆）

この中に可樂、壽樂、夢樂といふ名前が出てゐるのは、間違だらうと思ひます。けれども焉馬が向嶋で咄の會をするまでの道行、又その連中が出來て來る樣子といふものは、大凡これで考へられるやうです。向嶋の噺の會は夥しく賑つたといふことでありますが、それも物數寄が寄合つたので、その數は多かつたにしろ、決して後の寄席のやうな按配式のものでないのは勿論の事で、その顏觸の重立つたものは、咄をする人といふよりも、狂歌の連中が多かつたのではないかと思はれます。

道樂で終始した焉馬

その後の咄の會

それから引續いて咄の會が、向兩國の京屋とか、柳橋の大のしとかいふところで行はれるやうになりまして、大

分繁昌したものらしい。寛政の改革に御遠慮申して、同六年には咄の會といふことでなしに「宇治拾遺物語」の披講とか、又は狂歌の披露とかいふやうな名前で、向兩國の柏屋で開いて居りました。それが九年十月になつて　町奉行の小田切土佐守から差止められたのですが、享和三年正月七日には、焉馬の六十の祝をするといふので、向兩國の京屋で賀筵を張り、餘興には例の落咄をやつた。更に文化十一年には、焉馬の七十二の祝をするといふことで、盛に支度をしてゐる時に、南の町奉行から内達があつて、差止められてしまひました。翌十二年にも又差止があつたので、このところで咄の會は中絶しなければならなくなつた。十三年二月になりますと、たはけ笑ひ、俗におどけ話といふものをしてはならぬが、昔話の忠孝の物語なら差支無い、といふ内達が出て居ります。咄の會禁制の爲に、一時は全く無くなりましたが、――こゝに條件附ではあるけれども、許可があつたので、又ぼつ／＼やるやうになりまして、文政三年正月二十八日には、焉馬の一世一代の會といふのが、龜井戸の藤屋にありまして、大變に景物などを張込んでやつて居ります。

焉馬の興した天明ぶりの咄

焉馬といふ人は、一代落咄をやつた人で、それもたゞ作るばかりでなく、實演までやつたのでありますが、焉馬もその連中も、決して寄席などへは出ません。云はゞ道樂、御慰にやつたので、いづれにも錢を取ることは無かつたのであります。焉馬自身も狂歌をやり、鑿のてうなごん墨金といふ名を持つてゐる位でありますが、上方流の狂歌を打消してしまふほど、江戸の狂歌が盛になりました。彼の天明ぶり、安永の末から天明の初へかけて、山の手連中の狂歌が急に流行し出して、天明三年には「狂歌若葉集」、「萬載狂歌集」などといふ狂歌の集が出てゐる。なか／＼大繁昌で、毎月の狂歌の會をはじめ、狂歌の連中がいろ／＼な催をして居ります。それと竝んで咄の方へ天明ぶりを興したものが、烏亭焉馬の一派でありました。それ以前には咄本があつても實演することは無い。寛政十二年に出た「大通契語」などを見ますと、如何にも半可通の口氣で、

又明日は焉馬さんや慈悲成さんと、兩國へ噺の會にいきやすよ、こういふこつたものを、いそがしくて成りやせん。

といふやうな事が書いてある。これも誰でも行くわけではない、やはりその筋の人から手を引合つて行くので、噺の會といふものが、おつなものであるやうに扱はれてゐたことがわかるのみならず、なか／＼噺の會がはやつてゐたことも、これで見當がつくと思ひます。

焉馬によつて生じた變化

噺の會が禁止されて居る間でも、噺の本の發行はちつとも變りなく、どん／＼やつて居たらしい。焉馬が實演の祖であると云はれて居るのは、噺の會をはじめたからで、寛政以來噺の工合が違つて來て居ります。それ以前には噺の會といふやうな、大勢人を集めて話だけ聞かせる、といふものが無かつたので、噺の會が出來てからとでは、僅な年限でありますけれども、大分違つて來てゐる。とにかくそれが一つの藝にならなければならぬやうになつたのです。

焉馬は噺の實演の祖

焉馬の噺本も出て居りますが、いづれも噺の會以後、寛政度のものでありますが、はじめて噺の會を致しました天明度の噺は、本に書いてある通りだとは云へますまいが、已に人を集めてやるまでになつて居りましたから、大方焉馬の噺本に出てゐるやうなもので、會がはじめられたのであらうと思はれます。大體に於いて安永度のものと違ふのは、主として噺の會が出來た爲なのですが、その焉馬の書いたものでも、文化十三年の「穴手本通人藏」などになりますと、もう已に茶番の方になつて居ります。併し享和元年の「花開笑語」の序で、焉馬はかういふことを云つてゐる。

今や歳月流行して物換り星移り、宿昔の話の短きは、當世の長きに變て、輕口頓作に鄙俗名（いやしき）を呼ず。

つまり噺の樣子が變つて來た、それは概要かうであるといふことを申した末に、それだけの變革は誰によつて生じ

焉馬により咄が變る

たかと云へば、それは焉馬がしたのである、と申して居ります。享和度になりましては、焉馬の骨折で變つた江戸の落咄は、又少し形が變つてゐるやうに思ふ。ですから「ソレハナゼ」とか、「ハテ何だハサ」とか、「といふた」とかいふやうな、咄の中の妙な口癖は上方のもので、一分線香卽席咄といふやうな小咄、江戸で云ふ落咄の中には無論ありません。「ハテ何だハサ」といふやうな言葉は、やはり上方の俄から背負ひ込んだものなので、江戸のは俄とは全く別な、狂歌の趣向から生れたものであります。狂歌の影響を受けて生れた江戸前の落語には、そんな言葉は無いのが當前なのであります。

石井宗叔の長咄

寛政以後咄の風が變つたといふうちには、焉馬の外に石井宗叔といふ人が、長い咄をはじめたといふことも、その一として數へなければなりますまい。この宗叔も寄席へは出ませんで、二代目から寄席へ出て居ります。二代目の爲に振鷺亭が種出しになつて趣向を與へた、などといふ話があります

初代宗叔の座敷仕形咄

初代の宗叔は醫者でありまして、水魚亭魯石といふ號があり、狂歌を得意にした人です。この人は御座敷へ呼ばれて行つて咄をする。焉馬の會へも出て居りますが、この人のやり方は、咄の會のとは違つて、御座敷へ呼ばれて行つての藝ですから、例の座敷仕形咄といふやつになる。呼ばれて行つた以上、自分だけの藝で一席は繋がなければならない。どうしても短い咄ぢやいけない、長くなる。咄が長くなつたのは寄席が出來てからで、これは長くなければ席が持てない爲なのですが、それに先立つて宗叔のは、御座敷をつとめるので咄が長くなる。宗叔の咄といふものは、御座敷で二三時間聞いて歸つて來て、聞いて來た話をもう一遍しようと思つても出來ない、といふことが「黑甜瑣語」に書いてありますが、これは筋だけで行くのでない、仕形で行くのだから話せないので、それが又宗

宗叔の唄の落

叔の長唄の特色でもあつたと思ふのです。

併しそれでも落唄には違ひないので、それが小唄と違つた味ひを持つことになつてゐる。落にも間違落、仕形落、頓智落、地口落、といふ風にいろ〳〵ありますが、宗叔のは長唄であるにしても、やはり落唄なのですから、落で結ばなければならないのは勿論であります。たゞ長い唄になりますと、直ぐ落になつてしまつては困るので、落の働きが小唄とは大分違ふ。唄の切目が落になることは同じですが、唄の全部が落で持つてゐる、落で生きる、といふやり方ではなくなつてゐます。大坂俄の方でも、この安永の變革以後のものと同じやうなところがある。それはどうするのかと云ひますと、ムダで運ぶので、その運びで唄を長くする。俄の方のアブラといふやつで行くのです。

尙宗叔の長唄に就ては、「寶曆現來集」に書いたのがありますから、それを一つ出して置きませう。

寬政四年より唄し坊主とて、芳町邊に住居せし石井宗叔とて、今流行の長き唄しを始し男也、此坊主、予(著者山田桂翁)湯島に住せし時、同町に近藤彌十郎とて、御普請役相勤る方へ宗叔參りて、先日松平内藏頭(池田治政、備前岡山三十一萬五千二百石)殿へ召されし時の唄しを致ける、内藏頭殿より朝五ッ時頃、迎駕籠にて參候故、直に參候處、廣間へ通し、次上下の男出で、暫く御ひかへと申て、彼男引込、夫より一時餘も待たせ、又外の男出で、扨々御退屈なりとて、又奧の方へ連行、少し御ひかへと云て引込、又一時餘も待たせ、日暮迄に有ハごとく七ケ所程座敷を取替〳〵して、暮六ッ時過、扨々御退屈と申、奧の方へ案内致し行所、白晝のごとく灯り夥敷並べ、左右には次上下着たる男、正しく並び居て、其前を通り、入側より内へ這入ば、かひどりの女中兩がわに並び、美敷事何ともたとへ方なく、其中を又餘程通り行と、向の方に何か正敷上段に居られしが、則内藏頭殿也、側へ參れ〳〵と申されける故、御側へ參ると、唄せと仰せられ候故、直に朝迎ひの男、かご昇の肩の高びく、又一間〳〵に取次の男、形振顏の形迄まねて、夫より上下にて並びし人の形振、かひどり女の顏形ち夫より内藏頭殿の唄せ〳〵と申されしを眼にして、長々と唄ければ、殊の外御歡び、紋服其外さま〲の物拜領せしとて

此咄しにて、一夜近藤へ参り咄しけり。

この文でも話の中に迎ひに來たかご舁や取次の侍、そば女中の身振仕形のあるのが知れます。只しまひのところがよくわかりませんが、この落は宗叔が殿樣の前へ出ると側へ寄れと云はれた、そこで平伏した顏を上げると、殿樣の御顏が大天狗樣のやうで御鼻が高かつた、宗叔はびつくりして、夢中になつてその御鼻へ取付くと、殿樣が「はなせ／＼」と仰やいました、といふのが落になつて居ります。

咄の長くなる所以

それは宗叔のことですが、京傳の作つたのでも、やはり寛政度のは話が長くなつて居ります。寛政七年に大坂で出版された「鳩潤雑話」にある話ですが、京傳が或豪家へ呼ばれて行つて咄を拵へた。今でも噺家がやる咄で、赤坊が「オウギヤア(扇屋)／＼」と云つて泣いたといふやつですが、京傳がこれを拵へたわけも書いてあります

這話は東都の富己より文通にて至る、則當時專役地の流行にして、凡て其席の模様を即席に話して興ず、這話は山東京傳心易く行、豪家の寶、其元吉原の傾城なる故、人の子を儲(まふけ)を養ひ、淺草觀音へ告子せしを即席に製す

座興の爲咄が長くなる

これは當意即妙にその場で咄を拵へるので、題があるわけではない。貯へてある趣向でなしに、直に咄に仕上げるのです。けれどもそこでやるのは一人なのですから、あまり咄が短くては御座興にならない。どうしても長くなる。この御座敷へ出てやる咄があつたといふことが、後に寄席興行をする時分に非常に都合がよかつた。それは咄が長くなつてゐた爲であります。

尤もこの時分に淨瑠璃作者の司馬芝叟が、一夜讀切の長話をして居ります。それも連中があつて、幾度か催してゐるらしい。その中の話が往々淨瑠璃の中へ使はれたり、芝居の狂言になつたりしてゐるので、誰でも知つてゐる

「朝顔日記」などは、やはりこの長話から出て來たのです。けれども芝叟の話は當時の江戸で喜ばれなかつたらしく、只大坂では多少反響があつたやうに思はれます。

落咄の移り變り

さういふやうなわけで、安永、天明、寛政といふ風に、落咄といふものがだん／＼變つて居ります。どうしても噺の會以前になりますと、實演といつても大袈裟なことは無い。素人が座興までに、計畫的でなしに話すので、それには洒落をころがし出した程度でも、をかしいだけのものにはなれたのです。それが噺の會をやるといふことになると、人を集めるのですから、已に計畫的でもあり、一人ではいけませんから、自然連中が出來る。安永度の御座興時代に在つては、降つて湧いたやうなもので差支無かつたが、噺の會時分になつては、もう餘興ではありません。本當の藝當である。かうなると誰でも出來るといふわけには行かない。噺の會へ出てやつて見るといふのには、素人でも自信ある者でなければいけないといふことになります。

それから寛政度になりますと、御座敷がだん／＼盛になつて、彼方へ呼ばれたり此方へ呼ばれたりする。一人で行つて十分に御座興を添へるには、長い咄でなければならぬ、長い咄はどうしてもムダで運んで行かなければならない、といふことになるのです。併し焉馬が實演の元祖になつた、その連中といふものは、とにかく狂歌でも詠んで見ようといふやうな人達で、柄行も宜しいし、ものも知つてゐる。上方の方とすれば、大道藝にまでなつてゐる評話でありますが、江戸ではもう少し御品よくやつて行くことが出來たのです。

豆藏のやる掛合のムダ

けれども一方ではさうばかりも參りませんので、寛政頃の瓦版と思はれる「山下八景」の中には、豆藏の落咄を掛合でやつてゐるところが書いてあります。それをこゝへ出して置きませう。

三公「サアゑらくはつせへ、これがこの山下だ、こつちらの人だかりは、こび八に三藏だ、一
はゝちと中見ていくべい、
まめ蔵「ときにこび八てめへと久しくかけ合ねへ、
こび「おめへと久しくかけ出さねへ、
三蔵「なにかけ出すんじやアねへ、かけ合んだ、
こび「かけ合んじやアおめへに叶はねへ、おらはびつこだ、
三蔵「それはかけ出すのだ　まあこび八、てめへもとはなんだ、
こび「おれはげいしやだ、
三蔵「げいしやはどこでした、
こび「おれは深川、
三蔵「ふか川はおもてやぐらか、うらやぐらか、
こび「いんにや火の見やぐらだ、
三蔵「なぜげいしやが火の見やぐらにゐた、
こび「番太郎にさつまいもをかりてくつた、
三蔵「おきやあがれ、

二つの落を一つに纒める

これは當時山下で名高い、こび藏に三藏といふ名高い豆蔵の藝です、これは短い咄でありますが、二人掛合でやりますから、ちよつと間が延びて行くところがある。とにかく豆蔵の落語といふものは、焉馬の催があつてから數年たつて居るのに、こんな按配式に實演されて居つた、といふことが、この瓦版によつてわかります。豆蔵の方は掛

合で行かなければ、仕事がまづい。これは趣向の上からもさうですし、藝の柄行から行つても、さうでなければ丁合が惡い。焉馬や何かの連中が、豆藏から離れて實演出來るといふことも、藝は同じ落咄でありますが、氣味合に格別なところのあつたことがわかります。この豆藏の藝では、噺の會でもいけますまい。況して御座敷へ持出して、相當な人に聞いて貰ふことは尙いけない。けれどもこゝで一つ見逃せないことは、この豆藏のやつは短い二つの咄を一つにしてゐる。だから直に落ちません。前半が一つの咄になつてゐるのですが、それをムダにしてしまつて、後半と續けて一つの咄にしてゐる。だん〳〵長咄になつて行く姿は、かういふところからも見られやしないかと思ひます。この咄は「おらはびつくりこだ」といふのが一つの落で、胸が燒けるといふのがもう一つの落になつてゐる。落が二つあるのを、前の方の落はムダにして、一つの咄に拵へてゐるのであります。

寄席の出來るまで

一人で長く話すが名人

それですからこの一つの落をムダにしてゐる間へ、仕形、身振、物眞似、聲色、音曲といふやうなものを入れて、此雜物も皆ムダなのですが、それで進展させて行かうといふことにもなる。豆藏の藝と幇間の藝、この持込まれた二つのものが、同じやうであつて同じでない味ひのものであります爲に、咄の行き方が變つても參ります。豆藏の方は仕掛にも仕退きにも出來ますが、幇間の方は幾人も替るわけに行かないことが多い。一人で長い丁場を持つことが困難なので、それの出來るものが名人上手、といふことになるのです。この名人上手といふことは、寄席の興行があるやうになつてから、愈〻著しくなりました。寄席の高座となりますと、同業との會合に洒落のかたまりを拋り出して、面白がつてゐるやうなわけには行きません。野天でやる豆藏、酒の座の幇間、噺の會の通人氣取、御座敷の御伽などとは又違つたものになるのであります。

寄席の初り

そこで寄席といふものは何時出來たかと云ひますと、大坂下りの岡本萬作といふ者が、神田豊嶋町の藁店で、はじめて有料の興行を致しました。このビラには「頓作輕口噺」と書いてあります。頓作といふのですから、即席だつたに違ひない。題を貰つたものだらうと思ひます。江戸では輕口といふことは申しませんで、落噺とばかり云つて來ましたから、こゝのところが大變耳立つたものでせう。ビラに書いてあるところを見ますと、高座へ上つて見臺に書物を載せ、開いた扇を持つてゐる姿になつて居ります。寄席のビラといふものは、この岡本萬作の時からはじまつたので、珍しいわけでありました。噺をする人間の姿も、このビラにある通りで、珍しいものだつたのだらうと思ひます。

寛政四年五月に松田彌介といふ者が、京都から大坂へ下りまして、辻講釋のやうに、高い臺の上へ膝隱を置き、拍子木を敲いてやつた、といふことがありますが、萬作が江戸へ出てやつた藝當も、この松田彌介のやり方そのまゝであつたやうに思はれる。後々も上方の諢話は、膝隱を前に置いて、トン／＼と敲くので、下駄箱を敲くなんて悪口を云つたものです。この下駄箱を敲くことを考へると、前に志道軒が見臺を敲き立てゝ狂講をしたことがありますが、さういふ方の系統であつたやうに思はれる。江戸前の落語とは全く發達して來る筋道が違ふといふことは、この下駄箱だけを見ても明かであります。

江戸前の寄席興行

岡本萬作は二年餘り江戸で繁昌しましたが、それからはあまり評判が無くなつたやうです。江戸では誰が一番先に寄席へ出たかと云ひますと、それは三笑亭可樂であります。可樂は上槇町の櫛屋の職人で、又五郎といふ者でしたが、寛政十年六月に、下谷の柳の稻荷の社内で、二三の友達と寄席興行をやつて見た。これは岡本萬作が寄席興行をやるのを見て、思ひ立つたものらしいのです。何しろ素人細工ですから、噺の數が無いので、五日ほどでやめてしまひました。その後大に奮發しまして、文化元年六月には下谷廣徳寺門前の孔雀茶屋で夜講をやりました。その

時から三題噺をはじめたといふことです。

寄席になつての變化

この時分は「寛天見聞記」にも、

夫々晝は稼業有て夜斗り噺しする。

とあります通り、噺家が職業になつてゐたわけではない。晝間はめい／＼の家業をやつて、夜だけ咄をしたのです。可樂ははじめて錢を取る興行をやつたので、それから後は噺家といふものが、一つの職業をなすに至りました。落咄の先輩ではありますが、焉馬や慈悲成は寄席へは出なかつたので、可樂がはじめて寄席へ出たことになるのですが、この時分の寄席にはまだ定席といふものがありません。これも「寛天見聞記」に、

初めて寄席へ出た可樂

今の寄せといふ場所も定まらず、芝居休の頃、二丁町の茶屋の二階、又は廣き明き店など、五六日づゝ借受て咄する事也し、

と書いてあります。

寄席の定席が出來たのは文化の中頃の事で、神田明神社内の長谷川、池の端の吹貫、などといふのが早いのだらうといふことです。それが文化十二年には、寄席の數が七十五軒あつたといふことですが、更に十年たつた文政度には、百二十五軒に達してゐたと申します。この間に於ける寄席の流行方が、如何に烈しかつたかといふことも、これでよくわかりますし、又一般に落語の喜ばれた消息もわかるわけだと思ひます。

寄席の落咄の變りやう

かういふ風に寄席が盛になつた時から、安永度の落咄を回顧して見ますと、最初は素話の、然も短いものであつたのが、だん／＼雜物が飛込んで來て、長くもなつたが其變化の甚しさは吃驚ものです。この事は誰も知つてゐる

「飛鳥川」の中に出て來ますから、本文をこゝへ出して置きませう。

落咄しも昔いろ〳〵流行たる中に、殊に出來よしと、世に評判せしは、ある人此頃三味線を習ふと云、一座の面々、夫は一段の事也、何をならひ給ふと問ければ、岡崎を習ふと云、一座手を打、岡崎にても有まじとて、いづれも腹をかゝえて笑ふ、いや〳〵おか崎は、もはや上げたると云、そして何を習ひ給ふと問へば、女郎衆をならふと云、此咄し其頃第一の作とて皆々申せし也、奇麗にしていやらしくなくよいと申たるに、今(文化七)ではめつたに長く、聲色浄るり身ぶりたと交りてはなす、時世とておかしき事ともなりしたり、

ムダが大切になる

かういふ變化を致しましたのは、寄席といふものが出來て、高座を一人々々が或る時間だけは持つてやりますから、どうしても咄が長くもなし、ヤマが澤山なければならぬやうにもなる。ムダといふものが極めて大事なものになつて來ます。物眞似、聲色、身振、音曲、といつたやうなものが盛に入りますが、それがやはりムダなのです。さういふものを使つて參ります爲に、後には芝居咄だの、音曲咄だのといふものが出來て、いろ〳〵大道具を使つたり、鳴物を使つたりしてゐる。そんな事をして賑かにして見ても、獨一人だとだれる虞がある。一席の終の方になると、寂しくなつて來るので、それをひどく厭がつた。これは皆氣がついてゐることで、落語に限つた事ぢやございません、「我衣」の文化十年のところを見ると、こんな事が書いてあります。

抑此節のはやり物にて、諸藝とも皆かみ合にして、見物に退屈させぬを第一とする也、所謂藝の下手になりたるか、見物の功者になりたるかなるべし、軍書の講釋義太夫ぶんこ其外皆かけ合也、

それは藝が下手になつたからではありません。長丁場を一人で持たなければならないから、かういふ工夫が入るやうになつたので、どうかして長丁場を上手に持たしたい、といふことが考へられる結果、高座の藝がだん〳〵仕上つて來るわけなのです。けれども掛合といふ苦しい藝當をやつて、大勢高座に上るのは工合が悪いから、物眞似、

身振、聲色、音曲の持込み方が、いろ〳〵に違つて來るのであります。

寄席といふものが江戸で成功して、大變な勢になつて參りますと、高座の落語も豪儀な勢になつて來る。後來も寄席の藝と云つて、一つ別にするやうになりました。これは落咄ばかりではない、噺にしろ、淨瑠璃にしろ、皆御座敷のとは違ふものになつて居ります。

繰返しにくい高座取りの趣向

三馬は「膝栗毛」の初編が出た享和二年には、まだ中本は一つも出して居りません。そこで大に考へまして、前に出してゐた物眞似の方をやめて、寄席の高座の落語をつかまへて、「浮世風呂」を出すことにしました。それが果して大受であつて、大に勝手がよかつたわけであります。當時に於ける寄席の流行、寄席の勢といふものを背負ふ爲に、今まで手をつけかけてゐた物眞似は一切棄てゝ、高座の藝をそつくり取入れた。それが滑稽本の面目を一新することにもなつて居ります。

三馬は寄席の落語を取り入れる

高座取りは三馬に次いで文政八年に、瀧亭鯉丈が「牛嶋土産」を出しました。これは文政度の寄席の高座から取つて來たのです。鯉丈は後に吉原の幇間になりました瀧亭鯉樂といふ噺家の弟子で、自分も高座へ出て居ります。高座取りに就きましては、鯉丈は自分がそれ者でありまして、實際にやつてゐる。鯉丈の高座は音曲入の落語であつて、題を客から貰つて、都々逸なんぞを作つてうたつたりして、大分評判がよかつたと云ひます。併しそれとても高座取りをもう一度繰返すことはしなかつた。

三馬は「浮世風呂」だけではありませんで、文化八年に「浮世床」を出して居ります。長い噺は落が噺のおしまひにあるといふまでのもので、落が全體に働いてゐるのではありません。どうしても落語といふことであると、落で全

小說では千篇一律の處

體が働いて居なければならぬのですが、だん／＼咄が長くなつて來ますと、どうもさうは行かない。化政度の咄の形で行くとすれば、無論落で働かすといふわけには參りません。落語としてはさういふわけでありますが、高座の藝と致しますと、いろ／＼咄の材料を替へたり、仕方を新しくしたりして寄席の方を賑はして行く、といふ變化が出來る。けれどもそれを文字に取つて、小說に仕立てゝ行かうといふことになりますと、どうしても千篇一律になつて來る處がある。それですから三馬のやうな人でも、「浮世風呂」、「浮世床」と二つは書いたけれども、その後はこの手で行かうとしなかつたのです。

鯉丈は「浮世床」の三編を書いて居りますが、それに春水が序文を書いて、この頃はずつと三馬が滑稽の筆を收めて、「風呂も床も續が出ない」と云つて居ります。鯉丈の「和合人」の溪齋の序文にも、三馬はこの頃滑稽の筆を止めてゐる、といふことがある。これは何れも文政六年のものですが、溪齋の序文の方には、それは病氣の爲だから、ひたすら全快を待つ、といふことが書いてあつて、一時筆を執らぬやうになつてゐる。實際三馬の晩年は病氣勝で、執筆に疎くなつてゐたでもありませうが、「浮世風呂」、「浮世床」を出して後、十餘年間といふもの、抛り出して置いたといふのには、何かわけが無ければなるまいと思ひます。

これは別段に證據もありませんから、想像だけに止る話ですが、どう工夫して見ても、高座から取る趣向では變化が出來ない。その上にも／＼と、次から次へ變化して行くことが出來にくいから、後を書かなかつたのではあるまいかと思ふ。十分筆を續けるのに差支無いだけ、變化の出來るものでないことを、知つてゐた爲ではないかと思ふのです。目先を變へることが出來ないとすれば、何とか轉向しなければなりませんが、扨どういふ風に振替へて行くか、これから先どうするかと云へば、先づ茶番に行くより仕方が無い。そのうちに彼は病を獲て、もう一遍滑稽本を變化させるだけの働きを試みることが出來なかつたものではないか、と思はれる。

これは何も一九や三馬や鯉丈にばかり限つたことではない。どの作家も咄から取つた書き物は、二の矢三の矢といふ風に、その手で進んで行くことは出來なかつたらしいのです。前に申しました「杜撰商」や「願懸注文帳」、一九の「金儲花盛場」と云つたやうな覘ひのものは、それが隨分澤山あるやうですけれども、皆二の矢を次いで居りません。又同じ一九の黄表紙に、桃太郎や鼠の嫁入を取込んだものが幾つもあります。これは他の作者にもありますが、皆それほどの效果が擧つてゐない。中本、合卷としましても、そこらを覘つたものであると、度々蒸返して行くことはむづかしかつたやうです。

茶番仕立の「八笑人」と「和合人」

寄席の方はどん〳〵繁昌して行くけれども、中本や合卷物の滑稽本は、讀者が違ふ爲でもありませう、口と筆との違ひもありませうが、どうしても續かない。そこで中本を四度目に變化させたのは誰だといふと、それは鯉丈だといふことになる。どういふ趣向で行つたかと云ふと、茶番を覘つて行つた。茶番ら〳〵化政度の茶番で、ごく新しいところを覘つて仕立てゝ行つた、それが鯉丈の「八笑人」、「和合人」でありまして、大當りをしたわけであります。

俄と茶番の差別

一九は俄から取つたのでありますが、鯉丈は茶番から取つた。この俄と茶番とはどう違ふかといふことも、一通り眺めて置かないと、一九と鯉丈の味の違ふことがわかりにくいだらうと思ひます。俄と茶番といふことに就ては、蜀山人が早く「俗耳鼓吹」(大明八年)の中に書いて居ります。

俄と茶番とは似て非なるもの也、俄は大坂より始る、今曾我祭に役者のする是俄なり、ナンダ〳〵と問はれて、思ひ付の事をいふ是なり、茶番は江戸の戯場より起る、もと楽屋の三階にて、茶番にあたりし役者は、いろ〳〵の工夫を思ひ付、景物

をいだせしを茶番／＼といひしより、いつとなく今の戯場の例になれり、獨狂言の身ぶりありて、その思ひ付によりて、景物を出すを茶番といふなり、今専ら都下に盛也、

これだけ讀んで見ても、俄と茶番とは生れの違つたものだといふことがわかる。尙三馬は文政四年に「茶番早合點」の初編を出し、二編は七年に出して居りますが、その中に俄と茶番の差別を說いて居ります。

俄狂言と一ツにならぬやう心得有べし、不功者なる人の狂言茶番は、多く俄狂言になる物なり、たとへば、ある人、居合拔の題なりしに、居合拔の拵にて、請太刀の小僧を相手にして、居合のふりまじめに存分有て引込、扨景物には、三寶に歯磨をあまた積て出したりき、是何の趣もなく、題の通りにて、をかしくも何ともなし、是等を茶番と心得て居る人多し、歎かしき事也、立廻りの狂言に、をかしみあるを俄狂言といふべし、景物を出すを主として、それにさま／＼の趣向利屈などをこじつけ、笑を取るを茶番と云べし、此境よく／＼弁て混ぜざるやうにすべし、

俄の方は流しをもとゝしたものですから、無言のものさへあるといふことは前にも申しましたが、茶番の方は景物を出すのを主にしてゐるので、景物について言葉が入る、その言葉にをかしみがあるやうにしてある。このわけといふものは、兩者の差別さへ呑込めば直ぐわかることです。茶番は幕を引くが、俄は幕を引かないといふやうなことも、全く生れが違ふ爲なのであります。

諸書に見えた俄の様子

吉原の俄

それですから何も俄といふものは、上方に生れたから上方だけ、といふものではない。俄は江戸へ持つて來ても、やはり同じ型をして居ります。明和四年以來、新吉原に俄といふものが出來た。その様子は安永六年の俄番附ともいふべき「明月餘情」といふものがある、その跋を讀んで見ましても、茶番とも違つて居り、芝居とも同じでない、

といふやうなことが書いてあります。

郭中に物あり、首は茶番、尾は祭禮、足手は踊の如くにて、聲色、芝居に似たるものは何也々々、是則俄てふ物にして、日々夜々趣向同じからず、

殊に吉原の俄なんぞでは、景物を出すのでもない、最初の俄の様子を見ますと、言葉の無いのがある、落も無論無いのがある。廓の俄は上方と同じに、祭禮の邌物の氣持があるのです。それもその筈で、最初に北野天滿宮を鎮座して、その御祭から始まつてゐるのですから、祭禮の邌物の氣持があるのは當前の話である。それですから純然たる俄もあり、踊や囃子を主としたのもある。俄ではないが、御祭には出さうな代物なので、「明月餘情」の中を見て行くと、大神樂の男俄、座頭をどりの男俄などといふものもある。これは上方と同じ氣なので、元來京都の遊廓の眞似をしたのですから、上方そつくりな筈でもあるのです。

それに例の素人狂言の影響もありますから、多少の違ひを生じて來る。「吉原春秋二度の景物」などといふものがありますが、それを見ると、

此頃はにはかと云は狂言にあらず、祭禮のと違ひ、頓作の滑稽をむねとしける、

といふ風に書いてある。蜀山人の「一話一言」は大坂で見聞したまゝを書いたものですが、その中に、

俄といふもの多く來れり、大勢にて仕組とするもあり、又一人にて思ひ付て、あちこちとまにらかれありくを、俗に流しといふ、

とあります。吉原の俄はその通りでもありません。併し流しといふことになりますと、やはり上方にある俄のやうなのが普通なので、只一人でやつて歩くといふやうなものが無いだけの話です。

深川八幡の邌物

これは吉原ばかりではありません、「夢浮橋」の附録にある深川八幡の祭禮の邌物の中で、八番目にある大島町古石場の邌物などは、全く上方の古い俄の形をしてゐるやうに思ひます。

古今雛の立姿、次郎左衛門のおかしみ、紙雛のきうくつ、きり禿上下のはやし方、雛人形のおどり屋臺を、からくり臺にして、それを廻しておどる趣向、雛棚の諸道具にさまざまのおかしみ、よき思ひ附きとの事なりし、御腰元の女子、同じ年頃のみめよき女子、……其中に同じせいながら横ひろく色黒く、大あばたの男、顔の化はい、髪のはへぎわ見事にて、うつくしき振袖にて品もなく、つかつかと行におかしみあり、

奥女中十五人計……たもとよりはらぶと斜、大ぶかし、飾もじなどものしながら行く、おかしみ妙々、

これは腰元や奥女中などに扮して無言で歩いてゐるので、立止るわけでもない、すんすん行進してゐる。それを此本が俄だと思つて書きつけたのではありませんが、そつくり俄の形をしてゐることはよくわかるのであります。

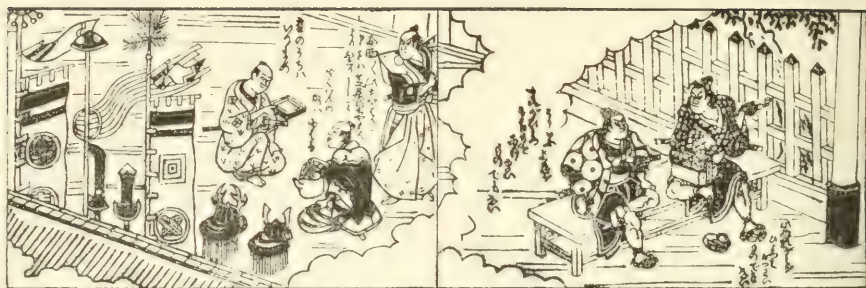
三馬も引いた「役者籤箱」

寶暦年間の茶番の一例

それでは茶番の起原沿革は、どういふ按配になつてゐるかと云ひますと、三馬は「茶番早合點」の中へ、寶暦十三年の役者評判記「役者籤箱」の江戸の卷を拔出して說明して居ります。三馬の引きましたのは全文でない、後半たけですが、こゝへは全文を出して置きませう。

○すぎはひははなれ物、ふり出したる圖景物

「はなれ駒の長吉まて、「なんだ、此長吉に待てと聲をかけたは、西のかたやの關取、ぬれ髮の長五郎ではないか、まてとはなんぞ用かな、「いやべつの事でもないが、ちとちからをかりたい程に、ちよつとそこへ腰をかけておくりやれ、「ちからをかりたいとはふさらおうなかし物ながら、其わけを聞ふかどりや、「何長吉、もし此度のすまひはいつにないはれわざ、だんだんと取あげて、あすはたがひに關と關、此ぬれがみが神ほとけの御ほうべんで、ひよつとかつまひ物でもないぞや、「ホヽウそれは神ほとけ迄もなく、音にきこへた濡髮、十が十ながらかちでも有ふが、かういふ長吉もまんが一ツうちわをあげまい物でもない、「さあ

「役者籤箱」の挿繪

そこを思ふによつて、ちゑがかりたいとはこゝの事、そなたは誰レあらふ、さがみのくにに名をふるふ、またの殿のおかゝへ、此長五郎は身ふせうながら、川津殿のかゝへ、此すまふ一ばんで、よりとも公の御大事、といふてとらずにもおかれぬ、「なる程其事はおれもかねてかくごはしながら、ふちをくらひこんだる此からだ、しやうぶは運に、「いや／＼それはあぶない／＼、若そなたがかつたらば、はなれ馬の平家方、いよ／＼ほこつて日のとめどが有まい、「いかさまそなたが父かちならば、ぬれがみ破りによりとも殿の、御身の上があやうい／＼、「そこじやによつて、ちゑがかりたいといふ事、「して又このしやうぶの付やうは、どうした物であらふ、「とつくりとくふうをしてお見やれ、「ハテなんとした物で有ふ、「長吉、「長五郎、「ハテ、「ハテなんとした物で有ふ○チョン／＼。

「中／＼これはまれ人はよふねてじや、中／＼おめさまされませう、「さてはゆめで有たか、「なんぞ夢を御らふじたか、「是は／＼あるじ殿か、これのかぶと人形、かはづまたのゝすまひの所、あまりようかざられたゆへ、うと／＼と見とれねいりました、「いやさき程仰られたは、此五月五日には都のかたにては、軒にしやうぶをふくと仰られたゆへ、いろ／＼とせんぎいたしたが、此國にしやうぶといふ物はござりませぬ、「なにしやうぶはないと、「なる程しやうぶはござりませぬが、ふるい者にうけ給はつたれば、其せうぶのかはりには、これ此重箱と此やくわんの内を、たび人にしんぜろと申たによつて、持てまいつた、是はどうした事でござりませうな、「なにしやうぶがないによつて、其重箱の内とやくわんの中チを、かはりとははてなんで有ふ、どれ／＼、まづ重のふたをひらいて見ませう、「さあ／＼、「重の内はまめいり、「やくはんの中はにばな、「ほんによいはながじや、これをしやうぶのかはりとは、「なんといふ事でござりませう、「ほんに思ひあたつた事がござる、むかしさねかたの中將、此みちのくへ下向の時、たんごのゝきにあやめをふかんと仰られしに、あやめは此

地にあらずとて、淺香ぬまのはながつみをふかれしためし、さては此茶のはなが、此いりまめをつんで、はながつみと申ス
が、ちやばんのけいぶつでござります、

茶番の沿革と解説

三馬はこゝで折半して、二つに遣つてをります。

東西〳〵、此茶ばんと申ス事は、其もと五十年このかたの事にして、もとは芝居の三がいよりおこりて、其ころ芝居大入には、三がい二かい打こんじて、茶ぐはしを出しいはひし事也、しかるに角至なんどゝいへるすきものより、だん〳〵風流になり、日〳〵新にして素人へわたる、まつた身ぶりは里住といへる人よりはじめて、ちかくは三落世にひろめて世にもてはやす、しかれば茶ばんはもと芝居の狂言のつかれを休めたるを、いつとなく狂言茶番と名付ケて、ぶたいと三がいをいつちになしたる、これ裏と表とがつたいしたるなり、これにくさ〳〵のしげきありて、太ゑんどのは其かたちおかしくして、しどうたしかならず、いはゞ秋の月をでんがくにして喰ふがごとし、流香はきたなくして、しぼめる花の水ばなをたらすがごとし、藤十郎といへるもの、此道にすきにして、六義ありとかけるもおこがましからずや、さて景物さま〳〵なる中に、かざり付あり、よそへ物あり、謎あり、しらあり、あつた闇にしてふる物は興あり、さらば此茶ばんの鬮箱に、役者紋づくし有、これを評判の口きりにして、第一ばんは團十郎、まづあなたへ景物をあげませう、

みづのとの　　作者　白露
ひつじの春陽　　　　自笑

前半のところは別にして、後半を寶暦年間の茶番の例として擧げて、解説の基礎にしてゐるのであります。

樂屋に發生した茶番

この本文の中に、五十年以降茶番が行はれたと書いてありますが、寶暦十三年に出版された「役者簑箱」ですから、

その年から算へると、正德四年になるわけです。併しかういふ場合、さう嚴重に計算すべきものでもありますまい。大凡に見當をつけたらよからうと思ひます。

茶番と酒番

三馬は尙これに補說しまして、茶番、酒番と二通りあつたのが、茶番の方がだん／＼盛になつたといふことを記す爲に、「茶番早合點」の中に先輩から聞いたことを擧げて居ります。

或老人の云、芝居大人の時は當振舞の外に催すことなり、これは三階中二階に役者おの／＼聚會して、思ひ／＼に酒肴を調へ、日々の勞を慰る宴なり、されど酒肴をたゞに出さんも風情なしとて、其時の狂言によせ、又役割などによそへて、種々の題を出し、其むれの人々に先配りわたす、さてありて題を得たる人／＼、さま／＼に趣向を考へ、或はをかしみにて興を設け、或は利屈にて笑を取り、彼貯へし酒肴を携出、かはる／＼趣向を演べ、順番に勤ることなり、さて連中悉く終りて後、其景物をひらき、大宴を催す、しかるに享保の頃元祖澤村宗十郎訥子座頭なりし時、我等は元より下戶なれば、酒番はおもはしからず、菓子を景物にして、以來茶番を催すべしとありければ、一座同意して敎に從しとなん、是は酒番ある間／＼に行ひけるよし、しからば茶番といふ名目は、元祖訥子が號る所にして、此戲業の祖師ともいふべし。

これによりますと、澤村訥子が下戶だつた爲に、茶番が茶番らしくなつて來たのだ、といふことになつてゐる。

茶番の約束

茶番に就きましては、一に景物、二に趣向、三に口上と云ひ慣はされて居る位で、茶番は景物を出すのを主とする。俄の方に在つては、無言であつてもいゝのですが、茶番は決して無言であつてはならない。さういふ約束が最初から何故生じたかと云へば、もと／＼芝居の樂屋で發生したもので、當り祝その他の場合にやつたものですから、自然さういふ約束があり、無言ではならぬわけでもある。そのわけは前に引いた「役者籤箱」や「茶番早合點」を御讀みになればわかると思ひます。訥子が江戶へ參りましたのは享保三年で、座頭に歷上つたのは享保の末のことですから、年代的に申しても、俄と茶番との起原には大變な隔りがあつたことは、これだけでもよくわかるのであります。

抜けにくい茶番の芝居臭

茶番の心得

それから又「茶番早合點」には、茶番の心得に就て書いて居ります。

抑茶番の起原は前編にいへるごとく、戯場より出たるものなれば、趣向萬端、戯場の趣を離れざるは勿論の理也、されど茶番第一の心得は、戯場を離ずして、戯場を離るゝにあり、かくいへばむづかしきやうなれど、たとへば口上茶番にてもせりふ等、戯場の通りにいふかと思へば、がらりと様子かはりて、平生の詞になり、平生の體かと思ふ内に、いつとなく、又芝居に歸るごとくなるをいふ也、始より終まで、戯場の趣ばかりにては、玉子とぢ、あんかけの重き物ばかり喰ふがごとく、始は口にうまけれども、なづみてもたるゝ也、間〻にさし身ひたし物の類をくふにて、玉子とぢ、あんかけの味も、ことさら増るものなり、とかく新しき趣向にて人の目さきを驚かし、見物の退屈せぬやうに、氣を引立る事、第一也

茶番と芝居との關係

最初にともかく下廻りにせよ、役者がやつたのですから、なるべく芝居離れした方がよかつたので、なるべく地で行く方がいゝといふことになつたのですが、いくら地で行くにしても、根がそれ者の事ですから、どうしても芝居の臭が抜けない。後に役者でない者が茶番をするやうになつては、そこを又大に用心しなければならないので、素人がやる時分に、芝居臭くないやうにするといふのでは、どうも面白くない場合がある。そこに工夫もあれば苦心もあるのです。何しろ芝居の中に起つて、役者のする遊びに倣ふわけですから、芝居がかりにならねばならぬわけでもある。これが江戸の茶番の大體であります。況して素人狂言といふものと、この茶番とが合流したのですから、猶更以て芝居の臭が強くなる。尤も後には又變化が來て居りますが、とにかく化政度までのところでは、さういふわけのものだつたのです。

立茶番と口上茶番

そこで三馬は茶番を二つに分けて、立茶番——坐つてやるのでない、立廻りがあるから立茶番といふのと、もう

一つは口上茶番といふのとにして居ります。口上茶番の方は坐つてゐて趣向をしやべるので、趣向に從つて景物を取出して來る。ですから口上茶番は又坐り茶番とも云ひます。最初芝居者のやつた茶番は、何方であつたかと申しますと、それは口上が働く、口上が趣向なのですから、口上茶番の筋目になるわけであります。

立茶番が盛になつた譯

然るに口上茶番といふものは、それほどにはやりませんで、立茶番の方が盛になつて來た。それはどういふわけであるかと云ふと、慈悲成の「茶番樂屋」の中にも、

口上茶番といふやつが、見物がたぼや子供じやァやんやといはねへやつだ、口上茶番といふやつは、茶ば通がよく見てくれねへけりやァうれしくねへ。

と云つてあります通り、どうも女や子供にはわかりが悪い。褒めてくれない。口上茶番は茶番の通が見てくれなければ、うまく行かないと云ふのです。どうしても少しその道に黒いやつでなければ嬉しがらない。一般の興味といふわけに行かないので、茶番と云へば立茶番の事であるやうになつてしまつた。況して素人狂言が強く根を張つてゐるのですから、口上茶番では遣る方の者も納得出來ず、又上手にも行かなかつたかも知れません。素人狂言がかなりに發達をして居つて、その影響が十分あつたから、立茶番が盛になつたのではないかとさへ思はれる。

もとを忘れた茶番の流行

寶暦明和の茶番師

それですから茶番の中にも、狂言茶番といふのがあります。これはどんなものであつたかと云ひますと、前に引用しました「役者篋箱」の前半、あれが狂言茶番の形です。あの後半のところに、茶番が素人に渡つたといふことが書いてある。それを寶暦度の事としまして、角至、里住、三落、他園、流香、藤十郎、一瓢、白壺、如齋、三樂、金福、陽堂、悪鬼、來道、といふやうな人の名を擧げ、此等の人は寶暦、明和の茶番師だと云つて居ります。もう

この時に茶番師といふものが出來てゐたのです。大坂で云へば俄ダニといふやつで、さういふ專門家があつた。尤も前の素人といふのも、役者でないといふだけで、誰でもするわけではありません。

明和から寬政度の連中

それから烏馬、今日吉、これは明和から化政度までの間に名高い男だと云つてゐる。烏馬は咄の會以前から茶番をやつて居りますが、これは商賣ではない、物數寄でやるのです。安永、天明になりますと、杜芳、京傳、好屋（北川嘉兵衛は狂歌堂眞顏を以て知らる、「戲作者小傳」に、茶番をよくして好屋翁といふ、茶物を段がへしにつかふ事も此翁より始るといへりとあり）、などといふのが出て來る。寬政度には秀朝、晉象、豐川、英賀、古石、竹鳴、井季、漁交、吉傳、松曉、慈悲成、種彦、なんていふ連中が出て來る。此等は何れも素人芝居の連中で、茶番師ではありません。又その外に、兩國連、藏前連、吉原連、本所連、深川連、淺草連、下谷連、神田連、芝連、山の手連、といふ風に、茶番の仲間が澤山ある。もうこの頃になりますと、茶番道具一式の損料屋さへ出來てゐる有樣でありました。けれども文化、文政度になりましては、茶番が芝居の樂屋から出たものだ、といふことさへ忘れられてゐる。役者のするのが酒番、素人のするのが茶番だと思つてゐる人があつたほどに、文化、文政度には茶番が一般にひろがつて來た。三馬がそれを辨じた文章がありますから、こゝへ出して置きませう。

茶番狂言といふものは、今より百十餘年のいにしへ、寶永の頃にはじまり、享保にいたりて、ます／＼開け、寶暦明和の間、盛に流行しけるとなん、勿論寶永より享保の間は、三芝居の樂屋にのみありて、役者おの／＼戯れに玩弄したる事なりしが、寶暦の頃、頻に行はれてより、此業、素人に傳來し、安永天明に趣向いよ／＼新にして、今猶專ら奇を盡し、すべて素人の玩物となりければ、竟に茶番といふ名は三芝居に絶たり、今樂屋において、酒番といふものたえず興行あり、世人おもひひがみて、戯子の爲るをば酒番と呼び、素人の爲るを茶番と號るよし覺たるは大きなる誤りなり、

曾我祭に於ける俄

それから又「劇場新話」の中に、芝居の年中行事を書きつけてありますが、例の曾我祭を行ひます際に、俄をやり、茶番をやつた、その狀況が書いてある。

五月二十八日、曾我祭り也、此始りは春狂言評判宜しく打替て大當りの時は、中古迄樂屋に於て祭禮を取行ひ、總座中酒宴を催し祝ひたるが、今は曾我狂言を舞納めて後、樂屋にて祭るを影祭りと云、又格別の大當りにて打續きたる時は、例年曾我の兩社の神輿、仕切場に鎭護して、四方に注連繩を引き、神前には數々の供物を備へ、甚花麗なる事にて、仕切場の入口には、御祭禮の大幟を建、かざり物の燈籠、口合の繪行燈、表裏にしげし、神輿を留場口より本舞臺へかき出し、芝居に拘りたる人々は、役者に限らず、思ひ〳〵の伊達衣裳に、蝶と千鳥を染出したるか、或は縫にしたる揃ひの手拭を、頭又は肩に打掛て、花出し、ねり物囃立て、東西の花道より本舞臺へねり込、長唄にて雀躍り花笠躍り等の大踊有り、尤立役女形とも皆一樣のはでなる姿にて幾組となく出る、終て後大勢交り、樣々の見立狂言俄茶番物まね身盡し等數々ありて、其面白き事たとへるに物なし、

この文章によりますと、寶曆六年の市村座が、春狂言から引續き大當りだつたので、從來は樂屋だけでやつてゐた曾我祭を、舞臺へ持出して大袈裟にやるやうになつた。それが癖になりまして、歌舞伎三座で定例にするやうになつたのです。ところが寬政六年五月、あまり大袈裟にやつた爲に差止められて、爾來影祭にすることになつた。その時から樂屋でする俄も絕え、茶番も絕えてしまつたわけで、ひつそりしてしまつた。茶番の賑しかつたのは、芝居の方で申せば三十六年ほどの事になります。

樂屋でする俄の衰微

それですから「あづまなまり」の中に、

曾我祭の俄にいふめるなんだ〳〵の類にあらず、

とあるのや、「巴人集」の歌に、

曾我祭いりくる人も俄雨なんだ〳〵と聲のしきり場、

とあるのも、やはり俄をやつた賑かさであります。芝居の方は前にも申しました通り、茶番でなしに俄の方が世間に知られてゐる。茶番の方が衰へたことは、大分早くからのやうに思はれます。

曾我祭の俄の模樣

二三座明鏡に曾我祭の俄に就て、その模樣を書いて居ります。

京都大坂の俄とは違ひ、又江戸吉原の俄とも違ひ、此俄の地口は狂言にしてみせる、たとへば鹽谷判官の前へ、力彌三方に艾を乘せて置き、お目からも宜敷と云、判官これを見て、力彌、由良之助はと云と、力彌未だ參上致ませぬと云と、判官硯箱を出し、おのれが臍の雨際に灸點にしるす、亦力彌と、はげ敷云て、由良の助はと顏見合はせ、力彌愁て、何と未だ參上仕ませぬと云、判官是非に及ばず、灸を一つのせて火を移す、齒を喰〆苦敷となし、此内向ばた〳〵にて由良の助出て來り、謹て手をつくと、判官、由良の助かと云、ハツトいひ、是れにてうしろから、何だ〳〵といふ、判官かわ切と云、

この樣子を眺めますと、狂言茶番といふものが出來たやうに、俄狂言といふものが出來たらしく見える。そこが俄の事ですから、景物を出すやうなことは無い。落語に形のついたやうなもので、どこまでも落語仕立で行つてゐるやうに見えもするのであります。

茶番と素人狂言との合流

俄と茶番の歩み寄り

こゝまで來て見ますと、芝居の方に俄や茶番が絕えぬ前に於て、口合俄と似たやうな趣向で、ちよつと趣の違つたものが曾我祭の俄だつたらしい。それはそつくり持つて來て、落語にすることの出來るものです。勿論身振聲色はついてゐる。この邊までは俄と茶番とは別々のものですが、ごつちやになりさうなところも持つてゐる。出發點は別だけれども、經過上步み寄つたと申してもいゝでせう。それが又芝居と寄席との因果關係をなすやうにもなつ

てゐるのです。

安永二年に出版された「當世作の種」といふ本があります。この本は「當世作の種と申書をあらはし御意に入ます」といふ書出しで「御酒宴の坐席にて、俄に狂言を作り、さつと一盃のんだり、咲ふたりの作の種でござります、是を茶番にも御用ひ被遊ますやうに、景物も書しるしましてござります」と云つて、いくつも例を擧げて居ります。こゝには短いのを一つ擧げて置きませう。

人足まはし

此狂言は上がたのにはかにてあんじ申候

罷出たる者は大名の荷物でござる、毎年〳〵御江戸へ参れど、ひとり旅はさみしうござるほどに、人足をよびよせて、つれまいらうと存じる、へい〳〵、人足どもゐるか〳〵、「はあ、といふて多勢人足いづる、「荷につゐて、こうまいれ、「人足どもおほぜいにて島田金谷のをうたうてはいる也まく、

此狂言のしうち、始は能の狂言の心、しまひは芝居なり、人足とて姿、雲助または百姓のすがたなどは、面々のおもひつきあるべし。

景物には

東海道五十三驛の名物になぞらへ出さば、何なりとも大分あるべし、

菓子などを荷物のやうにつゝみて引などか、

俄と茶番と落語の融通

俄を茶番に應用し、茶番を俄に振替へることが自由に出來るといふことは、この本によつてよく知れるのです。俄も茶番も御互に融通することが出來る。それは又落語にすることも出來る。落語を俄や茶番に振替へることも出來る。俄や茶番はハネを大事にして居りません。ハネよりもアブラに力を入れることは、安永を境に大坂俄に見る

大きな變化ですが、こゝに引いた例から見ましても、「身について」を「荷につるて」といふ、これが口合俄です。口合俄といふのは地口でありまして、地口は洒落ですから、同じやうになり行きさうなわけであります。

氣取もこの頃は安永度ですから、俄の方には能狂言の氣取がある。茶番の方には勿論芝居の氣取が十分ある。俄に能狂言の氣取があることは、前申した大名俄の大盡達が、幇間を連れてやつた、その爲なので、茶番に芝居氣取があることは、それ自體芝居の中に生れたのみならず、合流した素人狂言の影響があることも勿論であります。

茶番と素人狂言の關係

寶曆度に茶番師のあつたことは、前に申した通りでありますが、茶番と素人狂言とを同一に眺めることは、三馬が文化九年に書いた「素人狂言紋切形」の自序にも、

…賣茶翁がお手まへを見ずして、我から茶番師と稱り、俳優某が足どりをも學ずして、他に狂言師と呼る　一瓢、白兎如在、富士藏等が屬の人、寶曆より安永中、各狂言茶番に名あれど、下流を汲て水原遠く、且當生となせる故、眞の素人といふべきにあらず、

熟素人狂言の主意を監るに、自他を撰ばず、無我に至り、己を喪て他を育す、其故如何となれば、吾飯を食て他の口伎をつかひ、我腹を耗して他の介料をまねる、是便ち自他を撰ばずして、無我に至るにあらずや、吾幾日の產業を廢て、他に一夜の酒宴を華し、我雜費を不厭して、他に景物の饗頭を患む、是乃ち己を喪て他を育するにあらずや、

と云つてあります、けれどもこれは同一でない、別々に發生したものなのです。但この序文のみならず、「素人狂言紋切形」といふものが已に茶番の本なのですから、後には兩者別々にしてゐるけれども、この頃まではごつちやに云つて居つたやうであります。

素人狂言の盛行

勿論素人狂言と云はれたものゝ中には、商賣にしたものもあり、物數寄のものもある。素人と云つたところで、役者でないと云ふ意味に解さないといけません。茶番といふ言葉は、寶曆度に已にあつたので、「續百化鳥」(寶曆六年)の跋にこんなことが書いてある。

流霞燗が茗番誌にいわく、藝はじみざるをよしとし、せりふは短かきを主とすと、宜哉是素人藝の龜鑑なり、

「茗番誌」といふ本はまだ見て居りませんが、この跋文の中の文句を見ても、その樣子がわかると思ひます。併し寶曆當時の素人狂言の樣子がどんなであつたかといふことに就ては、あまり書いたものを見かけません。明和五年版の「楚古良探」、これは談義物を書きました伊藤單朴の遺稿として出版されたものです。單朴は寶曆八年八月四日に亡くなつて居りますから、明和五年に出た本ではありますが、この書き物は寶曆度のものであることは、申すまでもあるまいと思ひます。さりとてこゝに書いてある事柄を、そのまゝ鵜呑にして、事實とすることも出來ませんが、これによつて當時の模樣が想像されぬわけでもない。その模樣は物數寄な十幾人の連中で、素人狂言をすることが書いてある。この連中の一人の下屋敷には、いつでも舞臺があり、當時茶番師といふものがあつたことも書いてある。それは三馬が寶曆度に茶番師があつたと云つて、名前を列擧してゐる通りでありますから、疑も無からうと思ひます。設備が整つてゐたことも窺はれますし、又それほど素人狂言に身を入れるのらくら者があつたこともわかる。その模樣がよく見えるやうに、本文を入れて置きませう。

素人狂言の模樣

此所よりすぐに寺町の喜惣太が奧の坐しきへなりこみ、天かける鳥の聲、地を走る夜駕のかへるまで、座しき狂言、當時名高ひ素人の名人は、今晩御やしきへ參り候との返詞、是非なく少し欠なれども、立役女形童戯實惡詰、はやしまで誘引した、さあ〳〵とせり立られ、みな〳〵支度に宿〳〵へ飛行、立ながら茶漬喰ひながら、腹へ茶わんで引かけ、舞臺衣裝小脇に搔込、何がしは平家の侍、定めて景淸なるべしと、手廻しに額へ藪藍やら、何やらぬり付て、一さんに走來る、中にも地主多

尾四郎は食事きげんもあらばこそ、何やら懐へねぢこみ出るを、息子の鈍七、爺さま、何さしやるぞ、是見よ〳〵、晩の土産は鮭の子餅、おかしいか〳〵と、鎌髭を出して見せ、各喜忠太がゆさん所とも、内では下屋敷ともいふめる宿り場へいたれば、亭主早速座敷をかたづけ、兼て巧し事なれば、たちまち舞臺桟敷總張切落し中の間追込と、それ〳〵の場所、芝居の様子に少も違はず、何れも奇妙〳〵と褒美の聲、

さういふ有様でありましたが、芝居町御觸書を見ますと、明暦元年五月に、誰でも御座敷へ呼ばれても、歌舞伎の眞似をしてはならぬ、といふ達しがあり、寛文二年十月にも、屋敷方や町方でも、呼ばれて行つて芝居をしてはならぬ、といふ達しがある。堺町、葺屋町、木挽町の三町から、藝をする爲に呼ばれることは古くからあつたやうです。それは例の喜三二の書いた「古朽木」、あれは安永五年版ですが、あの中に御用町人のところへ御姫様を請じて、座敷狂言を御目にかけることが出て來ます。その本文もこゝへ出して置きますが、やはり本當の役者を呼んで、新作を御覧に入れたのであります。

役者の座敷狂言

次の大座敷は惣敷に取放して、何か面白いことのあるしつらい、定めて影人形碁盤人形などの御馳走にこそと思ひの外、三芝居の立者親玉を先として、當時若手の利者十餘人、小山にては慶子以下名取の色子、中ノ立物に至る、其數凡そ三十餘人、むだな物をとりのけて、能い物盡しの坐敷狂言、姫君耳にのみ聞し役者を目前に御覽有し事なれば、かゝる面白きことの又あるべきとも思ひ給はず、日本一の御機嫌にて、おもても白やと玉垂を引のけたくも思召ける。

滑稽でない「三階圖繪」

享保十八年版の「名物かのこ」などを見ますと、市村座のことを書いたところに、役者が御屋敷へ呼ばれたから休場する、といふことがある。かういふ例は捜したらまだいくらもあらうと思ひますが、本當の役者が呼ばれて行つ

素人の座敷狂言

て藝をする。それを眞似て素人が狂言をやる。無論舞臺ではないから座敷狂言ですが、素人が座敷狂言をやるやうになつたのは、黒人(くろうと)のやるのからはじまつて、素人に移つたものと思はれる。「素人狂言藝古本茶番三階圖繪」などといふものも出て居りますが、その目次をこゝへ擧げて置きます。

一狂言心得の事、二舞臺の圖、三顏の仕様の事、四舞臺かけ樣の事、五狂言氣取りの事十五ケ條、六衣裳の模樣、七同仕立樣の事、

これだけ眺めても滑稽なものではなく、眞面目なものであることがわかる。この本は十冊出る筈のものが一冊しか出て居らず、刊年は知れませんが、明和頃のものちやないかと思はれます。殊に役々の衣裳、かつら、顏の拵へ、氣持、といふやうなものを解説して居りますが、そのうちの景淸の氣持といふのを一つ擧げて置きませう。

いたつてむづかし、まづ工藤の氣もちなり、扨やつしなぞにて、百姓あるひは商人となること有、ゑて百姓町人のあなばかりに氣をつけ、かげ淸の本意をうしなふ、これ第一の祕事也、氣どりはあんばいあること也、百姓町人と成とも、隨分ことばのいやしくならぬよふにすべし、是等狂言の傳じゆごと也、

これを見ても益〻その眞面目さ加減のわかるもので、「楚古良探」と比べると大分の差がある。この本が十冊物で一冊しか出なかつたのは、恐らく賣れなかつた爲で、それは何故かと云へば、流行外れだつた爲だらうと思ひます。「楚古良探」に書いてあるのが寶暦度の素人狂言の樣子とすれば、「三階圖繪」のはそれ以前でないかとさへ考へられる。

幕開の口上と役人觸

尙「楚古良探」の中にある椎茸銀庵の幕開の口上と、福梨貧九郎の役人觸とをこゝへ擧げて置きます。

今晩の狂言の惣名題、審判官分散車、伴頭はいろと酒に首だけはまる池の庄司、手代は博奕と腹汁に身も亡した十人の殿原、舅は箪の身上を取込勝負の下心、すぐならぬ横山が毒酒、姑は嫉をふすべて外面如菩薩、内心鬼鹿毛と申が、今晩の新狂

言、役人替名の次第、

春の判官金捨には坐元、町内の御家持鼻毛長太郎樣、池の庄司には杉たてる門の酒屋、三輪の伴頭、妻は居れども夜みへず、毎夜の四ツ過に御身、潜り戸開てくれ、時限も今宵計りなりと、念頃に賴て四ツ手乘右衛門、二番目野非人宿内、二役照天の姫に菊子鍛屋のおはね、惣じて世間へ湛とあると見せて、氣をはる狂言の始り、此旨地借店かり召仕まで、急度申きかせ候間、油斷なく見物いたさるべし、

この中に女形に踊子を連れて來てやらせる、といふことが書いてありますが、これは如何にもありさうな事です。「語り」といふものは今はありませんが、古い脚本には皆ついてゐます。その語りを幕開の口上に述べてゐるので、後々は惣外題の上に書くだけのものゝやうに思はれてゐますが、この時分は幕開の時に云つたらしい。この事に就ては演劇史家の教を受けたく思つて居ります。

能樂者の顏觸

素人芝居といふものは、大體さういふやうな經過をしてゐるのでありますが、それが茶番の流行するに際して合流してしまふ。これは芝居臭い臭味の上からも、投合しさうにも思はれるのですが、素人芝居にも連中があつたやうに、茶番にも連中があつたのです。この連中を三馬や鯉丈は「能樂者」と云つて居ります。

能樂者といふ意味

この言葉は寶曆度の「下手談義」の中に見えて居りますが、能樂者といふ文字も、よみ方も全く同じであります。その意味では暖氣な者、苦勞の無い者といふことのやうですが、一般にはどうかと云ふと、それまでのところでは、ノウラクモノよりはノラ者でありました。それが天明になると、ノラクラ者といふことになつてゐる。ノラクラ者といふ言葉は、今日でも通用して居りますが、一九なども彌次郎兵衛の事を「のうらく者」と云ひ、又「同じ

はたけの能樂連中」などとも書いて居ります。それも畢竟ノラクラ者といふ世間一般の稱を避けたので、一九は又彌次喜多をつかまへて「騷士」と書いてゐる。鯉丈も「八笑人」や「和合人」の連中を、田夫野人と一緒にしたくない、いくらか風流な者にしたいので、特に能樂者などといふ言葉を持出したのではないかと思はれる。

能樂者の吟味

そこで少しこの連中の樣子を吟味して見る。どんなのが能樂者であるかといふと、「八笑人」の左次郎に致しても、「和合人」の和次郎に致しても、皆それが富裕な町家の息子で、若隱居とでもいふやうな姿になつてゐる。「楚古良探」の鼻毛長太郎などはどうかと云へば、これも年の若い、裕な町家の當主である。「八笑人」、「和合人」と「楚古良探」との中に出て來る能樂者どもを眺めると、寶曆から文化までの間に、約五十年の距離はありますが、かうした連中が一人々々ではない。團體をなして出て來てゐる。かういふことは前にも多少あつたかも知れませんが、寶曆以來著しい事のやうに見えるのであります。

委しく長太郎の連中を當つて見ますと、醫者の銀庵、町内の書役貧九郎をはじめ、皿萬部屋哥右衞門、表具屋の達磨庄次郎、湯屋の赤で富右衞門、荒物屋の名和又太郎、簾屋喜忠太、菓子屋の松風在平、石屋の玄翁、佛具屋木魚、合羽屋桐油先生、豆腐屋雪花菜、若隱居の浮了軒、子供屋の加久蓮房、足袋屋の十文、と云つたやうな顏觸でありまして、單朴は此等の人物を一括して、

究竟の鈍ぬけ、何れも親の溜た金を開帳場の燒香の樣に、パッ〳〵と抓出してしまふやから、

と云つて居ります。此等は何れも無資力、無產業の者どもではないのです。

武家の能樂者布施傳七郎

以上は民間の事でありますが、武家の方はどうであるかと云ふと、あまり違つてはゐない。先づこれに近いやう

武家の能樂者

な有樣であります。民間の能樂者の樣子も、しつかりと記錄されたものはありませんが、武家にしても同樣である。あの「續飛鳥川」に書いてあります遊樂隱人、あれは元祿度に鳴らした小普請奉行、布施出雲守正房の惣領で、傳七郎正信と云つた人です。この人は惣領除になつた人で、家譜にも「多病タルニヨリ嗣ヲ辭ス」と書いてあります。惣領除といふのは廢嫡のことで、布施出雲守は傳七郎を廢嫡した爲に、わざ／＼養子を貰ひました。名を正降といふ人で、この人に七百石の家を繼がせたのです。實子を棄てゝ養子に家督させるといふことは、隨分辛い話でありましたらうが、傳七郎は能樂者でしたから、已むを得なかつたのでありませう。

遊樂のやりかた

能樂者といふのは、別に惡事を働くのではない。武家は墮落したために寶曆前後のところで、いろ／＼重い、輕い處分を受けた者が澤山ありますが、能樂者の連中はさういふ處分を受けるほどではないのです。傳七郎はどんな事をやつたかと云ひますと、頭を剃り飛ばして遊樂といふ名に替へ、手妻の道具や踊の道具を大風呂敷に包んで供に持たせ、どこと限らず、案内なしに通つて、手妻を使つたり踊を躍つたりする。さうして飽きた時分には暇乞なしに歸つてしまふのです。江戸中をさうやつて歩く家がだん／＼殖えて、どこと云はずに押歩くものですから、後にはおゝ遊樂さんが來たと云ふわけで、どこへだしぬけに行つても、別に咎める人も無い。手妻にしろ、踊にしろ、子供の遊びのやうなものだけれども、皆面白がつて見る。もつと上手にやる藝人達よりも、この方が素性も知れてゐるから、皆喜んで賴みに行くやうになる。彼方からも此方からも呼びに來るのを嬉しがつて、一生この人は遊び暮してしまつた。先づさういつたやうなわけのものだつたのであります。

結構人を生ずる時世

士民にかういふ者を生じて來る社會狀態、これは經濟說明に俟つべきものでありますが、財理だけで十分に說き

盡すことは出來なからうと思ふ。況してこの時は思想上の問題が提起されてゐるのであります。それですから田沼主殿頭意次の都會政策といふものは、なか〳〵意味が深いもので、一概に惡政だと云つて卻け難いのです。同時に又松平越中守定信の寛政改革といふものも、一概に善政だとばかりは云へぬのであります。

その當時にありました結構人といふもの、これに就て「昌平夜話」は次のやうに論じて居ります。

世に結構人と稱する者あり、貴惡を好むではなけれ共、柔弱にして才智もなく、嚴重にして正敷事を嫌、文武忠孝の勤を太儀がり、酒宴遊興に日を送り、何の用にも立ぬ者あり、是はさして惡をなすと思ふ程の事なけれども、風俗に障り、政教を破るの恐れあり、

かういふものがどうして出て來るか。結構人といふものがある少し先には、能樂者なんていふものが出て來る順序である。結構人といふのはどんなものかと云へば、天明の落首に、

世の中は諸事御尤有難い御前御機嫌さておそれ入る。

といふのがある。この落首は誰でも知つてゐますが、結構人といふのはこゝから出て來る。能樂者も亦こゝから出るのです。併しこの落首は天明の有樣であると思つてゐると、享保度の落首に、

手れんとは左樣でござる御尤御意の通りにおめでたい事。

といふのがあるのを皆忘れてゐる。天明の落首といふものは、何も天明當時の有樣だけでない、享保度から持越したものなのであります。

さういふ事は又どういふところから起るかと云ひますと、これは無事を願ふといふことから來てゐる。人心に不安を感ぜしめぬといふ事、安定せしめようとする心持、この二つから斯ういふものが出て來るのであります。荻生徂徠は享保十一年に「太平策」を書きましたが、その中で、

ナマジヒノヿヲセンヨリハ老氏ノ道ヲ行ヒ、文帝ノ治メ、聖人ノ次ナリト知ルベシ、

と云つてゐる。太宰春臺の「經濟錄」には「當今ハ無爲ノ時節ナリ」ともあります。この時世に對する說明も入るのですが、それはこゝでは措くとしまして、まことに時世の已むを得ざる姿であり、因循挺捆して無事を圖る、といふ苦しいわけなのです。さうして行つた結果はどうなるかといふと、「昌平夜話」は、明日は何して遊ばうか、といふことをのみ苦にして暮す時世だ、と切言して居ります。その當時の狀況を書いた本文もありますから、併せて揭げることに致しませう。

已むを得ざる時世の姿

或假名書の俗書に、今治世の難有、弓は袋、刀は鞘、具足は土用ぼしならでは對面もせず、先祖武功の物の具を守り神にして子孫日出度榮へ、連綿として何の苦勞難儀もなく、陣羽織はなく共、羅紗の雨合羽なければならず、夏は琥珀の單合羽、帶刀も切れ味には構はず、金銀を鏤り、作物を賞翫して高代の品、折紙道具を賞翫し、遊山玩水計りを思ひ、後は亂舞茶の湯、盤上の棊枰古めかしく、或は儀太夫節豐後ぶしの、又は長唄の引語り、揚弓沖釣に樂しみ、明日は何して遊ばんと是のみ苦にして暮す事は、神武以來には其例なし、

固定した三民の生活

この時は武士階級の者が、何をして遊ばうかといふことを考へるのが仕事だつただけではない、民間の者も同樣だつたのです。第一番に町人といふもの、これは株式になつてゐて、仲間といふものがあり、新しく開業することが出來ない。賣込、買込にもそれ〴〵先がきまつてゐて、新規な取引をすることは許されぬ。それは海運の關係と取扱の品物の種類とによつて、自然にきまつたやうなものですが、實は法律、規則がそれを誘致(いうち)したのでありまして、幕府は享保以來、法令のよく行はれるやうに、それには共吟味(ともぎんみ)させる方がいゝといふところから、いろ〳〵法

商人の仲間組合

律を作つた上に、仲間組合といふものが促成されました。さうすると商人どもはそいつを逆に取つて、自分の商業を安定する道具に使ふ。遂には利益を壟斷するといふところまで行き著いたのです。

職人の仲間組合

それから職人の方面を見ますと、これも亦法律、規則がそれを誘致して、仲間組合といふやうな仕組を拵へ出した。賃銀なども共吟味によつて、不當な上げ下げをしないやうに、といふ幕府の心持なのを、團結して賃銀を上げ下げする、といふことにしてしまつたのです。そこには又師弟關係といふものがあつて、それが勞働關係を支配する。得意場の方も、何處から何處までは誰が引受ける、といふやうなものを極めてしまふ。親方とか、棟梁とかいふやうな者が、各〻一群を率ゐて組合仲間と云つたやうなものを組織することになりまして、その弟子、子方といふものは、親方のところにころがつて居りさへすれば、いつでも飯を食はして置いてくれる。その代り仕事のあつた時分には、必ず親方が頭をはねるので、それでその仲間の生活を保障する、といふ働きをなしたのであります。

日傭座

これは技術經驗を要する勞働でありますが、師弟關係といふやうなもの丶無い、技術經驗以外に立つても居る日傭取などといふもの、これも日傭座といふものがあつて、その關係から札頭といふものが出來る。寄子と云つて不斷大勢の勞働者を手許に置く。その關係から親分が出來る。さういふものによつて仲間組合が誘致されて居りますから、それらの手を經ずに勞働を賣ることも出來ないし、買ふことも出來ない。殊に享保以來は、農民の都會に出ることを各藩で制限して居りましたから、急に大きな勞働を要するからと云つて、日傭取を自由に移動することが出來ない關係で、彼等の職業生活の安定が出來て來る。だから安心してその業務に就いてゐる。その代り遊惰にもなるわけであります。

武士の生活固定

武士には主從の羈絆がある。その羈絆といふものは俸祿に在るわけで、それによつて武士の生活は保障されてゐる。さうしてそれが固定してしまふわけでありますが、その固定した爲に、えらい人でも出世が出來ず、凡庸な人

でも失墜しない。そこに惱みを持つやうになつて來た。武士ほどではないけれども、商人、職人、日傭取のやうなものも、それに近い固定を見たから、それに近い惱みを生じてゐるのであります。士工商といふ三民は、自分の持つてゐる祿高とか、組合とか、株とかいふものによつて、分に安するといふ氣持にさへなれば、別に苦勞は無いわけである。武士は世襲の俸祿があるから、馬鹿でもチョンでも、武藝があらうが無からうが、學問があらうが無からうが、腹の減る心配は無い。だからその固定に就ての惱みが深かつたものだけ、維新前後に於て動いたといふことも、昔の世の中の組立方を證明するやうに眺められる。

商人なども株式になつて、この仲間が幾株といふことになつて居りますから、疲弊、沒落する者があるやうな場合には、仲間で銀を出して救ふといふやうな、共濟法さへ出來てゐたのです。主人は算盤を知らず、秤の目を知らないでも濟む。番頭手代に任せて、その營業を續けて行くことが出來たのです。職人等はそれらに比べると、分が惡いやうでありますが、稼ぎさへすれば必ず食へる。だから氣樂なことを云つても居られたわけである。然るに三民はさうであつたけれども、百姓にはさういふものがありません。どうも自分の生活は犯され易いものである、といふところから、半商、半工といふ方へ走つて行つた。さういふ方面へ走らなかつた農民は、自然一揆や暴動を起すことが多かつたのであります。これが寶曆以降、百姓の樣子が變りました根本であると思ひます。

百姓は半商半工へ走る

人心の弛緩に伴ふ遊樂

元來百姓一軒の生活は、十石百姓と云つてゐたのが、八石百姓となり、遂に三石百姓といふほどまで低落しましたから、自分の持つてゐる田地を耕して、さうして分に安ずるといふわけには行きにくい。さういふ風になつたことも、又說明を要するのでありますが、ともかく田產が追々減つて行つたことは明かであります。

そこで士工商の三民は、分に安じて奢を省く。この奢といふことに就ても、いろ〳〵な解說もあるのですが、この時分に申した奢といふことは、收入と支出と釣合はぬのを云つたやうであります。そこを釣合せて、それに滿足して居れば、三民は生活を保障されてゐるわけである。寶暦の談義物といふものは、それをもう少し押上げて、精神の上にも安分し、滿足せしめようとしたのであります。併し世間では、現狀の生活の爲に、採算の安分といふことは出來ましたけれども、精神上の安心といふまでには參りませんでした。この算盤を持つて安心するといふこと、それは物價につれて商もすれば、勞銀も上つて行くのですから、士よりも商工の方がやりいゝわけでありますが、ともかくそこで安分して行くといふ傾があつたので、幕府は人心が弛緩して、思想上の衝動が鈍くなつたのを喜んだのであります。

人心弛緩す

尤もこの間に竹内式部の勤王運動が起りました。山縣大貳のもさうでありますし、法忍の念佛問題などといふのも勤王運動でありました。その他いろ〳〵な運動があつたのですが、その中に際立つて見えた勤王運動、これは根據を思想上に持つた問題だつたのです。さういふ思想問題が人心の弛緩と共に、影を潜めるやうになりましたから、幕府は大變喜んだ。世間がさういふ按配にのんびりして參ります、その時は自然逸樂に耽るといふ風になるのも、勢の已み難いものがあつたので、その逸樂の爲に興味の多いものを求めるのも、亦當然の事であります。

遊び事は目覺しい景氣

何も落語や茶番に限つたわけではない、すべての遊び事はめざましい景氣を現して參りました。その時の狀況に就きましては、「賤のをだ卷」でありますとか、「蜑の刈藻」でありますとかいふ、當時の事を書き記しました隨筆雜著に出て居りますが、較ゝ委しいのは「明和誌」の附錄の文章であります。

二月初午稻荷祭とて武家も町家も太鼓をうちてはやせしも寶暦の頃より遊興の元となれり、其はじめは三味線小鼓のひやうしをあはせて祇園ばやしなぞせしも、いつしか荷ぎ家臺萬度をこしらへやしき中を祭り渡るとて大ぜい集り、又は踊を催し

人形をつかひ夫よりして素人狂言とて色々取くみたわむれ場をうつして舞あそぶ、此素人狂言といふものはまづ言語をそほ〳〵身ぶりをならひ衣裳をこしらへ、數日骨折稽古して初午祭只一日の興とのみせんはあまり本意なき事なりとて、後には常々の遊びとせり、是よりのちはやしはすたり、素人狂言長うた三絃下かた師となり、踊をば仕手とするよります〳〵流行して出會祝義の席へ招かずといふ事なし、下方といへるは太鼓笛大つゞみに鼓此四拍子を長唄三絃と合せ亂舞の手を崩して是をまなぶ、此時より亂舞をば本業と唱へ習ふ人稀なり、其會合には緋毛氈をしきならべ堂々ぜんとしてはやしたり、船遊びには極めて此催しをせずといふ事なし、此頃は專ら長唄流行て何方の家にても三味せんの音せずといふ事なし、爰に於て皆々長唄を學びしが、天明の中頃より淨瑠璃流行出して長うたすたりて後は常盤津富本世にあまねく行なわれんとせし所に、寛政の時節となり御役所より不相應に家中身持不埒のともがら追々御咎ありしにより、三絃は乞食の外は習ふ人なきごとく、稻荷祭りも太鼓を出し幼年のものあつまりて打までの事なれば、夜通しのはやしなどいふ事はたへて世上靜謐なり、以前の如きはめん〳〵の遊興に心うつりて火事有といへども見つ付人なし、其所のもの半鐘をうつて知らすれども太鼓の音にまぎれて聞付る人もなく、火は心のまゝに燒ひろがりてのちにやう〳〵知るといへども、もはや大火と成て人力には及びがたしと見ゆるなり、されば其頃は初午の日あるひは前夜は年々の如く大火事有しも、稻荷祭の名目をかりおのれ〳〵が遊興の種とせしかば神慮もいかゞあらんと疊つかなし、

長唄と芝居　この文章の中に書いてある江戸長唄の流行、これは「邦樂年表」などを見ましても、元祿以來と云つていゝかと思ひます。下方は最初から長唄に伴つたものでありまして、芝居がその中心をなし、所作事の最も盛になりましたのは、寶暦、天明の間であるやうです。舞臺の所作が盛であつたので、踊が頭を持上げて來て、踊といふものが新に流行の勢をなしかけた。從來は舞ばかりでありましたが、舞子と云つたものも踊子と云ふやうになつて參りました。

舞と踊　舞踊といふことに就きましては、多少の例外はありますが、概して云へば舞は拍子に和して行くもの、踊は歌詞の

說明に當るもの、といふことになるだらうと思ふ。踊には「當振」などといふ。最も端的なものもありますが、一般には亂舞の手を崩して踊といふものを拵へた、と云はれて居ります。

素人狂言の流行と變化

素人狂言が最も流行した時は、踊、下方の流行した時でありまして、民間にもだん／＼それが行はれて來る。それによつて芝居と、世間と云ひますか、民間と云ひますかが結びついたので、芝居が世の中か、世の中が芝居かと思はしむるほどに、この間がよく融通されて居つたのであります。さういふことになつたのが、丁度この素人狂言の盛に行はれる時代からのやうに思はれる。素人狂言の流行といふものが、本文のやうに移り替つて行つて、素人狂言が變化して來た時、卽ち茶番狂言と合流するに至つた時、それは化政度に於て落語と呼應することにもなつたのです。その狀況は「八笑人」、「和合人」によつて見ることが出來るのであります。

京傳作中の二趣向

民間の樣子を「八笑人」、「和合人」によつて見るならば、武家屋敷の模樣は岡山鳥の「廿三夜待」、「如月稻荷祭」などに於て見ることが出來ませう。その移り替る時世の中に、素人狂言、茶番、狂歌、落語、川柳、といふ風になつて參りますのは、どういふものであるか、それがどういふ人々によつて推移するか、又分れて行くか、そこのところは大に考へなければならず、その時世に就て看て取らなければならぬところであります。

茶番の趣向

京傳が天明五年に出しました黃表紙、「江戶生艶氣樺燒」の中で、艶治郎が洒落に向嶋へ道行に出かける。これは留人が出て留めてくれる段取だつたのが、意外にも追剝が出て、道行の二人は裸にされてしまふ。如何にも茶番らしいけれども、茶番にしないで艶治郎の實際の話として居ります。これにも茶番の氣持は十分に出てるますが、同じ人の洒落本、寬政元年に出した「廓の大帳」には、全く茶番として書出されてゐる。最初に立てゝ置いた趣向の壞

れることは、これも同じてあります。

本舞臺三間のあいだ、眞崎のけしき、正やと云茶屋のかゝり、右の方石の鳥居とりつけ、まへに文塚とほりし碑あるべし。すだれあかるしかけ、山田三郎上下をおしやうにて、上のかたに居る、若イ衆一人仕丁のなりにて手をつき居る、かぐらにてまくあく。

山田三郎「それがしは都北白川よし田のおしん山田の三郎といふもの、主人梅若丸、きいつところより御行方しれず、このごろせけんの噂に聞ば、此あづまへ御下向のよし、御跡をしたひ當地に下り、御行衛をもとむれども、今においてそれしつ分明ならず、これによつて梅わかぎみの御身の上いのりのため、吉田家の重寶都鳥の一くわんを、當しやの神ぜんに備へ、一七日があいだかぐらをそうして、奉幣なさんそのために、今日それがし參けいいたした、此通り神主かたへ申傳へてよからう。

仕丁「いさゐかしこまりましてムり升る、ゐんゐのところ御くらう千萬、まづ神主方へ御人あつて、御きふうそくあられましやう。

山田「しからば案内

仕丁「いざお入りあられましやう。

トかぐらになり、兩人入る。下座岩戸になをす、さる鳴惣太しのびのなりにて、玉がきを切やぶり出る。

さる鳴「さいせん山田めが持參なしたる都鳥の一くわん、あいつをこつちへとりのまちとすりや、金にありつくといふもの、こいつはおもしれへちよほ一だ、したが此すがたじやア手おもい、どふぞすがたのかへやうが、ありそふなものだナア○をりわるいあの人聲、ソレ。

ト松の木のかげにかくれる。をくよりさいぜんの仕丁、みきどくりと茶わんをもち、ついでのみながら出る。

仕丁「アヽうまいぞ〳〵、とんとかんろじや、なんでもこれから七日が間神事が有といふ事だが、こいつはおいらがふくとく

の三年め、ずいぶんはしとくたちまはつて、さいせんをしとための、千住じやれとおめにかけやう、こりやをもしろぎつねだわへ。

さゆきにかゝるを、だしぬけに惣太うしろより出、ゑりをつかんで引よせしめころす。

仕丁「ダア、。

さる嶋「きじも鳴ずばうたれまじ。

トしらはりゑぼしをはぎとり、これをきてあたりをみまわしふきにかゝる、さいぜんより山田三郎うしろにつけている。トゞ出、

山田「くせものみつけた。

さる嶋「何がなんと。

ト兩人よほどたちまわり有て、トゞ惣太山田をあてゝきりまく八入る。しばらく有て山田をきあがり、

山田「とをくはゆくまい、そふじや。

トあごをしたゝ、花みちの方へはかふとすこ　花道のすみにたれのうちにて、調子やのけいせい稲鶴が聲にて、

いなづる「かぎりなくとをきあづまにすみだ川。

山田「なんと。

いな「たえぬ流をいつまでかくむ。

トいふをきつかけにすだれあがる。稲づるうちかけゐしやうにて、手にたんだくをもちたつている。

山田「これは。

トおどろく。をくよりいなづるがきやく鶴聲、江戸がみの鳥目、女げいしやおゑん、新造まひづる、そのづるたち出。

みな／＼「ヤンヤ、／＼、ざわらふ、いなづるはづかしそふにうちかけをとれば、下は白ちりめんのしごき、よそゆきのなりになる、みな／＼すはる。山田の三郎かづらをとり、上下モのひもをしめながら、　三味子「イヤモウいひ分もなく、

思ひかけないおいらんの今のお歌、とんとあんばいがはま村でござります、あれでけふの趣向の茶ばんがは　ました、いち/\あやまり入ましてござります、いなづまちよつとみな、いつそはつかしうさんす、魯堂「コレ三味子、實事師の山田三郎は、きついものであつた、手めへたちが此眞崎のけしきを、芝居の道具だと見て、ちやばんをするときいたゆへ、いなづるにふつこんで、だしぬけにきもをつぶさせたのだ、トいふ所へ、さいてんのしのびのたお出、ずきんをとれば、ヤア五町か、おきやアがれ、五町「ナント　だんな、わたくしがしうちは、秀鶴でござりましやう、魯堂「でかした/\、仕丁になつたのはたれだ、三味「あれはこゝのりやうりばんの傳介といふものでござります、魯「フウ、あじをやりをつた、鳥口「サア/\、みんなのみにする事だらうぜ、おさきしんぞうまひづる「五町さん、かほをふいてきなんし、そのづる「大こく/\まひのやうざんす、三味「又ぶしやれをいゝなさる、おさきどんにいつつけるよ、鳥一「イヤもふとんだをもしろかつた、ぶん「いなりさんのかぐらが、下座にとれたうちなぞは、あそびませんね、魯「をもしれへ/\、

この本文はこれに續いて前に引用しました「三人片輪」の話が出て居り、又それに續いて落咄が出てゐる。こゝだけで見ましても、同じ人物が茶番も落語もやる、といふことが思はれると共に、それに響應して行くといふことも當前の話であります。素人狂言と茶番とも、さういふわけで合流して行くので、たゞ景氣のいゝ方へついて廻るわけなのです。

かついで喜ぶ謔譚

京傳はこれほどに茶番の趣向を持つてゐたに拘らず、それが茶番小說、落語小說といふものでないといふことは、一部分の趣向とするにとゞめるからであります。若しこれを擴げて全部の趣向とするならば、三馬や鯉丈と同じ畠になつてしまふのでありませう。この京傳の黄表紙と洒落本、前に引いた二つのものだけ眺めましても、この頃で

は茶番を野外へ持出すやうになつたのが知れる。元來屋外のものでない、俄とは生れの違つたものである茶番を、野外に持出すことが行はれて居つた。「八笑人」の劈頭に、飛鳥山の花見に茶番を持出すことが書いてありますが、あゝいふことも實際あるべき事柄だつたのです。それが又失策であつて、敵討の趣向で大勢集つてゐる人達をびつくりさせるつもりのやつが、醉拂の士が拔身で助太刀に來るといふ騷ぎで、さんざんの有樣になつてしまふ。これは他にも例がありますが、前に擧げた京傳の趣向が一番話が早いから、それで申すことにしますが、野外へ持出すといふ事、やり損ひの御愛敬になるといふ事、これは「艶樺焼」にも「廓の大帳」にもあることなのです。

かつぎ茶番

譃譚の著しいもの

これが「かつぎ茶番」といふやつで、化政度になつて盛に行はれました。茶番ばかりではない、化政度には虛說を流布して世間を騷がして喜ぶ、といふ風があつた。それにはだんだん面白い話もありますが、洒落が高じて惡いたづらになつたものでせう。それは寛永度からある話ですが、近い寶暦度の譃譚として著しいものは、瀬川の敵討、宮城野信夫の敵討と云つたやうな遊女の敵討、これはいづれも譃つぱちである。その後だんだんに盛になつて來た、この流行に著目しまして、馬琴は「羇旅漫錄」(享和二年)の中に、譃譚の名人齋藤文次の事を書いて居ります。それを九年後に出した「夢想兵衞胡蝶物語」の後編には、食言鄕といふところへ虛月彌次郎として書いてゐる。齋藤文次といふのは上方の人で、これは譃ではない、實際にあつた人ですが、その他にも譃つき彌次郎を小說に取入れた者は、幾人かあつたやうです。

文化度になりましてから、譃譚が澤山ありましたことは、「文化祕筆」その他を見るとよくわかるのですが、幕府の御繪師であつた板谷慶意のところで、鉢植の梅の木の根から三寸ばかりの鯉が出たといふ話、兩國の萬八にあつた大食會の話、八歲の少女が子を產んだといふ話、かういふ話といふものは、皆人がびつくりするやうな話で、實は譃なのです。人がびつくりして騷ぐのを見て喜ぶ、騙して置いて笑ふ。所謂かつぐといふやつで、恰もかつぎ茶

番といふ趣向で人を騙すのがはやる時節だつたのであります。

かつぎ茶番の「八笑人」

盜賊人を欺き敵討

勿論敵討で人を釣寄せるといふことは、前からあつた話でありますが、前のは人を騙して騒がせるので、後のやうにかつぐのでは無かつたのです。元文五年版の「御伽空穂猿」に、「盜賊人を欺き敵討」といふので、延寶八年五月の或日、四ノ宮德之進といふ者の倅德太郎が、淺草寺に於て親の敵武太夫といふ者に出會ひ、名乘かけましたところ、武太夫もその孝心に感じて、明後日高田馬場で潔く討たれよう、と約束しました。愈〻その日になりますと、見物人は澤山集りましたが、一向そんな事は無かつた、といふことが書いてあります。

敵討の化物

寶曆八年に馬文耕の書きました「江都百化物」には、「敵討の化物」といふのがある。この方は何年とも書いてありません、三月とのみあるのですが、やはり淺草觀音の堂前に於て、淸水惣左衞門の倅惣次郎が、親の敵篠田伴右衞門といふ者に出會つた。伴右衞門は大に感心して、持つべきものは子である、今直にも討たれてやりたいが、主用の出先であるから、その用事を濟ましてから、明日改めて高田馬場に出て尋常に討たれよう、と云つた。それを見てゐた者もあり、聞傳へた者もありまして、當日は早朝から高田馬場へ人が集つたけれども、勿論敵討なんぞはありません。待てども〳〵討つ方も來なければ、討たれる方もやつて來ない。皆倦き果てゝ歸りかけましたが、その時氣がついて見ると、懷中物、腰さげ物、いろ〳〵な物が無くなつて居りました。これは本當の敵討ではなしに、掏摸どもが自分達の物を奪ふのに都合がいゝやうに、かういふ人寄せをしたのだと書いてあります。

譃譚の流行と「八笑人」

譃譚が行はれて參りますのは、それほど毒々しい事ではない。たゞ笑つてしまへばそれで濟むのですが、時のはやりは妙なもので、譃譚が盛に行はれると、今度はそれを茶番で行く。それが「かつぎ茶番」の流行になつたのであり

ます。鯉丈の書きました茶番小說といふものは、當時の江戸にはやつたところを書き出したものなので、その一例として「八笑人」の最初にある飛鳥山の段を擧げて置きます。

花暦 八笑人 春の部 壹の巻

福壽草の咲初しより、四季の花。盛たがえぬ時津風靜けき御代の春なれや。遲日におくる。日暮里も。けふに飛鳥の人の山。茶瓶の行列三重も、壹升德利のテ、ッ、も。彈や謠への芝居。浮世の塵の玉はゞき。はらふ片手は。おりづめの。勝負あらそふ拳角力。幕の内外の合せもの。うときしたしき。…だてなくチョットおあひのお手もとも、はゞかりながら慢哉。稍にむすぶ短尺も思ひ／＼の花見月。爰に下谷のかたほとり何屋某が惣領に。甚六ならで左次郎とて生れついての呑太郎。年中續く夕部けにうくる家業もうるさしと。弟右之助に相續させ。おのれは隱居の身となりて。心のまゝに不忍の池のほとりに寓居。同氣もとむる呑會所。（おもてのかたよりあがれたる聲で、）一「チト御めん下さりまし。あなたに安波太郎さまはお出なさりませんか。（此家にいうろう眼七、）眼「ハイ今も内から呼に來ましたか。まだこちらへは見へませんか。（安波太郎は表を明ケしずかにはいり、）アバ「コウ／＼内からたれが來た。（するだか茶部）ハ、、、べらぼうめヱだれも來ヤアーね、。か、りうちをくらつたナ。（眼七傍より口を出す、）眼「なんぢ等ごとき不才をもつて孔明を計ふとは。コレよく聞ツし天へ向ツてつばを吐ばかへつて我身へかゝる道理だ。アバ「イヤごたいそうなことを申たるは。おれがあんまり聲を掠過たからわるかつた（トいふうち、きたなゐ方より卒八、いふ女だち、この家をのぞきながら、）卒「ヲイ安波公居るか／＼。ちよつと來て見さつし美女／＼ アバ「女か／＼（トうろたへてかけ出すひやうしに、くつぬぎの下駄をふみかへし、おでこをいため、かほをしかめながらしようじをあけて、）どれ／＼。（卒八ずつとはいつて上へあがり、）卒「あとを引寄てくだつし。アバ「女けどこへ來た。卒「あけて這入るが面倒だから。足下にちよつと木戸番を頼んだのよ。モウいゝから表をしめて此方へ來さつし。アバ「このべらばアト（ざしきへおひきたりくらはせる、）卒「コ、よせヱ／＼。あんまりこすりつくな木屈にがたからア。アバ「ヲヤなほ／＼不屆なとを言にするナ。卒「ナンノ父その顏で。女さんまいをするからのこつたア。

左次郎「それ見さつし。他を咒はヾ穴二ツといふは。最初おれをかつがふとして眼公にかつがれて。卒八先生にたてつけられるも。智慧のねへりくつだハヽヽヽヽ。ガン「ナニ安波公なんぞが咒には穴一ツで澤山だ。自分而已おちるばかりだ。アバ「いめエましい足をひどくぶつたアヽ痛へ〳〵。卒「イヤかつぐといへば昨日日暮里へ行やした。ところが聞ねへアバ「ナゼかつぐといへばひぐらしへゆくのだらう。卒「ナンノ又のたり出るヨ。燕雀なんぞ大鵬の心をしらん。此一回何等のヿを言出ルや。つぎの段に分解をまつて知れ。アバ「こやつ何事をかいふト。首をかたぶけ手をこまぬき。やをら左右の耳をすまして。聞た所がかつぱの屁だらう。卒「フン引かたヿをならべ立るは。コウそして。利多ふうにしやべるが。河童の屁といふは。どういふわけか知りはしめへ。あんまり。文盲で不便だから友達のなさけに。おしへてつかはそう マツかつぱといふやつは河にすむものだが。水の中で屁をひつたら。ぶく〳〵と。音のするはづだぜ。ソレ柳樽に。すかしても、音のするのは河童の屁といふ句があるは。それを亦たはひのない。譬にいふはわけがわかるめへ。これ則いひあやまつて。居るからのヿだ。子曰、こつぱの火と論語にもあるは。夫でたわいのないすぢが。わかるだらう。アヽ歎かはしいヿだ。チツト學問をするがいゝ。一六の日には在宿いたすからきげんを聞ながら來さつし。アバ「ムヽ二七。三八。四九。五十。日濟貸で押分られめヱ。アヽなる程屁の講釋は感心だ。おめへは博識ではねへ物ひりだらう。左次郎「コウ〳〵そりやアいゝが卒公日ぐらしはどふしたのだ。アバ「ナニ屁でまぎらしたから屁ぐらしだらう。卒「どふも此奴が此通こしをおるから噺ができねへ。左「安波公チツトだまらツせへ。アヽやかましい口だ。卒「イヤサ聞ねへ。奇妙な趣向で花見に來たが。皆一ぱいかつがれたのよ。さすがのおれせへ。まじめだと思つた。アバ「ナニさすがのおれ。ヘン小刀のまがりが聞て呆れらア。左「東西〳〵フウどういふ趣向だ。卒「聞ねへうまくすぢを書アがつた。左「はてな 卒「聞ねへ。すつぱりとかつがれたぜ。寔にくゝしやアがつた聞ねへ。左「フウはてな。卒「ヤとてヱられねへ。アバ「ヱヽこちれつてヱどふしたのだ。手前ばかりのみこんで。なんだか。わけが。わからねへ。卒「いんにやヨ聞ねへ。アバ「聞て居るヨ。ひとつの噺に聞ねへ

〳〵が。百五六十出らアはやく申あげろ。　卒「そんならかいつまんで噺そう。まづ本舞臺三間の間ダいちめんに櫻の立木上の方に葭簀ばりの茶見勢「コレサつまんで咄すに其様なとはいらねへはな。　卒二イヤサ聞ねへ。其出茶屋がすぢだはな。ヾこの娘が十七ばかりで。岩井の半四郎、瀬川の菊之丞。げいは大吉粂三のおちやつぴゐに。生姜二片入煎方つねのごとしといふ美女だらう。聞ねへ。その亦腰かけに居た野郎が廿才ばかりで。いづれ金満の息子株。色のしろいいやみなしの梅幸。團十郎。持物衣裳つきは御推量ス　かン二モシ是には生姜ははいりませんか。　左「マタ〳〵ひかへろ〳〵。　卒「ソコデその客が暫く休んで。茶代を置て表へ出合がしら。でんぼうらしいやつが二人。門口で突當たトいふがいひがゝりで喧嘩よ。それから聞ねへ。其色男をノ聞ねへ。むごくぶちのめすもんだから。きゝねへ。　アバ「イヽサ聞てるよ。　卒「あすこのとだから人は黒山のやうに集て見て居るけれど。誰壹人取支者もねへ。おれもあんまりかわいさうだから。中へはいつてやう〳〵兩方へ引分てやつたら。ぶつたやつらはとなりの茶見世へはいる。色男は其娘の所へ這入る。其處で娘も氣の毒がつて。いろ〳〵介抱して。お髪をマアかりにわたくしでも結て上ませうと。鏡臺を出して結にかゝると。聞ねへ。隣に居るぶつたやつらが。いつの間にか調子をあはせてチヤン　卒「櫛笥鏡臺取揃ト。長五郎髪すきのめりやすよ。そこで合方になると聞ねへその野良が梅幸の身振軽色で。娘をあいてにいろ〳〵。おもいれありよ。日暮里中の人をすつぱりひつかついだが。なんと。おもしろくかついだじやアねへか。　アバ「しかし重かつたらう。山ぐるみかついじやア。　卒二いんにやうまくかいたじやアねへか。　左「ムヽこりやアいゝ。それとも古いかしらねへがおもしれへ〳〵。　かン「コウ〳〵なんと此連中で出かけやうじやアねへか。おめへたちがぶちのめし人で。おれが髪すきよ。おらア亦成田屋で遣るべヱト團十郎のこわ色になり　ふしぎなゐんでいかいおせわに。　左「エヽよしてくれヱ。さう思つたばかりで胸がわるくなつた。　卒「其顔で髪梳どころかかみつきそふだア。馬士唄のうしろで梳返しのかみすきがいゝ。　ガン「へゝそねめ〳〵。ノウ安波公催そうじやアねへか。　アバ「その梳返の方なら御多分には洩ますめヱ。　かン「チヨツ　いめへましい奴等だとかくおれがいふ事は取用ひねへ。　左二そんならこうしや

う他の仕た通もされめへから。自分〳〵に茶番の心もちで。一趣向づゝ案じて自分の書た正本なら。其狂言のたてものにするがいゝ。　アバ「ムヽそれで役ぶ足がなくつていゝ。それにしても此連ばかりではさびしい。野呂松や出目助はどふしたらう。　卒「さうよけふは大分遅い出仕だの。なアにみんな昨夜から二軒に行だをれだ。ホンニ眼公モウおこさつし午刻過だ。　ガン「さうだつけ一ばんおびやかしてくれべヱトしゆろばうきの柄にて二かいをさんへたゝきながら　ヲイみんなが息付られねへか。最う日が暮るは。　二かいにて八人げいの三すけが聲色で　ごん七「ハイ〳〵どふもハアほうきあんべヱで。疝氣のせへかどたまかやめて起られねへ。　左「其筈だア昨夜はひどく食つたぜ。ヲイ他の倒者はどふだ。　二かいにていまひとりののろ松といふ男、是も八人げいの小僧の聲色、　のろ「ハイ私はヱヽ引疝氣のやうな色氣のない病はおこりませんがヱヽ引血の道のせへかヱヽどふもヱヽ眼が覺ませんでこまります。　卒「コウ〳〵馬鹿アいはずとはやくおきさつし。急に相談が出來た。　ガン「ナニそんなあま口でいくのじやアねへ。皆々歩行ねへひつぱごう　ト眼七卒八安波太郎三人二かいへかけあがり、夜ぐを殘らず引まくれば寢起て下へおる、　左「トキニ斯言相談だ。此連中で花見茶番と步して。　出目助は半分覺す、　出め「ヲット皆迄宣ふな。最前より二階にゐて。やうすは不殘うけ給はり、　今一人ぞごん七、　ごん「とくより趣向致してござる。　のろ「いで鎌倉へといふときに。われらが智計をほどこさば。　ごん「せかいの女はみなごろし。　表のかたより頭分六ト五男、　ヅブ六「吞友公御入イ引ヒイ〳〵テン〳〵ツク〳〵〳〵〳〵ツヽテン〳〵。　左「ハヽヽヽ奇妙〳〵。これで群勢の着到はすんだ。コウ寐ぼけでゐねへは。早く顔でも洗て飯でも食つし。そこで頭分六こういふ案だ。ヲット承知〳〵先刻此所へ來かゝつてずつと這入るも智惠がねへから。何ぞいち番かつごうと思つて。そつと障子の蔭に身をひそめ。工夫の始終不殘聞。直に案は付ておいた。　アバ「イヤハヤどいつもすばやい奴等だ。サア〳〵此方は大變だ。さつぱり心當りはねへぜ。　左「何サさううろたへるともねへ。今日ッから始て一日に一幕ッヽだから。その中出來た者から先へやらかすがいゝ。マア今日の初日はだれがする。　ごん「ものごとすべて。手始が大事だ。用意なものにはさせられめへ。まづさしづめおれだらう。　のろ「ナンノまたさし出るヨ。先日の茶番の手なみでどふして初日が勤るものか。マア〳〵初日はおれだ〳〵。　左「熊谷平山待給へ。爭ふうちに日がたける。中をとつて亭主役におれが始や

う。　出め「それがいゝ／＼。　ごん「シテ其趣向はなんと／＼。　左「マヅ筋は敵討だが。コウト役割は色の黒いでく／＼と肥
滿た。眼の大イ髭むしや〳〵しやの惡々しいといふ面がほしい。ムヽ安波公やつてくだつし立敵だぜ。　アバ「立敵はいゝが。
顏の容色があつらへ通じやアうれしくもねへ。　ガン「ヲット狂言方の割つけだ面不足をいふめエ。　左「ソコデ着つけは黒羽
二重の紋付に。萌黄博多の帶、朱鞘の大小。中ぬき草履。深編笠といふこしらへだ。　アバ「ムヽいゝ〳〵。　左「おれと出目
助が順禮のすがたで。そこ爰と花を見ながらたばこを呑で居る所へ。安波公がのさり／＼と出かけて來る。これも同じくあ
ちこちと見あるき。成丈人の目にかゝるやうにして。程能所で順禮にたばこの火をかりやうと。すひつけにかゝる笠の中を
覗て。ヤアめづらしや烏目百見。年來尋る親の敵ト是から浮木の龜や優曇華のはな。なんでも彦兵衞で。（彦兵へとは御ぞんじの通言かけあひの事）
おもいれならべ立やう。安波公も出たらめのせりふで。トヾ不便ながらも反討だと。編笠をとつて捨舍貝ばりをスラリトぬ
く。おれと出目公は杖に仕込だやつをぬいて。先達茶ばんに仕組だ立合になりはどふだ。　卒「コリヤアごうせへだ。飛鳥山
は此友達ばかりで。花見をする様だらう。いゝわへ／＼。　左「そこで赤眼のしよぼ／＼した鼻のひらつたい。齒の黄ろい。
水ツぱなが鼻のまんなかに。たへずぶらついてゐるといふ面がほしいな。ヲイ／＼頭分六。ちよつとおめにかゝらう。
ヅブ「ハイ／＼大体は私が似よりか子　卒六「似寄どころか。南瓜を二ツに割ずに其儘だ。　ヅブ「チヨツいめへましい為方がね
へ此節だ。この首で間に合そふならお大事のものだが心置なく遣ねへ。　左次「其様に力を落すとはねへ。役廻りは助高屋だ
ぜ。六部の出立でチヤアン／＼と鉦鉦をならして來かゝり。切結中へ割て入。しばらく。錫杖であしらひながら。其一言
いふとあり。しばらく／＼と惣方引分て笈を下シ。中から酒肴三味線を出しておれに渡スト。チヤ／＼チヤン／＼と。彈出
すから出目公と頭分公が。エヽ引山できつころがした松の木根ツ子の様でもと唄。安波公が例の踊。跡の者も見物に交て
居て。直にそこへ踊込で大酒盛となる。といふやつだ。　野呂「ヤきてれつ〳〵。妙計／＼。サア／＼ちつとも早く押しだそ
ふ　アバ「そんならマアいせうや道具を早くくめんしよう。　左「眼公てへぎながら例の所へ行て借て來て下ッし。（是は茶番一式の損料屋なり）

入用は今いふ通りだ。順禮の杖のも大小も。金貝がいゝぜ。しかしおひずるの脊中に。千秋萬歳や大入叶では中だノ。正らつしで行てへもんだ。卒「それにはいゝさんだんが有りやす。どふせ六部の笈も。本ものでなければ諸色が遣入ルめへから。山崎町へいつて。六部の形りとおひずるは借てこよふ。是も父かの地に出來合い順禮六部の損料有り、左「そんならそふしてくんねへ。アヽしかしじゝむだろふナ。卒「じゝむも坂東も一ツ所に書て有ルぜ。左「エヽわるくしやれずと。千手觀音のいそふもねへのを。早く借て來さつし　ト卒八鼠七をせき立ておい出し、　左「サアそれできまつたが。なんぼ出たらめでも。ちつとはきつかけを付ケて置う　ト是より吉にかゝる　左「サア出目公とおれは。程のいゝ所に居ル。そこで。アバ公も同じく。是サマア立ツせへナ。そふ〳〵。そこいらがいゝ。そこでキツカケは圖武が山の下で。鉦をたゝく音を合圖に。たば公がアバ公をついて。「順禮殿火を一ツ」トそばへくる。アバ「ムヽよし〳〵。左次「エヽよし〳〵じやアねへ。爰へ來さつしナいけづるい。ぞん「たば公がアバこを呑じやア。たばると。きせこ入レがいるの。左「エヽしやれるな、邪魔になるは。サアたば公たゝねへか　のろ「ハヽヽヽヽやつぱりたば公だア　アバ「ヲイ〳〵「コリヤ〳〵順禮びろうながら火をひとつおかしやれ」でめ「ナニそれにびろふがいるものか。左「イヽサ〳〵そこで。トすひ付ケる。笠の内をのぞひて「ヤアめづらしや鳥目百味。なんぢを尋る其爲に。いく歲月のかんなんくろう。倶不戴天の父のあだ。サアじんせうに勝負〳〵」サア出目公もなんとかいわつし　出「ヲイエヽ引「弁財天の御由來、くわしくたづぬる母の敵、左「コレサどふも。さうしやれて計いてはいけねへは。身にしみさつしナ。そしておれが父の仇といふのに。母の敵といふ事もねへ。出「おめへが父といふから。同じいゝ草も智恵がねへから。そげてやる氣だ　左「イヤ〳〵其樣そんな智恵は。出さねへがいゝ　そしてむづかしい事をいわづと。あたりめへ。うきゝの龜うどんげの花。爰で逢ふたは天のあたへとか。なんとか。紋切形でいゝハサ　出「ムヽ。うどんげの花の山とやつてはどふだろふ　左「何〳〵しやれたがつちやアわりい〳〵　でめ「ヲイ〳〵そんなら「うどんげの花うきゝの龜。爰で逢ふのが百年目　のろ「どふで。こつちは夜ばたらき　二世より先へ命がけ　ぞん「戀の盜とたれしら波。ばんにやいのと合言葉　左「イヤモウどふもな

らねへぞ。此久べらぼうかなんだいやみナさまをしやアがるは、マアちつとじやまをせずに下ッし。それでなくつてせへ
しやれたがッていけねへ。マア〳〵てへげへにして置う、サアアバ公。ちつとやツて見さつし　アバ「ヘンおれか〳〵ヨシ
一こゝなるからは名乘て聞かさんよつく聞ケわれこそはくわんむ天王無體の强陰　左「コレサ〳〵。そう時代ではわり
い。そして狂言の氣をはなれていかねへと。まじめらしくねへムヽこふするがいゝ。あらたまると角が立ッからやつぱり
不斷けんくはをする心もちでやつて見さつし。おれはマア見物になるから二タ人でやんな　出「ムヽそれだと大キに仕いゝ
そんならアバ公やるぜ　アバ「ヲイよし〳〵「順禮殿火を壹ツかしてくだせへ」出「ハイ〳〵ト、笠の内をのぞいたば。
ト思入有ツて「ヲヤてめへは鳥目百味だナ　手前　七年以前におれが親を打て欠落をして　行衛がしれなんだが。いゝ所で逢た。
モウこちとらが目にかゝツては。貧乏ゆすりもさせねへぞ。かくごをして勝負をしろ一　アバ「ナンノ此やろふめへ。うぬら
が二タ人や三人來たとつて屁とも思ふものか。そして己らが親父がずるひ事計り。しやアがつたから。ころしたのだわへ。
それがわりイか一　で「ムヽわりイはヱッレヱヽ。親をころされてだまつていちやア。外聞げへバアわりいわへ。なんでもうぬを
ころさねへじやア。面がよごれらア　馬鹿ナ面ナ　ばアンつランあづまつ子　左「コウ〳〵どふいへばこういふと。それでも久。あんま
りだ。扨〳〵じれッてへ事だぞ。どふりで茶番のたんびにいたゞくはづだア。いゝ〳〵てへげへにして置ッしおれがいゝ
樣にごたついて仕舞うから。あんまり口數の。すぎねへよふにしさつし。そこで久。タテだが。それも、バタ〳〵〳〵ヤど
つこひト。見へになつてはよくねへぜ。すじはせんどの通りで。間のギックリ〳〵なしだよ　アバ出「ヲイよし〳〵　左「ヅ
ブ公。そのさいはいと。しんばり棒をもつて來てくんナ。アバ公は兩刀だぜ　アバ「承知〳〵おれにはさいはいを下ダッ
し。ヲツトきた〳〵サアやるべい　左「出目公は左りへ廻んナ　出「ヘン御開帳の樣だ　左「しやれるナ〳〵サア尋常に勝
負〳〵、　アバ「心得たりと　アバ「たりとはいらねへたゞ心得たサツレぬき合せた○そふきた○そう○そう○そふくる
味イ〳〵それすそをはらッた一ッとんで後へツレとん〳〵〳〵　ト跡すさりするはづみに、箱火はちへつかへ、りもちをつけは、一悪て有しとびんをこわし、ジユウ！〳〵プウ〳〵〳〵ト、

すかんに灰をふきかけル、アハ大きにこさくし、鼻、目のまねをつよくいため、口に灰はいル故出ます、火をあいちを顔にかぶるいえぶれまつ、おにぞり、　アバ「アタヽヽヽヽ　此時には彼を着おひかけもし、此こいを見てきもをつぶし、　喜「ヲヤ〳〵こりやアどふしたのだ大へん〳〵　行暮したる旅の修業者　此大雪になんぎしごく　在「エヽしやれ所ではねへマア早く来てくだつし　いなゝ〳〵「アバ公尻がやけるは早くわきへのかねへかト引立られ、よふ〳〵あん端へ出し、　のこ「そこへすわらッし。フイそのさいはいを爰へくんナサア目をしつかりとねむつて居たり　ごん「ヤレ〳〵目も鼻も知れなくなつた。サアいゝ〳〵こつちへ来さつし　左次「マア着ものを着替さつし　尻はびしよぬれだ　ごん「ナニサ此着物を背わせて町内を一ツぺんまはらせるがいゝ　奎「寐小便も此とし迄やまねへからモウ直ルめへよ　アバ「アヽ引いてへそ〳〵まとに目がくらんだなんと左次さんもふちつといたくねへ趣向は有ルめへか　左「ハヽヽヽ何サ飛鳥山には箱火ばちがねへからいゝトみな〳〵大わらひになり、此時眼じも諸道具そろへ帰り、　眼「サア〳〵道具はそろつた。コウ今道で八ツを聞タぜ。仕組がよくは。出かけねへか。人の出さかりでなくつては、おかしくねへぜ　左「ソウ〳〵稽古もあらましすじが通ツたからいゝとして。出かける仕度にせう。ドレ眼公いせうを見せな。ムヽいゝ奇妙〳〵、黒羽二重に朱鞘の大小に編笠ト　サアアバ公渡すぜ。こつちは杖計りだ　サア〳〵着替へた〳〵　是より後ヽいのあい思か〳〵のこしらへ出来て、　左「先是で支度はいゝがチト腹がわりイナ　眼「そふさ今日はめづらしくマダはじめねへから。物わすれをしたよふだ。なんぞ肴をこしらへよふか。　左「何〳〵そんな事をしてはいられねへ。イヤしかし弁当がいるナ。眼公そこらへいつて見つくろツて来てくれねへか。雨もちひに。すしなんぞもいゝぜ　アバ「アヽまずひ物屋のにしめもおそれるス。そして鮓もこひねがわくは。長門といきてへナ　眼「長門ずしとはどこだ　アバ「馬喰町ヨ。此男もアノすしやを知らねへか　眼「なんぼおれが物知りだとつて。どふして爰いらまで知れるものか。コレすしの評判十八丁といふハサ　左「わるくごたつくぜ。何でもいゝから早くはたらひて来さつし。そして笈の中へみんナ詰て。國武州は一ト足跡から出かけさつし。おらア茶碗で二三盃ひつかけて先へ出よふナア出目公　出「ムヽそれがいゝ〳〵。マアおれからはじめよふ、モウぐびがのど〳〵する　アバ「ヤレ〳〵いぢのきたねへ男だぞそんならてん〴〵にしよふまちどふだ。サア是へついで

くんな　左「そりやアいゝが順禮唄を承知か　出「ヲツト氣づかい給ふナ。例の美音で女どもをまよわせてくれべエ。ふだらくやきし打波のおのれのみ　アバ「ムヽくだけて今朝は物をこそ思へかへン紋切形だの　左「サア〳〵アバ公出かけねへか　アバ「ヲイ〳〵モウ一ツついでくんナ　出「いやモウあきれたいぢきたなダゾ。そんならおれもモウ一盃やろう　トまけずおとらぬ底ぬけ上戸、左次郎はよふ〳〵たお出す、　左次「サア〳〵おそいぜ〳〵今からそふ呑でつまる物か。是からが大役だばか〳〵しい　トこゞさたら〳〵手を取つて引出され、アバ太郎は編笠をふかく打かむり。出目介左次郎もおひづるをふところに入、すげがさに顔をかくし、隣家をしのび出て行。引ちがへて眼七歸り來り、　眼「サア肴もりつぱに出來たナント重詰はきれいだろう

卒八野呂松「ドレ〳〵　眼「ヲツトそれからごろうじろ　卒「ナンダナまだ見へもしねへ。喰うといやアしめへし。ごうぎと用心をするぜ、　野呂「すみの所に有ル黃いろナ物はなんだ　眼「ドレ　野「是ヨ　がん「ヲツト其手はくはねへト。ざんその手をくはずは此足を喰う　トさくら煮をしてやられ、　がん「エヽぶじやれるナエ。きたねへ笈から出すのだから。きれい事でなくつてはいけねへから。折角骨を折て詰させたに。チヨツだいなしにしたア　卒「ドレ〳〵ほんにナア。おれが直シてやろふ　眼「いんやたのむめへ。モウ〳〵ぶつそふだ。早く笈の中へ納メよふ。サア〳〵地藏さま御きうくつながらひろい所に寐ておいでなさい　ト笈傳を引出し、三味線酒肴諸色を詰込み[illegible]しておろし、　がん「サア是で安心だズブさんかぎをわたすぜ　圖武「ヲイよし〳〵。アヽしかしおれが一チばん難義ナ役だナ行つくまでの。道中がつまらねへさまた　なんでも酒の氣をはなれては出來ねへ。モウ二三盃やりつけよふか　眼「エヽうるさく呑たがるぞマアわらじでもはきねへ。其内かんを直シてやるから　圖武「ムヽそんなら爰へもつてきて下ダツし　ト上り端へ出わらじをはく、　ざん七「ソレ笈ヨ。ちつとおもいぜ　卒「サア〳〵かんが出來た呑ツし〳〵　圖武「ハイ〳〵是は御ほうしやでござります。どふぞもちつと大きい物でお願申ます　野呂「コレサ〳〵いゝかげんに呑で出かけねへか先へいつた。てあいが待遠だろう　眼「そふよ〳〵おいらたちも跡を片付て出かけよふ〳〵　ト追たてられて圖武六はとなる形りもこゝろもせかず、酒氣に乘じて出て行

花暦八笑人卷の一尾

花暦八笑人　巻の二

ふめばおもしふまねばゆかんかたもなし　心づくしの山櫻かなと。赤染右衛門は詠れけん。花の山里多かる中に。わけて江都の飛鳥山。植人もうゑ〳〵花盛。吉野初瀬もおよびなき。その山ふみも遠近より。あらそひきそふ道草の。花見連中。傍とともに引つゞく春の日あしや。足元もよろ〳〵山のつゞらおり。酒のとぶとも岩根ふみ。たどるかたへの出茶やには。きせんをゑらばぬよしず圍。花より團子の下戸上戸。かの醉狂の圖武六は。六部の姿に出立左次郎が宿を出。池の端を谷中の方へいそぎ行。最早隣家も程すぎしと心落つき。少シ稽古の心にて。しゆせうげに鉦打ならし、圖武「なまアだアぶウなアまアだアぶウ〳〵〳〵　六十餘りのはアさま「アイ六部さんしんぜませうトいわれて圖武六びつくりせしが、ぞ大事さとふくよりこゝをかゞめ、圖一「ヘイ〳〵是ははや有がとふございます　ヘイ〳〵是ははやヘイ〳〵トわるていねいに錢をいたゞき行よぎるをはアさま聲かけ、ばゝ「コレ六部さんほふしや返シのゑこうをナゼしたさらねへ　トとがめられて久びつくり、ハッと思へど何の押づよからぬ顔にて　ツブ「今いたす所でござります　ト口にはいへど何といふ役といわんさ、目をねむり口計りむぐ〳〵してむさうに鉦をチャン〳〵〳〵〳〵、しばらくしてとふ〳〵心當りの出來しにや　ツブ「エヘン如是畜生ほつぼだいしん。往生安樂國なアまアだア〳〵〳〵トしばらくして目を開てみれば、はアさまも見へず、ほつとしトいき　ツブ「ヤレ〳〵おそろしいめに逢た。モウ〳〵念佛は申サねへ　トつぶやき〳〵いそぎ行うしろより、「ヲイ〳〵六部どんしんぜませう。　圖武六ぎよつとせしが聞付ケぬふりにて早足に行すぎるをうしろより笈をしつかりおさへてうごかさねば、　ツブ「だれだ〳〵コレたおれるわへ。辛公か。野ろ松かふざけるナ〳〵　トしばらく引合しがことの外せき込し聲にて　判八「おれが見付ケては一寸も先へはやらねへぞ。いやはや〳〵貴樣はこなたは。おのれは〳〵〳〵〳〵　兄貴におどろきよく〳〵見れば、古笈の判八といふ悪友なり、けふ上野へ參詣し、ついでながら圖武六が宿へ立寄しに、圖女房圖武六が行衛不知とのわけ、又此ほど四五日も春へまゐりて當へ、はより付おなごさき折から、いけんいたしくれよとたのまれ、其歸ルさとなるなりをふるよりも、正じきごうぜうのかたゐやじらかはゆシもこらゆべき、おなつんぼのごう懸ヲふいた、て、　判「コレ。何がすまぬとが有ツて。お袋や女房を捨て六部に出るのだ。それほどよん所ねへ事なら。ナゼ相談づくで出ねへのだ。役にたゝずながらも。こなたが居ねへ日には。おれひとりやつかいを背負込みダは。　圖武六はいゝわけせん〳〵と思へど、判八はかなつんぼなれば、大きにてこずりいつも仕形にて噺しをする故、念佛へゆびをさしかむりをふり、是はぜうだんだ、花見にゆくといふ思入にて、鼻と目へ指さしする、　判「ナンダ六部に出るもいやだが。フウ鼻と目が役にたゝねへ。コレそれ

まいわねへことか。おとゝしのよこねのとき、しつかりと療治をして。一歳も毒だてをしろと。口のすくなるほどにいつても。廿日もたゝぬ内にモウ大酒をくらつて。悪物喰。たツたひとりのお袋が。ないたりわらつたり。くろうするを。へとも思わぬみんナばちだは。ヅブ「ナニサそふではねへは　ト又くふうして歯をむきだして、ゆびにてつゝきて見せ、又四文錢壹文出シうらのなみへゆびさし、歯波に行これしへ、笈の中は酒や弁當だといふ氣ごりにて、笈へゆびさし呑喰するまねをしてみせる、　判「ムヽナンダ歯。四文。ムヽ橋本町へ這入ツて此笈で喰氣だ。いやはやこなたも生若イさまをして。ふがいねへ男ダゾ。コレ親にゆずられた家業でさへ。なまけ廻ツてくへねへものが。壹文貫で親や女房がくわせられるものか。ヅブ「エヽこおれツてへ。そふでもねへは。そんならモウ仕形がねへ。此内を明ケて見せよふ　ト眼七に受取し笈の鍵を尋れども、チヨツとさもこへ入置しが、いつかふり落せしと見へ、向知れず、いかゞはせんとうろたへながら、きせるの吸口にて錠をこじ廻して居る、此押合の内往来の人ひとりふたり立留せしが、だん／＼あつまり、何かはしらず六部と親父と問答をするといゝふらせば、近隣の人我も／＼とはせ集り、ぜん時の間に黒山のごとく人立せしかば、　判「コレ此通り人立がして。外聞かわりい。マア／＼おれと一ツ所に内へけへらツせへ。何も彼もうちへいつこ。わけを付ケるがいゝ。圖武六も尤とは思へど、此ざまにて宿へも歸りにくゝ、又飛鳥山の手筈も相違するとゆへ何とかして引はずさんと、　ヅブ「先へ行なせへ。跡からすぐにゆく　ト手きねをすれば、　判「イヤ／＼そふはならぬ。貴様先へたゝツせへ。おれが跡からついて行と　トいきまきあらく中／＼がてんするけしきなければ、彼是長居するほど外聞あしく、心ならずも元來し道へ立歸る、判八はうしろより笈の角へ手をかけながら、跡へつゞいてふみくる、道より圖武六が宿へ歸れば何な房は、ふもさぞたい、隣家の人日家主まで集り来り畏るさまに大きにおどろき、家内大もにおやくこなりけれど、兎角いゝくろい此まゝ出行んと、花見の趣向を咄増いゝわけすれど、多勢にいゝまくめられ取おさへ［illegible］ごかさねば、笈の蓋を引放シ中の仕込を見せ、くわしく咄し聞かせよふ／＼みな／＼得心の色見へければ、はや春の日の長しといへど、店受の起發、家主の理屈、隣家の異見、女房の愁嘆、留大わらひと成ることに、茶番は寂滅人相に飛鳥の花はいかになりけん、圖武六も御輿を居て、有合酒肴とり出して、みたニぞ／＼に機をのべ、心ならずも酒役かわり、かくともしらず彼三人は日暮し迄の［illegible］ちにて、こぞ／＼にと度を直し、　左二郎「アバ公愛からわかれて。先へゆかツし。そして美しそふな幕張を見て置ねへ　なんでも勝負の場所は、女澤山の所と究よふ。アバ「承知／＼女の目利ならへン外の者には出來め　出め「ヨシ／＼いゝサ／＼とみはねへよふに早く行ツし　ト是よりわかれて出目助左二郎は引さがつて、ぶらり／＼と日暮をぶら付道くはん山をたどりながら、　左二郎「ヲイ出目助何ダかおかしな足取だが。あんまり呑過たよふだぜ。例のタテはおぼつかねへもんだノ　出め「ナンのおれが歩行形よりおめへがむづかしそふだア　左「馬鹿をいわつし。おれに間違が有ル物か。アノたて計りは。安波公がよく呑込ンで居るヨ。どふも足下がけんのんでならねへ　出め「ナニサあんじなさんな。美味やつて見せよう。しかしヤどつとひと見へに成ツて。後の鳴物が。かわろうといふ所からが。少シとつ

万一「おども」等未熟にて打負ば。「さへぜん」の慮外のはるしこ遣はそう。又打勝におひては。元より眞劒たゝみかけて新身
のためし。「ちん」と「殿」。此義はいかゞでこさろう　筑五「よつこそおみやア」付カれた。成程只今までためしおつたは「しぎや
ア」計りで。張合が「なか」事なれども。「しやッ」等が飛はねおる所を。「みんごと」すつぱ〳〵「切」さぐる「は。ゑゝ手定メ「たい」
然らば。支度いたそふと 下ゲ緒をほつし早だすき、こへ口くツろげ左右なつめかけ　筑四「サヽ「ひやアく」立上りおらぬか。兵術の。心がけおると見た故。
乞喰なれども。心根を不便に存じ。武士が「やアて」に成ツて遣はそう「ちう」に。「なじか」立合おらぬ　筑五「たゞし此まゝ打
掛ケ様かと 双方よりつめよせられ、左二郎も出目助も魂は中天へ飛上り、死人のごとく口びるまでつち氣色に成、酒氣は一向覺て仕舞ガタ〳〵ふるひ、引ッぱづして迯んにもあしこしなへて立上るときさへ出來ず、はいづりながら　左二郎「モシ〳〵失禮ながら
それは大きに。お目鏡違でござります。どふいたしまして私どもが。劒術なんぞ存ます者では御座りませぬ。〳〵有様は寔の
順禮でもござりませぬ。よん所ないことで。身をやつしましておるので御座ります。それもたつてお尋なら申上ませうが。と
てもまことは思し召ますまい。只御慈悲に命をおたすけ下さりまし　出目介は大なる涙をまへ、〳〵聲、目の根をたれ、　出目「ハイ此者が。申。通り。ど
ら。奉りまして。お武士様に。手むかひ。奉ります もの歟。わゝ私は。し。舌がちゞんで物が。いわれ。ません。ハ
イ「おがみ」の。後生様で御座りますどうぞ。命計りは御たすけ。遊ばさせられ。下さるびよふ。エヽ ぞんじ奉ります。
筑五「ヤア今さら「ふぎやアねへ」たは言いわずと勝負いたせ。此方「かツご」極ておるは。　筑四「おのれらわりい了簡ばい」「た
てへ「勝負」せねばつてんこ。此まゝゆるすこと「まかい」ならん。さすればせうぶは時の運次第。仕勝おつていきさゝく、のぶる
ゝが「ゑゝ」で「にやアか。彼是日間取内往來の人立チがしおるは　筑五「エヽ「ひやアく」立「やア」おらぬか ト出目介が杖を取ッて身ぐりし、突付る、拍
子に、杖に仕込し貝張、三寸すらりと抜れは、左二郎はハットおどろき、是を見せてはなを、ねじくり、むづかしからんと手早くしまひくる納ルを、筑四郎は目早く見付　筑四「ヤレ「ちつご」ゝ〳〵ぎんじ「ひきやアこさつしやれ。
先刻より「しやッ」等の爲體がてんゆかぬことども多き中にも「たでへま」忍劒の所持いたすを見受ましたが。何さま倶不戴
天の族かと存るが。貴公如何思わるゝ　筑五「なるほど貴所の賢察の通り。左様に存る。少シ小聲になり コリヤ順禮敵どもも尋おる身
の上か トいはれて左二郎しすましたりと、心によろこび殺の錦士手場の思入になり、　左二「ハかゝ御ン見咎に相成ましたる上は是悲も御座りませぬ。御推量の通り大望の

有令どもで御座ります　それ故命がおしうござります。どふぞこのまゝおゆるしなされて下さりまし　出目「ヘイ私も左様で御座ります　筑四郎に弟子を行　筑四「テモ扨もそうとも不存寄の怒を根にいたし。せへぜんよりの過言ゆるさつしやい　筑五「いかさまたいこうは。せへきんのきやアり見ずと。大望有る身は堪忍が大事ジヤ。先刻よりの過言今さらこうけへいたす　ト風なみ直れば両人は下に生した心持して　出目「ヘイ私共は生れ付いて人に負る事がきらいで。今迄五分でも引ケをとつた事はござりませんけれど。どふも敵を打ますには。成丈ケあやまつておりませんと。どふもそこが　トくだらぬ事をならべたてるを、左二郎は打けし、目くばせにて出め助をにらみつけ　左二「イヤモウ先程の慮外をおゆるし下されますも。矢張親共のかげみに。付添助けくれますかとぞんじられます　トそら涙をこぼしかは八法をあて　何時を限りと定メもなきうきかんなん。其上めぐり逢ましても。万一返り打になりませうかも知れません　トしほ／＼とする、両人の侍もしきりにうれいをもよほし　筑四「何サ／＼左様の不吉を申ものでねへ。孝子には天の助ケちうが有る。しかし其やアてちうは。手強やつか　左二「左様で御座ります。同じ家中に名を得たる剣術師範のヘイ名はもうしにくう御座ります　ト云　相手ト云　筑四「成程／＼尤しな事じや　承わるにも及ばねが。ア、何にもいたせ万端何角深労の段察しおる。思わずも隠水の催た。ハヽヽヽサヽ手を上ゲられい。本望とげられた其上は。尚又いつかどの御出世でござろう。我／＼とても同じ仕官の身。斯承る上は高下はござらぬ。サヽ平に／＼に　ト言葉も直り、いねいのあいさつに　出目助は頭にのり又さし出る　出め「ヘイ／＼何。是が勝手でござります。モウ身を落しますからは。昔の気を出してはいけません。たとへ内に金の茶釜が有ルと申ました所が。はじまらねへ理屈で。ござります　左二郎は出目助が口をだすたびに、ひやひや／＼して、又にらみつけ長居をしては、化の皮が、あらわれんと、しきりにけんのんに思ひ　左二「是は大きに御遊山の。お邪魔を致しました。最早おわかれ申ませう　筑四「成ほど。此方はともかくも。人目しのばるゝ。おの／＼方。人立致おるで。さぞ。心配でござろう。ア、名残のおしまるれども。是非に及ばぬおわかれ申ウ　筑五「武道を磨く我／＼。不計もかよふなる。孝子に行逢も。武門のめうが。今日は吉辰「パイノ」ニテ有　イヤーじるぶん　随分とも。身を大切に本懐のたッしめされ。御縁もあらば。重て貴顔の得ませうと　残り多気に見送り／＼、わかれ行、げにいおつゝきは武の表裏のなさけぞ深かりし、跡にふたりはぬくめ鳥の、暁を待得し心地して、五色のためいきをホッとつき　出「ヤレ／＼とんださいなんニ逢たノウ　左二「さい難どころか命ヲ拾ツたア。コレちつと気を付ケさつし。

どうも麁相ッかしいからこんナ目に逢ノダ。どふしてまたアノ侍の鼻面へ。丁度杖を突懸ケたろう。おらア向をむいて居たから。後から人の來るのも知れねへ筈だけれど。足下はアノ時こつちをむひて。居ながら侍の來るのが知れねへ事も有るめへにばか〱しい　出目「そふサどふして見付ケなんだかサ。どうもおらア藝事にかゝると。夢中に成てならねへ　左二「ナンの藝も大相ダア。まだしも顔へ突かけて。疵でも付ケねへで仕合。アノいきほひで疵でもついて見たがいゝ物いわずひつこ抜てやられる所だァ、おそろしい。思ッてもぞつとするは　出目「ホンニおそろしい事よノウ。しかしアノ侍もあんまり短氣ナ手合ダ。こつちもわるさは悪いけれど。殺ほどの事も有るめへじやアねへか。なんぼ此方連だといつて　犬を切ッた様にもいくめへす。こつちが死ねば先も解死人に出るだろう　左二「とんだ事をいふ。そこは武士の威光だは。こつちがダアといつて仕舞と。死人に口なしよ。いゝよふに理を付ケて。慮外者故手打に致した此段御屆申。ハイ左様ならぐらいで濟で仕舞ハサ。それだから町人は。割が悪イハ　出目「馬鹿ア言ねへ町人だとつて茄子や大根を切る様に。ソウ手輕く濟ものか。こつちニも荒神さまも大家様もあらア。又急度そういふ筋のものなら。屋敷方、出入の職人商人其外武士を相手にする商賣は皆馬鹿もの。往來をするにも向から侍が來ると通り過るうち軒下へかゞんで。待ていねへければならねへ。どういふ間違で。麁相しめへ物じやアねへ。ばか〱しい　左二「ナンノ今になつて。其様にりきむ事はねへ。さつき其通りいへばよかつた。漸々舌が廻ッて來たナ　出目「ナニサいつもだと。足でもすくつてほうり出して。ぶち放シといふ所だけれど。何分茶番の事が。氣にかゝつて。今度でそうどうおこすと。モウ飛鳥山もチヤン〱に成と思つたからむねをさすつてこらへて居たのダ　左二「このべらぼうだん〱つよくなるナ。そんならナぜさつき大粒な涙をこぼして泣た。　出目「おめへもベソ〱泣タア　左二「おらがのは傾城泣といふので。目へ袖を押付てこすりちらすと。目淵が赤くうるんでくるは。そこで又。せりふ廻シでぐ　とられいがきいて　あれから侍の氣がおれて來たろふ。足下は又手ばなしでポタリ〱、一ツ粒拾六文位な涙を落シたり。鼻の先へ綱渡りをさせて。鼻の中ばへしばらくたもつ。名付ケて野田の下り藤といふ

涙をどふしてこぼした　畠「ヘンおれも傾城泣ヨ。おめへの様にするのは。昔の傾城泣で目のふちへつわを付ケたり。のみかけて有茶を付タりして。袖でこするなんぞは。聰で褌をしめた時分の。客人でなければ眞受にはしねへ。今時は手ばなしで泣て見せねへでは得心しねへワナ　左二「そんだといつてうそに涙が出るものか「そこに秘傳が有るのサ　畠「ハテナ本とうか　畠「空言も眞言もいるものか。現に今おれがのを見たじやアねへか。　左二「ハアそんなら今泣たのはうそか。畠「知れし御事サ　左二「イヤそりやア妙術だ。さつそくお弟子いり　畠「へこそれだから人は破家に計りしなさんなよ。何かしらちつとは能の有る物だ。今三津五郎でも。幸四郎でも。愁歎に。本とうに涙をこぼすのはみんナおれが傳じゆだ　左二「イヤ又人がちつと受ると御大相なほらを吹からどうもならねへ　畠「ソレそふ思ふからどうもならねへ。法事といふものは理詰な物で。第一信こうがなくツてはおしへてもやくにたゝねへ　左二「フウ成程そふいふ譯も有だろう。そんならまじめにどうぞおしへてドゞツし　畠「ムヽそんなら教よふが。何も別にむづかしい事はねへ。マア女郎でいつて見よふなら。今夜此客に腹をたゝせて歸しては。約束の夜具も間違とかいふ時是非〳〵一チばんぐんにやりとさせよふと思ふとマツぐつと氣を落し付ケ。うつむいてふさひで居ながら。我が親か兄弟の死だ時の事。父遺言なぞを思ひ出したり。お袋の病氣で。人參の代に賣られた時の事なんぞしんに思ひめぐらし。十分愁をもつて。相手が腹を立ツているた。エヽうらめしいお心ダ。なんぞとむねの内でいろ〳〵考ながらよわ〳〵とあいさつをして見ねへ。そりやア手ばなしに涙の壹升や壹升五合出スぶんは。十五夜に糸瓜の水を取より心安イ　左二「アハヽヽヽヽおふ方其くらひな事だろふと思ツた　畠「ナゼ〳〵左「ナゼといつて馬鹿〳〵しい。そりやア成程女郎なんぞは其くらひナ事も有うが。よくつもつて見さつし。足下なんぞが。親の死だ時の事を思ひ出したぐらひデ涙を出す風か。コレ一昨歳親父が死んで葬禮の時。其面にもはぢず。三津五郎の身振で燒香して。始終袴のヒダを。内から手を入れて崩してすわつたり。かたをギス〳〵しながら膝で歩行たり。いやはやおらア冷汗を流して見て居たぜ。死たてのほや〳〵でせへ。其くらひのべらぼうだものを今時分思ひ出したとつて。そ

りやア手めへが出す氣でも淚が不承知だア。なんでも今こぼした淚は地金だ〳〵、なまんだいふな〳〵ハヽヽヽヽヽそれはいゝが。物云はちつと氣を付ケさつし。むだツ口やへらず口は。わる達者だが。少シまじめな事は無躰なもんだぜ。何だろら。ヘイ左樣奉りまして加樣奉ります。お腹立を納メ奉りますツ。ヘン大山へ參る山伏の樣だ　出「そふいゝなさんナ。あゝいふこけは。あがめさへすればうれしがる物だ　左二「いかにあがめるとツて。どういたしましてと云所へぬしがいふのは。どう奉りましてといふからわけがわからねへのだ。せめて仕りますならいゝに　出目「崇るから奉ると云のよ。チョツトいふにも。崇奉て置と。いふじやアねへか。あがめ仕ともあがめ致ともいふ人はねへ　左二「エヽ口のへらねへべらぼうだ。なんとでもぬかせ。そりやアそうと大きにおそくなつた。安波公かけゾうろ〳〵して待て居るだろう　出目「そふヨちつときり出そう。鬪武六や外の奴等はどふしたろう　左二「ナニ是も先に成たノサ。アレ〳〵。向から來るのは。モウから樽にして歸つてくるぜ　出目「ホンニナア。いゝ歲增が見へるナ。ヲヽ〳〵醉たは〳〵。どうも女はよろける程醉ては中ダヨ。何でも櫻色だ。目のふちがすこし。トロリと來たくらひの所が千兩だ　左二「跡の新造は是卜の大通ダぜ　出目「ム、〳〵こりやアたまらねへ〳〵　左二「ナンダ〳〵見へばるナヱ。いくら衣紋を直シたとつて。箕摺に柄杓ではおさまらねへ。よせ〳〵　出目「チョツいめへましいナア。モウモウこんなゝわだてには一味しねへゾ。馬鹿〳〵しい人は。花見に出るには。借著をしても見へばるのに。此ざまは何事だろう　左「なんのふさぐ事はねへ。著物はどのよふに立派にも出來よふが。頰の皮迄著替られやアしねは　出目「そういゝなさんな。馬士にもいせうだが　出目「我が形ゝ。ヘン公家にも綴では。たさまらねへ　左「所を馬士にも綴だものを。何分納メ奉られめ、ハヽヽヽヽヽ　出「ナンのおかしいこともねへ事をわらはせ　トかはるがはるくちよ

左二「剛氣とふさぐナ。コレ途中で見へばりに來はしねへ。飛鳥山がかんじんだ。サア〳〵いそごう〳〵　ト是より道を早メて行なかばにて、往來の花見人をさき〳〵こしらへだけして、たゞその人等がおこゝろのみ通りものと心得たるもおかし、是より擺置安波太郎はとくより飛鳥山にいたり適宜の場所を見いだしておかんとそこ爰さぶらつくうちはや酒氣も覺めうす淋しく思ひござも、今を盛りの花の山貴賤を若なく、小間物籠を取おろし、たゞ一聲を飛鳥山所々きゝて聞へ、うたひつ舞つ餘念もなき有樣を見て、安波太郎は猿狂言の役者のごとく茶番の事も打わすれ、浦山しげにのさり〳〵と見歩行を、花見の人々うさんに思ひ、殊に女中はうそ氣味惡くじろり〳〵と目を付れば、例の己惚たつぷりに一心いきゝ〳〵いきゝごも何といゝよるよすがもなく左右うろ〳〵する所へ、宿に殘りし四人の者がはし

ふく行合、卒八は小声にて 卒「ヲイ安波公まだか〳〵 アバ太郎ツ、[illegible]大にて 安「ヲイみんな早かつたナ。イヤきてれツ〳〵 安波さん有卦ニ入り敵
役替ツて色事師となるシヤン〳〵 編笠をほうり出してちらけへりがしてへ。卒「コレどうした狐にでも化されはしね
へか 野呂松春七「マア向ふの茶屋へでもちつと休ウ。安波公も一ツ所。歩行ねへ。連のふりせへしねへければいゝ。安「ム、
そふしよふ。おれもチツトうけて貰てへ事が有ル みな〳〵「何ンだかむせうにたれかゝりそうで氣味がわりい。おかわで
も買て來よふかトいゝ[illegible]やが遠に腰をかけたから 安「コレ〳〵早速なおらだが今日ほど女に目を付られた日はねへぜ。みんな編笠の内を
のぞき込ンだり。又見る様で見ねへ様で。イヤ成程色事は花見の事ダゼ。ナゼといつて見ねへ。女は一ツ淫陰氣たもの。それ
だによつて物事が都而うちばだから。女が男をくどくといふ事はめつたにねへもんだ。所が花見といふやつは。どの様ナ陰
氣な人も。陽氣になる場所だから。男増りに女の方から持懸る様に成ると思ふ。卒八「コレサマアどうしたのだヨ。ほんに
氣味の悪イ狐でもつきはしねへか。マア氣をしづめさつし 野呂「そして左次さんや出目公は來て居る様子か 安「ナアニマ
ダそこ所じやアねへ。マア聞ツし。凡江戸廣しといへど飛鳥山の花にしかずサ。飛鳥山廣しといへどサト向い方へ指を差し。アレあの
櫻ノあれは一昨歳植ツたぜ。七小町といふ名札の立ツて居ル。アノ木の元に纏居したる一ト群。なんでも御大家の奥方と見
へるが。上下ひツくるめて甲乙なしのドロビイ。卒八「ナニあれが盗人の女房か 安「エ、わからずはひツ込ンで居ロ。是
ドロビイとは硝子を逆といふ事だは 卒「アハ、、、うぬ計り呑込ンで居てさつぱりわからねへ 野呂「それがマアどふした
といふのだ。安「イヤサ何も取しきつてこうといふ事もねへが。先刻さつきからおれが行廻りかん廻り。三四度もアノ櫻を見て
居たろう。そふするとそれ迄何か高笑をして居ても。しんとなつてコソ〳〵噺ヨ。何か聞とれはしねへが。目引袖ひきいそ
〳〵する様子。イヤモウ咄しても惣身がぞく〳〵してだるひ様だが。どうも言寄てだてがねへ。いゝ智恵が有たら借して下
ツし友達のよしみだ みな〳〵「アハ、、、、イヤはやあきれたしろものだ。足下も鏡のねへ國の人ではあるめへし。女三昧
もてへげへにさつし。今日の形りは拵がおつりきだから。先でもぶ氣味に思つてじろ〳〵見るのだろう。そりやア茶人の女

でも有なら間抜でいゝとか。ちゞむさくつておもしろひとか。名を付ケて惚めへものでもねへが。氣心も知れねへ初對面から。ほれられよふといふ面でも有めへぢやアねへか　安「何もそんねへに手ひどくいわずといゝはサ。おれだとつてちつとは切ッ掛ケもあると思ふから相談するのだ　野呂「ハアそれぢやア少シは出來勝手ナ當りでも有るのか　安「そふよ。
呑七「なる程イヤ待ねへヨ。こつちが十分見くだして計りいるからしんこうがねへけれど。惚る心持に成て見た所が。コウト。先が武家育に。こつちが武士の忍び出立。著付ケは黑羽二重の紋付。萠黄博多の挾帶ぐつとはでに朱鞘の大小と。ムヽいゝわへ。御面相は編笠で見へず。下から覗て見た所が。鬼髭ダがマア。是も青髭と見るサ。ムヽいゝわへ。こいつはどふか。取結様が有りそふなもんだ。　卒八「そふよ首尾よく成就した所で笠を取ルと。手付ケ損にしておことわりヨ。こいつはおもしろい〳〵　安「ヘンそれ迄にこぎ付れば面にはかまはねへ。手くだで殺て見せべヱ。何にしろアノ幕へ入込ム手段にこまる
呑七「マア花見の場で心安くなるのは哥だナ。チヨイと梢へ付ケた短冊を。先で讀で又返哥の心持で。短冊を付るなんぞといふ様ナ事がマア早手廻しダナ　安「イヨ〳〵作者〳〵。妙案〳〵。こいつはきつといゝ。しかしたんざくに困るナ　卒八「ナニそれは鼻紙の端をさきかけて。チヨイとよりかけにしていゝのサ　安「ム、成程是以テさそくだナ　呑七「なんの是もたづともの事だ。ひどくかたくほめるぜ。それはいゝが哥は出來るか　安「どうして出來るものか。おめへたち考へてくんねへ
野呂「そんナつまらねへ色事師が有るものか　安「それだとつておれには出來ねへものを。仕形がねへ。呑公考てくだつし
呑七「どふしてそんナぶ人がらな事を知るものか　安「是迄にして腰がおれてはゝやしい。卒公眼公野呂松コレ拜む〳〵
卒八「それだといつてむりな事計りいつたもんだ。ついぞたべた事もねへものを　野呂「何とでも自作でこぢつけねへナ
安「なんのおれに出來るくらひなら。氣をもみはしねへはサ。なんの卒公なんぞは初午ダノ天王様ダノにはやりながら。いぢのわりい友達づくといふものはそうしたもんじやアねへ　卒八「それは地口や川柳点だは　安「それでもいゝはナ　卒「馬鹿〳〵しい地口で色事が出來るものか。せめて狂哥ならいゝけれど　安「ム、其狂哥がいゝ〳〵　卒「イヤサ其狂哥が出來

ねへといふ事ョ　安「ナンノおつゝうな事計いふからはじまらねへ。イヽどふするものか。ねへ昔とあきらめよふ。やつぱり縁のねへのだ。其替り此末おめへたちにどんナ事が有ツても。おらアしらねへといふから。其時腹をたちなさんなヨ　卒七「イヤハヤわけのわからねへ男ダゾ　安「そふヨおらア譯がわからねへ男よ。わかつていれば哥の十ヲヤ廿ナニ差支るものかト大きにふさぐ、眼七は野呂松をかたかげへ引廻し　眼七「コウあの様子では。今に左次さんや出目公が來てもかんじんの趣向は身にしみてする事ではねへぜ。　野呂「そふよこまつたもんだ。よし〳〵みんなと相談して何とでも哥らしくこじ付ケてやるべイ　トいひさまこなたへきたり　眼「卒公安波さんもあのくらひ思ひ詰たもんだから。何ぞ考て見よふじやアねへか　卒「そうよおれもどふぞこじ付ケてへと思ふけれど地口腹だから樂首になつてこまる　安「ナニ〳〵道修でもいゝ。ホンノ手引の爲計だ　卒「そんなら待ねへよ。七小町といふ邊の下に居るから。カウト。ムヽ。こつちは浪人と。フウ。先はマヅあがめていへば雲の上人ともいふ心持でとフウ　安「ムヽいゝ〳〵。成程向を高イ人と見るから雲のうへ。　卒「コレサかんげへてゐるのに。ちつとだまつて居さつしナ　安「ヲツト無言〳〵　卒八はしばらくかんがへ　卒「アヽやつとこぢ付ケた　アバ太郎に乗上りおごり上り　安「有難し出來たか〳〵　卒「エヽびつくりさせタア丸で氣違だハヽヽヽヽヽ「こふいふわけだおゝむ小町を向つけにこじ付ケた樂首ダぜ　安「ムヽ道修かいゝ〳〵　「雲の上は有し昔にかわらねど。見し玉だれの內ぞゆかしき。といふ哥を地ぐつたのだ。芝の上は借し莚にかわらねどサ。見し玉揃の內ぞゆかしき。どふだ〳〵　安「アヽ引いゝうまくやるナア。玉ぞろひの內ぞゆかしき。有がてへ早く書てくんねへ　と鼻紙を出して野呂松にかゝせ　「サア付て來よふ。なんでも此書付を先で取さへすれば。モウそれが縁のはしだア。どふか氣が改まつたらはづかしいやうで行にくい。ヘン思ひ切てやらかせ　ト宣人いそ〳〵かの木の元へいたり、下枝へ結付しづ〳〵と立もどり、目もはなさず見ている　「サゾ今比は評義まち〳〵だろふ　吾「ヘン扇パチ〳〵が聞てあきれらア　卒「アレ〳〵中年增がたんざくを取て引込だぜ　安「ヤア〳〵ほんになア大願成就。コウ〳〵奢るぜ〳〵　トいそ〳〵夢中になつて居る所に、はるか山の裾にてチャン〳〵と鉦の音聞ゆれば　卒「サア〳〵圓武州が來たぜ。マヅ色事師はしばらく預り〳〵　安「何サマダおそくはねへ。そして左次さんや出目公も見へねへ物ヲ　トうつゝをぬかして彼の方をにらみ白眼つめて居たりしが　安「ヤア〳〵出た

ぞ〳〵ヨ短册をつけるぞ　眼七「成程うめへ〳〵。安波公早くいつて取つて來さつし返哥が見てへ〳〵　安「あんまり度々だから行にくひ様だ　卒「馬鹿なつらな今になつてちぼけていけるものか。爰がかんじんの所だに。返哥の様子ですぐに向へ言葉を懸ケよふといふ場だ早く行ツし　トせきたてられ又しづ〳〵さかしこにいたり、彼のたんざくを見てしばらくかんがへ、何カふ興げに立かへるゆえ、みな〳〵「どうした〳〵ナゼすぐに歸つて來た　卒「首尾はどふだ〳〵　安「どふかよさそうもねへから。なんともいわずに持てきた見てくんねへ　「どれ〳〵　トみな〳〵打寄短册をよんで見る　呑七「ナンダ武士鼻たれの愚智ぞおかしき。ムヽぢよさへなく地ぐつたナ　安「何だか悪たいの様だぜ　卒「そふサ鼻ツたらしめへ。ぐちをいふナといふ事だろふハヽヽヽヽ　眼七「そんナものだ。しかし女の口調にしては味く地口タ。そしてサツクだから有難イ　安「ナンノ有難イ事があるものだおもしろくもねへ。あんまり人を喰ツたやつらだ。よし〳〵是から古法科でぐつとしけ込で。おもいれかツくらつてふざけぬいてくれべヱ　卒「コレ〳〵とんだ事をいふ。先は大家の奥女中。めつたな事をすると大へんな目に逢ぜ　呑「そふよ先のせへはねへ。ぜんたいこつちの己惚からおこつた事だ。アノ手合は男をひやかす事はなんとも思ふのぢやアねへ　野呂所篤「ハヽヽヽすつぱり釣られたナおかしろい〳〵　呑七「見し玉だれを。武士鼻たれはいゝ〳〵。　安「あんまりげら〳〵するナ。人のいゝ時にはてん〳〵にふせう〳〵なつらをして居て。ちつと落目になつてくると。アハヽ〳〵笑ぜ。いめへましい。どふかしていしゆげへしをしてへもんだ　卒「コウ〳〵其意趣げへしはいゝ事が有やす。今に役者がそろツたら。アノ幕のそばでおつぱじめるがいゝ。なんぼ屋敷育でも鼻の先で切たりはつたりを。じつとして見てはいられめへ。そふしておいちらしてやるがいゝ　呑「それがいゝ〳〵。左次さんや出目公はどうしたろう。モウ來そふナもんだ。闘武六はさつきからきている様子ダ　トいふ所へ向の方にて　「ふウだアらアヽくウヽやアヽ引　卒「アレ〳〵來たぞ〳〵呑公。早くいつて場所をのみこませてきさつしそつとダゼ　呑「ヲツト承知だ　トはしり行兩人にしめし合せる　卒「アバ公しつかりさつしヨ。かんじんの所だぜ　安「ヘン美味やつて見せよふ　ト帶など〆直シしづ〳〵と歩行ゆく左二出目助もつゞき合ひ噺咄を、そこ爰うたひながら程よき所にて行合　安「コリヤ〳〵順禮火を一ツかしやれ　左二郎はいまだたばこも呑ぬ所ゆへヱ、氣のきかぬと思ひながら、うろたへ火打を取出したばこ數付　左二「ヘイ〳〵サアお付ケ遊しまし　ト編笠を脱て「ヤアめ

づゝーや鳥目百味。年来尋る親の敵　出目「じんぜうに勝負〳〵　ト是より廻りせりふあらましこじ付ケ止、たがひに笠をかなぐりすて、刀に手をかけ詰寄れば、ソレけんくわ、イヤ敵うちこ、所せきまで居たらびし、野遊の人々上をトヽとさう〳〵ふし、重箱かゝへ欠出ス有、弁當はこをけちらすやら、吸づゝをふみくだき、毛せんをかむりにげまどうもあり、たゞかなへのわくにひとし、こなたははや挟合、仕組し通り十分に切結び、最早闘武六まかしと思へど、山の下道にてチャン〳〵と、鉦の聞ゆるのみ、ならざるも断り、此鉦の音は三さま雷雷院轉化の、おゝはゝの集しなれ、三人は々テの仕組所さとなりたれど、一向闘武六見へざれば、せん方なく八しなへりになぎちらし、たがひにいきちきれ、つかれきつたるその所へ、いづくにか吞いたりけん、早稲道くれ山にて出合たる、彼侍二人さし縮たすきにうしろはち巻、かひ〳〵しく出立「ヤレじゆんれいやアたち助太刀申　さいゝさま両人壹度に、氷のごときだんびらを、眞向にかざし三人が中へおごり込、左二郎出目助ごつくりぎよふてん　左二「ソレ安波公早く逃さつし　トいゝながら、あわてふためき逃出せば、アバ太郎も何かわしらず、持たる刀もはふり出し一もくさんに逃出せば、「ヤア ひきやうなれ　おどれにぐるとてにがそふか　ヤレ順禮間近になじか切付けぬ。後袈沙に打掛ケぬかエ、娑の明カぬと歯がみをなし、刀をふつて追かくれど、是もよほど呑過しと見へ、歩行も自由なりかねるやうす、三人はたゞ夢路をたどる心地して、右へ左へにげ廻り、はては山の端におひ詰られ、最早一生厳命と下道の方へ飛下れは、木の根株に突當り、衣類手足のわかちもなく、ばら〳〵になり、のたり廻つてよふ〳〵と、下道通へおりければ、彼侍も見へざれども、今にもあとより切付ケられるゝ心地にて、三人ばら〳〵我先にと、根岸通りをよふ〳〵と命から〴〵迯歸る、跡に四人のものどもは、なげちらしたる諸道具取集メ、すご〳〵と立歸り、たがひにつゝがなきをよろこび、又闘武六も夜に入て、漸々家内をおさめ出来り、途中にて店受に引返されし始まつなどものがたり、はては大笑となりにけり

○八笑人　尾

鯉丈は八笑人中の一人

實在の人物　扨「八笑人」の人物に就きましては、井上頼圀翁の御話を承つたことがありますが、あの中の和次郎、卒八、阿波太郎、眼七、野呂松、出目助、闘武六、呑七などといふ者は、皆その當人がある、鯉丈が拵へ出したものではない、飛鳥山の「かつぎ茶番」は、御本丸十九番組の御徒士であつた高柳兵助の弟、これが黒あばたがひどかつたので、「アバさん」と呼ばれて居つた、この男が考へたので、はじめは上野でやるつもりでありましたが、彼處には山同心が居つて、三味線を弾いて騒ぐことを許さない、飛鳥山には山同心もゐないし、三味線を弾いても差支無いから、彼方の方がいゝ、といふわけで、アバさんが選んで飛鳥山でやるやうになつたのだ、といふことでありました。

和次郎の如きは、狂歌の方では千種庵二世諸持、音曲の方では都一閑齋と云つた、淺草材木町の名主勝田權左衛門の事であります。卒八は作者鯉丈で、池田八左衛門といふのが本名です。都の三味線彈で都八造といふ名前だつたので、都八をもぢつて卒八といふことにしたらしい。——まあこんな按配に、「八笑人」なるものは實在の人物だつたのであります。

鯉丈は茶番の消息通

殊に鯉丈はその中の一人でもあり、一連の仲間でもありますから、彼等の樣子がよく知れてゐるのみならず、江戸中の茶番仲間とも交際がありましたから、自然消息通になつて、その社會の新しいところ、早いところを捉へることが出來たやうに思ふ。鯉丈としては茶番の事がよくわかるのみならず、仲間中の事がよくわかるので、その日常の事まで書き立てゝ居る。これと「楚古良探」の人物、人品とを對照して見ますと、だん〳〵茶番が下遷して來てゐる。廣く行はれて來るに從つて、その連中の數が多くなると共に、その人柄が下落してゐることは明かであります。享和以來、茶番一式の損料屋さへ出來てゐるといふことだけ見ても、そのひろがつて行く程度がわかると思ひます。

一九と鯉丈夫々の長所

一九が鯉丈に對抗出來ぬといふのも、全くそこに在る。その他の人にしても、この點に於て鯉丈の敵でないといふことは、茶番の消息通といふことに於て遜色があるからで、珍しい事はどうしても鯉丈に取られてしまふ。一九は文化六年に「串戯狂言一夜附」、同十三年に「茶番狂言初子待」といふやうなものを書いて居りますが、大體に於てどうも氣味合が鈍く、すばやいところが無い。江戸前なるものとは思はれない。この邊はどうしても鯉丈に及ばぬことであつたのです。

鯉丈の方は又已に賣込んでゐる一九の尻を追つて、「大山道中栗毛後駿足」(文化十四)ですとか、「旅寿々女」(文政八)ですとか、「箱根草」(弘化元)ですとかいふものを書いてゐますけれども、これはどうしても一九に及ばぬわけ

で、「八笑人」、「和合人」に至つてはじめて鯉丈は成績を擧げてゐるのであります。その鯉丈と雖も、文政六年に「和合人」を出して、天保十二年まで續けて居りますが、それからあとはもういけない。「牛嶋土産」の序に楚満人が式亭三馬のことを、

滑稽地に墮て。戯作者棚へ揚られ。風來の塵吹飛で　自陀樂の奇章。紙魚の巣にならんとせしを。式亭三馬再び浮世にもて遊ばせ。五歩も透ざる人情か。穴を穿て見せられしも。樂屋で聲をからす猫。目ばかり光らす見物か。腹に合ざる世態を。早く悟つて筆を擲、此頃著述の長休。

と書きましたのは、二番煎じのきかないことをよく合點してゐる言葉でありまして、鯉丈もこの序を載せてゐる以上、無論承知してゐたものと思はれる。これが「和合人」以後筆をとめてしまふわけだつたのだらうと想像されます。

中本の旁系たる細民描寫

この時に當つて注意すべきものは、鯉丈が天保二年に「質屋雜談」を出してゐることであります。何故かと申しますと、鯉丈は「八笑人」、「和合人」に於て仲間の日常の事を書いてゐる。それは江戸文學が細民文學であることを、一方に證するものでありますが、この方は鯉丈に限つたことではない、「膝栗毛」にも「浮世風呂」にもあることなのです。文化三年に出た振鷺亭の「鳴子瓜」、文化四年に出た神屋蓬洲の「民間圖誌口八丁」、文化十二年に出た一寸法師の「馬方蕎麥」、文政十二年に出た桃山人の「北國笑談」、刊年不詳の清川山住の「春笑能樂奇談」といふやうなものは、專ら細民の狀況を睨んで書いてゐる。そこで三馬は「戯場訓蒙圖彙」の中で、

穴の又穴を穿て泥の又泥を抓出すの類多しとは二代目風來山人の金言也（二代目風來山人初號万象亭一名竹杖爲輕又號天竺浪人東武月池人）今此書を撰といへども、劇場に於て極祕たることを記さず。凡早變の工夫。戯房の法式。年中の秘事等也。是則チ戯房の穴を穿て臺下の泥を抓出すの

恐あれば也。

と云つて居ります。そこをよく呑込んでゐる岡山鳥は、「廿三夜待」の中で、

穿といへることさらになし。

と斷言してゐる。穿(うがち)必ずしも滑稽ではない、そのまゝに描出して滑稽なのがいゝのである。「穴の叉穴を穿て泥の叉泥を抓出す」やうでは滑稽ではない、といふ萬象亭以來の主張を持出して居ります。それを横目に見て、「質屋雜談」その他の細民を描いたものを見ると、鯉丈が茶番以外に手をひろげようとした場所は、こゝではないかといふ想像も起るのであります。

鯉丈の細民描寫

大坂俄から豆藏、落語、茶番、といふ風に、四度變化した滑稽物は、何かものを押へて書出すことになつて來て居ります。そこで岡山鳥の「丘釣話」、「揚弓一面大當利」、南北の「夜見世の始」、桃山人の「滑稽繕の綱」なんていふものが出て、可樂の「滑稽枯木之花」などといふものになりますと、稻毛で枯松が流行神になつたことをつかまへて書いてゐる。かういふ類を捜せば隨分數多くなつて來るだらうと思ひます。

江戸文學は細民描寫

彼ばかりではない、大勢の作家が手を八方にのばして、樣々なものを提へて書かうとする。その登場人物と云へば例の御長屋の連中で、熊さん八さんの手合が多い。それが又勢ひ細民生活を書出すことにもなるのです。此等のものがいづれも一二冊出して、あとを出す計畫になつてゐながら、それが續かないのは、賣行が面白くなかつた爲でありませう。さういふ風にひろがつて行くとなると、鯉丈も必ずといふわけではありませんが、ひろげられた他の方面に行かうとしたらしく思はれる。こゝにはたゞ概括して細民描寫とのみ申して置きますが、その中には釣の話、揚弓の話、夜見世の話といつたやうに、種々雜多のものがある。これはいづれもあまり成績を擧げて居りませんが、中本の傍系として、始終遊離してゐるやうに見える。概して云へば、江戸文學は細民生活の描寫といふこ

とになるだらうと思ふのであります。

見物される江戸ッ子

江戸文學の特徴は細民生活の描寫でありましたが、そのすべての作者が、江戸ッ子を引伸すと云ひますか、增長させる、膨脹させると云つた方がいゝか、とにかく得意滿面なものにする。けれども江戸ッ子といふものが誇れば誇るほど、馬鹿々々しいことになるので、それが自然の滑稽、たくらまぬをかしみになるわけです。別に穿たないでも笑はせるのに十分で、却つてその方が有力でありましたらう。それは又讀者の大に喜ぶところでもありました。

馬鹿げた所を披露

併し熊さん八さんをさういふ風に仕立てますと、甚だ馬鹿々々しくなつて來る。「膝栗毛」にも、別に江戸ッ子の下らぬ事を指摘しては居りませんが、女と食物に對する樣子などは澤山書いてあつて、いつも馬鹿けたところを御覽に入れてゐる。「浮世風呂」にも江戸ッ子の利口でないところがよく寫されてゐますが、殊に遊ばせ言葉を嫌ふ下女の口を借りて、江戸ッ子の御麁末なところを披露して居ります。さういふ事はどの作者にも通有するものだつたのです。

江戸ッ子は細民の自稱

江戸ッ子と自稱致します熊さん八さんの手合は、いづれも御長屋の連中でありまして、皆細民である。商人と申す以上は、假令店借であつても、その口から「己は江戸ッ子だ」とは申しません。番頭、手代、小僧にしましたところが、やはり云はぬことですし、武家ならば三兩一人扶持でも決して云はない。これによつても江戸ッ子が如何なるものであるかゞわかるわけで、江戸ッ子を振廻すやつ、江戸がるやつといふものは皆細民であります。

これは中本ばかりの話ではありませんが、此等の細民各位、卽ち熊さん八さんの連中といふものは、無論その讀

者ではない。讀者になれるわけもないのです。江戸時代の人別書上といふものは、極めて不完全な人口統計の用をなすものでありますが、決して正確、明細といふことは出來ません。そこで先輩も、江戸市の人口といふものは――時々變りますけれども、大凡五十萬と見てゐる。その一割が江戸に生れた者で、それを又二ッ分にして、自稱する江戸ッ子、自稱しない江戸ッ子、といふ風に分けて居りますから、自稱江戸ッ子の熊さん八さんは、二萬五千と見積られる勘定になります。

罪のない連中

此等の諸君はいづれも勞働階級の人でありまして、一日の所得は銀三匁乃至五匁位のものである。銀一匁は錢百八文として、金一兩は銀六十匁に換算されるから、一兩が十二日の勞銀に當るわけです。この二萬五千人といふものを、他の四十七萬五千人が取卷いて見てゐる。それらの者どもは下卑、淺薄な者ではありますが、同時に罪の無い連中である。所謂ナンセンスだから、見物する者は面白がつて眺める。傍觀者にとつては興味が多かつたに相違無いのです。作者もそこを覘ふのですが、もと〴〵その馬鹿らしさを知らぬ筈が無いから、時々江戸ッ子のボロをさらけ出して見せるやうになるのであります。

鯉丈以後變化せぬ滑稽物

見物人の多いおかげで、江戸ッ子が顯著なものになる。澤山の違つた階級、別な社會から眺めてゐるので、自然讀者も多いことになる。江戸ッ子を書けば皆が面白がるわけはそこに在るのでせう。

滑稽物の行詰り

けれどもやはり變化した四つの筋目といふものが、興味の中心をなすものだつたので、鯉丈も「和合人」の後にはもう變化のしやうが無い。目先の替へやうが無かつたのでせう。又見物を喜ばせるには不足でもあつたのでせう。どれと云つて新しい押へどころも出て來なかつたのです。

そこで鯉丈の後には、梅亭金鵞の「妙竹林話七偏人」が、安政四年から文久三年までに、十五冊續いて出て居ります。これが僅におぼえられてゐる位のものですが、「七偏人」は鯉丈の蒸返しでありまして、別段に目先の變つたものでもなく、「八笑人」や「和合人」に超過する作物でもなかつたのであります。

「七偏人」は鯉丈のむし返し

それですから江戸の中本は、大體四變しただけで、おしまひになつたものと見て差支無いのです。今日滑稽物を求める聲が久しいに拘らず、一向何も出て來ない。そこから江戸時代に滑稽物が出てゐる經過を振返つて見ますと、今日滑稽物の出て來ぬわけも、その回顧に依つて十分認められるやうな氣が致します。

顧みられぬ第三說

扨今一つ殘つてゐる第三說、これは三馬及その一派の者の唱道する說でありまして、三馬の滑稽物といふものは、風來山人から系圖を引いたものだといふのです。この說は從來あまり顧みられてゐないのですが、いくらかそれに加擔する人もある。嘉永二年に櫟翁といふ人の拵へました「國字小說通」あの中には大分混雜しては居りますが、第三說を肯定したやうにも聞えることが書いてあります。その文をこゝへ摘錄して置きませう。

三馬は風來の引續とする說

中本といふは、洒落本に似て非なる物にて、明和の頃風來山人が著はしたる六々部集を始め、一九が膝栗毛、瀧亭鯉丈が八笑人、三馬が浮世床浮世風呂、京傳が腹筋鸚鵡石の類なり、是は京攝には古くより八文字舍自笑、江嶋其磧が作の親父氣質娘氣質の類の一變したる物といふべし、

是では三馬だけでなく、江戸の滑稽の總體が風來山人から初つたやうに聞えます。それは既に愚按を開陳して居ります。又江戸の滑稽物と上方の氣質物との交渉も斯うは云はれないでせう。その前に談義物と氣質物との吟味がなければなりますまい。其處には本來別個なものゝあることも既に申述べました。此櫟翁の說は、紛らはしいから

辨じましたが、全く第三說、三馬だけが風來山人から引統したといふのとは違つた話であり、大體としても受け入れ兼ねるものと存じます。

三馬自身の心持

三馬自身と致しましては、俺の滑稽は風來山人から繼承したといふことを證明して、その傳統を明かにしなければならぬ、といふ心持があつたものと見えまして、「戲場訓蒙圖彙」には萬象亭に序文を書いて貰つてゐる。それも特に「二代目風來山人述」といふことになつてゐるのですが、その中にこんなことが書いてある。

花の御江戸に名うての戲作者、根なし草の二立目に柿の衣に兜巾貝かけ、しばらくと聲懸て、世上の作者の鼻を挫キし古人風來山人が戲作の正統。

三馬が風來山人の正統だといふことを書かせてゐるので、それほど努めては居りますが、扨どこが正統として續いたのであるか、捜して見てもなか〳〵わからない。たゞ前にも申しましたやうに、穿ちは滑稽でない、といふ萬象亭の說を奉じて、この「戲場訓蒙圖彙」の自序の中にも、自分は穿ちといふことに耽らぬ、といふことを云つて居ります。面白味を覘つた萬象亭の「田舍芝居」以來の行き方を繼いでゐる。その點が强ひて云へば繼承したとでも云ふことになるのでせうが、平賀源內としましては、穿ちが滑稽であるのないの、をかしみを覘ふのなどといふやうなところではないのであります。

當時源內の書いたものは、なか〳〵評判がよかつたので、蔦重の洒落本の奧付を見ますと、「風來六々部集」の廣告が出てゐる。

平賀ぶり

この書は當世流行する洒落本の根元にして、古今獨歩の珍書なり、この書の文法を、世に平賀ぶりと稱す、

「平賀ぶり」といふ名稱は、こゝに書いてあるだけで、外には見えて居りません。成程さういふ名がついてもいゝ、一種の文章であるには相違無い。あの文章に就て、何とかいふ名稱をつけなければならぬとしたら、平賀ぶりとて

も云ふより外に仕方はありますまい。

山人と散人、浪人と老人

萬象亭の森嶋中良、あれは「物之本作者部類」にも、

蘭學戯作共に風來山人弟子也、

と書いてある。蘭學は慥に御弟子だつたでせうが、戯作の方も果して風來山人に學んだかどうか、疑はしいと思ひます。萬象亭は二代目風來山人と云つても居りますが、源内は風來山人と書いて、フウライサンジンとよませて居る。ところが「里のをだ巻評」の自序を見ますと、風來散人と書いてあり、本文の方はやはり山人になつて居ります。風來山人と風來散人と一字違ひで、二通りあるわけなのです。

源内の號

それから源内には天竺浪人といふ號があつて、これは浪の字が書いてあるのですが、又一方に天竺老人と、老の字を書いたのがある。「六々部集」の序を見ますと、天竺老人とあつて「江戸前」「森羅万象」といふ判が二つ捺してある。「蛇蛻青大通」の自序にも、やはり同様に署名してあつて、判も同様である。「蛇蛻青大通」の方は、自序が已に老人でありまして、他に署名の無いところを見ると、これは浪人でなしに、老人の作のやうに見える。又しても一字違ひの天竺浪人と天竺老人と二通りあつたので、然も老人の方が萬象亭であつたといふことは、捺してある判によつて明かであります。

天竺老人は萬象亭

まだこの外に「阿千代傳」の序も、やはり老人の名で書いてある。その序文のうちから、こゝに抄出して置きますが、これによると「阿千代傳」は浪人の方でない、老人の方の作だといふことがわかるのです。

……今の世に船饅頭ともて囃す此道の蒼妓、肥蒲〳〵の阿千代てふもの、新床てふ白拍子に、まみへて生活の不祥を說破

り、浮世は卞和が替玉となりて、女閭の寓居に目下見し兩瓦三舍の荒唐を口かたましくも言たるを、慣熟の奴が供待の聲高に語りしを、予物蔭より立聞しが、言葉のはなはひくしといへども、見識は水道尻の火の見より高く、彼泥郎が得難にしたる妬婦傳の趣にも、おさ／＼劣るまじと、筆にまかせてかいつけ、太平樂卷物と號す…

それですから「風來六々部集」といふものは、すべてが源內の書いたものであるのか、森嶋中良がどの位書いてゐるか、それはちよつとわかることではないと思ひます。併しそれに就ては、從來誰も疑つてゐない。然も麗々しく「江戶前」、「森羅萬象」の判を捺し、天竺老人と署名してゐるのを見ますと、天竺浪人の源內の外に、萬象亭森嶋中良が天竺老人と號して居つたので、「六々部集」の中の「阿千代傳」、「蛇蛻靑大通」の二種といふものは、源內の書いたものではないと思はれる。「里のをだ卷評」も、本文には山人と書いてありますけれども、自序として散人が書いてゐる。これなども疑ふべきものでありますが、明白に源內の作でないと云ひ得るものは、「阿千代傳」、「蛇蛻靑大通」の二種であります。

平賀ぶり繼承の根據

そこでこの二つを以て、他の源內の作と稱するものと比べて見ますと、なか／＼見わけがつかぬほどよく似て居ります。前に引いた「阿千代傳」の自序などは、天竺老人戲書と署し、「天竺」、「老人」といふ二つの印を捺してあるので、あの中に「予」とあるからは、無論浪人ではない、老人の方なのである。だから誰でも明白にわかりさうなことなので、水谷不倒氏も「靑大通」を萬象の作とし、「古今狂歌人物志」は「阿千代傳」を中良の作に揭げてあります。

源內、中良の辨別困難

それでも其指摘が通說にならないのは、その文章から組立に至るまで、如何にもよく似寄つてゐますから、兩者の辨別が容易でないからでせう、從つて平賀ぶりと指目されてゐるものに就て、どこまでが源內で、どこまでが中良で

あると云つて辨別することは、殆ど出來ない位に見える。たゞ「六々部集」を離れて見れば、自らこれが明かにわかつて來るのです。尤も「六々部集」以前に遡つて、「根なし草」、「志道軒傳」などを見ましても、疑ふことはいくらも出來さうに思はれますが、これはちよつと證據を擧げることが困難である。けれども三馬が繼承したとでも申すならば、それは「根なし草」、「志道軒傳」、「六々部集」といふやうなもの以後の萬象の事でなければならぬと思ひます。

同じ平賀源内の書いたものでも「根なし草」、「志道軒傳」と「六々部集」とでは大分風味が違つてゐます。平秩東作も、

憤激と自棄なひまぜの文章なり、

と云つて居りますが、「六々部集」の調子合は、如何にも東作の評したやうな氣分が、よく見えて居ります。それが源内の特徴であり、神采であるとして今日も感賞を鍾めて居るのですが、それは三馬の方にはどうしても認めることが出來ない。源内の風味も無ければ、源内の氣骨も無い。人込みにしても「六々部集」の中で、容易に辨別されないほど、森島中良は源内の風韻神采を持つてゐる。だが後年の萬象は、洒落本も書けば黄表紙も書いて居りますが、「六々部集」の俤はございません。

三馬に源内の風味なし

それも其筈、中良の黄表紙の第一作だとも云はれて居る天明四年の「萬象亭戲作濫觴」に、當春から天竺浪人の舊套を脱し、江戸作者の仲間入をして、名も萬象亭と改めて御子様方へお目見得をすると書いてゐる。源内は安永八年十二月に獄死して居りますが、是は切替へを宣言したのです。其後の作風も文章も前來の中良と違はなければなりません。既に前來の中良とは違つてゐるのですから、假に三馬が其後の中良に學び得た所があるとしても、源内—萬象—三馬と傳統すべきものがあらう筈もない、さりとて源内—三馬といふ繼承は、猶更云はれないことでせう。

中良は源内の舊套を脱す

第三說は肯定し難し

源内は新知識を振廻す

それから三馬は談義物以來の勸懲を持越して居りますが、平賀源内にはさういふことはありません。「根なし草」や「志道軒傳」が神儒佛に觸れないではございませんけれども、三教の一致といふことを勸善懲惡に收約し、更に國法に歸一しようとするのが、談義物の大體でありますが、それとは全く行き方が違ふ。すべての勸懲は皆談義物に系統を引いて居りますけれども、それとは違つてゐるのです。殊に談義物と違ふ。その根本は彼が當時の新しい人で、新しい知識を振廻す事からでありました。さうしてこの一端は已に「志道軒傳」の中に於て、風來仙人の名に托して書いて居ります。

人は陰陽の二つを以て體をなす、譬へば石と金ときしり合て、火を生ずるが如し、火の薪あるうちは人の一生のごとし、火消る時、跡に殘る所の灰は、卽ち死骸なり、其時消えたる火、地獄へ行くや、極樂へ行くや、汝此の行方を知らば、地獄極樂ありとすべし。

彼は科學の恩惠に浴したことを誇らうとして居るのでありまして、この水火の說といふものは、司馬江漢なども大に新しがり、見識ぶつて「春波樓筆記」の中に述べてゐる說であります。それは志道軒の說では無論ない、風來仙人の言葉として書いてゐるのですが、それでは志道軒といふものはどんな事を考へてゐたかと云ひますと、これは「元無草」に書いてあることを、摘んで置けばよからうと思ひます。

人も草も始もなく終りもなきものとしり玉ふべし、天が天とも名乘らず、地が地ともいわず、艸木が艸木ともいわず、只自然なり、萬物是に習ふてしり玉ふべし、

法は釋迦孔子より始るやうに思ひ、心のかたちをしらず、佛法には心を妙法とせつぱし、妙樂大師は心をゑんそんといひ、

眞言には心法色形と說き、儒には中庸上天と名付たり、すべて心の形をしらず、其心のかたちをしらんとせば、萬物のうごく形、みな我心の形の動也、

源内は志道軒門人悟道軒などと書いて居りますが、これは勿論眞面目ぢやない、戲に書いたのでせう。本當に門人になりたいと思つたところで、思想上の相異から御弟子入は出來なからうと思はれるほど、この二人といふものは違つて居ります。けれども時世はこはいもので、源内は風來仙人の言葉として、筆先だけにしろ次のやうなことを云はせてゐる。これは當時の思想問題として、目をそばだてしめた容易ならぬ事件、卽ち勤王運動の端くれを現してゐるのであります。その文章もこゝに擧げて置きます。

勤王運動の端を現す

唐の風俗は日本と違ふて天子が渡り者同然……日本にも昔より清盛高時のごとき、惡人ありても、天子にならうとは思はず、日本で天子を疎略にすると慮外なから、三尺の童子もだまつて居ぬ氣になるといふは、忠義正しき國なればなり、夫ゆゑにこそ天子の天子たるものは世界に双ぶ國なし、唐の法が皆あしきにはあらず、されども風俗に應じて敎へざれば又かへつて害あり、

三馬に風來の風格なし

こんな工合の云ひ立で、風來山人といふものは、とにかく一種の風格を持つてゐたのですが、そんなものは森嶋中良の萬象亭にはございません。勿論三馬などが知つて居るわけもない。この邊のところになれば全く畠違ひで、聲色だけも使へるわけのものではありますまい。萬象は何として三馬に「風來山人が戲作の正統」などといふ折紙を附けたものか、洒落なのか、串戲なのか、そんな詮議はするまでもありますまい。

洒落本黃表紙の素地まで

平賀源內は二十六歲の寶曆四年に江戶へ出て來まして、それから九年たつた寶曆十三年に「根南志具佐前編」と

「風流志道軒傳」を書き、明和五年、十五年目の四十歳の時に「痿陰隱逸傳」を書き、「根無草後編」を書いた。さうして二十三年目の安永五年、この時は四十八歳になつて居りますが、「長枕褥合戰」を書いて居ります。

四國育ちの源内

何の證據もない、想像ばかりの空話は無用の行止りであつて、書かずとも宜しいのだけれども、此想像は誰にも必然に起つて來るのであるから、兎も角も聞いて置いてお貰ひ申したい。一體四國猿の源内が十年乃至廿年の在江戸で、大通に成り濟したこと、江戸根生ひの人間以上に八百八町を知つてゐたやうにも見えるが、實はまだお國訛りも脱けてはゐなかつたらうに、さても不思議なことではないか、そこは何程の學問識見があつても往けることではない。何町の何屋の隣が八百屋だか、酒屋だか、こゝの新道、あすこの横町、天才だつて馴れない土地で迷子にならぬ筈があらうか。地圖に書いてないことを知つてゐるだらうか。其處へ飛出た森嶋中良、中良は曾祖父桂川甫筑が外科を以て、家宣將軍に召し出されて以來、甫三、甫謙、甫周の四世、卅々蘭方に名高く、孰れも法眼に叙せられる例で、幕府の奧醫者であつた。その甫周の弟に生れた男、廿六才で初めて江戸へ出て來た源内とは話が違ふ、當人だけではない、既に祖父が江戸でオギヤアだ、此中良が大に承ければ、誰でも江戸通が振廻される。源内が大衆小説の燧火のやうな怪しい處がなくて濟んだのは、中良のお陰なのを疑はない、それ故に兩人の交錯が甚しい、「六々部集」のみならず、作物を眺めて源内と中良との疆界が見附からないのも、無理のない譯柄ではないか。源内の淨瑠璃にしても、安永八年の「荒御靈新田神德」には、作者福内鬼外、森羅萬象、二一天作と名を連ねてある、恐らく源内の作物には中良の名の連ねらるべきものが多いのであらう。

江戸生れの中良

兩人の交錯

志道軒との出入

「根無草」は地獄めぐりであり、「志道軒傳」は異國めぐりである。つまり遍歴物が二つ重つてゐるわけですが、こ

「元無草」後繼說

れに就て饗庭篁村翁は、志道軒の書いた「元無草」から「根無草」が出た、「根無草」は申すまでもなく、寶暦十三年六月に荻野八重桐が、中洲に舟遊をして溺死した、それから源内が地獄めぐりの趣向を立てゝ書いたのです。十一年後の安永三年には、遊谷子の「和莊兵衞」が出、その「和莊兵衞」を親として馬琴の「夢想兵衞胡蝶物語」が出た、だからこれは「根無草」の孫になる、といふことを云つて居られます。此系統に就ては、異論もあるやうですが、篁村翁のやうに見てゐる人もあるのであります。

「志道軒傳」は談義物畠

遍歴物に就きましては、前にも申してありますが、地獄めぐりといふものは大分古くから、上方は勿論、江戸にもありました。異國めぐりの方は、近い寶暦四年に出た「華里通商考」の趣向です。そこで「志道軒傳」の方を眺めて參りますと、神道とは申しませんけれども、國風國俗といふことを頻に云つて居りますし、宋學を嫌ひ、徂徠派を惡く云ふ。その心持に就ては違つた處もありますが、事柄は談義物の畠である。遊廓や岡場所の事を縱横に說き立て、女若兩道に亙つて穿つてゐるのは、洒落本の種蒔とも見られる。所々に輕いとは云へませんけれども、洒落のめしてゐるのは、黄表紙の素地、素材とも考へられる。併し一體風來山人は、志道軒から何を採つたかと云ふと、あの無茶苦茶にしやべり立てる、元氣のいゝところを奪つたんぢやないかと思ふ。つまり辯舌の骨法を襲つたものだらうと思ふのです。

風來は志道軒の辯舌の骨法を襲ふ

殘口を學んだ迹

「六々部集」の序文にも、

　是を號て風來六々部集と題す、全く殘口が無駄書を八部せんとには非ず、

とあり、「蛇蛻(ぬけがら)青大通」の序文にも、

殘口翁が口眞似に勃然としたる惡口は世上の通を壁として、

といふことが書いてある。これで見ますと、志道軒を繼いだといふよりは、增穗殘口を襲つたやうに見えます。殘口の事は前に申しましたが、辻へ出て神道講釋をやつた人であります。こゝでは殘口々々とのみ云つて、志道軒の事は申して居りませんが、志道軒なるものは、實は殘口を眞似たものなのです。志道軒の少し前に銀杏和尙の靈全といふ者が居りましたが、これもなかなか猥談を用ゐたらしい。かういふ話口を狂講と申して居りました。當時はこの兩人の外にもまだ居つたのでせうが、狂講では靈全と志道軒とが知られて居ります。

志道軒は殘口に倣ふ

ところで志道軒の名に擬して、止藏といふ名で書いた「當世花街談義」の序には、

止藏（志道）が言辭は殘泥（殘口）が流を學び、本無（是は虛談で草上本無といふ儒生）が實義、久靜（靜觀房好阿）青（青柳村隱伊藤單朴）が忠臣なるかな、

と書いてある。又本文にも志道軒の言葉として、

我今遠くは二師（空海、覺鑁）の遺法をつぎ、近くは殘口が跡を演べ、大和の根元を語る。

といふことがあります。これは嘘ではない、當時已に志道軒は殘口を學んだものと思はれてゐたのであります。

志道軒の猥談の根據

又志道軒の狂講の特色でありました猥談、それにも根據のあることでありまして、「志道軒五癖論」にも、

男女の愛樂、古今に貫首たり、三教といへ共、まつたく是にもとづけり、

と書いて居ります。志道軒は眞言坊主だつたので、一種の見解があつたのです。それですから源内の「痿陰隱逸傳」とか、「長枕褥合戰」とかいふやうなものは、志道軒の猥談から筋を引いたものゝやうでありますが、その根據に至つては、志道軒にはあつても源内には無かつたと思ふのです。

殘口の著書

殘口の方は口でも盛にしやべり立てたのですが、筆でも盛に書き立てゝ居りまして、八部の書と云つて二十四冊

ほど本が出て居ります　その本が今日までも殘つてゐるところを見ますと、當時はよほど盛に行はれたものと思はれて、八部の書といふのは、

「艶道通鑑」、「異理和理合鏡」、「安者世鏡」、「有像無像小社探」、「直路乃常世草」、「神國加魔祓」、「つれ〱東雲」、「神路乃手引草」、「蓼科死出田分言」、であります。志道軒の方は何しろしやべることは盛でありましたが、書いたものとしては「元無草」、「可笑穴物語弁論」、「金坊靈夢傳」の三種が刊本です。但今殘つてゐるのは甚だ稀のやうであります。その他は「志道軒親類書」、「志道軒五癖論」が寫本で行はれてゐるに過ぎません。

志道軒の著書

辯舌と江戸文學

第三說の吟味と意外な發見

源内の僉議を圖らず致しまして、いろ〱三馬との交渉を考へて見ましたが、結局この第三說といふものは、顧慮するほどの値打は無いものだ、といふことがわかりましたと共に、志道軒の或ものを源内が承け繼いだ、といふことが考へられる。そこに又意外な事が見つかつたといふのは、志道軒は殘口に倣つて狂講をはじめた。勿論殘口のは猥談ではありませんが、その志道軒の辯舌の骨法を源内が奪つた。さうすると辯舌といふ事柄が、平賀ぶりに大きい影響を與へてゐることもわかりますし、それが上方、江戸を跨いでゐることもよくわかる。その代り三馬との關係は、決して彼等一派の人が云ふやうなものでない、といふこともわかつて來たのであります。

辯舌と江戸文學の交渉

從前に振返つて見ますと、談義物は說教坊主の高座でしやべるのが根本になつて居りますし、平賀ぶりは辻講釋の影響である。更に豆藏の藝やら、寄席の落語やら、さういふものを奪つて、時々の作者達が、江戸文學を賑かにして來たものであることがわかります。辯舌といふものが、江戸文學に大變な交渉があるといふことを、この第三說の吟味によつて、事新しく感ぜられるやうに思ふのであります。

東海道中膝栗毛

「東海道中膝栗毛」解題

判然せぬ著者の素性

「東海道中膝栗毛」の著者十返舎一九の名前に就きましては、「續膝栗毛」の五編に出て居ります。

一九子、姓は重田、字は貞一、駿陽の產なり、通名市九といふ、（作に市を一に作り雅名とす）若冠の頃より或侯館に仕へて東都にあり、其後攝州大坂に移住して志野流の香道に癖あり（十返舎の號、黃熟香の十返しに用ひてゝにいへる）今子細あつて、みづから其道を禁ず、寛政六卯年復び東都に來りて、はじめて稗史兩三部を著す（著書畫作）それより年々に倍し、就中書法に精きを以て諸文通の案本數種あり、

本屋の名で出したのですが、自著に附いてゐるものですから、かなり信用出來るものと思ひます。このうち「幼名市九」といふのは、「名人忌辰錄」に、

名貞一、通稱重田與七、幼名幾五郎、

と書いてある。「市九」を一九でもいゝやうなものですが、どうも「市九」といふのは變な名前である。自分が承知して書かせたものだから、間違は無さゝうなものですけれども、「市九」はをかしい。「市九郎」とでもありさうなところです。何に據つたかわかりませんが、「名人忌辰錄」には「幾五郎」としてある。「幾五郎」の幾から「一九」といふ號にしたといふ方が、聞えがいゝと思ひます。

淺草東陽院の過去帳――これは一九の墓所のある寺です――を見ますと、

駿河國府中生、元千人同心の子重田市次郎、初代十返舍一九事、

と書いてある。或は駿府の町同心重田與八郎の二男とも云はれて居りますが、この過去帳に對して見ると、如何なる據どころがあるか、疑はしく思はれる。駿府の町同心といふのは、駿府の町奉行をして居りました小田切土佐守の家來、といふ臆斷をした結果から出て來たことではないか。駿府で生れた男といふことは間違無さゝうですが、過去帳によると「元千人同心の子」とある。千人同心といふのは、八王子の鎗組の外には無いのです。殊に「元」とありますから、八王子の鎗組同心がどういふわけで駿府へ行つたか知れませんが、駿府へ行つてから生れた子ぢやないかと思ひます。

一九は府中生れと云はれて居ります。「眞木かつら」などにも、

一九は府中の產、子細ありて江戸に住す、

と書いてありますから、間違無さゝうなものですが、たゞ「物之本作者部類」は「遠江」としてある。併し大概なものには府中生れとあり、過去帳もさうだし、「續膝栗毛」の五編にも「駿陽の產」と書いてあるので、これはひどく詮議しないでよからうと思ひます。

「戲作六家撰」には「弱冠の頃、東都に出、或侯に仕へ、そのゝち大坂へ登り」とある。この「或侯」といふのを、一般に小田切土佐守と解してゐるらしい。「續膝栗毛」の五編にも「若冠の頃より或侯館に仕へて東都にあり」とあるので、この「或侯」がわからないと困るのですが、普通はこれを小田切としてゐるらしい。この小田切は土佐守直年といふ人でありまして、三千石の御旗本です。天明三年四月に駿府の町奉行になり、同年の八月に大坂町奉行に轉じて居ります。さうして寛政三年十二月には江戸町奉行になつた。大坂には九年ほど居つたわけです。駿府は僅か五箇月で轉役してしまつた人ですが、この人の家來とすると少しをかしい。一九の弟は與八郎と云つたとあるのですが、それが駿府の與力であつたことを立證すべき何物も無い。同心であつたこ

とを音許りなものも無い。駿府には與力も同心もあります。城代與力十騎、同心五十人、定番與力十騎、同心五十人、町奉行についてゐる與力八騎、同心六十人といふ風になつて居りまして、駿府には町與力町同心もあるが、城代付、定番付の與力同心が各〻ある。これもちよつとまごつく事柄であります。

一九が江戸に馴れてゐたことは、書いたものを見てもよくわかりますが、若い頃から江戸にゐたらしい。武家奉公をしてゐたらしくも見えますが、さりとてこれを小田切土佐守の家來と、一概にきめてしまふことも合點が行かない。さうすると駿府の町同心といふことがわからなくなる。又駿府の町與力町同心　若しくは城代定番の與力同心であつたといふことも、小田切の家來であると斷じて、さういふ風に考へてゐるけれども、町の與力町同心は居付のもので、御頭だけが替るのですから、小田切の家來でない方がよろしい。城代定番は大名役ですから、小田切が任命される筈もなく、是とても與力同心は人についたのでなく、御役づいてゐるのだから、町の與力同心と同樣です。何れにしても一九の府中生れだけはわかるが、親は何をしてゐた人か、一向わかりません。

女に向のいゝ人

「物之本作者部類」は馬琴が書いたものと云はれて居りますが、あれにはかう書いてある。

小田切土州、大坂町奉行の時、彼家に仕へて浪華にあり、後に去て大坂なる材木商某甲の女婿になりしが、其所を離緣して江戸に來つ、

これによると、町奉行になつた時に召抱へられて、大坂へ行つたといふことになつてゐる。轉役して急に役柄が重くなると、餘計人が入りますから、新に抱へることはいくらもある。さういふ事情であつたかも知れませんが、これでは小田切の家來といふことも、親の代からではない、一九その人かららしく見える。どうもこの「物之本作者部類」の記載も受取りにくいと思ひます。

本人の一九は浪花に七年餘居つたといふのですが、寛政六年には已に蔦屋の食客になつてゐるので、そこから勘定して見ると、天明七八年になるわけです。併し寛政元年には、若竹笛躬と共に近松與七といふ名で「木下蔭狭間合戰」の新作を出して居る。淨瑠璃の新作をしてゐる事を考へると、もう大坂町奉行の家來で居つた筈は無い。小田切が赴任する時に召抱へたとすると、こゝの勘定もおつつかぬのです。若し「物之本作者部類」の云ふ通りであるとすれば、十年以上大坂にゐなければならない。こゝの勘定が合ひませんから、小田切の家來になつたとしても、町奉行になつた當時ではなく、その後僅の間のことで、江戸の或侯館といふのは誰の事か、わからなくなつてしまふのであります。

寛政の末には蔦屋の食客から、長谷川町の後家のところへ婿入をして、こゝに數年ゐた、といふ事が書いてあります。さうすると「膝栗毛」の後編の中に、「去年の春一九が中田屋の勝山にしばられた時」と書いてある、この後編は享和三年春の出版であります。これに就ては先年三村竹清氏が、享和二年春の序がある「倡客竅學問」に、一九の縛られた話―吉原通ひのボロの話が出てゐる、だから享和元年にあつたことだらう、といふことを云はれた。一九は明和二年の生れですから、この時三十七歳になつてゐるわけです。もうこの時は長谷川町の後家は、破緣になつてしまつたんだらうと思ふが、婿に行つてゐる間も、吉原通ひをさんざんやつたものでせう。御馴染があるのに外の女郎を買つたから、さういふ吉原成敗を受けたので、その前七八年も吉原へ通はずにゐて、突然とそんな事が起る筈は無い。大坂から歸つて來て、後家のところへ婿入をして、少し餘裕が出來たから、大に放蕩をやつたのではないか。その後に離緣になるといふことも、隨分ありさうなことだといふ想像も起る

文化二年春の「滑稽しつこなし」の中に、「女ほうおたみ……」といふことがあります。このおたみは大變美しい女で、他の本にはこの女房の挿畫を出してある位です。文化二年春の出版だから、元年に書いたもので、もうその時にこのおたみといふ細君があつたらうと思はれる。一九はなかなか男前もよく、女には向のいゝ人だつたらしいので、大坂でも一度婿入をしてゐますし、

江戸へ歸つても亦婿入をしてゐる。その後で美しい女房を貰つた、といふやうなわけで、艶福家だつたらしく思はれる。一九はさう面白い人ではなかつた、大變眞面目な人で、滑稽なところなんぞは無かつた、といふ風に語り傳へられて居りますが、どこかに大分面白味のある男だつたらうと思ふのは、この女どもから取囃された樣子でわかる。度々婿入をしたり、吉原で騒がれたり、美しい女房を持つたりしたことを見ると、さう窮屈な、眞面目腐つた男でもなさゝうであります。

「膝栗毛」に關する諸說

「膝栗毛」の初編といふものに就ては、酒井抱一の弟である俳歌堂卍葉といふ人が原稿を與へたといふ說と　京傳から原稿を貰つたといふ說とがあります。が、これは皆取るに足らぬ說だと云つて排斥されてゐる。堀田甚兵衛記」には、

十偏舎一九が膝路の滑稽膝栗毛は、寶暦度に有りし小册を引出し大に世に行はれたり、實にたゞわらひをとるの一ッにて是ぞ誠の戯作ともいふべく、一九が名の幸ひならずや、

とありまして、寶暦度にあつた本を焼直した、といふ意味のことが書いてある。この或本から趣向を得たといふことは、大にありさうに思はれます。現に一筆庵可候の書いた「善惡道中記」の序に、

原本善惡道中記は飛雄亭の著述にて大に行れしと云、寶暦六年丙子の春の板也、繪圖と小册と合見るやうに綴て發市す、其後天明寛政の比に至り、桃栗山人柿發齋（元祖立川焉馬の初名なり）大通獨按内と題して、飛雄亭の作意に倣ひて、繪圖と冊子と合見るやうにせし戯作あり、また山東京傳戯作にて悟道獨按内といへるも、是等の草子に基きしもの也（鬻芥子主人蔵）先哲の妙案きはめてよしといへども、星霜うつりかはりて、流行當時の人情にあはぬ章も少からず、今將其趣向によりて、新に戯作せし拙著也、

といふことが書いてある。これは天保十五年に出たものですが、飛雄亭といふ人の書いた「善惡道中記」によつて、だんく皆

が道中物を書くやうになつた、といふのです。この「善悪道中記」のことは、前に談義物のところで申して置きましたが、これと同時に無々道人といふ人の「迷所邪正按内」といふものも出て居ります。「膝栗毛」はそれらから筋を引いたもので、更に遡れば「竹齋物語」、「東海道名所記」、「新竹齋」と云つたやうなものがある。遠くはさういふものから筋を引いたといふことも、無論云へる話ですが、近いところでは寶暦度のこの二つの著作を擧ぐべきだらうと思ひます。

まだその外に天明二年に萬象亭の書いた「當世導通記」、寛政五年に京傳の書いた「貧福兩道中記」などといふやうなものも、皆同じ筋道のものであります。前者は洒落本、後者は黄表紙で、その趣は違ひますが、その筋目のものであることは間違無い。京傳としては「貧福兩道中記」の外に「悟道獨按内」といふものもある。「膝栗毛」に近いところで、さういふものを書いてゐますから、「膝栗毛」の初編は京傳が書いてくれたのだといふやうな訛傳も、その邊から生れたのではないかと思ふ。

これは系統から申すことですが、一九が滑稽物としてをかしみを覘つた、新しい手際を見せたといふこと、それには俄をつかまへたといふことは、前に申述べてあります。それが彼の手際でありまして、京傳や萬象亭と違つた處もそこに在ると思ひます。かういふ間違はよくあるもので、一九の辭世が、

此世をばどりやおいとまにせん香と共につひには灰左樣なら、

といふのであつたところから、林屋正藏の逸話とごつちやになつて傳へられてゐるやうに、似寄りの話といふものは、とかく混雜し易いものであります。

種彦の思ひ附

一九の中本に對する功過といふものは、已に概略を申述べて置きましたが、「膝栗毛」の發端に就ての話が殘つて居ります。あ

の發端は文化十一年に出たので、初編の方が大分早く、享和二年に出てゐる。その事に就てはいろ〳〵疑問のあることを申したつもりでありますが、松裡紅といふ人の書きました「かくやいかにの記」の中には、六箇所ほど指摘してゐる點があります。この本は「未刊隨筆百種」の中に入れて置きましたが、尚その全文をこゝに出して置きませう。

十返舍が膝栗毛初篇一卷は、この册子、世におほひに流行せしにより、後年に出しものなり、趣向は古本評判記の序の體裁をあつめし、「芝居萬人かづら」（元祿年間印本、なれば後年ならむ）四の卷婦住の眼敵、打おふせた嫁人の夜の顏とある、この一段を彌次郎北八が住家の條に、そのまゝ假用なせり、體裁いさゝかも違はず、好事家はその册子につきてしるべし、

因みにいふ、この初篇發兌せさるさきの年、柳亭翁この萬人かづらの册子を見られて、此一段膝栗毛の初編のたねに用ひて妙なりといはれし事ありしが、果してその翌年十返舍これを假用して初篇出板せり、予その思ひよるところ、いづれも違はずと、古人雲界老人が、をのれにある時語れり、

種彦が「芝居萬人かづら」の趣向で發端を書いたら面白からうと云つた、といふのは文化十年のことになるわけです。一九が氣がついたのも殆ど同時で、「膝栗毛」の發端は翌年の十一月に出て居ります。「かくやいかにの記」に「初篇一卷」とあるのは、無論「發端」の誤ですが、これが豐芥子の話なので、兩作家が同じ時に同じ本に心づいた、といふことになつてゐる。それがきつとさうであるかといふことに就て、この本の十三段目の文を舉げて置きます。これは「萬人かづら」の中で、「膝栗毛」に用ゐない他の部分を、文化十二年の「通俗巫山夢」、文政二年の「紙屑籠」の中の種にしてゐるので、さういふところから見れば、一九は慥に「萬人かづら」を見てゐたに相違ない。この種彦の言葉といふものは、まことに適中して居りまして、その通りであると思ひます。

初十返舍が「紙屑籠」（中形一本）のうち、大家の後室が男妾を求むるの條、是もさきに出せし「萬人かづら」一の卷、當世男は後家の好鼻の都、

付たり戀よりこがるゝ身の焦じるし、

とある、この段のすぢを其まゝうちひたり、また「通俗寉山夢」同末の巻にも、この條を假用なしたり、

發見された「芝居萬人鬘」

ところでこの「芝居萬人鬘」といふものはどんなものか、どうかしてつき合せて見たいと思ひまして、よりより捜して居りましたが、どうも見つかりません。朝倉無聲、山口剛といふやうな人達も、大に氣をつけて居つたのですが、二人ながら遂に見ることが出來なかつた。然るに友人の石割松太郎氏が、近頃「芝居萬人鬘」に就て發表されたものがありまして、それによつてその本の何であるかといふことがよくわかりました。原本も同氏が持つて居られることがわかりましたので、それを私が懇望致しまして、石割氏の割愛を得て、今自分の所藏に歸したわけであります。これは私が彼是申すより、石割氏の發表されたものと、「萬人鬘」の四巻目の本文とを出して置きますから、讀者は「膝栗毛」の本文とつき合して御覽になれば、造作なくおわかりになるだらうと思ひます。

「かくやいかにの記」の筆者長谷川金次郎の說に從へば、「芝居萬人鬘」は古本評判記の序の集成であるといふ意だ。こゝにいふ「古本評判記」は勿論、八文字屋の「役者評判記」の意であらう。さう考へると、「芝居萬人鬘」の五冊に收錄されたる說話の悉くが、一章々々に、何の聯絡もない小咄で、その終末の筆致に役者評判記の所謂「開口」らしい臭ひがする事に思ひ當る。そして「芝居萬人鬘」の序の署名には、

めでたい初春　作者　其碩

とあるに考へて、或はこの「芝居萬人鬘」は、其碩が、從來執筆した「役者評判記」の開口をのみ、收錄刊行したものではあるまいかと考へた。

この考へ方によつて試みに家藏の「役者評判記」の開口に一々當つてみると、

享保二丁酉年正月に、鶴屋喜右衛門、江島屋市郎左衛門、正本屋九兵衛の三書肆の相板で刊行された『役者賭双六』三冊の序、開口の悉くが、この『芝居萬人臺』の文章繪畫がそのまゝといふより『賭双六』のそれらの板木を『萬人臺』に流用してゐるのを發見する、即ち三ヶ津芝居の口繪はそのまゝで（挿入の口繪がそれである）

役者賭雙六　　三國之惣序

とある内題を

芝居萬人臺

と入木して、序の四丁半をそのまゝで、『賭双六』に、

酉のとし　めでたい初春　作者　其磧

とある「酉のとし」の四字を『萬人臺』の方では削つてある事前述の如くである。次に『賭双六』の方だと

京三芝居役者目錄（位付）

があつて、本文らしいものになる、その題名が、

當世男は後家の好鼻の裡

付り戀よりこがるゝ身の燒しるし

とあるのが、『萬人臺』の一卷の第一章の本文及び挿繪である。そしてそれは疑ふべくもない古版本の流用である。次が『賭双六』では襃評があつて、京の卷が終つてゐる。この『役者賭双六』と言ふのは、内題の書名で、題簽には

女形ハ戀目のきく〇〇〇の樣子

とある。ところで、『芝居萬人臺』の方の一卷には、この次に、

女の粧ひ晴渡る月の武藏野

付り巢子は着てからぬから尻、

女の一節は口に津の溜る梅の難波、

付り母親の長談義は色宿の妨、

といふ二章があるが、これらの題名から推して、これは恐らく『役者賭双六』の江戸の卷、大坂の卷の所載であらう。私の架藏には『賭双六』は京の卷しかないので斷言は出來ぬが、この推定はまづ誤るまい。すると、即ち『芝居萬人𧄍』の一卷は『役者賭双六』の惣序と各卷の序との古版木を流用したものに違ひがない。

次に、正德四年正月江島屋市郎左衞門刊行の『役者目利講』京之卷、

四條の川原は水際の立春氣色、

付り若水茶屋に老せぬ木戸口、

の一條は『芝居萬人𧄍』の二卷の三章である。この二卷には他に、

春さく女におはまりの道頓堀、

付り三十一字ねぶかよりしやらくさい歌知、

節分は冬と春との堺町、

付り大豆一口に鬼も十八、

とある二章は、前者は大阪の卷、後者は江戸の卷である事に間違ひはあるまいが、手許にはこの二冊を缺いてゐる。から取調べてみると、『芝居萬人𧄍』は、「かくやいかにの記」の筆者の言ふが如く、役者評判記に內在する浮世草紙類の說話の集成である事に疑ひはない。三、四、五卷の評判記の書名を知る事が出來ないが、それは私の架藏の評判記が年次的に缺けてゐるからであらう。

以上は石割氏の考證であるが、その上に『芝居萬人𧄍』の本文を擧げて、參照對讀の便にいたしませう。

きなるを肝煎。女嫌ひといふは。むかし榮耀の餅の皮。報ひがはやく廻り來て。若衆に難義かけしかはりに。尻すへてゐる所さへなく。中腰になつて祝言の盃し。はじめて老女房持て。かはゆがらるゝも人の身はしれぬ浮世ぞかし。此女房。元助を大事にかけ。たばこ入もひとりして仕立。夫の手にかけさせず。我身をはたらき。こいしゆにはすこしても樂ごさせふと。さりとは奇特なる心づかひ。元助もはじめはさほどにも思はざりしが。女の心ざしに愛(めで)。夜も風ひかぬやうに氣を入てとらしける。ある夜しきりに戸をたゝくものあり。誰さまぞと。女房おさくは。つい起て戸をあくれば。歴々の侍。旅裝束にて十八九なる娘をつれ。京下りの元助殿、所は爰かとたづぬる。いかにも是でござりますが。どれからお出と尋れば。きづかひな者ではおりないと。娘もろ共内に入て。竈の前に腰をかくるを。元助見て肝をつぶし。其儘起て。是は〱長五左衛門様。妹御をつれさせられて。はる〲都から何としておくだりなされましたといへば。妹のおべんは是元助さん。何として下つたかとはきよくもない御一言。わしや。こな様の女房になりに來ましたと。元介がそばにむつれよれば是は思ひもよらぬ仰かけられ。さりとは迷惑千萬と。揉手をすれば。長五左衛門にが〱しきかほつきにて。其方上がたにて妹の手前をしそこなはれし刻。しばらく主人の長屋にかげをかくして引こみゐらるゝ中。これなるいもとがべんと密通をせられたとある段。跡に承つて。ことの外腹立いたしたれ共。一人の妹めが。どふした緣でか。こなたでなくは添まいと申すゆへ。ふびんに存じ。かんにんの胸をさすつて。すいた男にそはさふと思ひきはめ。海川を越て。是迄つれて下つて御ざる。此上からはずいぶんいもとめをふびんがつて下され。まづいはふて盃をさせたふと存ずれば。冷酒で成共。ちよつとさかづきをお出しなされて下されといへば元助が女房おさくすゝみ出て。男の惡性なるは世間にも類の多い事。女にあふて末かけての二世かけてのと眞實らしういひかけて。せゝつて見るは。女をおとすさだまりのせりふ。それを眞請にして。はる〲京から。こゝ迄其男にそはさふとて。つれてお下りなさるゝは御むたいと申物。元助殿は器量はよく。此道にまめな人ではあり。上がたでは名高い冶郎遊女其外町のむすめごたち。若後家浮世びくに問屋はすは迄。あまさずもらさず色をかせいだとのね物語で承りましたれ共。つゐにこな様のやうに跡追てござんした人はひとりもない。此せまい内に女房が。ふたり三人あつては。家主からねだがたまらぬ。店あけよと追立の使が來ては。互の外聞もあしふござれば。人のしらぬさきにつれましてお歸りなされ。ぬ

「芝居萬人

しとふたりおもしろい夢見かゝつてゐたに邪魔らしいと腹をたつれば。長五左衛門聞て。さいぜんからつべ〳〵と物いふ。そちは何ものじやとにらみつくれば。アヽりよぐわいなからかたじけなくも元助の奥様ちとおがんで下されと。行燈の影から顔さし出せば。長五左氣色をかへて。こりや元助　そちは女房をもつたな。ぜひにおよばぬ縄をかゝれ。上方へ引てゆくと。懐中より早縄出して。ねめまはせば。元助はさはがず。身共が女房もてば縄をかゝるはづか。二本さしたがおそろしき物にもあると。捕立して怪我せられなと出刄庖丁をしやにかまへ。居合腰になつて眼をくばれば。こりやゝゝ元助　此度妹をつれ下つたは。御家老中の御意を請て罷越た。今度組役衛門專太夫より。此妹を嫡妻にほしきよし。媒を以て申こされた。身にとつては過分の事。滿足に思ひ。早速同心したのみの祝義を受納た。其後是なるいもとめに。此通りをいひきかせたれば。其方と夫婦になるけいやくをいたしたれば。親兄弟の仰でも他へ縁につく事はいたさぬと申切しゆへ。專太夫かたへ使をつかはし。元介と申町人と妹めは密通をいたせし事。神以て存ぜず。それゆへたのみを受納仕る所に。妹めは密通の男ならではそはぬと申す。然れば妹の首を打てこなたへ持參仕らふ。是にて御一分をたてられ。御了簡たのみ入と申つかはせしに。諸傍輩へもかねて。こなたのいもとごを妻に申請るはづと噂仕り置

〔壹〕の挿繪

ぬれば。世間体へ申わけもない仕合。此上は御自分と私打はたすより外。分別これなし。明晩五條川原へ罷出。勝負仕るべきとの返事。もとより此方にも覺悟の前。あけの夜を待所へ。御家老中より双方をめされ。年來御主人の御知行をいたゞきながら。御用にもたゝず。私の宿意をもつて打はたさんとは。臣たるものゝ道にそむけり。いもとが兄にかくして。夫をもちしをしらずして。專太夫にけいやくせしを不屆といひがたし。いまだ婚禮なきうちなれば。互に一ぶんのすたる事は。ゆめ〳〵あるべからず。自今兩人意趣をはらし。御奉公を大切につとめらるべし。且又長五左いもと義は。かりそめにいひやくそくの男の外。他へ縁につくまじきとの貞節なる心中。殿にも感じさせられ。下地より馴染た男にそはすべしとの御意。ありがたくお請申て。それよりいもとを召つれ。是迄下りし所に。先の男は只今女房に持て罷在るゆへ。すご〳〵と妹をつれて歸りましたと。長五左衞門ともいはるゝ侍が。なまづらさげて歸られふものか。いもとを婦妻にすれば其通。さもなきと。いやでもおふでも縄をかけて。上がたの屋敷迄引てゆき。家老中へ此段申上。一たん約せし專太夫へ。おのれをわたさねば身がぶんがたゝぬとあすみやかに縄をかゝれとつめかくれば。たとひ此身は八割になればとて。我を大切にして身のくづをるゝもいとはず。艱難をせし女房をそでにして。御自分の妹が女房にも

たるゝ物か。ぜひにおよばぬ縄をかけて。引たい所へひかるべし。と庖丁なげすて手をまはせば。女房おさく。最前からの様子を聞。眞中へわけ入。元助様こな様は。當地でも都でも人も知たお身じやと。日比わしにおはなしではござらぬか。其お身として縄をかゝつて。長の道中をはぢをさらし。たがたでしばり首うたれて死なふとは無分別の第一。今こな様の此身は八割になるとも。艱難した女房は。そでにせぬといふて下された御一言が千ばいじや。わしには隙を下され。いはゞあのいもとごは京からのなじみとあれば。私よりは先なれば。そはふといはしやるがむりでない。かふわけていふ上に。いとまをもくれず。お侍様の手にかゝるがてんなら。まづおまへよりわしがさきへ死ますと。庖丁逆手に持て胸元へあてるをやれまて。さふ思ふてくれるなら。しばらくの中。いとまをとつて。請人にたのんだ小揚の作兵衛所へ成共いんでくれ。大事の女房をさらふなどゝは夢にも思はぬ別れをすると。夫婦腹一ぱい啼ての上に。硯取出し。三下り半を書てわたせば。女房は泪片手に。さり状持て出てゆくを。なごりをしげに外迄見おくり。内へはいりて門の戸しめると。彼侍。なんと元助さま。あぢをやりませふがと。打くつろひで申せば。扨も其まゝの武士。百五十石取とは。古金買に見せてもねらちする男を。棒手振の半右衛門にしてをくはをしい事かな。こゝなおはりの妙安の頭も。其まゝ屋敷方のひめごぜらしかつた。両人をたのんで艱難をした女房に。一ぱいくはせて。いまやつたも。急に卅兩といふ金がなければ。念比してゐる堺町の若衆が一ぶんのたゝぬ事あつて。むかし世にありし時のなじみゆへに。汝をまねいて談合せし時。そちがいふには。去ゐんきよの禪門。こしもとに手をかけられ孕だゆへに。成人の子共の手まへ。又はりんきづよき内義のわゝしきいひごとをきのどくがり。腹な子ぐるみに金卅兩つけて。何方へ成共急にやりたいと。ひそかに其方にたのまれ。ひとり住のやどばいりを心がけてゐるとの噺。是は究竟の事。卅兩さへ持て來るなら。腹には鬼の子がやどつてゐようと。其女房持たいといふたれば。御内義のある上へは。先さまからまいるまいといふによつて。しからばかふした方便をもつて女房共をいなし。跡へよびいれふと。そちに談合で。先首尾よふ女房共には。一ぱいすゝらせ。さつてのけた。むかしから知とをり我等は衆道好にて。女には深ふ心を殘さぬ物じや。扨まづ卅兩の土産女房は。いよ〳〵急に來るはづかととへば。中〳〵おまへも金が急なとおつしやる。先さまにも腹から實が出さふな。はやふやりたいと仰らるゝ。それゆへ今晩夜更て。ひそかにおかごでお出なさるゝはづ成が。なんと餅でもかふて。雑煮のこしら

へでもなされておかれましたかといへば。たつた今女房さつて。何こしらへる間が有物ぞ。今宵はいはふて盃ばかりにしてをかふと。とびうをのむしり物など。半右衛門にこしらへさせ。其身は袴の代に股引はいて。花聟がほで待ゐる所へ。表にかけ杖の音。そりやこそお出と。半右は仲人ぶん。やがて立出。おかごのはいるやうな内ではござりませぬ。それからをりて。すぐにかごはかへされませい。かごの衆太義じやと。はいらすれば 一盃酒もゝませねばならぬゆへ。門口から追立。女房の手を引て内に入。元助に引合せ。二葉の松は千世かけてと祝義をうたふて 狭所に長居はおそれありと、半右衛門は妙安娘ともろ共に罷立て帰らんとするを。元助表へついて出。小ごゑになつて土産の沙汰がないが。卅両はどふじやときゝやければ。我等もそこはぬかりなく。さいぜん内へともなふてはいりしなに。ちよつとたづねましたれば、明日昼時分にお里からまいるはづ。ちがひはござりませぬ。ありあけの燈心へしておやみなされませと。いひ立にして帰りぬ。跡には新たな女房と、鼻つきあはして何噺すべき事もなければ ほつしりとして互のかほを見まもつてゐるこそおかしかりき。然る所へ表をしきりにたゝくものあり。南無三寶始の女房が此わけを知て、わゝりに來たる物ならんと胸さきおどり。かふした所へなりこまれては。兩方共にぶしよびと思抜し 今の女房にむかひ 此町はどんな事で。店がりのものがよめをよぶと。名主が來て新婦の肌をさすつて見るが町の作法じやとあつて。今名主がそなたの肌を見にわせた。そちは懐姙のよし。同くは今夜は参らぬといふて見せともないが。そなたはなんと思やるぞといへば。わしもたゞの身でないからだを。しらぬ人になでさす事はいやでござんす。どこぞかくれる所はござりませぬかと。かくれたがるこそ珍重なれ。見らるゝ通二階はなし。かくさふ所がないが。窮屈ながら是に賣殘しの明半櫃あれば。すこしの間是へかくれてゐらるべしと。女房を半櫃の中へ入。ふたをしてさりげなき顔つきにて。夜中に誰じやと戸をあくれば。先の女房にてはあらずして。年比樂道のちなみある堺町の玉島門彌といふ蔭子。是は夜更て氣づかはし。何事で來るぞと。先内へ伴ひて子細をきけば さればお前とは新部子の時から念比して。今にかはらぬ中ゆへに。此中金が二三十兩なければ。親方の手前へ立ませぬ事あるとおはなし申たればこちこそ此身なれ。弟に武介といふて本町に歴々の呉服屋あれば 二三十兩の事は。何時成共才覺自由とおつしやるゆへ。今日迄待ますれど 何のおとづれもないによつて。成ますか成ませぬかの實をきゝにまいりました。おせわなことながらならふ事なら。明日迄に調ふよ

ふに頼ますといへば。きづかいするな明日晝時分には耳をそろへて卅兩。役にたつぞ。かふした住ゐはしてゐれども。二三十兩の目くさり金などは。何時成共御付られと。此身に成こもせんしやうはやまざりき。かゝるはなし半に半櫃のふた。内よりさしあげ。しきりに腹がいたみますか。氣がついたさふにござる。湯をわかして下さりませと。もつての外にうめき出す。元助は一生に産婦をとりあつかふたる事はなく。齒の根あはぬ程にふるひ出し。門彌そちは子を産女の手つだいした事はないか。腹を抱こやつてくれと。騷動すれば。何わこらよひ若衆が産の手つだいする物か。まづ半櫃から出して。しんぜたらよささふな物じやといへば。いかにも／＼そなたも手をかけ。ともぐ／＼に出してくれと。ふたとつて女の手をとり。しづかに是へ出られよと。兩方より手をかくるを女房見て。是は門彌様かうれしうござんす。わしが産月を心もとなさに。是迄見まひにござんしたか。内かたのしゆびはよいかと。額しかめながら尋れば。門彌は詞なく赤面してゐる。元介はふしんはれず。そちは此女とちか付かといへば。女房いたい腹をかゝへ。私はあなたの親方様の團七さまの隣居につかはれしものぬひ。門彌さまとはとふから人しれずあひまして。かふした身となつたゆへ。親方のきこへ。樂屋の陰口をきのどくに思し召。わしに暇付て。ひそかに外へやりたいと。門彌さまのおつしやる。いつまでもわしははなれぬ心なれど。さふしてはあなたのお爲にならぬと思ひ切。心にそまぬこゝへよめ入して參りましたと。泪をながしてかたれば。元介あまり興さめて。口をあいてゐたりしが。よく／＼思按すれば。若衆じやとて生類なれば。女に孕ませまい物でもない。しかし其借金の卅兩を念者に出させふとは。どふよくな仕懸じや。こちはそれとはしらず。三十兩なければ親方へたゝぬわけありといふゆへ。傍輩のつきあひに慰にてんがうして。親方の金をあけたか。どふぞして首尾をつくろふてやるべしと。懷姙した女房をいなして。卅兩のみやげを心がけて。今宵そなたをよび入しが。かふ底がぬけてしれた上は。卅兩にはおよばぬ。爰でゆるりとみやげなしに御産の紐をとかるべし。門彌きづかいするな。若衆の子は身が爲にも同前。如在はせぬぞと平産させ。親方に此通いひ聞せて。門彌をすぐに男となし。子の母と夫婦にして。元助後見して堺町近くに錢見世出しゐたりしが。俄に思ひ付て。堺木挽の立役子共の評判をはじめ。しばゐ好の人々をまねきあつめて。評判の中入のはたごを仕出しけるに。聞つたへに貴賤群集して賑なる所へ。元助様御舍弟武介様の。兄ご様を親父さまのかはりに御ゐんきよとあがめ奉ると。本庄の御隱居屋敷おゆづりと申　是

は切先のよい評判の手はじめ。是も役者のおかげ〳〵。しばゐはんじやう萬々年もたへず。とうたり翁わたして萬代の春ぞのどけき。

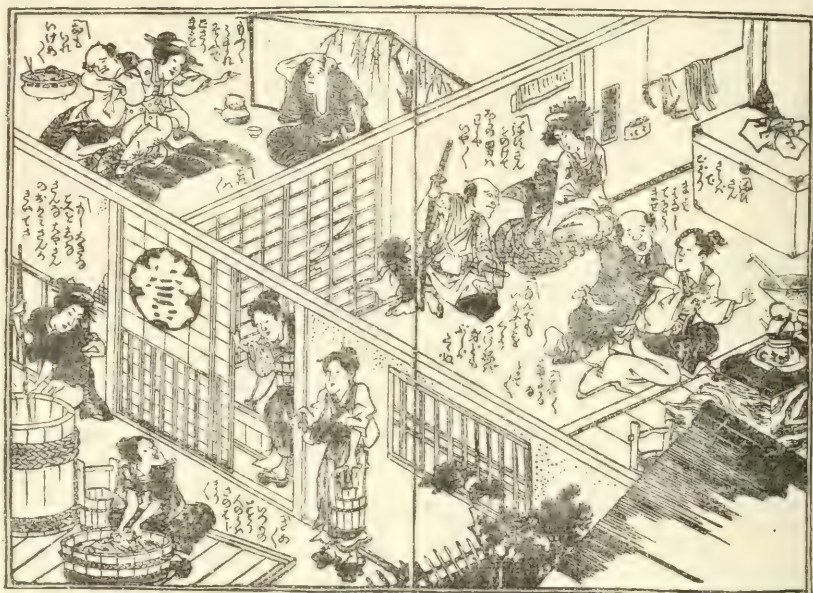
併しさういふ種があるからと云つて、直に一九が剽竊したものといふわけには行きません。剽竊論に就ては、前に申述べてありますから、こゝには繰返しませんが、皆がいろ〳〵と云ふ剽竊論といふものは、少くとも一九に對しては不適合なものだと思ふ、といふことだけ申添へて置きます。

東海道中膝栗毛發端

膝栗毛發端序

鬼門關外莫道遠。五十三驛是皇州。といへる山谷が詩に據て。東海道を五十三次と定らるよしを聞り。予此街道に竜をはせて。膝栗毛の書を著す。元来野飼の邪々馬といへども。人喰馬にも相口の版元。太鞁をうつて賣弘たる故。幸に乗人ありて。編數を累ね。通し馬となり。京大阪およびゝ。藝州宮嶋までの長丁場を歴て歸がけの駄賃に。今年續五篇。岐蘇路にいたる。彌次郎兵衞喜多八の輩。異國の龍馬にひとしく。千里の外に譃たれば。渠等が出所を問ふ人有。依て今その起る所を著し。東都を鹿島立の前冊とし。おくれ走に曳出したる。馬の耳に風もひかさぬ趣向のとつて置を。櫪からおろして如斯

于時文化甲戌初春

十返舎一九志

道中膝栗毛發端

東都　十返舍一九編

武藏野の尾花がするゐに。かゝる白雲と詠しは。むかし〳〵浦の苫屋。鴫たつ澤の夕暮に愛て。仲の町の夕景色をしらざる時のことなりし。今は井の内に鮎を汲む。水道の水長にして。土藏造の白壁建つゞき。香の物桶。明俵破れ傘の置所まで。地主唯は通さぬ大江戸の繁昌。他國の目よりは。大道に金銀も蒔ちらしあるやうにおもはれ。何でもひと稼と。心ざして出かけ來るもの。幾千萬の數限りもなき其中に。生國は駿州府中。※栃面屋彌治郎兵衛といふもの。親の代より相應の商人にして。百二百の小判には。何時でも困らぬほどの身代なりしが。※安部川町の色酒にはまり。其上。旅役者華水多羅四郎が抱の。鼻之助といへるに打込。この道に孝行ものとて。黄金の釜を掘いだせし心地して悦び。戯氣のありたけを盡し。はては身代にまで。途方もなき穴を掘明て留度なく。尻の仕舞は。若衆とふたり。※尻に帆かけて。府中の町を欠落するとて

借金は富士の山ほどあるゆへにそこで夜逃を駿河ものかな

※斯足久保の茶なることを吐ちらし。頓て江戸にきたり。※神田の八丁堀に。新道の小借家住居し。すこしの貯あるに任せ。※江戸前の魚の美味に。※豐嶋屋の劔菱。明樽はいくつとなく。長家の手水桶に配り。終に

○尾花がするゐにかゝる白雲　續古今集、大納言通方の歌「武藏野は月の入るべき峰もなし尾花が末にかゝる白雲」

○井の内に鮎を汲む　上水なれば云ふ。井といふは水道の呼び井戸のこと。呼び井戸は今の共用栓と同じ。

○栃面屋彌次郎兵衛　とちめく、周章するより出でたる屋號。足許の覺束無き弥次郎兵衛人形に取りたる名。

○安倍川町　駿府（今の靜岡）二丁町、遊女所在地。

○尻に帆かけて　尻をまくつて逃げること。

○足久保の茶　駿河にて最も早く茶の出來し處、こゝにては茶の枕詞のやうに用ゐたり。茶は茶にする、茶化すなどの意。

○神田の八丁堀　神田白銀町の處をいふ。下手談義聽聞集に「神田なる八町堀のかたほとり」

○江戸前　江戸城の前面、即ち下町のこと。
○豐嶋屋の劍菱　鎌倉河岸に在り、劍菱は酒の名。
○油繪　密陀繪、靜岡名產。
○たゝき納豆　納豆汁を拵へるために、納豆の粒を潰したるもの。
○びた錢　鐚錢。惡い錢。
○削り友達　飲み仲間。三村竹淸氏は大工の符牒に飯をくふ事をはる、蕎麥をきぐる、酒を削るといふといへり、また床場づきあひなりと敎へくれし人もあり。
○おすゑ奉公　大名屋敷の下級女中。
○ふくろび　ほころび。
○薯蕷鰻にならず　出世向上せぬ意。
○殼洒落　實のない洒落。

有金を呑なくし。是ではすまぬと。鼻之助に元服させ。喜多八と名乘せ。相應の商人かたへ奉公にやりしが。元來さいはじけものにて主人の氣にいり。忽小錢の立まはる身分となり。彌次郎は又國元にて習覺たりしあぶら繪などをかきて。其日ぐらしに舂米の當座買。たゝき納豆あさりのむきみ。居ながら呼込で喰てしまへば。びた錢壹文も殘らぬ身代。田舍より着つゞけの布子の袖。綿が出ても洗濯の氣をつけるものもなく。是はあまりなるくらしとて近所の削り友達が打寄て。さるお屋鋪におすゑ奉公勤し女。年かさなるを媒して。彌次郎兵衛にあてがへば。破鍋に綴蓋が出來てより。狼の口あいたやうなふくろびもふさぎてやり。諸事手健に人仕事などして。彌次郎を大事にかくる樣子。此女房の奇特なる心ざしに。彌次郎夜もはやく寐て。隨分機嫌をとりくらしけるが。うか〳〵としてはや十年ばかりの星霜をふりけれども。薯蕷鰻にならず。相替らぬ貧報。されども屈託せぬ氣性にて。殼洒落にしやれおらし。近邊のなまけものどもの遊び所となり

○味噌桶の蓋云々　を出せは蹴るといふ
○たなツ尻　裏ツ尻。
○大屋さん　家主、今の差配のこと。
○野呂間どの　野呂松人形より出づ。
○水をむけかける　巫女の言葉より出づ。
○おけんつう　髮の薄きをいふ。

て、五合德利の寐姿ながしもとに絕す。べこ／＼三味線の音。不斷味噌桶のふたを。あくる間とてはなかりける（よるも醤次郎兵へはうへ三見え女ぼうおふつ、ながしもとにあすのしかけしてゐると、うらだなの女ぼうおちよきた、まへだれにて、※たなつちりをふつて、うらぐちよりさしのぞき、）おちよ「モシおかみさんへ。御無心ながら。醤油がすこしあらば。どふぞかしておくんなせへ。ホンニ夕部はでへぶ。お賑かでござりやした。わつちらが所の。生醉どのを御覽じやれ。まだけへりやせんわな。此間の晚夜更て。路次の戸をわれるやうにたゝいたとつて。大屋さんのおかみさんがあのくちで。ごてへそうに小言をいひなすつたが。わつちらが所の野呂馬どののろまなりやア。あの又おかみさんも。あんまりじやアござりやせんかへ。ナント店賃の一ねんや二年。溜つたとつて。一生やらすにおきやアしめへし。それをやかましくいふくらへなら。溝板の腐つた所も。どふぞするがいゝじやアねへかへ。そして犬の糞も。てん／＼の内の前ばかり浚つて長家のものは。なんだとおもつてゐるやら。ノウおくんさん。（トむかふのうちのかゝしゆへ※水をむけかける）おくん「モシナあんまり大きな聲をして。そんなことをいひなさるな。奥（こあがりにおにかいをおろしてすごくにおゝをのませてゐる女ぼうがだいをりて皆かけ）のおけんつうが今手水にいつたよ。アノおしやべりも又大屋さんのおかみさんへ。いつそ追從ばかりいつて。長家のことをどふめへつたかうめへつたと。いゝ苦勞性じやアねへかへ。それに聞なせへ。此間からあそこの内へ來てゐた居候はアノかみさんの妹だといふこつたが。ナニあれがおやしきに奉公してゐたもすさまじゐ。ちよつと見てもしれてありやす。ありやアおへねへ。ばんくるはせものだとよ。一昨日もどこか下谷のおやしきへ。目見にいくとつて。つくりたつて出ていつたが。ナアニよその隱居さまへ。妾にいくので支度金が七兩來たとさ。いやじやアねへかへ。あの頰で妾も氣がつよい。わつちらもこの額のはげつてうがなくて。耳の際の痰瘤が。もふちつとちいさいと。妾にでも出て。支度金をとろふ

○願にかけて　きつと。

○假宅　こゝに云へるは文化五年十一月二十九日の火災後、田町、聖天町、瓦町、山ノ宿、山谷、深川の六箇所に假宅を設けたるを指す。吉原の臨時營業所。

○腎虚　女色によつて起る病症。

○お釜を起す　二十四孝の郭巨の話に本づく言葉といひ、一竈を起すにて、家を創立することゝいふ。

○きらず　雪花菜、豆腐のから、東京にてはおからといふ。

ものを。ハヽヽヽヽおかみさん。彌次さんはまだかへ。ヲヤヽヽ噂をいへば影がさすと。ソレ旦那がおけへりだ　ト二たりよおのかうちへひつこむと彌次郎立かへりて　彌次「エヽこの畜生めは。願にかけておらが所の裏口に寐てるらア　おふつ茶はわいてあるか　ふつ「ヲヤおめへ酒斗で。おまんまはまだかへ　彌次「しれてあることさ。居酒屋へはよつたが。居飯屋へはよらなんだ　ふつ「そして喜多八さんの所から。なんでたびヽヽ呼にくるのだへ　彌次「おれにかねをかしてくれろとつて　ふつ「ヲヤばからしゐ。どふしたのだへ　彌次「あいつめが仮宅へでもはまつたそふで。親方の金をちつとばかり。つかひこんだといふことだ。其尻がわれると。しくじるはあたりまへだが。こゝでしくじつては。理屈のわりいことがあるといふ。なぜだときいたら。あそこの番頭めが。此間癇氣が天窓へさしこんで。それなりにあたまが。しやつきりとなつて死だといふことだ。それに親方は。年寄の癖に美しゐ若いかみさまをもつて。※腎虚してもふ。けふかあすかといふくらゐ。これも今にめでたくなるは必定。そふすると喜多八めが。その後家を請合て。手にいれる仕様があるといつたが。なるほどそふいけばあいつめは。おかまをおこすはなしだが。そこではおいらもわりい事はなし。どふぞこゝで。しくじらさねへやうに。してへものだがしかたがねへ。時に飯にしよう。なんぞ菜はねへか　おふつ「さつきのむき身売汁さ　彌次「ナニ抜身がくはれるものか。しかしこいつも。※きらずとあればきづけへなしだ　ト此内日もくれたるにあんどうをともし、彌次郎ちやづけをくいかゝる時、としの頃五十あまりの侍、たびしやうぞくにて　侍「イヤ卒爾ながら。駿河の府中からおざつた。彌次郎兵衛殿は。爰元でおざるかヤア　ふつ「ハイこつちらでございますが。どつちからお出なさいました　侍「イヤハイ氣遣ひなものではおざんないヤア　ト三十ちかき女をつれてはいり、こしをかくるを見て、彌次郎きもをつぶし　彌次「コレハ兵太左衛門さま。妹御をつれて。何として御出府でございます　兵五「あんとしてたア曲がない。このいんも

ふとめをきさまの所へ。嫁入につれてまいつたのでおざるヤア。斯ばかし申ては。合点がまいるまい、きさま國元にてこれなる身どもが。いんちふとのお蛸と。密通をせられたといふこと。跡にて聞て腹立はいたしたれども。たんだひとりのいんもふとがこと、どふした縁でがな、貴様でなくては添ぬと申すゆへ。不便におもつて。堪忍の胸を撫て、すいた男に添せずとおもひきはめ。わざ／＼めしつれて參つておざるヤア、此うへからは隨分とていんもふとめを不便がつてやつて下さい。まづ祝つて冷酒でなりと盃をさせすにサア／＼はやく／＼　おふつ「チヤ／＼おめへさんはどなたかはしらねへが、どこのくにゝかめつそふな、悪躰男といふものは、女にあつて二世の三世のと。眞實らしくいひかけて。欺して見るは。女をおとすおさだまりの口上、それをまんまことにして。駿河からわざ／＼。其男に添そふとつて。つれておこしなさるといふは、馬鹿氣きつてゐるじやアございませんか。又妹御も妹御、滿足な男でもあることか、わたしは仕方なしに添てはゐますけれど。色が黒くて目が三かくで、口が大きくて髭だらけで。胸先から腹おうに、癩がべつたりで、足は年中鵞瘡でざら／＼して、イヤまた寐た時寐息の臭い男　彌次「ヤイ／＼／＼こいつめが、亭主を羅利骨灰にしやアがる　おふつ「ホヽヽヽ、それでも男といふものはすたらねへもので、女とさへいやア眼一でも鼻欠でも。たゞは通さぬ氣性、さだめし念比しられた人も。邂逅にはありましたろうが。あんまりこのもしい男でもございませんから。おまへさんがたのやうに。跡を追て來た人はひつとりもございません。この狭いうちに。女房がふたり三人あつたら。大屋から根太がたまらねへ店を明ろと追出れるでございませう。人のしらねへうちに。はやくつれてお歸なされませ　兵五「※エレハイ最前からつべらこべらと。此女中よくしやべるが。其方は先なにものだい

○羅利骨灰　俚言集に落首灰の字を充てたるが、村田了阿は骨はなれど、自説を異にす、語を詳にするには支離滅裂、或は形なしなどいふべきか。

○エレハイ　エレ／＼ともあり、ヤレ／＼といふに同じ。駿河言葉。

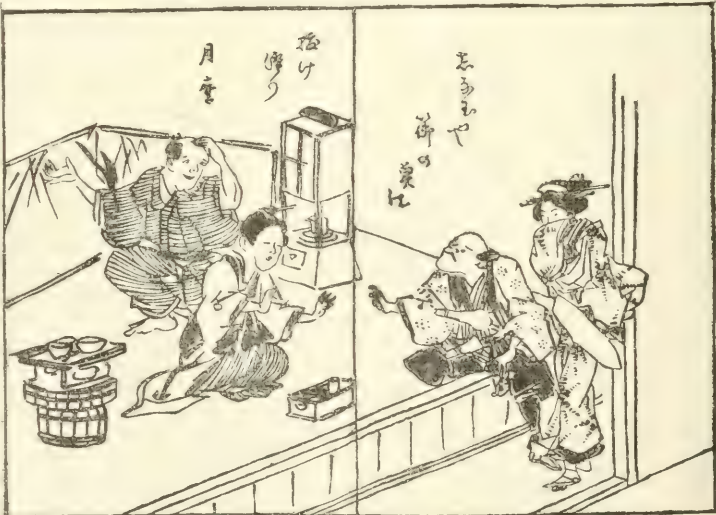
○つべらこべら　つべこべに同じ。

○いかずに　往かんずの略、駿河言葉。

○がいに　一廉にの意、我意とも書けり。

○せずことがない　前に同じ。

おふつ「アイわたしかへ。彌次郎兵衞の女房でござります　兵五「アニ女房だい見たくでもないヤア。これ彌次郎兵衞。お身女房をもつたか。エレ〳〵是悲に及ばない。繩をかゝれ。國元へひいていかずに　トくわいちうより、はやなはを取いだし立かゝれば、彌次郎やつきとして　彌次「ナニ繩をかゝれたアどふいふ理屈わつちが女房をもちやア繩をかゝらにやアなりやせんかへ。とほうもねへ。モシヱ繆切を二本さしなさつたとつてそれが恐しるものでもござりやせんはな　兵五「イヤお身。がいにかさ高にお出やるな。コリヤよくきけ。今度いんもふとをめしつれたは家老中の指圖に依て罷越たぞ。其譯といふは。相役の横須賀利金太かたより此いんもふとを。婦妻に貰ひたきよし媒をもつて申こした。身にとつては過分の聟ゆへ。早速に同心して結納まで受おさめた所に。いんもふとめは一筋に。こなたと夫婦の契約をした上は。たとへ親兄弟の差圖でも。ほかへ縁につかずこたアいやだといふ。身ども魂消まいものか。ア、せず事がないと。それから其利金太かたへ使をつかはし。彌次郎兵衞と申すものと妹めが密通をいたせしこ

○三枚におろされ　魚を料理する言葉。

とて神ちつて存ぜす。それゆへ結納も受納いたせし所に、いんちふとめは密通の男ならでは。添なゝと申。しかれば妹が首をきつて、こなたへ持参仕らふ。それにて御一分をたてられ、御了簡頼入と申遣せしにて先方ち諸親類はじめ傍輩どちへ兼てこなた妹御を、妻に申受る筈と吹聴せし上は、世間体へ對し申譯のない仕合。女の首ひとつ受たとて。何の役にもたゝぬこと。此上は其元とうち果すより外分別なし。明晩安倍川原におゐて。勝負を決せうとの返事、元來身共も覺悟のまへいかにもと挨拶せし所に家老中より双方をなめされ年來御主人の御知行を頂戴いたし居ながら私の宿意をもつて。討果さんとは。殿へ對して第一不忠。妹か兄にかくして。夫を持しをしらずして。利金太に契約せしを。不届とはいひがたし。いまだ婚礼もせないうちのこと。互に一分のすたることはないはづ。自今以後兩人意恨を弃て、御奉公を大切に勤られよ。また妹おたことは仮初にいひ約束せし男の外。他へ縁さつくまじとは寔に貞節のいたりと。殿にも不便に思召れ、下地より馴染たる男に添せよとの御意。有難く、お受申てそれより是まで罷越たる所。さきの男今女房を持おるゆへ。すご／＼と妹をめしつれ歸りましたとアニハイ兵五左衛門ともいわるゝ侍が。生頬さげてかへられずかヤアサア妹めを妻にいたせばそのとをり。いやだといへば是非とも繩をかけて國元へひきつれ。家老中へ此段を披露し。一旦約せし利金太かたへ。おのれをわたさねば。兵五左衛門武士がたゝない。サアせずことがないと諦めて。繩をかゝれ。但しは踏つけてめしとらずかヤア。弥次「ハア成程。そふおつしやればきこへましたが。しかしそれはおめへさまのほうの得手勝手。たとひ此身は。※三枚におろされ。切割れて塩辛にせらるゝとも。我を大切にして。艱難辛抱する此女房を捨て。妹御を女房にもたれるものか。しかたがねへ。どふとも御勝手

になせへまし　トかくごして両手をうしろへまはせば、兵五左衛門たちかゝり、よでに彌次郎をいましめんとするを、女ぼうおふつすがり付　おふつ「モシ〳〵段々の様子を承りますれば。御尤な事去ながら。現在夫が縄めにかゝり。永の道中に恥をさらし。お國でもしも命に拘ることゝやなどあつては。わたしの悲しさ。モシ今おまへのいひなさるには。たとへ此身はどふなつても。わたしには艱難辛抱した女房はすてられぬとゝ。いひなさつたがわたしには千倍。もふなんにもいひませぬ。わたしには隙を下さりませ。あの妹御は駿河からの馴染とあれば。わたしよりはさきの事。添ふとおつしやるも無理ではない。サア斯わけていふうへに。暇をもくれず。お侍さまの手にかゝる了簡なら。まづわたしからさきへ死ます　トなく〳〵ながしもとのほうてうをとつてひねくりまはすを彌次郎おさへて　彌次「コリヤ〳〵何をする馬鹿ものめが　おふつ「イヱ〳〵それでも　彌次「ハテさて。それほどに思ひ詰た事なら。しかたがねへ。ちつとの間暇をとつて。※親分の所へでもいつてゐてくれ。大事の女房を今さらふなどゝは。夢にもおもはねへ。はかねへ別れをするも。みんなおれがわりいからだ　トさすがの彌次郎も、女ぼうの手まへきのどくさに、かたかげへまねきて、いろ〳〵にだましつすかしつ、いひふくめ、すゞりはことりいだし、※三くだり半をかきてやれば、びんぼう人のきさんじさ、きの身きたまゝ、くしはこにふろしきづゝみひとつ、ひつかゝへて、なみだながら、しほ〳〵として出てゆくと、兵五ざへもん、大小をとつてほうり出し　「ヤレ〳〵重荷をおろした。ナント彌次さん。わしが仕打は妙でありませう　彌次「駿河ものゝ詞おそれ入た。田舎侍の出立。いかな後家の質屋へ見せても。百石どりとは直打する男を。棒手振の芋七にしておくは惜いもの。それにこのまた、矢場のお蛸が田舎娘の身振。妙であつた。皆おれが自作の狂言で。ふたりを頼んで女房にいつぱいくわせ。追出したも。あの陰氣ものに飽果たからの事。ひとつには急に拾五両といふ。金がなければならねへことで。芋七きさまへふつと咄したら。きさまのいふには。ソリヤさいわゐの事がある。さる所の隠居が。内の腰本に手をつけ。孕したゆへ。聟や娘の手前。しれぬさきにとて。表向いとまを出して。請人の所へ内證で。預けておかれ

○親分　よめ聟の里方になりたるを親代り又親分ともいふ、且つ媒人を兼ねたるもあり。
○三くだり半　離縁状。三行半に書くより云ふ。
○後家の質屋　多く貸さぬを云ふ。
○棒手振　天秤棒を擔いでる行商をいふ。
○矢場　楊弓場。

○潮來　潮來節。當時一般に流行す。

たが。どふぞ腹の子ぐるめに金拾五兩つけて、片付たいと、わしがたのまれて居るから、調度よいが。しかし女房のある上へは。どふもと、はなしにつるて、おれもその拾五兩ほしい最中、たとへ腹には鬼の子がやどつてるよふが、金さへもつてくれば。年增女房にあきた所、こいつは妙だと此狂言をかいて。きさまたちふたりを賴んで、まんまと上首尾にやりはやつたが、彼持參金のしろものは、いよ／＼急に來る筈か。どふだ／＼。 いも七「イヤくるはづとも／＼、おめへも金が急〳〵といふ、さきでも腹が落ふだから。一刻もはやいがいゝと。せきこんでゐられるから。そこで今夜更てから、そつと駕でこゝへむけてくるはづにしておるた。ちよつぴり酒でも出さにやアなるめへが、内にとつたのがありやすか 彌次「ヤア／＼今夜くるのか。ヱ、それは又早急な。それとしつたら。けふ髮月代でもしておこうものを。ドレちよつと。髭ばかりでも剃て來やう いも七「ア、コレ／＼今頃どこに髮結床があるものだ。そんなことよりか。酒の支度でもするがいゝ。コレサおめへなにをまご／＼する 彌次「イヤ何もしねへが。ちよつと爪でもとつておこう いも七「ナニ埒もねへ。そんなとはしねへでもいゝじやアねへか 彌次「イヤそれでも。拾本みんなとらずとも。せめて貳本の爪ばかりは いも七「ハ、、、おきやアがれ。大わらひだ ト此内にはかにそこらとりかたづけるやら、火ばちにけしずみをおこしかけ、ねづみいらずから、五合とくりをとりいだし、まづまちうけにしらふではおかしいと、三人はなつきあわせ、のみかけてゐる折から、おもてぐちに、いきづえのをと、カツチ／＼ いも七「チヤもふ來たそふな トかごの戸をそつとあけてこさんで出「チツトこゝだ／＼。駕の衆御太儀／＼。コレいつぱいのんでござれ トあり合のはした錢をやつて、かごのものをさつそく追かへし、のつて來た女の手をとつて、ともなひはいり いも七「サア嫁御のお出だ。お盃／＼ 彌次「コレハいかいおせわ いも七「サアお壺さん。そけへすはりなせへ。そこでおめへからひとつのんで。御亭主へさしなせへ。お蛸お酌／＼。コリヤア四海浪しづかにといひてへが。謠はしらす。あした來て潮來でもやらかしませう ト此内だん／＼さかきもすみ夜も

○ふりこんできたる　紛ひ込んで來た。大名行列の道具持より出でたる語、あの態度を似をふることいふ。

○いさくさ　苦情をつけること。

○ひよんなこと　妙なこと。

○半びつ　原本の挿畫を見よ。木製にて左右に金物あり。

○百日の說法屁一つ　諺。多年の苦心の一朝にして無效となるに云へり。

ふけたるに　おたこ「いも七さん。わつちらアもふ。おひらきにいたしやせう　いも七「ソレ〳〵此せまいうちに長居はおそれだ。コレおつぼさん。今夜はゆるりと休なせへ。又あしたお目にかゝろう　トいとまごひし、おたこもろ共立出れば、彌次郎おくるふりして、おもてにたちいで　彌次「コレいも七。持參金のさたがないがどふする　いも七「そこはぬからねへの。今のさき駕から出た時そつときいたらあしたの晝時分、隱居のほうから。くるはづに間違はないといふことだ。ソリヤノ請合きづけへなしに。今夜はしつかり樂みなせへ　ト彌次郎がせなかをひとつくらわせて出てゆく、彌次郎かごぐちをしめて　彌次「コリヤア寒くなつた。時に茶漬でもくはねへか　おつぼ「イ、エよろしうござります　彌次「そんならもふねよふか　おつぼ「おとこをとりませう　彌次「チイ〳〵おれが出してやろう　ト戸たなより、やぶれぶとんにかいまきなどとりいだす所に、おもての戸をトン〳〵〳〵　彌次「エ、今頃にだれだ〳〵　トいひつゝも、さては今おひ出した女ぼう、このこゝをかぎつけてや、※ふりこんできたるならんか、たゞしはおやぶん※いさくさをいひに來たる、何にもせよ見つけられてはめんどうなりと、今の女ぼうにむかひ小ごゑにて　彌次「コレ〳〵※ひよんなことがある。此長屋の作法で。長屋のものが娵をとると。長屋中の者が來て。其娵の尻をさすつて見るが定法。今そなたの來たことを。どふしてしつてやら。それですゐに來おつたに違ひはない。そなたは懷妊のよし。おなじくは。まだ今宵は來ませぬといつて。見せたくねへが。どふであろう　おつぼ「チヤ〳〵わたしはいやだのふ。殊にたゞの身ではなし。しらないお人に。このおゐどを撫させる事はいやだねへ　彌次「そんならどこぞへかくしてへものだが。此通二階はなし。チツトあるごく。究屈ながら。ちつとの間。こゝへ〳〵　ト賣のこしのあき※半櫃あるをさいわい、ふたをあけて、かのおつぼをいれ、もとのごとくふたしておき、やがておもてのかけがねをはづし、戸をあくればあんにそうゐして、喜多八せきこんでとびこめば　彌次「ヤア喜多八か。エ、今時分にどふして來た　北八「イヤもふ〳〵。內に落着てゐられやせぬ。此間からおめへに賴んだ十五兩の金の事。翌日は店おろしにかゝるゆへ。ぜひ〳〵あすの朝まで。わつちが遣ひ込だ穴を。埋ておかねばなりやせぬ。それが出來ねへと。忽※百日の說法屁ひとつ。おめへの

○讃談　算段のこと。醒睡笑の「年さんだんのあるは常なり」「見る人わらひさんたんする」とは、讃歎なるべし。

○目くされがね　僅な金。

○いつたがせうがにやア　云つたからには。

○虻もとらず蜂もとらず　何も取れぬこと。

いふには。隨分心當りがあるから。讃談してやらうと。いひなさつたによつて。じつと待てゐたが。今もつてさたがないから。あんまり氣づけへさに。寐所からそつとぬけて來やしたが。いよ〳〵そのかねは。出來やせうかね　彌次「しれた事よ。あしたの晝までには。きつと出かしてやる。そこへいつちやア男だ。さあなんぼこんなに。しみつたれなくらしで居ても。さあといへば。拾兩や十五兩の目くされがね。工面せうといつたがせうがにやア。ちけへはねへから。落着て居さつし　北八「そいつはありがてへ。其かわり百倍にして此恩を返しやす。此間からいふとをり。番頭はなくなる。親かたも今にめでたくなりやすから。跡で後家御を手にいれさへすりやア。すぐにわつちが旦那さま。どふか芝ゐの敵役がいふやうなこつたが。是ばつかりは違なし。極々内々の所は。もふ出來かゝつてるやすから。今が大事の所。爰で十五兩のかねがねへと。しくぢつて虻もとらず。蜂もとらずだから。どふぞおたのみ申やす　彌次「おれも手めへをおもふは。身をおもふだから。其咄のとをりにいきさ

○やみらみつちや　語を換へんには晦昧などいふべし。

くおれをとんだめに。あはせやアがつた　北八「ナニとんだめにあふものか。かねさへからねへけりやアいゝじやアねへかへ　彌次「いゝとはなんのことだコレ其金ゆへに。おらア女房をさらけ出してしまつて。今夜からひとりで寐にやアならねへは　北八「そのかはりまた。若い女房をゆづつたから。申分はあるめへ　彌次「たはことつくしやアがれ。あの女のつらが。ふた目とも見られるつらか。いめへましゐやろうめだ　ト　まつくろになつてはらをたて、ひとつふたついひつのりて、彌次郎こらへずきた八にぶつてかゝる、きた八もやつきとなつて、からかつてゐるうち、おつぼはしきりにむしがかぶると見へウン〳〵うなつてくるしがるをもかまわず、こなたにはやみくもとつかみあふてゐるうち、夜あけてなかう人のいも七、しやうばいものゝかひ出しにゆくとて、こゝのうちへをとづれたるが、何やらうちには、ばつたくさをとして、女のうめくこへもきこゆるにぞ、いも七これはと、そとより戸をあけんとするにあかず、たゝいてもあけざればやにはに、そとよりひつぱづしてはいると、彌次郎見るより　彌次「ヤアいも七か。よくも〳〵このやろうめと馴合ておれをはめたな〳〵。合点しねへぞ。すまねへぞ〳〵　いも七「ナニはめたとは何のことだ　彌次「なんの事だもすさまじゐ。ふてへやつらだ　ト　又いも七にとつてかゝるを、いも七はらをたて、小ぢからのあるにまかせ、彌次郎をねぢふせる、きた八とりさへてもきかず、ごつたかへして、たばこぼんをふみくだくやら、ごびんのちやをぶちまけるやら、三人※やみらみつちやに、さわぎたつるものをとに、きんじよとなりの人〴〵、おひ〳〵かけつけ、かれこれとりさへるうち、おつぼはそこらをのた打まはり、くるしみたるが、ついに血をあけて目をまわしてたをれる　北八「ヤア〳〵おつぼ。どふした〳〵。コレ芋來てくれ。可愛てふにどふかしたそふな　いも七「コリヤ目をまはしたのだコレ〳〵水だ〳〵　北八「おつぼヤアイ〳〵　となりのていしゆ「おつぼさまとは誰の事だ。モシ爰のかみさまはへ　いも七「コレこの目をまはしたがかみさま　となり「ハア彌次さん。おめへのおかみさまか　彌次「アイわつちが女房のやうでもあり。又ないやうでもあり　となり「ハアきこへた。喜多八さまのかみさまか　北八「アイわつちのかゝあのやうでもあり。又ないやうでもあり　となり「マアなんにしろ。どつちのだかしれない。おかみさまヤアイ〳〵　いも七「コリヤつめたくなつた。もふいけねへ　北八「エ、いぢらしいことをした。彌次さん醫者をよびにやつてくんなせへな　となりのていしゆ「わたしが元宅さんでも呼で來てあげませうか　彌次「その序にお寺へもいつてもらひてへな　ト　此内ゐしやがくるやら、灸をすへるやら、

○七里潔敗　神咒經七里結界より轉化せる語。

よつたかつてさま〳〵にして見れども、むざんやおつぼはかほのいろかわり、さつぱりいきはたへたるやうすに、きた八おもわずなきいだし「かわいや只の身ではなし。今のさはぎに血があがつたのだろう。しかたがねへ。時に彌次さん。おめへも腹がたつたろうが。どふぞ了簡して。この取始末をしてくんなせへな　彌次「おれをばいろ〳〵な目にあはせる　北八「なんぼ勘當同然にした女でも。斯なつては親の所へもしらせずはなるめへ。誰をやつたものだろう　いも七「ソリヤアわしでもいつてやろうが。ぜんてへ是はどふいふ譯か。さつぱりわからねへ。おらが新道の肴やに。預つてゐた女。余所の隱居の妾だが。片付たい。世話してくれろと頼れたから。こゝの内へ仲人したが。今きけばおめへの女房とは。どふした理屈だ　北八「マア〳〵あとでわかる。其肴屋といふはゝおいらが親かたの所の出入。預けておるたはやつぱりおいら。マアそれよりか。はやく親の所へしらせてへ。それもその肴屋までしらせると。親の内へあそこからしらせてくれる　いも七「そんならいつて來やせう　トいも七は出てゆく、きんじよの人〴〵手つだひて、そこらさりかたづけ、めい〳〵くやみをのべあいさつして、みな〳〵ひとまづかへると　北八「何にしろ。わつちはちよつといつて來やう。ゆふべそこ〳〵と出た儘だから。あとはいゝやうにたのみます　トかみいれから金一歩出して彌二郎にわたし、出かけんとする所へ、ほうばいの與九八、きたり　チヤ〳〵きた八どの爰にか。親かたがとう〳〵今朝がた。御臨終なされた　北八「そふだろうとも　與九「それにつゐて。おかみさまがおつしやるには。きた八に暇をくれる。あれは平生心ざしのみだらなもの。旦那殿がしなれたら猶の事。女の主と侮つて。どのやうな不埒をせまいものでもないから。そう〳〵請人の所へ引わたしてやれとの事。それはと傍から。さま〴〵取成をいつて見たが。どふでもきさまはかみさまへ。なんぞいやらしい事でもいつたと見へる。そふかして日頃からいけすかねへ。頬の皮の厚い男。顔を見るもいやだと。きさまの事をわるくいつて。七里潔敗。いやだ〳〵といつてござるから。しかたがねへ。モシ彌次郎兵衛さまはあなたか。

○業さらし　罪業をさらけ出す意。

○訴訟　歎願、いひわけ。

○早桶　棺桶。

只今お聞のとをりでござりますから　きた八どのは是でおわたし申します　彌次「承知いたしました。コレきた八、あのとをりいたゞ、それでいゝか　北八「イヤちふよくてもわるくてもしかたがねへ。しかし其筈ではねへつもりだに　彌次「くれ〴〵もいめへましゐ。業さらしな野良めだ。いつその事何も角も。ぶちまけやうか　北八「ア、コレ〳〵誤つた。おがむ〳〵　與九「また折を見て。訴訟のしかたもあろう。なんにしろ。けふは内が取込でゐるから。又そのうちに　トあいさつ、そこ〳〵にして與九八は出てゆくと引ちがへていも七立かへり「サア〳〵親元へはしらせて來たが。是から買ものをせずはなるめへ　北八「御苦勞〳〵。迚ものことに。わつちといつしよに來てくんねへ　ト彌二郎へわたした二歩をとつていも七をひきつれはやおけその外の入用のしなをとゝのへてくるさ※　彌次「ヂヤ手めへ氣のきかねへ。序に酒もかつてくればいゝ。　北八「それをぬかるものか　トはやおけの中から一升とくりにまぐろのさしみをとりいだしまづのみかけてゐる所へあひながやのものもだん〴〵大さかもりとなり酒もあとからかひたしてのこらずなまゑひとなりまきじたにて　いも七「サア〳〵この元氣で佛を桶へさらけこんでしまをふ。時に寺はどこだ　彌次「馬鹿アいへ。おいらが内に寺があつてたまるものか　北八「そいつは

○卒都婆の干物　形より來る見立。
○たちうり　魚の身の截ち賣。
○出はうだい　口から出まかせ。
○義者ばつて　義理立をして。
○どうりよ狐の子じやものを　「蘆屋道滿大內鑑」の文句。

つまらねへ　彌次「かまうこたアねへ。なんでも持出しさへすりやア。どこかしら寺があるだろう　北八「それだとつて葬禮をかついで。寺町を呼はつてあるひたとつて。かいてはあるめへ　いち七「イヤそれもおもしろかろう。わしは寺町へばかりあきなひにゆくが。呼よふが町とはちがひやす。マア今頃のしろものなら。死んでいこく〳〵。ゆうれんさうやばけぎやく〳〵。（新大根　漢蘿草　分蔥）卒都婆の干物に。石塔のたちうりなぞは。よく賣るから。葬禮も買人がありませうハ、、、、、　北八「かわへそふに晒落所じやアねへ。サア〳〵はやく片付てくんなせへ　トなまゑひ大ぜいよつてたかつて、むだやらしやれやら出ほうだいな事、しやべりながら、ほとけをおけの中へおさめて、香花を手向ける所へ、おつぼのおや、なみだをふき〳〵たづねきたりて　「アイゆるさつしやりまし。わしやハア。おつぼの親でござらア　北八「是はよふこそ。先こちらへ　親「ヤレ〳〵憂とをしおりました。わしやハア田舍もんでござるから。義者ばつてむけちなくぼる出しましたが。こんなになるべいたアおもひおりませなんだ。ドレ〳〵むすめはどこにるおります。ちよつくり頰サア。見せてくれさつしやりまし。彌次「ヱ、おめへもふちつとはやく來なされば い ゝに。もふ桶の中へさらけこんでしまつたものを。のふ芋七　いも七「イヤしかし。とつさんの身では。見たいは道理〳〵。どをりよ狐の子じやものをとけつかる。ハ、、、、さらばお開帳いたそふか　ト棺桶のなはをときふたをあけて見すれば、をやぢめがねをかけつく〴〵と見て　親「佛がちがひ申た。此佛にやア首がござらない。そしてわしの娘は女でござるに。コリヤハア男の死人と見へ申て。胸髭がはへてござらア　いも七「ナニ首がないとは。ドレ〳〵ほんにコリヤア首がねへ。彌次さんおめへどふした　彌次「ナニちがつたア何がちがひやした　親「コリヤハアちがつたアもし　彌次「ナニおいらがしるものか。そこらにやアおちてはねへかへ　親「ヤレハア此衆はとんだ人達だ。サアうらが娘はどふさつせへた。しんだのなんのと嘘ばつかしつかつしやる。サア娘を爰へ出しなさろ　彌次「出

せとつて外にやアねへ。とほうもねへおやぢめだ　親「コリヤハアすまないく　北八「なる程とつさんのいふのは尤だ何にしろ首がなくちやアつまらねへ　親「インチ〳〵田舍もんでこそあれ。うら頭百性もしたもんだ。お家主どのへことわつて。※ゑずい目にあわせてくれべい　トだん〳〵こはだかになり、やかましくいふゆへ、そばにゐあわせしひとぐ〳〵いろ〳〵なだめてもいつこうきゝいれず、大やさまがこのやうすをいさいにきいてかけつけ　大や「さて〳〵今聞ましたが。大變なことでござる。何にいたせ。しんだもの、首のないといふは　トはやおけのうちをのぞき見て「イヤ〳〵おやぢどの。きづかいさつしやるな。首はあります　親「あるとはどこにあります　大や「コリヤア佛を。逆さまに入れたのでござるハ、、、　親「ハアそれで落着ました。コリヤどなたも御太儀でござる　トこれより夜にいりてそうれいをなしあさねんごろにとぶらひけるかさてもきた八はせつかくしんぼうせしおやかたの内を出されて又彌次郎のかたに※居そうろうとなりたがひにつまらぬ身のうへにあきはていつその事※まんなをしにふたりづれで出かけまいかとのそうだんが友だちにたのみこ金子をかりうけまづそのとしはめでたき春をむかへてきさらぎのなかばよりいせさんぐうとおもひたち東海道へと出かける

かしまだちの狂歌

※難波江のよしあしゝとも旅なれば

おもひたつ日を吉日とせん

道中膝栗毛發端大尾

○ゑずい目　ひどい目。

○居候　誰々方に居候といふより出づ。掛り人のこと。

○まんなをし　まを跳ねて云ふ。仕合を直す意。

○難波江のよしあしゝとも云々　「東海道安見繪圖」（明和九年版）に「定め得し旅立つ日取よしあしは思ひたつ日を吉日とせん」といふ咒禁の歌あり。この下の句を用ゐたるもの。

○雀色時　たそがれ。

膝栗毛發端叙

春の日の長旅も。馬士唄の竹に。雀色時の泊には、奇妙希代の滑稽を吐て。衆人の腮顔に鈎匙を掛させ。彼佐々木梶原が。生唼磨墨より。遙に勝り。千里の駿足も及ばざる。膝栗毛と題せし。その發端の書を閲して。感稱の余り。跋文を乞ふて。智嚢の傷れるほど。底を無性と拂きしに。原來一文の貯は偖おき。一文不智の僕なれば。諺にいふ。蟷螂が斧猿猴が月。されども犢尾蒼蠅の譬のごとく。此ひざくり毛の尻尾に執付。唯意氣なりを。ひつかく事しかり

小舶街　旭亭一桃

東海道中膝栗毛初編

道中膝栗毛序

筥根八里の長持唄には。猛き宰領の心を和らげ。竹に雀の馬士唄には。鬼殺を感せしむ。是その哥の徳利酒。呑や謡の旅衣。都をさして行がけの駄賃帳を繰返し筆の建場に雲駕の。息杖をしてゑいやらやつと。書綴たる東海道。五十三次の記行に。無滑稽と方言の二割増。重荷に附言夷曲歌。それが中にも唯一夜。鮓のめし盛押かけて。商ふ戀の箱枕。その有増を宿帳の帖となしたるは。空尻の売無躰なる。ほんの噺の問屋場もどき。ハイ〳〵頼ます〳〵と。此本の鹿島立に。序する事しかり

維時享和二載

壬戌孟陽吉旦

十返舎一九誌

道中膝栗毛凡例

○此書はすべて東海道往來之記。上貴人高官の通行より。下拔參物貰の木賃泊。雲駕馬士の俗腸迄。其下情を穿て。悉く弘着す

○驛々風土の佳勝。山川の秀異なるは。諸家の道中記に精しければ此に除く。所々の名物景物等に至つては。聊其滑稽詞を加へ記す

○簡伴女俛倆の風流泊々の遊戲。その可笑さを純にす

○卷中に著す夷曲哥は。排設地口を專にす。故に洒者は笑へ。予が風製落首体たるを以て。人金を會て出さず。却て其料を着服するは。是稱を取より德を執て。慚と愧と思はざる。予が性質仕方がなし

○此編は東都品川驛より。稍く箱根驛に至つて畢る。其餘草稿出來あれども。帖數の過余を厭ひて。飯盛の跡釜に讓り。追焚して後編に著んとす。すべて玆年予が戲作の帖擧倶に滿尾に至らず。是則無性橫着骨惰なりと。書肆の私言一言もなし〳〵

凡　例　終

○波錢　古錢と云ひ、四文錢といふ、錢の背面に波形あるより波錢といふ。

卷中書目

發端鹿島立之話
川崎萬歳屋唱奈良茶話
馬士高聲演色情話
神奈川坐食滑稽之話
抜参宮葉旅人而腹餅話
戸塚泊番轉倒之話
聞長持唄而懐女房所謂之話
一寸加禮坊主過而食波錢話
駕籠自問無如在話
宿引應對嚴重之話
小田原泊功拙之話
筥根山中晒落蔓話

上件

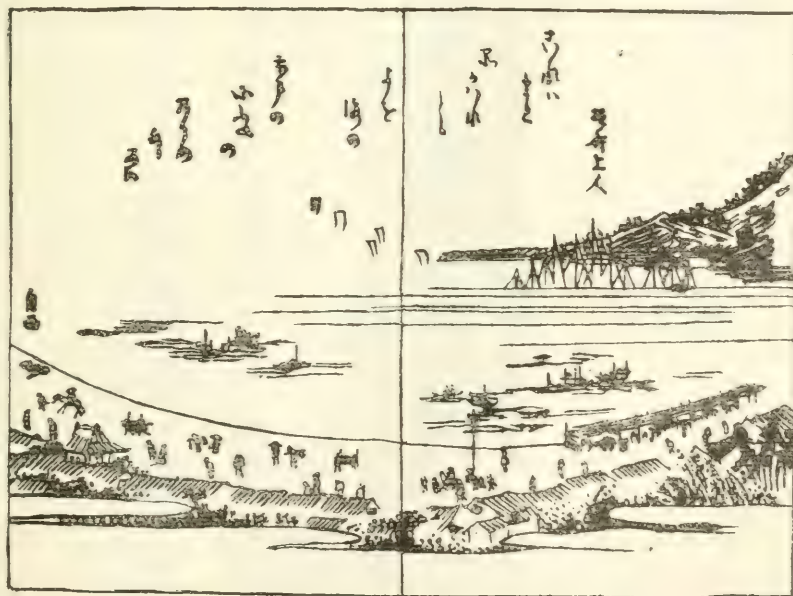
浮世道中膝栗毛初篇

十編舍一九著

發語

富貴自在冥加あれとや。營たてし門の松風。琴に通ふ春の日の麗さ。げにや大道は髪のごとしと。毛すじ程もゆるがぬ御代のためしには。鳥が鳴吾妻錦繪に。鎧武者の美名を殘し。弓も木太刀も額にして。千早振神の廣前に。おさまれる豐津國のいさほしは。堯舜のいにしへ。延喜のむかしも。目撃見る心地になん。いざや此とき。國〴〵の名山勝地をも巡見して。月代にぬる。聖代の御德を。藥罐頭の茶呑ばなしに。貯へんものをと。玉くしげふたりの友どちいざなひつれて。山鳥の尾の長旅なれば。臍のあたりに打がへのかねをあたゝめ。花のお江戸を立出るは。神田の八丁堀邊に。獨住の彌次郎兵へといふのらくもの。食客の北八もろとも。朽木草鞋の足もと輕く。千里膏のたくわへは。何貝となく。はまぐりのむきみしぼりに對のゆかた吹おくる。神風や伊勢參宮より。足引のやまとめぐりして。花の都に梅の浪花へと。心ざして出行ほどに。はやくも高なはの町に來かゝり。川柳点の前句集をおもひい

○富貴自在冥加あれとや　琴唄「菜露」の文句より出づ。

○げにや大道は髪のごとし　洛陽道　儲光羲

大道直如髮。春日佳氣多。五陵貴公子。雙雙鳴玉珂。（唐詩選）

○吾妻錦繪　錦繪が江戸の名物なれば云ふ。

○弓も木太刀も額にして　神社の額に上げることを云ふ。天下太平の心持。

○月代にぬる聖代　青黛を聖代に云ひかけたり。

○藥罐あたまの茶呑噺　月代より藥罐頭を出し、藥罐より茶呑噺に引かけしもの。

○打がへのかね　和訓栞の頭書に「俗に打つてがへと云ふに同じく、入違ひなるを言ふ、古の帶袋を中古の俗に打がへ袋と云へり、今も遠江の方言にはしかいふ也」とあり。腹卷の如きものか。

○のふらくもの　のらくら者といふを、當世下手談義に「野樂者の、人」又「比丘尼の親方能樂院」と書けり、寶曆度よりの言葉か。

○朽木草鞋　丸ノ內朽木屋敷の門番が賣れるより云ふ。價高けれども長途を行くに足を損ぜず。「江戸塵拾」にも「朽木土佐守の屋敷の仲間作兵衞と云ふものが造出せり」と見ゆ。

○千里膏　足へつける藥。本家は伊勢松坂湊町櫻井。通二丁目丸屋利助之を賣る。

○剝身しぼり　「江戸にてむきみ絞と云ふは蛤ばかあさり等殼を去りたるを賣る、これをむきみといふ、此絞白地幽かに藍地あることむきみを多く器に盛るに似たり、故に名とす」（近世風俗志）

○川柳點の前句集　古今前句集の事。「高輪へ來て忘れたる事ばかり」は前句集第一篇に「高輪へ出るとわすれた事ばかり」とあり。

○きさんじ　氣散じ。心安いこと。
○地腹を切つて　自分の出さねばならぬことを云ふ。「いたごと」の意。地腹は自腹にて自分の腹。
○往來の切手　寺より出す。旅中に死せる場合はその地の寺に引取らせ、その寺より自分の寺へ知らせて貰ふ爲のものと云ふ。
○御關所の手形　關所を通る爲の手形。
○ふめるもの　値踏の出來るもの。
○見たをしや　見倒し屋。
○がらくた物　雜具。
○店うけ　借家の保證人。
○すみかき庖丁　釜の尻の炭を落す庖丁。
○本貫　故鄕の意。
○さみづ　地名の鮫洲をもぢりたるもの。

だせば
　高なはへ來てわすれたることばかり
とよみたれ共。我〳〵は何ひとつ。心がゝりの事もなく。獨身のきさんじよ。鼠の店賃いだすら費え。身上のこらず。ふろしき包となしたるも心やすし。去ながら。旦那寺の佛餉袋を和らかにつめたれば。外に百銅地腹をきつて。往來の切手をもらひ。大屋へ古借をすましたかわり。御關所の手形をうけとり。ふめるものは。みたをしやへさづけて金にかへ。がらくた物は店うけにしよはせて礼をうけ。漬菜のおもしと。すみかき庖丁は隣へのこし。ちぎれたれども。繩すだれと油坪は。むかふへゆづりてなにひとつ取のこしたるものもなく。まだも心がゝりは。酒屋と米やのはらひをせず。だしぬけにしたればさぞやうらみん。きのどくながら。これもふるきうたに
　さきのよにかりたをなすか今かすかいづれむくひのありとおもへば
打わらひつゝ。彌次郎兵へまた狂詩を口づさむ
　雖レ非二亡命一可二奈何一　借金不レ報擲レ尻過
　夫居本貫掛乞衆　將三是川向成二干戈一
うち興じて。ほどなく品川へつく。彌次郎兵へ
　海邊をばなどしな川といふやらん
と難じたる上の句に。きた八とりあへず
　さればさみづのあるにまかせて

○首玉　瓔珞より出づ。頸玉。
○萬年屋　川崎の棒端の有名なる茶店。
○めんよふ　不思議といふこと。古く「めいよ」とあるより轉訛せるか。
○なら茶　奈良茶飯。こゝにては單に茶漬の意か。
○かぶりもの　樂屋通言、被つてゐる物より「かぶりもの」即ち失敗者に云ひかけたるか。
○九文龍　寛政八年三月番附に、東の關脇にて久留米の九紋龍淸吉、身長六尺二寸五分とあり。
○まきばしより
○葭町じんみち
の巣なれば云ふ。

後
前

いとおもしろく歩むともなしに。鈴が森にいたり。彌次郎兵衛
　　おそろしや罪ある人の※くびだまにつけたる名なれ鈴がもりとは
大森といへるは麥藁さいくの名物にて。家ごとにあきなふ
　　飯にたくむぎはらざいく買たまへこれは子どもをすかし屁のため
それより六郷の渉をこへて。※万年屋にて支度せんと。腰をかける　万年屋のおんな「おはようございやす　彌二郎兵へ「二ぜんたのみます　きた八「コウ彌二さん見なせへ。今の女の尻は去年までは。柳で居たつけが。もふ臼になつたア。どふでも杵にこづかれると見へる。そして※めんよふ。道中の茶屋では。床のまに。ひからびたはなをいけておくの。あのかけものをみねへ。なんだ。　彌二「アリヤア鯉のたきのぼりよ　北「おらア又。鮒がそうめんをくふのかとおもつた　彌二「コウむだをいはずとはやく喰はつし。汁がさめらア　北「ヲヤいつの間にもつてきたドレ〳〵　ト※ならちやをあり切さら〳〵さしてやり　彌二「もふ　おはちが零落した　北「又さきへいつて。うめへものをしてやろふ　トそれよりふたりはぜにをはらひ、こゝをたちいで行に、むかふより大名のぎやうれつ、さきばらひの男、一人は六十ぐらひのおやぢ、一人は十四五のやつこ、いづれも宿の人足なり　先拂「したアに〳〵。かぶりものをとりませふぞ　北「かけおちものは。下座をしねへでもいゝと見へる　彌二「なぜ　北「ハテ※かぶりものは通りませふぞといふは　さきばらひ「馬士。馬のくちを取ませふぞ　北「馬の口もとりはづしができるかのハヽヽ　先はらひ「あとの人せいがたかいぞ　彌二「おいらがとか。高いはづだ。愛宕の坂で。※九文龍とかたをならべたおとこだ　北「しやれなさんな。とんだめにあはふぜ　彌二「アレ見やれどれもいゝ奴だ。※まきばしよりで。ごふせいに尻がならんだは。何のとはねへ。※葭町じんみちの土用ぼしといふもんだ　北「ヲヤ〳〵弓をかついでいる人の笠を見ねへ。あたまと延引していらア

彌二「そしてアノ羽折のながさは。暖簾から金玉がのぞひている　北「とのさまはいゝ男だ。さぞ女中衆がこすりつけるだろふ。彌二「べらぼうめ。いろ〳〵なことにせはをやくはあなたがただとつて。やたらそんなことをして。つまるものかへ　北「ナゼそれだとつて。アレお道具を見ねへ。アノとふりにたちづめだは。ハヽヽヽヽサアお駕がとをつたからいかふ　トたつて行過ると、しゆくはづれに　馬かた「おや方かへり馬だが。乗つてくんなさい　彌二「安くはのるべい　馬かた「さか手でいかふ。彌二「じばでのつてくんなさい　ト馬のねだんもそうだんができて、彌二郎きた八もこゝより馬にのると、二ひきならべてひきいだす、鈴の音しやん〳〵〳〵馬ヒイン〳〵、　トむかふよりくる馬かた「ヘエちくしやうめはやいな　こちらの馬かた「くそをくらへ　さきの馬かた「うぬけつでもしやぶれ　トこれがこのてやいの行ちがひのあいさつ、たがひにあくたいをいつて、ぎりをのべわかれる、彌次郎兵へをのせたる馬かた「コレ伊賀よ。きのふ手めへとのんでいたやろうは。アリヤア上の宿の房州だな。　このてやいつねに名をいはず、みな、くにところのなをよぶ、きた八をのせたる馬かた大道にひよぐりながら「せんどのばんげにな。アノ房州めがかゝあがな。うらが親方の脊戸ぐちに。ばりをこいていたと思へ。あにがシャア〳〵といふおとをきくと。うらも氣がわるくなつたもんだんで。こいつなアかまうこたアなへ。ぶつちめてやろふと思つて。打くらつたけんきで。いきなりにうぢよヲねぢやアげて。そこへぶつたをしたとおもへ。そふすると。かゝあめがきもをつぶしやアがつて。コリヤアあにヲするとぬかしやアがつたから。ヱヽあによヲするも犬のくそもいるもんかへ。ぶつてしめるのだ。だまつてけつかれといふと。あにがアノづうたへだから。ひどへちからのある女よ。コノ野郎みやアと。おりよヲつつこかしやアがつたんで。ヱヽどふしやアがると。よこつつらアひとつぶんなぐつて。厩の壁へおつたをして。のつかゝつたとおもへ。まだこゞとをぬかしやアがるから。うらが親方の子に。やろふとおもつて。もちよヲ買つて來がけだから。そのもちよヲ二ツ三ツ。かゝあめがくちへねぢこんだら。むしや〳〵とくらやアがるから。其内にぶつち

○やたら　むやみやたらと云ふ。やたら拍子といふより出づ。
○お道具　槍のこと。他の武具は「道具」と稱せず。
○じば　雲助符牒。二百のこと。
○ばり　ゆばりの畧。尿。

めた。そふすると。最つとくれろと。いやアがつたんで。うらもそこらア探廻して。馬の糞たアしらずに。あいつがくちへおしこんだら。むによヲわるがつて。はらアたちやアがるまいか。うらもあんまり。可愛そふだんで。とふ〲焼杉の下駄アひとつ。おつたをれたはないまく〲しい　此はなしに、二人りも大きに興をもよほし、はやかな川の※ぼうはなへつく　夫よりふたりとも。馬をおりてたどり行ほどに。金川の臺に來る。爰は片側に茶店軒をならべ。いづれも座敷二階造。欄干つきの廊下棧などわたして。浪うちぎはの景色いたつてよし　ちやゝのおんなかどに立て「おやすみなさいやアせ。あつたかな冷飯もございやアす。煮たての肴のさめたのもございやアす。そばのふといのをおあがりやアせ。うどんのおつきなのもございやアせ　二人はこゝにていつぱい氣をつけんと、ちやゝへはいりながら　彌二「きた八見さつし。美しいた※へもんだ　きた八「ハヽアいかさま。いゝ娘だ。時になにがある　トきた八そこらを見廻し、さかなをさしづして、さけをいゝつける、むすめ前だれで手をふき〲、しをやきのあぢをあたゝめ、てうし盃をもち出　娘「これはおまちどふさまでございやした　彌二「おめへの焼た鯵なら味かろふ　トむすめフヽンとわらひながら、おちてのほうをむいてよびながらゆく　むすめ「お休なさいやアせ。奥がひろふございやす　北八「おくがひろいはづだ。安房上總までつゞいている　彌二「北八見さつし。此さかなはちと。※ござつた目もとだ　ト打かへし見て彌二郎兵へ

ござつたと見ゆる目もとのおさかなはさてはむすめが※やきくさつたか

きた八是をきゝて。おなじくこじつける

味そふに見ゆるむすめに油斷すなきやつが焼たるあぢのわるさに

彼是と興じて。爰を立出。いろ〲※道草を喰ふ。驛路の氣さんじは。高聲にはなしものして。たどり行ほどに。この宿はづれより。十二三才斗の※いせ參跡になり先になりて　イセ參「だんなさま。壹文くれさい

○ぼうばな　宿外れのこと。宿境に榜示杭あり、そこを「ぼうはな」と云ふ。

○たへもん　「いつちくたつちくたへもんどんの乙姫樣が、茶がまにおされてなく聲きけば」云々といふ童謠あり、「たへもんどんの乙姫樣」の略にて、美しい女を云へるか。

○ござつた　腐つたといふ意味。

○焼きくさつたか　「やきて」といふ言葉、古く遊女の評判記などにあり、燒くとはだますこと。「やきくさつたか」の「くさる」は腐敗の意味にあらず、「燒きやアがつたか」の意なるべし。

○道草を喰ふ　途中ぶら〲して手間取ること。牛馬などの場合より云ふ。

○伊勢參り　ぬけ參り。無斷にて伊勢參宮すること當時の流行なり。

馬二「やろふとも、手めへどこだ　イセ參「わしらア奥州　北八「おうしうはどこだ　イセ參「かさに書てあり申す
馬二「奥州信夫郡幡山村長松ム、はた山か。おいらも手めへたちの方に居たもんだ。はた山の與次郎兵へ
どのは達者でいるか　イセ參「與次郎兵へといふ人さアしり申さない。與太郎どんなら。わしらがとなり
さアにあり申す　馬二「ヲ、その與太郎よ。其又うちにのん太郎といふ。年寄のぢいさまがあるはづだ
イセ參「ぢゞいはあり申す　馬二「そして與太郎どの、かみさまは。たしか女だつけ　イセ參「※おかつさまアお
んなでござり申す。よくしつてゐめさる　馬二「今じやアなんといふかしらねへが。おいらがいた時分は。
名主どのは。※熊野傳三郎といつてな。そのかみさまが。内にかつておいた馬と色事をして。にげたつけ
がどふしたしらん　イセ參「それよさア。よくしつていめさる。庄やどんのおかつさまア。内の馬右衛門
といふ男とつつぱしり申た　北八「イヤ妙〳〵　馬二「コリヤ小僧よ。なぜあとへさがる。くたびれたか
イセ參「わしはひだるくてなり申さない　馬二「もちでもかつてやろふ。こい〳〵　ト五文もち五ッ六ッかつてやりながらいよ〳〵※づにのり
馬二「なんと小ぞう。よくしつているだろふ　イセ參「アイ〳〵　トもちをしてやる、この内つれのいせまいり、これも十四五の※まへがみ、あとからよびかける「ヲ、イ
〳〵長松ヤイ〳〵　やつこのいせ參「きさいの〳〵　ツレ「ぬしやアもちよヲ。おれにもくれさい　イセ參「さきへゆ
く人にかつてもらへ。あんでもあの衆が。國さアのはなしをするを。ヲイ〳〵といつていると。じきに
かつてくんさるはちやア　ツレノイセ「ヲイうらもかつてもらうべい　トかけだして馬二郎に追付　馬「わしにももちよヲかつてく
れさい　馬二「てめへはどこだ。　トかさのかきつけを見て　ハ、ア是も奥州。下坂井むら。コレ手めへの村に。與茂作と
いふ親仁があらふ。　イセ參「先もちよヲかつてくれさい。そふせないけりやア。こんたのいふとがあたり
申さない　馬二「おきやアがれハ、、、ハ、、、　北八「こいつは※かつがれた。ハ、、、　ト打わらひてゆく

○おかつさま　女房の意。「まかたさま」より訛れるか。
○熊野傳三郎　熊の膽賣の商人。「江戸名物鹿子」に在り。
○づにのり　調子にのる。
○まへがみ　元服以前の若衆のこと。
○かつがれた　だまされた。

ほどに。はや程ケ谷の驛につく。兩側より。旅雀の餌鳥に出しておく※留おんなの顔は。さながら面をかぶりたるごとく。眞白にぬりたて。いづれも井の字がすりの紺の前垂を〆たるは。扨こそいにしへ。爰は※帷子の宿と。いゝたる所となん聞へし　たび人をのせたる馬士なまけたるこへにて「※ふじの人穴馬でもはいるなぜにお方にや穴がないドウ〳〵　とめ女「馬士どんおとまりかな　馬士「イヤだんなはむさしやだが。おまへのかほを見たら。ソレこのちくちやうめがとまりたがらア。ソレ〳〵　馬「ヒ、ヒン〳〵　ト行過ると又あとより旅人二三人　とめ女「もしおとまりかへ　ト引とらへて引ぱる　旅人「コレ手がもげらア　とめ女「手はもげてもよふございます。おとまりなさいませ　たび人「ばかアいへ。手がなくちやアおまんまがくはれねへ　とめ女「おめしのあがられねへほうが。おとめ申ちやア猶かつてさ　たび人「エ、いめへましい。はなさぬか　と　やう〳〵にふり切て行と又あとからくるは旅僧　とめ女「おとまりかへ　旅僧この女のかほを見て「イヤもちつとさきへまいろふ　トこのあとよりくるは田舍同者　とめ女「おとまりなさいませ　田舍「※はたごさア安かアとまりますべい　とめ女「おはたごは貳百ヅ、　田舍「イヤ〳〵そふは出し申さない。※そんだい湯はぬるくてもよくござる。平はついぞ。かへてくつたこたアござらないが。めしと汁は。たつた六七はいヅ、も喰やアそれでよくござるは。そんだいにやアあしたの晝食は。この※柳ごりにいつぱいつめてもらへば。もふほかになんにも入申さない。はたごは百十六文ヅ、も出し申さふ　とめ女「そんなら。外へおとまりなさいませさ　田舍「ハアとめざアいきますべい　ト過行る　彌次郎兵へきた八この体を見て。始終興に入。彌次又こぢつけるうた

おとまりはよい程谷ととめ女戸塚前てははなさざりけり

と打わらひ過行ほどに。品野坂といふところにいたる。是なん武州相州の境なりときけば

○留おんな　宿引に出て旅人を留める女。

○帷子の宿　海邊にありて裏無きところなれば斯く云へりといふ。「關東下向記」「癸未紀行」その他種々のものに在り。

○ふじの人穴　神奈川驛の南芝生村に淺間神社ありて、人穴と稱するものあり。これより富士の穴まで拔けると稱す。

○はたご　諸說あれども結局、昔食物を入れたる箱といふことに歸著するが如し。

○そんだい　その代り。

○柳行李　杞柳を編みて拵へたる辨當箱。

○飯盛　享保の令によれば東海道にて飯賣といひ、水戸道中は洗濯女といふ。純然たる私娼にあらず、準公娼と認むべきもの。

○承知之助　承知といふことに「之助」を加へしまでにて、團助、半助などに同じ。

○たぼ　女のこと。髱。

○お泊り　大名の宿泊。

○なむ三　南無三寶の略。

○まごつく　惑っていろ〳〵歩くこと。まご〳〵するなどとも いふ。

玉くしげふたつにわかる國境所かはればしなの坂より

すでにはや。日も西の山のはにちかづきければ。戸塚の驛になんとまるべしと。いそぎ行道すがら　彌二「コレきたや。またつせへ。はなしがあらア。なんでも道中は飯盛をすゝめてうるせへから。こゝにひとつはかりごとがある。おいらは親仁なりぬしやア廿代といふもんだから。親子といつても。いゝくらいだによつて。是から泊〳〵では。なんと。おや子のぶんに。しよふじやアねへか　きた「ヲヽこれは妙だ。なるほどそれじやア。すゝめねへでいゝ。そんならおとつさんといふのか　彌二「そふさ。貴様は諸事を息子きどりだが。※承知之助か　きた「よし〳〵。そふいつて又。いゝたぼでもあつたら。此むすこをだしぬくめへよ　彌二「エヽばかアいわつし。ヲヤもふ

戸塚だ。笹屋にしよふか　北「とつさんや　彌二「なんだ　北「こゝじやアねつから。お泊なせへといつて。ひつぱらねへの　彌二「ほんにそのはづだ。爰はどなたか※おとまりと見へて。みな宿屋に札がはつてある　きた「コウむかふの内がいきだぜ　彌二「コレおねさん。とめてくれる氣はなしか　はたごや女「イエ今晩はおとまりで。あいやどはなりませぬ　彌二「※なむさんそふだろふ　トだん〳〵やどをさがせども、みなふさがりとめぬゆへ大きにこまり、※まご

○大きんたま　戸塚に大睾丸の乞食あり。諸書に出でたるを見るに、何代も繼續してありしものの如し。

○新宅　分家。

○ふみけへしの馬蹄石　いさゞ不整形にて凹凸なるを、その上にも踩躪して形容を變じたるにいふ。

○すゞりぶた　長方形の平たき盆の如きもの。酒の肴をのせて出す。

つきあるき

とめざるは宿を疝氣としられたり大きんたまの名ある戸塚に

それより宿はづれにいたるに。漸くはたごやの合宿なきていにみゆるあれば。やがてこゝにたよりて

彌二「なんとわしらをとめてくんなせへ　てい主「おふたりかへおとまりなされませ。當宿はやどやはみなふさがりましたが。私かたばかりあたりませぬ　彌二「こんなきれいな内を。なぜあてねへの　てい主「わたくし方は。新宅でござります。ソレおなべ。お湯はどふだ　ト此内女たちゐに湯をくんで來り、やなぎごりふろしきづゝみをざしきへはこぶ　北「コウ彌次さん。じやアねへとつさん。おめへわらぢも。いつしよにしておかふ　彌二「ヲ、そして。おれが脚半も。ざつといすいでおきや　北「ナニ脚半をいすげか　トかほを見ると、彌二郎兵へ目つきでしらせるゆへ、口こゞとをいひながら、きやはんをあらひしまい　北「あねさん。ちやをひとつヅ、くんな　トざしきへさをる女ぼんにちやをふたつもつてきたり　女「すぐにおゆにおめしなさいやせ　彌二「コウあの女のつらアみたか。眞中がへこんで。なんのとはねへ。ふみけへしの馬蹄石といふもんだ　北「そりやそふと。彌次さん　彌二「ソレ女がきたは　北「ヲツトとつさん。湯へはいらねへか　ト此内女さかづきをもつてくる　彌二「ヲヤさけか。ゐどものと見るとどこでもこふするにはあやまる　北「ナゼ。酒を出しやア。別に錢をとるか

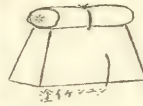
彌二「しれたことよ　トいゝながら手ぬぐひを取、湯へは入ル、女すゞりぶたにてうしをもちいで　女「おひとつめしあがりませ　北「是は御ちそうだコウおいらが親父に。はやくあがらつせへといつてくんな。　女「ハイさやう申ませふ　ト立て行、此内彌二郎兵へ湯よりあがりて

彌二「ハ、アなんだコリヤアのめるは。コレ手めへ。はやく湯に入つてきや　北「イヤのんでからいろふ

彌二「エ、てめへも。いぢのきたねへもんだ。這つてきやな　此内きたも湯へはいる　てい主出て「是は何もござりませぬがひとつめしあがりませ　彌二「イヤ御亭主さん。是ではめいわくだ　てい「イエ時にかよふでござります。

○様子は殘らずあれにて聞いた　「伊賀越道中雙六」沼津の段の聲色。
○白板　「近世風俗志」に「京坂には蒸したる儘を白板と云ふ、板の焦げざる故なり」とあり。
○鮫じやアあんめへ　鮫の蒲鉾は上等ならねばと云ふ。
○玉味噌　麹と味噌とを搗ちて丸めたるを繩につけ、爐の上に下げて燻れるを待つ。之を玉味噌といふ。
○なる口　飲める口。
○あひ　間をするといふ。間の手の意。
○思ひざし　盃を目差せる人に薦むること。
○しなだれ　しなへる、しな

わたくしかたは今まで。外商賣をいたしておりましたが。こんどはたごやになりまして。すなはち今日がみせ開でござります。あなた方ははじめてのおきやくゆへ。それで祝つて。ひとつさし上ますのでござりますから。別に御酒代を。いたゞくのではござりませぬ。おこゝろおきなく。めしあがつて下さりませ　彌二「イヤそれは先おめでたい。しかし御ちそうになつては。ちかごろきのどくだ　てい「ナニサ御遠慮なふ。今におすいものもできます　彌二「イヤもふおかまひなさるな　てい「ハイ御ゆるりと　トいゝすてゝたつて行、きた八ふろより出て　北「※よふすは殘らず。あれにてきいた。おや方たゞとはありがてへ　彌二「コレしやれずと。湯もふいつぺん湯へ這入つてきや。そのうちにみなおれがのんでしまはア　北「そふだろふとおもつて。湯へはいつていても。あらうそらアねへ。ヲヤ足はまだつちだらけだ。まゝよサアはじめねへ　彌二「もふとつくに初ていらア。ドレもふひとつ。初直してからさそふ　北「イヤおいらはこれだ　トちやわんについでいきなしにぐつ〳〵とやらかし　北「アヽいゝさけだ。時にさかなは。ハヽアかまぼこも※白板だ。※さめじやアあんめへ。漬せうがにくるまふだ。やほじやアねへ。コウとつさん。このしそのみがいつちうめへ。おめへは是ばつかりくひなせへ　彌二「ばかアいへ。そりやアあとへのこるにきまつたもんだ。時にもふ。吸ものが出そふなものだ　北「まちなよ　トふすまのあいだからかつての方をのぞき　北「でる〳〵。今よそつていらア。ヲヤなむさん。神さまへあげるのだ。イヤアくるぞ〳〵　トひざをなをしているとやがておんなすいものをもつていで　女「おてうしをかへませふ　トもつてゆく、ふたりながらすぐにすいものゝふたをとつて　北「ヲヤ赤みそたアしやれるは。よもや※玉みそじやアあんめへ。時にてうしはどふだ　彌二「せわしねへ。たつた今もつていつたは　北「もふきそふなものだ　ト此内女がてうしをもつてくると、ふたりながら※なるくちゆへ、※あいのおさへのとのみかけ、だん〳〵さけがまはつて、おやこのあいさつも、なんだかむちやくちやとなる　北「コウあねさん。ちつとあいをしてくんな　女「わたくしはいつかうたべませぬ　北「はてさコレそふいは

しなするの意。もたれかゝるやうな擧動を云ふ。
○やまの神　「いろは」より出でたる言葉。「おく」は「やまけ」の上にある故、女房を「やまのかみ」といふ洒落なり。
○千手觀音　蝨の異名。
○おはちの廻らざる　椀飯振舞の際、おはちだけ廻すことあり、こゝは飯盛の縁語なるべし。
○鳥目　鵝眼鳥目より來る。錢のこと。
○二すじ　二百。
○箱枕
○助郷　街道の宿に人馬を當てられたる場合、その近鄰の村に對し、高百石に付馬二匹、人夫二人宛割付ける、之を助郷馬と云ふ。定助郷と加助郷とあり。後者は臨時の賦課なり。
○てやい　擊劒などに云ふ手合せと同じ語原。同輩、仲間等の意。

ずと。そしてこんやおめへと。ちよつとナ。是がかための盃だ。ノウとつさん　彌二「せがれめは。もふよつたそふな　北「ナニよつたもきがつるゝ。アノ親父のつらはよハ、、、、、　トまきじたにてしやれる、女はきもをつぶしながら、うけたさかづきをほして、彌二郎兵へかたへさゝ　北「エ、おやぢのちくしやうめ。思ひざしにあづかつたな。コウ女中。のちにたのみます　トしなだれかゝる、女はあきれてそう／＼ににげだして行　彌二「コウきさまアわりいおとこだ。女の前で。あんなとをいふなへ　北「ナゼいつちやアわりいか。わるかアいふめへ。おらアアノたへもんめが。おかしな目つきをするので。ちふおやこのゑんがきりたくなつた　ト此内に膳も出て、いろ／＼あれども、あまりとながければこゝに略す、なま中おやこのあいさつにて、はたごやの女まことゝおもひ、何をいつても　とりあげねば。今更ひとりねの枕さみしく打ふしけるが。夜もふけゆくまゝに。勝手もしづまり。やまの神の小言いふ聲のみきこへて。此ふたり寐もやらず。着たる夜着のあかつきかけて。千手觀音の利生あらたに。かゆき所へふすまもる。風の手のとゞくもうるさく。ほろ醉の酒もさめて。今おもひ廻らせば。ひとりねにおはちのまはらざるも。めしもりの杓子あたりわるきゆへにや。仮の親子の遠慮ありしは。かへつて鳥目の徳つきたりとおかしくて

一筋に親子とおもふおんなより只二すじの錢まうけせり

斯口づさみて。打わらひつゝ、かたむけし。箱まくらも耳の根に。いたくもひゞく夜明の鐘。はやおもてには助郷馬の嘶く聲「ヒイン／＼／＼　馬の屁ブウ／＼／＼。長もち、にんそくのうた　人「竹にさあ引すゞめはアなアんあへ。ヲイ／＼。どうする／＼　此内、彌次も北八もおき出れば、やがて膳も出、こゝにもいろ／＼あれども、あまりくだ／＼しければはりやくす、それよりふたりはそこ／＼にしたくして、こゝを立出るに、向ふよりつゞいてくるお大名の長持、引もきらず　人足「はこねさア引。八里ィはアなあんあへアッ／＼どうだか／＼　北「彌次さん見ねへ。おもそふなものをよくかつぐぜ。アノ尻をふるざまア　彌二「あのてやいが尻をふりまはすを見たら。チトふさいで來た　北「なぜ／＼

○ちよんがれ　ちよんがれに節あり、寛政五年寛政十二年市村座春狂言に、菊五郎ちよんがれ坊主にて、しやくぜうちふりて、きみやうてふらい、どらが如來紋づくし、ヤレ〳〵聞なへ、私しが出みせの油に火が入、火事よさ結綿、重ね扇、あをぎ付たが、うづまく焼は、四ツ目に立こへ、火い子の花菱、ちらし菊水、水も車で、井桁にあり花、掛ても觀世、なをも鷹の羽、矢はづにふきあげ、風の銀杏蝶、丸は矢車、木瓜龜甲、仕方は梨子の切口、三つ銀杏蝶、丸は轡に、鶴の丸焼、みじめを三ツ星、三升鱗の、すあまを三ツ蔦、藤に下り〳〵、御縁は角桐、運の尸星、蛇の目傘、一本持ゝずに、さふ〳〵桔梗は、和尚梅罪、ござふしてかふも、當る紋だホヤイ」

○しまつ　始末のいゝの略。儉約。

○田町の反魂丹　芝田町さかい屋にて賣る。

○さつてやのしらみ紐　小傳馬町幸手屋茂兵衛にて賣る。蝨紐は布の紐に藥を塗りあるもの、之を締めて蝨よけさす。

彌「死んだ女房がことをおもひだして　北「おきやアがれハ、、、、、　ト此内むかふより、ちよんがれぼうず、やぶれたあふぎにて手をたゝきながら　坊主「ヒヤア御はんじやうの旦那方。壹文やつて下しやいませ　彌「つくな〳〵　坊「とこ〳〵〳〵よいとこな　北「コレつくなといふに。錢はねへは　坊「ナニないことがござりやしよ。道中なさるおかたには。なくて叶はぬぜにと金。まだら杖笠鑵桐油。なんぼしまつな旦那でも。足一本ではあるかれぬ。その上田町の反魂丹。コリヤさつてやのしらみ紐。ゑつちうふどしのかけがへも。なくてはならぬそのかはり。古いやつは手ぬぐひに。おつかひなさるが御徳用　彌「エ、やかましい。ソレやろう　ト※はやみちより壹文ほふりだす　坊「コリヤ四文錢とはありがたい　彌「ヤ四文ぜにか。なむさんぼう。三文つりをよこせ　坊「ハ、、、、　彌「いめへましい　ト此内はやふじ澤につきければまづぼうはなのあやしげなるちやみせにやすみ　北「ばあさん。團子はつめてへかチトあつためてくんな　ちや屋のばゝア「ドレやきなをしてしんぜますべい　トけしずみの火をかきさがし、灰のたつをもかまはず、あふぎたてる、此うちふたりはほこりをはたき〳〵、たばこのみいるこ、六十ぐらいのかつはをきて、ふろしきしよつたるおやぢ、このみせさきにたちどまりて　親仁「モシちつとものを問ますべい。江の島へはどふいきます　彌「おめへゑのしまへいきなさるか。そんならこいよチまつすぐにいつての。遊行さまのお寺のまへに橋があるから　北「ほんに橋といやア。たしか其はしの向ふだつけ。いきな女房のある。茶屋があつたつけ　彌「ソレ〳〵去年おらが山へいつた時とまつた内だ。アノかゝアは江戸ものよ　北「どふりで氣がきいていらア　親仁「モシ〳〵。其はしからどふいきます　彌「そのはしの向ふに鳥居があるから。そこをまつすぐに　北「まがると田甫へおつこちやすよ　彌「エ、手めへだまつていろへ。ソノみちをずつと行と。村はづれに。茶やが貳軒あるところがある。　北「ほんにそれよ。よくくさつたものをくはせるちや屋だ　彌「ソリヤア手めへのいふのは右側だろふ。左側の内はいゝはな。去年おらがいつた時ぴち〳〵する鯛

○越中褌　諸說あれど由來明かならず。延寶八年「福原ひんかゝみ」に「ふんどしや越中前可負相撲　作者不知」とあり。古くは單に「越中」とのみ云ひしが如し。
○早道　錢入れなり、守貞漫稿に插圖して解說せり。
○なみ錢　四文錢。裏に波あり。
○山　相州大山のこと。
○大平　大きな平。
○へた茄子　人に附けし渾名なるべし。

の焼もの。それに大平が海老のはね出るやつに。玉子とくはゐと大椎茸に。そして　親仁「モシ／＼わしはそんなものはくはずとよふござる。そこから又どふいきます　彌「そこをずつといきあたると。石の地藏さまがありやす　北「アノ地藏さまは瘡の願がきくそふだ。おらが方のへたなす※があれでなをつた　彌「ほんに瘡といやア。新道の金箔やのたぬ吉めは。草津へいつたつけが。どふしたしらん　北「あれは大福町に所帶をもつていらア　彌「大ふく町といふはどこだ　北「大ふく町はおいらが通ひをまつすぐに。當座町へ出て。判取町から店賃町を通つて。地代屋敷の算盤ばしをわたると。そこが大ふくてうだ　親仁「そんなとよりやア江の嶋へゆく道をおしへてくんさい　彌「ほんにそふだつけ。其地藏さまから。大ふく町をまつすぐにいくとの　親仁「ゐのしまへいゝくにも。そんな町がござるか　彌「イヤ／＼こりやア江戸の町だつけ　親仁「ヱ、この衆は。おゐどの事は聞申さない。らつちもない衆だドレさきへいつて聞ますべい　トぶつ／＼こゞとをいひながら行過る　北「ハ、、、、、、　ト此内あるじのばゞ、だんごを四五くし、ぼんにのせてもつて出る　彌「こいつは黒いだんごだ　トいひながら一トくし取あげてみれば、けしずみの火が、だんごにくつついているゆへわざと火のついているをかくして、きた八のほうへさしいだして　彌「コレ手めへ。こげたやつがよかろふ　北「ドレ／＼　ト口もとへあてがひ　ア、ツ、、、、、ばあさん。アツ、、、とんだめに

○そんだんで　それだので。それ故に。
○棒組　駕籠を昇ぐ棒の仲間。相棒のこと。
○旦那はかたいぜ　乗様の無器用なるを云ふ。

あはせたコレ團子に火がくつついて。ア、ぴり／＼する　彌「ハ、、、、手めへあつたかなのがよかろふとおもつて。火のついていたのをやつたは　北「エ、いめへましいペツ／＼　彌「サアいかふ婆さんおせわ。トちや代をおきこゝをいでゝふじ澤のしゆくへはいると、雨がはの茶や、口をそろへて　ちやや女「お休みなさいやアし。酔ないさけもござりやアす。ばり／＼する强飯をあがりやアし　馬かた「だんな生た馬はどふだ。やすくやりませう。馬は達者だ。はねるとはうけ合だ　かごかき「かごよしかの。だんな戻駕だ。やすくいきましやう　彌「かごはいくらだ　かご「二百五十　彌「たかい／＼。百五十ならおれがかついでいかア　かご「百五十にまけますべい　彌「まけるかドレ／＼此草鞋を其所へつけて下せへ　かご「おめへ乗るのかへ。百五十でかつぐといわしやつたじやアないか。※そんだんで片棒わしがかついで。百五十とるのだ　彌「ハ、、、こいつはいゝ。エイハそんなら二百か。かご「やすいがいきますべい。ナア※棒組。サアめしませ　トかごのねができ、彌二郎兵へ、こゝよりかごにのつて出かける　さきぼう「ほうバヽみや。旦那はかたいぜ　あとぼう「しつかり。かまへていさしやるもんだんで　ト此内、茶やのてい主かごかきのなをよびながら　てい主「ヲ、イ／＼梅澤の佐渡やへ。ちよつくりそふいつてくんさい。此中の新酒は。あんまり水の交よふがすくない。今度から酒をちつと。交てよこしてくんさいと。いつてくんさいヨ。ソレ何かおちたア　かご「アイ／＼　トかつぎいだす　彌「コウ貴様たちやア藤澤か。アノ宿も大分きれいになつたの。問屋の太郎左衛門どのは達者かの　さきぼう「よくだんなはしつてござる隨分たつしやでるられます　彌「孫七どのは。まだ勤ているかの　さき「アイサアだんなはなんでもあかるいもんだ　あとぼう「べらぼうめ。しつてるやしやるはづだ。駕の内で。道中記を見ていさしやるはハ、、、、　ト此内はやくも馬人のわたしにつく北八こゝは何といふ川と人にとひしに只わたしばとこたへけるを彌二郎きゝて

川の名を問へばわたしとばかりにて入が馬入の人のあいさつ

此川は。甲斐の猿はしより流れおつるよし。やがてむかふにわたりたどり行程に。此に白旗村といへるは。そのむかし。義經の首こゝに飛來りたるをいはひこめて。白はたの宮といへる。今にありと聞て彌次郎兵へ

首ばかりとんだはなしの殘りけりほんのことかはしらはたの宮

それより大磯にいたり。虎が石を見て北八よむ

此さとの虎は藪にも剛のものおもしの石となりし貞節

彌次郎兵へとりあへず

去ながら石になるとは無分別ひとつ蓮のうへにや乘られぬ

斯打興じて大磯のまちを打過。鴫立澤にいたり。文覺上人が刀作ときこえし。西行の像にむかひて

われ／＼も天窓を破りて哥よまん刀づくりなる御影おがみて

春の日の長欠びに。頤の掛金もはづるゝ斗り。目をすりながら 北「ア、退屈した。ナント彌次さん。道々謎を懸よふ。おめへ解か 彌「よかろふ。かけやれ 北「外は白壁中はどん／＼ナアニ 彌「べら坊め。そんな古いことよりおれがかけよふか。コレ手めへとおれと。つれだつて行とかけて。サアなんととく 北「ソリヤアしれたこと。伊勢へ參るととく 彌「馬鹿め。これを馬一疋ととく 北「なぜ 彌「どう／＼だから 北「ハヽヽヽ、そんならおいらふたりが國所ナアニ 彌「神田の八丁ぼり。家主與次郎兵へ店ととくか 北「エ、おぶしやれなんな。これを家が一疋犬子が拾疋ととく。 彌「そのこゝろは 北「ぶた二ながらきやん十もの 彌「お

○入が馬入　舍利禮文の「入我我入」に云ひかけたり。この狂歌川の名を問へるに對し「わたし」とのみ答へしを「私」の意味にもぢりたるなり。

○白旗の宮　白旗明神は馬入川の手前に在り。こゝにありといふは誤。

○虎が石　虎子石と稱す。虎子は海鼠のことなれば、形狀より來りし名なるべし。之を大磯の虎に附會して、石になりたるなど云ふ。

○藪にも剛の者　「藪にも香の物」といふ諺あり。轉じて野夫にも功(剛)の者と云ふ。「おもしの石」は香の物を利かせたる洒落なり。

○天窓を割りて　苦心する意。こゝにては「割りて」を鉈作に利かせたり。

○ぶた二ながらきやん十もの　二人ながら關東者。

○〆てよふたり「醉うたり」に「四人」を云ひかけしなり。

きやアがれ。コレ今度はむつかしいやつをいはふ。そのかはり。手めへ解ねへと酒を買せるがいゝか　北「といたらおめへ買うか　彌「しれた事よ　北「こいつアおもくろい　彌「ちつとながいぜ。マアこふだ。おいらふたりが國所とかけて。是を豕が二ひき。犬ころが拾疋ととく。その心は。ぶた二ながらきやんとをもの。サアこれなあに　北「ハ、、、、そんな謎があるものか　彌「べらぼうめ。ありやアこそかけるは。といて見ろへ　北「どふしてそれがしれるものだ　彌「しれざアいつてきかせよふ。是を色男が自分の帶をとつて。女にも帶をとらせるととく　北「ごうぎにむつかしい。その心は　彌「ハテといたうへで又とかせるから。なんと奇妙か。サアく酒をかへく　北「まちなよ。意趣げへしをやらかそふ。おれがのもちつくりながい。マアかいつまんだ所がこふだ。おいらふたりが國ところとかけて。是を豕が二疋。犬ころが拾疋ととく。其心は。ぶた二ながらきやんとうちの。これを又。色男がじぶんの帶をとつて。女にも帶をとらせるととく。又其心は。といたうへでとかせるから。サア是ナアニ　彌「ハ、、、、、とほうもねへ。長いなぞだぞ。　北「どふだ彌次さん。しれめへがの。これを衣桁のふんどしとときやす　彌「そのこゝろはどふだ　北「といてはかけく　二人「ハ、、、、、、、

打わらひつゝあゆむともなく、いつの間にか倉我の中むら小八わた八まんの宮を打過、さかわ川にさしかゝりければ

われくはふたり川越ふたりにて酒匂のかはに〆てよふたり

此川をこへゆけば小田原のやご引はやくも道に待うけて

やご引「あなたがたは。お泊でござりますか　彌「きさまおだはらか。おいらア小清水か白子屋に。とまるつもりだ　宿引「今晩は兩家とも。おとまりがござりますから。どふぞ私方へお泊下さりませ　彌二「きさまの所はきれいか　宿「さやうでござります。此間建直しました新宅でござります　彌二「ざしきは幾間ある　宿「ハイ十疊と八疊と。みせが六でうでござります　彌二「すいふろはいくつある

宿「お上と下と二ツづゝ。四ツござります　彌二「女はいくたりある　宿「二人ござります　彌二「きりやうは　宿「ずいぶんうつくしうござります　彌二「きさま御亭主か　宿「さやうでござります　彌二「かみさまはありやすか　宿「ござります　彌二「宗旨はなんだの　宿「浄土宗　彌二「寺は近所か　宿「イヱ遠方でござります　彌二「葬禮はなん時だ　北「コウ彌次さん。おめへもとんだことをいふもんだ　彌二「ハヽヽヽ、ツイ口がすべつたハヽヽヽ　トだん〳〵打つれて、ほどなく小田原のしゆくへはいると、両がはのとめおんな　女「おとまりなさいませ〳〵　トよびたつるこへかしましく、彌次郎しばらくかんがへ

梅漬の名物とてやとめおんなくちをすくして旅人をよぶ

此しゆくのめいぶつうい※ろうみせちかくなりて　北「チヤこゝの内は。屋根にでへぶでくまひくまのある内だ　彌二「これが名物のういろうだ　北「ひとつ買て見よふ。味へかの　彌二「うめへだんか。頤がおちらア　北「チヤ餅かとおもつたら。くすりみせだな　彌二「ハヽヽヽ、こうもあろふか

ういろうを餅かとうまくだまされてこは藥じやと苦いかほする

やがてやどやへつきければ、ていしゆさきへかけだして、はいりながら「サアおとまりだよ。おさん〳〵。お湯をとつてあげろ　宿の女ぼう「おはやうございます　ト茶をふたつくんでもつてくる、此内下女たらゐに、ゆをいれてもつてくると、彌二郎女のかほをよこめに、ちらと見て、小ごゑに北をよびかけ　彌二「見さつし。まんざらでもねへの　北「あいつ今宵ぶつてしめよふ　彌二「ふてへとをぬかせ。おれがしめるは　北「ソレおめへ。わらぢもとかずに足を洗ふか　彌二「チヤほんにハヽヽヽ　北「エヽでへなしに。湯をまつくろにした　トこゝをいゝながら、あしをあらひ、すぐにざしきへとふると、女御ごり※さんどがさをもちきたり、とこの間におく　北「コレ〳〵女中。たばこぼんに火をいれてきてくんな　彌二「チヤてめへもとんだことをいふもんだ　北「なぜ〳〵　彌二「たばこぼんへ火をいれたらこげてしまはア。たばこ盆の中にある。火入のうちへ。火をいれてこいといふもんだ　北「エヽおめへも。詞咎をする

○ういろう　外郎は丸薬の透頂香のこと。別に菓子の「うゐらう」あり。こゝはその間違を滑稽の趣向とす。

○さんどがさ　三度飛脚の被る笠より来る。三度飛脚とは月に三度づつ京都江戸間を往来する飛脚の稱。

○腹がきた山　腹の減つて來たといふを「北山時雨」にかけたる言葉か。「腹はきた山氣はザンザ」といふ唄あり。
○埒のあかねへ　賀茂の競馬の時、埒を結ひし人をせくより起りし言葉と云ふ。
○おもくろい　面白いを逆に云ひたるもの。
○おはんなみだの云々　富本、道行瀬川の仇浪の文句。「お半は涙のつゆちりほども、お前の無理じやあるまいけれどわしやいやイナ」
○い〻きぜん　氣前。前をぜンとよみしなり。
○一目さん　わき目も觸らずに走る。

もんだ。それじやア日の短い時にやア、たばこをのまずにゐにやアならねへ　彌二「ときに腹がきた山だ。今飯をたくよふすだ。埒のあかねへ　北「コレ彌次さん。おいらよりやアおめへ文盲ならんだ　彌二「なぜ　北「めしをたいたら、粥になつてしまうわな。米を焚といへばい〻に　彌二「ばかアぬかせハ、、、　ト此内女たばこぼんをもつてくる　北「モシあねさん。湯がわいたらへへりやせう　彌二「ソリヤ人のことをいふ。うぬがなんにもしらねへな。湯がわいたらあつくてはいられるものか。それも。水が湯にわいたら。へへりやしやうとぬかしおれ　此内、又やどのおんな「モシおゆがわきました。おめしなさいませ　彌二「チイ水がわいたかドレはいりやせう　トすぐに手ぬぐひをさげ、ふろは、ゆきて見るに、このはたごやのていしゆ、かみがたものとみへて、すいふろおけは、上がたにはやる五右衛門風呂といふふろなり、左にあらはす圖のごとく、土を以てかまをつきたて、そのうへ〻、もちやのござやきをやくごときの、うすぺらなるなべをかけて、それにすいふろおけをさけ、まはりを湯のもらぬよふに、しつくひをもつて、ぬりかためたる風呂なり、これゆへ湯をわかすにたきゞ多分にいらず、りかただいいちのすいふろなり、くさつ大津あたりより、みな此ふろ也、すべて此ふろには、ふたといふものなく、底板うへにうきているゆへ、ふたのかはりにもなりて、はやくゆのわくりかたなり、湯に入ときは、底を下へしづめてはいる、彌二郎このふろのかつてをしらねば、そこのういているを、ふたとこゝろへ、何ごゝろなくとつてのけ、ずつとかたあしをふんごんだところが、かまおじきにあるゆへ、大きにあしをやけどして、きもつぶし　彌二「アツ、、、こいつはとんだすいふろだ　トいろ〳〵かんがへ、これはどふしてはいるのだと、きくもはか〳〵しく、そこであらひながら、そこらを見れば、せつちんのそばに、下駄があるゆへ、こいつおもくろいと、かのげたをはきて、ゆのなかへはいり、あらつていると、北まちかねてゆどのをのぞきみれば、ゆふ〳〵とじやうるり　彌二「おはんなみだのつゆちりほども　北「エ、あきれらア。どうりで長湯だとおもつた。い〻かげんにあがらねへか　彌二「コレちよつと。おれが手をいぢつて見てくれろ　北「なぜに　彌二「もふゆだつたかしらん　北「い〻きぜんな　トざしきへはいる、此内彌次ゆからあがり、かのげたをかたかげへかくし、そしらぬかほにて　彌二「サアへへらねへか　北「ヲツトしめた　トそう〳〵はだかになり、いちもくさんに、すいふろへかたあしつつこみ　北「アツ、、、、彌次さん〳〵。たいへんだちよつときてくんな　彌二「そう〳〵しいなんだ　北「コレおめへこの風呂へは。どふしてはいつた　彌二「馬鹿め。すいふろへはいるに。別にはいりよふが有ものか。先そとで金玉をよくあらつて。そして足からさきへ。どんぶりこすつこつこ　北「エ、しやれなんな。かまがじきにあつ

○よめた　讀むことが出來た、わかつた。

てこれがはいられるものか　彌二「はいられりやアこそ。手めへの見たとふり。今までおれがはいつてゐた　北「おめへどふしてはいつた　彌二「ハテしつこいおとこだ水風呂へはいるのに。どふしてはいつたとはなんのことだ　北「ハテめんよふな　彌二「むつかしいこたアねへ。初めの内ちつとあつゐのを。しんぼうすると。後にはよくなる　北「ばかアいゝなせへ。しんぼうしてゐるうちにやア。足がまつくろにこげてしまはア　彌二「エヽ埒のあかねへ男だ　ト心の内はおかしさ、こたへられずざしきへかへる、北八いろ〳〵こかんがへ、そこらを見廻し、彌二郎がかくしておいたる下駄を見つけて、ハヽア※よめたさ、心にうなづき、すぐにそのげたをはいて、すいふろのうちへはいり　北「彌次さん〳〵　彌二「なんだ又呼か　北「なるほどおめへのいふとふり。人しめて見るとあつくはねへ。ア、いゝこゝろもちだ。あはれなるかな石どう丸は。ヅレレン〳〵　此内彌二郎あたりをみれは、かくしておいたる下駄がなきゆへ、さてはこいつみつけたなさ、おかしくおもつているうち、北八はさすがにしりがあつく、たつたりすわつたりいろ〳〵して、あまり下駄にてぐはた〳〵とふみちらし、つゐにかまのそこをふみぬき、べつたりこしりもちをつきければ、湯はみなながれてシウ〳〵〳〵　北「ヤアイたすけぶね〳〵　彌二「どふしたく〳〵ハヽヽヽヽヽ　やどのていしゆこのおとにおどろき、うら口かゆどのへまはりきもをつぶし　てい主「どふなさいました　北「イヤモウ命に別条はねへが。かまのそこがぬけてアイタヽヽヽ　てい主「コレハ又どふしてそこがぬけました　北「ツイ下駄で。ぐはた〳〵やつたから　トいふにていしゆはふしぎそふに北八があしをみれは、下たをはいているゆへ　てい「イヤアおまいは。とほうもないお人だ。すいふろへはいるといふ事があるものでござい

○南鐐一片　二朱銀。
○だまりん　だまりん坊などゝ云ふ。だんまりに同じ。
○ぶづくつて　取繕つて。
○じよさいのあるのじやアねへ　村田了阿云此所在は俗に間居無事なるゝ所在がないと云へる所在也といひて、如在と別てり、爾すことなきにあらずの意。
○げんなま　手形、證文の類に對し、なまの儘にて使へるものを云ふ。現金。
○おつとめ　御きまり。坊主が朝夕經を讀むなども、おつとめの一なり。
○きついもんか　えらいもんだ」などいふに同じ。洒落本に例多し。
○おへねへ　始末におへない。手に合はぬ意。

ますか。らつちもないこんだ　北「イヤわつちも。初手ははだしではいつて見たが。あんまりあついからさ　弥「イヤはやにがにがしいこんだ　ト大きにはらをたてる、北八もきのどくさ、こそ〳〵とからだをふいて、いろ〳〵いゝわけする、弥次郎きのどくにおもひければ、中へはいり、かまのなをしちん、なんりやう、一ぺんつかは、やう〳〵とわびごとして　水風呂の釜をぬきたる科へにやど屋の亭主尻をよこした

北「いめへましい　トおもひがけなく、弐朱ひとつぼうにふつて、大きにふさぎいる、此内膳も出、そこ〳〵にくつてしまい、やれ〳〵むだもいつかういはず、たゞぼうぜんとだまりんなり　弥「コレ手めへ。なにもふさぐこたアねへ。大きに徳をしたは　北「なにがとくだ　弥「かまをぬいて。弐朱ではやすい。よし町へいつてみや。そんなこつちやアねへ　北「エ、ぶしやれなんな。人の心もしらずに　弥「イヤそれでも。手めへがそんなにしていると。おらアきのどくな事がある　北「なにが　弥「さつきの女が後に忍んでくるはづに。ぶづくつておいたから。側で手めへが氣をわるくして。なをの事ふさぐだろふと。それがどふもきのどくだ　北「チヤほんにか。いつのまに約束した　弥「そんなとに。じよさいのあるのじやアねへ。さつき手めへが湯へはいつている時。げんなまでさきへおつとめを渡しておいたから。もふ手つけの口印までやらかしておいた。なんときついもんか。へ、、、、そふいつても色男はうるせへのハ、、、もふねよふか　ト手水にたつて行、此内女きたりとこをとる　北「コレあねさん。おめへおらが連の男に。なにか約束をしたじやアねへか　女「イ、エヲホ、、、、　北「イヤわらひごとじやアねへ。コリヤアないしやうのことだが。あの男はおへねへ瘡かきだから。うつらぬよふにしなせへ。おめへがしよつてはきのどくだから言つてきかすが。かならずさたなしだよ　ひそ〳〵ものでまことらしくいへは、女きもをつぶせしよふすに、北八心にのり　そして足は年中鳫瘡で。なんのことはねへ。乞食坊主の菅笠を見るよふに。所〴〵に油紙のふたがしてある。それに又アノ男の胡臭のくさゝ。その

くせひつつこい男で。かぢりづいたらはなしやアしねへ。めんよふアノかさつかきといふものは。口中のわるくさいもので。おいらもならんで飯をくうさへ。いやでならねへがしかたがねへ。おもいだしてもむしづがはしるペツ〳〵　ト此内はや彌二郎てうずより出てくるよふすに　女「もふおやすみなさいませ　トそう〳〵たつて行、彌二郎ざしきへはいり、すぐによぎをかぶつて　彌二「ドレふところを。暖あつためておいてやろう　北「いめへましい。こんやのよふにうまらねへことはねへ。やけどをして貮朱かねはふんだくられる。そのうへ〳〵アノうつくしいやつを。そばで抱てねられて。ちくるいめ。こたへられぬハ、、、、コレ北八〳〵もふてめへねるか〳〵もつとおきてるねへ　北八はいさいかまはず　北「ゴウ〳〵　彌二「もふきそふなもんだ　トひこりまし〳〵して、まてども〳〵おこもなし、なま中さきせにやつて、ほうにふるかこ氣がきではなく、こちへかねてむしやうに、手をたゝきたてると、やごやのかみさまきたり、女房「およびなさいましたか　彌二「イヤおめへではわかるめへ。さつきこゝの女中に。ちつと頼んでおいたことがあるから。どふぞちよつとよこしてくんねへ　女房「ハイあなた方のほうへ出ました女は。雇人でございますから。もふ宿へ歸ました　彌二「エ、ほんにか。そんならよし〳〵　女房「ハイお休なさいませ　トかつてへゆく　北「ハ、、、、ワハ、、、、、　彌二「べらぼうめ何がおかしい　北「ハ、、、イヤこれで地にした。もふ安堵してねよふか　彌二「かつ手にしやアがれ　ト哀なるかな彌次郎兵へ。北八が奸計とは露しらず。貮百戀しやうらめしのおじやれか無洒落かあたら夜を。是悲なくこゐとつつぷしければ。北八おかしく又一首

ごま鹽のそのからき目を見よとてやおこわにかけし女うらめし

彼是興じてふしたりけるに。はやくも聞ゆる遠寺のかねに。一睡の夢は覺て。夜明ければやがておき出。

○うけにくからう　のろけの受賃を取るが如き意味。

○ちくるいめ　畜生めに同じ。安永頃よりの通言。

○まじくじ　まじ〳〵すること。

○地にした　勝負なし。

○おじやれか無洒落か　おじやれは戯れふざける意味。無洒落は洒落にならぬこと。

○おこわにかけし　美人局の意。「おこはにかけた大衒め」(福内鬼外作、忠臣伊呂波實記)などあり。この狂歌の「うらめし」は飯に利かせたるもの。

○本堅地　東海の宿より箱根山にかけて用ゐしるか。

○とぼせばいゝ　「此頃青樓流行言葉に交合をとぼすといふ」（寛政六年、略山雑録）

そこ〳〵に支度して立出けるに。けふは名にあふ箱根八里。はやそろ〳〵と。つま上りの石高道をたどり行ほどに。風まつりちかくなりて彌次郎兵へ

人のあしにふめどたゝけど箱根やま本堅地なる石だかのみち

北「コレ〳〵明松を買はねへか。こゝの名物だ　彌「べらぼうめ。もふ日の出る時分。明松がナニいるものか　北「夜があけてもいゝはな。おめへかつてとぼせばいゝ。ゆふべのかわりに　彌「おきやアがれ

北「ハヽヽヽヽヽヽヽヽ　又こゝに湯本の宿といふは。両側の家作きらびやかにして。いづれの内にも美目よき女二三人ヅヽ。店さきに出て名物の挽もの細工をあきなふ。北八壹軒〳〵にのぞき見て　北「チヤ〳〵あらひ粉のかんばんを見るよふに顔と手さきばかり。しろひ女がゐるらア　彌「なんぞ買ふ　娘「おみやけおめしなさいませ。おはいりなさいやんせ　彌「コウあねさん。そこにあるものを見せなせへ　トいふにむすめは、又外のきやくに、あい手になつてあきなひしている、かつてよりはゞあ、はしりいで　はゞ「ハイ〳〵これでおんざりますか　彌「それじやアねへ。コウ姉さんそつちのをみせな　はゞ「ハイ〳〵これでおんざりますか　はゞあではふしやうおのがかほつきにて　彌「エヽそれでもねへ。コウあねさん。おめへの手にもつているはなんだ　娘「ハイ〳〵おたばこ入でおざりやんす　彌「コレ〳〵このとさ。時にいくらだ　娘「ハイ二百でおざりやんす　彌「百ばかりにしなせへ　娘「おまいさんもあんまりな。あなた方のおかげで。かやうにいたしておりますものをかけねはもふしやんせぬ　ト彌次郎をじろりとみる、たちまちのろくなりて　彌「そんなら二百よ　娘「もふちつとおめしなさつて下さいやせチホヽヽヽヽ　トおかしらおかしくわたいとをわらつて、彌次郎がかほをまたじろりとみる　彌「そんなら三百〳〵　娘「もふそつとでござりやんすチホヽヽヽヽ　彌「めんどうな四百〳〵　ト壹本ほうり出してかい取　北「ハサアいかふ　娘「よふお出なさいやんした　北「ハヽヽヽヽ三百のものを四百に買うとはあたらしい

く 彌「それでもおしくねへ。アノ娘はよつほどおれに。きがあつたとみえる 北「おきやアがれハ、、、、 彌「それでも初手から。おれが顔ばかり見ていたは 北「見ていたはづだ。アノ娘の目を見たか。※やぶにらめだハ、、、、（こゝにいがくりあたまの子共四五人ゐて）子共「權現さまへ御代參。壹文やつて下されチヤ 北「ナニ御代參とはなんだ 子共「此方こんたしゆのかはりに參るは 北「ナニおいらがかわりに。いづれを見ても山家そだち。身がはりにするつらがあるものか。※ろくなくびはひとつもない。イヤ時にアノ鉦はなんだ 彌「さいのかはらへきたぞ〳〵

辻堂はさすがにさいのかはら屋根されども鬼はみへぬ極樂

お茶漬のさいのかはらの辻堂ににしめたよふななりの坊さま

それより 御關所を打過て

春風の手形をあけて君が代の戸ざゝぬ關をこゆるめでたさ

斯祝して峠の宿に悅びの酒くみかはしぬ

○やぶにらめ　斜眼、邪視。

○ろくなくび云々　「菅原傳授手習鑑」寺子屋の段、源藏の言葉より來る。「ろく」は直。「太平國恩俚談」に「サア〳〵元の様にろくにござつて御咄なされ」などあるはお平にの意。ろくなのがないといふ、曲つたり歪んだりしたのばかりで、正しい、又よろしいのがないこと。

東海道中膝栗毛二編

膝栗毛後編序

予嘗旅の賦を作。其略に云、土橋を渡て又土橋を見る恰淺川にて友を訪が如く。並木を出て亦並木に入る殆淺草にて狐に魅が如し巻藁に鯱立なせる燒肴には。今井四郎が討死をおもひ、强飯に群鳥なせる蒼蠅には。伊勢平氏の敗軍を歎く。木賃泊の居風呂は鳧の脚短といへども膝をこゆる事なく。大井川の歩行渉は鶴の脛長といへども胸をひやす事しきり〳〵。雲助は裸虫の長として赤裸の境界に終。出女は万物の靈として万客の弄物に老。見るもの都意馬の頭を低聞事皆心猿の腸を斷。さるをうきものゝ發語ともしらで。天地の逆旅に居て獨たのしく。日月の過客にしたがひてそゞろうかれありくものは。十篇舍の主にして。これが爲に一双の膝栗毛を養ふ。一疋の口の糧屋は鬻に一册子を負て箱根にとゞまり。伯樂頤て本屋仲間ゝ初市に價を倍。今本馬卅六貫目中腹に擎才力を出して。一鞭たゞちに京城にいたる。かばかり迅速のうちに驛路の情態を記て。全篇の功を成此膝栗毛一日千里といふべし

享和癸亥春

芍藥亭主人　菅原長根題

道中膝栗毛後編凡例

○此膝栗毛後篇は。箱根驛より大井川に至て終る。羇中旅客の滑稽。逆旅傀儡の風色。其雅情を穿て著す事初篇に同じ

○驛々風土に隨て音律に清濁の差別あり。俚言方語の通稱に異なる事あり。笑ふべきに非ず。古代の詞は却て田舍に殘れりと。徂來翁の謂なり　たとへば駿遠兩國にて。行といふを行ずといふは行んずる也。酒を呑ず飯を食ずとは皆呑んず喰んずるなりと物類稱呼に見えたり

○恐しいといふ事を。相刕にてはおつかないといひ。駿刕にてはゑずいといひ。遠州にてはこはいといふ。同國にて九ツをけゝねつといひ。心なしといふをけゝれなしといふ事は古今集に「かいがねをさやにも見しかけゝれなくよこをりふせるさやの中山とあり

○おぞいといふけ。尾張にて物の惡敷事をいふ。駿河邊にては物事賢き事にいふ和字正鑑にからすてふ大おそどりの聲を「おほおそどりと濁音によませてあしき鳥の事といへり。おぞといふ是也。いは助字也

○相豆駿遠にてまずいといふは。味からずの下字をとりて。まずといふ。いは助字なり

○都て道中箱根より伊勢路までは。馬をおまといひ。又いまといふ日本記に馬をいまとよませり。仍て相通しておまともいふ

○なぜといふを。まぜといふは万葉にあぜそも今宵よしろさまさぬとあり

○うらといふは。我等の轉語おれらをちゞめておらといひ。おら又轉じてうらといふ

○驚くとを。相豆にてはたまげるといひ。駿遠にてはおびへるといふ。たまげるは源氏に魂消と有

○なでうあてうといふ詞は「紫日記」になでう女のまなふみとあり
○愚なるものを。駿遠にてひやうたくれといふ
○相豆に。とてつもないといふ詞は「性理大全」に塗轍と有なるべし。駿州にはとひやうもないといひ。遠州にはしやうくもないといふ
○にしといふは主なり。にとぬと通へばなり
○すはるゝをかうまるといふは。禪家に久しく座する事を行座といふ。行の字は久しき義なり。仍てかうまるといふ。まるは居の心にて。ねまるかしこまるのまゝなり
○此等の外勝るに暇あらず。只此卷中にあらはしたる詞のみを爰に解く。仍て排設の趣は。俚俗の訛言方語のまゝを記して。其おかしみを純にす
○逆旅木賃泊の慘慄なる体。六部順禮ぬけ參の患苦。雲駕馬士護摩の灰等の始末初篇にもれたるをこゝに記す。余は續編に讓ものならし

十返舍一九識

浮世道中膝栗毛後編

十返舎一九著

※長明が東海道記に曰。松に雅琴の調あり浪に鼓の音ありと。息杖の竹笛をふけば。助郷の馬太鼓をうつ。膝栗毛後編の序びらき。ヒヤリ〳〵。てれつく〳〵すつてん〳〵。狂言詞「加様に候ものは。お江戸の神田の八丁堀邊に住居せし。彌次郎兵衛きた八と申す。なまけものにて候扨もれ〳〵。伊勢へ七度熊野へ三度。愛宕さまへは月参の大願を起し。ぶらりしやらりと出かけ。ねつから急ず候ほどに。ゑいやつとはこねの驛に着て候　タヽ「玉くしげ箱根の山の九折〳〵げにや久かたの。醴賣やさんしよ魚の。名所多き山路かな　あまざけうりのおやぢ「めいぶつあがらしやいませ。おまざけのましやいませ。北八「彌次さん。ちつと休やせう。ヲイ一盃くんな。　トせう木にこしをかけるおやぢ一ぱいくんで出す　北八「こいつは黑い〳〵。彌次「※くろいよふであまひは。遠州はま松じやアないか　北八「わりい〳〵。コウおめへなぜのまねへ　彌二「おいらアいやだ。ソノちやわんを見や。施主の氣がきかねへよ。※あさがほなりにでもすればいゝに　北八「そふさ。是じやア强飯のかうのものも。奈良漬じやアあるめへの　おやぢ「かうのもんはござらねへがすめぼし（梅干）よヲ進ぜますべい　ト皿にある梅ぼしをいだす　北八「ヲイ〳〵いくらだへサアおせは　トぜにを掴ひ出て行向ふよりくる小荷駄馬ひきもきらずすゞのおと〳〵やん〳〵〳〵　まごのうた「ふじのあたまがつんもへる。なじよにけぶりがつんもへる。三島女郎衆に。※がらゝ

○長明が東海道記　長明は源光明の誤か。

○ヒヤリ〳〵てれつくてれつくすつてん〳〵　歌舞伎の忠臣藏大序の幕明につかふ鳴物、天王立。

○伊勢へ七度熊野へ三度　云々　俗。信心は多きを厭はずの意といふ。「茶屋のおかゝに未代そはゞ、伊勢へ七度熊野へ三度、愛宕様へは月まゐり」（かぶきのさうし）

○くろいよふで甘ひは遠州濱松　「遠州濱松廣い様で狹い横に車が二挺たゝぬ」の唄のもぢり。

○朝がほなり　茶碗の形。甘酒屋の茶碗は朝顔形なり。こゝは葬式の洒落なるべし。

○がらゝ　ツイの意。駿州邊の語。

○はつつけ　はりつけ。罵る言葉。

○あたじけねへ　吝ン坊の意。

○屋根屋が長局のふきかへに行きやアしめへし　「柳多留」五篇に「長局屋根屋一日絹を締め」とあり。何もかも綺麗にして行くことありしならんか。

打こみ。こがれおじやつたらつんもへたア。しよんがへドウ／＼

こちらからゆく馬かた　たがいに行ちがいて「ヒヤア出羽宿の先生どふだ　向ふよりくる馬かた「べらぼうめ。おれが先生なりやア。うぬははつつけだア　彌二「ヒイン／＼　又むかふより来るはお大名のお国からお登せ入の女中たちかごをつらせて四五人つれさはぎつれてくるを見て彌次郎「チヤノ＼ゑらい／＼　きた八「ほんに。是はみな生た女だ。きめう／＼。ナント彌次さん。つかねへこつたが。白い手拭をかぶると。顔の色がしろくなつて、とんだいきな男に見へるといふとだが。ほんとうかの　彌二「ソリヤアちげへなしさ

北八「よし／＼　トたもとから、さらしの手ぬぐひを出して、ぐつとほうかぶりにすると、とふりすがひに女中たち、きた八がかほをのぞいて見て、みな／＼わらひとふりすぎる　北八「ナントどふだ。今の女どもが。おいらが顔を見て、うれしそふに笑つていつたは。どふでも色男はちがつたもんだ　彌二「わらつたはづだ手めへの手拭を見や。木綿さなだのひもが。さがつていらア　北八「ヤア／＼。こりやア手拭じやアねへ。ゑつちうふんどしであつた　彌二「手めへゆふべ。ふろへはいるとき。ふんどしを袂へいれて。それなりにわすれたはおかしい。大かたけさ。手水をつかつて。顔もそれでふいたろふ。きたねへおとこだ　北八「そふよ。どうりこそわるくさい手ぬぐひだとおもつた　彌二「ナニぜんてへ手めへが。あたじけねへから。こんな恥をかくは　北八「なぜ　彌二「もめんをしめるから。手ぬぐひと取ちがへるは。コレおいらア見やれ。いつでも絹のふんどしだ　北八「それだとつて。やね屋がながつぼねのふきかへに行きやアしめへし。きぬをしめるともねへす。エヽまゝよ。たびのはぢはかきすてだ。斯もあらふか

　　手ぬぐひとおもふてかぶるふんどしはさてこそ恥をさらしなりけり

それよりかぶと石をよめる彌次郎兵衛

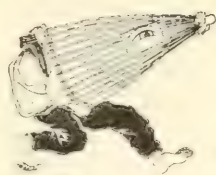
　　たがこゝに脱捨おきしかぶといしかゝる難所に降参やして

○くだり諸白　上酒。くだりは上方より來れること。

○雲介　居所の定らぬ人間のことより、後には駕籠舁のことを云ふ。

○ひやうたくれ　靜岡の方言にては無禮者を「ひようたくれ者」といふ。東京にてはふざけた奴の意。

○おしやらく　白石噺の淨瑠璃に「おしやらくの櫛さア見る様に」云々とあり。おしやれの意なるべし。

○やらうの猪じやアあんめへし　茶番狂言の五段目の猪にやる型にて、破れ傘を被つて飛出すを云ふ。

斯て山中といへる建場にいたる。爰は両側に。茶屋軒をならべて「おやすみなさいまアし。※くだり諸白もおざりやアす。もちよチあがりやアし。いつぜんめしよチあがりやアし。お休なさいやアし〳〵　彌二「きた八。ちつと休んでいかふ　トちや屋へはいる、此内のにはにつきたてたる、へつついのまへに、※くもすけども、ふとんをからだにまきたるもありしぶかみをまとひたるもあり、あるひはねござ、おかがつぱなどをまとひ、とりこぞり、火にあたりゐるトおもてのかたより、たけのきせるをくはへて、一人のくもすけは、ずつとはいり「おへねへ※ひやうたくれどもだ。あか熊や。どぶ八めが。峠まで長持でやつたアな。　ひとりのくもすけ「ゐいは。そんだいあび手が。あんどんにけんこはふんだくるべい　このくもちといふは、六百の事おびこといふは、さかての事之　今一人「コレそりやアゐいが。コノやろうが※おしやらくを見ろへ。しつかりもんつきをきやアがつた　酒ごもをきているくもすけ「きんによう小田原の甲州屋で。やらやつと壹まいもらつて着たが。あんまり裾がながくて。お醫者さまのよふだとけつかる　丸はだかのくもすけ「やろうめらア工面がゐいから。すきなものをきやアがる。おらアこんおう内から。はだかでゐりやア。がら吉ばゞあがぬかすにやア。古傘をやらふから。ひつぺがしてきろとけつかる。べらぼうめ。※やらうの猪じやアあんめへし。そんなもんがきられるもんかといつたら。すんならこりよチきろとつて。ゐいみしろを壹まいうつくれたとおもへ。そのみしろを。きんにようのばんけに。湯で湯につつぱいるとつて。ひん脱でおいたら聞きやれ。だいじのきものをがらゝおまにくはれてしまつたア。いま〳〵しい　彌二郎きた八、このてやいのはなしをきいていて、大きにきやうに入、やがてこゝをたちいでゝゆくさ、長坂大だれこいへるあたりより、旅人壹人、こんのもめんかつぱをきて、ふろしきづゝみと、やなぎごりをかたにひつかけたるが、あとになりさきになり　旅人「あなた方はどこでございます　彌二「わつちらアゐどさ　旅人十吉「わたくしもゐどでございます。あなたゐどはどの邊でございます　彌二「かん田さ　十吉「かんだにはわたくしもおりましたが。どふかあなた方は見申たよふだ。神田はどこでございます　彌二「神田の八丁ぼりで。わつちらが内は。とちめんや彌次郎兵へといつて。間口が廿五間に裏行が四十間。かどやしきの土藏づくりで。大造なも

○沽券　家屋の賃貸價格と云ふべきか。千兩屋敷などいふもその一例。沽券は表屋敷に限り、裏町には無かりしものゝ如し。

○直　直取引。

○淺草の門跡　東本願寺の別院。門跡といふは宮樣の住持せられし寺のこと。本願寺はさることなければ、准門跡なるべし。

○おつにはぐらかす　「おつ」は聲の調子の「甲」「乙」より來るか。東京にては殊に「おつなもの」の語を濫用す。「はぐらかす」は外らすこと。

のよ　十吉「ハアそのうちでございますか　彌次「とんだ事をいふ。うちだなはなしさ。わつちが所壹軒ですまつてるやす　十吉「ハアそんなら惣地代で※沽券はいくら　彌二「こけんは千八百兩　十吉「おめへ※直でござりやすか。口錢は何朱でも二ツ割にいたしやせう　彌次「おめへ何をいふ　十吉「わたしは又地面の賣買のおはなしかとぞんじました　彌二「ナニそんなこつちやアねへ。わつちらアちよつと出るにさへ。供の五人や十人はつれてあるきやすが。それじやア氣がつまつておもしろくねへから。此おとこひとりつれて不自由してあるくもものずきだね　十吉「なるほどさよふでございませうイヤ又あなたのおふくろさまなごは。私よくぞんじておりますがいつぞや※淺草の門跡さまの前でおめにかゝりましたとき何か包をさげて杖にすがつてござるよふす大きにおとしがよりました　彌次「ハアそれはおほかた寺參にでもいかれた時でございませうおめへ御ぞんじとあれば　さだめて何とか詞をかけられたでござりやせう　十吉「わたくしを見るとじきにかけてござつて何をおつしやるかとぞんじましたればぜもんやつて下しやいませと　北八「ワハヽヽヽヽハヽヽヽヽ　彌二「イヤおめへおいらを※おつにはぐらかすの　北八「おもしろへ〱なんとおめへこよひわつちらといつしよにとまりはどふだ　十吉「よふござりやせう　トそれよりみちすがらたがひにしやれ合岡澤といへるにいたるこゝに法花寺といふてらにあしかゞぶしやうのこんりうありししちめん堂あり彌次郎兵へはるかにこれをふしおがみて

足利のぶしやうの建し名にめでゝ七面堂といふべかりける

斯て三人はなしつれて。市の山にいたる　こゝにいがぐりあたまの子ども二三人大なるすつぽんをとらへて、もちあるきあそびいるを北八見付て「コウ彌次さん。いゝものがあるアノ泥龜をかいとつて晩にやどやでやらかしはどふだ　彌次「よかろふ。ナント小ぞう。そのすつぽんを賣ねへか　子共「こんたしゆ。いるならうちくれべい。そんだいぜによヲ。くれさるか　北八「や

ろふとも。ソリヤおつきな錢をやるは　ト四文ぜに廿四文斗ぬいてやり、やがてあたりのわらたひろい、かのすつぽんをわらづさに入れてひつさげ　北八「きめう〳〵　十吉「こいつはおもしろい。時に日がいらしつた。ちと急やせう　トあしばやに三人たどる　既に其日も暮にちかづき。入相のかね幽にひゞき。鳥もねぐらに歸りがけの駄賃馬追立て。とまりを急ぐ馬士唄のなまけたるは。ほてつぱらの淋しくなりたる故にやあらん。此とき、やうやく三しまのしゆくへつく　こゝ両がはより、よびたつる女のこへ〴〵　女「お泊なさいませ〳〵　彌二「エ、ひつぱるな。こゝをはなしたら泊るべい　女「すんならサアおとまり　彌二「あかすかべイ引　トにげるはずみにあんまに行あたる　あんま「アイタ、、、まなこつぶれが。べら坊め。あんまアけんびきイ引　しやうちううりのこへ「しやうちうは入ませぬか。目のまはる燒酎をかはしやいませ　北八「ゐいかげんにこゝへ泊ろふか　はたごやのおんな「サアおはいりなさいませ。おさんどん。おとまりだよ　やどやのていしゆ「コレハおはやうございます。おつれ樣はおいくたり　彌二「かけぼしともに六人　ていしゆ「ヘイそれは。ヤレちやア三太郎はいぬか。お湯をとつてこい。お茶は煮へてあるか。ソレ先お風呂をひとつあけいろ。お飯もわいたすぐにおはいりなさいませ　此内三人ともあしをあらひしまいすぐにおくへとほる　やどの女「お湯におめしなさいませ　彌二「ドレおさきへまいろふ　トはだかになりてかけいだす　女「モシそこは雪隱かうかでございます。こつちらへ　彌二「ホイこれは　トゆどのへ行　十吉「ときにかの藁苞はへ「とこの間におきやした。のちの寐酒にこしらへてもらひやせう　此内彌二郎湯よりあがると、つぎに十吉ゆにいりにたつ、やどのていしゆ、さいやの下やくをつれて、こうめんとやたてをもちいづる、これは宿帳とて、旅人の國ところなしるす事也　てい主「御めんくださいませ。ハアおひとりはおふろか。宿帳を附ます。あなたがたお國は　北八「ハイわしは泉州　てい主「泉州はどこでございます　北八「せんしう堺。名は天川屋義平といゝやす。　ていしゆ「ヘイあなたは　彌次「わしかへ城州山崎村與市兵へと申やす　てい主「さては與一兵へさまとはあなたか。うけたまわりおよんだ。あなたの聟さま勘平さまはどふなされました　彌次「かん平は三十に。なるやならず

○日が入らしつた　入つたの敬語。

○ほてつ腹　太つ腹の意か。「ほてつ腹の淋しくなりたる」といふは空腹のこと。

○あかすかべイ　あかんべいに同じ。

○まなこつぶれ　突當りし者に對し、眼が見えぬとて罵りしなり。按摩が自己に加へらるゝ罵辭を逆用せるもの。

○あんまアけんびきイ　按摩の呼聲。

○山崎村與市兵衛　こゝのところ忠臣藏五段目の人名を洒落て用ゐたり。

○あそばれた　玩弄された意味。

○がいに　大に、の意か。方言。

○十人前　十人並の意か。

○御如才　所在がないといふ所在を誤れるもの、如在と混ずべからず。

○しよびき　引張ること。

○けんかたばみの紋

○ふとりじま　太織縞、

○べにがらいろ　紅殻色。

にしにやした　てい主「ハアそれはおちからおとし。おかる樣は　彌二「ずいぶん達者でゐます　てい主「そして理の角兵へさまやめへほう彌八樣は。たしかあなたのお近所であつた　彌二「さやう〳〵　てい主「アノ又猫はどこにゐられます　彌二「ハアヽヽはどこだか　てい主「てんつる〳〵てんつるてんはどふいたしました　みな〳〵「ハヽヽヽヽヽ　てい主「イヤまづ御膳をあけましやう　彌二「いま〳〵しい。けつくあつちにあそばれた　ト此内やどの女せんをもちきたりならべおきて「サアおあがりなさいませ。コレおやア。おたつどんよウ。そこの飯櫃ウもつてきなさろ　北八「ときに。こゝにやアしろものはなしかの　女「此あいだ木曾海道の追分から來た女郎衆がふたりございます。おさみしかアおよびなさいませ　彌二「こいつおもしろかろふ。器量は　女「がいにゑいといふでも。おざりましないマア十人前でおざいます　北八「ハヽヽ十人まへのめしもりかおちくろい。呼でくんな　女「すんなら只今　トいゝすてゝたつて行、此うちおもてのめしもりがり一　十吉「おめへがたアなにか。やほからぬおはなしだね　彌二「ぬしやアどふだ　十吉「イヤわたしはアノ内の女に。すこしはなし合がありやす　ト此内やどの女きたりて「これは御如才でございます。サアおかへなさいませ。モシ今のが參ました。コレおまいらやア。こゝへ來なさろ。ドレむかひにいかずに　ト女はたつて行、すべてこのあたりより、するがたしうかけ川辺は、行ふといふ事をいかずといゝ、くるといふ事をくださいふ、やがてかの女、ふすまのおかけにのそいてたつているをひつぱり出る　女「サア〳〵きなさろ〳〵。　めしもりおたけ「アレハアふとつていきます。がいにしよびきなさんな。　今ひとりのめしもりおつめ「どふせハア。出べいとこさア出にやアならない。サアおたけさん。つん出なさろ　トやう〳〵ふたりながら出かけてくる、ひとりはこんのもめんに、けんかたばみのもんのつきたるをきて、ふとりじまのおびをまへにからいうの、あかきいとのいりたる、たてじまのぬのこに、これもおびはふとりのまいびろうご、べにもめんのふんどし、ちら〳〵と出しかけ、くろきらうの長ぎせるを手にもちて、ざしきへすはる　北八「サア〳〵爰へきなせい。時に女中。膳はひいて酒にしやせう　女「ハイ今に出します　トぜんをひいてしまい、ていうしさかづき、さかなをもちいで　女「サアひとつあがりませ　彌二「ドレ〳〵　ト一くちのんで下におくと、女こゝろへておたけにさす　お竹「コリヤハ

アわしにかへ　トのむまねして北八へさす北八のんでおつめへさす　おつめ「おたつどん。ハアおりよげへだもし　北八「ひとつのみなせへ
つめ「わしらアはあ。がいにのみましねへ。ヤレさてこの衆は。がいにおつぎやるとよ　女「おたけさん。お
まいちのとこじやア。みんなこりよヲさしているの　トお竹がつぶりにさしている、ぎんながしの五大力のかんざしを、ぬいて見る　たけ「コリヤハアお
ゐどでもはやるげでの。わしらがとこの金彌さんが野尻の彦十さんに買てもらつたげで。がいに自慢ら
しく。内ぢうのもんに。ひけらかすから。わしもはア。あのしゆのさすものを。さゝないでもくやしいか
ら。たてひきづくで。がらゝ廿四文うつちやつたアもし　女「おつめさん。おまいの櫛を見せなさろ　ト
取にかゝるをいやがりて　つめ「おらアやあだよハ、、、　トかほをそむけるを、むりにとつてみれば、しゆぬりのくしに、きんぷんにてだきめうがのもんがついている　女「ばあちやヤア。
コリヤア札の辻の太郎左衛門さんの紋所だアよ　つめ「しつちつたかやア　トひつたくり、くしにてたゝくまねをしてつぶりへさす、このふたりまことに、此あいだ追分からきたと見へて、これはみなたつちのことはなり、みな／＼おかしさをかくし、だんまりにてきいている、こゝにもいろ／＼あれども、あまりくだ／＼しければはりやくす　女「もふおそべりなさいませ　十吉「ホンニ
わしは。つぎのまへねやせう　彌二「ナニサいつしよにこけへ　十吉「コレハめいわくな　女「サアおまいが
たも。着かへてきなさいまし　トよぎふとんをはこびとこをとる、みな／＼ふとんのうへにあがりいると、一まいおりの小びやうぶにて、あいだをしきる、此うちやじ郎があいかたきたりて　竹「モウそべらし
やりましたか。がいにさぶいばんだアもし　彌二「もつとこつちへよりなせへ。なにもゑんりよはねへから。
ちつとはなしでもしなせへ　竹「わしらがよふなもなア。おゐどのしうにやア。こつぱづかしくて。なにも
かたるべいこたアござんなへもし　彌二「ナニはづかしいも氣がつゐゝ。おめへちふいくつだ　竹「わしや
ハア。お月様のとしだよ　彌二「ム、十三七ッではたちといふことか。でへぶおしやれだの　竹「ホ、、、
、わしらアこんぢう。追分さアから來て。これのとこのきやくしゆさア。あじやうしたらよかんべいか。
なをかしおゐどのしうにやア。きがつまつて。なりましない。帯のウときなさろ。そしてこの足さアわしが

○銀流し　錫めつき。
○五大力のかんざし

○ひけらかす　見せびらかす。
○たてひき　意氣張。
○ばあちやヤア　オヤマアの意。
○おそべりなさいませ　寢ること。寢そべるなどいふ。
○お月様の年　「お月様いくつ、十三七つ」云々といふ童謡による。二十の意なるは彌次郎兵衛の云へるが如し。
○あじやうしたら　どうしたら。

うへゝのつけなさろ　彌二「ヲイ〳〵かうかく　竹「ヤレハアねづらいこんだよ。そしてがいに。あとへさがりやることよ。もつとそらへつん出なさろ　彌二「チツトしやうちく〳〵　トよぎをすつぽりかぶり、しばらくむごん、このうちきた八があいかたの、おつやをきたりて、いろ〳〵くどけど、これらくだ〳〵しければはりやくす　はや其夜もふけゆくまゝに。助郷馬のすゞのおともたへはてゝ脊戸になく犬の遠吼しゝを追ふ鳴子のおとまで。ふきおくる夜あらしの身にしむばかり。行燈のあぶらも盡て。いつのまにかはまつくらやみ　このとき、かのつこになし置たる、すつぽんとこのまにおきたるまゝ、それなりにわすれたるが、やがてわらづとをくひやぶり、そろ〳〵はひ出、ごそつきあるくに、十吉目をさまし、何やらんとかんがへいるうち、かのすつぽんは、北八がよぎの中へはいこむと、北八びつくり目をさまし「だれだ〳〵　トあたまをあげると、すつぽんうろたへて、きた八がむねのあたりへかけあがる、北八きやつといつて、ひつつかみほふりなげると、彌二郎が[illegible]り、これもきやつといつて[illegible]、うろたへて[illegible]ゆびさきをくいつかれ「アタ、、、、、、　あいかたお竹「ヤレうつたまけたあじやうしたへ　彌二「火をともしてくれろアイタ、、、、　竹「あんとしたへ　トさぐりまはす手さきがすつぽんへさはり、バアチヤハアと、うしろへたをれるひやうしに、ふすまがはづれてともにばつたり、北八むしやうに手をたゝき「まつくらでねつからわからぬ　竹「おたつどん〳〵最前から客衆がうでをたゝかつしやるはやくあかしよヲもつてきなさろ　彌二「はやく〳〵アタ、、、、　トむしやうにうろたへさはぐ、此ひまに十

吉彌二郎がふとんの下にいれておきしうちがへの金をぬすみかねてこしらへおきたると見へて石ころをかみにくる〳〵つゝみたるをすりかへ、どうまきへいれて又もとのごとく、ふとんの下へいれおく、いつたいこの十吉は、道中の※ごまのはいといふものにて、こんなことをするがしやうばいなれば、いつのまにかは彌二郎が金をもつているを見てとり、ちうよりつけきたりてかくのごとし、此内やどの女ぼう、あかりをもちきたり見れば、彌二郎が手にすつぽんがくひついて、ぶつてもたゝいてもいつかうにはなれず、やどの女房あはてゝ「ばあチヤ。こゝへはどふしてすつぽんがきたやア　北八「ハヽアひるまのすつぽんがつとの中からはい出たのだな。コイツすつほんとぬけそふなもんだ　彌二「エヽしやれ所じやアねへ。アレちがでるいたい〳〵　竹「あんだとおもつたら※がさだアもし。ソリヤアゆびを水の中へいれめさるとじつきにはなしてつんにげ申すは　女房「ホンニそふしなさいまし　トあま戸をあける、彌二郎かけ出、てうづばちのなかへゆびをつけると、すつぽんははなれおよぐ　彌二「ヤレ〳〵とんだめにあつた　北八「イヤはや。奇妙希代希有けれつ。※ちんじちうやう言語同断なことであつたハヽヽヽヽ　トそこらとりかたづけ、まだよあけにも間もあればさ、またもまくらをかたぶけて、しばらくまどろみける中に、北八はおかしさ半分

※よねたちとねたる側には泥龜もはづかしいやらゆびをくはへた

おなじく彌次郎もいたさをこらへて

すつぽんにくはへられたるくるしさにこちや石龜のじだんだをふむ

最早其夜も明行ば。寺の鐘も勤行の聲もろともに響渡り。求食烏の軒ちかく。鳴わたるに。みな〳〵目ざめておき出れば。勝手より膳も出。それ〳〵に支度する内　やどの女「おひとりはどこへいきなさつた　北八「ほんに十公はどふした　彌二「大かた雪隱だろふ。さきへやらかせ　トかまはずめしをくひかゝる、十吉ははやいつの間にかは、うらぐちよりにげ行たれは、いくらまつてもくるはづはなし、彌二郎あたりを見まはし、ふしぎそふに「コウきた八。アノ十吉とやらアなんだろふ　北八「されば　彌二「ハテがつてんのいかぬ。アノやらうが風呂敷包も笠もねへ。大かたおいらが寐てる内。たつてしまつたと見へる　北八「ヤアそんなら。なんぞなくなりやアしねへか　トそこらを見まはし　何も別条はねへが　彌二「イヤ〳〵別条があ

○護摩の灰　弘法大師の護摩の灰と稱して人を欺けるより出づといふ。詐惑者のことなれど、多く道中旅人をごま化して金を盗む者を云へり。

○がさ　スツポンの方言。

○ちんじちうやう　「義經記」に「東國のかたへ主に心ざしもありちんじちうようにもあひ」云々とあり。非常の災、不時の出來事などいふ場合に云ふ。

○よね　娼婦のこと。

○石龜のじだんだ　諺に「雁が飛べば石龜もおかんだんだ」とあり。飛んだ望を起すことを云ふ。

○合羽干場の地請　俚俗合羽干場といふところあり。こゝの意は家を取掃つてしまふ、さら地にして俺が地請に立つて合羽屋に貸す、といふ啖火なり。
○お氣の毒の人丸様　柿本人麿の洒落。人麿様を更にもぢりて四斗樽様と云へり。

るよふだ　ト ふところからごうきを出しふるつて見れば、かみにつゝんだやつがばつたりとおちる、あけてみればみたいしころ　彌二「ヤアノヽくく　北八「どふした　彌二「どふしたどころか。金が石になつてしまつたヱ、ヱ、　北八「こいつは大變くく　彌二「くやしい今のやろうめにすりかへられた。コレ女中。御亭主を呼でくんな。はやくくく　ト むしやうにのぼせかへるに、女はそう〳〵はしつてゆくと、このやうすをきいて、やどのていしゆねまきのまゝかけきたりて「今承りました。扱くくとんだとでございます　彌二「イヤきさま御ていしゆだの。コレすまねへぞくくあんなごまのはいに。やどをかすからにやアこなたもうはまへを取たろふなぜおいらにさたなしに。さきへたゝせた　ていしゆ「コレハけしからぬおつれさまとぞんじて。とめたのでございます。今朝たゝしつたも。さつぱりしりませぬ。大かたうら道からでも　彌二「うらみちからもすさまじい。そんなでいくのじやアねへは。なんでも。アノごまの灰を出せくく。コレヱやらうを見そくなつたか。おゐどでも。神田の八丁堀で。とちめんやの彌次郎兵衞さまといつちやア。おそらくおれが近付の人に。誰しらぬものはねへは。悪くふざきやアがると。やてへほによチたゝきこはして。※合羽干場の地請にたつのだ足元のあかるいうち。サアごまの灰めを爰へ出せ。サアだせくくくく　ていしゆ「これは御難題。さりとてはおきのどくな　彌二「ナニおきのどくの人丸さまだ。イヤ

○一ツ穴の狐　同類。漢書に「一邱之貉」とあり。

○柄杓をふつても　當時伊勢参が柄杓を持ち、一文宛貰ひてぬけ参をすることあり、この柄杓は金を貰ふ道具。

○ことづかつてきた十二銅　代参を頼まれし人より預りし十二銅。神様に上げるは十二銅に限りしもの。

四斗樽さまがあきれらアサア四斗樽めをこゝへ出せ　ていしゆ「ナニしとだるとは　彌二「イヤサ四斗樽をがつてんでとめたからにやア、きさまも一ツ穴の狐だ　ていしゆ「これは無体な。ナニわしらが四斗だるをとめませう　彌二「とめねへことがあるものか。ゆふべから今のさきまで。こゝのうちにねていたは　ていしゆ「アノ四斗樽がかへ　彌二「チヽサ四斗樽。イヤ〳〵ごまのはいだ〳〵　北八「コレ彌次さん。マアしづかにしねへ。かわへそふに御ていしゆのしつたとじやアねへ。道づれにしてきたは、こつちがわりい。どふもしかたがねへとあきらめなせへ　ていしゆ「さやう〳〵これがわし共が内へござつての相宿ならば。おつしやるも尤だが。何をいふもいつしよにござつたものを。申さばおまいたちの御麁相といふもんだ　北八「ちげへなしさコレ彌次さん。おめへりきんでもはじまらねへ。どふもしやうとがねへはさ　ト

いはれて見れば、彌二郎もなるほど、おもつたところなつきたらず、ふさぎきつてだんまりでいる、しはいつかねはきた八「彌次さん。マア飯でも喰ねへ　彌二「めしもくへぬ。ナントきた八かうだ。府中迄いけばおつたアさんだんすんあてもあるから、先壹文なしで出かけよふ。　トつかひのこりのぜにをあつめてやう〳〵こゝのはたごをはらひあこにわづかのほしたぜにのこりたるをたよりにそう〳〵こゝを出かけみち〳〵も、こゝろがけて、ごまのはいのゆくゑをたづぬれども、いつかうしれず、しやれもむだもどこへやらたゞうか〳〵とたどりながら

ことわざの枯木に花はさきもせで目をこすらするごまの灰かな

北八「彌次さん。そんなに力を落しなんな。たかゞこふだ

うき沈ある世は次第ふどう尊いのれるかひもなき護摩の灰

彌二「きたや。おらアもふ坊主にでもなりたい　北八「おめへとんだことをいふ　彌二「いつそゑどへかへろふか　北八「ナニサけへることがあるもんだ。柄杓をふつてもおいせさままでいつてこにやア。外聞がわりい　彌二「それでもモウひだるくてあるかれぬ　北八「ハテまちなさいこゝにゑどからことづかつてきた

十二銅があるからさきへいつたら餅でもかつてくひなせへ　トいゝつゝふたりながらつゑにすがりゐちら/\と行むかふから馬士がつぎにんそく「エイさつさ/\　北八「なんだ野良の韋駄天さまア見るとふに。やみとかけてきやアがる　馬士「ア、うらやましい。あんなにかけるいきほひだから。さだめておめしもふんだくにくつたろふ　北八「エ、おめへもご食じみたとをいふもんだ　[illegible]にんそく「エイさつさ/\　北八「ソレあぶねへこつちへよんな　にんそく「エイさつさ/\　ト[illegible]二郎が小びんさきへがつたりとあたる　馬士「アイタ、、、　にんそくはいかまはず「エイこいやさつさ/\　馬士「ア、ア、いたい/\、なんの因果でこんな目にあうか。おらアしにたくなつた　北八「エ、ばかアい、なぜへソレ馬がきたア　馬士「馬士どん。さきの宿まではまだよつぽどあるかの　まご「ナニじつきにそこだア　馬士「いくらほどあるへ　まご「たつた三里廿四五てうもあるだんべい　馬士「ハツア、　トだん/\たどり行ほどに、やがて、[illegible]いへる所にいたりて、ある中にも、[illegible]又いつしゆくちずさむ、されども、うたもそのみのくるしきまゝなれば

名をきいてほしやこがねの釜が淵くちに孝行したきゆへには

此所にて餅などたべ、[illegible]少しは腹の虫をやしなひ。たがひにちからをつけ合。はなしものして。漸沼津の驛につく。こゝにて先足をやすめんと。宿はづれの茶屋へはいる　ちややのおんな「おはやうおざいますチヤ。お支度でもしなさいませぬか　北八「イヤあとの建場で。うんといふほどくつて來やした　ト此内雨がけをにんそくにかつがせ、[illegible]を一人つれたるさぶらひ、そくにふうの大たぶさ、もめん/\[illegible]にそめたる、小もんのぶつさきはおりをきたるが、このちや屋へはいる　女「ハイ八ツでもおざりやしよ　侍「よい酒があらば。ちくと出しなさろ　女「ハイ/\三十二文のをあげませうかヤア　侍「今すこし。下直なのはなんほじや　女「廿四文のもおざいます　侍「しからばソノ廿四文のさけと。二十貳文の酒と。等分にわつて。壹合五勺ばかり出しなさろ　女「ハイ/\　トかつてより、おうりは[illegible]

○韋駄天　南方天王八将の一。足疾鬼が佛舍利を奪ひて逃去りたるを、追ひかけて取戻したりとの傳說より、よく走る[illegible]ことから、その意にて用ゐしなり。

○釜ケ淵　「左の方に釜ケ淵とて有、むかしぬす人有て、釜をとりて行しに、ここの淵[illegible]はち淵の主になりけり」（東海道名所記）

○建場　馬方場。人馬休息所。

○ちろり　酒徳利に等しきもの。

〇わごりよ　お前の意。

〇財は身のさし合せ　「胸算用」に「貧は身のさしあはせ、之を貴りて當座の用にたつるより外なし」とあり。身につきたる物を、さし當り急場の間に合せる意にやあらん。

さかなのにつけなどいだす　侍「コリヤ〱此煮付よつた肴どもの價ななんぼじや　女「三十貳文でおざいます　侍「こちらは女「十二文　侍「ム、よい〱コリヤ傳助わごりよも。ひとつのみやれ　供傳介「子イ　侍「コリヤ向ふに火をたきよるおなごどもは。奥田氏の内室によく似よつた　供「いかさま。こちらの今笑ひよるおなごなども。よいよふでござります　侍「どれか〱。ウ、アノはしらのねきに。よこたわつておるおなごか。よい〱。サア傳すけ。今すこしある呑でしまへ　供「子イ〱　侍「サア勘定のいたそふなんぼじや。コリヤ〱この肴どもは手はつけないぞ　女「ハイ〱四十貳文でございますチヤ　侍「ヲ、よい〱　ト供のものにはらはせ、こゝ　トそれよりこゝを立出、ふたりかの侍とあとさきになり、さきに出かける、北八彌二郎は、ちやばかりのんでたちあがり　北八「サアいかふ　彌二「アイおせは　女「どなたもよふおいで　にたりて、いろ〱はなしつれて、たどり行にならのさかといふ所にいたり、千本の松原にて、きた八がこじつけるうた

この景色見ては休にやならの坂いざたばこにや千本の松

侍このうたを聞てかんしんし「ヒヤアでけた〱。お身たちは忝どものだな　彌二「さやうでござります。私どもは夜前の泊で。ごまの灰に取つかれて。大きに難義をいたします　侍「ハアそれは近頃きのどくじや。なるほどごまの灰のさしたのはいたかろふ　北八「イヤごまの灰と申すは。どろほうのとでござります　侍「どろほうとは何じや　北八「ハイ泥坊と申は。盗賊のとでござります　侍「ハ、アなにか人のものを取よる。盗賊のとを。どろほうといふか。　彌二「さやうでござります　侍「ソノ又どろほうをごまの灰といふじやナ。なるほど解せた〱　北八「ときに旦那へちとお願ひがございます。私ども右の泥房にあいまして。さつぱり路用はとられてしまいましたから。大きに難儀をいたします。府中まで參ればいかやうともいたしますが。おそれまでの所に。こまります。そこで財は身のさし合せとやら。どふぞ是をうりたふござりますが。お

かいなさつて下さりませぬか　トこしにさげたる、いんでんのきんちやくをいだし、みせる　侍「ホウそれはきのどく途中でものを求るは如何敷が。お身たちの難義とあれば。求てつかはそふ。あたひなんぼじや　北八「ハイ二百ぐらゐにさしあげませふ　侍「それは高直じや。　北八「すこしはおまけ申ませう　侍「しからばソノ巾着共のあたひな。かうと六十文のつかはそか　北八「それはあんまり　侍「六十一文の遣はそか　北八「もちつとおかいなさつて下さいませ　侍「しからば六十二文のつかはそか　北八「イヱどふも　侍「左あらば清水チウ。舞臺どもかふとんだとおもふて。六十三文のつかはすか　北八「イヤモウ。そんなに壹文ヅヽ、おかいなさつては。御相談ができませぬ。こういたしませう。丁度にお買なさつてくださいませ　侍「ヤ丁度とはなんぼじや　北八「ハイてうどゝ申すは百につばまりましたとを。てうどゝ申ますから百文なら差上ませう　侍「ム、なにか。百のことをてうどゝいふか。しからばてうどにちとめてつかはそふ　北八「それはありがたふござります　トきんちやくをわたし百文取　モシ是は。安いものでござります。捨賣にしても。根付ぐるみでは。四五百がものはござります　侍「イヤ身ども悴どもが兩人罷有が。是は惣領へのよいみやげじやて　北八「へイあなたはまだお若うお見へなさいますに。お子達がおふたりとは。よいお樂みでござります。無躾ながら。もふおいくつでござります　侍「あてゝお見やれ　北八「ハイあなたは。コウト。三十七八にも。おなりなされますか　侍「身ども當年巳のとしで。四十二才にまかりなる　北八「それはおわかうござります　侍「コレハ御挨拶。しかし身ども。相役の園原作野ゑもん。※米木津甚太夫など。みな同年でまかりあるが。その内で身どもが。いつちわけへ〳〵とい丶おるて　北八「さやうでござりやせう　侍「それに又。家中うちの。わけへおなごどもなどが。身どもがことを。※澤むら宗十郎に似ておるなぞと申す　北八「ハ、アなるほど　侍「とき

○いんでんのきんちやく　甲州印傳の巾着。江戸の火事羽織の古を甲州に遣りて印傳になると云ふ。

○清水チウ舞臺　思切りて何かする場合に、清水の舞臺から飛ぶと思つてと云ふ。

○つばまりました　纏まる意。

○米木津甚太夫　米津と書きてヨネキヅとよむこと、茂木をモテギとよむが如し。こゝは特に木の字を加へたるか。

○澤村宗十郎　三代目。享和元年四十九歲にて歿す。

○しみつたれ　けちくさい、みつともないこと。

○爰はうなぎの名物　東海道名所記に「この處うなぎのかばやきを賣る」と見えたり。柏原の建場の名物のよし。

に。お手前はいくつじや　北八「だんな。おあてなさつてごろふじませ　侍「ムウお手前としなこうと。廿七八にもなりおるか　北八「イヱてうどでござります　侍「ナニてうど。アノ百か　北八「イヤ　このはなしにまぎれて、あゆむともなしに、小すは大すはを打過、これでござります　侍「ハア三百にはわけへおとこだ　みな〳〵「アハヽヽヽヽ

ほどなく原のしゆくへつく、こゝにてつれのさぶらひにわかれて

まだめしもくはず沼津をうちすぎてひもじき原のしゆくにつきたり

北八「ヱヽおめへまだ。そんなしみつたれをいふは。いまの錢で蕎麥でも喰ふべい　彌二「ソリヤアよかろふ〳〵　トそばやへはいり　北八「ヲイ二ぜんたのみます　そばや「ハイ〳〵　トやがてそばをぜんにいだす　彌二「ふといそばだ。くひでがあつていゝわへ。北八もふいつぱいかへよふか　北八「イヤ〳〵。そふいちどきに錢をつかつてはならぬ。又さきへいつて。なんぞやらかしやせうから。湯でもおもいれのみなせへ　彌二「そんなら。わけへしゆゆをひとつくんな　そばや「ハイ〳〵　彌二「アヽうめへ〳〵。きた八のまねへか。ヲイ〳〵。もふいつぱいくんな。ヲツト〳〵アツヽヽヽくちをやけどした。あんまりあつい。どふぞそばをちつとうめてもらひてへもんだ　北八「コレ〳〵わけへしゆ。たび〳〵きのどくだが。藥をのむから。もふひとつゆをくんな。　そばや「ハイ〳〵　北八「コレたつぷりだよ。ヲツトよし。しかし。わしがのむくすりは。したぢのはいつたゆでなければきかねへから。とてものとに。わけへしゆ。したぢをすこしさしてくんな。ヲツトよし〳〵　トふなの水をのむよふにぐつ〳〵とのんで　サアいかふ　彌二「でへぶ心が慥になつた

今くひしそばはふじほど山もりにすこしこゝろもうきしまがはら

それより新田といへる。建場にいたる。※爰はうなぎの名物にて。家ごとにあふぎたつる。かばやきの匂

○あしをさすりて休やすらん　相餅はさすりて食ふ。さすれば皮がよく剝けるといふことより、上の句の「餅の名のかしは橋とて」に云ひかけしなり。

○ひろいやせう　徒歩の意。

ひに。ふたりは鼻のさきを。ひこつかして
　蒲燒のにほひを嗅もうとましやこちらふたりはうなんぎのたび
頓て元吉原を打すぎ。かしは橋といふ所にいたる。此所より富士の山正面に見へて。すそ野第一の絶景なり。彌次郎取あへず
　餅の名のかしは橋とて旅人のあしをさすりて休やすらん
斯て吉原の驛につく。棒ばなの茶屋女共いづれも黄色なる聲〳〵に「お休なさいやアせ。さけウあがりやアし米の飯をあがりやアし　こんにやくと葱のお吸物もおざいやアすおやすみなさいやアし　かごかごよしかな。かご　馬かたニナイ日那衆。馬アどふだ。戻りだからやすい　彌二今迄乘づめにのつてきたから。ちつと是からひろいやせう　北八こゑびやせうがきいてあきれらア　それよりこのしゆくはづれにやぶれあみがさをきたるらう人ものとおぼしく居ながちて
ウタイ「いざ〳〵酒をのまうとおさてさかなはなに〳〵ぞ。ころしも秋のやまくさき〻やうかんかやわれもかうしをんといふは何やらん道中わづらひまして。なんぎをいたします。なにとぞ路錢の御合力をねがひます　北八イヤモウ。わつちらアけふべごまの灰に。路用をとられて壹文なしだ。どふぞこちらへひためがあらば。こつちへ御合力ねがひます　らう人「そんならコレつくな〳〵　トそう〳〵に行過る、ふたりもおかしさ行すらひツ、たどり行に、村はづれに小屋がけして、くはんをんさまのかけものをかけ、あさのやぶれごろもをきたるばうさま、いねぶりをしていたりしが、たび人を見るとにはかにりんをうちならし　觀音坊「妙法蓮花經普門品第。始終忽多闇。世間子息大分遊興毎晩三味線。音曲盛多無正。夜前大食翌日頭痛八百。羅利古灰。笑止千萬。近邊醫者早速御見舞。調合煎藥。呑多羅久多良腹張多心經　チインノ〳〵　はなのした空殿のこんりう。おこゝろざしをおたのん申ます　北八おきやうがおもしろへから。寄進につきやせう　坊主ハイそれは御苦勞。お名をしるしませ

○薄縁　疊表にて作れるを「うすべり」と云ふ。茣蓙とは別なり。

○五文どり　初編に「五文餅」とあるに同じ。

う　彌二「そんなら。彌次郎兵衞とつけなさい　坊主「ハイ俗名彌次郎兵衞　彌二「ヱ、まだ死にやアしねへわな　「へイまだ死なしやらんのかな。イヤ是へはおこゝろざしの戒名をしるします　北八「チイそんならそけへかいてくんな。釋の急難取つめた佛果菩提のためソリヤ壹文　ト（なげだして行すぎる、松ばらの中ほどに、十四五のまへがみ、ごて〳〵とふしてやくわんをかけ、くはしなどならべて、あそぶかたこにたび人をよびたつる）「おやすみなさいませ〳〵　北八「サア彌次さん。くわしでもくわねへか　彌二「チトやすまう　ト（※ごてのうすべりのうへゝこしをかけ、ふたりながらくわしをしてやり）北八「小ぞう。このくはしはいくらづゝだ　小ぞう「アイ貳文ヅヽ　彌二「五ツくつたからいくらだ　小ぞう「わしはいくらだかしりましない　北八「そんならこうと。五ツで二五の三文か。コレこゝにおくぞ　彌二「ヒヤアこいつはやすいもんだ。もふひとつくをふ。コリヤアいくらだ　小ぞう「ソリヤア三文　北八「ドレ〳〵うめへ〳〵。小ぞう。せんの錢はすんだぞ。あとのくわしが。四ツくつたから。三四の七文五分か。エイハ五分はまけろ〳〵　彌二「イヤ餅もあるな　北八「ドレこいつはうめへ。このもちはいくらだよ。　小ぞう「ソリヤア五※

文どりよ　北八「五文ヅヽならこうと。ふたりで六ツくつたから。五六十五文。ソレやるぞ　ふぞう「イヤこのしゆは、モウ※塵劫記じやアうりましない。五文ヅヽ、六ツくれなさろ　北八「ヤア〳〵〳〵錢があるかしらん　ふぞう「こゝへ出しなさろ一ツ二ツ　三ツ　四ツ　ト五文ヅヽ、ひとつ〳〵にかぞへて※めのこざんやうにひつたくられ　彌二「こいつは大わるいだ　北八「とんだ目にあつた。サアいかふ　ト立あがり、四五けんあゆみすぎ　北八「アノ小ぞうは如才のねへやつだ。アノ餅がナニ五文取なものか。二文か三もんの餅だろふに。高くうつて。しよてのそんをうめやアがつた「いま〳〵しい。今くつた餅がのどにつまつたゲツ〳〵　トおかしさ半分、子どもとあなどつてじきにむくつたと、打笑ひたどり行　それより久澤の善福寺といへるに。曾我兄弟の石碑あるを。おがみて北八

今曾我に機緣を結ぶわれ〳〵は外に一家も壹もんもなし

富士川のわたし場にいたりて彌次郎兵へ

ゆく水は矢をいるごとく岩角にあたるをいとふふじ川の舟

此渉を打越けるに。はや日も西の山の端にちらつき。おのづから道急ぐ馬士唄の竹にとまる。※雀色時。やう〳〵蒲原の宿にいたる

道中膝栗毛後編　坤

此宿の御本陣に。お大名のお着と見へ。勝手は今膳の出る最中。北八そとよりさしのぞきて「コウ彌次さ

○塵劫記　算術の本。

○めのこざんやう　女の子算用ともいふ。九々などを知らねば、一々に數へるを云へるなり。

○雀色時　黃昏時のこと。

○御本陣　各驛に一軒あり。これに次ぐものを脇本陣とす。大名の宿泊は、本陣を常とす。

ん。ちよつと此ふろしきづゝみを。もつてるてくんな。彌二「どふする　北八「イヤちつとのまだ　ト彌二郎につゝみをわたし、御本陣へずつとはいり、かつてのごさくさ※の中へあがり、かたすみのほうへすはると、ばんの女だん〳〵ぜんをもちはこび、大ぜいへすへると　北八「チイこゝへも一ぜん　女「ハイ〳〵　トすへる、かゝるこんざつの中ゆへ、人もきがつかず、きた八おもふさま、くつてしまいよきまを見て、手ぬぐひをひろげ、わんにもりたるめしを、一ぜんちやつと打あけ、てぬぐひに引つゝみ、やがてこそ〳〵とにげ出、まごつく内、彌二郎はなかふの軒の下にまちたいくつして「きた八か　北八「チイ〳〵　彌二「どけへいつた　北八「へ、おらア飯をくつてきたが奇妙か　彌二「エ、どこで　北八「本陣でどさくさまぎれに。五六ばいやらかしてきた　彌二「ソリヤアいゝことをした。しかし手めへも實※のねへもんだ。なぜおいらもつれていかねへヱ　北八「イヤおめへにやアみやげをもつてきた　ト手ぬぐひにつゝみしめしをいだす　彌二「なんだめしか。有がてへイヤなか〳〵。手めへきがきいてるるはへ。ア、うめへ〳〵　トのこさずくつてしまいかの手ぬぐひをうちふるつて　彌二「これだといつて。ヤアこれは。手ぬぐひにつゝんできたな。ヱ、きたねへ　北八「ナニきたねへものか　彌二「手めへが金玉やなにかをあらつた。手ぬぐひだものを。ア、むねがわるいペツ〳〵　北八「ハ、、、。時に宿はづれへいつて。木賃※と出よふ　ト打つれて此しゆくのはうはなへ出そこらあたりをまご〳〵して　彌二「コウどふぞいきな女のある内へとまりてへの　北八「ナニ木賃でとまる内に。※いきもひやうたんもあるものか。ハテどこだかしれねへ　トあつちこつちのうちをのぞきあるき、のき下にねている、犬のあしをふんで大きにくひつかれ　北八「アイタ、、、　犬「キヤアン〳〵　すしうり「あぢのすウし。さばのすウし　北八「コウすしやさん。こゝらに木ちん宿はねへかの　すしや「アイむかふのとつぱしのうちよ　彌二「アイおせは　トおしへられたる内のかど口から　北八「チト御めんなせへ　トずつとはいりみれば、たゝみの四五でうもしかれよふといふ内にこゝ、ぶつだん一ツさ、やぶれつゞらひとつのしんだい、あるじは七十ちかきおやぢ、いろりのきはにわらをなつている、じざいにてつるしあるなべに、なにかぐつ〳〵にへるそばに、※六部がひとり、※じゆんれいふたり、一人は六十余のおやぢ、一人は十七八のむすめ、※おいづるをきたまゝ、あかぎれだらけのあしをのばし、火にあたつている、此家のはゞア、松のえだを、へしおりいろりへくべながら　おやぢ「あがらしやりませ。ソレそこに水がある。あしよチゆすぎなさろ　あしをあらひながらきた八「彌次さん見ねへいゝ順礼がとまつて

〇どさくさ　ごさ聲などに同じく、騷々しい意。

〇實のねへ　親切の無い。

〇木賃　自分の物を食ひて泊り賃を出すこと。然らずとも焚物代と米代とを別々に拂ふこと、旅泊の古風なり。後世に至り專ら安泊の意となる。

〇いきもひやうたんも云々　「いきもへちまもあるものか」など云ふに同じ。

〇六部　六十六部。日本を六十六國とし、國毎に法華經一部宛を供養するより出でし名。

〇じゆんれい　西國、坂東等の觀音を巡拜するもの。多くは三十三所なり。

〇おいづる　巡禮の著るもの。中白く兩端の赤きは兩親無きもの。中赤く兩端白きは片親あるものなど云ふ。

○しいな　實の無い籾をいふ。

○てんこちもない　「有るまじきことをするといふ言葉の代りに、東國にてはてんこつもないさ云ふ」（物類稱呼）とんでもないこと。古く「宇治拾遺」に見ゆ。

○とつけもない　取付もないより出づるか。或は取つてつけもないか。

○櫛箱　[illegible]。[illegible]になりて上に[illegible]の類を入る。下に抽匣あり。

○とひやうもない　途方も無いの訛か。或は「とびやうし」の轉化か。

いろ　彌二「ホンニこいつ。たゞはおかれぬひだるい時にやアまづいものなしだ　ト打わらひあしをふらいて上へあがる　六部「サアこゝへ來てあたりなさろ　北八「コウ彌次さんもつとこつちへよりな　トむすめのそばへわりこんですわるあるじのはゞはいろりのなべをおろし　はゞ「サア粥ができた。みんなくひなさろ　彌二「ソレハあつたかでよかろふ　はゞ「インヱ。こんたしゆのとじやアござらぬ。コリヤアこのしゆのかいだアよ　彌二「イヤけふもらつた米ア。しいなばつかしたんとあつて。そして半分は石ころだアのしこりよチくつたら腹がおもたくなるだんべい　はゞ「ろくぶさんのも二合ばかしやアあつたんべいそこへわけてくひなさろ　トこの内じゆんれい六部もてん〴〵にちやわんを出しもつてくふうちだし合の米なれば彌二郎きた八たゞ見ているばかり手もちぶさたにて二人のそこをはたご六部はやがてくひしまひて　六部「ふたりのお衆はさだめし。おふどのしうだろふが。わしどもはおふどで。てんこちもない目にあつたアもし　彌二「どふしなさつた　六部「わしがハアこの六部になつた。因縁のウかたり申べいがヤレ扱人といふもなアはあ。運がなくちやア。ちつあけべいにも。あんとしてなづきやアあがり申さない。わしがハア。わかい時分におふどに居申たが。そのときあんでもハア。夏のとつつきから秋へぶつかけて。毎日〳〵。づなく風のふいたとがあり申た。其じぶんハアあんでも金儲のウすべいとつて。いろ〳〵首さアひねくりまはいて。とつけもないとをおもひついたアもし　彌二「はての　六部「イヤサ箱屋をおつぱじめ申たは。あにが重箱だアの櫛箱だアのと。いろ〳〵箱共を。づなくかいこんで賣つもりだアもし　彌二「ハテ風がふいたによつて。箱屋とはどふいふあんじだの　六部「さればさア。わしがハアおもいつきにやア。あにが扱。まいにち〳〵。とひやうもなく風がふいて。おふどではがいに。砂ぼこりがたち申すから。おのづと人さアの目まなこへ。砂どもがふきこんで。眼玉のつぶれるものが。たんと出來るだんべいとおもつたから。そこでハア。わしが工夫のウして。せけんの俄盲が。外にあじやうせう

○**箱屋商賣**　この落語、西田維則が漢文にて記せる「萑談奇叢」にあり。

事はなし。みんな三味(しやみ)のウならはしやるだんべい。そふすると三味せんやどもが繁昌(はん)して。せかいの猫(ねこ)どもが打殺(ぶちころ)されべいから。そこで鼠どもがづなく(無上)あれて。あんでもせけんの箱どものウ。みんなかぢりなくすべいこたア。目の前だアもし。コリヤハア。こゝで箱屋商賣のウおつ初めたらうれべいこたアちがいはないと。あにがハア身上ありぎり。箱どものウ仕入たとおもはつしやい　彌次「コリヤアいゝおもひつきだ。大かたうれやしたろふ　六部「イヤひとつもうれましない。そこでわしもハア是ほどまでに工夫(くふう)のウして。ぜつひ(是非)まふかるべいとおもつた事が。つつぱづれ申たから。しよせんハアあじやう(何様)してもいかないこんだと。發起(ほつき)のウして六部(ろくぶ)になり申た。兎角(とかく)世かいは。おもふよふにやアならないもんだアもし　北八「ハア感心(かんしん)なおはなしだ。時に又。順礼さん。おめ

へはどふいふ事からおもひついて順礼にやア出なすつた　順禮「コリヤハア。わしも序(ついで)に懺悔(さんげ)ばなしのウしますべい。この娘はコリヤアふとり(一人)の孫でござるが。わしどもはハアかわつたこんで。佛縁のウ結(むす)び申た。わしは日光のほうでござるが。さだめてそれさまたちも。はなしに聞てゐやり申すだんべいが。わしどもが國なぞは。雷がたくさんで。此二十年ばかしも。あとのとであり申たがふと夏でかく雷がな

○天竺　天のこと。

り申てわしどもがせどぐちさアへ。おつこちたとおもひなさろ。そふするとハア其雷どのが。榎のかぶつちいで。でかく屁をうち申て。疝氣がおこつたとさはぎやる事よ。あにがそこで。天ぢくのウへ歸るべいともできないから。わし共の内で養生のウしている内。恥さアかたり申さにやアりがきこへ申さないが。其雷が。わしどもの娘と。がらいねんごろのウしまして。互にハアはなれべいよふすもおざんないから。すぐにその雷どのをむこにとつたとおもひなさろ。そこでハア天ぢくの親方どのから。夕立の時分は。手傳てくれろとつて。夏中はたのまれていきやり申たが。ふと夏上がたさアへかせぎに行とつて。出たなりけりでかへらぬとおもひなさろ。あまつさいその時。わしが娘はおつぱらんではいるし。あにがハア案おるまい事か。大かたどこぞへおつこちて。腰骨がなぶんぬいて。わづらつてでもゐるだんべいと。おもつたばかしで便きくべいにもあてづつぽうなり。コリヤハアあんたるこんだとおもつているうち。友達の雷どのが來て。これのむこどのはハア　熊野うらへおつこちて。鯨にがらゝ呑れたとのはなし。ヤレさて悲しいこんだと。娘もなきやる。わしもハア片腕のウもがれたやうにておもひおりましたが。あんとすべい　せうとがない。そんだいにやア。むすめが雷どのゝ種をおつぱらんだから。鬼子でもうみおるべい。それにハア親雷の跡を。つがせべいとたのしんで。あんでも鬼の子をうむよふにとて氏神さまへ願のウかけて。祈た所が。因果なこたア生れた子が此娘でござり申す。そこでハア。わし共もちからのウおとして。是ほど祈たのに。鬼はうまず。しかもこんなに滿足な。人間の子をうむといふは。よく／＼の因果だとあきらめて。罪亡しにこりよヲつれて順禮とおもひたつたアもし。わしどもほど。いんぐわなもなアないとおもやア。はなしよヲするさへむねがつぶれ申は　ト なみだながらにはなすうちにやよもふけければあるじはゞそれ／＼

に、ねござなごあてがひて はゞ「サアみんな。そべらしやいませ。内がゞいにせばいから。わしと順風の女のしうは。天上へあがつてねますべい ト九ツはしごを二かいへかけて、じゆんれいのむすめをつれてあがる、六部は笈のうちより紙帳など出しかぶる、あるじのおやぢもじゆんれいらがうすへらなるふとんのやふなものをひつぱり、いろりのはたへころげてねる 北八「コリヤ小便がもるよふだ 彌二「おいらもいつしよにいかふ トうらぐちへ出 彌二「アノ順礼め。ぶつちめよふとおもつたら。二かいへ行おつたいまいましい 北八「さつきからはなしている内。そつと手をにぎつたり。尻をつめつたりして。ちわをしていたがおめへしるめへ 彌二「うそをつくぜ 北八「うそでない。今夜アノ娘をぶつちめて見せよふ 彌二「はやいおとこだ トうちへはいりうらぐちをしめてねる かゝる木賃どまりのわびしきも。はなしのたねとはいひながら。凌ぐべきむしろ屏風も破壁をもる風の音いたくも更行鐘に目覚て。北八あたりを伺ひ見れば。皆旅労れのかけ合鼾ゴウ〳〵スウ〳〵ムニヤ〳〵〳〵 時分はよしときた八、そつとおき上れども、あかりはなし、まつくらやみ、そこらあたりを、さぐり廻して、よふ〳〵とはしごにとりつき、二かいへあがり見れば、天井はたけすのこにて、そのうへにむしろをしきたれば、あるくと、ミシリ〳〵となるにおどろき、やがて四ツばひになつて、さぐりまはり、むすめとおもひ、はゞアがねている、ふとんの中へはいこみ、そろ〳〵なでまはし、ゆすりおこせば、はゞアめをさまし 「だれだ。あによチする トいふこへに、北八うろたへ、さてはかどちがへせしと、にげだすひやうしに、おしへたけのすのこをふみぬき、下へごろりおちるおと、ミシ〳〵ガラ〳〵ストウン内のおやぢめをさまし 「あんだ〳〵 二かいのはゞア「あんだかしらないが。とつぴやうしもない。みんなおきなさろ〳〵 このおとにろくぶも順禮もおきあがり 六部「どゑらいおとがした。あかりをつけなさろ。まつくろくて。あんだかかんだか。しれないぞ こゝにあやしいかな、北八てんじやうをふみぬき、下へおちたところは何か箱のよふなものゝ中へおちていつかうにわからず、あしにころ〳〵となんだかひつかゝるゆへさぐりて見ればほとけさまのごくぼうなりさてはぶつだんのなかへおちしとくるしきうちにもおかしさはんぶんこのまにかけいでんとするにはやあかりをとぼして、内のおやぢ 「あんだか。ほとけさまの中へおちたそふだ トぶつだんのとをひらけばおもひがけなく北八がはひ出たるゆへきもをつぶして おやぢ「イヤこの人は「モシ身延様へはどふまいります「ばかアいわつしやい。こんたアまあ。アゼそこへはいらしやつた「イヤわつちは小便におきた所が。ツイ戸まどいをして「ア二戸まどひをしたイヤこの人はほとけさまの中へ。しやうべんをしやせぬか トぶつだんのうちをのぞき おやぢ「ヤア〳〵こんたア天

○順風　順禮の誤。

○九ツ梯子　九段梯子。

○紙帳　紙にて作れる蚊帳。

○竹簀子　竹を網代の如く組み、貫の通れる上に張れるもの。

○とつぴやうしもない　銅鈸子。神樂に附物たる銅鈸子が無いといふことより、意外、案外などいふ意に使ふ。

○身延様へはどふまいります　乞食の言葉。膝頭に草鞋をつけ、手に下駄を持ちて四つ這ひに這ひ行く乞食が「身延様はどつちへ参ります」といふ。北八が佛壇より四つ這ひになりて出でたるより、この言葉を用ゐて洒落たるなり。

○あじやらしい　忠臣藏九段目、「夫婦中むつましいとてあじやらにもり〳〵をはしーこと」かりそめにもの意。

○高野六十　高野六十、那智八十といふことあり。高野の紙は一帖六十枚、那智の紙は一帖八十枚といふことより出でたりといふ。又高野山は高野山にては、老年に及ぶ小姓を、といふもありての意にて、男色關係の言葉なりともいふ。

上からおちめさつたな　北八「アイサ〳〵い。アノ猫におはれておちやした　おやぢ「アニこんた鼠じやアあるまい猫におはれたゝアあんたるこんだそしてアぜ。天上へあがらしやつた　北八「イヤわしはふんどしを鼠にひかれたかち。もしや二かいにでもあろふかとそれをさがしに　トいゝわけをしているうち上からはしごおりて來り　「イヤ〳〵そふじやアござらないわしもハア六十にない申がどこの國にかあによ〳〵すべいとおもつてわしがひところへはひこみめさつた　おやぢ「ヤアノ〳〵こんたア氣がちがやアせぬかわし共は二十年もこつちイ、そんなあじやらしいこたア。中絶のウしてるますに。アノしはくたなばゞアが所へ。はひこむといふは。イヤはやこんたは。見たくでもない人だ　北八「イエもふ御めんなせへコレ彌次さん。ねたふりをしてるずとおきてくんな　トゆりおこされておきあがり　彌二「どふもわけへものといふちなア。あとさきのかんげへがござりやせん。どふぞりやうけんしてくんなせへ　トろくぶやじゆんれいもともぐ〳〵くちをそへてやう〳〵とおさまり、きた八もゆかた一まいうりしろなして、こんじやうゆつくろひちん、少々出し、さらりとすんでしまいければ、はじめなくよあけて、彌次郎北八ぶたう〳〵にこの所をたちいで行過ぎかに　彌二「きた八。でへぶふさぐの。小田原の泊では。すいふろのそこをぬいて。貳朱ふんだくられ。又ゆふべは二かいをぶんぬいて。三百とられたもちろゑがねへぞ　北八「イヤ面目しでへもねへ。いま〳〵しいが一首詠だ

順礼のむすめとおもひしのびしはさてこそ高野六十の婆々

彌二「ハヽヽゆふべ。戸まどひの言譯もおかしかつたがふんどしを鼠にひかれたとは。いゝこぢつけだ。イヤそれでひとつ。咄をあんじたがどふだ　北八「コリヤおもしろへ。きゝてへの　彌二「まづこふだ。ゆふべのよふに順礼や六部と一所に。木ちんどまりをしやした。時に手めへが夜中におきて。何かまごつきやす。そふするとみんなが目をさまして。コリヤおめへ。何をしなさるといふと。手めへがいふには。イ

〇鼓弓　樂器の名。

〇太棹　義太夫の三味線。

ヤわしは。ふんどしを鼠にひかれやした。たしか二かいのほうへ。ひいていつたよふだといふと。順礼も六部も。そふいゝなされば。わしも枕元に置たふんどしが見へぬ。イヤわしがのも。こゝにおいたがない。コリヤアみんな鼠にひかれたもんだろふ。なんでも二階へいつて見やせうと。皆つれだつてはしごをあがりやす。そふすると二階のすみのほうで。三味線の音がするイヤこいつはふしぎだと。あがり口からすかして見れば鼠どもが大ぜいよつて。みんなのふんどしをひろげて。見て。いつぴきの鼠がいふには。おいらがひいてきた六部のふんどしは。振ふと三味線の音がするはどふした事だやら。がつてんがゆかぬといゝながら。其ふんどしを口にくはへて。ふるつて見るとなるほど。チヽヽチン〳〵なぞとなりやす。そこで又。外の鼠がいふには。六部のふんどしにかぎつて三味線のねがするもふしぎだ。ものはためしおいらがひいてきた。順礼のふんどしをも。ふるつて見よふと。おなじく口にくはへて。ふるふと。是もチヽチンチン〳〵と。なりやしたこいつはめうだと又一疋の鼠がおれは北八とやらいふ男の。ふんどしをひいてきたがコリヤアゐつちうだから。短いだけで鼓弓のねがするだろふと。くはへて振つてみれば。ヅヽンヅン〳〵と義太夫三味線のねがしやすそこで鼠どもがこいつはふしぎだ六部や順礼のふんどしは。みなかはいらしい哥三味せんのねがするになぜ北八とやらがふんどしは。義太夫三味せんのねがするだろふといふとすみつこの鼠がしばらくかんがへソリヤアそのはづだはへ。ナゼそのはづだ。ハテ北八とやらは。太かた。ふと棹だろふよ　北八「ハヽヽヽ奇妙〳〵　ト此はなしのうち由井のしゆくにつくころ雨がはよりよびたつるこへ　ちやや女「おはいりなさいやアせ。名物さとうもちよヲあがりやアせしよつぱいのもおざいやアすお休なさいやアせ〳〵
彌二「エ、やかましい女どもだ

○女の聲はかみそり　きいきい鋭きを云ふか。

○髪由井　髮結に云ひかけたり。

○根ぶと　腫物。下の句「霽あがり」を「腫あがり」にかく。

呼たつる女※の聲はかみそりやさてこそ爰は髪※由井の宿

それより由井川を打越。倉澤といへる立場へつく爰は蚫榮螺の名物にて。蜑人すぐに海より。取來りて商ふ爰にてしばらく足を休めて

爰もとに賣るはさゞゐの壺燒や見どころおほき倉澤の宿

それより薩埵峠を打越。たどり行ほどに。俄に大雨ふりいだしければ。半合羽打被き。笠ふかくかたぶけて。名におふ田子の浦。清見が關の風景も。ふりうづみて見る方もなく。砂道に踏込し。足もおもげにやうやく興津の驛にいたり。爰にあやしげなる茶店に立寄　北八「ヂイばあさん。ソノきなこをつけた。團子を貳三本くんなせへ　彌二「さて〳〵久しぶりでおめへの顏を見たは。いつもお達者でめでたい。ときに此子は。ちつさな時見たよりかア大きくなつた。姉樣は達者かの　はゞ「わしは子どもはおざんない　彌二「そんなら孫か　はゞ「インネ。子がなけりやア孫もおざんない　彌二「ハテノおめへの孫でなけりやア。たしかどこのか孫であつた　はゞ「インネ馬士じやアおざんないとなりのかごやの子でおざるは　彌二「ハアそふか。コウあの子。團子がふたつあまつたソレくいな　かごやのこ「うらアやアだ　彌二「ナゼいやだ　かごやのこ「ナニ糠アつけただんごはやアだ　彌二「ナニぬかをつけたものか。コリヤきなこだ　はゞ「インネわしらがとこじやア。ぬかアつけてうり申　彌二「エ、どふりでざら〳〵するとおもつた。ペツ〳〵。そんなら犬にやろふコ、、、、　犬「わん〳〵　彌二「ソリヤやるはあんといへ　犬「あアん　彌二「ア、おしいもんだ

トのこらず犬にやつてしまいむねをわるくしてこゝをたち出たどり行に、猶あめはしきりにふり〳〵きて、いつこうしやれもむだもいではこそ、たゞとぼ〳〵とあゆみなやみて、ほどなく、江尻のしゆくをうち過けるに、こゝにて雨もはれ〳〵れば

降くらし富士の根ぶとをうちすぎて江尻に雨の霽あがりたり

○丁場の脊戸　馬士等の仕事に行く溜り。人力車などにも丁場と云ふ。
○すさ　藁の細かく切りしもの。
○むせう　やたらに同じ。
○かぢれ　習ふこと。
○吉田の的ば　吉田は地名。古くこゝに鐵砲の的場あり。
○梅の木の立場　不明。山中共古翁説に、清水と江尻の追分のところに藤棚の立場と云へるあり、その邊のことか、東海道に梅の木といふは見附の宿にあり、或はそれを間違へたるかとなり。

雨やみたればおのづから。行かふ人の足もかろげにからしり馬の鈴の音もいさましくシヤン〳〵まごのうた「よんべナアしのんだらアヱおさんどなアまづいイあせさねてゐた。がらいよなべの飯がすぎてつゝぷしたア、、へ引ヱ、このほてつぱらアまたばりをこきやアがる。ついでにうらもやらかすべいシヤア〳〵　さきへゆく馬かたあとをふりかへり「次郎ヤイにしがおまア。だがおまだ　あとから行馬士「コリヤアド下町のさか屋のおまよ。あしこのやろうめが。がいにづなくつかやアがつたんで。おまアゐづい。きんにようも。清水へ四くらいつてかへると。役があたつて。府中迄とつぱしらかしたア。駄ちんはみんな。うらが呑でしまつて。がらおまにくわせべいもなアなし。丁場の脊戸につなひでおいたら。雪陣のやによヲがらゝみんなくらやアがつた　さきへ行馬かた「アノ酒屋のかゝあめはしよつぱいやつよ。うらがあしこにゐる時分にやア。飯の中へすさをまぜて。くはしやアがつたそれにあんだかハア。うらを見ると。むせうに字を書ならへの。イヤ算盤をかぢれのと。いろ〳〵な戯言をつきやアがつてうらをあしこの。伴頭に仕よふといやアがつた。其手をくふものか。業さらしなドウ〳〵　北八「まごどん。火をかしてくんなせへ　馬士「アイ〳〵おまいちやアおゐどだな。おゐど衆は氣がづないきんにようらが府中から江尻迄三百でのせた旦那がおゐど衆でゐい旦那よ長沼までくると其旦那がいふにやア江尻まで三百じやア安いから酒てを二百ましてやろふそんだい酒はべつにこつちからかつて呑せろとて吉田の的ばでたらふく酒を振廻しやつたそれから又いはしやるにやアコリヤまごにしやア一日おまを引てあゆんで草臥たろふ是からうらがおりてにしを此おまにのせよふといわつしやるコリヤハアあんたるこんだうらア乗こたアやアだといつてもきかない旦那よぜつぴうらにのれとつてそんだい乗賃を二百やろふと梅の木の立場からとう〳〵うらをほいのせて江尻

○しけこむ　コツソリ入込む。
○二丁町　安部川彌勒の手前に大門あり、大門を入りて二丁、之を二丁町と云ふ。
○あべ川彌勒　新通り十丁目より先を安倍川町と云ひ、その少し先を彌勒と云ふ。安倍川町は遊女屋のある所。
○すがゞき　清搔しに三味線を弾くことを云ふ。新吉原に限りしことのやうに云へど、こゝにもありしと見ゆ。
○客人の神　末社のこと。洒落本に例多し。
○祖父ばしより　あづまからゆい事と「嬉遊笑覧」に見ゆ。
○そゝり　緩やかなこと。散漫

へくるとおきつ迄おまア取のだが草臥たろふからおまアとつたぶんでだちんやろふと又二百下さつたあんなへい旦那はめつたにやアないもんだ　トはなしの内此馬にのつているたび人馬のうへにてそらいびきをかく「ゴウ〳〵　馬士「ヲイ旦那あぶない。目をさましなさろ　たび人ハこゝろて目をひらき「一馬が埒があかぬから。ねぶけが出た。きのふ三嶋から乗た馬は。よい馬であつた。そして馬士がとんだ氣のよい男よ。三嶋から沼津へ百五十で。ねをして乗た所が。馬士がいふには。旦那はこんな。はやい馬に乗て。今に落よふか。イヤめつたに。いねぶりもならぬなどゝ。心遣ひして居さしやるだろふ。それがきのどくだから。駄賃はモウもらひますまいといゝおる。それから二三まいばしへくると。旦那は馬のくふで腰がいたみませふ。ちとおりてお休なさい。酒でもあがるなら。酒手はこつちからあげませふと。馬かたのほうから。百五十くれて。沼津へくると。さきのしゆくまで。おくつて上たいが。わしが馬ははねますから。外に馬を取て乗ていかしやれ。駄ちんはわしが。進ぜませうと。又百五十たゞくれた。あんな氣のよい。馬士もないもんだ　トはなしの内、此馬を引馬かた、あるきながら「ゴウ〳〵〳〵ムニヤ〳〵　此はなしに彌次郎北八も大きにはらに入、あほむさくなしに、府中のしゆくにつく、先傳馬町に宿をかりて、それより彌次郎だし、るべのかたへたづね行、こゝに荷物のさいかくと、いたし大きに、いそぎ出、こやどへかへり、なんでもこよひは、かねてきゝおよびし、あべ川丁へしけこまんと、きた八もろとも其したくをして、やどのていしゆをまねき　彌二「モシ御ていしゆわつちらア是から。二丁町とやらへ見物にいきてへもんだが。どつちのほうだね　ていしゆ「安部川の方でござります　北八「遠いかね　ていしゆ「爰から廿四五町ばかしもあります。なんなら馬でも。雇ておあげましやうか　北八「こいつはい、　彌二「から尻にのつて。女郎買もおもしろい〳〵　頓て爰より空尻馬に打乗。ゆくほどに。かの安部川まちといへるは。あべ川彌勒の手前にて。通筋よりすこし引こみて大門あり。爰にて馬をおり廓に入て見るに兩側に軒をならべて。ひきたつるすがゞきの音賑しく。見せつきのおもむきは。東都の吉原町におほよそ似たり。客とおぼし

きが黒き木綿に紋のつきたる羽折などきて。手拭のさきを結ずしてかぶり。おくり行茶屋の女は。燒杉の駒下駄をひきずり客人の神と見へしは。おほくは股引草鞋にて。いづれも祖父ばしよりなり。そゝりてやいに前垂がけの競あれば。棒のさきにもつこうなどくゝりつけて。かつぎあるくひやかしあり。行かふ男女は。開帳參の人のごとく。更に風俗定まらず。又繁昌は言斗なし　向ふよりくるは地まはりと見へて、かたのしまがら、かはりたるどてらをきて山だしのひくき角下駄に竹のかはのはなをすげたるをはき、さらしのこむぐひをゐくびにかぶり、往來の人に行あたりて「あんだイ。コノおんぢいはまなこをはだけてとをりやアがれ。アゼおれにぶつつかつた　あちこちからくる地廻り「ヤイ市イ。あんとしたそいつ。へこたらしてやらずい　これはへこませるといふがごとし　さきのあいて「くらがりでツイ。がらゝ行合ました。かんになさい　ト行過るそれより此てやいかうしさきをのぞき　地廻「アノ壁のきしにゐる女のつらは。淺間さまの天の面のよふだ。アリヤ立て行ア。せいのみじかい女郎だ。梶原の馬がくつた。笹葉を見るよふに。半分しかア育ないは　今ひとりのがまはり「こゝの内の着物はみんな七間町の硯ぶたのよふだナア　このかぢはらの馬がくつたさゝのはといふは、きつねがさきのかぢはら堂の故事と又七間丁のすゞりぶたといふはきじろいろに、あぶらゑのかいてある、するがざいくのすゞりぶたの事と、きものゝもよふをあぶらゑに見たて、のゝしやれたるべし　彌二「ナントどこぞへあがろふか　北八「まちなよ。たしかにこゝは壹分と。拾匁と。貳朱だけな。壁のほうにしよふ大かた拾匁だろふ。むかふの暖簾はなんだ。しなの屋。こちらがてうじや。こゝが大和屋だな。しかしどふしてあがるのだか勝手がしれねへ　トかうしさきをうろついている内、客人ひとり、あがるを見すまして　きた八「よし〳〵サアこゝにしやせう。彌次さん見たてねへ　彌二「チットきまつた。サアあがろふ　トつれだちてずつとのれんのうちへはいると、わかいもの「コレハよくお出なさいました。先うへゝ　ト二かいへあんないする、二人は見たてた女郎をちうもんすると、すぐに其へやへつれて行、あたりを見ればとこのまに琴もあり、花もいけてあり、すべて吉原小みせのへやもちのごとし、こゝは酒代べつにかゝると見へ、わかいもの「御酒はどふいたしませう　北八「酒も出してくんな　わかい「ハイ〳〵とつて上ませう　ト此内彌二郎があいかた、名は小ざゝの、うへたの小そでしまじゆすのおび、そらいろちりめんのうちかけ、北八があいかたいさ川しまちりめんに、きんもふるのおび、くろちりめんの打かけ、いづれもみなもみうらなり、座につくときじろいろのたばこぼんをひかへて　小ざゝの「よくおざいました　いさ川「エ、見た

なること。

○ひやかし　素見。看過。

○開帳參の人のごとく　ぞろ〳〵來ること。

○地まはり　近所廻りの人間。品物にも地廻り物といふあり。

○山だし　山家から出たといふ意。材木にも[illegible]鑛にも云ふ。下女下男などに云ふは山出よりの轉訛か。

○天の面　アマの面。舞樂の面のこと。

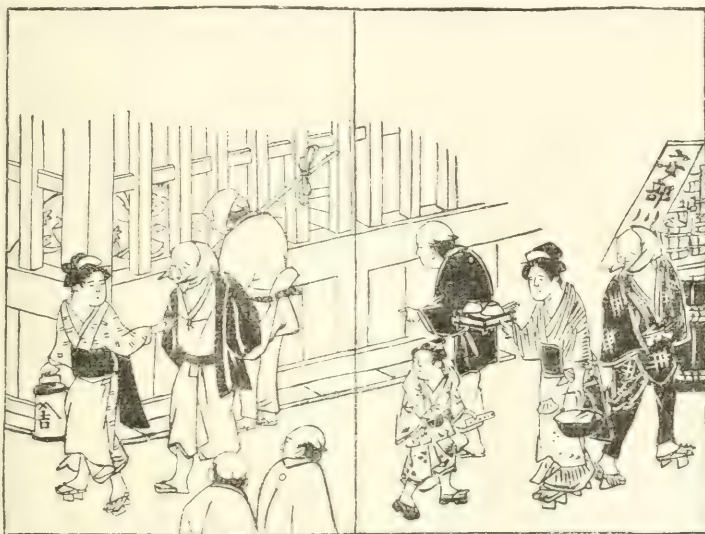
○梶原の馬がくつた笹葉　山中翁說に、靜岡市に入る東手前に梶原景時自殺の所あり、葉の先半は枯れたるを、[illegible]食ひたるものと云ひ傳ふるよし。

○七間町　靜岡の町名。金物問屋あり。

○きじろいろ　木地の木理を現せるもの。黑漆色に對して云ふ。

○壹分と拾匁と貳朱　一分は文化初頃の相場にて一貫六百二十四文、十匁は一貫八十文、二朱は八百十二文。いづれも女郎の相場なり。

くでもない　アノがきヤアまだ。たほこもいれないヤア。小さめヤア引く〳〵　彌二「サアおめへがた。もつとこつちへよんなせへ　わけへしゆ　さけをはやく　すかいのもの「かしこまりました只今　トいゝすてゝ行ほどなくさかづきだいてうしすゞりぶたをもち出おさだまりのさかづきもそれ〲にすんでしまい　彌二「わけへしゆひとつのみな　わかいもの「ハイ　彌二「ソレさかな　トたんりやう一ツはづな　わかいもの「アノヤ是はハイ　トいたゞいてたつてゆく、入かはりてかぶろ小さめ、かけてきたり　かぶろ「アノヤ今吉野屋から磯次さんがおざいましておまいに用がありますからちよつくりきさしやいまし　とさヤア　いさ川「今いかずに　小ざゝの「ハレ小雨やア久能の仙さんはおざつたか　小さめ「インヲ　小ざゝの「ばあチヤ。おらやだヤア。こんぢうからいかず〳〵といつてよこして。がいに人をつるくるヤア　北八「コウおめへがたア。もつとこつちへよつて。一ッ呑なせへ　いさ川「アイまあおまいちあがりまし　此内わかいもの二人さへ、やりてかつれだち八寸のうへになにかさうばこをさげ　こもちいご　やりて「たゞ今は有がたふおざります　わかいもの「わたくし金太と申ます。是は權右衞門。已後はおたのみ申ます　トていねいにれいをいつてたつ　彌二「ハヽア爰では花もひつぱりにもらう極とみえた。若者に金太權右衞門といふ名

○やりて　「太平記」に牛遣のことを「やりて」と云ふ。鎗手と見て、香車、カシヤといふ說もあり。
○八寸　膳の一種。川柳に「八寸を四すくつ食ふ仲のよさ」
○ひつぱりに　互に引合ふこと。賭合。芝居語より出でたるか。

○紀の字や　「吉原大全」に享保の頃喜右衛門といふ者料理に功者なりしより、臺の物屋の通稱となる。人の名にも物の名にも頭字を呼ぶこと、まゝあり、喜右衛門の喜の字を呼びしなり。吉原の臺屋は皆紀の字屋と稱す。

○がらい　がらりに同じ。

○日天さま　天道様に同じ。

○彌弟　「色道大鑑」に「額髮みぢかきは野體なり」などあるに同じ。「彌弟」は借字。この場合は嘲弄の意あらん。

○髮を切らずに　性惡の客の髮を切ること「吉原大全」にあり。寶曆八年版「水月物はなし」にも見ゆ。

ちめづらしい　北八「コノ重箱はなんだ。ハヽアあべ川の五文どりか。是が二朱のかへし。紀の字やの臺といふものだのハ、、、、　ト此内らうか何かさはがし大ぜいのこへにて、すむのすまぬのといゝわいきこへ、となりざしきへみな／＼はいる　北八「そう／＼しいなんだ　いさ川「なんでもおざりましない。アリヤア性のわるい客衆をめつけて。つれてきたのでおざいますヤア　彌二「こいつはおもしろいドレ／＼　トふすまをすこしあけて、となりざしきをのぞき見れば、大ぜいの女郎がきやくひとりを中にとりまき　女郎「おまい。こんぢうから。こつちイはなぜきましない　なひとりの女郎「てうじやへばつかしおざるから。とこなつさんが腹アつつたつも。むりじやアおざりましない　このきやく人は山家の人「ヤレ扨。わしはハイ。おつといもきんにようも。來ず／＼とおもつたが。がらい用ができて。こられなくなつた。ソリヤアハイてうじやへも川なべのおんぢいどんの附合で。いかずこたアいつたアけれど。アニハイ。爰の常夏あんねへと。申かわしたこたアあるし。日天さまかけて。まづい心じやアおざらないヤア　女郎「ばあチヤ。それでもてうじやの花山さんに。馴染でいかずこたア。ちがひはおざりましないは　客「アニハイ。そんだこたアないこんだが。づなくそふいやアせず事がない　トしをれかへつている、こゝの内のあね女郎、名はとこなつ、うちかけをつまみあげ、きせるたばこ入をもちそへ、つか／＼とざしきへはいり　とこ夏「彌弟さん。こんぢうからあいましないが。よくおざいました　客「よかアきましない。かんにしなさろ　とこ夏「なにも。かんにせずこたアおざりましない。わしもハイ。此内ではあんねい／＼といわれる。女郎でおざいます。こんなアに顔をへしつぶされちやア。ほうばいしうの前へ。たゞずよふがおざりましない。とてもハイ。これつきりの縁なら。おまいちのよふな。性根のわるい客衆は。見せしめのため。わしがせずことを見さしやいまし。ソレ夏菊さん。さつきの剃刀をもつておざいまし　客「ヤレこいやア。わしよヲどふせずとおもつて　とこ夏「どふせずもんか髮をきらずにヤア　トかみそりをもつて立かゝれば、きやくはうろたへあたまをかゝへこ　客「ヤアレ。コリヤさて待なさろ／＼　しんぞう共くちぐ／＼に

○けんつう　發端に「おけんつう」とありしに同じ。髮の毛の少きこと。

○一九が中田やの勝山に云々　勝山は吉原江戸町一丁目[illegible]側[illegible]まがき[illegible]の府中田屋茂登抱の妓（享和元年細見）。一九云々の事は享和二年版「倡客[illegible]學問」中にこれらしき記載あり。事實を持へ[illegible]のなるべし。

まだずこたアおざいましない　客「そんだアとつて。此ちつぽけなまげの。ちよんさきさへきらないに。夫そりよヲハイ。きらずこたアゆるしなさろ　ここ夏「ナニゆるさずもんで　客「アレこりや　ここ夏「ソレきらずに　客「ヤアレこりや〳〵　トにけだすをとりまきてにがさばこそ、よつてかゝつてあたまをむしりちらかす、いつたいこのきやく人、おけんつうにて、みなつけがみなれば、まげもびんもおちてしまい、きやくはあたまをなでまはして「ヤアこりやハイ。あたまアむしりなくしたは　女郎みな〳〵「ばあチヤチホ、、、　客「ヤレ笑所じやアない。コレわしはハイ。てうじやへはいくまいから。あたまア出してくれなさろ　ここ夏「わしやアしりましない　客「アレハイ。夏ぎくどのがかくした。サアあたまアはやく出しなさろ　ここ夏「おまいハイ、これでもてうしやへいかずか　客「モウいかない〳〵　ここ夏「ほんとうにかヤア　客「天照皇太神宮さまかけていかない　ここ夏「すんなら夏菊さんだしてあげさしやいまし　トここ夏のさしづに、かくしたるつけがみを、出しわたせば　客「ヤアまだ。たらない　なつぎく「モウそればつかし　客「アニハイ。まだかた小びんが。そこらにやアないか。尋てくれなさろ　女郎「コレカあるヤア　客「それだ〳〵　トじしんにあたまをさぐりまはして、まげさきをよこちよにくつつけ、ためいきをつきて　客「ヤレ〳〵ゑずいめにあつた　みな〳〵「ヤチホ、、、　ト是より出て、[illegible]の酒になりて、いろ〳〵[illegible]、彌次郎北八[illegible]のはなしをまじり　彌二「いづくのうちでもあろやつだが。よつぽどおもしろかつた。てうど去年のはる。一九が。中田やの勝山にしばられた時　おんなざまであつた。ごうさらしな　ト此内わかいもの来り「モウお床にいたしませう。チトあつちらへ　トきた八はじぶんのあいかたのへやへ行き、そのうち、わかいものここをさりて、二人ながらひきわかれてしばらくまどろむ　斯て一すいの夢はさめて。あかつきのなごりをおしみ。彌次郎床を起出れば。北八も目を摺ながら爰に來りて。打つれ立。梯子をおりるに。皆〳〵おくり出て。挨拶そこ〳〵にひきわかれ。傳馬町さして急ぎ。歸り來りければ。はやくも宿には朝めしの用意とゝのへ。膳をすゆるに。支度あらましにして。やがて此驛を打立けるが。今もどりし道をますぐに。ほどなく彌勒といへるにいたる。爰

は名におふあべ川もちの名物にて。両側の茶屋。いづれも奇麗に花やかなり　ちゃや女「めいぶつ餅をあがりやアし。五文どりをあがりやアし〳〵　弥二「おいらアゆふべ。貳朱がもちをくつて來たから。モウこゝではくふめへ　北八「そふさ〳〵　ト此内あべ川の川ごし道に出むかひて　「だんな衆おのぼりかな　弥二「チイきさまなんだ　川ごし「かはごしでござります。やすくやらずに。おたのん申ます　北八「いくらだ　川ごし「きんによふの雨で水が高いから。ひとりまへ六十四文　北八「そいつは高い　川ごし「ハレ川をマアお見なさい　ト打つれて川ばたに出　弥二「なるほど。ごうせいな水せいだ。コレおとすめへよ　川ごし「ナニおまい。サアそつちよチつんむきなさろ　ト二人をかたぐるまにのせこ川へざぶ〳〵とはいる　北八「ア、なんまいだ〳〵。目がまはるよふだ　川ごし「しつかりわしがあたまへとつつきなさろ。ア、コレ。そんなにわしが目をふさがつしやるな。向ふが見へない　弥二「なるほど深いはコレおとして下さるな　川ごし「アニおとすもんかへ　弥二「それでもひよつと。おとしたらどふする　川ごし「ハレおとした所が。たかでおまいは。ながれてしまはしやるぶんのとだ　弥二「エ、ながれてたまるものか。イヤもふきたぞ〳〵。ヤレ〳〵御くらう〳〵　トかたぐるまよりおりてちんせんをやり　弥二「ソレべつに酒手が十六文ヅヽ、　川ごし「ヘイコレは御きげんよふ　ト川ごしはすぐに川かみのあさいほうをわたつてかへる　北八「アレ弥次さん見ねへ。おいらをばふかい所をわたして。六十四文ヅヽ、ふんだくりやアがつた

川ごしの肩車にてれ〳〵をふかいところへひきまはしたり

夫より手越のさとにいたるに。又もや俄雨ふり出して。たちまち車軸をながしければ。半合羽とり出し打かづき。足をはやめてほどなく丸子の宿にいたる。こゝにて支度せんと茶やへはいり　北八「コウ飯をくをふか爰はとろゝ汁のめいぶつだの　弥二「そふしよモシ御ていしゆ。とろゝ汁はありやすか　ていしゆ「ハ

○安部川餅　名物。燒餅に黄粉をつけしもの。「五文取」とあれは、一つを寛永通寶五個に賣りしなり。

○川越　寶暦五年の「東海道巡覧記」に「徒越、平常涸水、吾越一人前六十文、水引にしたがひ下直になる」とあり。

○たかで　多寡。

○「川ごし」の狂歌　肩車より車の輪にかけて「われ〳〵」と云ひ、更に「ひきまはし」と云ひかけしもの。

○車軸を流し　雨滴の大なるに云ふ、「法苑珠林」云はく大洪雨、其滴甚麁、或如車軸、或復如杵。

○とろゝ汁　鞠子の名物。蜀山人の「改元紀行」に「芭蕉翁が發句に、梅若菜とめでしとろゝ汁いかゞならんと人して求るに麥の飯に青のりとろゝかけかけてきたれり」とあり。こゝに「海苔がこけらア」とあるも、その青海苔なるべし。

○ひやうたくれ　へりたくれなりといふ說あり、然らば謙倒の意なり。

○此のあまア　梵語。梵音アンバー、母と譯す。それより出でしもの。

イ今できず　彌二「ナニできねへか。しまつた　ていしゆ「ハレじつきにこしらへずに。ちいとまちなさろ　トにばかに、いもがにもむか、してざつ／＼とおろしかゝり　いま「おなべヤノ／＼このいそがしいに、あによヲしてゐるだ。ちよつくりこい／＼　トけはしくよびたつるに、うらぐちよりこゞとをいゝながらくるは、女房と見へ、かみはおごろつよふにふりかぶりたるが、せなかにおつこみをせおひ、わらぞうりひきずり來り　いま「今。彌太アのとこのおんばアどんと。はなしよヲしてゐたに。やかましい人だヤア　ていしゆ「アニハイやかましいもんだ。コリヤそこへお膳を二ぜんこしらへな。エ、ソレ前垂(まへだれ)がひきずらア　女房「おまい箸(はし)のあらつたのウしらずか　ていしゆ「アニおれがしるもんか。コリヤヤイ。そのはしよヲよこせヤア　女房「これかい　てい「エ、はしで。いもがすられるもんか。すりこ木のをだは。コリヤ扨まごつくな。その膳(ぜん)へつけるのじやアないは。こゝへよこせといふとよ。エ、らちのあかない女だ　トすりこ木をとつてごろ／＼といもをする　女房「ソレおまい。すりこ木がさかさまだ　てい「かまうな。おれが事より。うぬがソリヤのりがこけらア　女房「ヤレ／＼やかましい人だ。コノ又がきやアおんなじよふにほへらア　ていしゆ「コリヤ擂鉢(すりばち)をつかまへてくれろ。エ、そふもつちやアすられないは。おへないひ※やうたくれめだ　女房「アニこんたがひやうたくれだ　ていしゆ「イヤこのあまア　トすりこ木でひとつくらはせると、女ぼうやつきとなりて「コノやらうめは　トすりばちをとつてなげると、そこらあたりへとろゝがこぼれる　ていしゆ「ヒヤアうぬ　トすりこ木をふりまはして、立かゝりしが、とろゝ汁にすべつて、どつさりところぶ　女房「こんたにまけているもんか　トつかみかゝりしが、これもとろゝにすべりこける、なかふのかみさまかけてきたり「ヤレチヤ。又見たくでもないいさかいか。マアしづまりなさろ　トりやうほうをなだめにかゝり、是もすべりころんで「コリヤハイ。あんたるこんだ　ト二人がからだ中、とろゝだらけに、ぬる／＼じあつちへすべり、こつちへころげて、大さわぎとなる　彌二「こいつはじまらねへ。さきへいかふか　トおかしさをこらへてこゝをたちいで　北八「とんだ手やいだ。アノとろゝ汁でいつしゆよみやした

けんくはする夫婦(ふうふ)は口(くち)をとがらして鳶(とんび)とろゝにすべりこそすれ

それより宇津の山にさしかゝりたるに。雨は次第に篠を亂し。※蔦のほそ道心ぼそくも。杖をちからに※十團子の茶屋ちかくなりて。彌次郎おもはず。さかみちにすべりころびければ

降しきる雨やあられの十だんごころげて腰をうつの山みち

おかべのしゆくのやど引きたらうけて「おとまりでございますか　彌二「イヤわつちらアけふ。川をこさにやアならねへ　やど引「大井川※はとまりました　北八「なむさん。川がつかへやしたか　やど引「さやうでございます。さきへお出なさつても。お大名が五ッかしら。嶋田と藤枝に。おとまりでございますから。あなた方のおやどはござりませぬ。先岡部へおとまりなさいませ　彌二「そんなら。そふしよふか　北八「おめへなにやだ　やど引「相良屋と申ます。すぐにお供いたしませう

ト打つれていそぎゆくほどに、はやくも※大寺がわらのさか道をうちこへて、おかべのしゆくにいたりければ

※豆腐なるおかべの宿につきてげりあしに出來たる豆をつぶして

先この驛にやどをとり一日のあくまではらくたびのつかれを[illegible]やすめける

〇蔦の細道　「伊勢物語」に「蔦かへでしげり心細く」云々とあり、宇津の山道を云ふ。

〇十團子　宗長の紀行に「宇津の山に雨やどり、此茶屋むかしよりの名物十だんごといふ、一杓子に十づゝかならず、めらうなどにすくはせ興じて」とあり。「東海道名所記」には「坂の上の口に茅屋四五十あり、家毎に十團子をうる、其大さ赤小豆ばかりにして麻の緒につなぎ、いにしへは十粒を一連ねしける故に、十團子といふならし」とあり。時代により兩樣ありしか。

〇川どめ　人足の帶の所までなるを平水、その上を乳の下水、脇水、乳の上水などと云ふ。肩越し水となれば川止、更に二時（今の四時間）を經て引かざる時は幕府へ注進するよし、「道中方書留」にあり。

〇大寺河原　不詳。

〇「豆腐なる」の狂歌　豆腐を「おかべ」といふより岡部の宿に云ひかけたり。又豆を潰して豆腐を作ると、足に出來たる豆を潰すにかく。

道中膝栗毛後編

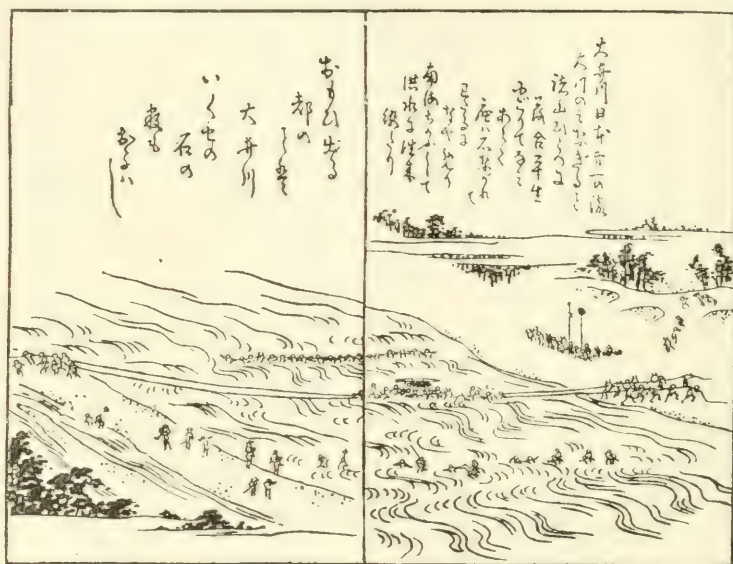
東海道中膝栗毛三編

東海道中膝栗毛三編序

予多年東海道に遊歴し。其行路中。山川の佳境勝景なるを假書して。旅袖に蔵おけるあり。それが中に風土の異なる遺風を錄し。亦土人の言語。都會に替れるくさ〴〵の多かる中に。往來旅客の光景。或は貴遊或は卑賤の患苦。雲駕馬士の木訥なる。出女の姿けはひ。なべて鄙情のおかしげなる行事を。白地にかいつけたる道中の滑稽を。膝栗毛と題號し。初編二編梓にして世に行れ。撰者が偶中の怡稍からず。由是今書肆の需に。三編を輯作し。同志の人の覽に備ふ。將其文の拙は。予が短才の及ざるを。視ゆるし給へとしかいふ

于時享和四載甲子芹陽日

十返舍一九識

凡例

此編は。道中岡部驛より。舞阪に至り。荒井渡船にして一集終る。其余草稿大概出來あれども。急迫にしていまだ挍正するに遑なし。因而四編に悉く著し。嗣に出す。都而初編二篇より。長途の滑稽。其趣一にして珍しからず。好士の見るに倦ん叓を恐れて。聊趣向の轉變せることを輯む。猶四編に至ては叓繁くして。舞坂驛より漸四日市に至て終る。其次五篇は伊勢路にかゝり。古市の遊樂。相の山の光景を盡し。其余奈良越より。大阪へ出る迄を記して。全册此に滿尾せしむ

道中膝栗毛三編

十返舍一九著

名にしおふ遠江灘浪たいらかに。街道のなみ松枝をならさず。往來の旅人。互に道を讓合。泰平をうたふ。づゞら馬の小室節ゆたかに。宿場人足其町場を爭はず。雲助駄賃をゆすらずして。盲人おのづから獨行し。女同士の道連。ぬけ參の童まで。盜賊かどはかしの愁におはず。かゝる有難き御代にこそ。東西に走り南北に遊行する雲水のたのしみえもいはれず。爰にかの彌次郎兵衞喜多八は。大井川の川支にて岡部の宿に滯留せしが。今朝御状箱わたり。一番ごしもすみたるよし。聞とひとしくそこ／＼に支度して。はたごやを立出けるに。はや諸家の同勢往來の貴賤櫛のはをひくがごとく。問屋駕籠をかけり。小荷駄馬飛で走る。街道のにぎはひいさましく。ふたりもともにうかれたどり行ほどに。朝比奈川をうちこへ。八幡鬼嶋をすぎ白子町にいたる。爰は建場にて兩側の茶屋女「おちやアまいるはア。一ぜんめしよヲまいるはア。お休なさいまアし／＼　馬上のうた「うらがお長松のかゝアはたこよナア。あぜさ蛸だとおもしやるへ。八間まなかに足だらけしよんがへドウ／＼　馬「ヒイン／＼　馬かた「旦那衆おまアいらないか。二ひやくだが安いもんだイ。なんなら錢さへくんさりやア。たゞでもいかずに。北八「エヽ二百出しやア夜るの馬にのらアくそたれめが　馬かた「ヤイくそつたれたアあんだイ。うらがいつ。くそを／＼　馬「ヒ

○つゞら馬　「さても見事なおつゞら馬よ、下にやせんしき唐縞の蒲團、ふさんばりして小姓衆をのせて」（松の葉）

○小室節　「松の落葉」にあり。信州小室より出でたるものと云ふ。こゝにては單に馬子唄と見るべきか。

○雲水　行雲流水。普通に雲水の僧と云へど、こゝは僧に限らず、行雲流水即ちそのまゝなる意ならん。

○御状箱わたり　封御状、御状箱の二種あり、官用文書。川水常に復して通籤を出す時、第一に御状箱を渡すの定なり。

○八間まなか　燈火の一にかぶせる「八間」といふものあり。宿屋、女郎屋、湯屋などの入口にあり。「まなか」は一間の半分、三尺の意。「御前義經記」に「今川をこちらへ目より高く指上げ、ゑいさいふて八間眞中三尺五寸投げた」とあり。

○ねぎまのふろふき　「ねぎま」は葱と鮪との汁。略語なり。但し「ねぎまのふろふき」とは、あつきが賞翫のものなれば、吹きながら喰ふゆゑの洒落なるべし。「ねぎま」が冷めては食ふに堪へず、「風呂吹」のことは慶長見聞集、甲陽軍鑑に見えたり。
○きじやき　醤油に漬けて焼くこと。「きじやきを煮た」とは、それを更に煮直したるなり。
○おだぶつ　ござつたなどいふに同じ。
○あぶみがふち　岡部と藤枝との間、鬼島村に在り。
○寒烏の黒焼　血の道の薬なりといふ。「浮世床」にも「そこひか明盲けへ、かん烏の黒焼でもくらやがれ」とあり。眼病の場合にも用ゐたるか。
○ぎやつと　産聲。
○金の鯱　江戸の見附の鯱を金の鯱と云へるか。

、ヒン〳〵　彌二「ナントちよつぽりのんでいかふか。コウ姉さんいゝ酒があらばちつと斗出してくんな　トちや屋へはいる　ちや屋のおんな　一「ハイかんをして上ゲずかヤア　彌二「そふさ。時にさかなは何がありやす　ていしゆ「アイねぶかとまぐろの煮たのばつかし　北八「イヤねぎまのふろふきソレよかろふ　ていしゆ「インチ。ふろふきじやアござらない。たんだ醤油でにたのだアのし。トいゝつゝてうしさかづきをもち出まぐろを皿にもりて持来る　彌二「ハヽアねぎまといふから江戸でするよふだとおもつたら。コリヤアきじやきを煮たのだな。よし〳〵　北「はじめよふヲト、、、、。イヤこの肴はおだぶつだぜ。コリヤきのふのまぐろだな　ていしゆ「インチハイきんにようのいをじやアござらない　彌二「それでもさつぱりくへぬ〳〵　ていしゆ「ハアきんにようのがわるかア。おつといのをしんぜませうか。そんだいにやア酔こたアうけ合だもし　北八「エヽ酔てたまるものか。そして此酒は半分水だペツ〳〵。時にいくらだの　ていしゆ、ハイさかなが六十四文。酒が廿八文　彌二「うまくねへかはりに高いもんだ。サアいかふと錢をはらひ。爰を立出。はやくも鐙が淵といふ所にいたり。例のすきの道なれば。彌次郎兵衛取あへず

爰もとは鞍のあぶみがふちなれど踏またがりて通られもせず

それより平嶋□田中を打過。藤枝の宿近くなりて

街道の松の木の間に見へたるはこれむらさきの藤えだの宿

此しゆくの入口にて、ふろしき包もよいさかさにかけたる、田舎のおやぢ、馬のはねけるにおどろき、にげるひやうしにきた八へつきあたると、きた八水たまりの中へころばれて、大きにおこつてなり、おきあがりて、田舎おやぢをひつとらへて　北八「コノ親仁め。まなこが見へねへか。寒烏の黒焼でもくらやアがれ　おやぢ「コリヤハイ。御めんなさい　北八「ヤイ。御めんなさいじやアすまねへわへ。コレやろうは小粒でも。ぎやつといふから金の鯱をにらんで。産湯

○大江山の親分云々　手知しないといふことを强がりし言葉。「大江山の親分」は酒顚童子。「石像さま」は大山の石尊様。「久米の平内」は淺草に石像あり。「猪の熊」は猪熊入道。「わたりにこよふ」とは一應挨拶に來ることを、わたりをつけるといふ。
○しちむづかしい「しち」は接頭語。「しち面倒」などともいふ。
○年頭　年頭の禮。村役人が揃ひて年頭に行く場合、上に坐るは名主なり。
○けゝれ　「かひがねをさやにも見しかけゝれなく横をりふせるさやの中山」（古今集東歌）、心のこと。
○尻がかいゝ　むず〳〵する。
○づない人　「致訓衆方規矩」に、横柄なることを田舍にて「づない」といふよしあり。
○荒神様　守護神の意か。此方にも荒神様がついてゐる、といふ語屢ゝあり。
○染飯　道中名物の一。强飯を山梔子にて染めたるもの。「東海道名所記」にもあり。

から水道の水をあびた男だ　おやぢ「インチハイ。水をあびたならよふござるが。そんたのこけた所はおまい小便たまりだもし　北八「エヽその小便のたまつた所へ。なぜつつこかしやアがつたへ　おやぢ「そりやハイ。わしもがらい。おまにつつばねられて。そんたにいきやつたのだ。どふもせすことがない。かんにさつしやい　北八「なんだ堪忍しろ。いやだわへ。ほんのこつたが。大江山の親分が鐵棒ひいてわたりにこよふが。石像さまが猪の熊の似づらをかゝせた。てうちんで。路次口から溝板のうへゝ。はいかゞんできても。きかねへといつちやア。久米の平内を居ざいそくにやつたよりかア。まだびつくともせぬやつこさまだア。おやぢ「ソリヤアハイ。あにかしちむづかしいことをいわつしやるが。わしらにやアハイ。かいもくにしれ申さぬ。わしもハイ。此近在の長田村じやア。名のしやくも勤た家筋だんで。今でもお地頭さまの年頭にやア上席ノウせる男だ　あにもがいにけゝれなく。雜言ノウしめさるこたアござんないヤア　北八「エヽわるくしやれらア。尻がかいゝわへ。あたまのかけでもひろわせてやろふか　おやぢ「エレ〳〵そんたアづない人だヤア。わしにもハイ荒神さまがついてるずに。がいに頭ノウたゝかしやんな　北八「エヽ此すいこ木め　トくらはせにかゝる彌次郎兵へ見かねてやう〳〵にひきわけ　「きた八もふりやうけんしろへ。とつさんおめへがぜんてへ。麁相しながら氣がつゐゝ。もふいゝからいきなせへ　トきた八をなだめるうち、おやぢはつらをふくらかし、ふせう〳〵に行過ると彌次郎兵へ

　頭にのつてきた八に今たゝかれし藥罐あたまの親父へこんだ

打笑ひつゝ瀨戸川を打越それよりしだ村大木のはしをわたり。瀨戸といふ所にいたる。爰はたて場にて染飯の名物なれば

　やきものゝ名にあふせとの名物はさてこそ米もそめつけにして

○「やきもの」の狂歌　陶器の産地たる瀨戶を利かせ、瀨戶物の染付を染飯にかけて云ひたるもの。

○へこたらず　へこたれぬこと。弱ることをへこたれるといふ。

○じやうに　方言。澤山の意。

斯てこの町はづれの茶屋に。さきの田舍親父休みいたりけるが。二人を見つけて呼かけ　おやぢ「エレ〳〵さつきやア無祀ノウしました。わしもハイ。ありよふは。一ばいのんだ元氣で。づない事もいゝもふしたが。そんたしゆが了簡ノウしてくれさつたから。※へこたらずに歸村ノウしますは。マアあんでも。祀にさけウひとつしんぜませう。こゝへよらつしやいまし　彌二「ナニわつちらア酒ものんで來やした　おやぢ「エレチヤア。せつかくわしがおもひだアのし。ぜつぴ一ッよからずに。コリヤ〳〵御亭の。味よいさけウ出さつしやいまし　北「イヤお心ざしは忝いが。サア彌次さんいかふ　おやぢ「ハテコリヤ。じやうのこわい人だヤア。じつきにやらずに。ちよつくりよつてくれされヤア　トむりに彌次郎きた八が手をとつてひきずりこむ。ふたりもなる口ゆへ。酒ときゝて少しこゝろひかされて　彌次「ゑいは。北八いつぱいやらかさふ。しかし親父さん。おめへの御ちそうじやアきのどくだ　おやぢ「ハテコリヤよいといふのに。御ていの〳〵。肴アじ※やうにつん出してくれさい。時にコリヤハイ。爰はあんまりはしつぽだ。おくざしきへいかずか

ヤア　ちや屋の女「サアあつちィござらしやいまし　ト出しかけたてうしさかづきをおくへもつてゆくと、三人もなかにはからまはり、おくざしきのふんがはに、わらじのまゝあぐらをかき、彌次郎兵へ「サアおやぢさん。はじめなせへ　おやぢ「アイすんだら毒見ノウしませず。ヲト、、、よからず〳〵。さて先若いのへしんぜませう　北「アイわつちやア酒よりかア腹がへつた　おやぢ「アニはらがへつた。ソリヤア飯をくはつしやい。じつきによくなる　北「イヤ先酒にしよふ。ヲットあります〳〵。時にこの吸物はなんだ。※たゝみ鰯のせんば煮か。おほかたこのおとじやア。かぼちやのごま汁か。さつまいものよごしが出るだろう。彌二「サアわるくいふぜ。コレ此海老を見や。こうはねかへつた所は。ごうてんじやうの天人といふ身がある　北「イヤ※豊後ぶしの。とかアいなア、、、引といふ所もありやす。ハ、、、。時におやぢさん。あげやせう　おやぢ「インチ。※へさいましやう。今さかながこずに。コリヤあんねい〳〵。さつきからハイへしおれるほど。腕をたゝくに。あぜさかなアつん出さない　女「ハイ〳〵。たゞ今あげずに。トやう〳〵に大ひらとはちざかなをもつてくる　おやぢ「※やらやつともつて來た。平はなんだ。たまごのぶは〳〵か　彌二「おそいはづだ。今うむのをまつてゐたと見へた　北八「こいつは無塩だ。きめう〳〵　おやぢ「たんとのんでくれさつしやい。そんたアわしがたにやア命の親だ。よくさつきやア了簡ノウしてくれさつたのし　北八「イヤわつちも。ツイむしの居所がわるくていゝ過しました。まつぴら御めん　彌二「そこは旦那どんも野暮じやアねへ。モシこいつは。どふせ味噌べつたり燒せうがといふおとこだから。しやうどはなしさ　トたゞのむさけゆへついしやうたら〳〵、やみくもにひつかける、このうちかつてよりもいろ〳〵もちだし、ぜんも出て、彌二郎きた八すこしよきのごくながら、これもくつてしもふさと、おやぢせうぶんに立て行あとにて　北八「コウ彌次さん。おめへこゝのわり合をおれによこしなせへ。おいらがアノおやぢを。いぢめたればこそ。おめへ。ごうてきにやらかしたぜ　彌二「※おきやアがれ。そふいつてもまんざらじやアねへ。アノ親父のこぬうち。後にのむぶんもやら

○たゝみ鰯のせんば煮　シラス干の小さきを漉きたるもの、その狀布海苔の如し。〇せんば煮」は古く西鶴の「五人女」に「下女は父それ〴〵に食杓子片手に目黒のせんば煮を盛る時」などあり。

○よごし　胡麻よごし。

○ごう天井の天人　引返りたる形容。

○豊後節のことかアいなア　屈む形容。此文句を唄ふ時の形。

○へさいませう　おさへませう。方言。

○やらやつと　漸く。

○玉子のぶは〳〵　「玉子をあけて、玉子のかさ三分一だしたまり、いりざけをいれ、よくふかせて出し候、かたく候へばあしく候」（料理物語）

○無鹽　生魚のこと。

○味噌べつたり燒生姜　辛かるべきものゝ辛からずこといふことより、性が（生姜）ないと云ひたるか。

○おきやアがれ　名古屋の「オキヤアセ」に同じ。よせ、やめ

かそふ　北八「おらア此茶碗についでくんな。ヲツトきた〳〵。きたさの〳〵讃岐のこんぴら。たかゞ高瀬の舟頭の子じやもの。おさへてどふする。ジヤヾジヤン〳〵　彌二「ヱ、、、引。山にきつころばした。松の木丸太のよでも。妻とさだめたら。まんざらにく〳〵もあるまいし。やとさのせ〳〵。おもしろへ〳〵。時にこの親仁のべらさくめはどふした　北八「ホンニながい雪陣だ。モシ女中。爰に居たぢいさまはどけへいつたの　女「たしかおもてのほうへ　彌二「ハテノ。こいつどふかへんちきだはへ　トまてども〳〵此おやぢどこへいつたかいつかうにかへらず、せつちんをさがせ共ゆきがたしれず　北八「モシ女中。今の親仁が爰のはらひをしていつたかの　女「イ、ヱまだいたゞきませぬ　彌二「ヤア〳〵　北八「いつぺいおこはにかきやアがつたな。おつかけてぶちのめそふ　トさんで出たれども、どつちへ行しやらいつかうくもをつかむがごとく、こゝにおやぢは此近在のものゆへ、わき道へはいりしにや、さらにゆくゑしれず、北八〳〵とはたご立歸り　一彌次さんどふもしれねへ。とんだ目にあつた　彌二「しかたがねへ。手めへ拂ひをしや。アノ親仁めがくやしんぼうで。手めへに意趣げへしをしたのだはな　北八「それでも。ナニおればかりかぶるもんだ。いまいましい。せつかく酔た酒が。みんなさめてしまつた　彌二「次郎どんの犬と。太郎どんの犬と。みんなさめてしまつたか　北八「ヱ、しやれなさんな。そこ所じやアねへ。まあなんにしろ。いくらだね　ていしゆ「ハイ〳〵九百長五十でござります　北八「かたいにあつたとおもつて往生して拂ひやせう。いやアいふほどちゑのねへはなしだ　彌二「そふいつてもおつなおやぢだ。いゝとをしやアがつた。コウ北八。手めへの顔で一首うかんだ

　御馳走とおもひの外の始末にて腹もふくれた頬もふくれた

北八「へ、ごうはらな。生馬の目をぬきやアがつた

　有がたいかたじけないと禮いふていつぱいたべし酒の御ちそう

よ、の意。

○ヲツトきた〳〵云々　ヲツトは燗徳利より酒の出る音。「きた〳〵さの〳〵〳〵讃岐のこんぴら」は「金々先生榮華夢」などにもあり。金毘羅節といふ流行唄もあり。

○べらさく　「べらぼう」と拔作とを合せたるか。

○おこはにかきやアがつた　既出。但この場合は美人局の意にあらず。騙されたること。

○次郎殿の犬云々　「お月様いくつ」の童謡の文句を洒落に用ゐたるもの。

○九百長五十　一般の錢通用は九六といひて、一文錢九十六箇を百文とする例なり、故に五十文といへば四十八文なり、九六に對して長百といふは、百文といひて一文錢百個のことなり。

かくよみて北八も笑ひをもよほし。田舎ものとあなどりて。とんだ意趣がへしをしられたるもおかしく。爰を出て行ほどに。大井川の手前なる。嶋田の驛にいたりけるに。川越ども出むかひて　川ごし「ハイ今朝がけにあいた川だんで。かたのんます　彌二「きさま川ごしか。ふたりいくらで越す　川ごし「おふたりで八百下さいませ　彌二「とほうもねへ。越後新潟じやアあんめへし。八百よこせもすさまじい　川ごし「すんだらいくら下さるヤア　彌二「いくらもすりこ木もいらねへ。おいらがじきにこすは　川ごし「ヲヽ川ながりやア貳百つけて寺へやるから。なんならそふさつしやい。ながれたほうがやすくあがらア。ハヽヽヽ　彌二「ばかアぬかせ。問屋へかゝつておこしなさるは。トいゝすてゝ、あとはやにゆきすぎ　彌二「ナント北八あいつらにからかうがめんだうだから。いつそのこと。といやへかゝつて越そふ。手めへの脇指を借しやれ　北八「なぜどふする　彌二「侍になるは。トきた八がわきざしをとつてさし、おのれがわきざしのひきはだを、すこしのほうへいだし、長くして大小さしたよふに見せかけて　彌二「ナント出來合のお侍よく似合たろふ。此ふろしき包を手めへいつしよに持て供になつてきや　北八「こいつは大わらひだ、ハヽヽヽ　ト彌二郎兵へおかしくもないつしよにしてきた八がかたにひつかけ、やがて川問屋にいたり、彌次郎兵へ、おくにことばのこはいろにて　「コンリヤとん屋ども。身ども大切な主用で罷通る。川ごし人足を頼むぞ　といや「ハイかしこまりました。御同勢はおいくたり　彌二「ナニどうぜいな　といや「さやうでございます。旦那はお駕かおむまか。お荷物はいく駄ほどございます　彌二「本馬が三疋駄荷がつがう十五駄ほどありおるが。道中邪魔だからゑどおもてにおいてきた。其かわり身ども駕の陸尺が八人。そこへしるしめさろ　といや「ハイお侍衆は　彌二「侍共が十二人。やりもちはさみ箱ざうり取。よいかく。かつぱかご竹馬つがう上下三拾人あまりじや　といや「ハイ〳〵その御どうぜいはどこにおります　彌二「イヤサ江戸表しゆつたつのせ

○八百よこせも云々　新潟に八百八後家あり。私娼のこと。「八百」の語によつて洒落しもの。
○問屋　御用(無料)及び御定賃錢の人馬を發給し、其管の休泊に關する用事を辨ずる職務とす。
○ひきはだ　刀の鞘に被せる袋。
○陸尺　駕籠の者。
○かつはかご竹馬　合羽籠は中へ合羽を入るるもの。竹馬は桐油、雑桐油などをつけしもの。

○麻疹　享和三年風疹流行のことを云へるならん。

○みをのや四郎云々　景清に鐶をつかまれ美保谷四郎のこと。鉢付の板より引ちぎれてよろめく拍子に、太刀の折れしことを持來りて、その末孫なりと洒落たるもの。

つは。のこらずめしつれたが。途中でおい〳〵麻疹をいたしおるから。宿〴〵へのこしおいた。そこでたゞ今。川をこそふといふどうぜいは。上下あはせてたつた貳人じや。臺ごしにいたそう。なんぼじや　といや「ハイおふたりなら。蓮臺で四百八拾文でござります　彌二「それは高直じや。ちとまけやれ　といや「ヱ、此川の賃錢にまけるといふはないヤア。ばかアいはずとはやく行がよからずに　彌二「イヤ侍にむかつて。ばかアいふなとはなんじや　といや「ハ、、、がいにづないお侍だヤア　彌二「こいつ武士を嘲弄しおる。ふとゞきせんばんな　といや「こんた武士か。刀の小じりを見さつしやい　ト いはれて彌次郎兵へ、ふりかへりうしろを見れば、かたなの小じり、はしらにつかへて、ひきはだばかりのところ、ふたつにおれている、みな〳〵どつとわらひ出せは、さすがの彌次郎めんぼくなく、しよげかへつてだんまり　といや「かたなのおれたのをさす武士がどこにあるもんだ。こんたしゆ。問屋をかたりに來たな。そんではハイ。すませないぞ　彌二「イヤ身どもは。みをのや四郎國俊の末孫だから。それで刀のおれたのをさしおるて　といや「たはごといふと〳〵しあげるぞ　北八「コウ彌次さんおさまらねへはやくいかふ　ト手をとつて引づられ、彌次郎兵へそれをしほに、こそ〳〵とにげ出す　といや「ハ、、、、、、とほうもない氣ちがひだ　彌二「ツイやりぞこなつたいま〳〵しいハ、、、、

出來合のなまくら武士のしるしとてかたなのさきの折れてはづかし

此狂哥に双方大笑ひとなり。彌次郎兵衛北八災をのがれ。いそぎ川ばたにいたり見るに。往來の貴賤すき間もなく。此川のさきを爭ひ越行中にふたりも直段とりきはめて。蓮臺に打乘見れば。大井川の水さかまき。目もくらむばかり。今やいのちを捨なんとおもふほどの恐しさ。たとゆるにものなく。まとや東海第一の大河。水勢はやく石流れて。わたるになやむ難所ながら。ほどなくうち越して蓮臺をおりたつ嬉しさいはんかたなし

蓮臺にのりしはけつく地獄にておりたところがほんの極樂

斯うち興じて金谷の宿にいたる。兩側の茶やおんな「おやすみなさいまアし〳〵　かごかき「もどりかごのつていじやござい　北八「コウ彌次さんかごはどふだ　彌二「イヤ氣がない。手めへのるならのつていかつし　北八「そんなら日坂まで乘ふか　トかごのねだんきわめてうちのりたるに、おりふしあめふりいだしければ、古ござ一まい、かごのうへにかぶせ、かつぎ出してようやくさく川の坂にかゝるに、順禮が二三人「※ふだらくや。きしうつなみはみくまの、。アイおかごの旦那壹文下さい　北八「エ、つくなといふにべらぼうめ　じゆん禮「それにべらぼうがいるもんか。そつちがべらぼうだ　北八「コノ乞食めが　トりきむはづみにいかゞしけん、かごのそこがすつぽりぬけて、北八どつさりしりもちをつき「アイタ、、、、、　じゆん禮「ハ、、、、　かごかき一「エレ〳〵怪我アさつしやりませぬか　北八「コレ手めへたちやアなぜこんなかごにのせた　かごかき二「ゆるさつしやりませ。あんとせるもんで　北八「どこぞへいつて。いゝかごをかりてきさつし　かごかき一「こかア坂中でかりずとこがござらない。イヤよかとがある。ほうぐみのしのへこをはづせ　ほうぐみ「アゼどふせる　かご「ハテおれがせるとがある。見され　トじぶんのふんどしをはづし、ほうぐみのふんどしと、ふたすじにて、

○いじやござい　おいでなさい。

○ふだらくや　普陀落や岸打波は三熊野の、是は巡禮の唄ふ御詠歌の文句。

ござのうへから、かごのごうなかをくゝりて 一「サアのつていじやござれ　北「とんだことをする。これでのられるもんか　かご「ハテ外にせるとがない。そんだいにやアねぶたくならしやつても。このへこでおちずよふがござらない。不肖してのらつしやいませ　ト きのごくそふにいふ、きた八もおかしく、これらはなしのたねこ打のれは彌次郎兵へ「ハヽヽヽ、白いふんどしで。かごの胴中をくゝつた所は。しつかいおやしきの葬禮といふものだ　北八「ヱ、いま〳〵しい。そんなことをいゝなさんな　彌二「ハ、ア。かごの内でものをいふから。佛でもねへ。こいつきこへた科人だな　北八「ヱ、猜いま〳〵しい。おらアもふおりてゆかふ　ト こゝよりかごをおり、こゝまでのちん〳〵せんをはらひ、かごをかへしたどりゆくに、雨はしきりにふりだしければさかみちよこりこゝやう〳〵こさよの中山たてばにいたる、こゝは名におふあめのもちのめいぶつにて、しろきもちに、水あめをくるみこいたす、このふたりさけのみなれば、やうやく一ツふたつくひける内、雨つよくなりたるに

爰もとの名物ながらわれ〳〵はふり出すあめのもちあましたり

傳へきく無間の鐘は。その寺に名のみ殘りて今はなしと

この寺にむけんのかねもつきなくし今は晦日に喰やつくらん

それより此坂を下り。日坂の驛にいたる頃。雨は次第につよくなりて。今はひと足もゆかれず。あたりも見へわかぬほど。しきりに降くらしければ。或旅籠屋の軒にたゝずみ　彌二「いま〳〵しいごうてきにふるは〳〵　北八「はなやの柳じやアあるめへし。いつまで人のかどにたつてもゐられめへ。ナント彌次さん。大井川は越すし。もふこの宿にとまろうじやアねへか　彌二「ナニとんだことをいふ。まだ八ツにやアなるめへ。今から泊てたまるものか　はたごやのはゞ「この雨じやアいかれましないとまらしやりませ　北八「イヤこりやとまりたくなつた。彌次さん見ねへ。おくにたほがでへぶとまつている　彌二「チヤドレ〳〵。こいつはなせるはへ　はたごやのはゞ「サアおまいら。とまらしやりませ　彌二「そふしやせう　ト こゝにて彌次郎北

○おやしきの葬禮　武家の内葬、表向ならぬ葬禮の場合、駕籠の戸を白布もて縛りて出す。

○「爰もとの狂歌　雨の餅にかけ、「もちあまし」の「もち」を餅にかけて「餅餘す」と云へるなり。

○無間の鐘　小夜の中山の傳説。この鐘を撞く時は無限の富を得らるれども、必ず無間地獄に墮つといふ。

○花屋の柳　花屋の門に植ゑたる看板の柳のこと。

彌二「コレ〳〵女中。素湯があらば一ッぱいくんな　女「ハイ〳〵いんまあげうず　北八「ひ[illegible]りやうずがきいてあきれらア　女「ハイおさゆ　彌二「よし〳〵きた八。きのふのくすりをくりやな　北八「なんだ。しんりいあんかん丹か。まちなよ。※ありのとはたりからひねり出してやろふ　彌二「ヱ、ばかアいやんな。腹がいたくてならぬ　北八「ソリヤアおめへ※ないらのおこつたのだ。豆をくやアなをる　彌二「ヱ、わるくしやれすと。はやく出してくれろへ　北八　そんならまだし目に。ソレ※田町の反魂丹。手を出しな　彌二「ふたつばかりくりやれ。ガリ〳〵。コリヤ胡椒だは。ア、辛い〳〵　北八「ハ、、、、まちなよ。イヤもふない。イヤこゝに※錦袋圓がある。ソレよしか　彌二　からかみのかげでまつくらだ　トつゝみ紙をあけてくすりをとり出し「ガリ〳〵〳〵。ア、又何をかくはしやアがつたペッ〳〵　北八「ドレ見せな。イヤア是は観音さまだ　彌二「ほんに観音さまのあたまア。かみくだいてしまつたハ、、、、　女「御膳を上ゲませう　北八「しづかにさわげがあきれらア　ト案内ぜんも出ていろ〳〵しやれながらくひかゝり　彌二「ときに女中。おくのきやく人は女ばかりだが。ありやアなんだ　女「みんな※巫子でおざりますア　北八「ナニ巫子だ。コリヤおもしろへ。ち※といき口をよせてもらひてへもんだ　彌二「もふおそかろふ　七ツからはよらぬといふとだ　女「ナニまんだ。八ッすこしすぎでおざりますア　彌二「そんならきいて見てくんな。おいらが山の神をよせてもらをふ　北八「コリヤおかしい　女「いんま。きいて上ふずに　ト此内ぜんもすみ、女おくのまへゆき、かのいち女にそのことをきゝ合す、いち子しやうちのよしなれば、やがて彌次郎きた八おくのまへはいりたのむと、いち女れいのはこを出してなをすと、さしこゝろへてやどの女、水をくみ来る、彌次郎すぎさりし女房のことを思ひだして、しきみのはに水をむけると、いち子は先神おろしをはじめる　いちこ「そも〳〵つゝしみうやまつて申たてまつるは。上に梵天たいしやく※四大てんわう。下界にいたれば。※ゑんまほうわう五どうのめうくはん。わがてう

○ひりやうず　がんもどき。飛龍頭と書く。
○しんりいあんかん丹　尻の垢の挾み言葉。
○ありのとはたり　會陰
○ないら　谷川士清は内爛の字音なるべしといへり、痔類の病名。
○田町の反魂丹　芝田町四丁目堺屋にて賣る。
○錦袋圓　池之端仲町通に在り。
○巫子　口寄せの女。
○生口　死口生口の生口を接吻の意に用ゐたるか。
○四大天王　持國、增長、廣目、多聞。
○五どうのめうくはん　五道の冥官、冥土の役人。

は神國のはじめ。天神七だい。地神五だいのおんかみ。いせはしんめい天照皇太神宮。外くうには四十まつしや。内宮には八十末社。あめのみや風の宮。月よみひよみの御みこと。北に※べんくう鏡の社。※あまのいはと大日如來。あさまがだけ※ふく一まん虚空藏。其外日本六十よしう。そうじて神のまんどころ。出雲のくにの大やしろ。神のかずが九万八千七しやの御神。※佛のかずが一万三千四れいのれいじやう。冥道をおどろかし。此に請じたてまつる。ハアおそれありや。このときに。この〳〵かたの※そしやうりやう。だい〳〵の※ぶつてうし。弓と矢のつがひの親。一郎どのより三郎どの。ばんもかわれ。水もかわれ。かはらぬものは五しやくの弓。一打うてば寺〳〵の佛檀にひゞくのうじゆ。ヤアレハアなつかしや〳〵。よく水をむけて下さつた。わしが弓取のまくらぞいどのも出やろうけれど。しやばにいた時精進がきらひで。肴は骨までくやつたむくひ。今は※牛鬼になつて。地獄の門番をしてゐらるゝゆへ隙がない。それでわしばかり出ましたぞや　彌二「おめへだれだ。わからねへ　いち子「ハアわしは。水を手向どんの爲には。からのかゞみじや子だからどの　北八「からのかゞみたア。彌次さんおめへのおふくろのことだ　彌二「ハ、アおふくろか。そんたにやア用はない　いち子「ハアレからのかゞみどんじやア用はおざらないか。わしやアそなたのまくらぞいじや。あつかましくも能ぞ問ふて下さつた。そなたのよふないくぢなしに連添て。わしや一生くふやくわず。寒くなつても袷一まいきせてくれた事はなし。かんの冬も單物ひとつ。ア、※うらほしや〳〵　彌二「かんにんしてくれ。おれも其時分はめんくがわるくて。かわへそふに苦勞をしゞにゝしやつたが殘多い　北八「チヤ彌次さん。おめへなくかハ、、、。こいつはおにの目に涙だ　いち子「わすれもせない。其方が瘡をわづらはしやつたとき。わしはあやにくひつをかく。※瓜の蔓の次郎

○べんくう　便宮にて休憩所か。
○あまのいはと　外宮の上、高倉山に在り。
○ふく一まん　福智圓滿の訛。
○まんどころ　政所。社務所のこと。
○佛の數が一万三千四れいのれいじやう　浮世床の神下しに神の數は九萬八千七社の御神、佛の數は一萬三千四百個の靈場とあり、全國の靈場の數なるべし。
○そしやうりやう　諸生靈の訛。
○ぶつてうし　佛餉しを訛れるか。
○まくらぞい　配偶者。巫女言葉なり。子寶殿、唐の鏡も同じ。
○牛鬼　牛頭のこと。
○うらほしや　うらめしやのもぢり。かんの冬も單物なれば、裏欲しやと云ひたるなり。
○瓜の蔓の次郎どの　弟。

○脾胃虚　小児病。

どのはよい／＼病ひ。たつたひとりの子寶は。脾胃虚して骨ばかりに瘦こける。米はなし日なしはせがむ。大屋どのへ店賃やらねば。路次の犬のくそに。すべつてもこゞとはいはれず 娘二「もふ／＼いつてくれるな。むねがさけるよふだ いち子「それに。わしが奉公して。せつかくためた着物まで。そなたゆへにおきなくしたがくやしい。質はさかさまにやアながれ申さぬ 娘二「そのかはり手めへは。結構なところへいつてゐるだろふが。おれはいまだにくらうがたへぬ いちこ「ヤアレハアなにがけつこうでござろふ。友だちしうのせはで。石塔はたてゝ下さつたれど。それなりで墓まいりもせず。寺へ附届もして下されねば。無縁どうぜんとなつて。今では石塔も塀のしたの石がけとなつたれば。折ふし犬が小べんをしかけるばかり。ついに水ひとつ手向られた事はござらぬ。ほんに長死をすれば。いろ／＼なめにあひますぞや 娘二「もつともだ／＼ いちこ「そのつらい目にあひながら。くさばのかげで。そなたのことをかたときわすれぬ。どふぞそなたもはやく冥途へきて下され。

やがてわしがむかひに來ませうか　彌二「ヤアレとんだことをいふ。遠い所を。かならずむかひに來るにやアおよばぬ　いち子「そんならわしがねがひをかなへて下され　彌二「チ、何なりとく　いち子「このいち子どのへ。おあしをたんとやらしやりませ　彌二「チ、やるともく　いち子「ア、名殘おしやかたりたいことといたいこと。數かぎりはつきせねど。冥途の使しげければ。彌陀の淨土へ　トうつむきていち子はあづさの弓をしまふ　彌二「コレハ御苦勞でござりました　ト鳥目二百文はりこみかみにくるみていだす　北八「くらやみの恥を。とうぐあかるみへぶちまけて仕廻た。ハヽヽヽ時に。彌次さん。おめへとんだふさぐの。ナントいつぱい吞ふじやアねへか　彌二「それもよかろふ　ト手をたゝき女をよびさけさかなを云ひつける　いち子「けふはおまいさまがたアどこからおいでなさりました　彌二「アイ岡部から來やした　いち子「これはおはやうおざりました　彌二「ナニわつちらアあるくこたア韋駄天さまさ。サアといふと。十四五里ヅヽはあるきやす　北八「其かわりあとで十日ほどは役にたちやせぬハヽヽヽ　ト此内さけさかなを持出る　彌二「ちとあがりませぬか　いち子「わたしはいつかう下さりませぬ　北八「おらのおかたはどふだ　いち子「かゝさんお出サアおかまさんもお來なさいまし　北八「ハヽアおめへのおふくろか。エヽこいつは。めつたなこたアいわれぬわへ。先あげやしやう　トこれよりさかもりとなり、さいつおさへつ、このいち子どもおもひの外のくらひぬけにて、いくらのんでもしやあくとしている、彌次郎兵へきた八は大きにゑひがまはり、いろくおかしきしやれあれ共、あまりくだくしければはりやくす、北八まきじたにて「ナントおふくろさん今夜おめへのおむすを。わつちにかしてくんなせへ　彌二「イヤおれがかりるつもりだ　北八「とんだことをいふ。おめへこそ今宵は精進でもしてやりなせへ。可愛そふに。しんだ嚊衆があれほどにおもつて。どふぞはやく冥途へこい。やがてむかひにこよふと。深切にいふじやアねへか　彌二「ヤレそれをいつてくれるな向ひにこられてたまるものか　北八「それだからおめへはよしな。サアおふくろ。おいらにきまつた　トいち子のむすめにしなだれかゝるを、つきはなしてにげる

○新造　娘のこと。船に比した語といふ。
○通りもの　通人。「誹諧䳄」に「鵲も橋になる夜は通りもの」

いち子「およしなさりませ　いち子のはゞ「むすめがいやならわたしでは　北八「もふこふなつちやアだれかれの見さかいはない　トむちうになつてしやれる、此内かつ手より膳も出、いろ〳〵こゝにもあれ共りやくす、いや酒もおさまり彌次郎北八もつぎまにかへり日がくれるやいなやとこをとらせねかけるおくの間にもたびくたびれにやらふねかけるよふすきた八小ごへにて

北八「なんでも巫子のしんぞうめが。いつちこちらのはしにねたよふすだ。後に這かけてやろふ。彌次さんおめへ。ねたふりなぞは通りものだぜ　彌二「おきやアがれ。おれがしめるは　北八「氣のつゑゝ。大わらひだ　トいゝつゝ両人ながらぐつとよぎをかぶりねる　すでに夜も五ツすぎ。四ツまはりの拍子木のおとまくらにひゞき。臺所にあすの支度のみそする音もやみければ。只犬の遠吼のみきこへて。物淋しくふけわたるに。　北八時分はよしとそつとおき出、おくの間をうかゞへばあんどうきへてまつくらやみ、そろ〳〵としのびこみ、さぐりまはして、かのいちこのふところへにおりこむと、おもひの外、此いちこの方より、ものをもいわず、北八が手をとつてひきずりよせる、北八こいつはありがたいと、そのまゝよぎをすつぽり手まくらのころびねに、かりのちぎりをこめしあとは、ふたりともぜんごもしらず、はなつきあはせてぐつすねいる、彌次郎兵へひとねいりして、目をさましおきあがりて　「もふ何時だしらぬ。手水にいかふ。コリヤまつくらで方角がしれぬ　ト小べんに行ふりにて、こちらおくの間へはひこみ、北八がせんをこしたとはつゆしらず、さぐりよつてよぎのうへからもたれかゝり、くらがりまぎれに、かのいちことおもひ、きた八がムニヤ〳〵いふくちびるをねずりまはし、わんぐりとかみつく、きた八きもをつぶし、めをさまし「アイタ、、、、　彌次「ヲヤきた八か　北八「彌次さんか。エ、きたねへペツ〳〵　このこへに北八とねていたるいちこも目をさまして「コリヤハイ。おまいらはなんだ。そう〳〵しいしづかにしなさろ。むすめが目をさますに　トいふこへにははゞあのいち子、きた八は二度びつくり、こいつはとちがへたか、いま〳〵しいとはひ出て、こそ〳〵とつぎの間へにげかへる、彌二郎もにげんとするをいちこ、手をとつてひきずりながら「おまへ此としよりをなぐさんで。今にげることはござらぬ　彌二「イヤ人ちがへだ。おれではない　はゞあ「インヤそふいわしやますな。わし共は。こんなことを商賣にやアしませぬが。旅人衆の伽でもして。ちつとばかしの心づけを貰ふがよわたり。はらさん〳〵なぐさんで。只逃るとはあつかましい。夜の明るまで。わしがふところでねやしやませ

彌二「これはめいわくな。ヤイ北八〳〵　はゞ「アンハイ。おつきな聲さしやますな　彌二「それでもおれはしらぬ。エ、きた八めが。とんだ目にあはしやアがる　トやう〳〵むりに引はなして、にげんとすれは、又とりつくをつきたをして、がたひしとけちらかし、そう〳〵つぎの間へはひこみながら

いち子ぞとおもふてしのび北八に口をよせたるとぞくやしき

道中膝栗毛三編　下

しのゝめまだき驛路のいそがしげに。ひきつるゝ朝出の馬の嘶に旅勞れの目をこすりながら。彌次郎北八おき出て支度するうち。相宿のいち子が。顔ふくらかしるるもおかしく。爰を立出ふるみや墾田の八幡を打過。右にしうとの畑姨が田といへる見ゆれば。彌次郎兵衛

　干からびしうとの畑にひきかへて水澤山のよめが田ぞよき

それより塩井川といふ所にいたりけるに。昨日の雨つよくして橋おちけるにや。行かふ人みづから股引をとり。裾まくりあけて爰をわたるにて　彌次郎北八も。いざや引つれて渉なんとする折柄京上りの座頭二人づれ。此川の歩渡りなることを聞けるにや。壹人の座頭　犬市「モシ川はひざきりもござりますかな　北八「さやう／＼。しかし水が早いから。おめへがたアあぶない。用心してわたりなせへ　犬市「ハアなるほど。水のおとがよつほどはやい　トいひつゝ石をひろひ、川のなかへなげこんでためす　犬市「イヤこゝらが。どふかあさいよふだ。コリヤ猿市ふたりながら脚半をとるもめんどうだ。おぬし若役に。おれをおぶつてわたれ　猿市「ハヽヽヽヽうるいことをぬかす。拳でまいろう。なんでもまけたものが。おぶつてわたるのだがよしか　犬市「コリヤおもしろいサアこんさんなむめで　猿市「りやん。ごうさい／＼　トかた手でけんをうちながら、兩ほうからたがいの手を出しながらにけん

○京上りの座頭　京都に上りて職學校に四兩の金を出し、告文を貰ふ。これよりはじめて座頭となる。それ以前は單なる盲のみ。

○歩わたり　川越を頼まずして歩渡りすること。

○さんなむめ云々　拳の言葉。

〇どんぶり　音の形容。井の字を、井の中に物を落した形容と「字彙」にあり。

をうつ手をにぎりあひ　犬市「サアかつたぞ〱　さる市「エ、いま〱しい。そんなら此ふろしきづゝみを。きさまいつしよにしよふわつせへソレよしか。サアこい〱。トしたくしてせなかをむける、彌次郎これはありがたいと、さる市におぶされは、さる市ほつれのいぬ市とこゝろへて、さつ〱と川へはいり、なんなくむかふへわたるさ、こなたのきしにのこりたるいぬ市「ヤイ猿よ。どふする。はやく川をわたさぬか　さる市むかふのきしにつけふらをたて「コリヤじやうだんなやつだ。たつた今おぶつてわたしたに。又そつちへいつて。おれをなぶるな　犬市「ばかアいへ　おのればかりわたつて。ふといやつだ　さる市「イヤふといとはそつちのことだ　犬市「コリヤおのれ兄弟子にむかつて。言語同斷な。はやく來てわたさぬか　トしろい目をむきだし、はらたつるゆへ、さる市しかたなく、又こちらへわたりてかへり　さる市「サアそんなら。おぶさりなさろ　トせなかをいだす、きた八しめたと、手をかけておぶされは、さる市又さつ〱と川へはいる、犬市は大きにせきこみ「コレさる市。どこにゐる　さる市川中にて「イヤこいつはだれだ　ト北八を川の中へどんぶりおとす　北八「ヤアイたすけてくれ〱　ト手あしをもがきながれるゆへ、彌次郎とびこみ引上れば、あたまからたれきでくさるほどぬれ　北八「エ、座頭めが。とんだ目にあはしやアがつた　彌二「ハヽヽヽヽまづ着物をぬぎやれ。しぼつてやろふ　きた八「ぜんてへ彌次さんがわるい。なんのおぶさらずともいゝ

○はまりけり　溺ること。これは上方言葉なり。この座頭の背に負はれて川を渉ることは、狂言の「丼礑」の趣向を奪へるもの。

○けつかる　居やアがるといふに同じ。

○腹がぼんぼこな　腹の張りしより腹鼓に利かしたるか。歌のはやしにも「ぼんぼこなア」といへるあり。

○おとぼね「奴俳諧」「逸物のたくは音骨ひつたてゝ」

ことに。おめへが手本を出したから。ツイおれも　彌次「川へはまつたかきのどくな。ハヽヽヽ。それで一首やらかした

※はまりけり目のなき人とあなどりしむくひははやき川のながれに

北八「エヽきゝたくもねへよしてくんな。ア、さむい〳〵　トはだかになりがた〳〵ふるいながら、きものをしぼる。北内ざとうは川をわたり行過る　彌二「こゝでほしてもゐられめへから。着替を出してきやれ。どこぞで火をたいてもらつてあぶるがいゝ　きた八「エ・いまいましい風をひいた。ハアクツシヤミ　トぶつ〳〵こゞとをいゝながらきがへを出してきかへ、くさつたきものはしぼつて引さげ出かけると、ほどなくかけ川の宿にいたる　棒鼻の茶屋おんな「おめしよヲおあがりまアし。鯵とこんにやくと。干大根のおすいものもおざりまアす。鮹のせんば煮もおざりまアす。おやすみなさいまアし〳〵　ながもち人足のうた「ふけばナア。ふくほどナア、ンエ。もつもなかるいナア、ンエ。わたをサア。いれたやナア。長持にわたをナア、ンエヨウ。しつたかどふだか〳〵　馬のいなゝき「ヒイン〳〵　彌二「ヲヤきた八見さつし。さつきの座頭めらが。あそこに呑で※けつかるは　北八「こいつはいゝことがある。おいらを川へはめた意趣返しをしてやろふ　トつくりごへにて、かいざとうのさけをのんでいる、ちや屋へはいる　北八「ヲイ御めんなせへ　ちやや女「おいでなさいまし　トちやをくんでくる、北八かのざとうのわきへこしをかける　女「おしたくでもなさいますか　彌二「まだ〳〵※腹が。ぼんぼこなだ　先きのざとう二人、この所にやすみさけをのみいたるが、かの二人とはきもつかず　犬市「ハアねつから酒がたらぬよふだ。もふ二合やらかそふ　さる市「いかさまなア。御ていしゆ〳〵。もふちつと頼ます　女「ハイ〳〵　犬市「ときに今の川へはまつた。べらぼうどもはどふしたろふ　さる市「それよハヽヽヽ。先かわりめをやらかそふ　トちよくにいつぱいついでひと口のみ、下におくと、きた八そつと手を出し、ちよくのさけをのんでしまい、ちやつともとの所におく　さる市「イヤふといやつらであつたちやんとおれにおぶさりやアがつて。其代水をくらやアがつた時は。たすけてくれろと。かなしい※おとぼねを出しおつた。なんで

もかすりをとる事ばかり。心がけてゐるやつだから。おほかたあいつは。ごまの灰だろふよ　犬市「そふさ。どふでろくなもんじやアない。あゝいふやつは。こんな所へ來ても。ゐてはくひにげをして。ぶちのめされるもんだ。イヤ時に盃はどふした　さる市「ホンニわすれた　トちよくをとりあげて、のまうとしたところが、さけはいつすいもなし「チヤこぼしたそふな　トそこらあたりをたゞのまはり「ハテめいよふな。あらためてさそふ　トまた一ぱいつぎ、ひとくちのんで、におくさ、北八くちを引とめのんで、もふ　犬市「かうしてゐる所へさつきのやつらが來たらおかしかろふ　さる市「ナニあいつらはおほかた着物をしぼつたりほしたりして。まだあつちに。まごついてゐるだろふ。ちゑのないべらぼう共だ。　トいゝながら、さかづきをとりあげた所が、またさけはいつすいもなし　さる市「これはどふだ　犬市「又こぼしたか。いくぢのない　さる市「イヤこぼしはせぬが。ハテきめうてうらいな　犬市「イヤ手めへ。そんなとばかりいつて。ひとりでのむな　ト此内北八、てうしをとり、じぶんがのんだ、おやのみがやわんふたつにあけて、そつとこうしてた、もとのところにおく　犬市「コリヤ猿よ。さかづきをまはさぬか　トひつたくりてうしをさんでついで見て「ヤアこのさる市め。ひとりでくらつてしまやアがつた　さる市「ナアニとんだことを　犬市「それでも銚子がさつぱりだ　さる市「なんだてうしがない。イヤこゝの御ていしゆ〳〵。わしらを盲とあなどつて。こんな横着をさしやるか。二合の酒がたつた二口のむと。もふないはどふしたもんだ　ていしゆ「ハイそれは二合。しかもたつぷりついであげましたに。大かたこぼしなさつたもんだんで　さる市「ナニこぼすもんだ。商人に似合ぬことをさしやるから。此酒代ははらひませぬぞ　ト大きにはらをたてる、此さきかざぐちに、あそんでいる子もりが、さいぜんより見ていたりしが、北八のほうへのびだしして　子もり「ワアイ座頭どんのさけウ。みんなあの人がちやわんへついでしまはつせいた　北八「ヲヤこの子はとんだことをいふコリヤア茶だ〳〵　トいゝながらのみさしたちやわんの酒をのんでしもふ　ていしゆ「イヤおまいさけくさいは。そして顔があかくならしやつたは。大かたあの衆の酒をのましやつたな　北八「エヽこの人も。おなじよふにとほうもねへ。わしが顔のあ

○くだをまく　紡綞の音。ブウ〳〵いふこと。

○其手は食はぬ　勝負事より來る。その手は此方も覺悟してゐるといふ意。

○ちやらくら　茶かすなどに同じきか。

かくなつたのは。茶に酔たのだ。わしはかわつたとで。ちやをたんとのむと酔ます。酒によつた人はくだをまくが。茶によつた證據には。ちやばかりいふがくせでならぬ。そこでちやばかりながら。どなたもちやよふ。チヤハ、、、、、　さる市「イヤその手はくはぬ。子共は正直だ。コリヤアこんたしゆが。よこどりしてのんだにちがひはない。酒代をはらはしやれ　北八「ちやれやれ。ちやりとはちやわいもないとを。ちやべらしやる。ちやつきからのんだはちやばかり。ちやとうしゆのちやけを。ちやくぶくしたおほへはごちやらぬ。わるいちやれだチヤハ、、、、　犬市「イヤ是目の見へぬものだとおもつて。そのちやらくらおかつしやれ。ハテ見てゐた子どもが證據人だ　さる市「まだ慥なとは。御ていしゆあの衆の呑だちやわんが。さけくさいかかいで見さしやれ　トうごかぬ所へ氣をつけられ北八ちやつと、ちやわんをかくそふとするを、ていしゆさつとりかいで見て　「ヒヤアくさい〳〵。そして酒でにちや〳〵する。コリヤハイ。おまいちがのましやつたにちがひはない。酒代をおかつしやいまし　トいはれてきた八こいつはおさまらぬとおもひ「イヤちやけはのまぬから。ちやか代は拂はぬ。茶代ならなんぼでもはらをふ。いくらだ　ていしゆ「そんなら茶代をおかしやいまし茶が二合で六十四文　北八「ヤなんだ。ちやを二合のんだ。とほうもねへ　彌二「エ

、めんどうな。はらつてしまつたがいゝ。手めへのすることたア。なんでもおさまらねへ。あしもとのあかるいうち。はらつてしまや　トめがほでしらせるさ、北八もせうことなしに六十四文はらつてやるさ　さる市「イヤはやとんだ人たちだ。大かたさつきおぶさつたも。こんた衆であろふ。人のかつた酒をよこどりしてのむといふは。マアどろしうといふものだ　北八「ナニどろぼうだ。このどうめくらが　トりきみかゝる彌二郎おしとめ　彌二「ハテこつちがわるい。モシりやうけんしてくんなせへ。こいつは茶に醉うと。氣がつよくてなりやせぬ。サアちやつ〳〵といかふ。アイおちやらば〳〵　トいゝすてゝきた八をむりにひつたてこゝを立出あしばやに此しゆくを打過　北八「ヱ、いま〳〵しい。けふはとんだ間がわるい。錢を出して酒をのみながら。へこまされたがうまらねへ　彌二「ハ、、、、おれよりはよつぽど。ちゑのねへ男だ

　することもなすこともみなあしくぼやちやにしられたる人のしがなさ

斯興じ打わらひつゝ。やがて秋葉三尺坊へのわかれ道にいたり。彌次郎兵へ遙拜して

　脇差の貳尺五寸もなにかせん三尺ぼうの誓ひたのめば

それより澤田細田を打すぎ。砂川の坂道にかゝりけるに。兩方より木立生茂りて日の陰くらく。折ふしゆきゝもとだへたるに。誰ともしれず「コヲレ〳〵たびの人ヲ〳〵　トよびかけられ、兩人うしろをふりかへりみれば、かたわらの木かげより、のさ〳〵とふところ手にて出來るは、ごてらぬの子に一こしぼつこみ、山※をかづきんをかぶりたる、ひげだらけのむさくろしき男、彌二郎北八がむかふへまはりたちはだかる、ふたりはびつくりしこはごはながら　彌二「コリヤ晝日中になんの用だ　かの男「イヤさか手を壹文下さいませハ、、、、　北八「なんのこつた。それでおちついた。ソレ壹文　彌二「あつたら肝をつぶさしやアがつて。いま〳〵しい乞食めだ　トつぶやきながら原川を打すぎ、はやくもなくりのたてばにつく、こゝは花ござをおりてあきなふ

　道ばたにひらくさくらの枝ならでみなめい〳〵に※をれる花ござ

○おさまらない　芝居言葉。承知しないこと。

○あしもとの明るい内　日の暮れぬうちより來る。

○どうめくら　「どう」は添へたる言葉。片語にあらず。

○みなあしくぼ　足久保は既に出でたり。足久保の茶より「茶にしられたる」に利かせ、「あし」を「惡し」に云ひかけたり。

○山岡頭巾　狩人などの被る蘽の頭巾。

○をれる花ござ　花を折ると、花莫座を織るとをかけたるもの。

○棧留の布子　サントメは地名、棧留縞は印度產の木綿縞なれど和製出來て、唐棧和棧といへり、後に二子といへるは和棧の名殘なり、布子は綿入れのこと。

○しやうぞくかけし合羽　飾の著きたる意か。

○きよとい　氣疎いか。上方語。

○おやま　女郎の上方語。やま衆ともいふ。

○ひらの晝三　晝三とは晝夜金三分の揚代なるをいふ、但し「ひらの晝三」は片しまひといひ一夜だけの半額とす、これは「つけ廻し」とて何時にても全額を徵するに對して云ふ也。

○一斤々々　一升のこと、壹一枚の代價。

○つき馬　「稽古三味線」に「ふたありながら、からつけつだアス、おさまらねへネ。附馬よ、ありがてへじやアねへか、そけへいつちやア又八公なんざアわりいネ、しめへにやアけんかじかけへして、附むきゝふみたをしたネ」。錢なき嫖客には娼家の若い者つき來りて自宅にて支拂はしむる仕癖あり、此若い者〳〵ことを附馬といふ。

程なく袋井の宿に入るに。兩側の茶屋賑しく。往來の旅人おの〳〵酒のみ。食事などしてるたりけるを彌次郎兵衛見て

こゝに來てゆきゝの腹やふくれけんされば布袋のふくろ井の茶屋

此しゆくはづれより。上方ものと見へて。棧留の布子に。銀ごしらへの脇差をさし。花色羅紗のしやうぞくかけし合羽をきたる男。供ひとりつれて。あとになりさきになり　上方もの「モシおまいがたはおゐどじやな　彌次「さやうさ　上方「わしも毎年くだるものじやが。おゐどはきよといはんじやうなとこじやわいの。アノ吉原へもちよこ〳〵さそはれて。晝三とやらいふおやまを買たが。いつも人にふれまはれてゆくさかい。なんぼかゝつたやら。こちやしらんが。おまいがたも。さだめて買なさるじやあろふが。アリヤなんぼほどかゝるぞいな　彌次「わつちも女郎かいでは。地面の五ケ所と拾ケ所はなくしたものだが。ナニ晝三ぐらいではわづかなこと。マアひらのちうさんなら。片じまいで壹分貳朱。茶屋が壹分か。藝者が一トくみで又壹分。そして一斤〳〵でもとれば。その代が貳百ヅヽかゝるぶんのこと　上方「ハテノわしも大見世はしよ〳〵へいたが。其いつきん〳〵といふは。なんのこつちやいな　彌次「ソリヤア酒一斤肴一斤などゝ。内の酒がのめぬから。別に外からとりよせること　上方「ハアわしが行た内ではそないなことはなかつたわいな。そしてなにものめぬ酒は。出しやせんわいの。ゐらふよいさけであつたわいな　彌次「ナニそりやアのめる酒でも。のめねへといつて。べつにとるが。ゐどつ子の氣性さ　上方「そして上方ではみな借てもどるが。おゐどの女郎は現金ばらひじやそふな　彌次「ナニサあそこでも。つき馬をつれてかへりさへすりやア。いくらでも貸てよこしやす　上方「ハ、、、、コリヤおまいは。大みせのおきやくじ

○大木屋、松輪屋　扇屋、松葉屋。
○ないもせぬもの　大阪語。
○やくたい　やくたいもなしといふ。薬袋も無しより出づるか。
○國ものゝつらよごし　國者は兼國者他國者の略なりとて、こゝは江戸ッ子の面汚しと云ふでは叶はぬところ、或はわざと洒落て國者と云ひたるか。
○神　とりまきのこと、大盡、旦那に附隨する者、旦那を本尊として、他を末社の神と見立て、單に神とのみもいふ。
○おぶとつた　人に錢を出して貰ふこと、足を使はぬといふより來る。

やないわいの。そのつき馬とやらいふヿは。わしらが店のしよく人しゆの。はなしできいてゐますが。晝三かいにそんなことは。ありやせんわいな　彌二「なくてさ。ほんにわつちらア。尻に四ッ手駕の蛸のできたほど。かよつたものだ。ナニねへヿをいゝやしやう　上方「ハアそんならおまいのおなじみは。何屋じやいな　彌二「アイ大木やさ　上方「大木やの誰じやいな　彌二「とめのすけよ　上方「ハ、、、それや松輪屋じやわいな。大木やにそんなおやまはないもせぬもの。コリヤおまい。とんとやくたいじや／＼　彌二「ハテあそこにもありやす、ナアきた八　北八「エ、さつきから。だまつて聞てゐりやア。彌次さんおめへきいたふうだぜ。女郎買にいつたこともなくて。人のはなしをきゝかぢつて。出ほうだいばつかり。外聞のわるい。國ものゝつらよごしだ　彌二「べらぼうめ。おれだとつていかねへものか。しかもソレ。手めへを神につれていつたじやアねへか　北八「エ、あの大屋さんのとむらひの時か。へ、神につれたもすさまじい。なるほど貳朱のつとめをおぶさつたかはり、馬道のさかやで。むきみのぬたとから汁でのんだ時の錢は。みんなおいらがはらつておいた　彌二「うそをつくぜ　北八「うそなもんか。しかもそのとき。おめへさんあまり背を咽へたてゝ。飯を五六ばい。丸呑にしたじやアねへか　彌二「ばかアいへ。うぬが田まちで。あまざけをくらつてくちをやけどしたこたアいわずに　北八「エ、それよりか、おめへ土手で。いゝ紙入がおちてあると。犬のくそをつかんだじやアねへか。業さらしな　上方「ハ、、、イヤはやおまいがたは。とんとやくたいなしうじやわいな　彌二「エ、やくたいでもあくたいでも。うつちやつておきやアがれ。よくつべこべとしやべるやらうだ　上方「ハアこりや御めんなさい。ドレおさきへまいろふ　ト　きもをつぶしそう／＼にあいさつし[illegible]はやにゆき過る　彌二「いま／＼しい。うぬらに一ばんへこまされたハ、、、、　このはなしのうち、みかのはしをうちわたり

〇二八十六でふみつけられて　「二八十六で文つけられて、二九十八でついその心、四五の二十なら一期に一度、わしや帯とかぬ」(平假名盛衰記)

大くぼい坂をこへて、はやくも見付の宿にいたる　北八「アヽくたびれた。馬にでものろふか　馬かた「おまいち。おまアいらしやいませぬか。わしどもは役に出たおまだんで。はやくかへりたいやすくいかずい。サアのらつしやりまし　彌二「きた八のらねへか　きた八「安くば乗べい　ト馬のそうだんができて北八こゝより馬にのるこの馬かたはすけごうに出たるひやくせうゆへいんぎんなり　彌二「コレ馬士どん、爰に天龍への近道があるじやアねへか　馬士「アイそつから空へあがらしやると。壹里ばかしもちかくおざるは　北八「馬はとをらぬか　馬士「インネかち道でおざるよ　ト爰より彌二郎はひとりかち道のほうへまかる北八馬にて本道をゆくにほどなくもかも川はしを打わたり西坂さかい松のたてばにつく　ちやや女「おやすみなさりやアし〳〵　はゞ「めいぶつのまんぢうかわしやりまし　馬士「ばあさん。異なひよりでおざる　はゞ「おはやうおざいやした。今新田のあんにいが。どうしにいかずとまつていたアに。コレ〳〵よこすかのおんばあどんに。いゝついでくんさい。道樂寺さまに御說法があるからあすびながらおざいといつてよヲ　馬士「アイ〳〵。又このごろに來ずいドウ〳〵　北八「この馬はしづかな馬だ　馬士「おんな馬でおざるは　北八「どふりでのり心がよい　馬士「だんなアおゑどはどこだなのし　北八「ゑどは本町　馬士「ハアゑいとこだア。わしらも若い時分。おとのさまについていきおつたが。その本町といふところはなんでもづない。あきん人ばかしゐるとこだアのし　北八「チヽそれよ。おいらが内も。家内七八十人ばかりのくらしだ　馬士「ソリヤア御たいそふな。おかつさまが飯をたくもしたいていのこんではない。アノおゑどは。米がいくらしおります　北八「マア壹升貳合。よい所で壹合ぐらゐよ　馬士「ノリヤいくらに　北八「しれた事百にさ　馬士「ハア本町のだんなが。米を百ヅヽ買しやるそふだ　北八「ナニとんだことを。車で買込は　馬士「そんだら兩にはいくらします　北八「ナニ壹兩にか。アヽこうと。二一天作の八だから。二五十。二八十六でふみつけられて。四五の廿で帯とかぬと見ればむげんのかねの三

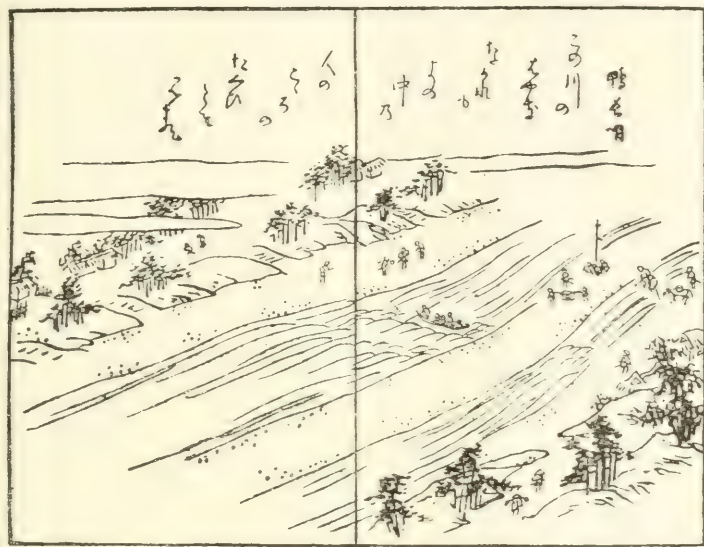
斗八升七合五勺ばかりもしよふか　馬士「ハアなんだかおゑどの米屋はむづかしい。わしらにやアわからない　北八「わからぬはづだ。おれにもわからねへハヽヽヽ。此はなしのうち。程なく天龍にいたる。

此川は信州すわの湖水より出。東の瀬を大天龍。西を小天龍といふ。舟わたしの大河なり。彌次郎此所に待うけて。倶にこの渉しをうちこゆるとて

水上は雲より出て鱗ほど
　なみのさかまく天龍の川

舟よりあがりて建場の町にいたる。此所は江戸へも六十里。京都へも六十里にて。ふりわけの所なれば。中の町といへるよし

けいせいの道中ならで草鞋がけ
　茶屋にとだへぬ中の町客

それよりかやんば。薬師新田をうちすぎ。鳥居松近くなりたる頃。濱松のやど引出向ひて　やど引「モシあなたがたアおとまりならおやどをお願ひ申ます　北八「女のいゝのがあるならとまりやせう　やど引「ずいぶんおざります　彌二「とまるから飯もくはせるか

○**かるくして**　手輕くして。

○**湯灌場**　寺にて湯灌をするところ。こゝは風呂のことを洒落たるなり。

○**風眼**　淋毒の眼に入れたるもの。

○**水引**　赤水引。湯の熱き爲、半分より入れぬ。身の半分赤くなりしを云ふ。

やご引「あけませいで　北八「コレ菜は何をくはせる　やご引「ハイ當所の名物蒟蒻でもあけませう　北八「それが平か。そればかりじやアあるめへ　やご引「ハイそれにしゐたけ、くわゐのよふなものをあしらひまして　北八「しるがとうふに。こんにやくのしらあへか　彌二「マアかるくしておくがいゝ。そのかわり百ケ日には。ちとはりこまつせへ　やご引「コレハいなことをおつしやる。ハヽヽヽ。時にもふまいりました

彌二「イヤもふはま松か。思ひの外はやく來たわへ

さつ〳〵とあゆむにつれて旅衣ふきつけられしはままつの風

やご引さき八かけぬけて「サア〳〵おつきだアよ　ていしゆ「おはやくおざいました。ソレおさん。おちやとお湯だアよ　彌二「イヤそんなに足はよごれもせぬ　ていしゆ「そんならすぐにおふろにおめしなさいまし　北八「湯灌場はどこだ。彌次さんマアさきへやらかしねへ　彌二「いま〳〵しいことをいふ男だ。手めへさきへはいれ　やどの女「こつちイお出なさりまし　とすぐにゆどのへあんないする、此内にもつもざしきへはこばせ、彌二郎兵へおくへとふると　ぜにや「ハイ兩替はよふおざりますか　あんま「おりやうじをなさいませぬか　彌二「チツトもんで下さい。イヤきさま目があるの　あんま「ハイ仕合とかたつぼはよく見へます。トね、ばかしちあとに風眼とやらをわづらひおりまして。兩眼ともにかいもくおつぶしてしまいおりましたが。それからこつちイいろ〳〵とりやうぢをして。やうやつと此あいだ。左りのほうがよくなりました　彌二「ひさしぶりで目があいたら。みんなしらぬ人ばかりだろふ　あんま「おさやうでおざります　彌二「見へないほうもずいぶんりやうぢをしなさいなをりさへすりやア見へるもんだ。時に北八。湯はどふだ　きた八ふろよりあがり「アヽいゝ湯だ。あんまりあつくて骸が半分水引のよふになつた　女「ハイ御ぜんをあげませう　トこゝにてぜんも出、いろ〳〵あれ共りやくす やがてぜんもすみ、彌二郎ゆにも入てしまひ　彌二「サアあんまさんやらかしてくんな。

○百万遍　百萬遍の念佛。
○手をつけられた　手をかけるに同じ。妾を手かけと云ふ。
○やきもちやき　寳暦版の「教訓衆方規矩」に「悋氣、和名燒餅といふ」とあり。餅を燒けば膨れるにより、女の腹立てゝ膨れるに云ひたるか。
○なをぜかし　其の上にの意か。

イヤ時に今いどしから見ればこゝの内のかみさまかしらぬが。病人と見へてとりみだしてゐるが。なか／＼うつくしいしろものだ　北八「きちげへでもでへじねへの　あんま「イヤきゝなさい。今にねんぶつがはなりますは　ト此内かつてのかたにてチヤン／＼とかねのおとして※百万べんはじまる　あんま「ソレお見さいあの氣ちがひどのは。こゝの下女でおざつたが。御ていしゆがふつと。※手をつけられたを。かみさまがひどいやきもちやきであの女をぶつたりはたいたりして。とう／＼さらけ出しおりましたがとかく御ていしゆは不便がつて。これからわきにかこつておきおりましたを。※なをぜかしかみさまがやかましくいつて。とう／＼きがちがひ。首をくゝつて死にやりました。そふすると御ていしゆは又よいことにして。あの女をうちへいれると。其晩からかみさまのゆうれいがとつついて。あの女が又かみさまのよふに氣ちがひになつたもんだんで。それであんなに。毎晩百万べんをくりおります　ト ひそ／＼はなすに、彌二郎北八もくちはたつしやなれども、しやうぼおくびやうもの　北八「なんだ幽靈がとつついたとは。こゝのうちへ其ゆうれいが出るかの　あんま「出るだんか　彌二「うそをつくぜ　あんま「ナニうそじやアおざらぬ。まいばんこの屋ねのうへに。しろいものがたつてゐるのを見たものがおざります　北八「ヤアコリヤとんだ所にとまり合せた　あんま「それにそのかみさまがくびをくゝつた時の顔色といふものは。目まなこをくるりとむいて。青洟をたらし歯をくひしばつて。それは／＼。いきているよふな顔であつた　北八「ソリヤアどこで　あんま「しかもソレおまいのうしろのゐんさきで　北八「ヤアコリヤたまらぬ。どふかくびすじがぞく／＼するよふだ　彌二「あやにく。しよぼ／＼雨がふり出したはなさけない　あんま「こんやなどはきつと出そふなこんだ　北八「イヤコレあんまどの。もふけへつて下さい　彌二「アノ又たゝき鉦のおとでいちばい氣がひきいれるよふだ　北八「なんにしてもいま

〳〵しいやどをとつた あんま「エ、臆病なお衆だハ、、、、 彌二「もふしめへか。北八はどふだ 北八「おらアもふねよふ あんま「さやうなら御きげんよく ト あんまはいさまごひしてたつてゆく此内女夜具をもち出、そこをとりてゆく、ふたりともにいつになく、しやれもむだもいはこそ、たゞまじ〳〵とねいりもやらず 彌二「エ、いつそのこと。北八今からたとうじやアねへか 北八「ナニとんだことをいふ。今のはなしでどう夜道があるかれるもんだ 彌二「それにこゝの内は。なんだかだゝびろいばつかりで。人がすくないから。うそきみのわるいうちだ ト めはかりぱち〳〵しているとき、ねづみがてんじやうをかけるおと、から〳〵〳〵 「チウ〳〵〳〵 北八「エ、鼠までがばかにしやアがつて。小便をじかけた 彌二「そのねずみがうら山しい。おらアさつきから。小べんをしたくてもこらへてゐるにやアなんだかやわらかなものが。あしにさはつた 北八「なんだ〳〵 ねこ「ニヤアン 彌二「コノちくしやうめ。シツ〳〵 百まんべんのかねのおと 「チヤアン のきにおちるあまだれ 「ぽたり〳〵 おりもおりとまよひ子をたづぬるこゑ 「まよひ子の長太やアい アヤ、、、チヤンとふたりともよぎのうちへもぐりこみきた八よぎのそでからそつとのぞき 「どふだ彌次さん。まだいきてゐるか 彌二「なんまいだ〳〵、ア、時にこまつたことがある。もふ小べんがもるよふだ 北八「おたがいになんぎな目にあつた 彌二「なんとおもひきつていつしよにいかふか 北八「あま戸をあけてやらかすべい ト ふたりいつしよにこは〳〵おきてそろ〳〵と、しやうじをあけ 北八「サア彌次さん 彌二「イヤ手めへさきへ 北八「なにが出るもんだ ト あまどをそろりとあけたところが、なにかにはかに、しろいものがちうにふは〳〵、北八きやつといつてたをれる 彌二「ヤアどふした〳〵 北八「どふした所かあれを見ねへ 彌二「あれとは 北八「しろいものがたつていらアそして。こしから下が見へぬ 彌二「ドレ〳〵 ト ふるへながら、こはいものは見たくなり、あまどのそこをそつとのぞき、これもきやつといつて、ざしきへはいこみたをれる 北八「コリヤ彌次さんどふした。チ、イ。彌次さんヤアイ ト このさはぎに、かつ手よりていしゆかけいで、このていを見て、さま〴〵かいほうしやう〳〵彌次郎やう〳〵きがつけれは ていしゆ「ヤレどふなさいました 北八「イヤせうべんにいつた所が。あそこになにか。しろいものがいたと。これでこのとふり。おくびやうな人さ ていしゆあまどさきへ出てこれを見て 「イヤあれは襦袢でおざります。コリヤ〳〵おさん

○らつしくちもない　締りのない。

○「ゆうれい」の狂歌　襦袢の糊のこはきを、幽霊のこはきに云ひかけしもの。

○くろゝ戸　樞なるべし。甲州にもこれと同じ唄あり。但「車戸」といふ。

やい〳〵日がくれたに。やつぱりほしものをなぜとりこまぬ。そしてさつきから。雨がぽろついてきたに※らつしくちもない女どもだ。しかしコリヤア。おきのどくさまでおざります　彌二「ナニサわつちらア。こわいといふこたアしらねへものだが。なぜか今夜は。虫の居どころがわるかつたとふな　ていしゆ「ハイおやすみなさいまし　トかつてへゆく　彌二「エ、いま〳〵しい。大きにきもをひやした　トやう〳〵に心おちつき、ふんさきへ出て見れば、なるほど女がじゆばんをとりこんでいる、ふたりとも、小用をたしてざしきへかへり、よぎひきかぶりて

ゆうれいとおもひの外にせんだくの

じゆばんののりがこはくおぼへた

はじめてわらひを催し。心おちつきてとろ〳〵と。一すいの夢もむすぶに。ほどなくやこゑの鶏のこゑ。家毎にうたひつるゝいさましさ。早出の馬のすゞのおと。シヤン〳〵　まごの唄「ばんにござらばナアうらからござれよヲ。おもてくろゝ戸で。　トおとがするよヲ　エ引　馬「ヒイン〳〵　からすがいたやねをつゝくおと「コト〳〵〳〵　彌二「もふ夜があけたそふな　ト北八もともにおき出れば、やがてかつてよりぜんもいで、いそぎ〳〵たくして立出、北しゆくにすは明神の社をおがみて

梅干のすはのやしろときくからにまもらせたまへ皺のよるまで

斯てわかばやしの郷をうちすぎ。篠原のとりつきにて　北八「ヲヤ味そふなぼたもちがある。チツトばあさ

○はなをあかす　口をあいた上に鼻をあかせるの意か。高慢の鼻を挫ぐ場合に云ふ。

ん。ひとつくんな　ト たちながらみせさきのぼたもちをつまんでがつちり　ヤアこいつはくへぬ。　はゞ「ソリヤアぼたもちのかんばんでおざるは　北八「イヤほんに木でこしらへたのであつた。どうりでかたい　はゞ「いくつしんぜます　北八「ナニ三ツばかりくんな　ト ぜにをはらひぼたもちをくひながらよびかけ　北八「ヲヽイ〳〵。彌次さん〳〵　彌二「なんだ。うめへものならちつとくれろ　北八「ごうぎにうめへ　彌二「ドレひとつ　ト 手のひらへのせてさし あぐるところへとびが来りちよいとさらつてゆく　彌二「ハヽヽヽヽ　北八「いま〳〵しいこゝらの鳶は。みな下戸だそふな　ト うらめしそふにそらを ながめこ

あいた口ふさがれもせぬそのうへにはなをあかせしとびのにくさよ

ほどなく蓮沼。つぼ井むらを打過。舞坂の驛にいたる。是よりあら井まで壹里の海上。乘合ぶねにうちのりわたる。けにも旅中の氣さんじは。船中おもひ〳〵の雜談。高聲にかたり合。笑ひのゝしり打興じゆくほどに。頓てなかばわたりて。乘合の人〴〵もはなしくたびれ。めい〳〵柳ごりに肘をもたげていねぶりをするもあり。又この風景に見とれて。只默然としてゐるも有　この乘合のうちに、としのころ五十ばかりの、ひげなし〳〵としたるおやぢ、いかにも、おかづきたるぬのこをきたるが、なにをかうしなひしや、いねぶれる人〴〵のひざのしたをさぐり、又はうすべりをもちあげ、しきりにものをさがしもとむるよふすにて、彌二郎がそこの下をさぐりますゆゑ、彌二郎そい手をさらへて　彌二「コウきさまはなんだことはりなしに人の袂をさぐつてなんとする　かのおやぢ「ハイ御ゆるされまし。わしはハアちとべこ。なくならしたものがござるから　北八「おめへなくなつたものがあるなら。ことわつてたづねるがいゝ。此ふねの中で。どつこへもゆくとではない。なんだたばこ入かきせるか　おやぢ「インニヤそんなもんじやアござらない　北八「イヤそんなら錢かかねか　おやぢ「インニヤたづねずともふよくござる　彌二「たづねずとよいものなら。人のいねぶりをしているうち。そこらアさぐりまはすこたアねへ　のり合み〳〵「サ

○とぐろ　蛇の場合に云ふ。

○あけ荷　馬の左右に附けるもの。竹で周圍に附けたる呉蓙の兩方の口を、紺のあみ絲にて締めるをあけ荷と云ふ。

アなにが見へぬい、なさい。此なかでものが見へないではすまぬ　おやぢ「インニヤもふよくござる　彌二「ハテいゝではすまねへ。なにが見へやせん　おやぢ「ハアそんなら、いゝますべい。みんな。びつくりさつしやりますな　北八「ハヽヽヽおめへがものをなくしたとつて。だれがびつくりするものだ　彌二「なにが見へやせん　おやぢ「アイ蛇が一疋なくなり申た　北八「ヤア〳〵とんだことをいふ人だ。へびたアなんのへびだ　おやぢ「なんだべいとつて。いきた蛇でござるは　のり合「ヤア〳〵　彌二「イヤきさまも。とんだものをもつてきた。へびをマアなんにしよふとおもつて　北八「こいつはきみのわるい。こゝらにはいぬか　トたちさはげば、せんちうみな〳〵そうだちにたちさわぎ　「ヤアこの板子のドに。とぐろをまいてるるは。ソリヤそつちのほうへいつた。エヽこりやきみのわるい。ソレ〳〵あけ荷のしたへはひこんだは。コリヤまあ。とんだ人とのりあはした　トせんちう上を下へひつくりかへし、おほさわぎ、かのおやぢあけにをとりのけ、へびをやう〳〵さがしてつかみ、又ふところへいれる　北八「コレ〳〵おめへとんだことをする。それをふところへいれておくと。又はひ出ますは。うみへうつちやつてしまひなせへ　おやぢ「インニヤさて。そふはなり申さぬ。わしはハアさぬきのこんぴらさまへいくもんだが。道中路錢につきて。すべいよふがござらないから。道でこのへびをとつたをさいわい。へびつかひになつて。壹文ヅヽもらつていくもんだから。コリヤアわしが。しやうばいのたねでござるは　彌二「イヤなんぼ。きさまがしやうばいのたねだとつて。へびをもつてるる人と。どふしていつしよにゐられるものだ。コレ舟頭どん。なぜこんなものをふねにのせた　せんどう「ハアわしらだとつて。よもやあの人が。へびをもつてるよふとはしりませぬ　のり合「コレおやぢどん。なんのかのといわずと。たぜいにぶぜいだ。はやくうつちやつて。しまいなせへ　おやぢ「インニヤやアだ。なり申さぬ　北八「ならざアきさまぐるめに。うみへぶちこんでしま

○てぶし　腕ぶしのぶし。

○たけみつ　竹にて刀の形に拵へしもの。刀工の兼光をもぢりて竹光といへるなり。

○おこしのもの　刀のこと。

○ころも川云々　辨慶立往生の時は、七ツ道具のうち木の手槌のみ流れたりとの意。北八が太刀も鎧も流れたりと云へるに反證として引きたるもの。

○「竹篦を」の狂歌　竹篦は前の竹光を指す。ソクヒをつくるには竹箆を用るを以て、今竹光を捨てたる以上は、殺費しとは云はれまい（飯を箆にて潰すことを利かす）と云ふ意。

北八「エ、このおやぢめはふてへやつだ　ト北八たちかゝつてかのおやぢのむなぐらをとらへ、ふところから、へびのあたまがによいゝとこり出る、北八さやつさいつてとびのく、彌二郎つゞいて立あがり、きせるにておやぢをひさつくらはせる、おやぢはらをたてゝつかみつくを、せんちうみな〳〵とりさへるうち、又かのへびが、おやぢのたもとからおちて、のたくりまはるを　おやぢ「ヲ、サはめるならはめて見さつしやい。わしにも手ぶしがござるは　みな〳〵「ソリヤまた出おつた。ぶちころせ〳〵　北八じぶんのわきざしのこじりでちやつさ、へびのあたまをおさへる、へびそのまゝ、さやにまきつきたるをちよいさうみへ、ほうりなげるはづみに、手がすべり、わきざしもいつしよに、うみへうちこみけるに、へびはなみにまかれて見へず、わきざしは※たけみつゆへ、うきこながれる、きた八めんぼくなく、しよげているゆへ、おやぢこれにてはらをいるのり合みな〳〵「ア、これでおちついた。しかしおきのどくなことは。あなたの※おこしのものだ　おやぢ「わしはこのとしになるが。わきざしのながれるのを。はじめて見申た　北八「エ、けつのあなの。せめへことをいふおやぢめだ。おうしうの※ころも川で。弁慶がたちおうじやうしたときやア。太刀もよろひも。ながれたといふことだ　おやぢ「ハ、、、、こりやアハア。よこつぱらがいたくなり申すは。やなぎ樽といふ本に。ころも川。さいづちばかりながれけり。といふ句がありもふす。弁けいのさしてお出やつた。こしのものは。かねでこしらへたもんだから。ながれべいこたアござんないは　北八「エ、いはせておきやア。よくしやべるしにぞこないめだ。はりとばしてやろう　ト又たちあかりつかみかゝるを彌二郎おしとめ「もふきた八いゝにしや。のり合のしうの手まへもある。しづまれ〳〵　ト是をなだめるうち、ふねはやあら井ちかくなる　せんどう「サア〳〵お關所まへでござる。笠をとつて。ひざをなをさつしやりませ。ソレ〳〵舟があたりまするぞ　のり合「ヤレ〳〵とゞこほりなくついて。めでたい〳〵　ほどなくふねはあら井のはまにつきければのり合みな〳〵ふねをあがりお關所を打過ける彌二郎北八もふねをあがり

舞坂をのり出したるは今切とまだゝくひまもあら井にぞつく

さるにても。腰のものゝ、ながれたるは。前代未聞のはなしのたねと。みづから打笑ひつゝ北八

※竹篦をすてゝしまひし男ぶりごくつぶしとはもふいはれまい

それよりふたりは、此あら井のしゆくに酒くみかはしてあしをやすめぬ

道中膝栗毛三編

東海道中膝栗毛四編

題膝栗毛四篇卷首

女方の阿佛。立役の親行。十六夜日記。東關記行の類。世に行るゝ多なれど。皆下役者の時代物。聾桟敷の耳遠きをいかにせん。此膝栗毛の世話事は。切落向を專として。樂屋落を不載。北八。彌次。二枚の道外方に東海道の引道具を用ひ。今四篇におよんで狂言の筋をかへず。見物猶跡幕の遲に手を打事頻なるものは。作者の手柄。宿はづれの並木氏も。領分堺の定杭是より右に出ん事を競ふべし。纔に野牛二番目に題して。一鞭直に京城の大詰にいたるといへるものは。大帳を不見の誤にして。此世界いまだ新井より桑名までの道行に終て。伊勢參宮のまはり仕掛。大津街道の泥仕合は。五篇目の打出しに載たり。嗚呼大儒先生。生前に文集の二篇目を出す事まれなるを。膝栗毛の四篇目。三年を不過して。製本既なれるは。當芝居の大名題。三都會の評判記に貫通すべし

文化乙丑春

前黄表紙著作　喜三二題于芍藥亭

勾欄全圖

○切落向　「三座例遺誌」云「切落、今は土間の七側目八側目の末にて、十一より十三迄の内すこし計の所也、昔は舞臺際より中の間のあゆみまで惣て切おとしなりしたり」。下の「戲場訓蒙圖彙」の挿畫(勾欄全圖)參照。

○泥仕合　泥仕合、水仕合など芝居の言葉也。「戲場訓蒙圖彙」に、「泥、田あるひは沼などに有土也、此中へ入る人は、すべて俳優也、案るに此人かねてどろへ入るといふ佛神の誓ありて、かくごして着かへて居るなるべし、又人落るときは、まづ頭からさきへどろになる也」、と如何にも洒落て書きたり。

○大名題　芝居言葉、狂言の主題をいふ。

上卷書目

新居の驛滑稽
白須賀の鷲嗅北八を誑す
二軒茶屋建場北八酒肴を奢る
田舍芝居の笑談
荷物坊主持問答
吉田驛に北丘尼を嬲る
彌次郎兵衛狐の怪を惧る
北八途中災難
赤坂泊婚禮騷動

下卷書目

彌次郎兵衛蘆川爭論
北八狂女に迷ふ
岡崎宿の遊戯
彌次郎兵衛草履を掠る
鳴見絞屋迷惑
北八伊勢音頭を踊る
宮泊瞽女彌次郎兵衛を罵る
七里渉船中混雜
桑名茶店酒宴

以上目錄終

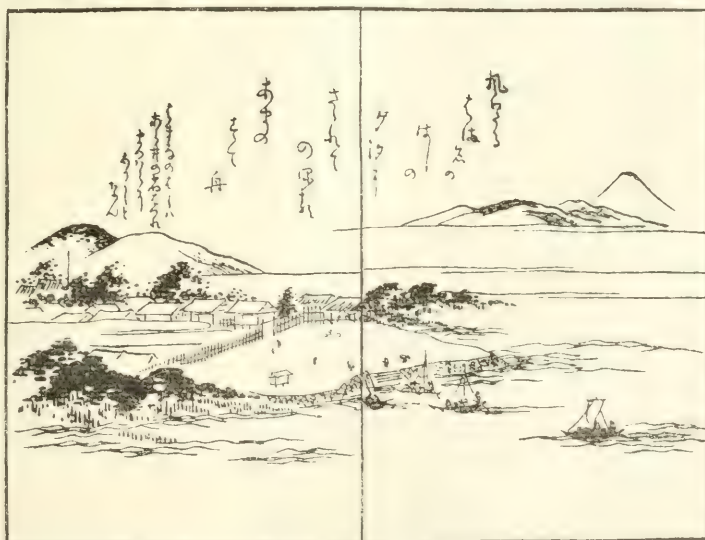
道中膝栗毛四編

十返舍一九著

由縁斎貞柳の狂歌に。螺貝の出しむかしはしらねども。今吹はよき追風なりけりと詠しは。東海道に名だゝる今切の渉になん。そのかみ明應の比山の奥より。螺貝あまたぬけ出。それより海上あしくなりたりしを。元祿年中　公の命によりて。海上に數万の杭をうち。蛇籠をふせ。往來渡船の難儀をすくひ給はりし。御恵の有がたさに。風和らぎ浪低なりてわたるに難なく。かの彌次郎兵衛きた八も爰を打わたりて。あら井の驛に支度とゝのへ。名物のかばやきに腹をふくらし休みゐたるに。げにも來往の貴賤絶間なく。舟場へ急ぐ旅人は。足もそらに出ぶねをよばふ聲につれてはしり。問屋へかゝる宰領はくちやかましく。果役をふれゝ馬さしについてのゝしりたり、はたご屋のはかまごしよこちよにまけてはしり、茶屋おんなのまへだれ〳〵すおかひに引ずりてとぶ。長もち人足横にたゝてうたひ。馬士うしろをむきて。ひよぐりながら行道すがら。うた「うらが性根ははま名のはしよヱ。今はとだへてヱ。おともせぬヨヱ。ドウ〳〵　おや屋おんな「おやすみなさいまアし〳〵。コレ馬士どん。おゝろし申さつせへよ　馬士「チットだんなさま。ソリヤおつぶりがあぶんない　雲助　トちや屋の軒下へ馬を引いれる、このからしりにのりたるは、もめんのねずみ小もんにぶさうおり羽、うじめすをあてたるぶつさき羽おりをきたるお侍、馬よりおりて、きた八　彌次郎がめんとこ向ふのしやうぎにこしをかける　女「おやすみあがりまし　トおゝなくでくる、お侍、女のかほをじろ〳〵と見、にこ〳〵おやわ〳〵をさり　侍「モウ何ン時じやろふ

○由縁斎貞柳　鯛屋貞柳。大阪の人。豊蔵坊信海の門人。享保十九年卒。
○螺貝の出し昔　明應の頃山奥より螺貝抜け出でし為、今切となりたりとの傳說あり。
○宰領　荷物に附ひ居る人。
○課役　御役に出ること。官用。無料の人馬。
○馬さし　問屋に居りて人馬の世話する世話人。
○旅籠屋の袴腰云々　忙しき様子。
○ひよぐり　小便する形容。
○ひうちの所　ぶつさき羽織の後にダイヤ型の切れを當てあり、こゝを火打といふ。
○じろり　目遣ひの様子。

○お内儀のかばやき　「おなぎの蒲焼」の洒落。これに對して更に「御てい主のすつぽん煮」と云へり。
○貫ざし　麻繩を綯りて一文錢を差せるもの。
○酒手をくせ　酒手をよこせ。

女「九ツ半でもおざいましよ　馬士「きん(昨日)にようの今時分(じぶん)じやろかい　侍「したくいたそふ。何ぞあるか　女「おなぎのかばやきがおざります　侍「なんじや。お内儀(ないき)のかばやきか　馬士「御てい主のすつぽん煮(に)はないかな。ハヽヽヽ時にだんなさま。お荷物(にもつ)は是におきます。お小づけがてうど五ッ　侍「その※貫(くはん)ざしはこれへたもれ　馬士「ハイ〳〵モシだんなさま。ちとおねがひがおざります。ヘヽヽヽどふぞ御酒を。いつぱいたべたふおざります　侍「ホウお身。さけがすきか　馬士「ハイめしよいはすきでおざります　侍「ゑんりよのない事じや。勝手(かつて)にのみやれ。身共たべうずならば。ふれまをふものを。かいもく下戸(げこ)じやからぜひがない　馬士「ハアだんなはあがらずとも。ハイどふぞ。いたゞきたふおざります　侍「ハヽア解(げ)せた。お身酒手(さかて)をくせといふのじやな。イヤまかりならんぞ。道中御定法(ごぢやうほう)の賃錢(ちんせん)ども。相(あい)はらつてまかり通る。別(べち)に酒手(さかて)なぞといふ事は。決(けつ)してならん事じや　馬士「さやうではおざりますが。どふぞそこを　侍「イヤ達(たつ)てといはゞ遣はそふが。請取書(うけとりがき)をしやれ。

○売尻のお荷物には云々　軽尻の荷物は二貫目より六貫目まで。

○「鳶がうむ」の狂歌　鳶が鷹を産むといふ諺あるより、鷹を高師の山の「高」に云ひかけしもの。

身共歸國の節。とん屋どもへ相とゞける　馬士「いつたい売尻のお荷物には。おもすぎておるから。どふぞ御りやうけんなされまして　ト くはんざしを八文ぬいてやる　馬士「ハイせめて十六文下さりませ　侍「しからば。身共了簡のもつて。今四文遣はそふ　ト ぜに四文ほうり出してやる、馬士ふせう／＼に取て、馬をひき行　侍「コリヤまて／＼。南無三寶。あやつもふ。どこへか行おつたそふな。身共大切の草鞋を馬につけておるたが。もつて行おつたそふじや残念な。江戸まではかれるわらふじじやものを　ト ぶつ／＼こゞとをいふをきた八おかしく　「モシあなたは。ゐどへお下りでござりますか　侍「さやう／＼　北八「今承りますれば。草鞋一そくを。ゐどまでおはきなさると見へましたが。けしからず道がお上手でござりますの　侍「イヤ身共。手作にいたいたわらふじじやほどに。一そくあると。いつもゐどまで行戻りはきおります　彌次郎「ほんにわらじのきれるは。あるき下手でございますが。あなたは道がお巧者なとだ。しかし私も。此わらじは。一昨年松前へはいてまいつたが。歸るまで何ともございませなんだから。しまつておいて。去年長崎へもはいてまいるし。そして又今度はいて出ましたが。御ろうじませ。まだなんともござりませぬ　侍「はて扨お手前は。身共より道が巧者じや。いかゞいたせばそのよふに。ひさしくわらふじがはかれますな　彌二「ナニサ草鞋ははきづめにしても切れませぬが。そのかはり。私はどふも脚半がきれてなりませぬ　侍「それはどふして　彌次「私は旅へ出ますると。馬に乘づめにいたしますから　きた八「おきやアがれハヽヽヽ　彌次「サアいかふ。あなた御ゆるりとアイおせは　ト ここの勘定をして立出、此しゆくはづれより、二人共ふた川までの駕をとりて、打のり行ほどに、はや高師山、はしもとの北に見ゆれば、彌次郎兵へ、ていの狂哥を口ずさむ

鳶がうむ高師の山の冬はさぞ峯に眞白く見違やせん

此あたりにて向ふよりくる。ふた川の駕に行合　ふた川のかごかた「どふじやおやかた。かへていかずに　こちらのかごかき「な

んぽおこす　ふた川「げんこやらずに。それでいじやござい※　こちらのかご「まゝよ棒組まけてやらアず　トかごのそうだんできまり両ほうのかごかき「旦那さまがた駕をかへますから。乗かへて下さいませ　北八「ふた川まで打こしだがいゝか　ト北八ふた川のかごにのりかへる時こちらの駕にのりかはりし後北八も弥二郎もかごにのりうつると北八をのせたるかごかき「旦那は仕合じや、コリヤア宿屋駕でおざりますから。蒲團がしいてあるだけ。おまへ方はかへさしやつたがお徳といふものじや　北八「ほんにそふだ　トいゝつゝ、かごにしたじきのふとん、高くなりいたるに心つき、何ごゝろなくふとんのあいだをさぐり見れば、四文ぜにてなあり、さては今までのつて来た男が、愛においてわすれたと見へた、なんでもこいつ、せ※しめうるしと、きた八そつと、かの一本をおのがふところへ※ちやくぼくして、そしらぬかほをしている、このうちはやくも、しらすかの驛にいたる、はいりくちのちや屋女、おもてに出、よびたつるを見て、弥次郎兵へ

出女の顔のくろきも名にめでゝ
　七なんかくす白すかの宿

此宿をうちすぎ。程なく汐見坂にさしかゝるに。是なん北は山つゞきにして。南に蒼海漫々と見へ。絶景まことにいふばかりなし

風景に愛敬ありてしをらしや女が目もとの汐見坂には

北八かく口づさみたるを[illegible]いさきぼう聞つけて「ハア旦那はゑらい哥人じやな。アレ向ふの山を見さしやりまし。鹿がゐおりますは　北八「ドレ〳〵是はおもしろい　さきぼう「※めいよふおゑどの旦那方は。あんなおもしろふもない。ちくせ

○いじやござい　よいであらう。
○まゝよ　放置の意。
○せしめ漆　漆の一種。せしめるといふことにかけたり。
○ちやくぼく　着服の訛。
○「出女の」の狂歌　出女の顔は黒きも白須賀の宿の名に愛でて「七なんかくす」と云ひたるなり。俗に「色の白きは七難隠す」と云ふ。
○目もとの汐見坂　汐見坂は地名。目もとに皺の出来るを目もとの汐と云ふ。
○めいよふ　名譽の字音を訛る、くつと訛りて面妖などと書くに至る。

○ひゆつと　輕く出る意。ひよつとか。方言。

うめをめづらしがらしやつて。きんによふも發句とやらを。いわつしやれたお人があつた　北八「おれも今の鹿で一首よんだ。貴さまたちにいつてきかせたとつて。馬の耳に風だろふが。こういふ哥だ。おく山に紅葉ふみわけなく鹿の。聲きく時ぞ秋はかなしき。なんと奇妙か〳〵　あごほう「だんなはゑらいものじや。わしどもはかいもくしらぬが。なんにしされ。うたが直に。ひゆつと出るといふものじやからゑらい〳〵　北八「ちよつとした所が此くらゐなものよ。イヤ貴様たち。あんまり讃てくれたから。酒が呑したくなつた。爰は建場か　ごまのはう「さるが番場でおざります。サア棒組一ぷくすつていかアず　トちや屋のかごに駕をおろしやすな　北八「みんな一盃ヅヽ、のまつし。コレ女中。そこへ酒を壹升でも二升でも。うめへ肴をつけて。出してやつてくんな　彌次郎兵へ胸の内にて「チヤ北八どふした。でへぶおうふうなことをいふな　北八「ナニサちよつと呑せるが。どこでもこのくらゐなものだ　トさきほどひろひし四文せに一本をだし見せかける　彌次郎「手めへそれをみんなおごるか　北八「しれた事よ　彌次「おもしろへ。おいらも御馳走になろふ　ト彌次郎かごを出て、みせさきにすはると、やがて女が、さけさかなをもち出る、北八をのせたる、かごのきよう「是は有がたふおざります。旦那いたゞきます。コリヤ〳〵ほうばいみなどこへいつた。ヤイみんな來されの。さつきの猿丸太夫さまか。御酒を下されるは　トかごかき四人よりこぞりてのみかける、彌次郎もおかしく、おもいれいみかける、きた八は、一ぱんへこまされて、だんまりなり　彌次「サア〳〵御ていしゆいくらだの。御酒代は駕の旦那がおはらひだ　ていしゆ「ハイ〳〵酒とさかなで三百八十文でおざります　北八「コリヤごうてきにくらやアがつた　トふせう〳〵にかのぜにを操つこしもふ、かごかき心付「ヤほんにほうぐみ。さつきの一本の錢はどふした　ほうだか「チ、それ〳〵。モシ旦那。あなたの乗てござらしやる。ふとんの間に四文錢壹本いれておきましたが。あるか見てくだされませ　トいはれて北八びつくりし「ナニ爰にか。イヤ見へないわへ　かごかき「ナニないことはあるまい。慥に入れて置ました　彌次「さつき見りやア北八。手め

○右からひだり　手から手といふこと。直ぐの意。

○「遠州へ」の狂歌　烏丸光廣卿の狂歌に「うち渡す尾張の國のさかゐ橋これや二かわのつぎ目なるらん」といへるあり。

○しけこむ　こつそり入り込む。

○ふんごみ　甲州にては股引のことをフンゴミといふ。こゝはタツツケのことか。

○叶福助　文化元年頃より福助の信仰流行。叶へは布團を一枚づつ殖すといふことより、こゝに洒落て用ゐたるなり。

へがふとんの下から出して。ひねくりまはしてゐた錢じやアねへか　かごかき「それでおざります　ト北八心のうちにいまいましいとをいふこと彌二郎をにらむ彌二郎はおかしくわきをむいてゐると、北八しかたなくふところから一本だしてふとんの下へそつといれ　北八「チヽヽヽ爰にあつたあつた　かごかき「サア棒組。この元氣でやりからかそふ　ちや屋「よふおざりました　ト駕をかきいだす彌二郎北八はおかしくこゝは昔がはんばにこかしわらの名物なれば

ひろふたとおもひし錢は猿が餅石からひだりの酒にとられた

かく打わらひてゆくほどに。境川といふにいたる。爰は遠江三河のさかいにて橋あり。彌次郎地口にてよめる

遠州へつぎ合せたる橋なればにかはの國といふべかりける

程なくふた川の驛に着く。此ところ家毎に。强めしをあきなふ見ゆれば

名物はいはねどしるきこはめしやこれ重箱のふた川の宿

兩側の茶屋ごとに。旅人を見かけて呼たつる　女「お休なさりまアし。あつたかなお吸物もおざりまアす。無塩の肴で酒でもお飯でもあがりまアし。此ちや屋のかど口にゐるくもすけ、北八彌次郎をのせたる、かごかきをよびかけて「ヒヤア八兵衛。かへてうせたな。畜生め。はやういて嬶が番をしされ。密夫めがしけこんでけつかるは。　彌二郎をのせたるかごかき「あほうめ。お己どれが所の親父めが首釣ておることアしらずに。くそたれめハヽヽヽヽ　トこゝを行過、こいやのすこし手前に駕をおろさ、彌次郎兵へきた八こゝよりおりてゆくと、このしゆくはいずれのこいさまにや、お小休と見へて、御本陣のまへに、のりものたてつゞき、あまたの御ごうぜいはせちがひ、こいやふかまごをねぢりてかけまはり、野ばかまふんごみのおさぶらひ衆、御本陣へ相つめるを見て、きた八「ハヽアおやしきだけ。大屋樣も二本さしているな　彌次「ばかアいふな。踏込さへはいていると。大屋だとおもつてけつかるそふだ　北八「アノ乗かけを見な。ごうぎに蒲團がかさねてあらア　彌次「その筈だ。のつてる人の天窓を見や。叶福助といふもんだ。ハヽヽヽ、ソレ馬がきたア　馬「ヒヽヽヽヽ　彌次「アイタヽヽ、

○おやとひの中間　道中するに就き、臨時に雇入れたる中間。
○かぶりかく　「かぶり」は食ふの意。「關越えて又柿かぶる袂かな　太祇」
○大江山の飯時　酒顛童子の傳說。
○赤鰯　刀の銹たる形容。
○おさへの拍子木　大名を指揮する押足輕が、出發の合圖に打つなり。
○喧嘩にふし　竹光の竹より竹の節へ利かせたるもの。「ふし」は文句、苦情などいふ意。
○尻くらひ　人を構はぬことを「尻くらひ觀音」と云ふ。

わりい所に今狢籠をおきやアがる　トけつまづいてこゞとをいふを、おさへ「コノやろうめ。合羽かごへ上足をふみかけやアがつて。ふてへことをぬかしやアがる。よこつつらアかぶりかくぞ　彌次「ハヽヽヽ大江山の飯時じやア有めへし。頬アかぶりかくも氣がつよい　中間「なんだこいつ。ぶちはなすぞ　彌次「きさまたちの赤鰯で＋ニきれるものか　中間「そふぬかしやア切にやアならぬ。コリヤ角助。お身のこしのものをちよつと借しやれ　トほうばいのかくすけが、こしのものをかりにかゝる　かく助「コリヤ／＼切ならばお身の刄物でなぜきらぬ　中間「ハテやかましい。どれできつてもいゝじやアねへか　かく助「イヤよくない／＼　中間「ハテしはいおとこだ。ちよつとかしやれな　かく助「イヤさておぬしも氣のきかぬ男だ。おれがほんとうの脇差は鑓持の槌右衛門へ。二百のかたにとられたを。お身さまもしつてるるじやアねへか　中間「ホンニそふだ。ヱヽコリヤおのれ。打はたすやつなれど。ゆるしてくれふ。はやくいけ　彌次「イヤいくめへサアきれ／＼　トつゝかゝる、みな／＼このけんくは、おかしがりて、引わけもせず、けんぶつしているを、かのお中間「ヱヽそふぬかしやア。了簡がならぬ。突殺してなとくれふ。　ト引ぬいてつきにかゝる竹みつを、彌次郎ひつつかんでねぢたをせば、くだんの男　中間「ヤアレ人ごろし／＼　ト此内はやとのさまのおたちと見へて、おさへのひやうし木　カッチ／＼　そりやおともぞろへと、さはぎたつ御ごうせいにつれてけんくはもそれぎりとなり、彌次郎兵へもこれさいわひに、きた八もろとも、こゝをのがれて足ばやに行過　彌次「ハヽヽヽ大笑ひのけんくはだ

　わきざしの抜身は竹と見ゆれども喧嘩にふしはなくてめでたし

それより此宿を出てたどり行に。はやくも大岩小岩を打すぎ。岩穴の観音をふしおがみて

　行がけの駄賃におがむ観音も尻くらひとは岩穴のうち

げにも旅のきさんじは。差合くらず高聲にはなしものしてゆく内にも。さすがに退屈の欠びしながら。
北八「ア、くたびれた。ちつとばかりの風呂敷包や紙合羽も。なか／＼邪魔になるものだ。コウ彌次さん。

○坊主持　向ふより坊主の来りし場合、荷物を交々に持つことを云ふ。女の場合は女持。

○ヲツト受取たりや　木戸藝者の聲色を眞似しもの。「後はむかし物語にこはいろをつかふに請取たりや、其次は是も同じく役者にて声色を猶ご覽に入ます」云々とあり。

○たかい山から　「たかい山からたにそこみればおまんかはいやぬのさらす、おれもさらすはぬのではないぞ、あだな男の心をさらす」（諸國盆踊唱歌）

○お縮符　人馬徴發命令標。

○勅願所　寺の格式、朝廷より御取立の寺院といふこと。

おめへの荷とおれつちが荷を、一所にして。坊主持にしよふじやアねへか　彌次「コリヤアおもしろへ。さいわいこゝにいゝ竹が捨てある　ト　ひろひとりて、ふたりの荷物をたけのさきにくゝりつけて

北八「としやくに。おめへはじめさつせへ　彌次「サア〳〵北八。てめへからもつてこい　彌次「そんなら狐けんでやろふ。サアこい。ヒイフウミイ。おつとしめた　北八「ヱ、いめへましい　ト　ひつかたげて行、向ふから来るたび僧は、法花宗とみへて　僧「だぶ〳〵〳〵。だゞだぶだぶ〳〵。フニヤ〳〵〳〵〳〵だぶ〳〵〳〵〳〵　北八「ソリヤ彌次さん。わたしたぞ　彌次「※ヲツト受取たいや其つぎの坊さまはどふだ。はやくくればいゝに　ト　又向ふよりくるのりかけ馬のすゞのおと　「シヤン〳〵〳〵〳〵　馬士うた「※たかい山から谷底見ればヱ。おまんかわいや布さらすナアヱどう〳〵　彌次「きたぞ〳〵。お縮符は勅願所。ソレ馬のうへに御出家よしか　北八「あんまりはやいな。ト　うけとつてひつかつぎ行道のかたはらに　いざり「御らんのとふり。足のかなはぬいざりに御ほうしや　北八「イヤアこいつ坊主だ。壹文やれ　彌次「まへから見ると坊主のよふだが。うしろを見や。ぼんのくぼに毛があるは　北八「おきや

○指につけし管　挿圖を見よ。

○さんがらへ　「松の落葉」に「さんがら踊」たるものあり。もと古き流行唄なるを、比丘尼等の間に傳はり、天保度に江戸に於て再度流行を見たるが如し。

アがれ。ハ、、、、、此内あとより、びくにが三人づれにて、ゆびにつけし管をならしてうたひくる うた「身をやつす。賤がおもひを夢ほどさまにしらせたや。ゑいそりや。ゆめほどさまにしらせたや。サアサ。※さんがらへ〳〵 北八「あざやかな聲がする。 トふりかへり ヒヤア比丘尼だ〳〵。サア彌次さんわたしやす 彌次「エ、いめへましい 北八「人に荷をもたせるは中〳〵いゝものだ。是でお供を連た心もちだ。ヤア〳〵こいつらアまんざらでもねへ。彌次さん見ねへ。こちらの比丘尼がおれを見て。アレいつそにこ〳〵と愛敬がこぼれるよふだ。畜類め 彌次「あいきやうのいゝのじやアねへ。アリヤア顔にしまりのねへのだは 北八「わるくいふぜ ト此内あとになりさきになり行びくにはけ、まださしも廿二三、今ひとりはさしき、十一二の小びくにともに三人づれ、中にもわかいびくにが、きた八のそばへよつて 「モシあなた火はおざりませぬか 北八「アイ〳〵今うつてあげやせう トすり火うちを出してかちかち〳〵 北八「サアおあがり。時におまへがたアどけへいきなさる びくに「名ごやのほうへまいります 北八「今夜一所に泊てへの。なんと赤坂迄行なせへ。一所にしやせう びくに「それはありがたふおざります。モシどふぞお多葉粉を一ッぷくくださりませ。とんと買うのを忘ました 北八「サア〳〵たばこいれを出しな。みんなあけよふ びくに「それではあなたおこまりでおざりましよ 北八「ナニわつちやアよしさ。時におめへがたのよふなうつくしい顔で。なぜ髮を剃なさつた。ほんにそふしておくはおしいものだ びくに「ナニわたしらが。たとへ髮が有たとて。誰も構人はおざりませぬ 北八「あるだんか。わつちらア一ばんにかまう氣だ。なんとかまはしてくんなさらんか びくに「チホ、、、、、 北八「はやく一所にとまりてへ。彌次さん。此さきの宿へもふとまろふじやアねへか 彌次「ばかアぬかせ。あやにく坊主のくるがとぎれた トこがさい、ながら行ほどに、火うち坂をうちすぎ、こゝはたちや屋にいたるころ、此所よりびくにはわかれ道へはいる 北八「コレ〳〵。おめへたちやアどこへゆく。そつちじやアあるめへ びくに「ハイ是からおわかれ申ます。わしどもは。この在郷へまはつてまいります

から　ト野みちをさつ〳〵と行過る、北八あきれて見おくりて、[illegible]おかしくふき出し「ハ、、、、北八。手めへけふは大分つけがわりいぜ　北八「エ、とんだめにあつた。ごうはらな　トうつかりしているうちに、はつたり行あたる往來の人　北八「アイタ、、、、。目をあいてとふれだれだ　トふりかへり見れば、たび僧　彌次「チツト荷物わたしたく〳〵　北八「コリヤはじまらねへ　トふせう〳〵に荷をひつかたげゆくまゝにやがて吉田のしゆくにいたる

※旅人をまねく薄のほくちかと爰もよし田の宿のよねたち

此しゆくはづれより、[illegible]者とは見ゆれ共、少し[illegible]手合五六人、[illegible]にはなして行をきけば、中にも[illegible]に、一チ、イ[illegible]所しまおちかはりたるをおこたる、[illegible]、ふろしきづゝみを、[illegible]せおひし[illegible]、[illegible]ふりかへり「源九郎義經。ヤアイ〳〵。はやく來さいの〳〵　トよぶこへに、[illegible]北八おかしく、このよしつねさまよける、[illegible]数つきのいろそであはせに、これもつゝみさいこだてをせ[illegible]かほは大あばたにて少しかたこびんにけたるおさこ「かめ井せなアや。片岡せなアは。※やく〳〵と足が達者だアのしてうちアあくとのあかぎれさアへ。行ころがつつはいつて。あるかれ申さぬ　かめ井「しづか御ぜんはどふしさつたアのし　よしつね「ヤレさてき〳〵なさろ。あとの建場で靜御前が持病の疝氣さアおこつたと。金玉ノウつりあけて。うつちぬべいと。あげへこげへにさはぎやるとよ。それにハア六代御前が。牡丹餅さア三十べしもうちくつたけで。食傷のウしで。したんばたん。せつながりやる。まんだそれに。弁慶は團子のくしさアで咽笛のウつゝいたと。淚アこぼしてなきやつたけで。うらが新家の友盛どのが。三人のゥ介抱して。やらやつとあとからつるんで來申すはに。にしたちやア。あにもしらずに。うつぱしつて仕合だアのし。彌次郎このはなしをおかしくきゝになりて「おめへがたアどけへいきなさる　よしつね「お伊勢さまへまいり申すは。　彌次「さつきからきけば。おめへがたア義經だの。弁慶だのといゝなさるが。どふいふこつたね　よしつね「ハアそんたしゆの聞きやつたらおかしかんべい。コリヤハアわし共が國さアつん出てくるまへに。祭禮があり申て。千本櫻といふ芝居のウし申たから。それでハアよしつねだアの。弁慶だアのと。狂言さアおつぱじめた時。忘れないよふに

○「旅人を」の狂歌　「吉田通れば二階から招く、しかもかの子の振袖で」といへる唄を蹈へ、薄の穂の旅人を招くと云へるもの。ほ[illegible]名物。

○ほくち　[illegible]口、[illegible]を焼きて製す、燧石を打ちて火を取る料なり。

○目引　木綿の縞物などの汚れて縞目の分らずなりたるを、紺屋にやりて色揚するもの。

○いとだて　縦が絲、横が藁にて織れる席。

○やく〳〵と　[illegible]か。[illegible]言。

○あくと　踵。奥州の方言。

○御門跡さま　本願寺の法主。

○博勞　馬商人。

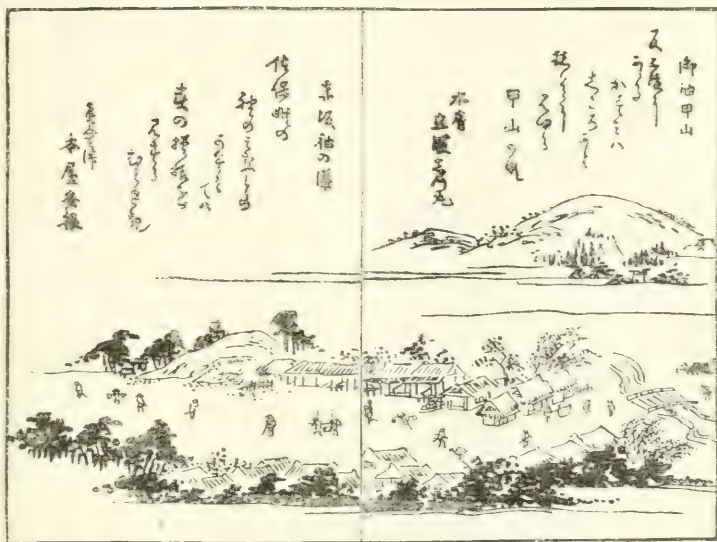
○らんごく　亂妨を坊主讀にて「らんごく」と云ふ。今にても三河にて之を云ふ。

と。その名たやへぺしい丶つけたくせさア。今でもおどけにいふのでおざるは　彌次「きこへやした。そんならおめへは義經になつたお方とみへる　よしつね「そふでおざる。其まへにわしどもが國さアへ江戸しばやが來て。天神さまの狂言のウし申たが。き丶なさろ。たまげたりくづよ。あにがハア時平とやら五兵衛とやらいふ惡人どのが。讒言のウせられたけで。天神さまの嶋ながしにならしやます時。輿にのつてお出やると。あにがハア見物のウしておる。ばあさまたちもかゞさまたちも。ヤレ／＼いとしぼいこんだと涙アこぼして。御門跡さまの通らしやますよふに。米だアの錢だアのと。舞臺さアへまきちらかいて悲しがりやる。そこでハア見物の中から。博勞の與五左といふうないふとが。舞臺さアへ。かけだいていやるにやア。このしばやアならないぞ／＼。あぜ天神さまア嶋ながしにせるのだ。最前お出やつた長樂寺さまのゑんまさまア見るよふな。お公家どのが惡人だアあにも天神さまに科アない。いがにしばやだアとつて。ふとを馬鹿にしたこんだア。天神さまのしりやア此博勞の與五左がもつは。時平どのはうらがあいてだとあにハア。御年貢米の一俵べしも。さしやアける力のあるせなアたんで。誰もうつたまげて。挨拶のウせるふたアなし。見物もくちやう／＼に。與五左どのそふだ。その時平とやらアしよびき出して。ぶつたゝけと。あにハア村中の若いふとたちが。樂屋さアへ刎こんで。らんごくをやるとおらひなさろ。そふせると。ゑど役者の時平どのは。コリヤたまらないと。尻のウおつはしよつて。つんぬげ申た。それからハア名のしどんへ寄合つけて。もふ此村へゑど役者アいれさるなと。談合のウして。わしどもが其跡のしばやさアで。狂言のウおつばじめ申たが。ゑどしばやよりかア。ぶちわれるほどはやり申た　トいきせいはつてのさにずがたり、じまんらしくはなしもてゆくまゝに、いつのまにかは、大雲寺にいたる、このところはゐまざけいめいぶつなれば、かの人／＼は打つれて、此ちや屋にやすむ、彌次郎兵へきた八は、いそぎこゝをうちすぐるとて

○なれる　成れる・熟るるさに通はす。

○のみこみ山　呑込んだ、心得てゐる、といふこと、何々山といふこと、他にも例あり。

いや高き御寺のまへの名物はこれも佛になれしあまざけ

斯て此あたりよりはや日も傾き。暮に近ければ。いざや急んとて。草臥し足をはやめて。たどり行道すがら　北八「どふだ彌次さん。埒があかねへの　彌次「大きにくたびれた　北八「なんと夕部の泊は中ぐらゐな宿で有ッたが。今夜はこうしやせう。赤坂までわつちがさきへいつて。いゝ宿をとりやせう　おめへくたびれたなら跡からしづかに來なせへ。宿から向ひの人を出させておきやせう　彌次「それよかろふ。しかし宿はどふでもいゝから。たぼのありそふな内にしやれ　北八「※のみこみ山〳〵　ト此ところよりかけぬけてさきへ行、彌次郎あとよりたどりゆくに、ほどなく御油のしゆくにいりかゝるころは、はや夜にいりて、両がはより出くるとめ女、いづれもめんをかぶりたるごとく、ぬりたてたるが、そでをひいてうるさければ、彌次郎兵へやう〳〵ふりきり行すぐるさて

その顔でとめだてなさば宿の名の
御油るされいと迯て行ばや

彌次郎兵衛あまりに草臥ければ。先此所はづれの茶店に腰をかけたるに。あるじの婆々「アイ茶アまいらせ　彌次「モシ赤坂まではもふ少しだの　はゞ「ア

イたんだ十六丁あざるが。おまへひとりなら、此宿にとまらしやりませ。此さきの松原へは。わるい狐が出おつて。旅人衆がよく化され申すは　彌次「そりやア氣のねへはなしだ。しかし爰へ泊たくても。つれがさきへいつたからしかたがねへ、エ、きつい こたアねへ。やらかしてくれふ。アイおせは　ト ちや代を置此ところを立出行に、くらさはくらしうそきみわるく まゆ毛につばをつけながら行、はるか向ふにて、きつねのなくこゑ　ケン〳〵　彌次「ソリヤなきやアがるは。おのれ出て見ろ。ぶち殺してくれふ　ト りきみかへつてたどり行に、北八もさきへかけぬけ、此所迄来りしが、これもこゝへきつねが出るといふはなしをきゝて、くもちはかされてはつまらぬと、彌次郎をまち合せ、つれ立んとおもひ、土手にこしをかけ、たばこのみいたりけるが、それと見るより　北八「ヲイ〳〵彌次さんか　彌次「ヲヤ手めへなぜこゝにゐるの　北八「やどとりにさきへいかふとおもつたが。爰へはわりい狐が出るといふとだから。一所にいかふとおもつて待合せた　ト いふに彌次郎心づき、こいつをやつめた、きた八にばけたなとおもひ、けれはわざとよはみをみせず　彌次「くそをくらへ。そんなでいくのじやアねへは　北八「ヲヤおめへなにをいふ。そして腹がへつたろふ。餅を買て來たからくひなせへ　彌次「ばかアぬかせ。馬糞がくらはれるものか　北八「ハヽヽヽヽ、コレおれだはな　彌次「おれだもすさまじい。きた八にそのまゝだ。よく化やアがつたちくしやうめ　北八「アイタヽヽ、彌次さん。コリヤどふする　彌次「どふするもんか。ぶちころすのだ　ト うつかりした所をぐつとつきたをして彌次郎そのうへにのりかゝりおさへる　北八「あいた〳〵　彌次「いたかア性体をあらはせ〳〵　北八「アレサ尻へ手をやつてどふする　彌次「どふするもんか尻尾を出せ。ださずはこうする　ト 三尺手ぬぐひをとき、きた八が手をうしろへまはしてしばる、きた八おかしく、わざとしばられている　彌次「サア〳〵さきへたつてあるけ〳〵　ト 北八をくゝりうしろからこらへて、おつたて〳〵あか坂のしゆくにいたる、はやいづれのはたごやにもきやくをとめて、かごにたちいる女も見へず、彌次郎はやごからむかひの人が、もはや出そふなものと、うろつく内　北八「コウ彌次さんいゝかげんに解てくんな。外聞のわりい。人がきよろ〳〵見てわりいはな　彌次「エヽくそをくらへ。ハテ宿はどこだしらん　北八「ナニおれはこゝにゐるものを。だれかさきへ。やどをとつておくものだ　彌次「まだぬかしやアがるか。おのれせうめ　ト 此内向ふよりくるいご屋のおとこ「あなた方は

當宿おとまりではおざりませぬか　彌次「さきさまおむかひの人か　やどや「ハイおさやうでおざります　彌次「それ見たか。此ばけごこないめ　ト北八をこえにてこゝくらはせう　北八「アイタ、、、、どふしやアがる　トはたごやの男きもをつぶし　あなた方。外のおつれさまは、まだおあとでおざりますか　彌次「ナニもふおれたゞひとりさ　やどや「ハアそれでは間違ました。私方のおとまりは、拾人さまじやと承りました　ト宿男はブラ〳〵行過る又あるはたごやののきさきにて　てい主「おとまりかならし　トおけよつてこらまへる　彌次「イヤつれのものがさきへ来たはづだが　北八「そいつれは。おいらだはな　彌次「エ、いけしぶといやつだ。ちふい〳〵かけんに尻尾を出しおれ。イヤまて〳〵。あそこに犬がいる。コ、、、、、シロコ、、、、ヲ、シキヲ、シキ〳〵。ハ、ア犬がきても。いけしやア〳〵として居おるから。さては狐ではねへ。ほんとうの北八か　北八「しれた事。わいいしやれだ　彌次「ハ、、、、サアおめへの所へとまりやせう　ト心とけてきた八のいましめをもとく、はたごやのていしゆ「サアおはいりなさりませ。ソレお湯をとつてこい。おざしきはゐいかな　北八「ア、とんだめにあつた　トあしをあらふ、此うちやどの女、しよくをだし、ふたりもざしきへうちあがりて　彌次「ホンニ北八了簡しや。おらア實に。ほんとうのきつねだとおもひつめた　北八「ばか〳〵しいめにあつた。いまだに此手首がぴり〳〵する　彌次「ハ、、、、しかしまてよ。斯はいふもの〻。やつぱりこれが。ばかされてゐるのじやアねへか。どふやらおかしな心もちだ。トむしやうに手をたゝき　御てい主〳〵　ていしゆ「ハイおよびなさりましたか　彌次「コレどふも合点が行ぬ。爰はどこだ　ていしゆ「ハイ赤坂宿でおざります　北八「ハ、、、、彌次さんどふしたのだの　彌次「エ、まだはぐらかしてゐやアがる　トいひつゝまゆげをぬらして　御ていしゆさん。なんとこ〻の内は。卵塔場じやアねへか　ていしゆ「エ、なによヲおつしやる　北八「ハ、、、おもしろへ〳〵　ト此内かつてよりやどの女　女「おゆにおめしなさりませ　北八「サア彌次さん。先湯にでも入て。氣をおちつけるがい〻よ　彌次「ち

○ヲ、シキ〳〵　犬をけしかける言葉。

○いけしやア〳〵　「いけしぶとい」ともあり。「いけ」は添へたる言葉。古き洒落に「お池に小便」とあるは、いけしやあ〳〵のこと。

○はぐらかす　惑はせる。

○亂塔場　墓場。

○わんかぐ　椀、家具。

くしやうめが。糞壺へいれよふと思つて。その手をくふものか　ていしゆ「ナニ湯は清水でおざいますから。奇麗でおざります。マアおいでなさりませ　トかつこ八行、女ちやをくんできたり「モシお淋しかア。女郎さんがたでもおよびなさりませ　彌次「ばかアいふな。石地藏を抱てねるこたアいやだ　女「ホヽヽヽいなことをおつしやります　北八「そんならさきへはいりやせう　トきた八ゆどのへ行此内ていしゆまたざしきへ出來り　ていしゆ「ときにお客さまへ申上ます。今晩は私方に。すこし祝事がおざりますから。御酒をひとつあげませう　トいふうちかつてからさけさかなもち出る　彌次「おかまいなさるな。なんぞおめでたいことかの　ていしゆ「ハイおさやうでおざります。わたくしの甥めに。娵を貰ました。今晩婚禮をいたさせますから。おやかましうおざりましよ　トいゝすてゝ立て行北八ふろよりあがり　北八「なんだ。おごりかけるの　彌二「こゝの内に。こんれいがあるといふことだ。コリヤいよ〳〵。きやつめがはぐらかすにきはまつた。もふ水風呂へもはいるめへわへ　北八「エヽおめへもいゝかげんにしな。さりとは執念ぶけへこつた　彌次「イヤ〳〵めつたにゆだんはならぬ。この硯ぶたもこんなにうまそふに見へても。性は馬のくそや犬のくそだろふ　北八「ホンニそふだろふから。おめへは見てゐなせへ。こいつはありがてへ。おじぎなしにやらかしやせう　トきた八手じやくにて、さい〳〵さのみかける、彌次郎れいのいぢがきたなく、さすがに見てもゐられず、まじ〳〵して「いめへましい。氣をわるくさしやアがる　北八「きづけへはねへ。いつぱいのみなせへ　彌二「イヤ〳〵馬の小便だろふ。ドレにほひをかゞして見せやムウム、ウ。こりやアほんとうのよふだ。どふもこらへられぬ。エヽまゝよやらかせ。　トーツぱいついでのみしたうちしながら　酒だ〳〵。ドレ〳〵さかな。チツト此玉子はどふもいろあいが氣にくはねへ。ゐぶにしよふ。カリ〳〵〳〵。こいつはほんとうのゐびだ〳〵　トひつかけ〳〵さいつおさへつさつ〳〵とのみかける、此内かつての方は※わんかぐのおとがたびしさはがしく、こりこみさいちう、はなれざしきには、はやこんれいのさかづきごとはじまりしと見へてうたひのこへする「四海なみしづかにて。國もおさまる時津風。ゐだをならさぬみよなれや。

○やみくも　無闇。

○割床　一室を分割してねる。

あひに相生の松こそめでたかりけれ　北八「ヤンヤア　彌次「コウやかましいわへ　北八「やかましいはいゝだ。おめへさつきから盃をはなさねへ。ちつとこつちへまはしな。ホンニ馬のくそだのせうべんだのと。いふかとおもやア、やみくもひとりで喰うやつさ。ハヽヽヽヽ　彌「おらア正直化された氣になつていたが今おもやアこふでもねへ。とんだ苦勞をさせやアがつた　北八「エヽおめへのくふうしたよりかアヽおらアしばられて。へんちきなめにあつた。ハヽヽヽヽ　ト此内かつてより膳を出しかれこれする内おくのざしきにて又うたひうたふ　千代もかはらじいくちよも。さかへさかふる松梅の。ふたばの竹のよをこめて。老となるまでと結びたのしかりける。めでたい〳〵。三國一の娵をとりすまいた。しやん〳〵〳〵　ト手をうちたゝきさゞめきわたる、此内かつてより女來り　あなたがた。もふお床をとりましよか　彌次「そんなとにしやせう　北八「コレ女中。祝言はもふすみやしたか。さだめて娵御はうつくしかろふ　女「アイサむこさまもよい男。よめごさまもゑらい。きりやうよしでおざります。おきのどくなことは。あちらの座敷に。ねやしやりますから。むつごとがきこへましよ　彌次「なんだ。そんな手合と割床はおやまる　北八「こいつは大變〳〵　女「モウおしづまりなさいませ　ト出て行、ふたりもそのまゝねかけると、はやふすまひとへ、となりのざしきに、むこよめかねるよふす、ひそ〳〵とはなしするをきけば、した地から、いろごとにて、もらひしよめと見へて、なか〳〵しよたいめんとは見へず、ぶつたりつめつたりしていちやつくよふす手にとるよふにきこへ彌次郎北八はねもやらず　とんだめにあはしやアがる　北八「ホンニわりい宿をとつた。人のこゝろもしらずに。なんだかおそろしく。むつまじいな。畜生め　彌次「サアはなしごへがやんだからむづかしい　トだん〳〵ふとんからのり出て、となりのようすをきゝみゝたて、ねられぬまゝに彌次郎そつとおきたち、ふすまのすき間から、さしのぞく、北八もはだかのまゝ、はひおきて　北八「コウ彌次さん。娵はうつくしいか。おいらにもちつと見せてくんな　彌次「コリヤしづかにしや。肝心の所だ　北八「ドレ〳〵見せねへ　彌次「アレサひつぱるな　北八「それでもちつと退なせへ　ト彌次郎かむちうになりてのぞきいるを、ひきのけんとひつぱれども、のかじといぢはる、はづみにはつたり、ふすまかあちらのまへにたふるゝと、二人も、ともにふすまの上へころげる、むこもよめも、おしにうたれてきもをつぶし　むこ「あ

○いさみ肌　勇み者の肌合。

いた〳〵。コリヤどやつじやい。なんぜ唐紙を打こかいた　トはねおきた所が、あんどうもひつくりかへしてまつくらやみ、彌次郎はちやつこにけて、おのがねごころへはひこむ、きた八まご〳〵して、かのむこにつかまりせんかたなく　北八「御めんなせへ。手水にゆくとつて。ツイ戸までひをしやした。ぜんてへ爰の女中がわりい。夜座敷のまん中に。行燈をおくから。それにけつまづいておきのどくだ。ア、小便がもるよふだ。ちよつといつて來やせう。こゝをはなしてくんなせへ　むこ「いやはや。あきれたお人たちじや。夜着もふとんも油だらけになつた。コリヤおさん〳〵。だれぞはやう。いこしてくれぬか　トよびたつるこゑに、かつてより下女が火をともして來りそこらかたづけるに、きた八も手もちなく、はづれしからかみをはめてひきたて、やう〳〵にここはりいふてもとのねごころへかへり、すご〳〵とねかける、彌次郎おかしくふき出して

　ねてきけばやたらおかしや唐紙とともにはづれしあごのかけがね

きた八も夜着うちかぶりながら

　聟姨のねやをむせうにかきさがしわれは面目うしなひしとて

斯うち興じて。夜もふけゆくまゝに。双方しづまり。只いびきの聲のみたかくなりぬ

道中膝栗毛四編　下

鷄の聲万戸にひゞきて。ひきつるゝ果役の馬の嘶いさましく。すでに夜明ければ。彌次郎兵衛北八もおき出て。あらましに支度とゝのへ。はやくも赤坂のしゆくを立出けるに。此宿の出端より。あとになりさきになり行。三人づれの旅人。是もゑどものと見へて。すこしいさみ肌※のまき舌にてはなし行をき

○あつくなり　腹を立てる。

けば　ひとりの男「コウゆふべのとまりは。おかしかつたなア　今一人「ソレヨなんだか奥の間にとまつてるたやつらア。きのきかねへやらうどもだ。やどに婚礼があるを羨しがいやアがつて。襖のあいだから覗きおつて。むちうになり。とう〳〵ふすまをぶつこかしやアがつた。大わらひなべらぼうどもだ　今一人「それからその聟にあやまるざまア。あの騒ぎでおいらもろくにねられなんだ。いめへましい　一人の男「そして。アノひとりのやらうめは。なんだか宵に宿の亭主をよびやアがつて。こゝのうちは卯塔場じやアねへかといやアがつたが。あのべらぼうめはどふでも氣がふれてるると見へる　ト此てやいゆふべ、彌次郎北八がとまりしうちへ一所にとまつたと見へて、此はなしをする、彌次郎聞て大きにあつくなり、あしばやにかけより、詞をかけ　彌次「コレきさまたちやアさつきからだまつて聞てるりやア。おいらがことをべらぼうたア。なんのこつた　さきいおとこ「ナニこんた衆のとじやアねへ。こつちのことだは　彌次「こつちの事といふとがあるものか。ゆふべのやどでの事をぬかすのだろふ。その襖をぶつこかした。べらぼうといつたア。おれがことだは　旅人「ハアこん

○くそをくらへ　江戸ッ子の語。

○もつてうしやアがれ　持つて來い。

○まつくろになつて　眞ッ赤になりたる以上に怒れるものか。

○たれたも同前　「たべたも同前」とあるべきところ。

○「ゆで蛸」の狂歌　茹蛸のぶらドりたるを藤花に見立て、「藤川」にかけしもの。宗因の句に「松に藤蛸木にのぼるけしきあり」

○おいへ　おうち。

たそのべらぼうか　彌次「チ、そのべらぼうだ　旅人「ハ、、、、べらぼうだからべらぼうといつたが。いゝじやアねへか　彌次「イヤこいつわるく。しやれやアがる　旅人「※くそをくらへ　彌次「なんだくそをくへ。コリヤおもしろへ。くふべいから※もつてうしやアがれ　ト彌次郎※まつくろになつてりきむ、されどあい手は、けつきさかんのいさみでやい、馬のくそをつゑのさきにつつかけ　「サアもつてきたからくらへ〳〵　彌次「イヤ馬のくそはきらひだ　旅人「きらひといふとがあるものか。是悲くはせにやアおかぬ　ト二人かゝつて彌次郎を手ごめにする、きた八おかしく中へはいり　北八「イヤもふ御めんなせへ。※たれたも同前でござりやす　三人「ハ、、、、かんにしてやろう　ト行過る彌次郎とても叶はぬと見て只くちの内にぶつくさ〳〵　此内桐の木中柴をうちすぎ。山中にいたる。爰は麻のあみぶくろ。早縄などをあきなふなれば。北八

　みほとけの誓ひと見へて寶藏寺なむあみぶくろはこゝのめいぶつ

かくて藤川にいたる。棒鼻の茶屋。軒ごとに生肴をつるし。大平皿鉢みせさきにならべたてゝ。旅人のあしをとゞむ。彌次郎兵衛

　※ゆで蛸のむらさきいろは軒毎にぶらりとさがる藤川の宿

それより此宿をうちすぎ。出はなれのあやしげなる茶みせに休みて　北八「なんだか。ごうてきにむしがかぶる。ばあさん素湯はあるめへか　ちや屋のばゞ「ハアさゆはござらぬ。水をしんぜませうか　北八「ヱ、くすりをのむのだへ。コリヤたまらなくなつた。時に雪陣はどこにある　彌次「どこにとつて。そんなにおい※屋上へを見廻しても。雪陣が疊の上にあるものか。裏へいかつし　北八「ヒヤアつきあたりに見へる〳〵　トうらへ出せつちんへゆき、しばらく用たして出、あたりを見れば、此うらに、ものおきをすまゐとせしひとつ家あり、内に十八九のむすめ、髪はさりみだしゐれども、なか〳〵の上しろもの、只ひとりゐるよふす、北八れいのわるじやれにて、ずつと此内へはいりて笑ひかけ　北八「モシ御無心ながら。水をひとつ　ト手をあらふ内、娘はけら〳〵とわらつてゐる　北八「コウあねさん。おめへ何を笑ひなさる。そしてひと

りこゝになるなさるのか。無用心な　トあたりを見れども外に人はなし、きた八こしをかけこ、たばこすい付け「へ、きみのわりい。何を見てわらひなさる。コレサ何をわらふのだよウ　トむすめの手をとつてひつぱるに、さすがふりきりもせず、やつぱりわらつてゐる、北八こいつは有がたい、しめたものだと、ぐつとひきよせる、いつのまにやら子共が見つけて「ワアイ／＼あの人は。きちがひと。いろごとをせるやアハ、、、、、、　ト大ごへをあげてわらひかけ出す、北八びつくりして、にげのかんとするに、娘はつかみついてはなさず

娘「エ、このおとこめ。はなさん／＼　北八「これはなさけない　トむりにひきはなさんとする所へ此娘のおやぢたちかへりて「コリヤ我徒はわかいおなごをとらへて何せるのじや　北八「イヤなんにもしませぬ　おやぢ「せんものがなんぜ。女ひとりおる内へはいらつせへた。コリヤじやうちならんわい　北八「ナニサ今用たしにいつて。ツイ水をもらつたばかりさ　おやぢ「インニヤあれは氣ちがひでござる。こなさん。きのちがふたものをとらへて。なぐさみかけさつせへたに。ちがひはあらまい※　北八「ナアニとんだことを　おやぢ「インニヤすまん／＼。氣ちがひとあなどつて。ひゆつとこなさんが。やりからかいた※にちがやしよまい。とかういわつせるな。此分ではすまんぞ／＼　トわめきちらかし大さはぎをやらかす、此内彌次郎兵へ、おもてのちやみせにまちゐたりしが、北八手水にいつてかへらぬゆへ、おこから見にきたり、さきほどより此よふすを、かたかげに見こゐておかしさこらへれず、しかしもふ出かけてやろふと、うそ／＼出きたり　彌次「御めんなせへ。わつちやア此おとこの連のものだが。いさゐ聞やしたこいつめも。あのよふに見へても。ありやうはちつと氣がふれてゐやす。了簡してやつてくんなせへ。エ、此やろうめ。よくせわをやかせる。アノ頰わよ。アレ見なせへ。きよろ／＼する顔が證據。むすめごは女だけまだしも。イヤモこのきちげへにはこまりはてやす　おやぢ「イヤ／＼そふではあらまい。ナニあの人が氣ちがひなものか　彌次「ハテサあの頰付を見なせへしアリヤ／＼あのとをりだ　北八「なんだおれをきちげへだ。コリヤおもしろい。ハ、アふるは／＼。アレ／＼花のふゞきが。ちりやたらり※。うんきんだらり※。かんきんちりゝ。ちりかゝるよふで。おいとしうてねられぬ。ト、、／＼。ヤアそこにおるは女房

○あらまい　西三河にては、「る」を「ら」に通はして使ふ。あるまい。
○やりからかいた　やったに同じ。方言。
○ちりやたらり　翁の謠の語。
○うんきんだらり云々　寒氣溫氣に睾丸がだらりとする、寒氣に縮まるの意。

どもか。イヤ能女房じやに〳〵。コリヤのほいほゝい。さんなあろかいな。ヤンヤア 彌次「アレ御ろうじろあのとをり。其くせあのつらで色氣違さ。それだから女と見ると。びろ〳〵して。ほんに恥をいはにやア利がきこへやせぬが。こいつめはわしが弟で。イヤモこんな因果なこたアござりやせん おやぢ「ハアこなさんがそふいわつせると。わしもかなしい。見さつせるとをり。たんだひとりの娘がこの病で。わしはおつきな苦患でござる 彌次「さつしております。ヱ、この馬鹿やろうめ。何をげら〳〵わらうのだ。時に親父さん。おやかましうござりやした おやぢ「マアちやでものんでござらつせへ 彌次「もふめへりやせう。サアきちげへめ。うせおれ ト彌次郎兵へがちやらくらに、やう〳〵とまいおさまり、彌次郎兵へきた八をつれて、こゝをのがれ出かけ、はては大わらひとなりて

くどきたる娘はほんの氣ちがひにこちやまちがひとなりし目ちがひ

かく打興じて。こゝを立出行道すがら 彌次「コウきた八手めへもとんだものだ。氣のちがつた娘をとらめへてどうしよふとおもつて。業さらしなおとこだ 北八「へ、めんぼく次第もねへ。しかしわつちまでをきちげへとは。彌次さん。ありやアおめへ一生の出來だぜ 彌次「さけでも買やれ。時にそれについてはなしがある。てうど手めへのよふな氣まぐれものが。きちげへの女をとらへて。じやらつきかゝると。其女のおやぢが見つけてはらをたて。ヤイ此やらうめは。人のうちへとはりなしに牛込やアがつて。むすめをちよろまかそふとか。ソリヤア赤坂べィだはへといふと。手めへもまけぬ氣になり。イヤうぬなんだ。くちばしをとんがらかして。四ツ谷鳶のよふだとちやかすと。さきのおやぢが。チ、おれがよつやとんびなりやア。うぬは八まんさまの鳩だといふ。コリヤおかしい。此北八がなぜ八まんさまの鳩だといふと。おやぢが。ハテきさまは。きちげへの豆をくをふとしたじやアねへかと。ハ、、、、

○さんなあろかいな 猿廻しに「さんなまたあろかいな」といふ言葉あり。

○びろ〳〵 涎を垂らすことを云ふ由。こゝは女に對して云ふ。近松の「一心五戒魂」にも「この右の手がびろ〳〵と惡ひ事を爲る程に」とあり。

○苦患 字音、苦限とも書けり。

○ちやらくら いゝ加減なこと。

○牛込やアがつて 押込やアがつてのもぢり。

○ちよろまかそふ ごまかす、それより詰意敏捷なり。

○赤坂べイ 「あかすかべい」のもぢり。「あかすかべい」は前に在り。

○四ツ谷鳶 鳶肌のこと。嘴を尖らすより云ふ。

○市谷の地口　「市谷」を「氣違」にかけしを云ふ。「八まんさま」は市谷八幡を指す。

○腹がすこしござつた　空腹の意。「ござつた」は「來た」の意。腹は北山などに同じきか。

○お小休　間の休。大名などに云ふを、洒落て用ゐたるなり。

○鮎のなます　前に「鮎の肴がおます」とある言葉に對して洒落たるもの。

○こうきぶし　不詳。朝倉無聲氏は岡崎節を字音にいひたりといへり。

北八「なんだ市谷の地口はおそれるハ、、、、。打わらひつゝ行ほどに。あづき坂を過岡の江ゆふせん寺を打こへて。大平川にいたる

岸に生ふ芹のあをみに小鴨まで水にひたれる大平の川

それより大平村を過行ほどに。岡崎の驛にいたるこゝは東海に名だゝる一勝地にて。殊に賑しく兩側の茶屋。いづれも奇麗に見へたり　ちやや「おやすみなさりまアし。おめしをあがりまアし。よい諸白もおざりまアす。おはいりなさりまアし〳〵　彌次「ナント※腹がすこし。ござつたじやアねへか　北八「いかさま。こゝでお※小休とやらかそふ　トあるちや屋へはいるうちの女「ようお出なさりました　彌次「あねさん。お飯にしよふ。なんぞ味へものはなしかの　女「ハイよい鮎のさかながおます　北八「ナニ鮎※のなますだ　女「チホ、、、、　ト笑ひながらやがてあゆのにびたしをつけてぜんをもちきたる　彌次「ドレ〳〵こいつはうめへ。そしてごうてきにしろいめしだ　北八「エヽ外聞のわりいとをいふ。アレ女が笑つていかア。あいつめは顔ぢうがゑくほだはへ　彌次「ゑくほならいゝがぼうべたがくぼんで踏返しの馬蹄石といふもんだハ、、、、　ト側のわるくちたら〳〵やれているこの北内おくざしきにはきんざいの客三人ばかり此ノゆくにゐつけしかへりがけと見へあいかたの女郎この所までおくり来りしとみへて、わかれのさかもり大さはぎにて、北しゆくの※こうきぶし、うたふこへにぎやかにきこゆる　うた「きくにませがきゆひこめられて。今はしのぶにしのばれず　チツテレトツテレ　ト大さはぎをやるゆへ、北八彌次郎おくの方をのぞきみれは、ひとりの客のこへとして「コレ〳〵太兵。さかづきはどふせるのじや　太「イヤ仁兵のねきにあらアす　仁兵「ドレおれひらをふ　太「あらためていこしやれ　仁「チト、、、、。こないにうけてはとかうはあたらまい。ソレさそかい　太「チツトうけた。ひゆつとやりからかいて。これから門もつこうへもどろふまいか。但しは桝屋か。てうじやへいこうまいか　女郎「なんじやいしアノ太兵さんはナア。醉なさるとナア。あのよふなことといふてじやがナア外へやります事はナア。ならまい

わいなア　太「イヤ／＼。かゝる折から橘屋で。手形うけとつたしろものがあるから。いかざならまい
女郎「ムウそふかいし　仁「そふとも／＼。チツテレトツテレ※かねて手管とわしやしりながら。だまされてさくむろの梅ハ、、、、、　ト此内からしりの馬二三疋おつたて來り、此ちや屋の軒につなぎこ、馬士共なかにはよりおくへこふり　三人「御太義だんながた。おむかひに參ました　これでわかれざならまい／＼。おなごりおしいが。
女郎「ひさしぶりで。これからまた鳴海のおつるさんじやおませんかいな　太仁「ハ、、、、サアいかふまいか　ちや屋のおんな「御きげんよふ　トそれ／＼にあいさつするうち三人の客は、めい／＼からしり馬にうちのり、いさまごひしてのりいだす、女郎おくり出て、さま／＼のしやれもあれごもりやくす、彌次郎北八、しじうこのていを見て、女郎かいのからしり馬でかへるもおかしいと、打わらひながら

三味せんの駒にうち乘歸るなり
岡崎およろしゆ買に來ぬれば

かくてふたりも此所を立出。宿はづれの松葉川を打

こへ。矢矧のはしにいたる

※欄干は弓のごとくに反橋やこれも矢はぎの川にわたせば

○かゝる折柄橘屋云々　芝居がかりの言葉。この手形は荷物の手形なるべし。

○かねて手管　文政元年秋、三代目菊五郎が大須に來り、天竺德兵衞の芝居の中に於て歌ひしため、この唄流行せるよし「小唄志彙集」に見ゆ。

○鳴海のおつるさん「金の草鞋」に「夫より程なく鳴海の宿に著たりける、此所にては飯盛の總名をお鶴と云ふよし」云々とあり。

○「欄干は」の狂歌　矢矧川に對して弓を持出せしもの。

○うづらやき　菓子の名。嬉遊笑覧に、園物語の「鶉やきはうす皮の十字のたぐひならん」とあるを引きたり、十字といふは饅頭のことなり。

○欲にはふける　鶉の鳴くを「ふける」といふより、鶉焼に因みて欲に耽ると云ひかけしもの。

○八ツ橋　杜若の名所。

○お亀　宮の飯盛の通名。

○わたしとこのぞうりは ひゆつと　この「ひゆつと」は爰にては、きつとの意に聞ゆ。

それよりうたふ坂町。尾崎の郷。今村の建場につく　ちや屋のばゞ「めいぶつ。さとう餅おめしなさりまアし。おやすみなさりまアし〳〵　北八「チイこの餅はいくらヅヽだ　もちやのていしゆ「二文でおざります　北八「こいつはやすい。こちらのうづらやきはいくらだの　ていしゆ「それも二文　北八「イヤこれは二文では高いよふだ。ナント御ていしゆ。こうしなせへ。これを二文にまけてくんなせへ。其かわりそちらの丸いもちは。四文に買やせう　ていしゆ、こいつはへんちきなことをいふとおもへど、どちらにしてもそんのいかぬことゆへ　ていしゆ「ハイよふおざります。おとりなさりませ　北八たばこ入からぜに二文取出して　一四文あらば丸いのを買ふとおもつたが。二文あるから。このうづらやきにしやせう　トうづらやきをとつて打くらひながら行　弥次「ハヽヽヽヽ、こいつは北八でかした。さすがのていしゆも肝ばかりつぶしていやアがつた　北八「ナントちゑはすさまじかろふ　弥次「へヽ、べらぼうめ。おれもそのくらひな事をしかねるものかハヽ、ヽヽ

　わづかでも欲にはふけるうづらやき三もんばかりのちゑをふるひて

かく興じ。わらひつれて。西田海道より半里ばかり。北の方に名にしおふ。八ツ橋の舊跡を思ひて

　八ツはしの古跡をよむもわれ〳〵がおよばぬ恥をかきつばたなれ

ほどなく池鯉鮒の驛にいたる　馬士のうた「みやで泊ろかお亀にしやうかナアたゞしや岡崎よい女郎しゆ。ナアドウ〳〵　弥次「いめへましい。わらぢであしをいためた。ちつとの間ぞうりで行ふ。モシ〳〵。此わらぞうりはいくらだね　ていしゆ「アイ〳〵十六文でおます　弥次「こいつはやすい。　このていしゆいせものにて、あきなひはこうしやに　ていしゆ「アイおやすうおますわいな。わたしとこのぞうりはひゆつと丈夫で。ねからきりやいたしませぬ　北八「ねからアきれめへが。さきのほうからきれるだろふ　ていしゆ「イヤおはきなされてはたまらないが。しまつて

○いもかは　西鶴の「一代男」に「芋川といふ里に、若松昔の馴染ありて、人の住あらしたる笹葺をつゝり、所の名物ひらうごんを手なれて」とあり。今云ふ「ひもかは」は之を訛れるか。「客をもつなぐ」といへるは、芋にて蕎麥をつなぐことに云ひかけしなり。

おきなさると。いつまでもおますわいな　彌次「そふだろう。そしておめへのとこのぞうりは。はなをがあつててうほうだ　北八「はなをのねへぞうりが。どこにあるものだ　彌次「何にしろ。やすいものだ。トつるしてあるぞうりを引きりとつて見て　イヤこのぞうりはちんばだはへ。かた〳〵は大きくて。こつちらはちいさいよふだコリヤア八文ヅヽにしちやア。大きなほうはやすいが。ちいさなほうはたかいものだ。ナント御ていしゆ。かたつほの大きなほうを。九文にかひやせうから。こちらを七文にまけてくんなせへ　ていしゆ「アイよふおます。おめしなされ　彌次「なむさん錢がたりない。一ッそく買ふとおもつたが。たつた七文ほつきやアねへから。アノこつちらのかた〳〵のほうばかり買やせう　北八「ハヽヽヽこいつは大わらひだ。おいらがまねをしよふとおもつても。餅ならいゝが。ぞうりかた〳〵が何になるものだ　ていしゆ「おさよふでおます。一ッそくおめしなさりませ。どふもかた〳〵はなしては。あげられませんわいな　彌次「ナニかたつほはうられねへか。さすがは田舍だけ。ものが不自由だ　北八「ヱヽ江戸だとつてナニぞうりをかた〳〵。賣ものがあるもんだ　ていしゆ「なんならこれになさりませ。これじやと。いつそくで七文にしてあげませうわいな　彌次「ヱヽ馬のくつがはかれるものか。人じらしな　北八「いつそくかいな。おめへかたつほ買つて。どふするつもりだ　彌次「またさきへいつて。かたつほ買をふ　ていしゆ「ハヽヽヽヽ十四文にいたしませう。一ッそくおめしなされ　彌次「きさま。とつくにそふいへばいゝ　トやう〳〵の事にて、ぞうりをこゝいの八、わらじをぬぎすてゝ、はきかへゆく　かくて此宿を打過。はやくも八町なはて。さなけ明神をふしおがみ。今岡村のたてばにいたる。

此ところは。※いもかはと言。めんるいの名物。いたつて風味よしとき ゝて

名物のしるしなりけり往來の客をもつなぐいも川の蕎麥

それよりあなふ村。落合むらを。すぎゆきて。有松にいたり見れば。名にしおふ絞の名物。いろ／＼の染地家ごとにつるし。かざりたてゝあきなふ。両がはの見せより。旅人を見かけて「おはいり／＼。あなたおはいり。名物有松しぼりおめしなされ。サア／＼これへ／＼。おはいり／＼　弥次「エ、やかましいやつらだ

　ほしいもの有まつ染よ人の身のあぶらしぼりし金にかへても

北八「ナント弥次さん。ゆかたでもかはねへか　弥次「おもいれ見たをして。やろうじやアねへか　北八「よかろふ。たんと買うつらをして。なぐさんでやろう　トあちこちを見まはすうち、此町のとつぱづれに、小みせなれど、そめ地いろ／＼、おもてにつるしある内へはいりて　弥次「コレ此しぼりは。いくらします　トいふに、此うちのていしゆと見へて、しやうぎをさしていたるが、よねんなくうてうてんとなりて　ていしゆ「サアしまつた。時にお手はなんじやいな　弥次「コレサこりやアいくらだといふに　トすこし、こはだかにいふと、ていしゆきをつぶし手「ハイ／＼それかな　弥次「いくら／＼　ていしゆ「コウト。あなたいくらだとおつしやる。そこでかやうにいたそかい　弥次「エ、小じれつてへ。コレうらねへのか。ねだんはいくらだといふに　ていしゆ「ハテさてやかましい人じや。そちらのほうへ。ひつかへして。符帳を見せなされ。たゞしれるものじやないわいの　弥次「こいつはとんだあきんどだ。ふてうに。ウのじとエのじがかいてある　ていしゆ「テ、そふじやあろコウト三分五りんぎれじや　弥次「たかい／＼。まけなせへ　ていしゆ「ナニまけいイヤならまい。此下手将棊に　しやうぎのあい手「次兵さん。マアあきなひをしよまいか。あなたがたがまつてござらつせる　ていしゆ「よいわいのとても敵等は。よふ買やしよまい。ハテかいたふても金銀はあらまい。ないはづじや。わしが手におはしますじやて　弥次「なんだべらほうめ。金銀があるまい。人を見くびつたとをいやアがる。あるから買をふ。これはふ

○有松　鳴海絞の産地。鳴海絞といへども、製造は有松なり。

○符帳　符牒とも書く、市語、商人の隠し語なり。

○敵等　古く花魁に對して敵と云ふ。相手といふことなれど、ここにては稍〻轉じて奴等と云ふ意に似たり。

んどしだけでいくらだへ　ていしゆ「なんじやふんどし買をふ。イヤぶしつけせんばんな　彌次「こいつおいらをてうしやアがる。賣ものかいものに無㒵も何もいるものか。はなつたらしめが　ト大きなこへする、ていしゆはつと心づきそう

くしやうぎをやめて「へイ〳〵是は麁相申ました。何なとまけてあげませずに。おめし下されませ　北八「そふいゝなさりやア。しこたま買つて上ゲやすは。彌次さん。おめへおふくろやかみさまへのみやげにはあれがよかろふ。いくらだの　ていしゆ「へイ十四匁八分でおます　彌次「ソレそつちのは　ていしゆ「これは十五匁

彌次「もつといゝのはねへか　ていしゆ「ありますとも。へイこれがなア廿一匁ヅヽ。こちらが廿二匁下のがナ十九匁ヅヽでおざります　彌次「もつとこれよりいゝのがほしい　ていしゆ「イヤもふみな。かやうなものでおざります　彌次「ムヽそんならでへじにしまつておきな。誰ぞがかいやしやうわつちやアいつち初手に見ておいた。此三分ぎれを。手ぬぐひだけ。きつてくんなせへ　ていしゆ「へイさやうかな　トきもをつぶし※二しやく五寸きつて出す、彌次郎此代をはらひて、こゝをたち出「とんだやつらだ。すでにいゝ三太郎にしよふとしやアがつた。きもつぶしな。ハヽヽヽ時にでへぶ道くさをした。ちと急いでやりかけよふ　トこれよりすこしみちをはやめ行ほどにはやくもなるみのゝゆくにつきければ

旅人のいそげば汗に鳴海がたこゝもしぼりの名物なれば

かくよみ興じて田ばた橋をうちわたり。かさでら觀音堂にいたる。笠をいたゞきたもふ木像なるゆへ。この名ありとかや

執着のなみだの雨に濡れじとやかさをめしたるくはんをんの像

それよりとべ村。山ざき橋。仙人塚をうちすぎ。やうやく宮の宿にいたりし頃は。はや日くれ前にて。棒鼻より家毎に。客をとゞむる出女の聲姦し。「あなたがたアおとまりじやおませんか。お湯もちんと

○二尺五寸　手拭。

○三太郎　丁稚にいへり。（學者氣質）猫よりはましぢやとほめられて、うれしがつてゐる三太郎殿、（六阿彌陀詣）おめへはかり智恵があつて、世間の人は皆三太郎だとおもつてゐなさる。

〇座頭の按摩　盲按摩のこと。

〇おんばこ様　堂あり、三途河の婆の木像を祭る。その前に裁談橋といふ橋あり、通稱おんばこ橋といふ。

〇六十六部の石碑　六十六部の結縁成就の碑。

わいておます。おあいきやくはおませんおとまりなされませ〳〵　弥次「とまりはどこにしよふ。銭屋か。ひやうたん屋か　北八「向ふのうちはなんだ。鍵屋か　女「モシおとまりかな　北八「チイ泊りやせう。はたごはいくらだ　女「チホ、、、、よふおますおとまりなさんせ　北八「なんだいゝとか。たゞでとめるか　弥次「むしのいゝ　トかさをとつてはいるやどのていしゆ「おゆをあげうず。おあしがよごれてなけらにや。すぐにおふろへおめしなされませ。　トにもつをざしきへはこぶ、此内弥次郎北八もわらじをぬぎ、おくへとをる、女ちやをもち来り「おちやあがりませ　ざとうの「おりやうぢをなされませぬか　北八「りやうぢもしてへが。マアはらがへつた　弥次「うどんでもくつてきや。こゝのめいぶつだ　あんま「さやうならのちに来ませず　ト立て行あとゝ二三人づれにてゆみはりてうちんをとぼし「ハイおとまりでおざりますか。是は當驛のおんばこさま。手水鉢の建立。お心ざしをおたのみ申ます　弥次「ハイきた八そけへあげてくりや　北八「是はすこしながら　トぜに八文出してやると、帳にしるし出て行、入かはりてぼうさまが一人「ハイわたくしは六十六部の石碑をたてます。お心もちしだい。お施主につかつせへて下されませ　弥次「なんだ石塔のせしゆにつけ。いめへましいことをいつてくる。ソレもつていきなせへ　トおなじく八文ほうり出してやる、入かはりて此うちのていしゆ、ひよつくりかほを出せば　弥次「エ、又八文か。きさまはなんのこんりうだ　ていしゆ「イヤ明日はおふねでおざりますか。又佐屋廻りをなされますか　北八「すぐに爰から舟にしやせう　弥次「舟はいゝが。おいらアどふもふねではなぜか小便をするがこはくて。そしてねつから出ねへにはこまる。七里のるといふもんだから。こらへてはゐられず。どふしたものだろふ。佐屋へまはろふか。ノウ北八　ていしゆ「イヤそれにはよいものをあげうず。さやうのおかたには。わたくしがいつも竹のつゝをきつてあげますから。それでおせうようなされるがよふおざります　弥次「そんならそれをおたのみ申やす　ていしゆ「ハイ〳〵。先御ぜんをあげう　トたつて行、此内女ぜんをもつてくる、こゝにてもいろ〳〵あれごもりやくす、やがてぜんもすみたるころ、さきほ

○按摩と北八　こゝの趣向狂言の「不聞座頭」より出づ。但最後に耳に指を突込むの條は「樂鼻頭」に左の咄あり。

按摩

肩をひねらせけるに大の下手ゆゑ、「是ばうさん、こなさんよりおらがおしなが遙上手だよ」、あんま胸をおさへやがて頭をもみ、それより耳のあたりをもみ、爰ぞ意趣がへしと耳へ指をおしこみ「はつゝけやらうめ」

○くがい　苦海。

ごのあんまきたり「だんながたいたしましよかいな　弥次「サアやらかしてくんなせへ　トこれより弥次郎あんまにもませる、このうちとなりざしきにとまり合せし、ごぜふたりが、なぐさみに三みせんを出し、いせおんどをうたふこへする、うた「はなもうつろふあだ人の。うはきも戀（こひ）といはしろの。むすびふくさのときほどきハリサコリヤサよい〳〵よいとなア。ツテチレ〳〵　北八「イヤこいつい丶こへだ。ナントあんまさん。わしはおどりが上手（じやうず）だ。おめへ目が見へると。あのうたでひとつおどつてみせてへもんだがなア　あんま「わしもすきだがなア。おどらつせるおとをきかアず。ひとつやらつしやらまいか　北八「やるはやろうが。ほめてもらはにやアはりやいがねへから。こうしやせう。わしがおどりしまつた所で。おめへのつむりをちよいとなでよふから。それをきつかけに。やんやアとほめてくんな。よしか〳〵。ソレおどるぞ　となりのうた「とけぬおもひはふたつ箱（はこ）みつよついつもとまり舟。それがくがい※のゆきちがひハリサコリヤサ　ト三味せんにあはせて北八手をたゝきおどるまねをして　北八「よい〳〵よいやさア　トおどりしまい、ざとうのあたまをちよいとあしにてなでるとあんま「ヤンヤアゑらい〳〵ハ、、、、　北八「なんとおもしろかろふ。もひ

とつやろふか　又となりのうた「さす手ひく手にわしやどこまでも。浪のうきねの梶まくら。　北八「よい〳〵〳〵よいやなア　ト又あしにてざとうのあたまをなでる　あんま「ヤンヤ〳〵　北八「ハヽヽヽおもしろへ〳〵　ト此うちやどのおんな「おゆにおめしなされませ　北八「彌次さんもふしめへか。しめへなら湯にいりなせへあんまさんが。おどりをほめてくれたかはりに。是からわつちももんでもらをふ　彌次「ドレそんならはいつてこよふ　ト彌次郎ゆに人に行、あとにてあんまは、北八をもみにかゝり　あんま「ときに旦那がたは。ちと當宿のおつるでもおよびなされ　北八「イヤそれよりかアとなりの三味は。こゝの娘か。何人だの　あんま「あれは二三日まへからこゝの内にとまつてゐる。瞽女でおますが。よいこへだなもし。しかしまんだ。わしがじんくを。旦那がたへきかせたい　北八「コリヤよかろふ。やらかしねへ　あんま「そのかはり。わしもほめてがなけらにや。はりあいがない。うたひしまつたら。だんなほめてドさるかな　北八「チツトしやうち〳〵　あんま「ドレやりからかさふ　ト北八がつむりをもみながらひやうしをとりてあたまをぴしや〳〵　あんま「ジヤヾジヤン〳〵エヽヽヽよふたよた〳〵五しやくの酒に。壹合のんだらさままたよかろ　トうたひさして北八がみゝのなかへぐつとゆびをつゝこみ「こいつがさいぜんわれらがあたまをあしげにひろいだはつつけやろうめ。かつたいやろうめ。うぬがよなやろうは。ろくではゆくまい。あげくのはてには。くびでもつるじやろ。トいゝさして、耳のあなよりゆびをぬけば、みゝはポンとなる　あんま「やとさのせ〳〵　北八みゝのあなをふさがれて、うぬがことを、わるくいはれたをもしらず　北八「ヤンヤ〳〵　あんま「ジヤヾジヤン〳〵　トひやうしにかゝつて、きた八があたまをぴしや〳〵とたゝく、北八かほをしかめて「おもしろへ〳〵　あんま「もひとつやろかいな　北八「イヤもふ御めんだ。あたまがたまらぬ　あんま「ハヽヽヽゑろふおもしろかつた　此内彌次郎ふろよりあがりこのよふすをちらと見て　彌次「おしやう。もつとやらかしねへ　北八「イヤおいらはもふ。湯にはいつてこよふ。あんまさんもういゝによ　トいゝすてゝふろばへ行、あんまはいとまごひしてかへると、うちの女、とこをとりに來り、ふとんをしきてかつてへ行、彌次郎はゝや、そのまゝねかける、此内北八もふろばよりかへりて「ヲヤ彌次さんもふねかけたの。とき

○後夜のかね　午後十二時。
初夜は午後十時。夜半は午前二時。

におめへ。となりざしきのしろものを見たか。とんだうつくしい瞽女だ　彌次「ごぜなら目があるめへ　北八「目はねへがまんざらじやアねへ。今湯からあがつてくるとき。ひとりのごぜめが。手水場にまごついてゐたから。小あたりにあたつておいた。なか〳〵やぼでねへしろ物よ。彌次「ドレ〳〵　トはひおきてのり出しふすまの間からさしのぞき「ハヽア、うしろすがたはなか〳〵いきなふうぞくだコリヤアこのまゝではおかれぬはへ　北八「イヤそふはならぬ　トいつゝよぎを引かぶり、心のうちには、おのれ今にはひかけてやろうと、わざとねるふりにて、よこになるとじきにそらいびきをかく。此内となりざしきもひそまり、ふたりのごぜもねたよふす、夜もしん〳〵とふけわたり、○後夜のかね「ゴチン〳〵　彌次郎、そつとおきあがり見れは、きた八はほんとうにねいりしよふす、してやつたりと、そろ〳〵はひかけ、ふすまをそつとあけてとなりざしきへはいり見れは、ごぜふたりはぜんごもしらずねいりはな、彌次郎ごぜのふところへ、はいらんとせしに、さすがは目のみへぬものとて、用心きびしく、ふろしきづゝみを、兩手にしつかりかゝへてねているゆへ、これがじやまになりて、はいりにくゝ、彌次郎そろ〳〵此ふろしきづゝみを、とりのけよふとするを、ごぜめをさまし、かた手につゝみをかゝへ、かた手にて彌次郎が手をぐつとさらへて　ごぜ「ぬす人よ〳〵。おやどのしゆ〳〵　トわめきちらされ、彌次郎は、あてがちがひ、じゆばんひとつのこのなりを、見つけられてはごうさらしと、ごぜが手をたゝきはなして、そう〳〵にもとのざしきへかへり、よぎをかぶり、そしらぬふりしてねている、北八はとくより目をさまし、くつ〳〵とわらつてゐると、此うち、かつ手より、ていしゆかけつけて「ごぜさまどふさつせへました　ごぜ「わしが此かゝへてゐるつゝみを。いんまだれやらとろふとしおりました。雨戸でもあいてあるか。見てくれなされ　ていしゆ「イヤどこもあいてはゐおりませぬ　ごぜ「それでもいんまの盗人は。どこから來おりましたろうな　ていしゆ「ハヽア ふすまがあいてある。モシ〳〵おとなりのおきやくさまがた。およつてござらつせるか　彌次「ア、ウ、ムニヤ〳〵　ていしゆ「ハヽアこゝにおちてあるはなんじや。イヤふんどしじやそふな。モシおきやくさまがた。これはあなたがたのではおざいませんか　ト大きなこへするに、彌次郎はつとおもひそつとあたまをあけて見れは、わがふんどしが、ごぜのまくらもとから、しきゐごしに、わがまくらもとまで、ながくなつておちているゆへ、おかしさもおかしく、さすがおれがのだともいわれず、もじ〳〵していると、きた八わざといぢわるくおきあがり「なんだへそう〳〵しい。ふんどしがおちてあるとは。ドレ〳〵それか。コリヤア彌次さんおめへのふんどしじやアねへか　彌次「エ、なさけないことをぬかしやアがる　トきた八がよぎのそでをひく、ていしゆもきてはとしやうちして、こゝろのうちにおかしく、思ひながら「イヤもふ旅の事でおざりますから。おたがひにお氣をつ

けて。御用心なさるがよい。ごぜさまもふお休なされ　ごぜ「きみがわるくてねつかれませぬ。よふしめていつて下さりませ　ていしゆ「さやうなら　トそこらたてまはして出て行彌次郎そつと手をのばして、ふんどしをたぐりよせる、きた八おかしく、ふきいだしながら

瞽女どのにおもひこみしは是もまた戀に目のなき人にこそあれ

すでに夜もいたく更わたれば。みな〱やうやく一すいの夢をむすぶ。あかつきの風樹木をならし。浪のおと枕にひゞきて。つきいだす鐘におどろき。目さめてみればはや明方の烏「カア〱　馬のいなゝき「ヒイン〱　長もち人足のうた「さかはなアてる〱ナアヱ。すゞかはくもるナアンアヱどつこい〱　出ふねをよぶこへ「ふねが出るヤアイ〱　此ときやどやの女おこしにきたり「モシいんま壹番ぶねでおます。御ぜんをあげましよ　彌次「チイ〱北八サアおきや　トふたりはおき出て、手水つかふ内ぜんも出くひしまひ、かれこれするうちやどのていしゆ「おしたくはよふおざりますか。舟場へ御案内いたしましよ　北八「それは御苦勞サア彌次さん。出かけやせう　トそこ〱にしたくして、おもての方へ出かける、やどの女ぼうおんな「御きげんよふ。又おくだりに　彌次「アイおせはになりやした　トいとまごひしてふなばへ行ていしゆこゝまでおくり來り「せんどうしゆ。おふたりさまじやたのみますぞ　彌次「ときにわすれた。御ていしゆさん。夕部おやくそくのかの小便の竹のつゝは　ていしゆ「ホンニちんときらしておきましたに。ドリヤ取てまいりしよかい　トていしゆかの竹のつゝをとりにかへる、此わたし船七里のかいじやう、一人まへ四十五文ヅヽ、其外駄荷のりものみなそれ〱にちんせんをはらひ、ふねにのる、此ときていしゆ、竹のつゝをもつて來たり「サア〱お客さま。そこへなげますぞ　北八「なんだ火吹竹か　彌次「これをあてがつてナ。とやらかすのだ。よし〱。イヤ御ていしゆさん。大きにおせは。サア是で大丈夫だ。ハヽヽヽ

おのづから祈らずとても神るます宮のわたしは浪風もなし

かく祝しければ。乘合みな〱いさみたち。やがて船を乘出して。順風に帆をあげ。海上をはしると矢

○小便の失錯　文化四年に一九が書ける「馬子の歌ふくろ」に便用に使ふ貫筒を知らずして酒酌みしことを記し、「東京にてもよき竹を火吹竹ほどに切はべりて、國の守などの便用にもたさせ玉ふ事はべるよし」云々と記せり。「膝栗毛」四編出てより三年目に種明しをせるもの。
○しゆびん　瀬戸物にて取手のつけるもの。溲瓶。

のごとく。されど浪たひらかなれば。船中思ひ〳〵の雑談に。あごのかけがねもはづるゝばかり。高聲に笑ひのゝしり行ほどに。あきなひ舟。いくそうとなく漕ちがひて「酒のまつせんかいな。めいぶつかばやきのやきたて。だんごよいかな。ならづけでめしくはつせんかいな〳〵　彌次「ア、よくねたは。いつのまにやらごうぎに來たぞ。時に小便がもるよふだ　トやどやのていしゆがくれたる竹のつゝをいだし、こゝでこそと、まへにあてがひ小べんをする、此竹のつゝは、火ふきだけのごとく、さきのほうにあなをあけたるなれば、ふねのふちにもたせかけて、せうべんをするつもりの所、彌次郎の心には、あなのあいてあるには心つかず、しゆびんのよふにおもひ、竹のつゝへせうべんをしこみて、あとでうちあける事とこゝろへ、ふねの中にて、すぐに竹のつゝへしこみければ、さきのあなより、せうべんがながれ出て、せんちうせうべんだらけとなり、のり合みな〳〵きもをつぶす　コリヤ〳〵なんじやいな。水がゑろうながれる　のり合「たれかどびんをうちこかいたそふな。ソレ〳〵たばこ入も紙入もびつしよりじや。コリヤたまらんは。ヤアおまへ小便じやな　トとがめられて、彌次郎竹のつゝをかくし所にうろ〳〵、まご〳〵する　北八「エ、彌次さん。どふしたものだ。おめへ小便をするなら、そけへあがつて。竹のつゝのさきのほうを。海へ出してしこむのだはな。めつそふな。船の中がせうべんだらけになつた。エ、きたねへ〳〵　彌次「おれはまたこゝでしこんで。あとでぶちまけるのかとおもつた　のり合「イヤはやとほうもない。コリヤアくさくてならんはい。舟頭衆〳〵。もふしきものは外にはないか　せんどう「だれじやぞい。せうべんをしたのは舟玉さまがけがれる。はやうコレふかつせいな　北八「エ、きのきかねへ人だ　せんどう「エ、ソレ。まだ竹のつゝからおちる。それもほかしてしまわつせへな　彌次「イヤこれはそつちへやろふ。火吹竹になろふから　北八「エ、おめへが小便したものを。ナニ火ふきだけになるものだ。はやくふきなせへ。らちのあかぬ　トいぢめられて、彌次郎ふんどしをはづし、そこらをふくうち、北八はうすべりをひつくりかへししきなをし「サア〳〵是でいゝ。どなたもおすはりなせへ　彌次「コリヤみなさま御めんなせへ。とんだばんくるはせをいたしやした　トついにたいしよげかへりて、そこらとりかたづける、のり合みな〳〵にがわらひしてだんまりでゐる、此内はやくも舟はくわなのきしにいたる　のり合「きたぞ〳〵。小便にこそぬれたれ。舟はつゝが

なく桑名へきた。めでたいく

トみなく\これよりあがりて此しゆくによろこびの酒くみかはしぬ

東海道中膝栗毛四編下終

東海道中　膝栗毛五編

膝栗毛五編序

歌人は居ながら名所をしり、雅人は行て名所を採る。今年五篇目の膝栗毛を十編舎の主人。心の手綱をかい〳〵くりかけ見れば伊勢の海千尋の濱に深くうがちて洒落を花なる貝盡し。古跡を温て新しき。趣向を見する筆のすさみに。予も寐ながら名所をしり馬。はねる顔にて序すること。是作者の需に應じてとはうその皮。もとめもせぬに筆を採しは。跡の一杯がすぎ田のむめの。香にひかれたるうかれ心。これも亦尓慶の仕事と謂ん歟

文化丙寅春　　亀山人蘭衣誌

附言併凡例

予今年神無月廿日あまり。六日の朝おもひたちて。東海道に杖をはせ。伊世路に赴き。内外の宮巡りして歸りしは。雪見月の五日になん。そよりして此五編目の著述にかゝり。彫工机のもとにたえず。須臾も筆をおくことなし。然るにいづれ人の編りけん。膝栗毛續編といへるもの。皇都の書肆より下したりとて。上總屋忠助なる人

のもとより。予が方におこせたり。予是を閲するに其排設つゞまやかにして。滑稽にも工みなり。おしむらくは。かゝる色の文をもて。などて自立せざることそ不審けれ。そは名を素る人に非ず。欲にはするの徒なるべき歟。されど予が爲の引札にして思はざるの幸甚なりき。此故に今五篇目にいたるまで。頓て見んことを競ひ給へる人のあなりと。書肆の喜びは。益膝栗毛の尾に尾をつかんことゝ。おしはかれるにやおぼつかなし

或人曰。此書初編より四篇に及ぶ迄。彌次郎兵衛北八なるものゝ。髪結月代をせし所を見ず。こは大江都を立出しより以來。其事なきはいかにぞや。予答曰。こたび旅行の刻しばしばその光景を見るに。風土人情の差別。方言のおかしみ。其洩たること。欠たること。算ふるに十指を出たり。されば其の足ざるを穿鑿し給はるこそ。予が爲の幸なれば。取あへず其ことをもて追加に出せり

驛中飯盛おじやれの戯れは。巻中毎に粗あらはして事ふりたれど。こたび作者の旅宿にて。實に夜這といへるとを。仕損じたるとのあなれば。其實をもて。彌次郎兵衛北八が。四日市泊の趣向とす

東海道追分までを上巻とし。其余伊世路にかゝりて。事繁く記すに遑あらず。漸山田に此巻の筆をとゞめて。續編に妙見町の寄宿古市の極樂。相の山の宮めぐり等をあらはし續て出板す

兼々聞及貴公才　一通相逢親十回
探得神都神代穴　翩々棄刺栗毛來

右　初逢十返舎一九生自勢刕還戯賦以送

瀨　芳　園　艸

東海道中膝栗毛五編上

十返舍一九著

宮重大根のふとしくたてし宮柱は。ふろふきの熱田の神の慈眼す。七里のわたし浪ゆたかにして。來往の渡船難なく。桑名につきたる悦びのあまり。めいぶつの燒蛤に酒くみかはして。かの彌次郎兵衛喜多八なるもの。やがて爰を立出たどり行ほどに。此頃旅人のうたふをきけば はやり唄「しぐれはまぐりみやけにさんせ。宮のお龜が情所ヤレコリヤ。よヲし／＼よし 馬士「コレ旦那衆戻り馬のらしやせんか 北八「せうろく四文でのるべいか 馬士「そんならよヲせよせ 彌二「よヲしよし 馬士「やすいに。たんだ百五十でやらまいか 馬「ヒイン／＼ 馬士「ふねはナア追手にほかけてはしるよアンエ。はやくサア。あつ田に泊りたやナアンアエ八兵衛どふした。馬でものんだか。なんだかはねらア。どつこい／＼ 北八「なんと彌次さん。なにもなぐさみだに。こうしよふじやアないか。おめへの荷物とわしがのを。いつしよにして。ひとりがひつかついで。半日がはりに旦那と家來のしうちはどふだろう 彌二「コリヤおもしろい。それよかろふ。まづおいらから。旦那をはじめるぞ 北八「そりやアいゝが。けふはもふ八ツだから。七ツがはりにしやせう。勿論だんなと供のあしらひは。たがひにばんくるはせなしに。やらかしやせうぜ 彌二「しれた事よ トいひつゝあたりに、竹一本をさいかくし、彌次郎がにもつさ、北八がつゝみを、りやうはうにくゝりつけて 北八「左ヅヽしやくにお

○宮重大根 尾張國西春日井郡落合村の名産。風呂吹にすれば甘味ありてよしといふより「ふろ吹」と續け、風呂吹の熱きより熱田にかけしもの。

○時雨蛤 もとは時雨の頃の蛤といふ一定の時期を指せる語。轉じて一箇の名稱となり、遂には桑名特有のものゝ如くなる。

○せう六四文 六のことを正六といふ。六四にて六十四文。

○馬でも呑だか 馬を呑む放下師鹽屋長次郎のことを云へるか。「兎角金を儲けん爲に我人工夫すれば鹽屋長次が馬を呑む術もなる事」（諸商人世帶氣質）

○おいらはトヽ上下　我は道中日傭の上下雇の人足のつもりで行かうといふ意か。

○やみけんこ　拳固は五指なれば、やみけんこにて三百五十と云へるか。雲助の符牒なるべし。

めへ旦那よ。おいらはトヽといふもので出かけよふ。ナントよつほど。氣がきいてるんだろふ　トまたかご[illegible]ひつかけて　北八「モシ旦那へ　彌次「なんだ　北八「いゝ天氣でござります　彌二「ナヽ、サ風が凪であつたかだ　北八「さやうでござります　トかくいふうち、いつのごとく、打かたりつゝゆくほどに、はやくも大ふく村、小田村を打過て、けや川にさしかゝれば彌次郎兵衛取あへず

旅人を茶屋の暖簾に招かせてのぼりくだりをまつ早川かな

斯打興じてなを村おふけ村にたどりつく。此あたりも蛤の名物。旅人を見かけて。火鉢の灰を仰立〳〵　女「おはいりなさいまアせ。諸白もおめしもございまアす。おしたくなさいまアせ〳〵　かごかき二「駕いかまいかいな。これから二里半の長丁場じや。安うしておきぬかい　かご「あとのおやかた。旦那をのせもふして下んせ。戻りじや。やすめに　北八「だんなは。おひろいがおすきだ　かご二「そふいはすと。モシ旦那。やすうしてやらまいかいな　かご一「やすくては。やたら高くやるならのりやせう　かご「そしたら。高うして三百いたゞきましよかいな　彌次「いやだ〳〵。もちつと高くやらねへか　かご「ハアなんだやすいなら。やみけんこで（※三百五十）彌次「壹貫五百ばかりなら。のつてやろふか　かご「エ、めつそふな。わし共も商賣冥利。其様ないにちつとはいたゞかれませぬ。せめて五百でめして下んせんかい　彌二「それでも安いからいやだ　かご「ナアニやすいこんではあらまい。そしたら。わかれに七百くだんせ　彌二「イヤノ〳〵、めんどふだ。何がなし壹貫五百よりまからぬ〳〵　かご「はて扱こまつたもんじや。それよりちつともまからまいか　彌二「まからぬ〳〵　かご「エ、なんの事じや。かごかきのはうから。ねぎるといふはめづらしい。まゝよぼうばみ。壹〆五百でやらまいかい。サア旦那めしませ〳〵　彌二「それでいゝか。高くのつてやるかはりに。酒手をこつちへ貰らはにやならぬがつてんか　かご「あげませずとも

彌次「そんならさきへいつて。壹貫四百五拾文。こつちへ酒手にさしひいて。のこり五十のかごちんだが。それで承知かどふだ　かご「エ、そんなこんであらず。とひやうもない　彌次「そこでまづゐんきりだハヽヽヽ　北八「こいつは旦那ができた〱

たび人をのせるつもりで駕舁の
　高い直段にかつがれにけり

斯て朝餉川松寺をうちすぎ。富田のたて場にいたりけるに。爰はことに焼はまぐりのめいぶつ。兩側に茶屋軒をならべ。往來を呼たつる聲にひかれて。茶屋に立寄こしをかくると　女「おはやうございました　トちやを二ツくんで來り彌次郎へさし出す、彌次郎兵へは旦那のつもりゆへわらじのまゝ、ちやの板の間にあぐらをかきて「きた八、したくはいゝか　きた八もやくそくなれば供のきどりにて「よろしうございませう　コレ女中。おめしを二ぜん出してくんな　女「ハイ〱はまぐりでおあがりなされますか　彌次「イヤ箸でくいやせう　女「チホヽヽヽ　トはこにしたいろりのよふなものゝ巾へ、はまぐりをならべ松かさをつかいこみ、あふぎたてゝやくうち　彌次「コウ酒はいゝのがあるかの　しかし諸白ではなくて。片白にはこまる。そして江戸じやアうめへものゝ。くひあきし

てるる駕だから。道中のものはねからくへぬ。馬にのればあぶなし。駕はあたまがつかへる。店のものどもが。おやどの駕をおつらせなさるがよふござりますといひおつたが。なるほどそふすればよかつた。不肖してのればのるものゝ。もふ／＼道中駕にはあきはてた。北八是からはあるいてゆかふ。いゝ草履があらば買つてはいた。はきつけぬ草鞋で。コレ見や。あしちうが豆だらけになつた　北八「ほんにな。アッけふはじめてわらじをおはきなさつたから。古いあかぎれが再發した　彌次「とんだことをいふ。これはあんまり足がやはらかだから。わらじのひもがくへこんだのだ。ヤ時に。はまぐりは　女「ハイ只今あげます　ト大さらにやきはまぐりをつみかさねていだいめしをこぜんもつて持てくる　北八「コウ彌次さん見なせへ。いろおとこはちがつたもんだろふ。コレ／＼こゝのむすめがおめへの飯はちつと盛ておいらがのは。このとふり山もり。餓鬼道の一里塚といふもんだ。ア、うめへ／＼　彌次「へ、べらぼうめ。アノむすめが。しやくしあたりのいゝのを。ほれたのだとうれしがるもおかしい。ソリヤア手めへをやすくするのだは　北八「なぜ／＼　彌次「すべて此かいだうでは上下のものや。供のものへは。飯を山もりにして出すといふとだ。それだから誰が目にも。おれは旦那。手めへは御供と見へるから　北八「ハアそふかいめへましい　彌次「ハ、、、、はまぐりをもつとくんなせへ　女「ハイ／＼　ト又やきたてのはまぐり大さらにもつていだす　彌次「おまへのはまぐりなら。なをうまかろふ　ト女のしりをちよいとあたる　女「ヲホ、、、だんなさまは。よふほたへてじや　北八「おれもほたへよふ　トおなじくしりをつめりにかゝれば、女「コレよさんせ。すかぬ人さんじや　北八「どふでも。おいらをばやすくしやアがる　トぶつ／＼こごとをいふうちあたりの寺のかねがゴヲン　北八「女中あれはなん時だへ　女「もふ七ツでござります　北八「しめた／＼。約束のとをり。是からおれが旦那さだま。コリヤ／＼彌次郎兵衛。おれはもふ。馬にも駕にも乗あきた。是からそろ／＼ひろいませう。いゝ

○おやどの駕　道中駕にあらざる、頭の閊へぬ駕。

○餓鬼道の一里塚　一里塚は道標なり、疲れたる者が道標に慰むが如く、飢ゑたる者は澤山の食物に慰ふべし。是に見立てなり。

○七つ　午後四時。

○「膏薬」の狂歌　蛤貝に膏薬を入るゝより云出せるもの。その膏薬を、蛤にてしたる火傷へつけるといふ意ならん。

草履をかつて來やれ。はきつけぬわらじで。コレ見や。豆だらうが足だらけだ　彌次「ばかをいふ。なるほど手めへは足だらけだ。ひとつの足が。いくつにもわれてゐるから　北八「イヤ旦那にむかつて。手めへとは何のこだつ。この荷物もそつちへやろふ　彌次「ハテ現金な男だ。マアそつちにおきやれ「イヤそふはならぬ　トつきつけるを、彌次郎兵へつきもどすはづみに、はまぐりをもつてある皿をひつくりかへすひやうしに、やけたはまぐりが彌次郎兵へのふところへひよいとはいるト　彌次「アツ、、、、、。はまぐりのつゆがこぼれてアツ、、、、　北八「ドレ〳〵　トふところへ手を入れてはまぐりをつかまへ　北八「アツ、、、、　トとりおとせははまぐりへその下へおちる、きた八うろたへて、彌次郎がもゝひきのうへから、きん玉とはまぐりを、いつしよにつかむ　彌次「ア、、アツ、、、、コリヤどふする。きんたまがこげらア　トいふうち、やう〳〵もゝひきのまへのふはせめをひろげると、はまぐりはほつたりおちる　北八「ハ、、、まづは。御安産でおめでたい　彌次「しやれ所じやアねへ。とんだめにあつた　女「おけがはござりませぬか　彌次「けがはせぬが。まだ腹の中がぴり〳〵する　北八「ハ、、、、、、

膏薬はまだ入れねどもはまぐりのやけどにつけてよむたはれうた

○帯屋は兩家とも　帯屋は二軒あり。

○十四五の前がみ　元服以前の者。

○淺柄の煙草　産地を呼ぶなり、「十方庵遊歴雜記」云「尾州の赤坪又は朝から抔いふ玉莨を用ゆ」

○四文粉　安煙草のことなれど、四文にて何匁あるや不詳。

それより此所を立出。はつ村八幡を打過。七ツ家あくら川にいたりし頃。四日市の宿引出向ひて「これはおはやうございます。わたくしおやどをおたのみ申上ます　彌次「わつちらア帯屋へ行やす　宿引「イヤ今夕はゝお大名さま。おふたかしらおとまりで。帯屋は兩家とも。おさし合でございますから。わたくしかたにおとまり下さりませ　ト [illegible]　やど引「ハイそれはいかやうとも　彌次「ゆふべは宮の斧屋にとまつたが。とんだ叮嚀にした。百五十で圖臺をつけてめしをくはせるか。そして酒も菓子も出したから。コリヤアだまつてもゐられめへと。別に茶代を貳百やるつもりの所。やつぱりやらなんだから。大きに安かつた。きさまの所もそのつもりで馳走するがいゝ　やど引「かしこまりました　ト だん〳〵はなしながら打つれてゆくともなしに、四日市のほうはなにいれば、やど引かけだして、サア是でございます　コレおとまりさまじや　女房「おはやうおつきなさいました　ト あいさつのうち、ふたりは[illegible]入　亭主「今晩はわたくしかたへおこしやいました。おきのどくながら。奥のお客と御いつしよになされて下さいませ　彌次「ずいぶんよしさ　ト あんないしておくの間へつれ行、あいやざいなかものふたりあり　女房「さやうならこれへ　彌次「御めんなさい　田舎もの「おはやうござらつせへたか　北八「ア、くたびれた。ゐいとこな　女「すぐにお風呂にめしませ。御案内いたしませう　北八「ドリヤおさきへまいらう　ト 手ぬぐひをさげて湯に行、此内十四五の前がみ、ふろしき包のはこをさげて「おたばこは入ませぬか。楊枝はみがき。おはながみはよろしうございますか　田舎「久しかぶりで。吉田の大竹へのたりこんで。おやまに淺柄のたばこ貰ひおつたがみなすふてしもふた。　今ひとりのいなかもの「四文粉はおらまいか　商人「イヤそれはございませぬ。是をあがつて御らうじませ　田舎「ドレ〳〵パツ〳〵〳〵。こりやねからたわいがない。こつちらのはどふじやい　ト

きせるについですつぱ／＼　商人「それがよふございませう　田舎「イヤこれもねから火がつかぬ。見やんせ。すふておるうち消らかいた　商人「ソレあなたのひざにもえております　田舎「ヤアコリヤ／＼大事のきりらん（着物）を燃らかいたプツ／＼。イヤこないに膝の焦るたばこはいらない。もつていかんせ　商人「ハイさやうなら　ト　こゝこいゝながら出て行、北八湯よりあがりて　北八「サア彌次さん。湯にはいらねへか　女「あなたおめしなさりませ　彌次「イヤで大分へぶ。

あだなやつらがちらつくぜ　北八小ごゑに「今のやつを風呂場で。ちよびつと契つておきは。はやかろふ　彌次「ソリヤほんとうにか。どふして／＼　北八「おれが湯にいつてる所へ、おぬるくはございませぬかといつて。うせおつたから。すぐにそこで約束した。まだひとりいゝ年増が見へるから。おめへ湯に入てまつてるなせへ。大かたそこへくるにはちげへはねへから。そこでくらをかけるがいゝ　彌次「しやうち／＼。ドレ入て來やせう　ト彌次郎はゆにいつて[illegible]　一ハイ燒酎は入ませぬか白酒あがりませぬか　北八「チツトそのしやうちうを少しくんなナト、、、、よし／＼　トちやわんにつがせこれをはらひ、かのしやうちうをたしにふきかけ　よし／＼。これでくたびれがやすまるだろふ。どなたも御めんなさい　ヤア忝いとこな　ト　とこにねかけて、北八彌次郎は湯に入て、女のくるのをまちわびいつかうに來らず、手あしい　ゆびを一本ずつにあらひて、しばらく[illegible]、ふろはのなかにもいれてぐにやりこなり[illegible]北八[illegible]彌次郎がながゆなこゆへ[illegible]ふろは八のぞきにきて[illegible]を見て　一ヤアノ＼／＼彌次さんどふした／＼コリヤたいへんだ　ト彌次郎ハかほに水をそゝぎ　彌次さん／＼　彌次「チ、〳〵ウ、、ウ、、、引　北八「いゝかく　どふしたのだ／＼　彌次「どふした所か。手めへおれを、忝いめにあはした　北八「なぜ／＼

彌次「ゆに入ながら。もふ女がくるか／＼とおもつて。あんまりながゆをしたから　北八「それでゆけにあがつたか。ハ、、、ちゑのねへはなしだ　彌次「手めへのおかげで。まだ足がひよろ／＼する　北八「ハ、、、、こいつはおかしい。サアたちな　トやう／＼にきものをきせ、きた八がかたにひつかけ、ざしきにつれてかへること、そのきゝたおれて、さちからなささふに　彌次「ア・／＼今

すこしはつきいした　北八「おめへもとんだものだ。いゝかげんにあがればいゝに　彌次「イヤおれも。手めへのいつたとをり。大かたなめがくるだろふと。まつたほどにく。向ふのながしに。かの年増らしいやつが。なにかあらつてゐるから。コレ脊中を。ながしてドせへといつたら。ハイとこいて。六十ばかりのばゞアめが。たはしをもつて。さやアがつて。おせなかを。あらひませうかとぬかしやアがる　北八「こいつはいゝ　トむちうになり、ねはらはつてゐるながら、おもいゆびにて、あごのほうにねころんでゐる、いなかものゝ耳をひつぱつたりなにかして、もちやそびにする、このいなかもの、さんだきのよい男にて、そつこわきのほうへあたまをよけるさ　北八「それからどふした　彌次「きいてくれ。おれもあんまりごうはらだから。いまくしい婆々あめだ。たはしをもつてどふしやアがるといつたら。ハイくとぬかしてひつこんだが。やがて又庖丁のおれたのを。もつてうしやアがつて。これでおせなかの垢を。こそげおとしてあげませうかと。おれを鍋か釜のよふに。おもつていやアがるそふな。いまくしい　北八「ハヽ、こいつはでかしたく　トむちうになりて、又田舎もの・あたまを、あしにてさがしまはし、みゝをいぢりかけるさ、こらへかねて北八があしをこらへ　田舎「コレく最前から。だ

○手そゝぶり　喫、捧などの字を當つ。こゝでは足にておもちやにすること。

まつておればなんぜ。此おしで。わしが耳をなぶりものにさつせへた　トいはれて北八一ハイこれは御めんなせへ　田舍「インニヤ扨御めんではじやうちならまいわい。それもこなさんが。むちうにならつせへて。はなしさつせる。手そゝぶりにやアあらまい事でもないが。こつちであたまをよけよふとすると。又あしでさぐりまはいては。なぶりものにさつせる。なんぜ人のあたまア。土足につつかけさつせへた。すまない〳〵　彌次「ソリヤおきのどくなことだ。御めんなせへ。此よふにおあいやどするも。他生の縁とやら。どふぞ了簡してやつて下さりませ　田舍「こんたがそふいはつせりやア。きかまいものでもないが。あんまり人を。ばかにさつせるから　北八「イヤもふ生醉だから。かんにしてくんなせへ　田舍「イヤまんだこなさんは。わしどもをばかにさつせる。最前から見ておるに。酒ものまないで。生醉とは。猶じやうちならまいわい　北八「はてわつちは酒をのみやせぬが。此足がなま醉だから　田舍「ナニ足が酒をのむもんか。ばかアつくさつせるな　北八「おめへでへぶあつくなるの。あしが醉たといふは。さつき燒酎をふきかけたから。それに此おしめが醉くさつて。ソレ御らふじろ。ひよろり〳〵。アレまだおめへのあたまに。からかをふとするコリヤ〳〵〳〵　田舍「ほんにこなさんの足は。わるい酒じや　北八「さやうさ。おしは下戸の足がよふござりやす。わつちはまことにこまりはてる　田舍「そんならよふござる。もふねまらまいか。女中〳〵。ねどころをたのみます　ト此内女來りそれ〳〵にとこをとりねかすと、田舍ものふたりは、そこへころげるやいなや、ぜんごもしらずすう〳〵と高いびき、彌次郎北八この女どもに、こあたりもん句もさま〴〵あれど、この所ことめしどきのしやれは、ぐつとはしよる、女どもはとこをとつてしまい、かつ手へ行と、彌次郎小ごゑになりて「きた八〳〵。實に手めへ。さつきの女と約束をしたか　北八「しれたことよ。しかしこつちへは來ぬつもりだ。此つぎの間の壁を。つたわつてゆくと　いきあたつた所のふすまをあけろ。そこにねているといひおつたから。今にゆかねばならぬ　彌次「おれがさきへ

かた/\ふるへるひやうしに手がゆるみ、うへのたながぐはら/\/\こツやかなわぬと、きた八にゆいたせしが、うろたへてとまごひし、いつこう
わからず、まごつくうち、このものおとにかつ手よりは、ていしゆのこへとして、あんどうさけこ出くるよふす、おくの間からは田舎ものが出てくるていゆへ、
いよ/\うろたへ、みせのかたへはひ出る手もとに、こもいちまいありしをさいわい、
引つかぶり一いきをころし、かゞみいるところ、ていしゆあかりをもち出きもをつぶし
「ヤアノ\/\コリヤなんぜ。棚がおちた。膳ばこもなにもらりこくたいになつた　トそこらとりかたづけるうち、何事やらんと、田舎ものふたりながらおき出「ヤレゑらいおとがせるとおもふた。道理こそコリヤ地藏さまのねきにまで。箱どもがとびちつておるが。ヤアノ\/\\/\。お鼻がぶつかけてしもふた　今ひとりのいなかもの「ドリヤノ\/\ほんに。地藏のさまの鼻アなくなつかいた。そこらにやないか。イヤこゝにねておるはだれじやい　トこもをまくれば、きた八ははつとばかり、かほをあけて見るに、そばには、こもにつゝみし石ぢぞうあり、さては彌次郎兵へが、しんだものゝありしといひしはこの石ぢぞうならんと、おもひゐるうち、ていしゆ北八を見て「ヤアこなさんはこちへとまらせへた。おきやくじやないか。それに今時分。なんぜこないな所にコリヤ合点がいかんわい。どふじやら。こなさんたちのなりそ

ぶりやうさんくさいとおもておつたが。もしや護摩のはいじやないか。何ごとまた。しよしめるつもりかおりやうにいはつせへ　田舎イヤこれはかしじやござらない。大かたこなさんが此棚をおとしたもんで。なんぜ地藏さまのおはなアうちかいた。コリヤわしどもが村で。今度建立せる地藏さまじや。昨日のふ石屋どのからうけとつて。あしたは早々長澤寺さまへおさめにやならぬが。お鼻がうちかけてはもつてい

○うろん　「諸録俗語解」に胡亂、唐音ウ、ロン、胡亂風ニ吹カレテ、ブウ／＼ト云音ナリとあり。胡思亂想、胡言亂道など俗語にも云へり。

○「はひかけし」の狂歌　「地藏の顏も三度」といふ諺あり、その三度を三度笠に云ひかけたり。「かぶる」は首尾の惡きをいふ通言、それを三度笠をかぶるに云ひかけしもの。

かれぬ、ことのとをりまどわつせへ　これは此近在の人々、村のお寺へおさめる地藏を、石屋よりもつてかへる所、おそなはりしゆへこよひは、こゝにとまりしと見へたり、ていしゆいよ／＼やつきとなり　「お地藏さまのおはなもおはなしやが。おまいがたのお荷物。なんぞなくなりはせないか。どふでもがてんのいかぬやつらじや　まりやうにいひおるまいか　北八「イヤわしらは。そんなものじやアねへ。めつたなとをいひなさんな。しらきてうめんの旅人だ　田舍「インチそふじやあらまい。又それでなけらにやアなんぜ。今時分そこにねてゐさつせへた　北八「イヤこれはの。手水に行とつて　ていしゆ「たはけたとをつくさまい。手水場は座敷の椽さきにあるものを。さだめし背にもいたであろに。そないな間似合くやせんわい　北八「そふいはれちやアわつちも面目ないが恥をいはにやア理がきこへぬ。有体にいひやせう　ていしゆ「ヲ、サいはいでどふせるもんじや　北八「イヤどふもおはづかしいが。今頃わつちがこゝにまごついておつたといふわけは。ツイ夜這にきて。此棚のおちたに。うろたへたのでござりやす　田舍「ナニ夜這にきた。イヤはやこなさんはたはけもんじやどこの國にか。石地藏さまの所へ。夜這に來て。どふせるつもりじや　ていしゆ「いへばいふほど。ろくなことはぬかしおらぬ　北八「コリヤとんだ災難にあふことだ。彌次さん／＼　トよびたつる、せん／＼こくより、彌次郎兵へは、たちぎゝしてはらすじをよりゐたりけるが、もふよい時分と立出　「コリヤアどなたもおきのどくな。おりやアわつちがうけ合。うろんなものじやアござりやせぬ。りやうけんしてやつてくんなせへ。又地藏さまの鼻とやらが。かけたといひなさるが。どふぞわつちにめんじて。あとではどふともいたしやせう　トいろ／＼ちやらくらとことさわりをいひちらし、ていしゆも今はせんかたなく、さながらわろものとも見へぬ手あひ、一トとふりはいつたものゝ、今はなつとくしてすましければ

はひかけし地藏の顏も三度笠またかぶりたる首尾のわるさよ

かく卽吟の彌次郎兵へが狂哥に。おの／＼どつと笑ひをもよほし。やう／＼いさくさおさまりけるにぞ。

いまだ夜のあくるにはほどもあらんと。めい〳〵ねどころにはいりたるが。しばらくありて。はや一ばん鶏の告わたる聲〴〵。馬のいなゝきおもてにきこへ。彌次郎兵へきた八。いそぎおき出て支度とゝのへ。やがて此しゆくをたちいづるとて

やう〳〵と東海道もこれからははなのみやこへ四日市なり

それより濱田村を打すぎ。赤堀にさしかゝりたるに往來殊に賑しく。男女大ぜい。こゝかしこにつどひあつまりたるは。何事にやと。彌次郎兵へ北八も片寄行つゝ。ある親仁に向ひて　彌次「モシ〳〵。何でござりやす　おやぢ「あれ見さつせへ　北八「けんくはでもござりやすか　おやぢ「イン子※天蓋寺の蛸藥師さまが。桑名へかいてうに行しやるので。今こゝをとをらつせるから　彌次「ハヽアなるほど。向ふへ見へる〳〵　ト此内だん〴〵人あししげくなり、講中とおぼしくまつさきに、村の名をそめたるのぼりをおしたて、いづれも大おんにて　こう中「なアまアだア〳〵　北八「たこやくしさまア。ゆでたのじやアねへ。なまだと見へる　こう中「なアまアだア　彌次「のぼりをもつていくやつのつらア見さつし。ちゞのねへつらだぜ　こう中「おさいせんはこれへ〳〵。是は※海中より芋畑へ出現したもふ所の。天蓋寺蛸藥師如來御しん〴〵のかたは。おこゝろもち次第。あげさつしやりませう。サア〳〵お心もちはよふござりますかな　北八「けさほどは中かさで。三ぜんほどたべました　彌次「ソリヤ蛸どのがござつた〳〵　ト此内みずしにいれたる、やくしによらい、大ぜいにてかつぎとふる、あとよりてんがいじのおしやう、のりものにてきたると、こゝかしこにあつまりゐる、ばゞかゝども、十ねんをねがひけるに　わか※とう「※お十念　〳〵　トいふと、のりものをおろす、わかたうかごのとをひきあくれば、おしやうはゆでたこのごとき、あからがほにて、大あばた、ひげだらけのでつくりおしやう、さも※しかつべらしく　「なむあみ　みな〳〵「なむあみ　おせう「なむあみ　みな〳〵「なむあみ　おせう、なむあみと、だん〳〵となへ十ねんのしまいに、ごふしたはづみやらはなのあながむづ〳〵として　おせう「ハアくつしやみ　トいふと、みな〳〵十ねんのあとゆへこれも、くちまねすることとこゝろへ　みな〳〵「ハアくつしやみ　おせう小ごへにて「※くそをくらへ　みな〳〵「くそをくらへ　彌「ハ、、、、

○天蓋寺　蛸のことを坊主の隱語にて「天蓋」といふと稱す。その洒落にて天蓋寺と云ひしなるべし。

○海中より芋畑へ出現　蛸が芋畑へ芋を掘りに來るといふことあり。

○中がさ　飯椀。いくつも組める中の中位の椀か。

○わかとう　蛸の脇につきゐる侍士。

○お十念　正念相續といふことなるべし。南無阿彌陀佛を十遍唱ふること。十は滿數なれば念々相續して不斷の念佛となる。

○しかつべらしく　然りつべきらしくの略か。眞面目くさること。普通に鹿爪と書くは當字なるべし。

○くそをくらへ　噫の厭勝の一。

とんだお十ねんだ。アノおせうは。※くつしやみから長郎だハ、、、、　こう中「なアまアだア〳〵　トどゞめき立行通る、彌次郎北八はおかしく、あとを見おくりながら

十ねんをもふしながらのくつさめはあつたらくちに風をひかせし

かくよみすてゝ。打興じ行ほどに。はやくも追分にいたる。此所の茶屋。まんぢうの名物あり　ちやや女「お休なさりまアせ。めいぶつまんぢうのぬくといのをあがりまアせ。おざうにもござりまアす　北八「右側のむすめがうつくしいの　彌次「かぎやの小ぢよく※めらもあいきやうらしい　トちや屋にはいりこしをかける　女「おちやアあがりませ　彌次「まんぢうもやらかして見よふ　女「今あげませう　トやがてぼんにもつてきたる、此うち、こんぴらまいりと見へて、ぬのこのうへに、しろきひさ八のはんてんをひつぱりたるおとこ、おなじくこのちや屋にやすみ、ぞうにもちをくひかゝる、彌次郎まんぢうをくひしまい「もつとやろふか。いくらでもはいるよふだ　北八「イヤおめへも雨風どうらんだ。いゝかげんにしなせへし　こんぴら「あなたがたアおゑどかな　北八「さやうさ　こんぴら「わたくしもおゑどへいた時。本丁の鳥飼のまんぢうをかけどくして二十八くつたことがござりましたが。又かくべつなものじや　彌次「とりかいはわつちらが町内だから。まいにち茶うけに。五六十ヅヽ、はくひやす　こんぴら「それはゑらいおすきじや。わたくしも。もちずきで。御らふじませ。此ざうにを。いきなし五ぜんたべました　彌次「わつちやア今こゝのまんぢうを。十四五もくつたろふが。まだそのくらいはいけるだろふ。ねからくひたらぬよふだはへ　こんぴら「イヤしかし。わるあまいものは。もふそのよふにはあがられますまい。十四五もあがりやア關の山だ　彌次「ナニまだくへやす　こんぴら「どふして〳〵。あなた口ではそふおつしやるが。そのよふにはくへぬものじやて　彌次「ナニくへぬとがあるものだしかし費だからくひやせぬが。誰ぞくはせるとまだ〳〵いくらでもはいりやす　こんぴら「コレハおもし

○くつしやみから長郎　「長郎」は「長老」の訛。「沙彌から長老にはなられぬ」といふ諺を、「くつしやみ」の「しやみ」にかけしもの。

○あつたら口に云々　餘計なことを云ひて口に風を引かせたり、との意。

○小ぢよく　女郎にも小じよくといふあり。こゝは小女の意か。

○雨風どうらん　「どうらん」は革製の藥莢入れ。轉じて腰下げの革袋にいふ。酒も飲み甘いものも食ふを「雨風」と云ふ。藥莢は乾濕の氣に犯されぬやうに拵へあり、腰下げの革袋になりても風雨に傷まぬ拵へゆゑ、雨風胴亂の稱あり。また胴亂は方形なるより、其形を摸して松風胴亂、胡麻胴亂など菓子の名に呼べり。

○鳥飼のまんぢう　本町三丁目、鳥飼和泉掾。「鳥飼和泉蒸鳥飼、饅頭日々注文多、喫歡皮薄餡尤好、荷出蒸籠日幾荷」（江戸名物詩）

○關の山　事の極限。山中翁は相撲の關より上に上れぬことを云ひしなりといふ。或は地名にて、鈴鹿を指せるか。

○おたをれ　貸した金の取れぬことを云ふ。こゝは損になる意。

○お初尾　お初穂の意なるべし。東京にては「お初う」こと云ふ。

○てんぽのかは　「女用知恵鑑」に「京、ハレモノ、大坂、てんぽ」とあり。てんぽ儘の皮といふは、腫物の上の皮なれば、勝手に處置されるを云ふ。

ろい。モシ無躾ながらなんと。わたくしがお振廻申ませう。もふそれだけあがつて御らふじませぬか　弥次「くひやせうとも　こんぴら「もしあがらぬと。あなたの※おたをれじやが。よふござりますか　弥次「それやしれたことさ　トかつにのりてまんぢうをとりよせくひかゝりしが、十ヲばかりくつて、あとはもふおくびに出るくらいなれどおのれこんぴら、はなあかせやらんと、むりにおしこみ／＼くつてしもふ　こんぴら「コリヤたまらぬ。ゑらい／＼。もふ／＼わたくしはかなひませぬ　弥次「おめへもやらかして見なせへ。こんなちいさなものは。いくらでもくはれる　こんぴら「イヤそふはまいりませぬ。しかし。わたくしもあまりざんねんな。十ヲばかりたべて見ませう　弥次「ナニ十ヲぐらい。二十くひなせへ。そのかはり。ひとつものこさずくひなすつたならば。まんぢうの代はもちろん。外に百文。金比羅様へ※お初尾をあげやせう　こんぴら「そりやありがたい。※てんぽのかはやつて見ませう　トまんぢう二十とりよせ、たゞもじ／＼と見てばかりゐたりけるが、やがてくひかゝるとぼつり／＼十ヲ斗くつてしまい、あとはいやそふなかほつきにて、やう／＼とのこらず、くつてしもふ弥次あてがちがひ「コリヤおそれる／＼　こんぴら「おやくそくのとをり。饅頭代はさしひいて。おはつをの百もん下さりませ　弥次「今あげやせう。しかしあんまり

○ちやくぶく　著も服も身に著けるものなれば云ふ。普通には「著服」と書く。
○おざうさ　造作。
○てき　敵の晉呼、相手のこと。
○阪の下　關と土山の間の坂の下。五里ほど先にあり。
○ごうがにへかへる　ごうは業腹の略、腹が立つこと。

見ごとだから。もふ二十くひなせへ。今度はおはつを三百文あげやせう。そのかはり。くはねへとこつちへ貳百とりつこだが。どふだ／＼　こんぴら「おもしろい／＼。何も欲德腹のさけるまで。やつて見ませう　彌次「サア／＼今度は現錢だ。おめへも貳百。そこへ出しておきな　ト彌次郞三百文をつきだし、なんでも今とられた、おはつを三百文に、利をつけてとるきになり、よもやもふくはれめへと、おもひこんで、まんぢうをまた／＼二十とりよせ、こんぴらへすゝめるやいなや、このたびは、なんのくもなく、たちまち二十くつてしまひ、手はやくかの三百文をちやくぶくして　こんぴら「これはありがたい。まんぢうの代もよろしうおたのみ申ます。ハヽヽヽ、おもひがけない※おざうさにあづかりました。ハイゆるりと　彌次「いまいましいめにあはしやアがつた。はじめの百がおしくなつて。うはのりをした。ごうはらな　ト此内しものかたよりかごかきぶら／＼ときたりて「だんな方は。お駕はいらしやりませぬか　彌次「かご所じやアねへ。ゑらいめにあつた。※てきめはあないなふうをしてあるきおるが。アリヤ大津の釜七といふ。ゑらい手づまつかひじやげな。こんぢうも坂※の下で。もちのくひくらで。七十八とやらくつたと見せて。錢は人にはらはせ。もちをばみんな。たもとへさらひこんで。うせおつたといふことじやが。旦那も一ツはいはめられさつせへたのハヽヽヽ　此にはなしのうちいせまいりの子どもふたりまんぢうを三ツ四ツづゝ手にもちてくひながら此かごぐちへきたり「ハイだんなさま。ぬけまいりに御ほうしや　北八「コレ手めへたちやア。そのまんぢうを。誰にもらつた　いせ參「ハイコリヤ此あとで。こんぴらまいりの人が。袂から出してくれました　彌次「エヽそんなら。あいつめがくらつたと見せやアがつて。おいらをだまくらかしやアがつたか。いま／＼しいほつかけてぶちのめそふか　北八「いゝはな。おいらも神參りだかんにしてやりなせへ。みんなこつちがまぬけだからよハヽヽ　彌次「それだとつて。あんまりご※うがにへかへる

これに　トおさきばこをせなにおひ、あとをも見ずして、出て行たるに彌次郞はあきれはてゝゐる　北八「ハヽヽヽヽ、大かたこんなことになろふとおもつた

北八「ゆふべの泊りでおれをゑらいめにあはせた。そのむくひだとおもひなせへ。ほんにいゝごうさらしだ

盗人(ぬすびと)に追分(おひわけ)なれやまんぢうのあんのほかなる初尾(はつを)とられて

彌次「エヽおもしろくもねへしやれやんな。モシ〱まんぢうの代はいくらだね　女「ハイ〱のこらずメて。弐百三十三文でござります　彌次「せうことがねへ　トふせう〲にぜにをはらふ。かごかき「だんな。※まんなをしに。やすくめしてくださりませ　彌次「いや〱　かごかき「さか手でまいりませう　彌次「きさま酒をのむか　かご「ハイさけはすきで一升ざけを下さります　彌次「また酒の。のみつくらしよふと。おもつてか。もふいやだ〱。サア北八出かけよふ　トこれよりいせさんぐうみちへはいる

東海道中膝栗毛五編下

神かぜや伊勢(いせ)と都(みやこ)のわかれ道なる。追分(おひわけ)の建場(たてば)を。左りのかたの町をはなれて。野道をたどり行ほどに。※おかむかふより來る。農行(のうけつ)の馬によこのりしたる男。かんばりごへにて　うた「見てもぬくとそふなヨ。おかたとねたりやナア。手おりぬのこの一まい。※ねつこに。つんぬけたア、エ、、、エ　彌次「コウ見さつし。アノ向ふからのつてくる馬士(むまかた)を。おろして見せよふか　トわきざしを、ぐつとぬきだしてさし、かつけいそでをまへのほうへおりて、かたなのつかに、もちそへたるていに見せかけてゆくと、馬かたやがて馬より、ちやつとおりて行　彌次「ナントどふだ〱　又向ふよりよこのりの馬士「ばんにとまりにヨ。いことてやめたナア。な

○まんなをし　まんは間の訛、間がいゝ、間がわるいの間なり、その間を直す。

○おかた　「和訓栞」に田舎には人の妻を稱する詞とあり。こゝにては女のこと。

○ねつこに　十分に全く。

○馬士をおろして見せよふ　馬上は馬に乘るだけの格式を有せざるべからず、馬士は馬の口を取るべきもの、然るに口を取らずして馬に乘るは道中法に背けり。故に侍を見て馬を下るなり。

〇そらへあがらせる　上へ上ること。方言か。

〇ぶさをもうつべ川　「ぶさをうつ」を宇都部川にかけしもの。「ぶさ」は無作法の略か。明かならず。

〇二ほうくはうじん　馬の兩側に枠を著け、兩方に乘ること。其上、馬の上に一人乘れは三方荒神となる。

んぜいきやらぬ裸でおかたにあはりよかへナア、、、、エ　彌次「こいつもおろしてやろうエヘン　馬士「シツ〳〵　トにはかにうろたへおりて行過る　彌次「きだ八どふだ。きめうか　北八「一本ざしを見ると。乘打のできねへこたア。みなしつてゐらア　彌次「それだからよ。おれを侍だとおもいおつて　北八「ばかアいふぜ。あとを見なせへ。侍がふたりくるから　彌次「エ、ほんにか　トふりかへるひやうしにこのお侍にはつたり　彌次「ハイ是は御めんなさいやし。神戸へはもふどれほどござりやすな　北さぶらひしゆは此八〳〵の馬士とみへ「ソレむこの堤からつつとそらへあがらせると。もふ半道もあらずにな　彌次「ハイありがたふござりやす　北八「つゝみからそらへあがれたアなんのこだ。蝮がてんじやうしやアしめへし。ハ、、、時にこの川は。何といふ川だ　はしばん「ハイ橋錢が貳文ヅヽ出ます。此川は宇都部川といひます　彌次「ソレ貳文ヅヽ、四文よ

　　拔まいりならばぶさをもうつべ川わたしの錢もかりばしにして

これより高岡川をうちわたり。はやくも神戸のしゆくにいたる。入口に寶珠山火除ぢぞう堂あり

　　安穩に火よけ地藏の守るらん夏のあつさも冬の神戸も

斯てこの宿はづれなる。茶みせによりて。休るたるに　馬士「モシおまいがたア。おまにのつてドんせんか　彌次「いかさまもどりなものるべい　馬士「上野までもどるおまじやわい。荷をつけて貳百五十くだんせ　北八「二ほうくはうじんで百五拾やるべい　馬士「けふは枠をもてこんわいの。爰からうへ野まで三里の所じや。白子へ壹里半。かはりやつてのつていかんせ　彌次「ふたりのられにやアいやだ　馬士「そしたらおふたりとも。おまの鞍へく、しつけていこまいか。この繩でしめりや。きづかひはないがな　北八「と

んだとをいふ。それじやアたばこものまれぬ　彌次「そんならかはりぐのろふ。百五十でやるか　馬士「まゝよかし。やらかしましよ　（ト馬のそうだんできて、ふたりのにをつけ、此所から北八のつて出かける）　彌次「おらアそろ〳〵さきへいくぞ。ソレ北八。右のほうへかしぐよふだ　馬「ヒイン〳〵　（すゞのおと）「しやん〳〵　（此内向ふよりきたるおとこ、こんじまのせんたくしたる、ひきまはしをきて、ぜに壺〆ばかりさし、このふるきふろしきに包かたに引かけ、ぞうりがけにて來り、此馬士をみつけ）　「ヒヤアのしやアうへのゝ長太じやないか。今のしがとこへいた戻りじや。ゐいとこでいきあふた　馬かた長太「ハア權平次さまかいな。コリヤさて。わしやめんぼくがないがな　ごん平「あろまい〳〵あろはづがないわい晦日〳〵にいこすはづを。まんだびた錢壹文もいこさんがな。どふしさるのじや。ソレきこわい　馬士「マア〳〵こち來て下んせ　（此馬士、しやつきんのとはりさ見へてかのおとこを、日あたりのよいところへさもなひおのれも土手にゆう〳〵とこしうちかけて）「そないにごうにやらかいてくだんすな。マアこゝへかけさんせ。イヤそこのねきには。犬のくそがある。けふおいでるとしりおつたら。そうぢしておこもの。コリヤ〳〵。權平さまへちやなとあげんか。酒かふてこいといふ所じやが。こゝは大道なかでそれも

でけぬくい　北八「コリヤどふする。はやくやらぬか　馬士「ハテせわしない。ちとまたんせいんま。だいじのおきやくがある。さてマアきいてくだんせ。去年の冬から。うちのかゝめが病氣を煩ひおつて。がきどもには※せちがはれる。雑役にさへ出やせんものを。何じやろと。こうして下んせ。四五日のうちには。ひゆつとこちからもていこがな　ごん平「イヤじやうちならんわい。そないにいふても。よふいこしやしよまいがな。※でんないく。もふ三年ごしといふもの。かした錢じや。利に利がくつて。二十貫あまりといふもんじやもの。いこすなく。そのかはり。あのおまをとていのかい。ハテまさかの時は。のしがおまをわたそと。證文にかいたじやないか。そしたらいひぶん。ありやしよまいがな。サアくもし。おまのうへな旦那さま。いんまきかんすとふりじや。借錢のかはりに。請とるおまじや。どふぞ。こゝからおりさんせ。きのどくながら　北八「ハアおいらもさつきにから。じれつたくてならなんだ。ひよんな馬にのり合せたは。こつちの不仕合。しかしまだ錢はやらず。是までのつたを徳にして。ドレおりて行やしやうか　トかのごん平に口をとらせて馬からおりるを馬士かけより「モシだんな。おまへがおりては。このおまをとられる。マアのつてて下んせ　ごん平「イヤならんわい　馬士「ハテどないにもするわいの。旦那をおろしてはきのどくな。サアくめして下んせ　北八「またのるのか。しつかりたのむぞ　トきた八又馬にのれば権平やつきとなり「コリヤく長太。どふしさるのじや。旦那おりて下んせ　北八「ヱ、又おろすのか。イヤきさまたちやア。おれをいゝ※てうさいぼうにする。おろしたりあげたり。足も。こしもくたびれはてた　ごん平「それじやて。わしがおまじやどふぞかし。おりてくだんせ　北八「ヱ、めんどふだ　ト小じれがきてぐつとこびおりる　馬士「はて扨。おりさんせぬとよいがな。コレ権平さまこうしてくだんせ。わしも途中じや。しよとがない。せめて。うちへいぬまで。まつてくだんせ。そ

○せちがはれる　關東にてはセタゲルといふ、文字に書けば切請などあるべし。

○でんない　普通に「だんない」と云ふ。傍註の通り、大事無しの意。「でんない」は書誤か、聞誤か。

○てうさいぼう　尾州侯何代目かの御茶坊主に長斎といふ者あり、寵を得たり、矮小にして弄り物となりしより、尾張方面にては人の玩具になることを「てうさいぼう」といふとの説あり。

○唐人めらア　罵語。

○そふはかいの　此方言不詳。

○「借錢を」の狂歌　馬の「ひん」を貧にかけ、「貧すれば貪する」の諺により、馬より「どん」と落された、と云ひしもの。

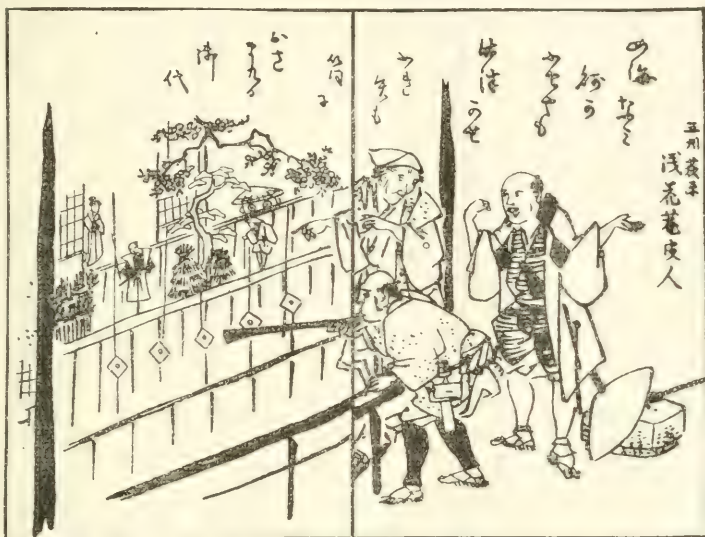
のかはり。こゝで此ぬのこをわたすに　ごん平「そしたらいんで。わけつけるか　馬士「もふよいわい。サア旦那。めさぬかい　北八「ナニ又のれか。もふかんにしてくれ。おらアこれからあるいてゆかふ。なんならせうくは錢を出しても。のるこたアいやだ　馬士「そふいはんせずと。のつてくだんせ。もふよいがなサアく　ト馬のくちをとりてすゝむるゆへきた八またしかたなく馬にのれば　ごん平「サアやくそくの布子（ぬのこ）。ぬごまいか　馬士「イヤそないにはいふたものゝ。これもうちへいぬまで。まつて下んせ　ごん平「イヤおのれ。もふりやうけんならんわい。サアく旦那。又おりてくだんせ　北八「エ、この※唐人（とうじん）めらア。又おりろとぬかしやアがるか。もふいやだ。サアはやくやらねへか。どふしやアがるのだ　馬士「だんな。※そふはかいの。おりずとよいに　ごん平「イヤおりずとゐいとは。なんでぬかす　トまつくろになり、馬にとりつきかゝる所を、馬士つきのけて、馬のしりをおもふさまたゝきたてると、馬はいつさんにかけいだせば、きた八うへにて、まつさほになり、大ごへあげて「ヤアイノく。たすけてくれコリヤどふするく　ごん平「馬をにがしてはならん。ヲ、イく　トおつかける、北八はごしやうたいじに、馬のくらにとりつきても馬はやみくもにはしるゆへ、きだ八とびおりよふとして、くらのなはにあしがひつかゝり、まつさかさまにおちてこしのほねをうち「ア、いたいく。だれぞ來てくれアイタ、、、、、　トひとりもがきてくるしむていに馬かたいつさんにかけつけきたり「モシ旦那。おけがはないかなドリヤく　ト手をとりて、引おこすうち、ごん平は馬をとらへんと、かけぬける、馬かた、これを見て、そふはさせぬと、北八にかまはずかけだして行　北八「ヲ、イまちあがれ。おれをばひどいめにあはしやアがつた　トこゞとをいひながらおきあがり、はらはたてどもせんかたなくおつかけんには、あしこしがいたみ、やうくのことにて、ふみしめく、そろくとたどり行つゝ

※借錢（しやくせん）をおふたる馬にのりあはせひんすりやどんとおとされにけり

ゆくほどなく。矢ばせ村といふにいたる。彌次郎兵へは神戸の宿（しゆく）はづれより。さきへ來たるが。かの馬のいさくさをば露（つゆ）しらず。よほどさきへなりたるを。ふしぎにおもひこゝにまち合せゐたりけるが。それと見るより　彌次「ヲヤく北八。そのなりはどふしたのだ　北八「イヤもふはなしにもならぬとんだめに

あつた

トさいぜんよりの※いちぶしじうをはなせば彌二郎おかしくさいわいこのところはかまくらの権五郎がこせきありときゝて彌次郎兵へとりあへず

※権五郎ならねど馬士のいつさんにおつかけてゆくかけとりの海

それより玉垣をうちすぎ。白子の町にいたり※福德天王をふしおがみつゝ。子安觀音の別れ道にて

風を孕む沖の白帆は觀音の
　加護にやすく海わたるらん

このしゆくをすぎて。磯山といへるにつく。此所に※吹矢のいろく。かざりつけたる小見世の親父。わうらいを見かけて「サアくおなぐさみにやてかんせ外題はちうしんぐら。十一だんつゞき。ソレふかんせヤレふかんせおあてなさるとたちまちかはる。※新板の上細工はこれじやく　北八「ハ、アなんだ勘平おかる。※魂膽夢の枕イヤこいつやらかして見よふ　トふきやづゝに矢をいれて　フ、、、引カチリガツタリ　彌次「なんだハアゐらい松茸が出たコリヤおかしい。ハ、、、、與一兵へ子故の闇の夜は。何が出るだろふフツくフ、、、引カチリガサくくくヒヤアみこし入

○いちぶしじう　畫卷などの一部始終。始から終までの意。

○「権五郎ならねど」の狂歌　馬士が一散に追かけて行くといふことを、鎌倉權五郎景政が鳥海彌三郎を追ひかけて行くに見立て「かけとり」を「とりのうみ」にかけしもの。

○福德天王　式内鶏(?)神社のこと、勝手明神ともあり。

○吹矢　これはからくり的といふもの。上に人形を飾り、紐を引張りて四角の的に之を掛く。環の如きものあり。矢中れば外れて、上より人形の下る仕掛になれり。

○新板　何にても新しきを新ぱんといふは、此の頃の例なり。

○魂膽夢の枕　邯鄲をモヂル、盧生の故事、夢中の榮華。

道ハ、、、、向ふのはなんだ。北八そつちへよりや　トひきのけるひやうしにあしもとにねていたりし犬のあしをふむ　犬「キヤアンく

彌次「アイタ、、、、。うぬぶちころすぞ　トおつかくるはづみにさ

つきりところげたそばにおちてあるはたばこいれ

彌次「このちくしやうめ　トふきやのつゝでくらはしにかゝる、犬はワンといつてかみつく　彌次「アイタ、、、、。うぬぶちころすぞ

彌次「ころんでも損はいかぬ。こゝにたばこ入が　トひろひにかゝると向ふがはにゐる子どもがいさをひくとたばこ入はするくくく

彌次「エ、いまくしい。一ばんはぐらかしやアがつた　子共「あほうよワハ、、、、　北八「こいつはいゝごうさらしだ。サアいきやしやう　トふきやのぜにをはらひ出かける、向ふに欠きせる一本おちてあるゆへ　北八「ソレ彌次さん。またひろはねへか

彌次「イヤもふ其手はくはぬ。アレあとからくる親父がひろひおるだろふ　トゆき過てふりかへり見れば、あとよりきたる親父、かのきせるをひろひてふところにおしこみさつくと行すぎる　彌次「ハアだましでもなかつたそふな　北八「ハ、、、おめへごうぎにまんがわるいぜ　ト打わらひつ行ほどにやがて上の、しゆくにいたる、こゝに此あたりの人と見はおりぱつちにて、※小やろうをともにつれたるおとこ、あとよりきたりて、彌次郎兵へにちかづき「卒爾ながら。あなたがたアおゐどでござりますか　彌次「アイさやうさ　かの男「わたくしは白子のさきから。あなた方のおあとについてさんじたが。みちくの御狂詠を承りまして。およばずながら感心いたしました。おもしろいことでござります

彌次「ナニサみな出ほうだいでござりやす　男「イヤおどろき入ました。先達ておゐどの尚左堂俊満先生など當地へおいでゞござりました　彌次「ハアなるほど。さやうく　男「あなたの御狂名は　彌次「わつちやア。十返舎一九と申やす　男「ハ、ア御高名うけたまはりおよびました。十返舎先生でござりますかわたくし。南瓜の胡麻汁と申ます。さてくよい所でおめにかゝりました。此度は御參宮でござりますか

彌次「さやうさ。かのひざくり毛と申。著述の事についてわざく出かけました　ごま汁「いかさま。あれは御妙作でござります。是へおこしなさる道すがらも。吉田岡崎名古屋邊御連中方。御出會でござりましたろふ　彌次「イヤ東海道は宿々殘らず立よる所がござれどもまいると。引とめられまして。饗應にあひ

○ぱつち　絹にて造れる股引。外來語なるべし。

○小やろう　小野郎。青二才といふほどの意。

○俊滿先生　窪氏、通稱易兵衞。畫を楫取魚彥に學び、後北尾重政に就く。畫名は俊滿、狂歌名は南陀迦紫蘭。文政三年歿。

まするがきのどくでござるから。みな直通りにいたしましたそれゆへ御らんのとふりわざと麁服を着いたしてやはり同者の旅行どうやうに。心安くなんでも氣まかせに。風雅を第一と出かけました　ごま汁「それはおたのしみでござります。わたくし宅は雲津でござりますが。どふぞお供いたしたい　彌次「おぼしめしありがたい　ごま汁「まことに御珍客。近所の社中どもへもおひき合せ申たい。いづれ御一宿をおねがひ申ませう。マア〳〵ふしぎな御縁でよいとこでおめにかゝつた。時にこゝが。小川と申所。まんぢうのめいぶつ。一ぷくあがりませんか　彌次「イヤまんぢうにはこりはてたすぐにまいりませう　トうちつれてこのところをゆきすぐるとて

から尻のうまい名代をたび人にくひつかせんと賣れるまんぢう

是より行ほどなく。津の町にいたるまへに。高田の御堂。右のかたに見ゆる。※石井殿といふこれなり

※おまな板なをしに鯉のひれふるはこれ佐用姫の石井でんから

津の入口。ひだりの方に。如意輪觀音堂あり。又かうのあみだといへるもあり。此所は上方筋より參宮の人おちあふ所にて。往來ことに賑しく。中にも都がたのわかき人〳〵。小袖のうへに揃へのゆかたを引ばり。藝者めきたる男女うちまじりて。かざりたてたるつゞら馬をひきながら　うた「チ・、、、チン〳〵エイ、、、引。ござれみやこの名どころ見せん。ぎをん清水。やれ音羽山。ヤア、とこなアヨウいやさア。ありやゝこりやゝ。コノなんでもせエ、、引チ、、、チン〳〵エイ、、、引。ぢしゆのさくらにまく打まはし。霞がくれに。ものおもはする。ヤアとこなアヨウいやさア。ありやゝこりやゝ。コノなんでもせエ引　彌次「コウ北八見や。ごうぎにうつくしいたぼが見へる　ごま汁「アリヤみな。京都のしゆじや。あないに。りつはにしてお出やつても。ねから錢はつかやせんがな　京の人「御無心ながら。火ひ

○石井殿　一身田のこと。石井殿はいゝ加減の字を當てしものか。

○「おまな板」の狂歌　松浦佐用媛の「ひれふる」を鯉の鰭にかけ、媛が石に化せしを「石井殿」にかけたり。鯉のまな板といふことあり。

とつかしておくれんか　ごま汁「サア〳〵おつけなさい　ト くはへたきせるをさしいだせば京の人すいつけにかゝり　京「パッ〳〵〳〵
ごま汁「まんだつかんかいな　京「パッ〳〵〳〵　ごま「なんじや。おまいのきせるにや。たばこがついで
ないがな。ハヽアきこへた。すひつけるふりして。人のたばこをのむのじやな。モよさんせ〳〵。ノウ
おゑどの先生。京のしゆは。あないに吝ひのねつこじやわい。ハヽヽヽ時に。先生もふ一ぷく下さり
ませ　弥次「京のものをしわいといふが。おめへもさつきにから。わしがたばこばかり
のんでゐる　ごま「イヤわたくしはたばこ人
をもちやせんもの　弥次「わすれて出なさつ
たのか　ごま「ナニわすれもせんが。ありや
うはぜんたいがないのじやわいな。そのわ
けはわたくしはゑらいたばこずき。いちに
ちに。拾匁ではたらぬくらひじやゆへ。コ
リヤ自分でかふてのんでは。たまらんとお
もふて。それからたばこ入はやめて。きせるばかり。もてあるきおります　弥次「そこで人のばかり。の
みなさるのだな　ごま「さよじやわい　弥次「そりや京の人へ※ふくりんかけて。おめへが※あたじけねへとい
ふもんだ　ごま「ハアそふかいな。ハヽヽヽ時にいかうおそなつた。ちといそぎましよか　ト あしをはやめてゆくに、ほどなく月もとにいたり、此へんよりからすの宮へまいる道ありときゝて

○ふくりんかけて　輪をかけてと同意。
○あたじけない　鄙吝。

○「照わたる」の狂歌　雲津に烏の宮あり、月本は雲津の先なり。秋の月に浮れて烏が來るの意。

○まんざらでもねへ　いゝ方でもない、惡い方でもない、それ程でもないの意。

○小ぢよく　小女のこと。

照わたる秋の月本ならば今うかれまいらん烏御前に

かくて雲津にいたり。南瓜のごま汁。おのが家に案内するに。これもはたごやと見ゆれど。折ふし相客もなく。おくの間に請じ入れ。かれこれともてなしければ彌次郎兵へはあらぬ名をいつわり。かゝるめにあふも一興なりと。北八もろとも心の内におかしく。やがて湯にも入しまひ。ゆう／＼と座しゐたるに。ていしゆごま汁いでゝ「コレハおくたびれでござりましよ。よふこそお入くだされましたしかし折あしく。此頃はしけで。何もおさかながござりません。それゆへなにも。御ちそうがでけぬくいが。當所はいたつて。こんにやくがよござりますから。マア是でもあげましよとぞんじて。申つけおきました

彌次「もふおかまいなされな。イヤ御主人。此ものはいまだ。おちかづきにならぬけな　ごま汁「いかさまあなたは　北八「わたくしは。十返舎の秘藏弟子。一片舎南鐐と申ます。ふしぎな御緣で御役介にあづかります　ごま汁「ナニサとつとねから。おかまいは申さんじやで。イヤせんせい。ちとおくつろぎなされまいか

女「御ぜんがよござります　ごま汁「はやうあげんかい。御ゆるりとめしあがりませ　トていしゆはかつてへたつてゆく。女ぜんをもち出、彌次郎へすへて行　彌次「まんざらでもねへの　北八「いゝ女だ。しかしこゝじやア。おめへも先生かぶだ。おとなしくせざアなるめへ　ト北内又十二ばかりの小ぢよく、ぜんをもちきた八にすへる、兩人はしをとりて、くひかゝり見るにぜんの向ふに、ひらめなるさらのなかに、大ふくもちの大きさのごときくろきもの[illegible]のせて出せり、ひらにはこんにやくを[illegible]三つに小皿にあり、彌次郎兵へ小ごゑにて「ナントきた八。この皿にあるまるいものは何だろう　北八「されバ。なんであろうか　トはしにてつゝき見るに、いたつてかたく、はさめどもうごかず、よく／＼見れば石之けるゆへきもをつぶし　北八「コリヤ石だ／＼　彌次「ナニいしなものかノウ女中　女「それは石でござります　北八「それ見なせへ　女「こんにやくをおかへなさりませ　彌次「いかさま。もふすこし　トひらを出して女のたつて行をまちかね

彌次「コウなんとばか／＼しい。どふして石がくはれるものか　北八「イヤそれでもくはれる仕法がありやア

こそ。出したであらふ。さつき當所のめいぶつをあけませうといつたア。何でもこのいしのことだ 彌次「それだとつて。ついぞはなしにもきかねへ 北八「イヤまちなよ。江戸で團子(だんご)のことを。いし〳〵といふから。大かたコリヤだんごであろう 彌次「ハ、アなるほどそこもある。よもやほんとうの石じやアあるまい トまたはしをもつて、つゝき見るに、やはり石なり、こゝはふしぎときせるのがんくびにてたゝきみれば、かつちり〳〵 彌次「どふでも石だ〳〵コリヤどふしてくふものだと。きくもごうはらだが。どふもねつからがてんがいかぬ 此内ていしゆかつてより出「是は何もござりません。よろしうめしあがりませ。イヤ石がさめはいたしませんか。コリヤ〳〵。ぬくといいしをかへてあげ申せ トいはれてふたり共いよ〳〵ぎよつとせしが、いかにしても、此石のくひよふ、しらぬといわれんもごうはらさ、彌次郎兵へこれをくひたるかほにて「イヤもふおかまひなさるな。いしもはやよろしうござる。扨〳〵めづらしいものを賞翫(しやうぐはん)いたしました。江戸表(おもて)などで。折ふし小(こ)

砂利(じやり)を。とうがらしじやうゆで煎(いり)つけるかまたは煮豆(にまめ)などのよふにいたして。たべることがござります。それに又。石塔(せきとう)なども。嫁(よめ)をいぢる。しうとばゞなどに。くはせたがくすりだと申て。たべまするがわたくしも。ずいぶん好物(かうぶつ)でございます。今度(こんど)府中(ふちう)に逗留(とうりう)いたしたとき馬蹄石(ばていせき)を。すつぽん煮(に)にしてふるまはれましたが。ツイわたくし。四ツ五ツたべました所に。おきゝなさい。はらがおもくなつて。立(たと)ふとした所が。

いつかうたゝれずしかたなしに。りやうほうの手を棒しばりのよふにいたして。かついでもらつて。やうく\と手水にゆきやした。御當所の石ころはかくべつ風味もよふござりやすから。又たべすぎたらば。御やつかいになるだろふとぞんじて。おきのどくでござりやす　ごま汁「ナニそのいしをあがりましたか　彌次「たべましただんか　ごま汁「イヤそれはめつそふかいな。石をあがるといふは。けしからんお齒のおたつしやなことでござります。しかしやけどは。なさりませんかいな　彌次「それはなぜな　ごま汁「イヤあの石はやけいしでござります。すべてこんにやくといふものは。水氣のとれぬものでござりますから。あのやけいしにて。おたゝきなさると。水氣がとれて。かくべつ風味がよござります。そのためのやけいしでござります。あがるのではござりませんわいな　彌次「ハヽアなるほどく\きこへました　ごま汁「マアそふして。あがつて御らんなされ。コレおなべよ。石がぬく\となつたらもてこんかい。はやうく\

ト此内さらに、いしのやけたるをのせて、女もお出、引かへてゆく、彌次郎北八ていしゆがとはのごとくして、かのこんにやくをはさみ、くだんのいしにうちつけ見るに、シウ引といふて、水氣されたる所を、みそをつけてくらふ、ふうみ、かくべつかろくしていはんかたなければ、大きにかんしんして

彌次「まことにめづらしいおりやうり。御仕法かんしんいたしました。そしてかやうに。おなじやうなる石が。さつそくによく。そろひました　ごま汁「イヤそれは。かねてたくわへおきます。おめにかけませう

トかつてにかけいり、すいものわんをいるゝよふな、はこをもちいで「御らんくだされませ。こないに二十人まへは。所持いたしております　トかのはこを見する、ふたりはおかしく、そのはこのよこのほうに、何かかきつけてあるゆへよんでみればこんにやくのたゝき石、二十人まへとかきつけたり、此内近所の狂哥よみおいく\きたりて「御めん下さりませ　ごま汁「ヤこれは小鬢長兀成さま。サアく\どなたもこれへく\「ハイく\是は。十返舎先生。はじめておめにかゝりました。わたくしは※富田茶賀丸と申ます。つぎは※反歯日屋呂。水鼻垂安金玉の嘉雪。いづれもお見しりくださりませ　ごま汁「ときにせんせい。おやかましうはござりませうが（おむづかしかろふといふことをおやかましかろふといふくにことばなり）扇面。たんざくなど。

○やけ石　この事他に見えず、事實なりや否や不明。

○富田茶賀丸　「とんだ茶釜」より出づ。

○反歯日屋呂　三番叟の拍子より出づ。

おねがひ申たいが。何ないとも。おもち合せのお哥を。おしたゝめくださりませ　ト おふぎたんざくをつきつけられ、彌次郎しかつべらしくこりあはて、なんの出ほうだい、やらかしてくれんと、いろ〳〵かんがへこみ、わがよみしうたには、これぞといふうたもなく、さつそくにおもひつきもなければ、これまで、きゝおぼへゐたりし、人のうたをかきて、さしいだせばごまじるこれをいたゞき見て　「これはありがたうございます。おうたは。ほとゝぎす。じゆうじざいにきくさとは。酒屋へ三里。とうふやへ二里。ハヽアなるほど。どふかきいたよふなお歌だ。きぬ〳〵の。なさけをしらば今ひとつ。うそをもつけや。明六ッのかね。イヤこれは。千秋庵大人のおうたではござりませんか。彌次「ナニわたくしがよみうた。しかも江戸中大評判の歌たれしらぬものはござらぬ　ごま汁「イヤさよじやあろが。せんねんわたくし。おゐどへさんじた時。三陀羅大人。※芍薬亭大人などにも。おめにかゝりまして。すなはちおたんざくもいたゞいてかへりましたが。御らんなされ。其びやうぶに。はつてござります　ト いふゆへ彌次郎ふりかへりてみればなるほどびやうぶに、たんざくにかきて、右のうたあり、きだ八あかしくきのごくなれば「イヤわたくしの先生は。そゝつかしいがくせで。人の歌だの。わが哥だのといふ。しやべつはいつかうござりやせぬ。コウ彌次さん。イヤ先生是まで道中筋で。よみなさつた。おめへのうたをかきなされば いゝに　ト きをつけられて、彌次郎めんぼくなけれども、おしのつよいやつ、ここなれば、いけしやア〳〵と、このたんざくへは、道中よじのうたをかゝく、北八も手もちなければ、はりまぜのびやうぶを見て 八「ハヽア※戀川春町のゑがある。モシあのゑのうへにある賛は。なんでござります　ごま汁「イヤあれは。詩でござります

北八「こちらのほていのゑの上にあるは。詩と見へますが。誰がいたしたのでござります　ごま汁「イヤあれは語でござります。澤庵和尚の　ト いふゆへ北八心のうちにこいつ〳〵しいやつださんかといへばしだといふしかといへばごだといふなんでもこんどはひとつよけいにいつてまごつかせてやろふとそこら見まはし

北八「モシおかけものゝゑのうへにかいてあるは。おほかた六でござりませうな　ごま汁「六かなにかしりませぬが。あれは質にとつたのでござります　ト 此うちかつ手より女たち出　一「ハイひげつらさまから。お手がみがさんじました　ごま汁「ドレ〳〵何じやあろな　ト 此手がみをひらきこたかぐ〳〵とよみて見れば　手がみ「鳥渡申上候。只今東都十返舎一九先生。

○千秋庵　三陀羅法師の事。頭の光の弟子。

○芍薬亭大人　菅原長根。通称次郎右衛門、狂歌の名は浅茜裏成。二代目喜三二の戯號あり。弘化二年二月十日歿。この門人、津松坂に多き由。

○戀川春町　松平丹後守の留守居、倉橋壽平。狂名酒上不埒。

○あれは詩で ござります　この趣向天明頃の落語にあり。そのまゝ取入れしもの。

私宅へ御着有之候勿論名古屋連中。幷吉田大嶽から。書狀參り申候。早速貴公御噂もいたし置候事故。追付貴宅に同道參上可致候間。右御案内申入置候以上　ごま汁「コリヤどふじやいな。とんとがてんのいかぬ。ノウ先生。たゞいま朋友どもから。かやうに申こしましたが。定めてこやつ。貴公のお名前をかたつてまいつたものと見へる。さいわい追付これへまいるとあれば。ナントおあひなされて。なぐさんでやろじやござりませぬか　彌次「さて〳〵大變なことだ。いやはや橫着なやつもあればあるものだ。しかしわたくしはあひますまい　ごま汁「なんぜ〳〵　彌次「イヤどふか先刻から。持病の疝氣がおこりました。さやうでなくばそのにせもの。いたしかたがござるものを。さて〳〵こまつたものだ　トおもひがけなく、此しぎにおよび、さすがの彌次郎、しよげかへりてゐる、ていしゆごま汁をはじめ、みな〳〵せんこくより、彌次郎がふるまい、がてんゆかずこおもひし所、さてはこ心づきこいつはけのかはあらはしてくれんこ、たがひにそでをひきあふて　ちやが丸「なんと先生。コリヤおもしろいとがでけました。御不快ではござりませうが。ぜひそのにせものには。おあひなさるがよふござりませう　彌次「ハテさて。こまつたとをおつしやる　たれ安「イヤ時に。先生のおたくは。ゑどおもてゞは。どこもとでござりますな　彌次「されば。どこでかござつた。ヲ、それ〳〵※鳥羽かふし見か淀竹田かゆき「※山ざきのわたしをこへて與市兵へとお尋あれかおきやアがれハ、、、、　ごま汁「イヤたしか。あなたがたのお笠に江戸神田八丁ほり。彌次郎兵へとかきつけて。ありおつたがその彌次郎兵へさまといふは。たれさんの事じやいな　彌次「ハアきいたやうな名だが。だれでかあつた。ヲ、きいたはづだ。わしが實名を彌次郎兵へといひやす　ごま汁「ハ、アつねにやまいらぬ。※ちよつ〳〵とまいらぬ。彌次郎兵へでござるといふは。あなたのとであつたか　彌次「さやう〳〵　ちやが丸「ときに彌次郎兵へ先生。そのにせものゝ一九を。いんまつれてこまいかい　彌次「イヤわしは。もふ出立いたそふ　ごま汁「なんぜ。今ごろ何時じや

○鳥羽かふし見か淀竹田　忠臣藏六段目、勘平の言葉。
○山ざきのわたしをこへて云々　同じく忠臣藏五段目、勘平の言也。
○ちよつ〳〵とまいらぬ彌次郎兵衞でござる　箇季ぞろの詞をもヂル。

○ほからかし出す　抛り出す。

○犬にとりまかれたときは云々　安永五年版の落語「鳥の町」に左の咄あり。犬のほへるとき虎といふ字を手に書いて握つて居れば、ほへぬと貴様に聞いて大きな目にあつた「何んとしたぞ「ゆふべ夜更けて歸るとて、何が犬めがほへかゝる所へ、にぎつた手を出したらそれ此様にしたゝか喰ひ付かれた。「ム、そりや無筆の犬であろふ。古く「醒睡笑」にもあり。

とおもふて。もふ四ツじやがな　彌次「されば の事、わしが疝氣はかはつたとで。此やうにかしこまつてばかりおると。だん／＼わるくなる。いつも夜分そとをあるひて冷さへすりや。じきによくなるから　ごま汁「ハヽアそれで今立ふといふのか。そふさんせ／＼。たとへこなさんがゐよふといふても。爰にやもふおきやせんのじや。はやう出ていかんせ。よふも人の名をかたつて。だまさんしたの　彌次「ナニかたつたとは　ごま汁「ハテかたつたわいな。ほんまの十返舎せんせいはなごやの川並連中から。状がついてきてありや。ちがいはないがな　たれ安「はじめから。こなさんの不都合たら／＼こないなとであろとおもふた。こちからほからかし出されぬうちに。ちやつ／＼と出ていかんせ　彌次「なんだほかし出す。コリヤおもしろい　北八「コレサ彌次さんりきんでもはじまらねへ。ぜんてへおめへのおもひつきがわるい。サア爰を出て。どこぞ木賃にでもとまりやせう。コリヤアどなたも。眞平御めんなさりやし　ト北八だん／＼わびごとに、ていしゆはらはたてども、おかしさも半分、みな／＼このふたりがはう／＼のていにて、そこ／＼にしたくし出行なりを見おくり、家内のものども、手をうちたゝき、どつ／＼とわらふ、彌次郎兵へは、しじうふくれづらして、りきみかへり出ゆくおかしさ、北八あとにしたがひ

いとはまじとをり一ぺん旅の恥かきすてゝゆくあふぎたんざく

かくよみてあとはわらひをもよほし。出かけたれどもはや亥の刻すぎたると見へ。家並に戸を閉て。ひそまりかへり。いづれを旅籠屋とも見へわかたず。とまるべき方もなくして。うか／＼とたどり行ほどに。あはや軒下の犬どもが。おきたおて吼かゝれば。彌次郎兵へきよろ／＼して「ヱヽこのちくしやうめらア。わるくふざきやアがる　ト石ころをひろひ、うちつくればなを／＼犬おこりたちてさりまく　北八「かまいなさんな。犬までがばかにしやアがる。ヲヤ彌次さん。おつな手つきをして。おめへ何をする　彌次「イヤ犬にとりまかれたときは。宙へ虎といふ文字をかいて見せると。犬がにげるといふとだから。さつきからかいてるが。ねつからにげやア

がらぬ。こいつらアみんな、無筆の犬だそふなシツシ〳〵　トごふやらこうやらおひちらかしてゆくこと なしにおもはず、このまちを出はなれて　彌次「コリヤつまらねへものだ。まゝよ北八。夜どふし。あるこうじやアねへか。きついこたアねへ。やらかせ〳〵

北八「おめへとんだ事をいふ。まだ九つにやアなるめへ。又どこぞへとまりて八ものだ　彌次「それだとつて。今頃におきてゐるうちはなし。イヤあるぞ〳〵。遙向ふに火が見へる。アノ火を目あてにいつて。宿をたのまふ　北八「ヲ、サそれがいゝ〳〵。しかし挑灯の火じやアねへか　彌次「とんだ事をいふ。戸のすき間よりもれる火だものを　北八「ほんに。家のうちでたく火だなんでも是悲あそこをたのんでとまりやしやう　トおしにきかせ いそぎ行、やがてそこにちかづきたるにかつ目あてこの火はおのれとだん〳〵さきへあゆみ出して行て　彌次「ヤア〳〵〳〵あの家がどふかあるひて行よふだ　北八「ほんになアこいつはおかしい　彌次「イヤおかしくないきみがわるいどこの國にか家があるくといふは只事じやアねへ　北八「ナニサこれも赤坂のとまりぐらいでみんな狐めがするとだろうよはみを見せるとなをつきあがりがする構うこたアねへ

○呑口がはづれそふだ　小便が出さうだの意。江戸ッ子の言葉なり。

さつ〳〵とおよびなせへ　トわざとりきみかへつてあしはやにくだんの火におひつきくらまぎれにすかしみれはいざりの車なり、小ぶのうちにて火をたき、ちやをわかしながら、くるまをおしてゆくのなり、ふたりはおかしく、こゝをよぎゆくに、折ふし月は出たれども、くさ木もねぶる眞夜中のうそさみしさ、あとにもさきにも只ふたり、うわべはがまんにつよはつても、こゝろはいたつてのおくびやうもの、こは〳〵たどりゆくあとより、一人來るもの有、彌次郎ふりかへり見れは、小山のごとき大おとこ、長わきざしをこしにさしこなたへ來るは、たゞものならず、われ〳〵をめがけ、つけきたるならんと、きだ八にさゝやきて　彌次「コウあとからおかしなやつがついてくる。ちといそひでやらかそふ　トあしはやにはしれはあとの男も又はしる　北八「まちなよ。呑口(のみぐち)がはづれそふだ　ト小べんをすれは、その男もたちどまりてゐるゆへ、彌次郎こへをかけ「モシおめへ。今ごろどこへお出なさる　トこは〳〵いへは、かのおとこ、ぞんじの外、やさしきものいひにて「ハイ〳〵わたしは松坂へもどりおるものじやがな。夜さりひとり。こはふて〳〵もどふしよいなと。おもひおつたとこへ。おまいがたが。通らんすゆへ。コリヤよいつれじやと。あとからおふたりをこゝろだよりにさんじたわいな　北八「イヤおめへなりには似合(にあは)ぬよわいねを出しなさる。そしてそんな。長いやつをさしてゐながら　かの男「ハ、ア是かいな。コリヤあとでひらふて來た竹きれじやわいな　トこしからぬいてつへについてゆく　彌次「ハ、、、わきざしではねへの。わつちらア又。おめへがこわくて〳〵。さつきにからコリヤひよんなやつに見こまれたとおもつたが。マアおめへおくびやうもので。わつちらもおちついた　北八「もふ〳〵これから三人といふものだから大丈夫(だいぢやうぶ)だ　男「イヤ〳〵。このさきにとつとゑらいとがあるがな　彌次「なにがゑらい　男「きかんせ。わしやけふ。江戸橋までいて。かへりにきつうおそなつてな。いんまのさき。この松原にきおつたとこが。なんじややら。向ふに大きな白(しろ)いものがたつてるおつて。それがあつちやへいたり。こつちやへきたり。ぶうらり〳〵。もふ〳〵〳〵。わしやこはふて。コリヤしぬかとおもふたわいな。そじやもの。どふして向ふへいかれるもので。コリヤならんわいと。あともどりして。どふぞよいつれがほしいと。おもひおつたとこへ。おまいがたにいきあふ(行)たのじやわいな　彌次「エ、

○三渡の藤九郎狐　天明年間の道中記に「雲津から松坂へ行く道中の左に狐の森といふ松の森あり、藤九郎狐と云ひて古き狐あり」と見ゆ。
○いこいた　よこした。

その。しろい大きなものがゐたといふは。どこらに　男「イヤじつきに。このさきじやわいな　北八「エ、なにが出るものだ。おいらがさきへゆかふ。おれについて來な　ト打つれこの松原を一丁斗も行たる時かの男「アレ／＼向ふに。ア、コリヤたまらぬ／＼　トがた／＼ふるへる、ふたりもあやしく、はるか向ふを、月あかりにすかし見れば何ともわからぬしろきもの、およそ一丈ばかりも、かく、かい道いつぱいにひろがり、たつてゐるよふな、これはなんだろふと、さきへもすゝまず、たちどまり見れば、又きゆるよふにはつたり、たくなるかと見れば、又すつくりと大きくなつたり、ちいさくなつたり、そのかたちわからず　彌次「マアなんだろう　北八「すそがねへから亡魂にちげへはねへ　男「ア、アレあれじやもの。どふしてさきへいかれましよいな　彌次「しやうたいがわからにやア。猶きみがわりい。コリヤいかれぬ。あとへもどろふ　男「わしもおまいがたをたよりに、又來さんじたが。どふもこゝはふていかれんわい。あとへ戻つて。又つれの人が出來おつたら。又爰までこうわいな二三度もそないに。いたりもどつたりしおつたらてうど夜があけふわいな　彌次「なんでも白裝束だから。何ぞの亡魂にちげへはねへ　北八「アレ／＼青い火が見へる　男「エ、どふかこつちへきおるよふじや　彌次「コリヤどうしよふとてもさきへはいかれぬ／＼　ト三人ながらいろ青ざめておた／＼ふるふ折から向ふより人の來るさみへ　うた「戀の重荷をナつんだらおまにへ。いく駄あろやらしれぬくひ。ナアンアエ　トうたひながら來るは助郷の人そく四五人　彌次「モシ／＼。おめへがたアどつから來なさつた　人そく「ハアわしらアこの近在じやが。役にあたりおつて。津までいきおるのじやわいな　彌次「ソリヤアいゝが。こゝへはどふしてきなさつた　人そく「ハテこな人は其役で津へいくのじやといふのに　彌次「たゞしおまへがたも幽靈じやアねへか。どふも人間なら。爰迄いきてこよふはづがない　人そく「なにいはんすやら。ねからはからわからんわい　北八「イヤむかふに。化ものがゐるのに。どふしておめへがたア。そのまへをとをつて。來なさつたといふとさ　人そく「コリヤこなさんたちは。※三渡の藤九郎狐が。※いこいたのじやな。ハヽヽヽ　北八「ナニサむかふを見なせへ　人そく「むこに何がゐるぞ

い　北八「アノ白いものがアレ〳〵　人そく「しろいものとは。あれか〳〵。ありや道なかで。おまのくつや。わらふじがもえておるが。其煙が月にうつつて。白なつて見へるのじやわいな　彌次「ハ、アそふか。ハ、、、コリヤ有がたふござりやす　ト人そくにわかれて、二人ともほつとためいきをつぎ、打わらひつゝ、やがてその所にたどりつき見るに、なるほどわらじくつなどをつみかさねて、火をつけもしたるにて、そのけぶりしろくたちのぼり見へたるなり、此ところをすぎて、松坂にいたりまだ夜ふかければ、道づれのかの男をたのみ、ねるばかりのことなれば、あたりまへのはたごを出すもついゑなりと、町の入口に、きちんやどをせはしてもらひ、そこにとまりて、一夜をこそはあかしける　かくて月落鳥なきて。時の鐘明六ツを告わたるに。彌次郎北八はやくもおきいで。此所を立出るとて

鳶も輪になりて舞ふ日ぞたび人のおどり出たる松坂のやど

右のかた。小山の藥師を打すぎ。櫛田といふにいたる。こゝにおかん。おもんといへる。二軒の茶屋あり。餅の名物なり

旅人はいづれにこゝろうつるやとおもんおかんが賣れる燒もち

それより祓川を打わたり。齋宮をすぎて。明星が茶屋に休みたるとき。こゝに上がたもの二見へて、はで六大じまい引まはしをきて、帳めんとふろしきづゝみをせおひたる男、馬のねをつけてゐたりけるが、馬士「モシ〳〵おまへがたア其荷をつけて。おひとり。此だんなと。二ほうくはうじんに。のらんせんかいな　上がたもの「おまいがたも。おほかた參宮じやあろ。わしも古市まで。掛とりに行さかい。いつしよに乘なされ。はなしもてゆこわいな　彌次「いかさまでゆふべの夜道で大つかれだ。北八おらアのつてゆくぞ　北八「そんなら。此荷をつけてもらをふ　ト此所にて馬のそうだんができ、上がたものと彌次郎兵へと、二ほうくはうじんにて出かける　馬「ヒイン〳〵　上がたもの「おまいがたア。江戸衆じやあろな　彌次「さやうさ　上方「ゑどはゑいとこじやが。わしや去年行て。ゑらいめにあふたがな。アノゑどに似合ん。どこへいても。手水場が。とつともふ。ゑらい。むさくろしうて〳〵わしや百日ほどおるうち。とんと手水にいたことがないがな。それから江戸をたつて。鈴が森たらいふと

○かくて月落鳥なきて　張繼の楓橋夜泊の詩「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船」、原本に鳥とせるは誤なるべし。

○「旅人は」の狂歌　おもん、おかん兩女が賣れる燒餅のうち、旅人は何れに心移るかとの意にて、女が燒餅を燒くにかけたり。

○明星が茶屋　「又明野が原明星が茶屋こそおかしけれ、いつとても振袖の女赤根染の裏付たる木綿著物を黑茶に散し形付かぬは一人もなし、扨日本の愛の女ほど白粉をつける所又もなし」（西鶴織留）

こへ來て。ヤレ嬉しや。こゝでこそ小用してこまそと。海の中へためく／＼た小用を。いつきに三斗八升ばかりしおつたが。ゑらふよかつた。あしこは奇麗でゑらいおつきな小用擔であつたわいな。ハヽヽヽ　彌次「京では小便と菜と。とつけへこにするといふことだから。小便も大切なもんだに。おめへ海の中へおしいことをした。その三斗八升でとりけへたら。菜が馬に。五駄や六駄はくるだろふに。それだから京では。屁をひるにも出そふになるとちやつとうらの畑へかけていつて。はへてある。だいこや菜のうへゝ。屁をひりかけるといふことだが。なるほど是もこやしになるだろう　上方「そふじやわいな。其屁をひりかけた菜を。よふ刻で土にまぜて。壁をぬりおるがな。京ではその土を。へなつちといふわいな　彌次「そうてへ京といふとこはあたじけねへ所よ。めへどわつちがいつた時分は三月で花見のさいちう。てん／＼に幕をうつてけつこうな高蒔繪の重詰なんどを。取ちらした所はいゝが。其重のうちに何があるとおもへば。※かくやへの香のものにきらずの煎たやつは。おそれる／＼　上方「イヤそれよりかおゑどの衆が。吉原のさくらはゑらいと。いこう自慢せらるゝさかいでわしやわざ／＼吉原へいて見たが。なんのさくらはありやせんがな　彌次「そりやおめへいつごろ。いきなすつた　上方「わしがいたは。たしか十月時分　彌次「なんの十月さくらがあつてたまるものか　上方「ハアそふかいなそれでも京の小室やあらし山には年中さくらがちんとあるがな　彌次「そりやア木ばかりだろふ花はねんぢうありやアしめへ　上方「さよじやわいなイヤ又ゑど衆は長唄をよふうたふてじやが京の※宮薗や。※國太夫は又格別なもんじやわいな　彌次「國太夫といふは。どのよふにうたひやす　上方「くに太はこうじやいな　トまじめにこへをはり上てくに太夫　上方「やがてわたしがねんあけておまへとめうとになるならば。肩を裾へはまだなこと足を耳にかけてなりとも

○かくやの香の物　「香物にさま／＼の漬物をあつめて細にきざみ酒醬油を加減してかけたるを世にカクヤといへり」と「松屋筆記」にあり。語原につき覺然（人名）、隔夜（隔夜堂）などいろ／＼いへど、何れか明ならず。

○宮薗　薗八節のこと。豐後節より出づ。天明五年初代薗八（鸞鳳軒）歿。その後三十年許にして宮薗千之再興。

○國太夫　宮古路國太夫、常磐津の祖。

そひませうチン〳〵〳〵〳〵チンチリツン〳〵　彌次「イヨ〳〵おもしろへ〳〵。ナントわつちに。ひとくさり。おしへてくんなさらねへか　上方「そりややすいことじやわいな。わしについてやりなされ　ト此内きた八は、ほそながき竹一本をひろいて、上方ものがあまりにかうまんくさいことをいふゆへつゝきおこしてやらんと、馬のあとから、ねらつてくることをばしらず上方ものはむちうになり、又國太夫ぶしほんにおなごはしうねんのふかいといふはうそじやない。しんでも呵責の夜叉羅刹。杖ふりあげててうどうつ　トいふ所にて、北八手をのばし、かの竹にて上方ものゝあたまをぴつしやり　上方「ヤアコリヤどやつじやい人のあたまへ礫うちおるがな。彌次「ハ、、、、もふ一ツぺん今のもん句を　上方「ほんにおなごはしうねんの。ふかいといふはうそじやない。しんでも呵責の夜叉羅刹。つゑふりあげて　北八うしろより又ぴつしやり　上方「アイタ、、、どやつじやい。どめつそうな。ゐらふつぶてうちくさるがな　トふりかへり見れども、きた八はちやつと、彌次郎がのりたるほうの、馬のかげにかくれて、いつかうみへず　彌次「おもしろいが。どふも。ふしがむつかしい。もふ一ぺんやつてくんなせへ　上方「ソリヤなんぼでも。やるはやるが。又つむりを。うちやしよまいか　彌次「ナニサわつちが見てるよふ　上方「そんならまいち度やりましよかい。しんでもかしやくの。やしやらせつ。つゑふりあげて。てうどうつ　トこんどは北八うろたへて、彌次郎があたまをぴしやり〳〵〳〵　彌次「アタ、、、きた八おれだが。コリヤどふする　上方「ハアさつきから。わしがつむりをうたんしたのも。こなさんじやな。何としてうたんした　北八「わしはうつたおぼへはない　上方「ナニないとはいはしやせんわいな　北八「ハテおいらアしらねへ。いけしつこいやろうめだは　上方「やろうとはなんじやいな。こなさんはゐらいおとがいたゝかんすな　北八「なんだ。このべらぼうめ。さつきからそうてへ氣にくはねへやろうめだ。あんまりたはことつきやアがるとひきづりおろすぞ　上方「おもしろい。サアおろして見やんせ　北八「ヲ、まつさかさまに。おつことしてやろう　ト馬のしりをぴつしやり馬おどろひてはね上る　上方「ヤアコリヤたまらん。何するのじや　彌次「お

れもたまらん。コリヤノ＼どふするノ＼　馬士「エ、ちくしやうめドウノ＼　ト此内しんちや屋あけの町をうち過ぎかゝたにつく、此所より馬をおりて三人とも、茶やにやすむ、上方もの北八にむかひて　上方「コレおまいは。なんとしてわしがつむりをうたんした　彌次「もふいゝにしなせへ。おたげへに旅じやアいろノ＼なことがあるもんだ。了簡しなせへわつちが一ばいかいやせう。モシ女中。何ござ肴があらばこけへいつぱい出してくんな　ト[illegible]　爰方ものもひとつなるくちゆへたんノ＼ゑひがまはりて「コリヤゑらふよふたわいな。コレ彌次さんとやらわしやおまいが。ゑらふすきじやが。此わろはいかんぞや。とんといかんけれど。おまいのつれじやしよことがないかうしよじやないかいな。これから山田の妙見町にいつしよにとまつて。古市をおごろかいな。わしやあこではゑらふきれるがな。千束屋の鼓の間。柏屋の松の間。わしが案内するさかい。いかんせんかどふじやいな　トやたらにおほふうなことはかりいふゆへ、彌次郎兵へこいつをおだてゝ、なぶりものにせんとおもひ　「きめうノ＼。どふぞおともいたしてへの　上方「是から世古の松坂やでしたくして。妙見まちの藤屋としよじやないかいな。サアノ＼もふいこわいな　彌次「ドリヤ出かけや

せう　トこゝの酒代をはらひ、立出る、此さきの出はなれにみや川といふ舟わたしにいたりて

宮川や神に機縁をむすばんとすくへる水のかげのしらゆふ

是より中河原をうちすぎ。堤世古をうちこへて。山田のまちにさしかゝりける

東海道中膝栗毛五編下終

膝栗毛五編後序

たび人のすなる日記といふものを。作者のして見るひざくり毛。筆のあゆみのはかどりて。はやくも伊勢路にさしかゝりぬ。いでや天地は古市の宿屋のごとく。光陰は※同社に似たり。人間行路の難きとは。宮川のはにあらず。相の山の山にあらず。たゞ襟もとの錢かけ松こそたふとき。神の※ほぐらには比すべけれ。末社めぐりの十返舎。こゝに感ずるところありて。あまのいはとのあなをたづね。ふたみの海の底をさぐりて。かひあることばたえりつゞりつ。あつぱれ明星が茶屋にはねたる※三寶荒神。その尾にとりつくおかげ参。※賓導堂に。筆をとりて。ひがとすなる伊世街道。※島さんこんさん仲成しるす

○同社　道者の音に通はせて、宿屋の如くといへるに對せり、道者とは社閣への参詣旅行する者をいふ、一体此二句は李泰伯の「桃李園序」の「夫天地者、万物之逆旅也、光陰者百代之過客也」とあるをモヂリたるものゝ如し。

○ほぐら　ほこらの訛、叢祠。

○三寶荒神　馬の背に木框をおきて三人をのせるやうせるをいふ。

○賓導堂　ヒンは馬の嘶く聲、ドウは馬を制する聲。

○島さんこんさん仲乘さん　三寶荒神の眞中に乘れるを仲乘といふ、島さんこんさんは着衣を見て呼ぶと解するが通例なれど、一説には大御番鳴主馬助、權太遠江守、中澤主税助が二條在番の上下に華美なる行裝せしより沿道宿驛にて取ましたるに初るといふ。

東海道中膝栗毛五編追加

膝栗毛五編追加緒言

荒海の障子に手脚を屈。乗合の賓船に天窓を掻。忠綱が歯むなしく歯磨を費し。眉間尺が額いたづらに剃刀を労す。話長ければ棕櫚箒鯱立をして。災害はきものにおよび。幕長ければ蜜柑の皮羽翼を生じて。余波留場を閙。古人不用物を指て長物と呼ぶ宜哉。唯長くして美なるものは飛頭蠻。長くして奇なるものは膝栗毛なるべし。今既五編追加成て。長袖よく舞ふ古市の娯樂。長舌巧に囀る宮雀の滑稽を盡せり。實に二子が鼻の下の長より出たる滑稽の骨にして。價良馬の骨より貴し。卿が文さんげ〳〵の提灯と光をあらそひ。卿が名法性寺入道とともに長く傳ふべし

文化丙寅仲夏

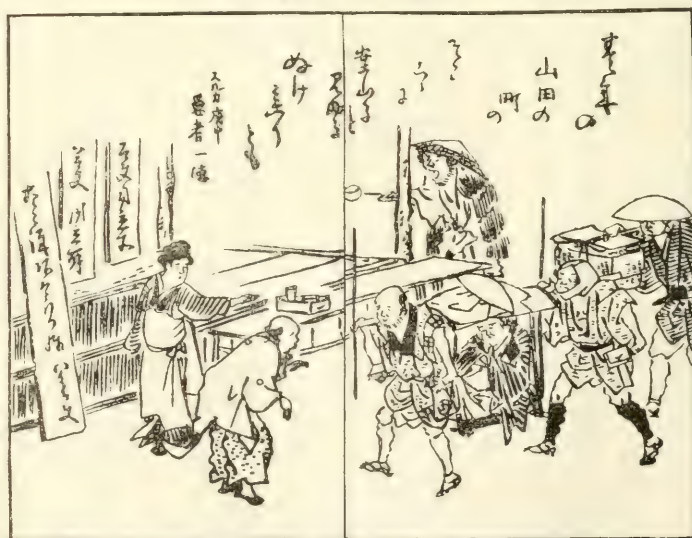
喜三二書于芍樂亭

○荒海の障子　清涼殿の北のへだてなりとぞ。
○忠綱が歯　「東鑑」に「足利又太郎忠綱は、前歯の長さ一寸にして其聲十里に響く」と見えたり。
○眉間尺　「太平記」云「其後鏌耶、子を生めり、面貌尋常の人に替りて、長の高事一丈五尺、力は五百人か力を合せたり、面三尺ありて眉間一尺ありければ、世の人其名を眉間尺とぞ名づけゝる」
○留場　劇場内の取締
○長袖善舞　韓非子の語。
○さんげ〳〵の提灯　六月大山石尊参詣の夜立。
○法性寺入道　小倉百人一首の中にて法性寺入道前關白太政大臣は、一番長い名なり。

年憚口上でなし
自序ともつかぬ

附言

氣のきゝたる化物は足をあらひて引こむ時分ひざくり毛の作者圖にのりて又しても彌次郎兵衛北八がしやれもむだも洗濯頃此五篇目追加にいたつてあしもとのあかるきうち先今日は是までの筆をおくにしくこなしと漸滿尾しこぢつけたれど御見物のしびれをきらせし所に附込み京へのぼるの一段を拾遺にかけよと書肆のもとめに是非なくとは嘘の皮やつぱり作者も欲の皮ひつぱりだこの手をくみてひと工夫せしあとの二冊は京大坂の穴さがしほぢくりかへして御覽に入んとしこたま趣向はとつておきの正月物それははれ著此一冊は不斷櫻の伊勢道中おはりかとおもへば拾遺のはじまりこゝはざつといたしませうとあとをはらんでそのためおとはりさやうと

例のなまけものがいふ

○川崎音頭　伊勢の俳人梅露にはじまる、自笑樂記に「伊勢風流の川崎音頭」とあり。

○和名抄　書物の名。

○御師　太神宮の下級の神人にて某太夫と稱する者。御詔刀師の略なりといふ。

○竹本義太夫　御師を何太夫と稱ずるより、洒落に用ゐたるもの。以下の道頓堀その他も、義太夫に關連したる洒落なるべし。

○かたはものは云々　見世物の片輪者。嘲弄の意に用ゐたり。

東海道中膝栗毛五編追加

十返舍一九著

川※崎音頭に。伊勢の山田とうたひしは。※和名抄の陽田といへるより出たるにや。此町十二郷ありて。人家九千軒ばかり。商賈甍をならべ。各質素の莊嚴濃にして。神都の風俗おのづから備り。柔和悉鎮の光景は。余國に異なり。參宮の旅人たえ間なく。繁昌さらにいふばかりなし。彌次郎兵衛喜多八は。かの上方ものと打つれ。此入口にいたると。兩側家ごとに※御師の名を板にかきつけ。用立所といへる看板の竹葦のごとく。こゝに袴はをりひつかけたる侍。何人となく馳ちがひて。往來旅人の御師にいたるを迎ふと見へて。一人の侍彌次郎兵衛にちかづき　手代「モシあなたがたはいづれへ。おこしでございますな　彌次「しれた事。太神宮さまへまいりやす　手代「イヤ太夫はどれへ　彌次「太夫は。竹本義太夫殿さ　手代「ハア義太夫と申すは。どこもとじやいな　彌次「その義太といふはな。大坂にては道頓堀　北八「京は四條。お江戸はふきや町がしにおるて。永らく御評判にあづかりましたる　手代「※かたはものは。おまい方でつたかいな　北八「たはことぬかすとひつぱたくぞ　手代「ゑらいあごじやなハヽヽヽ　上方もの「ちと休んでいこかいな　北八「こゝらはきたねへ所だ。みな御師の雪陣と見へて用立所とかいてある　彌次「おきやアがれハヽヽヽ　ト三人ともあるちや屋へはいり、しばらくやすむ、此内向ふより、上方ごうしや大ぜい、そうひのなり、女まじりにこへはり上げ　うた「ござれ夜みせは順慶町の通り筋か

○すけんぞめきは云々　「すけん」は素通り。「ぞめき」はざわ〳〵して來ること。「柳亭筆記」に「難波にて新町をぞめく者をあわざ烏といふとぞ」とあり。

○太々講　太々神樂を上ける講中を云へるか。

○みじかいおたち　小刀。

○講親　講元。講中の世話役。

ら。ソレひやうたん町を。ヤアとこさアよいとさア　チヽ、チン〳〵　すけんぞめきは阿波坐の烏。ソリヤサ。かわい〳〵もヤアレかうしさき。ヤアとこさ。ヨウいとなア。ありやゝこりやゝ。コノなんでもせ。チヽ、ン　チヽ、ン　チン〳〵〳〵〳〵　ト此ひとむれ通り過たるあとから、太々講とみへて、廿人斗いづれも、御師とりむかひの駕にうちのり來るが、おしの手代さきにたちて「サア〳〵〳〵。これじや〳〵。まづどなたさまも是で御休足なさりませ　トかごはのこらず、ちや屋のかどにおろす、此だい〳〵こうは江戸とみへて、いづれも小そでぐるみに、みじかいおたちをきめた手やい、めい〳〵かごを出て、ざしきに通る、此内一人のおとこ、彌次郎を見つけて「イヤこれはどふだ。彌次どの〳〵きさまも參宮か　トこへをかけられて、彌次郎びつくりし見れば、町内の米屋太郎兵へなり、ゑごをたつ時此米やのはらひをせず、立たる事なれば、何となく彌次郎、しよげかへりて「ハア太郎兵衛さまか。よくお出かけなさいました。しかし爰であなたのお目にかゝつてはめんぼくない　太郎「ナニサ〳〵。わしも仲間の太々講で。そのくせ講親といふものだから。據なく出かけましたが。よい所であつた。旅へ出ては。とかくづうくにがなつかしい　同國　おくへ來て一ツぱいやらつし　彌次「ありがたふございやす　太郎「つれはだれだハ、アまんざらしらぬ顔でもない。ナントきさまたち。さいわいのとだ。太々講おがまぬか。それも飛入といやアちつと斗。金が出るから。無躾ながらわしらが供になると。一文も入らず。しこたまそうになつて。おがまれるといふものだからどふだろう　彌次「それは願つてもない。有がたい事でございやす。しかし。それが出來やせうかね　太郎　ハテわしが講親だもの。どふでもなる。マア何にしろおくへ來さつし　彌次「ハイさやうなら。モシ上方の。ちとこゝに待てくんなせへ　上方ものつれの「よいわいの。いてごんせ　太郎「サア〳〵ふたりともきさつし〳〵　ト此太郎兵へ、にいだなはれ、彌次郎も北八も、わらじをとつておくへ行と、上方ものはひとり、みせさきに酒などのみてまつてゐるうち、おくはだい〳〵こうの事なれば、御師よりのちそうにてさいつおさへつ大さはぎのさいちう、又おもてにひとむれのかご、十四五てう斗り、これもかみがたのだい〳〵こうと見へて、おしの手代さきにたちてかご「ホウよい〳〵。ゑつこらさつさ〳〵　トこれもおなじく此ちや屋にはいる　おしの手代「サア〳〵御案内〳〵　ちや屋の「おはやうござります。おくへおとをりなさんせいな　ト此内みな〳〵、かごよりおりておくへとをるを、すぐにさけさかなをもち出し、だい〳〵こう、二くみの大さはぎ、ざしきのしやれ、いろ〳〵ちれども、あまり

○いちはなだちて　先立ちて。

○へげたれ　「ひゆたれ」か。氣の利かぬやつ。

○道中じら　護摩灰のこと。

○あたけたいな　何だ怪しからぬ

くだ／＼しければりやくす、やがておくの酒もりもをはりて、サアおたちといふと、二くみのだい〴〵こうかいつしよになり、ござくさして、おくよりいづると、兩ごぐみの御師の手代、我いちはなだちておくより出「サア／＼お駕の衆これへ〳〵。どなたもサアおめしなされませ　トあつちこつちをかけまはりかごにのせる、其うち又、上がたぐみのおしの手代も、おなじくかけまはりて「こちらのおかごはこれへ〳〵　トよこづけにして、みな／＼をのせる、米やの太郎兵へなまゑひとなり、彌次郎が手をとり　太郎「コウ彌次公。きさまおれがかごにのつていかねへか　彌次「イヤとんだことをおつしやる　太郎「ハテわしは。これからあるくはならぬさみだ。きさましやれにのつていかつし　彌次「さやうなら。へ、、、、こりやきめう／＼　トかごにのれば、サアおたちじやと、兩方のかごが、いちどきにかき出し、こんざつして、彌次郎がのりたるかごの人そく、さんだまぬけと見へて、上方ぐみのかごの中へ、まぎれこみたるにきもつかず、さつさとかいてゆく、かゝるござくさまぎれに人もそれとこゝろづかねば、だん〴〵といそぎゆくほどに、山田のまん中すじかいといへる所にて、江戸がたの一くみは、内宮のおしなるゆへ、左りのかたへわかれ行、上方ぐみは、外宮のおしにて、北どころより、右のかたへわかれ、田丸かいどうの、[illegible]六人のかたにつく、門前のはうき目、もり砂に水うちきよめ、ばんたくはんにまく打まはして、ちそうりやく／＼、はをりはかまに出向へば、こうおう、なゝ／＼、かごをおりて、げんくわんより打とをる、このとき彌次郎兵へも、かごかきのそゝうにて、上方ぐみの中へまぎれこみ、こゝにきたれど、十四五こうもあるかご、どれがどれやらわからず、彌次郎はかごを出て、おなじくげんくわんに打通りそこらをうろ／＼見まはせども、みなしらぬかほばかりなれば　彌次「ハテがてんのいかぬ。モシ〳〵米屋の太郎兵さまは。どれにお出なさいます　そばにいた男「なんじやいな。太郎兵へさんとは。こちやしらんわいな。そしておまいは。ねから見ん顔じやが。誰さんじやいな　彌次「ハイわつちは。ソレ太郎兵へさんの。町内のものじやが。ハテどふかちがつたよふな。北八はどふしたしらん　トむしやうに、うろ／＼きよろ／＼と、まごつきあるけば、みな〳〵きもをつぶし、たがいにそでをひきあふて、にもつなぎかたよせ、さゝやきあふうち此講中の内二三人立向ひて「コレ〳〵こなさんは。見なれぬ人じやが。たれじやいな　彌次「ハイ〳〵　こう中「ハテこなわろは。何をきよろ〳〵さんすぞいな。誰じやといふのに　彌次「イヤわつちは。米屋の太郎兵衛さんに。おめにかゝればわかりやす　こう中「ハテそないな人は。こちの講のうちにはないもせぬもの。なんじややらきみたのわるい人じやわいな　御師の手代「ハアこな人は。あなたがたの。おつれではござりませんかいな　こう中「さよじやわいな　手代「イヤそれはどしたもんじや。とつとゝ出ていかんせ。ぶらい※へげたれじやな　こう中「※道中じらであろぞいな。ほり出してやらんせ。※あたけたいな　彌次「エ

、そんなに。いひなさんこたアねへほり出すとはなんのこつた。とほうもねへ こう中「ハ、アおまいのものいひは。おゐどじやな。それでよめたわいの。いんまのさき。お江戸の太々講と。ひと所でおちあふたが。其時おまいの乗んした駕が。こちらの中へまぎれこんで。ござんしたのじやな 彌次「なるほどさやう。そんならわつちのゆく御師どのは。どこでございやすな 手代「ナニおまいのいく所をたれがしろぞいな こう中「めん〳〵のゆく御師どのを。しらんといふことがあろかいな。コリヤわりさまは。わざとこちのなかまへまぎれこんで。太々講をくひたをししよふでな こう中みなく「エ、けたいなやつじや。のうてんどやいてこまそかい 彌二「イヤわるくしやれるア。手めへたちのだい〳〵講。丸ッきり喰倒した所が。たかゞしれてある。あんまりやすくしやアがるな。江戸ッ子だは。おれひとりで。太々講うつて見せよふ トざつさりすはれはおしの手代きもをつぶして「ナニおまいが。おひとりでかいな。こりやでけた〳〵。みんごとおまいが 彌次「しれたとよ。多少にやアよるめへこれでたのみ

○太々講がならずば云々　太々を橙にかけ、橙に似て小さきより「蜜柑講でも」云々と洒落たるもの。

ます　トうちがへのぜに二百文、かみにつゝみ出せば、おしの手代二度びつくり「ハヽヽ、太々講は。やすうて金拾五兩も出さんせんけりや。でけんわいな　彌次「ナニ是ではなりやせんか　手代「さよじやく　彌次「太々講がならずば。是で。蜜柑こうでもたのみます　こう中「ハヽヽ、べつかこうにさんせハヽヽ、　手代「イヤおどけたおかたじや。ハアよめた。おまいのいく所は。憶に内宮の山莊太夫どのじやわいの。さつきの手代が。あこのじやほどに。是から妙見町をすぐに。古市のさきへいて尋ねさんせ　彌次「ハアそふか。コリヤ有がてへ。ほんにおやかましうございやした　こう中み　なく「ゑらいあほうじやハヽヽ、　ト手を打わらふ彌次郎はらたてども　せんかたなくしほくここの所をたちいづるとて

鉢植のだいくこうにあらね共ちうにぶらりとなりしまちがひ

それより彌次郎兵へは。もとの筋違に出。妙見町をさして行道すがら。北八はいかゞせしや。米屋太郎兵へと打つれて御師の方へ行しか。但しは上方ものと。妙見町に泊りしかと。おもひわびつゝ。たどり行ほどに。廣小路にいたると　此所の　やどや「モシおとまりかいな。やどをとつてかんせ　彌次「コレ妙見町といふは。まだよつほどございやすかね　やどやの　おんな「イヱいんま少し此さきじやわいな　彌次「ソノ妙見町にてア、何屋とかいつた。道づれの上方ものが泊るといつたは。ア、それよ　トいろくにかんがへても、宿屋といふを、わすれてさつぱり思ひ出さず　ハテロへ出るよふな。何でも棚からぶらさがつてゐるよふな名であつた。モシく妙見町に。ぶらさがつてゐる宿屋はございやせんか　そこにいた人「ナニぶらさがつてゐるやどやは。こちやしらんわいの。そないとをいふては。しりやせんがな　彌次「なるほど。こゝらでたづねてはしれめへ。もちつとさきへいつてたづねやせう　トそれよりこゝをすぎて、いそぎたどり行ほどにこゝに万金丹のかんばん、みやうけん町山原七右衛門といへるを見て、さてこそこゝが妙見町ならんとおもひ、わうらいの人をよびとめて「なんと此所に。ぶらさがつてゐる宿屋はございやせんかね　わうらいの人ふしぎそふに「なんじやいな。ぶらさがつてゐる内とは。何屋

じやいな　彌次「やどやさ　わうらい「その家名わいな　彌次「家名をわすれたからのこと　わうらい「イヤそれいふて。かんせにやアしれぬくひわいの。何じやろと。ぶらさがつたうちといふては。ハヽアむこのかどに。人のたつておる内へいてとふて見やんせ。あこは去年首くゝりがあつて。ぶらさがつたうちじやさかい　彌次「イヤそんなもの〻。ぶらさがつたのじやアございやせん。　わうらい「ハテまあいてとふてかんせ。あこも宿屋じやあろわい　彌次「ハイさやうなら　ト　はしり行うち、かの家のかどに、たつてゐた人もどこへか、いつてしまい、さつぱりしれなくなり、まご〱して、あるうちのまへにたちて　彌次「モシ〱。ちとものがたづねたうございやす。去年。首をおくゝりなさつたは。あなたでございやすか　このうちのていしゆ、ゑあたま　せきもつぶしたごんで出「イヤわしや。首つつたとはないがな　彌次「そんなら。どこでございやす　ていしゆ「こゝらにくびつつた内はしらんがな。此二三軒さきに。棚からおちたぼたもちがあるが。もしそれじやないかいな　彌次「いかさまなア。なんでも棚からぶらさがつたよふなうちであつた　ト次二三げんさきへゆきあるうちのかどにて「モシ棚からおちたうちは。おめへじやアございやせんか　トきいたことをいふ此うちの女ぼうさしでて「イヽエナ。わたしがうちはもとから爰で。ついしかたなへあげておいたとはおませんわいな　彌次「ハア外にはござりやせんか　女ぼう「ソリヤおまい。

きゝおがひじやあろごいな。山からおちた内じやおませんかいな。これじやと相の山で。寅次郎の小室が。此間の風で。谷へふきおとされたといふことでおますがな。大かたそれじやあろいな　彌次「イヤそれでもねへが。コリヤアこまつたらんだ。何だかかだか。さつぱりわからなくなつて。もともこもうしなつたよふだ。わつちもさつきから。たづねあぐんで。ちふ／＼がつかりとくたびれやした。どふぞ一ぷくのまして下さりやせ　ト此みせさきにこしをかける、ていしゆきのごくそふに、たばこぼんをさげて、おくより立出　てい「サア一ぷくあがらんせ。いつたいおまいは。どこを尋ねさんすのじやいな。参宮じやあろが。おひとりか但しは。おつれでもおますかいな　彌次「さやうさ。わつちはそのつれにはぐれて。道連ともに三人の所。こんなこまつたこたアござりやせん　てい「イヤそのおふたりのおつれは。おひとりはお江戸らしいが。今おひとりは。京のお人で。目のうへに。此くらひな。痰瘤のあるおかたじやおませんかいな　彌次「さやう／＼　てい「それじやとこちの内に。おとまりなされたさかい。すぐにおまいさまのおむかひを出しましたわいな　彌次「そりやほんとうにか。ヤレ／＼うれしや。そしておめへの所は。何屋といひやす　ていしゆ「アレ御らんなされ。掛札に藤屋とかいておますがな　彌次「ホンニそれ／＼。たなからぶらさがつたよふだとおもつた

○**筑摩の鍋かぶり**　近江國筑摩に鍋祭なる行事あり、婚嫁せる婦人は鍋を戴きて神に奉す。夫を換へたる者は、その婚嫁の數に從ひ、鍋の數を增して被ることいふ。こゝは髮の見立。

○**信仰が薄い**　難有くない。

が。その藤やよ。そふしてつれのやつらは。どこにゐやす　こいしゆ「ソレおくへ。おつれさまがお出だといふてかんせ　ト此こへをきくよりおくから出る道づれのかみがたものきんで來り「コリヤよふごんした。さだめてそこらうち。尋さんしたであろ。こちもゐらう。たづねまふたこつちやないわいのマアおく〳〵へ　彌次「これはおせはになりやす　トすぐにおくへ行、上方ものと北八は、ゑごなみの太々講について、御師の方へ行しが、彌次郎兵へ見へざるゆへ、しらぬ人ばかりにて、手もちなく、いろ〳〵きゝ合せてもわからず、せんかたなくその御師の方を出、たずねたくもあてどなく、かねてみやうけん町の、ふじやへとまらんといひたるこどもせうちの事なれば、大かたたづねてくるであろふと、さてこそ、この所にとまりてまちうけしなり、彌次郎はだい〳〵こうのかごが、まちがひたるいちぶしゞうをものがたり、大わらひとなりける、北八はかみゆひをよびにやり　ひげをそりていたりけるが「まあ〳〵おたげへに。別条なくてめでたい〳〵　彌次「いやもふ。とんだ目にあつたといふはおれが事よ。時に。かみゆひさん。そのあとでわつちもひとつ。やらかしてくんなせへ　北八「おめへマア湯にはいつてきなせへ　彌次「そんならそふよ　ト彌次郎はゆにいりにゆく北八ひげをそりかゝりて「ときに髮結さん。おいらがかみは。ぐつとねをつめて。いつてくんな。なんだかこつちのほうの髮は。たぼが出て。髷がおつにながくて。とんだきのきかねへあたまつきだ。そして女の髮も。ごうせへに大きくいつて。なんのこたはねへ。※筑摩の鍋かぶりといふものだ　かみゆひ「そのかはりおなごは。とつときれいでおましよがな　北八「きれいはいゝが。たつて小便するにはあやまる　かみゆひ「イヤおゐどの女中も。おつきなくらをあかんして。あくびさんすには。ねからいろけがさめるがな　北八「それでも。女郎は又江戸のこたた。ゐどはいきはりがあるからおもしろい。こつちのは。誰がいつてもおなじことで。ねつからふるといふとがねへから。※信仰がうすいよふだ　かみゆひ「イヤこちのほうでは。おまいのよふなおかたがいかんしても。ふらんさかい。それでゐいじやおませんかいな　北八「きさまおれをやすくいふな。コレほんのこつたが　かみゆい「チツトあをのかんすと切ますがな　北八「イヤきらなくてもごうせへにいてへかみそりだ　かみゆひ　いたいはづじやわいな。このかみそりは。いつやら

研(とい)だまゝ、じやさかい　北八「エ、めつそふなぜ。剃(そ)るたびごとに研(とが)ねへの　かみゆい「イヤそないにとぐと。かみそりがへるさかい。ハテ人さんのつむりのいたいのはこちや三年もこらへるがな　北八「どふりこそ。いたくて〳〵。一本ヅヽぬくよふだ　かみゆい「なんぼいたいとて。たかで命(いのち)にさはるとはないがな　北八「エヽそりやしれた事よ。もふ〳〵さかやきは。いゝかげんにしてくんな　かみゆひ「おまいさかぞりはおきらひかな　北八「エヽ其剃刀(かみそり)で。逆剃(さかぞり)にやられてたまるものか。あたまの皮(かは)がむけるだらう。もふそこはいゝから。ぐつと髪(かみ)をつめていつてくんな　かみゆひ「ハイ〳〵コリヤゑらいふけじや。このふけのとれるとがおますがな　北八「どふするととれる　かみゆい「ぼんさまにならんすとゑいがな　北八「エヽいめへましいとないふ　かみゆい「ねはこないで此様(よ)ふおますかい　北八「イヤ〳〵もつとひつつめてくんな。とかくこつちのほうへくると。髪はへたくそだ。ねをかたくつめていふことをしらねへ。無器用(ぶきよう)な　かみゆい「さよなら。これではどふでおます　ト北かみゆい、これみたかといふほど、ぐつとねをつめると、さかやきに三ツほど、ひだができて、目はうへのほうへひきつるくらひに、かたくひつつめられ、北八かみのけがぬけるほどいたけれ共、まけおしみに、かほをしかめながら「これでよし〳〵。アヽいゝ心もちだ　かみゆひ「ナントそれで。よござりましよがな　北八「あんまりよすぎてくびがまわらぬよふだ　ト此内彌次郎ゆよりあがりくる　かみゆひ「サアあなた髪(かみ)なされませんかいな　彌次「イヤどふか湯に入たら。ぞく〳〵して。風でもひいたよふだ。わつちはマアあしたのとにしやせう　かみゆい「さよならごきげんよふ　ト出て行此うち女、膳をもちいでめい〳〵へなをす、上方もつたる例より、ねころびいたりしが、おきなをりて　「ドレ飯(めし)くをかいな　「今日はしけで。お肴(さかな)がなにもおませんわいな　彌次「是は御ちそう。サア北八どふだ　北八「彌次さん。わつちが箸(はし)はどこにある　彌次「エヽ此男は。ソレ膳(ぜん)についてあらア　北八「とつてくんな。どふもうつむくことがならねへ　彌次「なぜならねへ。ヲヤ〳〵手めへの顔(かほ)はどふした。目がひきつつて。狐(きつね)つきを見るよふだぜ　北八「あんまり髪(かみ)ゆひめが。

○牛車樓　備前屋のこと。

ごうぎにねをつめていやアがつて。ア、タ、、、、くびをいごかすたびに。めり〳〵とかみの毛がぬけるよふだ　上方もの「ソレおまい。お汁がこぼれるわいの。アレお飯のうへに。お汁わんをおかんすさかい。アレこぼれたわいの。コリヤもふとつとやくたいじや　北八「彌次さん。どふぞふいてくんな　彌次「いめへましいおとこだ。そしてマアうつむかれぬほどに。なぜそんなに。かたくいわせた。もふちつとゆるくすればいゝに。手めへ大かた。かみゆひをいぢめたろふから　上方もの「そじやさかい。そないなめにあはんしたのじやあろぞいな　北八「イヤもふ。ものをいふさへ。あたまへひゞけてならぬ。彌次さんどふぞ。この難義を。たすかるしよふはあるまいか　彌次「ドレおれがちつとゆるくしてやろう　ト髪のねをもつこいやといふほどぐつとひつたてる　北八「アイタ、、、、どふする〳〵　彌次「これでよかろう　北八「ア、ちつと。くびがまわつてきた。エ、とんだめにあはしやアがつた

あなどりしむくひは罸があたりまへゆだんのならぬいせのかみゆひ

みづから斯よみて打笑ひつゝ。支度仕廻。はや膳もひけたるに。いづれも打くつろぎて。はなしの序に　京の男「ナントこよひ。これから古市へいこかいな　一「まだ宮めぐりもせぬさきに。もつてへねへよふだが。まゝのかは。やらかしやせう　京の人「いて見やんせ。わしやあこで。年〳〵すてたかねが。千や貳千のこつちやないさかい。なんぼなとわしがうけこみじや。サアはやういかんせんかいな　彌次「エ、そんならおれも。髮月代すればよかつた　京「御亭さん〳〵。ちよと來ておくれんかいな　このやどの ていしゆ「ハイ〳〵御用でおますかいな　京「おゑどのお客が。これから山へのぼろといな　妙見町のつうげんに古市へゆくを山へのぼるといふ　ていしゆ「よござりましよ。おともしてまいりましよ　京「アノ牛車樓か。千束亭に。しよじやないかいな　北八「たいこの間

○きよといもんじや　驚くべきものだ。

とやらは。何屋にありやす　ていしの「たいこじやおません鼓の間の事かいな。ソリヤ千束やでおますがな　京「そのちづかやがよござりましよ　ト　みな〳〵したくするうち、はや日もくれて時分はよしと、ていしゆをあんないとして三人とも、出かけ行ほどに、北側見町のうへよ、すぐに古市にて、倡家軒をならべひきたつるいせおんごの三みせんいさましく、うかれ〳〵て、ちづかやといへるにいたれば女共みな〳〵はしり出「よふござんした。すぐにお二階へ　ふぢやの「おつれ申てちよいかいな。サア御案内いたしましよ　トていしゆをさきにおの〳〵二かいへ上り座につくと　京「ときに彌次さん。こうしよじやないかいな。おまいがたを。お江戸でゑらいおつきな店の。番頭衆にしよじやないかいな　ふぢや「そないなことがよござりましよ　京「しかし訛らんしてはあかんわいの。上店といふもんじやさかい。京談でやらんせにや。工合がわるかろが。どふじやいな　彌次「そんな事は。もつてこいだ。すつぱりと。わつちがかみがたでやらかしやしやう。コレ〳〵おなごしゆ〳〵。ちよと。きておくれんかいの。わしやなんじややら。とつともふはや。ゑらふ咽がかわくさかい。ちやひとつ。もて來ておくれんか　女「ハイ〳〵　彌次「ナント京談。ゑらいかく〳〵。へ、ちくしやうめが　京「イヤ※きよといもん

○間口が三拾三間　三十三間堂を洒落に用ゐたるもの。
○六條珠數屋町　新口村の梅川文句に、私がとゝ様かゝ様は京の六條珠數屋町云々とあり。

じや。でけた／＼　ト此内女酒さかなをもち出す、めるふおやはじめてだん／＼にまよすと京の人引うけて　「コレお仲居。おやまさんはどふじやいな。コノおかたはな。お江戸のゑらいお店のばんとうさんじやさかい。なんじやあろと。おやまさんをありたけ出さんせ。お氣にいると。百日も二百日も御逗留で。おかねの入事はねからはからとんとおかまひないおかたじや　ふおや「さよじやわいな。私が去年。おゑどへさんじた時。お店のまへを通りましたが。なるほどゑらい御大家じや。あなたの御支配なさるほうは。兩替店と見へましたが。これもおつきなお見世でおますわいの　彌次「ナニサ格別ゑらい見世ではないわいの。間口がやつと三拾三間あつて。佛の數が三万三千三百三十三人ぐらしじやさかい。ゑらい賑がなことといな　ふおや「京のお店は。たしか六條數珠やまちであつた　彌次「サイノわたしがとゝさんかゝさんは。さぞやあんじてゐるさんすじやあろにこないにおやまばかり買ふて。とつともふ。ゑらいやくたいじや／＼　女「これいし。みなお出んかいな　トよびたつるこへに四五人たち出「どなさんもよふござんした　彌次「ハ、アどれもゑらい出來じやな　京「ばんとうさん。盃をちとあつちやへさゝんせ　彌次「アイもし。ひとつあげふかい　トその中でいちばんうつくしいやつへさしてにこ／＼しこゐる　北八「おいらは太鼓の間が見たいが。どふだ　京「また。たいこの間といわんす。つゞみの間じやわいな　女「つゞみの間には。これもお江戸のお客さんが。子どもしゆよせて。おどらせてじや。アレきかんせ　ト此内おくのつゞみの間にておどりがはじまると見へてさみせんのおときこへる「チヽチン／＼　チヽヽヽ、トヽチン／＼　いせおんどうた「すゞ風や。ちりもはらふて木がくれの。池にうかべる月の顏。けわひはさとのいろ／＼に。ヨイ／＼ヨイ／＼　よいやさア　京「イヤアおくで踊をはじめおつたそふじや。こちもコリヤおもしろなつてきた。おつと。おつきなもんでやろわいな　彌次「そふさ。とんだおつにうかれて來た。もふ京談も何も面倒になつた。ヨイ／＼ヨイ／＼よいやさア　京「イヨ／＼　トテチン／＼　又おくにいうた　めだつうきな

○ちとひねくつた奴さま　少し面倒な、手數のかゝる奴さん、といふこと。

もおもしろき。やはらぐうたや三みせんに。足もしどろに立かへり。またもこよひのやくそくは。ヨイ/\ヨイ/\よいやさ。トテチン/\　京「コリヤふらひ/\。時にと。下拙の私めが相方のおやまさんは。コレおまい。名はなんといふぞいの。なんじやお弁。ありがたいの。誰あろう勢州古市。千づかやのお弁女郎といふ。美しいかわゆらしい。女の弁才天女様は。忝なくも尊くも。京都千本通。中立賣ひよいと上ル所。邊栗屋與太九郎さまの相方じや。ちとねきよらんせんかいの　ト手をとり引よせる此京の人は酒にゑふと何でもかいねいにくどくいふことのくせにてだん/\くだをまきかける、彌次郎ははじめに、わがさかづきをさしたるおやまゆへ、じぶんのあいかたとおもひゐたりしに、京のおとこ、わがあいかたのよふにいふゆへ、やつきとして　彌次「コレ京のお客。ソリヤわしがあいかたのおやまさんじや　京「イヤ何いはんすぞいの。コレ女中のお仲居。おまい名は何といふてじや　女「ハイきんといふわいな　京「ソレ/\勢州古市。ちづかやの仲ゐ。おきん女郎に。京都千本通。中立うりひよいと上ル所。邊栗や與太九郎が。先刻内々ひきあふておいた。アノ美しい可愛らしい。弁才天女のおべん女郎といふおやまさんは。則京都千本通中立賣　彌次「エ、やかましい。千本も百本もいるものかへ。何でもかうしよてつぺんに。おれがさかづきをさしておいた　トいふは、ゑどにては、女郎のざしきになをると、すぐにさかづきをさして、あいかたをさだむれ共、こつへんにては、さやうの事はなく、たゞないノ\にてちや屋の女ばう、あるひは女などにたのみおきて、あれはたれ、これはたれと、あいかたをきはめておくゆへ、京の人せんこく、なかゐへわたりて、此中にていつち上しろものを、じぶんの相方とさだめ、のこりを彌次郎、きた八と、おのれがさりやくして、きはめておきしゆへ、彌次郎はそのとをいつこうしらず、ゑどのかくにて、さかづきをさしたるおやまを、わが相方とおもひゐたりしゆへ、さてこそ、このいさくさおこりたり、なかゐ彌次郎をなだめて「これいし。アノおやまさんはな。此人さんの相方。おまいさんは。こちの嶋田髷さんじやわいな　彌次「ばかアいふな。此中でアノおやまが目についたから。それでおれが。盃をさしたにちがいはない。そこでわしがおやまかいな　京「ハテわるいがてんじやわいの。こなさんは。アノ江戸はどこじやいな　彌次「ゑどは神田の八丁堀。とちめんやの彌次郎兵衛さまといつちやア。ちとひねくつた奴さまだア　京「そのおゑどの神田八丁ぼり。とちめんやの彌次

郎兵衛どのといふ。ひねくつたやつこさまが。京都千本通。中立うりひよいと上ル所。邊栗や與太九郎があいかたのおやま。勢州古市ちづかやの　彌次「ヱ、何をぬかしやアがる。へんぐりやの與太九郎もあきれらア　京「イヤこゝなおゑど神田八丁ほり。とちめんやの彌次郎兵衛どの。京都千本通中立賣上ル所。邊栗や與太九郎を。京都千本通中立うり上ル所。邊栗や與太九郎殿といへばまだしも。それを。京都千本通。中立うり上ル所。邊栗や與太九郎と。よびすてにさんしたの。そこでもつてからに。京都千本通中立うり　彌次「ヱ、やかましい。よくしやべるやらうだ　北八「おらアそんなことより。太鼓の間が見てへたいこの間はどこだ〳〵　女「たいこの間とはなんじやいしつゞみの間のとかいな　北八「ヲ、そのつゞみ〳〵　京「イヤつゞみじやあろが。なんじやあろが。此邊栗や與太九郎が。相方じやわいの　彌次「コレわるくしやれるな。なんでもつゞみの間はおれがのだ。わるい敵役じやアねへが。いやでもおふでも抱てねる　ふぢや「ハ、、、、あのひろい。つゞみの間をかいな　彌次「ヲ、ひろくてもせまくても。頓着はねへ。おれがものだ　京「イヤ〳〵〳〵〳〵〳〵そりやさゝんわい　彌次「ナニさゝんとがあるものか。誰が何といつても。京都千本通中立うり。とちめんや彌次郎兵衛さまが相方だは　京「イヤ此おゑど神田八丁堀あがる所。へんぐりや與太九郎の買ふたのじや　北八「ハ、、、おめへがたは何をいふやら。どつちがどふだか。さつぱりわからなくなつた　女「そして此おかたは。京のおかたじやといわんしたに。ものいひが。いつの間にやらおゑどじやわいな　彌次「べらぼうめ。このいそがしいに。京談がつかつてるられるものか　女「あんまりおまいさんがたがいさかふてじやさかい。ソレ見さんせ。おやまさんかたは。みなにげていかんしたわいな　彌次「いめへましい。もふけへるべい　女「マアよふおますがな　ふぢや「モシこうしよ

かいな。これから。柏屋の松の間をおめにかけふわいな。たゞし麻吉へお供しよかいな　彌次「いやだ〱。おらアぜひけへる〱　ふぢや「ハテよござります　彌次「イヤとめやアがるな。いめへましい　トすつと立てかへろふとする、仲ゐども立かゝりて、いろ〱あいさつし、とめてもとまらずふりはなし出かけるところへ、あいかたのおやま初江立出「これいし。なんじやいし　彌次「とめるな。よせへ〱

初江「おまいさんばかり。そないになア。かへる〱といわんすかな。わしがお氣にいらんのかいし

彌次「イヤそふでもねへが。こゝをはなせ〱　初江「わしやいやいし。ト欠かけ出しそふにするを引とらへむりむたいにはをりをぬがせる　彌次「イヤ羽折をどふする。よこせ〱　トいひながら、又かゝいれたは二人をこられる　彌次「コレサおらアけへる〱　初江「じやうのこわい人さんじや　トいひながらおびをぐつとひきほどききものをぬがせよふとする、彌次郎は、あかじみたるふつちうふんごしをしめてゐたりしゆへ、はだかにされてはたまらぬと、大きにへきゑきし、きものを両手におさへて　彌次「コレ〱。もふかんにしてくれ　初江「そじやさかいこゝにゐるさんすか　彌次「ゐるとも〱　仲ゐ「はつ江さんもふ堪忍してやらんせ　ふぢや「サア〱よござります。これへ〱　ト彌次郎が手をとりゐとの所に引すへる　北八「ハヽヽ、おもしろへ〱。彌次さん斯もあろふか

むくつけき客もこよひはもてるなり名はふる市のおやまなれども

此一首に。みな〱わらひを催し。藤屋の亭主。仲居どもが。そこら取かたづけて。それ〱に座敷を儲け。酔倒れたる上方ものを引立て案内するに。北八も倶に出行ば。あとに彌次郎兵衛ひとり殘りたるに　女「サア〱おまいさんもあちらへ　彌次「ドレ行やせう。どこだ〱　トいひながら立て行、此彌次郎かのいたつて見へものにてにしめたるごときふんごししめたるが、その外きにかゝり、ひよつと見付られたら、はぢのかきあげならんと、ふところのうちにて、そつとはづし、れんじのまどより、にはのかたへほうり出し、あとさきを見まはし、人の見ざるにあんどして、仲ゐのあとに引そひゆく　かくて夜も更わたるに。おくの間の。川さきおんどもおのづからしづまり。旅客のいびきの聲喧く。鐘の音もはや七ツひゞきて。鶏の聲万戸にうたひ。夜もしらみかゝる。あかり窓の障子におどろき。起あがりて日を

○のいてかんせ　おどきといふこと。「かんせ」は「行かんせ」の略か。

○まはし　二布のこと。關東にては腰まきといふ。

○宿入の奴さま　先供の奴が宿驛に入るに當つて毛槍を振るをいふ。

○さあらば ふんどしをまいらそふ　三番叟の「さあらば鈴をまゐらさふ」をもぢりたるもの。

こすりながら　京の人「サアくどふじやいなおきさんせ。もふいのわいな　北八「彌次さん。日が出たアけへらねへか　ト兩人彌次郎がねている所へ、來りおこし、彌次郎おきて「ヤレくぐつとひとゝねいりにやらかした　おやま「これいしけふもゐさんせ　彌次「とほうもねへ。けへるく　トみなくしたくして出かける、おやまどもおくりてちう下に出、一人のおやまれんじのまどゟ、にはのかたをのぞき「これいしく。アレ見さんせ。庭の松に。いもじがかゝつてあるわいなア　彌次郎のあいかた女郎はつ江「のいてかんせ。ほんにいやいな。誰じやいな　彌次「ハヽアこいつはおかしい。羽衣の松じやアねへ。ふんどしかけの松もめづらしい　北八「彌次さんおめへのじやアねへか　はつえ「ホンニそれいし。あのさんのまはしじやないかいな　ト彌次郎がかほを見てわらふ、彌次郎は背に、れんじにすてたるふんどし、にはのまつのえだに、ひつかゝりて、ぶらさがりゐるを、おかしくおもひながらさすが、それともいわれず、へいきにて「ナニとほうもねへ。あんなきたねへふんどしを。ナニおいらがするものか　はつえ「そじやてゝナ。ゆふべわしや。このおきやくさんのきりものをぬがすとてなアよふ見たが。あないな色の。まはしじやあつたわいな　京「ヲヽそふじやあろぞい　彌次「ばかアいわつせへ。おらア木綿ふんどしはきらひだ。いつでも羽二重をしめてゐる　はつえ「ヲホヽヽヽうそやの。あれじやいし　北八「いかさま。おいらも見おぼへがある。たしかにあれだろう。それが嘘なら彌次さん。おめへ今はだかになつて見せなせへ。今朝ア宿入のやつこさまで。ふつてゐるにちげへはねへ　はつえ「そふじやいし。ヲホヽヽヽこれいし。久すけどん。そのまはしはおきやくさんのじや。取てくだんせ　トにはに、そうぢしてゐる男をよびかけ、さしづすると、此男竹ぼうきのさきにて、かのふんどしをつつかけてとり、れんじのまへへぐつとさしいだし「さあらば。ふんどしをまいらそふ。ソレとらんせ。どふじやいな　はつえ「ヲヽくさ　北八「ハヽヽヽ彌次さん。手を出しなせへ　彌次「エヽなさけないことをいふ。おれがのじやアねへといふに　北八「そんならおめへのを。まくつて見せなせへ　ト彌次郎がおびをときにかゝれば、ふりはなして、そのまゝにげ出して行　みなく「ヲホヽヽヽワハヽヽヽ　ト大笑しておくり出る三人とも此所を立出ると　彌次「エヽい

めへましい。北八めがおれに赤恥を。かゝしやアがつた　北八「松に。ふんどしのぶらさがつたもめづらしい

ふんどしをわすれてかへる淺間嶽万金たまをふる市の町

かくて。妙見町に立かへりたるに。其日は空のけしき。いと長閑なれば。いそぎ内外のみやめぐりせばやと。支度あらましにして立出るに。行ほどなく今戻りし古市のあがりくちにてはや見せいだして。めいめい小屋に。引たつる。いにしへのお杉おたまが。おもかげをうつせし女の。二上りてうし「ベンベラベンベラチャンテンチャンテン　トむせうに引たつるうたのしやうがは何ともわからず、往來の旅人、此女のかほにぜにをなげつくるを、それぞれに顔をふりよける　彌次「あつちらのしんぞうがゐるぞへ。ぶつつけてやらう　ト錢一二文なげるとちやつとよけてあたらず　「ベンベラベンベラ　北八「ドレおれが。あてゝ見せやう。ハアこれはしたり　京「なんとして。おまいがたが。どないにほりつけさんしても。てきらがさすもんじやないわいの　彌次「こんどは見なせへ。ハアこれはいな　北八「チヤチヤさしぐるみやらかしたな。それでもあたらぬ。コリヤしよふがある。あんまりつらがにくい　トちいさな石ころをなげかけ、なげかくると、かの女、はちにて、ちよいとうけ、なげかへせば、彌次郎がかほへぴつしやり　彌次「アヽいてへいてへ　彌次「アイタヽヽヽ　北八「ハヽヽヽヽこいつは大わらひだ

とんだめにあいの山とやうちつけし石かへしたる事ぞおかしき

かくて愛を打すぎ。中の地藏町にいたる。左りのかたに本誓寺といふ勝景の地あり。また寒風といへる名所もあり。五知の如來。中河原。さまざましるすに遑なし。夫より牛谷坂道にかゝれば。女乞食共。けはひかざりたるが。往來に錢を乞ふ。又十一二三の女子ども。紙にてはりたる笠のいろどれるをかぶりて「やてかんせおふどさんじやないかいな。さきな嶋さん。はな色さん。頬かぶりさん。やてかんせ。

○「ふんどしを」の狂歌　忘れて歸る事を「朝熊山」にかけ、萬金丹は朝熊の名物なれば、更に萬金丹を出し、「萬金丹」と「金たま」、玉をふるを「古市」にかけたるもの。

○お杉お玉　「中にもお杉お玉とて二人の美女あつて身の色を作り三味線をひきならし、あさましや女の末と伊勢節をうたひける、毎日の參詣仇ながらに足をとめて愛に立ち止まり前なる眞紅の網の目より顔の内を狙ひすまして錢投げ付けたるに一度もあてたる人なし」（西鶴織留）

○「とんだめ」の狂歌　飛んだ目にあふを「間の山」にかけ、「石返し」を「意趣返し」にかけしもの。

○嶋さんはな色さん　道者を呼びかける言葉。その行裝により斯く云ふなり。「嶋さん」は嶋の著物を著たる人。

○てんちうじや。はりひちじや　殿中ぢや。張肘ぢや。

○網の目にかねとまる　「網の目に風とまる」といふ諺をもぢりしもの。

ほうらんせ　彌次「やかましい。つくな〳〵　こつじき「アノいわんすといな。おゑどさんじや。ちやとくだんせ　北八「エヽ、ひつぱるな。ソレまくぞ〳〵　トよいかげんに、ばら〳〵とぜにをほうり出せば、こつじきどもめい〳〵ひろひこ「よふくだんしたや　トひとり〳〵禮をいふ、このさきに又、七八才ばかりのおとこの子、白きはちまきをして、そでなしばおりにたちつけなごをはきたるが、手にさいはい、あふぎたごをもちおごる、うしろに、あみがさきたる男、さゝらをすり〳〵「ヤレふれ〳〵。いすゞ川。ふれや〳〵ちはやふる。神のおにはのあさ清め。するやさゝらの。ゑいさら〳〵。ゑいさらさ。ソレてんちうじや。はりひちじや。やてかんせ〳〵　北八「ソリヤやてかんすぞ。しかも四もん錢だ　乞食「四文ぜになら。つりを三文くだんせ　彌次「こいつむしのいゝことをいふ。時にこの橋は。うぢばしといふのか　京「さよじや。アレ見さんせ。網でぜにをよふうけてじや　北八「ドレ〳〵　トはしの上よりのぞきみれば、竹のさきにあみをつけてりよ人のなげせんをうけとめる　京「ゑろふおもしろいな。彌次さん。小せんがあらば。ちくとかさんせ　ト彌次郎がぜにをかりて、さつ〳〵とほうりなげる、下にはみなうけとめる　京「よふうけくさる。もちつとほつてこまそかい。コレきた八さん。おまへもちとかさんせ。ソレ又ほるぞ〳〵。ハヽヽヽ、ゑらい〳〵　彌次「コレ京のお人。おめへ人のぜにばかりとつてなげる。ちとおめへの錢をもなげなせへ　京「よいわいな。おまいがたの錢じやてゝ。わしがぜにじやてゝ。かはりやせんわいの　彌次「それだとつて。あんまりあたじけねへ　京「ナニわしが此まい。參宮したときわな。きかんせ。ゑらいあほじやあつたわいな。こゝで錢五貫か。拾〆ほつたわいの。あんまりつらのにくいほど。よふうけおるさかい。何じやろと。こんどは網やぶつてこまそと。ふところに丁銀が一まいあつたを。ツイとほつてこましたら。やつぱり網でうけくさつたさかい。コリヤどふじやいな。丁銀ほつたら網がやぶりよかとおもふたに。ねからたわいじや。どしてあみに。とまりくさつたしらんといふたりや。下におるやつめが。ソリヤとまるはづじやとぬかしくさる。なぜじやといふと。ハテ網の

日に。かねとまるじやと。ゐらふわしを。へこましくさつたわいの。ハ、、、、サア〳〵いこわいな〳〵

なげ錢をあみにうけつゝおうらいの人をちやにする宇治ばしのもと

是より内宮。一のとりゐより。四ッ足の御門。さるがしらの御門をうちすぎ。御本社にぬかづきたてまつる。是天照皇太神にて。神代よりの神鏡神劍をとつて。鎭座したもふところなりと

日にましてひかりてりそふ宮ばしらふきいれたもふ伊勢の神かぜ

こゝにあさ日のみや。豐の宮よりはじめて。河供屋ふるどのみや。高の宮。土のみや。其外末社。とく〳〵しるすにいとまなし。風のみやへかゝる道に。みもすそ川といふ有

引すりていく代かあとをたれたちふ御衣裳川のながれひさしき

すべて宮めぐりのうちは。自然と感涙肝にめいじて。ありがたさに。まじめとなりて。しやれもなく。むだもいはねば。しばらくのうちに順拜おはりて。もとの道に立いで。頓て妙見町にかへり。こゝにてかの上がたちのと別れ。彌次郎北八兩人のみ。藤屋を昔だちとして外宮へまいる。是すなはち豐受太神宮なり。天神七代のはじめ國常立の尊と申せし御神なり。神璽の宮。寶劒のみや。其外あまたの末社をおがみめぐりて。天の岩戸にのぼりたるに。彌次郎兵衛いかゞしけん。しきりに腹痛てなやみけるゆへ。そう〳〵に此所をおりたち。傍に休みて丸藥など用ひ。とかくするに絶がたければ。いそぎ廣小路にいたり。宿をからんとそこ爰を見廻すうち。あるやどやの亭主「モシ〳〵おとまりじやおませんかいな

北八「アイつれのものが。少し虫がかぶるそふだから。宿をおたのみ申やす　ていしゆ「サアおはいりなさん

○「なげ錢を」の狂歌　宇治橋にては、こゝに乞食の上より宇治橋に錢を網にかせしもの「ちや」は茶化すの意味と兩樣あり。

○四足御門　内外玉垣御門を云ふか。

○さるがしらの御門　玉垣御門と瑞垣御門の間に萱葺屋根の小さき御門あり、屋根の上の押壓に打ちたる木の頭が猿の頭に似たるより斯く云ふよし。

○かたのひけたる　肩のぬけた、絲の透けたるを云ふ。

せ。ソレおなべ。おくへおともせんかいやい　女「よふおつきでおます　北八「サア彌次さん。あがんなせへ　彌次「アイタ、、、、　北八「ヱ、きたねへかほをする。おめへコリヤアなんぞの罸があたつたのだ　彌次「ナニサ罸をくつたおぼへはねへ。大かたけさの飯があたつたのだろう　ていしゆ「おまんまもあがりつけなさらんと。あたるとがおましよわいな　北八「ヱ、コリヤいくぢのねへこつた。サア〱おく〱　彌次「アイタ、、、、　ト北八にかいほうせられざしきにさふる、ていしゆもにもつをはこび「さぞ御なんぎでおましよ。おくすりでもあがりましたか。さいわいわたくし所の妻が。今ン月臨月でおますがな。きのふからちとすぐれませんので。いんま醫者さまをよびにさんじたが。あなたも見ておもらひなさんせんかいな　彌次「それはどふぞ。おたのみ申やす　ていしゆ「かしこまりました　トかつ手へたつてゆく彌次郎はしきりにくるしがるやうすに　北八「どふだゆでも茶でも。酒でものみたくはねへか　彌次「ばかアいふな。アイタ、、、。むしやうに腹がごろ〱なる。北八雪陣はどこに有。　北八「おめへどこにおいた。袂にでもねへか。　彌次「あほうつくせ。ナニせつちんがたもとにあるもんだ。どこにあるか。見てくりやといふとよ　北八「ハアそふか。ドレ見てやろう。あつた〱。アレ椽側のさきにおちてある　彌次「まだぬかしやアがるアイタ、、、　トやう〱いどに立あがり、用たしにゆく、此うちやどの女、かつてより出「ハイお醫者様がおいでたわいな　北八「サア〱これへ〱　ト此内近所のいしやの弟子と見へて、こゆちやのもめんもん付に、くろちりめんの○かたのひけたるはをりを、ひつかけたるはうさま「エヘン〱。これは不順な天氣あいでござる。ドレおみやくを　ト北八のそばへすはり北八がみやくを見よふさする　北八「イヤ私ではござりませぬ　いしや「ハテ達者な人の脉から見くらべねば。病人のみやくがわからんわいの。先きさまお見せなされ　ト北八がみやくをとりしばらくかんがへ「ハ、アなるほど。きさまはなんともないよふじや　北八「さやうでござります　いしや「お食はどふじや　北八「ハイけさほど。めしを三ぜん。汁を三ばい。たべ

ました　いしや「そふであろ〳〵。平は大かた。一ツはいじやあろ。かへてはまいるまい　北八「さやうでござります　いしや「そふじやあろ〳〵。此脉体では。どこもなんともないよふじや　北八「さやうでござります　いしや「ナントよふ。あたりましたろう。およそ醫は意なりと申て。脉体をもつて。勘考いたす所が第一でござる。きづかいない。もはやおいとまいたそふ　北八「モシ〳〵。病人を御ろうじて下さりませ　いしや「ほんにそふじやあつた。わしはかわつた癖で。とかく病家へまいつても。病人のみやくを見ることを。どふもわすれてならんわいの。しかし見ずともしれたことじやが。ついでに見てしんじよ。病人はどれにござる　北八「ハイ只今雪隠へまいつております。コレ〳〵彌次さん。おいしやさまがござつた。はやく出なせへ〳〵　ト大きなこへをすれば彌次郎せつちんの中から「イヤまだ出られぬ。おいしやさま。どふぞこれへお出くださりませ　北八「エ、めつそふな。おいしやさまがそこへいかれるものか。無躾なことをいふ　彌次「そんなら今出る〳〵　トやう〳〵せつちんより出ればいしやしかつべらしく彌次郎のみやくをみて「ハ、アきこうは。コリヤ血のみちじやわいの。とかく臨月などにはおこるものじや　彌次「イヤわたくし孕だおぼへはござりませぬ　いしや「ナニ懐胎でない。ハテめんよふな。イヤコリヤわしが師匠がわるい。廣小路の伊賀越屋からよびにおこしたが。あこの病人は。産月じやさかい。大かたちのみちがおこつたのじやあろ。そのつもりで。くすりもるがよいと。おしへておこしたが。そりやきこうのことではなかつたわいの　北八「さやうでござりましよ。血のみちはこゝの内儀のことでござりませう。この男は。それではござりませぬ　いしや「さよじや。コリヤわしがまちがいじやわいの。しかし。なんならきさまも。それにしておかんすと。薬もるにもいつしよにして。めんどふになふてよいがな　北八「なるほど。コリヤおいしやさまのおつしやるとをい。彌次さん。おめ

○無宿　無筆を江戸訛にて「むしつ」といふ。無宿は更にそれを聞違へしもの。

○桂枝　中村富十郎のことを慶子と云ふ。桂枝は同音なれば云へり。道成寺はその當り狂言。

○陳皮　狆が火に當り居る故チンピ。

○枳殼　鬼が屁をひるより、鬼こくといふ洒落なり。「ひる」を方言に「こく」といふ。

○せんじやうつねのごとし　漢方醫が藥の煎じ方につき、袋に記す文句。

へも血の道にしておくがいゝね　彌次「とんだ事をいふ。男にも血の道があつてたまるものか　いしや「イヤ〳〵外の病氣もおもしろかろ。何もわしがけいこのためじや。いつたいきさまは。何病ひじや　彌次「わたくしは先刻から。むしがかぶつてなりませぬ　いしや「大かたソリヤ腹のうちでかぶるじやあろ　彌次「ハイおつしやるとをり。腹のことではござりませぬ　いしや「そふじやあろ。コレ〳〵女中。供のものにくすりばこおこせといふてくだんせ　女「ハイ〳〵かしこまりました。イヤもし。おともの人は見へませんわいな　いしや「見へんはづじや。つれてこんさかい。くすりばこは。わしがもてきたわいの　ト さげてきたふろしきづゝみをひらきくすりばこを取出す　女「ヲヽ、おかし。あなたは竹の匕で。煮豆もるよふにしてじやわいな　北八「ハアきこへた。藪醫者さまだから。そこで竹のさじを。おつかいなさると見へた。そしてあなたのおくすりぶくろには。繪がかいてござりますが。どふいたした事でござりますね　いしや「イヤおたづねでめんぼくないが。生得手習をいたしたことがないさかい　北八「ハヽアあなた無宿じやな　いしや「さやう〳〵。かいもく字がよめぬ。むしくじやさかい。それでかやうに藥の名を繪にかいておきますじやて　北八「これはおもしろいさやうなら。その道成寺の繪は。なんでござります　いしや「コレハ桂枝じやて　北八「ゑんまさまは。大かた大黄でござりませうが。コノ犬が火にあたつておるのは　いしや「陳皮〳〵　北八「コノ産婦のそばに小便してるるは　いしや「しれた事。山梔子　北八「印判に毛のはへたは　いしや「半夏　北八「おにが屁をひつておるのは　いしや「それは枳殼　北八「ハヽヽヽおもしろい〳〵。時にお藥は　いしや「せんじやうつねのごとし。せうがはひとへぎおいれなさい　北八「わさびではわるふござりますか　彌次「ばかアいふな。これはありがたうござります　ト此内なにやら、かつてのかた、にはかにさはがしく、人のあしおとさん〳〵ひゞき、いしやのこへとして「コリヤ〳〵おなべやい〳〵。とりあげば

○はやめ　お産の前に飲ます藥。

ゞどのへ人をやれソレ久助はゆをわかせ。はやめはあるか。はやう〳〵　トさはぎたつうち、こなたには又彌次郎が、しきりにはらいたみ出し　彌次「アイタヽヽヽ　北八「彌次さん。どふした〳〵　いしや「コリヤたまらん〳〵。病人のそばにはおられぬ　トそう〳〵にけ出してかへると、かつてのかたには、ヤレとりあけばあさまのお出と、下女いおなべかうろたへて、はゞあの手をとり、これへ〳〵と彌次郎が、ふとんかぶりにねてゐるところへつれてくると、とりあけばゞ「これはしたり。ねてるさんしてはならんわいのサア〳〵おきさんせ〳〵　ト彌次郎をひきづりおこせどかほをしかめて　彌次「アイタヽヽヽ　はゞ「しんぼうさんせ。コレそこな人。孤（こも）はどふじやいな　彌次「アイタ〳〵　はゞ「そこじや〳〵　トこのはゞうろたへたうへ、いつたい目がすこしうとく、うおのさん〴〵ぶとまあゐへ、彌次郎がこしを北八つたて〳〵「サア〳〵みな來さんせんかいな。コレ〳〵こゝへ來て。だれぞこしをだいてくだんせ。さあ〳〵はやう〳〵　トせきたつにぞ、きた八はあきれかへりて、おかしく、こりやどふしおるしらんとこほけがほで、彌次郎がこしをだいてひつたつれば　彌次「コリヤ北八どふする。ア、いてへ〳〵　はゞ「そないな氣のよはいとではならんわいな。ぐつといけまんせ〳〵　彌次「こゝでいけんでたまるものか。雪隱（せつちん）へ行てへ。はなした〳〵　はゞ「こうかへいてはならんわいの　彌次「それでも。こゝでいけむと。こゝへ出る　はゞ「出るから。いけまんせといふのじやわいの。ソレウ、ンウ、ヽヽン〳〵。そりやこそ。もふあたまが出かけた〳〵　彌次「アイタヽヽヽ、そりや。子ではねへ。それをそんなに。ひつぱらしやんな。ア、コレいてへ〳〵　トもがくをかまはずはゞはぐつとひつぱれば彌次郎はらをたて　「エヽ、此ばゞあめ　トよこつつらをはりとばすはゞあきれて　はゞ「この血ちがひは　トむしやぶりつく、かゝるさはぎのさいちうかつてのかたには、はや女ぼうのあんざんと見へて、あか子のなくこへする　「おぎやア〳〵〳〵　はゞ「そりやこそ生れた。イヤこゝじやない。どこじやいな〳〵　トうろたへまはるうち、彌次郎も、しきりにいたみせつちんへはしりこむ、こいしゆはかつてよりさんで來り　「コレ〳〵ばあさま。さつきにからたづねておるに。もふ生れたわいの。はやう〳〵　トはゞをひつたてつれ行ば、かつてのかたには、ざゞんざのこへ「めでたい〳〵。三國一の玉のよふな。おとこの子が生れた　トよろこびのこへ、ともにていしゆにこ〳〵して立出　「コレハおきやくさま。おやかましうございませう。先わたくし妻（さい）も安産（あんざん）いたしました　トいふうち彌次郎もせつちんより出　「さて〳〵お

めでたい。わしも今。せつちんで。おもいれあんざんしたらば。わすれたよふに。心よくなりました

ていしゆ「それは。あなたもおめでたい　北八「おたけへに。めでたい〳〵　トこれよりよろこびの酒くみかはしこゝりあゆはゞのまちがひやらなにやらはなしあひて大わらひさなりけるめでたし〳〵

道中膝栗毛五編追加終

東海道中膝栗毛六編

膝栗毛六編序

長いは／＼此作者のながきこと。体は心と倶に長く。鼻の下は褌のさがりと倶く長し。酒のあとをひくとは。行脚を飛脚にやりたるよりも長く。借金をひきずる事は。淋病やみたる牛の小便よりも長し。去に仍て膝栗毛の尾に尾をひいて。長道中の今に帰らず。漸く五編目に至て。伊勢路に筆をおくと雖。例の長尻しびりをきらして。京へ登るの趣向を考へ。下手の長談義を六編とし。御見物が長者世帯の掃除し給ふ紙屑を売出すも。固より爪の長き熊手性。長呂はおそれも承知之助。ひとつ長屋の佐次兵衛とは。隣国土の彌次郎兵衛。せめて四国は廻らずとも。京大坂はあたりまへ。是だけの所御辛抱。御一覧のほど。ハイおたのみ申ますと志可伊布

維時文化丁卯春正月

十返舎一九識

附言幷凡例

○或人予に謂て曰。此膝栗毛。追々足下の骨折見ゆれ共。五編目伊勢參宮迄にて。大かたは事足れり。夫花は半開に詠。酒は微醉にのむがよいと譬の通。ものは十分ならざるを却て壯觀と心得べし。不佞は足下が贔屓じやから言ますが。今年も六編を書たといふとじやが。よしにすればよいになア。足下が胸の奥行も。もふ大概はしれてある此らへ掃出さば。鼠糞やら鼻かんだ紙やら。色々の穢いもの引出して。はては人の鼻に袖蓋はするの罪にあはん。予答曰。趣向は塵芥のごとく。今日掃て今日積る。胸中掃溜にひとしければ。狗の糞のしやれたるも。南瓜の花のむだなるも。作者が知惠のこやしにして。葛西船につむとも盡ず。そは御見物の贔屓組から。こゝの庫も掃たがよい。あそこも埃だらけじやと。こちの氣のつかぬ所を敎て下さる岡目八もく。すかさず是へと反古張團扇にうけとめた。塵埃の中から趣向をさまぐ〳〵。既に五編目凡例にいへるがごとく。彌次北八が髮月代をせし所なし。東都をたちしより日數を經て。其事なきはいかにぞやと。或人の批判したまひしとありしを。ヲットまかせとすぐさま追加妙見町泊の趣向とせし事御存知の通。なんでも人の懷をあてにする。そこが金じやと。版許の欲心房がひとつ穴の狐。化あらはした所が。三文が知惠もない。作者のはらはたかくのごとし

○偖又此書伊世路より。大和廻り御約束のところ。一ッ足飛に伏見から京大坂とやらかしたるは。和州名所巡覽の滑稽。其おもむき珍らしからず。こぢつけあまり〳〵だゝしければ。此所縫上をせしうへぐつとはしよる

○大和路より大坂へ出る順道なれども。予おもふところあれば。先花洛見物を前とし。大坂を後にす

○京名所こと〴〵くしるすに際限なければ。只祇園清水知恩院。大佛さま御らうじたかへ金閣寺拜見あらば。よい傳があるぞへと。いつたぐらひの事をしるす。故に此次七編は。京都見物おはり。千本通より淀に出。八幡山崎に參詣し。佐田守口の邊にておはる

道中膝栗毛六編　上編

東都　十返舍一九著

諺に云旅の恥は。書捨てゆく落書の國所は欄干にとゞまり。おのづから往來同國の人の目を慰め。被り行聾の笠印は。わざとおのれひとりの心をくしよろこばしむるも。みな倶に驛路のわざくれ。相宿の木まくらに結ぶ緣は出雲の帳外。二方くはうじんのとなり同士は長家附合の外にして。其心〳〵に出る儘をしやべり。あくまでに喰ひ。掛取道連にせざれば晦日の愁におはず。米櫃脊負て出ざれば。鼠追ふせはもなく。名にしおふ東男も。さつま芋に髭を撫。花まだき京女郎も。團子のくしにつぶりをかき。しらぬ火のつくすたはけに欠落して走るあれば。栗井路のみちゝさくふし遊山旅のおもつくあり。並松の根にこし打かけて。金毘羅參りの樽をひらき。街道の眞中にひよぐり出して。諸社順拜の鈴口をふる。爵中のありさまっ。まことに命の洗濯もの引ッぱり。股引草鞋に何國までも。足にまかする雲水のたのしみえらいはれず。こゝに東の都神田の八丁堀邊にすむ。彌次郎兵衞北八といへる二人連のなまけもの。神風や伊勢參宮より足曳のやまと路をまはり。靑丹よし奈良街道を經て。山城の宇治にかゝり。こゝより都におもむかんと急ぎけるほどに。やがて伏見の京ばしにいたりけるに。日も西にかたぶき。往來の人足はやく。下り船の人を集る舟頭の聲〳〵やかましく「サア〳〵今出るふねじや。のらんせんか。大坂の八軒家舟

○旅の恥は書捨て云々　「旅の恥は掻捨」とあるより、橋の欄干などに落書する「書捨て」と云ひかけしもの。
○聾の笠印　笠に聾と書くこと。他人に話かけられるを避くる爲、聾ならぬ者にもかく記すものありといふ。
○出雲の帳外　相宿などにて生ずる男女關係は、出雲の緣結びの外なりとの意。
○不知火のつくすたはけ　不知火の筑紫を「つくす」盡すに轉じたるもの。
○金毘羅參りの樽　金毘羅へ參る者、奉酒とし一徑四寸許りの酒樽を持行き、之を奉納す。小さき樽を海へ流すもあり。船頭など途中に之を飲みても、彼地に到りて新に詰め奉納すといふ。
○鈴口　社頭の口。諸社の鈴にかく。
○命の洗濯もの云々　樂しむことを「命の洗濯」といふ。道中洗濯したるものを引ばりて著ると云ふにかけ用ゐたり。

○淀川の夜ふね　三十石船。晝荷を積み來りしものが、夜は人を運ぶ。夜間を利用し、兼ねて宿賃の助けとなる。

○錢かい　兩替のこと。錢に替ふるなり。

○みづから　昆布を結び山椒を入れたる菓子。

○あんばいよし　豆腐料理。「皇都午睡」に江戸と大坂の言葉を比較して「あんばいよし」を田樂」と云へり。

じや。のてかんせんかい　彌次「ハヽアこれがかの淀川の夜ふねだな。ナントきた八。京からさきへ見物するつもりで來たが。いつそのこと。此舟にのつて。大坂からさきへやらかそふか　北八「それもよかろう。モシ乘合もありやすか　せんどう「そふはかいの。コレ乘ならはやうのらんせ。いつきに出すさかい。ゑらいへげたれじやなくわらじといてのらんせ。ゑらいへげたれじやな　北八「エヽ何をぬかしやアがる。きのつゑゝべらぼうだ　彌次「コレ北八。手めへのつゝみもいつしよに。おれが風呂敷につゝんでおこふ　北八「せんどうさん。コリヤアどけへすはるのだ　せんどう「そこな坊さまのねきへ割込んせ　彌次「御めんなせい。ヤアゐいとな　トふたりながらともの間へわりこみすはる　のり合「コリヤゑらうつめくさつた。舟頭さん。ふとんひとつかさんせ　せんどう「ソレとらんせ。サア〳〵みなゑいかいな。ドにゐてくだんせ。苫ふくさかい　あきんど「錢かいなされ。錢はよござりますかな　同「みづからさとうもちく同「かんざけよござりますかいな。あんばいよし〳〵　ト此うちせんどうども、舟にとまをふいてしまひ、さほさし出して　うたふ「ふねは追風に帆かけ

てはしる。われはこがれて身をあせる。ソウレソレ〳〵〳〵なんざい。コリヤゐらう空がわるなつた。
ふろかしらんわい　りの合「せんどうさんゆふべはちうしやう嶋じやあろ。精進がわるいさかい。コリヤ雨
じやあろぞいのハ、、、、ときにどなたも。じようかいてるなさらんか。今のうちあんじようせんと。
後に工合がわるなるさかい。京の人「コレおまい。ちと退てかさんせ。粽のうへに。いしかつてじやわい
な　大坂の人「コリヤ無調法。とかく乗合はおたがひに何じやろと不肖してくれなされ　京「よいわいな。お
まい大坂はどこじやいな　大坂「わしや道頓堀　京「かいな。どとんぼりのしゆは。みな藝子じや。ナン
トこゝで。何なとひとつ。やりなさらんかいな、長さきの人「コリヤよかたい。船中のねぶり目ざましに。
あんたしゆ。ひとつヅヽ藝能やらしやつたらよかたい。うんどもは長さきのもんじやが。能毛川嶋のほ
うぶらまくらで。かみさしほつきりでもやろふばいよナ。越後の人「コリヤゑいことんし。わしどもはい
ちごのもんだが。長崎のあんにやさがやらしやつたら。わしも國風のおけさ松坂でもかたるべいとこ
と。北八「こいつはおもしろへ。マア長崎のお客からはじめなせへ。ながさきの人「よか〳〵。これしこやろふば
い　トむしやうに手をうちたゝき　うた「おまへよかはたわしよふりすてゝ。よんにようしやんすとちぎらんす。コリヤど
ん〳〵が飛なら桶かぶせ。それでもとぶならきねおけ〳〵。コリヤ〳〵〳〵なんじやいな　のり合「イヨ
〳〵ゐらでけじや　ゑちごの人「わしどもやるべいみんなそれからトコトン〳〵とはやしてくれさつしやい
長さき「よか〳〵合点あろふ　のり合みな〳〵手を打たゝき「トコトン〳〵　ゑちごうた「※お長なよつぱらかんだまめでたかおち
よな　のり合みな〳〵「トコトン〳〵　ゑちごうた「にがた一ばんすいぎゆのくしを　のり合「トコトン〳〵　ゑちご「に
しにさつくれべいと六百文で求めた。のり合「トコトン〳〵　弥次「ハ、、、、おもしろへ〳〵　京「イヤゐ

○ちらしやう嶋　中書島。「五個津餘情明」に「京橋の中将嶋の色姿」とあり、古き遊所と見ゆ。
○おけさ松坂　唄の名。「蔭觀帖」に「わしらが國のおけさ松坂甚句などは、よくどこの國でも人がやれども、越後者のやうには出來ぬ」とあり。
○よかはた　好い風の意。長崎言葉。
○お長な　お長さん。

○こうせき　舞臺言葉。
○源之助　文化八年改名して四代目澤村宗十郎となる。源之助はそれ以前の名。
○三津五郎　三代目。寛政十一年三津五郎となる。
○高麗屋　松本幸四郎。鼻高幸四郎と稱せられしはこれ。

どのお客に何ぞ。所望しよじやないかい　彌次「ソリヤもふ。琴三絃皷弓。なんでもちつとヅヽはやりやすが。こゝにやアそんなものは。ねへからはじまらねへ　京「おまいのこうせきでは。こはいろが出るじやあろ。誰なと。ゑど役者やりなされ　彌二「聲色も二十や三十ばかりはつかひやすが。誰にしよふ。源之助か三津五郎か。イヤ高麗屋にしやせう。しかしゑど役者は。おめへがたにやアわからねへからつまらねへ

大坂「ハテゑいわいの。ひとつやりなされ　彌次「みそじやアねへが。聲色はゑどでも一ばんといふ男さ。誰でもうしろをうたふ人があると。すつぱりやつて見せるがなア　京「うしろうたふとは呼出しのとかいな。わし。やろわい口三絃じや。チ、ツ、ンチンシャン　うたこ「これはおゑどの堺町や。ふきや町に名もたかき。やくしやこはいろはどふじやいな。たれじやいな。松本の幸四郎でせい。チ、、、、チン　のりかけ「イヨ松もとヲ　彌次「まんまと。うばひとつた此一卷是さへありやア出世の手がゝり。大願成就かたじけない　京「コリヤやくたいじや。わしやゑどに五六年ゐて。此間戻つたわいな。高麗屋はそないな。こうせきじやないもせんもの　大坂「わしひとつやろわいの　京うたこ「是はねつからでけませぬ。さて又つぎの役者。名はたれじやいな　大坂「やつぱり今のじや　ト

ト大安ものはゐごにちゑて、こけいろもまんざらでなければ、わざともんりやう、そうきゝにいふ　まんまとうばひとつた此一くはん。これさへありやア出世の手がゝり。　大安「おさかのおか

大願成就かたじけない。　ト八無調法　のり合「イヨかうらいやア　鼻「コリヤきよとい〳〵。

たのがほんまじや。おまいのは高麗やとはきこへんわいな　彌次「きこへんはづだ。コリヤア信州松本のも

ので。幸四郎が弟子の胴四郎がこはいろだ　鼻「そんなこつちやあろざいなハヽヽヽ　ト舟中彌次郎のへこんだのをおかしがりざつさ

笑ふ、彌次はしよげてだんまり此内舟ははや淀を過て　彌次「ときにきた八。とんだことをわすれた。ふねにのるまへに。小便すればよかつたもの

を。例のとをり船ではどふも。あぶなくてしにくい。こまつたものだ。コレ舟頭さん。ちよつくり舟をつけてもらひてへの　せんどう「あがるのかいの　彌次「せうべん〳〵　せんどう「エヽふなべりへちよ〳〵こなつて。ひよぐらんせ〳〵　彌次「それができりやアいひぶんはねへ。アヽもふ〳〵。出そふになつて來た　トうろ〳〵する、此彌次郎北八、ともの間と、どうの間のさかいの所にゐたるが、どうの間三人前かりきりにして、十二三のまへがみつれたる、ゐんきよらしきちいさま、よひより、彌次郎北八と、はなしなどしてゐたりけるが、せんこくより、ふとんかぶりてねころびゐながら　いんきよ「モシ〳〵。おまい小用におこまりなら。ぶしつけながら。わしがしびんかしてあぎよかいな。コレ〳〵長松よ〳〵。イヤこいつもふねくさつたそふじや。モシそこらにあろざいの。だんないそつちやへもてかんせ　彌次「それはありがたふござりやす　トくらがりまぎれに、となりをさぐりまはせば、はこひばちのうしろに　図のごとくのごびんあり、上がたにては、これをきびしよといふ今ゑどにも、たまさか見へたり、彌次郎これをしびんとこゝろへ、さりいだして、「ハアこゝにござりやした。こいつはじんじやうなしびんだはへ　トもつ手の所を、くちとこゝろへ、まへにあてがへども、はなだければ、さてはくちに、こめてあるせんか、まへのはうへひつこんだものであらふと、ゆびをいれて、つゝきまはすうち、しきりにせうべんがもるよふになり、心はせく、ふたのおちたをさいわい、ハヽアこゝにもくちがあると、うへのほうから、シウ〳〵と、せうべんをしてしまひ　「ハイありがたふございやした　トとなりへそつとやつておく、いんきよやがておきなをり　「コリヤゐらうさむなつた。長松。おきて火イともさんかい。酒なとやろわい。コレ目イさまさんか〳〵。コリヤやくたいじや　トそこらさぐりまはして、ひばちの火をつけ木にうつし小でうちんをともして、ふたはりにぶらさげ、きびしよをとつて　いんきよ「ヤアコリヤ何じやい。ハヽア茶をたくつもりで。水がな入れておきおつたそふ

○さいろう　竹を編みたる蝶富箱。蓋ある提物籠なり。（菜籠）

じや　トいひつゝ、さまの間から、きびしよを出し、彌次郎がしこんだせうべんを、川の中へうちあけこしまひ、すぐに樽のさけをあけて、かの火ばちのうへにかけながら　いんきよ「モシゐどのお客。さけひとくちどふじやいな　北八「コレハおたしなみでございやすね。　いんきよ「もふでけたそふじや　ト※さいろうのにしめなど出し、いんきよ、さかづきに少しついで　いんきよ「ドレおかん見ましよかい。イヤこれは。けたいな香がするペッ〳〵コリヤ酒がわるなつたのか。よもやそじやあろまい。ひとつおまいのんで見てくだんせ　トきた八へさかづきをさす　北八「ハイこれはヲトゝゝゝ　ト引うけてぐつとのんでしまひしが、何さやら、しほはゆきよふにて、へんなにほひのするさけださ、こころにおもひながら、むねをわるくして、なでさすり〳〵「ハイいたゞきやした　いんきよ「おつれのおかたへあげてくだんせ　北八「そんなら彌次さん。ソレ　トさかづきをまはす、彌次郎はせんこくより、これを見てふしぎにおもひ、なんでもあれは、おれがせうべんをしたしびんだが、それでさけのかんをするといふは、ごふしたものだ、たゞしは、おれがそゝうで、しびんさおもつて、せうべんしたのか、何にしても、さんだことをしたさ、心のうちに、ふたりがかほをしかめるを見て、おかしさこらへられず、それとしらずにあのうちのさけを、北八がのみたるを、ふきいだすほどおかしく、じつとこらへいたりし所へ北八、さかづきをさしければ　彌次「イヤおらア御めんだ。なぜかこよひは。酒がのみたくねへ。お盃ばかり。ハイそれへあげませう　いんきよ「あがらんのかいな　北八「ナニあびるくらいさ。彌次さん。なぜのまねへ。さけといふと。一ばんに咽をぐい〳〵するおめへが。コリヤア何でも。へんちきだはへ　いんきよ「ハヽアきこへたとがあるわいの。今そつちやのお方がくらがりでしびんとまちがへて。このなかへ小用しこみやさんせんかいの。どふもせうようくさいとおもふたが。コリヤおまい。そじやさかい。のまんのじやあろぞい　北八「ソリヤしれやせん。桑名のわたしでも。此人が船の中で小便して。大さはぎをやりやした。そのくらへの麁相は。しかねん人さ。ヱヽきたねへ。ゲエイ〳〵　いんきよ「どうりこそ。きびしよに何か一ッはいあるとおもふたが。わしや又。此わろめが。水入れておきおつたと思ふて。川へほつたが。どふでもせうようのおどもりが。のこつてあつたものじやあろぞい　北八「とんだこつた。むねがむか〳〵する。　いんきよ「アヽこりや。ゲエイ〳〵。長松よ脊中たゝいてたも。アヽむさやの。ゲエイ〳〵　彌次「こ

○結構人　好人物。

○藤の森　伏見に在り。藤森神社あり。

れはおきのどくな。モシ何ぞ薬でもあがりやし。しかし小便のあたつたには。何がよかろふしらん。モシ〳〵。どなたぞ丸薬でも御所持なら。少し下さいましな。のり合「ハイどふも。せうべんのあたつたに。よいくすりはもちませんわい　北八「彌次さん。苫をちつとまくつてくんな　彌次「どふする　北八「せうべんを　彌次「するのか　北八「はくのだはな　彌次「ドレふなべりへ。ぐつと顔を出してやらつし。おれがつかまへてゐてやろう。ソレよしか。シイ引〳〵。どふだまだか。ヱヽ川の中だから犬がいねへでわりい　北八「ナゼ犬がいるとどふする　彌次「てめへ小便をはくのに。白コイ〳〵〳〵〳〵とよんでやるは　北八「ヱヽばかアつくす。ゲヱイ〳〵　ト此うちいんきよは、やう〳〵にはいてしまひ、川の水にうがひし、くちをあらひこ

いんきよ「どふじやそつちやのおかた。ゑいかいの　北八「どふやらこうやら。よくなりやした　トくちをそゝぎて、まじめなかほ、彌次郎は心のうちに、おかしさをかくしている、いんきよはけつかうじんと見へて、かくべつはらもたてず　いんきよ「イヤもふおたがひに。どゑらいめにあふたこつちや。くちなをしに。あとの酒やりたいが。かんをするものがなふなつた。どふせうぞいの。　長まつ「そしたら。こつちやにある。ほんまのしびんでさけのかん。いたしましよかい　いんきよ「ホンニそふじや。ほんまのしびんのほうがきれいじや。藤の森でけふ買うてきたまゝで。まだ壹度もせうようせんさかい。それでかんせうわい　北八「めつそふな。あやまりやすね　彌次「ばかアいふな。茶は土瓶のちやがうまし。酒のかんはしびんのとだは　北八「ナニしびんの酒が。のめるものか　彌次「そんなら。モシ御ゐんきよさま。やつぱり今の。きびしよとやらになさいませ　いんきよ「きびしよは川へほつたわいの。しびんのほうがあたらしいさかい。きれいじやわいの　ト樽のさけをしびんにあけ、火ばちのうへにかけて　いんきよ「長松。そこな茶碗おこせ。サア〳〵ほんまのさけじや。ソレおまいがたさそかい　トちやわんをさしいだす、彌次郎ちやつと引とり　「いたゞきやせう　いんきよ「むしのゑいお人じ

○小便の趣向　已に桑名渡船の條に云へる如く、馬士の歌ふくろ」に事實談あり。再びこゝに用ゐしもの。

や。肴あぎよかい。煎売あがるかいな　彌次「ハイ〳〵これは。なんでござりやす　いんきよ「ソリヤ鯨の油とつたあとの身じやさかい。煎売といふわいな　彌次「いゝものでございやすね。サア北八さそふか　トきた八へちやわんをまはし、しびんをとりてつぐ、あたらしきしびんときゝて、なるほどだいじもあるまいと一ぱいひきうけて、ぐつとのんでしまい　北八「小便のまざらぬ酒は。また格別だ。ハイあげやせうか　いんきよ「みな乗合のおしうへ。ひとつづゝあげてくだんせ　北八「さやうならおとなりの　トつぎにいたゑちごの人にさす　ゑちご「ヤレふとついたゞくべいとこと　トちやわんをとる北八しびんからつぎにかゝる　ゑちご「ソリヤ小便のする。やきたごじやアござらないか　北八「ナニこのしびんは。新いからきれいさ　トついでやれはぐつとほして　ゑちご「ア、ゑいことん〳〵。サアながさきのあんにやさ。やらつしやるか　トちやわんを廻せは長さきの人うけて　「ナイコリヤ。氣のどんくうなとばよヲ　いんきよ「だん〳〵そつちやのおかたへ。あけてくだんせ　長さき「しから。あんたへさんじますたい　トそのつぎの人へさす、是は病人と見へて、いろのあをざめたるあかだらけの男、ゑりにわたをまきて、ふとんによりかゝり、もつ共四人まへにかかりかりきりにして、かいほうのおやぢと、ふたりづれにていたるが、　びやう人「わしやさけはいかんさかい。此方こなんひとついたゞかんせ　ト供のおやぢにゆづる、せんこくより、しびんのきれいなるともきゝいたるとなれは、いつかうかまはず　おやぢ「モシ〳〵。はゞかりながらそのしびん。こつちやへくだんせ、手杓にやりましよかい。　ト此おやぢ酒ずきと見へ、つゞけて二はいやらかし、だん〳〵ちやわんをもとへおくりかへせは彌次郎兵へとりつぎて　彌次「サアゐんきよさまあげませう　いんきよ「イヤおまい。まひとつのんでおこさんせ　彌次「ハイ〳〵さやうなら。モシそのしびんこちらへ　びやうにんの所のおやぢ「ハイ〳〵それへ　トしびんをおくりもどす、北八とつて彌次郎へ、なみ〳〵とついでやる、彌次郎ひといきにぐつとのんでちやわんをなげだし　彌次「エ、、、こりやとんだこつた。ゲエイ〳〵　北八「彌次さんどふした　彌次「どふした所か。コリヤ酒じやアねへ。小べんだ〳〵　おやぢ「ハ、アこれはしたり。そゝうしました。わしらがとこの御病人のしびんと。取違へましたサア〳〵酒のはこゝにある。ソレとりかへてくだんせ　北八「ハ、、、こいつ大でき〳〵　彌次「エ、もふ。どふしたらよかろふ。此くらへなら。おれがせうべんをのむはまだしも。

○よいきびしよなり　よい氣味に「きびしよ」をかけしもの。

○飯くらはんか　「世間侍婢氣質」に「浪花津に咲やこの花の都より十三里、夜の間に寝たがる往來して牧方くらわんかの夢うつゝ」とあり。食物を賣りに來る船をくらはんか船と稱す。

○づくにう　こゝにては頭の意。木兎入道の略か。

○がんどう　剪盗は當字。强盜の唐音。

アノ病人めが。エヽわるくさい。ゲエイ〳〵ペツ〳〵〳〵　北八「ハヽヽヽあの病人の顔を見な。瘡と見へて、あたまから首筋のあたりまで。じく〳〵　彌次「エヽヽヽもふいつてくれるな。帆がさけるよふだ。アヽくるしい。ゲエイ〳〵　北八「とかくおめへは小便がたまる。船ではらふ禁便にするがいゝ。そこでいつしゆ。うかんだが。どふだ〳〵

せうべんを人にのませしそのむくひおのれものんでよいきびしよなり

此騒動に船中おの〳〵ねぶりをさまし。大笑ひとなるうち。ふねははや。ひらかたといへる所ちかくないたると見へ、商ひ船。こゝにこぎよせ〳〵　あきん人「めしくらはんかい。酒のまんかい。サア〳〵みなおきくされ。よふふさるやつらじやな　ト此ふねにつけて、ゑんりよなくこぎひきこつは、わめきたつる、このあきなひぶねに、ものいひがさつにいふを、めいぶつとする事、人のしる所なり、うりとばにかいとはなれは　のり合「コリヤ飯ちてうせい。ゑいきはいがあるかい　北八「いかさま。はらがへつた。爰へもめしをたのみます　あきん人「われもめしくふか。ソレくらへ。そつちやのわろはどふじやいやい。ひもじそふな顔してけつかるが。錢ないかい　彌次「イヤこのべらぼうめら。何をふざきやアがる　のり合「この汁はもむないかはり。ねからぬるふていかんわい　あきん人「ぬるかア水まはしてくらひおれ　のり合「何ぬかすぞい。そして。此芋も牛房もくさつてけつかる　あきん人「そのはづじや。ゑい所はみな。うちで焚てくてしもふたわい　長さきの人「イヤこやつふとうなやつよヲ。いかなちうつるばつてん。そのぬかしよふばい　ゑちごの人「づくにうにやしてやつくれべいか　あきん人「ちよこざいぬかさずと。はやう錢おこせやい。コレそこなおやぢ。錢どふじやい　ふやだ「このがんどうめらは。たつた今とりくさつて。コリヤはやういねやい。さだめしおどれがげんさいは。晝は袖乞して生米がなくらふさかい。今ころはぶつ〳〵と腹ふくらして。しろい泡

○四條の蒲鉾　四條河原の蒲鉾小屋。乞食のこと。

ふいてるよぞい　あきん人「ヲ、われがうちは。大かた四條の蒲鉾じやあろ。雨がふりそふじや。水の出んさき。はやういにくされ　彌次「イヤこいつらア。いわせておきやア。とほうもねへやつらだ。よこつつらアはりとばすぞ　のり合「コレ〳〵おまい腹たてさんすな。アリヤこゝのあきなひ舟は。あないにものを。ぞんざいにいふのがめいぶつじやわいの　彌次「それだとつてあんまりな　あきん人「ワアイあほうよく〳〵たアだれがこつた　トこぎだしてゆく　彌次「コリヤまちあがれ。あほう　トひとりりきんでたちあがるひやうしに、おもはずのり合のひざをふんで、ごつさりこける、　ゑちごの人「アイタ、、、、。コリヤわしがぶしやかぶふんだ　長さきの人「うんどもがべんぷう。よんにようつた。アイタ、、、、、、　彌次「コリヤ御めんなせへ。トやう〳〵にすわる　かくて船は。ひらかたすぎたるころ。雨催ひのそら。俄にくらくなり降いだし。あはやと見るまに。篠をつく大雨となり。苫をもれば。乘合はうへを下へとさはぎたち。船頭もかくてははたらき自由ならず。やがて堤に船をこぎよせ。しばらくかゝりて。見合せけるが。こゝは伏見と大坂の半途にして。登り船も下りぶねも。みな落合混雜し。がたぴしと岸によりて。今やと霽をまちいたるに。およそ一ッ時あまり過たるとおぼしき頃。漸く雨やみ雲きれて。月の影八わた山にさし出たるに。船中おの〳〵いさみたち。

○「一刻を」の狂歌「一刻に千金づゝの相場なら一夜三千両國の舟」といふ狂歌あり。こゝは「春宵一刻直千金」の意を「三十石（三十刻）にかけしまでのものならん。

彌次郎北八も。とまひきあけ。顔さし出して。此けいしよくをながめいたるが　彌次「ハアもふ何ン時だろふな。ときに北八。又こまつたことがあるわい。雪陣へゆきたくなつた　北八「エヽきたねえとばつかりいふ　彌次「どふも船ではできぬ。イヤさいわい。こゝにかゝつてゐるうち。ちよつくり土手へあがつて。やらかしてこよふ　北八「ホンニよその船でも。人が手水にあがるよふすだ。はやくそふしなせへ。イヤわつちもお相伴がしたくなつた。モシ船頭さん。ちよつとあがつて來たいが。いゝかねへ　せんどう「用しにならはやういてごんせ。わしらが今めしくてしもふと。いつきに船を出すさかい　彌次「わらじはどこだ　北八「ナニサはだしであがらふ。乘るとき足をすゝげばいゝに　ト両人ふねよりつゝみにあがりて　彌次「ナント いゝ景色だな。どこらでやらかそふ　北八「チツトそこには水溜りがある。もつとそちらへ。アヽなるほどいゝ月だ

※一刻を千金ヅヽの相場なら三十石のよど川の月

かくちずさみて。おもはず勝景にみとれゐたるが。このうち。岸にかゝりゐたりし船ども。追〳〵漕出すやふすに。北八彌次が乘たる船も。今出ると見へて。船頭どももやひ綱をとき。棹さしのべて。ふたりを呼たつるに。いづれのふねにも。乘合のうち。土手にあがりたるもの共。いちどきにおりたち混雜し。彌次郎北八。やう〳〵のことに。人をおし分。飛乘たるは。大坂八軒家の登り船なり　此ふたりあまりせんどうによびたてられて、大きにうろたへ、今までのつて來りし、伏見の舟と心え、そのつぎにならびて、かゝりゐたりし、大坂ののぼりぶねにとびのりたるが、とまの内くらく、まちがひたるふねとも心付ず、ことさら此ふねにも、乘合のうちつゝみにのぼりたるものも、二三人あれば、それらかとおもひて、船中にも、たがひにかほもかたちもしれざれば、これをとがむるものもなく、そのうちふねは出るにまかせ、おのおの〳〵宵よりはなしつかれたるにや、おし合へし合、たがひにあしをやりちがひとなし、ふしたりけるが、彌次郎北八もくらがりまぎれ、そこらさぐりまはして、手ごはりよくにたれはこゝ、人のふろしきづゝみを、わがつゝみとこゝろえ、引よせて、すぐにそれをまくらとして、うちふし、それよりふぜんごもしらず、たかいびきなり　去ほどに。船は右にさほさしひだりに綱引のぼるに。はやくもやはた山ざ

○八はいとうふ　細く刻みたる豆腐。

○分銅河内や　「南水漫遊拾遺」の浄瑠璃作者列傳中に、川四郎、長町分銅河内屋と云宿屋、四郎兵衛とあり。「柳巷方言」名物の項第一に、河四郎、また浄瑠璃作は河四郎、笛躬、下風、柳とあり。思ふに一九とは作者仲間なりしなるべきか。

○新町　大坂の遊廓。

○虎屋のまんぢう　高麗橋三丁目虎屋大和大掾藤原伊織。元禄十五年開業のよし「浪華百事談」にあり。

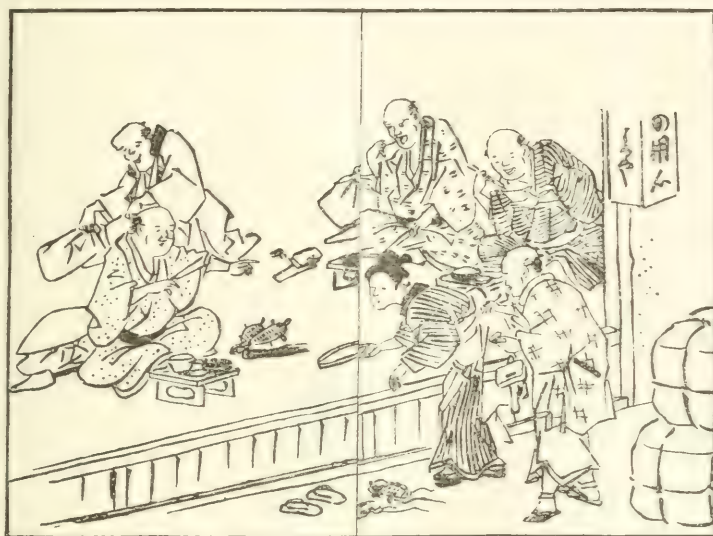
きをあとになし。淀堤を打過。夜もあけちかくなりたる頃。伏見にこそは着たりける。苫もる影も白く。烏の聲告わたるに。船つきたりと。乗合みな〱目をさまし立さはげば。きた八彌次郎も苫打ひらきて。笠ふろしき包を手に引さげ。船頭があゆみ板わたすを。打わたりて岸にのぼり。ふな宿にいたるに。乗合の人〲つゞいて爰に來るを見れば。見しりたる顔一人もなし。是はふしぎと。そこらうろ〱見廻しながら　彌次「ナント北八。おいらに酒をのませた隠居どのは。どふしたの　北八「さればの。そしてアノ長崎ものや越後同者どもは來そふなものだが。大かた爰へよらずにいつたと見へる。おいらは。ゆるりと爰で。支度して出かけやうさ　トもとのふしみについたといつかうにきがつかず、ふなやどのおんな「どなたもおしたくあぎよかいな　彌次「チイ爰へ二ぜんたのみす　女「ハイ〱　トたきたてのめしに、※八はいとうふのひらをつけてもつて來る、これはふしみのふなやどのおさだまりと、此兩人はじめてなれば、こんなことはしらず、もとより大坂へついたとばかり心得、へいきにて　彌次「けふは斯いたぞ。是から長町の分銅河内やとやらいふ宿屋へいつて。あれも大和の初瀬の茶やで。よこした書付の所だから。あそこへとまつて。すぐに芝居でも見よふじやアねへか　北八「おいらアまた。※新町とやらをはやく見てへ　彌次「ヲヽそれもまんざらでねへの。アヽアツ、、、、ごうてきにあつい汁だペツ〱〱　此かたはらにもふなあがりの三四人づれおなじくしたくをしながら「太兵衛さん。おまい虎屋のまんぢうはどしたぞいの　太兵へ「六兵へさんきかんせ。けたいなこつちや。きのふわざ〱あこへいてかふて來て。とんと大佛屋にわすれたわいの　つれの人「つい一トはしりいてとてごんせ。爰からわづか。十里ほかないもせんもの　太兵へ「ハヽヽヽそふいふてもくれんがよいハヽヽヽヽ　此はなしをきいて彌次ふしぎそふに「モシあなた方が。今いひなさつた。とらやといふは。たしか大坂でございやすね　六兵へ「さよじやわいの　彌次「その虎やのまんぢう。わすれたとおつしやつた。大佛やとやらはどこでございやす　六兵へ「コリヤ新町ばし西詰を南へいくとこじやわいの

○つがもねへ　束もない、[illegible]へごころなしの意。

○やばなこと　奇怪な事。

○あんだら　「あん」は接頭語。「だら」は馬鹿の事。

彌次「その新町ばし南へいく所までは、爰からいくらほどございやすね　太兵へ「こゝからは十里じやわいの　彌次「はてなア大坂は。おもひの外ひろい所だ。ノウ北八　北八「ナニサいゝかげんにきいてゐなせへ。わつちらをひやかすのだはな。爰から十里あつてたまるものか。とほうもねへ　太兵へ「イヤおまい。こゝをどこじやとおもふてじや。こゝは伏見の京ばしじやがな　彌次「ナニ伏見だ。コリヤ北八がいゝふ通。きさまたちやア。人をばゞらかすな。おいらアゆふべ。伏見から船にのつて來たのだはな　太兵へ「何いはんすやら。桃山のけつねにがな。つまゝれたらんじやあろぞい。みなこちどいてゐやんせ　北八「のいてゐるもすさまじい。そしておいらを狐つきたアなんのこつた。ゑどつ子だぞ。つがもねへ　トいさくさなかに、此大坂ものゝつれと見へて、二三人かけ來り「なんじやい〳〵。何せりあふてじや。そんなことより。こちやどゑらいめにあふたわいの。こつとらがつゝみを。船でうしなふたさかい。いんまのさきまで。其せいらくしておつたが。ねからはからしれんわいの　トいふうちひとりが彌次郎がかたにおふたつゝみを見つけ「イヤ權助さん。あこにあるわいの。そじやさかい。わしがいふまいとか。さきへあがつた衆を問ふて見やんせといふたじやないかい　ごん助「ホンニこれじやわいな　トこりにかゝれは彌次郎ちやつときひかへて　彌次「コリヤ何ひろぐ。此つゝみはおいらがのだは　ごん助「ナニぬかしくさる。おどれら。やばなことはたらきくさるな。コリヤ見い。ふろしきのはしに。こちの名がかいてあるわい　トいわれて、彌次郎びつくりしよく〳〵みればじぶんのつゝみでなしきもをつぶして　彌次「ホンニコリヤまちがつた。ソレもどすぞ。おいらがのはどこにある　ごん助「あんだらつくせ。ナニおどれらがつゝみを。たれがしろぞい　彌次「こいつはつまらねへ。北八どふした　北八「おめへおれがのもとつて。一ッ所につゝんで。そばにおいたじやアねへか。どふしておいらがしるものだ　彌次「ハテめいよふな。モシいよ〳〵こゝは。ふし見にちげへねへかね　みな〳〵「ハヽヽヽ何ぬか

しくさるやら。アノ頬見やんせけたいなつらじやな　北八「イヤこいつらはふてへやつらだ　ごん助「ふといもほそいもいるこつちやないわい。たかでおどれらアがんどうじや。つゝみに別条ないさかい。ゆるしてこます。とつとゝ出ていにくされ　彌次「コリヤアとんだめにあふが。さつぱりわからぬ。きた八どふしたのだろふ　北八「されば。わつちもわからぬ。ぜんてへゆふべは何日だつけ　彌次「ム、こうと。ゆふべあのじぶんに月が出たから。大かた廿四五日あたりだ　北八「今ゝ月は大か小か。きのふは。なんの日だねへ　彌次「さればこうと。此間ソレどこでかとまつた時甲子だといつたじやアねへか　北八「ソレ〳〵。あの茶飯はうまかつた　彌次「ひらの牛房の大きさ。あいつはめづらしい　みな〳〵「ワハ、、、。コリヤどふでもできらはほん氣じやないわい。ワハ、、、、　トはらすぢをよつて大わらひよる、この中でもさしはいの太兵へしばらくかんがへこ「ハ、アきこへたことがあるわいの。なるほどあまりかしこうも見へんわろたちじやさかい。人のもの。手まへるほどのはたらきは。ありやせんわいコリヤこうじや。コレそこなわろたち。ゆふべ伏見からのらんして。途中で船のかゝつたとき。用たしにがな。つゝみへでもあがらんしたとがあろがな　彌次「さやうでござりやす　太兵へ「ソレ見やんせ。こつとらがのつた船にも。あの時あがりおつた人が大分ありおつたが。やがて船が出るといふと。みなうろたへてのりおつた。その時こなんたちは下り船と。のぼり船をとりちがへて。めん〳〵の乘て來た船とこゝろえ。こちのふねへ。のらんしたものでがなあろぞい　北八「ホンニさやうでござりやせう。わつちらも船にのつた時は。くらがりではあるし。とりちがへたとはしらず。どふやら居どころもちがふたよふでございやしたが。乘合のことだから。まゝのかはとそれなりに。くたびれまぎれに。ツイねてしまひやして。けさこゝへ來て見りや。乘合の衆のうちに。見しつたかほがひとつ

もねへは。ふしぎなヿだといつていやしたのさ　彌次「そふいへばなるほど。今のさき船のあがり場で。ハテ見たよふな所だとおもひやしたが。見たはづだ。やつぱり初手のふしみだもの。ハヽヽヽ必竟それゆへ。おまへがたのつゝみをわつちらがのだと思つて麁相いたしやした　北八「これでものがさつぱりわかつた　彌次「イヤわかることアわかつたがおいらがつゝみはどふしたろふ　太兵へ「それもわかつてあるわいな。おまいがたの乗らんした。下り船に。つゝみばかりのこつて。今頃はおさかの八けんやに。ふろしきづゝみがうろうろと。おまいがたを。たづねてゐよぞいなハヽヽヽ　北八「とんだめにあつた。いめへましい　彌次「まゝよ。どふするもんだ。かねは胴巻に入れてもつてゐるから。たかゞ包は手めへとおれがきがへばかりだ。うつちやつてしまへ。そこらはゑどつ子だは　トおしけれ共せんかたなく、これから又ふねにのつて、大坂へたづねにゆくもばかばかしいとすぐに京へ行つもりに、そうだんきめて立出れば、この人々も、それぞれにこゝを立出けるに、北八彌次郎、きぬけのしたかほつきにて、ぶらりぶらりと、京かい道にさしかゝり

伏見出て淀の車がまたあとへまわりまわつて來たは何事

それより伏見のまちを打過。墨染といへる所にさしかゝりけるが。爰はすこしの遊所ありて。軒毎に長簾かけわたしたるうちより。顏のみ雪の如く白く。青梅の布子に。黑びろうどのはんゑりまで。おしろいべた〳〵つけたる女。はしり出て彌次郎が袖をとらへ「もしな。はいりなされ。ちよとあそびんかいな　彌次「なんだ。よせへ〳〵　トふりきれば又北八をとらへ　女「おまいさん。どふじやいな　北八「こうじやいな　トべつかこうをする　女「ヲ、すかん。こちやいやいな　北八「いやいなの三郎よし秀でも。とまらんのだ。エ、はなしやアがれ　女「ヲ、こは　トねつはなしてうちへはいる　彌次「ハ、アこゝが。あとできいたすみぞめだな

すみぞめのおやまのかほの眞白さは石灰藏のねづみごろも䑓

深草のさとは。家ごとに燒もの。土細工を商ふ見ゆれば

やきものゝ牛の細工に買う人もよだれたらして見とれこそすれ

かくて藤のもりにいたりけるに

稻荷山松のふぐりにかゝれるはふどしのさがり藤のもりかな

こゝに。いなりの社をふしおがみつゝ　北八「ナントそこらで一ッぷく。やろうじやアねへか　彌次「よかろふ〳〵　トよしずだてかけゝるちやみせにはいり　彌次「ヲヤあまざけがあるの。ばあさん一ッはいくんな　ばゞ「ハイ〳〵ぬくふしてあぎよわいな　北八「コウ彌次さん。こゝのばあさんが。おめへに氣があると見へて。アレこつちばかり見て。おかしな目つきをすらア　彌次「ばかアいへ。ばあさんどふだ。はやくくんな　ばゞ「まちつとまつておくれんかいな　トいひつゝ此ばゞ彌次郎のかほを見てはなはだきするゆへふしぎにおもひ　彌次「ばあさんどふぞしたか。おめへ目がわるいの

○いやいなの三郎義秀
朝比奈三郎義秀のもぢり。

○どうまん聲　野鄙の聲。

○店おろし　洗ひ浚ひ勘定するを云ふ。こゝは顏の造作を評せるを指す。

かね　ばゞ「わしやおまいのかほを見て。いかうかなしうてならんわいな　彌次「ソリヤどふして　ばゞ「ワアイ〳〵　北八「こいつはおかしいばあさん。何がかなしい　ばゞ「わしや此あいだ。ひとりのむすこをうしなふたが。そのむすこにアノおかたが似たとこそい〳〵　彌次「ハアおいらに似たとかへ。それじやアおめへのむすこもいゝ男であつたらうに。おしいことをした　ばゞ「ソレそのどうまんごへのものいひから。おまいのやうに。やつとあらいみつちやがあつて。色がくらふて。はなは獅子鼻とやらで。目のいつかい所までが。其まゝじやわいな〳〵　彌次「それじやア。わつちが顏のわるい所ばかりがよく似たの　北八「わるい所ばかりもきがつゑゝいゝ所はひとつもねへもせんものを　ばゞ「それはかりじやないわいの。アノ片小鬢のはげさんした所までが。あないにもにるものかいな　彌次「人の顏の店おろしがすんだら。其醴をはやくくんな　ばゞ「ほんにわすれたわいな　トちやわんふたつにあまざけをくんでさしいだす、ふたりながらこれをのんで　北八「ごうぎにうすい醴だ　ばゞ「うすふもなりましたじやあろ。わしやかなしうて。ツイ涙を。そのなかへおとしたわいな　彌次「エヽとんだことを。涙ばかりならまだしも。見りやアおめへ。水ばなをたらしてゐるが。それも此なかへおちやせんかね　ばゞ「わしや見なさるとふり。三ツくちじやさかい。はな水とよだれをひとつに。その中へおとしたわいな　北八「エヽコリヤなさけないことをいふ。こいつはもふのめぬ　彌次「おらア。ついのんでしまつた。いめへましい。サアいかふ　北八「ばあさんいくらだ　ばゞ「ハイ六文ヅヽくだんせ

北八「水ばなはおまけだの。アイおせはペッ〳〵　トこゝをたち出てふりかへりながら

　くりごとになみだをまぜて水ばなもすゝりこんだるうばがあまざけ

かくてふたりは。足にまかせてたどりゆくほどに。だん〴〵みやこちかくなりて。往來ことに賑しく。

人のふうぞくも。自然と温順にして。しかも衣裳ははなやぎたる女のよそほひに。うつゝぬかして見とれ行うち。はやくも大佛まへにいたりて　北八「チヤ〳〵ごうせへなお寺だ。アレ山門のうへから佛さまがのぞひている　彌次「ハヽアこれが。かの大佛だはへ。なるほどはなしにきいたよりはごうてきなものだ。そしてこの石を見やゐらい〳〵

　大佛の御堂は雲に入とてやこれは大きなもの、天上

かくよみて山門のうちに入。やがて御堂にのぼりける

道中膝栗毛六編　下編

大佛殿方廣寺。本尊は盧舍那佛の坐像。御丈六丈三尺。堂は西向にして。東西廿七間。南北は四十五間あり。彌次郎きた八。こゝに法施し奉りて　彌次「ナントはなしにきいたよりか。ごうてきなもんじやアねへか。アノこうしてござるお手のひらへ。疊が八疊しかるげな　北八「たぬきの金玉とおなじことだな　彌次「もつてへねへとをいふ。そしてアノお鼻の穴からは。人がかさをさして出らるゝと　北八「ソリヤアまだしも。人がさして出ゐからいゝが。おらがほうのほうだら八が鼻のあなからは。瘡がひとりでにふき出したは　彌次「ばかアいふな。おうしろへまはつて見よふ。チヤお脊中に窓があいてゐらア　北八「あれは大かた汐をふくところだろう。彌次「ナニ鯨じやアあゐめへし　北八「チヤ〳〵アレみんなが柱

○天上　一番のものゝ意。こゝは「雲に入」といへるに利かせたり。

○大佛殿方廣寺本尊　天正十六年秀吉建立。慶長七年燒失。同十五年秀頼再建。寛文二年銅像を改めて木像とす。寛政十年七月落雷の爲燒失。大佛殿はその後再建されず。堂内に大佛の首を存するのみ。膝栗毛時代には勿論大佛殿無し。

○柱の穴　「五車反古」に「大佛の柱くゞるや春の風　二柳」といふ句あり。

の穴をくゞつてるは　彌次「ホンニこいつは奇妙〳〵　ト此御堂のはしらのもとにちやうど人のくゞるだけ、きりぬきし穴あり、田舎どうしやどち、たはぶれにこれをくゞりぬける、北八も同じくくゞり　「コリヤおもしろへ。しかしおいらはくゞられめへが。彌次さんはふとつてゐるから。ぬけられめへ　彌次「おれだとつて。ナニこれしが　ト北八をひきのけ、四ツばいになつて、はしらのあなへ、からだ半分ほどはいりかけて、いつかうにぬけられず、あとへもどろふとするに、わきざしのつばがよこはらにつかへて、いたみこらへられず、彌次郎かほをまつかいになし　「アイタ、、、、コリヤひよんなことをなした　北八「ヲヤどふした。ぬけられねへか　彌次「コレ手を引ツぱつてくりや　北八「ハ、、、、こいつはおかしい　ト彌次郎が両手をぐつとひつぱる　彌次「アタ、、、、　北八「よはへ男だ。ちつと辛抱すればいゝ　彌次「あとのほうからあしを引てくれろ　北八「しやうち〳〵　トうしろへまはり両のあしをとらへ　「ヤアゐんさア〳〵　彌次「あいた〳〵　北八「ちつとこらへなせへ。よつぽど出かけたよふだヤアゐんさア〳〵　彌次「ア、まつてくれ〳〵。腰骨がおれるよふだ。コリヤやつぱり前のほうから引出してくれ　トいふゆへ北八、又前へ廻り、両手をとらへて引く　北八「ヤアゐんさア〳〵。ソレまたこつちへよつぽど出て來た　彌次「コリヤたまらぬ。アイタ、、、、。北八これではいかぬ。初

○蛇が女に見こんだ時

「松屋筆記」に本草綱目を引いて「蛇纏ニ人足一。淋以ニ熱湯一。則自解。蛇入ニ人竅一。灸以ニ艾炷一或辣以ニ椒末一則自出」と云ひ、自註に「以ニ艾炷一灸ニ蛇尾一或割ニ破蛇尾一塞以ニ椒末一即出」云々と見ゆ。

手のよふに。又あとへひきもどしてくれ　北八「エヽいろ〳〵なことをいふ。ト又うしろからあしをさらへ「ヤアゐんさア〳〵　彌次「まて〳〵。コリヤどふでも。まへのほうから引イてもらおふ　北八「エヽそんなに。前へまわつたり。うしろへまわつたり。引出してはひきもどし。いつまでもはてしがねへ。コリヤいゝさんだんがある。そばに見ていたりしさんけいの人をたのみて　北八「モシどふぞ。こつちからおめへひつぱつて下さいませ。わしがあつちへまわつて。あしをひきずり出しますから　彌次「ばかアいふな。両方からひつぱつては出る瀬がねへ　北八「出るせがなくても。両方からひつはろと。前へまわつたり。うしろへまわつたりする。世はがなくていゝわな　さんけいの人「イヤ両方からあのさんの骸を。引のばしたら。ツイ出られそふなもんじやあろぞい　北八「コリヤいゝことがある。酢を一升も買て來て。彌次さんおめへに呑せよふ。彌次「なぜ。酢をのむとどふする　北八「ハテ酢をのむと痩るといふことだから　さんけいの人「ハヽヽヽそないなこといふたて、いんまの間にあふこつちやないさかい。こうさんせ。どこぞへいて槌借てきさんして。つむりをあとのほうへ。打こまんしたがよいわいの　北八「なるほど。こいつがはやい理屈だ。しかしそれでは。いのちがあるめへ　さんけい「されば。そこはどふも請合れんわいの。ト此内田舎ごうしや人「コリヤハアきのどくなこんだアのし。わしはハア遠國のもんだアから。あにもしり申さねへが。ふとの難儀さつせるこんだア。愚意のういつて見ますべいか　北八「どふぞあの人のたすかることがあるなら。いつてきかしてくんなせへ　ごうしや「ハアそれだアからのこんだアよ。あんでもあのふとの足のさきさを切割つせへて。山椒粒のうはさまつせへたら。ふとりでにつんぬけべいのし　北八「ハヽヽヽそりや蛇が女に見こんだ時のことだろふ。どふせ。そんなとであろふとおもつた　さんけい「コリヤわしがちゐかそれいの。何じやろと。あのさんの骸を。和ら

○土砂　御祈禱した土砂を硬直せる體に振掛ければ軟くなるといふ。

○一ばんの桶　最も大なるをいふ。

○「傘さして」の狂歌　大佛の鼻の穴は傘さして出られるよし云へり。「あなおそろし」の「あな」を柱の穴に云ひかけしもの。

かにして引出すがよかろさかい。こうさんせ。土砂とて來てかけさんせいの　いなかもの「すんだら土砂のウぶつかけずと。※一ばんの桶さア買てきなさろ。手足をうとべしおんまけたら。はいろべいのし　彌次「エ、いめへましいことをいふ。むだ所じやアねへ。北八はやくどふぞしてくれぬか　北八「まちなよ。ハ、アおめへ脇指の鍔がよこつぱらへ。こだわつていてへのだ　ト手をさし入てひねくりまはしやう／＼わきざしをぬいてとる　彌次「いかさま。これでどふかくつろぎがあるよふだ　北八「ドレ／＼イヤときにどなたぞ。まへのほうからおし出して下さいませ。わしが足をもつて。こつちへ引出しますから。ヤアゐんさア／＼　さんけいの人「ソレ出るわいの。まちつとじや。いけまんせ　彌次「ア、ウ、、、、、。北八「ハ、、、、出るやつがいけむから大わらひだ　彌次「ア、いてへ／＼　北八「しめたぞ。ゐんやア／＼、ソリヤ出たぞ／＼　トやう／＼のことにて引出せば、彌次郎大あせこふき／＼、ほつとためいきをつきながら「ヤレ／＼ありがてへ。コリヤどなたも御苦労でございやした。わつちやア伊勢の泊で。産をしやしたが。うむよりか生れる身は。よつほどせつねへ。コレ着物がすりきれて。あばら骨が今にぴり／＼する

傘さして出るお鼻よりはしらなるあなおそろしや身をすぼめても

かくよみ興じて。大わらひとなり。それより御境内をめぐり。蓮花王院の三十三間堂にて

　　いやたかき五重の塔にくらべ見ん三十三間堂のながさを

是より。この御門前を北へさしてゆくに。往來殊に賑しくげにも都の風俗は。男女ともにどことなく。柔和溫順にして。馬士荷歩持までも。洗濯布子の粘こはきを。おりめ高にきなして。あのおしやんすとわいなとなまめきたるもおかしく。ふたりは興に乘じ。目に見るものごとにめづらしと。たどりゆくうち。俄に往來騷たちて。老若打まじり。はしりゆく人ごとに「ホウホよい〳〵。ゑつこらさつさ。ホウホよい〳〵。ゑつこらさつさ 彌次「むしやうに人がかけるはなんだ。イヤ向ふに。何かあるそふで。すさまじい人だ。モシ〳〵。なんでございやすね 向ふより來る人「あこにゑらい。いさかひがあるわいの 北八「京のけんくはもめづらしかろふ トあしはやに行て見るに、けんぶつ山のごとく、わうらいもならぬくらひなるに、ふたりは人をおしわけ〳〵これを見れば、かのけんくはの一人は、さかなやと見へて、そこにはんだいなどおろしてあり、あいてはしよく人こいのおさこ、いづれもくつきやうのわかものなり、されどみやこは、人の心もゆうちやうにして、けんくはさみゆれど、さのみあたまからたゝきあひもせず、目あたりのとゞくところに、ふたり向ひ合て くさつて。そないなといふもんじやないわい。おのれのうてんたやいてこまそかい さかなや「コレイノ。わが身のほうから行あたり あいてしよく人「おきくされ。こなんが手のうごくのに。こちやじつとしてるやせんわい トいひつゝ手ぬぐひを、ていねいにおりこみ、はちまきをする さかなや「よふおとがいならすわろじやな。いつたいわりや。どこのもんじやい しよく人「おれかい。おりや堀川姉が小路さがるところじやはい。さかなや「名はなんといふぞい しよく人「喜兵へといふわい さかなや「としはいくつじや しよく人「廿四じやわい さかなや「おきくされ。おのれ廿四にしちやゑらうわかい。うそつきくさるな しよく人「何いふぞい。ほんまじやわい。前厄でことし嚊めを死なしたわい さかなや「ソリヤゑらいちからおとしおつたじやあろ。ゑいきみさらしたな しよく人「イヤそればかりじやない。乳のみくさるがきめが

○あたまからたゝきあひもせず　最初から敲き合もせずの意。

○お家　女房のこと。

あるさかい。ゑらいなんぎなめにあふたわい　さかなや「そじやあろわい。おりやわれにふたつうへじやわい
しよく人「そふぬかしくさりや。われもわかい。うちはどこじやぞい　さかなや「一條猪熊どふり東へ入所じや
はい。しよく人「かいやい。あこに盲で目の見へん。寸伯といふ針醫があろがな　さかなや「ヲヽ針醫がありや
どふすりや　しよく人「イヤこちの一家じやさかい。おのれ逝くさるなら言傳してこまそ　さかなや「いやじや
わい。なんのわれが言傳。たれがいをぞい。ゑらいあほうめじやな　けんぶつの人あくびしながら「十兵衛さん。もふいの
かい　十兵へ「またんせ。今に打あふじやあろ　見物「イヤわしやうちに。客ほつておいてきたさかい
十兵へ「そしたらそのお客つれてごんせ。序にうすべりなと一まいくさんせんかい　又こちらのほうにいる見物、のき下につくばひ、ひげをぬき〳〵
「一見なされ。あつちやのわろが。どしてもゑらいやつじやわいな　見物「イヤこつちやのおとこも。ゑ
らい頤じやはい。　見物「ホンニその頤でおもひ出した。※お家はどふじやいな。痛所はゑいかいな
見物「ハイおかたじけなふござります。とんとゑいよふであつたがな。きのふからゑらうわるなつて。ツ
イゆふべ。しにましたわいな　見物「ソリヤおまい御愁傷じやあろ。御葬礼はいつじやいな　見物「今出し
おりますとこじやあつたが。ゑらいけんくはがあると。人がはしるさかい。わしもツイいて。見てもど
るほどに。それまでまてといふて。またしておきましたはいの　トおの〳〵きのながいものはかりゆふ〳〵と見物しているこ、かのしよく人のおとこ「コリ
ヤヤイ。まちつとこつちやへよりくされ。日向がなふなつて。さむなつたさかい　さかなや「ヲヽよつたが
どふすりや　しよく人「おのれ今。おれがとをあほうとぬかしおつたが。なんでおれがあほうじやぞい
さかなや「あほうじやさかい。あほうじやわい　しよく人「なにぬかしくさる。そふいふわれがあほうじやわ
い　さかなや「イヤこちやあほうじやない。賢じやわい　しよく人「われがかしこなりや。おれもかしこいわ

○うすのろい　「うす」は接頭語。江戸獨特の語。

○うたとよみ　相談づく。公家衆の歌よむことにかけて云へり。

○なんばうどん　葱を入れたるもの。今東京にては南蠻と云ふ。

○「名にしおふ」の狂歌　鯉の瀧登りと、清玄が櫻姬にのぼり詰めたといふことを云ひしもの。

い　さかなや「チヽわれもかしこいか。そしたらこのけんくは。やめにせうわい　しよく人「サアひよつとたがひにせりあふて。着物でもひきさいたら損じやさかい。やめにしてこまそふかい　さかなや「ゑらふおそなつた。もふいんでこまそ　しよく人「おれも。われがいにくさる道じやほどに。つれだつていんでくりよわい。けふはゑいてんきじやあつたな　さかなや「あたゝかうてゑいわいやい　トたがひにあいさつしてこのふたりつれだちてかへる、けんぶつもこそ／＼ちりぐ＼にみなかへりければ彌次郎北八、はらをかゝへて　彌次「ハヽヽヽなるほど。かみがたものは氣がながい。あんなうすのろいけんくはが。どこにあるもんだ　北八「あのなかで損德をかんがへて。やめにしたから大わらひだ

公家衆のゐます都はおのづから喧嘩やめるもうたとよみなり

かくうち興じ。はやくも清水坂にいたるに。兩側の茶屋軒ごとにあふぎたつる。田樂の團扇の音喧すきまで。呼たつる聲ぐ＼「モシナおはいりなされ。茶ちやあがつてお出んかいな。めいぶつ。なんばうどん。あがらんかいな。おやすみなされ＼／　彌次「何ぞくつてもいゝが。もつとさきへいつてからのことにしよふ　トはこたく清水寺にいたり、けいだいをめぐり、をとはの瀧を見て

※名にしおふ音羽の瀧のあるゆへ鯉のぼりつめたる清玄の戀

本堂は十一面千手觀世音なり。むかし沙門延鎭が夢中にえたる靈像にして。坂の上田村丸の建立とぞ。北八彌次郎兵衞。しばらく此寶前に休みながら

境内にうへしさくらはすき間なくてもたくさんな千手くはんおん

傍の小だかき所に。机をひかへたる老僧。參詣を見かけて「當山觀世音の御影はこれから出ますぞ。誠に靈驗あらたなる事は。盲がものいひ。啞の耳がきこへ。あるいて來た。いざりがなをる。一たび拜

○傘をさしてとぶ　心願ある者は清水の舞臺より飛ぶ、念願叶ふ者は怪我せずと稱す

○金輪際　どん底まで。

○根ほり葉ほり　何も彼もよつかりといふこと。

する衆生は。いかなる無病達者なりとも。たちまち西方極樂淨土へ。すくひとらんとの御誓願じや。どなたもいたゞいておかへりなされ、冥加錢は澤山にお心もちしだい。御信心のかたはござりませぬかな

北八「よくしやべる坊主めだ。時に彌次さん。かのうはさにきいた。※傘をさしてとぶといふは。此舞臺からだな　僧「むかしから當寺へ立願のかたは。佛に誓ふて。是から下へ飛れるが。怪我せんのが。有がたい所じやわいな　彌次「妄からとんだらからだがみぢんになるだろう　北八「おり〱は。とぶ人がありやすかね　僧「さよじやわいな。ゑては氣のふれたわろ達が來て。とびおるがな。此間も若い女中が。とばれたわいな　北八「ハアとんでどふしやした　僧「とんでおちたわいな　北八「おちてそれからどふしたね　僧「ハテ根どいするわろじや。此女中は罪障が深いさかい。佛の罰で。目をまはしたわいな　北八「鼻はまはさなんだかね　僧「イヤ猪と見へて。鼻はなかつたわいな　北八「そして。氣がつきやしたか　僧「きがついていんだわいな　北八「いんでどふしたね　僧「さて〱しつこい人じや。それきいて何さんすぞい　北八「イヤわつちがくせとして。聞かけた事は。金輪際きいてしまはねば。氣がすまぬといふもんだから　僧「それなりやいふてきかそかい。それからその女中が全躰其した地もあつたかして。俄に氣が違ふたわいの　北八「ハテナ。きがちがつてどふしたね　僧「百万遍をはじめたわいの　北八「百万遍はじめて。どふしやした　僧「かねを叩て　北八「かねをたゝいてどふしたね　僧「なむあみだんぶつ　北八「それからどふだね　僧「なむあみだんぶつ　北八「コレサ百万遍のあとは。どふしやした　僧「なむあみだんぶつ　北八「そのあとはよ　僧「ハテせわしない百万べんじやわいの。マア念佛すましてからのことといの。　北八「エ、其念佛。百万べんすむまでまつてるのか。とほうもねへ　僧「イヤこなさん。聞かけたとは。根ほり葉

○内陣　大柱の内を内陣、大柱の外を外陣と云ふ。
○中回向　百萬遍の中回向。
○こゝは清水。あつもりさんの墓所　清水に御影堂ありて、玉織姫の來りしといふ傳說あり。是皆の屋座熊谷はこれより捏造されしもの。

ほり。きかんせにやならんと。いふたじやないかい。まちと辛抱してきかんせいな。退屈なりや。こなさんたちも百万遍手傳ふて下んせ　北八「コリヤおもしろかろう。彌次さん。おめへもこけへかけなせへ。サア〳〵。なむあみだアんぶつ　僧「とてものことに。鉦いれてやろわいな　トむしやうにかねをうちならし　ハアなまいだア。チヤン〳〵　北八「コリヤごうてきにおもしろくなつた。なまだア〳〵　僧「わしや手水してくるうち。たのみます　ト北八にかねをつきつけ、どこへやらいつてしまふ、北八はむちうになり　「ハアなまだア、チヤン〳〵チキチチヤンチキチヤン　彌次「手めへ。鉦のたゝきやうが下手だ。こつちへよこせ　北八「ナニ如才があるもんか。チヤン〳〵なまだア〳〵チヤン〳〵〳〵〳〵　トむちうにたゝきたてさはぐゆへ、内陣の番僧出來り、このていを見てきもをつぶし　ばん僧「コレナ〳〵。わごりよたちはどしたもんじやぞい。勸化所にあがつて無作法な　トしかられてふたりは心づききよろ〳〵しこ

北八「ハア今の坊樣はどけへいつた。まだ中回向もすまぬうち　彌次「ナニたはごといふのじや。一反たてこじやとおもふてじやぞい　北八「ハイこゝは清水。あつもりさんの墓所とけつかる　番僧「コリヤおのれ。氣

○とんだ話　清水の舞臺から飛んだ話に云ひかけたり。

○くすねて　除けて置く。

か間違ふておると見へる　北八「氣ちがひゆへに此百万遍　彌次「ナニぬかしくさるやら。とつとゝ出ていなんかい。こゝは御祈願所じやぞ　トこはだかにいふうち、かつこより、ほうつきて出、おひはらふに二人はそう〳〵、この坂をおり立て　北八「づくにうめが。とんだめにあはした

舞臺からとんだ※はなしは清水にひやかされたる身こそくやしき

此山内をくだりゆくさきに。清水燒の陶造。軒をならべて。往來の足をとゞむ。此所の名物なり

天道の惠みもあらんすへもの師大日山の土を製せば

かくて其日も。はや七ッ頃とおぼしければ。いそぎ三條に宿をとらんと。道をはやめ行向ふより。小便擔と。大根を荷ひたる男「大こん小便しよ〳〵　北八「ハ、、、、唐茄子が笛をふいた見世ものは見たが。大こんの小便するのはよ。ついど見た事がねへ　彌次「あれがかの。大根と小便と。取替とつけへにするのだろう　こへとり「おつきな大こんと。小便しよ〳〵　トよんでゆく、こなたより、ちうげんらしき、みたれのおとこがふたり「コリヤ〳〵。わしらふたりがこゝで小べんしてやろが。その大根三本。おくさんかいな　こへとり「マアこち來てして見さんせ　ト此所の辻子へふたりをつれてゆく、辻子は江戸でいふ新道也、彌次郎北八、これを見て、ごふするのだしらんと、あとよりついてゆき、立どまり見れば　こへとり「サアやらんせんかいな　トこのたごのうちへ、ふたりながら小べんし、こしもふと、こへとりたごをかたげ見て「もふ是限で出んのかいな　中間「うちどめに屁が出たから。もふ小便はそれぎりじやわいな　こへとり「コリヤあかんわい。ま一度よふ骸をふつて見さんせ　中間「ハテ小便くすね※ておいて何せうぞい。ありたけしたんで。のけたわいな　こへとり「それじや大こん三本は。よふやれんわいな。二本もてかんせ　中間「コレ小便はすくなふても。こちとらがのは。しろものがふいわい。よその茶粥ばかり。喰ておるのとはちがふて。こちや肉ばかり。くておるがな　こへとり「そ

れじやてゝ。おんまりじやわいな　中間「ハテやかましういはんすな。うちへもていんで水まぜりや。三舛ばかりにはならぞいな。はやう三本くさんせ〳〵　こへとり「そないに。くせ〳〵といふたてゝ。これでくさるもんじやないわいな。そこらへいて。ちやなとのんで來て。まちつとやらんせ〳〵　トやつつかへしついふているを、ふたりはおかしく、見てゐたりしが、きた八「モシ〳〵。さいわいわつちが小便したくなつたから。無躾ながら。おめへがたに上ゲやせう。これをたして。大根三本とりなせへ　中間「お心ざしは。おかたじけなふござりますが。それじやおきのどくさまじやわいな　北八「ハテいゝわな。どふせ。わつちもありあはせたちんだから。あまり輕少なれど　中間「さよなら。お小便いたゞきましよかいな　トせうべんたごを北八のまへゝもつて來りなをす　こへとり「コリヤきよとい〳〵。イヤおまいのは地きなせへ。わつちがのは。一二間づゝ向ふへはしります　北八「もちつと早いと。ではないわい。とかく小便は關東がよござります。地のはうすふてねうちがない　中間「そまだ出たものを。わつちは生れついて小便ちかいから。不斷小便桶を。首にかけてあるいた男さりやおうらやましいこつちや　こへとり「さよならおまい。此たごを首にかけておいでんかいな。わしやどこまでもお供していこわいな　北八「イヤちかごろは。そのよふにもねへのさ　こへとり「おつれさまもあるそふじや。モシおまいもついでに。手水してお出んかいな　彌次「イヤわしは前かたは。いちどきに小便の壹斗や二斗するぶんは。ねから苦にもおもはなんだものだが。どふしたことやら。きんねんは小用づまりで。さつぱり出ぬには。こまりはてる　こへとり「ハア小用づまりなら。ゑいとがあるわいな。いつきによふなるこつちや　彌次「どふするとよくなるの　こへとり「アノ酒屋などで。酒の樽の吞口から。おもふやうに。酒の出んとがあるもんじやわいな。そないなときは。樽のうへのほうへ。錐もみして穴あける

と。じきにドかい。シウノ＼＼ニ酒がはしるものじやさかい。おまいの小用のつまらんしたのも。額ぐちへ錐もみさんしたら。すぐに小用が通るじやあろぞいな　[illegible]　北八「ハ、、、、こいつはできた。時におそくなつた。サアいきやせう　[illegible]　「ヒヤアゝいきた女がくる。きれいな／＼　彌次「じやうだんな女どもだ。みんな着物をかぶつてくるは　北八「あれが被といふものだの。アノうつくしいやつと。おれがものをいつて見せよふか　トやがてかの女中のそばへよりて　モシおともものがお尋申たい。これから三條へはどふまいりやすね　トきくに此女中御所がたさ見へてさんだおうへいに　「わが身三條へゆきやるなら。この通りをさがりやると。石垣といふ所へ出やるほどに。それをひだりへゆきやると。ハイ三條の橋じやはいな　トいつさい御所がたの女中は、人を何ともおもはず、ちとこきいたふうのおとこと見ると、わるくひやかすふうゆへ、五條のはしを、三條と[illegible]　北八「ハイ是は有がたふござりやす　ト何もしらねば禮をいつてしばらくゆきすぎ　彌次さん。アリヤアなんだろう。ごうてきにおうふうな女どもだ　彌次「ハ、、、、とんだやすくとりあつかはれやアがつた。ごうさらしめ　トそれよりやがて、かの石がきといへるをうちすぎ、ひだりのかたへおしへられたる道すじをこゝろへ、はやく五でうのはしにいたり、頃は、はや日くれになりければ、わうらいの人　「モシ／＼しる谷のほうへは。どふまいりますな　北八「ハアわが身しる谷へいきやるなら。此とふりをすぐにいきやると。ツイし

○すつぽかし　「す」は素一分などの「素」、「ぼかし」は放下しなり。

る谷へ出やるほどに。ソレ轉んだら起ていきや。牛のくそをふんづけたら。遠慮なしにふいていきやれ　わらいの人「イヤこやつ。ぞんざいなものゝぬかしよふじや。こゝなあんだらめが　北八「ナニあんだらたア何のとだ。道をきくからおしへてやるのだは　往來「イヤ細言ぬかすない。どたまにやしてこまそかい　ト此男のつれと見へたるが、二三人立かゝるを見れば、いづれも見あぐるごとき大おとこども、こしに長わきざしをよこたへ、ものいひかつこう、いかさまにも、おの〳〵すもふとりらしきものどもなれば、北八たちまちしよげかへりて「ハイ御めんなせへ　弥次「こいつは生酔だから。どなたも了簡してくんなせへ　すもふとり「イヽヤ了簡ならんわい。おどれらうちはどこじやぞい　弥次「イヤ旅のものでござりやす　すもふ「たびのものなら宿があろふ。ソレぬかしくされ　弥次「是から此三條に。宿をとろふといふのでござりやす　すもふ「なにぬかすぞい。此三條にとは。何のこつちやい。こゝとらは今三條の編笠屋から出て來たものじや。こゝは。五條のはしじやわい　弥次「ヤアこゝは。三條ではござりやせぬか。ソレ見や北八。さつきの女どもが。とんだすつぽかしをおしへやアがつた　すもふ「きさまたちは。どつから來たのじや　弥次「きよ水のほうから　すもふ「ワハヽヽヽてゝきりけつねにがなつまゝれくさつたもんじやあろぞい。ゑらい隙費しな。ほつておけ〳〵。さりとはあほうなやつらじやな　ト打わらひて行過る　弥次北八はおもひもよらず、五條のはしに來り、ま〳〵、はん〳〵るけせん日にあふたこ、こぐさいひながら、はしを向ふにわたり、そこゝとまごつくうち、わらいのにぎやかなるにうかれて、おもはずもはしのたもとを、ひだりのかたへうかれゆくと、なにかはしらず、いやうなはにかけあんどう、のきごとにてらし、三みせん〳〵いねこにぎはしく、ぞめきうたに、ほうかぶりせし、おとこどものふらつくにまぎれこ、のぞきあるくこの所は、五條新地とて、[illegible]しのながれ[illegible]、家ごとに、ふごい戸をたてたるが、くゞりはかりをひらきて、かごぐちにたたずみる女のさゝやかなるこへして、モシナ〳〵と、弥次郎がそでをひくに、ふりかへりて、くゞり戸の内を見れば、ふせつきのおやまならびいたりけるにぞ　弥次　ナント北八。こゝはおやま屋と見へるが。いつそのくされに。こよひはこゝにとまりはどふだ　北八「いかさま何も荷物はなし。まんなをしに。そんな事もやぼでねへ　女「サアはいりんかいな　弥次「はいるとははいろうが。こゝはいくらだ　女「ヲヽかたやの。おとまりなはるかいな　弥次「もちろんさ　女「まだ初夜まへじやさかい。七匁ヅ

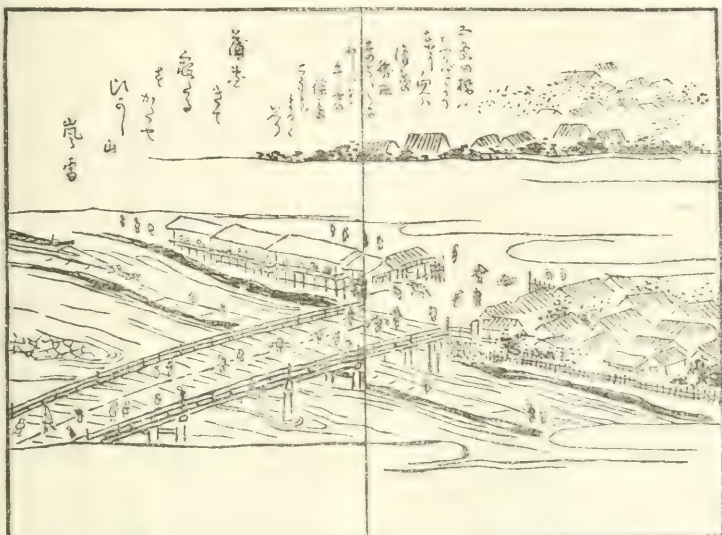
○六角　六角堂。「六角の朝市に」云々とは、悪口なるべし。
○六條様　本願寺の事。東本願寺は東六條、西本願寺は西六條に在り。

、おくれんかいな　北八「上方のお山は。直切て買うといふことだ。半分にまからねへか　彌次「何かなし。四百ヅヽならとまつていこふ。それで出來ずは。御縁がねへとあきらめよふさ　女「よふこざります。おはいりなされ　北八「それでいゝの。てうど。おやまさんもふたりあらア　トこのうちへあがると、女が二かいへあんないするに、やねうらのひくき二かいに彌次郎あたまをこつつり「あいたしこ　北八「どふした　女「ヲホヽヽヽおあぶなふござんす　トたばこぼんをもつてくる、此内おやまふたり、一人名は吉彌、今一人は金五、いづれも、ふとりつむぎじまやうのきものに、くろびろうどのはんゑり、はりのつかへるほどひくき二かいを、しやんとたつてあるくしろもの、片手にきものゝつまを、よこのほうへ引あげてきたり、ヲヽしんどゝいつてすはる　北八「とんだくらいあんどんだ。サアもつとこちらへよりなさらんか　吉彌「おまいさんがたはどこじやいな　彌次「されば。どこやらであつた　金五「ヲホヽヽヽ六角の朝市に。こないなおかたがよふ見へてじやが。訛てじやさかい。大かた旅のおかたじやあろぞいな　吉や「六條さまへお出たのかいな　彌次「マアそこらのものよ　吉彌「モシナさゝひとつあがらんかいな　彌次「そふさ。酒がはやくのみてへの　吉彌「そふいふてやろかいな。お肴は何にせうぞいな　金五「かどのすもじが。おいしいじやないかいな　吉彌「わしやナ。かちんなんばがゑいわいな　彌次「かちんでも家賃でもとんだやくはねへ。はやくしてくんな　吉彌「いつきにさんじるわいな　ト此そのまゝさけさかなをいひ付に下へおりる、あとにのこりしおやまは此内帯のあいだからかゞみをいだし、あんどうのそばへより、かはをなをす、やがて下より、てうしさかづきをいだし、大平が一人まへにひとつゞゝ、ひろぶたにのせもち出し、彌次郎きもをつぶし「なんだこ大平を人別割とはめづらしい。京はあたじけねへ所だときいたが。こゝらは又ごうせへだ　北八「四百にはやすいもんだ　ト此ふたりは、さけもさかなもあげ代の四百のうちだとおもひむしやうにやすいとほめる　金五「サアひとつあがりなされ　北八「はじめよふ。ヲトヽヽヽひらはなんだ。ハヽア葱にはんぺいはきこへたが。こつちではんぺいをやくと見へて。まつくろにこげてるらア　吉彌「ヲホヽヽヽソリヤ哥賃じやわいな　トこれは上がたにてするなんはもちとて、ねぎをいれたるぞうにもちと、此おやま、下戸とみへて、おのれがこうぶつゆへ客にすゝめてとりよせたること、北八かちんといふことをしらず　「ハアかちんといふは。きいたこともねえ。どんな肴だの　吉彌「ナ、せうし。

○十六匁三分　當時の錢相場は概ね六貫盈なれば、十六匁三分は錢にして一貫六百三文。一分即ち十五匁を錢に直せば一貫五百文となる。

餅「あもじやわいな　北八「ム、鱧か。ドレ／＼ヤアこりや餅だ／＼　彌次「おきやアがれ。上方ものは氣がきかねへ。酒の肴にもちとはどふだ。是で酒がのめるものか　金五「外のおさかな。いふてさんじやうわいな　トすぐに下へおりたるが、ほどなくどんぶりものをもつてくる、なかには上がたにはやる鳥貝のすしなり、此おやまのすきとみへて、此すしを、ひ付やりたる之につけたのだな　金五「とりがひのすもじじやわいな　彌次「出すものも／＼。へんちきな物ばかりで。もふ酒ものめぬ／＼　ト此内むだもいろ／＼あれ共りやくして、こゝにふさんたしきならべこしびやうぶにてあいだをしきる、此うち四十斗の女、こゝの女ぼうと見へて、つとめをとりにきたり、びやうぶをあけて「おゆるしな　彌次「チイだれだ　女「ハイおつとめをいたゞきにさんじました　トかきつけをいだす彌次郎ひらき見「一なんだ。四匁ヅヽ八匁の揚代はきこへたが。四匁かちんなんば。貳匁すし。壹匁八分御酒。五分らうそく。〆て※十六匁三分。コリヤとんだはなしだ。雜用は別にとるのか。おらア又。酒もさかなも揚代のうちかとおもつた。コレ／＼北八。このとふりだ　北八「ドレ／＼なんだ。コリヤおめへがたア。わつちらを他國ものだとおもつて。酒代を別にとるさへあるに。ごうてきにたけへもんだ。此四匁かちんなんばといふは。アノ大平のことか。餅ならたつた三ツ四ツいれて。ねぎのちつとばかりさらへこんだものを。壹匁ヅヽとは。なるほど。京のものはあたじけねへ。氣のしれた根性骨だ。らうそくまでつけるこたアねへ。こんなものはまけにしておきなせへな　女「ヲホヽヽ、京のものをわろうおしやんす。おまいさんがしゆみじやわいな。五分ばかりのらうそく代。まけいのなんのと。おしやんすことはないわいな。そしてみな。あがりなされたあとで。たかいのやすいのと。おしやんしたてゝ。あかんこつちやないかいな　彌次「エヽめんどふな。ソレ壹分持ていきな。はしたぐらひは。まけなせへし　ト金一分ほうり出してやる、女ぼうふしやう／＼にとつて下へおりると彌次郎あつけにとられてかほつきぐにやりとなり「アヽとんだめにあつたノウ北八　北八「しかしおらアおしくねへ。どふかおつに。もてそふなあんばいだ

○しんきやん　しんき臭いと云ふ。心氣の結ぼるゝに云ふか。

ト此内北八のあいかた吉彌きたりこ「ヲ、じんきやの。あこにわたしひとりおかんして。こゝに何してじやぞいな。サアやすみんかいな　ト手をとりておのがかたへ引ずつてゆく　北八「コリヤ〳〵。おれが帯をといてどふする　トわざと彌次にきこへるよふにこはだかにいふ、女北八を引こかし「よいわいな。こよひはいこうぬくひじやないかいな。おまいさん。じつとしてゐなされ。わたしがあぢよふするわいな　ト　すべて上がたすじのおやまは、初たいめんから、客をもてな帯ひもをときて、打さけたるていに、すと、さだまれる掟のごとし、中にも此吉彌は大ごしまにて、じよさいのなきしろものきた八にきものをぬがせてほうり出し、おのれもおびをときて、きた八におのがきものをうちかけ、さながらふかきなじみのごとく、うちとけたるていに、もてなしけるゆへ、きた八うつゝをぬかしてうちふしけるが、夜も〳〵たいにふけゆくまゝに、犬のこゑもほえるのさみしく、時のたいこもやうし〳〵ここにはかりなるに、吉彌目さめしやうすにて「モシナ〳〵よふねてじやな　北八「ア、ム、なんだ〳〵　吉彌「わしや手水にいてくるぞへ　トねきあがりたるが、まくらもとにほうり出してある、きた八のきものをきて、おびを引〆おまいさんの着物ちよとかしておくれや。わしやこれきて。とのたちのふりして。下の衆をだましてこまそわいな　北八「よく似合た。きめうく　吉彌「つむりがこれじやあかんわいな　ト手ぬぐひをとつてうちかぶり、下へおりてゆく、北八はそれよりねもやらず、まつごくらせど、かの吉彌はいつこうに来らず、きこへぬ外に、客に一ぱいくわさるゝやと、しばらくまちいたるに、はや七ツのかねもなり、ほどなく夜もあけなんとするに、北八こらへかねて、むしやうに手をたゝくと、下より女ぼう、かけあがりて「どなたぞおよびなされたかいな　北八「ヲ、こ

○かいな　さうかいな。

○おにぶとり　鬼太綟か。

○ほてくろしい　腹黒い事。

○才六　上方贅六と云ふ。語義不明なれど、上方人を罵る言葉なり。

○糸引くさつた　絲を引いた、操縦する意。操人形より來れる語か。

ゝだく。コレわつちがおやまは。さつき下へおりたがそれなりで顔出しもしねへ。ちよつくりよんでくんなせへ　女ぼう「サアそのことで。下は大さはぎでござんすわいな　北八「なぜく　女ぼう「アノおやまが。おとこのきりもん着て。はしつたさかい　北八「ナニはしつたとは。にげたのか。ソリヤ大へんだく。その男のきものといふはおれがのだ　女ぼう「かいな。ソリヤ又何として。おまいさんのをきていたぞいな　北八「イヤドへいつて。みんなをだましてくるから。かしてくれろといつたによつて　女ぼう「それでかしなさつたのかいな　北八「そふさ。時にそのおやまの欠落したは。こつちにやアしらねへこつたから。なんでもこゝの抱へにちげへはあるめへ。きものは。ぜひとも爰の内から。どふぞしてもらはにやならねへから。ドへそふいつてくんなせへ。はやくく　女ぼう「マアなんにいたせ。そないに申ませう　ト下へおりてゆくと、ほどなくこゝのていしゆと見へて、おにぶとりのどてらをきたるでつくりとせし大男、りやうりにん、おとこども、二三人引つれ、どやくと二かいへ来り、ていしゆ北八がまくらもとに立はだかり「コレ吉彌にきりもんかしたといふわろは。こなはんかいな　北八「オ、おれだく　ていしゆ「おどれかい。ほてくろしい事さらしたな。マアおきくされ。ドレ顔見せさらせ　北八「イヤこの才六めらは。何でおれを。そのよふにぬかしやアがる　ていしゆ「ぬかしたがどふしたりやア。おどれ吉彌めにきりもんかして。欠落させおつたからは。ゆくさきはしつてけつかるじやあろ。ありていにほざき出しくされ　北八「とんだことをいふ。何おれがしろふのか　ていしゆ「イヤくそないにぬかしさらしても。われが人にたのまれて。糸引くさつたにちがいはないわい　北八「コリヤきさまたちは。おつにいひかけをするな　ていしゆ「頤たゝかすな。しよびきおろせ　トみなく立かゝり、北八を手ごめにする、このとき次の間に彌次郎目をさまし、このていを見て、はねおき来り「コリヤおれがつれだが。うぬら此男をどふする　トていしゆをつきのくるとりやうりはん「イヤこなやつも同盗じやあろ。ふたりともにひつくゝれ　トいづれも小ぢからするものども彌次郎北八を、両はうから引たて、下へおろし、ほそびきをもつて、ついに

ふたりをぐる〳〵まきにしばりたるに、彌次郎はいつこうがてんゆかず、いさいの事をきゝてぎやうてんし、北八もいまさら、おやまにきものをかしたる、あやまりをこうくわいし、うたがひうけたるうへ、かゝる目にあひ、くやしけれども、りのとうぜんにいひわけたゝず、だい所のはしらに、つながれゐるめんぼくなさ、ここに夜もあけはなれて、きん所のもの共、おひ〳〵見まいにきたるうちに、これも此しやうにいやのていしゆとみへて、少しおぐちでもきかふといふ男名は　十吉「わしや今きいたが。吉彌めが。きよといとさらしたげな。その手引したやつらは。どしたざいな　ていしゆ「あこに。くゝつておいたわいの　十吉「店主よんであづけさんせ　ていしゆ「旅のもんじやてゝ。うそつきさらして。ほんまのうちをゑいはんわいの　十吉「ソリヤきのどくなもんじやわい　ト二人がしばられてゐるそばへきたり　十吉「コレこなんたちは。わるいがてんじやわい。ソリヤはて。友だちづくなら。たのまれまいもんじやないが。もふこないにばれてはしよとがない。ありやうにいふて。めん〳〵の身ぬけするがゑいわいの　彌次「イヤわつちらは。かたつきしなにもしりやせん。たゞ此男がほんのしやれに。きものかしたばつかりで。うたがひうけたといふもんだから。どふぞあなたのおとりなしで。わつちらをたすけて下さいませ。コレ手をあはせておがみたくても。しばられてゐるから。足を合せておがみます。コリヤ〳〵北八もおたのみ申せ　北八「ハイ南無金比羅大權現さま。此災難を免れますよふに。なむきめうてうらい〳〵　ていしゆ「エ、何ぬかすぞい。こんぴらさま祈るならそないなこつちやきかんわい。さいわいおどれ裸でおるから。水あびせてこませ。垢離とつて祈りくされ　北八「イヤわつちは全体こんぴらしん〴〵でござりやすが。是まで願をかけやすに。人とちがつて。水をあびて寒い目してはきゝやせぬ。なんでもきものをたんときて。売汁にあつかんをひつかけたうへ。巨燵へくびつきりのたくりこんで。願ふとすぐに御利生がござりやすから。せめてきものはきずとも。いつぱいあつくして下さりませんか　ていしゆ「エ、尻ねずりくされ　彌次「イヤ御尤でござりやす。わつちこそは此男めがまきぞへ。ほんの災難。そしてこんな目にあひますと。持病の癪がさしこんで。

○身ぬけ　脱退。

○かたつきし　かたつきりさもいふ、片寄り、片方の意。

○きめうてうらい　歸命頂禮。

○尻ねずりくされ　尻甜りの意か。

○たらされ　欺される。

○みだれ　上方にて乞食のことを云ふ。

○「うとましや」の狂歌　赤恥をかいたを「赤はだか」にかけ「合羽」の「羽」を「はづかしき」にかけしもの。

アイタ、、、、　ていしゆ「しやくがいたいなら。胴中の縄を。もちと堅う〆てやろかい　「イエ〳〵わつちがしやくは。じんくおどるとおさまりますから。どふぞ此縄といて下さりませ　十吉「ハ、、、、コリヤねからやくたいなやつらじやわい。勘太さんゆるしてやらんせ。たかで敵等はゑらいあほうじや。なるほど吉彌めに※たらされくさつて。きりもんかしたまでのこつちやあろぞいな　ていしゆ「サイナそないにいはんすりや。いかさま賢ふも見へんわろたちじや。べしてのこともありやせまい。いなしてやろかいな　北八「それは有がたふございやすが。わつちやア此はだかのまゝでは。けへられやせん　ていしゆ「いなれざいなんすな〳〵。こちにもいひぶんがあるさかい　北八「イヤそんならめへりやせう　十吉「サア〳〵いなんせ。あたあほらしい衆じやわいな　トふたりがなはをといてやる　彌次「きた八手めへのおかげで。とんだめにあつた　北八「おめへよりかおらア此とふり。きものをとられて。ハアくつさめ。ヲヽさむ〳〵　ていしゆ「ハ、、、あんまりかわいそふじや。何なと一まい。くれてやろかい　北八「ありがたうございやす。どんなものでも。どふぞいたゞかして下さいやせ　ていしゆ「エヽ※みだれめがいふよふなことぬかしけつかる。てきに似合たよふに。納屋の菰一まい。もて来てやれやい　下男「イヤこゝにきりふの俵がある。これきていかんせ　北八「ナニそれをきろとか。エヽ情ないことをいふ　ていしゆ「せつかくのおれが心ざしじや。きていなんかい　北八「ハイ有がたふございやすが。わたくしはやはり。はだかゞかつてゞござりやす　彌次「けへぶんのわりいおとこだ。おいらが合羽をかしてやろう　ト彌次郎が、もめんがつぱをとつてきた八にうちきせながら

※うとましやかいたる恥も赤はだか合羽づかしき身とはなりたれ

はては大わらひとなり。ふたりはやう〳〵のことにて。此所をのがれたち出けるとなり

道中膝栗毛六編下編終

東海道中膝栗毛七編

道中膝栗毛七編序

穆王※。八駿に御して。王母が桃を甘じ。靈鷲の說法を聽ぬ。ひとへに名馬の功によれり。こゝに彌二郎兵衛。喜多八は。心の欲る所に隨ひ。膝栗毛にのりが來るまゝ。四方に奔走して果もなきは。八駿にも勝てたのしかるべし。かの生唼。磨墨ならば。八十うぢ川の爭ひもあるべきに。人喰ひ馬にも合口同士。勝手次第の道轡は。これ此栗毛の德ならずや。盡ぬ趣向に七編の緖を。作者の乞に任せ。予も又乘かゝつて筆を揮事然。

文化辰春　　龜山人蘭衣述

○穆王　周の穆王の傳說なり、名馬と上手な調馬師とを得て世界大旅行を試み、西王母と瑤池といふ處で宴遊したとか、お釋迦の說法を聽いたとかいふ。

述意

○洛陽の名所舊跡しるすにいとまあらず予若年の比浪花にありし時おり〳〵上京して逗留せしがそは十とせあまり以前のとなるゆへ悉く忘失し今此編にはやうやくその十がひとつをあらはすのみ

○爰にいへる如く僕浪花に七とせあまりも居住せしが花洛へは唯用弁の爲のみに登れば一覧の目をよろこばせしまでにて委しからず地理順道もおぼつかなしが今の流行に照らしあはさばまはり遠くものゝおくれたることも多かるべし

○五編目著述の前に予おもひたちて勢州に杖をはせ參宮道中のおもむき今のむかしにかはれるあらましを補ひあらはしたればその心ざしやまず既に六編におよばんとする時上京の念ひをおこし其儲とゝのひたるがはからずも類燒にあひてしからざればやむことを得ず予がむかし見しまゝをしるしてやみぬ故に今七編も右におなじければそれこれをさつし給はるべし

○近比此書に類せし版本さま〳〵出たりしを予悉くもとめ得て閲するにおの〳〵滑稽の花實を備へて其おもむき尤ふかし恐るべし予が家の膝栗毛既に七篇の老馬となりて他の駿足におくれんとをこや六編にして筆をおくにしかじとおもひたりしに書林榮邑堂のあるじ連にすゝめて冊中の發客が浪花の津にいたらん限りまであめよと乞ふによりツヽいなみがたくて終にこれを著すものならし

東都　通あぶら町のみどり橋

十返舍一九誌

道中膝栗毛七編　上

十返舎一九著

或人の句に。花尊都に本寺〳〵かな。と詠たりしは。實も寺院堂塔の廣大無邊にして。其莊嚴麗秀なるいふもさらなり。殊に花の春紅葉の秋は。東西南北に。名だゝる勝景の地ありて。加茂川名酒の樽とゝもに。人の魂をとばしめ。商人のよき衣きたるは。他國に異にして。京の着だをれの名は。益西陣の織元より出。染いろの花やぎたるは。堀川の水に清く。釜もとのおしろい。川端のふしのこは。ゆきをあざむき。御影堂の扇伏見のうちわに。風匂ふ香堂前の粽。丸山かるやき大佛もち。醍醐の獨活芽くらまの木芽漬は。庭訓往來にいちじるく。東寺の蕪壬生の菜は。名物選にはなたかし。其外名產奇製の品物あまたある都に。たま〳〵入こむ騷客の兩人。彌次郎兵衞喜多八とて。ぬけまいりの刷毛序にまぐれ出たれども。淀川の下り船に。かどちがひして荷物を失ひ。五條新地の一ッぱい機嫌に。はや呑込して丸裸となりたる。きた八の名にも似ず。同行の彌次郎兵衞が木綿合羽を。借着せしほどの仕合なれば。かゝる洛陽の地もおもしろからず。うか〳〵と。新地もどりの朝風身にしみわたり。五條のはしにさしかゝりたるに。此所はいにしへ。牛若丸の千人切したまふ所とあれば。きた八しほ〳〵と打かたぶきて

○商人のよき衣きたる　「文屋康秀は。たくみにてそのさま身におはず、いはゞ商人のよききぬ著たらむが如し（古今集序）

○京の著だをれ　京の著倒れ、大坂の食倒れといふ。

○釜もとのおしろい　釜元白粉といふものあり。

○川端のふしのこ　寺町通竹屋町に、御用ふしの粉司川端陸奥掾あり。

○香堂前　革堂前か

○くらまの木芽漬　「庭訓往來」に「城殿扇、仁和寺眉作、姉小路針、鞍馬の木芽漬、醍醐の烏頭布、東山の蕪、西山の心太」とあり。

○壬生菜　東京にていふ京菜のこと。

○きた八の名にも似ず　「きた」を「著た」にかけ、名はきた八なれど、何も著るものなしの意。

○牛若丸の千人切　辨慶の誤。

○「かゝる身は」の狂歌　「戀し」を「牛若」にかけ、裸にて寒ければ弁慶縞の布子こひしと云へるなり。

○済生湯　「京羽二重大全」に「済生湯三條東洞院東入、谷安映」とあり。

○おゑさま　おかみさん。

かゝる身はうしわか丸のはだかにて弁慶じまの布子こひしき

かくて東にわたりて。河原院の舊跡門出八幡ちすぐどをりとなして。高瀬ぶねの綱にひかれてたどりゆく道すがら　北八「おもへば／＼つまらねへとになつた。どふぞふる着屋でも見つけたら。どんなでも綿入が一まいほしいが彌次さん。いゝちゑはねへかの　彌次「ナニかわずともいゝにしたがい。ふどつ子の抜参に。はだかになつてけへるは。あたりめへだは　北八「それだとつてさむくてならねへ　彌次「そんならさいわいこゝに湯屋があるナントちよつくりあつたまつていかねへか　北八「ホンニこいつはきめう／＼彌次さんおさきへありがてへ　トいふもく／＼にさるかうしづくりのうちのいんをくゞりて、すつこんで、はだかにならふとすれば、そこのていしゆ「モシ／＼こなさん誰じやいな何さんすのじや／＼　トこがめはまて、北八あたりを見廻し見るに、ゆやでなし「エ、いめへましい湯屋かとおもつた　ていしゆ「ハ、、、こちの暖簾に。ゆのじがあるさかいそれでせんとうかとおもふてじやの。アリヤ済生湯といふ。ふり出しぐすりの名じやわいな　彌次「ホンニこいつは大わらひだ　北八「また一倍さむくなつた。いめへましい　トこゞへながら、みたれのふろきやにはあり見せさきに、ふるぬのこ、ふるきせんこしおりきたる彌次郎兵へをくごきて、ぬのこ一まいもとめんと、くだんの見せにたちひねくりまはして、こんのぬのこをとつてすかし見「モシこのぬのこはいくらだね　ふる手やのていしゆ「ハイ／＼こつちやへおかけなされ。コレおちやもてこんかいな。おたばこの火もないわいな。赤いの。ひとつちやとくさんせ　北八「イヤ茶もたばこもいりやせんコリヤアいくらだといふに　ていしゆ「ハイ／＼そりやきやうとうよござります。おやすうしてあげふわいな　小ぞう「ハイおちやあがりなされ　ていしゆ「長吉。そりやおぬるいじやないかいな。なぜ。あついちやゝあげんざい　小ぞう「イヤおゑさまが。朝はちやがゆじやさかい。茶ちや焚なとおつしやつてゞござります。それはきのふ。焚たまんまのちやゝでござりますわいな　彌次「いかさま。きのふのお煮花ほどあつて。と

んと河童の屁のよふだ。イヤ屁のついでに。尾籠ながら御ていしゆさん。手水にゆきたい。※おうらをちよつと　ていしゆ「ハイ〳〵雪隠へお出かいな　小ぞう「せつちんはぬるふはござりませぬ。よふわいてじやあろぞいな　ていしゆ「ナニ雪隠を誰が沸したぞい。小ぞう「それじやてゝ。いんまのさきわたしがさんじたさかい。すぐいて見なされぼつぽと煙が出てじやあろ　ていしゆ「エ、むさいといふやつじや　北八「そんなとより此布子はいくらだへ。はやくきめてくんねへ。さむくてこたへられぬ　ていしゆ「おさむくは。もつとそつちやへよりなされ。そないによふ日がさしてじやわいな。きのふも着物かいにお出たおかたが。コリヤきやうとい。ぬくひうちじやてゝ。そこに一チ日ひなたぼこしていなれましたが。そのおかたがちふ、着物買うて着いでもだんない、毎日こゝのうちへ日向ほこしにこうわいなと。こないに。いふてじやあつたわいな　北八「エ、じれつてへ。コリヤアうらねへのか。どふだな　ていしゆ「ハイ〳〵かうじやわいな　北八「やすくしてくんねへ　ていしゆ「ソノ紺の

○河童の屁　タワイなきこと。

○おうら　便所のこと。江戸語にあらず。

○だんない　大事ない。

○紺のおひゑ　「慶長見聞集」に「異老若き頃までは、諸人の衣裳木綿布子なり、麻は絹に似たれはとて麻布を色々に染、わたを入、おひへと云ふて上著にせしなり」とあり。

○後家のしちや　大事を取つてなか〱貸さぬを云ふ。

○脾胃虚　消化不良。

おひゐじやな。ト そろばんはちく〱 三拾五匁とんとぎり〱じやわいな　北八「たかい〱。わつちらはゐどものだが。古着は商賣がらで。いくらもとりあつかつてゐるから。やるもんじやアねへ。ほんとうの所をいひなせへ　ていしゆ　ハア御商賣がらとあれば。おまいさまも古着屋なされてかいな　北八「イヤわしは。質せうばいさ　ていしゆ「しちとあれば何かいな。おとりなさるのか。置なさるのかいな　彌次「おくのが此男のせうばいさ　北八「それだから。質におく時の入用からしてかゝらにやアかはれやせぬ。此ぬのこはどふしても。壹〆より外は貸めへから。貳朱ばかりにかはにやア損がいく　ていしゆ「なにいひじやございな。後家のしちやへもていても。金壹分はものいはず。かすわいな　北八「とんだことをいふ。どふして壹分かされやしやう　ていしゆ「ナニ壹分つかん事はありやしよまいがな　北八「それともおめへ。じきにうけなさるか　ていしゆ「うけるわいな　北八「そふいつても。あてにやアならねへ。それよりか此間の股引の出入はどふしなさる。そして袷の時がしもあるし。それもおめへ。子ども衆が脾胃虚して煩つてゐるうへ。かみさまが疫病でしなれたけれど。佛かゝへて葬禮を出す工面が出來ぬと。たつてのおたのみゆへ。貸てあげたものを。義理のわるい。いつそのこと。此布子はその袷のかたに。只とつておきやせう　ていしゆ「アヽこれ串。とつともふ。やくたいもないこといふてじやわいな。わしが嬶が。いつ疫病でしんだございな。あたけたいなこといはんすわいな　トていしゆ大きにはらたてる彌次郎兵へをかしく「どふも此男は。くちがわるくてなりやせん。了簡しなせへ。そして何角とめんどうな。そのぬのこも。壹貫にまけてやりなせへし　ていしゆ「よござります。朝商ひじや。まけてあぎよわいな。シヤン〱〱　北八「まづは。ぬのこにありついた　ト彌次郎に代錢をはらはせ、かのぬのこをきて、彌次郎兵へに木綿合羽をかへし、此うち出るとて、のれんを見れば、とらやとあるにおもひよりて

○「和藤内」の狂歌　古著屋が虎屋なるより、和藤内を持出せしもの。和藤内の名の三官を三貫に利かせ、その父の老一官を一貫に利かせたり。
○ちやらぼこ　いゝかげんなこと。
○紺の看板　紺無地の衣服、中間の役服、役服を看板といふ。
○紫ぼうしの野郎　女形の役者が紫帽子を頭に戴くより云ふ。
○宮川町　芝居町。

※和藤内三貫あまりの古布子老一くわんにもとめこそすれ

それより。きた八は忽に元氣をゑて「ナント彌次さん。すさまじかろう。古着屋めを※ちやらぼこで。はゞらかして。壹貫に見おとしは。やすいもんだ。見なせへしっ　まだ衿垢もつかねへものを　彌次「※紺の看板と見へておいらがおともののよふで。てうどいゝの　北八「ときにこゝらは何といふ所だの。どうてきに。女いきなたぼがちらちらくするは。　彌次「ハ、ア紫ぼうしの野郎どもが見へるから大かた宮川町といふけんとうだ　北八「くるそくく美しい妓どもがくるいゝときおいらアきものを買てよかつたまんざらはだかのうへにその木綿合羽じやアあいつらにすれちがつてもげへぶんがわるい　ト にほかに乗りかきあはせて見へはりながら向ふより來るおやまはいがにすれちがひさをれば一人のおやまふりかへりきた八を見こ　「はつねさん見なませあの人さんの着物きりもんにおつきな紋がついてじやわいなヲ、おかしヲホ、、、　はつね「ホンニあほらしい人さんじやヲ、すかんやのヲホ、、、、　ト打わらひ行過るゆへ彌次郎兵へも心付　チヤノ\きた八。手めへのきものを見や、背中のよこちよに。大きな紋所がくつついていらア　北八「どこに\／　トふりかへりてよく見れは、のぼりを、こんにそめたるぬのこゆへ、たまつさ見こなしたねども目あたりへ出るさ、大きなもんごころ、ありありとすいて見ゆる　北八「コリヤ大變\／　彌次「ハ、、、、すそのほうには。鯉の瀧のぼりが見へるから。

○三五郎の腹切云々　三代目嵐三[illegible]、[illegible]。[illegible]三五郎、[illegible]。[illegible]川友吉。

○火なは　中賣、殊に煙草盆、酒たばこを扱ふを火繩番衆と云ふ。

○ひときり　一幕に同じ。一切は上方語なるべし。

○みづから宇治山　「みづから」は既出。宇治山不明。

○腹がへりまの大根　練馬の大根のもぢり。

こいつ臟のはぐらかしものだな　北八「ヱ、古着やめがとんだ目にあはしやアがつた。どふりで安いとおもつた。ぶんのめして來よふ　彌次「ナニうつちやつておきやれ。みな手めへがべらぼうからおこつたこと。さきは商賣だものを。しかたがねへ　北八「ヱ、いめへましい　ト[illegible]　[illegible]「サア〳〵ひやうばん〳〵。今の三五郎の腹切じや〳〵。此あとが、あら吉とて友吉が所作ごと。ひやうばん〳〵〳〵　ト[illegible]　[illegible]「モシナおまいさん方ひとまく見ておいでんかいな　[illegible]「いかさま「ナント彌次さん、京のしばゐも、ひときり見やうじやアねへか　彌次「おもしろからう女中いくらで見せる　[illegible]「[illegible]ますわいな。わたしがどふなとするさかい。マアお出なされ　ト二人を[illegible]　[illegible]「みづからうぢやま〳〵。まんぢうよいかいな一茶アあがらんかいな。ちやゝどふじやいな一ばん付ゐほん〳〵　彌次「ごうぎに大入だ。しかしゐどの芝居の半分でもねへ　北八「アゝたいくつだ。一ッぱいのみたくなつた　彌次「おらア腹がへりまの大根だ。くはしでも買てくをふ　商人「みづから宇治山　彌次「なんだ手づからうつちやる。勝手にさつせへ　商人「まんぢうどふじやいな　北八「こいつがいつちわかつてゐる。コレまんぢう。三ツ四ツくんなせへ　商人「ハイ〳〵。三文ヅヽ、でござります　となりさじきのけんぶつ「コレまんぢうやさん。どしたもんじやぞい。こちの弁當へしつぶしじや　商人「ハイ〳〵おゆるしなされ　彌次「アイタヽヽヽ。ごうぎに足をふんだ　商人「ハイこれは[illegible]ちとおゆるしなされ　北八「コリヤどふしやアがる。人のあたまのうへを。金玉をひきずつてとをりやアがる。ヱ、きたねへ〳〵　となりさじきのけんぶつ太郎兵へ「ヲ、權兵へさん。何買うてお出たざいな　權兵へ「[illegible]太郎兵衛さん。待てじやあろ。わしや。

○あしをつけて　關係を持つこと。引繋りを作ること。

今あこの棧敷でな。氣疎味ひもの喰くてじやさかい。ソレ見てゐて。おそ遲なつたわいな。サア〱こ此な様いなもんじや　ト竹の皮づゝみを出す　太郎兵へ「ハア鯖のすもじかいな。コリヤきよとい〱。その飯は弁當のかはりにして。さかなはへがして。酒のさかなにさんせ。それがよいわいな　權兵へ「さよじや。竹の皮はもていんで。草履のはなをたてるわいな。イヤときに。一盃やろかいな　トちいさなちよくを取出し、ふろしきにつゝみし、とつくりよりついでのむ、北八これを見て、小ごへになつ彌次さん見ねへ。うまそふにのみおろかうらやましい　彌次「エ、いめへましいとをいふおとこだ　ト北八「コレおぼうさん。おまんひとつあげやせう　おのれがくひのこしたまんぢうひとつ、となりさじきの子どもにやる、これにて※あしをつけて、さけをのもふさいふ下ごゝろなり　太郎兵へ「コレハお有がたふござりますわいな　北八「おめへがたアよいものをあがりなさる　太郎兵へ　おまいも御酒はおすきかいな　北八「さやう〱、めしよりは好物さ

太郎兵へ「ソリヤよいおたのしみじやわいな。コレ權兵衛さん。もひとついたゞこかいな。

コリヤよい酒じやな　權兵へ「さよじや。ホンニおとなりのお客。御退屈じやあろ。是なとひとつ。チト、、、あが

○もつけな顔　意外な顔。勿怪の字音。

○しだし　これに大體の狂言の筋を云はしむ代役のこと。

○大根　江戸にて云ふ。ごき卸すより起るといふ。

○おちがきて　落語の落より來る。

らんかいな　トちやわんをさしいだすきた八手に茶とりはやくいたゞきこ「ハイありがたうございやす　太郎兵へ「しかし。さめはせんかいな。モシおてうしごと。それへあぎよわいな　ト茶やのさびんをきた八にわたせば、もつけなかほしてうけとりついでのめば、ぬるひ茶なり　北八「エ、ちやだそふなペツペ〳〵　太郎兵へ「おぬるなつたじやあろ　北八「とてもぬるい序に。どふぞ是へその徳利のをうめて下さいませ　太郎兵へ「これはしたり。コレ見なされ。こないになつたわいな　トとつくりをさかさまにして見せる　彌次「ハ、、、ごうさらしな　北八な「いめへましい。まんぢう一ツぼうにふつた　トぶつ〳〵くちのうち、こゞといひながら、ふくれているうち、ひやうし木「カツチ〳〵　見物「イヨ口上さまア　口上「とうざい〳〵　ト此内口上もすみまくのうちにて　たいこ「てん〳〵てれつくてん〳〵　ひやうし木「カツチ〳〵カチ、、、　三味「ツ、テン〳〵　まくひらくとはな道より※しだしのやくしや、大ぜい出るとけんぶつのわる口　ーイヨ大根ウ十把ひとからげじや　北八「ナニ大根とは。アノ役者のとか。何のこつた　見物「ヨウでけますの　北八「ありがてへと申やす　ト此きた八いたつてしばゐずきゆへ、まくがあくとむちうとなり、何もかもうちわすれて、むしやうに大きなこへしてほめるゆへ、見物みな〳〵おかしがり、きた八のはうを見ているとほかにして　ーイヨ盲𧥄さまア　北八「ヨウ〳〵大根め〳〵　ト此大根といふ事は、上がたにては、役者の下手なものを大根といふ、北八そのわけをしらず、人が大根〳〵といふを、きゝいたふうに、やたらに大根〳〵とよびたつるを見物北八をわらふ、かみがたにてもうろくといふは、ありすはといふ事也、きた八これをしらねば　北八「彌次さんきいたか。こつちの役者には。いろ〳〵のへんちきな名がある。大根だの盲𧥄だのと。よもや俳名じやアあるめへ　彌次「大かた役者の仇名だろう　北八「そんなら。今出た役者がもうろくだな。ヨウ〳〵もうろくありがてへぞ　トいふと、見物にごつとわらひながら、きた八のはうばかり見て、ざつ〳〵とわらひながら　ーイヤ向ふさじきのもうろくさま。大でけ〳〵　けんぶつ「あほよ〳〵。向ふさじきハ。もうろくのあほうヤアィ　北八「なんだ。むかふさじきのもうろくたア。なんのこつた。はなつたらしめら　彌次「ハ、、、、。はなつたらしたア手めへのこつたは　北八「なぜ〳〵　彌次「上がたで。もうろくといふは。折助のことだは。手めへ紺のかんばんをきてるか

○だいなし　紺のだいなしといふ、紺の看板に同じ。

○うき世ものまね　すべてのものゝ假聲。

○感和亭の著す云々　「旅觀帖」に見えたるは京都のことにあらず、兩國廣小路の事なり。

○腹が北野の御神木　竹は八幡の御神竹、梅は北野の御神木、といふ流行唄の文句より、腹の減りたる意に用ゐたり。

ら。それでみんなに。ひやかされるのだは　北八「ヱ、そふか。そんならとつくにそふいつてくれゝばいゝに　見物「あほよ〳〵　北八「イヤこいつらは。ふてへやつらだ　ト むしやうにりきむと、見物みな〳〵さはぎたち、けんくわよ〳〵と大そうどうとなると、さじきはん四五人来り、北八をさらへ、引出んとする　北八「コリヤどふする　さじきはん「おまい狂言の邪魔になるわいな。こちごんせ　見物「そいつはやういなせヤイ　北八「なにぬかしやアがる　さじき「ハテよいわいな　彌次「コリヤきさまたち。此男をどふする　さじき「イヤおまいもごんせ〳〵　トふたりをちうにつりあげ、下へかきおろし、くち〴〵に、何のかのとべちやくちや、まるめられてのぼせあがり、せんかたなく、ヱ、めんごうだと、兩人こゝをたらん〳〵しばいを出て、ぎをんまちのかたにおもむく　北八「ヱ、ごうさらしなハ、、、、

　木戸錢を棒に古手の布子にてしばるも紺のだいなしにせし

それよりゆき〳〵て。祇園の社にまいる。御本社の中央は。大政所牛頭天王。東の間は八王子。西の間は稲田姫聖武天王の御宇。吉備大臣。唐土より歸朝の時。播磨の廣峯に。垂跡し給ふを崇奉れりといふ。其外攝社末社しるすにいとまあらず。参詣日日に群集し。茶店あまた祇園香煎の匂ひ高く　歯磨うりの居合拔。賣薬のいひたて。うき世ものまね能狂言。境内に所せきまでみち〳〵たり。　こゝにもさま〴〵方言おかしみあれども、そのいはむと、感和亭のあらはす、旅觀帳に、とふりたれはこゝにりやくす、彌次郎兵衞きた八こと〴〵くじゆんぱいして、南の楼門を出ると、二けんぢや屋とうふでんがくのめいぶつにておかまへだれしたる女ども大ぜい、かどにたちて、しやべる　「おやすみなされ〳〵。これへおはいりなさらんかいな。コレナおしたくなさらんかいな　彌次「ハ、アこゝが川柳点に。とうふ切ル顔にぎをんの人だかり。といつた所だな。アレきた八見や。こいつは妙だ〳〵　トのぞひて見れは女のとうふきる音「トント、、、、、トン〳〵　北八「ホンニおもしろへ〳〵。イヤときに。こゝで一ぱいやらかしはどふだ。ちよと腹が北野の御神木だ　女「サアおく八おはいりなされ　ト此内兩人おくへとふる　女「おちやあがりませ　北八「でんがくで飯にしよふ酒もすこし　女「ハイ〳〵　彌次「京では何でも他國ものと見ると。とほうもなく。高

○蔦引　餡掛のこと、
○おむし　味噌。

くとたといふをだかた。ゆだんはならぬ　北八「ホンニそれ〳〵。三文でも割をくつちやアごうはらだ
ト此うち女さかづきをもち出、口ミりに菜のしたしもの、丼に人持出　女「たゞ今。おでんがでけます。マアひとつおあがりなされ　彌次「よし〳〵。モシ女中。酒はいくらづゝだの、女「ハイ〳〵わたし所の御酒はよございます。六拾匁がへでございますといな　彌次「エ、それじやアわからねへ。此どんぶりはいくら　女「それかいな。五分でございますわいな　北八「めしをはやくたのみます　女「ハイ〳〵かしこまりました　ト ぜんを二ぜんにめしさらでんがくを持出　「ハイおでんが出けました　彌次「こいつは変な田楽だ　女「ソリヤ蔦ひきじやわいな。おむしのは只今　彌次「でんがくはいくらヅヽだ　北八「ハヽヽヽいかにさきへ直をきくがいゝとつて。田楽はきかずといゝじやアねへか。サアーッぱいはじめねへ　彌次「チット〳〵。なるほどいゝ酒だ。ツほくてねからのめぬ。もふいつぱいつゞけよふ　北八「コレおめへ。こゞとをいひながら。ひとりでのむの。ちとこつちへよこしねへな　彌次「ときにこれではいかぬ。モシ〳〵何ぞさかなをひと　一ハイ

○はかり　錠銀小玉銀の受授には秤を用ふ。
○ざつとした所　大凡。
○てんごう　わるさ、いたづら。

〳〵　トやがてすゞりぶたを持來る　彌次「この硯ぶたはいくらだ　女「ハイ貳匁五分でござります　北八「こいつはたけへ〳〵　彌次「へ、うつちやつておきや。あんまりあたじけなくしやアがると。おれがこまらせてやる仕法がある　トかきつけを見てはかりにそへてもちきたる　トだん〳〵さかなを出すごとにそのねだんをきいて出しだけのものいこらずくひしまひて　彌次「サア〳〵女中勘定をたのみます　女「ハイそれへ　北八「チヤ〳〵拾貳匁五分たアごうせへにたけへ〳〵。貳朱ぐらひのものだ。ざつとした所が此書付だ　彌次「イ、やすいものだ。ソレつりをもつてきな。サア〳〵きた八。荷物ができた。彌次さんまけて貰ひなせへ　彌次「ドレ〳〵北八見や。これをみな持てけへるのだぜ　トすゞりぶた、大ひら、どんぶり、などを、みなはながみにてふきかたづけるゆへ　きた八「彌次さん。それをどふする　彌次「コレ女中。コリヤアみな。もつてけへりやすぜ　女「イエそれは　彌次「ハテさつきに。此どんぶりはいくらだときいたら。五分だといつたじやアねへか。そして硯ぶたはといへば。貳匁五分だといふ。よしか。大平が三匁。よしか。此鉢はときいたら。これが三匁五分と。きさまがいつたにちげへはあるめへ。そこでしめた所が拾貳匁五分。わたしたかいひぶんはあるめへ　女「チホ、、、。よふぢやら〳〵と。てんごういふおかたじやわいな。チホ、、　彌次「イヤ。チホヽじやアねへ。ほんとうにもつてけへる　トきじめになつてふろしきにとふこするゆへなきゆきつぶし、「モシナ。わたしのいふたは。おさかなのことでござりますわいな　彌次「ハテさかなの直段きく氣なら。此すゞりぶたにもつてあるさかなはいくらだときゝやす。それを此すゞりぶたはといつたら貳匁五分だといつたじやアねへか　女「そじやてゝそれがまあ　彌次「ナニいさゝさかあるもんだ　トかへりついふところへ、まへにいれたる[illegible]出「ハイこれは。あなたの御尤もでござります。おもちなされませ。そのかはり。道具の代物はいたゞきましたが。あがつたものゝおはらひは。まだいたゞきませんわいな。それを御勘定下さりませ　彌次「なるほど〳〵くつたものは。たかゞしれ

○うつむけにしやアがる　人を馬鹿にしたる意、

○みそをつけたる　やり損ひの意。田楽の味噌に云ひかけたり。

○れん木　すりこ木。

てある。はらひやせう。いくらだ　男「ハイ七拾八文五分でござりますわいな　彌次「とほうもねへことをいふ。おいらを旨だとおもふか。コレエたつた五百か六百がものをくはせておいて。大それたことをぬかしやアがる　男「イヤわたくし方では。何じやあろとおさうなは。大坂から歩行荷で。とりよせますさかい。駄賃がゐらうかゝりますわいな　彌次「さかなはそれにもしてやろうが。青物はたかゞしれてある。アノはじめに出した。菜のしたしものはいくらにつく　男「ハイあれはな七文五分　彌次「ヤアあれが七文五分たア。あんまり人をうつむけにしやアがる。二文か四文がものだ　男「そないにおつしやりますな。ありや京の名物で。東寺菜と申ますわいな。わたくし方では別につくらせまして。虫のくた菜はのけますわいな。そして茎もふといほそいのないやうに。撰出してあげるわいな。むさいおはなしじやが。糞も絹ごしにしてかけますはいな　彌次「とんだことをいふ。そんなとがあるもんか。何でもくつたもの、代はゝ弐朱ばかりやろう　男「イエ／＼さよふじやないませんわいな。ハテたかいとおほしめすなら、あがつたものを。残らすおもどし下さりませ　ト此言にこまり、彌次郎兵へやつきたなりて、せりふにおや、りくつづめにおひて、大八こみこなり、まじくしく相は　彌次「いま／＼しい。言分があれど。かんぢやうづくで恰好がわりい。了簡してやろう。よくおらねへぜ　北八「エ、めんどうな、彌次さんはじまほへていやアがれ　トにこ／＼まほしてかけ上りはう／＼この所を出れば　女「よふお出またおちかいうちにへ　彌次「くそをくらへハ、、、、

又してもぎをんの茶やにでんがくのみそをつけたる身こそくやしき

それより境内を出て。もとの四條どをりをゆくに。日もはや七ッさがりとなれば。いそぎ三條に宿をもとめ。足休んとたどりゆくさきにたちて。近在の女商人。いづれも頭に柴薪あるひは。梯子連木。槌などをいたゞきて。四五人打つれだち「はしごかはしやんせんかいにやア。れん木いらんかいにやア　北八「コウ

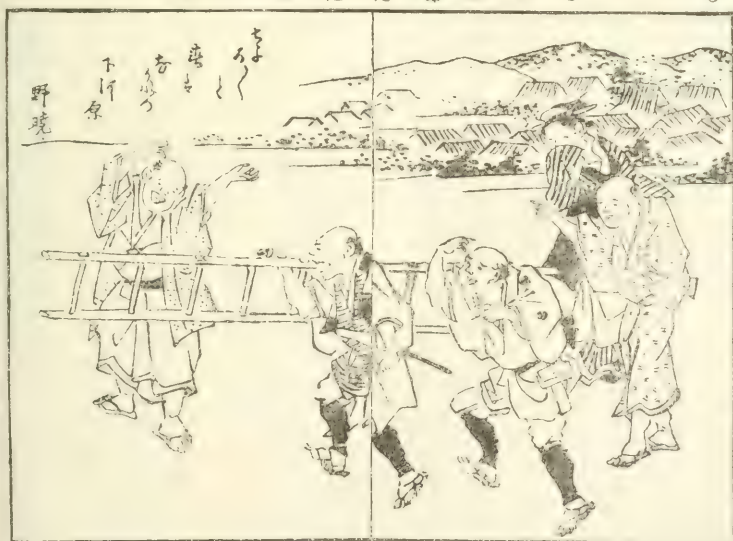
○うどん屋の粉なひき　肩へかけて石臼を廻す。頭の上を臼が廻る故、頭にて廻すやうに見ゆ。

見ねへ。ごうせへなものをあたまへのつけてゆくは　彌次「アノまた尻をふるざまはいへ、、、　女あきん人「たきゞかはしやんせんかいにやア　（トゆき〳〵て河原に出ると、かの女ども、おの〳〵こゝに荷をおろし、より火打にて、たばこなどのみてやすむ）　彌次「ハ、アさすがは都じや。どいつも小ぎれいな面つきだ。おつとひやかしてやろふか　北八「またおめへ。へこまされよふとおもつて　彌次「ばかアいふな。手めへじやア有ルめへし　（トきせるをいだし女あきん人のそばへより）　御無心ながら。火をひとつ。　パッパ〳〵〳〵ときにおめへがたア。とんだおもてへものを。よくあたまへきけてあるきなさるの　女「さよじやわいな　北八「ナニ此くらへなものを。おいらなんざア。廿〆目や卅〆目ある石を。あたまでふりまはしたものだ　女「おまいさんは。うどん屋の粉なひきじやあろわいな　彌次「エ、手めへ。だまつてゐろ八　女「おまいさんがたア、どふぞ此連木買うておくれんかいな　彌次「ナニすりこ木か。ア、かいてへが。コリヤアほそい。わつちらが所じやア、なんでも材木のやうな。そして四角なすりこ木でなくちやア間にあはねへ　女「ヲホ、、、、。四角にした連木で。おむしすらんすなら。大かたすりばちも。四角じやあろわいな　彌次「そふとも〳〵おいらが所じやア穴藏でみそをする　女「ヲホ、、、、きやうとい。きさくなおかたじやわいな。アノ連木おいやなら。梯子かうておくれんかいな　彌次「ハ、、、、はしごおもしろへ。いくらだ　女「けふはなにもよふうらんさかい。安してあぎよわいな。六匁下んせ　彌次「弐百ばかりなら引受やうさ　女「アノぢやら〳〵いふてじやとわいな。もちとかうて下んせ　彌次「いやだ〳〵　女「おまいさん。こないにあちよふしてあるわいな。モシ五匁にあぎよかいな　彌次「いや〳〵　女「よいわいな。是もていんだら。ひかられよふ。弐百にまけてあぎよわいな　彌次「ヤアまけるか。情ないとをいふ　女「きやうとうやすいもんじやわいな　彌次「いくらやすくつても。はしごを買てどふするもんだ。内もねへくせ

○梯子の親とこ　梯子の親といふは縦の二本。子は横に打ちたる短き木を云ふ。

に　女「よいわいなサアもていなんせ　彌次「こいつはあやまる。おりやうは。おいらは旅のもので。今宵は三條にとまらうといふのだから。はしごをかつてもしかたがねへ　女「なにいはんすぞいな。いらんものを。つけさんすことはないわいな　彌次「ソリヤもふ。直をつけたが不肖だから。いらねへものでも。袂かふところへはいるものなら。買てもやろふが。何をいつても。此はしごだからおそれる／＼　女「そじやて〻。わたしらを。なぶらんしたのかいなこちや商賣じやわいな。そないなといやじやや。もていなんせ　ト　女ども四五人、くち／＼にやかましくしやべりたちこ、彌次郎を中にとりまきせめたつる、すべて此女あきん人は、みないつてきのつよきものゆへ、なか／＼がてんせず、ものみだかい京の人だち、何ごとやらんとおりかさなりて、ぐるりとりまくに彌次郎兵衛、にげられもせず、大きにこまりはて、さま／＼にいひわけし、又はりこみいつて見ても、いつこうきゝいれず、あいてはみな女のことなり、けんくわにもならず、せんかたなく／＼、錢二百文出してやり、とう／＼はしごをかいとり、人の見るまへすてられもせず、見物はどつとわらひにちる　彌次「こいつは。いくぢもねへめにあつた。北八そこらまでかついでくれ　北八「エ、とんだことをいふ。おめへもちなせへな　彌次「又一ばんへこんだごうはらな

いかにせん梯子の親とこのよふな
やつかいものをひきうけし身は

○じやうもん　素人足のこと。

○「是もまた」の狂歌　梯子を擬人せるもの、京へ上ると、梯子にのほるをかけたり。

かくて四條どをりを。寺町へさがりてゆくみち〳〵も。梯子のもちおもりして。つぶやきながら「ナントきた八手めへ附合をしらぬものだ。ちつとばかりもてくれろへ　北八「いかさま。おめへ心がらとはいひながら。きのどくなこつた。さぞおもたかろ。こうしなせへ。アノ女どものやうにあたまへきけてもつて見なせへ　弥次「なるほど〳〵　ト手ぬぐひをたゝみあたまへのせ、そのうへゝはしごをのせ、両手にもちそへゆくさ、わうらいの人「コリヤなんじやいな。浮雲てならんわいな　弥次「ハイ〳〵むかふが。さつぱり見へねへであるかれぬ　わうらいの人「コリヤじやうもんがいくそふじや。おひやもて出やしやんせんかいな　じやうもんがいくさは火事があるそふなさいふこと　わうらい「どこに。じやうもんがいくぞいな「アレあこへ。はしごもていくわいな。あほよ〳〵　弥次「何ぬかしやアがる　わうらい「ふぬけなわろじやハ、、、、　弥次「イヤこのべらさくめら　トはしごをあたまへのせたなりに、ぐつとふりかへれば、かのはしごのあとさきにて、わうらいのあたまをこつつり　わうらい「アイタ、、、、何ンじやいどめつそふな。此人中で。ながいもの横たはしにしくさつて。ふらいあんだらじやな。のうてんどやいてこませやい　弥次「ナニたはとぬかしやアがる　わうらい「わしが額の痰瘤がなふなつた。そこらにやないか。見てドんせ　弥次「エ、おいらがしるものか。馬鹿なつらな　わうらい「ふらい頤なわろじや。たゝんでこませやい　トいづれもきかぬ気のものども見へて大ぜいごや〳〵と立かゝれば北八とゞめて「コリヤアこつちらがわるかつた。どなたも御りやうけんドさりませ。サア〳〵弥次さん。あゆびなせへ　弥次「いめへましいやつらだ。北八どふもひとりではもたれぬ。あとのほう八肩をいれてくれぬか　北八「ドレ〳〵コリヤアおれまでをとんだめにあはせる

是もまた噺しのたねよはる〴〵と京へのほりし梯子一脚

弥次「エ、哥どころじやアねへ。どふぞうつちやつてしまいてへものだが　ト今は二百の銭もおしからず、やつかいものゝはしご、うちすてゝゆかんと、わう

○京の水　昔の化粧下に「京の水」と云へるあり。

こいすくなきよこ町へはいり、そつとすておきにげんとすればおりあしく人に見付られてとがめられせんかたなくかつぎおる長久いのかたへぞすてん、〜これもふうちうに宿やご引と見へたる男「モシナおまいさまがたおとまりかいな　弥次「とまり〳〵　やど「こちのうちかたへお出んかいな　北八「おめへどこだ　やど「ツイあこじやわいなサア〳〵お出んかいな〳〵　トうちつれて大はしのかたへゆく

道中膝栗毛七編　下

既にその日もはや西におちて。家ごとに灯火をてらし。かどさす頃。三條小橋をうちわたりて。かの旅籠屋のかたに着たるに　やど引「サア〳〵おとまりさまじやわいな　やどやていしゆ「コレハおはやうおつきでござりますわいな　弥次「アイおせはになりやす　ていしゆ「お荷物は　北八「此はしご壹ツ　ていしゆ「コレハ氣疎おにもつじやわいな。コレ〳〵おたこや。おくへ御案内申さんかい　女「ハイ〳〵お出なされませ　トおくへあんないするにつれおちてふたりはざしきへとをるとていしゆきたりて「今晩は。お客さまがいこ。おすくなふござりますさかい。お湯は焚ませぬ。ツイあこの。小ばしさがる所にきやうとうきれいな湯がござります。これへなとお出なされ　北八「おいらアいゝから。彌次さん。おめへいくならいつてきなせへ。京の水で洗ふと。ごうせへにいろがしろくなるといふとだぜ　弥次「このうへしろくなつちやアたまらねへからよしやせう　ていしゆ「ときにあなたがたは。きん在からお出かいな　北八「イヤわつちらアゑどでござりやす　ていしゆ「かいな。わたくしは又。梯子をおもちなされたさかい。コリヤ近在のおかたで。おやどへ買ふておかへりなさるのかとぞんじましたが。

どして。ゐどのおかたが。はしごを何なされますぞいな　北八「イヤこれには譯がありやす。アリヤゐどからことづかつて來やしたのさ　ていしゆ「ソリヤなんとして。あないなものを　北八「きゝなせへ。わつちらが心安いものだが。生れは此京の人で。今江戸に世帯をもつてゐやす。所へ京の親元のほうから。はる〴〵とアノ梯子をかつがせてよこしやした。そのわけは。かの親御が無筆といふとで。人に手紙を書て貰ふも。面目ねへといふ事かして。アノ梯子ばかりよこした心は。のぼつてこいといふこゝろいきでござりやせう。そこで又。その息子が。返事をよこしてへが。おなじくこれも無筆で。いろはのいのじもかけねへくせに。とんだまけおしみ。わつちらが今度御當地へくるといつたら。さいわいのことだから。とゞけてへものがあるといふによつてずいぶんなんでも。とゞけてやろふといひやしたら。きゝなせへ。きたねへ乞食坊主ひとりと。アノ梯子をよこして。是を親父のほうへ。とゞけてくれろといひやす。そこでわつちが。コリヤアはしごはいゝが。坊様は生てゐる人だから。もつて行になんぎだといひやすと。其男のいふには。そんならはしごばかりもつていつて。京へついたなら。どふぞ坊さまをひとり頼んで。その坊さまに撞木斗もたせて。梯子といつしよに。おやぢの所へやつて下せへといひやすから。ソリヤアなぜ。そふするのだときゝやすと。イヤ京の親もとから。のぼつてこいといつてよこしたから。そのへんじだと。頼れてもつて來やしたのさ　ていしゆ「ハ、、、梯子をやつて。のぼれといふはきこへてじやが。そのおへんじに。はしごと又。ぼんさまにしゆもく斗もたしてやるとはどふじやいな　北八「ソリヤのぼりたいが。かねがないといふこゝろ　ていしゆ「ハ、、、、でけましたわいな。しかしはる〴〵の御道中。はしごのとなりや。柳ごりへもよふはいるまいに。さぞ御難義にあつたじやあろ　北八「イヤなかく〵そふ

でもございやせぬ。道中するには梯子をもつてあるくが。とんだ。てうほうなものさ。馬などにのるに。はしごをかけてのると。とほうもねへのりよくて。そして川なぞをこすに。とくなことがありやす。大井川でもあべ川でも。臺越といふをすると。川ごしの賃錢が四人まへに。かの臺の賃が壹人前出やす。所を梯子持參といふものだから。川ごしの賃錢ばかりで。臺の賃がかすりになりやす。おめへがたも是から。もしも道中しなさることがあるなら。かならず。はしごは。もちなさるがいゝ。コリヤ人の氣のつかねへ。てうほうなものでござりやす　ていしゆ「イヤ誰も道中するとて。ナニはしごもていことといふ。氣がつくものかいな。ハ、、、、ときに。只今おつしやつた。坊さまはこゝでお雇ひなさるのかいな　北八「そふさ。是非やとわにやアなりやせぬ　ていしゆ「さよなら。さいわいのこつちやわいな。わたくしかたに。せはいたしておきおります。よい坊がござりますわいな。これをおつれなされませ。只今おひきあはせ申ましよかい　トたちあがらんさするきた八きもをつぶし「モシ〳〵まつて

くんなせへ。今急には入やせぬ。やつかいものゝはしごをひきうけてこまるさへあるに。又いきたぼうさまをとりこんで。どふするものだノウ彌次さん　彌次「イヤ〳〵ソリヤ手めへのかゝりだから。おいらはしらぬが。何にしろ。そのぼうさまを。はやくたのむがよささふなものだ　北八「ヱ、おめへまでがとんだことをいふ　ていしゆ「ハテ今あなたのいふてじやとをりなら。ぜひともおたのみなさるのじやないかいな　北八「それはそふだけれど　ていしゆ「なんじやあろと。わたくしへおまかしなされ　北八「そんなことより。おらアはやく飯がくひてへ　ていしゆ「御ぜんも今あげますが。ぼんさまはどふじやいな　北八「ヲ、サぼんさまはやくくひてへ。腹がへつてこたへられぬ　ていしゆ「ハイ〳〵かしこまりましたわいな　トかつてへたつてゆくと、ほどなく女めしを出す、しよくじの内さま〴〵むだあれこれ、あまり〳〵くだ〳〵しければりやくす、やがてぜんをひきたるに、やどのていしゆは、きた八がちやらくらに、のつたかほして、なぐさみはんぶん、これもぶしやれものなれば、としのころ、六十ちかき、うそよごれたひげむしやくしやのにはぼうず壹人、いざなひきたりて「イヤもふめしあがりましたかいな。ときに。たゞ今おはなし申ましたは。此ぼんでござりますわいな　ト引合すれば、此ぼうずはなひしやげにて、はなごへなり「ハイ是は。ひやうおとまりなはれました。愚僧名はひやんてつと申ます。内かたの。はんなどのがおはなしゆへ。まいりました　彌次「コレハ御苦勞サア〳〵これへ〳〵　北八「コリヤ御亭主さん。だん〴〵おせわだが。きのどくなことがありやす　ていしゆ「なんじやいな　北八「イヤ無躾ながら。アノおかたでは間に合ますめへ。なぜといふに。ちつとばかり素人狂言でもしたといふやうな。坊さまでなけりやアなりやせん　ていしゆ「ソリヤどしたもんじやいな　北八「イヤさつきおはなし申たとをり。さきの親元へいつて。のぼりてへが金がねへといふことを返事したうへで。かのむすこが。三百兩なければ。のぼられねへといふものだから。その心いきをせにやアなりやせん。所でかの。盛衰記の梅がえが。無間のかねの所作事。しゆもくを柄杓とこちつけて。チ、、、チンア、三百兩の

○盛衰記「平假名盛衰記」元文四年竹本座上場。

○おちをとる　前出「おちがくる」に同じ。芝居の通言。今の拍手喝采に當る。

かねがほしいなア。なぞとそのぼうさまに。やらかしてもらはにやアならねへといふものだから。むつかしい　ていしゆ「イヤよござります。此ほんもありやうは。馬鹿村蔓之助と申て。以前は宮芝居の女がたをやりおつたものじやさかい。ゑらでけじやわいな。さいわいこちの娘めが。今むけんのかね習ふてじや。何もなぐさみ。ちよぼかたらして。やらしましよかいな　丸てつ「ひやりましよとら〳〵、わしふめがえをひやるさかい。どなたぞへん太をやて下んせ　彌次「コリヤおもしろい鼻くたの梅がえに。北八。源太は手めへが相應だ　北八「エヽばかアいひなせへ。わるいしやれだ　トまじめになり、こゝさいつてゐるうち、ていしゆがさしづに十三四のむすめ、三みせんをかゝへてくると、うちの女房、下女めしたきまで、つぎのまにかたまりぐはんてつぼうをそゝのかしながら、けんぶつする、彌次おかしく「コレ北八。アノとをり。かみさまや。女中たちが。けんぶつしてじやが。一ばんおち※をとる氣はねへかどふだ　トそでをひかれてきた八すこしうかれがきて「いかさま。見物が多いとはりやいがあるまゝよ源太におれがならふ。そのかはりいひぐさは出たらめにやるがいゝか　ぐはんてつ「ひよござります〳〵。サア〳〵おとらさん。へん太の出端からやて下んせ　彌次「ハヽヽヽ、髭むしやくしやのむめがえもいゝが。源太が幟を染返したきものきてゐるもめづらしい　北八「コレ〳〵とうざい〳〵　ト此うちむすめじやうるりをかたりいだす「夜ごと〳〵にかよひくる。梶原源太景季。

○そらさぬ顏　澄した顏。かけ障らぬ顏。

○撲た衿にはつかれまい　好い客につくを衿につくといふ。これは浪人の汚い衿なれば心を寄せまじの意。

○ひちなん即滅　七難即滅。質にかけたり。

○氣種　種は腫物の腫なるべし。

ちとせがおくを伺へばてうどよいしゆびさいわいと。ずつと通れば梅がえは。こたつにとんと身をそむけ。※そらさぬかほでふくきせる　北八「コレ何がきげんにいらぬやら。めつきりともたせぶり。われらがよふな浪人の※撲た衿にはつかれまい　じやうるり「ずんどたつをまたしやんせ　ぐはんこつ「座ひきばかりをふとめるひやづで。けふ爰へほられれたは。文でひらせて。がてんじやないか　じやうるり「にくい男と目にもろき。涙は戀のならはせなり　北八「ア、コリヤよるな／＼。くさくてならねへ。そつちへぐつとよつた／＼ごうせへに。くさい梅がえだぞ　ぐはんこつ「ひよひやきこへませぬへんたさん　北八「ヱ、よるなといふに。コリヤ手みじかにやつてくれう。コリヤほうだ。イヤ梅がえ。産衣の鎧はどふした　ぐはんこつ「※ひちなん即滅と三百目にまけたわいの　北八「ナニ打ころした。ソリヤなぜに　ぐはんこつ「そりやわたしがよこねから。ほねうになつて山歸來。のむほどに／＼。※氣種はしく／＼。此ひやなを。たすけたいばつかりに。ひやねならたつた三百目で。ひくいひやなをおとすか。ア、ひやながおしいなア　うた「二八十六でふみつけられて。二九の十八でつい其心。四五の廿なら。一期に一度。わしや帶とかぬ　ぐはんこつ「ヱ、なんじやのひとの心もひらずに。ふたいくつさる。ほんにひよれよ　彌次「イヤまつた／＼　トこれもこゝへらわず、かつてにゆきて、いぜんのはしごみせのまに、よこたをしにしてありしを、ひつさげ來り、かもゐにうちかけ、二かいのきざはしにて、彌次郎ちうだん／＼にのぼりながら、手ぬぐひをたゝんで、だいりふうにおよいこあたまにのせ「サアおせう。やらかしねへ　ぐはんこつ「つたへきくふけんのひやねをつけば。有徳自在心のまゝ。ほれよりはよの中山へ。はるかの道はへだゝれど。ほもひつめたるおが念力。此ひようづばちを。ひやねとなぞらへ。ひしにもせよ。ひやねにもせよ。心ざす所はふけんのひやね　トきせるおつとり、いろ／＼あるき、此ところ彌次郎、はしごのうへより、うちがへのぜにをはらり／＼となげいだしながら、じしんにじやうるりかたる「そのかねこゝにと三百文。うちがへの錢なけいだす。みやまおろしに山吹の。花ふき

ちらすやうにはあらで　ぐはんてつ「こゝに二文かしこに五文。ひろひはつめてひやん百銅。コリヤ雇れの賃錢。さきどりとは有がたい　ト かきよせてたもとに入れんとするを、彌次郎兵へはしごのうへからぐはんてつをこちらへひつたくろふとするに、ぐはんてつはやるまいと、あらそふひやうしに、かもゐにかけたる、はしごはづれて、彌次郎兵へひつくりかへり、どつさりおちると、はしごはぐはんてつのうへになり、むすめも、ひばらのはねをうたれて、わつとなきいだせば、彌次郎こしぼねをなでさすりながら、　彌次郎「ソリヤやるのじやアねへ。おれがのだ　ト 「アイタ、、、、　ぐはんてつ「アヽウ、く　ていしゆ「どしたぞやいく　ト 家内ぢうがうろたへたちてたばこぼんひつくりかへすやら、あんどうをうちこかすやら、ざしきぢう、たゞまつくらとなり、なくやらわめくやら、大さはぎとなり、ていしゆやうやうあかりをもち來り　「アヽコリヤ。　娘「いとめはどふじやい。イヤ梅がえがおかしな目をしおるわい。コレく氣をたしかにせいやい　ぐはんてつ「アヽくくるしい。あしや悩りして。はつとほもふたへいやらして。ひんたまがうへのほうへつつたわいな。アイタ、、、　彌次「ソリヤこまつたものだ。モシく御ていしゆさん。梅がえがきん玉を。つるしあげました　北八「きん玉のあがつたには。よいことがある。さつき見れば。こゝの見せに。錢膏薬といふ看板が見へたが。それをぼんのくぼへはると。きんがさがる　ていしゆ「何いわんすぞいな。錢がうやく首筋

へはつたてゝ。何さがるものかいな　北八「ハテさがる理屈さなぜといひなせへ。錢があがればきんがさがる　ていしゆ「エ、なんのこつちやいな　ぐはんてつ「ア、わしやどふやらよいやうじやが。いと（娘）さんはどふじやいな　やどやの女ばう「コレ誰なと一はしり。寸伯さんへいてたもらんかいな　ぐはんてつ「わしやもふよいさかい。醫者さまよんでこうわいな。其かわりお寺へは。たれなと外のものやらんせ　ていしゆ「エ、何ぬかしくさるぞい　北八「ホンニおきのどくなこつた。娘御はどこをうちなすつた　ていしゆ「ひはら。ゑらううちおつたてゝいたがいますわいな　彌次「いたいひはらは都の生れ。人にどやされひよんなめにあはれて。ア、お笑止千万なこんだ　ていしゆ「イヤおまいゝ人の娘に怪我さして。口合所じやあろまいがな　彌次「ハ、、、人の娘にけがさしたとは。わしやどふやらはうかしい　ていしゆ「イヤわらひ所かいな。そふたいこなさんたちはけたいじやぞや　彌次「けたいとは。何がけたいだね　ていしゆ「なにがとはちよこいふてじや。よふおもふても見さんせ。わしや此年まで。やどやしておつたが。つるに梯子もてきた客をとめたことはないわいな。いつたい遠國のおかたが。何しに梯子もてあるかんすやら。こちやとんとよめんわいな。もしも。屋ねからおどりこむ衆じやないかと。家内のもん（小言）がぼやいてじやあつたが。なるほどやば（奇怪）なこと。しかねん衆と見へるわいな　トていしゆやう〳〵きこえたり、よこしまはあら〳〵しくいふ、このおどりこむとは、上がたにては、夜盗のことをおどりこみといふゆへなり、もとより彌次郎兵衛は、むかふ見ずのたちなれば　「イヤおめへおかしなことをいふ。わつちらア。しら。きてうめんのお旅人さまだ。おつにひねつたことをいふと。了簡がなりやせぬぞ　ていしゆ「チ、いしこやの。なにいふたてゝ。こなんたちが。梯子もてござんしたから。おこつた事じやわいな　女ばう「是いなア。そないな人にかまわずと。こちきて下んせ。いと（娘）がアレ〳〵ひよんな目つきしてじやわいな　トなみだぐみてさはげば　ていしゆもうろ〳〵　「コレ見やんせ。もしもいとめがしにおると

〇いたいひはらは都の生れ　「朝顔日記」に「自體我等は都の生れ」とある文句のもぢり。

〇ちよこ　猪口才の意か

〇いしこや　「いしくも」の轉か。こゝはよくもさういふことが云へたの意。

○解死人　下手人に同じ。

○加判　本人の外に判することを加判と云ふ。立會人。

こなさんは解死人じや。そふおもふてゐやんせ　女ぼう「アレ〳〵たはいがないわいな　ていしゆ「コリヤ目がまふたのじや。ヤアイおとらヤアイ〳〵　女ぼう「いとイのふ〳〵　ト にようぶはむすめをかきいだき、ていしゆはきつけにかゝり、さはぎたつて、なきわめけば、彌次郎にかゝり、　ていしゆ「コリヤ〳〵うろたへ出し「エヽコリヤ。きた八どふしたものだろう。おらアもふこゝにやアゐられねへ　ていしゆ「おとらやアい　彌次郎「エヽなさけない。コリヤたまらぬ〳〵　トうろ〳〵してたつたりゐたりさまざまたつき　女ぼう「おとらイのふ　ていしゆ「コレこなさん。どつちやへもやることならんぞ　彌次「ハイ〳〵どこへもいきはいたしませぬ。コリヤ〳〵きた八ぜんてへ手めへがわるい。何のありていにいへばいゝものを。ちやらくら嘘をついたからおこつて。無間の鐘だの。なんのと。ろくでもねへことをはじめたから、此さはぎになつた。もとは手めへが發頭人だから。解死人はそつちへかけるぞ　北八「チヤとんだことをいふ。當人はおめへだわな　彌次「そんなら拳をしてまけたほうがげしにんだ　北八「ばかアいひなせへ。おいらアしらぬ〳〵　ト此内いしやもきたり、くすりなどあたへさま〴〵かいほうするうち、むすめやう〳〵いきふきかへせば、みな〳〵あんどし、彌次郎もむねなでおろしおちつきて、此うへはあやまるにしくはなしと、北八をたのみだん〳〵わびことし、あやまりぜうもんをかきて、やう〳〵こゝのいさくさおさまりける。尤きた八※かはんにて、しかつべらしくかきたるそのせうもん

一札之事

一我等此度ひらかな盛衰記淨留理之内安壽の役相勤候所實正也然る所梅がえ無間之鐘相撞候節其金是ニ罷有趣申之打替之鳥目投出シ候迚梯子爲辷候故丸鐵殿隱囊御釣上被成幷貴殿息女に怪我爲致候段全く右梯子鴨居に打掛候より事起り候趣預御腹立無申譯段々誤入候所御了簡被下忝存候然ル上は以來御宿御無心申候とも梯子抔決而持參致間敷候爲後日仍而如件

月　日　　當人　彌次郎兵衛

證人北八

○あたじけなすび　あたじけなしの「な」を茄子の「な」に云ひかけしまでのもの。
○術　單なる手段にあらで、魔術つかひなどいふ方の術ならん。

此證文にてとおさまり。やどやの娘も。次第に心よく。中なをりの酒くみかはして。夜もふけければ。ふたりはやがてうちふしたるに。ほどなく夜あけて。家内の人〲おきたちたるものおとに目をさまし。支度とゝのへ。そこ〱に。立いづるとて　彌次「コレハ大きにおせはになりやした。とに。いろ〱なことで。おきのどくな　ていしゆ「御きげんよふお出なされ　女ばう「モシ〱おはしごが。ござりますわいな　彌次「イヤもふそれは。こちらにおゐてくんなせへ。けふは所々見物して。晩程また。おせはになりやせうから　ていしゆ「イエ〱おもちなされ。そしてこちやばんほどは。おさし合があるわいな　トいつたいていしゆは、このふたりを、うろんにおもひいたりしゆへ、はしごも、あづかることきみわるく、いかなるこうなんやあらんとうけつけざれば、せんかたなく、又かのはしごをかつぎこの所をたちいづ　北八「ナントけふは。どつちのほうへまごつくのだ　彌次「イヤ　まだひがしに見物して～所があるが。マアけふは。北野の天神さまへいきやせう　トだん〲みちをたづねてほり川ごをりに出　北八「ときに。おもひ出したとかある。ソレ伊勢の古市で。京の人と一座したが。慥にその人は。千本通中立賣とやらいつたが。北野の天神さまへ。ゆく道だといつたじやアねへか　彌次「ヲヽサ邊栗やの與太九郎か　北八「ソレ〱。そいつが所へ尋ねていつて。酒でも呑でやろふじやアねへか　彌次「ナニあたじけなすびがのませるものか　北八「ところをおいらが術にかけて呑倒そふ　トおうらいの人に、千本ごをりをたづね、中だうりにいたり、ハヽぐりや與太九郎はおまへ、やう〱たづねたたりて、さいのはしごを、いきにてかけ一二西兵へ「御めんなせへ　トおうしはなをおいてはいれは與太九郎「たれじやいな。コリヤめづらしい。よふおのぼりじやわいな　彌次「さてマア伊勢では大きにおせはになりやした　與太「なんのいな。サアこちはいりんかいな　北「ハイおひさしうござりやす　與太「イヤこれは〱、まだおもてに。おつれさまがあるそふじや　北八「ふたりばかり。誰もおりやせん　與太「それでも。アリヤなんじやいな　彌次「は

しごのとかへ　與太「何じやはしごおもたせかいな。コリヤきよとい　北八「イヤおめへのところは中立賣。ひよいとあがる所だといひなすつたからもしも。高い所なら。梯子かけて登ふとおもつて。わざ〱もとめて持参いたしました　與太「ハ、、、コリヤおでけじやわいな。ときに。何もお愛相がない。おしたくはどふじやいな　彌次「アイ今朝。やどやでたべたまゝ。中食はまだいたしやせん　與太「ソリヤおたのしみじやわいな。さゝなとあげたいが。此へんに酒屋はなし　北八「さかやは。じつきにおとなりにあるじやアねへかへ　與太「イヤあこでは。小賣はいたしませんわいな。せつかくのお出。おたばこでもあがりなされ　北八「たばこはこつちのだから。勝手にいたしやせう　與太「おまいがた。せめて。もちつとさきへよつてお出なさると。きやうといものがあるわいな。かつら川の若鮎。いきておるのを。塩焼か※魚田にすると。ねからはかた。うまいのなんのと。いふよふなこつちやないわいな。イヤまだ。四條の生洲がちかいと。おともしていこもの。あこの鰻はかも川でさらして。とつとちがふたものじや。きやうとうまいがな。そしてあこは。玉子焼なとふもうよふしてくはすわいな。何じやあろと是ほどに。大きう切おつてほつほといきの出るのを。※南京の薄鉢にもつて出しおるが。うまいといふては。ねから※くゝんでもつやうじやわいな。ホンニそれよりまた秋にお出なさると。とり〱の松茸じや。當所の名物で。これがまた外にはないわいな。あたらしいのを。すましのすいものにして。ちよつと山葵おとして。さけのおさかなにいたそなら。とつともふ。なんぼくふても。ねからあきがないわいな　※トはなしばかりして、なにも出さぬゆへきた八こらへかね、そつとぬけ出てとなりのさかやへのみにゆく、はなしに身をいれし與太九郎は、いつかうきた八のにげたるをしらず　「イヤ最ひとりのおかたはどこへいかんしたぞいな　彌次「もふかへりやした　與太「はてさてねからしらなんだわいな。いつのまに。いんでゝあつたぞいな

○魚田　魚の田樂。

○南京の薄鉢　南京焼の薄皿。

○ねから　根から。

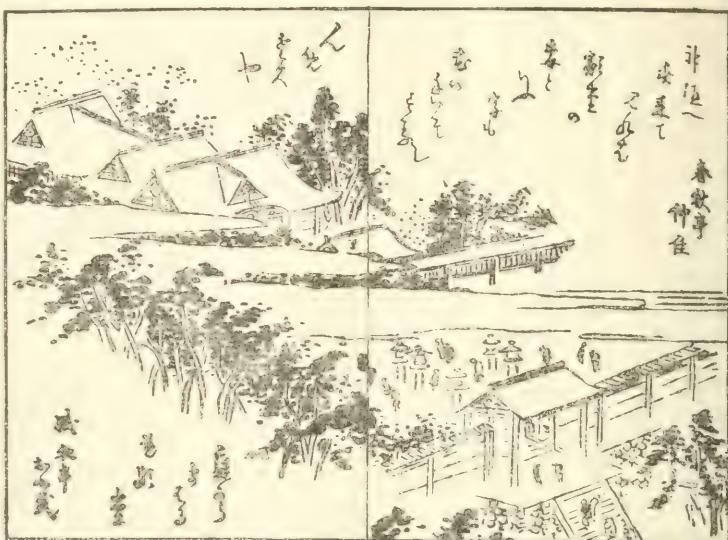
○くゝんでもつ　卑下するいが惜しい。

○はなしばかりしてなにも出さぬ　この趣向、狂言の「鱸庖丁」より出づ。

○御きんとう　當金を倒に金當といへるならん。

彌次「今。松だけのおすいもの丶出た時。中座いたしやした　與太「ソリヤ殘多い。後段にまだ。お菓子のおはなしいたそもの　彌次「イヤもふ。さきほどから。大きにおちそうになりやせぬ。おかげでひもじい。おいとまいたしやせう　與太「イヤおまちなされ。よい所へお出たわいな。ちとおはなしがあるわいな。アノ伊勢の古市で。おつき合申たときのことゝいな。あの時の入用。金壹兩じやあつたがな。わしや算用ちがひして。金壹分貳朱。こちから出しておいたさかい。コレ見なされ。道中の小遣帳に。おやま屋の書付つけも。何もかも。こないに細に。かきつけておいたが。うちへ戻つて。さん用して見るとて。おまいがたひとり前。百廿四文ヅヽ、わしのほうへお貰ひ申さねば。さん用があはんわいな。わづかのこつちやさかい。どしてもだんないが。とるにしくはないさかい。おふたり分、貳百四十八文おもらひ申ましよかいな　彌次「エヽおめへも。今となつてきたねへことをいふ。そればかりのとうつちやつておきなせへ。こつちでも。たてかへた事がありやす　與太「ソリヤあげるのがあらば。あげろさかい。いひなされ。さん用はさん用じや。マアこちへとるのが。此となりじやさかい。斯しましよわいな。はしたまけてあぎよわいな。貳百文くしなされ　彌次「エヽげへぶんのわるい。その時とればいゝものを　トこゞに八びやくいへどもがてんせず、かれこれとせり あふた所がはてしつかず、彌次郎兵へめんどうとこゝ、二百文出してやると　與太「ハヽヽヽコリヤ御※きんとうじやわいな。是からおまいがたは。天神様へいかんすじやあろ。そしたらつるでに。平野さま。金閣寺へいかんしたがよいわいな。おそなるさかい。はやういてもどらんせ　彌次「大きにおせは　トふくれつらして立出れば、となりのさかやより、きた八によつこり出來りて「どふだ。御ちそうがありやしたか　彌次「いめへましいめにあつた。なんの手めへが。たづねてよらずとも。いゝものを。錢貳百たゞとられた　北八「ハヽヽヽどふして〳〵。いゝは其代り。アノはしごのやつかいものを。こゝにう

○「おまもりを」の狂歌　財布を首よりかくるといふことに、宰府をかけしもの。

○「綱の名は」の狂歌　渡邊綱が納めたる石燈籠あり。但三ツ星の紋なきよし。昔を今に見るといふを「三ツ星」の「み」にかけ、渡邊の紋に利かせたるもの。

ほつておかんせ。彌次「エヽ北八か。わりいしやれをするな八　北八「ナニおいらアしらねへ　トいひさま、にくし、かのさしま女のしりを、つめつてやろふと、わきめをしながら、そばによい、こしまのしりとおもひ、おぶつてゐる子のしりを、おもふさまつめると　子「アヽいたい〳〵　トわつさとなくこしまの女「たれじやいな。おぶさつてゐる子「アノおぢさんがつめつたわいの　女「エヽすかん人さんじやわいな　彌次「かんにしなせへさりとは外聞のわりい男だ　トおしはやにすご〳〵と此所をすぎて、みなみの御門より入りて天まんぐうのほんしやへまいる

おまもりを首にかけつゝとうとまん
　さいふのみやをうつす神垣

北野天滿宮はむかし近江國比良社の神主良種。神勅を蒙り。朝日寺の僧。最珍。右京の文子等とちからを合せて。靈祠を作り。天德三年右大臣師輔卿。巍々たる大厦をあらためいとなみたまふ。今の北野宮是なり。社頭に渡邊の綱がおさめしといひつたふ。石どうろう苔むしてあり

綱の名はいまだに朽ぬ石燈籠むかしを今に三ツぼしの紋

○「こゝろよく」の狂歌　本膳の平を平野へかけしもの。

○のんこ髷　なまじめこもいふ、圖のごとし。

○雷子　前出嵐吉三郎の俳名。その始めたる髷か。

○芝居のやつし　色男役。

東向観音は。梅櫻の二樹をもつて。菅神御手づからきざませ給ふ所なりといへり

御利金は四方にかほれる観世音梅さくらにてつくりたまへば

それより社内をぬけて平野の社にまいる此御神は四座にて今木神久度神古開神比咩神なり

こゝろよく飯くふために本膳の平野の神を祈りこそせめ

こゝに紙屋川のほとりに二軒茶屋あり。ふたりは空腹となりたるに。支度せんと此茶屋にはいれば。女ども出向ひて「よふお出たわいな。ツイトおくへお出なされ　彌次「なんぞうめへものがあるかね。めしもくひたし。酒ものみたしてマアちよびとしたもので。一ッぱいはやくたのみやすぞ　ト女のあんないにてこしをかけると、女さうし　さかなをもちくる、さかなはほしたるゆゐ、にびたしなり　彌次「さつそく是はありがてへ。女中ひとつつぎ給へチツトありやす〳〵　女「おさかなあぎよわいな。コリヤわたしが心のたけだやぞへ　彌次「ハア此鯖がおめへの心いきとはどふだ　女「わたしはナおまいさんが。川鯖といふこつちやわいな　彌次「コリヤ有がてへ。そんならおめへにあげやせう。ドレわつちも心いきのさかなあげやせう　女「ヲホヽヽ、此生姜がなんとして。おまいさんの心じやへ　彌次「わしやはおかみイ　北八「ハヽヽヽ、こちつけるもんだときに女中。でんがくでめしをはやくくんなせへ　女「ハイ〳〵只今　トやがて女でんがくとめしをもち来る、ふたりはしよくじしながら見れば、ついこのあいだに、きもむさくるしき出家二人、すさのころもの、よごれたるをきて、これもでんがくにこふしくひながら一人の僧のいふをきけば「ナント役戒坊きさま髪は。どこでゆふぞいの　やくかい「ヲヽ持戒ぼう。わりさまもわしがゆふ所でゆわんせ。あこはきやうじようよふゆふわいの。わしや。ひさしうのんこ髷にゆふてじやあつたが。いまははやらんさかい。コレ見やんせ。雷子にいふて貰ふたが。ゑらう氣持がよふて。たまらんわいな　トいひつゝいあたまをなでければ、其ほうさま、身にはふさのころもをきながら、あたまはまきびんにて、しばゐのやつしといふかたちなり、彌次郎兵へきゝかね、これを見てきもをつぶし、おかしさほんぶん、ふしぎそふに伺ひ見れば　やつかい「ハヽアなるほど。

よふいひくさつた。わしや又こちの弟子坊にゆはせおるが。もふ／＼月代がむちやじやさかい。見て下んせ。いつのまにやらこないに。すりこかしおつたわいな　トこれもづきんをとれば、わけはぼんのくぼにある、そりさげやつこなり、弥次郎あまりにがてんゆかずこたへかねて「モシおとなりのお客さま。わつちらは遠國のものでござりやすが。所々あるひてゐるうち。いろ／＼さま／＼な。めづらしいことも見聞しやしたけれど、御出家がたの髮ゆふたを見るは。まことに今がはじめ。どふも合点がゆきやせぬ。卒爾ながら。おまいがたは。どこのおかたでござりやすね　やつかい「ハヽアこのあたまの御ふしんかいな。こちや空也堂の僧じやわいな　弥次「なるほどな。はなしにきいてゐやした。かの茶筅うるお方だな　やつかい「さよじやわいな。こちの宗体は。むかしから由緒があつて。こないに身には染衣をちやくしながら。天窓は大俗凡夫じやわいな　弥次「それできこへやしたが。なぜ又おまいがたのゐるなさる所を。空也堂といひやすね　やつかい「さればいな。こちのしうていでは。どしたこつちややら。代／＼みなゑらい大食で。飯じやあろが。なんじやあろが。なんぼでもよふくふさかい。齋非時によばれていても。しるつけられて。ちつとくふやどうじやいなと。人ごとにいふたを。すぐに空也堂といふわいな　もつかい「そじやさかいコレ見やんせ。ちよとこゝへきても。ふたりでおはち三ばいくふたわいな　弥次「ソリヤとほうもねへ大ぐらひだ。もつとも。わつちらもくつたものさ。いつやらも信濃へ行やした。ナニがあつちは飯どころでござりやすから。先朝すつとおきると。ちやうけにとて。座頭の天窓程ある。にぎりめしを出しやすが。あつちの手やいは。子どもでさへ。それを十四五ほどづゝもくひやす。わつちは。折わるくきぶんがわるくて。ろくに食もいけやせなんだが。十七八斗もくひやしたろう。そうすると。やがて。めしができたとつて。そこのていしゆのいふには。ゑどのおきやくは。おあんば

○齋非時　齋は晝食、その他の食を非時といふ、總じて御馳走によばれることゝ。

○相手ほしさの 玉手箱
あけてくやしき玉手箱。

へがわるいといふことだから。けさは。麦飯をたきましたといつて。何かとろゝ汁を。すつたほどにすつたほどに。擂鉢の二十ばかりも。そこにならべてあるとおもひなせへ。こふすると。椀へもるがめんどうだと。家内のやつらは。みなそのすりばち一ッづゝ引うけて。麦めしをその中へ。山のよふにもつて。くらひおる。わつちらも絶食同前でゐたが。麦は大好物でこたへられやせんから。せめてひとすりばちもやつて見やうと。くひかゝつた所が。くちあたりがいゝから。ずるずると。なんのことなしにすべりこんで。とうとうすりばちに五六ぱいもくひやしたろふが。今ではとんと食がへりやした　やつかい二ソリヤおまいも。めしは素人じやないわいの。ナントめしもりさんせんかいな　彌次二アノ飯盛が。こゝにもありやすかね　やつかい二ハヽヽヽおまいのいふてじやは。道中の飯盛じやあろ。そじやないわいな。こちとらが仲間でするは。酒のむ衆が。酒もりといふかくで。飯をたがひにくひあふを。めしもりといふわいな。ちとやて見やんせ。さいわゐこちもまだ飯がくひたらんさかい。あい手ほしさの玉手箱じやわいな　北八一どふやらおもしろそふなこつたが。それはどふするのでござりやすね　やつかい二マアなんじやあろと。やて見なされ。モシ女中。ちよときてくだんせ。おはちのおかはりじや

女「ハイ／＼ トめしはちに一ぱいもちきたると やつかい「サアはじめんかいイヤていしゆやくに。わしからやろわいな トちやづけぢやわんにめしをもりてさつ／＼とくひしまい やつかい「サア／＼おまいさそかいな ト彌次郎へかのちやわんをつきつけこ、しやくしを取「さかもりなら。お杓といふ所。めしもりじやさかい。お杓子いたしましよかいな ト彌次郎がもちたるちやわんへめしをもりつける 彌次「コリヤわつちがくふのかね やつかい「さよじや／＼ 彌次「ハヽアきこへやした。さかづきをまはす心だね ト彌次郎、かの一ぱいのめしをくひしまひて、ちやわんをやつかいのかたへさすと やつかい「コリヤきやうとい。おさへましよかい 彌次「イヤまづ／＼ もつかい「はておまい。最一ツぱいかさねなされ。わしすけてあぎよわいな トむりに又一ぱいもりつけると 彌次「そんなら。おめへすけてくんなせへ トめしのもつてあるを、やつかいぼう、ちやわんをもつかいにわたせば、もつかいほどくひこ「これも酒じやと。つけざしじやけれど。めしじやさかい。くひさしじや 彌次「エヽ、おめへの。その髭むしやくしやと。不掃除な口中でく／＼ひさしはあやまるの。しかもソレ／＼水ばなをたらしてさ もつかい「ナニいふてじやざいな。そないなといふて。めしもり附合がなろかいな。はやうくはんして。誰になとさゝんしたがよいわいの 彌次「ソリヤ情ない。さて／＼めしもりといふものは。きたねへものだ。もふ／＼、わつちは御めんなせへ やつかい「イヤおまい。麥めしすりばちに。四五はいくはんしたといふてじやないかいな。ひきやうなといわんす。こうさんせ。一衾いかんせ 彌次「そんならけんでまいろうか もつかい「よかろわいの。そのかわり。否應とんといはさんぞや トかのちやわんのうへへもりそへて もつかい「サア／＼※さつまけんじや。サンナ 彌次「ムメで／＼ もつかい「トウライ。ゐらいか／＼。サア／＼あがりなされ。そのくせおはちのおかはりじや トむりむたいつけつけられ、彌次郎めんどうなりこゝ、がまんをおこし、やう／＼さくひしまへば、 やつかいぼう「もひとつやらんせ。おはちのかはりめじや 彌次「イヤもふ／＼御めん／＼ やつかい「コリヤやくたいじや。おまいは田舎ものじやな。麥や挽割のまぜたのを。あがりつけてゐさんすさかい。こないな。一

○**薩摩拳** 御國拳ともいふ、服部晋白氏の話に、其仕方は杉箸又は象牙にて造りたる箸よりも短き箸を用ふ、双方相對して、背後又は袖の中にて數を撰み、双方一時に前へ突き出す、杉箸の場合は特に四指を延ばし、拇指にて支へ、對手に其數の見えざるやう、掌裡より腕下に藏す、甲「ハー、オーセ」(仰せ)といふ、乙數を言ふ、双方の合算也、的中すれば、乙も箸を出し、甲は「まけました」となる、的中せざれば、乙「ナカ／＼」といふ、甲は言ひ中つる番となるゆゑ、數をいふ、中れば乙の敗なり、不中なれば一番終りたるなり、今度は乙が「ハー、オーセ」といふ番になる、この勝負は動作も辭も頗る早く、瞬間に決してしまふやうになるものと聞く。

本木の。米ばかりのめしは、よふあがらんちんじやあろぞいな　彌次「ナニわつちらア猪の牙のよふな。めしでなくちやアくひやせん　やつかい「さいな。これがし、のきばじやわいの　彌次「こんなら。おめへかはりめのあいをたのみやす　やつかい「ソリヤよいわい。とてものことに。おつきなもんで。おつもりにしよじやないかいな　ト なづけのいれてありし、ごんぶりをうちあけて、めしをもり、ぺろ〳〵とくつてしまひ、もつかいぼうへまはすと、これもしこたまよそつてくひしまひ「サアあぎよわいな。イヤめしでにちや〳〵する　ト ぶん〳〵さきのごうにはな、ごんぶりをいれあらひて「サアすましたわいの。おつもりじや〳〵　彌次「イヤ〳〵もふいかぬ。そしてきたねえ人が雪陣へいつた手をあらつた。手水ばちで。すましたどんぶり。それでどふしてくへるものか　やつかい「そしたら此茶碗で　彌次「イヤもふ。はらがさけるよふだ。それに聞なせへ。今の一ぱいやらかしてゐたとき。なにか。ふところのうちでぷつつりといふおとがしたから。さぐつて見たら。ゑつちうふんどしのひもが。きれるくらゐに。腹がはりきつてきたものを。もふ〳〵おゆるし〳〵　やつかい「ハ、、、、もふよしなされ。おつもりじや。

コレ女中なんぼじや勘定してくだんせ　女「ハイ〳〵御いつ所にいたしましよかいな　やつかい「そじやわい
な　女「御酒とおでんの代もつは十文でよござりますがおめしは五百七十二錢いたゞきたうござります
やつかい「ソリヤ　氣疎やすいもんじや割合にいたそかいな　ト此代錢かんぢやうして半分のはらひすれば　彌次「ソリヤあんまりだお
めしはおめへがたがしこたまあがつてわつちはたつた一ぜんか二ぜんくつたもの二ツわりとはふしやう
ちだね　もつかい「なにいわんすぞいな一座でめしもりさんしたもの。よふくはんは。おまいがたのかつ手
じやないかいな　トやつつかへしつこれもりづめに、彌次郎兵へせんかたなく、さう〳〵二ツわりにして、この所のはらひをなしければ、僧ふたりははやくもさきにたちて出行たるに　北八「ハヽヽヽヽいゝ見せ
ものだ。サア彌次さんどふだ。いかねへか　彌次「ヲヽサいきてへが。あんまりくひすぎてうごかれねへ。
どふぞ手をひいて。そろ〳〵たゝせてくれ　北八「エヽいくぢのねへ。サアたちなせへ　彌次「コレサ手あ
らくしてくれな。めしがくちから出るよふだ　北八「テモきたねへことをいふ。サア〳〵たちな〳〵　ト
いひつゝ彌次郎の手をとりひつたつればやう〳〵にたちあがり出かける　女「おゆるりとお出なされ　北八「アイおせはになりやした。サア〳〵彌次さ
ん。いかねへかどふする〳〵

　はじめから人を茶にして何ばいもやたらに飯を空也寺の僧

是よりまた。天神の社内にかへりたるが。東の門が一條どをりに出る道をしらず。うか〳〵ともと來し
南向の門を出たるに。おもはずも。かの梯子を預しちや屋のかどちかくなれば。彌次郎兵衛こゝろづき
てーまて〳〵。さつきのはしごが。やつぱりあそこにたてかけてある。エヽこつちのほうへ來なんだら
よかつたものを。北八またあとへもどろふか　北八「なるほど。あそこへやすまずに。すぐとをりにした
ら。ひよつと見付たとき。例の梯子もつていけといふだろうし。といつて又あとへもどるもごうはらだ。

どふぞいゝちゑがありそふなものだ　ト立どまりてしまんしてゐるうち、うこんの馬場の借馬一疋、はくろうが、ひいてきたるを見るより　北八「イヤアいゝとがあるぞ〳〵。アノ馬の。よこつばらのほうにくつついて。茶やのまへをとをれば。馬のかげになつてゐるから。よもや見つけはしめへじやアねへか　彌次「チ、サそれがいゝ。コリヤ大できだ〳〵　トあさよりきたるしやく馬を見合せゐるうち、やがてそばちかくなれば、ふたりともならんで、馬のかげにかくれゆくと、てうどかの、はしごをあづけし、ちや屋のまへにいたりて、馬はたちどまりてうごかず、ふたりはかけぬけて、ちや屋に見つけられてはと、せんかたなしとおもひ、おなじく馬のよこはらのほうへついて、たちどまりゐる、はくろう馬をうちて「エ、このならずめは。なにしをるのじや。日がくれるはやい　トうてどもうごかず、やがて馬は、せうべんをしやア〳〵彌次郎北八にとばしりはねて、せうべんだらけさなり　彌次「エ、コリヤ又なさけないめにあふことだ　北八「ア、くさい〳〵ソレ彌次さん。おめへのほうへながれるは　彌次「ちくせうめがとんだめにあはせる。これは〳〵　トこびのけば、むかふのちや屋の、かごさきにゐる女が、はやく見つけて「モシナ〳〵こつちやでござりますわいな。サアおはいりなされ　北八「ソリヤこそ見つけられた　彌次「コリヤたまらぬ〳〵　ト一もくさんにかけいだせばちや屋のていしゆさん出「コレナはしごがござりますわいなチ、イ〳〵　トよびたつれどみゝにもいれずふたりは※まつくろになりにける　兩人はやう〳〵と。※いきをはかりにかけいだして。下の森をうちすぎ。もとの千本どをりに出。今宵は嶋原の廓中を見物して。やす見世もあらば。いつしゆくせばやと。申合せて往來の人に。道すがらを尋ね千本さがりてゆくほどに。町をはなれて東寺に至る

　　手折んと手を出す人ぞ鬼ならめ東寺わたりの花のさかりに

それより壬生寺に參りて。こゝに薦簀かどさきにたてよせたる。あやしの茶見せに引こまれて。其夜の宿とさだめうちふしたるが。あくる日嶋原を見物し。朱雀野より。丹波街道をよこぎりに淀の大はしにいたり。爰より下り船に打のりて。大坂へとおもむきける

○まつくろになり　眞黑なり、物が見えぬほどになり、夢中になる。

○いきをはかりに　息がつけなくなるほど。

○「手折んと」の狂歌　茨木童子を利かせたるか。

道中膝栗毛七編下終

洛中見物之滑稽さま〴〵趣向有べけれど前にいへるが如く作者不知案内の地なれば大概にして筆をおきぬ此續大阪にいたりては作者殊に七とせ餘も居住せし土地なるゆへ名所古跡の微細なるはいふもさらなり此中の光景島内道頓堀堀江曾根崎の風色まのあたり見しまゝを著して全部三巻となしむかふ巳の春の新撰にそなへんとす抑此書初編より今七編におよぶまで祥るに行れて偶中の悦稍からず既に浪華の編にいたりて全からしめんとおもふなればまことに膏血の智を絞り丹誠に筆をこらして綴りものせんと心ざしは千里の外までもすゝみ走れる膝栗毛文才のいたらざるは原よりなれば其あしきを棄て宜く察し給へとみづからいふ

東海道中膝栗毛八編

道中膝栗毛八編序

凡而。ことの十分なるは。欠るの兆。九分なるは。充るの首なれば。八の数を以て。永久の嘉瑞とし。もの〻めでたき極位與する事は。先大江都の八百八町。是にして盡ず。神に八百萬神永く跡を垂給ひ。法華經の八卷末世に傳へて弘く。歌書には八代集を最上とし。易に八卦。十露盤に八算。食言にも八百の相場あれば。質も八ケ月を限とす。予が膝栗毛も。此八編に至て足を洗ひ。引込思案の筆をおくこと。花の半開。酒の微醉に託たれど。實の所は迯口上。知恵袋揚底なれば。はたき仕舞し栗毛の趣向據なく。おつもりの大坂着。長町泊から滑稽のはじまり〳〵

文化巳孟春

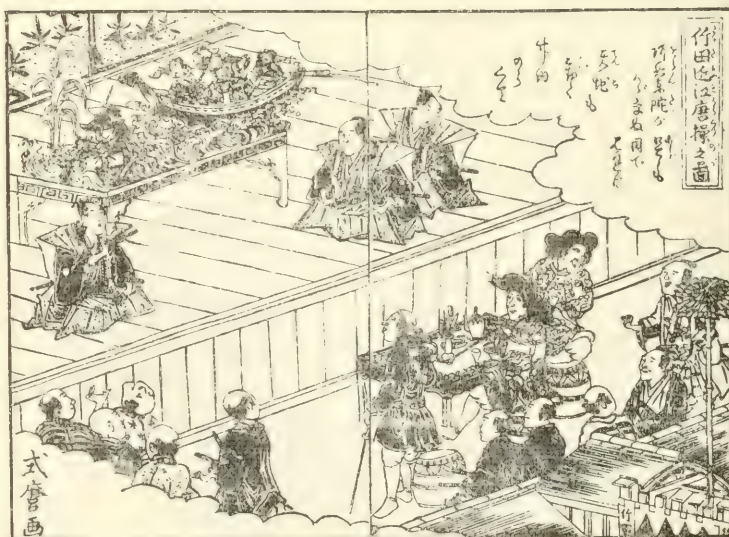
十返舎一九誌

附言

膝栗毛初編よりさいはゐに行れて今年八編にいたり漸く滿尾し畢ぬ近ごろ此書に類せし販本是彼と出はべればその流行の圖をはづさずむかふ午には初篇再販のもよほしあればそれに發端一冊をまして二卷となしそのあとへひき續き木曾路の記行をもとむれども作者固辭して肯はずこひねがはくは諸君子の催促をまちてもみせんとの事なれば猶追て御披露におよぶものならし

書肆　榮　邑　堂　志

美丸画

竹田近江唐操之圖
式麿画

○押照　難波の冠詞。
○さくらの宮　「舊社は西野田の小橋故大名田の辺、字を櫻野といへる處に有しを後世此に移す故に、舊地の名を以て櫻野宮と申せしが、何時しか社頭の傍に數百株櫻を植ゑしより今は櫻の宮と稱して花ゆへ名づけし如くなるも、所謂名は自稱なるべし」(浪華の賑)
○鮒卯　料理屋の名。
○難波新地　難波新地の由來たるは享保八年よりなれど、その新地は明和元年より開發。又同六年に始めて舞臺出來、その年大角觝の興行ありて、翌年より角觝の定場所となる。
○豆茶や　瑞龍寺の表門より一町東南に通ずる道あり、その西南の角に豆茶屋といふものありしよし、「浪華百事談」に見ゆ。
○うかむ瀬　新清水の坂下に在り、風流の宴席にて、鸚鵡盃をはじめ種々の珍器、大盃等を秘藏す。
○解船町　「此地は阿波座堀の南側にして、瀬戸物町の南にあり、河海の古船を解きほごきて其板柱等を商ふ家軒をならぶ、是他邦に

道中膝栗毛八編　上卷

東都　十返舍一九　著

押照や難波の津は。海内秀異の大都會にして。諸國の貫船。木津安治の兩川口にみよしをならべ。碇をつらねて。こゝにもろ〳〵の荷物を蓄ぎ。繁昌の地いふばかりなし。殊更花の春は淀川に棹さして。さくらの宮に遊び。網島の鮒卯に醉をもよほし。夏は難波新地の納涼に螢をかり。豆茶やに腹をこやし。秋はうかむ瀬の月。冬は解船町の雪げしき。四季折々の詠おほかる中に。目枯ぬ花の曲中は。いつもさかりの春のごとく賑ひ。道頓堀の芝居は。つねも顔みせのこゝちして群集絶ず。かゝる名擧の地を。見のこすも本意なしとて。かの彌次郎兵衛喜多八なるもの。ふし見の晝船に途中より飛乘して。はやくも大坂の八軒家にいたり。爰より船をあがりたるは。最早たそがれ時にして。東西をしらず。南北をわきまへざれば。人に尋ねとひつゝ。長町をさしてゆくほどに。堺筋通を南に。日本ばしへ出たりければ。宿引どもこゝに居合せ。兩人を見かけて。宿の相談をしかくるに。早速きはまり。すぐさま。此長町の七丁目なる。分銅河内屋といふにぞつれゆきける。やど引さきにかけぬけて「サア〳〵おきやくさまお供して來たわいな
やどやの(はんとう)「是はよふお出なされました。おいくたりさまでござります　彌次「ハイ同行四拾七人　はんとう「ナニ四十七人さま。コレ〳〵おさんどのや。大勢さまじや。西のおくの間を打ぬいてあげさんせ。よふきれい

は少き活業なり」浪華の魁

○道頓堀　安井道頓の掘りたる川なりと云ふ。

○顔みせ　十一月狂言、役者の入替へ後。

○伏見の昔船　夜船と晝船とあり。朝出たるは晩に著き、夜出たるは明方に著く。

○長町　「浪華の賑」日本橋の條に「此道は北を堺筋といひ南詰より南九丁を長町といふ、紀州泉州よりの喉口にして往來常に繁く兩詰には旅舍軒を並べ……長町九丁目の間にも旅舍多く就中瓢箪河内屋分銅河内屋などいへる大家有りて數百人を宿す、此町筋に傘を製する家多くありて浪華の名物とす」とあり。

○同行四十七人　忠臣藏の洒落。「泉州堺の天川屋」と云ふと云へるも然り。

○久三　下男の通稱。久三郎などとも云ふ。舊參より轉じたるか。

○いこ　甚だの意か。

に掃だしたがよいわいの。コレ久三。おあしお洗ひなさるお湯はどふじやい。ぬるてもだんない。水なとうめてあげませい。はやう〳〵。時にもしその四十七人さまは。いこおあとかいな　彌次「イヤ是にて先達て鎌倉ハ發足。われ〳〵兩人は。是より泉州堺の天川屋へ　はんさう「エヽなんのこつちやいな。やつぱりおふたりかいな。コレ〳〵おつんや。おふたりじやといな。こつちやのおひとり居しやしやる。せまいとこにさんせ　おつん「ハイ〳〵御案内いたしましよかいな　ト此内兩人は、あしをあらひあかりて見るに、此宿は富所、ずい一の大家にして、およそ、間かず七八十もありといへり、兩人女につれられてゆくに、おくのくちもとの、六でうばかりなる小ざしきへはいる、外に一人この間にとまり合せゐるとなれば、　はんさう「御ゆるしなされませどふぞもし。御究屈にござりましよが。御一ッ所になされて下さりませ　此旅人は丹波の人「だんないてや。サア〳〵こつちやへわせさつしやい　北八「これは御めんなせへ　彌次「モシわつちらア二三日も逗留して。所々見物がしたいからおたのみ申やす　はんさう「ハイかしこまりました。先御ゆるりと　トいひすてゝかつてへゆく　たんばの人「コリヤわごりよたちは。どこからきよりました　北八「わつちらアゐどでござりやすおめへは

○いつかい　大。

○しゝまひばな　獅子鼻に同じ。

○ぼやけぶとり　火焼か。太りたる形容。

たんば「わしは丹波のさゝ山在郷今度高野へゆきよります。コリヤあじいな縁で。あいやどしよりますれいな　彌次「とかく旅は道づれ。お心安いがよふござりやす　ト此内やどの女「まゝあげましよかいな　ト三せんもち来りすへる、しよくじのうち、いろいろおもしろきやくす、やがてめしもすみ、ゆにも入てしまふと、大あはたの女あんま、いやらしきふうにて、さぐりさぐりきたり「おりやうじはよござりますかいな。どふぞもましておくれんかいな　彌次「イヤあんまさんか。おめへ女だの。しかも生ていらア。北八どふだ。ちまねへか　北八「こつちからもんでやりてへ　あんま「チヽおかし。何いひじややら。おまいさんがたはおゑどじやな。わしやアノおゑどのおかたがすきじやわいな。とのたちは男らしうて。ものいひじやとこが。とんだゑらいすつぱりとしてよいわいな　北八「おめへさつぱり目が見へやせんか。見へると此うちに。此男よりわついゝおとこがゐるに。見せてへなア　あんま「そじやあろぞいな　彌次「ナントあんまさん。ちがいゝ男か。そふして年はどつちがわけい。あてゝ見なせへ。あたつたならふたりながら。もんでもらひやせう　あんま「ソリヤいつきにあてるわいな　北八「コリヤおもしろへ。サアおいらはいくつぐらひだ　あんま「まあみなされ。おまいさんは廿三四　北八「コリヤきついは。男はいゝ男だろうね　あんま「さよじや。お顔はよふ道具がそろふてじや　北八「かけてあつてつまるものか　あんま「お目がゑらいいつかいお目じやあろがな。そして。お鼻が　北八「高いかひくいか　あんま「こういふたら。おはらたとかしらんが。あたしかに。しゝまひばなじやあろぞいな　たんば「ハヽヽきよといく　彌次「おいらはどふだ　あんま「あなたは。いこふけてお出じやわいな。おとしは四十ばかりで。おいろがくろふて。はなのひらいた。髭だらけなおかほじやあろがな　北八「きめうく　あんま「そしてぼやけぶとりに。よふ肥てゐなさるじやあろ　彌次「イヤちがつたく。おいらはひんなりとしていろ男　北八「うそをつく。コリヤあんまさん

○くわしん　上方にては菓子を「くわしん」と發音す。

○なか／＼いゝ菓子だぞ　こゝにては女を指す。菓子にかこつけて女を褒めたるなり。

○夢中作左衛門　辨へたき人物、夢中といふを擬人せしなり。

がかちだ。もんでやりな　彌次「やくそくだからしかたがねへ。爰へ來てくんな　あんま「チホ、、、、それへさんぜうかへ　ト彌次郎がうしろへまはり、もみにかゝると、此内女のくわしうり、はこをかさねてもちきたり「よふおとまりじやわいな。くわしん買ふておくれんかへ　北八「ヒヤアだん／＼と出てくるは。なか／＼いゝ菓子だぞ。おめへわつちらに賣氣か　くわし賣「さよじやっこちやおまいさんがたに。賣たうて／＼ならんさかい。やう／＼はしりまふてさんじたわいな　彌次「上方の女中は手があるの　くわし賣「手もあしもないが。むちやにおまいさんがたに。ほれたのじやわいな。そふおもふてどふぞ。くわしんかふておくれや。ドレおちやゝくんでさんじやうかへ　トくわしはこをつき出しおいて、かつてへゆく　北八「エヽ、つらのにくいほどしやべるやつだ　ト北八、ひつそり彌次郎に目くばせして、そばさくわしのはこの下に、かさねてあるはこより、何やらくわしを、五ツ六ツとりいだし、うしろへおやつさかくすと、かのあんま、手を出して、そのくわしをそつとひつたくり、たもとへいるゝを、北八いつかうにしらず、彌次郎もおなじく、くわし三ツ四ツとり出すに、かつてより人おとするゆへ、おやつこはこはもとのごとくかさねておき、かのくわしは、うしろのかたへかくすを、あんまこれをもそつとせしめて、たもとにいるゝを彌次郎も、いつかうに※むちう作左衛門なり、此うち、くわしうりの女、茶をくんでぼんにのせ、もちきたりて「サアぬくいのをあがりなされ　彌次「せつかくおめへきなさつたものを。まんざらすげなくもしられめへ　トくわしはこのうちより「これはいくらだ　くわし賣「ハイ／＼四せんヅヽじやわいな。ソリヤもむない。こつちやあがつて見なされ　トならべたてゝすゝむるに、彌次郎も北八もんはの人ら、こんでにとつてくらふ　北八「コウ待ねへ。むせうにくつて。かずがしれめへ　くわし賣「よご

ざります。なんぼなとあがりなされ。こちやたゞでもあげよわいなノウおたこさん　あんま「さよじやわいな。サアよござります。こつちやのおかた。もみましよかいな　彌次「ヲヤもふしめへか　あんま「サアあなた。わしかねきへ。よてかしんかいな　北八「ソレよしか〳〵　くわしうり「ちやゝ最ひと〳〵あがりなさらんかいな　あんま「おなべさん。御ちそうなされ。此お旁は忝い御心ふしじやわいな。サアあなたおよこに　北八「もふ肩はしめへか。ごうぎにはしよるの　たんば「コリヤわりさまたちのくちまつにかゝつて。忝らう。くはしんくてのけた。何ぼざい　くわしうり「ハイ〳〵お三人さまで。貳百四拾八せんでござりますわいな　彌次「ヤアとんだことをいふ。何そんなにくふものか。きた八はいくつだ　北八「さればのいくらであつたか　たんば「わしは四文のを五ッくたから。ソリヤ二十やるぞ　北八「そんならあとはふたりで出すのか。ばか〳〵しい菓子よりかはたごのほうがやすい　くわしうり「そじやてゝ。あがりなされたものをしよとがないじやないかいな。ヲホヽヽヽ　彌次「イヤヲホヽ、所じやアねへ。とんだめにあはせる　トこゞといひながらせんかたなく、ぜにをはらひやると、此うちあんまもんでしまふと　北八「あんまさんはいくらだ　あんま「ハイおふたりで。おあし一すじおくれいな　北八「ナニ五十づゝか。コリヤたかい〳〵　トこれもあとではぜひなく百文出してやるとふたりはたつてゆく　彌次「上がたの女にやアゆだんがならねへ。しかしくわしうりめがおいらをいゝようにしたと。おもつてけつかるであろふが。そふは虎の皮。こつちにも荒神さまがあらア　馬鹿なつらな、とつくに上菓子を。こゝにはへつけておいたを。しらぬやつさ　トうしろをさがすにせんこくのくわし見へず、北八もおなじく、こゝにおいたはづだと、たづぬるにいつかう見へず、かつてより女あんまやくわんをもちいで「御退屈さまでござりましよ。おにばながでけました　トおいてゆく　北八「エ、今のがあると。てうどいゝのに。どふしたしらん　たんば「ソリヤいんまのあんまとりめが。とていんだもんじやあろ。ハヽヽヽ、イヤこゝに。忝いものがありよる

○よてかしんかいな　寄つて下さい。

○わりさま　お前様が。

○くちまつ　口前か。

○おふたりでおあし一すじ　五十宛にて百文。緡にさしあるを以て一筋と云ふ。

○そふは虎の皮　さうらまくは虎の皮の褌、といふことあり。

○荒神さま　竈の神、一軒の主人だといふ意。

○はへつけて　分け取って。

トうしろのやなぎごりをあけてちいさなまげものをとり出し「サア〱コリヤ道修町の店で貰ふてきよつた。さとう漬じや。茶の子にひとつ
やらつしやれ　北八「コリヤありがてへ。彌次さんどふだ。たんとやらかしねへ　たんば「イニヤそないに。
くてもらふてはならんわい。こちくされ　トひつたくりて、そう〱にしまふさ、此内女ふさんを引ずり来り「もふおとこ。のべましよかいな
トそこら取かたづけるうちかつてより今ひとりの女まくらふとんをもち来り、ほうりこんでゆくを見れば、やつぱり今のあんまとりなり、みな〱きもをつぶし　彌次「モシ女中。今そこへ來た女は。さつきのあ
んまじやアねへかの　女「さよじやわいな　北八「どふして目が見へる　女「アリヤお客さんがたへ出るに。
目あきではお心おきがあつてわるいさかい。おさしきへは。あないに目の見へんふりして。出てじやわ
いな。爰の内かたですきられますさかい。いにしなには。いつもあないに勝手へつだふていんでじやわ
いな　彌次「ヤアさては。おいらがことをよくあてたはづだ。目が見へるものを　北八「そんならおいらがも
のしたものも。ものしやアがつたにちげへはねへ　女「ヲヽおかし。おまいさんがたの。源四郎してじやく
わしんじやてゝ。わたしもこないに貰ふたわいな　トたもとから出して見せ打わらひかつてへゆく　北八「大笑ひ〱　彌次「やつぱり
あつちが。※したつぱらに毛のねへのだはハヽヽヽ

※ろく〱に按摩はとらずくはしまでもこちに目のないゆへにとられた

断打興じ〱。それより三人とも。蒲團引かぶり。うちふしたるに。丹波の人ははやさきに。高鼾かき
出せど。ふたりはいまだ寐入もやらず。彼是とはなしあふうち。裏通のはたけに。犬の聲きこへ。割竹の
音。※時のたいこも。はや九ッのかず打過る頃。きた八あたまをあげて「コレ彌次さんおめへごそ〱と
何をする　彌次「なぜか。あんまりねられねへから。ふつとおもひ出して。コレ見や。足でこんなものを
かきよせたは　トよぎの中から、ちいさなまげものをとりいだして見せる　北八「ヲヤそりやさつき。あの人の出した。さとう漬じやアねへか

○茶の子　東京にては茶うけといふ。上方語。

○こちくされ　此方へ下され。

○内かたそこの家といふこと。

○すきられます　過ぎられる、身すぎ、世過のすぎたり。

○源四郎　樂屋通言に、ごまかすことを源四郎と云ふ。

○したつぱらに毛のねへ　吉原大雑書云「としまのふる狸となつて、下腹にけはなか〱あるべきとも思はれず」、いづれも古狸にいへる例多し、腹つゞみ打ふるして其處の禿げたるなるべし。

○「ろく〱に」の狂歌　按摩はろくにとらず　此方が按摩に眼の無き爲、菓子を取られたの意。

○割竹の音　火の用心の割竹。

○時の太鼓　「街能噂」に「大坂にては夜のときを知らするには太鼓にて廻る」とあり。

○知音女房　馴染んだ女房。

○大切ない佛　大切なに同じ。「いふは活へたる言葉」

彌次「コリヤ聲がたかい。柳ごりのわきに出てあるな。さつきからにらんでおいたからよ　北八「コウひとつよこしねへ　彌次「まて〳〵　トあんどう〳〵とさがしけれど、さいはひすかさず、かのまげものゝふたをとり、ひとつ〳〵つまんでくちにかつかふ　北八「ドレ〳〵　トまげものをひつこり、こゝろよくつまんでくちにぐしやり、にちや〳〵　「ヱ、なんだ。いつそ灰だらけなものだペッペ〳〵　彌次「コリヤさとう漬じやアねへ。なんだかおかしな。にほひがする　トむねをわるくしてゲイ〳〵といふこゑをきゝつけ、やがて目をさましこのていを見るより、びつくりして、かみさまはのおき　「ヤア〳〵。わりさまたちア。コリヤ何しよる。わしが女房をなんぜくひよる　彌次「ナニおめへのかみさまたアなんのこつた　たんば「なんのこつちやとは。情ないわいの。ソリヤわしが知音女房じやわいな。そのいれものゝふたを。よふ見やしやれ　トいはれて彌次郎さんでおき、あんどうのまへにもちゆきかのふたのかきつけを見れば　彌次「ハア秋月妙光信女ヤア〳〵。そんなら此曲物は。おめへのかみさまの骨だな　北八「ナニ骨とは。コリヤ大變〳〵。どをりで胸がむかつく。ヱ、どうしよふ　たんば「わりさまたちの。むねのわるなつたよい。わしのむねがつつはつたわい。コリヤわしどもの村の所法則で。その骨を高野へおさめにもていきよるのでござるわいの。よふまあ。大切ない佛をなんぜくひよつた。わりさまたちは。眞人間じやありやしよまい。鬼か。ちくしやうか。どしたのじややい〳〵。　トたもとをかほにおしあておい〳〵となく、彌次郎もおかしさはんぶん小はらたつこ　「ヱ、むつかしいこたアねへ。おめへがさつき。柳ごりをあけた時。こゐけ出たをしらずに居たのは。そつちの無調法。それをさとう漬だとおもつて。くつたのがこつちの鈍相。ソリヤ五分〳〵だ。何もいさくさはねへわな　たんば「イヤ〳〵きかん〳〵。もとのとをりにしてかへしやく　トいきせいはつて、なみだまじりに、わめきちらせば、きた八いろ〳〵ここわりいひ、さま〴〵なだめすかして、やう〳〵となつとくさせ、しづまりければ、彌次郎もこゝろのうちにおかしさ、まぎらかして「イヤもふめんぼくしでへもねへのさ

人の骨くふもことはり若いとき親の脚をもかぢりたる身は

此彌次郎がくちずさみに。丹波の人も心とけて笑ひを催し。漸くきけんなをりて。打臥たるが。程なく一睡の夢さめて夜明ければ。勝手よりおこしに來り。手水つかふやいな。膳をすゆるに。三人ともくひしまひ。丹波の人は。高野へと出ゆき。彌次郎兵衛喜多八は。二三日逗留のつもりゆへ。けふは爰もとの名どころ一見せんと。したくするうち。ばんとう出て「コレハおはやうござります。今日はどつちやへぞおこしでござりますかいな。さよなら御案内のもの。おつれなさるがよござりましよ　彌次「ホンニそれをおたのみ申やす　ばんとう「畏りました。コレ〳〵※左平次どの。ちよとござんせ　トかつてよりあんないの男をよぶ　あなたがたが。あんないたのむとおつしやつてじや　北八「モシわらざうり。二そく買てもらひてへの。彌次「イヤ一そくでいゝ。おいらは京雪駄買てきた。どふもわらざうりではみす〳〵田舎ものゝ。上方見物と見へてわりい　北八「ナニ旅で見へもへちまもいるものか　左平次「おしたくがゑいなら。出かけましよかいな　彌次「サア〳〵はやくめへりやせう　ばんとう女ども「いてお出なされませ　トこれより三人打つれて此やどを出かける　左平次「ナント断いたしましよ。天王寺生玉は。住吉御参詣のときにおまいりなされ。けふはこつちやのほうへ。さんぜうわいな　ト長町をとをり、北八ぴいつへより、高津新地に出、まづ高津の御みやにまいる、こゝはむかし、仁徳天皇の、たかきやにのぼりてみればと、ゑいじ給ひし舊地にして、今にはんじやういふはかりなし、社内にこうふでんおくのちや屋、さんけいの人をよぶ「サア〳〵おはいりな〳〵。これへ〳〵おやすみな〳〵〳〵　※きしんじやうるりの木戸「今じやア〳〵。紙屋徳兵衛。天滿やおはん。かわらやばし白木屋の段。次は千本ざくらの天川屋。弁慶の腹切出がたりじやア〳〵　※さをめがねのいひたて「サア見なされ〳〵。大坂の町々蟻の這ふまで見へわたる。近くはどゝんぼりの人くんじゆ。あの中に坊さまが何人ある。お年寄にお若い衆。お顔の※みつちやが何ぼある。女中かたの器量ふきりやう。※ほつこり買ふて喰てござるも。濱側でしゝなさるも。橋詰の非人どもが。繻絆の虱なんぼとつたといふまで。手にとるや

○左平次　大坂詞に世話やきを左平次と云ふ。

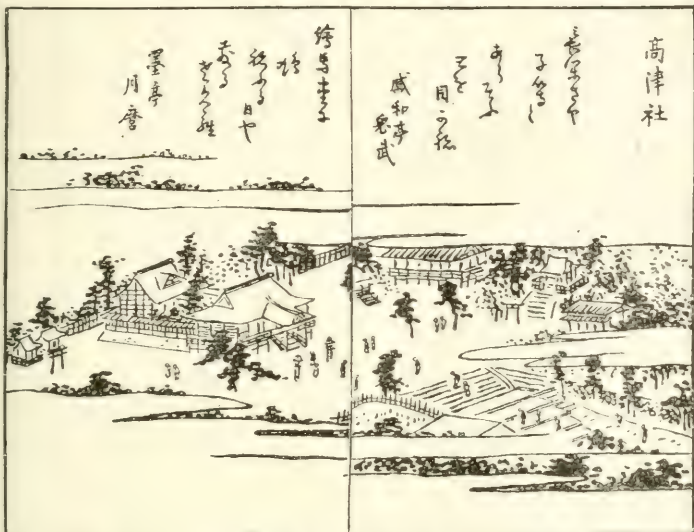
○きしんじやうるり　奉納上るり。

○めがねのいひたて　浪華の賑」の目鏡屋の口上にも「淡路嶋より須磨の浦に通ふ千鳥の鳴く聲も耳へうつれは聞えます」とあり。

○みつちや　ジャンゴ面。

○ほつこり　燒芋。

○大庄の鰻　道頓堀二ツ井といふところに在りしよし。

うに見ゆるが奇妙。また風景を御らんなら。住吉沖に淡路島。兵庫の岬須磨あかし。大船の船頭が。飯何ばいくた。何くた角くたち。いつきにわかる。まだ〳〵ふしぎは。此目がねをお耳にあてると。芝居役者の聲色つけひやうし木のかたり〳〵。残らずきこへて見たもどうぜん。お鼻をよすれば。大庄のうなぎのにほひ。ふん〳〵とあがつたも同前。たゞの四文では見るがおとくじや。千里ひとめの遠目鏡これじや〳〵　彌次「めがねやさん。おとにきいた新町とやらも。ちかく見へるかね　めがねや「さよじや。このお山のツイねきに見へるわいな　彌次「それじやアちかく見へるのじやアねへ。とをく見へるのだ　めがねや「なぜもし　彌次「ハテ此高津と。新町との間はたつた。壹寸貳三分ほかねへもせぬものを　めがねや「ソリヤおまいおさかの繪圖で見てかいな　彌次「さやう〳〵。ハヽヽヽ先お宮へまいろう。ハヽアいかさまいゝおみやだ　ト三人ともお前にぬかづきたてまつりて

もろ〳〵の神に脊くらべしたまはゞ
さこそたか津の宮のたうとさ

○かねにうらみ 「京鹿子娘道成寺」の文句。

是より境内の石段を西におりたち。谷町どをりに出たるに。何とやら腹淋しくなりたれば。さいわいと居酒屋めきたる。見せを見つけて立寄 弥次「モシなんぞありやすかね さかやのていしゆ「ハイ煎売に鳥貝。鯡の昆布まきじやわいな 北八「さつぱりわからねへ。そのうち。うめへものならなんでもい丶出してくんな ていしゆ「ハイ〳〵いつきにあぎよわいな 弥次「イヤいつきんは入らぬ。三合ばかりたのみます 北八「ときに尾籠ながら。用たしにいつて來よふ。雪陣はどこだ。チ丶あるぞ〳〵 ト玄んさきより、むかふへまはりて、せつちんへはいるさ、此内こなたには、さけさかな出たるに 弥次「サアひとつはじめなせへ あんないを弥次「マアあなたから 弥次「そんならおさきヲト丶丶丶ア丶い丶酒だぞ。コリヤきた八。はやく出ねへか。酒がみんななくなるはやく〳〵 トせりたてられ、きた八せつちんのうちにて、のみたくてこたへられず 北八「チ丶合点だ。今出るぞ トうろたへて戸をあけ、ずつと出た所か、ふしぎなるかな、さかやの内にてはなく、このせつちんは、けんまへのせつちんにて、此さかやこ、うらにすむ人の家さ、両ほうにてつかふせつちんなれは、あなたにも、こなたにも、両くちあるゆへ、きた八うろたへて、はいりしほうの戸をあけず、むかふの戸をあけて出たるゆへ、よそのうちなり、ゐんきよらしきぢいさまひとり、何やら小ざいくしていたりしが、北八を見こきもをつぶし、目かねのうへからじろ〳〵と見るに、きた八もうろ〳〵さ、いつかうにがてんゆかず、まごつくうち、かのゐんきよ「モシ〳〵こなんは誰じやいな 北八「ハイ是はちがつたそふな。モシさかやへはどふまいりますへ ゐんきよ「ハアよめたわいの。こなんは。おもてのさかやのおきやくじやな。其椽側をひだりにとつて。すぐにいかんせ 北八「ハイ〳〵コリヤ行どまりだ。 ゐんきよ「その戸をあけていかんせ 北八「ハ丶ア又もとのせつちんへはいらにや。いかれねへな トせつちんの戸をあけんさすれはうちに「エヘン〳〵 北八「なむ三ほう道がふさがつた トいふをきゝてせつちんのうちより 弥次「きた八か。おつなほうへ出てゐるの 北八「イヤ弥次さんだなおいらア戸まどひをして。とんだめにあつた。はやくそこを。とをしてくんねへ ト戸をあけにかゝる、弥次郎うちよりかけ〳〵ねをかけて イヤちつとまつてくれ。そしていけむこたア。大毒だといふこつたから。ひとりでに。出てくる時節を待てゐるのだによつて。すこしひまがいる。ア丶退屈だは。※かねにうらみでもかたろふか。北八

〇山づくし　同じく道成寺の文句「面白の四季のながめや、三國一の富士の山」より「東叡山の四季のかほはせ三ケ山」までを云ふ。二三治の「紙屑籠」によれば、二朱判吉兵衛の作を取入れたる嵌込物のよし。

そこでくち三味線たのむぞ　北八「エ、とんだとをいふ。はやく出なせへ〳〵　トそこからおせどもおさず、うちには、ゆう〳〵とごうじやうじのうた「戀の手ならひつい見ならひて。誰に見しよとて。べにかねつきよぞ。みんなぬしへの心中だて。ヲ、うれし〳〵　北八「氣のなげへ。なんのこつたな　ていしゆ「すへはかうじやになア。そふなるまではとんといはずにすまそゞへと。せいしさへいつわりか。嘘か誠か。どふもならぬほど。おひにきた。　北八「エ、コリヤはやく出ねへか〳〵　トいへどもうちにはさつぱりなんのおさたもなきゆへ、きた八せつこみ「どふだちふ出たか。エ、コリヤ。彌次さん〳〵　トいふうちしばらくムヽ、ントンといふおこして「ふウつウり。悋氣せまいぞと。たしなんで　北八「コレサどふするのだ　彌次「ちふとつくにいゝが。まちやれ。やまづくしまでやらかそふ　北八「エ、ばかなことといひなせへ　トいひさまむりに、戸をつよくおせば、かけがねはづれて、北八せつちんのうちへころげこむと、彌次郎もさかやのかたへ、戸をあけて出るひやうし、戸ははづれてたふれるそのうへゝ、北八ぐるめ、どつさりとせつちんの戸はやぶれる　彌次「アイタヽヽヽ　ていしゆはしり來りて「コリヤ何じやいせつちんの戸がやくたいじや　北八「イヤぜんてへおめへがたアこんなに。兩頭の雪隠にしておくからわるい　ていしゆ「そじやてゝふたりつれまふて。せつるんへゆくといふとが。あるもんかいなあほらしい　彌次「かんにしてくんなせへ。わつちらがわるかつた　トひざがしらをさすり〳〵みせのかたへ出きたれば　左手「なんとなされたぞいな　北八「うち身には酒がいゝといふとだ。はやく一ッぱ

いのましてくんな　弥次「こゝはつけがわりい。又さきへいつてのみやれ　トこのところのかんぢやうをして、そう〳〵出かけると、さかやのていしゆ、ふせう〳〵にあいさつもせず、こゞとをいひながら、ふくれかへりてゐるを、ふたりはおかしく、こゝをたちいづるとて

※出ることのおそいはやいであらそひしこれ宇治川の雪陣かそも

それより谷町どをりを。安堂寺町より。番場の原に出。はなしものしてたどりゆくほどに。頓て天満ばしにざいたりける。まことや淀川の流れひろく。行かふ船ども。漕ちがひ棹さしあひてうたひ。或は遊山舟に三みせんたいこ。はやしたてゝゆくを。橋の上より。往來の人立とまりて「ヤアイ〳〵。おどれらそないにたてくさつても。うちへいんだら。借錢乞にせがまれて。吼おろがな。ゐらいあほうじや。おどれらがあほうじやあほよ〳〵　ふねの中より「何じやい。そちがあほうじやわい　はしのうへ「何ぬかしくさる。ふねの中「ヲヽ、いしこやの。あほうくらべせうかいこちにはよふかなやしよまいがな。はしのうへ「なんのおどれらに。まけてゐいものかい。こちやあほうのゐらいのじや　トむせうにりきみかへる、此おとこのつれと見へて「ハテゐいわいの。こなはんがゐらいあほうはみなしつておるこつちや。ほつておかんせ　トひつぱりてつれてゆくとあと からわうらいの人くち〴〵に「ヨウ〳〵あほうのゐらいの〳〵ハヽヽヽヽ　ト此内弥次郎きた八も、くんじゆにおされながら、このはしにさしかゝり、橋のうへと、ふねとのけんくわ、いづくでもよくあるやつと、こゝろにおかしく、うちすぐるとて

※眞黒になつてはらたつけんくわとてあほよ〳〵と烏めがする

それより此橋を北へおり。市の側どをりをゆくに爰は青物の市たつ所にて。殊に繁昌の地なりける

※青もの〻賣買ながら商人に尾ひれの見ゆる市のかはまち

ほどなく天満宮の御社にいたるに。まとや神徳の彭々たるは。參詣の人どよみにあらはれ。料理茶屋の赤前垂かどになまめき。水ちや屋楊弓場のかんばり聲。往來の心をうごかせ。あるは※仙助が能狂言。※忠

○「出ることの」の狂歌　佐々木梶原の先陣爭ひを指す。「雪陣」を「先陣」に利かせしもの。

○「眞黒に」の狂歌　眞黒になつて怒ること、早く出でたり。その眞黒より烏に思ひよせ「あほよ〳〵」を烏の啼聲に擬す。

○「青もの〻」の狂歌　「尾鰭の見ゆる」は立派に見えるの意。青物の賣買なれども、魚屋の如く尾鰭の見ゆると云へるなり。

○仙助が能狂言　不明。

○忠七がうき世ものまね　「皇都午睡」に「忠七を豆蔵又おでで子とも云」とあり、同じ書に「輕口物眞似とて性もなき馬鹿口をたたき頤をはづさせ、劇場俳優の物眞似をするを東都にて豆蔵声色と云。浪華にて忠七身ぶり物まねと云、豆蔵忠七は小屋主座元の名也」ともあり。

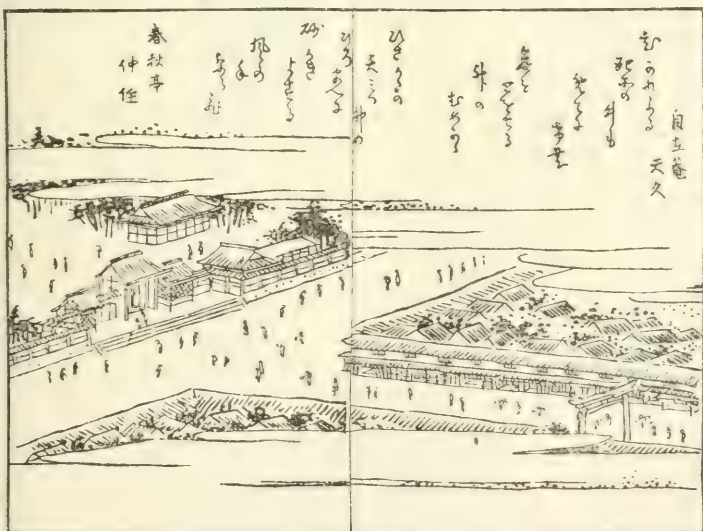
○靈符の女　占の一種。「筆拍子」に「靈符―長谷」とあり。靈符は處の名。鎮宅靈府神の祠あるより云ふ。

七がうき世ものまね。其外山海の珍物見せもの。芝居。輕わざ。曲馬乗。境内に充滿たり

何ひとつ御不足もなき御繁昌まことに自由自在天神

かくて社内悉く順拜し。靈符の女の。ましろきかほも。横目に見なし。小山屋のかどをも。むなしく打過。天神ばしどをりに出たるに。彌次郎兵衛のはきたる雪駄いかゞしてや。横はなをぬけたりければ

彌次「しまつた。京のものはゆだんがならねへ。ごうせへに請合てうりやアがつて。いま〱しい　トつぶやく

向ふよりかみくずかひ「デイ〱デイ〱　是は大さかにては、かみくずかいかくのごとくデイ〱とよんで、あるくを、彌次郎は、京ごゐかヽで、せつたをしまふ、おもひとがかけ「コレ〱此せつた頼みます　かみくずかひ「ハイコリヤかたしかいな。かたしではどふもならんわいな。見りやそのはいてじやも。はながどふやらそこねそふじや。いつ所にさんせ　彌次「ホンニこいつも今にぬけるは。とてものことに。いつ所にして。いくらだ〱　トいふゆへかみくずかひはこれをかひとる心にて　ひねくりまはし「コリヤいこ安いが。ゐいかいな　彌次「そふさ。なんでも安いがいゝの　かみくずかひ「さよなら四拾八文じやが。

○わたなべ　渡邊村。穢村なり。
○よこつたをしめ　罵語。

どふじやいな　彌次「イヤそれでは。たかい〳〵。廿四文ばかりでよかろう　かみくず「エヽじやら〳〵いふてじや　彌次「ハテサ。ほんとうに。廿四文〳〵　トむせうに、はきものをつきつけるゆへ、かみくずかいは、いつかうにがてんゆかず、うりてのほうから、ねだんをねぎるはめづらしいこと、おかしさはんぶん、何にしてもそんはいかぬことなればぜにを取出し「ハイそしたら。廿四文にまけてあけて買ましよかいな　ト廿四文彌次郎にわたし、せつたを取荷のうちへいれて、ゆかふとする　彌次「コリヤまつた〳〵。おれに錢をよこして。その雪駄をどふするのだ　くずや「ハテ買ふたのじやわいな　彌次「とんだことをいふ。はなをがぬけたから。なをしてくれろといふのだはな　くずや「イヤこなはん。わしをはきもんなをしじやとおもふてかいな。コレ紙屑かいは。※わたなべから出やせんぞへ。あたけたいなわろじやわい　彌次「イヤこの※よこつたをしめが。なぜそんなら。ディ〳〵といつてあるくのだ　トりきみかゝるを左平次おしとめ「ハヽアきこへた。コリヤおまいが麁相じや。わしやさつきにから。かわつたとじやとおもふてるたが。アノおふどじや。はきもん直しか。ディ〳〵といふて。あるきおると。いふこつちやが。當地では。くずやどのだ。みなディ〳〵といふてあるくこと、御ぞんじないさかい、御了簡ちがいじや。コレくずやさん。こちがわるい。ゆるしなされ　くずや「じやてゝ。あんまりなわろじやわいな。あんだらくさい　北八「ハテ間違じや。その雪駄をけへしてくんな　くずや「いやじやわいの。これをはきもんなをしじやと。いひくさつて。こちや外聞がわるいわいの　トはらたつを、北八左平次がやう〳〵とこゝはりいひて、せつたをとりかへし、それより彌次郎は、わらぞうりをもとめてはき、せつたはこしにはさみ、天神はしをこへ八打わたり、よこぼりといふところを、ごりゆくに、こゝに人だちさはがしく、けんくわと見へて、くち〴〵にわめきのゝしりて、うちあひ〳〵、わらいいやもうへにかきなり、そうだうするに、彌次郎きた八も人におされて、行ぬけんとしけるが、何か紙につゝみたるもの、あしもとにおちてあるゆへ、彌次郎何心なく、ひろひとり、ひらき見れば、「(子)八拾八番」かくの如くかきたる札なり、今はたへて、そのことなしといへども、此時分はざまのみやに、富のありし時箇にこゝ、わらいの人、このくじゆにおされて、とりおとしたると見へたり、はるかにこゝをゆきすぎて、左平次「モシ今あなたの。おひろひなされたのは富の札じやないかいな　彌次「そふだろう。コレ八十八ばんとありやす　左平「コリヤ座摩の宮の札じや。しかもけふつく日じやわいな。大かた今頃は。もふつい

てしもふたじやアないな　彌次「そふさ。どふせおとすくらへのちんだものを。からつぽの札であろう。へちまにもならねへ　トそしき、ひねりてうちすてるをきた八あさよりちやつとひろひて、くわいちうしゆくほどにやがてかのざまのやしろにいたりけるに、けふは、※くわんけ富の當日、こゝに今つきしまひたると見へて、くんじゆ下向、おびたゞしく、おしもわけらますず、そのなかに人のはなしながらゆくをきけば　「アヽ、殘念なことしたわいな。あの八拾八ばん。すでのことに。わしが買ふ所じやあつたわいの。あれ買ふたこなふたはな。こちの運の來らんのじや。買ふたら第一ばんで。金百兩とりおつたもの　トはなしながらゆくを彌次郎きゝつけ、きよつとして　きた八きいたか。今の札をとう／＼やらなんだらよかつたもの。エ、どふしよふ。あとへ戻つても。もふあるめへか　北八「ナニ今まであるものか　「エ、／＼殘多いことをした　トあとふりかへり／＼神前にいたり見るに、當りはつきしまひて第一ばんより、だん／＼と、あたりふだのばんづけ、いち／＼しるして、正めんにはりつけあるを見れば、一のとみ、八十八ばんとふでぶとにかきたりける、彌次郎あまりのことにあきれはてゝ　「エ、いめへましい。おらアもふいつそのこと。坊主にでもなりてへ。とても運のひらける時節はねへ　北八「ハ、、、、、そんなにちからをおとすめへ。おれが百兩とるから。おめへにも。三兩や五兩は。かしてやる。コレ見なせへ　トかのひろひしふだを出しみせる　彌次「ヤア／＼手めへひろつて來たか。出かした／＼。こつちへよこせ　北八「イヤそふはなるめへ。おめへのすてたものを。あとからちやつとひろつてきたから。コリヤアおいらにさづかつたのだ。　彌次「イヤ

○くわんけ富　各地共に諸堂はた寺社のためにて、勧化募財に擬へるなり。

○けたい　卦體か。怪體か。

〳〵ひつきやう。おれがさきへ見つけて。ひろつたりやこそ。又手めへの手へも入たといふものだから。 彌次「ハテそふいはずと。マアよこせ　トむりにひつところうとするきた八いかなやるまいとせりあふを左平次とゞめて「コレ〳〵しづかになされ。そないにいふたら。ひよつとすてたぬしがきゝつけて。出まいものでもないさかい。何じやあろと。わしが挨拶じや。半分づゝわけなされ。そしてわしにも。ちとはおくれじやあろな　北八「ソリヤアおいらがしやうちの助だ何にしろ善はいそぎだ金はどこで受取のだろう　左平「ソリヤあこの世話人のおふとこでわたしおりますわいな　北八「そんならそけへいつて見やう　ト打つれてそのところへゆきて見れば

口上
當日殊之外混雑仕候に付當り札之御方明日四ツ時金子御渡可申候以上
月　日　世話人

かくのごとくさげふだしてありけるゆへさてはけふのことにはいかずとまづ神前にまいりて

御神の利生かくべつ有がたや罸にはあらじあたる富札

かくていじて大きにいさみたち社内のこらずじゆんぱいしておもてのかたにたちいづる　北八「ナント其内すてたやつが金請取にいきはせまいか　左平次「ソリヤ氣遣ひないわいの。いたとて札と引替にせにや。わたさんさかい。なんぼ當人でも。無證據じやわいの　彌次「きめうく。ごうてきにおもしろくなつたわへ　北八「あしたは百兩。久しぶりの對面　彌次「エ、ひさしぶりもおかしい。ついぞあつたこともなくてハ、、、、　トいさみよろこびやがてかしこのちや屋にはいりてまづまへいわひと酒くみかわしぬ

道中膝栗毛八編　中巻

かくて。彌次郎兵衛喜多八は。おもひもよらず。百両の富にあたり。たちまちいきほひをゑて。座摩の社地をいでしより。煮うり茶屋に入て酒くみかはし。ほろ醉きげんとなり。心おもしろげにうかれ立て。案内者の佐平次にひかれ。難波御堂の穴門より。御境内を順拝しながら

おふみさまときけば女の名にも似てあらありがたの穴かしこなり

それより。仁徳天王の社にまいる。これは世俗に博労の稲荷といふ　はくろうのいなりは別にけいだいに見へたり

博労のいなりといふもことわりや繪馬うりてくふ見せも見ゆれば

門前のでんがくぢやや「おはいりな／＼。田楽のやきたてあがらんかいな　北八「エヽしれたことをいふ。でんがくのさめたのがいけるものか　佐平「サア今が盛衰記。むけんのかねじや。ひやうばんで／＼　彌次「むけんのかねもすさまじい。こつちは百両とつてるるは。とほうもねへ。コウ北八。ナント是から新町とやらへ。女郎買にやらかしはどふだ　北八「おもしろへ。すぐにいかふか。ノウ佐平さん　佐平「ソリヤお出なさるはゑいが。無躾ながら。おまいさんがたのそのなりじや。とつともふあかんじやないかいな。ソリヤ局女郎なとおかいなさりや格別。みせつきじやてゝ。ちと身なりあんじやうして。あすの夜さりなと。お出なされ　彌次「コリヤなるほど。おめへのいふとふりだ。ハテ百両といふかねがとれるものを。とても買うなら。その太夫とやらを。買て見る心いきだ　北八「ヲヤもふ。くらへそばへてきたの　佐平「ソリヤ其はづの

○難波御堂の穴門　「東本願寺、在其南、堂宇結構、較西少減、大門二、東向、鐘鼓閣至低、石門在其後、疊石造之、俗稱穴門」(大坂繁昌誌)

○「おふみさま」の狂歌　「おふみさま」は門徒宗の御文章。文中に「あなかしこ／＼」とあるを「おふみさま」の名の女めきたるに利かせしもの。

○くらへそばへてきた　贅澤になつて來たの意。正しくは「くらひそばへ」なるべし。

○九軒の揚屋　新町の廓内にある町にて、揚屋のみあり、こみをつくし」に「此廓始まりしとき揚屋九軒を取立たる故此名あり」と見ゆ。

○まんがち　我勝の意。

○りうもん　籠瀬羽二重を云ふ。

○符帳　「筆拍子」に紙屋の符牒として擧げたり。イ、ユ、ヨ、キ、久、位、保、正といふ。

○きめの判官もりひさ　主馬判官盛久の洒落。

といの。わしおともして。※九軒の揚屋どつこへなと。おつれ申そ。時にこれが大丸屋。ナントゑらいもんじやあろがな　大丸やごふく店「あなたこれへ／＼。なんでござい。おはいりなく／＼　彌次「ナント北八。こゝへ今着物を。あつらへていかふじやアねへか　左平「ハ、、、、おまいさんも※まんがちな。あすのことになされませいな　北八「そふさ。今にやアかぎらねへ。サア／＼あよびなせへ　彌次「そんならあしたのとにしよふ。北八手めへは。何にするつもりだ　北八「きものゝとか。さればの結城のぐつといきな縞で。三まいばかり。羽折は※りうもんのこり／＼するやつの。芥子あられなぞが。金持らしくて。よかろうじやアねへか。　彌次「イヤ／＼それでは店者めく。そんなきものきたら。コレおまいけふへは何ほ出た。ヨの字か。キの字か。こちやホ久のしろもので。位出たさかい。ゑらい徳したなどゝ。※符帳でしやれよふといふふうだから。おさまらねへ。おいらはしまらりぞろへに黒羽折。お太刀壹本。ちよいと※きめの判官もりひさは。妙であろう。たゞしはぐつと。大ふざけに。

○ひがのこのへりとりむく　胴拔のことか。

○しゆんだ　けちくさい。

○あみだ池　北堀江下通り四丁目和光寺境内に在り。池中の島に寶塔ありて放光閣と名づく。

○砂場の和泉屋　大坂鑑昌詩に、砂場在二新町西一南北に店あり、饂飩に名高しとあり。

○「いつとても」の狂歌　三味線の「胴」を道頓堀にかけ、三味線の緣によりて「調子くるはじ」と云へるもの。

ひがのこのへりとりむく。うへにゆふきの棒縞。對のはをりはあんまり。きいたふうであろうか。八丈もやほになつた。唐棧はおやぢめく。南部じまはもふゆやにぬいでおるやうになつたから。おそれる〳〵　北八「そふさ。なるほど着やうといふと。まさかきるものもねへもんだ　トむちうになりてはなしゆく　あとからこつうらいのもの「きるもんがなかア。やつぱりその。うしろにおつきな紋所のある。幟の染かへしをきて。ゐさんすがゐいわいのハ、、、、　北八「イヤこいつらア何ぬかしやアがる　うしろの人「おまいのこつちやないわいの　トいちもくさんににげてゆく　北八「エ、いめへましいやつらだ今に見ろ。あしたはどんなものきるとおもやアがる　左平次「ハ、、、コリヤ無躾ながら。おまいがたが。そないにしゆんだなりして。縮緬じやの。羽二重じやのと。いふてじやさかい。わらひくさるのじやが。コリヤ敵算が。もつともじやわいな。ハ、、、、ときに是から。あみだ池へさんじて。砂場の和泉や。おめにかけたいな　彌次「イヤ宮寺もあきはてた。それよりかはやくしんまちへ行てへものだが。あすの晩までは。ごうてきにまちどをな　左平「さよなら。斯いたそかいな。わしなんなと。損料のきいもん借てあげるさかい。それ着て今宵。しんまちへお出なされ。おかねはあとでもだんない。わしがおやかたのしつてじや。揚屋へゆくさかい。どしてあすは。百兩おとりなさるのじやもの。なんじやあろとそふしなされ　北八「コリヤおもしろへいけつだ　彌次「いかさまなア。そんならすぐにかへつて。おめへに。そのさんだんをしてもらひやせう　トうこうこんになりしんさいばしすじを南へはやくも、どうとんぼりにいたりければ、まことに富地第一のさかりばにして、まへにしまの内あり、うしろに坂まちあり、おやまげい子のなまめき、行かふさまにぎやかなれ

　いつとても調子くるはじ三味線のどうとんぼりのにぎはひはそも

其日もはや。七ツさがり。大西の芝居打出して。櫓だいこの音喧く。評判じや〳〵の聲。木戸口に溢れ

○いろは茶屋　四十八軒あるよりこの名あり。「戯場樂屋圖會拾遺」に「元祿三年申十一月よりはじまる」とあり。

○嶋の内の迎ひ駕　芝居に行きてはねたる時、嶋の内より僅の距離ながら伊達に迎に行くを云ふ。

○大庄のかばやき　前に「大庄の鰻」と見えたり。「浪花名物富貴地座位」に「大庄の鰻追頓堀、柔かに忘れ難き風情あり、此にほひたまりかぬる鼻いつもなく木の葉天狗の芽出しにもなりなんとて夏のくれ尚ほ一ト間をせきたつ」とあり。

て。見物もどよみつれ。おしあふ中を漸くすりぬけ〱。ゆくまゝに角の芝居。中のしばゐの看板さへも目につかず。角丸若太夫。竹田の切狂言もうち出しまへ。※いろは茶屋の仲居。あかまへだれと倶に毛氈を引ずりてはしり※島の内の迎ひ駕。ハイ〱馬じや〱につれて。もまれ行ほどこそあれ。此群集大かたは。おかずとも拾文のなら茶屋へはいり。あるひは※大庄のかばやきに。鼻いからして入るもあり。日本ばし近くなりて。しばらく往來もすきたりければ。頓てはしりいだしてゆくまゝに。はやながまちの宿に着たりける。左平次さきにたちて「サア〱お歸りじや　やどの女ども「おはやうございます　アイ〱、是は左平さん御苦勞。ときに今の損印の理屈はどふだろう　左平「かしこまりました。いつきにせいらくして參上わいな　北八「そんならはや〱　ト ふたりはおくへとおるとおんなきたりて「モシナお湯におめしなさらんかいな。おひもじかア。御膳にいたしましよわいな　彌次「イヤめしも咽へはとをらぬ。なんだかそは〱して。しかし湯へはちよつと這入てこよふ　北八「おそくなる。ゆもいゝじやアねへか　彌次「イヤ顏ばかりあらつてくる　北八「おきやアがれハ、、、、　ト此内彌次郎はゆにいりにゆく。しばらくして、左平次そんりやうものを、ふるしきにつゝみて、はしりもちきたり「おまちがねであつたじやあろ　トつゝみをとけば北八かれこれとひねくり廻し「モシぶいきものばかりだ

○てんつるてん　東京にてはツンツルテンと云ふ。一茶の句に「たのもしやてんつるてんの初袷」
○無塩の奴凧　生きた奴凧。
○清盛さまの脈　川柳に「清盛の醫者は裸で脈をとり」とあるところ。
○ぬきもん　石持のことか。
○干鰯の仕切にゆかふ　百姓が干鰯を買ひに行くを云ふ。
○藪木寸伯　醫者の名の洒落。

ね　左平「じやてゝ。是が。いつちゐいのじやわいな。おまいには此黑紬がよかろ〳〵　北八「なんだ。とほうもねへ紋所だ。そしてたけがてんつるてんで紬はてへそうに大きい。これを着たら。無塩の奴凧といふものだろう。そつちらの嶋はなんだ　左平「ふとりじやそふな　北八「イヤ此小紋がよかろう　ト引たてゝ見れは女のきもの　左平「ハ、、、わしやおとこのきいもんかとおもふて。とこしきたわいの　北八「よし〳〵。斯しよふ小袖ひとつじやアしみたれだから。此女小そでをしたに着てうへはふとりだじまときめやせう　トふたつかさねてきかへ、おびをしめているところへ、弥次郎より、あがりて来り、「ヲヤ左平さんはやいな。エ、きた八めが。きたは〳〵男ぶりがいゝから。どこへ出しても。借着したとやつぱり見へる〳〵　北八「しやれずと。はやくしたくをしねへ　弥次「おらア此黑いやつか。よし〳〵。旦那と見へるやうに。お太刀一本こうきめてゆくは　北八「コレサおめへきものをきねへか。裸身に其脇差をさして行つもりか。醫者どのが清盛さまの脉を見にいきやアしめへし。とんだ狼敗やうだ　弥次「ときにはなりは　左平「おまい樣は此ぬきもんにしなされ　北八「けちなはおりだ。干鰯の仕切に。ゆかふといふなりだ　弥次「人のことをいふ手めへのふうは。藪木寸伯さまの代脉に來たといふうだ。ハ、、、　左平「おしたくがよござりますなら。さんじやうわいな　北八「ヲヤおいらはまだ。湯へはいらなんだ　弥次「ばかアいわずと。サア〳〵出かけやう　ト打つれてこゝをたつ、左平次は、ふたりが百両の富にあたりしにつけこみ、なんでもわりまへを、せしめんとて、むせうにおひやりちらかし、このやどのはんとうへふきこみ、しんまちあけやへの手がみをもらひて、打つれこの所を出かける　かくてみたりは。足もそらに長町を北へ。堺筋ますぐにゆけば。はやくも順慶町にいたりける。名にしあふ此所は。夜見せはんじやうの町筋にて。兩側に内みせ出見せ尺地もなく。万燈をてらし。呉服や道具屋ふくろもの。櫛笥玳瑁珊瑚馬瑙の類。あるかとおもへばその隣には。盥小桶飯櫃すりこ木杓子なんど。或は神棚もとめて。代錢をはらひきよめて行あれば。

○下駄をはく　値段を高くするを下駄をはくといふ。「草履のうり人にわらじはくあり」は之に對せるなり。

○くるま　くるま海老。

○はつ　鰣。

○あんばいよし　前出。「梟都午睡」に「あんばいよしは田樂」とあり。

○ちくら鮨　「虛實柳巷方言」に、すしは泉千くらとあり。

佛像買ふて。尻くらひ觀音と。不足錢あたへてはしるもあり。傘の買人に下駄をはくあれば。草履の賣人にわらじはくあり。兩替やは目を皿になして天秤を打ならし。金物やは口を剃刀にひとしく。きれものを商ひ。肴屋のしろものは腐たれども。賣聲はねて呼立るをきけば「ヤアおつきな鯛じやアく。鱧じやアく。※くるまやアく。このしろやア。※はつのみのきりうりやアく　さつま芋「ほつこりく。ぬくいのあがらんかいな。ヤアほつこりじやアく　上かんや「ぬくいく。鯡のたいたの。あんばいよし――ヤアあけたく　しんまいの煎賣じやアく　すしうり「御ひやうばんの※ちくらずし。鯖かく。鳥貝やアく　北八「アレ彌次さん見なせへ。アノ鮓は京でくつたがとんだよかつた。ひとつやらかそふ。夕めしもくはねへで。はらがへつた　彌次「ホンニそふだ。モシこれはいくらだね　すしや「ハイそつちやが四文。こつちやのが六文じやわいな　彌次「チツトよしく。コウきた八。そんなにやみとくつてくふな又長まちで。くわしをくつたやうなめにあをふぜ。モシこけへ三拾貳文ばかりが。つゝんでくんな　トぜにをはらへば、すしや竹のかはにつゝみて出すを、彌次郎とりて、はちへくらう　北八「コレおれにもよこしねへ　彌次「あとで竹の皮をやろう　北八「エヽ、むしのいゝこつちやへ　トこゝりにかゝる、彌次郎やるまいとするところに、ドから犬が、ひよいととびつきひつたくる　彌次「アイタ、

、、、北八「どふした彌次さん彌次「いめへましい。ちくしやうめにしてやられた犬「わん〳〵彌次「エ、こいつめがトあしでけると犬はにげる、おつかけるはづみに井戸がはへまたぐわつたり彌次「ア、いた〳〵。コリヤとんだ所へ。井戸を出しておきやアがる。四ッ辻のまん中に北八「コリヤ井戸の辻といふとこじやわいな北八「いゝきみだ。おれにくはせねへむくひだは

ひとつ下されと犬めがとり貝はさてもよいきみ團子ならねど

それよりも。往來をおしわけゆくさきに。あみがさふかく打かぶりたる。卜筮者の口から出次第「サア〳〵御遠慮はない。お出なされ。當卦本卦。すみいろの考。こゝろかうすいをあてるが奇妙。うせ物は存ぜず。あづかりものは仕らず。待人は來るか來んのふたつ。あたるも八卦。あたらぬも八卦。どつちやでも見料は十六銅ヅヽ申うくる。是ばかりは違ひはござらぬ。サア〳〵これへ〳〵彌次「ナント北八。おいらがあした百兩とること。しれるかしれねへか。何もなぐさみ。見てもらをふか北八「コリヤおもしろへ彌次「モシわつちが運を見てくんなせへト十六文出せば、うらない者彌次郎のかほを見て、ハ、[illegible]彌次「さやうさ。大きに心あたりがあア是は。おまいとひやうもない。ゑらい仕合なことがでけるわいなうらない「そじやあろぞいな。卦は坤の卦坤なこんくわい。俗に申す狐則狐福と申て。誠にりやす北八「コリヤ奇妙。よくあたりやしたうらない「しかふつてわいたよふな。さいわいが來ると見へます北八「コリヤ奇妙。本卦の坤と變卦の乾と。合してこれを考ふるときは。易にし變卦は乾の卦。乾な。けんけれつの象り。本卦の坤と變卦の乾と。合してこれを考ふるときは。易に曰乾坤ふたつのあいだをぬけ。離の卦にあたつて中たえたり。扨は玉なき空鐵炮と申事ござれば。万事にお心をつけらるゝがよござります。彌次「こいつはすこたん〳〵。そふいふわけじやアねへ。もふこつ

○井戸の辻　新町通に在り。梅川忠兵衛の傳説などもあり。

○「ひとつ下され」の狂歌　「ひとつ下され」は、桃太郎に團子を乞ふ言葉。犬なればそれを利かせたるなり。鳥貝に「とり」をかけ、よいきみに「黍團子」をかけしもの。

○扨は玉なき空鐵炮　「離れ離れに離れ、ここでは玉なきから鐵炮」は斗兵衛の臺詞。淨瑠璃「義經腰越狀泉三館の段」にあり

ちの手へにぎつたもどうぜんだものを。延喜のわりい　ならない「イヤそこでおたるも八卦。あたらぬも八卦　北八「もふよしなせへ。十六文たゞすてた　トこゞさいひながらこゝを打過ゆくほどにはやしん町はしたり打わたりてひやうたんまちにぞいたりける　さてこの曲輪は。寛永年中に。はじめて、御免許あり。田圃をひらきて新に町を建たりしより。新町とよんで。廓の惣名となせりとぞ。むかしより今に至るまで。はんじやういふばかりなく。両側の六字見世。うりものに花をかざり。きらびやかにならびたるを。覚軒〱に差覗きつゝ。それより阿波座越後町を見物し。局女郎の袖ひくを。罵り興じてゆくまゝに。やがて九軒町にいたれば　左平「モシ〱こゝがみな揚屋じやわいな　北八「なるほど。ごてへそふな屋てへほねだ　左平「サア〱こゝじや〱。おまいがたはそこにお出なされ　トふたりをはしにまたせおき、左平次ひとり、住半のかどぐちへはいり、かくと言入るゝ、この所は長まちのやどより、おりふし客をおくりこすうちなれば、左平次手紙をもち来りてわたしけるゆへ、ていしゆさつそく、はをりはかまにてむかひに出来り

一「コレハよふお出下さりました。コリヤ〱仲ゐなどこら御案内申さんかい　サアおとをりなされませ

彌次「そんならゆるしなせへ。コウ北八。来ねへか。かどバヽらに立はだかつて。花屋の柳じやアあるめへし　左平「コリヤでけました。ハヽヽヽ、サアお出　ト玄關よりあがり、いく間も〱こへてゆくほどにぐつとおくざしきの、はなやかなる所に、あないするゝ、左平次はかへる、ふたりを、たじ〱ふうにもてなし、はるか末座にすはる、仲ゐども、ちやたばこぼんをもち出るうち　ていしゆ「ていすめでござります。御ひいきによふこそ。有がたふございます

彌次「御亭主さんか。わつちらア今度。ゑどから仕入に登りやしたが。御當地ははじめてゞござりやす。逗留のうちは。どふぞたび〱めへりやせうから。おたのみ申やすそのかはり。わつちらアちよつと来ても。はしたがねつかうことはきらいだから。むだ遣ひの一箱とふた箱は。別に爲替にふつてよこしてあるから。そこはいつかう未練なしさ。しかし牛得が商人といふものだから。はじめからそふはいきやせぬによつて。マア今宵は。おめへのほうでも。随分やすあがりにまけてくんなせへ。ハテあとのた

○六字みせ　圍ひ店。圍ひを鹿戀とも書く、よつてシカといふ、ロクともいふか。

○住半　揚屋の名。天保版には之を「吉田屋」と改めあり。蓋し當時巳に衰へしものか。

○一箱とふた箱　千兩箱を云ふ。

○ずぼうに鳴鐘　「ずぼう」は「ぼうず」を顛倒せしか。「坊主になる」に「鳴鐘」をかけしもの。

○東南さん　「難波土産」に大盡の名數十擧げたる中に東南の名あり。「虚實柳巷方言」にも見ゆるよし。同書「をどりの部」にも見ゆるよしなれば、この「東南さんが手をつけて」は、踊のことかと云ふ。

めだから。ノウ左平次さん。左平「さやうく。斯いたしましよ。夜前お着なされて。おくたびれでもあろさかい。マア今宵は。太夫さんがた借て。御らふじて。御酒ひとつあがつて。お歸りなさるがよござりましよ。ハテまた。あすの夜さりなと。お供いたしましよかい　トこゝに左平次ふと心づき今宵かねをつかはせた所がひよつとあすの[illegible]ごういふことにて間違ふまいものでもなし手に入たようなは不定なりと、難波町の[illegible]ことは、おもひはせしが、安心ならねども、今さらこのまゝにもかへされず、[illegible]一ぱいのませて、つれてかへるもくさんゆへ、かくはいふと見へたり　彌次「いづれともよろしくく　左平「そしたら仲居衆。太夫さんがた。マアかりにやらんせ　なかゐ「ハイかしこまりました　トたつてゆく、このうち酒さかな出、なかゐどもあいてに、のみかけてゐると、となりざしきには、ぐつと粹[illegible]がたのお侍と見へたる客人、たいこもちげい子ども引よせて、大さわぎにしやれちらすを、ふすまのこなたより、そつとのぞき見ればげい子のうた　「三すじほどある薄鬢のあたまつ。やがてずぼうに鳴鐘ならば。權八がよかろうけんれど。是から貞月といふておくれの神かけて。願ひたりとこ。エッシヤ　たいこ「イヨくおしまさんっ。ソリヤ南の權八めが摺ものゝうたじやないげい子「さよじやわいな。東南さんの手をつけてじやあつたわいな　客「コリヤく。我わいどもが是こいから。おくに踊どもおどるでの。サア三味引だいてたもれ

○ふとうなやつ　太いやつ。
○横さるき　横歩き。
○ぶつそうづら　佛頂面・佛頂といふこと諸説あれど、結局不明。
○額風呂　額といふ風呂屋なり、湯女風呂なり。
○太夫主　太夫衆か。太夫ぬしの意か。

ト此内客人、たつて手ぬぐひをかぶり、雨の耳を出し、はなりを横ちよにかたさきを出しかけ、ぢんぢばしよりして、手にあふぎをもつ。けい子がさみせん「トチチテン〳〵　客うた「コリヨ合コリヨ合コリ〳〵もちこいかソコヨツチヨン　三味「トチチテン〳〵　うた「ずやまお龜女は。ずやまの山の古狐。龜女しりよふれ。かんべまくれちやちよれちや。コリヨ合コリヨ合コリ〳〵もちこいか。コリヤせどにや小屋がけ龜女がばん。そくばつたのゞうからす。ぼうぶら枕にへことい て。そこねいこゝねいずりさるき。これしこよかことしてのけた。ソコヨツチヨントチチテン〳〵　みな〳〵「ヤンヤでけました

客「ア、だりがていく。こんがい。ゑひくらひおつて。わいどものしやんすめに。がらりうばあてや。おとろし〳〵　けい子「チホ、、何いひなますやら。こちやねからよめんわいな　客「なじかい〳〵　けい子「チ、すかんやの　アノお顔見なませ。ゑらいおつきな目して。ひかるやうにねらんでじやわいな　客「イヤこやつふとうなやつの。わいどもの頰よい。お身のつらなんじや。ふぐとうどもの。横さるきせるやうな。ぶつそうづらして。おもしろふないぞ。わいども最早づらんばい。づるぞ〳〵　ト もつての外むかばらたちて立あがるを仲ゐ共引とめ　「コレイナアおまいさん。そないになんで。お腹たちなますぞいな　たいこもち「コリヤしま主が無調法。ナントこういたしましよかいなどふやらおざしきがしゆんできたさかい。是からわつさりと。額風呂へなりこみの。例のフカ〳〵フツ、カ。ホカ〳〵けつこう〳〵などは。どでございますぞいな

客「なんじや額風呂といふは。売ふろのことじやな。こやつ。わいどもをのろまじやとおもひおるか。客どもに向ひて。おんがいおろよいこと。ぬかいてよかばいものか。づくにうどもにやいてくれるぞ　ト此客人はらたち上戸と見へて、むしやうにおこりちらし、みな〳〵とめるをも、つきのけ〳〵、ぜひかへろうと、大ちのさいおう、おいかたの太夫、引ふねかぶろをつれて、こゝにきたるさ　仲ゐ「ソレ〳〵太夫主が來なましたわいな　太夫「チ、しんど。おまいさん何じやいな　仲ゐ「今おかへりなますとてゑらうおはらたてゝじや

○脚ふり　散歩か。

○これへおかし　顔をお貸しの意か。これハお通しの意か

わいな　太た「おまいさんもマアこちや洲濱のうちかたに出てじやさかい。もとの間。まつておくれなませといふて。おこしたじやないかいな。それに今。おかへりなますとは。なんのこつちやいな。それほどこちがおいやなら。サアおかへりなませ〳〵　室「イヤわいども。それでづるといふではなかばい。それたんだ此廓ども。※脚ふりにづらんばいと。いひおつたのじや。もふよかばい〳〵　引ふね「よふせわやかしてじや。サアあつちやへお出なませ　ト大ぜいにひつたてられ、かしこのざしきにゆく、さてこなたには、太夫十人ばかり、次の間につめかけひかへゐるゝ、てうしさかづきをべつにもち出仲ゐてうめんさ、すゞりばこを、ひかへ　仲ゐ「あふぎやの折琴さん。これへおかし　トよびいだせば、おこゝ太夫ざしきに出、さかづきをとり、のむまねして下にをき、仲ゐのかほを見てにつこりとわらひ立て行　仲ゐ「つちやのひな松さん。※これへおかし　ト此内だん〳〵と、太夫ひとり〳〵に出、はじめのごとく、みな〳〵さかづきをとり、のむまねしてゆく、彌次郎きた八は、これをおかしきことにおもへ、こゝにもさま〴〵むだあれどもりやくす　仲ゐ「どなたぞお氣に入なましたかいな　北八「イヤもふ残らず氣にいつた。そのうち三ばんめに出たは。なんといふ女郎だの　なかゐ「ハイ西の扇屋の東路さんじやわいな　なかゐ「マア今宵は御見物のみのこつちやさかい。あすの夜さりなと。おゆるりとおあそびなさるがよござりましよ　「ナゼ今夜でもいゝじやアねへか　なかゐ「ハテまあ。わしだいにしておきなされ　ト心にいちもつあるゆへこれぎりにしようとする彌次郎もくさ〳〵おかいてふせう〳〵に　「そんなら。酒でもたらふくやらかしやせう　仲ゐ「げい子さんはへ

○あぶら　油をかけるの意。おだてること。

左平「イヤそれもゑいわいの。お急じやさかい呼にやア。こゝのうちへきのどくじやアねへか　北八「こけへきて。酒ばかりじやアはじまらねへ。何ぞ　仲ゐ「なんのまあ。サアおひとつおあがりなませ。ホンニおはをり。おとりなませんかいな　ト仲ゐども二三人たちかゝり、彌次郎きた八に、はをりをぬがせてたゝみながら、はをりのうらに、しるしあるを見つけて、くつ〳〵わらひだしなかゐのいさ　一コレ見いな。十もんじの糸ぬいがあるわいな。大かた損料の着物借て。お出たのじやあろ　ト仲ゐどし、ちいさなこへにてさゝやきわらふ、すべて長町のそんりやうやにては、きものはをりとも、うらには、白糸にて、十もんじのしるしをつけおくとみへたり、折〳〵長町どまりの旅人、これをかり着してしんまちなどへゆくことあれば、此さとのものども、みなかねてしやうちしていることゆへ、かくはさゝやきわらふと見へたり、左平次はこれをきゝつけ、心のうちにおかしくおもひおれども、彌次郎北八はつゆしらず　彌次「ナント女中しゆ此くるわぢうに。太夫はいくたりほどある。みな惣揚にして遊んだらおもしろかろふ　北八「わつちらが逗留の内。どふぞみんなへ。そろひの仕着でも残していきてへもんだ。ノウ彌次さん　仲ゐ「ソリヤおうれしうおますわいな。ソノきりもんのうらに十もんじの印つけてかいな　ト そで引てわらへども、ふたりはいつかう〳〵しらず　北八「ナニうらに十のじとは何か。あたりのあるとだな。ちくせうめが。なるほどおめへなぞは。いろがあろう。ごうてきに仇ものだ。トレおさかづきいたゞきやせう　仲ゐ「ヲホ、、、ゑらいあぶらいひなますさよなら。十のじのおかたへ。あぎよわいな　北八「ナニ十のじとは。おれがとか。コリヤありがてへ　トおのれがおそはるゝことはしらず、さかづきをとりあぐると、なかゐてうしをとつて、つぐとき北八此なかゐのひざを、ちよいとつめる　仲ゐ「ヲ、いた　今ひとりのなかゐ「めつそふな。　トとびのくひやうし、さかづきにさはり、きた八のひざのうへゝ、ばつたりおちることそこらぢう、酒だらけになる　仲ゐ「ヲ、せうし。おきのどくなといたしたわいな。きをつけさんしたがよいわいな。あなたじみ〳〵しておわるかろ。そしてさゝのかゝつたのは。きはづくものじや。ちやとくゝみ水でなと。洗ふておげさんせ　仲ゐ「ホンニざつとなと。あろふてさんじやう。おぬぎなませ　ト立かゝり、ぬがそふとする、きた八は、ぬぎては、かつこうわるしと仲ゐをはねのけ　北八「イヤおらはずと。よしく〳〵コリヤほんの不断ぎだ　仲ゐ「ハテ御ゑんりよはおませ

○ゑて吉　ゑて吉は猿のこと。こゝは例のあれ、といふほどの意。

○てんがう　笑談。ふざけること。

んわいな。おぬぎなませ〳〵　トこの仲ゐどもふたり、きた八のきもの、これもうらに、十のじのしるし、あるか見てやらんとおもひ、うなづきあふて、むりにふたりして、おびをときかゝる、きた八きもをつぶし「コレサ〳〵。よいといふに　彌次「ハテコリヤ北八。ゑて吉じや。しみかついては。ナソレ。ちよつくりとそこの所ばかり。ゆすいでもらうがいゝわな。ハテ火ばちでなりとあぶればじきにひるとだ。　トそん印ゆへあとでやかましかろふと、目がほでしらせて、北八にぬげとおしゆる、きた八は大きにこまりはて「エヽ何のちつとばかり。さけのしみぐらひ　彌次「ハテさて。ちつとでも。あとが。きはづいちやア。ソレわるいじやアねへか。仲ゐ衆太義ながら。ざつとつまみあらひしてやつてくんな。　仲ゐ「ハイ〳〵サアおぬぎなませ　北八「ハテ扨。なさけないことをいふ。もふよいといふに　トいろ〳〵いひまぎらかして、ぬぐまいとすれども、こう〳〵ふたりして、おびをとき、むりにぬがせた所が、下には女のきものをきてゐる、そでちいさく、ゆきのみじかい所をかくさんと、きた八両手をちゞめて、しりごみする彌次郎ふしぎそふに「チヤ〳〵手めへなんだ。女のきものをきてゐるか　北八「エヽとんだことをいふ。もふ〳〵ひとつ脱だら。寒くてならねへ　トだん〳〵うしろのほうへちゞまる　左平「おさむかろ。ひとつあがりなされ　北八「彌次さん。其盃をとつてくんな　彌次「ナゼ手めへ手を延すとはならねへか。そこにある。とりやな　北八「いま〳〵しい。おめへまでがおいらをへこませるな　ト此内仲ゐ、かの酒のかゝりし、きものをあらひ、火にほして、干あがりたるを、もち来り「サア〳〵十のじがよござりますわいな。ヲホヽ、、、。こちやいやいな。あなたのそのなりは。何でおますぞいな。ヲホヽヽヽ　トむせうにわらへば北八むつとして「コリヤうぬらは。さつきにから。おれがだまつてゐりやア。十のじだのなんのと。おいらに符帳をつけて。なぐさみものにしやアがるが。なんでおいらが十の字だ。それをぬかせ〳〵　ト何がなあたりまなこにねぢかゝる仲ゐどもこまりはて「ツイてんがうにいふたのじやさかい。おきにあたりなましたら。かんにんしておくれなませ　北八「イヤおくれなますめへ。なんでもその十のじのわけを。きかねへうちは。了簡がならねへは　左平「ハテゑいわいな。そないに。おまい腹立てじやと。いんまのさきのお侍のよふに無粋じやぞへ〳〵　北八「ハテ

○ふんばりめら　女を罵る語。

○あかんわいな　いけないの意。埒があかんより來るか。

○一損料の一の狂歌　損料貸の著物を借りしのみならず、太夫も借りて見たりとの意に、「三人」を云ひかけしなり。

ぬしのしつたこじやアねへ。ぶすいでも。さんすいでも。頓着はねへ。サア※ふんばりめら。十のじたアなんのこつた。ぬかせ〳〵　ト わめきちらすを彌次郎左平次いろ〳〵にこめても、さけきげんにていつかうにがてんせず、ぜひ〳〵十のじのわけを、きかねばりやうけんならぬとのことゆへ、左平次もしちめんどうになり、此上はせんかたなしとて

「コレ〳〵仲ゐるしゆ。あないにおつしやるものを。しよとがない。十のじのこと。いわんしたがゑいわいの　仲ゐ「そじやてゝ。それがまあ　北八「はやくぬかせ　仲ゐ「いふたら又。おはらたちなますじやあろ　彌次「はらアたつても。わつちが呑込でゐるから。念晴しにいつてしまいなせへ。おいらもどふか。きゝてへやうだの　仲ゐ「さよなら。いふてのけるぞへ。アノナ。十のじとは。是じやわいな　ト ふたりのぬぎおきたるはをりのうらをひつくりかへし見せる　彌次「ヂヤ〳〵なんで。此はをりに十もんじがぬひつけてある　左平「ハ、、、コリヤもふとつとねから。やくたいじや。ハテ旅のおかた〴〵じやもの。そないに着物用意して。お出るおかたばかりもないもんじやさかい。それで。損料借てお出たじやわいの　北八「ナニおいらが損料のきものきてくるものか。とんだことをいふ　左平「イヤもふ。そないに。いわんしても。※あかんわいな。長町の損料屋のきりもんには。みな十のじの印ついてあること。敵等よふしつてじやさかい。それであないにいふたのじやわいな　ト 十のじのわけさらりとわかりて、ふたりはにはかに大へこみとなり、北八なまなかのことゝいひつのり、今さら、はぢのうはぬりし、くしや〳〵おもふ内にも、おかしくなり、そう〳〵したくして、こそ〳〵とこゝを出かけけるに、そりやおかへりじやと、なかゐども大ぜい、目ひきそでひき、わらひをかくして、おくり出るにぞ、三人やがておもてにたちいで

損料のきもののみかは太夫までかりてみたりの不首尾たら〳〵

十の字のしるしありとは露しらず借りしはをりのうらめしきかな

かく打興じつゝ。長町さしていそぎける

○りうきうおもてをけぬきあはせに　琉球表の疊。「けぬきあはせ」はへり無き故、しつくりくひ合ふことを云へるか。

道中膝栗毛八編　下卷

かくてみたりは。新町のあそびにおもひもよらず。面目をうしなひしも。道すがらわらひのたねとなりて。うち興じつゝ。曲輪を出たりしは。最早子の刻過けるゆへ。順慶町の夜見せもひけて。往來さびしければ。おの〱あしをはやめて。長まちに立かへり。翌日こそは。かの百兩をあたゝまり。今宵の恥辱をすゝがんと。胸工みして。河内屋のおくざしきに臥たりけるが。なにとなく心さえてね入もやらず。漸く一ばん鶏のうたふころ。とろ〱とまどろみたるが。はやくも夜明て。こゝに泊り合せし旅人の追〱起出て。はなし聲するに。彌次郎兵衛きた八も。目さめて床を出れば。左平次。目をこすりながら出きたり。はやとく〱とすゝめたつるにぞ。ふたりは食事もそこ〱に支度調へ昨夜の損料着物引ツはり。立出ていそぎはせゆくまゝに。頓てかの座摩の宮なる。富會所にぞいたりける　北八「急ぎ候ほどに。もふこれだ〱。サア彌次さんはいらねへか　彌次「手めへ。さきへはいれ　北八「へ、どふやらはづかしいやうだ。ハ、、、、。モシちとおたのん申やす。わつちらア昨日の一の富にあたりやした。金子をおわたし下さりませ　トいひ入れると、せわやき講中と見へたるが、壹人はをりはかまにて、さつそく立出「コレハようこそ。サア〱こつちやへおとをりなされ　トげんくわんへあげて、しばらくまたせ、やがて又出きたり「きんすおわたし申ましよ。マアこつちやのほうへ。御案内いたしましよ　ト打つれて、ぐつとおくの廿疊ばかりのざしきへとをす、二人こゝにすわりて、見まはすにりうきうおもてを、けぬきあはせにしきつめ、とこの間、ちがひだなのかゝりきらびやかに、ちりひとつなきざしきのけつかう、いふばかりなし、此内十三四才ばかりの、うつくしきわかしゆが、くろつむぎに、もへぎちやうのはかまにて、茶たばこぼんをはこびつぎに、すひもの、すゞりぶた、てうしさかづきをもち出ると、こう中一人「たゞ今金子。おわたし申ましよ。先御酒一献。めしあが

○南りやう　安永元年九月十日、此度通用ノ爲メ、吹拔候南鐐ト唱候銀ヲ以テ、二朱ノ歩判被仰付候間、右歩判八ツヲ以テ金一兩ノ積、文錢幷錢共、時ノ相場ノ通、無滯兩替可致事。

りませ　彌次「コレハ／＼御ていねいな。ハヽヽヽヽ　ハヽヽヽヽ　北八「ナニそれがおかしいとかお辭義なしにはじめなせへ　こうぢう「まことにはや。此おほくの札數のうちにて。一の富におあたりなさるといふは。御運のひらける瑞相。わたくしなども。あなたがたに。あやかるやうに。お盃いたゞきましよかいな　彌次「左様ならはゞかりながら　こうぢう「イヤまづあなたへ　北八「コレハ御ちそうでござりやすヲト、、、　ト したぢはすきなりぎよゐはよし、むしやうにさいつおさへつ、のんでいるうち、さかないろ／＼出、せわやきこう中、かはり／＼あいさつにきたり、ついせうたら／＼そやしたてゝ、さけのあいことなり、大かたこ生酔となりたる頃　「御時分でござりましよ。麁末の出來合さし上ましよかいな　ト さけをひきて本ぜんをすへる　北八「コレハいろ／＼御念の入たことだ　彌次「もふお構なさいやすな。ハヽヽ、イヤモおもしろくてこたへられねへ　ト 三人ともおもふさまに、くひしまうと、やがてぜんもひけたるに、當社の神しよくと見へたるがさきにたち、こう中二三人、つきそひ、南りやうにて百兩さんばうにつみあげたるを、ふたわけにして、目八分にもち出、三人のまへにおく、彌次郎北八これを見るより、ぞく／＼して、うてうてんとなり、にこ／＼ものにて、ひかへてゐると神主「さておの／＼がたには。はじめて御意ゑます。拙者神職の名代でござります。先はお悦申入ましよ。おめでたいことでござります　彌次「ハイ／＼　こうぢう「金子おわたし申

○十二支がちがふた　富の札に十二支の符のつけるものあり、されど一の富に相當する番號のものは、一割乃至二割の金は貰ひ得べし。こゝに三文にもならぬさせるは、趣向を滑稽にするより出でしものにて、實際には受取りがたし。

ましよ　北八「ハイ〳〵　こう中「ときにお願ひがござります。當社御覧のとをり。大破につきまして。再建のため興行いたした富にござりますれば。おあたりなされたお方へは。どなたへもお願ひ申て。百両の内十両。寄進におつき申て。お貰ひ申ますさかい。あなた方もさやうなされて下さりませ　彌次「ハイ〳〵　こう中「まだ外に。お願ひがござりますわいな。是もすべて。さやうにいたします。金子五両。せわやきどもへ。御祝儀といたしておもらひ申たうござります　北八「ハイ〳〵〳〵　こう中「まだひとつござりますわいな。今五両。あと札をおかいなされて下さりませ　彌次「ハイ〳〵〳〵　こう中「さよなら百両の内。廿両引まして。おわたし申ますさかい。それでよござりますかいな　彌次「ハイ〳〵どふなりとも。宜くなされてくださりませ　こう中「さよなら。その札をこれへお出しなされ。引かへに金子おわたし申ましよ　北八「ハイ〳〵是にござりやす　トくだんの札くわいちうより、出してわたせばこう中、手にとり見てびつくりし「モシ札は是ばかりかいな　北八「ハイそればつかりさ　こう中「コリヤちがふたわいな　北八「ナニちがつたとはへ。アノ一の富は八十八番じやござりやせんか　こう中「さよじや。八十八番じやわいな　北八「そんなら何が違ひやした　こう中「コノ十二支がちがふたわいな。當社の札には。みな番付のうへに。コレ見やんせ。十二支がついてあるわいな。一の富は子の八拾八ばん。こなさんがたの。もてごんしたのは。亥の。八十八ばんじやわいな　トいふは、この所のふだは、すべて十二支をかしらにつけてあるゆへ、おなじばんかずの札、十二まいづゝあるゆへなり、北八これをしらず、うつかりとして、そこに心つかざれば、このまちがひ出来たるなり、両人これをきくより、はつとおもひ、ぐんにやりとなげくびして　北八「エ、そんなら。三文にもなりやせんか。彌次さん。コリヤどふしたものだろう　彌次「ア、〳〵どふといつたら。ねつからさつぱり。ちからがおちて。おいらアもふどふも　北八「エ、なんだ。おめへ泣か。業さらしな　こう中「コリヤこなさんたちは。よふ札を。あらためてごんしたがゑいわいの。ゑらいあほうな衆じ

○そろひのかんばん　かんばんは法被の如く大なる紋あり、陸尺の著るもの。主人よりの支給にて皆同じなり。

やれいの　神主「いこやくたいじや。とつとゝ出て。いなしやれ　こう中「サア／＼いんだ／＼　彌次「ハイ／＼コリヤ思ひがけもない。御馳走になりやした。なんなら十二支ぐらゐは。まちがつてもよふござりやすから。どふぞ今の金子を　こう中「あほうなことぬかしやアがれ。こゝならずめが　北八「イヤものゝ間違といふことはありうちだ。そんなに。やすく。いやアがるこたアねへぞ　こう中「たはことといふとどづき倒すぞ　左平「コレイナもふゑいわいの。こちがわるい。ハテこないにちそうにあふてきのどくじやさかい。しよことがないサア／＼こち來なされ。是はしたり。彌次さん。どしたもんじやぞい。サアたちなされ／＼　彌次「ア、コレ／＼北八。おれがうしろをかゝへてくれ　左平「なんじやいな。おまい腰がぬけたかいの　彌次「はつとおもつたせいかして。どふもこしがのされぬ。アイタ、、、、　北八「エ、いくぢのねへこつた。サア立ねへな　彌次「コレサそのやうにひつぱるなあいた／＼　ト立あがりしが、ひよろ／＼こしいたくあるかれず、せんかたなく、四ツばいにげんくわんまで、やう／＼はひ出れば、○そろひのかんばんきたる、ほうつきの男ども、くち／＼に　一「ゑらいあんだらじやな。敵等はおほかた。あないなことといふて。酒のみにがなうせおつたもんじやあろぞい。晝盗賊めが。やばなことさらすな　北八「なんだ。いめへましいやつらだ。よこつつらはりとばすぞ　ほうつき「ア、い

しこやの。どやいてこませやい　トみな〳〵立かゝるを、左平次中にいり、おしなだめて「サアゑいわいの。こちごんせ〳〵　トむりに北八が手を引ゐりさきへやり、彌次郎がよい〳〵めきたる、あるきぶりをかいほうしながら、やう〳〵さけいだいを出たれど、ふたりとも元氣おちて、きぬけのしたるごとく〳〵にやりとなりて　北八「ホンニ※勘平じやアねへが。するとなすといすかのはしだ。今おもへば。ゆふべの占者めが。きついとをぬかしやアがつた

　百兩の的ははづれてあたらねどよくあたりたるさきのうらなひ

彌次「ヱ、哥どころか。コリヤちふ。つまらねへものになつた　左平「サイノおきのどくなこつちやわいの　北八「コリヤ全体左平さん。おめへがわりい。わつちらア他國もので。この土地の勝手はしらず。アノ札の十二支の理屈も。いつてきかして。くんなさると。何もこんなに。ばんくるわせは、かつたものを。いめへましい。※いつそのくされに。是からどこぞ。遊びにつれてあよびなせへ　左平「ホンニわしもねから。氣がつかなんだわいの。まあなんじやあろと。ひとかへりもどりなされ。其着物のともあるさかい　ト一のとみのもくさんだひ、左平次もおのれが、うけ合〳〵そこ〳〵りやうのこともきにかゝり、又彌次郎がうか〳〵と、きぬけいしたるていに、もしやはしのうへから、どんぶりとやりはせまいかと、こゝろのうちにゆだんせず、さま〴〵にいひくろめて、まづやう〳〵と、長まちのかわちやにつれかへりければ、はんこうも、かの富のことも、せうちなれば、さだめし百兩せしめてかへりつらんと、出向ひて「コレハおはやうございます。ソレ女子ども。お茶あけんかい。マアおく〳〵ときにお客さまがたは。何じややら、おめでたいとがあると、夜前ちらときゝましたが。どふでございましたな　彌次「イヤいつかう※やくたい〳〵。しかし命には別条なく歸りやした　トひよろ〳〵してふたりこもおく〳〵へゆく左平次はんこうにさゝやきこ「イヤモゑらい※ばんくであつたわいな　はんこう「おほかた十二支ちがひじやあろぞいハ、、、、　左平「サイノウそじやさかい。アノひとりの年のいたおかたが。どふじややら。氣のふれたやうに見へるさかい。氣をつけさんしたがよいわいの。モシ雪陣へいてなら。油斷さんすな。首なとくゝりおろもしれんわいの　はんこう「ソリヤきみたのわるい。どふぞはやうほり出して※こましたいものじや　ト引わかれて左平次

○勘平じやアねへが云々　忠臣藏の臺詞。

○サイノ　左様です。

○いつそのくされ　どうせ駄目である事のついでに。

○やくたい　やくたいなしの略。

○ばんく　番狂はせの略。

○こましたい　しまひたい。上方詞。

○目が出る　高價なる場合に「目の玉が飛び出る程高い」といふ。驚く意なり。

○あた　あたじけないの略。

○子の四拾壹匁四分云々　前の富の札の十二支違ひをこゝに用ゐて洒落たるもの。

○ひとすじではいかぬ　單純ではいかぬ。

○すかんぴん　素寒貧の字を當てたり。

（おくざしきに來り）「モシ早速ながら。損料屋が勝手へ來てゞございます。ちふお脱なされて。お戻しなさるがよございましよ　北八「アイけ返へしてくんなせへ。サア彌次さんおめへも脱な　（トふたりながら、ふせう／＼にぬぎて、もとのふるぬのこをきる、左平次これをそでだたみになして）「ハイ損料錢の書付でございます　（トさし出すを北八とりあげ）「なんだ。〆て壹〆八百文。こいつたけへ／＼。ちつとまけてもらつてくんなせへ　（トやつつかへしついふうちかつてより女來りて）「たゞ今新町の九軒から。御勘定いたゞきにさんじたわいな　（かきつけをさしおく彌次郎とりあげ）「なんだ拾五匁座敷代。三匁硯ぶた。壹匁五分すひもの。拾匁三分御さかないろ／＼。貳匁五分御くわし。六匁八分六厘が酒。壹匁貳分四厘がらうそく。〆て四拾壹匁四分。ヒヤア目が出る／＼　北八「コウ左平さん。他國ものだとおもつて。あんまり人をばかにした。夕部喰たものが。何こんなにかゝるものか。惣体上方ものはあたじけねへ。氣のしれた。べらぼうどもだ　左平「イヤおまいがたがあたじやわいな。何じやあろと。くたものはらうてドんせにや。わしがすまんわいな　北八「イヤおいらを。あたじけねへとはなんのこつた。ばかなつらな　左平「錢出してから。何となといわんせ。あたけたいな　彌次「コウ左平さん。おめへいくらりきんでも。此新町の書出しはちがつてある　左平「ちがふたとは。何がちがふたございな　彌次「ハテわつちらが借て來たは子の四拾壹匁四分。コノ書出しは。亥の四拾壹匁四分とある　左平「ヱ、おきくされ。てんごういわずとかね出せやい　北八「イヤこのやろうめはふてへやつた　（ト立かゝれは、左平次もひとすじではいかぬやつ、たがいにまけずすでにつかみ合にもならんかとおもふ所へ、このかわちやのていしゆ四郎兵へ、かけ出、左平次をしかりちらし、北八をなだめて、いさいのことをきくに、此ていしゆのやうす、たのもしげに見へ、ことにこの家のあるじと見てとり、ふたりもおくそこなく、いさいをかたり、身のうへのすかんぴんなることも、打あけてたのみければ、ていしゆ四郎兵へ、わけとをおさここにて、ぐつとのみこみ）「よございます。ハテ万兩分限でも旅では。かねにつまるともあるもんじやげにございます。此商賣いたせば。たとへどないなおかたでも。お客はお客。飯料がないてゝ。そんなら。出ていなしやれとは申ませぬさかい。何日なと

○はかまや新田　地名。

逗留しておかへりなされ　彌次「それは有がたふございやす。わつちらもゆるりと。所々見物がしたふござりやすが。もふそんなに。長逗留してもつまりやせんから。あすは出立いたしやせう　ていしゆ「ハテせつかくお出たもんじや。ゆるりと御見物なされ。ホンニ住吉へはまだじやあろ。さいわいけふわしも住吉へゆくさかい。お出んかいな。しかしわしは。※はかまや新田のかたへ用事が有さかい。舟でいこが。おまいがたは。生玉天王寺かけて。歩行でお出なされ。新家の三もんじ屋といふ茶屋に。お待申ましよさかい。ノウ左平次どの。こなさんも中直りにお供さんせ。もふ四ツ過たじやあろ。のつきにお出るがよござります　ト　いふに、ふたりもさいわいのことなりと、そのそうだんにきはまり、左平次さもたがひにあいさつして、心さけ、やがてしたくこゝのへ、ていしゆは舟にてゆくとのことなればこなたは、いく玉てんわう寺をまはり、ゆかんと、又左平次のあんないにてこゝを立出、高津しん地にかゝりゆくほどに、はやくもいく玉のやしろにまいりて

御普請もあらたに見へて金ものゝ
　ひかり益なりいく玉のみや

當社は。生魂命。化現の靈玉を鎭たてまつると云常に参詣の人おほく。境内に田樂茶屋たてつゞき。見せ

○あしがつく　芝居より出でし言葉。惡足といふ。よからぬ情夫の出來ること。

○聞いてあきれらア　自ら罵る言葉。「ざまア見ろ」なども同じ。江戸言葉の特徵といふべきもの。

○「商賣の」の狂歌　「濡手で粟」の諺あるより、粟餅屋が商賣上手にて錢金を儲くる意に云ふ。

もの。はみがきうり。女祭文東清七がうき世ものまね。其外さま〴〵あるが中にも。粟餅の曲舂は此ところを元祖とす　むかふはちまきに、手ぎねしやにかまへたる、おとこ「サア〳〵ひやうばんで〳〵。元祖名代あはもちのきよくづきは。生玉やが家の看板。ソレつくぞ。ヤレつくぞ。アリヤ、コリヤ、つく〳〵〳〵〳〵何をつく。粟つく麥つく米をつく。旦那はんがたには供がつく。わかい後家御にやむしがつく。隱居さんはちよちんで餅をつく。おやまはお客のゑりにつく。けい子にや。又してもあしがつく。コリヤ居去の金たまへ砂がつく。ヨイ〳〵サツサ〳〵ひやうばん〳〵　彌次「おいらは。年中うそをつくがきいてあきれらア

商賣のうまみを見せて錢金をぬれ手でつかむ粟餅の茶屋

かくて境内を打過。馬場さきどをりに出たるに。こゝはすこしの遊所ありて。おやまけい子のなまめき。行かふさま花やかなり　こゝにも引はきて、ちよいとかたつま、はしよりたるおミこ、ちや屋めきたるかど〳〵にたちて、いふをきけば「イヤア新吉に。舟場邊お醫者の娘出ほつといとした中年增。おねまのところは愚都々々と。煎じやう常のごとしとは申せども。そこにはちくと匕加減お用ひなされて御らうじませ。天王寺屋に是はまた。去所の飴屋のむすめ出。につちやりくつちやり。澤山な水飴もどきの上しろものが出ます。いづれもおたのみ申ます　トふれてゆく　北八「左平さん。アリヤアなんだね　左平「あれかいな。こゝのおきやに新造が出ると。あないにいふて。呼屋をふれて。あるきおるのじやわいな　彌次「コリヤめづらしいハ、、、　左平「ときにわしは。ちよと此裏に用事があるさかい。おまいがたは。此とをりまつすぐに。さきへお出なされ。ツイこのさきが。天王寺じや。いつきにわしおひつくさかい　彌次「よし〳〵。おさきへめへりやせう　トこゝにて左平次に別れふたりははなしつれてたどりゆくに、つきあたりて少しまがる所、いづれへゆきたるがよきやしれざるゆへ、さきへゆくこへとりのおやぢをよびかけ　彌次「モシ〳〵てん王寺へはどふめへりやすね　こへとり「わしがあとへついてごんせ

○ねき　側のこと。上方詞。

北八「エヽついてこいはあやまる。くさい〳〵　トあとへさがろふとするとこへとりふりかへりて「コレイノわしや天王寺のツイねきじやさかい。つれまふていこわいの。サア〳〵ごんせ〳〵。おまいがたはどこじやいな。　彌次「わつちらアゐどでござりやす　こへとり「ハアおゐどはゐいとこじやけな。アノおゐどは。屑が一荷何ほ程するぞいな　彌次「わつちらアそんなことはしりやせん　北八「コウ彌次さん。もつとあとへさがつてゆかふ　ト彌次郎がそでを引て、こへとりのおやぢをさきへやらんと、わざと小べんをする、此内しばらくして、かのおやぢをさきへやり　彌次「いめへましいおやぢめだ。おいらに糞のねだんをきいたとて。何わかるものだ。氣のきかねへ　トいひつゝもはや、よほどへだたりしならんと、さつ〳〵とゆくむかふに、また今のこへとりのおやぢ、待うけてゐるていに　こへとり「サア〳〵ごんせ〳〵。おまいがたは。爰で道がしれぬくかろ。　北八「エヽ情ねへあそこにまつてゐやアがる　こへとり「サア〳〵ごんせ〳〵。今見ればおまいがた。あこでしよんべんしてじやあつたが。おゐどじや。あないにみな。こきばなしにしてじやそふな。もつたいないといの。マアおまいがたは。一日にいくたびほどツヽ。しよんべんしてじやぞいな　彌次「ソリヤア三度する日も有。四たび五たびする時もあり。定まつたこたアござりやせん　こへとり「ふとう出るか。ほそう出るかいの　彌次「エヽおめへもいろ〳〵なことをきくもんだ。わつちなどは。そんなでもねへが。此男のは何のとはねへ。シヤア〳〵と瀧のおちるやうに出やす　こへとり「アヽそりやよふきくじやあろに。おしいとしてじや　彌次「ちと急いでいかふじやアねへか。北八チヤ手めへ何をする　トとがめられて彌次郎のそでをひき小ごへに　北八「アレ見ねへ。糞擔の内に。銀のかんざしのあたまが見へる　ト彌次郎はかのおやぢとはなしながらゆく、うしろのかたにて、北八は、あたりにありあふ、竹きれをひろひ、ふしとなして、かのこへたごのかんざしをはさみとらんとしたるとき、こへとりのおやぢ、やつとこさと、かたをかへんとするひやうし、北八のもちたるはしを、はねとばされて、そこらあたりへとばしりかゝれば、彌次も北八も「エヽこれは。とんだことをした　はながみを出してふく、此うちおやぢは、まへのほうになりたる、たごのうちに、かんざしを見つけ「コリヤ何じやいな　トあたまをつまみて、ちよいと引上て見ればよほど、めかたの見ゆる、かんざしなれば　こへとり「コリヤゐいのじや大かた雪隠の中へ。おちてあつたのじやあろ

〇「唐めきて」の狂歌 「道風」を豆腐にかけ、「唐めきて」の「から」を「おから」即ち豆腐糟に利かせたるもの。

ごい。孫娘に。ゐいみやげじや。ドレおさきへいこわい。ゆるりと跡からごんせ〳〵 トいさいかまわずさつ〳〵とゆく 左平「ヤレ〳〵辛度やの。やう〳〵のことでおひついた。コレ見なされ。此鳥居の額は小野の道風のかいたのじやといなさい。

北八「エヽごうはらなことをした 彌次「アヽてめへろくなことはしねへ。なんだかからだ中がくさくて。やつぱり今の親仁めと。つれだつていくやうだ トこゞといひながらゆくこともなしに、はやくもてんわうじの西門にいたりければこゝにて、左平次あとより來り

彌次「なるほど。はなしにきいてゐやしたが。コリヤア何だかねつからわからねへ

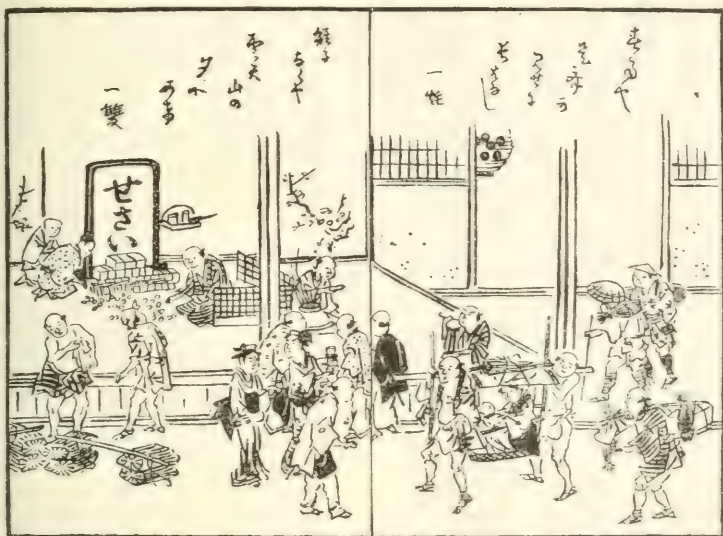
唐めきて見ゆる文字にしられけりをのゝとうふのお筆なりとは

抑この四天王寺は。上宮太子の御草創にて。由來は太子傳記にくはしく見ゆ。まことに日の本最上の靈場にして。堂塔の莊嚴。いふもさらなり

何となくこゝろはうちやう天王寺われをわするゝありがたさには

御境内の廣大なる。記し盡すべからず。おほかたに順拜し こゝにもいろ〳〵おれ共りやくす それより安部街道にいで。ゆく道すがら。畑うつ男のうたふをきけば「坊樣よヲ大ぼんよヲ。ちよつちよと。めさるまいかいの。コノ大ぼんよヲ 彌次「とつさん。精が出やすの。もふ何時だへ 男「アイきんのふの今時分じやあろざいな 彌次「おきやアがれ。お定りのしやれをいふは。ときに北八。たばこの火でもひとつうたつせへな 北八「むかふに乞食が呑でゐるから。すひつけなせへ。しかも女の乞食だ 彌次「ナニきたねへ 北八「とんだことをいふ。こつちのきせるで吸付るものを。ドレ〳〵おいらがかりてやろう。コレ火をひとつかさつし。廿一二斗の女のひにん「ハイいんまツイ消ましたさかい。ちよとうつてあげましよかいな 北八「イヤうつくらゐるなら。こつちにもある 女「そしたらおまいさん。ひとつうつておかしなされ 北八「いゝことをいふ。しかしき

○てん〳〵てんまのおてこ「てん〳〵天満のはだか神子」とて、裸にて身振する乞食のこと「通者茶話太郎」に見ゆ。

さまのこつたものを。うつてかしやせう。ノウ彌次さん。見なせへ乞食にしておくは。おしい器量だ

彌次「ホンニ仇しろものだ。コレ手めへ。男があるか　女「ハイ亭主には去年わかれましたわいな　彌次「そんなら又。あたらしく片付ばいゝに　女「さよじやわいな。此間ちつ。せはやいてじやおかたがあつてな。さきのおとこもよい男じや。年中はだかでこそ居れ。※てん〳〵てんまのおてこが。ねからゑらい上手じやてゝこ一生貫ふて。くわせかねんおとこじやさかい。あこへいかんかてゝ。いふてじやあつたが。肝心のうちがないてゝ。よふさんじませんわいな　彌次「おれがいゝ所へせはをしてやろう。此男はどふだ　女「チホ、、、あのおかたのとこへなら。わしやどふぞいきたいわいな　北八「おれもうちがねへがいゝか。しかし今普請さいちうだ。出來あがつたなら呼やせう　女「ソリヤどこにふしんしてじやへ　北八「イヤ所は何といふ所かしらねへが。爰へくるみちに。橋普請していた所があつたが。あれが出來たら。そのはしの下で祝言しよふ　女「そしたらわたしもあたらし

い莚なと貰ふて。きりもんのしたくせうわいな。北八「ドレ結納に壹文やろふか。ハ、、、、おれが乞食だと。手めへを女房にするものを。殘念〳〵　女「ハアおまいさんは。アノわたしらが。なかまの衆じやないかへ　北八「しれたことよおいらア。しらきてうめんのお町人さまだ　女「わしやまた。そないにあかじみた。しゆんだなりしてじやさかい。仲ケ間の衆かとおもふたわいな　北八「エ、いめへましいとをいふ。　トそれよりすみよしかいだうに出たるに、貴賤老若打まじりて、此御神にあゆみをはこぶ、道すがらのにぎはひ引もきらず、こゝに大じんふうのおとこ、まつしやあまたつれたるが、さわぎたちて、だんごやのかどに立どまり、おの〳〵かのだんごひとくしづゝもとめて、よこぐわへのしやれと出かける、この大じん名は※かは太郎　左手「ハ、、、、お見たてゑらいもんじや。サア〳〵お出んかいな〳〵　一「コレばさまや。わしや團子より。外にかふていにたいもんがあるが賣んせんか　はゞ「ハイ〳〵何なとかふておくれなされ　河太郎「そしたら此かどにたてゝある。障子一まい賣て下んせ是やろわいの　トまへだけのごうら〳〵より、金壹分出してやると、はゞはきもをつぶし、あきれたかほしてゐるうち、河太郎みづからそのしやうじを、はづしにかゝれば、末社共おどろき　「コレハ旦那。こないな破れしやうじ。百疋とは。※ゑらたかの數珠じやわいな。しかし是には。何ぞきよとい。御しゆかうがござりましよいな　河太郎「わしやひなたあるくと。のぼせてわるいさかい。コレ久助。コノ障子もてこんかい。コリヤそちにも壹分やるは。そのかはり住吉までコウたてにして。もてあるけ。ヲ、そふじや〳〵　トしやうじ一まいをたてにもたせて、そのかげをゆくといふしやれなり、この河太郎といふは、浪花名だいの※くわつぶつにて、かゝるしやれをなしてたのしみとし、その名のこりたり、彌次郎きた八これを見てぎよつとし　彌次「イヤこいつはなか〳〵おもしろい　北八「上がたもばかにやアされねへ。とんだしやれものがある。きめう〳〵　トだん〳〵此人〴〵のあとにつきゆけば、およそ六七丁もゆきたるとおもふころ、かのさきへゆく大じん河太郎　「イヤしやうじもすこしうつとしうなつたわいな　久助「ちとあけましよかいな。お庭はいこひろい。泉水は御前崎。淡路しまがつき山とは。ゑらいもんでござりますわいな　河太郎「久助もふ其障子ほつてしまへ　久助「もふよござりますかいな　河太郎「おけ〳〵　トいふにかのしやうじ道のかたはらへほうり出してゆくあとより北八　「ナント彌次さん。此しや

○かは太郎　實在の人物なり。船場糴米雨替屋河内屋太郎兵衞。天明八年七月十七日歿。「川童一代噺」「通者茶話太郎」等の書は、この人の逸話を記せるもの。

○ゑらたかの數珠　えらい高いといふ意を「いらたかの數珠」にかけしもの。粒の平たき珠數を「いらたか」といふ。

○くわつぶつ　濶達の人。

うじをひろひはどふだ　彌次「イヤ〳〵京で梯子にこりてゐる　北八「ハテふたりでかはり〴〵持て。おいらも障子のかげをゆかふじやアねへか。おもしろいしやれだぜ　彌次「なるほど。けふはごうてきにあつたかで。ひなたはのぼせる。北八もつてきさつし　北八「かはり〴〵もつのだがいゝか　彌次「しやうち〳〵。コリヤきめうだ　ト北八にせうじをもたせ、彌次郎そのかげをゆくに、やがて天下ちや屋むらなる、わらうさん是齋の見せさきにいたりけるに

麗な天下茶屋から四方に名の羽をのす鳶のわちう散みせ

此内むかふのかたより下向の大ぜいづれ「てうさや〳〵。まんざいらくじや〳〵。ハヽヽヽ　アリヤ何じやい。日がさのかはりじやな。アノもていきおるやつのつら見いやい。檀尻の印もちと。しやうじもていくやつに。賢いつらはないもんじやわい。ハヽヽヽ　北八「コノさる松めらは。何ぬかしやアがる　さきのあいて「何じやい。おどれ病ひづかしくさるな。聲あげさせてこませやい　北八「コリヤゑどつ子だは。かたつぱしから。はりとばすぞ　トもちたるせうじをふりまはせば、さきの大ぜいの中に、今みやしんけの、備じさいふ、おからだほのでつくりしたるおやぢ、きた八をとらへて　ー「コリヤ此障子は。どしておどれ。こゝへもてうせたそい。おれがうちのしやうじじやわい　北八「ばかアぬかせ。ナニおのれがところのもんか　おやぢ「イヤこないに。おつきにかいてあるのが。おどれのまなこにやはいらんかいの。コレ見い。善哉餅三五團子今宮新家。さいかちやと。しかもわしがかいたのじや。けふこの衆と。住吉講の月參にいたるすに。ばゞひとりおいて出たが。コリヤおどれら。ぬすみくさつて。もてうせたのじやな　北八「ナニどろぼうしたとは。うぬふてへやつだ。コリヤア道でひろつたのだ　おやぢ「あほなとぬかせやい。しやうじすてゝゆくもんがあろかい。あんだらつくしあがれ　左平「コレ〳〵おつさん。コリヤこうじやわいな。誰やらおまいのとこで。此しやうじ買うてもて來てじやが。道へすてたさかい。このおかたがひろふて。來てじやあつた

○「麗な」の狂歌　天下茶屋の和中散の名が四方に遍しといふことを、麗なる日和なれば鳶が輪を描くと云ひ、「輪」を「和」にかけて云へるなり。

○てうさや〳〵　囃し言葉。太祇の句に「きりはたりてうさやようさや呉服祭」とあり。狂言の「千鳥」にても山を引く囃し言葉に「てうさやようさ」と云ふ。

○檀尻　山車のこと。

○さる松　罵語。ふざけたやつの意。

○聲あげさせて　悲鳴を揚げさせること。

○三五團子　五つ刺して三文の團子か。或は三五十五夜にて月見團子の意か。

○はづしくさつた　上方詞。「くさる」は賤す場合に用ゐるが如し。

わいな　おやぢ「エ、こなんち。あほうつくさんせ。こないに書てあるは。コリヤわしがとこの看板じや。おやぢ「お賣もんじやないわいの　北八「それでも當分出して買たをおいらア見てゐたは。くそたれめがきくされ。こないな古障子。たれが百にもかふものかい。大かたおどれら。團子くらひおるてゝ。はづしくさつたのじやあろぞい。なんじやあろと此しやうじ。おれが内までもてこい。サアあとへ戻りやく　左平「コレりやうけんさんせ。ハテおまいのしやうじなら。こゝからもていんでくだんせいの　トしやうじをつきつくればつきもどしかれこれとせりあふところへ馬かた一人馬をひいてこゝへ來かゝり　「何じやいく。往來あけて下んせ　トひいてきたるはなのさき、しやうじをあつちこちへひつぱり合、ほうり出せば、この馬にあたり　馬「ヒインくく　トおどろきてはねあがるひやうしに、馬かたはねつけられ、一二けんむかふへのた打まはり　「あいたくく　左平「コリヤどしたぞいな　馬士「イヤどした所か。あいたくく。コレ金玉がなふなつた。そこらにやおちてないか。見て下んせ　おやぢ「ナニきんたまが。こゝらにや見へんわいな　馬士「それでもどこへか　左平「たもとにやないか。見やんせ　馬かた「ドレく。ないはづじや。廣袖じや　左平「コリヤこなさん。もて來やしよまい。うちへおいて來やせんかや　馬かた「あほいわんせ。しかもわしや疝氣もちで。大金じやさかい。こないに。ふくろにいれて。首にかけてゐるわいの　おやぢ「そ

○せがきのふくろ　細長き美濃紙に二貼りたるもの。概ね寺より来る。

○ふせう〴〵　いや〳〵ながら。

○「美濃紙の」の狂歌　美濃紙より破れかぶれを持出し、「笑止千萬」を「障子」に云ひかけしもの。

○「ぴち〳〵と」の狂歌　ぴち〳〵と客がはねこむといふことを、料理する魚の新しくしてぴち〳〵はねてゐることにかけ、「新在家」の「新」を利かせしもの。

したら。そのふくろ。ふるうて見やんせ　馬かた「ドレ〳〵イヤあるわいの今のびつくりで。上のほうへ。つるしあがつたのじやそふな。もみ出してこまそ。イヤ出てきおつた〳〵　北八「ハヽヽヽなるほど大金だ　弥次「せがきのふくろとおなじ事で。※ふせう〴〵に一ツぱいあるハヽヽ　馬かた「イヤきんたまはゐいが。ひざのさらすりむいた。コリヤおまいがたは。何ンでこのしやうじを。わしが馬へ打つけさんした　左平「わしやしらんわいの　馬かた「しらんてゝコリヤ誰がしやうじじやい　おやぢ「わしがとこのじや　馬かた「見やんせこないに疵がついてはすまんわいな。しやうじに今宮新家。さいかちやとかいてあるさかい。これがせうこじや。サアごんせ〳〵。何じやあろと。こゝへいて。めきしやきと。せいふせにやおかんわいの　トしやうじをひつたくり、馬につけ、ほそ引にてからみ、いさいかまわず、しやん〳〵とひいてゆく　おやぢ「コリヤ〳〵そのしやうじ。どこへもて行おるぞい。まてやい〳〵　トおふてゆく、みな〳〵あとより　「てうさやようさ。万ざいらくじや〳〵　トかけてゆく　弥次「ハヽヽ馬かためがおつをやつたハヽヽ

美濃紙の破れかぶれと喧嘩せしあとのしまつの障子せんばん

かくてそれより二たりは。ほどなくすみよししん家にいたりけるに。げにも此御神のはんじやうましますことは。両側の茶屋にあらはれ。いづれも家作美麗にして。赤まへだれの女。かどに立ならび「お休なく〳〵。おしたくなさらんかいな。蛤のおすいものもござります。鯛もひらめもござります。おはいりなく〳〵　北八「ア、どれもいゝ茶屋が見へる。御てへそふな

※ぴち〳〵と客のはねこむ賑ひはりやうるさかなも新家町なれ

此ところの名物は。金魚酢蛤ごろ〳〵煎餅。唐がらし。昆布。竹馬。糸ざいくなど。あきなふ家あまた

○「和らかに」の狂歌　謠曲「白楽天」に、白楽天が住吉の神と問答して、歌才に驚き逃げ歸りたりといふことあり。

○しゆみ　身にしみて。

ある中に。りやうり茶屋は。三文字屋いたみ屋こぶ屋。丸屋。なんどいへるが。わきて客のたへまなく。はんじやうとにいふばかりなし　左平「モシ〳〵爰が三もんじや。チトおまちなされ　トげんくわんよりのぞき見れば、おくに長町の河内屋、はやこゝに来りあわせ「コリヤ左平次どの。はよごんしたの　彌次「わつちらアやう〳〵。たつた今めへりやした。先参詣いたしてめへりやせう　ト是より打つれて御やしろにいたる　抑此大神は。ちはやふる神代の御時。日向の國。小戸の橘の檍原よりあらはれ給ひて。當社の御鎮坐は神功皇后紀十一年辛卯四月廿三日とかや。四社は底筒男命。中筒男命。表筒男命。神功皇后これなり。攝社末社すべて三十余前。巍々としてつらなれり。

まづ御本社にぬかづきたてまつりて

海上をまもりたまへる神がきやいとおだやかに見ゆる並松

和らかに歌と出かけて樂天の顔をよごせしすみよしの神

かくて御社内をめぐるに際限なければ。あらましにして。出見の濱の高燈籠をゆびさし見たる迄にて。いそぎ。かの三もんじやにもどりたるに。女どもばら〳〵と立出「おはやうござりました。サアあつちやへお出なされ　左平「アノ河四郎さんはどこじやいな　トいひつゝ打つれておくへとをるさ　かはちや「ゑらいおはやいこつちやの　北八「ごうてきにはらがへつた　かはちや「マアひとつあがりなされ　トさかづきをさす　北八「彌次さんおさきへ　彌次「手めへのんでさしやれ　北八「もふくちをかけるの　左平「おさかなは何がよかろ　北八「なんぞはらにたまりそふなものをくんなせへ　彌次「エヽきたねへことをいふおとこだ　北八「へヽ人のこたアいひながら。ソレまだ。盃もいかねへうちに。おめへさかなをしてやるじやアねへか　左平「コリヤゑらい。しゆみになつてじやわい　彌次「イヤもふ。かわちやのおやかたのおかげなりやこそ。こんなうめへもの

も。くうやうなものゝ。なるほど錢のねへ咄はうるものつらいものだ　ト さすがの彌次郎、はじめてよわいねをいだし、しよげかへりていふゆへ、左平おかしさをかくして　一ナント　おまいがたは。大坂ものにならんせんかい　北八「イヤわつちらも。どこへいつてもつまらねへものさるといゝけれど。是でくをふといふことが。ひとつもねへから。

かはちや「ホンニゑいことがあるわいな。どふじやふたりのうち。ひとりは賣付るくちがあるのになア

彌次「どのやうなことでござりやすね　かはちや「おとこめかけのくちがあるが。どふじやいな　彌次「ソリヤほんにかへ。おもしろへ〳〵　トあつかましくもにはかにはなをひこつかせうれしがれば北八もすつこまへのほうへ出かけ「モシわつちがやうなもんでもよくば。おせわなすつて下さりませ　彌次「ハヽヽヽ手めへじやア手がねへ。じかし御昨今のおやかたのまへで。こんなとをいふは。おかしなもんだが。わつちなら。さきの氣にいるにやア。おげへのねへことがござりやすから。どふぞそれがほんとうのことならば。わつちをナもし。へヽヽヽハヽヽヽ　かはちや「コリヤせいもんほんまのこつちや。しかもさきのしろものは。ゑらいうつくしうて。年は三十四五にもなろかい。船場邊でぐめんのゑいとこの後家どのじやわいの。わしやそこのばんとうが心安うて。さき。こゝへ見へて。そのはなししてじやつたが。どふも役者かふて。かねつかふてならんさかい。やつかいのない男めかけかゝへたいといふこつちやさかい。モシいことおもふてじやなら。わし世話してあぎよわいな。マアなんじやあろと。その後家どの。見なさらんかいな　北八「ナアニ見ずとちよふござりやす。せう〳〵はめつかちでも。はなつかけでもそこにやア頓着はござりやせん　かはちや「じやてゝ。そのばんとうが供して。あつちやの坐敷へ來てじやさかい。ドレわしがマアちよといて。よふ聞糺してこうかいな　彌次「ハイ宜くおたのみ申やす　ト一はいきげんにむしやうにのりが來てたのむゆへかはちやはたつておくのかたへゆくさあとにて　彌次「コウきた八。おれがゆくのだぜ

○せいもんほんま　彌次をきいこもいゝ事を寓なりとの意。
○船場邊　大坂にてゝ物持多きところ。

北八「氣のつよいとをいふ。おめへ男めかけといふつらか。ついぞ鏡を見たことはねへそふだ　彌次「ばかをいふな。男がわるくても手がある。手めへにやアましだは　北八「ナニましなものか。ノウ左平次さん。おめへが女なら。彌次さんにほれるか。わつちにほれるかどふだ　左平「わしや。どつちやへも氣はないわいの。ハ、、、、しかし人は惚いでも。おまいがたはめん〳〵が。己惚てじやさかいゑいじやないかい　北八「そんなら男ぶりは。五分〳〵にしたがいゝ。年のわけへだけおれがゆく　彌次「イヤおとしやくにおれだ　左平「こうさんせ。わし鬮を出すさかい。長いのをとらんしたのが。おめかけさまじや　北八「コリヤよかろふ。南無住吉大明神さま。わたくしへながいのを。おさづけ下さりませ　左平「サアとりなされ。　彌次「コリヤながゑいかいな。ソレすい〳〵のすウ引　トうこうてんになつてよろこぶ内、かはちや四郎兵へかへり來り　「サアでけたわいな〳〵。ばんとうに掛合て來たが。ないのじや。しめた〳〵　

んじややら。うまいはなしじや。給金は望次第で。別にまた牛房と玉子代がなんぼやら。しきせは後家

○三臟圓と巨勝子圓　三臟圓は大坂博勞町法橋吉野五運、巨勝子圓は淡路町御堂筋西江人法橋澤宗貞とあり。いづれも滋腎藥。
○讀書丸　山東京傳の店にて賣る。效能は前に同じ。
○むくろじ　木患子。追羽子に用ゐる。いくら磨いても黑しといふ意。

御から。年中やわらかもの。何ほなとこしらへしだい。三臟圓と巨勝子圓は。通ひでとて。のませるといふこつちやわいの　彌次「ゑどにも。山東京傳の見世に。讀書丸といふくすりがござりやすが。コリヤアしやれでなし。ほんとうに。氣根をつよくすると。奇妙といふくすりだから。ハテ氣根がつよくなれば。なにもかもつよくなるといふもんだによつて。是もとりよせて用ひやせう　かはちや「さよじやわいの。ときに今その後家どのだ。こゝへ見へるはづじやわいの　彌次「ナニ今こゝへかへ。ソリヤ大變だ。ア、このなりではつまらねへ。モシ左平さん。こゝらに髮結床はござりやせんかね　北八「ヱ、おきなせへ。むくろじは三年みがひても。しろくはならねへ。性のものを性で。おめにかけるがいゝ。たとへにも。見ぬあきなひは出來ぬといふが。是ばつかりは。見たらじきにあつちから。お斷にあひそふなとだぜハ、、、、　左平「ときにむこの座敷から。ゑいとしまが來おるわいの　かはちや「あれじや〳〵。大かたこゝへくるのじやあろ　彌次「コリヤたまらぬ〳〵　ト むしやうにゑりかきあわせ、にはかにまじめなかほしてゐるとかの後家といふはすつかりとした上しろもい、はへさがりふつさりとしていろはゆきのごこゝ白くふたかは目にあいきやうは、ほたり〳〵こゝほれおつるはかり、しまちりめんのむく、三ツはかりかさね〳〵くろびろうどのおびまへにむすび、もゝいろのちりめんに、ぬいのある長じゆばんすそからちら〳〵と出しかけ、すこしほろゑひきげんにはんさう引つれて來るとかわちやのこいしゆ出向ひて「コレハよふこそサ、あつちやへお出なされ　ごけ「おゆるしなされやヲホ、、、　はんさう「どなたも御免下さりませあつちやはおなごばかりで。ねからはから御酒のあいてがないさかいさいわいと。河四郎さまのお出で。こなたの後室の大悦び。ついてはわたしも。おあいなといたそとぞんじて。まいりました　かはちや「サア〳〵。もちつとねきへおよりなされ早速ながら持合たさかづき。まづあなたへ　ト ごけのところへさせはにつこりとしてとり上「わたしもいゝこ。さゝが過たさかい。もふそないには。よふたべませんわいな　ト いひつゝ少しうけてのみこのおさかづき。御返盃いたしましよかいな　かはちや「イヤわたしも先刻から。ゑらふすぎました。マア

○しよにんなおとこ　不人情な男、附合を知らぬといふ意。

○あら吉　或吉三郎の略。

どつちやへなと。おさしなされ　ごけ「さよなら。あなた近頃はゞかりさまながら。　ト彌次郎へさす、彌次郎はしばうむちうとなり、この後家のかゝはかり、しりめにかけて、じろり〳〵と見つめてゐたりしが、さかづきをさゝれて、ぞつとするほどうれしく、うろたへ出し　一「ハイ〳〵〳〵いたゞきやせう　左平「コレ〳〵ソリヤさかづきじやない。たばこ入じや　彌次「ホイ是は。とりちがへて麁相千万サア北八。ついでくりや　北八「おらアしらねへ。勝手についでのみなせへ　彌次「ヱ、しよにんなおとこだ　ト仲ゐにつがせのみほし、はんこうへ一ツさす、おしもごしてはんこう　ゑらいお手際じやな。最ひとつおかさねなされ　彌次「イヤもふわつちは。いつも酒をのむと。だん〳〵色が白くなつて。後にはとんと。白はぶたへのやうになりやすが。けふはなぜか。こんなに眞赤になつて。たべられやせん　ごけ「おあいなといたしましよかいな　彌次「ハイ〳〵〳〵ノウ北八あなたへ。おあいをおたのみ申そふかの　北八「かつてにしなせへ　彌次「ハ、、、、さやうなら。はゞかりじやけれど　ごけ「なんのまあ　トさかづきをうける　かはちや「コリヤおふたりして。あつちやいこつちやいとんと婚礼のさかづきのやうじや　ごけ「ヲ、おかしヲホ、、、　彌次「コリヤこてへられぬハ、、、　北八「しづかにわらひなせへ。さかなの中へ。おめへのつばきがはいらア　彌次「はいつてもいゝ。だまつてゐろハモシとかく此男めは。わつちがすることに。けちをつけてなりやせん。わつちは是でもちつと唄もうたひやす。三味もかなりやすから。女中がたを。ころ〳〵とおもしろがらせることが。ゑてものでござりやす。そんな時にはつとかくきやつめが。やきもちをやいて。こまりきりやす　ごけ「ホンニおまいさんは。どふやらおもしろそふな。おかたじやわいな　トおもひの外うけのよさに、彌次郎は心のうちに、もふしめたとよろこびゐるうち、後家がおもひのほか、きたりて　一「モシたゞ今。あら吉が見へまして。さつきにから。あつちやのざしきで。あなたのお出なさるを。お見うけ申ましたが。御遠慮いたしておりましたけれど。ちよつとなと。お伺ひ申ていのてゝ。あつちやのざしきに。待てゞございますわいな

ごけ「アノあら吉が來てかいな。コレハ河四郎さん有がたふござります。みなさんこれにへ。ハイさよなら　トにはかにそは／＼として、あいさつもそこ／＼、ばんとう引つれこたつてゆく、彌次郎は、あつけにとられたかほつきして　「コリヤ何のことだ。モシあら吉たア何のことでござりやすね　かはちや「ソリヤあらし吉三郎といふて。今でのたてもの。としはわかしおとこぶりはよし。おさか一ばんの役者じやわいな　彌次「ハアそんなら後家どのが。にはかに狼敗て。立てゐつたは。その役者めに。ほれてゐると見へるわへ　かはちや「さよじやあろぞいな　左平「コリヤア彌次さん。いかいおちからおとしじやわいな　北八「ハ、、、、おもしろへ／＼。コウ彌次さん。こゝへ來がけに見たら。このちつとさきに。髮結床があつた。おめへ今いつて髮月代でもして來ねへな　彌次「何とでもいやアがれ　トつらふくらしてこゞといつてゐる内ばんとうまた出きたりて「河四郎さん。きゝなされこれじやさかい。わしや心づかひじやわいの。アノあら吉が。ゑらいひいきじやさかい。さいわいのこつちやこれからあら吉といつしよに。船でもふいぬさかい。わが身は。ひとりあるひていねてゝ。わしばかりまかれましたわいな。もふ御相談のこともあかんはなしじや。おさきへまいりましよ。どなたもこれにござりませ　トあいさつそこ／＼にして出てゆくと、やがておくざしきから、庭におりて、かの後家はあら吉をともなひ、こしもと下女打つれて、何やらおもしろそふに、わらひざゞめきて、出かけるていを、こなたより見て　左平「アレ／＼あら吉

は。なるほどゑい男じや　彌次「アノ黑仕たてのやろうか。ナニあれがいゝ男。くそがあきれる。いろのなまじらけた。日影の瓢箪見るやうなしやつらだ　仲ゐ「おまいさん。そないにいふてじやけれど。あないなゑい男は。やつとはござりませんわいな。そじやさかい。あら吉にほれんおなごは。おさかぢうにはないといな　北八「アレ〳〵彌次さん見なせへ。何か後家めがさゝやいて。こつちのほうへ指をさして。わらつてゐるは。大かたおめへのこつたろう　彌次「いめへましい。かわちやのおやかた。おめへがうらみだ〳〵　トむしやうにぐちをいつゝくやしがる、かの後家はいさゐかまはず、さはぎつれて出てゆく、彌次郎うらめしげに　「モシ〳〵わつちらもふけへりやせう　かはちや「ゑいことがあるわいな。わしがふねまたしてあるさかい。みないつしよに乗て。敵等が舟のじやましてやろかいな　彌次「コリヤいゝおもひつきだ。サアそんなら出かけやしやう　左平「しかしおまちなされ。どふじややら。雨がおちて來たじやないかいな　彌次「雨でも鑓でもとんぢやくはねへ。サアおたちなせへ　トひとりきをもみさきへ出かけるところに時ならぬかみなり彌次郎のあたまのうへにて　「ごろ〳〵〳〵〳〵　みな〳〵「コリヤやくたいじや　彌次「くはばら〳〵　トうろたへてかけもどる、此うちあめはしだいに大ぶりとなり、いなびかりすさまじく、かみなりはしきりになりつゞけ、あま戸をくるやら、まどをしめるやら、三もんじやの家内のものも立さわげばみな〳〵ひとつ所によりかたまり　北八「コリヤとんだめにあつた。此かみなりで。うらやましいはあら吉だ。今比はふねのなかで。ごろ〳〵ぴかりといふたびに。アノ後家めがヲヽこはなぞと。しがみつきおるだろうの　かはちや「ソリヤそふはかいの。アノ後家はあら吉に。ゑらはまりじやといふこつちやさかい。このかみなりなさいわいに。くひついたりひつついたり。はなれはしよまい　北八「さやう〳〵アノまた。後家がひたいつきや。はへさがりのあんばいでは。こたへられめへのふ彌次さん　彌次「おがむから。もふいつてくれるな　左平「ソレ又ひかつた　かみなり「ごろ〳〵〳〵　北八「テヽこわやの　トごけのものまねして彌次郎にだきつくとつきとばして　「アイタ、、、、エ、何をしや

アがる。あいた〳〵 北八「コレどこがいてへ 彌次「このふろしきにつゝんだ。天狗の面が。いたくて。こたへられねへ 北八「ハヽヽヽコリヤそのはづ〳〵 左平「ときに雨はやんだそふじや。この間にちやと。ふねへ出かけましよかい 彌次「サア〳〵はやくめへりやせう トひとりせきこみさきへたちてげんくわんのかたへ出かけると大そうなるいなびかり「ぴかり〳〵 かみなり「ごつ〳〵〳〵ぴしや〳〵〳〵〳〵 トあたまのうへへおちかゝるごとき大かみなりに、彌次郎わつといふて、そこへへたばり、かほをしかめて 彌次「あいた〳〵〳〵 左平「何としたぞいな 彌次「エヽ何としたどころか。へしおれた〳〵 北八「なにをへしおつた 彌次「今のぴしや〳〵で。はつとへたばつた。はづみに。かの天狗のめんのはなばしらが。ぽつきりといつたやうだ。あいた〳〵 トきんたまをかゝへていたがるゆへ、みな〳〵おかしさこつこ打わらひこけ、けうにいりけるうち、ほどなく雨もかみなりもやみ、そらもはれ〳〵となりたるに かはちや「うれしや天氣になつたそふな。ナント最いつぱいヅヽ。※わつさりとのみなをして迶わいの ト又あらたにさかなをとりよせ大わらひとなりおの〳〵酒よきほどにくみかはしそれより打つれて長まちへこそかへりける 斯て彌次郎兵衛きた八は。河内郎のかたに。また〳〵逗留して。所々殘る方なく。見物しけるうちにも。ふたりとも江都氣性の大腹中にて。かゝる難澁の身を。へちまともおもはず。洒落とをして。すこしもめげぬやうすに。かわち屋の亭主。大きに感心し。衣類などあたらしく着かへさせ。路用十分にもたせ。大坂を出立させけるゆへ。此たびは木曾路にかゝり。草津の溫泉に一囘りあそび。善光寺へまはり。妙義は留那へ參詣し。めでたく歸國したりける。此記行は追てあらはすべく。まづはこゝにて。筆をさしおき畢ぬ

道中膝栗毛八編下卷終

○わつさり　あつさり。

○は留那　榛名。

有喜世
物眞似

舊觀帖

「有喜世物眞似舊觀帖」解題

思ひもよらぬ和詩の著作

「舊觀帖」の作者鬼武の傳記は殆どわかつて居りません。前野曼助と申して、旗本衆の小笠原某の家來であつて、後に浪人をした。そこで曼亭と云ひ、感和亭といふ號もある。前方は飯田町に住つて居りましたから、飯騨山人といふ別號もあつた。これは飯田町の臺といふ心持ですから、飯田町の高いところに住んで居つたと見えます。それから後に淺草の聖天町へ移つて、文政元年二月二十一日に五十九歳で死んで居ります。

先づこれだけの事はわかつて居りますが、その外には畫を谷文晁に習つたので、黄表紙の中には自畫のものがある、といふことがわかつてゐる位のものです。この人の作としては、黄表紙、合卷、讀本、咄本、中本といふ風に、隨分いろ／＼な作物があり、總計では五十種を越えてゐる按配であります。その鬼武の著作の中で、毛色の變つてゐるのが「舊觀帖」でありますが、その外に思ひもよらぬ鬼武の著作が一つある。それは文化元年に出した小本の一冊物で、「國字詩階梯」といふものであります。

これは和詩とも云はれるところのもので、嘗て支考が首唱し、その後美濃派の俳人の中には、和詩を作る者が後々まであつたやうです。明治になつてからは新體詩が盛になりましたが、猶三十七八年戰役の時分に、幸田露伴翁が大變長い詩篇を「讀賣新聞」に連載して、後に「出廬」といふ名前で單行本にしたのがある。あの露伴翁の長詩は、和詩の方の系統に屬するもので、新體詩の系統ではないやうに見える。文化元年に鬼武が「國字詩階梯」を出しました時分は、美濃派の俳人に和詩の作者が無かつたわけ

ではありませんが、その他には殆ど作家が無い。美濃派の方でもあまり多くは無かつた樣子であります。

この和詩といふものは、今樣とは違つた形と心持とを持つたものでありまして、我國の韻文の上に、慥に一種變つた形を持つてゐるやうに思ひます。それを鬼武が文化度に於て、弘めようと致しましたことは、別段な成績は得て居りませんけれども、注意すべき事柄だと云はなければなりません。然るに今日日本の韻文の事を云ふ人が、和詩の事は全く度外視してゐるやうに見える。從つて鬼武のこの著作なども、殆ど知られて居らぬやうですが、これは拋却して置くべきことではあるまいと思はれます。

早かつた自來也の上演

又讀本と致しましては、文化三年から四年のところへかけて、「自來也說話」前編六冊、後編五冊といふものを出して居ります。こゝに曉鐘成の「噺の苗」の本文を出して置きますが、この「自來也說話」は時を移さず、大坂で芝居に仕組まれてゐるのであります。

文化四年九月廿一日より道頓堀太左衞門芝居において、新狂言興行をなす、

柳お園に幾の糸よじ かゞみの浦に賊ひの仇討　楷自來也談（やなぎおそのいとのよすぢ かゞみのうらにかたきうちのおもかげ　くすのきじらいやものがたり）

右は東都滑稽者鬼武の著述せし自來也話といへる小說本なり、狂言作者奈河篤助近松德三なんど打より、歌舞伎狂言に引直す、是小說本、歌舞伎に直すはじめなり、是によつて日々に評判よく、又右小說本大いに流行して、貸本屋は三日切の札をはり、是をそらざまになして、街をはしる有さま、浪花の賑ひ、言語に絕し、筆にも盡しがたし、

此時市川團藏、盜賊自來也の役に、好みにて脇ざしの鞘を朱のあらき海老ざやを用ゆ、是より此さやの名を自來也鞘と云、又は烟草入の懷拔煙などにも、此形を用ひ自來也筒とよび、大に流行す、また右狂言にて羽織のひも、眞田紐の三角に組んを用ひてより、是又自來也紐とよんで大に流行し、今に至て專ら用ゆる人多し、

江戸の作家で脚本化された小說としては、鬼武が一番早かつたのであります。京傳の「稻妻表紙」は文化三年に出版されて、文化五年の正月には、中座と角座と兩方で出し物にして居ります。それから馬琴のものなども、大坂で芝居になりましたが、一番先へ芝居になつたのは、鬼武の「自來也說話」だつたのです。だからこの「自來也」といふ作物は、大分評判でもあり、注意されても居つたことがわかります。

自來也の出所

それから「國字小說通」の說をこゝへ出して置きますが、大當りの讀本といふものは、この「自來也」のみならず、外國種の嵌め物が多かつたことは、誰も知つてゐるところであります。

先第一當時讀本の巨擘たる里見八犬傳は、水滸傳に擬て作りしは、皆人の知る所なれども、其中にいろ〳〵拍按驚奇等種々の小說を交出せし所もあり、美少年錄は擣𣏐閒評に、俠客傳は好逑傳による、其他稻妻表紙の薛菩提を萃し、自來也の類書纂要に擬たる如き枚擧に遑あらず、

だから鬼武も相當に支那の小說雜書を讀んで居つたものと思はれる。從來この「自來也說話」といふものは、「類書纂要」から抜出したものと云はれて居りますが、これは五祖の言葉であります。つまり法演禪師といふ人だらうと思ふのですが、勿論五祖の云はれた中には、自來也などといふ名前が出てゐるわけではない。その言葉は「大惠武庫」にありますから、それを出して置きませう。

五祖云く三乘の人、三界の獄を出る、小果必ず方便を藉る、地を穴り壁を穿ち、及び天窓の中より出るが如し、唯だ得道の菩薩は初より地獄に入つて、先づ獄子と相疑はず、一切常の如し、一日信を寄せ去れば、酒肉を覓め得て、獄子に與へて喫せしめ、大醉に至て、獄子

の衣服行纏頭巾を取りて、自身を結束し、却て自身の破れたる衣服を將て、獄子に與へて著せしめ、枷を移して獄子の頂上に在き、坐せしめて牢裏に在き、却て手づから獄子の蘆條を提り、公然として大門より出で去る、參禪の人、須らく恁麼にして始て得べし。

小說化された我來也の話

ところがこの五祖の話が、宋の沈俶の「諧史」の中には、もう大分小說めかしくなつて現れて居ります。前の話といふものは、禪宗坊樣のお悟り話なのですが、今度はさうでない、全く世間話になつてゐる。大分長うございますから、大意を申述べることにしますが、五祖の話に無かつた泥坊の名が、「諧史」では「我來也」といふことになつて居ります。

この我來也の話といふのは、趙師睪といふ人が臨安府尹の職に在りました時分に、臨安城内に頻に賊が忍び込む。さうして忍び込んだ家毎に、必ず「我來也」と書殘して行く、といふ變な泥坊があつた。それが評判になりましたから、嚴重に捕方を命令しましたが、容易につかまへることが出來ません。さうかうしてゐるうちに、城内のみならず、そこでもこゝでも大評判になりましたが、いゝ按配に我來也を取押へたといふので、府廳へ送つて參りました。そこでこれを牢に繫いで吟味をしましたところが、なか／＼服罪致しません。又贓品その他の證據物も出て來ないので、どうも結審することが出來ず、久しく獄に繫いでありました。賊は牢に居ります間に、だん／＼牢の役人と心易くなつて、或時獄卒に對してかういふことを申しました。私は泥坊をしたおぼえはあるから、無罪にならぬことは知つてゐるが、我來也といふのは自分ではない、だからそんなにひどい刑を受けることは無いと思ふが、無罪で出られる身體ではない、何にしても當分娑婆へは出られないにきまつてゐるから、一つ大目に見て貰ひたいことがある、シカ／＼のところへ行つて、取つて來て貰ひたいものがあるのだが、それは取つて來てくれゝばあなたに上げる、あのまゝにして置けば、品物もどうなつてしまふかわからないし、罪滅しの一つだと思ふから、どうか取つて來て貰ひたい、

長々御世話になつた御禮にしたい――。これを度々云ふものですから、最初は何を云ふかと思つて取合はずにゐたけれども、遂に牢屋の役人も動かされて、それでは一つ取りに行つて見よう、といふことになりまして、云はれたところへ行つて見ると、成程澤山の金があつた。本當に大金が隱してあつたものですから、次の朝は早く出勤して、牢役人の方から內證で酒肉をその賊に御馳走してやりました。

それから又しばらく經ちますと、どうも先度は捨てたと思つてゐた金の在處を敎へたら、御馳走をして貰つて難有かつた、まだあの外に甕の中へ入れて、或橋の下の水中に隱して置いたのがある、それを取つて來て貰ひたい、といふことを賊が云出した。牢屋の役人はそれを聞いて、彼處はいけない、夜も晝も人通りの多い、賑かなところだから、とても彼處へ行つて、川の中に沈めてある甕なんぞが持出せるわけのもんぢやない、彼處はだめだと云ひますと、いやさうでない、あなたのお上さんが洗濯物を籠に入れて、あの川まで持つて行つて、歸りには甕を籠の中に入れ、甕の上へ洗濯物を引掛けて持つて來れば、目に立つことは無いから、是非やつて御覽なさい、持つておいでなされば、その金は前より澤山あるが、それは無論前の通りあなたに上げる、といふことでありました。一度味を占めて居りますから、獄卒は家に歸つて、その通りやつて見ますと、果して大變な金が隱してあつた。そこでこの牢役人は、愈々その賊を大事にかけて、いろ／＼心づけをしてやつて居ります。

さうしますと或晩のこと、大分夜が更けてから、泥坊が俄に大變なことを云出した。御賴みだからちよつとこゝを出して貰ひたい、夜明までにはきつと歸つて來るから、どうかちよつと出して貰ひたい、と云ふのですから、これには牢役人も驚いた。そいつは困る、牢屋から勝手に出してやるわけには行かない、と云ひますと、その賊が少しキツとした樣子になつて、私はあなたに迷惑をかけるやうなことは決してしない、假に私が歸つて來ないにして見たところが、囚人に逃げられたといふだけならば、免職位で事は濟む、若しあなたが聞いてくれないならば、此間うちから大金を上げてある、あの事を申立てる、さうすればなか

なか面倒になつて、免職位では濟みますまい、私の云ふことを聞いてくれて、免職になつて見たところが、あの金さへあればあなたは一生樂に暮して行けるぢやありませんか、併し私は決してあなたに迷惑をかける氣は無いから、夜明までには必ず歸つて來る、それでも私の賴みを聞いてくれないかどうか、と云つて懸合ひ込まれた。牢役人も仕方が無いので、たうとう內證で出してやることはやりましたが、さあそれからが氣が氣でない。あゝは云つてゐたけれども、果して歸つて來るか知らん、と思つて心配して居りましたが、夜明近くになりますと、賊は約束通り屋根傳ひに歸つて來て、獄舍の庭に飛下りた。やれ〳〵よかつたといふわけで、直につかまへて牢屋へ入れまして、知らん顏をしてゐる。

ところがその翌朝になりますと、臨安府の重立つた役人のところへ泥坊が入つて、例の通り「我來也」といふ三字を書殘して行つた、といふことがわかつた。府尹の趙師睾は、あゝさうであつたか、道理であの賊が服罪せぬと思つた、我來也を慥に牢に入れてあると思つたのは間違で、まだ捕へられて居らぬに違ひない、それでは此間のやつは間違であらう、といふので、百敲か何かの處分で、例の賊は所拂になつて牢を出ることが出來ました。

話替つて一方例の牢役人が、或晩宿直をして翌日自分の家に歸つて參りますと、細君が留守の間の話をして、昨晩遲く門を敲く者がある、或は御歸りなすつたのかと思つて出て見ますと、一人の男が二つの袋を投込んで歸つて行きました、その男は誰だか一向わかりません、といふことでありました。どんな袋か出させて見ますと、金銀の道具がいろ〳〵入つてゐる。さては例の賊が御禮にかういふものを持つて來たんだらう、と思つてよく見ますと、その代物は先日上役のところで盜まれたものに相違無い。これでたうとう我來也なる者は、聰明の評判であつた趙師睾ですら、その奸を見破ることが出來ず、僅な罪で牢を出てしまつた。それからその牢役人は、無事につとめて居りましたが、病氣といふやうな名目で辭職しまして、生涯樂々と暮すことが出來た。たゞその子に放埒者が出て、その金をすつかり使ひ果して後に、昔話としてその金を貰つた話が世間に傳はつた、といふ

のであります。

不都合な「舊觀帖」の改編

かういふ風になつて、五祖のお悟り話が「諸史」の中にある。それを基として白來也が出來たものゝやうに思はれます。それですから鬼武といふ人は、支那の小說、雜書の類を相當讀んでゐたことがわかります。京傳や馬琴の學問に就ては、あるとか無いとかいふことが云囃されて居りますが、鬼武に至つては、何程の讀書があつたものであらうか、とさへ云はれて居りません。この人の學問その他に就ても、大に調べて見なければならぬのですが、一向わからないのはまことに惜しいことだと思はれます。

殊に合卷の「兒雷也豪傑譚」が出來てから、この方が弘まりまして、原作である鬼武の方が却て忘れられさうな形になつてゐるのは、氣の毒でもあり、惜しい事でもあると思ひます。鬼武の事に就ての穿鑿は、すべて等閑になつて居ります爲に、「舊觀帖」などは、中本として知られた方の作であるに拘らず、後來は三編九冊本といふものになつて居ります。本當は初編一冊、二編二冊、三編一冊で、それに鯉丈が續足しをした四編二冊でありますのを、序跋を拔きさし致しましたり、本文を分合したりして、さういふ編成のものにしてしまつた。一九や鯉丈の名も削つた上、何だか聞いたこともない白馬白華などといふ者の名で、いゝ加減に文章を補つたりしまして、一編上中下三冊、三編まで全部で九冊といふ、全く貸本屋の都合のいゝやうに拵へてしまつたのです。これは當時の讀者といふものが、一々本を買ひませんで、貸本屋から借りる方が多うございましたから、貸本屋の側から云へば、一度に餘計貸した方が便利である。讀本などのやうなものは、最初から一帙數冊になつて賣出されてゐるといふ風ですから、その邊の便利を考へて、中本なんぞの方にも、貸本屋の爲に冊數、體裁を擅に變へることがありました。鬼武が

さういふ都合上の分合をやられたのみならず、隨分他の作者もやられて居りますが、自作でないものを一緒につゝ込んで、全部鬼武の作のやうにするといふのは、實に怪しからん事でありまして、鬼武に對しては殘酷な話だと思ひます。

中本研究の不足

今度こゝに取出しましたのは、舊本による一編から三編までの四冊でありまして、鯉丈の纘足した四編は捨てることにしました。つまりもと〲通りの體裁で掲出したのですが、「舊観帖」のもとの姿、もとの體裁がどんなであつたか、それを考へる人も無いといふことは、まことに遺憾千萬な話であります。これは從來中本といふものゝ調べが、全く缺けて居つた爲でありまして、今後少し丁寧に中本の調べを致しましたならば、かなりいろ〲な收穫がありさうに思はれます。鬼武の傳記の如きも、もう少しわかつて來なければならぬ筈であります。

同じ中本作者である岡山鳥、あれは岡嶋權六と云ひまして、神田淡路町の近藤某といふ旗本衆の家來でありましたのが、一度浪人し、その後又歸參したりしてゐる間に、中本その他いろ〲の著作をして居ります。これが多分鬼武などと似通つた人物であつたらうと思はれます。旗本などには用人をはじめ渡り奉公をするものが澤山ございました、是は今日は帶刀し、明日は無腰になる、武士の階級にも、庶民階級にも固着しない渡世の人間があつたのです。

中本の作者に限つたことではありませんが、江戶文學の中に數へられるところの作家には、かういふ風な人が多かつたといふこと――それはたゞ士の畠から出たといふだけでなしに、半官半民といつたやうな人が、大分あるやうに思はれる。かういふことも亦大に考へて見なければならぬ處でありまして、どうしてさういふ階級に作者が出たかといふことは、大分面白い研究事項ではあるまいか、と考へるのであります。

○鸚鵡石を見て云々 「禮記」に「鸚鵡能言不レ離二飛鳥一猩々能言不レ離二禽獣一」とあるによりて記せるもの、「猩々花」までを利かせたるなり。「鸚鵡石」は役者の假聲をつかはんが爲に、聲色を書抜いたるものを云ふ。

○有喜世物眞似 天明に松井鶴市といふあり、名高し、その頃は浮世師といひ、後には豆蔵講釋また豆蔵聲色などいへり、その技は俳優の身振聲色を旨とせり。

○そこはかとなく云々 「心にうつり行くよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物ぐるほしけれ」（徒然草第一段）

○鸚鵡に似たる舊觀帖 「舊觀帖」は九官鳥の洒落。

有喜世物眞似 舊觀帖初編

有喜世物眞似舊觀帖自序

※鸚鵡石を見て能く口眞似をすれども。其藝素人を放れず。猩々花は能く見事成といへども。其花を見ざれば金仙華に及ず。此に有喜世物眞似てふもの。能く人の心を歴め。樂しめ。腹筋を撚らせて。而世に行るゝ也久し。今其事によせて戯れ書せよと。柴色堂主人の慇需。彼物眞似せる人の他まねして見聞たる。ありふれことを筆の行まゝに。※そこはかとなくかひつけ侍れば。あやしうも一小册となんぬ。則※鸚鵡に似たる舊觀帖と題して。口眞似ことの口もとに。感和亭鬼武なるものみづからしるす。

乙丑孟春

有喜世物眞似旧觀帖目録

感和亭鬼武著

第一回 馬喰街寓居之条

第二回 戯場看取老婆説話之条

第三回 愛宕山眺望之条

第四回 上野山下邉巡覧之条

第五回 浅草両國遊覧之条

有喜世物眞似　舊観帖　　感和亭鬼武著

第一回　馬喰街寓居之条

夫戀娘昔八丈浄瑠理のたゞ句に曰。いふもさらなる繁花の地。人の心も國がらや。自然と廣き武藏野の月日もしげくたちつゞく。家居ひまなく。諸國から入込人と出る人と。出家侍諸商人。百万石もけんへきも。揩違ふたる繁昌は。金のなる木の植所ト云々。復盧照鄰が詩に。

長安大道連狹斜　青牛白馬七香車　玉輦縱横過主第　金鞍絡繹向侯家　龍銜寶蓋承朝日　鳳吐流蘇帶晩霞

ト長安古意も思ひ合する。爰や大江戸の賑ひは。何所を見ても人の山。家にも一盃外にも一盃。口に溢て言もつきせず。筆にも及ぬ繁榮なる八百八町の其中に。馬喰街と聞へしは他國の人の旅宿りせる所にて。旅籠屋の軒甍を並べ。六十余州の風俗を居ながら見やる一興は。東都の徳ぞかし。頃しも春の日も西へはや入相の夕ぐれ時。へ春寒や霞て鐘は暮ながらト彼兎明子のとの葉や。かすみがくれに聞る鐘の音。「ボチンウン〳〵〳〵〳〵〳〵「こゝに奥道者と見へて年の頃六十ばかりの婆々と廿四五の男いづれも手織の生木綿の廣袖の單物を上張に着て。婆々は亘紋の古びたる手拭にて天窓をつゝみ。其上へ雨に度々逢たと見える。赤みのついた菅笠に。奥州淵黑村道行二人としるしたるをかぶり。白の鼠色になつた甲掛脚半草鞋かけにて。巾着の提多葉粉入を前帶の脇に指。竹の杖を

○戀娘昔八丈　松貫四、吉田角丸作、安永四年九月廿五日外記座新浄瑠璃。
○けんへき　痃癖、訛りてケンペキ。
○盧照鄰が詩「長安古意」（唐詩選）
○兎明子　各種の俳諧年表に漏れたり、千梁兎明は太白堂五世桃隣の門下にて、天保三年刊大向齋孤中撰「返事ついて」の中に句あり。
○奥道者　奥州道者。

○八幡黑　黑く染めたる揉み革。

つき。若き男は笠も甲掛脚半も。婆々と對ひ出立。上張は白地に紺の弁慶嶋の浴衣。桃色木綿の下帶の端シ少し見へ。みがきのない瀏の皮の角煙草入に煙管筒を付。狼の牙の根付で腰へぶらさげ。二尺ばかりの長脇差の小尻へ。七寸ばかり銅ではすに張かけ。柄は※八幡黑の皮でくる〳〵と卷。腹へあたつてもいたくないやうにて裏がはらの所を手拭で結び。落し指にして。黑の小葛籠の上に莞蓙包を乘せて脊負ひ。二人連にて向ふへ見ゆるを。宿引それ刈麥屋の番だ（トいふうち一人二人りのそばへ行）宿おふたりかへ。まだお連がありやすか。なんにしろ私どもの所をお宿にしなせへ。サア御案内もふしやせふ。旅の男其方。何屋でおざるナモシ。宿わつちどもの所は。刈麥屋ニ申やす。旅ハアわしらア山畑屋長兵へどのといふ宿屋サア行もふサア。宿そんなら山畑屋まで送てあげやせう（此りよ人おくられ一ト錢のいる事と思へば）旅アニ能おざらア案内はいりもふさねへ。宿よしサ。おめへ方は不構行なせへ。送ルのがわたしどもの法だよ（ト後より付ゆく二人りは宿屋の門を右左と見廻し見世のせうじの書付を見て彼若男）「ウ、山畑屋長兵へ。ハア、婆アさん爰だア

○兒童 奥州語。ワラシといふ。

もし〳〵　〔はゞ〕そんだら。おとづれなふして見めさろ　（トいはれ一山畑やのかご口にいたり）　〔旅〕ハイゆるさつしやりまし。モノ
山畑屋長兵へ様とは内方かアもし。（一山畑屋の女ぼう見せへはしり出）　〔女ぼう〕ハイこれでござります。どちらからお出なせへ
ました。〔旅〕わしらア奥の淵黒から。御江戸サアいつたら。爰の内方に逗留なふせろといつて。書状のう
附て越れました。〔女ぼう〕それはよふこそおたづねなせへました。サアマアおかけなせへまし。コレ女次
どん。はやくお洗足の湯をもつてきなよ。そしておちよどん。おちやもよ。〔宿引〕モシこつちが定宿だと
いひなさるから。おくり申やした。〔女ぼう〕アノこれはおせわさまでごぜへます。〔旅〕サア婆アさん。マア
其所へかけなさろ。〔はゞ〕そんだら。ゆるさつしやりまし。ハアヤツトコサ。（と見せへこしをかけ）〔はゞ〕コリヤハア不
思義なア事で。おせわになりますべい。〔女ぼう〕やれ〳〵お年寄の遠方から。よふお出なせいました。は
んにおたつしやなことでごぜへますねへ。江戸ははじめてでごぜへますかへ。〔はゞ〕わしははじめてだア
が。兄兒アは一度出來たこともおざるとよ。わしはハア達者ナア事は。これでも國方に居ると。今でも
日に壹石位の麥なア搗ちふサア。けふも杉戸とやらから。きちふしたが。こわいともおもひましねへよ
（出た事を出來た、出來た事を出た、くたびれた事をこわいなどゝいふは、みな國ことばなり）〔女ぼう〕ほんにけしからね八御丈夫な。わたくしどもは江戸の内でも。遠
方はくたびれて。歩行へゝませんにナホ〳〵。〔はゞ〕此兄兒アはわしが甥子で。福介といひますが。
今度用事で。お江戸サア出來る序に。わしも看取にくつついて來ましたアな。（此うちせんそくのゆを持來り、下女はぼんに茶わんを二ツのせてさし出す）
〔福介〕コレサばアさん。語り言なア寛出ることだア。マア足のう洗て上なさろ。〔はゞ〕マア主あらへサ（これより兩人）
（きやはんわらじをとり、あしをあらひ一）〔はゞ〕此わらじなア持て上るべいか。〔福〕アニ捨て仕廻ッしやひ。お江戸じやア。ハアわら
んじやアいりもふさねへは。〔はゞ〕やれしまつのう。しらねへ兒童だアぞ。また立時にいりもふサア。

○蚕の種引　種紙を配ること。

〔たゞう〕おわらじは。さやうなさつておゝきなせへまし。仕廻せておきませう。サアマア二階へお出なせへまし。お千代どんや御案内もふしなよ。〔はゞ〕荷物ナアどふしますべい。〔たゞう〕それも只今もたせて上ゲます。（こゝにおいて兩人、二階へ上る、したはたらき文治、荷物を上る、女ぼうも二階へきたる）〔亭〕ヤ御亭に逢申て。書狀のう屆ますべい。〔たゞう〕ハイ今日は外へ參じましたから。ちと歸りはおそうござへませふ。御狀はわたくしがお預り申ませう。〔亭〕そんだらさうしますべい。ト頭陀袋のやうなものより書狀を出し。女房にわたす。〔女ぼう〕ハイたしかにおうけとり申ました。もしへ此間をあなたがたへ御かし切にいたしませふ。ゆるりつと御逗留なせへまし。イヤほんに久次郎さまは。お替りもおざいませんか。毎も秋は蚕の種引とやらに。八王子の方へいらつしやいますから。わたくし共はもふ〳〵大躰久しいおなじみでごぜへますが。けつかうなお方サねへ。ホイわたくしとしたことが。手前のいふことばかりいつて。まだお茶もあげません。お千代どん〳〵。お茶を汲なよ。モシお枕はこゝにごぜへます。ちつとお横におなんなすつて。そして錢湯へいらつしやいまし。（トしやべりちらして下へおりる）〔はゞ〕こゝのおかたも口弁口の無圖人だア。何をいふのだアが。氣上なアして。わかりもふさねへ。〔亭〕そんだアとをいはつしやるな。お江戸のびてへは氣が强から。ごせなアやきもふサア（大造な事を無圖、女の事をびすびこハ、はらたつことを、ごせをやくといふも同ことはなり）此内下女來り。〔下女〕もしサアお湯へいらつしやいませんか。御案内いたしませう。〔亭〕錢湯屋サアいくのかもし。〔女〕さやうでござります。〔亭〕近くでござるか。〔女〕ハイ直さま横町でごぜへます。〔はゞ〕アンダ内に呂風なたちもふさねへか。〔女〕こゝはみな錢湯でごぜへます。〔はゞ〕おらア錢湯とやらサ這入た事がござらねへから。やだアもし。そして荷物のう置て。是どけへいくべいチヤ。〔女〕お荷物はわたくしどもでおあづかり申て居りますから。おきづかいはおぜへません。〔はゞ〕イヤおらア

ふろのかはりに。きどころ寐でもしていますべい。いごころねのことなり 〔福〕コレサばアさん。あんの事だ。お江戸サ來て。錢湯サ入らずに。永逗留のうち。あぢよにすべい。そんだアこたアいはずに行なさろ。そしてこんたア福島の本町の錢湯を見たんべい。あれを大したのだアな。〔はゞ〕ふくしまのもしりもふさねへ。アニハア旅籠屋にふろのねへとこがあるものかア。ほんにごせつぱらのやけた。ト めつたにこゞさをいふゆへ、ふく介も下女もきのどくがりいろ〳〵なだめまはし、よふ〳〵ゆへゆくきになりければ、福介はおさとゆへゆき、はゞは下女がついて女ゆへつれゆく、これもひとゝふりのりよ人はつきはなしてやれ共、此はゞはよきだんなより引付なれば、大せつにとりあつかひ、下女をつけてやると見へたり、又おさとはすぐに宿より丸はだかになり、手ぬぐひを下帯のかはりにむすび湯へゆくこと、まゝあれども、こゝしげければ、ふく介の一じやうはしばらくりやくす、さてこはゞはせんとうへゆきはじめてなればまごつく故 〔下女〕もしおめしものは。此戸棚へでもお脱なせへまし。どふでわたしが附て居ります。〔はゞ〕迚の事に。その錠まへのうあるところへいれてくんさい他國だアから。慥なア事がよくおざり申ス。ト 衣類をぬぎ、戸棚へ入れ、そは切いろのゆもじひとつになり、そのまゝすぐにゆへ入りにかゝる、下女はおかしさをこらへ 〔女〕モシ〳〵おゆもじをとつておいでなせへ。〔はゞ〕おらアお江戸の衆に不礼だんべいと思つて。わざとしめてはいりもふサア。それにハア洗たく前だアから。ついでに風呂の中ですゝぎますべひもさ。〔女〕ヲヤ〳〵それこそぶしつけでごぜへまさアヲホ〳〵〳〵。ト わらひながらゆもじをとつてやる、はゞははじめてなれども、しつたふうのものゆへ水船を湯つぼと思ひければ、さつ〳〵と水ぶねのそばへゆき、からだもすゝがずにまづ水船の中へかたあしぐつとつつこめば、ひいやりとするゆへ、びつくりするひやうしに、あはゝ〳〵とよこに水ぶねへころげこみ、あつぷ〳〵と水をのめば、みな〳〵きもをつぶし、はゞを引上水ぶねをくみかへるやら、こゞとをいふやらやかましく、下女もおかしさ、きのどくさ、はゞのそばへゆき 〔下女〕もしおけがはごぜへませんか。十方もねへ。これは水ぶねでございますものを。〔はゞ〕おやつかな。おらアゆだアと思ひましたア。水船とやらなら船頭でもおいたがよくござらア。ト 口こゞとをいゝながら、又 ゆ上りゆの口へゆき 〔はゞ〕ヤレハア少な風呂だア。ト いゝさまゆぶねへ手をつゝこめばにへかへつている故 〔はゞ〕ア・チ、、、、、、あつい〳〵。〔圖〕ねへさただア〳〵。やけどのうさせたアぞよ。〔下女〕モシ〳〵湯は向ふでごぜへますはな。〔はゞ〕アニ向ふだアエこりやまた。うらアハア水船だアの。湯船だアのといゝめすから。船玉さまがまつゝたお宮だアとおも

○てんこちもねへ　飛んでもないこと。

○御方　人妻をいふ、甲州言葉也、

ひましたアハア。トいゝながらやう／＼ゆ口へゆき、おつかなそうに下からのぞきこみ　はゞおらアやだぞ／＼。おぢよだかかぢよだか。眞闇な所で。こきみなアわりいから。こんなアふろへはいりますめへ。トいふゆへ、中にはいつているものもおかしく、きのどくなれば、まづはいつてごろうじろ、中はずいぶん人がほもわかりますよと、みな／＼になだめられ、ふせう／＼にはいつて見た所が、よいこゝろもちなれば、やゝ半時ばかりかゝつて、うでだこのやうに眞赤になつてあがり、くみぶねへゆき、升から水をがぶ／＼のみ、その升にて水をからだへやたらかけてあびるを見かね　下女もし上り湯はこゝにくんでおきました。ちとおせなかを流してあげませふか。はゞナニハア上りますべい。トかの上りゆをつかい、おがら／＼させしが、にはかに一熱湯にいり、とりのぼせしうへ、水ゆをしたる故にや、湯氣にあたつたと見えて、ウンといゝながら、あふのけに倒れるを、みるよりみな／＼きもをつぶし、湯ばんも下女もゆ入りの人もかけこみ大ぜいよつて、ばアさんやアイ引／＼とよびたてるやら、水を吹やら、いしやよ、きつけよと、らんちきさはぎをやゝかゝうち、やう／＼よこしこゝろづいたと見へて、目をぼつちりとひらけば　下女氣がつきましたかへ。はゞおらアあじよにしました。みな／＼おめへが目をまはしたから。見なせへ。これ大さはぎだアな。はゞヤレハアそりやアとんだアことだア。わしやアまた。あんだか無閙ヱ、心持にうん寐たアとおもつたが。氣遠になつたのかもし。これだアからおらアせんとうサいるめへといゝもふしたア。わしは死事はだいのきんもつだアに。湯水のせめにあつてたまるべいか。もふ／＼やんだぞ／＼。サア／＼いきますべい／＼。でんこちもねへことだア。トこれより下女とつれだち宿へかへり、福介は先へかへりゐて、こゝにゆやのさはぎあれども、あまりくだ／＼しければはりやくす　こゝにまた越後蒲原邊の人と甲州韮崎邊の人いづれも一人り旅にて。用事をかね。江戸見物ながら。兩三日以前より此家に宿をとり。たがひに知る人になり。どちらもひとりものなれば。二人り一所に一ト間を借り切て。婆々のとなり座敷にあるゆへ。女房二階へきたり。女ぼうもしおばアさんへ。おとなりの座しきのおきやく様も。江戸御見物でござりますから。またおつれにもおなんなさりませうし。そして御一所も同前でござへますから。御逗留中御互におこゝろやすくなさりまし。ト兩ぼうを引あはせる　福介こりやアはじめておめにかけました。甲州の人おたがいにお心安くおたのみ申ます。こゝのおかたのいわつしやるとふり。わしらもなアお江戸見物に出來ました

○おけさ、松坂、甚九　三種の俗謡なり、おけさは主として東越後中越後に行はる、西越後にては人妻を「おかつさ」といふ、東中にては「おけさ」といふぞ、松坂は松坂踊の音頭、甚九は櫂歌にて、長州赤馬關より發す、享保以來のもの、越後は最も流行するよし、中陵漫錄に見ゆ、江戸も文政度には頗流行せしなり。

○桑折　福島縣伊達郡の小都會にて、機織養蠶の盛なる土地。

○半田の山　福島縣名勝舊蹟抄云桑折より西北凡一里、寛文頃銀山奉行をおき採鑛、金銀數千貫を得て、非常の富を致し、佐渡の相川の金山、但馬の生野銀山と並び稱せられ、海内三大坑となし、幕末に及んで廢す……今日山腹崩壞、新沼欠潰氾濫し、民家十數戸埋沒したり。

○杉田の藥師　福島市の北西二里半、信夫郡平野村字井佐野醫王寺にあり、佐藤庄司繼信忠信の墓あり。

○花の本宮　郡山と福島市との中間にあり。

○はんで　甲州言葉なり、度々、頭々の意。

から旅は道づれとやらでなア。ひとりもしる人の多ひがよくござらアなア。甲州も出ると出來るのちがひあり　越後の人わしも江戸ははじめてゞ。ことに一人りたびで淋しうござるよつて。直國へかへらふと思ふたが。かうおつれが出來ては。とうりうする氣になつたことよ。はゞわしらア氣まゝものだアから。ねそべつたり足でもふんだいたり。無禮なことのう多かるべいから。ごせのうやかずに附合てくんさいもし。此内女ぼうはごれ、ごぜんをあげよふと下へゆく、ほどなく下女ぜんをもちきたり　下女サアお心安く。みなさま御一所におあがんなせへまし。トありふれのさいごしらへのぜんをならべ、みな〳〵くいしまい、ぜんをさげれば、はや火ともしころなり、下女あんどうをもちきたる　甲州の人けふはおかげでにぎやかにようざけをくいましたヨウ。昨日まではわしらが國の哥の通り。へ夕飯を打喰ふときも一人身は。うそら淋しひ惠林寺の鐘でおざつたアなアハヽヽヽ。「夕飯をようざけ、昨日をきのふなどゝいふよ、みな国ことばなり　越後の人ヤ國〴〵で色々の唄もあるとも。わしらが國のおけさ松坂甚九などは。よくどこの國でも人がやるとも。越後ものゝやうには出來ぬことんし。トすこし國じまんのやうすなり　福介おらがア國方でも間抜節拵ア。お江戸の衆にも覺へて歸る方がおさるから。唄ふ人もあんべいて。越後ハテのどしたふしだか。つい聞ませぬわい。福あにおもしろくもねへが。きかつしやりまし。こんなにいゝますよ。トかんぼつたるこへはり上げ　三下り　へ仙臺まぬけ桑折女郎衆と半田の山は　合　へ穴の中から金が出る　合　へ田舍なれども杉田の藥師　合　へ花の本宮目の下に。甲州おこれはきめう〳〵。福あにわしよりやア。ばアさんがヱ、聲だアもし。越後これはふとつしよもうじやヤこときにちと酒をかうてもらをかい。ト下女をよびさけ肴をいゝ付てやる　甲州サアおこれおなかい。やつておくれんか　都て他の女ぼう、またはさしよりにてもお仲居、おかたなどいふ國ことばなり　はゞアニわしやアハア齒がぬけて。あちよが出ますべい。福介なアとんだ爐のうぶちぬかアヨ。福さういわずと。さんさ時雨でもやんなさろ。此うちさけさかなきたり盃はじまり、すこし酒もまはりぎみになりければ、はゞもうかれのいろ見えて、はゞそんだらお肴に。ふとつやりますべいか。甲州は※

○さんさ時雨　林若樹氏が曾て此唄を夜廻ひの唄なりといひしことあり。

んでしよもふ〱（いそぐことをほんでさいふ）〔ほゞうた〕三下り へ肴はさめと数の子はさむ。親はにしんで。子はあまた。しよんがへ。〔みな〱〕きめう〱。よい〱お聲じやナア。わかひときがおもひやられるわい。〔ほゞ〕うたへ※さんさ時雨か。萱野の雨か。音もせできて。ぬれかゝるしよんがへ引。（きごとあるひはさかづきをおさへてお肴をしますべいといふて、うたひしうたなり）〔みな〱〕やんや〱「[illegible]」〔ほゞ〕アニハア無[illegible]がまわつたアから。あぢよにも舌がまはりましねへ。〔越後〕イヤ〱さうでないことんし。きめうじやて。どれわしもふとつ甚九をやつて見せませふ。ト（此ゑちごものは、大きにうたも[illegible]）へ甚九ヱ、引あた[illegible]剃ねへ先へ塩辛でもなめたかア引へ今はぐいら剃たいけどうらく道心坊ウ引合詞へコリヤ鉢崎砂山すかりでもちこめ砂地に（小べんたまらない）〔ほゞ〕うかれだき（こゝおもわす）ハアだいたはく越後殿サどけへぎやアる小手補が手ざる手にさけて引〔ほゞ〕チヤ〱チヤン〱〔越〕可愛柳の根本の鎌倉鮨押へに引合詞へソリヤお寺の前の樒の木だア。本からうらまで毛だらけだア。〔みな〱〕いよ〱やんや〱。〔越〕出たおどりだアづねへ沙汰だアもし。

○さりやく　作略

○もさ引　坂東もさとは古く云へり、關東べいさいふと同様にて、鄙びたる言葉つきを指せるなり、よつて田舎者を總べてもさといふやうになれり、案内人も江戸見物に來れる田舎者を引廻すにいふ。

惡ヤ平生はもちつとよくおどるども。こう酔ては息が切れて出來ぬとこと。ア、敵ないく。ヤレ下の青ずべたら湯をふとつもらいませうよ。（くるしい事はてきない、二才やらうを青ずべなぞいふ、國詞なり、ひふゆよなどのかなちがひあり）福サア甲𠮷のお客も。なんぞうたはつしやいもし。甲わしはナア酔つてずくがないからナア。ゆるさつしやいまし。何もうたはすものが。おざらねへはナア。（いくじのないことをずくがない、ごふせずかふせず、ナアくなど、いふはみな國のことばなり、）福あんでもゐゝからうなつて見なさろよ。甲ハテこまり申たわい。まゝいよふござらア。わしらが國の麥搗うたをひとつやつて見すかい。へ三上り唄𠮷を見る目は糸よりほそい。合へさうすらくなにようたゞ親を見る目はのう猿眼だア。福づないく。時出たアうただアもし。（ここよりみなく大がいていの女ぼうなり、）女ぼうもしおもしろい事でごぜへますチホ、、、、に明日はおはやう御見物にお出なせへませうから。御あんないの人を今晩から。左様申て雇つておきませうかね。ほどわしらアあんだかふあんないだアから。さりやくのうしてくんさいもし。女ぼうさやうなら。皆様御一所のつもりで。御案内はひとりたのみませう。さいわいこちらへ出入の忠次郎と申人が下へまいつておりますから。これをたのみませう。忠治どんく。ちよつときな。（此あんないしやのことをもさ引といふ、忠二郎一名か）（いへ來る、）女ぼうこうあした。みなさまを御案内申ておくれ。忠かしこまりました。明日はおはやうごぜへませう。先どちらから御案内いたしませうねへ。おかみさん。みなくそれさふあんないだから。ゐゝようにたのみますよ。女ぼうそんならあすは。これから堺町葺屋町の方から。芝の愛宕さまの方を御案内申て。それからまたあしたは上野淺草のほうがよふごぜへせう。忠二さやうにいたしませうねへ。みなくどふでもよろしくたのみますは。ほどおらハアゐら寐むくござるから。もふうつ倒れますべい。皆々わしらも大分酔ひましたから。もふふせりませうて。女ぼうそんならおとこをあけませう。もふお

やすみなせへまし。［忠二］さやうなら明朝さんじませふ。ト両人下へゆく、ほどなく床をしきならべ、おもひ〳〵にうちふすさま、

月上山楼燭影微　寒衾凛冽偏思帰
終宵辨聴風林響　愁況無端涙沾衣

其からうたに引かへて。無我無心なる木訥手合。前後もしらぬ高鼾。いかなる夢やむすぶらん。

戯場一見併老婆説話之条

「春の夜の夢ばかりなる手枕に」甲斐と越後と陸奥の隔る國も。へだてなく同じ衾を明烏カ、アと啼ば。ト越後の人は、すこしふうりうもあるとみへて、「こゝろよく思ひ出す國の妻子と見し夢も。覚てくやしき白髪のばゞが寐姿打詠。ト口すさむを、甲斐の人はさいぜんより目さめたりと見へて、おもはず吹出し［甲］イヤ御発句は面白ひがナアっ　あのお婆々を柳とは柳の眠る日和かな。ト両人わらふこゑに、ばゞ福介もめをさまし、［福］ヤアハアお天道さまナア。むくれ出來たちとうつくし過ませうナアハ、、、、。［はゞ］チ、がつてんだア。あんだか。おらア今夢にクサメしたくおもつたアが。ゆめがアな。たゞしやアたれぞ噂でもいつたかもし。トいゝながらア、クッサメ［はゞ］コリヤア風を引たアそうだアヱ。みな〳〵わらひにまぎらし、サア〳〵おきませう〳〵と、ここを上げ、夫より朝のしたくありて、かれこれするうち四ツまへにもなりければ、もさ引忠二もきたり、みな〳〵したくにかゝり、是よりけんぶつと出かける［福］イヤモノお宿の衆。草履の買てくんさるもし。［甲］わしらも買ふてもらはずに。ずんこでもよふござらア。［下男］何すんごへ。こいつアわからねへ。［甲］それさ竹の皮でこしらへたのよ。［男］アイそんならわかりやした。トぜにをうけとり、みな〳〵のぶんをかいきたれば、したくをして出かける、女ぼうおくり出て、［女ぼう］さやうなら皆さまゆるりつと御けんぶつなさつて。お歸ん

○春の夜の夢ばかり云々　百人一首周防内侍の歌「春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなくたゝん名こそをしけれ」を引き「かひなく」を「甲斐」に利かせたるもの。

○カヽア　鳴に利かせ、國の妻子を引出せり。

○よしの山云々　新古今集西行法師の歌「吉野山去年のしをりの道かへてまだみぬ方の花を尋ねむ」

○ありあけの油町　有明の油より出づ。唐にもあるまじの意を「ありあけ」に利かせたり。

○丹前師　六法役者。

○澤村源之介　四代目宗十郎。

○瀬川路之介　仙女路考養子。

なせへまし。忠治どんおたのみ申やすよ。[みな〳〵]アイそんならばんげへあいませう。「よしの山。去年の枝折の道ならで。まだ見ぬ花の江戸の町。馬喰町より立出て。横山通り。塩町の。唐にもかゝる町並は。またありあけの油町。傳馬町〳〵横切レに。堺町へと曲り角。[ごふくや]なんでござい〳〵。およんなハア。是おいで引。ト何かわからずよび立られ、はゞは福介の袖を引[はゞ]あぢよだか。こゝの大キなア土藏の中で。兒童たちが。あんだア〳〵ととがめるが。御番所かアもしれねへぞ。主が杖のう突ているから。小言なアいふさふだア。わびとのうしてゆきめさろ。[忠二]何サありやア呉ふくやで。なんぞ買なさるかといつて。よぶのだアな。うつちやつて歩行なせへ。[はゞ]そりやア。ハアわしはわるく氣をまはしたアな。ござせのやけたア。ごてへそうな呼びよふだア。

是よりみな〳〵は、さかい町、ふきや町、二丁町のにぎわゐにきもをつぶし、しばゐの表かんばんをながめいる、

[はゞ]ア、けつこうなア額だアもし。[甲]何それは狂言のかんばんだろう。[はゞ]丸の中に。いの字の紋のうくつつけた人は。丹前師かもし。[忠二]アレハ。澤村源之介といふぬれごと師さ。[はゞ]こちらののしノウ見るやうな紋のうくつつけた。びすもうつくしいもんだアナア[忠二]ありやア瀬川路之介といふむすめがたサ「しばゐもの引手、一名かつぱといふ、」[引手]カウばアさん。かんばんよりやア。マア

這入て。ひとまく見なせへ。今對面のまくでおもしれへ所だによ。〔はゞ〕ヤレそんだにふつはつてくれめすな。着るものナアそんじらアもし。そして對めんたアあんの事だ。おらがア國の白石の溫麵に。仙臺の燒鯛を煮たのう。たいめんといゝもふさア。引手氣の強ばアさんだ　一幕見ていきねへ。〔はゞ〕かんばんの通りかアよ。引手しれた事。江戸の芝居にうそがあつてたまるものか。はゞそんだら。なかのう見るにやアおよびもふさねへ。かんばんべい見ていくべいもし。引手如才のねへばアさんだア。そんなふるひことをいはずに。マアへゐんなせへ。忠三ときにみんなひとまく見なさるか。〔はゞ〕國への見やけに見ていきませう。はゞ錢ニヤアなんぼだアか。極てはいりもふさふて　忠三そりやアわつちがいゝやうにしやすから。マアはいんなせへな　是より芝居の中へはいり、花道を行ながら　はゞハイごいさりやしたと爰にゐませう。ト引手の跡について行、切おとしへわりこませ、みな〳〵せいながる仕打あり、ほごなくしらせの拍子木カツチ〳〵　はゞ何どきだアなひやうし木のう。ツ打申が。お江戸にやあ。二ツといふ時もあんべいか。忠三あれは幕開をしらせの拍子木サ。はゞばアさんちつとだまつていなさろ。よく口なアきくこんだア。はゞ氣ばらしだアから。にしも口のうきゝめされナア。ア、まくなアぶちあけねへかアな。人にもまれて居ることも出ねへハア。まくをまちかねゆへ、所々で手をたゝく　おとけたゝ〳〵〳〵〳〵　はゞあんだたれのう呼び申スのだア。忠三けんぶつがてへくつだから。早くまくをあけろとさいそくの手拍子さ。はゞ役者衆を呼申だアな。はやく出來さつしやればゐゝに。宿がア遠くござるかアな。忠三何サみな樂屋にきていやサア。ほごなく口上出て、まくをきこえたる、見物そろ〳〵きやうげんたいまくのまく、かほよ、の英雄今樣の役し、そお兒ゑの當祝、富士田の唄　富士の上るりなどの所作あり、見物イヨ瀧野やに。紀の國やに。濱むらやア引。同見物やかましいわい。しづかにほめやアがれヱ。上るりが聞へねヱわい。かつてへめ。見物ナンダやかましいもすさまじいわへ。くそでも拜味しやアがれへ。うぬらがやかましいのだ

○切おとし

寶曆現來集に安永末のさまをいひて、「舞臺より鼠木戸迄の間皆切落、東の方棧敷下二通、羅張ミて土間を仕切り、花道の方は棧敷下、是又東同樣に仕切土間なり、其外一間切落ミ二間き土間なり」ミあり、切落は舞臺直下なれば仰向きて見物するなり、川柳點に色々の句あり。

○二ツといふ時　昔の時は九ツより八ツ、七ツ、六ツ、五ツ、四ツミ行きて又九に還る。故に「二ツ」ミいふ時は存在せざるなり。

○居る　坐るこミ。越後獅子の文句にも「ねまりねまらず待ちあかし」

○かつてへめ　かつたゐ(癩)め。罵語。

○くそでも拜味しやアがれ 「糞でも食へ」をひねりて云へるもの。
○たアこと たは言。
○とめば 三座例遺誌云「是は見物のふせぎなり」

ア。見こいつらアすきなごたくウ上げやアがるな。たアことウぬかすと。てつぺんを張子の福介のやうにするぜへ。こゝにおいて奴ばう大ぜいくわゝなり、ひきさきやら、まさめはしくるやら、大さわぎとなる、かの田舍てあい、ねごろきてにげ出しにかゝる、べつして福介はきもをつぶし 福わしが名を呼であたまをはり子にするとは。づねへ沙汰だア。ばアさんはやくぬけなさろ。忠二マアしづかにしなせへ。かゐつて怪我をしやさア。トいふうち福介は花道へさび上つてにげ出ス、越後甲州も同じくかけ出す、ばゞヤレおれさアすてゝ行かアよ。まてろやれ。トこれもにげ出るゆへ、忠二もせんかたなくつゞいて、ようよう表へ出る、福やれ〳〵おつかねへ事だア。ハアしばるナアこりぐしもふした。なむさん手拭のうすてゝきたア。ばアさん。そんたもなんご落しやアしもふさねへか。ばゞ馬鹿アつけ。主らアそこがわけへだけ。いくじなしだアといふ事よ。大かたそんだアこんだんべいと思ふから。おらア逃ながら他の肩サア掛た手拭のうぶつたくッて來たア。これ見めさろ。是をにしにさつくれべい。すてたのよりやアよかんべいがな。忠二イヤとんだふてへばアさんだ。江戸もなアはだしだア。越後イヤモわしらアあまりおどろいたせいか。はらがへこ〳〵に

○あは雪　寶暦度兩國日野屋など名高く、其後泡雪豆腐處々に出來る。
○ふきや町のくぼや　當時に名高き店なるべし。
○しけこみ　中本に多き言葉なり、膝栗毛に「今宵はかねて聞き及びし阿部川へしけこまむ」などあり。

なつた事よ。〔甲盈〕それサなア。わしらもよ。〔忠二〕そんなら。マアあは雪へでもよりやせう。〔はゞ〕また諠譁のうあるかぶきかアよ。〔忠二〕何サ豆腐で。茶飯を喰ふのサ。〔はゞ〕くふ事ならよりますべい。ト忠二のみな／＼あんないにて、ふきや町のくぼやへしけこみしたくをする、〔はゞ〕うらがア國かたのとうふとちがつて。あんだかかんだかしまりのうわりいとうふだアヨ。〔忠二〕これが名物のあは雪サ。〔はゞ〕名物だアの。あんだアのといつても。あんでもうらが國の方がよくござらア。芝居だアッてもさうだア。イヤ瀧のやだアの。イヤ濱村やだアのと。旅籠屋の寄合のうきくがいな役者斗あつて。ねつからうらにやアわかりもふさねへ。あれから見ちやア國方の大谷龍左衛門どの。山下金吾どのなどの在所へ來たときやアづねへ事よ。〔嫗〕いつのことだアもし。〔はゞ〕まだにしらア生れねへさきよ。うらがアむすめざかりのときサ。〔甲州〕おこれはふるひはなしだが。ちと足休にはなしてきかせさつしやいナア。〔越後〕なるほどよふござらうはひ。〔嫗〕あんだか。ばアさんとんだアことをいふのだんべい。〔はゞ〕エヽあにようにしがしつて。だまつていめさろ。「中でも山下金吾どのといつちやア。若衆形で。丹前師でナア。そのいつくしさ。めんなごさうらも。その時分ナア十八のさかりだアから。がらい金吾どのゝ若衆ぶりにかつほれたアとおもはつしやい。何が名主どんの息子とわけもあつたが。アニハア金吾どのゝ顔を見ちやア。外の人のつらサア見たくでもござらねへから。毎日／＼紅白粉ノウくつゝけて。しばるサ斗這入こんで。おりがアよくば金吾どのに心のたけのうぶちあけべい。あの人より外にやア御亭ナアもつめへと。心でおつ極ていたことだアから。何が毎日にち。いつたア所が。あるときナア金吾どのが。敦盛とか。ふつかけとか。あんでも蕎麥のうよふな役のわかしゆでくになつたアが。あぢよのわけだかしれもふさねへが。ちくせふにぶちのつて出來て。大勢と切合申

○がらゝ　ツイの意。

たが。金吾どのはづねゑでくでナア。皆迯ていつたアとおもはつしやい。おらもうれしくいきんで見るひやうしに。おもはずがらゝモノ屁のうひとつこいたア事よ。それを金吾どのにきかれべいかと氣をやんだアが。アニ金吾どのナアいそがしいから氣もつかねへさうで。大勢を追かけてゆきめさるから。まづおちついたアとおもつたら。おちつかれねへことが出たハア。聞てくんさい。あんでも馬貝とか。熊貝とか。貝類は貝類だアが。圖なく強さうなおつかないでくナア。これもちくせうにぶち乘てお出やり申てな。扇子ナアぶちひろげてやれまてろヤアイ。敵に後を見せるか。慮外だアとか。比興だアとか呼立て。金吾どのをまねくと。金吾どのも。金吾どのよ。聞ぬふりでぬければヱ、ニ。あんだア何後のう見せべいぞと。ごせなアやいて。やがてちくせうのかしらアぶちけへして。刄物をぶちふつてたゝき合たアが。それを見るうち。おらアハア金吾どのなアまけにやアゐゝ。若衆でくな勝ますやうにと塩竈六所の明神さまナア一心におがんで居るうち。ふたりやアがらいはものをほかしだいて。サア組べいとかあんとかいふと。何があるべいことか。あるまい事か。畜生の上で角力どいなア。おつぱじめたアとおもわつしやい。それから二人りが。海ばたのかいな所へころびおちて。うらアハア〳〵とおもふうち。馬貝でくに若衆でくが打なげられて。ひしげつけられたアから。うらアどふすべいと泪をためて見てると。馬貝どのがアつく〴〵若衆でくの頬なア見て。其方を見るに。うらが息もおんなしよふだア。そんたふとりおつころさねへとつても。勝べい軍をまけべいでもあるめへから。人の見ぬうちにはやく迯てゆきなさろと。ちりのウぶつぱてへてやるべいとしたアが。金吾殿も氣性わらしよ。何先へいつていく〳〵でくや折助でくの手にかゝるべいより。爰でおつころつてくれめさろと。じくね出來て。ぶつつ

はつていごかねへハア。これから屋に逃ろの。やんだアのといふ内に。何がうしろの山からハア。出來たア程に赤ひでくに。白ひでくに。青ひでくに。黒ひでくに。とびいろなアでくまであらわれてなア。ヤアレ馬貝の心が二ツになつたアぞ。ひた心だアとやらだアから。一所にぶつ殺せと。たしか平山とかいふでくが。大せうで呼たてたアから。サア濟ましねへで。いろ／＼馬貝どんも氣をもむし。わしも斬念していたアが。あにがうしろからアどなり申ス。若衆でくなア死ぬべいといふ。無據馬貝どのが刀をふりあげたアから。うらア目なアかくしているうち。がらゝ首のうぶちおとひてしまつたアから。それを見るとわしやア。そこへぶち倒れたアが。ちくと氣がつき申て。扨も／＼てもさても。世界に神さまも佛さまもないことだア。御亭と思ふ金吾どのにわかれ申て。あこハアたのしみもふあるべいぞ。うらアもせど　阿武隈川サ身投をすべいと。覺悟のうして。せめてはいまふとたび死顏なりと見て死ぬべいと。そろり／＼樂屋の方へいつて覗て見申たら。死んだアと思つた金吾どのなア大はだぬぎで團のう遣つてけそ／＼として居られたアから。うらアあいそもこそもつきはてゝなア。扨／＼役者といふもなアおくべいするもんだア。あれじやアうらがかつぽれてもむだことにされべいと。そのとき金吾どのも思ひきつて。今の親父どのゝわしなめんなごがつてつけまはひて。わかいときから正直なア心になづき申てから。外心もなく五十年近くそいとげ申たアから。今もおやぢどのがめんごくつて。かふお江戸サア出來て居ても。ふとり寐てさびしかんべいもしや近所のばさまアでも。ちよろまかしはしめへかと。折／＼道中でも夢に見ちやアうなされ申事よ。ア、かたりとがながくて口が酢くなり申たアよ。皆々イヤハヤこれはもふ／＼おもしろい噺しを聞ましたハ、、、、、。甲二時にこれから。どちらへいかすなア。

○めごい　可愛。

○親父橋　江戸町獨案内云、てりふり町より、よし町へわたる。

○照降町　江戸町獨案内云、里俗てりふり町といふは、小あみ町と小舟丁の間。

○赤緒に黒緒に　赤鬼黒鬼の洒落。

〔越後〕芝の愛宕さまとやらへゆかふことよ。〔忠二〕サアそんなら。めへりやせう。〔甲〕上かたか。下方か。〔忠二〕なんのこつたかね、からしれねへ。左りの方へ曲んなせいし。〔越〕直そこか。〔忠二〕何是から小一里ごぜへす。サアはアさん。福さんあいびなせへ。皆々ヤツトコサ。〔くぼや〕おかへんなさいますか。よふお出なさりました。

愛宕山眺望之条

さてみな／＼はふきや町よりあたごへと心ざし、ほどなく親父ばしにさしかゝる、〔ほゞ〕こりやアあんといふはしだアもし。〔忠二〕こゝは親父橋といゝやす。ト　いふとほゞはわつとなきいだす、皆々びつくりし〔福介〕ばアさん。あぢようさしつた。〔ほゞ〕ヤレぐちなアことだが。おやぢばしと聞たアから。がちゝ國の親父どのふおもひ出て。ゆかしくない申たア。ア、皆さまのまへもこつ恥かしうござるチヤア。みな／＼もおかしく、これもごもつともだと、うちわらひ、ふしぎにせば、〔ほゞ〕こゝは両方が下駄とぢようりばかりだア。あんといふ所だアぞ。〔忠二〕照降町サ。〔ほゞ〕ハテおつなア所だアな。地ごく繪のう見るよふだ。〔越後〕なしだとへ。ほゞハテ赤緒に黒緒に。いろ／＼あるからさア、みな／＼わらへば〔忠〕またおばアさんが。ふるひことをしやれだしたよ。〔ほゞ〕ハテサアとしよりだアから。ふるひことべいいふてへばさ。ほどなく日本ばしへさしかゝる、〔甲〕ヤあの木鉢の上の蛸を見さつしやひ。大ものだなア。〔越後〕わしらが國の蛸をお目にかけたい。あんなものでないとこと。ぶつたてると八尺ばかりの蛸は。いくらもあることとんし。トまた國のじまんをする、〔福〕ヤアづねへれんてなアあるぞ。〔忠〕ありやアあかるだアな。〔ほゞ〕こつちのしびのう見めさろ。づねへぞうよ。〔忠〕江戸ではよ

○をつとせいのねりやく　後々まで香具師が賣りて居れり。
○ちくと　ちつと。少しの意。
○かはかしちやア　からびさせる。
○瀬戸物早つぎ　粉末なり、紙包にして賣る。

ぐろといゝやす。〔はゞ〕此橋はおやぢばしのちかくだアから。ばゞあ橋トいふだんべい。〔忠〕これが日本橋サ。〔はゞ〕なるほどうはさにきいたアほどあつてにぎやかだアが。うらアまた丸太で二本ぶちかけた橋だアとおもつていましたアが。こりやハア板橋だア。そして橋杭でも二本かアな。〔忠〕何サにつぽんばしとほんとうはいゝやす。はゞきゝちがへて〔はゞ〕すつぽん橋といふもつともだア。肴べいある所だアから。これよりこふり町をゆき、中ばしへんにて、大道うりが口上をいゝたて※をつこせいのねりやくをたちどまる人に、一トさじづゝふるまう、〔はゞ〕松前のおつとせいだら。うらが國方だアから。ちく床しくおもひまさア。ふく介もらつてなめて見めさろ。〔福〕モノ此へちくとくんさい。※トゆびのさきへつけて、なめて見る、〔はゞ〕あまひかアよ。〔福〕エ、塩梅だアもし。これじやア何にも利ますべい。〔はゞ〕こゝへもくんさい。トおなじくなめてみる、〔はゞ〕こりやアハア無闇甘ひはまつとくんさい。〔忠〕これサおめえ買もしねへで。そんなにかは※かしちやア氣のどくだ。一貝買なせへ。〔はゞ〕なんぼだんし。〔商人〕此貝から此曲物までが。十六文から三十二文五十百と上げます。〔はゞ〕十六文でも錢ウ出てはやんだア。又先へ行たらあんべいから。貰てなめますべい。サア皆おざらつしやひ。〔忠〕ハテサテしまつなばゞさまじやのし。〔甲〕あぶなけはおざらぬなア大より段々京ばし銀座尾はり町と通りをゆけば、やくしゆ屋のかんばんをみて、〔はゞ〕ヤアハア大な糠袋だア。〔忠〕あれかへありやアきぐすりやのかんばんさ。〔はゞ〕わしはわるく見申た。お關取のぬかぶくろだんべいとおもつた事よ。〔皆々〕ハ、、、、、、こゝに瀬戸物早つぎの粉を大道にて、口上をいゝたてゝうるを見て〔はゞ〕チツトこゝへちくとくんさひ〔商人〕ハイこれで十二文。ト、人のまゝさし出す〔はゞ〕其つ、包まないのうまアちくとくんさい。商人匕にすくひいだせば手のひらへこれをうけ、口へぐつと入れてみれば、はじめのおつとせいとちがひ石うるしの入りたる粉なれば、しぶく口をしめこたへられぬあぢはひゆへ、〔はゞ〕ぺツペエ、こりやアとんだア藥だア。ヤレ舌がこはばり申て。あぢよにもかぢよにも。しぶくてこたへもふされねへ。水でもくんさい馬鹿げたくすりのう。其方賣めすナアエ、ペツペ。くすりやも皆々もおかしく大わらひをしながら、〔忠〕あん

○石うるし　セシメ漆。

○買はずに　買はうの方言。「錢をやらずに」も同じ。この行違を滑稽の趣向とす。

○すべどん　越後新發田の近邊の人は「コラすべ」と呼び掛けるなり。「すべ」とは貴樣又は汝の意なり、それを轉じて「すべ」といふ者を「すべ殿」と調謔するなり。

まりお前がいぢがきたねへから。十方もねへ。そりやア瀬戸物はやつぎの粉で。なめるものじやアごぜへせん。石うるしが這入ているものを。これをなめてたまるものか。人を馬鹿にした。[商人]こゝにぬるい茶がございます。これで口をおゆすぎなせへまし。とんだことだ。[甲]老婆があまりげびさつしやるから。藥やどんにまで世話をかけてきのどくナアもし。其代買ずに了簡さつしやれナア。[商人]モシなぐさみものにせずと。買ておくんなせへ。[甲]それだからかわずにりやうけんめさろといふことよ。[商人]何サわたしどもは。よはい商買のあきんどでごぜへすから。了簡のなんのと。そんなこつちやアごぜへせん。不買はかはねへでよふごぜへす。[甲]ハテサテかわずといふに。錢もやらずに。聞わけのわるい人だア。[商人]かはずに。錢をやらずになら。元々だア。こつちもうらずだ。ばか〳〵しい。商のじやまになりやす。なんのこつた人を茶にした。[甲]イヤサわるひがつてんの男だ。コレサかわずに錢をやらずに。ト（いゝながら錢をきんちやくからだしかける、）[商人]錢を見せたばかりでかはずか。人をくそにした。今時の田舍者アわるくしやれらア。（このまちがひを越後はみかね）[越]ヤわしも合点がゆかなんだがよめた〳〵。これ〳〵すべどん此御方は錢を拂ふて。買ふて行ふと云なさるのじや。お國の詞でどふせず。斯ふせずといふとよ。そこでかはずにといふは買ふこと。錢をやらずにといふも。はらをふと云しやることじや。のんし。[甲]それサもし。[忠二]ハ、アそれでおいらもわかつた。おめへもわかつたらう。[商]さやうかへ。これは大間違。ごめんなさいましハ、、、。[福]まづばアさんが手を出たからおこり申ことよ。[はゞ]己等もはじめのくすりの樣に甘かんべいとおもつて。づないめに逢申た。舌がしぶりもふさア。（こゝにて甲殆も、よんどころなくやきつぎの粉をさゝのへ、それよりほどなくあたごへきたり、石坂をのぼる、）[甲]けはしい坂だナア。ばアさんにやア太儀だろう。[はゞ]あにこれべい。こはくおもひますべい。うらが

○腹も北山時雨　空腹の意。

船でごぜへます。〔甲〕なるほど。いつそなアちかく見へますよう。〔越〕あれ〳〵猟をするのが。そんまそこにわかるとこと〔船〕釣をする船があるが。ばアさん。こんたの目にも見へ申か。〔ばゞ〕たゞ見るよりやアよくわかり申ス　あれ〳〵づねへ魚なアとれ申た。それ船からとびできらア。ヤレにがし申な。トうかれ一手おほくとおもひ、ゑちごの人のあたまをしたゝかむしりつく、ゑちごはびつくりして、〔越〕コリヤどするのじやへ。ばアさん。〔ばゞ〕ヤハアこんたのあたまツアよ。うらア魚のとつてやるべいとおもつたアが。かう見ちやア。今のふねもどれだか見へもふさねへ。あんでも手がとゞくはづだアが。まちがつたなアゆるしなさろ。だアけれどもふしぎなアりくつだ。あんでも此目がねの中に魚ないべい。筒のうぶつくでへて見さつしやひもし。〔悪〕とんだ事をいゝなさらア。ちかく見えるが目がねのからくりだアな。元船あたりまちやア爰からア三里半もあるものを。ばか〳〵しいハヽヽヽ。トわらへは、ばゞ大きにはらをたち、〔ばゞ〕あにばかだアとはあんのこんだ。うらアいなかもんだアから。ばかアしれたアこんだから。そんたしうをたのみ申て案内ゥふしてもらひますは。おかしくてわらはゞ。なんぼでもわらひめさろ。うらもそんたがわらふのがおかしうござらア。ごせつはらやけた。それほどおかしかアわらいつくらなアしべい。もつとわらはつしやい。ふとをばかだアのあほうだアのと。ほんにづねへさただア。あしたからそんたア案内にやア　たのみますめへわさ。サア福介もふいくべいぞ〳〵。〔亜〕これさおばアさん。マア〳〵きういはすときけんをなをしなさろ　〔亜〕ありやアなア。よたものだ。おかんにんしなされなア。〔ばゞ〕やんでおざる。うらアもふいきますべい。〔越〕これさそう首ごはをいわぬものだとこと。くびごはとはじやうのこはいことなり、〔福〕ばアさん了簡しなさろな。〔忠〕わつちがそそう申やした。御りやうけんなせへやし。〔ばゞ〕さういわつしやりやア　うらもごせのふやけねへことよ。〔越〕どふやら腹

も北山時雨。　甲それかあらぬか春雨の。　忠アレ雨雲をちよふしやした。マアけふはおけへんなせいし。　ばメサアゆきますべい。へねぐらもとむる群烏。うちつれてこそ立かへる。

是より上野山下淺草兩國看取の条。餘り丁數延て繁多なれば。後編に書顯し。備一覽申候

○借錢の家も云々「積善の家には餘慶あり」のもぢり。

○三編目に廻し云々「三遍廻つて煙草にせう」を利かせたるもの。

有喜世物眞似 舊觀帖二編

有喜世物眞似 舊觀帖自叙

葉邑堂主人の需に應じて。予が著述せる舊觀帖とうもの。倖に行れ侍るとて。嗣編を乞ふことせちなり。これ過の高名なめりと。輕卒の安請合に諾ば。且日先に出せる目次には少しく違ふといへども。東都の街神社佛閣。名だゝる所は殘りなく。看取の趣向を追加せよとあるに。それも承知。是も承知と呑込侍れど。實は予が借錢の家も余斗の業あつて繁多なれば。毫を採るに隙無枚。此におゐて上の卷は僕是を著し。下の卷は十返舍哥々の筆力をものして漸後遍二卷を綴る。しかあれどもいまだ半に止れば。なをはた此餘は三編目に廻し。煙艸盆ある折〳〵可咲味の工風を懲し。閲る人の一笑ともならば。玆則咲ふ門には福耳の。其卯の年の永き春日の新板と爲ばやと。先今年の遁口上。道にあらはす發端は。作の案も。まだ青く。草木もめくち吹出して。笑ひかゝれる四方の景。柳原から始り〳〵。

予旹文化みつのとし丙寅孟春

感和亭鬼武述

上之卷 自柳原始 至湯嶋止

世道筋乃滑稽とあらハす
但都て字乃よミとし虫細くとめ書ゆ
ふて違ひあれバ閲る人字抔と假名
附ふところを附べし尤初遍よ
國扨の往紀ちゝ後編ま注畧之

有喜世物眞似 舊觀帖次遍上之巻

感和亭鬼武著

抑有喜世物眞似の由來を尋奉るに。天竺にては佛在世。富婁那といへる口賢に始り。唐土にては周の御代。蘇秦張義が徒に發り。日の本にては小尺娘。未だ遠からぬ流言に。人眞似。小眞似。酒屋の猫めが手を燒たと口すさむ。道物眞似の濫觴也。其口上も御退屈。間話休題。此にまた甲州者と奥州と越後の人の四人連。例の忠治が案内にて。また立出る馬喰町。柳原へとさしてゆく。日脚もことに久かたの雨雲もなくゝ晴々と。光り長閑けき春の日や。心なく行道に。鼻のあたりへ散りかゝる。花より匂ふ團子のつけ燒。婆々は鼻をひこつかせ。奥ヤレハア大造おまい匂がし申サア。あんだんべいもし。奥何さまよい薫りじやのし。忠コリヤアむかふでだんごに醬油をつけて燒匂ひサ。おばアさん喰なさる氣か。奥なんぼだんし。忠一串四文サ。奥おきますべい。まんだ今朝。宿屋の內儀のおたちで。はらが能くおざるから。匂ひ斗嗅で打喰た心で居ますべい。（おたちといふは、[illegible]にて、飯をしいることをいふなり）甲州鰻のにほひをかいで。其代に錢ウ音をさせて勘定をすまいたといふ。咄のやうでおざるナア　ハヽヽヽ。越介アレ向ひを見なさろ。澤山に柳の林のうあるところだアな。忠これからが柳原サ。奥何ハア柳原じやアあらまい。柳堤だんべいもし。己等が國方で原といふナア。芝草のう生へた所をいひ申スナア。

○口賢　口まめのこと。「[illegible]」「浮世風呂」にも出づ。

○人眞似小眞似云々　「人眞似小眞似、酒屋の猫が田樂燒くさて手を燒いた」といふ。

○光り長閑けき春の日　「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん」（紀友則）を利かせたるもの。

○花より匂ふ團子　「花より團子」を利かせたり。

○おきますべい　止めよう。

○めど木　賣卜者の道具。

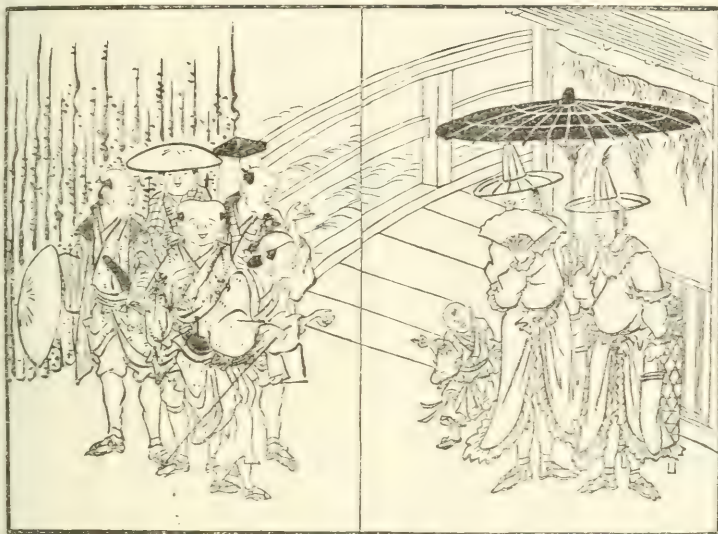
福介。　福それさもし。　申わし等が國でも。そう言ますヨウ。　忠何サこゝも元は草はらであつたども。今はお江戸も繁花につれて。原といふ名斗りのこつたものでもあろうかい。　劇さやうサ。　はゞヤアあんだか。しやきばつたものが出來ておざるぞ。　忠アリヤア皆古着を竹で突張ツて掛ておくのサ。　はゞこうらアハアわるく見申タアヨ。棚鉢へ落た人が日向ボッコのうして。干すのだアかと思ひました。アワハフハ〳〵〳〵。　こゝに出たるうらないしや、あごかさでかほをかくし、　古者當卦本卦の占ひ。ねがひのぞみ。うせもの人相手の筋まで。おのぞみしだひトいゝたてゝいるを見て、　福なんとばアさん。己等が手の筋のう見てもらふべいか。　はゞヲ、主より。おれがふた親の爺さまの安否のふみてもらふべい。　トそばにいたちより　コレモイ法印さまナアもし。己等ア遠國ものだアが。むづかしくも一寸見てくんさいもし。　モイといふことは、やはりもしといふことにて、人をよぶことばなりといふ、国詞さまなへあり、　占アイドレ〳〵見てしんぜませう。　トこゝうらないしやはやいふことにて、めど木をいたゞき、口のうちにて、むにや〳〵うらなひ、さん木をならべ、はゞをあみがさごしにうかゞひ、　占ハ、ア斯う見たところが。おまへは國は常陸か。アアア、、、、っ　トそばでひつはつていゝながら、ゞのかほをあみがさのうちからみてゐる、はゞはうかねてたんきりで、かぶりをふつて居る、　占たゞし出羽かアアアア、、、引。　トひつはつているうち、くゞかぶりをふるゆへ　占イヤ〳〵奥州かアアアア、、、引。　トいふにはゞはせきこみ　はゞヲ、その奥州でおざる　占ウ、奥しうだろうの。それ〳〵奥しうと見へる。　はゞ國まで占でしれ申スか。　占しれるだんさ。見通しのわしじやによつて。これ〳〵ごろうじろ。奥州と云卦が此通り出て居ますハ。　はゞハテふしぎだアなもし。そんだらわしがゆかしく思ふ人をみてくんさい。　うらなひしや、又本をくりかへし、さん木をならべ、　占ハ、アこれはおまへの孫かアノ、、、引　又わざと久しく引はつていふ、はゞはかぶりをふつてゐる、　嫁子かア、、、、引。　またはゞ、ふさくしんいかほに見ゆれば、　むすこどのかア、、、、引。　はゞまたふせうちのかはゆへ、はやくいゝなをし　御亭主かア、、、引っ　トいへは、はゞうかれて、がてん〳〵するを見て、　占ハ、アこれはおまへの御ていしゆで。としのよつた男

○白髮三千丈　李白の詩句。
○けんつう　髮少きこと。
○はつをもすさまじい　鏡山の「はつ」を利かせたるもの。
○いじやつて　ゐざつてか。

のぢいさまだの。〔はゞ〕ヲ、それ〳〵よくあたりましたア。そのぢさまの安否のう見てくんさい。きめうだアもし。ぢさまの男といふことまでしれますかアもし。（しめたと思ひ）〔占〕しれるとも〳〵。これ〳〵此本に白髮三千丈とあるところで。けん〳〵の乾の卦じやから。そのぢいさまは髮に白ががあつて。そしてかみがすくなくてけんつうだろう。〔はゞ〕何托鉢勸進坊。てん〳〵のてんつんといふ卦がはへたとへ。あんにしてもめうでおざらアモイ。そしてそのぢさまアたつしやかアもし。〔占〕たゝしやとも〳〵。此ごろは達者過て。野邊廻りに。ばアさまの色が出來たとみへるはひ。〔はゞ〕ヒヤアひようちくねへことが出たアナア。そんだアことも見えますか。〔占〕ヲ、サこれ〳〵これは。こん〳〵の坤の卦で。女を化すといふ卦だから。八卦のおもてに違はござらぬ。〔はゞ〕ヤレハア情ない。そりやア斯してお江戸に逗留のうしちやアいられましねへわい。マアはやく書狀をぶんだいて。邪魔のふしてやりますべい。ちふ〳〵聞きやアきくほどごぜがやけ申スから。皆さまもたいくゝだんべいハアいきますべい。〔醫〕氣の毒なことが出來たとのし。〔甲〕ふしぎにあたるものだアナア。〔忠二〕サアおばアさん。迷ひの種だ歩行なせへ。ト（みな〳〵はきにかゝる）〔占〕ア、モシ〳〵おばアさん。お初尾をおたのみ申やす。〔はゞ〕あんだはつほ。己等が國にやア鰹はおざらねへ。〔占〕じやうだんをいゝなさらずと。お捻のお初尾の事さ。〔はゞ〕はつをもすさまじい。おのへどのや岩ふじどのがきいてあきれべい。コレモイ占屋どん。そんたアふてらつこい人だアぞよ。さつきから其方の占ッたナア。見んなおれが敎たのだア。何が笠のうちから己等が顏アを見い〳〵。虚斗ぶち拔て。其うへにあんだ。ぢさまが色事が出たアとあきれ申サア。コレモイうらがぢさまアハア三年越腰がぶちぬけて。疊の上でも。いじやつてありき申サア。いろごとに苦勞があるほどなら。ぢさまア

内に殘て。何うらがお江戸サ見物に出來べいぞ。色事にぬけめのあるうらアだアとおもひめすか。いけあつかましい稽古させてやつただけ。錢を此方へぶつたくつてもごぜがやけるのだアと云捨て行。うらないいしやは一句もです、さんだはゞアに出あつたさ、口のうちでこゞとをいつてあきれてゐる 〔皆々〕イヤこりやア大わらいだ。〔福介〕うらもいな事をいふ法印だアとおもひましたアヨ。こしのぬけたぢさまを野邊まわりようせるといふからハア。こいつアちくをぶちぬくだアとおもひましたアから。モノばさまのだまされべいとおもつたアが。何ハアそんたの智恵にやアたまげたアもし。〔はゞ〕ちくとさうでもおざるまい。あにお江戸の衆にだつて。わりのふくつてなるべいチヤ。〔忠二〕是から筋違のほうへ出て。神田の明神さまへいきやせう。〔越〕筋違に行ては道が損ではないかへ。やはり直な道を行がよいとことよ。〔忠〕何サすじ違とは所の名サ。これを眞直にいくとすじけへだが。同じ道も退屈でござへせう。あたらし橋から佐久間町通りをいきやせう。〔甲〕どふでも能ひように案内せるがましさ。是より柳はらをよこぎれに、あたらしばしをわたれば、向ふより今のはやりの唐人すがたのくはしうり二人きたり、たちどまりて日がさを持、かた手にあふぎをひらき、「コリヤ〳〵〳〵來たわいな。これは九州長崎の丸山名ぶつ。チヤカラカ糖。お子さまがたのお目ざまし。おぢいさんやおばアさんにあげられて。第一壽命が長くなる。お若いおかたにあげられて。いろのとれるがきんみやうじや。おや〳〵どうせう。おやどうしやう。うまいあまひのチヤカラカ糖。パア〳〵。〔福介〕あんだ唐の唐人かもし。〔忠〕何につぽんの唐人さ。〔越〕イヤ〳〵唐人にしては髭がないとゝ。〔忠〕ありやア今流行の菓子うりさ。〔はゞ〕あんでも壽命のくすりたア耳よりだアぞ。おれも打食て。ぢさまにも持ていつてやりますべい。〔福〕若イ衆にやアいろがとれるといゝ申すから。ばアさん。うらにもかつてくんさい。〔はゞ〕ヲゝまてろ。これナアもし年よりにやア色は出ましねへか。〔商人〕わらいながらずいぶん。おとしよりにもきゝます

○すゝこんにやくの　何だの彼だのといふを、昔の蒟蒻のさいふ。

○おはんどんの御亭　お半長右衛門を利かせし洒落。

のさ。　忠ヤ色がとれるときひては。わしもふと袋がふてゆこれい。　はゞよしなさろ。　これにアられしも。ひよ〱くらあじなこゝろになると。ばんげへ一間に寐そべるから。わるふおざいアっ　忠ヤなんぼくわしの奇どくでも。主とその氣は出ぬことんし。ハ、、、、、、。（はゞはふきやうけなかほをしている）　甲わしらはくわしのかわりに。忠二どんと。そこらで一盃やらずナア。　忠ようござへしやう。（[illegible]）[illegible]が名物の嫁がうどんといふのでござへすよ。　（[illegible]）　はゞあんだほしうんどん。加田や長右衛門と。ハ、アおはんどんの御亭の内がもし。（ト[illegible]）（[illegible]）忠[illegible]ア、これ〱そりやア小べんする所じやアねへ。これだふてへばゞアじやアねへか。天水桶へ小べんをしこみやアがらア。　はゞ何ふてへばゞアたアあんのこんだ。小べん桶を出いておくから。たれたがどふしたアぞ。こやしだけもふけたんべいが。　店者イヤ十方もねへことをいふばゞアじやアねへか。てんすい

桶へ小べんをたれてすむとおもふか。田舎とはちがうわい。ぶちのめされるか。（トいひながら一人表へかけ出る、忠治はおさへて、）〔忠〕モシ／＼御めんなせへし。いなかの衆だから譯もしらずに。どんだ事をしやした。了簡しておくんなせへし。〔はど〕あにぶちのめすと。こりやアおもしれへ。サアふまれべいは。外へ出いてをくたごへ小便のふたれた者をふむなら。うらが國方じやア。年中野邊で小便ナアこかれねへハア。サアふまばふみめさろ。ひようちくでもねへ人だアな。（ふむといふはうちのめすといふくにことばなり）〔忠〕コレサばアさん。おめへいなかとはちがふわな。ありやア小べんおけじやアねへ。天水桶といふものだアな。〔はど〕泉水をけだアあんのこんだんし。〔忠〕用心水をいれておく桶サ。それだからおめへのそそうだア。あやまんなせいし。〔はど〕あにあやまるにやアおよびましねへ。そんだら小べんたごじやアおざらぬ。用心桶だアと書付のうしておくがよくおざらア。〔忠〕町内／＼にいくつもあつて。しれたことだものを何かきつけがいるものか。〔はど〕いなかものにやアしれもふさねへ。（此ろんはてしなければ、[illegible]中に入り、）〔遠〕ハテ首強なばアさんじや。もし／＼此ばさまのかはりにわしらがあやまります。こちへてくんなされ。十分おまへがたがもつともじやから。わしが仲人にはいるじや。彼にかまはず。わしにめんじてりやうけんしなされとこと。（くびごわさはだゞやうのこはひことなり）〔甲〕わしらがもらはずに。おかんにんしなされナア。（此こりあつかひにて、此けんくわやう／＼すみければ、行ながら編作、はどにむかい、）〔編〕コレモイばアさん。そんたもちくとひかへなさろ。あんでもかんでも。そんたがさしできめさるから。モノ皆さまにも世話をかけもふサア。〔遠〕それよおちとおばアさん。ふかへめにしなされ。今のやうなことがあると。連までこん窮するど事よ。〔はど〕忝なうおざる。忝ゝゐけんのうきゝましたア。これからアハア何にも口のう立ますめへ。（トいつて口の内で、何かこゞとをいゝながらゆく、口をきくことを口をたつといふ之、）〔画〕がいに風立て少しさぶくなつたが。忠治どん。まゝいそこら

○鯱

○高羽子屋　高砂屋なるべし。

で一ぱいやらずかい。〔國〕いかさまちとさぶうなつた。さきへいたら休もよかろう。ト いひながら越後は風にて砂のたつへ、はじめゑりにかけおきたるづきんをかぶらんと、えりに手をやりさがせども見へず、まはう、うたかたをさがすやうすみて、〔國〕なんぞおとしなせへやしたか。〔越〕ヤほこりがたつから頭巾をかぶろと思ふて。ゑりにかけておいた頭巾をさがすども。しれぬとこと。〔はなぢ〕モノちりめんの黒ひ頭巾だんべい。〔越〕それ〳〵。それをおまへしつてかいの。〔はなぢ〕ア、ハアとつくに道へおちましたア。〔越〕ヤそんならなぜに教へろとも。拾ふともしてくださらぬぞい。〔はなぢ〕あんでもさし出來て。口のう立なと御異見のふ聞ましたアから。また口をだいたらしかられべいと。それでだまつていたアもし。ハア誰ぞ拾ていつたんべい。〔越〕どふゆへばかふゆふと滅法なばさまじや。エ、百疋の頭巾を棒に振せたしかしまだ直其所のことじやから。たちもどつて見よう。ト跡へ立かへり見れどもなし、みな〳〵あきれて、わらつている、越ごは小ごといひながら、〔越〕エ、口おしいことをした。サア〳〵そこらで酒でも呑ませう。あまりはらがたつ。トいひながらほごたくすおかいへ出る〔國〕モシ爰がさつきいつた筋違サ。〔國〕御宮の家根ナアあんだんべいもし。〔國〕あれは鯱といふ魚サ。〔はなぢ〕ハ、ア鯱たアあの事だアな。これでおもひだいた事がおざらア。まえどうらが國へお江戸の衆がお來やつて。何が無上いきをぶつときに。うらアギヤツトいふと。しやちほこのう白眼で。水道の水で育た男だアといゝ申たが。そんだら其人は爰で生れて。常平生あの魚のうにらんでいたとみへ申が。太儀なことだアな。今思やアハアあんまり利根なさたでもない事だアもし。いきをぶつとは、りきむことをいふ事なり、〔國〕こいつも妙だ。いゝ〳〵ときに。サアこゝが高羽子やといふ料理茶屋だが一盃やんなさろか。〔西〕よくおざらふ。〔はなぢ〕こゝは家が大から高かんべい。もつとちつくとした内へよりめさろ。〔國〕そんならあのどぜう汁へでも寄りやせう。あそこにも小肴もありやしやう。〔越〕それもよからうかい。これよりみな〳〵にうりやへ立より、酒肴をいだせば、あおのしほやきを見て、

○干物の無塩　干物のナマ。

はゞ干物の無塩が出來たアもし　思なぜへこりやアうら生あじさ。　はゞあに生あぢだアとへ。こりやアうらが方じやア。塩ものにべいせる魚だアモシ。　申なるほどおかたの國などのあぢのなまはあらまい。わしらの國にも無塩はないよう。　越後は、こゝにて頭巾をおもひ出し、思ばく。頭巾をおとしたがごうはらじや。今にも頭巾が出ルと壹歩拾ふた氣で。貳朱は奢てもよいものを。　トいふをきいて　はゞその頭巾の出來れば。こゝの拂は其方しめさるかもしっ　越それはもふ。こゝばかりじやない。けふの入用は皆わしがおごるども。頭巾をなくないて。はらがたつことんし。　はゞちくなしに貳朱。出さつしやるかヨ。　越しれたことんし。はゞそんだら出いてやりますべい。正直はおれがさつき拾ておいたアもし。晩げへかへしてしんぜべいとおもつたが。こゝのはらいをさつしやるといふから。ソレ頭巾のうしんぜ申ス。けふ中の入用ナア。其方出しなさろ。　トづきんをわたす、越後はまじめに腹を立、　越ヤ此ばさまは乘談もことによるぞへ。人には大キに尋させて。そしてこゝのはらひをせるといふたら。頭巾を出

○わりあい　頭割。

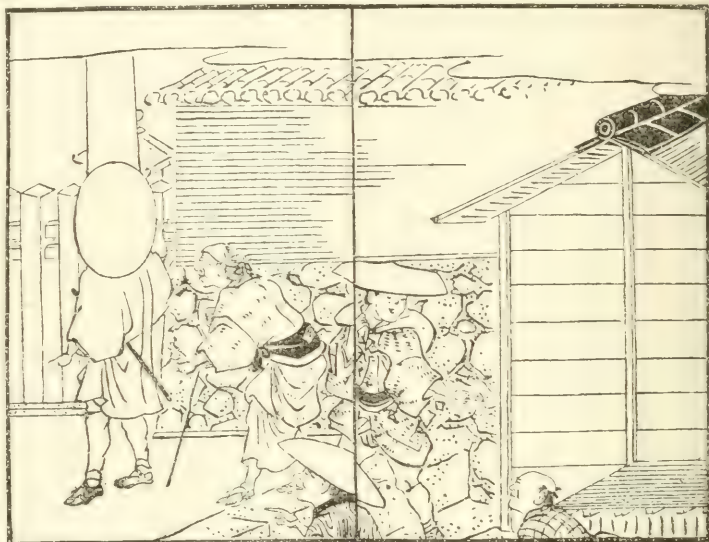
シテ。ヤすまぬ人じや。もふ〳〵一文も出しやせぬほどに。そなたけふ中の入用は出さつしやれ。ほんまに餘りの事で興がさめるわいな。〔西〕おこれはちつとおばアさん躰がわるいナア　〔忠〕さやうサこりやア。こゝのおごりはおばアさんがしなさるがいゝ。〔福〕それもさもし。〔ばゞ〕コレ忠治どんも福介もだまりめさろ。うらア乗戯に隠いておいたアが。あの人のこゝの拂をすべいと言しつたのう虚にして、うらに錢ウだせとは。あんのこんだ。うらやんだア。あにぜにようだすべいッチヤア。〔忠〕それでも。こりやアおめへが人だわりひやうだぜへ。〔ばゞ〕ハテさてそんたアどちらにしても食イたをしだア。だまつていめさろ。（皆ろんやかましく、やう〳〵四人わりあいのつもりに、甲兵あつかふ、）〔ばゞ〕ごぜのやけた。たゞ呑食のふすべいとおもつたら。わりあいのうだせとか。そんだら福介の分は三人の内へしめて割にしてくんさい。〔忠〕それもおめへむりだ。福さんはおめへの甥ッ子で。つれて來た人じやアねへかヱ。〔ばゞ〕またしてもいらぬ世話アやく男だアぞ。そんだら其方も割のう出しめされ。〔忠〕それでもおめへ。あんまりだからよ。マアこゝの勘定を聞て見やせう。モシ〳〵おかみさん。こゝはいくらでござへやすね。〔女房〕ハイ丁度三百でござへます。〔忠〕ウ、それなりや。四人にわつて一人前七十貳文ヅ、じや。サア〳〵ばアさん二人まへ百五じやうらん出しなされ。（はゞ大きにはらはたてども、詮くつに、あらそ、しかたなければはふせうなくそふで出しかねてゐる、酒や女はうちをのごくゆへ、きいさうのすこしはに、）〔ばゞ〕ヲ、出し由サア。あにこれ百五十べい。あんとおもふべい。トいふものゝはなはだおししどふぞわたくしどもも。あなたにあやかりたうござへます。そして御丈夫でねヱ。もふ御元氣なおばアさんでござへます。〔女房〕イヤもるかもし。それだらわしにあやかりたいとゆわつしやるやうに。〔ばゞ〕何わしにあやかりたいとゆわつしやるやうに。お家さまに能ものをしんぜますべい。〔女房〕それはありがたふおぜへます。どふぞあやかりますやふにいたゞきませう。トいへどふところより、はゞはしうきものゝきんをとり出し、〔ばゞ〕ドコ

リヤアわしが汗拭にすべいとおもつてとつておいたが。わしにあやかるよふに。そんたに進ぜるから。顔拭にしなさろよ。〔女ぼう〕ハイ〱コレハ大きにおありがたうおざいます。そしてけつこうなもめんで。おせふきによふござへます。しかしおもらひ申ても。お氣の毒でござへますねヱ。〔ばゞ〕おによくおざらア。それともそんた氣のどくだアとおもひめすか。〔女ぼう〕さやうサどふもおきのどくでござへますよ。〔ばゞ〕さうおもはつしやるなら。氣がすまねへでもわるくおざるから。斯してくんさい。今きかつしやるとふり。わしと此男の分で。こゝのわり合を百五十出すところだアが。其内を一人前七十二文まけてくんさい。それでそんたも氣がすみやア。わしもきがすみまサア。わしにあやかりたいとゆはつしやるから。きがかりでもわるかんべい。目出度まけてくんさい。女ぼうもいけあつかましいばゞアださはおもへども、いらざる口をきいたことゆへ、せんかたなく、〔女ぼう〕ハイずいぶんよろしうござへます。おまけ申ませう。トいへどいめへましいばゞとおもつていれば、ていしゆも此やうすをみて、かゝアをにらみつけて、ぶにんさうなしてゐる、みな〱きのどくゆへ、〔忠二〕サア〱おはらいがすんだらめへりやせう。トめい〱はらひをして、こゝをたちいづる、どつからあんなもめんのうだいて。七十貳文に賣つけたアこんだナア。〔ばゞ〕主アしるめへ。おいさまとうちがふんどしの余り切レだアだ。手拭にすべいと。お江戸サもつて出來たアだ。さいわいだアから。あのおかたにやつて。七十二文まけさせたアことよ。〔忠二〕ヱ、ふんどしの切レとは。とんだものをやつたもんだ。人をばかにしたて。そしておりやア跡で夫婦げんくわができやせう。きのどくらしいねへ。〔国〕ヤモあまりおそろしうておかしうて。わらひも出ぬわいの。〔国〕さればサ。トわらひ〱ゆくうち、ほどなくかん田明神へいたり、うら門より山門をくゞり、両ほうにあるほうのふの神馬のさいくものを見て、〔ばゞ〕ヤアいつくしい馬だア。白と黒だアな。おつゝら馬かアもし。〔忠二〕これはちかごろ御しゆふくがあつて。りつぱになりやした。ほうのうの神馬サ。〔ばゞ〕此ちくせうはじんめといふも

○御たくう　御託宣の略。

のかアよ。やつぱりうらが國の馬とふと〳〵だアもしっ（みな〳〵わらへば、また偏屈もそこらを見まはし、）甲ハアこゝの欄間にやア。鶴龜のうついてい申スが。あれも細工ものだアなし　はゞこつちらに出張ッたア唐獅子だアな。忠治どんのつらにちつくと似たアぞよ。甲なんだいろ〳〵の御たくうあげろばアさんだア。おもしろくもねへ。サア〳〵マア明神さまへ參なせへ。（トいはれてみな〳〵いはいをする）忠これが平親王將門さまをば明神さまと祭ッたのだとさ。はゞあに傾城のう淺香どのたア。どこのおしやらくだアなし　忠甲おめへにやあ何をいつても通じねへのう。サア又こつちのほうへまはつて見なせへ。越これはめづらしい石で造つた藏じやの。忠明じんさまの御輿をいれておく藏ださうサ。福うらがこんどとふつてきた道の宇都宮ちうとこちア。みな石の土藏斗あつたツけへ。はゞハ、ソレサなアこちらア見めさろ。無間大こくさまと惠比壽さまがおざるぞよ。甲ほんにおこれは大なものだナア。（こゝに楊弓場のあるを見て、はゞぜにをきんちやくより一文出しなげこむ、これはすべていなかごうしやにまゐるところのとし、佛神さまがたへさいせんの心持なり、いまだ作者もそのゐをしらず、）忠なぜこゝへ錢をなげなさるへ。こりやアよう弓ばで。弓を射て的へあてるのだよ。佛さまじやアござへせんは。はゞハアうはさに聞た楊貴妃だア。あの娘の事かもし。忠何サ楊弓といふのサ。はゞラウ楊雄とやらがもし。其人ア弓の上手だアと。いろはえんぎの山中左衞門さまにきゝましたアよ。忠やつぱりわからねへやつサ。甲こゝもよい見はらしだナア。福昨日のあたごさまのやうだア。越ちとあの茶やで所々見はらしながら休もかいの。はゞ何むだな。いま酒屋でやすんだからよしなさろ。たゞ立てゝ見はるべいもし。忠アレぐつとむかふが。深川本所の方。五百羅漢やあふぎ堂の家根が見へやす。二三日中にまたあつちへもつれもふしやせう。右の方が今來た柳はら。こつちらが上野のほう。ありやア今に行所サ。福アノあかく美しいはあんだんべい。忠ありやア櫻や桃のさいているの

○見わたせば云々「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春のにしきなりける」(古今集、素性)をもぢりたるもの。

○臺八車

さ。〔はゞ〕なるほど能けしきだア。哥ア一首よむべいか。〔越〕これはきゝごとじや。あんじがあるかの。〔はゞ〕まづこう見はつた所が。「見わたせば。ト〔甲〕フウ見はたせば。〔はゞ〕見わたせばト。〔越〕見はたせば。〔はゞ〕こつちがやなぎ原。あつちがさくらト。よしく斯だア。〔越〕どふじやへ。〔はゞ〕見わたせば柳にさくらぶちまぜて。〔甲〕ハ、アおかたの顔まで。式部に似てきたよふでおざるナア。それから。〔はゞ〕見わたせば※柳に櫻ぶちまぜて。面白黒の一疋なりけりトでもぶん出すべい。〔忠〕ぶちに白に黒がゐのころやなぎ。犬ざくらといふもんだね。〔皆〻〕ハ、、、、きつい。(これより女坂を下りて、ゆしま天神のかたへおもむく、向ふより牛車のくるをみて、)〔はゞ〕ヤアべろがあんだか尻サくつつけて來たアぞ。ソレ福介角に引掛られべい。はやく逃めさろ。ト(いふに福介もびつくりして、さびのくひやうしに、ぬかるみへふんごむ、)〔福〕ヱ、べろのかげで足ウ泥だらけにしもふしたア。(べろさはうしのこと、でろさはごろの事之)何べろヱ。ありやア牛サ。〔ぼさ〕尻サ引ずるなアあんだんし。〔忠〕ありやア車サ。あれをしんなさらねへか。江戸で臺八車。上方で臺七車といふ牛車サ。〔ぼさ〕ハアうらが國方にあ

○芝居で時平どの云々　[illegible]「菅原傳授手習鑑」を指す。

○曾我の二の宮　兄弟を合祀するゆゑ、曾我兩社といへり。

○御手のうち　掌、握り與ふる意より施す義。また手練の意にも。

○となせどのゝ太刀下　淨るりの忠臣藏九段目「御無用と止めしは、修行者の手の内か、ふり上た手の內か、イヤお刀の手の內御無用」といふ文句あり、是[illegible]るとりのことなり。

○あつくなり　「陰嚢毛」に在り、怒る形容。

○からくり子供踊　宮芝居に[illegible]歌舞伎に當なれども、表向には云はず、子供手踊などゝ稱して興行する例なり、からくり子供踊といふ竹田からくりは連鎖興行

んなもなアおぞらねへ。だアかむかし芝居で時平どのトかアだ。のつたのう見たこともあつたアが。そいやアもつとわつはでおざつたアが。そんだら。あれが淀の川瀬の水車とやらかアもし。〔忠〕ナニとほうもねへ。ト（[illegible]）〔□〕此お宮は何さまだアな。〔□〕ハヽア關東惣社妻乙稲荷大明神とあるわい。〔□〕これは日本いなりさまの二の宮サ。〔□〕そんだら曾我兄弟の衆に所縁の宮だアな。〔忠〕そりや曾我の二のみやの事かへ。それだアおごうのさ。（こゝにてみな〳〵はいをなし立いづれば、はゞは目のやるきまゝに、[illegible]）〔□〕エヽいんでんの巾着だアとおもつたら。蟇だア。ごせのやけた。〔□〕ヤこれは御麁相〳〵。（こゝに黑絽のあかくなつて、[illegible]羽織を着て、[illegible]）（たかぶりたる浪人の體こゝ、あふぎに、こはゞをあふぎ、こしをかゞめて、）〔浪〕永〳〵の浪人に御合力。トいふに〔□〕此人アあんだ。長芋の料理人が牛房のふくいてへト。〔□〕イヤ御手のうちの御合力をお願ひ申ます。〔□〕となせどのゝ太刀下アみる様なことゥいふ人だア。手のうちなら御無用だア。〔浪人〕さやうおつしやらずと。少人の御いたはり。ごほうしやに預りたう存ます。〔□〕田の草とりに蛭の食付たがいにしつこい人だアぞ。精進だアの。なまぐさだアのと。ゆはつしやるが。うらがいふこと。ふ。よくきゝめさろ。マアうらが國で浪人せる者ア。ろくなアことじやアおざらぬぞ。（おう刕にては、欠落するをろう人といふ）〔浪〕イヤもふわたくしも。だん〳〵若氣のあやまりゆへこの仕合。〔□〕イヤなんぞといふと。手のうちだアの。わかげのあやまりだアのと。本藏どのや勘平どののいふ様に。忠臣藏でやりめさるが。コレモイ見りやアそんたちもまんだ若へ人だアが。此うへ身持をつゝしみなさろ。うらがやうな慈悲善根のせる心のもなア。金の一切づゝもしんぜ申スから。その金ウだん〳〵ためて。又世世界サ出來ルがいに心掛なさろ。（金一切レとはおう刕にて壹分を一切レといふ、また此はゞのいけんにて浪人は[illegible]くること心得ければ、なんでもきけ[illegible]ところがよいとおもひ、）〔浪〕ハイ〳〵ありがたいおことばにあづかります。かやうになりさがりましては誰も見織でくれますもの

ともいふべきものにて、機關人形の間に子供の踊を演じたり、その[illegible]に傚ひて趣向を[illegible]ませたるならん。

○佐々木長十郎　十方菴遊歷雜記市谷八幡の項に、當社内の芝居は、延寶年間御免ありて、坐元名代を孫[illegible]八尾八と號し、芝居となり、歌舞妓の狂言を絶へたる事なし、此因にいわく、芝神明の社内歌舞妓芝居は、寛文の末御免ありて、坐元の名代を江戸喜太郎と號し、又湯島天神社内の歌舞妓は、寛延年間御免、坐元名代を□□□□と號し、三ケ處おの／＼宮芝居にして常に狂言のある事なし、是を三座の宮芝居といへり、狂言の仕打藝道の[illegible]者、大芝居の俳優におさ／＼劣らぬ上手もありて、引道具廻り仕掛[illegible]出し[illegible]し等の一件、大芝居にかわらずといへど悲しいかな宮芝居なれは、櫓を上る事なりがたく、及び舞臺の破風作り、或は一幕／＼に狂言の名代役割の替名を讀上る事、成がたきは無念にや思ふらめとあり、宮芝居三坐の名代、本文に缺けたれど、爰に明記しあるを以て補ひ得たり。

もございませず。一家親類には見放され、よるべのない身の上を。あなたのやうなお情深ひおふくろさまがあればこそ。露命もつないでとふります。仰の通り只今下されまする金子を元手に仕りまして。このうへは身をつゝしみ。少々の渡世でもはじめまするでございませう。　はゞヤレそうゆはつしやりやア可愛くない申サア。そんだらうらも金ウやるべいとおもひますが。これ見なさろ。そんたアまんだ保太織の羽織でも着めさつて人柄だアが。うらア見さつしやる通りの形ウして居る奥道者だアから。持合もおざらず。そんたアもうらに借るほどのたくはへもあらまいが。異見をするも不思議の好身だアもし。此禮に今そんた持合がおざらば二百計かしなさろ。其代にうらがやうな慈悲善根のふあつて。金のあるばアさまでもとふらしやつたら。其人から貰ひなさろ　保太織とは絽に似たるもの、おうしう川俣へんより出すなり、らう人はゞ[illegible]　浪人くそでもくらやアがれ。かつてへばゞアめ。人をちやにしやあがつて。面白くもねへいもほりだアっ　トあくたいをつきたなら跡へさがつて、むしやうにあくたいをついている、はゞアもおさいひすごしてきみわるければ、口のうちにて　はゞなんぼ百性のおかたでも。くそがくわれべいか。馬鹿アつけ。　トいゝながら、あしはやにさふりぬける、　皆々ばアさんのおどけも。よいかげんにしなせへ。けんくわが出來ルぜへ。ハ、、、、、、。　ほどなくゆしま天神へきたる　忠まづ天神さまへ詣なせへ。　のたりへはいをなし、本堂のがくなどを見まはる、　はゞこゝだアな八百屋の娘が額ウあけたアとは。そのがくはどこにあんべい。　忠もふ今じやアしれやせん。　國たしか其角であつたか。「神こゝに北野ゝ梅を摘穂かなトいふ。ほうなふの句をかいた柱隠しがあるときいたども。これも見へぬもし。　忠みな仕廻つてござへせうよ。　甲そんならこゝは北野の天神さまのうつしかなア。　國そうだとこと。　補御神木の梅はどれだんべい。　忠裏のほうに梅もありやす。　トけいだいをぐるゝまはつて見る、甲しう芝ゐのだいをよんで見る、　甲なんだからくり子供踊。寛延三庚午歳霜月吉祥日佐々谷長十郎ト。　はゞこりや

○香具芝居　足薪翁百話に、香具若衆の事をいひて後に、「古老の曰寶永の頃まで、此商人まれくにありて、種々の物を賣來りしが、伽羅沈香の類を商ひしが初なるゆゑ、香具若衆といひけるとぞ」、是等の者の集りてするかぶきを香具芝居と[illegible]、[illegible]香具所[illegible]葉といふ額を香敷に掛、初の程は木戸にて錢付酒やうの物を賣、それを買たる者に見せたるが、後は札錢をとる事になりしとぞ、近年迄ある湯島天神社地の芝居に、御香具所と云額の掛て有りしが、その名を[illegible]る是なり。

○からくりの吹矢　からくり[illegible]

ア香具芝居かアもし。ハア歌舞妓アやんだが。人形だおふくと見べいか。（いなかしばゐはすべて香具といふ）忠なに此節やすんでいやす。これより向ふのからくりの吹矢をふきなせへ。〔圕〕そりやアよかんべい。ばゞこうもア息がつゞきもふさぬから見ていますべい。（賓は錢のいるこ[illegible]）見物している、皆々吹矢をふく、甲しうまごに吹あてれば、ぜんまいの仕かけにて大キなるかに出る、〔ばゞ〕ヤレ無圖蟹が出來たア。イヤこりやアハアなかく面白さいくだアもし。（すべて國詞にて清濁の違あり、蛭蜂蜻蛉蟹蛙のるい之、また忠次もふき矢をまごにあてれば、ぼうさま一人出ル、またゑちごがあてる、つりがねさじやが上り下る、ばゞもうかれて、）〔圕〕こりやアたまげた細工だア。〔ばゞ〕ヤアきめうだアく。どれうらも一箱吹て見べい。（ト[illegible]）〔圕〕うらにもふかせなさろ。〔ばゞ〕そんだら半分。主に吹せべい。（ト一箱をふたりでふく、福介は折くあたれども、ばゞはいきよはく一向あたらず、ごうはらまぎれに、かねてにくひこおもつたさうで、わきのほうもうつかりこたばこをのんでいた忠次の頬ぺたへ吹つける、されども先のこからぬ矢ゆへ、ちはいでねども、忠二きもをつぶし、）〔忠〕アイタ、、、、、コリヤアどふするく。ばアさん。とんだめにあはしたア。血が出るだらう見てくんな。〔甲〕イヤく血も出ず。疵もつかぬが。あぶないことゝ。目へでもあたるとおふごとであつたなア。〔ばゞ〕ほんな奇妙に中ツたことだアな。それだが態と射べいと思ヤアせず。

○かはさげ　銭入。革製の腰さげ。

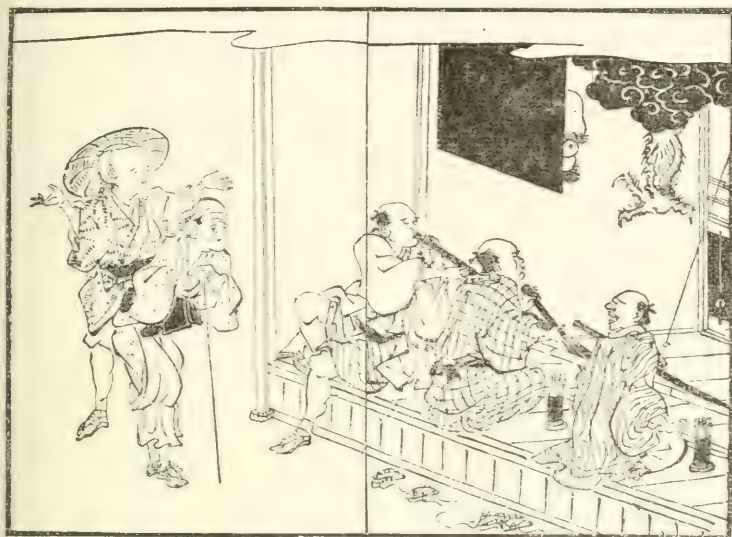
○名代のお若衆　湯嶋の陰間を指す。

○小姓の吉三云々　八百屋お七の情人。お七が湯嶋天神に額を上げしといふこと前に見えたり。

○野島の地蔵さま　武州埼玉郡野島村曹洞宗浄山寺にあり、子育の願掛するに穴ある杓を納む。

○五十の塔　五重塔、「五重」を「五十」に「山門」を「三文」へかけたり。

○御門跡の御堂　本願寺。「御門」を「五文」にかく。

反矢だアから了簡しなさろ。　忠おめへ。それを悪がつて。わざと吹アしねへか。いめへましい。　はゞ、あにおもしろくでもない。銭ウだいて。そんたの顔ア吹てあふべいッチヤ。ほんのそうだアもし。　忠もふ〳〵吹矢もよしなせへ。　トはら立まぎれに、うかれて直段をしつているだけ、こまへのこしのかはさけより銭をいだしはらつて出る、皆々もこゝろつかずはゞはこれを見れどもしらぬふりにて立出る折ふし子供の通るを見て、　はゞヤア昨日咄た山下金吾どのう見る様な。若衆の娘がとふり申ス。　忠あれはこゝの名代のお若衆サ。　はゞなる程小姓の吉三さまだんべい。こゝアお七どんの縁もおざるから。　忠さやうサよくあてなすつた　福このお宮ア何さまだんべい。　忠これは野島の地蔵さまといふのを移したのサ。此地蔵さまは片目だといふ事サ。それで野島の池の鮒まで。めつかちだといゝやすめうだね。　西ハテのし。　はゞ此なかに片目のふとがないから忍ゝが。地蔵さまの疱顔な所ア。甲劢のおかたの様だア。　おはたの事をあかはさい、甲劢はほうそうのあとありて、いもがほなれば、すこしはらはたてござれ、にかわいひなし、　甲おせわでおざる。ようおざい事ばつかりいふおかただナア。自分のことは言ずに。他のことをめつたに気をつけなさるよう。　おぞいはふていいはなはだにくひこと　忠アレ〳〵むかふの左りのほうが。浅草の五十の塔に山門。その手前が御門跡の御堂。　トおしゆれは　はゞ五十に三文に五文。安いもんだとゆはせよふとおもつてか。ハアそんだふるひこたア云ましねへ。　忠こつちらに見へるが。今行不忍の弁天さまだよ。　はゞそれも芋畑へ水が出来たとゆわせべいとおもつても。これも古そうだアからゆひましねへ〳〵。　忠やつぱりいゝてへのだヤッサ。又遠眼鏡があるがどふだね。　はゞもふやんだんし。遠目がねよりやア。だん〳〵毎日向へいつて正で見ますべいはサ。　こゝに男坂のわきに二丁町のやぐら下のはんづけかけてあるをみて　はゞコリヤアあんだんし　忠これはおめへ。きのふ見なすつた戯場のばん付サ。　まへこそはの水茶やのわきに月水早流しとかいてはつてあるを見て　はゞあんだ月水早流しト。こりやアどこの芝居のばん付だアもし。　忠二わらひながら、それも芝居のばん付サトいふ所へ、うて門のかたより田舎者三四人来るを見るより、はゞは飛上り、　とゞ　ヒヤアと

ない村の鍵吉兄アかよ。ヤレこちらたア四左衞門どのだア。ヤレハア何用で。お江戸サ出來めされたアぞ。[四]四左衞門ヒヤア兵内どんのばアさまかア。いつ出來めさつた。おいさまも同士かアよ。ヤア福介どんもよく出來たアな。己等どもは去年の冬。お伊勢さまへ年越へ詣に參宮のうし申て。二三日お江戸に逗留のうして。今日はハア國へ立ますから。見のこいたところを見物のうして。是からすぐに今夜草加泊りと行申サア。そんた衆はまんだとふりうかアよ。[福]ヤレなつかしうおざらア。うらも此ごろ伯父はのこいて。伯母を同士にお江戸サ出來て。馬喰町に逗留のうして。夕べにもしい申せば。旅宿へたづね申べいに。しらぬ事でのこり多くおざらアもし。ハア今日立めさるなら。書狀もたのまれましねへ。わしらアまんだちくと逗留のうせる氣だアから。兵内おさまにも村の衆にも。ばアさまはじめうら迄息才だアと。よつくたよりのふしてくんさい。[ばゞ]ヤレ四左衞門どんも。鍵吉兄アも。よつはらかんだア。マア茶やへでもぶち上ッて。ちくと咄してゆきめさ

ゐ[illegible]久しぶりさいふ事之 [illegible] わしらもマア一日もとふりうせる氣だアが。團崎の伯父がいそぎ申から、ハアすぐにこれで別れますべい。おさまに用事があらばたよりようしますべいもし。[illegible] ハアそつちらなア與吉せなアのおんぢいさまだら。團ざきの與五六どのだア。ヤレよく參宮のうさつしやりましたアよ。私ア淵黑の兵内のおかたでおざらアもし。與五六 なるほど見知りごしに知ッていまさア。よくお江戸サ出來なさつた。此つれの衆はみんな郡の衆でおざらア。[illegible] ヤレハア皆近くの人達だアな。なるべいことなら。うら一所に歸國のうしたくおざらア。これからすぐに同士に行べいか。[illegible] あに宿屋に荷物もありもふさア。それにまんだお江戸の用事もあらアもし。みんなさまにやアけふわかれても。また押付あい申サア。たゞおさまに傳言のうたのまつしやいもし。[illegible] そんだらぜひに及びましねへからわかれますべい。其代うらがぢゞいどんによつくたよりのうたのんます。間もなく歸り申スから。達者で居めさろといつてくんさい。四左衛門どんのおかたや。[illegible] 吉せなアのがゝ様にもよつく傳うしてくんさい。四左衛門 がつてんでおざる。はやく歸國のうしなさろ。やんがて國でゆるらつとあいますべい。わしらアハア國を出來て百日斗になり申スが。うらが村で替る事のおざつた沙汰もきゝめされぬかア。[illegible] あにうらがたちまへに。そんたの村の衆に菜名川の市であつて。うはさがおざつたアだ。そんた衆のおかたもおふくろもかわることたアおざらぬさただアもし。實はなし合、[illegible] よく〳〵皆みなもこゝにてわかれゆけば、はゞははなはだなごりおしく、くにをおもひだしたる風ぜいにて、 はゞ ハアそんだらもふみないきめすかア。ずいぶん達者でいきなさろ。くれ〴〵もおさまのことうたのんますよ。[illegible] そんだらほどなく逢ひますべい。達者ではやくけへんなさろ。ト こゝにおゐて泣わかるれは、[illegible]

後のかほへすこしさはしるはねかゝる、手でなでてかいで見れば、ふんにほいくさくここたへられず　甲ヤアあぶない。おばアさん。怪我はせぬかい。婆ヤアわしが顔へ何かはねた。トまへだれにてふく、はごぶらうしたきより、婆いやこりやマアどふしたらよからふぞ。婆ヒヤアこれは貞へ糞がはねたそうじや。エヽくさい。ヤレくさいぞ〳〵。こうけんしなさろ。うらもころびたく〳〵てたまりやアしましねへ。これも怪我だア。國方の衆があまり名殘をしかつたアからだアもし。婆ヤ國の人がなごりおしいとてわしがつらへくそをはねてよいものかい。ばか〳〵しい。ほど ハテけがだアからりやうけんしめされ。甲ほんにおこれは。けがでしやう事がおざらなア。福それさもし。りやうけんしなさろ。忠マアなんにしろ。きたねへことだア。そこのそば屋へでもへふつて。水でももらつてあらひなせへ。甲さうしなさるがまし。福さうでもしやうとと。ほど うらが鼈相だアしかたがおざらなア。まんだ腹もふゝが。そんだらそばやへよりますべいか。皆々サア〳〵さうしますべい。トウザイこれより下の卷作者がわりさやうに御覽下さりませう

右上編

感和亭鬼武著

東西板元栄邑堂。乍たから、この所へ罷出まして。一寸口上の申上升。舊観帖之義。だん〳〵御評判よろしく。私は勿論。さくしや畫工一同。いか斗り大慶至極。ありがたき仕合にぞんじ奉り升。扨又前編作者感和亭もとうし殊の外繁多にムり升ればっ。余計の仕ごとに。後編の儀は十返舎主人相たのみ。上の巻。下のまきと。作者を相わけ御らんにいれ奉り升。則これより下の巻。さくしやがわりさよふに御覽被下ませう。

榮邑堂自畫

○鐵鉢の米云々　托鉢僧の持つ鐵鉢。到る處施米を受くるを以て、中の米は固より一樣ならず。乘合船が各國の客を容るゝに擬せるなり。
○二八のぶつかけ　二八蕎麥のぶつかけ。二八は十六文にて蕎麥の代なり、二八を蕎麥粉八分、饂飩粉二分の割合なりとする說もあれど爰にては代價の方なるべし、ぶつかけはカケのこと。
○巖丈　堪乘と書き、馬の言葉なりといふ、爰では堅固の意。
○錦袋圓　下谷池の端仲町勸學屋大助發賣。

浮世物眞似 舊觀帖下之卷

十返舍一九著

※鐵鉢の米と乘合船は。國々の寄合にして。其いゝ出せるくさ〴〵も。おのづから興あり。春の日の麗なるにうかれどもの四人づれ。旅雀の口觜がろく。忠次といへる案內者をさきにたてゝ。湯嶋の坂をくだり。※二八のぶつかけに腹をふくらし。たどりゆくほどに。やがて下谷の仲町に出ると。木戸際のかごかき「ヘイかご。旦那參りやせうか。越後わしどものあし（足）やア※巖丈だアから。かごどもはハアいりましねへ。忠ナニおめへがたの事じやアねへ。おしのつぶゝ。かごにのん（乘）なさるふうか遠忠治どのなアそふいわつしやるな。わしどもなア國方で。わづかべいとなり村の寸伯どのへいぐ（行）のにハアかごどもにのりおつたこととんし。忠ソリヤア煩ひでもなさつた時の事だろう。遠インヤア。病だ時じやアござらぬ。雪ノウかくとつて。大（大）やねからぶちおちて。でこしけつのウ。ぶちぬいた時のことんし。忠それ見なせへ。イヤときにこゝが名物の※錦袋圓。おばあさん買なさらんか。かいたくても。はいるべいとこがござんないもし。福ハアほんに。こゝの內のふとたち（人達）やア籠の鳥だアよ。出來べいにも出來るくちがハア。見へ申さねへがあじだアもし（これは御ぞんじのとふり、きんたいゑんはかうし汁にて、入口のなき店ゆへ、かくいふなり）。忠そふさ。こゝのうちの人は。一生そとへは出やせぬのさ。福ソリヤハア。だんはうど（旦那殿）なア內方で生れべいが。奉公

○目黒の黒門　目黒不動瀧泉寺の總門は黒門なり。

せるふとたちやア。外からはいつたんべいから。そのはいるべい口ノウありやア。出來べいことの。ならないといふ事も。ないがなアもし。〔忠〕なにさ。よその内とちがつて。こゝの内へ奉公にくるにやア生れるとじきに。おぎやア〳〵といふやつを。格子の間から。ちよいとほうりこみやす。それから中で。だん〳〵と成人するものだから。もふ出ることがなりやせぬ。ハ、、、、イヤむだ斗いつて見世さきをふさげていることもねへ。サアみんな一包ヅヽ買なせへきめうなくすりだ　トこのうちみな〳〵錢を出し、かうしの間から藥を買ふうち、ものもらいこみへて　たいこをたゝきながら「ド、ントン〳〵。こゝに黒船町の。黒米やの九郎右衛門さんのお袋さんが。目黒の黒門まへで。まつくろ〳〵の黒犬めが。くつくるりところけて。ねてたを見つけて。これやくろちりめんの黒羽織が。おちてるとおもつてな。ひよつくりひよつとつかんだら。わんといつてくつつかれて。小便たごひつくりかへし。でんぐりかやし。かつくりかやし。そつくりかやして小便一升五合のんだ。そだ〳〵〳〵そだから目が出た。どぶから蛇が出た。尻からぶいが出た。でた〳〵〳〵〳〵ド、ンドン〳〵　トむしやうにしやべる、此ものゝもらひさしは廿四五にみゆれど、あたまけしぼうず、まへがみちよつぽり、あかいきれでむすびあるゆへ　〔甲〕おこれはハイ。おとなかとおもつたらなア。あたまは子供だア。アレお見さい。〔はゞ〕ハア此子はそとででかく。せいじんノウしめさつたふとだんべいから。それでハアこゝの内へははいれへねへで。そとからもらつていけばハアもし。〔忠〕ハ、、めへりやせう　トこれより仲町を打過、ひろかうじに出、三まいばしにかゝるころ、こつじきの女子ども大ぜいきたり、「ハイ旦那さま。壹文やつて下さいませ。〔越〕イヤわしはぜによヲもたぬはな。あとのふとにもらいめさろ。こつじき「ハイさやうならあなた壹文。〔甲〕おこれはめいわく。あとのおばゞのおかたがくれずに　トはゞをおしゆるゆへ、大ぜいはゞをとりまき、「おばあさん。壹文ヅヽ、あなたから出ますそふな　〔はゞ〕あにハア。うらふとつて出來ますべい「そふおつしやらずとおとしよりはおじひぶかい。あ

なたもふいつまでおいきなさるもんで。壹文や貳文。ないとおつしやるよふな御仁躰でもござりませぬ。

[はじ]コりやさて。そんなアにじよぶきめさるな。うらもハア。こんたア衆と。あんまりちがい申さぬ。

こじきばゞアだアものを。あにぜによヲうつくれべいか。「なるほどそふおつしやりやアわたしどもとあまりのいた中とも見へませぬから。猶のことどふぞいたゞかして。[はゞ]ヤレコリヤ。ごせのウやける。やかましいふとたちだア。「それでもおじびに。まゞアやアだく〱。[忠]ソレおばあさん水たまりが。[はゞ]ホイこりや　トとびのくひやうしに車どめの札につきあたりころぶと、おびの間から小ぜにのさしがきれて、はら〱と、こつじきどもはしりつきて、「ヤレおばあさんが下さるは。コリヤヤイちよまも來て。ひろへ〱。[はゞ]コリヤハアあんとしめさる。うらがぶちまけたぜによヲよしなさろ〱。「ハイ〱ありがたふございます　ト物もらひが大ぜいよつてたかつて、むせうにひろふ、はゞはやるまいとして、やつきとなり、かきあつめる、ふく助は行過しが、かくと見るより立もどり、

[福]コレばあさん。ゐいかげんにしてあよびなさろ　ト大ぜいの中をわけ入て、こじきはゞあの手をとり引立ると、此はゞあきもをつぶし　「ヤアコリヤ。わしでござる。[福]わしもあにもいりましない。サア

○のいた中　距離ある意。

○つく〱　傍へ寄るなの意。物貰などに對して云ふ。

○中堂　東叡山の根本中堂に擬して建造せらる、當山五世公辨親王瑠璃殿記あり、戊辰の兵燹に係りて今はなし、舊觀を知らんとせば手近き江戸名所圖會などよし。

○大師様の御宿坊附　兩大師の像、山内子院を廻る例にて、月月所在おなじからず。宿防は宿坊の誤。

○ほし見世　露店。

○賣物に花をかざる　諺。

○染井の鉢植　染井は植木屋の多き所。素人細工でない代物の

はやくきなさろ〳〵　ト むりに手をとり引ずつてゆくと、こちらではこつじきの子が、おうしうのはゞあをとりちがへてとりつきひつつき、「ばあさん。おまへのひろつたのを。おいらにくんなよ。〔はゞ〕エ、このわらしは。あによヲする　ト つきはなしこかけだし、ふく介をよびかけ、〔はゞ〕せなアの〳〵。どうしにいくべい。まちなさろ〳〵。　ふく介ふりかへり 〔福〕ヤレもふづくな〳〵。〔はゞ〕コリヤさてうらだアよ　ト いふにふく介心づき手を引ずつてつれゆく、はゞあを見れば、ものもらひのはゞア、〔福〕ヤレコリヤちがつたア。ものもらいのはゞ「ちがつたら壹文下さい。〔福〕やんだ〳〵。　ト あしばやにやう〳〵黒門のうちへはいると、こゝにゑちごもかう叔も待合してゐる、〔忠〕ソレ御らうじろ。むかふがさつき湯嶋から見た弁天さまだ。こちらが清水。このさきが山門。なんと大きなものでごぜへしやう。ト あんないして行うち、中堂ちかくなりて 〔はゞ〕ヤレハアけつ構なア橋がある。此川原なア。水のウ出來たらこはかんべい。〔忠〕とんだ事をいふ。こりやア川じやアござりやせん。サア〳〵こゝから草履をぬぎなせへ。　ト これより御本堂へまいり、御山のうち所々おがみまはるうち、いろ〳〵あれども略りくだ〳〵しければはりやくす、ほどなくもとの黒門にいづると、例のあめや、「おみやげにおめしなさいませ。飴は大白さとう入。こうばしくてあまい〳〵。　よみうり「ごこん年中の御調法。大師さまの御宿防附大小はしらごよみが四文〳〵。　りやうり茶や家ごとに「おはいり〳〵。お休なさいませ。これへ〳〵　ト呼たつる聲かしましく。兩側のほし見世。所せきまで。賣物に花をかざる染井の鉢植。こゝにひらく繁花の地とて。商ひの利生ある佛店のかばやき。往來の鼻をひこつかせ。仕込ほど消てなくなる淡雪のとうふ。あんかけうどん二八そば。團子のくしのはをひるたる。居合ぬきのはみがき梅香をちらし。見世物の看板には。唐渡りの猩々が大福もちのあばれぐひ。いざりの輕業。見るも後生見らるゝも後生半分。六部が云たて「ヤレ〳〵いぢらしいこんだ。親は丹波の國氷上郡獵師勘平。つまのおかるとちゝくたむくひ。其子が猪と生れまして。からだはけだもの。手足は人間。しかもアレ五寸だるみの股引をはいてるます。札錢がわづか八文。御らうじておやりなさるが罪ほろぼし。サア〳〵評判で〳〵。〔亘〕おこ

註

○佛店のかばやき　增田甚兵衞記に上野山下の賑を叙して、「天保に東山の閑ひ地となりては、此處の寺までも、葬地を引うつし、僅に往來のみ殘りて、佛店の鰻、濱田の料理茶屋、竹澤の獨樂のみ殘り」といへり、佛店の大和屋は天明の初より蒲燒を賣出し、江戸の蒲燒の元祖と稱せられ、濱田の料理と共に佛店の名物なり、本書にも濱田屋にて一分と六百文の饗宴ありしこと見えたり、佛店は江戸町獨案内にも、里俗、佛店といふは下谷町つゞき、山下の原の所とあり、蜀山人の山下八景にも佛店晩鐘あり。

○淡雪豆腐　兩國橋東詰日野屋東次郎しはじめたる事江戸物鹿子にあり。

○六部　六十六部の略、六十六國を廻りて法花經を各靈地に納むるよりの名目なり。

○五寸だるみ　眞佐木のかつらに云股引は五寸だるみ、又は德利がたなど云て、膝より下は廣く仕立、前に化粧に絹糸を組て附、是を毛虫といふ。

れは忠臣蔵のしゝなら狸の角兵衛じゝでがなあらアず。サア〳〵いかずに〳〵。ト又こゝにけいこ上るりの木戸ばん「おはいり〳〵。今が酒本呑太夫の出がたり〳〵。〔はゞ〕あんだか。がいにうなり申事よ。トいゝながら、よこのほうからよしずのうちをのぞけば出がたりの上るり、「ころはむつきのすへつかた。四方のきまぐれ打とけて。水ばなまざりしかの大盞。うちだやの中の間ふみちらし。むかふのきしにも。らんちき酒もりすきまなく。くろふたるむちやくちや五六人。銚子かはらばあいをせんと。よだれをたらして待かけたり。かゝる時節に呑ずんば。いつかほまれをあらはさんと。名にたきのみの小なから酒より。いつさんに呑いだせば。つゞいてあとにむちやいつき。これもおとらぬさけずきあとひき。二きあいならんでぐつ〳〵とのみかける。コレ〳〵兄者人。是まではしたみもならふ。これからが上戸のかんもん。自身にはのみにくかろ。平次かわつてすけよふかと。いふに千鳥がきゝかねて。兄ごさんの底なし上戸。よこあいからあいをせずと。だまつてのまずにいやしやんせ。ヤアいやらしい肩もつな。われにはかまわぬ。今のあとはのんでやろ。肴はだいなし香のもの。あれではのめぬのろまいろ。ついに悪酒に呑たをれ。イヤ〳〵〳〵なんのあなたがゑい給はん。しらふながらもちろりがすいりやう。敵は酒をむくべしと。大鉢小鉢みなそばに置ならべ。のみしふりしてあけさせしは。こつちのそんだあかすかべい。そふはならぬとせきたまひ大鉢小鉢。打こはし〳〵なされたでござんせう。チヽちろりがいふにちがひなく。鉢はのこらずぶちこはし。だざけをのんだるいきつきに。一ッ斤ばかりのみほしたり。きゝて大ぜい「ヤンヤ〳〵。〔福〕づねへさけのみだアもし。〔甲〕わしどもゝのみたくなつたア。そこらで一ぱいづゝやらずになア。〔忠〕酒よりか申。ソレむかふに豆蔵が喜世留をのむのをごろうじろ。こればつかりは奇妙だぜ。〔みな〳〵〕ドレ〳〵。トはしりよつて、おしわけ見物すると、豆ぞう「さていよ

○けいこ上るり　大夫にあらざる浄瑠璃語りの出演する場所を稽古場と稱す。

○内田屋　寛政の頃より江戸に著名なる昌平橋外の酒屋。

○小なから　二合五勺。

○平次千鳥　平假名盛衰記第二「コレ兄じや人、是迄は咄しもならふ、是から先が勝負の肝文、自身には云にくかろ、兄弟のよしみ、平がかはつて咄さふと、いふに千鳥が聞兼て……」といふ文句のモヂリ。

○あかすかべい　赤ンべいに同じ。「膝栗毛」にあり。

○一斤　一升のこと。

○豆蔵　膝栗毛にあり、重出。

○鶴吉　山下今昔物語に、佛店に安永天明年代に、鶴吉といふ放下師が、錬と豆と徳利とを手玉に取る妙技を演じゐたるが、寛政年間郷里名古屋に退隱し、その後へ桶松といふ放下師、悴伊三郎と共に出て籠拔をなせしこと見ゆ、ここには名高かりし故人を持出せしならん。

〱此きせるをのんでおめにかけます。今日はお天氣もよくて。一しほお人が多い。お急でない御方は。お茶やへでもおはいりなされ。おちやたば粉でもめしあがりながら。ゆる〱だら〱と御見物下さりませ。今にのみます。其代りあとでかのだがソレよしかへ。イヤまたこれをのむのがたいていのくるしみではござりませぬ。おき丶なさいませ。此間呑そこなつて。大きな目にあいました。何がいつものとをり。吸口のほうからぐつとのみこみますと。近頃びろうなお咄だが。おいどのほうへぬけるやつがどういたした事やら。てうどかのまへの。小用出ます所へ。すい口がちよいと出ますと。それから水がらくりのやふに。小用がシュウ〱とほそくなつてはしりまするを。小ぞうめが見まして。とつさんやおさるのうすひきをかつてきて。臼をひかせなせへとせがみをります。私はまた。そこどころではなし。こいつはつまらぬものだとおもつているうち。お聞なさい。此さきにいつも見世を出しなさるところてんや様がお出なさつて。コリヤ鶴吉。さいわいの事だ。おらが見せへやとわれてくれまいかとおつしやる。どふなさいますと聞ましたら。年〱鬼灯をふかせるやつも古ひから。きさまをところてんの船のまへにたゝせておいて。口から水をのませては。そのふねのなかへシュウ〱とやらかさすつもりだ。コリヤアいちばんめづらしくて。よからふと思ふから。どふぞやつて見たいとおつしやる。何も商賣づくまいりませうと。そうだん極て。何がそれから其とふりにいたしたところが。こいつは奇妙だと。見世出しそう〱からお人が山のよふに寄たかつて往來もとまるくらゐ。したがかんじんの。心太をあがらふといふおかたがひとりもない。コリヤないはづでござります。私が小用の出ルところから。ふき出す水につけておくものを。どなたがあがらふとおつしやるものを。これはつまらぬと。じきさまあつちか

○おぞい　ズルイ。

ら。おことはりにあづかつて。歸りましたが。世界はひろいもんで。また御近所の鍛冶屋さまへふいごのかわりにやとわれてまいりました所が。何がかの。撞木のよふな木のはしを。私が口のなかへおいれなされ。火床のそばに裸のまゝ。すはつていろとおつしやる。それからやがて。私がひざのまへゐ。炭をしこたまくべて。口の中からしゆもくのやうなやつを。出したりいれたりなさると。其風のいきが。まへのほうへは出ねへで。うしろのおいどが。ブウ〳〵といふと。かぢやさまが。イヤこのふいごはつかわれぬとおつしやる。なぜでござりますと聞ましたら。屁の用心がわるいといわれました。ハヽヽヽ　【越】あんだ。けせろサアのまないで。へのよふなことんし。サア〳〵いきますべい。　トうちつれてそこ〳〵うかれあるく、道のかたはらに何かかみにつゝみしものおちてあるゆへ、甲刕の人、足にてけると、はゞちやつとひろひあけ、かみのうへからさぐりみれば、いびつなりにて小判一枚、たちまちふところへいれにかゝるを皆々おさえて、　【甲】おこれはかねだそふな。わしが見つけた。およこしなさい。【はゞ】あによヲハア。かねじやアござらぬ。　トふところへおしこむ　【甲】おぞいおかたじやお出來なさい。【はゞ】あにそんたアがめつけよふが。

うらがひろつたアから。うらがもんだアよ。【福】コリヤハア。ばあさんがりくつだんべい。そんたアふとにひろはせておゐて。よこせといゝめさるは。あんまりむげちねへことだアよ。【甲】イヤわしがとらずとおもつたとこなア。つきとばいて。これのおかたがひつかけめされたから。そつちいやらずごたアなるまいはい。トむしやぶりついてとりにかゝる、はゞはやるまいとせりあふを、忠ぢご忠治やう〳〵にひきわけ、【越】コレひたりとも。ゐいかげんにでうけなさろ。又ばあさまのいふどもりくつだアが。ふとが見て居申スは。もつともハア。甲忍のいゝめさろども。理くつだアから。こふしなさろ。ひたりで半分ヅヽ、のウわけめさろ。それがいつちゐいことんし。【はゞ】インヂハア。うらアやアだ。【忠】こいつはむつかしい。何にしろおばあさん。とんだものをひろいなさつて大さわぎだ。コリヤこうしやせう。おめへひとりでもとられめゐから。此人数へけふの中食をふるめへなせへ。【越】それがゐいとこと。サア〳〵どこぞで休ますべい。トおうせうづくめに、さすがのはゞあもせんかたなく【はゞ】ソリヤハア。うらもふとりでとるべいたアおもひましねへから。そばきりのふ。ふとつヅ、うちくはせべいもし。【甲】あに。そばぐらいですませずものか。【忠】さふさ。せめて半分おごんなせへ。【はゞ】やアでござる。【福】あじよにもせうことがない。ばあさんそんだけははづみなさろ。トやう〳〵にとくしんさせて、忠二なんでもおごらせてやろうと※濱田やへはいる【はゞ】コリヤハアでかい内だアこゝじやアたかかんべいもし。トこゞとをいゝながらすはると、忠次いろ〳〵いひつけてやるやいなや、直に大ひらばち肴をもつてくると、はゞさかなをつぶし、【はゞ】コリヤハアあんたるこんだア。こんなもなア。うらアやアだ。忠治どのなア。ひつこませてくれなさろ。【甲】インヂハイ。よからず〳〵。【越】ばあさま。御ぞうさになり申ス。【甲】ハ、、、、御みようになされば ゐいになア。サアお越後はじめなさい。【越】イヤおくの旦方から。【福】アレしよむづかしいこんだア。それからおつぱじめなさろ。トさかづきをおしいたゞき、ゑちごからはじめて、ひとつのみ、甲忍へさす、【越】アヽゐい酒だんし。さかなのウあによヲ

○むげちねへ　情なきこと。

○でうけなさろ　ふざけろ。

○濱田屋　佛店の名高き饅屋。

○御ぞうさ　造作の字音、愛にては馳走といふに同じ。

○打がへ　打違なり、細く作りし帶び袋のこと。

しんぜますべい。その鉢のこつぺらか。〔甲〕サアばあさんさしましよなア。ト ばゞへさすこしぶ／＼うけて一ッのみ、大平のなかをさしのぞき、〔忠〕とんだことをいゝなさる。ありやア白魚といふものだ。〔はゞ〕福介見なさろ。お江戸の鰯しやアまつちろだア。〔はゞ〕ハアまた。この烏芋さア。お江戸じやア。皮のウひんむいて。うちくふそふだアよ。〔忠〕しれたこと。かはアむかねへでさ。〔はゞ〕そのかはさアどふしめす。〔忠〕どふするもんか。うつちやつてしもふのさ。おめへもげへぶんのわりいことをいひなさる。あたりに人もあるもんだにハ、、、、。〔甲〕おこれはよつたく。時に忠次どなア。あにかすつぼいものがくいたいなア。〔忠〕さし身でもとりやせう。ト 此うちさかなもいろ／＼出、ぜんもとりよせ、皆々〔はゞ〕コリヤさてもふよしなさろ。〔惡〕ヤレおぞい御亭ぶりだアハ、、、、。〔惡〕コリヤハアでこし御ごうさになつたども。これじやアハア。はらつぴりのおこりますべい。忠次どのなア。こゝのかんぢやうのウきゝなさろ。〔はゞ〕いくらだんし。〔忠〕ハイ壹分と六百だといひやす。〔はゞ〕ヤレコリヤづねへさたアぶちぬかア。ひやうや二ひやうべいは。うらがつん出來もせうが。あとはみんなアが頰わりにしめさろへ。〔甲〕おこれおかた。わしがひろはずとおもつた小ばんを。とりこみめさつたかわりになア。みんなおかたが御ちそうせるはづであらずに。〔福〕なじよとすべい。ばあさんこつからつん出來もふそふ。ト ふところの打がへから、しぶ／＼壹分貳朱出しつりをここ、はゞおびのあいだからかみにつゝみしものをとり出し〔はゞ〕コリヤハアそんだいわしふとりのものでござるぞ。ふく介にしがほうへしまつておきなさろ。イヤまてろ。こゝさアへぶちまけて。みんなアの頰のヲ見かやいてやるべいもし。ト にこ／＼もので、つゝみしかみをひらき見れは、まことに小判一兩〔はゞ〕ソレ目まなこのウはだけて。よく見なさろ。金だアよ。コリヤハアまじつぽくでなり申さぬ。ト はた／＼して、ふく介にわたす、手にとつてきもをつぶし、〔福〕ヤレコリヤほんとうのかねじやアござらぬは。〔惡〕ドリヤ見せなさろ。ハアあんだか。竹に虎の繪がほつてある。

うらアかやいて(返)見せなさろ。ハアコリヤ神田の八丁堀。太郎兵へ悴長松とかいてあるとこと。〔忠〕ほんにコリヤア。ちく(陸)のウぶちぬきめさる。迷ひ子の札であつたハ、、、、。〔はゞ〕忠次どのなア。ちくのウぶちぬきめさる。ぴかくするものウ。かねでなくてあんだアもし。〔忠二〕イヤ御とう地では。このしんちうに所書をほりつけて。子供衆の帶にさげさせます。そのしやうこは。コレ見なせへ。こゝにひもをとをす穴があいてゐやす。〔甲〕おこれはおかしいワハ、、、、。〔越〕い(今)んまのさつき(先刻)。わしが頭巾どもかくいたむくいだアとおもひなさろ。しかしなア。きのどくなことんし。〔はゞ〕やアだく。こゝのうちくつたぜ(錢)によヲ。みんな出來なさろ。〔福〕ハアわしががらゝはらつてしまつたア。なじよとすべい。〔はゞ〕にしやア(主)あじよして。そんだアことヲしめさつたア。忠次どのなア。今のぜ(錢)によヲこゝのうちからとりかやいてくんさいもし。〔忠〕とんだ事をいゝなさる。そんな事がなるものか。マア何にしろ。あとでわつちがどふともわりをつけやせうから。まづこゝを出かけやせう。〔越〕それがゑいとこと。わしどもなア御門跡さまへも。お礼のウし申さにやアならぬども。そんまいぎ(直行)ますべい。なアもし。〔甲〕はんでこ(急)

○奈ら茶や　奈良茶飯を賣りしより名を得たり。
○ちんぶつぢや屋　魂膽夢譚に昔は淺草上野山下には名鳥茶屋とて、珍しき鳥獸をあつめおきて見せたる茶屋ありしとぞとあり、花鳥茶屋、珍物茶屋などと呼ばれたること甲子夜話、寄田甚兵衛記等に見ゆ。
○三國一のあまざけ　嬉遊笑覽云三國一と今も醴屋に殘れり、又聟取の祝言に謂えたり、塵塚談、淺草本願寺前の甘酒屋古しとあり。

ゝを出來るがよからず。ト　みなゝしたくして、ぞうりをもちたちいづれは、はゞもせんかたなく、ぶつゝこごとをいひながらこゝを立出、打つれゆく、向ふによし簀ばりのうらやさん、一大師さまお鬮の判談。當卦本卦。まち人うせもの墨いろのかんがへ。そのとなりのあきんど「サアゝ耳かきが。よりどり。たゞの四文ゝ。〔忠〕コレおばあさん見なせへ。おめへのひろいなさつた小判が。いくらもこゝにつるしてある。〔ばゞ〕見たくでもござらぬ。ごせはらのウやけ申さア。〔みな〕ワハ、、、、打わらひつゝ、行がけには、奈ら茶やいかごを、ちんぶつぢや屋「唐わたりのめいてうゝ。鳥をごらうじておちやをあがりながら。おやすみなされませ。おちや代わづか十二せん。孔雀鳳凰のいけどり。天狗の巣立。擂子木にはねがはへて。こはいろをつかひます。お國元へのよいおみやげ。はなしのたねに御らふじませ。サアゝおはいりゝ。〔ばゞ〕ふく介見なさろ。でく（小人形）のぼうがば（便）りのウこいてる申すは。〔甲〕このでこ（人形）も。きせろをのんだ。でこでがなあらず。〔忠〕おばあさん。鳥を見なさらんか。〔ばゞ〕ぜによヲつん出來申こたアやアだアもし。〔福〕サアあよびなさろ。ト　こゝをうちすぎ行は、※三國一のあまざけ、〔越〕こかア（愛）あんだアもし。〔忠〕名物のあまざけさ。〔甲〕あまざけよからず。一ッぱいづゝのんでいかずになア。ト　いひさま、さきに立て、すつとはゐると、〔忠〕モシみんなへあげてくんなせへ。あまざけやの女ぼう「ハイゝかしこまりました。ト　めいゝにくんでくる　〔越〕ハアコリヤゐいかげんだとも。〔甲〕ゐいかな。アッ、、、おこれはくち（嘴）ばしよノウやけどをした。サアおばあさんは。なじのますか。〔ばゞ〕うらア。あまざきやアきらひでござり申す。〔越〕なじよに。〔ばゞ〕見たくでもござらぬ。あまざけやの女ぼう「大かたおばあさんは。さゝをあがりなさるだろふから。それでこれはおきらひだろふ。〔ばゞ〕これのおかたアとんだアことをいひめさる。うらア竹の子さアくひますが。さゝ（笹）つ葉ア。ついうちくつたこたアござらぬ。〔忠〕ハ、、、こいつはおもしろい。〔越〕イヤコリヤ旦方どのなもし。おゐどこは。でこし（大分）はんじやうなことんし。そこつながら。これのあまざけべ（斗）い。商賣のウして。

○こなします　消耗すること。

○ぶつさき羽折

このハワ内に大ぜいのウくらしめさるといふは。ほんにたまげたこんだアもし。(あまざけやのていしゆ)「さやうでございます。マアありがてへ事は。おかげで家内十人あまり。あついめもさむいめもいたしませぬ。[越]そんでハアいぢにちにいくらべいあきないのウしめさることとんし。(ていしゆ)「ハイまづ五貫(くわん)と七〆くらゐのあまざけは。毎日こなします。[越]ヤレハアでかいこんだアよ。此家なア間口(まぐち)ども。いくらべいあんべいなア。(ていしゆ)「ハイ五間口でござります。[越]家賃(やちん)のウやく〳〵(多)と出べい。(ていしゆ)「月に壹兩たらずの地代でござります。[越]その地代サア。いつ勘定(かんぢやう)のウしめさる。(ていしゆ)「ハイ晦日かぎりにいたします。[越]それにハア。まちげへはござらぬかなもし。[忠]イヤおめへも。こゝの大屋さまかなんぞのやうに。とんだことをいひなさる。いゝくらうしやうだぞハ、、、、。[福]ばあさん。もふいぎますべい。[越]まちなさろ。どうしに出べい。コレ忠次どのなア。御門跡(もんぜき)さまへは。もふいくらべいもあることとんし。[忠]ついそこでござりやす。

サア〳〵お出なせへ。[あまざけや]よふお出なさいやした。トみな〳〵此こころを立出れはむかふよりお大名[お徒士]そうぢまて〳〵。馬(ま)士(ご)。馬(むま)の口をとれ。[はゞ]がいに。すさまじいふ人とだア。コリヤハア。みんなおとのさまがかつてをくふ人とかなもし。[里]おさやうであらず。[はゞ]ヤレハアでかいこんだア。そして見なさろ。みんなアの羽織(はをり)さア。けつのあてからほころびのウきれて居申スは。[忠]ありやアぶつさき羽折(はをり)といふものさ。[はゞ]ハアぶつさけ

○てらじゆをすゝめる
聴衆に勧進するなり。

たのでござるか。ぬつてきめさりやアゑいことだアに。〔彌〕ソレばあさん。おまがあぶんない。こつちいよつておよびなさろ。　トこのうちはやくも御もんぜきまへにいたり　〔思〕アイゑちごの御客。御門跡さまへまいりました。〔越〕ハアこゝかなもし。ヤレ〳〵有がたいこんだア。サアみんなアもどうしに参詣のウしめさろ。〔はゞ〕わしどもゝお宗旨だア。どうしにつるんでまいりますべいか。　トこれより御門ぜきへさんけいする、御堂にはけふ御先代の御法事にて、さんけいのくんじゆおし合へし合、今御ほうだんもすみし所と見へて、こんざつの中、こうおう座上下にて、てらじゆをすゝめる、　「かわら。しき石の御きしんにおつきなさりませ。多少にはかぎりませぬ。戒名俗名をしるして。永代御供養にあはれます。お心ざしはござりませぬかな。　こうじゆみな〳〵　「ア、おありがたや。なんまいだア〳〵。ジヤ〳〵〳〵。　ゑちご、講中のまへにこしをかゞめて、　〔越〕慮外ながら。ちくとべいたのみますよ。わしはハア。いぢごのもんでござるとこと。寄進のウしますべいから。〔講中〕ハイそれは御きどくな。〔越〕ハアそこへどもあげますべいか。　ト内ぶところ、うちがへの金かずはしれねど、うまゝさし出すと、講中きもをつぶし　「これは〳〵。ありがたいお心ざしでござります。御遠方からと申。さりとは。はや御奇特千万な。まづこちらへおまはりなされませ。

ト内げんくわんの方へつれゆく、講中二三人出來り　「サアこれへおあがりなされ。さいはひ今日は御先代さまの御法事でござりますから。御膳についておかへりなされませ。先しばらくこれ御きう息なされませ。　トあいさつしておくへゆくと、　〔越〕あんでもマアぶちあがつてやすみますべい。〔はゞ〕インチ。ハアまたぜによヲとられべいヨ。〔越〕もつたいないとをいひめさるども。〔彌〕マアそこへあがりなさろ。　トめい〳〵あしをはたき、はゞはぞうりをふところへいれて、上へあがると、さきの講中　只今お役者がたがお目にかゝられますから。まづそこもとばかり是へお通りなされ。　トゑちごをあんないしておくへつれ行、しばらくして立もどり　〔越〕ヤレ〳〵ありがてへこんだア。二十五さいとやらの御料理のう下さるとよ。そんでハアどうしのふともござるからそんまかへりますべいと。ことはりのいひ申たが。その人たちも一所につれだつてこいといひ

めさるから。みんなもこつちへどうしにきなさろ。おざしきのウ拜見(はいけん)しますべいもし。【はゞ】ヤレそりやアゐいこんだア。ふく介もくつついてきなさろ。【忠】わつちやアこゝにまつていやせうから。ゆるりとはいけんしてきなせへし。【越】サアいぎますべい。ト うちつれておくへはいると、講中引まわしてお座敷をはいけんさせる、このうちふく介はそつとゐちごの袖をひいて、【福】いまそんたなア。いひめさつた二十五菜(さい)たア。あんだアもし。【越】わしもしらぬども。大かためしに菜(さい)のウ二十五べいも。くつつけて出る事だんべい。御門跡(もんぜき)さまのおふるまいだアから。御てへねへなことんし。【福】その二十五菜(さい)のウ。なじよとしてくふべいか。ふと(人)に笑(わら)はれべいとおもつて。うらア敵(てき)なくおもひまさア。【甲】おこれはなるほど。わしどもゝついに。二十五さいとやらアくつた事がないなア。さだめしおゐちごは。しつてるずに。【越】わしどもゝはじめてだア。そんだアとつて。お江戸の衆(しゆ)にあかつぱぢのウかゝされるども。はらのにへるこんだアから。こうしますべい。あんでもどう(同)し(志)にくふふと(人)もあんべいに。そのふと(人)のするとをりにしますべいは。【甲】おこれはよからずく。かくておざしきもだん〲はいけんしてしまい、こう中あんないして、客もうけの一ト間へつれくると、こゝにじんたいよきとしはいの男藝人、はをりはかまにて上座になをりいる、みた〲そいつぎへじゆんにすはると、きうじにんはかまにて膳をさゝげ出、めい〲にすわる、二

○敵なく　白石暨信夫の言葉にも、てきねへ思ひをしてさあり。努して苦しむこと。

のぜん、三のぜん、むかふづめまで、けつこふづくめのおりようり、みな〳〵きもはかりつぶして、大おせをだら〳〵ながし、ゑちごつぎにすわり申しうへさゝやきて【越】あんでもあのふと（人）のするとをりにしますべい。【甲】上のかはらずとも。福介どのなア。がつてんかなア。【福】よくござらア。ト それ〳〵のかゝりのやく僧たちあいさつ出、こう申しもちてすゝめると、上ざの人はしをとれば、みな〳〵おなじやうにはしをとる、それより上座の人めしゝるのふたをとりくひかゝると、みな〳〵それくふのだと、つゝき合て同くくひかゝる、【上座の人】これはけつこうな。おあんばいでござります。ト いふとやがて同じやうに【越】これはハア。けつ〳〵こうなおあんばへだアもし。【甲】おこれはおけつこうなおあんばい。【福】コリヤハア。ゑいおあんばへだアよ。【はゞ】うらもハアゑいあんばへだアもし。ト 此うちしゞう上座の人、しるをすへはみな〳〵しるをすい、ひらのものをくへはひら、ちよくをくへばちよくと、おなじやうにする、【上座の人】エヘン。ト せきばらいすれば同じく【越】エヘン。ソレ甲しうのチ。ゑへんがまはり申た。【甲】ホイおこれは。エヘン。【福】エヘン。【はゞ】あんだアな。【甲】エヘンでござらア。【はゞ】エヘン。ト みな〳〵おなじやうな事をいふゆへ、上座の人さてはみなおれがまねをするぶてへやつらだとおもひ、ゑちごのほうをしりめに、ウ、とにらめると、ゑちご又甲しうをウ、とにらめる、甲しうふく介をウ、とにらむと、ふく介はゞをウ、とにらみつける、【はゞ】うらアたれのう。にらみますべい。【福】たれでもゑいからはやくにらめなさろ。【はゞ】ハアそんだらきうじのふと（人）。ゆるさつしやりまし。ウ、。ト にらみつける、きうじ人おかしくふきいだせば、上座の人もあまりのことにこたへられず、フ、、、、とふき出すひやうしに、口のうちからめしつぶをはら〳〵ふきいだすと、そのつぎにいるゑちごの人あわて、めしを一口かつこみおなじくフ、、、、とふきいだせば、甲しうの人、これもフ、、、、、ふく介もフ、、、、、はゞもフ、、、、と、のこらずめしをふきちらし、そこらぢうめしだらけにする、きうじ人きもをつぶし、ヤレぞうきんだのと立さはげば、上座の人たもとから手ぬぐひを出し、座をたち、そこらをふくと、おなじくゑちごも甲しうもみな〳〵手ぬぐひを出しふきかゝる、はゞも手ぬぐひをもつて立あがるとき、ふところからひやめしぞうりのきれかゝつたやつをぜんのうへにおとし、大さわぎをやらかす、本ぜんも二のぜんもしるやらめしやらごつたになり、なか〳〵くふところではなし、上座の人ぜんをつき出して「これは大きに無調法いたしました。もふおさげ下さりませ。ト いふとやつぱり同じよふに【越】こりやハア無調法（ぶてうほう）のウしました。もふさげさつしやりまし。ト 甲しうもふく介もみな〳〵そのとをりいつてぜんをつき出せば、きうじ人さう〳〵下げてしもふと、其まゝ上座の人はつぎのまへ立て行、【甲】サアおゑちご。あの人の跡（あと）について。いきましよなア。【越】あにハア。二十五さいなアしまい申たアから。もふあのふとの通りにせずともよくござらア。【福】ヤレハア二十五さいといふもなア。敵（てき）ないもんだアもし。【甲】おさやうさ。二度とふたゝびくはずもんじやアござらぬわい。【はゞ】わしはハア。

○日もくれ竹云々　日も暮れを呉竹にかけ、更に雀色時を出す緣とす。
○雀色時　夕方を云ふ。「膝栗毛」にあり。この語より「さへづりながらかへりける」と云へり。

めしつぶのウ。はなのあなさアへ引こんで。あじよにもかじよにもなり申さぬ。ハアクツシヤミ〳〵。[通]サアそんだら出かけべいに。[はゞ]イヤまちなさろ。ト そこらぢうきよろ〳〵見廻し、麻上下をきた人をとらまへて、モノわしが膳のうへに。ぞうりをくひのこしておき申た。見てくんさいもし。[編]あにハアよくござらア。ト それより打つれ、よう〳〵このげんくわんへいづるとき、[通]ごうぎにひまがいりやしたの。これからあさくさのくはんをんさまへゆくのだが。もふおそひから。おく山もひけやしたろふ。なんならまたあした。くはんおんさまから吉原と兩ごくのほうへ。御案内いたしやせう。けふはこれでおかへりなさいやせ。アレ入相の鐘がなりやすと。すでに日も※くれ竹にとまる雀色時。さへづりながらかへりける。

舊観帖下卷終

舊観帖後序

或人の曰。道中膝栗毛之書。續而此舊觀帖たるや。うき世もの眞似といへるものを。口うつしに書たるにて。被譽の書にはあらずといへり。されど膝栗毛は異なり。舊觀帖は既に其事を以て。表題に顯し編たるなれば勿論の事也。近頃報讐之書。世に行れて。秀異玄妙の著作年毎に倍すといへども。凡而もの〻おかしみを專とかくとは難がゆへに。是を編者稍し。舊觀帖は。憂世もの眞似と其意作くして。筆に異なるおかしみあり。是鬼武子の奇才といふべし。故に初篇行れて書肆次編二卷を索む。鬼武子予に此下の卷を編よと乞ふ。予固より不學短才にして。只戯作をのみ嗜欲とすれば。辭せずして是をかくと。將に鵜の眞似する烏とやいふべし

十返舎一九跋

○皐月末の八日　五月廿八日を夜見世はじめといふ、この日川開きとて花火をあげる。

有喜世物眞似　舊觀帖三編

序か口演かわからぬ發語

倩舊觀帖も初編二編と著し。永夏は御退屈と作者も足を洗ひ。三編目は煙管を噬へ。引籠思案の折から。去御方より請望には。素浮世物眞似の趣意は。兩國にあるべきと。去ながら兩國は。古より人々耳なれたる處ゆゑ。今更案もなく。二編に限り筆を止むると覺ふれど。三編目は淺草兩國看取の目次も出し。その儘に止なんも本意なし。善惡閲人の欠も不出やうに。半点計三編目の験を書寫よとあるまゝに。麻艸看取を除き。春の景色も押移たる兩國花火。初日の趣向。由來愚の作意をもて。皐月末の八日なる朦闇の耻辱を。夜店の明晃に斯ばかり。その分說を首に記して。叙をまぎらすこと爾り。

文で化すとよめる六つのとし己のはる日

感和亭鬼武いふ

○陸奥は霞とともに云々　能因法師の「都をば霞と共に出でしかど秋風ぞ吹く白川の關」のもぢり。

○當振　こじつけたをどり。

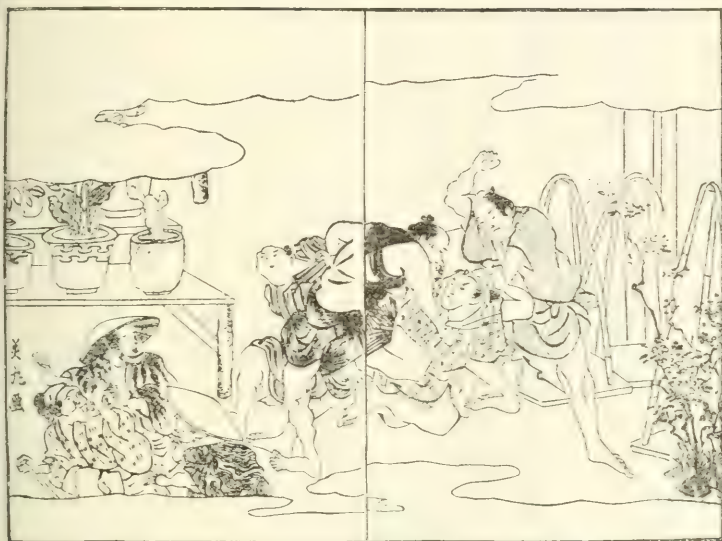
有喜世物眞似　舊觀帖三編

江戸　作者　感和亭鬼武戯述

陸奥は霞とともに出しかど。夏來にけらし白川の夢。第一此歌からして固齢跟のやうに聞ゆれば。卷中にはどのやうな當振があらふやら。忘憚のならぬ光陰は鳥銃玉の如く。移行日の春暮て。奥のおばゞに甥の福助。越後の人に甲州もの。江戸見物の逗留も昨日今日と過る中。おもはず夏も半ばなる皐月廿八日は。兩國川の花火の初日賑はしと聞および。這を見物して國へ歸らんと待たりしが。今日ぞ。その日になりぬれば。夕方より旅宿を出。那もさ引の忠次を前に立。四人は後に延添ゆく。折しも藥研堀の不動尊緣日なれば。まづ爰より廻らんと。馬喰町から横山町。藥研堀にさしかゝれば。參詣の群集おしわけがたく。兩側の植木賣は所狹まで居ならび。その外小間物飴賣菓子賣など賑はしく。四人のものは眼を驚かす繁花ゆゑ。婆々は忠次とおもひしらぬ男の袖を引。ばゞ コレもい忠二どん。お江戸の牡丹はあじよに小出來だんべいもし。ト いふはばらの花の事なり、奥州にすくなきゆゑ見しらず、またそでを引れたる男はなに事かとふりかへり見て、かの男「なんだ牡丹餅をくれろと。この乞食ばゞアは。とんだ奢た事をいふぜへ。この込合中で。餅所か。錢も出さりやアしねへ。うるせへつくなく。ト いひながら、こじきこおもひふりきつてゆく、ばゞ ヤア何所のか人を。忠二どんと。とりちげへたら。うらア。ほいとうとぬかしたア。ごせつぱらのやける。ヤレみんなまちめさろ。こじきのことをほいとうといふは、くにことばなり、 忠二 コ

○なうまくさんまんだ
不動の中咒。

レサおばアさん。何をして居なさるな。あんまりきよろ〳〵脇見ばつかりしてはぐれても。おらアしら
ねへによ。〔恵比〕ヤほんに けふは別して人込みだよつて。ばゞさま。放れぬやうにごんせや。〔福介〕まづ
はないに不動さまサ參詣のウとげて。そこらア見ま
すべい。〔甲盈〕それがよからず。 ト みな〳〵拜をする、ばゞは人々の拜むを見て、
〔ほゞ〕ハヽアうらが國の武駒明神さまア。鰯が御好の
樣なあんで。此お不動さまアさんまの干物が好で居
られたアナ。〔恵比〕なぜへ。〔ほゞ〕アレきかつしやいも
し。みんなが手を合せて「なアもしさんまの干物
ばさらにくつたら高かんべい。ト いつて拜みもふさ
ア。〔甲盈〕何さうゆはずよう。それは「なうまくさん
まんだうんたらたかんまん。ト不動さまの御しんご
んを稱るずら。ハヽヽヽ。ト 皆〳〵うちわらひつゝ、よたおもてへいづる、折ふし
向ふに二三十ばかりの男のうへ木の直をつけて、金錢花を十六文にて買ところを、廿四五のいさみの男わきからみて、〔いさみ〕ヲイ
その金仙花は十六文なら。おれが買べい。ト とりにかゝる
〔植木や〕もし見んな賣限て。もふこればかりでごぜへ
やす。コリヤアあなたに直が出來てあげるのさ。ト

○三文野郎　四五二。

いへども きかず、［いさみ］なんのまだぬしのかはねへうちに。おれが錢をさきへ拂たから。もつていつてもいひじやアねへか。はじめ直をつけたをここ「コウとんだ無法をいふ人だぜヱ。金仙花のいつぽばかり。いりやアしねへけれども。おれが買たものをひつたくりはおわるかろう。よしてくんねへ。［いさみ］何おわるかろうもすさまじい。おらもいりもしねへけれど。もふ立引だっ さういはれちやアおれが買ていかア。［相手］さういやアこつちも横引トやらだア。やるこたアならねへは。［いさみ］なにやるこたアならねへト。この三文野郎め。おれをだれだとおもやアがるヱ。［相手］うなアだれだかしらねへが。おれが三文やろうならナ。うなア二文やろうだア。［いさみ］コウおれが二文やろうなら。わりやア一文やろうだぞ。［相手］おれが一文なら。うなアたゞやろうだは。［いさみ］おれよりうなアたゞもねへは。此巾着やろうめ。［相手］なんだ巾着だと。此ふくべやろうめ。トいはれて、いさみは相手のむなぐらをとり、［いさみ］口でばかりいつていりやア。つきあがりやアがらア。ふくべやろうたアなんのこつてへ。むねをとられた手をおさへて、［相手］おれがとウ巾着やろうたア。なぜぬかしやアがつた。［いさみ］チ、うぬがつらア短かくつて。縫あげのあるやうで。皺があつて巾着に似て居るから。それできんちやくやろうといつたがどふした。［相手］うぬがつらも長くて青つこくて。のろまづらだから。ふくべやろうといつたがどふした。［いさみ］ヤこのやらア。すきな御託ウあぎやアがらア。おらアついににぎりべの。青つくせへのと。いはれたこたアねへ男だぞ。［相手］おれもきん玉に似たの。皺くたゞのといはれたこたアねへわへ。ト せきこんでまちがひをいゝながら、こゝにてたがひにこぶしをあげ、たゝきあいになり、うへ木にふみおろ、にさはぎ、近所のいさみとりさへに出てもきかず、めんどうだ他所からきて、土地をさわがしやアがるやろうどもア、商内のじやまにならア、ふたりながらぶんのめせと、わかいもの大ぜいはだぬぎになり、二人をぶちにかゝる、此けんくわをはじめた二人のもの、立どまり見てありけるうち、大さわぎとなり、さんけいのくんじゆ一同にばら／＼とにげきたる、はゝ福介越後甲州も、きもをつぶし、人におされながらにげだす、はゝは人さきへ眞一文字にかけだし、後をみながら横向でにげるはづみに、爰に二八そばと行燈の大かんばん。通りへ出してあるに。突當る拍子。行燈

○かつぎ　蕎麦屋の出前持。

破れて。婆々は大かんばんの中へはづみに飛込み。なをもにげやうとするゆへ。大行燈をかぶつたまゝそこらあたりを引づり廻るさま。恰も袋をかぶつた猫のごとし。そばやはこれを見つけて。［そばや］アレ〳〵おらがかんばんあんどんが化たそふだ。風ちふかねへにおどりよウおどらア。どふいふもんだ、

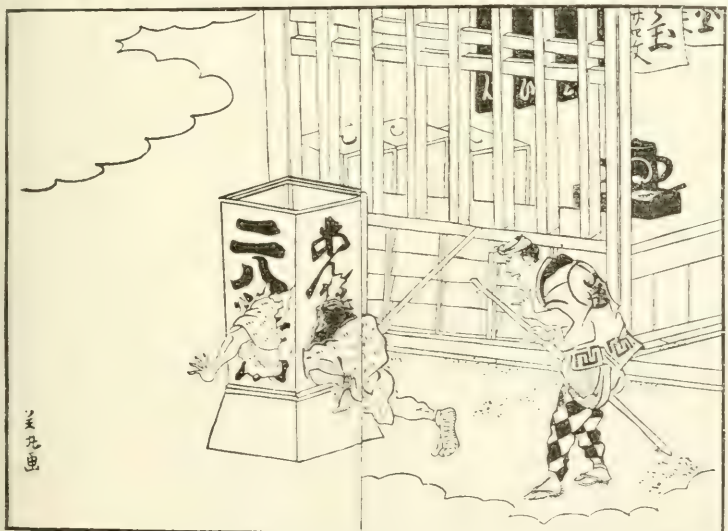
ト いひながら、かつぎがかけだし、あんどうをおさへると、中からはゞアがかほをだす、かつぎもきをつぶし、

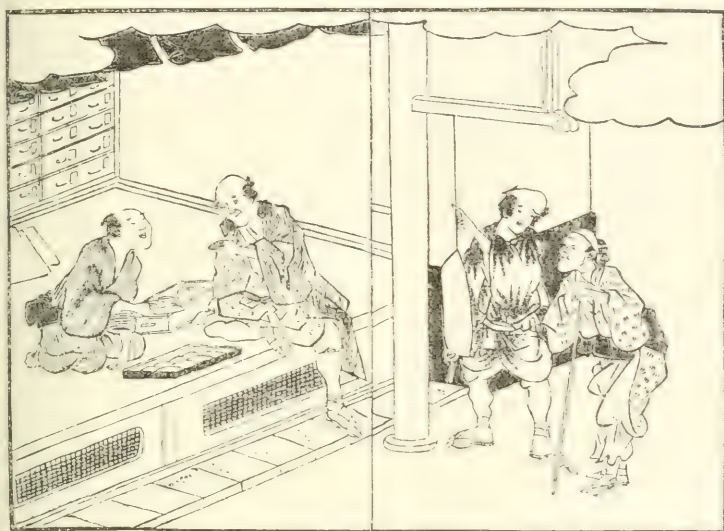
［かつぎ］コウとんだこつた。あんどんからばアさんが産れたア。二八の中から出るから娘なら聞えたが。ハヽア二八は八々六十四か。そりやアいゝが。マアおめへは何處の人だ。十方もねへ。看板をでへなしにしたア。

ト こゞこをいふ所へ、みな〳〵きたり、忠二はそばやにわびをする、

［甲㐂］ヤレ又よたばアさまにはこまるよう。コレそばやどの。そんだいにゆいわけがてら。わしらが寄てそばをくつていかずに。おかんにんしなされ。サアみんなおざらつしやい。

ト 先にたちうちへいるゆへ、みな〳〵もはいる、

［忠二］かけにしてもらひやせうかね。［甲㐂］何めい〳〵現金に拂ふがよからず。［忠二］いんね。蕎麦を盛か。ぶつかけかと聞事サ。［㐂］チイそんなら。もりを越後何でもよいとこと。

五ッだしてくんな。（はごなくもつてくる、みなノヽ一ッづゝくひしまひ、）〔甲〕かわりをもらはず。（又五ッもつてくる、はゞは手ばやに二ッくひしまひ、）〔はゝ〕福介にしやアひたつアすぎべいぞ。やだなら。うらがうつ食てやるべい。爰サゐこしなさろ。〔福介〕あにひたつべいうつ食たつて過べエもし。まんだたりまうさねへ。そんたこそ。二ッ三ッくはつしやらア。年寄の冷水ですぎますべい。（トいゝながら、こいつも手ばやにかつこんでしまう、）〔忠二〕もふみなさんよしかね。〔みなノヽ〕もふいりませぬ。〔越後〕ときにまたばゝさまがやじいふてはわるいよつて。代はめいノヽに拂ふがましよ。〔甲州〕それがよくおざるよう。忠二どんのむきは。わしが出しませず。（トめいノヽ錢をいだす、はゝは錢のだいノヽにへつこは、おごふせうちのかほつきなれど、しかたなく、胴脊からト六文だして、）〔はゝ〕それわしらがむきは出來ましたぞ。〔忠二〕おめへは福介さんとふたりぶんだよ。そして二ッづゝ四ッ食なすつたから。六十四文出しなせへ。〔はゝ〕あによういはつしやる。ひたりで四ッくつたから。十六文でよかんべい。〔忠二〕とんでもねへ。一ッ四文といふそばがあるものか。人を馬鹿にした。〔はゝ〕夫でも看板を見めさろ。二八とおざらア。〔忠二〕夫だから六十四文サ。〔はゝ〕あじよにさうだんべい。二八とあるから。一ぱい四文。二はいで八文。福介も二はいだから八文。それ十六文でよかんべい。〔忠二〕こいつア大わらひだ。二八といふが。一ぜんが二八十六文の事サ。〔はゝ〕そんだ小むづかしいそろばんなア。うらが國のほうにやアおざらねへから。しりまうさぬよ。〔忠二〕こねへだもおめへ湯島で蕎麥を食つて。直はしつてるはうだ。〔はゝ〕そのときやア越後の人さまが拂はしつたから。うらアしりまうさねへ。ぜんてへけふもうらがくんべいといつたのじやアおざんねへ。甲州の人さまが。さきへはいらしつたから。うらアしよかたなくはいりましたアから。跡はそんたしよ。ゐゝよふにしてくんさいもし。〔甲州〕ヤそんたがかんばんのうやぶりめさつたアについて。そのゆいわけに寄つたからよう。此代はみんなそんたがだいてよからず。

○長命丸の看板
○四ッ目屋　長命丸を賣る店。
○いろ身　色好様の身振
○宮守の黒焼　惚れ薬と稱す

けれどわづかの事だからまゝい。わしがだいてしんぜず。ト田舎侍でぱらく八まゐる、四作は長命丸のかんばんを見て、米澤町の方
四作ハ、ア爰は聞及んだ四ッ目屋だよってに。わしはちと買てゆきたい品がある。皆さんそんまゆくほどにまつておくれ。忠うちはぢもかんばんを見て、はゝあんだ長命丸。ヤコリヤア長生のくすりだんべい。うらもちつと買て。もふ三三ン百年生延べヱか。ト内八はひる、このあひだに [illegible] 宮守の黒焼を買ひ、しらぬ顔で居る、はゝ長命丸とやらアなんぼだんし。くすりや ハイ六十四文でも。三十二文でもあげます。[illegible] たんとのんだら。大造づなく長いきようしますべいかもし。忠二はこゝろおかしく 長生をするから。忠二おばアさん。こりやアたくさんのむほど。彼是いはずに。おもひきつて六十四文が買ていきなせへ。はゝイヤくマア三十二文がかつて呑で見て。百年も生たら。また三十弐文が買に來ますべヱもし。ト小包の長命丸を買ひゆく、見せのものもおかしくわらつて居る、みなく両國へいづれは、はや夕かたなれば暇ふ群おびたゞし、福介ハ、ア大造な川だアもし。うらが國の阿武隈川よりやアづねへやうだア。あれが両國ばしかもい。ばアさん見めさろ。永い橋だアぞよ。

〔ほゞ〕ほんね。あらくさかる所だアな。〔忠二〕此川で晩に花火をあげやす。〔甲州〕なるほどお江戸の繁花にはたまげるよう。あの先らつかいの橋のうへの人はよう。コリヤちとむかひな茶屋に腰をかけて。川のわでつかたしもつかたの景色を見ずか。〔越後〕そのことんし。トみな〳〵かしはたの茶見せに立よる、むすめちやたもつてくる、〔福介〕むかいがはもあらく盛るだんべいもし。〔忠二〕向ふも見せものや何か。やつぱりこつちのやうに賑かさ。しかしけふはもふ橋が人で通りきられやしねへ。回向院さんにけへちようもあるから。近所じやアあるし。向ふ側はあしたにも來てみなせへし。〔ほゞ〕あんだか。そこらあたりがしやみだアの。たへこだアのと。きのほせがしもふサア。ヤのほせるでおもひだいた。いんま買てきた長生のくすりよウこゝでのむべい。ト

かの長命丸をとりだして口へほうばる、このとき越後も、とゝのへきたるいもりの功能をためし見たく、さいわい此ちやみせのむすめうつくしければ、これへふりかけやうすをみんと、かの包みをいだしあけてみる、折からさつと吹くる川風に宮守の黒燒はつと吹ちり、側にいたるほゞに皆かゝつてしまうと、ほゞはうつかりと所々をながめいたりしが、おもはずぶる〳〵とみぶるひするよとみへしが、ほどなく品かたちをつくり、さもいやらしき目つきとなり、越後を流し目にみやりながら、越後がふと股のあたりをふつつりとつめる、〔越後〕アイタ、、、、、、コレばゝさま何せるぞへ。〔ほゞ〕あによふせるもごてへそうだア。うらがそれべヱさわつたが。そんだにいたみ申スか。そんだらわしがにくゝござるべヱなアもし。ヱハアあんだかきもせのうやけて小じれつたく。ごせのやけるがいな。あじよな氣持になつて來た事だアぞよ。〔越後〕サ惱ひといふじやないが。いたいわいの。〔ほゞ〕あんだにくゝはおざんねへとか。ちくではおざらぬかもい。それじやアハアいよ〳〵めんなごいおふとだアぞ。わしもハアおてつきますサアヤ。まんだおてつかれましねヱはい。これまできくべヱ〳〵と思つて。きゝましねへがもい。そんたア在所におかたがありますかアよ。〔越後〕ヤ此ばさまはさま〴〵のとを聞人だの。わしはにうほうもあつたども。ひしあはせで。はやくがゝめは死でのけた

○天にあらば云々　長恨歌「在天願作比翼鳥、在地願作連理枝」の片言。

ことんし。それからいんまにやもめ男でいるよつて。ふまではあり。そつこでこんなにおいどの永逗りようちせるとことよ。ほゝそんたにやアふしあはせかアしりちふさぬが。わしがためにやアしやあせだアもし。そりよウきいちやアハア。おつこてへベヱと思つてもやるせがおざんねへ。今度國サけへらつしやるときやア。わしもどうしにつれていつてくんさい。※天にあらばふよくのとつくりとやら。地にあらばれんりの枝豆とやら。もふはいはなれる心はおざらねへもい。　トいふつゝ、いやらしき風俗にてよりそへば、みな／＼おかしく、こいつは氣が違つたそうださおもつている、［越後］こりやアこなさん。どうかさんしたか。そしてマアそんま。そこへよつて息をひつかけてくだせるな。何かへつぼとはなしせるやうな匂ひがせると事。　トわきのほうへにげる、ばゝむつとしたかほつきにて、［ばゝ］どふかしたアとはきよくがねへ。深山の猿も狼も。わがめんなごいもなアしりもふさア。ましてやふとの性をうけ。があいとおもひあかね染。うらなく思ふわしが氣を。そんだにやだがる心根は恨でおざる。　ト越後の手をさりあられのやうな涙をほた／＼おとすにぞ、越後はきもをつぶし、おそれて向ふのせうぎへにげのけば、ばゝはぐつとあつくなり、ものを

〇しやきばり　硬直し。

〇ゆづられた十石　土地により十石百姓、八石百姓などいひて、百姓一軒の持高なり。

〇四文屋　四文均一。

もいけず、だん／＼しやきにり立あがりしが、越後をみつめ恰も棒をのんだ人を見るやうに突張り、たゞいきはかりついて顔色、紫いろに赤みがゝり、しやきはりかへつているゆへ、みな／＼あきれはて、きもをつぶし、これはアさまがどうかしたそふだと、甲州脇すけ立さわぐを、忠二は心づき、〔忠二〕ハ、アヤみんなあんまりさはぎなさんな。こりやア今呑だくすりのきいたのだそうだ。そふならなをしやうがありやす。わつちにまかせておきなせへ。チイあねさんこゝへ茶をもつて來てくんな。トいふに、娘もおかしくおつなばアさんとおもつて、ちやをくんでくる、忠二はちやわんをもつて、〔忠〕サアおばアさん。マア茶を一口のみなせへ。トいへども、しやきはつてものもいはぬゆへ、忠二はばゝの口へつぎこんでやる、このちやにゑてあつたと見へて、ばゝは大きに口をやき、ものもいはずプツプゝとはきだし、いよ／＼しやきはる。〔忠二〕ホウこいつアあつかつたそふだ。大麁相御免／＼。トいゝながら水をうめてもらい、いやがるばゝの口中へつぎこんでやる、此ちや咽へとふるとおもふところ、たちまちぐにや／＼となりて、せうぎに腰をかけるゆへ、越後もさてはおれにいやらしくするも、いもりのふりかゝつたきざくとこゝろづきければ、わしもまじなつてしんぜやうと手ぬぐひではゝのからだをはいてやれば、かのくろやきもおちたさみへ、やう／＼ばゝは本性のていになり、〔ばゝ〕ヤレハアうらアあじよのこんだんべい。からだがしやきばつたり。ぐたつひたりしもふサアよ。〔忠二〕そりやア長生の藥のきいたのサ。トわらふ、〔ばゝ〕そんだらハアたのしみなアこんだがもし。〔越後〕はいそんまふがくれやうに。もそつとそこらを見物しようじやないかい。〔甲州〕それがよからず。ト立いづるに、ばゝはぐにや／＼して、ヤツトコナとやう／＼たちあがりて越後にすがり、まだ掛りのこりのいもりだけ、やつぱりすこし越後にいろけあれは、〔ばゞ〕ちくとべエ手のウふいてくんさい。くすりのきゝめかしらねへが。ありくがこはくおざらア。〔越後〕わしはようさつしやれ。福介どの。手をふいてしんぜたがよいわいの。〔ばゝ〕福介だらやんでおざる。サア／＼そんだらいぎますべエ。これより豆蔵、浄瑠璃語、業あやつり師のうちの八人藝諸芸どう／＼の店など、だん／＼に見めぐり、こゝに辻で焼うる鰻のにほひに、ばゝは小鼻をいからし、〔ばゝ〕おまさうな匂ひだのし。一串なんぼだんし。あに十六文に十二文だアエ。ヤづねへ沙汰だア。〔福介〕ばアさん食たかア一ト串買なさろ。〔ばゝ〕あに此わらしやア。そんだ身上持じやア。ゆづられた十石べエの田畑もぶんなげべエぞ。トいゝつゝ、となりになんでも四文屋といふやたい見せに、くいものをくしにさしてあるを見て、〔ばゝ〕こりやア安イもんだア。一ツくんべいか。〔甲州〕また澤山うつく

○幾世餅　両國に名高き餅屋

つて。何でも四文と。今の蕎麥屋のがいに。わしにはらわせるではおざらねよう。〔ばゝ〕あにハアこれや是をふとつうつくひながら。隣のおなぎのにほひをかぎつけていまうすから。十六文べエのこたアしもうして。とくでおざらア。ト［illegible］なりのうなぎのにほひをしきりにかぎこむ〔うなぎや〕コウきたねへ。此ばアさんはうなぎへみづッはながたれらア。何をしなさるのだ。不買ア。そつちへよつてくんねへ。トいはれてみなくきのどくゆへ〔忠二〕サア〳〵ちふおばアさん、けびもいひかげんにして。こつちへきなせへ。ト引ぱつてくれば、江戸［illegible］〔ばゝ〕お江戸一ばんとありやア。此もちやアづなくおまかんべいもし。〔忠二〕コリヤア名代のもちサ。しるこもありやす。お國の土産にあがらねへか。〔甲州〕わしは宗旨違だが。名物なら一ッくつてみずかい。〔越後〕わしは餅ときては好物じや。ばさま福介さん。おまへがたはどうじやい。〔福介〕わしも餅は好でおざる。ばアさんまゝひよらつしやい。〔ばゝ〕いくよ餅とやらアなんぼだアな。〔忠二〕一ッ五文ヅ、さ。

○五文どり　一ツ五文。

忠二ヤづねへさたゞア。福助よしめされ。越後ヤばアさんわしも好なり。名物なり。おもひきつて。爰の餅はばさまと福さんにはわしがおごろかい。忠二そりやアかたじけなくおざる。ふるまひなら。ゑんりよなくくいますベヱ。ナア福介。越後なんでもおもいれくいなされ。と（うちつれいくよもちへはいれば、）忠二チイいくよもちを五膳出してくんな。ト（いふゆへ、やがて／＼にぼんにのせもちきたる、）忠二ヤだならよしなさろ。わしがすけますベヱ。ト（いゝながら、まづわかばんの五文どりを大口にくいかける、）越後ばさま。わしがおごりじや。せかずにたくさんくいなされ。（はゝはよふるたひさおうらへに、おもいれくへこいばるゝとゝのへ心よろこび、なんでもしこたまくいませうとおもひ、せきこんでほうばりのごへもちをひつかけて、ぎつく／＼する、）福助ばアさん。こんたアあんまりくいすぎたアから。のどへふつかゝつたさうだア。もふよしなさろ。どれこれもわしがくつてしんぜべヱ。ト（さりにかゝる、はゝは目を白黒しながらも、もちのぼんをすきへ、福介にはやらず、もちながのごにつまつてものがいはれぬゆへ、たゞちやをくれろといふことをしかたでしてもがくゆへ、忠二おやたもちのさまをみ、たゞにしあふ五文どりの大きなるいくたものごへひつかゝりしとなれば、ちやにてもこふす、まづおかばはごくるしめば、越後田州も見かねて、是ばならぬと、御水寄などをのごへつぎこめどもとふらず、もちやもおごろきたちさわぐうち、にゝほう／＼にはかりにふんぞりかへり目をひきつければ、みな／＼いかゞせん、うろたへるおりふし、奥のかたにしるこをくつているわかい医者ごのありければ、これさいわいとみな／＼此やごのをよびにぞ、いしやごのもきのごくがり、さつそくやうすをみるに、はやみゝくもなかり、はゝはいきのたへたるありさま、たむさんほう、これは一とふりではいきませぬ、わしが家法のくすりをいわひもあおひもございば、これがふもちひますが、これはわずかでも百両でござるがよろしうござるかといふうちも、みな／＼こゝろやすくゆへ、越後田州口をそろへて、）なんでもはやくおもちいなされて。たすけてくださいませ。と（いふにぞかのいしやふところより黒やきのやうなくすりをいだし、はゝのくちへねぢこみあさからせうゆをつぎこむと、もちおさまつたとみへ、はゝウ、ト いゝさま目をみひらく、）みな／＼ばアさん。気がつきましたか。のどのあんばいもどふだの。はゝあにわしはどふしたのだ。どこもなんともござらねへヤ。いんまおれがくいかけておいたもちやアどふした。福介コレサばアさんもちどころじやアおざらぬ。こんたがもちをのどサふつかけたので。みなさまアたまげはてゝ。しよかたがなくて此おいしやさまにお願ひまうして。結構な御薬のウもちいてくださつたアから。やう／＼たすかりましたア。おいしやさまやみなさまに御礼のウゆはつしやい。はゝそりやアとんだアおせわなアかけました。

［いしや］あぶない事。わしがおらぬと。今頃は遠い所へいかつしやるのじや。あのくすりは家法でござるが。餅をとふすには妙じやて。ト いしやごのも大キにかうまんがほでいる、福介ヤそんだいにばアさん御くすりの代を百疋おいしやさまにあげなされ。はゝはまなこをむきだし、福介をにらみつけて、はら立がほになり、［はゝ］あに薬代を壹分あげろと。そりやアあんのこんだ。馬鹿アつくな。［福介］イヤサそんたア目をまやいてしるまいが。おいしやさまが。高いくすりだアとことわられたアが。みなさまがよくござる。もちいてくんさいとたのみましたから。そんたも生めされたアから。薬代はあげなされ。［はゝ］コレエうらが口からいかいてくだされとたのみやアしもうさねへ。そんだ薬を呑より。死ぬほうが。勝手だアが。あんだか。わしが心もしらずに。みなさまがはからいめされて。そして薬代をうらに出せたアむりだんべエ。せめて割合ともいふなら。まんだ聞えた譯だア。［越後］ヤそんたの命を救れて。その薬代を割合とはあまりなことといふふとじやの。［甲盈］それサもし。［はゝ］コレぜんてへ越後のおかたが。餅をわしに振廻

○南鐐一片　銀二朱のこと、一分は一兩の四分の一、一朱は一兩の十六分の一。

○にたり　小なる川船の種名。

○さんちやう　同前、荷足よりは小、ちよきに似て僅に大、櫓三挺にて操るといふ意にて名づく。

○ちよき　小なる川船の種名。

○川一丸吉野丸　船の名。前來藥の滑稽を承けて、藥名と紛違せるもの。

たからおこつたことだアから。そんただいてくれてもよくおざるべエぞ。[越後]コリヤ無法なふとじや。酒買ふて尻きられるよりふらいな。此ろんはてしなければ、もちやはじめみな〳〵あきれはてたるはゝこ思へばいしやごのもせんかたなく、きのどくにおもひ、[いしや]さて藥代ゆへに彼是がござつては。わしもきのどく。藥代はよいとまうしたいが。實にあれはヤヽイと申スくすりで高直なもの。なんぼ仁術でも。わしが損をいたすも。馬鹿〳〵しいやうじやによつて。南鐐一片つかはされサ。[越後]ひつきやうわしどもがお願ひ申たよつて。お藥も下されたを。それでは氣の毒。[甲忍]さればサよたばアさまには是非がない。わしどもがばさまの心もしらずにおたのみ申たがわるい。どうせず。まゝい。おいしやさまにも半分まけておもらひ申て。割合で出しませず。[越後]そのとんし。何とせうぞい。サア〳〵ばさまわり合で出して進ぜる。よろこびなされ。[ばゝ]割合だアて。あんのよろこぶことがあんべい。ごせのやけた。　ト　まだばゝはふせうちのやうすなれど、忠二福介もこたへかねて、こふとふはゝにもわり合を出させ、南鐐一片にしこかのいしやごのにわたし、みな〳〵もちのはらひもこ〳〵にして、こゝをたち出れは、はや日ぐれとなり、兩國の夜見せいちざに燈火を照らし万燈のごとく、此とき花火をあける刻げんちかければ、このほとり人のくんじゆする事おびたゞしく、今は茶店にもこしをかけべき所もなく、たゞ人にもまるゝばかりなれば、見物どころじやないとこと。[福介]それさもい。[甲忍]どふかせずやうはあらまいか。[忠二]これじやア船を借の。川へ出て。船で見るがようごぜへす。[甲忍]何さまそれがよからず。船をかりたがまし。　ト　いふゆへ忠二はみな〳〵引つれ柳はしのふなやごへきたり、※にたりか※さんてふがいつさうできやしやうかねトきく、[船宿]はりまやこんやはではらいましたが、※ちよきならこしらへてあげやしやうトいふに、[忠二]五人はちつとむりだがみなさんちよきでもよふごぜへすかトきく、[ばゝ]ちよこでもつぼでもせばくともよくおざる、そんだいねおやまかんべいといふゆへ、みな〳〵それでもよしさトいつて、ふたごしらへのうち、はゝはそこらを見廻しふなやどのあんどうをみて、あんだ川一丸吉野丸とは、ハヽアこゝにもくすりのかんばんのうできてゐまうすだ、ハアくすりやアやんだぞ、いんまにからだがくた〳〵せるがいだア、トいふうち、サア船がよふござりますトいはれて、[忠二]ヲイふなちんはいくらだね。[船宿]こんやのこつてごぜへますから。三百五十おもれへまうしましやう。おけゐりでもよふござります。[忠二]もしふなちんは拂つていきやせ

うか。[船頭]歸りでよくござるといひめすから。後の事にしなさろ。トなんでも錢さくるさはゝはけだかくはかりする、[船頭]それでもよろしうござへます。サアおめしなせへやし。きもみだくふねにのりうつる、はゝきのうふさするさおとをがたらつくゆへ、[ほゝ]ヤレ福介こしよう押へさいてくれめさろ。コリヤアハアづなくゆれもふサア。ヤツトコナ。ト越後のそばへよりそふ、ふちごはうるさく、[越後]ばゝさまむかいへならびなされ。それでは船がかしぐわいの。[ほゝ]イヽヤ爰がよくおざる。そんだにわしようやだがるこたアおざんない。氣心にそまずと。ちくとべヱおいてくんせへ。[越後]イヤサきらふのじやないども。あぶんないよつてのことんし。ヤそふふはく股をあけられてはこたへされぬもし。おまへ入替つておくれんか。[甲州]わしはもふすわつたからこゝにいず。福介さんとかわらつしやい。[船頭]もしくそふぐらついちやアあぶなふござへす。おつよくならんでくんなせへし。といはれて越後もせんかたなく、そのまゝにしている、[ほゝ]これ見され。いんまやだがらしやると。こん夜寐所へいきまうして。うらみのごせをやきまうすぞ。此うちふねこぎいづる、流石の大川、花火見物の船に一隻もすきまなきほどなれば、[船頭]もし此とほり船が込合てあぶなふござへす。橋の下までやりや

○ぼんくら　もと博奕より出でたる語。盆の上の見えぬ、卽ち盆がくらいとの義なり。

○でへぞう　（時勢世話談義）智恵のない者をは大蔵とも。のしよ共。或は野揖と申。

○大隈端　阿武隈川の端か。

○高尾とやらのつるしぎり　仙臺侯が高尾を三股の船中にて釣し切りにせしといふ謬說あり、山東京山は高尾考を書きて之れを辨正す。

せうか。忠二 あすこもすきはあるめへよ。どこぞいゝ所へつけてくんな。ト こぎゆく、むかふよりくる船あたり合そふなれは、船頭 チイとり梶だく〳〵。ト いふうち船つきあたるさ、のつているみたみたがつくりとして、はつとばかりにびつくりする、船頭 とんだぼんくらじやアねへか。とりかゞ〳〵といふに。つきあてやアがらア。つんぼうけへ。こぎようをしらねへのケヱ。大キなでへぞうじやアねへか。向の船頭 此通り込合中だアふせうしやな。ト こぎわかれる、向ふにてははや玉や鍵やの花火、流星玉火、いちどうにぼん〳〵とあがるを見て、はゞは大きにきもをつぶし あにごとだんべい。川中から火事が出來たか。ふなようれいのふとだまかア。ト いゝながら、たちあがる拍子に、ちよきぶねにぐら〳〵となる、ヤレあぶない、あれが花火といふものだ、まづしづかにしなせへと、忠二船頭ともぐ〳〵せいするうち、ぐらつくふねに越後甲忍福介もおどろき立あがれは、はゝの乗たるかたへふねかたぶき、はゝは川の中へ眞さかさまにおちるところを、ヤレといゝながら忠二福介がおどろきあはてゝはゝの兩足をつらまへる、はゝはさかさに川へ釣され、頭は水中に入て水をくらひ、あつぷ〳〵とするを、越後も一つだい〳〵ろう〳〵引あげてやる、みな〳〵あぶない事とおどろき、まづ〳〵けがゝなくてしやわせといふに、はゝはよほど水をくらへども、まけおしみの達者ものゆへ、へらず口に、はゝ あに川へおちても。うらア大隈端だアから。およぎよう得手て居まうさア。水をのんだより。あしようふつぱられたがてきなかつたアもし。そしてあとからしやかしやにわしようふきあげたア。だれだもし。越後 わしがやう〳〵ふきあげたことんし。はゝ そりやアうれしくおざる。たしか此あたりだアと聞ましたが。よりかねさまとやらと高尾とやらのつるしぎりとか。あんでもあんかうのがいなめにあつたはなしやアのし。てうどいんまのがいで。他目にやアわしが高尾で。そんたが賴兼さまのがいにみへたんべい。ト まじめでいふゆへ、みな〳〵あつかましいはアさんだ、高尾も賴かつよひさ、大きにわらへは、はらをたち、はゝ ぜんてへ。いんまのが花火だら。もふ見たくでもござんねへ。ありやアハア火玉べヱあげるのだア。そのかげで。うらをばがらち川へぶちこんで。ごせのやけたさたゞア。ハア船からあがりますべいちや。福介 せつかくふによういかりて來て。もふちくと見なさろ。ト いふうち夕立ふり來り雷ごろつきだせばみな〳〵これではふねにいられめへと引かへしもとのふなやどへぬれながらかけこむ、此ときばゝは歸りにはさだめてふなちんのわり合かゝるとおもひければ、ひとりこゝをそつとはづし一向ふがはのゝきしたにかくれている、みな〳〵ふなちんをはらふとき、はゝをたづぬれどもみへず、せんかたなくゑちごふなちんをはらひて、こゝを立いづるときあめはます〳〵つよく、かみなりきびしくなりはためき、大雨篠をつくごとくなれば、數まんの花火けんぶつ、一同にくずれたち、はせいだすゆへ、はゝアはついにみな〳〵をみうし

なひ、はくろ丁へのみちはしらず、づぶぬれになつてまごつき、通りの人をとらへて、〔ばゞ〕これもい。わしがつれはしりめされぬか。そしてわしがとうりようしていろ宿へはどふいきます。しらせてくんさい。トたづぬればまご一此ばゝアは何をいやアがる。うぬがつれや。うぬがうちを。おらがしるものか。それよりぬれちやアならねへは。トつきとばし、みな／＼かけてゆく、ばゝは十方にくれて、

〔ばゞ〕福介ヤアイ。忠二どのヤアイ。トよびたて／＼まよひあるく、また四人のものはばゝをみうしないたづねさもこみあふゆへしれず、雨にはぬれる、せんかたつきて白壁丁のまうへかけだしながら、すつとはに、

〔皆々〕まよいごの／＼ばアさんヤアイ。折ふしかみなりのなりひゞくおとぐはら／＼／＼すつてんとんとゝさん／＼／＼／＼

後序

戸の透間もる梅が香。朝寐咎ふる黄鳥ならで。感和亭の大人。予が弊菴を訪らふ。道者希見などいふ程に頓てひとつの巻を取り出ていへらく。丹波の国にはあらねども。不労意に著述たる舊觀帖と云へる珍物あり。首は浮世物眞似に容造。體はおとし話にひとし。故人の糟粕を饘として。能口眞似す。頼政の射玉ひし化鳥にも劣るまじ。是によつて忽例の欲を發。化眼貪に出さんとの心より武總を發兌しと。則わらはに後序をたのむ。ヲツトまかせと筆をとり。萬國普通々々と云爾。

惟旹文化第六聖節日

千鶴庵萬龜識

諢話浮世風呂

「諢話浮世風呂」解題

不得意な考證物

式亭三馬は本町菴、滑稽堂、洒落齋、哆囉哩樓、四季山人、遊戯道人、なんていふやうな號が幾つもあります。三馬といふ號は、唐來參和の參と、烏亭焉馬の馬とを取つてつけた、といふことが云はれて居ります。又芝全交の名を繼がうとしたこともありました。

それは三馬自身も、

喜三二、春町、全交、月池、三和と此五大家を調合して書いて居れば間違なしサ。

と書いて居ります位で、彼の見當をつけたのは一人ぢやない、大勢ある。それもその筈で、最初からをかしみを覘ふのが何よりの事なのですから、誰であつても構はない、同じ覘ひの人なら、彼にとつて難有かつたに相違無いのです。彼が特に風來山人を振廻しますのも、元來婆娑ッ氣の强い男ですから、風來山人が天下一呑と云つたやうな調子合で、大口あいてしやべり立てる、あの樣子が嬉しかつたので、正統呼はりをしたんだらうと思ひます。

をかしみを覘つて出た男ですから、彼の著作を見ますと、讀本三、洒落本三、滑稽本二十八、合卷七十七、といふことになつて居ります。彼は自己の天分を知つて、をかしみを覘ふことに努めて、自分の不得意な物には力を注がない。讀本と洒落本とは大變に數が少いのですが、それは無駄な勞力をしなかつた證據である、と云はれて居ります。けれども三馬といふ人は敏捷な人

ではありましたが、ちよつと睨んだだけで、これは自分に堪へられぬからよさう、といふやうな男ではない。彼は自分の才を自分で試みた上でなければ、よすもよさぬもきめない男だつたと思はれる。

と云ふのは三馬の端書のある寫本に「直傳大盡舞」といふものがあつて、かういふことが書いてあります。

この大盡舞は正德の頃ほひ、よし原に名だゝりし朱判吉兵衛とよべるたいこ持てふものゝ、戯れにつゞりしものとか聞り、おのれ三馬さきにひめおけるものは　かしこゝあやまりの文字さはなれば、いまはたふか川なるうたひめ何がしのもとに乞て、みづから手してうつしをへぬ、

享和よつといふとしのきさらぎなかば　式亭のあるじ　三馬

この日付を見ますと、京傳の「大盡舞考證」の凡例の末に、「享和四年孟春」と書いてある、それと略ゝ同時だつたことがよくわかるのですが、この本には大變丁寧に自分の考證を書入れて居ります。それからもう一つ「身の書」といふ寫本がありますが、これにも又書込が澤山ある。

文化八年求め得たる古寫本、倉卒に參考したれば、いまだ備はらず、追つて委しうすべし、　式亭

といふことがあり、卷尾には、

吉原七福神並丸鑑に似よりたる事もあれど、正德享保の頃にあらず、これは高尾薄雲も正德已前の名妓なるべし、延寶天和元祿の時代を探らば符合する事あるべし、

千歳の妹分にて千壽とあるを思へば、七福神によく合へども、七福神には高尾薄雲見えず、いづれ先代の事なるべし、

文化十とせにあたるとしのかみな月すゑつかた、表裝を補はせてをさめおきつ　式亭三馬

などといふことも書いてあります。これを眺めますと、引用の書もよろしくありませんし、つかまへどころも隨分見當違ひであ

りまして、京傳の生彩が無いのは勿論、種彦の精緻なところにも及びません。この成績を自分で認めた結果でありませう、彼は一つも考證物に手を出してゐない。自分の能不能を實際に試して見て知るといふのは、大に感心すべきことであると思ひます。三馬は無駄になつても構はず、自己の能力を試驗するだけの精力と根氣とがあつたのです。三日三夜の急稿といふことを得意にした男が、はかも行かぬ考證といふものに就て、自分で力試しをして見る。結果はものにならぬにしても、あんなテキパキした事の好な男が、捗取らない考證のやうな仕事に、それ程までの骨折をしたといふことは、大に買つてやらなければならぬと思ひます。

爲朝神社の神主の孫

さういふ風に精力根氣の強い男でありましたから、茅場町の地本問屋西宮新六の丁稚から、遂に有數の大作家にもなれたので、それは全くこの精力根氣の然らしむるところだつたやうに思はれる。

彼は平林惇信に學んだといふことで、書も相應に書きますし、畫は誰に習つたかわかりませんが、これ亦相應にかいた。本などを讀んでゐる暇はありさうもない、何といふ人を師匠にして學問をしたといふことも無いが、戯作をするのに一向差支無い程度のことには、自分を仕上げて居ります。殊に彼は二十歳の寛政六年に、第一作の「天道浮世出星操」を出して居りますが、その年齢から考へて見ますと、馬琴が二十四歳、一九が三十一歳ではじめて自分の作を出して居るのに比べて、大變頭の上げ方が早いのです。彼は丁稚から本屋に長いこと勤めて居つた、それが役に立つて、早く世の中へ出られたのでもありませうが、一つにはさういふ方面に堪へ得るだけの能力を貯へて行けたといふことも、無論考へなければならぬと思ひます。

西宮といふ本屋と彼とを結びつけたのは、親仁の菊池茂兵衛が板木師であつたといふだけでは決してありますまい。この親仁

といふ人は、八丈嶋の爲朝神社の神主である菊池壹岐守の庶子だといふことで、三馬は爲朝神社の神主の孫に當るわけです。この事もたゞそれだけしか傳へられて居りませんが、江川太郎左衞門の手代、吉川儀右衞門といふ人の書いた「嶋の見聞噺聞書」に、この菊池の事が出て居ります。

三月五日(天明二年)小嶋に渡

爲朝の塚在、社前に賴朝奉納の戸張、東照宮御神獻の御紋付の戸帳在、神主菊池壹岐守。

これは後々まで彼處の神主樣の家であつたらしいので、天明三年といふと、三馬が八歳の時の記事ですが、八丈嶋に菊池の家はあつても、その後は音信は無かつたやうです。

三馬の親仁は八丈嶋で生れたのですが、三馬は淺草田原町三丁目で生れたので、主人の苗字を貰つたものと見えて、西宮を名乘つて居ります。

三馬は山下御門外の本屋、万屋太次右衞門の壻養子になりました。これは西宮を首尾よく勤め上げた後の事ですが、妻が死んで離縁になり、日本橋十九文横町に居つて、古本屋をしながら黄表紙を書いて居りました。「俠太平記向鉢卷」といふものを書いたのは、この間のことで、あれは寛政十一年の出版でありますが、趣向は前年の出來事から得たのです。山王祭に麴町の鳶の者が小舟町で喧嘩をして、それが内濟になつたことがある。それを軍事に仕組んで書いたので、何方も鳶の者でありますが、よ組の方の者が大變腹を立てゝ、寛政十一年正月五日に、三馬の家と、版元の西宮の家とを敲きこはした。それから表沙汰になりまして、あばれた鳶の者は無論牢へ入れられましたが、版元は過料、作者も五十日の手鎖といふ處分を受けました。併しこの事件があつた爲に、大變三馬は名高いものになり、後の著作がずん〳〵世間に行はれるやうになつたのであります。

侮るべからざる商才

そのうちに故主の西宮の世話で、仙方延壽丹といふ藥店を引受けることになつた。これは京都寺町通五條上ル田中宗叔といふ人の店で、潰れ同樣になつてゐるのを引受けたのです。三馬が延壽丹主人などといふことを書いてゐるのは、この店を引受けてからの話であります。

三馬はこの店を引受けると同時に、本町二丁目へ移つたのですが、翌文化八年閏二月二十五日に、江戸の水を賣出しました。當時江戸には化粧料といふものがろくに無かつたところへ、これを賣弘めましたので、大變當りまして、從來あつた看板の延壽丹よりは、江戸の水の方で名高くなつてしまつた。

一體三馬といふ人は、なか〱目の着けどころが違つて居りまして、賣藥は京傳も馬琴もやつて居りますけれども、三馬のは少し違ふところがある。齒磨に致しましても、特に砂を用ゐずと斷つて、匂入の箱入を拵へてゐる。匂袋の蘭奢待といふものを賣つたり、毛生藥や、しやくの黑藥などといふものも賣つて居ります。孰れにしても婦女を目がけて居りまして、ふりだし婦人万病飲といふものもありますが、白粉などでも、御かほの藥おもひこ白粉薄化粧、といふものを賣出した。この廣告文の中を少し引いて置きますが、これは年取つた人の隱し化粧に使ふやうなものだつたのです。

あつ化粧をきらひ給ふ御方、うす化粧があだでよいと、くちべにばかり、ちよいとなさるが當世ふう、或は四十歲以上の御女中樣方けば〱しくけはいするも、ふさうぢやとおぼしめす方などは、かならず御用ひ御ためし可被遊候、

この邊のところなどは、隨分油斷の無いものだと思ひますが、彼は更に進んで産兒調節の藥を賣つて居ります。その廣告文もここへ掲げて置きませう。

月水不順を治す名方
くわいにんせぬ妙藥　天女丸
月〴〵のけいすいとゞこほれば、さま〴〵の病となるゆゑ、これを用ひてはやくつうじさするが吉、いかほど久しき不順もなほらぬ事なし、とし子、としはさみに子しげくうむ人は、しぜんと血うすくなり、体かれてよわり、多病になるものなり、五三年くわいにんせざれば無病の人となるべし、此藥用ひやうにて何ヶ年にてもくわいにんせず、もはやよきところと思はゞ藥をやすむべし、其月〳〵くわいにんするなり、

三馬が商にかけての覘ひ、才智といふものは、著作の方の働きにも增したものゝやうに見受けられます。

大自慢の合巻物の先鞭

それから三馬が大自慢で、「式亭雜記」の中にも書いてゐることがある。

文化三年の春發兌したる雷太郎强惡物語十册ものを、前後二編となして、合卷二册に分けて賣出しけるが、大に世に行はれて幸を得たり、さる程に合卷は表紙外題の數も繁からず、製作も便利なればとて、其翌年よりさらし問屋不殘合卷となりて、ことし文化七年に至れど今に合卷流行す、相撲取お○が勝たる噺ばかりするに似たれど、合卷繪ざうしを世に流行させしは、予が一生の譽と思へば、老後の思出いさぎよく侍り、雷太郎出て、其翌年京傳作西村與八板にて、お六櫛木曾の仇討といふ七册もの、是また前後二册に分て大に行はれり、

これは黄表紙といふものが、三馬によつて合卷になつたといふことなので、從來の黄表紙は一卷と申すのが五丁づつです。それがだん〳〵二册三册を一篇とするやうになりまして、その狀態が久しく續いてゐたのですが、文化になりましては一層篇數物が多くなつて參りました。これは內容の變化から來たことで、だん〳〵趣向が複雜になつて、五丁一卷なんていふものでは、とても盛りきれなくなつた爲もあります。それが爲に戲作の體裁も變つて參りまして、讀本、中本、合卷、といふ體裁にきまつて行つたのです。

これはいづれにも本屋の得になる話でありますが、「雷太郎强惡物語」に十巻五十丁のものを二巻に仕立てたのですから、三馬も云つてゐる通り、製作が便利だつたに相違ありません。今までの本ですと、五丁づつが一冊物の拵へになるので、それに一々表紙や外題をつけなければならなかつた。それが「雷太郎强惡物語」は一冊二十五丁、五巻がけといふのですから、表紙や外題の數が大變減つて、世話が省けることになるから工合がよろしい。この思ひつきは作者の肚と申すよりも、商人の肚と云ひたいものであります。

「雷太郎强惡物語」が出ますと、その翌年からは殆ど合巻になつて、從來の黄表紙はすたれてしまひました。そこを三馬が大變味噌にしてゐるのですが、それに就ては異論が無いでもありません。享和二年に京傳作の「通氣智之錢光記」等四種が、合巻の體裁で出てゐる。合巻といふ名稱は、幾冊かの黄表紙を一冊にするところから起つたのですが、合巻は京傳の先作があるから、三馬の創意ではない、といふのです。併し京傳が享和二年に、さういふ新しい體裁で出した時には、何の反響も無かつたのが、三馬が出した時に至つて、それこそ劃期的に合巻時代になつて參つたといふところを見ると、一概に京傳の先作があるとのみも云へない次第だと思ひます。

喧嘩は嘲罵癖から

そんなに商才の發達した、世渡りの上手な三馬が、どうして喧嘩ッ早い男と云はれるのか。三馬は誰にも喧嘩ッ早い男と云はれて居りまして、本屋とも喧嘩をすれば、繪師とも度々やつた。戲作者仲間とも仲の惡いやつが多かつた。これは譃ではないやうです。

三馬は若い時からよく飲む方でありまして、それが爲に嘲罵癖が烈しくなつてゐるかと思はれる。これは著作の上にも出てゐ

るやうです。勿論肌合ですから、酒をやめたところで絶無にはならない。三馬の嘲罵癖は婆娑ッ氣から來てゐるので、たゞ自分がえらがつてやるとばかりも受取れません。景氣よく天下一存と云つた按配に、傍若無人の勢で一氣に云ひまくつて、それでいい氣持になる。根も葉も無いのが多いのです。大に罵つたからと云つて、抗爭する心持とも云へず、相手方を壓伏する爲とも云へない。婆娑ッ氣といふものは、元來さう根を突張つたものではないのであります。

三馬が畠違ひの源内を嬉しがつたのも、あの大言壯語するところが氣に入つたのだらうと思ひますが、その源内にしても、胴卷に百兩づつは何時も入れて置いた、といふほど用心深い男でありました。眞面目に大言壯語するものとして考へると、如何にも氣の小さいところがあつて、不釣合のやうにも見える。彼はマヤものであり、これは全く肌合から來てゐるので、性根からさういふものを持つてゐるのでもなさゝうに思はれる。

嘲罵癖で喧嘩ッ早いと云はれる三馬の如きも、商事や著作上の事に就ては、隨分こまかい心遣ひの出來る人です。「式亭雜記」の中に、江戸の水の容器に就て、

十の目方十六匁或は十七匁あり、しかるに兩國米澤町硝子屋は百文に付十六がへにて出來する故、この家へ誂、則出來、數十に付目かた十五匁、

などと書いてゐるところを見ても、寧ろ算盤高い、小商人らしい處のある男であつて、氣が荒いどころではなく、年中喧嘩腰でゐたわけではないのです。

寂しくないその身邊

三馬は早く地本問屋の小僧になつて、暖簾の下で人となつた。永年の奉公で十分商人風に仕立てられてゐる筈だが、一生職人

肌が抜けずにゐたらしい、只だ向ふいきだけの強い、あの婆娑ッ氣などといふものは、算盤の手前として商人の出せるものではない、あれは親方とか兄哥とか云ふ人達に限つたものです。三馬は職人の忰で、親仁茂兵衛は板木師、板木師といふとわかりが悪い、判彫りといふと知れいゝ、手間を取るのですから旦那でない、親方と呼ばれる人の家に生れた。我等の懇意な老輩に幾人もありましたが、職人肌の商人といふものは變なものでした、實體な中から時々婆娑ッ氣が飛び出しますから、例のだとは思ひながらも吃驚することが多うございました。何程よく商賣氣になつたやうでも、職人の子には肌合の抜け切れない人がありました、ですから店向といひました。大きな呉服屋などでは小僧を雇ふのに、職人の子を嫌つたものでした、さうした肌合の人は覆藏がありませんから却つて親しみのあるものです。三馬が開放し流儀で、交際が廣かつたのも、奥歯にものの挾まつたやうな樣子がないからでせう。三鳥、三友、三曉、三生、三笑、三冬、三鷺等、三の字のついてゐる御弟子が十五人もあつたといふことで、その中には爲永春水や三世一九のやうに、世間に知られた人もゐたのです。人當りの悪い人でなかつたといふことも、これでわかると思ふ。嚴格で人を容れぬといふやうなところも無かつたらしいのです。

又「物之本作者部類」には、三馬の親仁の茂兵衛が酒好だつたので、月々飲代を送つた、といふことが書いてある。飲代を送る位ですから、同居してゐないのは無論ですが、茂兵衛は淺草に居つたらしく思はれます。三馬の催した書畫會の世話人の中に、淺草愚弟金藏とありますから、この金藏が親仁と一緒にゐたのでせう。さうしてこの方が親仁の職を續いだものと思はれる。金藏は繼母の産んだ子で、三馬には異母弟になるわけですが、親仁は繼母の産んだ弟と一緒に淺草に別居してゐたらしい。けれども飲代をわざ／＼親仁のところへ持たせてやる、と云つたやうな工合式であつた。

三馬は文政五年閏正月六日に、四十八歳で死んで居りますが、倅に虎之助といふ者がありまして、薬店の方は立派に株になつて居りましたから、その相續を致しました。この虎之助が又小三馬といふわけで、若干の著作を遺して居ります。

三馬は繼母だつたかで、早く實母に別れたものでせうが、とにかく親仁に對し、又自分の跡式に就ても、それ相應に仕方を立てゝ居りますから、そい身邊は戯作者仲間としては、先づ工合のいゝ方の一人であつたらうと思ひます。

譯話浮世風呂前編

浮世風呂大意

熟監るに錢湯ほど捷徑の教訓なるはなし。其故如何となれば。賢愚邪正貧福貴賤湯を浴んとて裸形になるは。天地自然の道理。釋迦も孔子も於三も權助も。產れたまゝの容にて惜い欲いも西の海。さらりと無欲の形なり。欲垢と煩惱と洗淸めて淨湯を浴れば。旦那さまも折助も孰が孰やら一般裸体。是乃ち生れた時の產湯から死だ時の葬灌にて。※暮に紅顏の醉客も朝湯に醒的となるが如く。※生死一重が鳴呼まゝならぬ哉。されば佛嫌の老人も風呂へ入れば吾しらず念佛をまうし。色好の壯夫も裸になれば前をおさえて己から恥を知り。※猛き武士の頭から湯をかけられても。人込じやと堪忍をまもり。※目に見へぬ鬼神を隻腕に彫たる俠客も。御免なさいと石榴口に屈

○錢湯ほど捷徑の教訓なるはなし　一篇の大意全く茲に在り、[illegible]面なり。

○西の海　厄拂の詞に「西の海へさらり」とあり。

○暮に紅顏の云々　「朝に紅顏ありて夕に白骨となれる」云々といふ、白骨の御文章より來る。

○生死一重が鳴呼まゝならぬ　「虎は千里の藪さへ越すに、ノフコレサ障子一重がまゝならぬ」と流行唄にもいふ。「障子」を「生死」にもぢりたるもの。

○猛き武士　古今集序に「猛き武士の心をも慰むるは歌なり」

○目に見へぬ鬼神　同上「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」とあるより來り、轉じて文身に鬼神の形など彫りたるを云ふ。

○石榴口　湯槽に入る前にある一の造作のこと。語原につき諸説あれど明ならず。

○藪の中の矢二郎　諺に、人の見ぬ所にて惡行をなす者を、「藪の中で屁をひつた」と云ふ。

又「うそつき彌二郎藪の中で屁をひつた」とも云ふより「譬へば人密に湯の中にて」云々とあるに云へり。

○**五常** 仁義禮智信。

○**留桶** 番頭に附屆がしてあれば、小判なりの大なる桶を持來る。後には流しを取れば同じく持來る。これも留桶と云へり。

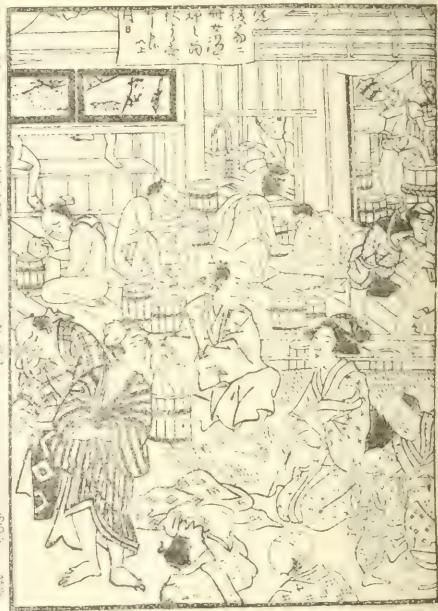
○**田舍者でござい** 邊鄙の人、野人の意、都會の人に對して自己の媚はざるを謂ふ、本來狂言言葉なり。

○**冷物でござい** ヒエ（皮膚）[illegible]になるを云ふ。

○**石子で毛を切る** [illegible]毛髮の[illegible]場合、石二[illegible]毛を[illegible]ること。

○**垢をたけな** [illegible]の意。

○**二度入** 月いくらときめて[illegible]來り夕來る[illegible]これを二度入といふ。

○**萬能膏** 膏藥の名。「萬能足つて一心足らず」の諺を利かせたり。

むは錢湯の徳ならずや。心ある人に私あれども心なき湯に私なし。譬へば人密に湯の中にて撒屁をすれば。湯はぶく〳〵と鳴て忽ち泡を浮み出す。嘗聞。藪の中の矢二郎はしらず。湯の中の人として。湯のおもはくをも耻ざらめや。惣て錢湯に五常の道あり。湯を以て身を溫め垢を落し病を治し草臥を休むるたぐひ則仁なり。桶のお明はござりませぬかと他の桶に手をかけず。留桶を我儘につかはず。又は急で明て貸すたぐひ則義之。田舍者でござい。冷物でござい。御免なさいといひ。或はお早い。お先へと演べ。或はお靜に。お寛りなどいふたぐひ則禮なり。藤洗粉糠石絲瓜皮にて垢を落し。石子で毛を切るたぐひ則智之。あついといへば水をうめ。ぬるいといへば湯をうめる。お互に背後をながしあふたぐひ則信之。かゝるめでたき錢湯なれば、此に浴する人々も。水舟の升。陸湯の桶。方圓の器に隨ふ道理を悟りて。湯屋の流し臺のごとく。己が心を常に磨きて。諸の垢をたけな。人間一生五十年。二度入の御方あるとも御一人前の分別あるは湯屋の番札の如く。一心足らぬ萬能膏あり。馬鹿に附る藥はあらずも。走馬の千里膏。鼻打て哭れる交の無二膏あり。口中散を服せば忠孝一切の妙藥。二親の安神散

○**千里膏** 同上。走り馬の商標ありしか。

○**無二膏** 同上。根太の藥。無二の交にかけたり。

○**口中散** 齒磨。口を翻すにかけたるか。

○**安神散** 血の道の藥。

兎角梵惱の火の用心は湯屋の定書に似たり。心に驕奢の風立ば家私は何時にても早仕舞ゝ。五倫五体は天地より預物なれば。大切の品を御持参物なるを。色と酒とに魂の失物不存。我から招く禍は。他人の一切存不申叓ならずや。名聞利欲の喧嘩口論。喜怒哀樂の高聲御無用。此文言をまもらぬ時は。仕舞湯に入損ひ。モウ抜ましたといはれて。後悔手巾を咬とも益なし。なべて世の中の人心は錢湯の風に等く。善悪に移り易き物なれば。權兵衛が褄襟から八兵衛が羽二重に移り。田舎の湯具から令室の絹布へも移る。きのふの纐絆一枚は棚の上へ脱しも。けふの重着は棚の上へ脱に等しく。高貴貧賤は天にあり。善悪邪正は己が招く所ゝ。此意味をとくと悟らば。他の異見は朝湯の如く。己が身に染わたるべし。唯一生の用心は。軀を借切の戸棚へ納め。魂に錠をおろして。六情を履違へぬやうに堅く相守可申叓と。神儒佛の組合行叓が牡丹餅ほどの判を居てしかいふ。

維時文化六年巳の春の發市にせばやと。辰の重九に毫を起して例の急案。后の觀月の芋を食て。屁のごとき小冊成る

石町の寓居に於いて

式亭三馬戯題

弘万齋管巻大酔書

○火の用心は湯屋の定書　云々　湯屋の定書に「火の元大切に相守り申すべき事」とあり。

○仕舞湯　今の十二時近くまであり。

○モウ抜ました　湯を落したること。栓を抜くより云ふ。

○おはれ　晴着。

○借切の戸棚　着物を脱ぎて入れる戸棚を借切にすること。一一名前を記しあり。

○六情　喜怒哀樂愛悪欲は七つ。喜樂哀怒哀は五つ。六情は何を云へるか。

○堅く相守可申叓　湯屋の定書の文句に擬せるもの。

○神儒佛の組合行叓　斯く結べる處甚だ味ふべし、牡丹餅ほどの判を押して相違なきを引受けんといふ、之を三教に質して違はずといふ、正しく談義物の骨法なり。

○重九　九月九日。

諢話浮世風呂前編　巻之上

江戸　式亭三馬戯編

五日の風靜なれば早仕舞の牌を出さず。十日の雨穩なれば※傘の樽をも出さず。月並の休日靜謐にして。賢も愚なるも。貴賤おの／＼恩澤に浴する人心。今日※煤湯を沐て五塵の垢を落し。明日※貰湯に入て六欲の皮を磨き。※いつも初湯の心地せらるゝは。げにも朝湯の入加減。嗚呼結構とやいはん。噫嘻ありがたいかな。這首に※だぶ／＼といふ僧あれば。彼首に。※ぶう／＼をいふ俗あり。※タロクと※とぐる男あれば。湯う屋と引く女あり。藥店の小二は※現金湯と洒落て讀ども。儒者の塾生反て※忍冬湯と誤るは。讀易く解難きの類なるべし。女湯の湯舟に簪を墮せば。湯汲の男。※滑川めきて探すとも。御壹人前拾文の※孔方は。青砥も惜むべからず。子供衆八文※御供付十六羅漢。※偏袒右肩の湯上りに浴衣容の※かほよはあ

○五日の風云々　五風十雨を利かして云ふ。風の吹く日は早仕舞の札をかくること定書の中にあり。

○傘の樽　雨傘を突込む樽を

○煤湯　煤拂の日の湯。

○五塵　色、聲、香、味、觸。元來は六塵にて、この外に法あり。

○貰湯　正月及盆の十六日。この日は三助がおひねりを貰ふ定なり。

○いつも初湯　「聞くたびに珍しければ時鳥いつも初音の心地こそすれ」の歌を利かせたるもの。初湯は江戸にては元日。大坂にては二日。

○だぶ／＼　日蓮宗か。

○ぶう／＼　文句を云ふこと。醉拂か。

○タロク　不明。「小野篁譃字盡」の枕言葉に「湯屋淨るりたろく」といふことあり。

○とぐる　とぐり言葉といふものあり。「きいたふう」を「ふうたきい」と云ふが如き類。

○現金湯　ゲンキンユ。留湯、即ち月極に對する言葉にて、一々錢を持ち二人湯すること。こゝにては藥店の丁稚が藥名の如く「ゲンキンタウ」と讀めるを云ふ。

○忍冬湯　忍冬を入れたる湯。漢學書生が返り點をつけしを云ふ。

○滑川めきて　青砥藤綱のこと。

○孔方　錢。孔が四角なれば云ふなり。

○御供附　湯錢八文、十文の時代にても、御供附は二十文になりしよし。

○偏袒右肩　前に十六羅漢とあるを承け、湯上りの人の姿を羅漢の偏袒右肩に見立てしもの。

○かほよ、師直　忠臣藏の顔世御前と師直。

るとも。當時の師直さらに女湯を覗かず。男湯孤ならず女湯必ず隣にあり、亭主の賓頭盧尊者は。竈を撫る糠袋を貸すいとま。拍子木で留桶をきつかけ。斜に女湯を見やりて膏薬の流るゝをしらねど。男女風呂を同じうせず夫婦別あるをしれるや。女房の光明皇后女湯の番頭にかはる。消炭の火鉢に糠の油を採り貸手巾の雫はしぼれど。却て極老人あしき病人をいれざれは。阿閦佛の化益はあらずもの。千手觀音の上這はあるべき歟。洗粉の袋はぷん／＼と匂ひて下男の鼻をうがち。風呂の壁はとん／＼と拊きて湯殿の睡を醒さしむ。或はぎやあ／＼と啼き。或はがや／＼と騒ぎ。あついといへばぬるいと云ひ。うめろといへばうめるなと喧く。どよめきわたる風呂の中しんめりとして牡丹前かうたへば六法に振こむ裸体あり、ノリ地になりて角力の段を語れば土俵入の身で出るあり。爰にあはれをとゞめしは。石榴口の冷物ふるひ聲にあらはれ。去程に是は又。馬じや／＼といふ人思ひの外立派にあらず。ハイ出ます子供／＼は江戸節を喊る爺さまにて。いつも長湯の名をあらはし。御免なさい田舎者はめりやす好の江戸子にて。ざつと一風呂手巾を濡らすのみ。されば長湯も短湯も。あるは八百屋の椽の下と松坂音頭の白聲は。店向の新下りにて。長し短し儘ならぬちよいと黄色なそゝり

○男湯孤ならず云々　論語に「德不孤、必有鄰」とあり。男湯女湯の別になりしは、白河樂翁公以來のこと。はじめは隔日に男、女となりしことあり。
○亭主の賓頭盧尊者　番臺の上に坐れる亭主の見立。
○拍子木　女の場合は二つ、男の場合は一つ、番臺にて拍子木を打つ。[illegible]の桶あり、その人來れば拍子木を打ちて三助に知らすなり。
○男女風呂を同じうせず　男女七歳にして席を同じうせず、の洒落。
○夫婦別あるを云々　夫婦別あり、長幼序あり。
○糠の油　消炭の上に油紙を敷き、その上に糠を[illegible]取る、いんきんたむしの藥。
○阿閦佛　阿閦佛。光明皇后の[illegible]に阿閦佛來る、[illegible]の化身なりしといふことあり。前に「女房の光明皇后」云々とあるも、この伏線と見るべし。
○千手觀音　[illegible]の異名。
○しんめり　しんみり。

節はサイ子エモシの合の手あり。にやんまみじや佛と咬まぜれば、法蓮陀佛と吐出すあり。ほゝほんと腮でころがし。ふゝふんと鼻へぬかすに引かへて。是は唐山かね金山の禁とは吾から名告る胴滿聲。あたまを押へて呟くあれば尻をたゝいて語るもあり。片足あげて諷ふもあれば踏はだかりてどなるもあり。居たり立たりする中に。寐ててんつるの口三絃は。湯舟の隈に屈居る藝なし猿の戯れ口。神祇釋教戀無常みないりごみの浮世風呂。所はいづくと定ねど時候は九月なかばの頃。錢湯天明ていまだ店を開かず。

朝湯の光景

▲むかしは錢湯の看板に矢のかたちを木にてつくり門口の目印としたり弓射といふ心なるよし古き繪さうしにまゝ見及びぬ今も遠境には用る所あり

▲夜あけがらすのこゑ かアく〳〵〳〵 ▲あさあきんごのこゑ なつと納豆引 ▲家々の火打の音 カチ〳〵〳〵 ○此幕あきに出るものは二十あまりの男ねまきのまゝの細おびにて下まへ下りにきものをきて下駄の歯のかくるゝほど裾を引ずり、油で煮染たやうなる手ぬぐひを、いくぢなくだらりと肩にかけ、手のひらへしほをのせて、右のゆびではをみがきながら、虫の這ふやうにあゆみ来るは俗にいふよい〳〵といふ病の人 ぶた七「チヤままだ明ね。明ね。明ねか。あ。あひやねなべやぼだぜ。トひとりごとをいひつゝ戸口に立よりてうしはづれに高聲「ばゝばんぢさん。〳〵。起ねか〳〵。

○枕丹前 長唄の曲名。

○六法で振込む裸體 六法は鎗持奴の形。「裸體」は踊身、立身などゝ同じく、身振の行はれたるより來りし言葉。

○ノリ地になりて云々 義太夫の拍子あるところ。角力の段を語るとあるより、土俵人の身振にて出づる人あるを云へり。

○去程に是は父 説經の言葉。古くは淨瑠璃の六段本にあり。

○馬じや〳〵 道具の大なること。

○出ます子供〳〵 湯槽より出づる時、人を押分くるに當りかく云ふ。

○めりやす この頃稍ゝ流行下火になれるか。

○されば長湯も短湯も云々 「浮世床」三編下に「戒名の長いもあれば短いもあるは八百屋の緣應信女」といふ歌あり、同じ所より出づるならん。「絃曲粹辨當」の「なぞおんごう」に「長いもあれば短いもあるが男の腰のもの」といふ唄あり、調やゝ似たれど猶考ふべし。

○白聲 拍子無きこと。

○店向の新下り 上方にて子飼時代を過し、中年になりて江戸に下り來る店員。

○唐山かね金山 「猩々の盃」に「是は唐土かね金山の麓」とあり。支那にキン山と呼ぶ山あるを以て、徑山をコミチキンザン、金山をカネキンザンと區別す。

○よい〳〵 中氣。

○かゝあたばね　ッゝコミと云ふ。[illegible]自序に「婦人の毛を厚くて俗だと否がる日本人」とあり。

○貝の口　帯の結方。

○ほうをのべゝ　華魁の着物に[illegible]。川柳には華魁に[illegible]させる句多し、雞群の一鶴、それ以上といふ意か。

○人をつけへにした　「うつけ」の略か。人を馬鹿にした。

○金時　小豆の煮たるもの。

○あげて來やアがつて　取つて來ること。[illegible]て來るの意か。

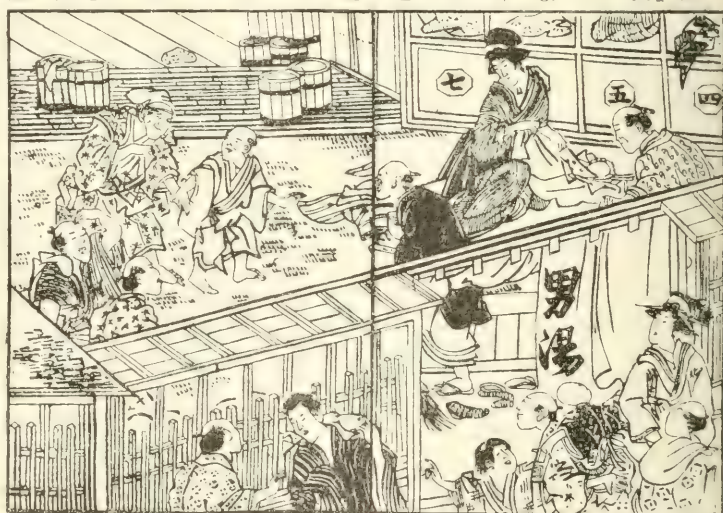
○かながしらから揚錢　顔面を云ふか。「かながしら」は魚名。「揚錢」は株を持てる人に揚込む錢。

おお。起ねく\けつぱた燒痕すウ程。おておてんざま。おあがや。おあがやひつた。コ。コ。コ。コ。ばんたんチヤ。チヤ。チヤく\。くそく\。くそふだく\。エ、エ、けたねっ　トそばにねてゐるいぬにむかひ　てめかく\わいやつだなてめだねだとゝこれたてくそふだく\ナア。こゝ。こちくしよく\。　トこごとをいひながらはみがきのつばを犬にはきかけてようく\してゐるところへ　▲ひたいをぬきかけびんぎりかゝあたはね、二十二三の男、さらしの手ぬぐひこころく\くちべにのつきたるをかたにかけはみがきのふくろをやうじにつらぬきしをはけのあいだへはさみ、もゝ引をきるめて小わきにおいこみねおきのまゝにて來　○むかふ横町より此ごろひたいをぬいたと見ゆる、はたちあまりのをとこ帯と下駄ばかり、目にたつありさますこしくびをきけておくばをやうじでみがきながらきたりしが、つえをはくひやうしにかたの手ぬぐひをおとすこちらの男見て　▲べらほい。手拭が落たイ。何をうかく\しやアがる　トわらひながらいふ　●下駄の歯のさきでぐるりとまはりながら手ぬぐひをひろひあげ、うしろをふりむいて、※貝の口を見ながらくると又犬につまづく　「キヤン　●ろくせうめ。氣のきかねへ所にうしやアがる▲ナニてめへが氣のきかねへくせに。ざまア見や●そねむなイ。此野郎ほうをのべゝを引張たと思つて。なんだまだ湯はあかねへか。朝寐なやつらだぜへ。エ、人をつけへにした何時だと思ふ。モウ納豆賣は出直して金時を賣に來る時分だアドレ手拭を見せや紅を付て。化粧をして。ヘン。いゝ業晒だぜへ。あれが所からあげて來やアがつて▲よせエ。癪をいふなエ。男なら持て見や兄が違はア。●違ふはづだア。目鼻がなけりやアわさびおろしといふ面だから。かながしらから揚錢を取さうだア▲こんべらばア　トいけぞうだんにごぶ板の上へつきとばすと　●ア、糞だどつこい　トとびのき　誰かモウ踏付た跡だいゝ。今。今。おやふだ●おめへ踏だか。なんの踏ずともな事だ。夫がほんとうのよけいだぜ「よゝよけでも踏だかや。したゝねゝねなゝた。ココ。下駄たゝたつてたゝたゝらた▲何をいふかねつからわからねへ。コウおめへの病氣もこまつたもんだぜ。まだ能くねへか「なゝ。なに。最能く\。でで大丈夫だく\。こゝ此通だ夫く\。のの。此通大丈夫だア　トあしをふみしめて見せるとよろけさうになるをこらへて足をふみかためながら　コ。コ。此樣だく\足しや大丈夫だ此間も本所の。伯母ざん伯母たんの方に。火火火事だつた。かけてつ

○おはりごふう　長めに封じたる御札の如きもの。病人の枕許に貼り、一番上まで貼上ぐれば全快すといふ。「堀の内さま」は妙法寺。當時流行物の一なり。

○空心　空腹。朝飯前。

○れこだア　手眞似にて刀をさす様子をしたるか。

たア。働たア〱おもたま働たア。伯母たん嬰た伯母たん譽たア●何云て譽た　よい〱「エヱ大丈夫だつて大丈夫だつて。夫ぢやア讃岐の金毘羅様ヱ。金毘羅様ヱお礼參に行。行ア。行る迚▲堀の内さまを信心さつし。まだ〱ほんとうじやアねへ。あぶねへもんだ　よい〱「ほんのつたま。おはいごふいたでた。あいがてゝ。たゝたてやたちただち。なもほねぎよ〱〱〱とつて。おでもこ〱さばぺさばぺ。とねた▲お題目を三百遍じやアすくねへ　よい〱「あたあた。あためち。めだ。おでもこ。かやぱ空心でなくたアけかねてたおたアおふくど。おでへおでへ可愛がる。滅方だ〱。すてすて。すてきに可愛がるから能。淺艸の伯父たん。おでへ。悪。悪がつて坊主になで。坊〱坊主になてはア。●坊主の方が能からう。伯父御の異見につくが能。　よい〱ニナニ〱。おふくど〱。お袋合点しねへ。おで。おッつけ。花聟花聟だアたまねへ〱。※れこだア。〱。れれ。れこだア▲お侍になるのか　よい〱「兩刀だア〱。たまねへ〱。コ。コ。足は此通。大。大。大丈夫だア〱。トごぶ板の上で、ふら〱する足

○俄　吉原の俄。九月なり。

○はいがらくり　折鶴などの中へ蠅を捕へて入れ歩かするもののよし。

○吉田町　本所吉田町。夜鷹の住所。

を、二ツ三ツふみしめるひやうしに、湯屋の大戸を内よりひらく、とたんによろ／＼として、大戸へこけかゝりしが、ふみとまらず戸につゞいて、内にはへあふむけにごつさり　●▲ア、あぶねへ／＼　湯屋のはんとうきもをつぶしてとびおり、二人ともろともにだきおこす、此内よい／＼はあふむけにころんだまゝ、目をぎろ／＼して、人のかほばかり見てゐる　はんとう「何所もけがはしなさんねへか●夫見さつし。いふくちの下からころんだア　▲●アハ、、、、　よい／＼「な。な。何。大丈夫だ／＼。イヒ、イヒ、イヒヒ、、、、　トまけおしみのにが笑して上へあがる　はんとう「どなたもお早うございます　▲●アイ●ごうてきに朝寐だの　はんとう「アイゆうべ夜を更しました▲怪しいぜ番頭●※俄へでも行たらう　はんとう「へ、、、、夫なら能けれども　ト敷ぶさんで錢箱に鏡棚の上をはたきながらすはる　○二人ははだかになりよい／＼の方をむいて　●又すべるめへぜ。ヲ、寒い。今朝はめつぽう寒いナア▲とでございヤナ。同行でござい。同行／＼　トかけ出して　是はいな　トざくろ口をはいるすぐにそゝりぶしなり「よい／＼ははだかになりて、手ぬぐひをいくおなく、前へあてごしやうだいじにむかふをにらみつめて、※はいがらくりのあしざりであゆむ　よい／＼「ヤやつとこさ　トざくろ口をくゞり　御免ね／＼。暑。暑。こいちやアちい。めつぽうだ。石川五右衛門だア／＼。トまたぎて、かほをしかめながら、まけぬ氣ではなうた「ア、今は※吉田町でねんとゞねんとゞよ　▲●こいつア。いさみだ。アそりや。ハそりや　ト二人にはやされてよい／＼いよ／＼ぶにのり　夫で。ねんとゞ。ねんとゞとゞとつねん。　おもてのかたより人來るは、七十ばかりのいんきよ、置づきん紙子のそでなしはおり、十二三のでつちに、ゆかたをもたせてつゑにすがり、くちをむぐ／＼しながら　はんとう「御隱居さん。今日はお早うございます　いんきよ「どうじや番頭どの。だいぶ寒くなつたの　はんとう「ハイそろ／＼加減が違て參りました「イヤ違た段ではない。コレ鶴吉よ。履物を用心しろ　ト上へあがりみゝのわきのじゆずをはながみへはさみながら　ヤゆふべは寐そびれてこまり切たて。それに犬めが。ヤないた／＼。此としになるが。ゆふべほど犬の吠た晩は覺ぬ。それからまづ。ちやんと支度して。布團の上にすはつて。たばこをぱくり／＼のんでしばらく考てゐた所が。さて寐られぬ。さうでもない。内の用心を見やうと思つて。手燭を持て表裏を見たが。別条もなし。又もとの床へ這入たが。イヤ若い者といふものは。よく寐るものだ。おれが起て家内を氣をつけてあるくに。ひとりでも目

○七ツ金とぞ五水りやう　あれ一木九からに火三六の山に土一ツ七ツ金とぞ五水りやうあれ」魂の數を云へる歌。三世相にあり。

○梅紅散　歯磨。製賣元小網町の伊勢吉。

○南蠻漬　唐辛子漬。

○徳利のお明　通ひの徳利。貧乏徳利。翌日は小僧が集めに來る。

○徳願寺　行徳にある淨土宗の寺。花菖蒲に名あり。十夜にも田舍に稀なる賑あり。

○萬屋さまが出る日　家々にて毎月施物を出す日の定れるものありしたり。

のさめたやつがない。あれだから由斷はならぬて。コレハぴん助どの早かつたの　ぴん介「ハイ御隱居さんお早う。ゆうべの地震は何時でござります　いんきよ「それよ。あれからしばらくして七ッが鳴たから。八ッ半前だらう。九は病ひ。五七は雨に。四ッひでり　ぴん「※七ツ金とぞ五水りやうあれ　いんきよ「イヤ／＼六八ならば風としるべしじや　ぴん「ほんにさうだつけ。魂の哥とはき違た。道理で風をひいたやうな心持だ　いんきよ「イヤサ吹く風の事さ　ぴん「ホイ又違た。私は又。九が病とあるから。六八も風をひくだらうと思つた。チツトおあぶなう　トつゞいて入る　▲これより追々人ごみとなる　はみがきうり「※梅紅散くすり歯磨口中一切。ばいこさん／＼「あさアりむツきん蛤むツきん「ひしほ金山寺。醤油のもろみ「菜漬なら漬※南蠻漬。なづけはようござい「御用はよろしう。伊勢屋はよう「御用は能。御用は能。※徳利のお明はございませんかな　もくぎよをたゝくぼうさま「なむあみだぶ／＼。なむあみだぶ。ボク／＼／＼　はんとう「あげませう　トほうしやする　なまみだぶ／＼／＼／＼今日の御志御先祖代々一切の諸精靈證大菩提のためなむあみだぶ／＼／＼ボク／＼／＼／＼／＼　こしのまがつたおびくにふたりづれにてくる　りんの音「チリリンチリリン　ばんとう「進ぜませう　びくに「アイおありがたう。にやんまみじやぶ。にやんまみじやぶ。西光さんおまへの頭巾はいつもよりあたらしくなつたやうだ。わたしが目のかすんだせへかの　西光「ナニサ去年のお十夜に※徳願寺さまへお通夜をしたらのや。私が傍にちやんと落てあつたのさ。主がしれねへからつゞくつて持のよ。頭巾がわるくなつたからのや。小裁をめつけたら拵よう／＼と思つた所。これが信心の徳とやらだ。のう妙清さん　妙清「ほんにそれがお如來さまのお授だらうよ。のや西光さんヤレ／＼にやむあみじやぶ／＼。ホンニけふは※萬屋さまが出る日だよ　西光「マア叶屋の方から廻ていから　妙「ア、腰が痛へチリリンチンリン／＼

○いつまでもこゝに稲荷や福の神　稲荷と「こゝにゐる」とをかけしもの。

○アイ和尚　これは願人坊主なるべし。

○跡の〳〵千次郎　子供が遊ぶ時に云ふ言葉、一列縱隊になり蹈みながら、先へ行く子が「芋蟲ごヲろごろ、瓢簞ぽつくりこ」と云へば、後尾の子が「あとのあとの千次郎」と云ふ。

○じやうけるな　ふざけるな。

○しつぱり物　しつかりの意か。熱きこと。

○海老屋か扇屋か　王子に在り。「武江年表」寛政十一年の條に「春より王子料理屋海老や扇や見世開きあり」と見ゆ。「文化秘筆」文化十三年の條によれば、扇屋を十五年この方と云へり。

ト つゑをつつぽつてからだをそりてこしをのばす　坊「※いつまでもこゝに稲荷や福の神ツ。※アイ和尚お久しぶり朝坊主丸まうけツ

ばんとう「出ねへ〳〵　坊「さういはずとおくんねへ丸まうけだア。アイ一文。アイ和尚二人一文　ばんとう「出ねへ〳〵　坊「出ねへ〳〵ッ　ト くちまねしながら手桶を持てとなりへゆく

▲四十余の男、六ツばかりの男の子の手をひき、猿まはしのやうにせなかへ負しは、三ツばかりの女の子、竹でこしらえたる持あそびの手桶さ、やきもの、かめの子をもたせて、なまのろいくちびやう「よい〳〵〳〵よ。アそりや〳〵來たぞ。おぶうはどこだ。兄さんヤころびなさんなよ。能く下を見てあるきよ。アよい〳〵〳〵よ。アおぶうはこゝだ。そりや〳〵ばゝッちいだ〳〵。飛だりとんだり、チ、きたなや〳〵。コレ兄さんはの。わん〳〵のばゝッちいを踏うとしたよ。坊はおとつさんにおんぶだから能の　せなかのいもと　坊おんぶ　チ、。チ、。坊はちやんにおんぶ。兄さんはあんよ。サア下しな。コリヤ〳〵待たり〳〵ころぶよ〳〵。サア兄さんひとりで衣を脱な。坊の衣はちやんが脱せる。ソリヤ手を抜たり　兄「おいらはモウ衣を脱だよ。※跡の〳〵千次郎おめへはおそい。おめへはおそいと　ト ちいさい子のあごの下をこそぐる　「コリヤ〳〵※じやうけるな〳〵　そばの人「チヤ兄さんのには。似指があるが鶴さんのはねへの「アイ鶴は落しましたへ、、、、。福助さん扨此日和は能く續く事でございますね　福助「さやうさ是ぢやア豐年でござります　金「さやうさ。サア這入ませう。コレ〳〵兄さん。すべりなさんな。鶴さんはお持遊を落すまいぞアよいとこさ。福助さんモウ是ぢやア納らねへ。子が出來ちやアみじめだぜ。　運「能おたのしみだア　金「能苦さ。いくぢやアねへ。ソリヤあたま〳〵。ハイ子供でござい〳〵　ト ざくろ口へ入り二人の子をしめしながら　兄さんは手のとゞく所をしめしな。ソリヤだぶ〳〵〳〵ア、。能いぞ〳〵。溫で能ぞ　德藏「是は金兵衛さん。子供衆には。チト※しつぱり物でござりませう　金「ハイ德藏さんきのふは何所へお出なすつた。大分御機嫌だつけチ　德「ハイ王子へ行ました　金「ハ、ア※海老屋か扇屋か子

○今口巴屋　吉原の引手茶屋山口巴。

○逆櫓の淨瑠璃　「平假名盛衰記」の船を出すところに「ヤッシッシ」と云ふを指す。

○鐵炮の方まで　釜の方まで。

○うなノヽ　叱る、打つこと。うのノヽとも云ふ。

徳「夫ばかりですめば能のに。田圃通を抜ました　金「例の※今口巴屋かチ。ハヽヽヽ、どうも打留はさう來るてハヽヽヽ　徳「チトうめて上やう。子供といふ者は熱い湯で懲させると湯嫌ひになるものさ。ハヽ（トン）ノヽノヽトヽ（はめをたゝく）　トントト（詞返）湯をかきまはす時は。※逆櫓の淨瑠璃を語る人が能い。サアノヽ皆さまはねます。ヤツシツシ。ヤシツシ（トかききはよ）　金「ハイノヽ是はありがたうござりますサア這入ましよ。兄さん早く這入な　兄「おとつざんまだ熱いものを　金「ナニあつい事があるものか。おおさんが折角うめてお呉だは。鶴は強いから。コリヤ。コリヤ。這入ました「※鐵炮の方までぬるくなつたモウよしトンノヽ　金「鶴は強いぞノヽ　兄「おとつざん。おいらも強いよ。コレ見な這入たよ　金「ヲ、つよいノヽ。手桶でだぶノヽを汲で。ソレざア引。面白ぞノヽヲヤ。ヲヤ。龜の子がおよぐよ。ヲヤ。そりや。ぶくノヽノヽノヽ。ア、能ぞノヽ。兄さん能沈で溫んな　兄「アイよく沈むと金魚や緋鯉が出るのう　金「ヲ・出るともノヽ。啼くと水虎が出ますヲ、こわい事。いやノヽ。水虎出るな。鶴は利根者だから啼ませぬ。のうなかねへのう　兄「おいらも弱虫じやアねへよ　金「ヲ、。ヲ、。兄さんも強い。ソリヤ耳の脇にばゝッちいの溜らぬやうに。アよいと。目ねぶつてな。ソコデ鼻の下のお掃除をして虫の食付ねへやうに。ヤレ能子になつたぞアレ他所のおおさんがお譽だよ。ソリヤお舌をべろりヤレ能子になつたぞ。ホイノヽお咳が出る。ヲ。ヲ。惡いおとつざんだの。あんまりお舌を洗つたから。腹の方は灸があるからよしませう。灸ウ誰すえた　妹「おつかア　金「ホ、ッおつかアか。にくい母めだの。※うなノヽをしてやらう。可愛坊に灸ウすえて　妹「おつかア。うのウ　金「ヲ、ノヽ。母アうなノヽしてやらうぞ　兄「おとつざんモウ出よう　金「まだノヽモット溫て　兄「それでもせつねへものを　金「ナニおとなしくねへ。鶴は是ほどおとなし

○お月様いくつ　山中共古翁説に、全國にて六十幾つかあるうち、四十幾つまでは「十三七ツ」にて、他に十三九ツ、十三一ツなどもあるよし。

○仲景　張仲景。漢代の醫家。

いちのな。サア〳〵兄さんも鶴も哥をうたひな　兄「おウ月さまいイくウつウ十三なゝつ　金「そりや兄「まだ年わアはへなア（若）　金「あの子をうんで　兄「この子をうんで　金「サア〳〵鶴もうたひな　妹「おまんだかちよ　金「チヽ〳〵おまんにだかしよ夫から「サア夫から　妹「太鼓あつて　金「ナニ〳〵まださお万どうけつた　兄「油買に茶ア買に　金「アリヤ兄さん上手だよ　兄「油屋の椽で　金「氷張て　金「チヽ氷が張つて兄「すべつてころんでヱ　金「あアぶら一升こウぼしたア　金「サア鶴もいひなその油どうちたト。サアいひな「次郎どんの犬と　兄「わアい〳〵おとつぴさん違つたア。太郎どんだものを　金「みんな嘗て　妹「ちイまつた　金「おとつぴさんは忘れますのうハヽヽ　兄「其犬どうした　金「サア〳〵そこだ〳〵　妹「たいこ張て　兄「あつちら向ちやアドドドン　金「こつちらもドドドン　兄「さうじやアねへ。こつちら向ちやアどゝどん　金「ホイさうか。アどん〳〵どんよサアあがりましよ。ハイ出ますもの子ども〳〵。おつかアが待てるだらうぞ。お芋か。餅か。何でも能子になつた御褒美に待〳〵して居るだらう。ヤレ能子になつたぞ。アリヤ〳〵初がお浴衣を持てお迎ひに來たぞ　妹「はちゆべゞ（初衣）　金「チヽ〳〵「サア初や。あけるぞよ。ヤレ能子になつたぞ。（上りばにては醫者といんきよとはなしをしてゐる）くわん二「御隱居どうでごつすナ。相かはらず碁でござらう。伊勢十の主人。油八の太郎兵衞なる者。おの〳〵御出會かナ。所謂碁敵なる者であらうて。ハッハツハッハ　（卜人をあざけるやうに笑ひ一口さきにて切り口上に何なる者といふくちぐせあり）　いんきよ「イヱ此頃は親類どもに病人がござつて。家内の者が代り〳〵に夜伽に參るの。イヤ何のかのと取紛れて碁も出しませぬて一ム、夫はわるい。ハヽさて夫は氣の毒千万。トキニ病体は　いんきよ「兎角食物が納り兼まして。食ると尾籠ながら吐まする。此節はます〳〵重りますばかりで　いしや「ハヽア誰におかけなすつた　いんきよ「仲景さまを二廻りで驗が見えませぬか

ら。孫邈さまを中たびお願申て。只今では丹溪さまでござります　いしや「何と見立たナ　いんきよ「まづどなたのお見立も膈症じやと仰られます　いしや「膈症でないっ　ナニ夫が膈症まづ物を食して吐すものを膈といふは。俗物も當推量にいふテナ。膈噎翻胃なる者は。なか／＼又大に異なるものだて。何として／＼。あの男等が小量で何がしれるものか。ハッハッハッハ既に醫書といふ内にも外臺千金方などの。説によれば。エ、何といふ事があるて。エ、何アノ何でごつすて。息は鵞棒に似て飛で散亂し。人は膈症にして達て俳諧すとある。すべて病人の息は鵞棒といふて。關羽張飛が持た棒を呑だやうなもので。息がせか／＼といきだはしいものでござるから。兎角飛で散亂したがる。此膈症なる者は。所謂俳諧などを好む人にある病ひとござつて。人は膈症にして達て俳諧す。人が止ろ／＼といふ程達て俳諧する者などに生ずる病だて　いんきよ「なるほどさやうおつしやれば俳諧が好でこまりまする　いしや「イヤそれも一寸哥仙ぐらゐはよけれど。五十員百員など、くると。留員で又業をなすて。それ御覽じろ俳諧が好だ。見ずとも其通だ見脈にして病を指す此方は聞たばかりで病を察するはさ。ハッハッハッハ。ア去嫌がある食物をお氣をつけられい。其膈噎翻胃に似て非なる者を鵜飼の症といふ。是すなはち物を食てすぐに吐くものです。おそらくは鵜飼の症でござらう。難治の症でごつす。あの男等は匕先より口先が功者で。病家の俗物をとらへては。新渡の唐本には点がなくて讀にくい。唐人もはなはだ杜撰が多いなど、いふ傍からモシ丹溪さま鷄卵を食たいと申ます。いかゞ致しませうといはれて。ア、ア。なる程エ、。鷄卵はよろしくない。しかしたべたいと思はゞ。あひる卵を少しが能い。など、てにはのやうな事をいふ男どもだ。ハッハッハッハ。歎しい事だてナ。ハッハッハッハ。イヤ。チトお出なさい。此間は

○孫邈　孫思邈。唐の人。

○丹溪　元の人。朱震亨。このところ故意に支那の名醫の名を用ゐたり。

○膈症　胃癌か。

○千金方　醫書の名。

○息は鵞棒に似て云々　「和漢朗詠集」の「雪似鵞毛飛散亂、人著鶴氅起徘徊」のもぢり。更に「鵞棒」を關羽張飛の持た棒云々とあるは、蛇矛のもぢり。

○哥仙　俳諧の三十六句より成るを云ふ。

○五十員百員　同じく俳諧の五十句、百句より成るもの。「留員」は留飲にかけたり。

○去嫌　俳諧にて云ふ去嫌を轉用せるもの。

○新渡の唐本　舶來書。唐本は無點に極りたるを、半可通にてかく云へり。

腹こなしに鞠を初たでごへす。所謂蹴鞠なるもの。成通卿ほどの高手にもならねど。踏つぶすまでも大きく腹こなしに能てナ。チトお出なさいドウダ番頭。所謂主管なる者も大役だてナ。ハツハツハツハ

ばんとう「へ、、、、今日はどちらへ

いしや「ム、今日は芥子園が書畫會から顧炎武が所へよつて。山谷が詩會へ廻るが。東坡や放翁が代作をたのむ更だらう。兎角隙つぶしが多くて病家の小言を聞てならぬ。是で醫者が流行てはたまらぬ。イヤしからば。ハツハツハツハ　トゆかたをかゝへて出てゆく

▲八兵へといふ男、あたまからほう／＼とゆげをたてゝ手ぬぐひを下おびのかはりにこしへまいてきものをふるへてある　▲松右ヱ門といふ男古風にふんどしのさがりをあごへはさんでしかつめらしき手ぬぐひは丸くしてあたまへちよいとのせ

松右ヱ門「八兵衛さんアレ見なさい。深い笠をかぶつて。障たらひけさうな羽織を着てあるくにが／＼しいあれが三十箇所の地主さまの果だア

八兵「角のどらかネ

松「さうさ痛はしさもいたはしいネ。心がけがわるいと皆あの通りだ

八「ソリヤまく／＼よ。天王さまはトいふ形だネ

松「あの御親父は伊勢から出て來て一代に仕上た人さ。其代利勘だ。なんでも人は奢てはゆかぬネ。けふは大分魚が見えるから。チト驕つて奉公人に食はせようといふ所が。大きな皿に鯷の酢煎なら五匹ばかり。尾頭をならべて。鯷が小笠原流で。トしやにかまへて居るはさ。こはだならけふ買て燒て置て。自身にあすの朝さげかごを提て河岸へ行きます。河岸中をぐる／＼廻つても直が出來ぬから。十大根の折を買て來て。ソレきのふの燒たこはだを一匹づゝ入れて。輪切大根の煮付。夫が惣菜。大勢下女はしたがあつても。菜は婆さまが出てまんべんなく盛わたす。爺さまは彼こはだをむりゝ／＼とあたまからしてやりながら。魚といふものは頭にうまみがあるものだといふから。四五十人の手代子供が無據首から食はねばならぬ。ソコデ物が廢らぬ。年中朝が茶粥で。晝が汁ばかり。夜食は澤菴。それも塩のあた辛いやつだから。二切で湯までの菜になる。けふは佛の日だ

○成通卿　鞠の名人。「古今著聞集」に見ゆ。「成通卿口傳日記」などいふものあり。

○芥子園　李笠翁。明・清の人。

○顧炎武　明の考證學者。

○山谷　黄庭堅。宋の詩人。

○東坡　蘇軾。宋の詩人。

○放翁　陸游。宋の詩人。こゝも彼らに支那の大家を擧げたること、前の名醫に同じ。

○古風にふんどしのさがりを云々　當時にも「元祿の生れふんどしあごでしめ」「古風なる男ふんどしあごでしめ」などあり。

○ひけさうな　衰れさうな。

○どら　道樂者の畧。

○まく／＼よ　まかしよ／＼と云ふ。是は寒修行として、橋本町に住む願人坊主なり、切繪といふ小さき錦繪又は方一二寸の紙に彩色ある畫を摺りたるを撒きあるく。

○天王さま　わい／＼天王は神田明神社より出づ、赤き小紙片に黒く牛頭天王と刷りたるを、年

年九月氏子の町々を巡行して撒布す、その言葉、「天王さまははやすがおすき、子供やはやせ、わいわいとはやせ、まけ〳〵ひろへ、よやせ〳〵、わい〳〵はやせ」

○八盃豆腐　細にきりたる豆腐。

○薩摩いり　米と小豆とを混ぜ、薩摩芋の四角に切りたるを入れ、ふかしたると煎りたると兩樣あるよし。「當世乙女織」に「大婦の馳走、およきいさつま煎といふ豆茶でもてなし」と見ゆ。

○株　何かの權利なり。そこを蕪に洒落て「かぶは汁の實に買たばかり」と云へり。

○かて飯　雜物の入れる飯。

といふ所が。八盃豆腐が。平の中をゆる〳〵と游で居るやつさ。鰹節のはいる汁は夷講と生辰ばかり。三度の飯の外に食ふものは。冷飯を干た糒の塩いり。其中へ田舎から貰た味噌豆をいれた所が。豆の数は鉦太皷で探す程だアおめへ。其豆いりの外は自作の醴よ。婆さまが上總産だから。薩摩いりといふ茶の粉を拵るばかり。其外に奢といふはさつぱりなし。御先祖さまを大切にして。出入の者に目をかけてやらしつたから。身体はよくなる筈。金が子を産で家質が流込む。商では設かる。暫時の内に大造な物になつた　八「なるほど私等が親父の咄を聞に。まづ酒は夷講ばかりで。常に客のある時は蕎麦二ツを鼻の先へおいて。サア〳〵お辭義なしにお上んなさいといふ所が。たつた二ツだから客も一ツ食つて立つ。そのあとで婆どのヤ。さらば相伴しませう。こなたもまいれと半分づゝ食との事だ。夫じやア金もたまるはづさ　松「まづ第一冥利が能いわさ。僅三十年の間に。地面が三十二三箇所。土藏が三十。穴藏が二十五六。出入の人數からかけては事も大造だて　八「それをたつた二三年で潰した子　松「さやうさ。なくすは早い物。一文の錢もあだおろそかには設りませぬ。おまへがたもお若いが錢はつかひなさるな。金罰があたる。ナア番頭。此番頭もだまり〳〵してるて。モウ株でも買たらう　ばんとう「ハイかぶは汁の實に買たばかり。どうも錢金といふやつはたまりませぬ　松「イヤ〳〵至つて溜能ものだ。心がけが悪いから溜らぬ。ありがたいこの御江戸に居て。金のたまらぬ事があるものか。錢も金も一ツ所に集るありがたい所だによつて。諸國の人〴〵が皆出て來て。出世するではないか。番頭も金を持たぬ氣なら。國に居てかて飯を食て冷かたまつて居るだらうが。ナントどうだ一言もあるまい　ばんとう「コレハあやまりました　松「しかし見所があるテ。此番頭はたのもしい。綿の厚い着物が嫌では

○寒の内に筍云々　二十四孝の孟宗の話なれど、黄金の釜は同じく郭巨の話なり。二者混雜せり。

○どつぴ／＼　突鼻と書く、醉ひて歌ひ狂ふにいふ。

○茶臼藝　挽臼藝ともいふ。中途半端にして長藝にならぬもの。

○豐後よみの豐後しらず　「論語よみの論語しらず」のもぢり。

○珍事ちうよう　珍事中夭、珍事中庸などゝ記す。「義經記」にあり。「膝栗毛」にもこの語見えたり。

身はもてぬ。貴さまの着物も。薄綿になつては夫限だと思はつしやい。八兵衛さんも今ではかゝさん一人だから。隨分孝行しなさい。世話をやかせなさるな。唐の何とかいふ唐人は。寒の内に筍を掘らうとしたら。金の釜を掘出したとさへある　八「ハイ私どもが孝行は金の釜も掘ねへから。唐銅の釜を擔て來る。醴でも呑せるくらゐな事さ　松「夫でも能のさ。今のどちらがそれ程な身上を受取てあのざまは不孝の罰だ。ナニが御親父の葬に。燒香をすれば。役者のまねをして上下でゐざりあるく。現在親の別に。哀の情が見えぬ奴だから。ろくではあるまいと思ふと案のごとくだ。ヤレ藝者の。ソレたいこもちの。ヤ何だはかだはと。さま／＼の者を内へ取込で。どつひ／＼と騷ぐやら茶屋だの女郎屋だの。すべつたはころんだはと。内外の物入が強くなる。仲間の取遣はあがつたり大明神。御親父の身の脂をとう／＼なくしてしまつた。そのくせ高慢に人を見くだして。文盲だの。ヤレ俗物とかやら云て。茶磨藝を鼻にかけたがる。茶坐敷ばかりも何度拵たかしれぬはさ。あれがほんの豐後よみの豐後しらずとやらだ。兎角人は身の用心／＼　トいでゝゆく　▲田舍出の下男じうのうへおきごたつかけて持來りしが此はなしを聞て　三助「モノ金を拵べい云て山事は惡い事だチわしイ國サ居たとき珍事てうような事が有けヱ。爰でヱ。何云がな。己方で薯蕷と云ます　みな／＼「江戸でも山の芋さ　三助「モノ。夫で其。薯蕷めが。鰻なつたアだ　みな／＼「ハテナ　三助「もつともハア。五躰揃つてでもねへ。半分が薯蕷で。半分が鰻子だア。そこでハア獵師イ。夫見てうつたまげただア。何でも山神どのゝ祟りか。蟒蛇だつぺい。蟒蛇の化ねえ所が魔性の物に違ねへ。打殺さア手もねヱ事だが。臨終しねへときやア氣味惡いと。何がハア。村内打寄て評定のした所が。モノ。曾根村の松之丞殿ちふ人は。神功皇后さまの時分から代々續た博識だア。此世開闢からの事を。何でもしらねへ

○市女の笹つぱたき　神下し。

○雀海中に入て蛤となる　「禮記」月令に、「爵入二大水一爲レ蛤」とあり。俳諧にても秋の季とす。

○庭訓の往來　玄慧法印作。消息文に擬して民間の事物を數へんとしたるもの。

○今川了俊　古狀揃。

○居びたり餅　川びたり餅か。

○三日正月　新年第三日、元日二日はそれ〴〵儀式あれど、此日はたし、のび〳〵と休む。

ちふ事のねへ人だアから。ハア松之丞どの雁首のう打傾て。まじイり〳〵見て居ツけヱ。サアたまんねへ考たア。是鰻だと。鰻がまちがつたら。生神殿離れて。代々住居のうした此村内に住ねへ法もあれ。薯蕷が鰻になつたがな。モノ鰻が薯蕷になつたがな。二ツ一ツの内だア。お禰宜どのゝ占も。市女の笹ぱたきもいらねへ。鰻だア。蟒蛇でェねへ。モノ夫だけども。雀海中に入て蛤となるちふ事ア書物にもあるが。薯蕷が鰻化た事は。庭訓の往來。今川了俊。其外雑書にも年代記にも見あたらねへ事だと云けヱ。何がハア。山師ちふ者ア。何耳だアがな。早く聞付るもんだア。此事をがら打知て。直ハア熟談のうした所が。小判二十兩だア。其廿兩さ村内へ割付て。濁酒だアの。居びたり餅だアの。あんでもハア三日正月で祝ツけヱ。扨その山師どのだテ。何がはや。今度觀物の太夫どのた云て。四角イ箱さ入て。開帳場の大金もうけべいと思つて。あらかた普請のうして。サア始べいとした所が。サテひよんな亊があるもんだ「どうした〳〵「イヤハヤ 腹筋よる事だて。モノ半分

○やけのやん八　「やけ」の音より「やん八」と續けたるものか。

○湯氣に上つた　ユゲなれども、爰は濁らずユケと讀む。鐵瓶より立つユゲ。入浴中に氣が遠くなる。

○早打肩　病名

○ぶた七ヤア、イ、ドドドンチヤン〳〵　昔は鉦太鼓にて迷子を搜す、その時の呼聲を應用せるもの。

○あやめ　あやめ團子

○おらが所の水瓶云々　燒締は大なる器物にはせぬを、水瓶を類などと、無駄を云ひ、故や

鰻だと思つた薯蕷めが。普請中の日數さ經た內に。薯蕷の形ががらなくなつて。皆ハア鰻になつてしまつたア。半分薯蕷だ物が。がらゝ鰻なつたもんだから。あつちイぬたくり。こつちイのたくり。抓べいとしても指の股さ。ぬる〳〵ぬる〳〵かん出て。によろチり〳〵鰻のほりイするだア。サア魂消めへ物か。がせうぎにかつつかんだらおつちぬべエ。土埋たら鰻死て。芋にでもなるべいが。薯蕷斗なつちやア元直にならねへ　アッハ、、、ハ、、、、　トびつくりかへつてわらふ　三助「何にしろかんじんの太夫殿の正躰がわかんねへから。うつたまげたの何のじやアねへ。サア山師殿大きに目算違だ。小屋掛から何から三十兩斗損のチして。やけのやん八おこして。其鰻さ燒て食たげだ。一串の割付三兩二歩何分となる。高い鰻だア。三十兩の蒲燒。一人で食たア。欲の皮が引張て。さぞこはかつたんべい。アハ、、、ハ、、、、　▲をりからふろの中にて「湯氣に上つたさうだ。チイ番頭目を廻した人があるぜエ。湯氣に上つた〳〵　はんとう「ナニ湯氣に上つた。夫は大變〳〵　トゆはん大ぜいにてふろの中よりかつぎいだせば　ぜんのよい〳〵は湯氣にあがつてたはひなし　「誰だ〳〵「よい〳〵のぶた七だ「病人のくせに長湯をするからだ「水を吹かけろ「草履を顔へ載ろエ「ナニそりやア癲癇だア。刀豆と肩へ書が能い「それこそ早打肩だア「ぶた七ヤア引　ぶた七ヤア、イ。ドドドンチヤン〳〵「じやうだんじやアねへ呼生ろ〳〵　トなはい水をふいて大さわぎになる　やう〳〵にぶた七はいきをかへす　「どうだぶた七〳〵氣がついたか〳〵「氣はしつかりか　よい〳〵「ウ、。ウ、。でゝ。でゝ。大丈夫だ。〳〵。おだどうすたの　おそは何とした　大きなこゑで「湯氣に上つたよ　よい〳〵「エ。エ。「湯氣に上つたよ「湯氣。湯氣に上つた。ム、。ム、。飛だ事たの最能〳〵。大丈夫だ〳〵。モウ湯氣下つた。〳〵。夢中〳〵。夢中だつけ。ヤツト〳〵。湯氣下つた大大。〳〵。大丈夫だ〳〵　ゆくみの男はんとうの飯代りに來て臺に座す

【商人の諸聲】

「あやめあやめ引「金時湯出大角豆「豆

つかましい」と云へるなり。「やつかましい」は流行語、無駄を云ふなの意。

○鐵炮へ沈むと云々　この鐵炮は吉原の安見世を云ふ。一ト切二百文なるゆゑ鐵炮の二ツ玉といふ洒落なり、若し泊りとなれば一夜を四切、五切などいひて、標價倍増／＼、掛り物もあれば、小店の遊びより費用嵩む。案外の入用になるより、所持金では不足する、勘定が出來ぬ時は、娼家の若い者が嫖客に附き來り、その宅について支拂を求む、これを馬を引くといひ、その若い者を附馬といふ。

○熱かア香の物を一切云々　飯のあとにて茶を飲む時、香の物を入れて掻廻すことを洒落て云へるなり。

○しのびよりくる云々　「忠臣藏」の九段目。小寺玉晁の「小歌志彙集」に文化二年の流行唄として「むかふよりくる小提灯、伊吾よく／＼と呼でもみたけれど、かわい吉松は誰とねた、サ、おさつさんとねたならよし／＼」と云ふを擧げたり。

腐引「蒲ア燒は能。かばやき「瀬戸物燒繼引。やきつぎはござりませんか　▲チイやきつぎよ。おらが※所の水瓶をたのみてへ　やきつぎや「ヘンやつかましい

晝時の光景

ふろの中にて　トン／＼／＼　うめねへか／＼あついぞ／＼「うめるな／＼水になるぞ　ばんとう「湯が出るよ　ゆくみ「ヲイ　ト とめ桶をもちいづる　▲せはやきおいさまと見えて手拭をそゝぐ桶を足でかたよせながら　コレ若イ衆。ながしを能く洗はつせへ。老人はあぶねへ。すべりさうだ。此また小桶をならべた事はい。通りみちがねへ。アレ水舟の水が溢るによ。誰だか糠袋をあけた。あのざまはい。いけぞんざいな。コレ。コレ。コレ。膏薬を足の裏へ踏付た。エ、きたねへ。ヘツ。ヘツ。痰を吐やら。瘡蓋を落すやら。ヘツ。ヘツ。イヤハヤ埓くちはねへぞ。なん妙法蓮華經　ト ざくろ口より のぞき　ヤおびたゞしい尻だ。アイ御免なさい。コレおめへがたは悪い事た。口もとを塞て居ずと中へ這入なせへ。跡から這入事がならぬ。ソシテマア其樣に腰を掛てばかり居ちやア。どうもならねへ。アイ老人でござい。ヤ是は能湯だ。此湯をぬるいといふ人は鐵炮の方へ沈むか。此格子をはづして鑊の中へはいるが能。ヤレ／＼けつかう／＼。アなんみやうほうれんげきやう　うた「清盛さまは火の病われらはツ。コウおぢいさん。鐵炮へ沈むと附馬がうるせへはな。おめへ熱かア。香の物を一切入てかき廻しねへ。ソリヤ湧て來たぞ。ごうてきだア。虱の食た穴へしみて能塩梅だぜ。體中へ一粒鹿の子の紋が付た。虱もまんざらじやアねへ　うた「※しのびよりくる小挑灯。伊吾よく／＼とよんでも見たが。可愛よし

松はたれとねた。サ。サ。おとつざんとねたならよし／＼　うた「たとひ山中三軒家でも。主と二人でくらすなら「ヘン畜生め。こゝろいきだイ。すつぱりやつてくりや。　いたこのはや「ア、づウなイ。まだこヲい。こい。　さみせんのわるまね「テコテントン。てこ／＼。てん／＼。つん。ぼんぼん「ヲイしづかにしねへ。※三味線がはねらア。「アイ御免ねへ「ソリヤ出ます／＼。ハイまたぎます。おゆるしなさい「大きな睾丸だぜへ。天窓と鉢合をして睾丸が宙を飛行たア。とんだ人魂だ「吉や。あたまから睾とうたれちやア合馬アなるめへ。尻から銀で褌をかけやナ「うさアねへ。飛車とつぶれて角の通りだ。おきやアがれヲイ出やす。田舎者／＼　▲西國の方からはじめて江戸へ出て錢湯の勝手をしらずきよろ／＼とつつ立てゐたりしが※下だらいにあたらしきもつこうふんどしがゆにつけてあるを見て　さいこく者「是ア憚な事。湯も汲置て。手拭まで添置とは。どうする事もならんばい　ト　おのれがてぬぐひはしぼりてふんどしたほすかけざほへひろげおき　▲さてかのあたら／＼きもつかうふんどしを湯の中からとりあげてかほをあらひながら　此湯は臭匂のする湯たい。ア、臭事。／＼。是。何かい。どうした物かい。人ども遣ふた跡でも有つろ。此まア。油の浮た事ちう。※のさんばい。ぎら／＼する事。鯨ども洗ふた跡どもの如あるけへ。奇妙な匂ひ。是ア打明る事　ト湯をあびてたらいをゆくみの所へもつてゆく　ゆくみ男「その盥はこゝへお持なすつてはわるい。やつぱりあそこへ置て。小桶で汲で行てお明なさい「ナイ／＼　ゆくみの男は下帯をあらふ事と心得しゆゑさしづするなり、かの男はさしづをうけてもとの所にもちゆき小桶にゆをくんできたりわざ／＼下だらひの中へあけてつかふ　此手拭は新だつとも。なしい此様に。彼所此所。穢居るか。ぜへたんぼう打込だ如。此よごれのすさましか叓　ト　もつこうふんどしをひろげて見ればあこさきにひもがついてゐる　此前後に紐付たは。此奴ども中へ天窓さ打被る時。此紐ども。腮のあたりへ。からみ付る事か。是。至極勘辨な叓ぽ　ト　かのひもをうでへ／＼巻てふんどしをまるめてからだ中をこする所へ「かみがたもの風呂より出下だらひのそばへきてうろ／＼見まはし　コリヤどうじやい。最前ひやして置た下帯がないはいまだ洗はん物が失る筈はないがの。何ぼでも見えん。とひやうもない。　ト　かの西國ものが手拭にしてかほをあらひゐるを見てきもをつぶし　ヤ。こりや滅相じ

○こゝろいきだイ　己の心持と同じだといふこと。

○三味線がはねらア　湯のはねるを洒落て云ふ。「樂屋通言」に馬鹿のことをハネルといふ。

○あたまから睾とうたれちやア云々　以下將棋の洒落。

○下だらひ　「錢湯手引草」に「下盥は天保の始迄殘りありしが、不淨といふて近頃は一向になし」とあり。

○のさんばい　西國訛なるべし。不明。

○滅相じや　大變だ。

○亂氣　氣がふれたこと。

○おこして　よこして。

○ふんどした叓でもつこうの幸　「ふとした事でもつけの幸」の地口。もつこうふんどしにかけて云ふ。

や。夫おまへの手拭じやあろまいがの　さいこく〳〵ナイ〳〵此奴ども。此盥に打込で有けへ。自己所持の手拭。爰さ掛置くたい　かみがた〻ヤ。そりや大變じや。テモマ。めつそうな叓する人じやな。夫手拭じやない。私が下帶じやはいの。褌で顔あらふとは。マあほらしい。狐につまれたか。亂氣したのじやないかい。おまへソリヤ何さんすのじやい。早うおこして。其體雪がんせ。勿体ない　トきいて西國ものきもをつぶし「道理か。油ぎつとるとおもふたテ。今一時過ると。皆洗出いてのくる所たい。ヘツ。ヘツ。是。是。臭か事思ひ出すと。のさんばい。のさんばい。　トしもたらいの中へ下帶をなげこんでふろの中へ入る　かみがた「アハ、、、、ハ、、、的めもふらい癡呆めじや。コリヤモウ私が洗ふたよりや。いつかう能。ふとした叓でもつけの幸じやない。コリヤコレ。ふんどした叓でもつこうの幸とけつかるはい。さてきびしい口合な。アハ、、、、

諢話浮世風呂　巻之下

江戸　式亭三馬戯編

午後の光景

○御膳しら菊あまい〳〵（子供大勢かはる〴〵手足も眞だいくろんぼうのごとくになり目ばかりひからしてごや〳〵と入來るは手習から八ツさがりと見ゆ）「ありやりやりやんいうといっ　ありやりやん。りやん〳〵〳〵〳〵　松さんなんざアしよにんな者だぜ。おいらア否だア。あら程。虫拳をしてっ　一極をしたじやアねへかナ。能うじぶツくるぜへナア、アレよしねへよ。着物が切れると内へ歸つてしかられらア。おめへン所のかゝさんは縫ちやア呉めへ　松「ずいぶん縫ふのさサア出しなせへ　亀「なんの口功者な。其時にやア。あかすかべヱだらう。アヽレヨ〳〵おめへの内へ云告て遣らア。松「こいつア面白へ。男なら云告て見ろ　鐵「なんだナ。おめへ達ア能う喧嘩アするぜへなア。吉さん御免し。御免だヨ。吉「おいらア。しんどウき。しんどきだヨっ　サア湯へ這入う。誰でも早く這入た者は能子だツ。又「ゆから上つたらの。あのの貝打をしねへか　鐵「おいら否　又「しよにんな子だなア。そんなら今度からおめへたア遊ねヱ。鐵「あすばねへでも能。金さんと幸さんと芝居叓をすらア。石段の立は威勢が能　又「おいらアツちやアねへヨ　又「フムム、そんならおいらもしんに入ねへナ　鐵「おめへは捕人に成な　又「おいらア否　鐵「それ見ねへ。おめへ抔ア芝居も見ねへ癖に　又「ヱヽ、いつか行やした。姉さんの宿下の時に行たア　亀「おいら抔アお師匠様から下ると毎日行まアす　又「夫でもおめへ下手だア　鐵「下手でもおめへの

○御膳しら菊あまい〳〵　甘酒賣の呼聲。

○しよにん　情愛の無い意。「膝栗毛」にもあり。

○虫拳　三竦み、蛇、なめくぢ、蛙。

○一極　順番をきめること。

○ずいぶん縫ふのさ　よく縫ふ意。

○あかすかべヱ　赤ンべいに同じ。「膝栗毛」にあり。

○しんどウき　仲間に加はらぬこと。

○貝打　海贏打か。「寶暦現來集」に「子供遊びに春は貝打とて、蜊貝をふせて、上より下の貝を打て遊びたるものなり」とあり、天明の頃まであり て、其の後無くなりしものゝ如くなれど、この貝打か。

○石段の立　曾我。文化五年春、市村座の「月梅和曾我」に、近江小藤太は松本幸四郎、八幡三郎は澤村四郎五郎扮せり。

世話にやアならねへ。打遣て置ねへ。新さんと亀さんと平さんと二人で。高麗屋と三津五郎と半四郎のたてをしたア。あのの。あのノ。あすこの内の階子での。傘を持てギックリとにらんだらの。亀公めヱ。とヲんと落たア。啼さうな顔をしたつけがの。おばさんが強い〳〵。高麗屋といふ者はなくもんじやアねへと云つたもんだから啼ねへやつさ 又「何のアノ啼虫めヱ 幸「鐡さんヤ是を。おまへに上やう ト此子は子どもの内でもおさなしい子なり ▲おさなしき子には友だちのわんぱくものもおのづからことばがあらたまるなり 幸さんおかたじけ。こいつア能のう。豊國の繪だよ。威勢が能ぜへなア又公 又「ム、此源之助は能く書たのう、おいらが所じやアの。皆がの。源之助が贔屓だからの。お屋敷へもの。上方へもの。源之助の繪十貫て上るよあのの 吉「ヱ、きたねへ。おめへ噺をすると人の顔へ唾をかけるから悪い 又「堪忍しねへな。おめへも嗜が臭じやアねへか 吉「是ア病氣だからおしつけ治ア。おめへこそ鼻の下が眞赤だア 又「ヱ、是も虫のせいだア。おいらはおめへのやうに鼻屎をなめやアしやせん 吉「ヱ、おいらもおめへのやうに爪は食やせん 幸「吉さんも又さんも喧嘩するもんじやアねへよ。指切をして中直んな 二人「あい 又「サアおめへ出しねへ 吉「おめへ先へ出しねへな 幸「今度から中の能やうに油證文しな。喉に大の字親のあたまに松三本。フツ。フツ。フフ、 升「コ六「亀さん此本をやるからのおいらも役者にしてくんねへな ト合巻のおさうしをおはむきにやる ▲かき大將て 亀「ム、おかたじけ。それに這入な、後にの。おれが何にならア。仁木彈正でせり出しの所をするからの。幸さんは團十郎が男之助で。椽の下から出る所だア。おめへ其時。鼠になつて卷物を咥て出さつし 升「おいらはいや。夫じやア幸さんに扇で打れるのだア。おいらアいや〳〵。只這出してあたまをくらはされるばかりじやア威勢がねへぜなア 亀「夫ならの。あのの。幸さんに踏られて居ながらの。ギックリときめね

○ギックリ　芝居言葉。或動作の止りて一の見えになること。

○源之助　四世宗十郎か。文化九年廿九歳にて歿す。

○指切　子供の誓約。指を曲げて互に引かくるなり。

○親のあたまに松三本　油證文と稱す。髪を抜き、フツ、フツ、フツ、と吹きて飛ばす。

○おはむき　御機嫌取り。「再來志道軒」に「御武家方のおはむき、町人の前ない」とあり、場合によりては賄賂までに至るか。

○仁木彈正　文化五年三月、市村座に「伊達競阿國戯場」あり、幸四郎の彈正、團十郎の男之助、半四郎の政岡。

○ありやりやん　火消の眞似。
○武部源藏　「寺子屋」の人名を用ゐたり。
○お無言だよう　默つて習字すること、寺子屋の言葉。
○留られやう　殘されること。
○番頭三津五郎　役者三津五郎の洒落。
○絲鬢奴
○剃下奴

へ　幸「私はいやだ。夫じやア私が男之助よりは鼠の方が強くなるものを　竹「そしておれもいやだ。それが鼠でギックリをすると。幸さんがおたまを痛く打だらう　竹「そんなら後にせう。サア皆が這入な。ありやりやん。りうといゝ　ありやりやんりやん〱〱〱〱　トふろの中に手ぬをくちにふくんでふきかけるやらはた〱こたゝきまはしておたまからかけあふやら大さわぎなり　はんさう「コレしづかにしねへか。此子どもは騒々しい。武部源藏さんの手習子は皆いたづらだ。ヤイ静にしねへか。一ソリヤ番頭が始つたイ　一皆がお無言だよう　一竹鶴亀松さんお習ツ　一千万億二郎さんお習ツ　はんさう「まだやかましいが「夫見ねへおめへたア　一なアんの。おめへがはじめたア　一おいらじやねへよ。あの子だよう　ヨ「翌また留られやうと思つて。お師匠さんに云告てやらア。一べエ引　一ム、能面だ一べエ引　△ひよろ〱ひようつきながら目をすえ、むづかしいかほをしたる大なまゑひ江戸ツ子の人と見えたるが入きたり　まゑひ「ココ　コレば番頭。居るか。ア　居るか。居ねへか。はんさう「ハイ爰に居ります　酔「ぴゝ賓頭盧の手間取を見るやうに。しや。しや。しやちこばつて。ナ　ナゼ　高い所に居るウハゝゝゝハゝゝゝ　トこわいかほをしながらをかしなだくに向わらひをするくせあり　酔「湯屋の番頭だな　はんさう「ハイ　酔「チ違ねへ番頭。名は何といふ。名は。番頭か。番頭三津五郎か。お。おれが目には六ツばかりに見えるから　は番頭六ツ五郎だらう。湯はいくらだ。十文か　トむねにいれを出しながらぜに箱の巣紙をよむ　ナンダ奴が四文。フム奴が四文。坊主はいくらだ　野郎が十文。奴が四文では。坊主は只入れるか。エヽ番頭。どゝうだよ。はんさう「わたくしへ、へ、へ、へ、これは奴が四文じやアございませぬ。ぬか四文でございます　酔「ム何。糠四文か。ムゝ。ムゝ。コレぬの字をりきんで書けば。奴と讀は。糠なら糠のやうに。誰にもわかるやうに書け。奴といふ字は。上て書くと絲鬢奴。下て書くと剃下奴と讀む。番頭。しらねへか　はんさう「ハイ存ませぬ　酔「しらざア宥してやる。ナニカ其糠袋も入て四文か　はんさう「イヱ糠ばかりで四文でご

さります 醉「フム糠代か ばんとう「ハイ 醉「フム夫では。ゲイフウ糠代番頭代が四文と。賣てあるけばいゝウハ、、、ウハ、、、 トわらひながらあたりを見廻し ナンダあれは藥の看板か ばんとう「ハイさやうでござります 醉「いろく欲ばるな ばんとう「ハイ 醉「湯でばかりは食ないか ばんとう「ハイ諸方から弘をたのまれまして無據弘遣しますへ、、、、へ、、、、 醉「フム赤切手ひかず膏ッ。番頭 ばんとう「ハイ 醉「なぜ赤切が手をひかねへ ばんとう「ハイへ、、、、 醉「イヤサ足へ赤切が切れて歩行れずは。手を引てもらふが能じやねへか。但しト手へ赤切が切れた時。足がひかねへなら尤にもせう。痛くて一足も引かれぬ事はあらうが。手のひかれぬ事はあるまい。ナ。但しあるか。番頭ナナ。ナゼ。赤切が手ひかず膏だ ばんとう「ハイ手をひかぬ間に治るといふ心でござります 醉「ハテ呑込のわるい番頭だ手をひかぬといふ事があるものかよ。エ、トこちらは。風流。八人。丸ではない。アレハ。八人湯か八人散か。ばんとう「ハイあれは八人藝でござります 醉「フム藝か。ハテ。しらぬ藥だな。※風流とあるから風藥だな ばんとう「イエ八人藝と申て。一人で八人の眞似を致します 醉「ハテ奇妙な者を賣るな。いくらほどするものだ ばんとう「イエ賣物ではござりませぬ。見る物でもないが。アレハきく物でござります 醉「サアそのきくが能はさ ばんとう「※六十四文位でござりませう 醉「ハテ安いものだナ。一人前八文につくっ湯錢より安いナ。その藥を呑で八人藝をしたら。一人前八文づゝ八八六十四文取て。湯へ入る時は一人分十文拂ふ。差引くと五十四文づゝ利がある。斯うだから待よ。コレ。番頭。賣物ではあるまいが。せめて半分賣てくれぬか ばんとう「ハテとんだ間ちがひ。あれは八人藝と申て人でござります 醉「サ人はがつてんだ ばんとう「イエサ此方ではいたさぬ。他所できかせるので 醉「ハテ扱きくから買ふ。きかぬ藥が益にたつものか

○糠代番頭代云々 糠代販こう代つ洒落にて、諸賣などの事を云へるか。

○手ひかず膏 即效藥の意。

○風流八人藝 「浮世床」にも「風流れこ八人藝す」と讀む滑稽あり。一人にて八人の眞似をするもの。

○六十四文 當時の芝居の木戸錢。

ばんとう「イエサ藝存する盲人でござります　醉「ハテ此番頭は何を云つてもわからぬ男だはへ。ア、醉たゲイッフウ。ア、めんどうな男だ。又かほをしかめてきよろ〳〵見こ　アノあこらは何だ。ハテ讀ねへ書やうだ。おれに讀ねへから誰にも讀まい。番頭。あれ。あゝ。ありやア何だ　ばんとう「ハヽヽ戯讀談と讀さうでござります　醉「ム、解毒丸か　ばんとう「イエあれは落咄でござります　醉「ム、ハテいろ〳〵な物を賣る。能く手が廻るナ。道理で高い所へ上つて居るはエ。ハ、ア。あれ〳〵。あの藥が第一だ。どうもいへねへゲイッフウ。番頭〳〵ゲイッフウ、ア、醉た〳〵。あのアレ。夜ばいの藥といふ物は。何を置ても買ねばならぬ。今度は賣まいと云ても買ふ　ばんとう「なんでござります　醉「ア、。あれ。あれ〳〵。アノ。夜ばいの藥　ばんとう「ヘエ。エ、あれかヱ。ハ、、、ハ、、、、あれはおまへさま。夜ばりでござります　醉「夜ばりとは　ばんとう「寐小便の藥でござります　ウハ、、、、ハ、、、　生酔ゑくよみ直し一大わらひをしながら　醉「そりや十二文やる。これで糠をまけやれ。ソシテ手拭も新いのをかしてくりやれ。醉ざましに一風呂。イヤどつこ

○長刀草履　長刀型になりたる等き古し。

○店向　大店向の略、商家。

○香煎　米を荒引にして炒たるもの。白湯に撒布して飲む。

いナ。コレ番頭。おれが草履は長刀だらうが鑓だらうが。履違られてはすまぬぞ。若違へたら其代に。裏付を取るぞ。番頭。氣を付やれ。　ト二かいのはしごへあがらうとする　ばんとう「ア、もし〳〵二階は貸切でございます。どうぞ下に被成て下さりまし　酔「番頭。コレ。お身はいろ〳〵の事をいふの。何處でも二階へ脱ぐに貸切とはどうだ。三百六十日晝夜十二時が間。飯も食はず茶も呑ず。宿元の用事も足さずに。此二階を借切て。湯へばかり這入て居る者があるか。サあるなら爰へ出せ。おれが對手になる。もし借切た奴があらば不所存者だおれが利害を說て聞せる　ばんとう「イエサ。貸切といふ譯は。店向のお方〴〵に戸棚を皆貸てございますから。お脱なさる場がございませぬ。扨〳〵おまへさまは聞分のわるい。世話をやかせるお方だ　酔「番頭。コレ。扨〳〵われも聞分のわるい。世話をやかせる男だ　ばんとう「ハテそれでも店向の　酔「イヤサ店向でも樽抜でも。おれが着物をおれが脱で。おれが睾丸をおれが握て。おれが湯へ這入ればおれが儘だ。湯はその方の物。錢はおれが物だから。湯へ入た跡で。借切の者が兎の角のいはゞ。體の湯の氣をさまして歸さうから。其時湯錢をも。おれに歸しやれな。ナント。是ほどわかる事はあるまい。ナ、何だ。あすこに居る奴めがおれを見て笑おる。不屆な奴だ。何がおかしい。ヤイ。爰へこい。對手になる。うせぬかおのれ　▲二かいのばんとう見かねてはしごい上よりだましかける　二かいばん「モシ〳〵是へお上りなさりまし　酔ふりあふむいて　酔「ナンダ。われはなんだ。正体をあちはせろ　二かいばん「ハイ私は二階の番をいたす者でございます　酔「ム、二階の番か　二かいばん「ハイ　酔「番は番頭まで功を經ねへのだナ。よし〳〵。さう聞けば堪忍なる。ナア番頭。下の男のやうにわからぬ男もない物だ　ト二かいへ上る二かいの戸だなはかし切の衣裝付の戸に紙をはりこ家々のしるしを書付ありたまゑひはきよろ〳〵見廻して　コレ番頭おのしが呑ものはなんだ　二かいばん「ハイ香煎でございます　酔「フム八人藝ではないか　二かいばん「イ

○お市　天明六年の凶歉に近在の農娘相率ゐて江戸に來り、滑稽たる唄をうたひて踊りあるきて物貰ひせり、その唄流行となる。「しんぼ興大寺よ、何で氣がそれたよ、お市毛饅頭で氣がそれた、おいちがめゝつちよ、なめたらしよつぱい」

ヱさやうなものではござりませぬ　酔「ム、錢をとるか　二かいはん「イヱこれは賣物ではござりませぬ　私は茶が嫌だからこれをたべますこれは私ひとりでたべる物でござります　酔「ム、それでおちついた一ぱいすそれわけをしてくりやれ　ト一くちいむ　ゲイツフウア、酔醒には能はい　二かいはん「ハイ　酔「錢はとらぬな　二かい「ハイ、酔「そんならモウ一盃くりやれ　二かい「ハイ〳〵　▲またのむ　酔「ア、能はいばんとう　二かい「ハイヘ、、、、　酔「酔醒には能はい番頭　二かい「ハイどうござりますか　酔「ハ、ア番頭何かうまさうな物をくふの。それはなんだ　二かい「ハイあまりたいくついたしますから。晝すぎの目ざましに買てたべます　酔「ム、晝すぎの目ざましか。おれも目をさましたいの。ハ、ア。竹の皮につゝんで。ヤ。コレ。番頭。おのし買たらうが。ナント。それもおすそわけはどうだの。人に見せてばかりはおかれぬものだてナ　二かい「ハイこれはたべかけで。きたなうござります　酔「ナニサずいぶん苦しくないテ。これはなんといふものだ　二かい「ハイ夫はお市といふ菓子でござります　酔「ム、お市なら饅頭でありさうなものア酔醒には見ても能はい　二かい「イヤモシそんなにお手をおつけなすつては　酔「ナゼわるいかおのしが喰物をおれがいぢつたとて。おのしに罸もあたるまい。じぎに及ばぬ。サテト。そんなら手をなめて。また外のをいぢつて又なめる分は能からう。コレ番頭モウ一盃くりやれ　二かい「ハイ　ト今度は番頭ぶつ〳〵に呑せんをくみてくわしの袋をもちかたよせる　酔「手をなめながら湯をのみ〳〵　糖をいぢつて。其指をなめては。又各別能はい番頭。此湯の中へ入た物は。其菓子の碎けた粉だらうな　二かい「イヱ〳〵夫は香煎でござります　酔「フム何所から貰て來る　二かい「夫はおまへさま買求ます　酔「フム錢を出したか。ハテ酔醒には能はい番頭　二かい「ハイ　トかほをしかめてゐる　酔「ナントもう一盃呉やれ。面倒なら其藥罐と粉の筒を爰へ貸れ。おれが氣儘に呑う。酔醒には能は

○目を長くして　「長い目で見る」といふと同意ならんか。
○傘屋の六郎兵衛　傘より轆轤にかけし名なるべし。
○目黒の蛸藥師　下目黑秋葉山成就院。いぼ、たこ、魚の目、眼病などの祈願をする眞言宗の寺。
○手負があらう　寺が目黒なれば品川へ寄るものあらんとの意か。手負は怪我人のこと。

い番頭。湯上りに呑でも錢は取らぬか　二かい「ハイ　醉「まづしからばと。一風呂這入て又湯上りに呑ふ。ヤットコサまづ是も脫でと。番頭。あのあれ。角力取の灸の蓋のやうに紙を張たが。あの戸棚は何だ　二かい「あれが貸切の戸棚でございます。あの紙に書たは。店方の印でございます　醉「フムあの小さな戸棚に。人が這入て居るか　二かい「イヱ衣裳戸棚でございます　醉「おれはまた。借切た奴が寐てでも居る事と思つた。此壁は貸切ではあるまいな　二かい「ハイさやう　醉「ム、錢は取るまいな　二かい「ハイ　醉「それでよしと　トゲイ引　ドリヤ。一風呂。番頭行て來て呑う。醉醒には能はい　トはしごをひよろ／＼さがりてゆく　▲金兵へ「とんだ者が來たの。生醉でも程が有たもんだ。ノウ番公。源四郎さん奇妙な奴だネ　源四郎「さやうさ。　二かい「イヤハヤあ先刻から傍で口を出したかつたが。喧嘩になつては惡いと。※目を長くして居ました　源「金兵衛さんきれたお人さネ　源「ヤ※傘屋の六郎兵衛さんが亡たさうだネ　金「ヤレ／＼氣のどくな　源「おまへもおいでなさるだらう　金「久しい馴染だから供に立ませう。葬禮は翌の何時だネ　源「おほかた四ツでございませう。遠いお寺だネ　金「ハ、ア方角はヱ　源「※目黒の蛸藥師から。まだ十五六丁あると聞ました　金「ヤ夫は遠い／＼。いつもなら四ツと云て四ツ半九にもなるか。遠くては早く出すだらう　源「さやうさ併葬は遠くても近くても一日の潰さ。歸つてから何の用も達ぬやつさ　金「さやう／＼。ア惡い方角だネ。二日がけの葬歸りが出來よう　源「手負があらうて　金「六郎兵衛さんも能老入だ。息子たちはよく粒が揃て。皆大丈夫ない。娘はそれ／＼にかたづくシ。モウ孫も五六人ある。今往生すれば殘る事はねへのさ。あの人も若い内苦勞したから。老て樂をする。今の若者は老てから苦勞する。身持が大きにあべこべだ。ア久しい馴染だつけ。南無あみだぶつ。アッアなむあみだぶつ。　源「又へぼ將棊ど

○横町の草聞　草聞は大橋宗桂のもぢりなり、誰にても将棊の上手な人を大橋といひし、當時の言葉なり。

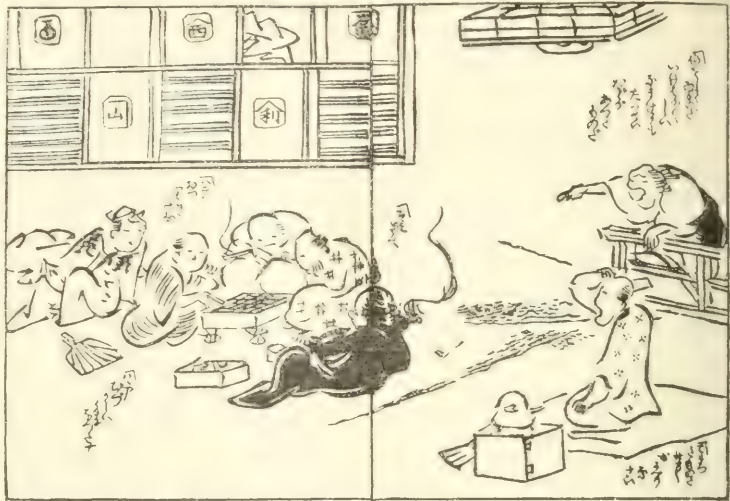
○屎でもくんべい團扇　「屎でもくらへ」を軍配團扇にかけたるなり。

○五節句に何程よこす　弱手扱にせるなり。

○迯たの内に横木瓜　「井桁の内に横木瓜」の洒落。

もか。蠅のたかつたやうに初たの　▲（五六人あつまりてしやうぎをさしてゐる）太吉「ヤ横町の草聞御出なさい。又まけやうと思つて　源「ナニ此由将棊め。太吉なぞア一番構をねぶらせると、本気で勝たくもので居る　太「サアそんなら此跡で教てやらう　源「屎でもくんべい團扇だ。ぎうくいはせてやるぞ。五節句に何程よこす　（うしろから このざいは）こ　「ドレく今の跡はどうなつた。ハヽア悪くしたナア。負になつたア。先の塩梅じやア丸で勝た将棊だア。些と見ねへとそうだ　おや「是でも能よ。勝て見せやうツ　後「ハヽ今飛車角二枚渡したもんだから弱り切たア。洒落も出ねへ　太「飛車と角で将棊は指ねへッ。こつちは王を取やすツ。ソレ。王手　後「そこで合馬せ。チット待たり　先「きたねへ将棊だナア　後「銀は惜い。こゝは桂馬でソレそつちが王手だく　先「いまくしい奴だ。やつはり銀にしておけば能のに　後「へゝン妙手を指てた。サテ迯ろく。能かく。迯たナ。そこで何を打てやらうな。ヤもう一間角を突込め　先「角を突込めとお出なすつたか。イヤ角を突込めとお出なされたかッ。ソコデト。かう打。あれで取るか。斯う来る。あゝ行く。背引たら尻からひたりト。まづなんでも遣て見ろト　後「ハヽアおつな事をして来るナ。飛車手王手がはづれたら。銀を奪取る計畧だナ　先「ナニ飛車もいらぬのさ　源「此手合の将棊は。王を詰やうとはしねへで。飛車と角ばつかり惜がつて居るぜ。コレ駒ばかり抓で居すと。有つたけ打ッしナ　先「ハテだまつて見なさいッ。汝等がしる所にあらずだ。サアく早くしねへか。下手の考休むに似たりだ　後「ナンノちつと能手をさすと洒落らア。下手の考休むに似たり（ベイ引こ口まね）ヤ此計究て好だぞ。ソレ来い　先「ヤ取れく　後「イヤ遣れく遣つてさせかい　先「取てさせくッ。能なく。ソリヤ王手。ヤ迯たナく。迯たの内に横木瓜ッ。イヤ迯たの内に横木瓜ッ。どうしてくれうナ。是で行うか。あれで行うか。まづ斯

○きびしゝに牡丹唐草　「唐獅子に牡丹」の洒落か。

○香桂前にたゝず　後備前に立たず」

○金角寺の和尚　「金閣寺の洒落。

○いたゞき女郎衆　岡崎女郎衆か。

う行け。ヤきび助〳〵。ヤ迯たの内に横木瓜。王手サアどうだ　後「ハテきびしゝに牡丹唐草かい。斯う引く。天窓からぴしやり　先「アおなまめだん佛だある〳〵。角を引て取捨てしまはつし　後「それでも能くないテ　太「ナニ能よ。マア引て取捨さつし　先「アヽやかましい東西〳〵。一人に五人がゝりだナ。大勢の智恵でおれ一人に負るかい可哀や〳〵。取捨たか。ソリヤ又王手　太「ソレ引たくれ〳〵　先「アヽ。アなむさんそこに桂馬があるとはしらねへ。待て呉ともいはれまいゝ　後「そこでお手に　先「お手は山〳〵王が三枚飛車角六枚　後「じやうだんぢやアねへ　先「お手には山〳〵といふ内にも。※香桂前にたゝず。※金角寺の和尚　後「銀があるか　先「銀も一分や。二歩はありツ　豊「いかい事渡したのウ　後「取捨る事は奇麗だ駒はいらねへ　先「フム盤でばかり指がいゝ。負る氣遣ひなしの木さいかち猿辷ッ。ヤ入王とさせまいとおうちなさる。歩を成と打　後「まづ金をいたゞき女郎衆と　先「ハヽア惜い成金を取れたかい。是にて將棊はおだ佛かい。ヤ是にて將棊はおだ佛よ。斯うしろ　後「イヤ待た

○引たくれんげの皮財布　「引たくれ」を「れんげの皮財布」と續けしものか。此等は「段々」といふ尻取文句の影響なるべし。
○おまへがたも精出して云々　河古屋の琴責の文句。
○勤といふ字に二ッはない　同上。
○能手があれば大橋もありやす　次代とあれば大橋もありやす。
○何にもいふな云々　「春花五大力」薩摩源五兵衛の言葉。
○おかつたるい　不足の意。

り。これは爰に居たのだの。そんなら此香で此金を取らう。斯らは逃めへ　先「ナンダ〳〵。どうするのだ。二三手過た事を仕直すぜへ。此方の駒まで動して。大きにお世話な事た。一人で兩方指すの。アン。御覧なさいあの通りだ。若殿様のお對手になるやうだ。夫でよしか。何でも佛のいふ通りにしてやらア。斯う氣の能將棊だ物を。名人だてナ。ソレ。よくは引たくれんげの皮財布と責るだ　後「おつに責よせたナ。待よ。爰が思案のあとや先ッ。ハテナ爰が思案のあとや先ッ。責られてはチト辟易だてハテ。こいつはチト辟易仕るて。ハテお責なさるかい。※おまへがたも精出して。お責なさるが身のお勤ツ　先「勤といふ字に二ッはない。テテン　運「ア、そこへ逃ちやア損だ。其隣へ逃て。むだ駒を遣はせるがい、　太「能く口を出すナア　太「ア能手があるッ。※能手があれば大橋もありやすッ　運「ムフム目が暗で居るから見えねへ　先「だまつてくたばれ。何にもいふなッ　後「※何にもいふな人ではないはッ　先「ヤ何にもいふな人ではないはッ。ソレどこへ行く　後「爰へ逃る　運「ア、わるい〳〵。そう逃ちやアをへねへ　太「ソレびたりだ　先「ア、よんやらまかせろさト　後「ア、よんやらまかせろさト　先「ソンよんやらまかせろさト　運「ソレ〳〵そこが由斷　先「ハテ何にもいふな人ではないはッ　後「ヤ人ではないはと取る　太「能か〳〵　先「ソリヤ何にもいふな人ではないはト。雪隠へお出なさい。ア、臭い〳〵　後「いま〳〵しい。とう〳〵雪隠へ　先「ヤよわい事〳〵　運「ドレ〳〵。おれが敵を打てやらう　太「おれが出る　運「マア待ッし「又へほめらが。金銀でもおかつたるい。エヘン〳〵　▲五十余のおゝさき内かになかひにきたり門口から　おらが太吉は何をして居るの　トいひながらはしごを上り「コレ太吉や此子は何をして居るナ。父さんが仕事をしかけて。今ッから店へ行なさるつて。おのしが歸るのを待て居なさるはナ。先刻から首を長くして。モウ歸るか。モウ歸るかと

思ふに。再び三寶歸るもんじやアねへとつざんがじれ出しなさるだらうと思つて。ハツ／＼として居るにホンニ／＼思ひやりもねへ。能きぜんだア。飯を食て椀を突出すとモウはや。湯へ行候と手拭を持て出たがる。いくつだと思ふ。廿三の四のと。年ばツかり取て。おれに世話ばツかりやかせて世が世なら嫁子を貰ツて。親をけつかうにすごす時分だア。世間の息子さんかたを見たが能。おのしがやうにうぼつぼで遊んであるく者は。又一人とありやアしねへ。なまける奴に。ろくな事を考出した例がねへ見たくでもねへ。將棊をさして飯のくはれるほどになれば能けれど。おのしがやうな物あきをする者は。万一に飽ツぽくて。何を一ツとげた事がねへ。くやしくは石垣へあたまを打付て。死ででもしまつたが能。おのしがやうな者は。死でも親は泣ねへ。此一言子を思ふおやの心こわいけんにておいづから恩愛の情をふくめり　イヱサ。もう手。どなたもおやかましからうが。可愛くもなんともござりません。ホンニ／＼おえねへなまくら者で。にくゝてなりません。あれがお蔭で。私が不斷とつざまにしかられます。私が蔭になり日向になりして。とつざまの前をつくらつて置て。夫でさへ常不斷しくぢります。人といふ者は。何ぞれ角ぞれ。取得のあるもんでござりやすが。あれに限ちやア。鵜の毛で突た程もござりません。親に似ねへ子は鬼子とやらで。とつざまが曲つた事の嫌な人だのに。あんな子を持ましたから。世間の人さまに。私が面目次第もねへ。おまへがたの前でいふは悪いが。全体友が悪いからさ。折角内に仕事をして居る者をば。釣出しに來てなりません　わが子のあしきを思はず他人の子をうらむは愚痴無智のはゝおやかたぎかへつてわが子をあしき道にいざなふ之母おやたるものか、このたぐひはよく／＼つゝしむべき事也　四五日も内に居るから。ヤレ／＼のう／＼としたと思ふと。又はかけ出し。又はかけ出しして。本のせいせう乾しさ。モウ／＼ほんに命も精もつゞくもんじやねへ。サア／＼歸つた／＼。あて事もねへ　太吉「今歸らアナ　か「今歸らア

○きぜん　氣前の音譜。
○湯へ行候　湯へ行くといふ口實を設ける意。
○うぼつぼ　おぼつぼの訛か。
○のう／＼とした　伸び／＼したの轉か。一仕事了りて、氣が樂になりたる場合に云ふ。
○せいせう乾し　淸書の乾く間にて、ちよつとの間の意。
○あて事もねへ　飛んでもない。

ナじやねへ、直に歸るがいゝ　トはしごをドる　連「太吉めヱ。お袋に※天井見せられたナ。くやしくは石垣へまたまゑぶつ付て死んででもしまふが能。おのしがやうな者は。死でも親は泣ねへツサ　ト口まねをする　太「死だら※一はながけに泣だらう　トづるい詞をいふもおのづからあまやかしたる毒のはこりしこ　▲おなじくくちまね　先「全体友がわるいからさ　連「アイサさやうでござんやす。おやんなさいやしツ　二かいはんとう「サア／＼太吉さんお歸んなせへ。親の詞を背く物じやアない。親を不孝にすると。老て又我が子に不孝をされる　みな／＼「サア／＼歸らう／＼　太「ア、湯ざめで寒くなつた。湯の中でおつな聲がするぜ　連「ほんにナア　二かい「あれは座頭の坊が來たから。大かた※仙臺浄瑠璃だらう　▲五人づれのざとうのうち二人の盲人風呂の中にてせんだい浄瑠璃をかたる　「さる程に爰に又。九郎判官義經どのが。八島をさして下らるゝ引。扨早。其日の出立には。上には赤地の錦の直衣を引張り。下には紺の布子のどてらを引張けり引。附屬ふ御供には龜井片岡伊勢駿河。西塔の武藏坊。彼等なんどが御供にて。尻から泥水の流れるやうに下らるゝ引。其翌日もドらるゝ引。又明後日も下らるゝ引。めつたやたらに下らるゝ。「扨早。御大將も。長旅路の事なれば。草臥果だとナント弁慶。何爺をかけべいが解ぐ氣は無かどさ。※おぎやり申せば弁慶よ。御大將の事だあ物。隨分謎を解ますべい。そんなら謎をかけべいか。そも／＼眞桑瓜とかけて何と解と。おぎやり申せば弁慶は。少しばかりは小首かたぶけ居たりけり引。やう／＼思按が附たつけと。夫は何より心易し。そも／＼眞桑瓜とかけては。俵藤太秀郷と解まする。其心はあんだんべ。むかでかなはぬと解たりけり。御大將我折果だよ。コリヤ又弁慶は日本一の謎解の名人だと。よろこびいさんで八島の浦へ着にけり。扨いくさは早。※でかばちなく起ツたア。「爰に西塔の武藏坊弁慶。柄も四尺刄も四尺あはせて八尺の長刀をふりまはすから。傍あたりの鼻があぶねへでゐすは。いしやア

○天井見せられた　仰天させられたこと。

○一はながけ　一番駈。尖端。

○仙臺浄瑠璃　「用捨箱」に馬喰町の西村屋與八方より仙臺浄瑠璃の正本を奥州へ下すことあり。「[illegible]」「奥州[illegible]栗毛」等にもあり。

○おぎやり申せば　仰せあ[illegible]せは。

○でかばちない　方言、極めて大なること。

○臍の下では桑原〳〵　「桑原々々」は雷鳴の時に唱ふる言葉。

○萬歳樂　地震の時に唱ふる言葉。

○めゝず　蚯蚓。

○ざとの坊　座頭の訛、座頭は盲人の官位なり。

長刀ア何處からつん出した。巾着からつん出した。いしやア爰來う首斬べい。おぎやり申せば平家の軍勢。そら弁慶が怒たぞ。臍の下では桑原〳〵。頭の上では万歳樂と逃まはるを。眞額梨割車斬。あたま切らるゝやつもあり。腕を切らるゝやつもあり。されども怪我はなかりけり引。コリヤたまらぬと軍勢ども。そこらあたりの缺を拾つて繼ぐほどに。腮のかけをばかゝとへ繼ぐ。かゝとのかけをば腮へ繼ぐ。あごへあかがり切らすもあり。かゝとへ髭の生るもあり。おつかけまはつて弁慶が。三尺あまりのめゝずのとけを。あたまの。どんのくどへ。ふんづらぬいたッけ。是には何がよかんべい。ハテ朧豆腐の黒燒がよかんべいとぞかたりける。中略　御代もかさねし万〳〵歳。貴賤上下おしなべて感ぜぬ者こそなかりけれ　▲風呂の中にていちごうに　ヤンヤ〳〵　▲ざとの坊かんがよいといふ所をじまんにて目あきどうぜんに風呂より出てくるあり、かんのわるい盲人はしはるのやみじあひいごく〳〵、あた〳〵まことあたまをすれちがふて出るあり、一人の盲人は小おけに湯をくんで、ながし板の上を両手でおしながらゆくうしろから出てくる盲人とあたまをかつちり　アイタ、、、、　くりのいち「チ、いたい。盲人に鉢合せをするとは明盲め　かきのいち「ヤこいつは。わが方からぶつつけておいて。おれがいふ事を先へ

○勾當　盲人の官位。

○ねぶ一ツてう　子供がオハジキをする時、ヨシヤゴを彈くに、互に食付けるものをネブと云ひて取除くことあり。

○なまゑひ、せんのおけをそつと取て云々　この趣向、狂言の「丼礑」より出づるものゝ如し。一九も「膝栗毛」に之を用ゐたり。

ぬかしおる。おのれこそ明盲だはい　くり「イヤおのれが明盲だはい　かき「イヤおれはねぶつて居る盲だ　くり「イヤおれもねぶつてゐる盲だ　かき「又口まねをしをるか盲とあなどつて　くり「ハテナ。そふいふ聲は聞たやうな聲だ　かき「フフムなるほど。わしも聞たやうだ　ト小くびかたぶけ　くり「ハヽア俤の都殿ではござらぬか　かき「いかにも貴公は栗の都殿ではござらぬか　二人「イヤこれは〳〵　かき「誠に其後はうちたえました　くり「一別以來まづ〳〵お達者で　かき「桃栗勾當の坊殿の所でお目にかゝつたまゝ。てうど三年になります　くり「さやうかな扨〳〵かやうな龜相がなくばおたがひにすれ違てもわかりませぬ。おつぶりは痛ませぬか　かき「イエ〳〵何ともござりませぬ。貴公のおあたまは　くり「イヤずんど痛もござらぬ。併座頭同士鉢合をして。ヲツトねぶ一ツてうといふ古い咄があつたてナ　二人「ハヽヽヽヽハヽヽヽ、　かき「コリヤ柚の都湯をくれる筈ではないか　ゆず「今そこへ汲で置た　かき「こゝにはない　ゆず「ハテめんようなたつた今汲だがのう。なるほどない　ト又一ぱいくんで來て、そばへおくと、さいぜんのなまゑひ、せんのおけをそつと取て、かたわきへのけておきしが、又こんどのおけをも、そつとかたよせておく　かき「まだ汲んか　ゆず「今そこへ汲だはいの　かき「こゝにはない　ゆず「又かいの。コリヤあやしいはい。貴公つかつてそんな事いふのではないか　かき「何をいふぞい。まだつかひもせんもの。ハテめんような　ゆず「ハテめんような。ト又一ツくんでくるを、なま醉又さらふとする手をしかととらへ　かき「おのれふといやつだ。最前から何ばい湯を遣つたかしれぬ　ゆず「コレサ〳〵おれが手だ〳〵　トいふ内、なま醉は手をふりはなす、出合がしらにゆずのいちが、手をとらへて　かき「ナニ柚の都か　ゆず「ヲヽサおれだよコレサおれが今汲んで來た所の手だはな　かき「ハテめんような　ゆず「ハテめんやうな　▲なま醉その内に又小桶をかくす　どこへ汲で來た　ゆず「コレこゝへ。ヲヤ　かき「ドレどこに　ゆず「ヲヤ。たつた今汲で來たが。ハテめんような　かき「ハテめんような

○瘡毒いなかの芋掘　「生得田舎の芋掘」の洒落。

○下疳瘡毒治し　何かの呼聲の洒落ならんも不明。

なま酔「わらひながら　コレ貴さまたちに湯を進ぜようっ　ハテわるいたづらをするやつがあるはい。サアく\これ汲たてだ　ト いせんの小おけ四ツ五ツの湯をざざうにやる　かき「ハイく\これは忝うござります　ゆず「これはく\ありがたい。扨く\わるいたづらをするやつがござりますナ　トおのれがくんだゆにいちれいをのぶる　酔「わるいやつだ。ハ、、、ハ、、、、コレきさまたちはなぜ目がつぶれた　かき「ハイ疳の蟲でござります　酔「フムなるほど。夏は虫干をするから土用の虫がないが。寒の虫は誰も干さぬてナ　ざざうふしぎさうなかほして　かき「ハイ　酔「イヤサ寒の虫は誰も干さぬてナ　かき「それは何の事でござります　酔「寒の虫よ　かき「イヱこれは五疳と申て。いろく\の疳の病でござる　酔「ハ、ア病か。いろく\の借の病だとて。高が五貫ばかりなら一両にも足らぬ事だ。夫がほんの目腐金だ　かき「ハテわるい合点ハ、、、、　酔「イヤ何も笑ふ事はない。イヤコレそちらのお座頭どのも借の病か　ゆず「ハイイヱ　私は瘡毒でござります　酔「瘡毒とは何だ　ゆず「ハイへ、　酔「イヤ何も笑ふ事はない。瘡毒いなかの芋掘といふ事か　ゆず「しやれだとこゝろえて　ハ、、、マアそんな物でござります　酔「夫には能療治があるはい　ゆず「ハイ何をたべます　酔「イヤサ療治がある醫者があるてさ　二人「ハ、ア　酔「毎日箱を擔つて呼であるくはひ　二人「ヘヱなんでござるな　酔「あれをしらぬか　二人「まだ存ませぬ　酔「※下疳瘡毒治し－ハ、、、、ハ、、、、　酔「しかし貴さまたちは。三百六十日目を睡て居るから。ねぶたくはあるまいな　ゆず「へ、、、、目を塞で居ても心は寐ませぬから。ヤハリ寐る時は寐ますのさ。懐胎の女の腹が大きいとて。食を食はずには居らぬ道理でござる　酔「なるほど是はその筈だはい。そちらの人は大分赤く湯出つたナ。無躾ながら蛸にすると直打のある頭だはい。こちらのお座頭は白座頭に黒座頭。寒の虫で盲た人は氷座頭ト。これまでは座頭もきこえたが。赤座頭とは珍らしいはい　くら「ハイ　私は

○海鹿　海獸にてよく睡るもの。

○ごつぼう人　業報人と書く、業の深い人。

小豆に交たのでござります　醉「ム、いゝ／＼。コレ貴公も瘡毒か　くり「イヱ麻疹が目へはいりまして　醉「ハ、ア麻疹。ハテとんだ物が目へはいつたの。はいる時に何とかいひましたか　くり「イヱ何とも申ませぬ　醉「ハテぞんざいなやつだ大切の目へはいりながら案内なしに無作法なやつだナ。まだしも麻疹で仕合せ※海鹿が目へはいつたら。嘸寐るだらう、目へはいつては眼病であらうな　くり「ハイ　醉「ハテ扨きのどくな。目は人間の眼だ。人の眼とする目へはいつて。眼病になつては。盲になるはずだ　トいふ折からうしろの人、立てゐてをか湯をあびる、とたんのひやうしに又一人の男、小桶へ水をくんでさげ來りしがすべつてころぶと、なま醉のあたまからざつぷり　醉「ヲ、ひやつこい。ホイ。／＼。己は／＼。ヤイあちらの男。ナゼ立てゐて。はねをかけた。まだある／＼。ヤイこちらの男。ナゼころんで水をあびせた「ハイ御免なさい。どうも麁相だしかたがねへ　醉「ナニ麁相だ。コレ。そつちのころぶは麁相でも濟うが。おれに水をかけて麁相ですむか。湯をくゞらせた上で。水をかけるとは野郎の索麪と思ふか「ハ、、、　醉「イヤ笑ふな。おかしくないぞ。人に水をかけて是がほんの水かけ論だ。二人ながらおれが對手だぞ。コレ。此通り水瓶が鼠へ落たやうに十分濡だ。りやうけんならぬ。二人ながら待て居ろ。コレ番頭。先刻から喧嘩の對手が欲かつたが。漸々の事で二人一時に出來た。とてもの事に笊を貸せ。湯の中を探して見たら。最う二三人はあらう。サア／＼皆覺悟しろ今の二人逃るな。にがしては番頭對手だぞ。今見おれどうするか　トつツ立あがりてひよろ／＼せしが、かるいしへ足をふみかけこ、あふむけにごつさりころぶ　醉「ア、痛／＼。うぬら出しぬけにトいひながら足もとを見れはかる石があるゆゑ「ナンダかる石か。輕石でもどいつでも。みんな對手だ　トあひてをまちかまへてこほかの人につかみつく　いさみ「つきこはして　なんだ此ごつぼう人め。四文一合湯豆腐一盃がせきの山で。に。に。濁酒の粕食め。とんだ奴じやアねへかい。誰だと思つてたはとをつきやアがる。二日の初湯ツから大卅日の夜半まで。是計も

○いざア　いざこざの略。
○東子　江戸ッ子と云ふに[illegible]てこの語あるに注意すべし。
○しちもくれん　面倒なこと。
○おつかじめる　押付ける。
○六十六部　廻國の修行者。
○石菖鉢の目高　狭い小さい處に住む。
○芥子之助　淺草奥山に名高き放下師、二代目如皐の只今お笑草を見よ。

いざア云た事のねへ東子だ、ナア。斯う云ちやアしちもくれんだけれど　とりさゆる人「ハテサまあ能はな　いさみ「インニヤサおめへまでがおつかじめる事アねへはな。此方は大体な事アりやうけんして。ちんころがうんこを。踏だやうな面で通さアな。無面目も程があらア。何處の釣瓶へ引かゝつた野郎か。水心もしらねへ泡ア吹ア。コレヤイ。六十六部に立山の話を聞アしめへし。あたまッからおどかしをくふもんかへ。石菖鉢の目高なら。支躰相應な孑孑をおつかけていやアまだしもだに。鯨や鯱を呑うとは、大それた芥子之助だア、掘抜の足代へ。家鴨が登らうといふざまで。おれに取てかゝつたのが胸屎だ　ばんとう「ナニサまあ能から了簡しなさい　酔「ナ。ナ。なんだ。家鴨だ。あ。あ。家鴨とは。よ。ナ。なんの事だ　いさみ「ナニどうしたと　ばんとう「ハテサテ　そばの人「コレおめへも生酔の癖にしつッこいからだア。だまつて居なせへ　酔「ナナ生酔おれがいつ生酔だ。おらア酔やしねへ。コレ酔やアしねへぞ。酔たと思たらほんの事たア。當が違ふぞ。ほんの事たア　いさみ「コレヱ生酔だからふせう

○南京あやつり　絲で運ふ人形。

○とうへんぼく　とうは唐なるべし、分らぬを唐人といふ、心の雷云物はたきゆへにへんこ云はれ、こうを副へていふか。

○ぼくねんじん　動きのとれぬ人、全く氣轉のきかぬにいふ。

○ぼく大根　前條の語の一ねんじん」を人参に取りて、ぼく大根と洒落しなり。

○三の切　三段目の切。

○本田あたま　當三二に一當世風俗通」の落あり、時勢髪八分之圖を出す、就いて見るべし。

○拾てくれた　助けてくれた

○鹽丁　三代目政太夫。

○紅梅簾の二ツ胴　芝居でする花街見臺。

○假橋を出した　臨時の出しもの、助け舟などいふ心なるべしさ、是は石割松太郎氏の說。

○中二階を張おつた　不明。

すらアヱ。さもなけりやア。とつくに張くぢくンだア　竪「チ、面白いは。は。張くじいて〳〵。見ゝ。見ろ。くそうぬ。ほんの事たアほんの事たが又ほんの事たア。コレヤイ。は。は。張くぢいて見ろヱ。ほんの事たが又ほんの事たア　ト二三人につかまへられ「ひよろ〳〵ひよろ〳〵なんきんあやつりのごとくそのくせに目をすえてにらんでゐるゆゑ一いきみをやう〳〵にながめて引わくる　ほんこう「ハテおめへ跡でわかる事だはな。皆が知てるからかんにんしてやんなせへ。高が生酔だから。どうもしかたがねへ　トたゞ竪「かへしさてかの生酔にほよ〳〵か〳〵てきものをきせ「おもてへ出してやると門にて　子ども大ぜい「なアまるで粕食〳〵　竪「ナナなんだ此とゝッとうへんぼくめ　子ども「ぼくねん人ヤイ　竪「おれ。おれ。ぼくねんじんなら。おいらアぼく大根だ〳〵。おら酔やアしねへぞ。ほんの事た。イヤまた。ほんの事たが又ほんの事たア　あとは大風の吹たのあのごとし　▲　ほんこう「ヤ太夫さん此間は　義太夫のけいこ屋とおぼしき男　太夫「ハ。ハ。ヤるらふ込ナ　ト芝居の引まくをれまきにかほしたるひろ袖のきものをぬがふとするこゝろへけいこ所の月なみ會では二の明をかたらうといふ太夫あたまりはけあんばいで一手ぬぐひをしつぶりとしたをここぼつなから　義遊「イヤモ呑太夫が所を拾てくれた。酒客めが。紙治の茶屋場を出して丸で鹽町の氣で語りをるから。にくさもにくしと。紅梅簾の二ツ胴をはり出させて。久しぶりの石町をきかせるつもりであつたが。赤助がいふには。やつぱり音十郎殿に稽古した。先斗町が口づいて大丈夫だといふから。假橋を出した　太夫「ハ、ア一本鎗じやナ　音十郎とはいづみや音十郎ごしと浄るりの名人すなはち古人松主が事之　しかしおまへの浄瑠璃は。やつぱり住さんの性根で押て行なされ。それが徳じや。見物の請が能て一割設るはい　義「イヤ又ゆふべも浪花が例の鍋屋で。中二階を張おつたはい。的めも潜人じやな　なべ屋とは豐竹麓太夫の事せんにんとは浄るりのみそをおはこにかたりくちをむりに上手めかしこわだまゝにかたりいづすたぐひこと　▲潜上をいふゆゑ潜人なるべし　○浄るりの浄言之　太夫「大せんにんじや。東へ持來もよけれど。的めはあまり仰山過るはい　豐竹巡前様の方若太夫弟太大和太夫のたぐひを東といふ竹本筑後様の方政七大住太夫のたぐひを西といふなり　しかしうまい事はうまいテ。ほんまの東口といふものは。まだ〳〵あのや

○立會　序段より段終りまで、續けずとも或處まで筋を通した出し物で會をする事と石割氏に聞く、然らば見取に對する言葉なり。
○すこたん　臆病。
○大師河原　川崎。

うな物じやない。白湯さまはどうじやつたナ　義「例の通り白湯と鼻をかむ音ばかりさせおつて。床の内で咳ばらひばかりしてけつかる　太夫「あの人の語るときあの人を床から出して聞人にして聞せたい。自由にならぬもんじや　義「立會はまだかナ　太夫「稽古がやつと殘てある。まだマア今やそこらの事にやいけそもござりませぬチヤトお出なされ　義「弦糸は見えるかの　太夫「此間すきとお出がない　義「アあいつも古い下手ふけいきな聲だ　ト立わかれる此やうに人の事はかりわるくいふ人そのれが床へはいるとすこたんをかたり三味せんひきにいつはいわそはれきく人にわるくちをいはれゆかの中まであくびの帯のひくゝもかまはずあせをながしてかたるされごもつや得るものゝ三のきりかゝりたり　▲富「きのふ大師河原へ參つたが。ヤ遠いぞ〳〵。歸りに羽田の弁天へ廻つて。大森の橋の際へ出たがくたびれはてた。チイ金公久しく潮來を聞ねへぜ。ちつとうたはつし　金「ヘンそんな安いンじやアねへ。是でも大体錢をかけて習つたのだア。潮來をさらふとつて。毎日六七十ヅ、錢をつかつたア　富「何につかふ　金「見あたり次第に湯へ這入つたア。翌は杵屋のさらひがあらア　富「茶屋か　金「ウム今から湯の中でさらつて。それから彈合だア　富「たまらねへ　金「チヤなんだか女湯の方で大きな聲をしてしやべるぜへ　富「新道の藝者の内の婆さんだらう　金「番頭のわきで聞かう　富「こいつアおもしれへ〳〵

番頭曰

男湯の殘闕女湯の光景おかしき事さま〴〵あれども前編の紙數僅なれば書つくしがたく後編に猶くはしくおめにかけまする女湯のしゆかうおもしろく出來のうへ來春出板を皆さまが　□まつの内早仕舞　めでたし〳〵

極り切つて十二文。
〇ちよいと捻た　前のおひねりにかけて云ふ。
〇當筒棒　宛寸法とも書く、語意によつて文字を充てたるが如し。
〇此節薪高直に付　湯錢の値上をする時の言葉。
〇二番仕込　第二準備。
〇烏の行水　早く湯より上る人を、烏の行水のやうだと云ふ。
〇ざつとながして　「烏の行水」を承けたる言葉。汗を流してなり。
〇三史五經　チンプンな漢學の本。
〇稗官野史　繪本草双紙。
〇女大學女今川　婦女の修身書。

附ていふ

小兒を養ふに丸藥の苦きと。水飴の甘きとあり。これを書に譬へば。三史五經は丸藥の苦味にて。稗官野史は水飴の甘味なり。蓋世に女教の書許多あれど。女大學今川のたぐひ。丸藥の口に苦ければ婦女子も心に味ふと尠し。這女湯の小説は。素より漫戯の書といへども。心を用ゐて讀む則は水飴の味ひ易く。善惡邪正の行狀はおのづからに曉得べし。されば常言にいふごとく。他の風見て吾ふりをも。好歹ともに改め給はゞ教諭の捷徑となりぬべし。父強異見は耳に止めぬ壯者も。含笑ある教訓は。聽くに倦ざるものなれば。自然と心にとむるものなり。人々假初の戯冊子も心をとゞめて味ひ給はゞ。大益必らず小益の中にあるべし云爾

此書初編は文化巳の年の肇春祝融氏の怒りに觸て板面ことごとく烏有となりぬ仍て再び増補して上梓せんことをはかれり　四方主顧の君市發市の日を俟て需め給はらは發客の幸甚からんと敬白

○一切成就云々　願人坊主の言葉。
○一天四海皆歸妙法云々　法華宗。
○願くは此功德を以て云々　回向文。
○八宗九宗入つどふ　種々雜多の意。
○何文字　常磐津文字太夫の名取。
○豐何　豐後掾の弟子。
○白齒　亭主無き女。鐵漿にて齒を染めざればなり。
○謎染　判じ物の模樣。
○甚九　「中陵漫錄」云此歌元來長州赤間關の京屋の娘より大に盛に成たり、流行して羽州米澤に入る、此歌を唱へざる者なし、八十餘歳の老翁も厠に入て踊り歌ふ、如此盛なるに至て、官府より令下て大に禁ずと云、今に盛なるは越後の如きはなし、男女老弱相聚て足を踏て唱ひ、手を打て其節を正し聲を助け、今に至て此風四方に在て人々常に是風なりと思へり、享保の頃より往々に此風起るとなり、此風盛に都には人々好む者な

諢話浮世風呂二編　卷之上

女中湯之卷

江戸戯作者　式亭三馬　著

朝湯より晝前のありさま

物もらひ百さへずり「一切成就祓極凡穢毛滞無穢者有羅之。內外乃玉垣清淨登申す「一天四海皆歸妙法南無高祖日蓮大菩薩。南無妙法蓮華經〳〵「願くは此功德を以て普く一切の衆生に及さん南無阿彌陀佛〳〵南無阿彌陀佛　○淨土宗やら。法華やら。八宗九宗入つどふ女湯の障子を明て。ナ、さむいと云ひながら肩をぶる〳〵として入來るは。何文字とか豐何とか名告るべき十八九の白齒。といふ昔模樣。謎染の新形浴衣をかゝえて。おさみ「チヤお鯛さんお早うございますチ。夕は嘸おやかましう　料理屋の娘おたい「アイゆふべはおねむかつたらうチ。いつでもあの生醉さんは夜がふけるねへ　さみ「アイサそれでも癖がなくて能上戸さ。粕兵衛さんのやうに酒亂でないから能よ。あれからチ。わたしを送て遣う迚。新道のまがり角で辷つたり何角アして。とう〳〵內の前まで送てさ。たい「いゝ氣ぜんな。きつい世話やき爺だチ。呑助さんのへぼ拳と。飲六さんの惡ふざけにはおそれるねへ　さみ「さやうさ酒香さんの甚九も騷〴〵しいよチエ　たい「いつでもしまひは鼾さ。チヤおまへモウお仕舞が出來たチ　さみ「アイ。今朝お櫛さんが一番に來て呉たからサ。おまはんのは誰にお結はせだこ　たい「お筋さんさ　さみ「いつそ恰好がよいチエ　たい「なアに今朝は替りだから。勝手が違ておかアしい氣持さ　さみ「人

が替ると上手でもわるいものさ。あつちを向てお見せ。チヤいつそよいがチエ　たい「一が上り過たじやアないかチ　さみ「いゝへ能ございます　たい「ハイおゆるりと　ト駒下駄をおろしてかごぐちへでかゝる　さみ「ちつとおよんなはいましな。宿に母が居りますよ。ハイさやうなら　ト捨ぜりふにて風呂へいる

▲あとから来るは、是もおなじ仲間と見えて、三十ばかりの白歯、まゆ毛の上へ小じはがたまつて、はなのわきのきめじはも、だん〳〵ふかく※くえこんで、色つやうすぐろく、白歯も黄色になつたれど、※ひつじばえの眉毛が、りきんだばかりで、顔中の※七難をかくすといふやつ、※中折の下駄をがた〳〵といけさう〴〵しくはきすてて、湯ばんのかみさまにあいさつし、ゆかたをほうり出して、帯をときながら、風呂の方へむかひ、かんばつたてうしにて　おはち「お三味さん〳〵。トいへどもきこえず　お三味さアん。つんぼうめ。ふろの中でいぜんの娘　おさみ「アイヨウ。お撥さんかお早いの　はち「お早いじやアねへはな。おめへといふものはしよにんな者だの。さうしなせへ。随分つき合をしらねへが能のさ。あれほど待て居て呉なといふのに。　さみ「それでもおめへのお飯は埒が明ねへものを　はち「アイサ。大喰だからね。左様さ。至極おまへさまのが御尤な筋さ。トいひながら風呂へ入り　いまの。おめへの所へよつたらの。おめへン所のかゝさんがいふには。たつた今行きやした。今しがたまでおめへの来るのを待て居たはな。どうもあの子はしよにんだねへ。何の角のと嬉しがらせる奴さ。ホンニおめへのかゝさんはせじ者だのう。いつそ世事が能よ。おらが所のかゝさんと来ちやア。小ごとばアつかり云て。うるさくつてならねへもんじやアねへ　さみ「能はな。その代にとつざんが氣が能から能はな　はち「あんまり氣が能過から。※常日一夜かゝさんに叱られてばつかし居るはな。とつざんの贔屓をするじやアねへが。傍で歯痒い様だよ。コウ〳〵おめへゆふべは大酒屋か　さみ「ア、。註に曰アイといふ返答をア、といふはすべて少女の通り言之　おめへは　はち「わたしは※蛭子講の坐敷さ。丁度※八ツに歸つたはな　さみ「わたしもそちこち八ツ前だつた　はち「むり酒をのんだから是みな。いまだに目が腫ぼつてへよ　さみ「道理で色が悪い　はち「チ、あつい　さみ「あついか。弱虫だのう。　はち「弱虫じやアねへはな。おめへもあつからうが。此子

し、此邊鄙の樂なり。

○お仕舞　化粧をすること。

○いつそ　この階級にて盛に用ゐたる言葉。寧にあらず、却にあらず、「本當に」などいふ意に近し。

○一　髷の後端。

○くえこんで　凹んで。

○ひつじばえ　稀觀帖に詳。

○七難　七難九厄とて、すべての悪いことを云ふ。

○中折の下駄　「守貞漫稿」に「中切下駄　折下駄ともひきづりとも云、表緒ともに同前、無歯い桐臺を半より二つに切かけ革を以て繼レ之」云々とあり。

○さうしなせへ　勝手にしろの意。

○常日一夜　始終。

○蛭子講　十月二十日。

○八ツ　二時頃。

の様ないぢのつつぱつた子はねへよ。トン〳〵〳〵ちつとうめておくれ。湯汲のをここわざとからかひ今うめました。モウなりません はち「今うめたもすさまじい。まだあついからうめや。おいねへ三助だのう 湯くみ「三助といつちやア。猶うめません はち「そんなら三助大明神さまおがみます。此うち水をうめる 湯くみ「サアかきまはしなさい はち「いやだよ。誰がかき廻す物か。コウ〳〵こゝへしづみな。水の來る所へ。アレサ。※まんがちな。コウお三味さん。おめへ一昨日何所へ行た さみ「※芝居へ はち「フウお客とか さみ「ナアニ※櫻丸で はち「チヤだれと さみ「猫文字さんの所から誘はれたからの。おづるさんと豐たほさんと。一所に行たはな。おめへの所へ人をやつたら。者通さんと堀の内へ行たといふから はち「さうさ。まだ見ねへが誰が能い さみ「※紀の國やさ はち「さうだらうよのう。業腹な。跡の替り目も見損なつたよ さみ「芝居がはねたから。※丸三へよつて。三さんに禮を云て出たらの。二階でエヘン〳〵といふから。仰向て見たら。大勢首を出して居たはな。聲色の彌七さん

○すさまじい　聞いて呆れる、笑止がやたい、など云ふ意に近し。
○おいねへ　始末におへねへの略。
○まんがち　我勝ち。
○櫻丸　茶屋通言、自辯のこと。
○紀の國や　澤村宗十郎。
○丸三　芝居茶屋の名。

と。のし松さんが詞をかけたつけ。その外は誰が居たか早く〳〵かけ出して來た。アまだあついやうだ。サア〳〵出やう〳〵。トをかへ出ると、ながしのをとこ留桶と小をけ二ツへ、湯を汲でおき、せなかをながしに來たり ながしの男「サアお撥さん脊中を出しなせへ。トあらひかける きみ「コレ。此人はや。おれが先へ來たものを ながしの男「どうでもいゝ。どうで一緒に歸る者だ。此ながしの男は、來年ごろばんとうにぬけやうといふ人物、このいへに四五年も長年するゆゑ、女中がたへ同に心やすく、詞づかひもいけぞんざいが通りにやつこ はち「コウ。叮嚀に扱つて呉な。いけぞんぜへな。二三べんさするかと思ふと。湯をぶつかけてお仕舞にするのう 男「大概で能とさ。垢だつても毎日出る者でねへ きみ「さう云ひなさんな。お撥さんはの。猫脊中ときてるから、鼠の糞のやうな垢がよれるよ はち「エ、。置てもおくれ。能口だのう 男「また喧嘩をせうと思つて。モウ〳〵水の吹かけ鏡は惡いぞ。ア、やかましい娘どもだ。ソレよし。サア〳〵お三味さん脊中を出さつしやい きみ「ソレ出さつしやつた洗はつせへ。ぞんぜへな親父だのう。ト此うちのからかひ、ながけれはりやくす ○三十四五のかみさま、八ツばかりのむすめをつれ、二ツばかりの子をだきて、門ドぐちから「ヲ、。あぶいぞあぶいぞ。ヤレ〳〵あぶかつたのう坊や。ヤレ〳〵。内へ這入つたら溫になつたぞ。トふりむき おかみさん此間は「湯やのかみさまたかいところにゐて「ハイお早うございます。一兩日はけしからぬお寒さでございます。お杉さんお出かチ。ヲホ、、、。いつも御げん氣で能ぞ。お玉さんけふはお手習はお休かへ 娘「イ、エ かみさま「ハ、ア。おなまけだね 母「御覽じましな。私の目つまをしのんでは休みたがります。今日もちやんとお爺さんをだまかして。お休に致しました。兎角おとつさま殿が。おまやかし過てこまります。それだから私のいふとはさつぱりお取上なしさ かみさま「まだそのはづさおまへさん。シタガ。かはつた物で女﨟のお子は兎角爺親の可愛がるものさ。アハ、、。お杉さん。何をお持だね。お薩か。ヲ、能物をお持だぞ。ヲホ、、。いつそ愛盛りだ。とんだ人相よしで能お子だ。アレ〳〵

○ばんとうにぬけやう　流しより番頭に出世する意。

○猫脊中　頸前に出で、脊の後に彎えたるを云ふ。猫と云ひたるより「鼠の糞」云々と云へり。

○能口だのう　惡口を云ふな、の意。

○目つまをしのんで　目を偸んで。

○女﨟のお子　女の子。

○お薩　薩摩芋の略。

○紋の足袋　文派の足袋。

○りん　女中の通り名。

○久しいものさ　古いこと、變化のないお定まりのこと。

○えつさらおつさら　今は「えつちらおつちら」と云ふ。

○丁子水　丁子を水に入れて香氣をつける。

ひとりでお笑でさ。チヽ。チヽ。お杉さんかよ。チヽいゝお子だぞ。ヤレ〳〵。母「サア〳〵お玉は衣をお脱なら爰へおよこし。ソレお轉でないよ。お杉坊も紋の足袋を脱で。ソリヤ。お胴着も解て。チヤ〳〵りんがいくぢもねへ結びやうをした。お繻絆の紐が解る物じやアねへ。サア〳〵。ソリヤよし。サアいゝ。早くお湯で溫になりませう。アよい〳〵。よい〳〵　八才ばかりの女の子門ドロの障子を明て　馬「おつかさん〳〵。トよぶ　風呂の内より　辰「なんだお馬か。何しに來た　馬「あのね。あのう。おとつさんがね。お客があるから。あのう。早くおあがりと。そして。あのう。何處へも道よりをせずに。たつた今お歸りと　辰「アイ〳〵。今歸ります。誰が來たのう。たま〳〵の湯へ來ても直にお迎ひだ。うるせへのう。そしておしはお手習に行たじやアねへか。何でお歸りだ　馬「けふはね。あのウ。お清書だから。清書双紙を取りに　辰「そんならよし。早く行てお習ひ　馬「アイ。そしてネ。あのウ。おとつさんがネ。あのウ。けふは御褒美にッ。お弁當にしてお遣りと　辰「また久しいものさ。雨の降ねへ日は。お弁當は入ません　馬「ウヽ。それでも。トはなをならし　ヨウ。おつかアさん。お弁當にしておくれな。ヨウ。おまへなんざア。おとつざんがお弁當にしてやれとお云ひだ物を　辰「チヨツやかましい。そんならお弁當にしてやるから。お菜好はならないよ　馬「アイ　ト出て行　そばにいるひさ　巳「どこのもお弁當でこまりますよ　辰「ハイサ。もううるさくてなりません。いかなとでも。お弁當が遲いと宿まで取に參りますはな。さうしてえつさらおつさらお師匠さまへ持行てたべます　巳「ハヽヽ。いへ又雨降風間には。轉んだり何角致さぬで。お弁當も能ございますが。お菜がなんだは角だはと。望み好がうるさうございますよ。ヤレ水入へ挿すから花を買て呉ろの。肉桂がほしいの丁子水にするから。丁子も欲とのと。さま〴〵のねだりとでおくせい仕果ま

す　辰「いへさ何處のもその通りでこまります。金紙だの行成紙だのと益にもたゝぬとに切こまざいて遣ひ捨ますし。夫にまたアノ。※替り繪とやら申て子。あつちへこつちへひつくりかへつて。役者の早がはりの繪がございます。夫をおまへさん。買程に〳〵。箱に一ツはい溜つてさ。私も肝が潰れましたはな。三ばん目の兄どのは又。※合卷とやら申草双帋が出るたびに買ますが。葛籠にしつかり溜りました。ヤレ豐國が能の。國貞も能のと。畫工の名まで覺えまして。それは〳〵今の子どもは功者な事でございますよ　巳「さやうさねへ。私どもの幼少な時分は。鼠の嫁入や。※むかし咄の赤本が此上なしでございました　辰「いへさ。何事も移りかはる物でございますよ。鬢插を入はじめた事は。近頃のやうに存ました。その前は※一面に　巳「アイサ。みんな摘髱でございました。それがおまへさん。鬢插だの※張籠だのと調法なとになりました。獨手に髮が結はれます。あの島田くづしの形などは役者の鬘同然さ。頸へ乘せさへすれば手つかずに髷が出來る。イヤハヤ利口な事さ子　辰「一頻は頸の上へ髷がおつかぶさつて居ましたが。又むかしへ皈ツて。些ばかり貰て來たほどの島田になりました。その上に上方風を好このむものも出て參りますし。ホンニ〳〵移り氣なものでございますよねへ　巳「京形だの京かんざしだのと。何でも珍しい事を好ます。お江戸の人はお江戸の風がいつまでも能うございますよ。つかねへとでございますが。御惣領のお姉さんは。タシカ。お片付なさいましたツけ子　辰「ハイ。相應な所がございましたから片づけました　巳「お一人ヅヽもお身のかたまるがお心休めさ　辰「何でございますか。モウ女の子は金ツ食ひだと申て。宿でも小ごとばかり申てをります　巳「先さまはお姑御がございますか　辰「ハイ。まだ若姑でございます　巳「それはあのお子さんお骨が折ませう　辰「いへもうずんど。氣立のよい姑御でご

○替り繪　余が幼き頃、役者早替り衣替と呼て、「きめ出し」錦繪開板あり、專ら童幼の玩物となりしが、其後形をだに見ずなりぬ、今茲(文化七)歌川豐國其廢れるを興し、再び大錦繪に畫てより、頃日行はること夥し。早變胴機關)

○合卷　文化の始、式亭三馬工夫にて、十五枚を一冊として、二冊つゞきを合卷の六冊物といふ。(眞木のかつら)

○むかし咄の赤本　畫を見る子供本、表紙の赤きより名に負ふ。

○一面に　一般に。

○張籠　ハリコ、鬢入れ。

○つかねへと　束ない、話の飛び〳〵になる意。

○實母散や婦王散　藥名。實母散は現存もあり。婦王散は震災前まで神田須田町にありたり。
○熊の腹帯　未明。女用訓蒙圖彙に、熊の掌にて、はらこしをなでおろせば、うまるゝものなりとあり。
○子安のお守　子安觀音。
○お雛形　粟嶋樣の安産の守。

ざいます。夫に誰どのは。一返どうらくをして堅まつた人だけに。至極わかつて居ますから。大きに仕合さ。夫婦中も至極ようございます「それは何より能ことさ。よしや姑御がむづかしくても。御夫婦中さへよければ納ります「ハイサ。最う跡月帯を致しましたはな「チヤ〱。それは重ね〲お悦びでございますネ。能くお毒だてをお氣を付なさいましよ。五ッ月過れば何をたべてもあたりは致さぬけれど。鱝などは決しておあけなさいますな。お乳に障りますよ。實母散や婦王散も。おまへさんがお子もちだけに。御如在はございますまい「ハイ。私にも合ひ藥でございますが。てりふり町の足袋やで賣る。血の道の藥が能うございます。看板も出てはをりませんが。能く人のしつてるお藥さ。逆上ないで至極よいおくすりでございます。あのお藥のお蔭で大分よい人がございますから。方〲へ敎て上ます「七夜の内につければ。乳も出る。ソシテよくしこりも取れて乳口の明くお藥がございましたつけ。ア、どう忘れを致しました。何處でお有たて「ヘヱそれは。尾張町の平松の黒ぐすりでございませう。あれはよいお藥さ。熊の腹帯だの。子安のお守だの。お雛形だのと。それは〱有がたい品を方〲さまからお借申ました。私がたび〱産を致ても。子の産は何か案じられまして。氣味のわるいものでございますよ「その筈さおまへさん。お産れなすつたら。産湯を德利に一盃おとりなすつて。胎衣と御一緒にお埋なさいまし。幼さまがお乳におこまりなさらぬといふお咒咀でございます。私どもは兎角に子育がなくてこまりますよ。ホンニお羨しい事だ「夫でも御惣領がお獨ござらッしやれば澤山でございます。殊に男のお子ではあり。私どもは女の子が三人。男の子二人でございますが。そのうちにも女の子は。ほんに〱生れるから死まで厄介さ「いゝへ。女の子が心樂みで能うござ

○けにも晴にも　褻にも晴にも。不斷にも餘所行にもなり。かけ替無き意。

○年病　老病。

いますよ。おまへさんのもお二人男のお子だから。二ばん目のお兄イさんは丁度能お跡とりさ。私どもの惣領どのも。世話ばつかりやかせてこまり切ります。※けにも晴にも一人の男だけに。あまやかして奉公にも出しませんから。今での後悔さ。利口發明でも人中を見ねへじやア役に立ませぬ。設る事はしらねへで。遣ふとばかり功者になります　辰「なにさ。どうで一盛りはおどうらくでございますのさ。私どもの二番目も人中が藥だと申て。本店へ遣して置ました　弖「へエ。よく長しく御奉公なさいますねへ。いづれサ他人の飯をたべねばネ。他の想像がございませんのさ。たとへサ奉公人を遣へばとてもネ。わが身をつめつて見ねば。他の痛さがしれませんはな。どうしてもモウ。親の手を離れぬものは。痛さ痒さがわかりません。御奇特に御奉公させ申なさいます　辰「ハイサ。只今の分ではよく辛抱致します。宿できびしいだけにネ。宿下りの外は内へ來るなと申付ましたから。近所までお使に參つても内へは寄ません。トはなしなかばへ下女かけきたり　下女「おかみさんエ。式手屋の馬太郎さまが入らつしやいましたから一寸お歸んなさいまし　辰「ヲイ。今行よ。あれ御覽じましな。二度三度のお迎だ。ホンニ〳〵たんまりと湯へも這入れません。ホヽヽ。コレ〳〵喜代や。おのしはの。お茶の支度をさつせへよ。下女「ハイ〳〵ト出てゆく　辰「さやうならお靜に　弖「ハイさやうならお宿へよろしくおつしやつて下さいまし。侘ながら御不沙汰　ト別れる　○水ぶねのかたわきに、ぬかなごこぼしたから、はおさまふたりむか[illegible]日をうごかしながら　さる「おばさんおあがりか　とり「ヲヤおばさんお早かつたの。いつの間に來なすつた。トおないどしぐらゐのばあさま、たがいにおばさん〳〵のあいさつなり、どちらがおばさんかねからわからず　さる「ホンニおばさん。此頃はお遠〳〵しいの　とり「アイヨ。おめへあんばいがわるかつたじやアねへか　さる「ソレヨ。その事よ。何最う※年病だらうはな。目は惡しの。足腰は不自由なりの。かゝつた事じやアねへはな。嬉しがるものは

嫁斗さ　とり「何まだその年じやアねへはな　さる「いくつだとおもひなさる　とり「サレバ。おれよりは上だらうよのう　さる「ア、。上所か一まはり違はア。最う丁度だはな　とり「八十か　さる「ヤレモノ〳〵。かはいさうなことをいふおばさんだ。七十よ　とり「おや。おや。おれはの去年まで五十九だつけが。取て六十だヨ。おほかた來年は本卦歸りだらうといふはさだ　さる「此おばさんは馬鹿なことばつかりいふは。ホンニ〳〵。いつも若い元氣だ　とり「わかくなくてさ。※おばゞ四十九で信濃へ嫁入といふけれどの。六十じやア脉が上ツたよのうおばさん。ハ、、、　さる「おめへはいつも氣さくで能よ。白髮にはなつても氣は若いヨ　とり「氣を腐したつてはじまらねへ事だ。なんでもこちとは貪惜しねへのさ。黑油でもなすつて最う一ぺんおしやらく※をする氣だものを。嫁に行口があらばおばさん。仲人して呉なよ。※鬼も六十今が婆盛りだ。アッハッハッハ、、、　さる「ハ、、、、。ほんにおめへは後生がよからうヨ　とり「なアに後生も三舛もかまふことか。死だ跡は勝手にするがいゝ。此世の事さへもしれねへものが。死だ先がどう知れるものか。寐酒の一盃ヅヽも呑んで。快く寐るのが極樂よ　さる「それよ。おめへは些ヅヽも酒がいけるだけ氣の持やうが違ふ。こちとらは氣の晴やうがねへ。年が年百くさ〳〵して居るだ。ホンニ〳〵。見たくでもねへア、最う〳〵。娑婆に倦じ果た　とり「チヤ〳〵。此おばさんはヤ。今ッから娑婆に倦てつまるもんか。死だ先には當もねへ事たから。お近づきの娑婆に百までも壽をするが能はな　さる「チ、否な事かな。モウ〳〵。しみ〴〵いやだ。些とも早くお如來さまのお迎をまつのさ　とり「エ、。何のこつたないくぢのねへ。死たい〳〵といふ人の。死たがつた例はねへ。お迎が來たら。最うちつと待て呉といふだんべい　さる「ウンニヤ。ほんのことさ　とり「死で見たら。また生たがるだらう。追出

○本卦歸り　本卦還りの誤。六十一を云ふ。
○おばゞ四十九で信濃へ嫁入　一茶の句に「お婆四十九で信濃へと紙子哉」とあり。
○おしやらく　おしやれ。
○鬼も六十云々　「鬼も十六番茶も出ばな」といふ。六十なれば婆盛りと洒落て云へるなり。
○後生も三升も　五升も三升もの洒落。

○七色菓子　大黒天への供物、甲子の日に賣りに來る。

○塩がしみたか　辛酸を經ること。

○おぼつぼ　懷中、錢を遣つてあるく。

した嫁を譽ては後の娵を惡いふやうなもんだ。夏が來れば冬が能といふし。冬がくれば夏が能といふし。人間といふものは自由ッくうな事ばつかりいふ物よ。こちとらは不斷息子や嫁に云て聞せるのさ。手めへたちはの。おれが活て居る内にうまい物をたんと喰せろとの。死だ跡で目がさめるな。お佛檀へお盛物を並立て。ナニガ芋やすりこ木を削込だつて。佛になつて食ふやら食ねへやらしれねへッ。精進日をわすれて。油揚を一枚燒て着たり。お備や七色菓子を上るよりか。生て居る内に初松魚で一盃飲せる方が。遙に功德だと。の。さうだらうおばさん。さういふもんだからの。野郎どのもよく孝行にして賣買を精出すはな。毎日商から歸りにはの。何かしらン竹の皮へ買て來ての。サアかゝさん一ッあがれと一合ヅヽも燒酒をのませるしの。（ト少しうれし泪で泪ぐみたるおもむき）あれもおめへ。前方はちつとどうらくだつけが。今では塩がしみたか。それはく\おとなしくなつてよく挊ます。爺さまに早く別れたのが。あれが身のしまりにもなつたのさ。其代におれがあれを育るにはのうおばさん。海山の苦勞をしたはな。なんとしてく\。なかく\生やさしい事じやアなかつた。それでも生立の惡い野郞なら。おぼつぼで遊び歩行て。いまだに役にも立めへが。早く了簡が付たで。あれもおれも兩爲さ。夫にまた娵が直な者での。朝晩よく氣をつけて吳るからの。是がまた一ッの安氣よ。あれもおめへ。龍の糞禰道の。足右衞門さんの媒人で。不意とした事で貰たが。最う足かけ三年になるはな。どうぞ孫がほしいけれど。埒の明ねへ夫婦さ。あれも授り者だから。いくらほしがつても無い種は出來ねへものよのうおばさん　さるこ　さうさ。自由にならねへものよのう。おらが内じやア。おれが軀がきかねへから。守が一ッ出來ねへのに。年子だア。ホンニちつとおすそわけしてへ位よ。先の娵が置て行た子が三人に。今度の嫁が續て二

○引ずり　女房にいふ、此體に・貧乏するも引ずりめがうせてから（東海道敵討）、引きずりの癖に早いは尻ばかり（末摘花）、又双蝶々曲輪日記に「嬉しや雪も上つたそふな、近所の德には引ずりで軒傳ひ」とあるは、引ずり足駄に出來するか。

○椎茸さん干瓢さん　精進物、油けなきをいふ。

○ぶつかけ　蕎麥。

人。またおめへ出來そうだ。せめて仕事でも精出せばいゝが。大酒食だから。五日ら三日らなまけ出すと細工はあがつたりさ。かゝアどのは長屋中で評判の引ずりよ。うぬが嬰兒にはかまはねへで髪頭ばつかり作り立て。亭主にはほろを下させるか。屎小便もかけながして。しめしを一ッ洗ふではなし。飯を食へば膳をつき出してモウ嬰兒を脊負出す。誰も仕人がねへから。せうことなしにおれが取り始末をすればかり。大勢の子持を權に借て。内の事は一葉も構はねへ。誰が大勢子を持てといふもんか。手〴〵の好で子を拵て自慢らしい。あきれもしねへといふとさ。あのざまアを見なせへ。おめへの方へも行だらうが。椎茸さん干瓢さんといふ天窓をして。なけ無の一ッてうらを蒼殺に着切て仕まふだ。着物ものおめへ。身じんまくをよくすれば。じゞむさくもなく。小ざつぱりと洗濯ものが着られるのだはな。洗濯物は置け。針をひとつ持すべをしらねへだ。商賣あがりだから。大かた子も出來めへし。教たらちつとづゝ縫物も出來やうと思つたが。何が出來やうズ。出來ずともいゝ子は出來て。ようかし雑巾の張返しも手にのらねへ。針を一本持せると。疊屋さんが端をさすやうだ。口は達者にべヱら〳〵しやべつて。人が一言いへば十言程づゝ口答をするか。ホン二〳〵。肝の煎た事よ。聞なせへ塗盆の上で鰹節を搔たり。敷居の上へ吹殻をはたいたり。當り合のものを枕にして。いけずう〳〵と晝寐さ。火鉢の中へはぴよつぴよと痰を吐て灰でぐる〳〵と轉がしての。丸いものをいくらも拵て置から。おれが跡から廻つては掘出して捨れば。いぢにかゝつてお竈さまへ液を吐はな。宵ッはりの朝寐坊ときてるから。人を集めておもしろくもねへ芝居ばなしを。べヱん〳〵としてそのあげくは寒からぶつかけを食てへのと。さんざつぱらあばれ食をしてお寐ると高鼾だ。息子どのの寐言と掛合にギリ〳〵齒を咬といふもん

○修羅を燃す　怨恨憤懣するを云ふ。

だから。やかましくて寐つかれねへ。その合間には子どもらが目を寤して。ギヤア〳〵吼ると。あつちもこつちも一時に泣出す。サア夫でも起さねへじやア目がさめねへ。それだもんだから夜がな夜一夜騷〳〵しくてならねへよおばさん　とり「いゝはな。夫でも夫婦中がよくはこつちのしつたこじやアなし。打遣て置なせへ。おめへが世話やき過らア　さる「何おれはかまはねへのさ。夫婦中がよくは夫婦喧嘩もねへ筈だが。親子喧嘩の合間こまには夫婦喧嘩さ。出しあへもしねへくせに出て往といふ。片〳〵とのは見くびつてふてるの。その跡は科もねへ行燈へ當て。暗くもねへものを。エヽくらひ明りだなアんの角のと燈心を抓み込んで。此高い油をばつはと減らすか。こつちらどのはこつちらどのであたけちらして。傍にある入物小鉢はその度にぶちこわすだ。瀬戸物燒繼と塗師屋は常得意さ。あれでもすまねへもんだが。ほんに〳〵からつきり氣の休まる間がねへ　とり「ハテ、そんなことに苦勞なするはおめへの損だよ。氣で氣が休らねへのだ。後生を願はずと此世を極樂にしなせへ。おめへが修羅を燃すと内中が納らねへから。やつぱり地獄の苦みだはな。おれがやうに氣を持ても是でも姑はやかましいといはれ勝だ。おめへも五十年あとは廿才だのう。そんなら五十年あとの氣になつて。おめへが嫁で嫁を姑のやうにあしらふ氣になればしち面倒なことはねへ。家を納めるために嫁を取てあてがふからは。姑は遠くへ退居るがいゝ。兎角姑が口を出すと納らねへよ。おめへ死たい〳〵といふから死だ氣になつて居れば。何もやかましい筈はねへ　さる「おばさん。おめへまでが嫁の贔屓をするから　とり「ハテ。誰が贔屓をするものかナ。夫がおめへの愚痴だアな。おらア女だけれど心は男のやうだから。愚痴なことは嫌だ。そんなことをいふ隙に大般若經の建立にでも出なせへ。内に居るから悪い。おいらは毎日お念佛だハアそうだ

ぞ。と囃して。鉦をたゝいて出なせへ。氣がはれてとんだ能よ。いつまで活るもんだナ。そんな事はさらけ遣て置なせへ。エ、やくにも立ねへ。チ、さむくなつたおめへ最うおあがりか。お十夜には來なせへよどうせ勸信坊が札を持徃だらう　さる「アイ。どうぞして參りてへもんだ　とし「もんだじやアねへ。さつさと出かけなせへ　ト道具入。●二十くらいの女房、人がらのよい國ざく、はなの下をながくのばして、もみあげのあたりをあらひながら　いぬ「チヤ〳〵お鍋さんでございますかへ。あのお子さまは少し見申さぬうちに。おみ大きくおなりなさいましたヲ。モウ當年おいくつでございますへ　きお「ハイ九ツになります。ヲホヽヽ　いぬ「お宿下りでございますか　きお「ハイ。三夜泊りにお隙を頂きました　いぬ「それはよろしうございます。踊と申すものは。おちいさい内から御奉公ができてよろしうございますねへ。おいくつからお上なさいましたへ　きお「ハイ。六ツの秋御奉公に上ましたへ　いぬ「へエ。よく思ひ切てチエ　きお「ハイサ。乳母を付て出しましたから。只今までも御奉公が勤りますが。最う早。わが儘らのでこまります　いぬ「イエサ。○やんちやんが能うございますのさ。しかしお乳母どのが大体ではございませんヲ。何は。御稽古はどうなさいますへ　きお「ハイ。藤間さんがお屋敷へお上んなさいますから。やはりお屋敷で致ます　いぬ「それは。幸ひなとでございます。モウよほどお上なさいましたらう　きお「ハイ。何か埒もございません。それでも此子は好でございますから覺もよい様でございます。へ、、、　いぬ「おほかた芝居をおねだりでございませうヲ　きお「ハイ。最一軒見せましたが。今日はお寺詣に連て參じますのさ。これがドツて居ますうちは。何角手につきませんで。モウ〳〵〳〵用がさつぱり片付ません。明日は早々。お屋敷へ上ます　いぬ「ナゼヱ。追願ひをなすつて。最一三日お泊なさいましなチエ。お鍋さん。ヲホヽヽ。ホンニ私どもへも些とおよこし申な

○あんちやん　[illegible]と云ふに[illegible]たり。[illegible]の語にて、兄と言はれ天を「山の大工」、また「大工」と稱へ、山のあんちやんといへり、山は僧侶をいひ、あんちやんは三遊の方言にて兄をいふ、山のあんちやんを、山ンちやんとし訛りていへるか。

さいまし。お釜と丁度能お友達だ　さお「ハイ。有がたう。ホンニお釜さんもきつい御成人でございます。毎日よく御稽古にお通ひなさります　いぬ「ハイ。もう脊丈ばかりのびまして。をとなしくございません。ヤレさらへ。ソレさらへと申て。やう〳〵さらひます。兎角無精でこまりますよ。それにおまへさんネ。御縁がなくてどうも御奉公の口がはづれます。此方で上たいと思へば先さまへ済ず。御意に入ればこちらで不承知ない。度〳〵お目見えに出ますが。兎角に故障がございまして。ヲホヽヽヽ。なんだかモウ世話なものでございますよ。ヲホヽヽ　さお「イエサ。何ごとも御縁づくでございますからネかならずお氣ながになさいまし。しかしネ。御奉公は有がたうございますよ。躾るとなしに行儀がよくなります。内においてどのやうにやかましく申ても。※折屈が直りませぬ。お屋敷さまへ上ておきますと。おれそれが何處か違て参ります。それにおまへさんネ。此子が上りましたお屋敷さまは。お高が能所へか御富貴でございましてネおあてがひから何から万事がふんだんでございます。それに部屋親さまがいつそお氣立のよいお方で。これを御自分の子のやうになすつて。お世話なさりますから至極勤ようございます。ソシテ奥様の御意に入りまして。名をばお呼び遊ばさずに。おちやッぴいヤ。於茶ヤ〳〵とお召遊ばして。お客様の入らつしやる度に。此子を御吹聴遊ばすさうでござります。誠に有がたいことでござります。幼少から上て置ました厚い御恩を一生忘れてはすみませんのさ。さりながら着類は綺羅が張ましてネ。この上今までの衣類は段〳〵ちいさくなりますし。何も角も只今からは大人並に拵へ直しますから。イヤハヤ。大頭痛でございます　いぬ「さやうでございませうしかし段〳〵順送りになすつて。あのお子さまの着古しはお妹子さまのになりますからむだはございません。夫はもうおとつさんのお痛

○折屈　擧措。

○部屋親　幼年者の奉仕する年嵩けたる女中の部屋に在る例にて、その部屋の主人を部屋親といふ、それゆゑ部屋子といふ唱へもあり。

○おちやッぴい　小想兵衛嘲嘲物語云昔のはすわ、今はをちやぴいと呼かえ、猿觀帖云天竺にては佛在世、富樓那といへる口賢に婦り、唐土にては周の御代蘇秦張儀が徒に殺り、日本にては小尺娘。長明白酒賣云、ちまめごりのおちやつぴい、にくてらしいはざかわゆらし。

○尼駄さま　山田。

○かいな　さうかいな。

○上の風　上方風。

ごとでございますねへ。チホ、、、。ホンニちつとおよこし申なさいまし。私どものお釜に地を弾せて
なんぞお踊なさいましなチト拝見いたしたうございます　きだ「ハイありがたうコレ御あいさつを申しや
れ此子はヤ　娘「ハイ有がたう　きだ「お釜さんはお琴もなさいますネ　いね「ハイ。生田を習せましたが。
此間は尼駄さまのはうへ上ましたっ　モウ中許を取りましたヨ。　きだ「それは宜うございます。チトもしお
はなしに　いね「ハイ有がたう　ト別る　●かゝおゝおい女、ずんぐりとした風俗、いろ白にこくみぢかく、目のふち、額のほかし、口べにくろびかりに濃くぬり、ふさいかうがいを白紙にてぐる／＼とまきたるは、湯気にてべつかうのこらぬためなり　●かまいらしいこゑにて　おかみ「お山さん。ゑらう寒いな。何じやとトト　モウ此間はお腹の觸合がわる
うて。夜さい毎に腹痛でゝ、ないはいな　それじやさかい。風呂になと入て。温めてこまそと思ふて。
なアんほち入ッてじやはいな。お山さんあれ見イ。お家さんの傍に立て居なます嬰兒さんを見イな。あ
りや何色じやしらん　お山「あれかヱ　あれは紅かけ花色といふのさ　かみ「いつから能う染てじやなア
山「薄紫といふやうなあんばいできだねへ　かみ「いつから酷じや。こちや江戸ならさきなら大好く／＼
こちやあないな着物だしてほしいわヱ　お山さんあゝちや向んか　山「ながしておくれか。夫はおはゞ
かいだヱ。かみ「なんのいナ　テモ能う肥てじやな　山「いやよ。太ッちやうはしみん／＼否だ。酢でも呑ん
で痩たいよ　かみ「なんのマア。肥たが能じやないかいな　山「それでもおまへ。ほつそりすうわり柳腰と
さへいふじやアねへか　かみ「がいな　こちやまた。風負せいで能かと思ふた。わしなど走鏡せうな
ら。横にねて轉ろ方が。やつと速じや　山「ハ、、、。モウ四ツを打たかヱ　かみ「何いひじやいな。つ
ウッと最前打てじや。最うやんがて晝じやがな　山「さうかヱ日は短いヱヱ　かみ「さいな。これから往だ
ら。わし所へお出て飯食んか。上の風に丸を料理して食て見たいとて千度いふてち。トトモウ内のが

耳潰してじやつたが。今日はどうしてやら丸焚て食はそと。此様に云てじやさかい。晝は丸じや　山「丸とは何だヱ　かみ「御當地でいふ鼈じやがな。おまへも食て見い　山「ヲヤいやよおつかねへ。鼈なんざア見るもいや。丸を焚といひなはるから。麥飯かと思つたら鼈かへ。ヲ、氣味のわりい。江戸じやアね　鼈をしやれて蓋といひやすよ　かみ「何じや。蓋。あほらしい。蓋とはマアなんのこつちやいな　山「蓋の樣だから蓋さ。上方の丸とはなぜだねへ　かみ「甲が丸いさかい。丸じやわいな　山「そんならどつちらも五分〱のこぢつけだヲ　かみ「さいな。御當地の鼈煮〱といふはな　どたいな仕方じやと思ふたら。あほらしいマア。吸物じや無て上でいふ轉煮じやさかい。鹽が辛うてトトやくたいじや。上の拵方は又あないなもみないもんじやない。第一が薄したぢで吸物じやさかい。酒の下酒になとせうものなら。いつかう能じや。こちや最う大好〱。鰻なども御當地のは和いばかりでもみないがナ　上の鰻といふたらまあ。どないなもんじやい。名高い所がマア。京で上の生洲な。大坂で大正ナ。その外に川魚屋はまだまあ多とあれどナ。玉といふたら的等じや。何じやろとマア。鐵串にさして燒じや。ハ。その燒た跡で能程づゝに切てナ。平に入てぎつしりと蓋して出すさかいに。なんぼでもさめるといふ案じがないわいナ　山「江戸じやア。そんなけちな事は流行らねへのさ。江戸前の樺燒は。ほつほと湯氣の立のを皿へならべて出す。たべるうちにさめたらその儘置て。お代りの燒立をたべるが江戸子さ。さめると猫に持行て遣うと。竹の皮へ包で歸る人は。よつぽど勘定高な人さ　かみ「デおますか。夫がマア。何で江戸子じやナ。物の廢にならんやうにしてこそ。自慢したが能はいナ。いしこらしう江戸子じや何たら角たら云ても。上の者の目から見ては。トトやくたいじやがな。自慢らしういふとが皆へ

○いしこらしう　ギス〱することゝ。
○へこたこ　へこさこいふ、[illegible]過て

○上方ぜへろく　上方人を嘲りて云ふ。

こたこじや　じやによつて江戸子はへげたれじやといふはいな　山「へげたれでも能のさ。江戸ツ子のありがたさには、生れ落から死まで。生れた土地を一寸も離れねへよ。アイ、おめへがたのやうに京でうまれて大坂に住つたり、さま〴〵にまごつき廻つても。あげくのはてはありがたいお江戸だからけふまで暮してゐるじやアねへかナ。夫だからおめへがたの事を上方ぜへろくといふはな　かみ「ぜへろくとはなんのこつちやヱ　山「さいろくト　かみ「さいろくとはなんのこつちやヱ　山「しれずはいゝわな　かみ「へ、關東べいが。さいろくをぜへろくと。けたいな詞つきじやなア。お慮外も。おりよけへ。觀音さまもこかんのんさま。なんのこつちやろな、さうだから斷だからト。あのまア　から　とはなんじやヱ　山「から「だから」から」さ。故といふことよ。そしてまた上方の「さかい」とはなんだへ　かみ「さかい」とはナ。物の境目じや。ハ。物の限る所が境じやによつて。さうじやさかいに。斷した境と云のじやはいな　山「そんならいはうかへ。江戸詞の「から」をわらひなはるが。百人一首の哥に何とあるヱ　かみ「ソレ〳〵。最う百人一首じや。アレハ首じやない百人一。首じやはいな。まだまア「しやくにんし」トいはいで頼母しいナ　山「そりやア、わたしが云損にもしろさ　かみ「ぞこねへ。じやない、云損じや。ゐらふ聞づらいナ。芝居など見るに。今が最期だ觀念何たらいふたり。大願成就忝ねへ何の角のいふて。万歳の才藏のと。ぎつぱな男が云ふてじやが。ひかり人のないさかい。よう濟んである　山「そりや〳〵。上方もわるい〳〵。ひかり人ツサ。ひかるとは稻妻かへ。おつだチヱ。江戸では叱るといふのさ。アイそんな片言は申ません　かみ「ぎつぱひかる。なるほどこりや私が誤た。そしたら其。百人一首は何のこつちやヱ　山「からトいふ詞の譯さ。能お聞よ。百人一首の哥に。文屋康秀吹からに。秋の艸

木のしほるればトあるよ。ソレ吹からに。子。よしかへ。吹ゆゑにといふことを。吹からにさ。なんぼ上方でさかいくと云ても。吹さかい。秋の草木のしほるればとは。詠はいたしやせん　かみ「なる程さう聞きやおまへのがほんまに尤らしいが。ハテ云や何でもいはれるはいな　山「大願成就でもなんでも。利口をじこうといつたり。立派をぎつぱ。狐をけつねといふより能のさ。五音相通とか。何とかゞかなつてるから。むりじやアねへと。此中も博識な人がおはなしだつけ。延引だの観音だのと。あいうえをの上へ。むの字が乗れば。五音相通で。恩愛。観音。延引。善悪などゝいふものだと。能教なすつたから。今度おめへが江戸詞を笑ッたら一番しめてやらうと思つて。待てるたはな　かみ「さうかいな。そんならまア。かんのんも能はト。からも能はト。扨また關東べいじや。どうしべい。斯しべい。行べい。歸るべいとは。扨見ともないナア　山「それも子。万葉集とやらその外神さまの時分の本に子。べいく詞があるとさ。可とは可といふことで。行べい歸るべいは。可行可歸といふ詞で。いまでも萬葉とやらの哥よみは。べい詞を遣ふさうさ。この事も一緒に聞て置て。内へ書付て置たから。その哥や詞を來て見なせへ。鄙言の。何ちふことだの。角ちふことだのといふのも。ちふことは「といふ」といふ詞を詰たので。古い詞だから頼もしいとお云だよ　かみ「なんのいナ。べいく詞が何で譯があろぞいナ。山「譯がなくッてさ。うそならわつちが内へ來て書付を見なせへ　かみ「ハア。ちと見よかいナ。何なと賭にせうかい。私がまけたらナ。醴なと。大福餅なと立ちよはいナ。おまへ又何なと立さんせ　山「立るとはへ　かみ「振舞の事ちや　山「おごるのか　かみ「さいな　山「ムヽ。わつちが負たら鱣を武朱はづまう　かみ「こりや能はいな　山「アいたくく。チヽいたいよ。おめへはまア。調子に乗つて脊中を

痛くおこすりだよ。モウよいよ。　かみ「ハ、、、。拍子にかゝつてチ、しんど　山「サアおまへの背中をお出し　かみ「又遣趣がへしに。ゑらいことすまいぞや　是どうじやいなお山さん。アいた。アいた。アいた。アいた。何しいじやいな。痛さがたまらん毒性なお方なア。いつこ面倒なら放ておかんせ。アいた。アいた。アいた〳〵〳〵〳〵。　はいナ。灸があるさかい。味能うながしいな。アいた。アいた〳〵〳〵〳〵。

子もりの小女、おかみさんの赤子をおはるおいた、きちい〳〵そばにすはつてゐて、ひとつ身のきものをぬひながら、ちい〳〵をひろつてゐるかたはら、七八才ばかりにして、八ッばかりなる娘の子、四五人、えのしまみやげの貝細工の屏風を立て、香箱の上へ、人形のべゝをしき、おふとんをきせてねかしおき、※草たばねのあねさま、※もみ紙でこしらへた嶋田、丸まげ、嶋田くづし、片はづしなどのあねさまへ附木で拵た櫛かうがいをさし、ちりめんの古ぎれで帯をしめたりといたりして、こしやくなどをしやべりながら、※おとなりごとをしてゐる

おはる「坊や。おとなしくねんねしやヨ。朝起〳〵したら。お目覺にお薩をやらうヨ。チヤ〳〵又おきたか。なぜ寐ねへのう。お夏さん〳〵。チヤさうじやアなかつた。お隣のおかみさんへ。最うね私どもの内の坊はチツどうも啼てなりませんよ　おなつ「そんなら灸を居ておやんなさいまし　おはる「ハイ〳〵。ありやこわいよ。灸だと。チ、こはいの。早く寐しな。※もゝんぢいが來るよ。ハイ〳〵。坊は最う寐いたします　●中でもいぢわるのにくまれもの年下の子をなかせたり、きげんのよい中を引さいたりする、※札付のおしやべりあまにて、大あばたのおにくといふむすめ、此仲ケ間の子どもがしらなり、あをつ㸑をよこなでして、その手をひざのあたりへこすりつけながら　おにく「チヤ〳〵〳〵。わつちやア否。わつちやアいや。おはるさんなんざア虫の能ねへ。おまへはおかみさんじやアないよ。お夏さんとわたしがおかみさんで子。おまへはお三どんだものを。ねへお秋さん　中でもお心よしぐうたらべいお秋「ア、さうだよねへお夏さん　中でもりかうもの　おなつ「どうだか私はしらんよ　おはる「チヤ〳〵〳〵。さうじやアないよ。先刻の極じやア私がおかみさんな筈だよ。私は夫じやア否。おまへとは遊ないよ。　両方へくつつくうちまたかうやくのお冬「ア、能よ。おまへがお遊びでなくても能ねへおにくさん

○草たばねのあねさま　童女の自ら作る玩具。

○もみ紙　白紙を竹に卷き皺を寄せたるもの。あねさまの髪形などはこれにて作る。

○おとなりごと　おとなりごつこ、童女の遊び。今のまゝごとなどの類。

○もゝんぢい　モヽンガアとも云ふ。モヽンガアはムサヽビなり。

○札付　定評あるもの。

おにく「ア、能のさ。根からこまらねへチヱ　なつ「おはるさん堪忍してお遊びナ。お三どんに成たつて。皆が代番事だから能はな。又跡でおかみさんにおなりな　はる「わつちは否。おにくさんやおふゆさんがあんな事をお云だものを　ふゆ「わたくしが何と申ました　はる「いまお云ひじやアないか　にく「能はな打遣てお置。あんなものにお構でない　はる「そんなら。今しがた上た物をお返し　にく「ア・返すよ。こんな穢いものは入らないよ　ト[illegible]小ぎれなど出す　よう「お冬さんも先刻の物をお返し　冬「アイ　ト[illegible]　はる「よい。[illegible]さア今度から何を呉ろとお云で　みな出して　三味線の糸屑なんぞを何にするもんかねへ　おにくさんも。やりやアしねへからい　にく「びゝびゞびいイ引　トくちびるをひつくりかへしてひたいでにらめる　はる「いぢわるや　にくふゆ「はら立婆々や。どチろほどろほ。今年のどろほに由断がならね　はる「いつ私がどろほしたヱ　ふゆ「歯かけ婆々に茶ア呑しよ。歯かけばゝアに茶アのましよ　はる「歯かけでもおまへのお世話にやアなりやせんよ　トくちびるをつきだす　はる「お秋さん〳〵こつちへお出この裁を上やう　あき「アイおかたじけよ　はる「おまへとわたしと遊ばうねへ。お隣事をしませう　あき「ア　にく「ざまア見ろ。お秋のべらぼうめ。お夏さんとお冬さんはお出でないよ。わつちとお遊び。何を致さう　ふゆ「ア、毬を突ませう　あき「よいねへ。おまへと二人でお隣事せうねへ　はる「ア、あんな馬鹿はしんに入ないよのうお秋さん　ふゆ「サア〳〵こつちは毬をはじめませう　なつ「中なお直りナ。喧嘩をするもんじやアないよ　にく「能よ。サア〳〵諷つてお呉れ。皆がお諷ひ。一二つ三四。五六。七八には。九と一十ヤ。廿ヤ卅ヤ。四十ヤ。五十ヤ。六十ヤ。七十ヤ。八十ヤ九十九貫目おてさま三六。てうどお目の前で百春ます。一二つ三四五六。チイ落た。　ト此うち一チきはめずむ「おまへが一で。私が一さ。お冬さんは三だよ「サア。何に致さうね。大門口に

いたさう。大門口。揚屋町。三浦高浦米屋の君。皆々道中見ごとなこと。ふりさけ見よなら花紫。相川清川あい逢染川。錦あはせて龍田の川。あのせ。このせ。やつこのせ。向見イさい。新川見イさい。帆掛船が一艘續くあの舟に御女郎乗せて小女郎乗せて。跡から家形が押かアける。ヤレ留ろ。船頭留ろ。留たら汝等に五升進ろぞ、五升入らぬ三五升入イらぬ。わいらにかまふと日が暮れる。日は暮れるお月は出やる。夫で殿御のおん心。それ百よ。それ一イ百よそれ二百よ。由留　とゞめて〳〵一貫貸したせんそうせん。大紺屋のおンすみさアまは。旦那も大八さアまちきよなら清水六角堂。大格子の松の蔭で。おひとの聲が見て候よ。ソレ百よ　なつ「アイ落ました　●お白のサア。おんしろ白〳〵白木やのお駒さんウ。才三さんウ。見せには丈八ならひ筆　ふゆ「ア、落た　●ゑヱん遠州はやいちごじやのウ。油まんしゆの孫じやといふてヱ。いふにいはれぬ伊達なる男ウ。夏も足袋はくばらをのせきだア。じよろり〳〵とじよろはくばかり一チヤ落した。ヱ、業腹な　▲はる「能氣味だねへ　●にく「うつちやつておきやアがれ。おちやつぴいめ。今度は手。お夏さん。京〳〵京橋中〳〵中橋。おつや十六大振袖よウ。あの哥にせうテヱ。ア、それがよいよ　▲こちらのふたりはさなり同上をしてゐる　はる「お隣のおかみさん御免なさいまし　あき「ハイお出なさいまし。コレハ〳〵マアこちらへお上んなさいまし　はる「ハイ。これは赤の飯でございますが。※わざつとお祝ひ申ます　あき「ハイ〳〵。御叮嚀にお拵へなさいましたねへ　はる「たんとお給なさいまし　ト帯を前へまはしてあかねもめんで拵た枕のさるをせなかにくゝりうたをうたひながら　どうも坊が啼虫でございますから。迷惑でございます。ちよつとお山を見せながら小便をやりませう。爰が木や花のたんとあるお山だッサね。よい〳〵。よい〳〵。こゝがどん〳〵橋を渡る所だッサ。サア最うお山からだん〳〵歸る所だよ。サア小便しな。

○わざつと　わざとの意にあらず。少々の意。

○芥子坊主　子供のあたまつき。

シイ引　あき「おかみさん。もうお帰んなさいましたか　はる「アレサ。まだ帰らねへ所だはな。今お山に居てお花見の所だものを　●まりをつく女の子こちらを見て　にく「ざまア。わアい〳〵。※芥子坊主のおかみさんが何所にあるもんか。お冬さんあれお見。箒を折ぺしよつて箸にして。豆猪口で芥を掻廻して。赤の飯でごじやいまちゆ。おかみちやん。わじやつと。ざまア。　トくちびるをひつくりかへしてくちまね　はる「嘘言だから是でも能ねへお秋さん。○子もりの女見かねて　子もり「おにくさんいぢの悪い事を云なさんナ。惣体おめへは少者をいぢめらア。皆が中を能くしてお遊び。そんなに別〳〵になるから仲間割がする。一所になつてお遊び　はるあき「アイ

にく「いらざるおせわだ構やアがんな目腐めエ　子もり「ホンニ〳〵あきれた子だのう。それだから男の子になぶられらア。あくたれあまとはおめへの事だ　にく「おれがあくたれがうぬがせわになるもんか。ピヨイ　トつぼきをしかけて、門ドロへかけだし、三足ほどあるくと、わつとなきだして、いちもくさんに内へかけて行、中途ではなきやみながら、わが内のろじぐちから、又なきなほして、ワア〳〵〳〵ワア引　はる「みんなが私の内へお出でないか　なつ「ア、参らう　あき「わたしも参う　ふゆ「おはるさん。わたしもしんに入れておくれなア、おまへもお出　うちまたかうやく、ぐうたらべい、りこうも、ばかもひさむれにかんはしつたる帚をわけ　一「おいらア内イ帰へろ。蛙が鳴よ。おいらアうウちイけへろ。蛙が鳴よ。

浮世風呂二編卷之上終

浮世風呂二編巻之下

女湯之巻

江戸　式亭三馬戯作

あくたれとよばれたるおしやべりかみさまお舌「おかみさんお出なさいやしたか。モシ筑田屋のおかみさん。あいさうのわるいかみさまお苦「ハイ　トいつたばかり　した「ほんに今朝ほどはお珍らしいものをありがたう。いつウでもおもらひ申てばアッかり居やす子。そしてあのお香々のお塩梅の能さ。おいやアもし。どんなにお漬なさるかとんだお上手だ　にが「ナニサ。上るやうなもんじやアないけれど　した「いかな事でも。あれほどおいしい物をや。チヤお泥さん早かつたの　ごろ「おしたさん。お早うざいます子。どうないましたエ。ト何ものかしらず此女いことばおつになまるこ　した「どうないましたエ。斯ないましたヨ　トくちまね　ごろ「どうなされましたとサ。能音咎めをするこすかねへヨウ　した「すかねへヨウも。ばからしうございます。きざでありますヨウ。ト大きな聲する　ごろ「チヤもう後生だよおしたさん。おまはん何のまねをさつしやるのだエ　した「おめへの口まねをさつしやるのだよ　ごろ「ほんにかへ。世話焼性だねへ。おつゝけ治りまさアなへ。トいひながら風呂へ入る　した「ようかし。治らうざい。滅多に治るこつちやアねへ。コウ〳〵。糠袋をかしてやらうか　ごろ「あります　した「よく恥をかゝせたの。三ン年忘れねへよ。覚て居な。お鳶さんッ〳〵。おめへモウあがるか。最ちつとつき合な。今にもう一返這入て来て一緒に上らアな。コウ〳〵。昨夜はお忝け。あのまア。おらが内を聞ねへナ。※しだらもなくて酔てき

○しだらもなく　[illegible]蔵も無くか。今は之をさぐりて「ダラシ」といふ。意味は同じ。

○無理八百　無理ばかり云ふ。諺八百などいふに同じきか。

○だりむくれ（六阿彌陀詣）佗梨毛久里の大酒くらゐ。

○口も八丁手も八丁　口も手も達者の意。

○泥水で腹アふくらした女　商賣人上り。これは茶屋女などか。

○吾家樂の釜盥　仙鉢秤論（安永六年版）云落に吾家らくの銅盤といふを、いかなる事ともわきまへがたくて、ある博識にたづねたれば、かなだらひにはあらず、かまたらい也、自分の家にては釜を手洗に遣ふ共、己が儘じやから我家ほど樂な事はなしとの諺也。

ての。とぼ口をまたぐが早か。大の字に踏ごべつて。色々な※無理八百ウ言ての。こまらせぬいたはな。其上句果は何だとおもひなはる。まだ足ねへからモット酒買てこいだ。ナニがおめへ。懐から錢出しての。（此女かたとばかりならべるゆゑよく／＼ふりがなに氣をつけてよみ給ふべし）おれが買て來べいと云ながら。草履をはくから。わつちが引抱てのコウおめへといふ者ア悪い了簡だと。の。※だりむくれ切ッて呂律も廻らねへ癖に。おかしくもねへ。酒なんざア。見たくでもねへと云ふが早か。わつちを搔抓て放下込んだと思ひねヱ。サア行燈がひつくる返ると。おべそがわア／＼と吼る。コレヱ明りをつけやアがれといひながら。杓の水を打かけにかゝると。其拍子に藥罐がぶつくる返つたから。茶釜も火吹竹も灰だらけョ。それから隣のお蛸さんがかけ付て。明りをつけたり何角アすると。太平樂だ。わつちも虫を持居る人間だから合点しねへ。なんだ。おしやべりあまもすさまじい。こつちはナ。※口も八丁手も八丁だア。山の神の功を經たのだから。よそのおかみさん達とは勝手が違ふだらう。※泥水で腹アふくらした女だよ。思案もなくぶち打擲しても。病犬をぶち殺したやうにやアすむめへ。とかなんとかいふと聞なナ。しろ箒を振上て半死半生な目に合されたア。今に骸が痛ッてならねへ。コレ見な。こんなに痣が出來たア。夫でも亭主といふ者は位の能者だのう。皆が寄てかゝつて。お舌さんおめへが悪い。何事でも亭主にくつてかゝつてすむものか。勿体ねへ事をしらねへ。なんでも誤なせへとおもふさま手甲すつて。漸々おつつくねたはな　わさび「そりやアとんだ事だつけのう。おいらアかたつきし知らなんだ。しつたらとりせへに行だものを　した「それが燈臺元暗とやらだはな。※我家樂の釜盥とやらで。内じやア我儘いつぺへされて　しかたがねへ。おべそがあんまり云ばねだるから。昨日三絃を一挺買てやつたら。夫をも踏びしいて撥をば何所かど

○平氣馬子左衞門　今平氣の平左といふ。人名に擬せしもの。
○しらん顔の反兵衞　前同樣の語。これは今も云へり。
○内廣がりの外すはり　「内はだかりの外すぼり」とも云ふ。内に對しては驕れども、外に對して怯なること。
○蔭弁慶　内辨慶とも　ふ。陰にて强がれども、實際は意氣地なきこと。

う迷子にして仕まつた。喧嘩の度に徳は行ねへ。おめへン所の肝右衞門さんなんざア。全体氣前が能から靜だ。おらン所の氣位とは雲泥万里の違よ　こび「ナニサ。そうでもねへよ。あゝ見えてもやかましいはな　した「そりやア些らヅヽのとは無てさ　おらが内じやアちよいと踏ばづすと直に横ぞつぽうだ。惣別魂が違はアな。亭主の事たから悪くいひたくはねへが。あんまりしねへはな。大津畫の福祿壽を見たやうに天へとゞきさうな天窓アして。牙をむき出してにらめ付らア　こび「チヤ〳〵もつてへねへ事をいふのう。おめへがそんなとをいふが悪いはな　した「ナニ構はねへ。おれがとを古狸だといふけれど。てん〳〵は狼だア。百で買た馬か磁石の劔を見たやうに。横倒に寐そべつ居て。年中堅の物を横にもしねへ。チツト仕事を精出しなせへといへば。打遣置へ。果報は寐て待。なアんのかのと※平氣馬士左衞門。何を云ても※しらん顔の反兵衞さんだ。ホンニノ〳〵あんなにいけぞんきな者ア。鐵の草鞋で尋ねてもあるめへ　こび「そんなに云ひなさんな。わつちらが内へ來なすつちやア。とんだ世事が能はな。夫だから方〳〵で請が能よ。チヽさむい最一返溫らう　した「ナンノ。※内廣がりの外すはりよ。おいねへ※蔭弁慶だつちやアねへ。ドレおいらも這入らう。チヤ〳〵お泥さんおめへまだ這入て居るかな。あきれが湯氣に上らア。コウ能加減に磨な。垢も身の内だよ。翌の分も除置ねへな　どろ「ようざいますヨ。すかねへ　した「すかねへ。すかねへでお忝だ。是ですかれてみな。命も脊もつゞかねへ。ハイ御免なさいやし　トまたぐそはの人●「モシ靜におつかいなさい。はねがかゝりますよ　した「アイ。それだから御免なせへと云ひやす。人込の中だはな。些ははねもかゝらねへでさ。湯水を遣ふのだものを。かゝるが悪くは遠くへ退居るがいゝ。是がまた火でも遣つて火がはねるといふ物なら燒痕でも出來やうが。高が湯

○とんちき　樂屋通言、氣の利かぬ奴を罵る語。
○十二文ばかりが稽古　安い師匠の意か。一通々々に錢を持ち行きて習ふ。
○闘扉　「積雪の闘扉」。セキノトより落のこと洒落たるなり。
○代曲　意趣返し。積意あるひは復讐的にやるを云ふ。

だ。但し湯がかゝつて熱なら水のはねをかけてうめてやらうかアイ又かゝりやす。はねたら御免なせへ。ト（やたらにつかふのを、こはの人もあきれて、すみのはうへかゞむ）した「いけッ大造な。てめへ獨り買切た湯じやアあんめへし向三軒兩隣のつき合をしらねへとんちきだ。煤掃ならチット芥がいたしやすと斷もせうけれど。湯遣ふ度に。アイはねがかゝりやすと斷られる物か。のうお貧さん。チヤ最う上つたか。お泥さん出たか。チヤお鳶さんこいつも居ねへ。おれを出し抜にして皆出たナ。ア、ごうぎと男湯が騷〴〵しいぜ。氣のきかねへ治郎どもだ。黄色な聲や。白聲で。湯の中を五色にするだらう。十二文ばかりが稽古した闘扉だか。踏のとうだか。震ひ聲で湯殿中を震はせらア。こまつた病人だぜ。今日が發り日ださうだ。ト（ひとりごとをいひながら、がくろぐちを出る）

▲（湯屋の障子をあけてこり ガノ〵さないてくるば）娘え八三かゝさんお鬢さんと。お鬢さんが打たア引　した「なんだ。此がきめヱ。又啼てうしやアがつたか。見たくでもねへ。どど。どいつが打たお鬢のがきか。何だお鬢と二人だ。あのがきめらア。惣体依怙地悪い奴等だ。なんぞの代曲にやア。泣してよこしやアがる。うぬも又うぬだは。あいつらに泣せられることがあるもんか。益にたゝねへ。なぜ向の面でもおもふさま引掻むしつて遣ねへ。ソシテまア。いけ外聞の悪い。湯屋まで泣てうせることがあるもんか。能。く。待居ろ。今おれが連居て。あの親めらに誤らして呉う。全体また親めらも世間をしらねへ奴等だ。己が兒ばつかり可愛がりやアがつて。他の子はくたばらうと構ねへ。長屋中鐵棒引て。人の陰沙汰アするのが眉目でもあんめへ。そんなとは棚へ上置て。己が兒の世話アしやアがつたが能。うぬも又あんまりしやはけるからだは。此あまめヱ　べ三「ナアニ。おいらア。おとヲなしく。あすんで居たものを。やつたらむせうにいぢめちらして。着物がきたねへの。貧乏人だのと。色々なとを云て。あのウ。そウしてからに　した「な

んだ。貧乏人だ。いらざるお世話さ。あいつが内はどれほど身上が能のだ。着物を貰て着やうじやアあんめへし。そんなことは小兒のいふ詞じやアねへ。あの親めらが不斷ぬかすからのことだ。思ふさま鳴込でやるべい。　ト いふ所へ、なかせた娘のはアさま來あはせゐたりしが、ふろのうちより出で、さいぜんよりうしろにて、のこらずきゝすまし　ばゞ「なんだ此かみさんは。親めら。親めらと。口穢へ。そつちの娘のいたづらなことはいはねへで。人の子に返りくじを食せる。口廣いことだが。わたしらが孫といつちやア。近所で名代のうちば者だから。何余所の子を泣せやうズ。そして長屋中鐵棒引とはなんの事た。わたしらが嫁はそんな口松じやアござへやしねへ。人さまの噂なぞは是許も仕たことのねへのだ。アイそりやアわたしが見上て居やす。能かと思つて大勢の人さまも聞てござる中でいけふさ〲しい。そつちの子こそ常不斷。おらが孫をなかせてよこすは。コレ鳴込で能けりやア。こつちから鳴こむのだよ　した「コレ。コレ。やかましい。チツトだまるが能はな。年老のくせに出しやばつてからに。コレ。おらがきが。あくたれあまか。うぬが孫が根性惡か。人さまが御存だは。着物がきたねへの。内が貧乏だのと。がきの口からいふことばじやアねへ。てめへたちが云て聞せるからいふのだア。塵葉一本。箸片。御合力は受たことはねへよ。アイ。そりやア最貧乏してもこんた衆の疾介もつけへにやアならねへ。　そばにゐるひこ〲「コレサおまへがたはどうしたもんだへ。子供の喧嘩に親が出ると譬にさへ笑種だ「コレサ。お舌さん。おめへまあ　した「ハテいゝはな。打遣て置ねへ。貧乏人だの何だのと　ばゞ「ハテ云たか云はねへか子供のいふことに證據があるものか　そばの人「ハテおばさん。おめへもマアあぶねへはな。マア〱上んなせへ逆上て毒だよ。　ト ひきつれて戸だなのかたへあがる　した「なきごゑまじりのかんばしつたこゑにて　ナニサ。年老なら年老らしく引込で居りやアいゝのに。若者並にしやべくるからのことさ。澁帋へ兼房小紋をおいたといふ面で。口ばかりむ

○口松　おしやべりか。「膝栗毛」にあり。

〇方圖がございません、方途さもかく、限りがない。
〇折檻 ひごく叱ること。朱雲折檻、蒙求にあり。

ぐ〳〵したつて歯がたつもんか。「アレサ。あの子が泣はな静にしなせへな。トロをさがらして跡で云ても済とだはな。トやう〳〵なだむる ●おしたは子のほうをにらんでした「よく泣るがきだア。ヤイ見やアがれ。親まで血道をぶちあけて騒ぐは。何だと思やアがる。皆うぬから發るは。トきものをきて「チョツさきへ歩行がれ。ト子をしかりながらいで行、ばあさまも別にかへりて、あさよしづまる ●「こはいおかみさんだネエ。ほんに〳〵おつかない「さやうさねエ。一体また。子供の喧嘩をとりたるは悪うございます。すべて手まへの子に利を付ては済ません「ハイサさやうさ。私どものあたりでも泣て來ると叱ります。云告口をとり上ては方圖がございません。利も非も構はず我子をしかるのが一番能うございますよ。ひよつと余所のお子さまが云告にお出なすつたら。我子をこりるほど※折檻する事さ「にくい奴でございます。堪忍しておやり。今に歸つたら大きな目に逢せて遣りませう。など丶申すと。先のお子も納得いたします。イエサその内にもよく云告口をする子がありますヨ「あれも癖さネ。どれも〳〵一人前のいたづらでございますから。皆能とはございません。その内にも殿のお子はおいたづらばかりでございますが。女の子は意地の悪いものでございますて「そうも申されません。女臈のお子は大体おをとなしうございますけれど。男の子は悪あがきが過ます。何でも厳しいにしくはございません。チホ、、、「ホンニ只今のやうなもので。子供の居る前ではめつたなことは申されませんよ。チホ、、、「いへ。もう余所のお子にけがでもさせ申してはすみませんから。負て歸るほうが能のさネ「アイサ。弱むしが世話なしで能ございます。トいふところへ、廿四五のよめらしき女、七十あまりのめくらばあさま、姑と見えて、法体したる人の手をひき、ざくろ口より付そひいづる、もつとも手をあてて、はら〳〵するてい よめ「おあぶなうございますヨ。お静に遊しまし しうとめ「アイ〳〵 トとめをけのわきへすはる よめ「とめ桶の湯をかき廻して見て マアすこしお待遊ばせ。おまへさんにはチトおあつうございませう。彌壽か。ど

○部屋がたにつとめたる　部屋方とは又者、奥女中の使用人なり、この娵は御直奉公、やすは遣はれ居りしもの。

○お夜食　晩飯にあらず、上流にも八時、九時頃にお夜食と稱するものあり。民間にても同樣の事あり。

うぞの。爰へ水を少しお呉れ　下女おやす「ハイ／＼。トくみきたりさめ槽へあける　よめ「チツト／＼待たりヨ。トかきまはし　サア／＼てうど能うございます。おまへさん是をお浴遊してお上りあすばせ　しうとめ「アイ／＼。最うあがりましよ。今日はこなたが能く流して呉たでさつぱり仕ました。わたしは上るが。こなたはもつと這入るが能よ　よめ「イヱもう。私もよろしうございます　しうとめ「よいかへ。能温らぬと跡で寒いによ。私に構つて風を引てはならぬ。よいかヱ　「ハイよろしうございます。彌壽か。常のことばなら、彌壽やとよぶ所なれども、此よめはいまだおやしきの詞うせぬゆゑ、やすか、彌壽かと、かの詞によぶなり、▲下女おやすも、このよめが、やしきづとめの頃より、※部やがたにつとめたるが、よめいりについて、これいゝ付のこしもとゝ見えしがだんなさまい名をよばず、あなたヱあなたヱと、發言して用事をのぶるなり　よめ「彌壽か　やす「ハイ　よめ「おのしはの。跡へ殘つてゆるりと流してお出。わたしがお供するから能よ　「ハイ／＼。ト戸棚の方へむかひ　勝どんヤお上遊すよ。きものゝばんに來てゐるでつち「アイ」　ト見かけてゐた、合巻ゑざうしを、きようにふところへおしこみ　でつち「ハイ／＼。こちらへ。トめくらはあさまの手を引く　よめ「おなじくせなかさかた手をそへて　おあぶなふございます　やす「あなたヱ　きこゑず　やす「あなたヱ　よめ「アイ　やす「お浴衣が。トうしろよりつくろひ　「御隱居樣ヱ。お靜に入らつしやいましヱ　しうとめ「アイ／＼。おのしはよく温りやれよ。やす「ハイ／＼。ヘイあなたお靜に。トよめにもあいさつしてのこる　でつち「チツトおあぶなうございます。御新造さんヱ。お糠袋は　よめ「ア。彌壽が跡から雫で來るから能よ。モシヱ。お風でもめしてはお惡うございますから。直にお着物をめさせ申しませうテ。トきものをきせて、手を引出る、でつちはあとよりゆかたをかゝへてしたがひ行　●あとには下女おやす「おかみさんヱ。チツトお流し申ませう　女房「アイおかたじけ。チヤおやすどん。けふはお早かつたの　やす「ハイ。お供で參じましたから今日は早うございます。※お夜食を仕舞てから參じますと。氣がせか／＼致ますから。落着て流しては居られません　女房「さうさのう。おまへの所もお人が多いから大体ではないのう。おまへの所の御隱居さまはお目が御不自由だが。御不足のないお娵御さま

をお貰ひなすつてお仕合せだ。鐘も撞木の中りがらとやらで。なんぼ結構なお方でもお姬御さんが悪いと。是非しつくりといかぬものさ。親孝行で御器量はよし。人あたりはいひぶんなし。何所と云て難のないおかただ。おうらやましい事だよのう　やす「ハイ。いへもう私の旦那をお褒め申すもいかゞでございますが。惣別お氣立のよいおかたでヱおまへさん。あなたがお屋敷にお出遊す時分は。お部屋中で評判のお結構人でございました。私が一体麁相かしい性で。ぞんざいものでございますのに。つひしか。ぶッつりともおつしやりません。夫で私もあんまりのありがたさに。せめて御婚禮までお着申さうと存まして。只今までとう〳〵長年致ましたが。是からはどうぞ。お子さままでもお出來遊すのを見て。何所へぞ片付ませうと存ますのさ　女房「それは能心がけさ。ホンニおめへも最う片付なすつても能のう　やす「ハイサありがたいことには。私のやうなものでもあちこちからお世話遊して下さいますがヱ。マア遲からぬことでございますから。氣長に致て何所ぞ見定めますつもりさ。有がたい事には。旦那さまから支度をして遣はさうから。相應な所を見立ろとおつしやいますが。私は姑の面倒は隨分見ませうけれど。田舍出の人か何か。當世めかぬ律義な人の所へ參りたうございます　女房「その事さ。當時はモウ。色男より稼男。それが大丈夫でよいにヨ。　やす「イヱもう。恥を申さねば利が聞えぬとやらで。私の姉がおまへさん。男望でございましてヱ。小ぎれいな男を亭主に持ましたが。サアおまへさんその人がヱ。兎角浮虛が止みませんで大きに苦勞致します。それもおまへさん。遊びに參るならまだしもでございますが。意地のきたない人で。兎に角近所の娘御や何や角や。いぢり散しまして。人聞も悪うございますのさ　女房「そうサ。それが第一の疵さ。女郎買は大概程があるから能いけれどの。地

○私の旦那　これは姬を指す、部屋方は主人を旦那様といふ。

○お結構人　好人物。こゝにては物わかりよき意味も加はれるか。

○長年　勤續。

○男望　男えらみ。

○まつとう　律儀天法の訛。

○引ばりだこ　凧か、蛸か。彼方此方より引合ふこと。

○半道　芝居の言葉、滑稽な役廻り。

○ゑぐり　深刻に行くこと。

もの好のぼろッ買といふ者が性悪でいかねへものさ。わたしらもきつい嫌さ。マア一体男らしくねへ手。男なら男のやうに。金を遣つて賣物買物が能はな。何所にもそんな人の多いものさ。（トおいらんに引うけてのあいさつ）やす「ハイさやうでございますよねエモウ〳〵夫を見ましては私どもは。どんな男でも正直で律義※まつとうな人が能うございます　女房「そう仕なせへ。必好男を持なさんな。好男だと思つたのも其當坐ばかりさ。世帯染てお見。毎日能顔もねへものだから兩方で面白ないはな。そして好男ほど浮虚で飽ッぽい物さ。その筈だものを。方〴〵から※引ぱりだこにするから。己惚で身持が悪いはな。なんでも好男は傍から身を持せねへ。わたしらも女の端だが。全体女といふものは男の爲には悪いものさ。芝居でする忠臣藏をお見。もとは何からおこるといへば。師直がかほよ御前に惚たから事が發つて。あれほどな騒動になつた。小波が力彌に惚たばつかりで。親の本藏が命を捨て夫婦にして貰ふの。親馬鹿とはよく云た譬さあのまア勘平を御覧。旦那のお供に來ながらこしもとのおかると色事をしたばつかりで。あの大騒動にも間に合はず。是も色事の所爲だ。伴内もおかるに惚るが。何でも角でも原のおこりは女からさ。今は役者贔屓もひねつて。ぬれ事師よりは敵役や※半道をひく世の中。女郎も好男を捨て醜夫を見えにするさうだから。人も段〴〵※ゑぐりとやらになつたのさ夫だがあの。勘平は役に立ねへ男だよ。わたしがおかるならば伴内のほうにするは。マアなぜ云てお見。主人の一大事にはづれて狼狽廻ッて切腹せうとするを。おかるに止られて切腹も仕得ずサ。女の智恵を借りてその上に。いけまじまじとおかるが親里へ行て居候になつてゐるはサそれも能けれど。主人から頂いた定紋付を胴着にして着て獣ッ臭い身に付て。猪や猿を打に出る。そしてマア麁相かしい定九郎が足を拿てからびつくりする

○つもり　心算。

とがどこにあるものか。猪だか人だか大概しれさうなものだ猟人が火縄を消やうなヿでどうして渡世がならうぞい。最う疾に死んだ跡をくすりはなきか何の角のと探り廻るが。鐵炮で打殺した物が藥位で屆くものじやアないはな。つもりにもしれたもんだ。つかんで見たる金財布。天のあたへとおしいたゞきッサ。天道さまが人を殺して取れと何教るものか。ソシテまア猪は最前樂屋へ引込で。お食をたべ居る時分だのに。猪より先へ一さんにッサ。どうして人の足で一さんにかけたとて。猪に追ッつかれるものかナ。あてともねへ。切腹迚も其通りさ。一体麁相かしいに狼狽るから悪い。まづ氣を靜めて與一兵衛の死骸を改めれば。鐵炮疵か。ゑぐつた疵か。わかるもんだから。その上で昨夜のはなしをすりやア。そんなら斯〱で親の敵定九郎を直に打とめたと云て。却て譽られるのみならず。痛い腹も切らずにすむヿだ。あんまり馬鹿らしい男さ。おかるもおかるだ働のねへ。あんないくぢなし男に情を立て。女郎に賣られるヿはないはな。可哀さうなものはあの婆さんさ。嶋の財布の島黄金。四十九日や五十兩あはせて百兩百ケ日と。とんだいそがしい所で洒落を云て殘して歸つたが。あの五十兩で一生は食まいよ。與一兵衛は死ぬか。勘平は腹を切るか。平右ヱ門が敵討の供をして歸つた所が。永〱の浪人ものなりサ。おかるはお比丘尼になる。三人口を養ふに四十九日や五十兩所か。どうも暮しやうがなかつたらうよのう。　やす「さやうでございます。おかるも身請されました所が。年明といふものは借金が多くて、丸の裸で出ますさうだから。せつなうございましたらう　女房「そうサ。夫に急なヿではあるしの。しかし由良之助が如在ないから。内證で手當もしたらうのさ　やす「そして女郎になつても名がかはらず。ヤハリおかるで居ましたテ　女房「その代りにお比丘尼になつてから名を更たらうよ　やす「なる程

ヲ。そうおつしやれば勘平は働のない男でございます　女房「件内がいくら能か。マアわたしなら二ツどりは件内さ。男が悪いといふけれど。にがみのある能男さ。まづ第一忠臣でヲ。旦那の身のうへを案じて一力へ犬になつて入込が。三段目では若狭之助の機嫌を取て主人をかばふ。万事抜目なく奉公を勤て。仕舞は主人のために討死とやら十一段目に死だが。勘平に競ては大忠臣さ「さやうさヲ。あなたも能くお覺なすつてお出遊ばすヲ　女房「アイサ。それだからなんでも女さ。アノまあ琴責なんぞも。岩永はほんとうの役目を守つて　景清が行衞を詮義するけれど。重忠は半 半尺で役目を麁末にするはな。琴だの胡弓三絃だのと。あんなやさしい事をしてゐる。あれで間尺に合ふものかヲエ。岩永がいふとが皆尤さ。あれも岩永は女にびろつかねへから眞直だが。重忠はあこやに現をぬかして。あの琴を聞顔を見な。さも〳〵涎が三尺ばかり下るやうだ。万事女が毒だのう　やす「ハイさやうでございます。ヲホ、、、、　女房「それだからの。おめへも亭主を持たら弓断をお仕でないよ。男といふものは小面のにくい。皆あの通りだ　やす「いかなこつてもあなた。アハ、、、。さやうだが 私 どもの旦那さまは好男と申てもいかゞでございますが。御器量の好に似合ぬお堅いお性でございます。お寄合參會がございましても。一番にお歸り遊ばすし。お吊や何角にも道倚なしにずいとお宿へお歸り遊して。けふは茶代が十二錢。お寒錢が七錢。なんぞとお算へ遊して。お小遣が漸く三十二錢ぐらいで濟ます店の衆が生姜だ生姜だと申ますが。生姜とは何の事でございますか。大かた御實体なとでございませう。其代りお友達づき合が悪いさうで。大旦那が折〳〵御異見でござります。モちつと若者らしくして。物見遊山にも出るが能い。どうも外嫌でこまるとおつしやつてゞございます　女房「お 羨しいのう。わたしらが内な

○二ツどり　二つあるうちの何方を取つてもいゝならば。

○勘平に競ては大忠臣　以上「忠臣藏」に關することゝ、「忠臣藏偏痴氣論」（文化十年）の氣味あり。

○半半尺　二寸五分か、升目の場合にも「ナカラハン勺」といふことあり。

○間尺　馬尺と書けるもあり。今は訛りてマシヨクに合はぬといふ。

○私どもの旦那さま　これは前の塲の主人公を指す。

○生姜　吝なこと。摑む手の形より云ふか。

○奈何の町の湯豆腐云々 吉原の湯豆腐にて飲むこと。居續けすることなり。
○膳を居るものを云々 据膳食はぬは男の恥といふ。
○神 末社。取卷の意。「膝栗毛」にあり。
○かぶ 手持ち。
○内 家の内の略、一家の意味にも遣ひ、家の内の主といふ意味より亭主の的稱ともする。
○十死一生 殆ど駄目な場合。九死一生以上なり。ジヒは江戸訛。
○粉になるよ 身を粉に碎くやうに骨が折れること。
○泣子と地藏 泣く子と地頭には勝たれぬ、の地口。
○いひなり三寶 云ひなり次第の意か。

んぞは出好での。内には尻が居る間なしさ。わたしが異見めいた事をいふとうるさがつて。ハテ奈何之町の湯豆腐も食て見ねへじやア行渡らねへの。膳を居るものをお辭義は無躾だのと。能やうな事を云つて出かけるのサ。アノもう幇間だの神だのといふ者がしみ〴〵にくいよ。主がおとなしくせうと思はしつても。湯の行返や髮結床あたりにぶらついて居て。すゝめ出すだ。マアはじめは料理茶屋で。それから一ツあがるとお船かお駕籠さ。ホンニ〳〵おめへの所の旦那を煎じてあげたいよ。チ、長ばなしで骸が乾くのも忘れた。ト こめをけをあびる やす「私が汲で上ませう。ト 小桶へ三ばいくんで來てさめをけの中へあける 女房「これはおはゞかりいたゞきますよ。サアお這入な やす「ハイ〳〵。まアあなたお先へ。ト ふろへ入る ●かなやうな手つきをしてゆびのさきをあらふかみさまうしろをふりむいてかるいしでかゝとをあらふばアさま ▲●かけ合 此ばアさまはノヤ〳〵といふ事ばぐせありてなきごとばかりいふがさかぶなり ▲「おかみさんどうしなすつた。おめへの内じやア皆お達者か ●アイサ。捨る神あれば助る神ありとやらで。内で亡てもどうやら斯やらたべつゞいてをります ▲そりやア仕合だのう。聞なせへおらが所はのや。おいさまがどうど床に着て十死一生だはな。はじめの内は今はやるよい〳〵といふ塩梅だつけが。のやッ。サアおめへ此頃は立居もひとりで出來ねへから。尿屎もおまるでとるイヤハヤ粉になるよ ●ヲヤヲヤそれはほんに能々の大病だチ ▲それで一倍我儘を云つてやかましくてならねへ ●此かみさまつまらぬ所へたこ八をいふ詞ぐせありん 夫でもおめへ。泣子と地藏にやア。かなはねへといふから病人の。いひなり三寶にして上なせへ。一寸延れば尋延るとやらで。寒さの内を凌だらまた能からうヨ。あんじるより產がやすいと。思ひの外にすら〳〵と治る事もあるからの。一寸先は闇だはな。是が斯と煮てかためた事はねへ。蟻の思ひも天にとゞくとやらでの。一心に介抱すればまた能日の照る事が無てさ。兎角神佛を信心しなせへ。鰯の首も信心がらで。聞なせへ斯いふ

とがあるはな。私等が親方の出入場の旦那どのさ。三ッ子の魂百までと譬の通り。小さな時分から氣儘八百に育た物だから。大きくなつても旨蛇物に畏ずだ。何がおめへ身上も構ずに遣ッたほどにの。地獄の沙汰も金次第で。人に※持長じられるが面白さに。とう〳〵大身代を潰して。百貫のかたに笠一蓋となつただ。サアそうした上何か悪い病ひを病出して。二進も三沈も行かねへはサ。兄弟他人のはじまりとは能云ッたもんで。大勢の兄弟衆もあるけれど。馬の耳に風でさつぱり音信不通。サアどうもしかたがねへから。寶は身の指合せだと。殘た道具諸式を賣ては藥。賣ては藥とした所が。三年越の長煩。だから仕覺がねへとおもひなせへ。子を捨る藪はあるが身を捨る藪はねへとやらで。たッた一人の女の子を他所へ呉て。夫婦兩口となつた。さすが御新造も惜たらうが。負た子より抱た亭主だはさ。脊に腹は換られねへから。其子をやつてしまつて。しつけもしねへ人仕事をして主を看病したよ。そのむかしは一寸出るにも乗物で眷族の五六人も引連て出たお人が。味噌こしを持て豆腐を買にいつたり。朝晩の介抱から口食物。縫針の余計に人仕事だ。あだやおろかな事ではないによ。サアその御新造の一心で淺艸の觀音さまへ朝參りの日參をして。一年が間精進潔齋したらば。こはい物だの。夫ほどの大病が漸くに能なつて。此頃は※すつぺり素の通りさ。それだから一心に凝かたまるといふものは強いもんだの。おめへの所のも隨分信心して看病しなせへ。貴い寺は門からといふけれど。醫者さまばかりは見かけによらぬものよ。裏店に居る貧乏醫者に功者なお人があるものさ。藥紙を袂へ入れて自身に持運びをしてくれて。第一まア手がかゝらねへで。貧乏人には能利方だ。アノまア。藥とりに半日づゝかゝるのは。人ずくなな者は難義仕果るよのう　▲さうさお醫者さまも今度で九人目だ今度のお醫者さまは。ア

○親方の出入場　かく云ふを見れば職人の女房なるべし。

○氣儘八百　八百とは數多きにいふ。

○持長じられる　持囃される上に、稍ゝ重んぜらるゝを云ふか。

○二進も三沈も　昔の數學の言葉。

○仕覺がねへ　正しくは志學、論語の字面、本義を轉じて心掛け、又始末といふ意味に用ふ。

○口食物　間食物。

○すつぺり　すつぱりに同じきか。

○代脈　代診。
○かてゝ加へて　かては雜。まじへ加へる。
○妹のお糠　こゝは妹娘の意。
○質八　質と七と音同じきにより、質八と續けて云ひたるまでにて、八に格別の意味なし。
○やつさもつさ　揉め合ひ。
○能耳　いゝ事といふに同じ。
○手前細工　自由結婚の意。
○ろくそつぽう云々　ろくな事なしの意か。ロクスッポともいふ。スッポは寸法か。
○情のこはい　強情。
○大般若經建立　大般若經の買入れ資金勸募。
○つひしか　遂に。
○日掛の錢　講中の錢を日掛にすること。
○御湯花講　御茶湯料御花料を支出する講中。

ノそれ。豕右ヱ門さん。のや。あの人がよい〳〵がゝつて。一トしきりぶら〳〵したのを治さしつたッて。功者な噂だからかけて見たが。タッタ一返お駕籠でござつたが。夫から後は一日置に代脉だはな。●フウ。醫者さまの方じやア代脉でも承知だらうが。素人の目からは安堵しねへものよ。▲その筈さ。お醫者さまばかりが便だものを。のや。夫に又かてゝ加へて妹のお糠が屋敷から病氣で下る。息子は息子で便毒をふみ出してうんすんと寐てゐる。此頃はあひにくに商が隙でのや。小遣ひにも追れ切るはな。高くはいはれねへが質八を置て暮らしてゐる所だ。その上にのや。姉娘のお粕は片付た先から。出るの引くのとやつさもつさが發つて。家内中こねつ返すはな。年老て能耳を聞ねへで。ホンニ〳〵長生すりやア恥多しとよくいつたものだのやおかみさん。それでお粕にいふとさ。我好このんで持た男だから此後まごつかねへやうに分別して。どうとも好にするが能と。親の持せた男を嫌つて。手前細工の亭主だから。どうでろくそつぽうな事はねへ筈だ。わが目の覺やうが遲いといふとさ。違あるめへのやおかみさん ●そうさ。あの子も大不出來しさ。女賢くして牛を何とかやらで。女の利口はやくにたゝねへ ▲惣体情のこはいから發るはな。ホンニ〳〵何で苦勞するかと思へば皆子故だによ。世間の親は子を持て樂をするに。大きなあべこべだ。こちとは樂はせずといひから。せめて苦勞の薄らぐやうにしてへ。それより外に願ひはねへ。此中もお寺さまが大盤若經建立するから志を附ろと賴まつしやる。わたしらがお寺さまはつひしか勸化事をさしつたとがねへから。澤山奉納しても能けれど。自由にならねへもんだのや。それにおめへ田舍からは居候が來る。日掛の錢は每日金毘羅さま。成田さま。江の島。大山。鹿島講。御湯花講何や角やで壹〆貳三百の出入だ。なまやさしい事ちやアねへよ。どうし

○乙姫時代のこと　大時代の意。

○湯屋轉び寐起　七轉び八起のもぢり。

たら楽になるだらうか。のやおかみさん。アなんまみだぶつ　■引おぶつ、ふところの下女一人ざくろ口より出しなに、ないさすべつておふなはにころぶ　チ、おぶねへ。ヤレ〳〵痛かつたらう　ト こゝにたおの下女　チットおぶなし。お開帳なんまみだぶつ。■しやれ所じやアねへはな。ア、いてへ　ト いひながら顔を貝殻にしてきまりわるさに小桶をさる　▲チヤ〳〵轉でも貝起ねへとはおめへの事だの　■そうさ、チット違ふよ　ト まけをしみにて湯くみの所へ行　ゆくみの男一のをかしがりこくんでいる　■きり〳〵没な日が短いよ。いつだと思ふ十月の中の十日だぜ　ゆくみ「なんだ氣のきかねへ。湯屋へ來て言ふやうな古風なことがあるもんか。乙姫時代のことだ。　ト 湯のくみのあつらしいことに江戸ッ子の氣のきいたやつなり　■能よ。打遣ておきや。其隙に流板を砂で磨が能。いけ無性な　ゆくみ「ハイ〳〵畏りました　■ナンノそれほど平生をかいて居ながら　ゆくみ「そんならあぐらかきました。おれはあぐらかきましただが。おめへはねころばりましただの。■やかましい。　ゆくみ「しかし能音だつけ。ずつしりと地響がして。各別なもんだ。お蔭で居眠の目が醒た。どうぞ翌も眠てへ時分に。ナ。ソレおよいと湯屋轉び寐起さ　■エ、。しやれずと早く没ねへか。じれつてへ。　ト小桶をさげてゆく　お丸どん髮を結たの。とんだ能おめへか。●ウンニヤ。おかみさん。■道理だ別に女ぶりが上ツた。●なアんのかのと。ヘンよくいふもんさ。■ほんとうにヨ　●コウ。おめへン所のおかみさんもお髮はお上手だの。■なんの。しやらツくせへ。お髮だの。へつたくれのと。そんな遊せ詞は見ツともねへ。ひらつたく髮と云なナ。おらアきつい嫌だア。奉公だから云ふ形になつて。おまへさまお持佛さま。左様然者を云て居るけれど。貧乏世帯を持つちやア入らねへ詞だ。せめて。湯へでも來た時は持前の詞をつかはねへじやア。氣が竭らアナ。●そんならうぬが所のかゝアめは。髮を引束やアがることが。上手だナ。■チイ。上手だがどうしたてうぬが所の旦那めは。今おらが内へ來やアがつて。おらが親玉めと一緒に酒

○しみ眞實　しみ〲の「しみ」なるべし。
○油をとられた　搾り上げらるゝよりいふ。
○戸張　戸板にて張物をすることか。
○火のし摺　火氣強くて布を損ふこと。
○附祭　小言を云ふ毎に附加へていふの意。元來は祭禮の言葉なり。
○いび〱　いびるの意か。
○早がはり胸のからくり　文化七年、即ち「浮世風呂」二編と同年の出版。替り繪を應用したる趣向のもの。

を食ッて居やアがるが。まだ滅多に仕舞やアがらねへから。か丶アめに預けて置て。おれ獨で湯へ來やアがつたら。いつの間にかうぬも來て居やアがる。そつちらを向きやアがれ。背中をひつこすつてやらうから。跡でおれが背中も引ッこすりやアがれ。うぬ又いたく引ッこすりやアがんな。ア、息が切た。ヲ、せつねへ。●待やアがれ。うぬがいくら引ッこすらうとぬかしやアがつても。おらア垢摺を落したからうぬが垢摺でおれが背中を引ッこすりやアがれ。湯が熱くは水をうめやアがつて。うぬ又すべりやアがらねへやうに。そろ〱とながしやアがれ。ヲ、息がきれた。ヲ、大義だ　■是じやア喧嘩をするやうだ。ア、是でさつぱりした。モウ〱〱内に居ると。あなたどう遊ばせ。斯遊ばせで。おそれぬかせるのう。※しみ眞實否だ　●そうさのう。コウおべかどん。おめへの笄はモウついで來たか。■ウンニヤまだ。コウ先刻油※をとられたのは何だ　●※戸張をしたら大首先を張曲たといふこごとさ。解物をするとき襟かたを引裂た事と。火のし摺を出來したとが。こごとの度に出るだ。■おらが内じやア。南京の鉢を割たとが。いつのこごとにも※附祭だ。うるせへのう。思ひ切のわるい。こごとをならべたつて。割れた鉢が歸る物じやアねへ。おらが所の惡婆は。ホンニ〱※いび〱こごとの本家だらうぞ。此間三馬が作で。※早がはり胸のからくりといふおかしい繪本が出たがの。その中にある姑婆の口まねは。あの婆に正だよ。ソシテおめへたちやおいらが事も書てある。何でもそこへ出たやうだ。ことし中でのおかしい本だと云て。店の衆はてん〲に一冊づゝ持て居るよ。借て見な。おかしくてこてへられねへよ。●ム、あれか。見たく〱。しかられた小藏が。直に番頭に變ッたり。嫁が姑になつたり。しかも豐國が繪で。あの繪はよく書たのう。見てゐるうちにふき出すのう。そして直が安いから年玉に能迚。おら

が所じやア。※いかいと買たよ 圖こんな事をいつて。又繪本にでも書れねへうちに止やう。サアお丸どん。這入ねへか。●ム、這入らう。 トつゞいて入る 〔此所にて口上〕よめしうとめをそしる事、よめをいぢめるしうとめのこと、主人をそしる下女のことは、はやがはりむねのからくりと中小册に、くはしくしるしたるゆゑこのさうしにはゞぶく、たはめうらしきよめしうとのせりふは、おつて二編にお目にかけます、※〔東西〳〵〕二三十四五のうば、四才ばかりのからこまげの子を留桶の中へ入れおき、たましたながらさかやきをそつてゐる、かたはらに四の子もりをんな 子もり「おん乳母どんその跡で。わつちの襟を剃ておくれナ うば「ヘン。あきれらア。襟や顔をすりつけるよりは。小鬢先の兀ッちやうでも治すが能。※廣島藥鑵の口をもいだといふ額だ。髮といへば赤くちゞれて油揚と一緒に煑さうなざまで。なんの※洒落臭へ※おきにするがいゝ 子もり「コウ。御乳母どん。剃らずは剃らねへで濟はナ。なにもそんなに棚卸をするにはおよばねへヨ。わつちが天窓が昆布に油揚なら。雲脂の溜ッたおめへの天窓は。鼠尾藻の白和だ。なるほどあなたさまはお美い。 トくちびるをつきだしていふ うば「チット達ふよ 子もり「どうりで人並とはチット違ふのさ。鼻が仰向て二階がきなつ臭いといふ。齒は返齒で椽の下を覗うとする。※口はかゝつ居て鐵棒ひいても。耳は遠い〳〵だ。 うば「此あまめ覺てゐろ 子もり「覺えて居ねへで。そんならなぜおれがことを惡く云ッた うば「惡いから正直をいふのよ。 子もり「こつちも其通りさ。 うば「まだまけねへか※口ばたきめ 子もり「おれが口ばたきなら。そつちは※尻ぱたきだ うば「ナニ虱ッたかりめ 子もり「狐臭ぷん〳〵め うば「おれがいつ狐臭がある 子もり「おれがいつ虱がある うば「※鍋屋藥を附るじやアねへか目腐めが 子もり「※茄子藥を附たじやアねへか猿眼めヱ うば「なに。この※ぢゞむさあまめ 子もり「ヱヽ。おしやらく御乳母めいけもしねへ。 うば「また泣ようと思つて。子ヱお孃さん。あんなべらぼうには構はねへが能子。お孃さん。ぢつとしてお出。ソリヤぞり〳〵 子もりくちまね「お孃さんぢつとしてお出ッ。※ざまア。ソリヤジより〳〵〳〵 うば「やかましい。邪魔になる

○いかいと　澤山。
○東西〳〵　芝居の口上が劈頭にいふ言葉。
○廣島藥鑵　眞鍮にて雲龍などの彫ある藥鑵。
○洒落くせへ　生意氣の意か。
○おきにする　やめにする。
○口はかゝつ居て　不明。
○口ぱたき　べら〳〵しやべること。
○尻ぱたき　尻早きこと。
○鍋屋藥　蟲細。
○茄子藥　不明。
○ぢゝむさ　さつぱりせぬこと。不潔。
○ざまア　ざまア見ろの略。

○天々　頭のこと。子供言葉。
○甞人形　おしやぶりの類か。
○番太の炭團　番太は町の木戸番。荒物駄菓子などを賣る。炭團もありしならん。
○達磨に乗居るお小僧　玩具。
○きよ剃　仕上。

は。うぬに構ふと肝癪がつッぱりけへるはい。じれつてへ　子もり「そつちの肝積は三年もこてへるは。お嬢さんお嬢さん。おつとしてお出でないよ。つむりをかぶり〳〵してお動き。そうするとおまへさんのおつむりを思ふさま痛々にして。御乳母が大しくじりだア、能氣味だ。早くふりまはしてお動き　うば「いや〳〵だねへ。天々をお動かしだとぞり〳〵が剃ませんヲ。剃〳〵を剃て能お姉さんになつて。おッかさんに譽られませう。ソリヤお後の方をチヨイト一剃刀。ヲヤ能子におなりだはへ　子もり「ヲや。ばゝッ子にお爲だはへ　うば「やかましい。是ほど能子におなりだものを。ヲヱお嬢さん。おほかたけふは神さまへ連てお出だらうぞ　●ばゞア痛。モウ御仕舞にせうよ　うば「ハイ〳〵最うちいつとでございますよ。ヲ、〳〵。是〳〵。毛虫がたかつてサ。今ばゞアが毛虫をぞり〳〵と取て。ヲヱ。ヲヤ〳〵にくい毛虫だねへ。ヲ、ヲ、ばゞつちい。ヱ、きたなヱ、穢な。ホイ〳〵また毛虫が　子もり「お嬢さん嘘でございますよ。毛虫ではないとさ。最否〳〵とお云ひ　うば「またくおを出すか。是ほど長しくお剃だものを。ヲヱお嬢さん。この御褒美には甞人形に。何でも四文の人形か　●ムウ。番太のよ　子もり「番太の炭團かへ　●アイ。　うば「お嬢さんは直だから。アイとお云ひだ。ナニ炭團な物かヲヱ。番太で見た達磨に乗居るお小僧だねへ。上ませうとも。ソリヤ最うきよ剃だからそろ〳〵とおさすり斗り　子もり「がり〳〵と痛いねへ　うば「ナアニ。ばゝアの剃のは痛くないねへ。サア能ぞ〳〵。ア、奇麗におなりだ。能お子だぞ　子もり「穢なくおなりだばゞッ子だぞ。お嬢さんばゞッ子だね　●ウンいゝ子だ。ばゞッ子じやアねへ。坊は能子。愚太さんはばゞッ子だ。のう乳母　うば「さやう〳〵　子もり「イ、ヱ。愚太さんは能子。お嬢さんはばゞッ子　●ウ、そうじやアねへ　うば「また世話をやかせ申すよ。ホンニ

〲片時だまつちやアゐねへ。内へ歸たら御新造さんに云告てやらア。どうするか覺えてゐろ　子もり「へン。どうもなりやせん。そつちがお孃さんの御乳母なら。こつちは愚太郎さんのお守だよ。安くはないよ。お跡とりの若旦那さまのお守でござんやアす。アイ。先代萩なら政岡といふものでございやアす。芝居ですれば半四郎の役さ。チツト違ひやすでございやアす　うば「ア、やかましい。通らつせへ。おやんなさいやしが來たやうだ。愚太さんは男のお子でも次男だからいくらはねへ。お孃さんは御惣領だからお跡とりだ。チヱお孃さん。やがて能聟さまがおいでなさるチヱ。愚太さんはばゝツ子だから他所へお出だね　●坊は能子だ　うば「チ、〲。能お子とも　子もり「イ、ヱ。それでもね此間旦那さんと御新造さんとお咄に。愚太は跡とりにせうと云てお出なすつた。うば「なに跡とりにさせる物か。此お子さんは女でも何でも惣領だから他所へは遣らせねへ。そんな咄でもあるが最期。おれがじや〲ばつて合点しねへ　子もり「なんの。いくらもがいても歯が立もんか。おめへの子じやアあんめへし　うば「おれがお育申たからはおれが子も同然だ　子もり「なんでもかでも。跡とりはおらが愚太さんだ　うば「ウンニヤおらがお孃さんだ　子もり「愚太さんだ　うば「お孃さんだ　子もり「愚太さんだ〲〲〲〲。愚太ばた〲〲　うば「お孃さんだ〲〲〲〲お孃さだ〲〲〲〲　子もり「にくい乳母だチヱ。うな〲をして遣らう。斯〲斯と　●ばゞアを打ちやア否だア引　うば「それ見たがいゝ。畢竟泣せ申た。チ、チ、。堪忍お仕。堪忍お仕。憎やつだチヱ。　トおゝきにいきせこだましかける　■上り口にははなくたの中ウござしま手ぬぐひをしぼつてゐる　かゝ「ほ疾ぴん早く上んな。己ア遲くなつたへれど。御前なら付合氣だ　おしつ「おかたじけ。そんなら一緒に上らう。コウおめへ此中の簪をどうした　かゝ「京打か　しつ「ウ、京打よ。かゝ「買たはな

○半四郎　岩井半四郎。

○通らつせへ。おやんなさいやし云々　乞食が來たやうだ、の意。

○次男　第二子の意、今日ならば長女、長男とあるべき所。

○はなくた　梅毒にて鼻のなくなりしもの。

○角琴柱　肩の上りしもの。
○來つた　古くなつた。
○指込　髷の眞中にさすこと。
○ちやらッぽこ　いゝ加減なこと、スチヤラカ、ポコ〳〵、阿房陀羅經より轉來せるか。
○竹馬　天秤棒の端に竹をつけ、布を掛くるもの。大名行列にも竹馬あり。「膝栗毛」の挿畫に出でたり。
○御化　化無垢と云ひて、一枚の著物を二枚に見せるもの。
○甚三紅絹　下を蘇枋にて染め、梅酢にてさらせるもの。
○八ッ過　七ッ下りと同じ意か。色も品も惡きもの。
○四百　四文錢を一緡にせるもの。
○三ッ物　身頃と、袖と襟おくみ。
○布子　褞袍のことか。「膝栗毛」にもオヒエといふことあり。

しつ「買たか　かさ「ウ、　しつ「おらもの。※角琴柱はチト來たから打直させうと思ふよ　かさ「フムそうするが能はな。角琴柱を止て。己が樣に昔形にしての。唐艸の毛彫に仕なナ　しつ「ム、そう仕やうヨ。此頃は括猿の※指込が流行さうだのう。夫もしらねへが。小間物やの※ちやらッぽこがそう云たつけ　かさ「はひつもほべつか計り云て。當にやアならねへ。そしての。ほめへの所へ來る※竹馬が通るなら呼んで呉んな。しつ「竹馬か。あの裁屋はろくな物は持居ねへよ。たしか昨日も通つたッけ日暮方に氣を付居りやアいゝ。おめへ何を買ふ　かさ「片身頃有りやア※御化が一枚出來やうといふ洒落だアな。そうしての。袖なしの肩入にするから。太織島かなんぞ見繕て買ふと思ふヨ　しつ「その位な物はあるだらう。しみつたれな裁屋だから直は恰好だが。代物が少へはな。此中見たうちに※甚三紅絹の※八ッ過かといふ身頃があつたが、貳朱ト※四百といふ云直だから。直切たらまた負だらう。ひよつと直が出來たら片身頃づゝ分やうじやアねへか　かさ「フムそりやアよからう。※三ッ物も目利をして買ねへと。跡で御役に立ねへよ　しつ「そうさ。此間※布子の裏をの。布布に解て見たらの。手をあてる所がビリ〳〵さ。タッタ一冬はつちやア着ねへものが。あれじやアたまらねへしかも去年みつ物で買たのさ。そしてアノ不斷着の裾廻しはの。秩父絹じやア切るにかゝつてゐるから。今年は絹紬にしたらいつそ丈夫でいゝよ。おめへの所の不我八ざんにもそうして着せなせへ　かさ「そりやアほんによからうよ　しつ「コウお瘡さんつかねへこつたが先刻の簪の事で思ひ出したがの。惣別むかしの形がはやるによつて　笄もおつつけむかし形といふものが流行だらうといつて。小間物屋が形を見せたよ。こりやアマアおれが書くのだから能くはねへがの。形ばかりさ。ト板のまへかよきたる所へ小桶の水をゆびに付てゆび先にて書く　しつ「これ見なマアてうどこんなかたちさ。おつりきだのう。モット

○次男の孫　二人目の孫。

長い大きいのもあるとヨ　是はべつかうさ。　こゝの所にぼち〳〵〳〵とふがあるのさ　チヤ〳〵〳〵ひかな事でもはれがむかしのはうがい。ホヤ〳〵〳〵〳〵へしはらねへ。　まだこんなかたちもあるよ。　斷の。断して。断して。断さ。おつだのう。へらのやうだのう、　まだこんなのもこんなのもあるとさ。田舎たさみせんの撥かと思つた。ホヽヽヽホヽヽヽ　ほんにのう。古風なもんだ。新形を仕つくしたからまたむかしへ歸つておつ付この樣なはうがいがはやるだらうよ。　是が大か。己アまのばアさまがさしそうだのう、　アハヽヽトゆびでかきまはしてけしてしまふ。

かゝる所へかうまんなるかみさまはやりのしまだくづしにてゆかたをかゝへ人來り兩人の女に向ひ

「チヤ〳〵お出なせへしたか。大分お靜でござへしたチ　アイサもう。何だかいろ〳〵日出度事が重つてね、　▲此間はしばらくおめにかゝりませんでした。御きげんようございますか　●アイサもう。何だかいろ〳〵日出度事が重つてね、まア聞ておくんなせへし。大隱居の夫婦が百五ッと百三ッになりますから。又改めてお祝ひさ。　▲それはおめでたうございますね　●それから中の隱居が八十八の米の守を出しますチ　▲それはおめでたうございます　●それから聞なせへし。次の隱居は七十の賀　▲それはおめでたう　●そのつれ合は六十一の本卦がへり　▲かさね〴〵お目出たう　●その妹が六十の賀　▲さても〳〵おめでたい　●わたしの宿が五十の賀　▲やれも〳〵おめでたい　●惣領の孫が七ッの祝ひ　▲やれさてそれはおめでたい　●次男の孫は五ッの祝ひ　▲さて〳〵これはおめでたい　●末子の孫は三ッの祝ひ　▲さて又それもおめでたい　●かさね〴〵のめでたさをこれから拍子でやつてくりよ　▲やれこれ拍子でたんのむぞい　●髮置袴着帶解元服娵取聟取さて誕生　▲めでたい〳〵さりても

此の圖は貞享四年印本
訓蒙圖彙により
今文化七年迄百二十四年に及ぶ

めでたいこりや又やたらにめでたいな　●七珍万寶しつかり詰たる土藏の數〳〵十千万軒　▲さつてもめでたいしつかり詰たるめでたい數が十千めでたいと。口にあまいしめでたさをめでたき春のわらひ初に。目出度のぶるぞ愛たかりける

浮世風呂二編大尾

○丹前風呂　堀丹後守の前に在りしより斯く云ふ。○とりがなく　「東」の枕詞。「毫をとり」の「とり」にかけ、「吾嬬訛」の枕詞とせるなり。○關東べい　關東訛を云ふ。○べい〳〵詞が書けべいなら云々　「べい〳〵言葉がやむべいなら借りても三百つん出すべい」といふことあり。轉じて「浮世風呂」の事に用ゐしなり。○幕湯　「鎌田兵衛名所盃」に在り。有馬は野外の温泉なれば、湯を借受けたる表示に幕を張るより云ふ。○趣向有馬の　かけ言葉。○三寸廻圍の胸の中　胸三寸といふことあるより斯く云へるか。○楊雄が方言　「揚子方言」を指す。「センボ」は樂屋通言。舞臺裏にて用ゐる符牒の如き言葉を云ふ。○半二がさんしよ　近松半二か。「さんしよ」は「さんしよ言葉」といふものあり。京都産所、西宮産所より人形遣の出づる所あ

諢話浮世風呂三編

浮世風呂三編自序

丹前風呂の風流は古に衰れども。浮世風呂の滑稽は。今行るゝお蔭にて。ことしも毫をとりがなく、吾嬬訛の關東べい。べい〳〵詞が書けべいなら。借ても三編つん出すべい。と書林の欲心増長して需る事頻なり。タツト承知の幕湯に浴る。趣向有馬の温泉はしらず、三寸廻圍の胸の中。九尺四方の風呂の裡。筆おつ取てかき廻すとも。工夫の出べき筈もなし。假令楊雄が方言を闇記じ。半二が隱語を鵜呑にするとも。諸國へ見する諸國の言語。うかめだての謬誤だらけが便ち一興の端ともなるべし。江戸の奶奶が唇紅兀して礫野郎とは似氣なき惡態。京の老爺の鼻嗚呼めかして。あのおしやんす事はいな。と弱氣た言もそらかぞふ。大坂の壯夫が。何ぢやいとけ

り。その言葉より起るといふ。通言。

○うかめだて　知つたかぶりか。

○礫野郎　どうにもならぬつまらぬ奴の事。最も輕き意味の罵語。「膝栗毛」に在り。

○弱氣た言　若道の若より出づ。

○そらかぞふ　大の枕詞。

○四文と出たがる安作者　糠袋も四文なれど、當時四文店と稱し、煮染、菓子の類までを賣る屋臺店ありたり。

○十文の湯氣　十文は當時の湯錢。

つかる迄。書古したる蹟なれば。こゝらで留湯と固辭すれど。宥す氣色もない智慧を。絞り出したる糠袋。四文と出たがる安作者が十文の湯氣にあがりて。寢言を吐く事しかり。

文化八年辛未の夏四月本町延壽丹藥店において

式亭三馬戲題

門人德亭三孝書

假字例

○申を「もうす」訓興立を「こうりう」音と書る類すべて婦女子の讀易きを要とすれば音訓ともに假字づかひを正さず

○打遣置などゝ詰る言○ちやまがなどいへる片言の屬は俗語に據所之雅俗の異同は傍訓に從ひて會得あるべし

○春はあけぼの云々　「枕草子」第一段の文に據る。
○ぶざめいたる　武左衞門の略か。田舍侍めきたる。
○ものはづけ　何々のものは、何々、とつける言語遊戯の一種。「はつ湯の三方」は、おひねりを置く故に白きなり。
○不盡と筑波山　競ひ立つ樣。

をみな湯ぶざめいたるなどさるたぐひの古言は御國まなびのたへ犬たちもいまだ知らせ給はざるべし

○人々の面白や云々　夜の明けたること。前よりの關係にて、天の岩戸開けたる神代の話に云ひよそへたり。
○糸道　三味線の絃の痕のつきたること。
○彼大政入道殿　平清盛。その時代ならば六波羅の御所などへ見參すべきものなりとの意。
○ぼつとりもの　豐富、重厚。
○ヲツトきなさい　のとびあがり　輕卒なる者。

諢話浮世風呂三編　巻之上

女中湯之遺漏

江戸戯作者　式亭三馬戯編

春はあけぼの。やうやう白くなりゆくあらひ粉に。ふるとしの顔をあらふ初湯のけぶり。ほそくたなびきたる女湯のありさま。いかで見ん物をとて松の内早仕舞ちふ札かけたる格子のもとにたゝずみ。障子のひまよりかいまみるにそのさまをかしくもあり。又おのおの身のぶざめいたるは。あさましくもありけり。

白き物はまつ湯の三方とかいふめる、※ものはづけとやらんもうべなり、御祝儀の十二銅、男衆への水引包は、二ツの三方にうづ高うして、雪消ならぬ松の、※不盡と筑波山ならそへ[illegible]、それぞれにには神代の[illegible]うつしたりけむ、[illegible]逆[illegible]ひきわたせる[illegible]の[illegible]にて、[illegible]真木も[illegible]風呂[illegible]の庭火[illegible]、[illegible]天の岩戸[illegible]、[illegible]にまかへる[illegible]の[illegible]はれわたり、※人々の面白や[illegible]、ふるはひ、髪のかざしもすこしうすめの命めきたる女の、指の爪に※糸道といふ物の残れるよ、世にいふ鉢子白拍子のたぐひとおぼし、※彼大政入道殿の世にあらましかば、あそびの者の推參とて見參すべき者にこそ[illegible]あかすりで耳のわきをあらひながらふごゐにて、かみがた下りのはやりうた、

ウタ「※お客の嘘は引して女房にしよ。女郎衆の嘘は惚ました。藝者の嘘は客とらぬ。幇間の嘘は酔ました。茶屋の嘘は遅てもお早うござりますッ。

●[illegible]といふ十八九のほどとみゆるもの、かんばんにいつぱりなしの浮世[illegible]にて、※ヲツトきなさいのさびあがりなるべし、髪をいびつにそむけて下目をつかひ、ゆび一本で左りの耳をひつぱり

▲今一人はおはねといふ廿一二のやせつぼち、目をねぶりてひたいに八の字をあらはし口をむすびてはなの下を長くのばし、ぬかぶくろで顔をみがきゐるところへ、あなじむれとおぼしき三十ばかりのしんぞう風呂の口へ入來る、この名は婆文字「ヲヤおはねさん。おはやいの

はね「婆文字さんか。今朝は早かつたのう

[illegible]ね「婆文字さん。私らにもお詞がありさうなもんだ子。さうするが能のさ

はゝ「此子は恨ッぽい事をいふぜ。まだ此方の挨拶も切れねへうちに

ねこ「フウ。さうか

はゝ「ハ

イ豊猫さん。明ましては結構な春でございます　ねこ「是はお早〳〵とねつからおかたじけ　はゝ「トキニ舊冬お仕舞はいかゞッ　はね「チヤきざだのう。コウ〳〵婆文字さん。おめへに逢たら咄さうと思つてるた　はゝ「なんだ〳〵。マア待な。寒いはな。ちよつと溫つて聞う。チ、さむ。　トざくろぐちへはひり、からだをしめしながら、始終內と外とのかけ合なり

作者曰　二編女中湯の發端に比ぶれば婦人なりしたこゝにもおなじたぐひを出せるは趣向めけらしかねど、すべて女中湯の朝の間は、町藝者か、料理家の娘、あるひは※鹿戀などの多く入湯するゆゑやむことをえず、ふるきをもちゐ、趣向は新しきを述たり、

はゝ「一はの字〳〵。何の咄だ　ねこ「あのの。先一昨日の晩の。チヤ。先一昨日と云ちやア。最う去年だのう。去年と云ふとんだ久しい樣だが大卅日と元日と夜が明た計で。去年もをかしいぢやアねへか　はこ「なんだな。おめへの咄はいつでもくだらねへ事計云ふよ。かんじんの用向はいはずに去年の講釋か。エ、じれつてへ。夫がどうしたな。　はね「うんにやよ。暮の廿九日大雪の降た晩にの。とつちり者で※工左衛門が來たはな　はゝ「どこへ　ね「※物川へさ　ゝこ「フム　ねこ「工左衛門とは役者のやうな名だのう。　はね「さうよ。大坂者で浪花さんといふ※表德さ。その人の形が工左衛門の善六に生寫だ迚、婆の字が渾名を號たのよ　ねこ「フム。さうか　はね「おめへを呼びに遣つたら。※桃林だと聞て例のこごとさ。いま〳〵しいがきぢや。あないな。ごくどうめはない。わしが呼ぶたびにうせをらぬ。へげたれめが　はこ「チヤ正だは。おめへの上方詞は浪花さんが出たやうだ。おほかた惡口を腹さんざ云つた跡が※駄味噌の卒だらう。ホンニ見る樣だよ　はね「卒がきつい※塩屋さ。チヤ又わすれたは。かんじんの用をいふのだつけ　はゝ「それ見な。いはねへ事か　ねこ「夫だつても。口數が多いから竟おそくなるのだはな。あのの。正月はお屋敷のお禮を三日までに仕舞ふから。五日の日には舟で※妙義さまへ參らうと云なすつたよ。其事をおめへに忘れずに云て置て呉れッサ。大体間違ねへけれど。約束も大騷らしいから心待にして居なと云

○お客の嘘は云々　この唄「式亭雜記」に京大坂の流行唄として擧げたり。

○鹿戀　圍者。

○とつちり者　うろたへもの。

○工左衛門　淺尾工左衛門。役者の名。文化五年六月中村座の狂言「與樟樣妹背門松」に手代善六の役をつとむ。

○物川　百川、料理屋。

○表德　號。替へ名。

○桃林　料理屋の名。

○駄味噌　自慢することを味噌を上げるといふ。駄は駄洒落の駄なるべし。

○塩屋　傍訓に「ウヌボレノ」とあり。自慢することを「塩屋」といふ例。洒落本に在り。

○妙義さま　龜井戸天神內の妙義社。

○太鼓菴　當世愛かしこ云こうこ庵は蕎麥の名題、淺草稱往院塔頭道光庵の住持が好物を振舞しより、蕎麥屋のやうになる、その名をもぢりたるか。
○灰汁のぬけた　洗練された。
○二本目ヱには庭の松　松づくしの文句。
○お里がしれる　素性が知れる。
○押物　十日夷の替唄に「賴さんのおしものは」云々とあり。好物、得意な物の意。
○三下　三下奴といふことあり。遊び人の使ひ奴のこと。
○すかまた　挾み言葉にてスマタの意か。見當違ひとでも解すべし。

なすつた。其代に恨ッこいのねへやうに。おめへとおれと。ねの字と。豊太さんと。黒文字さんと。斯五人つれて行く筈だ　は「フウ嬉しいのう。初〴〵しく能からう。しかし酒が恐るのう　はね「その代には氣がはらず。三味線なしの心やす立で能はな。ねこ「浪花さんは。いつか※太鼓菴で隣座敷に居たお方だの　はね「さうさ。氣さくでわかつて居るから妙さ　ねこ「よつぽど灰汁のぬけた人だから氣めへが能よ。「※二本目ヱには庭の松」ぢやアねへはな　ねこ「あのモウ。松づくしを唄ふ上方者ならお里がしれるはな　は「あれと。伊勢音頭が。上方者の押物だよ。シカシ拳は强いのう。自慢をするも無利ぢやアねへ。夫だから他の拳を見るとの。的さんのは○ヤ拳ぢや。あいや金たゝぬ○や拳ヤ○で拳段は。あほらしうて對手になられんはい。なんぞと※三下に見てるはな　ねこ「○や拳○で拳とは何の事たの　は「六や。五や。と。やの字を付るのがや拳さ。三で。七で。九で。と。での字を付ていふのが○で拳だッサ　ねこ「そんなら何といふのだらう　はね「おめへや。おいらのは。みんな其連中だ。夫だから勝兵衞さんの拳を見な。でも。やも。ねへは　は「マア大概な人はその組さ。はね「そしておいらが九といふと笑ひなさるが。眞の拳と云ふ物は一二三四五六七八九といふものだッサ。五だの七だのといふは。大すかまたさ　ねこ「無手と十は打もんぢやアねへと。おとつさんが敎なすつたが。おいらがやうなへぼ拳さまぢやアはじまらねへのう。一二三四五六七八九と打のはどういふもんだ　は「ありやア古風さ。一本をいつこう。一けん。といふは悪いッサ。拳の詞の外に。五ッ六ッ。と常の數でいふのはかまはねへさうさ　ね「なんの道にも利屈があるのう。面倒らしい。兩方から指を出して數が當ッたら勝で能さそうな物だ　は「さうだが。あんまり負ると腹が立ッよ。お客でも構ねへ。くやしくなつて來るは

○ゆでたき春の御壽　めでたき春の御壽の洒落。

○反吐鯨舍　江戸藝者のもぢり。

○株　定式。

○きざがらせ　厭がらせ。

○此中　此間。

はね「おめへは意地が張居るから。どうでも上手だ　はご「なんだな。褒るのか。悪くいふのか。わからねへ。浪花さんも奇麗な拳ぢやアねへ。聲が早いに手は出し切で。指先をおつにごまかすはな　はね「ヲ、さむくなつた。ねの字這入らうぢやアねへか　ねこ「サア這入らう　トざくろ口へ入る　はご「おめへたちが這入るなら。おいらア出よう　はね「ヲヤしよにんな子だの　はご「夫でものぼせるはな。初春早〻ゆだるも智恵がねへ　ねこ「※ゆでたき春の御壽ぢやアねへかッ　はご「ヘン。よろしく申ておくれっ。能口だの　はね「おいらア。風を引居てけふが初湯だよ。夫だから漸けふ礼に出るはな。　はご「おいらア元日に出た　はね「違つたもんだのチトお衣裳を拝見いたしたい于　はご「長持七さを。簞笥が四さをで。日移がしてならねへはな　はね「そりやアさうと。彼に極たか　はご「さうさ　ぶね「あれがおめへには似合ふよ　はご「帶もいつかぢうはなした通りさ　はね「ム、ありやアよからう　はご「ハイ御免なさい。出ます〳〵　トいひながらざくろ口を出て留め　はね「おけをつかひながら又一日からかつて遊ばう　はね「そのかはり口は悪いのう　はご「どく〳〵しく云なさるけれど癪な事はいはねへはな　はね「そこへかけちやア三德さんだらうよ　ねこ「わたしが初ての座敷の時。がうぎといぢめたはな。※反吐鯨舍だ。なんのかのとひどい事を云て。癪にさはることだらけさ。それから居溜らねへから下らうと云たらの。桃林の内でいふには。ナニありやア。あゝいふ癖で。氣には何もねへが。口に悪を持居る人だと。云なすつたが。段〻つき合て見りやア。今ぢやア。※株だと思ふ所爲か。耳にとまらねへ　はご「なんの。あの爺さまは口計さ。おいらア常不断喧嘩をするはな。人を※きざがらせて面白がるのだが悪い洒落さ。※此中もおれがとをの。てめへまア。百七ッの帶解でも祝はうといふいけ年仕ッ

作者曰　此ア、さいふ、さりなどの類の詞は、もちろん江戸時に限れり以下推てしるべし

○痲疹に三度云々　麻疹は一生一度のもの、それを三度もしたらうと云へるなり。「善光寺様のお開帳」は三十三年目に一度と云ふ。古き俚諺に「伊勢へ七度、熊野へ三度、愛宕様へは月参り」といふをモヂリしならん。
○きめじは　大きな額。
○まじイり。まじり　すまし込んでゐること。
○箔代建立　佛像の箔代建立。箔佛とは全身金箔にて塗るものあり。こゝは白粉のことを云へるなるべし。
○ばくれん尊者　女に莫連者といふあり。目連尊者にかけたるか。
○賀の祝　人より賀せらるゝに就て身祝ひをする事。
○道理で料理茶屋も云々　前に爺と婆を云へるより、桃太郎の話に擬せしなり。こゝにては「桃川」と云へり。
○おつりき　きは聞へ言葉。
○棒組　駕籠舁の棒組より云ふ。
○どちぐるふ　馬鹿ふざける。

て。其眉毛は何のまねだ。此とは鏡の手前をも恥たがいゝ。其眉毛は痲疹に三度。善光寺さまのお開帳にやア。七度半も行廻つたらうきめじはの間へ白粉が身を投て。まじイり。まじり〳〵してゐるとの。ヤレ。婚話で箔代建立があきれる。とんだばくれん尊者だ。なんぞと云のよ。　ねこ「にくいのう　はつ「こつちもまけずに。アイサ。どうで婆鯨舎はあたりめへさ。夫だから賀の祝と一緒に。赤飯を配ツて引込む覺期だが。おまはんもいらざる世話やき爺だチと云たら。口のへらねへ事を聞な。客が世話やき爺に。鯨舎が百なり婆だやア。むかし〳〵あつたとさだ。道理で料理茶屋も桃川だッサ。まああきれた口ぢやアねへか　にね「つらのにくい人だのう　ねこ「ア、あつたまつた。モウ出やう　トまたぐ所へ外から入來る婦人あり、これもおなじ友達と見えて、としのころ廿七八おつりきたる女、鹿戀と見たはひが目にあらじ、くちに水をいつぱいふくみにそつと入り來り、[illegible]ねこがはらのあたりへふつとふきかけ、わらつてゐる　ねこ「ヲ、つめてへ。誰だな。悪い事をするチヤお閨さんか。悧りしたはな。にくいよモウ。覺てゐな　かこ「ヲホ、、、、能きび〳〵。ちつとさうもござんやすまい。此中の遺趣返しだよ　よね「お閨さんか久しいものさ　かこ「チヤおはねさんか棒組お揃ひだね　トいふうち、[illegible]猫、又水をふくみ來りて、おかこにふきかけ、ざくろ口にて平手でぶちあひ、きいろな聲を上ゲて、ヒイ〳〵といつてはござおぐるふう。はゝ、文字ぶたかつぎをあびながら　はつ「又初まつた。ホンニ〳〵能氣ぜんだのう　トいひながらふろへ入る　おかこ「おはねさん。おめへきのふはなぜ來なんだ。恨な者だのう。あれほど約束したのに。きのふはの。旦那様が一日御入だつたはな　よね「ほんにか。其癖にきのふはうちに居たけれどの。朝つぱらからふさいだ事があつて寐て居たはな。やつと今日禮に出る位だから。是にて御推もじさ　かこ「そんならお初を呼に遣ればよかつたのう。惜いとをした　はつ「なにさ口ぢやアあゝ云ふが。正はといへば邪魔になるのさ　はね「さうだらうよのう。おちん〳〵で　かこ「ヘン。可愛さうにそりやねへよ。きのふはの。酒孝さんと雅文さんとわつちらが旦と　旦さはだんなをしやれたるとは　三枚が何所で落合た

だりむくの方言世上に弘りてより今は又へちむくりといふなり

○御推もじ　察してくれ。

○おちん〳〵　ちん〳〵鴨ともいふ。仲のいゝ事。

○三枚　役者が三人。

○おかさん　おかこさんの略。

○おゆかり様　知つてゐる女。

○松葉のしの付た初文　進物なり。

か。おひやら手合を四五人引連て押かけたといふちんだから。大酒となつてだり切たはな。（だりむくれの方言をだりさ畧し、むくれとつめ通用するなり）最う昆布鱈に鰤の糀漬といふお定りでもあるめへとかいつて。種〻取寄せたあげ句に。旦のおちひつきが能ぢやアねへか。去年の暮には年忘れをしたから。今日はめでたく年覺をせう。こりや斯又能顔の揃ふ事もねへ。何でも手々爾々に一番宛趣向して。穢細工の料理をせうと云出すと。こりやア妙だとか云て。手々爾々に何處か行て案じて來た所が。モウ〳〵穢くてたまらねへのよ　はね「いやだのう　ついぞねへ　かこ「まづ雅文さんが新しい煙盆を提て出たから。ト見るとの。火いれの中へはむしり海老をこまアかにして櫻灰と見せて。中にちよんぼりと火のいけてある形が。海老の殻の赤い所さ。傍の灰吹の中が雲丹　はこ「エ、きたな　かこ「夫から酒孝さんが買立の耳盥の中へ。えまし麥に海苔のどろ〳〵交つたのさ　はね「チヤ〳〵〳〵穢へ。そりやア小間物店に見立たのか　ねこ「さうだらうよ。いやだのう。聽ても胸がわるいよ　かこ「さうすると旦が。あたらしいおまるをすつと持て出て。穢さうに蓋を撮で傍へ置くと。其中が汁澤山の雞卵のふは〳〵さ　はね「エ、いやだのう。行ねへで仕合。なぜそんな悪洒落をはじめたもんだらう　かこ「時〴〵あんな事がはじまるはな。器はいづれ新しいから。奇麗な事は百も承知で居て。どうも食ふは否だ。其外に五六番あつての。流石に各位も否ださうで。冷ちやアいかねへ。最うお止〳〵とか云て眞の料理になつたはな。アハ、、、。おめへたちも最うおあがりか　はね「ア、　かこ「最う一遍つき合て這入なな　はね「いや〳〵　かこ「しよにんな子だのう。（此内は、文字まじめ三人さも、ぬかぶくろを水ぶねのわきであけよくすゝいでしぼり、みな〳〵ゆかたにたけ〳〵あがりきものを着かへて）三人「おかさんお靜に　かこ「おさらばよ後に必ずよ　一「アイヨ（トゆかたをかゝえて駒下駄をはき暖簾手をあけながらばんとうにむかひ）はこ「久しくおゆかり様のお文を見ねへの　ねこ「松葉のしの付た初文が來たら

○書出し　勘定書。

○板毬　子供用語、鈴木南陵氏云眞が糸屑で堅く出來てゐる、室下縁側でつく。

う　はね「此番頭さんは色をとこだよ。何を見る見せな　ばんとう「それ御覧なさい大卅日の書出しヱへ、、、、　トはなのさきへつき出しわらつてゐる　是だものを。いくおはございましねへ。ホンニ此頃は鍋鶴さんがひさしくお見えなさんねへね　はね「アヽ。あの子は病氣だはなっ　おめへ見舞に行てやんな　ばんとう「ヤレ〳〵そりやアほんに。フウ。道理か久しくお見えなさらねへ。私が見舞に行たら直に本復さ。ハイさやうなら　三人「アイ　ト出ゆく　作者曰　すべて女田舎は常に[illegible]、又[illegible]出せり、さるたぐひの些細なるうがちは、ものうしとてこゝにしるさず　■さーいころ十お十一ばかりの小娘こましやくれた形にて二人きものを着ながらはなすをきけば　お丸「お角さん。此おひだはお稽古がお休でよいねへ　お角「アヽ。おまへもかへ。わたしもね。お稽古のお休が何よりも〳〵最う〳〵〳〵〳〵一イばんよいよ。夫だからお正月の來るのがおたのしみだよ　丸「アヽ、チヱ。お正月も松が取れると不景氣だねへ。もつと。いつウまでも松をとらずにおけばよいのに。何所の内でも直さまお取だねへ。否だつちやアないよ　角「アヽ、おまへはね。お正月がよいかヱ。あのウ。お雛さまがよいかヱ　丸「どつちもよいよ　角「マアどつちか一ッお云ひな　丸「マアおまへお云ひな　角「わたしも兩方よいよ　丸「それお見　角「そんならねっお丸さん〳〵毬と羽根ではどつちがよいヱ　丸「毬と羽根でかへ　角「ア、　丸「どつちもよいがねっ羽根はお天氣が惡いとつかれねへから毬の方がよからうか　角「イヽヱお天氣が惡くてもね。私はお藏の前でつくからよいよ。お藏の前はね。高アく家根が拵てあるから　丸「わたしの所には藏はないものを　トいひながらふところから手まりをとり出し　これ御覽。お屋敷のね。伯母さんの所からね。お年玉にお呉だよ　角「よくかゞつたねへこれは板毬かヱ　丸「いゝへ疊の上で。よヲくはづむよ　角「おまへの伯母さんは能伯母さんだね。そしておまへのおッかさんも氣がよいからよいがね。わたしのおッかさんはきついからむせうとお叱りだよ。まアお聽な。朝むつくり起ると手

○お座を出して來て　机を並べて來てか。

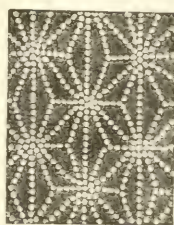
○踊でお屋敷へお上り　武家奉公に出る場合、何か藝を申立つるを云ふ。

習のお師さんへ行てお座を出して來て。夫から三味線のお師さんの所へ朝稽古にまゐつてね。内へ歸つて朝飯をたべて踊の稽古からお手習へ廻つて。お八ッに下ッてから湯へ行て參ると。直にお琴の御師匠さんへ行て。夫から歸つて三味線や踊のおさらひさ（ト此内いきをきらずにスウ〳〵といひながらつゞけてはなすこれすなはち小娘の詞くせなり）其内に。ちイッとばかりあすんでね。日が暮ると又琴のおさらひさ。夫だからさつぱり遊ぶ隙がないから。否で〳〵ならないはな。わたしのおとつさんは。いつそ可愛がつて氣がよいから子。おつかさんがさらへ〳〵とお云ひだと。何のそんなにやかましくいふ事はない。あれが氣儘にして置ても。どうやら斯やら覺るから打遣て置くがいゝ。御奉公に出る爲の稽古だから。些と計覺れば能とお云ひだけれど子。おッかさんはきついからね。なに稽古する位なら身に染て覺ねへぢやア役に立ません。女の子は私のうけ取だから。おまへさんお構ひなさいますな。あれが大きくなつたときとうかい（彷徨）とやらをいたします。おまへさんがそんな事をおつしやるから。あれが。わたしを馬鹿にして。いふ事をきゝません。なんのかのとお云ひだよ。そしてね。おつかさんは幼い時からむしつ（無筆）とやらでね。字はさつぱりお知でないはな。あの子。山だの。海だのとある所の。遠の方でお產だから。お三絃や何角もお知でないのさ。夫だから。せめてあれには。藝を仕込ねへぢやアなりませんと。おッかさん一人でじや〳〵ばつてお出だよ。ア、。ほんとうに

丸「ほんにかへ。わつちのおッかさんは何でも知てお出だから。些でも三絃の彈樣が違ふと直にお叱りだよ。わたしのおッかさんは七の歳に。踊でお屋敷へお上りだと。それだから子。地赤だの地白だの地黑だの。紫縮緬の裾模樣だの。惣模樣だの大振袖だの。帶は黑天鵞絨のや。厚板のや。何角を。お長持に入て。たアんと持てお下りだけれど。わたしのおとッさんがどうらくだから子。皆お亡だとさ。

○ぐるり落　式亭雜記、文化七年六月、女の髮の風、京大坂のかたちになれり、号てぐるりおとしと云へり、鎗ゟ南慶氏云水髮にて髮鬢を髮風年若ならは、い一うしろ返し、年増ならば、をしやこに結ふ、前髮を角に取り眞中をタバネて、次にまはりの毛を揃へて一端たばねた眞中の毛の處へ上げて共に結ぶと、髮とたぼが出來る、そしていはへるなり。

○半四郎鹿子　岩井半四郎。

○路考茶　瀨川路考の流行させたる色。

○伊豫染　當時の流行品。

○そらおがみ　見せかけばかり丁寧による事。

ア、。お婆さんがわたしにお話だよ。夫でね。お婆さんはおとッざんの事をどら殿と計お云ひでね。いつそおにくがりだよ。わたしは夫だから稽古はなんでもする筈だが。お婆さんのお云ひには。お丸は病身だから手習と三絃計で外の事はさせねへが能。其代に女は縫物をよく覺させるがかんじんだと此間は子。縫物をいたすよ。おまへもお仕か　角「いゝへ　丸「わたしは此間も子。人形の衣を二ッ縫ました。アイ。アレ〱お角さん〱　トみゝへ口をよせて中にながし一ゐるなを横目に見ながら小聲にさゝやく　アレ。あのをばさんを一寸お見。子が三人有ながら淺黄縮緬の裁をかけてさ　丸「チヤほんにねへ。若い作りだね。あのアレ。ぐるり落に結居るおかみさんの頭を御覽か　角「イ、エ　丸「黒油ではけつてうを隱してさ　角「アレ小さな聲をお仕。きこえては惡いよおまへ　丸「サア參らう。チヤ。おまへの袂から何だか落ました　角「ホイ　ト拾つて　チヤ〱髷結びの裁だ　丸「一粒鹿子かエ　角「ア、　丸「麻の葉もよいねへ　角「あれは半四郎鹿子と申すよ　丸「わたくしはね。おッかさんにねだつてね。あのウ路考茶をね。不斷着にそめてもらひました　角「よいねへ。わたくしは子。今着て居る伊豫染を不斷着にいたすよ　丸「おまへのも太織かエ　角「ア、是は子。田舍から掛のかたに取たから安いとさ。ア、おとつさんがいつか中お云だ　トくゞりを明ケながら　丸「お角さん後にお出な。哥がるたを取て遊びませう　角「ア、參らう　ト出てゆく　▲人がらのよきおかみさま水舟のわきにて小桶に水をくみゐる、こゝはそらおがみにて詞づかひもあいそはせづくしなり　●お袋さんお早う入らつしやいましたね　▲六十おかゝばあさま　ハイ是はしたりどなたかと存ました。まづあけましてはけつかうな春でございます　●ハイあなたにもお揃ひ遊しまして御機嫌ようお出遊し　▲ハイおまへさんにもお揃ひなすつて　●ハイありがたうございます。皆かはりますともございません。ホンニお孫さまが疱瘡を遊ばしたさうでございます子。夫でも至極お輕い御樣子で別してお愛たう　▲ハイサ

○馬橋　東葛飾郡馬橋村。
○御利生　御りやく。
○私の　お勤申た旦那様　自分の仕へた奥女中を云ふ。この奉公人は又者なりと知るべし。

おまへさんヂ。暮におしつめて人手はございませずヂ。大きに苦勞致ましたが。仕合と輕うございまして。ホンニ〳〵御方便な物でございます。母親がおまへ御ぞんじの通りヂ。疱瘡が重うございましたから。どうかと存ましたが。案じるより産が易いで顔にはわざつと五粒ばかり。手足に漸〳〵算るばかりでございました。あれも思ひますりやア神佛のお力もございますのさ。馬橋の万満寺の仁王さまのお草鞋をお借り申て。丁ど三年になりましたが其御利生でございますのさ　●それはホンニありがたい事でございますね　私も舊冬から一寸お見舞ながら。お歳暮にもあがりますのでございましたが。御ぞんじでもございませうが。娘をお屋敷へ上ますので。何かせ話〳〵しうございまして。存ながら御ぶ沙汰いたしました　▲ホンニさやうだツサね。おめでたうございます。お宿へお置なさるとお心づかひだから夫がようございます。タシカお十六かヂ　●ハイさやうでございます　▲いへもう近所の若い衆が騷〳〵しうございますから。何事もない内に御奉公のとさヂ。お屋敷はどなた樣でございますエ　●ハイやはり私のお勤申た旦那様へ上ました　▲それはホンニ御重縁で別ておめでたうございます　●此まあお寒さはどう致た物でございませうヂ　▲さやうさ今年は余寒が强うございまして。あのまア雪を御覧じましな　「さやうでございます。雪の所爲かして兎角病人が多うございますよ　▲さやうさ。いつも寒明にはちつとづゝ病ひ勝でございます。シタガおまへさんはいつも御丈夫でようございます　●イヱモウ是でも病身でございますがヂ。本町二丁目の延壽丹と申すねり藥を持藥にたべます所爲か。只今では持病も發りませず至極達者になりました　▲ハイそれはお仕合せでございます。あの延壽丹は私の曾祖父の時分から名高い藥でございますのさ。あれは一丁目でございましたツけ。私も暑

寒にはたべますのさ　●ハイ只今は二丁目の式亭で賣ます　▲エ、何かネ。このごろはやる江戸の水とやら白粉のよくのる薬を出す内でございませう　●ハイさやうでございます。私どもの娘なども江戸の水がよいと申て化粧の度につけますのさ。なる程ネ。顔のでき物などもなほりまして。白粉のうつりが奇麗でようございます　▲私どものりんが田舎育だけに根から白粉がのりませんが。成ほどよくのります。嫁などもつけますがネ。翌の朝。顔を洗た跡で。ちよいと紙で拭ますと。薄化粧でもいたしたやうに。きのふの白粉が出るさうでございます。種〳〵な調法な事が出來ますよネエ　●ホンニあなたの女中衆は。がせいに能働きますネ。水ぎれの時にも擔桶で水をかつがれますが。さつ〳〵と氣味のよい人でございますネ。私どもあたりの三などと申ては。いくぢがなくて世話ばかりやけますはな。それに此間は風だと申て臥つて居ます　▲それは御ふ自由でございませう。女中衆と小僧の塩梅の悪いのが一ばんわるうございます　●ハイサ夫にあなた。兎角お薬が嫌でどうも成ません。隨分臥つて居るも病なら致方もございませんが。御膳をたべて。そして寐て居れと申つけますが。替たもので何の奉公人も兎角さう致さぬ物でございます　▲ハイさやうさ。奉公人根性とやらでお飯をたべては寐て居にくいか致して。どこのも左様さ。達者な身でも一かたけお飯をたべねへと氣色が悪くなりますのに。ましてや病氣の時は。それだけに養生を致たが能うございます。つまる所は面〳〵の損といふ所に氣が付ません　●イエモウいかい事人も遣つて見ますが。遣ふではございません。遣はれるでございます　▲ホンニ去年まで居つたお三どのは至極柔和に見えましたッけ　●ハイあれは久しく年季に置ましたが。相應な縁がございましたから。かたづけて遣しました　▲それはよくなさいましたネ　●今度のはがんさい者で

○がせい　軍書には「我勢」とあり。

○水ぎれ　水道普請等にて水のきれる事あり。

○がんさい者　ぞんざい者。がさつ者。

〇顔付をする　ふくれた顔付をすること。

〇誇はしり　音便にて云ふ。「はしり」は走らすの心持あり、飛はすといふに似たり。

〇鳶の羽をひろげた様に云々　肩張を入れたる形容。

こまり切ます。叱ればあたけちらして物をこはしますシ。だませばつき上りが致す。あのモウ顔付をするのと。ふて寐を致すのが。第一にわるうございます　▲イ、エサ。私どものりんめが。やつぱり左様さ。大の差出もので。口をきけば手もとがお留守になります。朝飯を仕舞つてそこらを撫まはすと。二階へ上つて髪に半日かゝります。お晝の支度を仕やよといはぬ内は。物干へ出てばかり〱むだ口をたゝいて居ます。毎日しれた事に世話をやかせて。啼ても笑つてもせねばならぬ事を骨惜をした物さネ。サアおまへさん。水を汲候と申て井戸端へ出ると。ちよつと一手桶提て來るのも漸一時かゝります。其筈でございますはな。お長家中の男衆を對手にどち狂ふ隙には。同じ女中達と寄湊て内の事を誇はしりさ。此間も何をいふかと存て雪隱の蔭で聽て居たら。先の主人をほめちぎつてネ。ナンノ世界中が白壁造りだ。三月が來りやアおさらばさ。お願申ますと手をついてもこんな不吉な内に居るもんか。他人宿に雜用を拂て。まごついて居るには增だから居てやるのだ。なんぞと太平樂さおまへさん。ホンニ〱面の憎さ〱としたとが。ネヱまアさう申ますはな立聽をすると三尺地の下の虫が死ぬとまうすが。いらざる罪を作りますのさ　●ハイサきけば聽腹でつい一言もこごとを申ますと。口三絃でいけもしない鼻唄さおまへさん。夫に又私共も直ではございませんが。鳶の羽をひろげた様に襟を出して。あの貌へべた〱となすりますから。半襟は白粉に染ツて地がわかりませんはな。賤しいお話でございますが。十六錢や廿四錢の紅粉は。二日か三日になめてしまひます。夫につけては元結油も麁末に遣ひますから。孔方の遣ひ方が荒うございます　▲イヱモウ何方も同じとさ。着替もないくせに能物好で。釜元を働くにもなけなし殿で。やつぱりおしやらくをしたがりますから。おのしは釜元を立まはる内は古

○貴様　[illegible]

い着物を着て。足袋も古いのと履替やれと。毎日〜〜口の酢くなるほど申すがきゝません。さうしては新しい足袋も、汚いも混へたので坐敷をのさ〜〜踏で歩きます　●其様もネ。四尺裁ッて貰つて二布にいたせばつい通りでよいのに。七尺も買つて三布にいたすから。サア是も裁端を集めて縫ふ氣はございません。木綿も松坂はいやだとかまうして眞岡を買ますから。縮も茶鹿子の縮緬を幅廣に仕立て大きな尻へ巻つけます。どこの國にかおまへさん。茶屋子屋の女中衆ではなし。商人家のお飯炊が。それでは濟ません　▲さやうさ。ホンニ能く似たお話がございます。私どもの嫁が湯具を縮緬の中幅を二布にいたして。居るにも立にもびら〜〜と致すから。貴さまはあまり無雑な人だト。女のゆもじといふ物は白木綿二布に限した物で。膝から下へ下る物ではない。上つ方の御奉公する女中衆を見さつしやい。羽二重だらうが縮だらうが。皆短くあそばすヲ。長ゆもじといふ物は下卑た人のする業でござるッサ。女郎ですら好者は昔の風を養す。万事長しやかだから長ゆもじなどゝいふ事はないといふ事だ。早〜〜止さつしやいと申て異見いたしましたが。それをも知りつゝ。りんの馬鹿めが。幾布にいたした事やら。木綿の長ゆもじを。ちやんとしめましたはな　●いかな事てもヲホ、、、　●▲ヲホ、、、ホ、、、　▲あんまり忙れて叱るにもしかられませんアハ、、、、　●イヱモウほんに慌た物でございますよ。着物なども手まめに洗濯でも致て夜なべに縫で置けば。さば〜〜とした布子も着られますのに。拵たらその儘に葛籠の隅へおし込で置ますし。兎角針さへ持ば晝も居眠ますが。ホンニ〜〜仕様仕方のない物でございます　▲アハ、、、、、。ホンニ〜〜了簡のない物でございます　●最うあなたお上り遊しますか　▲ハイサ　●私も御一緒に參ませう　ト きものを着て出ゆくあとへ下女二人風呂の中より出きたりをか湯をつかひゐる折から

○目口乾　物を欲しがること。場合によりては世話焼の意味にもなる。

○六十四文ばかり置て來た　百文の内よりなり。

○勞痎　肺病。

○着た限雀　着切雀の洒落。

○下に遣て　在物に金錢を副へて購ふ時にいふ。

○ちやらッぽこ者　いゝ加減な事。

四ッの自鳴鐘

ギリ〳〵チヤン　下女おべか■お猿どん今のをきいたか　今一人おさる■ウ、聞たは　おべか「よくしやべくる婆さんだの　さる「さうさ婆はあたりめへだが。金溜屋のおかみさんよ。人品の能風をして居てとんだ目口乾だの。遊ばせの。入らッしやいのと。たべつけねへ言語をしてもお里がしれらア。あれだから奉公人が居着ねへはな。マアためしてみな。去年まで居たお三どんは。六十四文ばかり置て來た人だから久しく辛抱もしたらうがあの跡で幾人出たとおもふ。たつた十月ばかりの間に丁度五人かはつたぜ　べか「どうせ又。あのてやいの氣にいらうとすれば直さま勞痎だ　さる「しれた事さ。何又あの家でも貰はうぢやアあんめへし。高が一年限でふい〳〵と風まかせの奉公だものを。同じ直ならば氣散に暮す方が德さ。針を持うと持めへとこつちの量見づくだ。縫物が出來ねへで打遣られた女もねへもんだはな。こちとらはどうで着た限雀ときてゐるから。氣に入た着物をさつ〳〵と着殺すがいゝのさ　べか「その方がさつぱりして能はな。見たがいゝ。てん〴〵が奉公人をわるくいふから。又奉公人の方でもわるくいふ筈だア。差引て見りやアお互ッこだから損も德もねへはなしだ。ナヤ損も德もと云へばお猿どん聽な。頃日まで挿た京琴柱の簪の　さる「ウム　べか「あれを※下に遣て挿込みのある簪と取替たがの。二朱と六百いくらか足たはな。余程な損をしたよ　さる「そりやアおめへ些とは損をせざらにさ　べか「しかし流行だから能のう　さる「コウ〳〵きゝな。おべかどん。昨日小間物屋のお車口が持て來た鼈甲の櫛さ。ばら脚で甲の能さとした事だが。山の恰好から何から今風で。最う〳〵ふるひつく樣だつた。御新造さんのふ斷挿になさる櫛を下に遣て。三兩いくらとか打と云たつけが。昨日は相談が出來なんだが。あの人はちやらッぽこ者だから。御新造さんにきつと賣つける

○小指　女房。
○親だま　亭主。
○二朱や三朱の云々　オイランにあらざる女郎。
○餓鬼に苧殼　鬼に鐵棒の對句。

のさ　べか「おめへン所の小指も派手者だの　さる「派手者所か。髪は髪結のお櫛さんが常詰か。小間物屋は四五人道入込はな。アノマア親だまのあたじけねへに合しては不思義に買てやるよ。ヤレ薪が入過るの。炭が多いのと。おいらには小言をいふけれど。御新造さんには御意次第。何でも角でもチイ〳〵さ　べか「よつほどのろい男だの　さる「のろいばかりぢやアねへ。生が入聟だにの。店者上りだから女珍らしいのよ。二朱や三朱の女郎にばかりだまされ居た上句に。艶な女房を初て持て見た物だから。そりやアおたまりやアねへ　べか「尤だの。全体能御器量だ　さる「ちつと權があるよ。あれで愛敬がありやア鬼に鐵棒さ　べか「餓鬼に苧殼とはおいらが事たらう。そんな櫛や簪を見ても買ふ事もならず　さる「きつい事はねへ。おいらが三年ぶりの給金が不斷挿さ。そりやアさうと。おらア伯父さんの來るのを待居るがさつぱり來ねへ　べか「又ねだるのか　さる「さうさ。伯父御でもいたぶらねへきやア。出所がねへはな。績が大分とれたから。川岸の問屋へ仕切を取に出る筈だが。なぜ來ねへしらん。そしての。内で給金を借やうといへば。最う遣ひ切たか。錢遣ひが荒いの。何のと。貝でも吳れるやうだ　べか「おめへ又さういへば能。こつちは錢遣ひがあらい。おめへがたは人遣いが悪いッ　さる「違ねへ。おべかどんおめへン所もやかましからうよのう　べか「やかましいの何のぢやアねへ。ヘン。そこへ行ちやアやかましいを初た内だ。其癖にあたじけなくッての。云はう様はねへはな。三年前の酢くなつた澤庵二切。たま〳〵惣菜といふ所が鼠尾藻の中へひしこを三疋。精進日が荒和布に油揚の細引たのが二切さ。店の衆はてん〴〵に料理茶屋這入をして。うまい物のくすね食をするから能が。こちとらはつまらねへはな。其癖夫婦してうまい物は食ふけれどの。内のものには見せたばかり。あれが悪いはな。いつそあたじけねへな

ら。てん〴〵も食ずに居りやアよし。似た物は夫婦とやらでどれも〳〵憐のねへ代物さ。それに又あの兒めが。いび〳〵啼て。びゝりツ子で我儘育ときてゐるから。子僧どんはみじめよ。何でも角でも云ひなり次第。離し飼といふ物だから。悪くあまやかしていけるもんぢやアねへ。能く育りやア相應に可愛氣のある子だけれど。猫撫聲の親めらと。舌ッ足らずの眞似をする兒は。見ると面が憎い。あれほどな夫婦だが親馬鹿とは能く云た物だよ。今の分で大きくなつたら。あの兒はろくな者にはならねへ。いけッ惜くして溜た金は。さゝほうさにされるのよ。ホンニ〳〵見る様だア　さる「子にはあまい物よのう
ぶた「聽な。どう思つたか歳暮に足袋一足。年玉に扎方を二百呉れたがの。おほかた氣でも違たらうよ其代に元日しまから小言だ。三日でも節句でも未練みしやくはねへ。いび〳〵いび〳〵と宵の上下だからうるせへ。イヤうるせへの瓢箪のと御沙汰にも及うと思ふかの。かたッきしあけしい間はねへはな。それから見りやア。お猿どんの所なんざア、能旦那様だ。何迚不自由がなく。第一氣がつまらねで勤能はさ
さる「なアに。他から見りやア。さうだけれど。あんまり能ともねへのよ。いづくもおなじ春の夕暮とやらさ。せめて正月だから晝の内湯へ來ようと思つて云ひ出したらの。小指のいふ事を聽な。正月と云ふ物はいそがしい物だから。用でも仕舞て行が能とぬかさア。そりやア百も承知だけれど。松の内は早仕舞なり。そちこちする内這入損ふから。こつちは手廻しをする氣よ。不斷夜るばかり這入て居るから。たま〳〵はだまつてよこしてもよささうな物だが。依估地悪い人よ。おらが内なんざア。親指が是式といふもんだから。（ト[illegible]りの手でのむしかたをして）他からうせる客めらが。みんな。酒ッくらひよ。見たくでもねへ。日がな一日皿鉢を拭たり返したり。あれにもおそれるぜへ。下手な料理茶やの様だはな。全体酒客

○びゝりツ子　イビリのイを省きたるもの。

○さゝほうさ　ササホサツより訛れるか。

○元日しまから　元日匆々からの意。

○未練みしやく　未練未釋などいふに倣へるか。「みしやく」は格別の意なきが如し。

○うるせへの瓢箪の　うるせへの絲瓜のなど云へるに同じきか。

○かたツきし　片方づける事。

○親指　亭主、主人、親方などに用ゐる。

といふ奴は人の想像のねへもんだヨ。他の奉公人をばうぬが飼た狆兒の様に思つて。好三昧をぬかしての。夜中までべん／＼と飲居らアな。こつちは晝の勞れでちつとも早く寐てへと思居るに。夜深早更まで能氣になつて洒落居るが。箒も灸も利くもんぢやアねへ。てん／＼は腹さんざ朝寐をして。ヤレ宿醉だの。頭痛だのとぬかして。藥を呑だり。水雜炊を食たりして。うんすん云ながら。八ツ九ツまで起居た奉公人の想像なしだ。料理茶屋なら花でもはづむだらう。こちとらにはおかげで小言さ。お忝けでも何でもねへ　ト はなして居るうしろの方に別家のかみさまいつの間にか來てゐるゆゑ　さる「ばつくりしてかほをあかめ しかし御新造さんはわかつたお方さ。一体お慈悲深いから勤る者の仕合さ　ト おべかさかほを見合せしたをべろり　サア這入らう　べか「中でながし合うか　さる「ウンニヤ。さうしてはゐられねへ。今に九ツが鳴るだらう。早く歸つてお節の支度をせにやアならねへ。おめへン所は味噌の雜煮か　べか「うんにや。やつぱり醬油のお雜煮さ　さる「そりやア奇特だのう。おらン所も醬油さ　ト ざくろ口へはひる跡よりうはきらしき女十七八をかしらにて二三人いりきたり　おふな「どうだ色女め　ト おべかのせなかをぴつしやりたゝく　べか「チヽ痛へ。おふなさん。何だな。浮虛者めへ。ふざけなさんな。おめへの傍へ倚ると色がぶれがしてこまらア　ふな「へンきつい洒落さ。そりやア。あつちらこつちらだよ。こつちはガツ※をしこらへるやうな働はねへはな。ノウお疊さん　たぼ「さうよのう。彼がよろしくと云たよ　べか「その通り。ヘン。あきれるよ。掃溜の蔭にてちらと見そめんゝ。いづれいろよき御返事を。松虫鈴虫轡虫めめづウ引。とんだお龜※女郎だ　ふな「お龜女郎はあたりめへさ。打遣つて置な。どうせおべかどんの様に硝子※を横ツ倒にぶらさげた様ぢやアねへから　べか「なんだおめへの事を云たのぢやアねへ。アイサ私は硝子を横倒さ　さる「おべかどんも負なさんな　たぼ「なんの又四文と出るやつさ　さる「おめへも出る幕ぢやアねへよ。鐵炮の隈へかゞんでお念佛でも申

○箒も灸も云々　箒を逆に立て、下駄に灸を据う。いづれも長尻の客の歸る呪ひ。

○ガツ　女のこと、樂屋通言。「物類稱呼」に長崎丸山にてもいふよし見ゆ。

○お龜　宿場女郎の通名。東海道宮の宿。

○硝子を横ツ倒　細面の美人を形容して、ビイドロ德利を逆様にしたといふこと、「美景蒔繪松」に在り。普通に「ビイドロ逆様」と云ふは、德利を略せるなり。こゝは更に轉じ「横ツ倒」と云へり。

○餌はつきやせん　骨牌の語、餌は畫とあるべし。
○うんざり鬢　ウンザリ鬢、瘦病眉は安永天明以來の風俗なり。
○野方圖　野風俗と書きてノフウゾと讀み、更に轉じてノハウヅとなる。野方圖は當字。
○あくぞもくぞ　江戸語。「あくたいもくたい」など云ふも同じ。
○いかつぱち　どれ程の意。

て居な　たぼ「きついおせゝだの　べか「アイサ私どもはお鮒さんの様な美人德利ぢやアねへのさ　ふな「備前德利を橫倒でもよいよ。わつちらア數ならぬ者だから。おべかどんのやうに※餌はつきやせん　べか「何だこいつが　ト湯をすくつてかける、又こちらからもすくひかけると、兩方から加勢が出てざくろ口と風呂の中で大さわぎにくるふ、此時風呂のすみにかゞみ居たるは、※うんざり鬢とかいふちうツぱらの中ウどしま、さきほどよりだまつて居たりしが、この騷動おびたゞしく、湯のはねるにあつくなつて、風呂のすみから眞赤におこり出す　女「ヤイ／＼此あまめらは何をふざけやアがる。いけやかましい何の事たいあたり近所へ湯がはねて是見やアがれ。天窓からお湯をめした姉さんがお一方出來たはい。惣体此あまめらア惡くふざけやアがる。うぬらばかし買切居る湯ぢやアあんめへしあたりに人様も御座らッしやんねへ様に。※野方圖な奴等ぢやアねへか。コレ。人は人と思つてナ。些と熱いと思つた湯も。溫ちやア口がうるせへから。しんぼうして這入居るのに。あんまりてへばむやみな仕方だ。べつちやくちやべつちやくちやと。※あくぞもくぞを算立て。おやんなさんやしの口を寄せやアしめへし。湯の中中を口だらけにして。いけ騷／＼しいあまつちよめらだ。是見や罰もねへ者にまでざつぶりと浴せやアがつた。※いかつぱちの錢を蒔て。はゞをするかしらねへが。コレ番頭。こいつらア。打遣置たら。湯の中へ糞をたれて。鬼渡や捉迷藏も仕兼めへ。片端からしよびき出して。一軒／＼に斷ねへきやアならねへぞ。みんな覺期をしやアがれ　トなり立てにらみつけられ、四五人のおちやつぴいは、いろをかへてしよげかへる、番頭これを聞てあはてゝかけ來り　ばんとう「モシ／＼おかみさんお腹立は至極御尤でござります。何を申すも若い人たちだから。跡先の勘弁なしでござります。初春早／＼彼是があつてはお互に快くございませぬから。どうぞ御不肖なさつて遣さりまし　女「春早／＼からこつちは何も云たかアねへが。若とつて程れへのあつた物だ。今の世世界ぢやア啼くと食うのねゝさんでも。無面目ぢやアねへはな　ばんとう「マアようございます何事も私におくんなさりまし「おらア。御幣はかつが

○きよくる　[illegible]す。
○猫糞　猫は糞をたれし跡にはせず、土をかけて隠す。よからぬ事を隠して、知らぬ顔をする事。
○尻もや　尻も宮もの約。
○舌の先にざく錢　口を利きて八方に錢になる。

ねへが。正月の三日にあたまから湯をあびちやア。亭主の前へ云譯がねへ　番頭「ハテ清めるのだから
ようございます。四月八日ならあたまから茶をあびるが。正月三日だから天窓から湯を　女「コレをかし
くちねへ。此番頭はこんたまでがきよくるぜへ　番頭「ハテ何きよくる。そう柄をすけなすつちやアわ
るい。ハテまアようございます　女「いゝはな。悪氣でした事でもねへから量見してやらうが。どのあま
でも変來ておれがあたまア。拭アがれ。ヤイ変來うよ　番頭「ハテさておまへをおそれてこゝへは來
られません　女「おそれるほどなら湯も浴せず。小くなつて屈で居べいが。猫糞で。しやア〳〵まお〳〵
だ。コレ姉さんを見變居て尻もやの用心しや。舌の先にざく錢が絶ねへお蔭にやア。一ツ身もんでへを
すりやア小判小粒が嚏をして欠付らア。おつにごろつく雷の脳天から。わるくいたぶる地震の尻の
毛まで。百も承知とはマアおいらが云出した事た。子分子方が有余てを賣た代にやア。土地を離れても
姉御だよ。ヘン。[illegible]生霧め。何を云ても張合がねへ不肖してやるべい。ドウダ番公。おれと一緒に
歩ねへか。屠蘇もたゝき牛房も苦な噛だから。さらけ止の。古風な餅も搗ずよ。角大（樊の銘）を抱て劒菱五（酒の銘　五合の事）とい
ふ正月だ。歩ばつし。例所（落鵰の料理屋）へ行て。もゝんおいで四文二合半ときめべい　番頭「アハ、、、お跡から
參りませう。モシエおまへ方に不断騒ぎなさるなといふは変の事さ。今度からたしなみなさい。モシお
かみさん私が拭てあげませう。ト（毛をふきながら）私は是でもね。むかし風の狂哥が大好さ。しかも一風齋
の弟子で。一風呂齋と申ます。私は御高名を承知だが他はしらねへ。惜い時止ました。今だと判者にな
つて。翌から一風呂齋大人といはれるのだけれど　女「コレ何をいふのだ　番頭「イエサそこで一ツいは
ふつもりでございます。エヘン〳〵。斷もあらうかッ。エヘン。此即狂が名人だてチ　女「道理で獅子鼻

○へりふんだり云々　鬼武の天保太平記に「うか〳〵と酒をのんだり酒のみぬ蹈踏足もゝ也けり」とあり。

○猛きおかみさんの云々　古今集序「猛きものゝふの心をもやはらげ」のもぢり。

だ「東西〳〵。ア、折角出たものを。エ、まづ前書を。イヤナニあの。はし書を。エヘン〳〵。扨と。

エ、。何さ。エ、。

○エヘン。浮世風呂の風呂の中にて。女の數が五人。六人。七人ちかく居はべりて。

女「佛の數は三万三千か　ばんとう「チット東西〳〵。

○エ、。居はべりしが。べちやくちやとしやべり侍りて。

ばんとう「こゝらが。狂だて子。

○エヘン。しやべり侍りて。又後にはたがひに湯をあび見。あびず見。かけ見。かけず見。

ばんとう「ふりみふらずみの心で。あびたりあびなんだり。かけたりかけなんだりさ　女「※へりふんだりへりふまなんだりぢやアねへか　ばんとう「チット東西〳〵

○くるひはべりしが。その湯が。エヘン。その湯がはね侍りければ。そこでかみさんはら立はべり。がつ点せぬとて四の五の侍りけるを。やう〳〵になだめ侍りて。百万年の御いはひといはひ侍るッ。

ばんとう「よしか子。そこで哥に。

錢金は。涌出る湯屋の手ぬぐひで。年のかしらをふくは來にけり。サ

ばんとう「アハ、、、、なんと名哥でござりませう　女「ハ、、、、此番頭のいふ事は今朝ほどの判物の様だアハ、、、、　ばんとう「それでも哥讀だ。アハ、、、、。※猛きおかみさんの心を和らげるも。一風呂齋が哥の德なりけりサ。アハ、、、、。ト笑ふ門には福大黑。當年の惠方から庭に飛込み打はやせ

ば。七福神(しちふくじん)の寳船(たからぶね)。と唄(うた)ふ鳥追(とりおひ)諸共(もろとも)に。聲長閑(こゑのどか)なる しろチざけしろ酒(ざけ)

しばらくありて 九ツの自鳴鐘(とけい)

浮世風呂三編卷之上終

諢話浮世風呂三編 巻之下

女中湯之遺漏

江戸作戯者 式亭三馬戯編

名代のひやうきん者とよばれしかみさま、浮世風呂とは一ツながやさ見えて、湯くみばの片わきなる、ひらき戸を明て、ゆかたのなりにて出來り、水ぶねのわきのかけざをにかけ置、ざくろ口へはひりながら、

おふご「番頭さん。最うお晝をしめたか　ばんとう「しめた〳〵　おふご「おいらも今お節を祝つた。腹こなしにどんぶり溫らうといふ腹だが。大きな腹だよのう。我ながらなぜこんなにふごくするだらう。トいひながらざくろ口を見こびてくりし　ヲヤ〳〵並んだ〳〵是見よがしにいかい事尻をおならべだ。ハイ御免なさい田舍ものと江戸者と等分でございハイ冷物〳〵。滅多にむぐり込だら角兵衛獅子が舞込だといふだらう。アハヽヽヽ　トいひながらやうやうへはひこみ　おまへさんがたは。どなたも能くお並びなすつた。私は跡立だよ。ボンヲドリノウタ「前駆衆は尻が低い。最う些高くたアのウみイまアすウ〳〵引「アハヽヽヽ　トみな〳〵わらふ　ふご「盆〳〵のやうだものを。盆と正月の入込はならねへによ。ハイ湯がはねます。子等でございい。しかも三十年跡はツ。トべろり舌を出す　ヲヤ〳〵どなたか洗粉をお遣ひだネ。フツ。フツ。トはなをひこつかせこ　ア、臭い。ア、臭い。サアくさい。サア臭い。ト大きな聲をしてよぶ　是はサアござい〳〵と云ふ洒落だが。どなたもさう聞ておくれ。正月めいた物だらう。チ、〳〵熱いは〳〵道理で柘榴口が込だ。どなたも長しい事ネ。なぜお湮なさらぬネエ。モシ憚ながらそこからトン〳〵をお狸申ます。骸はこつちの

○しめたか　手を打つを締めるといふより出でしか。
○お節　正月の煮染物を云ふ。
○角兵衛獅子が舞込だ　戸障子開けあれば人り來るより斯く云へるか。稍ゝ明ならず。
○前駆衆は尻が低い　俗謡唄に「先駆衆はお聲が低い、もうちと高くたのみます」といふことそ、四編巻之上に見ゆ。そのもぢりなり。
○サアござい〳〵　賓引の言葉。人を集める時にかく云ふ。
○お狸申ます　お頼み申ますの洒落。

物。湯はあつちの物。何にも御遠慮には及ぬ事さ。チイ三公。うめて呉な。※ゆで海老にしても最うお飾は済だぜ。さうだ〳〵。もつと濡たり〳〵。ぬるくなつたら又湯をうめる分の事さ。こつちの腹の痛ねへ利屈だ。トン〳〵。チツトよかろ。ハお邪魔になるな。三助殿のやつかい者だ。アおなまめだんぶつ（トいひながら中へはいる）ーチヽあつツ、ツヽツ、。しつはりだ〳〵（トいひながらかきまはす）そりや。はねがかゝります。はね物〳〵。おれと同じ事だス。アヽよくなつた。サアどなたもお這入なさいまし。ヤレ〳〵結構〳〵（トしづみ）南むあみだ佛。ヤレ〳〵〳〵湯と糠味噌は兎角かき廻す事だ（[illegible]）ーをばさん　おご三　チイおちお坊か。誰と來た　[illegible]　お隣のをばさんと　おご三　よく來たの。何ぞやりてへが爰は湯の中だーハヽヽヽ　▲見なせへ。私が湯へ來るにも腰巾着だ　おご三　さうさノウ。おめへがあんまり可愛がるからさ。いつそおめへの娘にしなせへ。のうおち坊。娘に成だらうが　▲まさかそれも否だッサ。何でも朝むつくり起るから、晩まで私が内に居續だ。畜生で何でかあつたらうよ。兎角くつついているたがる　おご三　くつついて痛がる物なら狼の生れがはりだらう。取付て離ねへなら狐さま。引付て離ねへなら石漆。もし煙草の脂なら乾ねへ内に味噌汁で洗ひなせへ。墨の付たのならお飯粒で。チツトよかろーアハヽヽヽ　▲なる程おめへは氣さくだよのう。おめへン所の旦那殿は。苦虫を食潰した様な貌をしてだんまり坊だに。夫に引替ておめへの又元氣の能さとした事が　おご三　似た者は夫婦といふが。わたしらが夫婦は鬼夫婦といふのだ。からッきりうら腹だよ。見なせへわたし一人と家内中と掛合ふはな。今朝も聞なせへ。旦那殿は胸がやけると云てお雑煮をタッタ二切だが。こつちはそんな事ぢやアねへ。眞四角に切た餅を。菜も芋もいれずに※空盛で十八切。其跡で重詰の數子と座禪豆で。茶漬をさ

○ゆで海老　普通ならばゆで章魚とあるべき所、正月なれば飾海老にかけて斯く云へり。
○はね物　飛上り者。こゝは湯のはねるにかけて云ふ。
○腰巾着　始終その側を離れぬこと。
○石漆　せしめ漆。
○苦虫を食潰した　今は嚙潰したといふ。
○鬼夫婦　一親に似ぬ子に鬼ッ子と云ふより、夫に似ぬを以て鬼夫婦と云へるなり。
○うら腹　反對を
○空盛　餅ばかり入れたること。

○さるぼう　赤貝のかたるもの。エテボウとも云ふ。

○お信　信濃者。大飯をくふと云ふ。

○天窓　おつむてん／＼といふ。子供言葉。

○薄皮　饅頭。

○八里半　「八里半」といふ語は早く「心中大鑑」（寶永元）に見ゆ。後に「栗（九里）より（四里）うまい」とて十三里と稱す。

らく／＼と三杯さ。イヽエサ肝を潰しなさんな。他所のおかみさんがたとは違つて。一文からの商で日がな一日ゐたり立たりする物を。腹もへらうぢやアねへか。お晝はチット早かつたから。未だ腹が能かと思つて。食て見たら又いける。イヤほんに聞なせへ。腹をへらして物を食ふほど。うまい物はおそらくねへによ。汁が銀杏大根に焼豆腐の賽目。お平はお定りの芋胡羅蔔。牛房大根。田作といふ所を。あの田作が這入と臭くてならねへから。奢ツてさるぼうのむきみを入やした。おめへの所でもさう仕て御覧じろ。アイサ。田作鱠に鮭の焼たので又六ばいとお目にかけた。塩引ぢやア飯がすゝむよ。今も番頭に笑はれたが。さう食から骸が丈夫だ。下手なお信はかなはせねへ　▲チヤ／＼よくそんなにたべられる事だね　トわらひながらざくろ口を出る　●三才ばかりの小児を留桶に入れておき、母親は片手で留桶のふちを押へ右の手でぬか袋をつかひながら　おたこ「じつとして這入てお出よぼちや／＼をするとだぶ／＼がはねます。ソリヤ／＼。言ねへ事か。夫見なせへ。いふ口の下から湯が目へ這入た。それよし／＼。　トかほをふいてやり　最今度からおよしョ。ヨ。手拭でお顔や手々をよヲくお洗ひ。エヽきたない足だお鼻の下もばゝツちいだからお湯をかけてお洗ひ。番頭さんがお叱りだによ。ヲヤ／＼能子におなりだぞ。上手にお洗だのう。是お見おつかさんも上手にお洗だよ　小児「坊も。上手にお洗。　おたこ「ヲヽ／＼。坊も上手にお洗だぞ。コレサ／＼それがわるいはな。天窓からお湯を浴ては今のやうに目へ染ます。さう。さう。能く云ふ事をお聞だぞ。坊は聞訳が能から御褒美をやりませう。餅がよかろ。薄皮か。お焼芋か　小児「はちいあん。はちいあんが能よ　おたこ「はちいあんトハ何だの　小児「はちあんお芋が能いよ　ト泣き聲　おたこ「ヲヽ／＼。お芋／＼。ムヽ八里半か。ヲホヽヽ此子はマア誰が云て聞せたか。をつな事を覚てさヲホヽヽ　そばにゐたかみさま　おいか「ヲホヽ

○髪　子供言葉。

、、八里半ッサ。いかな事でもとんだ事を覺てさヲヱ。ほんに〳〵子供衆といふものは。能くまア子耳にはさんでお忘なさんねへ物でございますヲヱ。功者な口をおきゝだ おたこ「イヱモウ店の者が色〳〵な事を教ましてどうもなりません。ませた口をきゝますに側から附智惠がございますから。いとゞおしやべりになります おいか「ヲホ、、、それに又。今年は琉球芋が澤山な所爲か。燒芋がはやりますよヲヱ。おまへさんがたは御存もございますめへが。いづかたも燒芋のないとはございません おたこ「さやうございますとさ。私も初は何の事を申すかと存たらば。八里半とは九里に近いと申すとだと おいか「さやうさ。最ちつとで栗だといふ事ださうにございます。おまへさんはどうか存ませぬが。私どもは栗よりおいしうございます おたこ「さやうでございます。栗は皮をむくだけ世話でございます おいか「お薩の方がやつとおいしうございますよヲホ、、、意地のきたないお咄だ。併どこのも好物さヲ おたこ「私どもでも毎日おさつでございます 小兒「おつかア。お芋。お芋をおくゑ。トはなをならしてねだる おたこ「とんだ事をお云。こゝはお湯だものをや。そんな事をいふと番頭さんがお叱だよ。イヱモウ咄食はうでどうもこまります。最ちつと聞譯がありさうなもんでございますが。根から分ません。まだおまへさん。尿も教たり教なんだりで おいか「それはその筈さおまへさん。是でもヲ。最半年も立て御覽じまし。大きにおせ話が薄らぎますよ。トいひながら小兒にむかひ ヲヱお鮫さん。おつゝけ能お姉さんになりだヲ。※髪を結て簪をさして 小兒「櫛イ。紋あつて。 おいか「アイさやう〳〵。紋の付た櫛〳〵でヲホ、、、。よくお言をおつしやる。ヲヱおまへさん。ちよつとお聞なさいまし。櫛。紋有てッサ。アハ、、、、なか〳〵わかります。イヱモウ女郎のお子さまは各別お早うございますのさヲヱ。ヱヘ、、、 おたこ「なん

○水なぶり　水いたづら。

だかこしやくな者でございますよヲホヽヽヽ　おいか「お湯がお好でようございます　おたこ「ハイ湯は好でございますが。かはつた事で行水が嫌でこまりました。最う今年らはどうございませうか。去年の夏は大ごまりさおまへさん　おいか「ヲヤ〳〵どう致たヿでございませう。水なぶりをなすつてお嬉しがるはずだが。サア〳〵伯母とお湯へおはいり。　ト手を出す　小児「いや〳〵　おいか「否〳〵かへ。ヲヤきついお愛相づかしだヲ。大分ぞり〳〵が生ました　おたこ「ハイサ兎角嫌でこまります。サア中へ這入ませう。サア〳〵お手桶とお徳利をお持。ヲヽさむくなつたぞ。坊は留桶の中だからよいが。おつかさんはあぶうございます　小児「坊。あぶい　おたこ「ヲヽ〳〵。あぶからう〳〵　おいか「サアおばあも這入ませう　ト中へいだき行　おたこ「ハイ御免なさいまし子供でございます　トふみだんへたゝせおき「サアこゝに立てお出。お脊中をよくしめしませう。　ト手ぬぐひにて湯をあびせゐる内おいかは小桶ふたつへ水をくみてもち来り　おいか「おかみさんヱ。此お子さんにはおあつうございませうから水をうめて上ませう。サア〳〵爰へお這入なさいまし　おたこ「これは〳〵はゞかり様。お手をいたゞきます。これはモウ有がたうございます。サア〳〵坊や這入ませうよ。ヤレ〳〵けつかうなお湯だぞ。をばさんがうめて下すつて。てうどよいお加減だ。ソリヤしづみませう。ソレぶく〳〵〳〵〳〵。ア、よいぞ〳〵　小児「あちいよウ。おつかア。あちいよう　おたこ「ナニあついヿがあるものか。弱いヿをいひたさる。アレ〳〵よそのねゝさんも長にお這入だものを。アリヤよそのをばさんがお譽だよ。ハイ〳〵お鮫坊はとんだ能子でよく湯へはいります。お譽なすつて下さいまし。ハイ〳〵。ありやお譽だ。ノウ。最よからう。ソリヤあつくもなんともない。ヲヱ。てうど能うございます。サア〳〵能ウく溫ッて出ませう　小児「最出ようヨウ。おつかア。出ようよウ　おたこ「サア〳〵出ませう

○江戸の水がしみて　江戸慣れて来ればの意。

○御詠歌　寶暦度より勸化に俗人の出ること流行し、口々に巡禮歌を唄へり、此流行も寛政度に至りて江戸に衰へ、田舍に盛なり。

／＼。ハイ御免なさいまし。出ますものでございます。ト詞「ヘイさやうならおかみさんおゆるりとお出なさいまし。私はお先へ上ります　おいか「ハイさやうなら。お鮫さんあばく＼　おたこ「をばさんにあばく＼。サアお辭義をしな　おいか「ヲヽ能お辭義だぞ。ハイさやうなら　トをかゆをうたせてあがりゆく　●風呂のすみにて鄙めきたる聲よりあは下總唄に銚子のなき節といふをうたふこゑする　▲山出し下女「さまよ銚子のウ引。荒濱そだちお引。色の黑いは御免なれ。しよふがゐ引　●「コレ／＼何を唄ふのだナ。女湯の中で唄をうたふものが何國にあるものか。貴さまの國ではうたふか　▲「イヽエわたしが國でもうたひましねへ　●「そんならなぜうたふのだ　▲「それでも隣の男湯でうたふから。わたしは又江戸といふ所は湯へさへ這入れば唄ふものかと思ひました「馬鹿なことをいはつしやい。あれは男だから唄ふのだはな。女湯で哥を唄つてすむものか。いかな事たつてあきれけへるは　▲「そんならよしませう。ハテ江戸はをつだチヱ男湯で男は唄つてもいゝが。女湯で女が唄つちやアわるいだチ　●「しらねへよ。じれツてへ。　お松「いゝよ唄つても能から唄ひたくは隨分大きな聲でやんな。とんだ能聲だは　●「チヤお松どんか。聞なナ。あゝいふ代呂物だはな　お松「此内が能はな。おつつけ江戸の水がしみて見な。賴でも唄はしめへ　●「さうよのウ。そしての。田舍の女の聲は。あはれツぽくをつにふるへるのウ　お松「そのくせ能聲さ　●「この人は聲自慢だはな　お松「道理だ。最うひとつうたひなナ　▲「イヽエよしますべい　●「お好が出たからうたひな。鬼もたのめば人を食ねへとやらだ　▲「何おめへ方が笑ふだんべい。わたしは國にゐた時。觀音堂建立の御詠哥に出ました。十六七を頭にして。私らが十三のじぶんだつけ。毎晩建立にあるきました　お松「そんなら御詠哥も知居るだらうの　▲「アイ。まづ一ばん知居るものが坂東の御詠哥。それからじやうかよ節。いたこぶし。しようが

○海老屋の甚九　甚九は下關よりはじまるこの說あり。この唄など、甚九の本唄とも見るべきものか。

○糸物立　絹綾物。

○ふたなり新艘　不明。船首が二つあるよりいふこか。

○もちとくどけば　唄の中途にて切る時、よく云ふ言葉。

へぶし。それから甚九。それから川崎ぶし。何でも知居るだ。中でも海老屋の甚九がおもしれへだ
お松「それはなんだ　▲「今度喜代が崎海老屋の甚九さ　●「うんにやよ。何といふ節だよ。▲「甚九のクドキといふものさ　お松「うたひなナ　▲「うたひますべい。笑はつしやるべいがどうするもんだ　ト大きな聲にて　今度喜代がさき海老屋の甚九。親の代から小間物賣よ。今は小間物賣やを止て。大坂通ひの糸物立よ。船は黑檣ふたなり新艘。綾や錦を下荷と積で。まだも積ましよ金襴純子。錠巻上ててんまを積で。白帆まき上て蟬口しめて。表上りて塩風みれば。甚九戀風はや吹まくる。周防灘をも七十五里よ。播磨灘をも三十五里よ。はるか見ゆるが津の島灘よ。サアサおせさせ船頭も水主も。押せば大坂がのう近くなる。甚九運が能きや夜一夜で走る。おやれ嬉しや大坂へ着た。宿はどこだと手代衆にきけば。宿は加賀屋の八郎兵衛さまよのつ。中の積物は何〳〵ござる。綾もござれば錦もござる。まだもござるや金襴純子。けふは日もよし商仕舞た。人をなぐさむ新町通ひ。此廓にて目につく人は。小銀小櫻梅の花よりも。三味の音を出す白糸さまも。わしが目につく道芝さまよ。こゝろざしよと道芝さまへ。そこで道芝大きな事よ。こゝろざしとは佛の事よ。今宵一夜に千万兩も。金をつかふて戀路をてらす。※もちとくどけば事長くなる。これで仕舞ましよ小じやんとしやんと　●「ヤンヤ〳〵　▲「ア、ヤレ〳〵逆上たは子　お松「大きに御苦勞〳〵　●「とんだおもしろかつた。アハヽヽヽヲホヽヽヽ　風呂のなかの人々みな〳〵大わらひをする　▲山出しの下女平氣にてさび出し、水舟のそばへゆき、升から水をのんで耳をしめし、かほに眞赤にしてふかしたてのごさくからだに湯氣を立てゐる　はんさう「コレ〳〵伊勢屋の女中。きさまはとんだ能聲だの。ハヽヽヽ。女湯はじまつてついぞない事だ　みな〳〵「アハヽヽヽ　●髮の毛のうすき女はうニ人りにてながし合てゐる　お山「サアお川さん。おめへの脊中を出しな　お川「アイそんならざつとやらかしておくれ。垢はよらずと能よ　お山「チツト承知の

幕さ。チヤおめへ灸がいぼつたの。痛かアねへか　お川「痛いはな。けふは日本橋の藤の丸から。膏薬を買て來てもらつた　お山「そりやア能かつたの。あすこの膏薬は能くきくとさ。

因に云藤の丸は舊家なり慶長年中湯島天神の門前において創業し万治二年日本橋通二町目に開店してより年數凡百五十余年連綿と相續す江戸において膏薬を鬻ぐ家は藤の丸法橋高室見林を元祖とせり其証委しくは國家万葉集に見えたり且慶長よりかぞふれば凡二百十余年に及ぶおのれ三馬當主と金蘭の友たり故に舊家の緣故を記してあまねく世人にしらしむ

お山「コウ〳〵お山さん。おめへの隣ぢやア。夕も夫婦喧嘩があつたの。久しいものさ。なぜあゝだらう　お山「おもふ中の小いさかひとやらさ。どつちをどうとも云ねへはな　お川「兩方が悪いといふ内にも。商賣あがりの者は。癖として悋気深いから。夫婦喧嘩が絶ねへのさ。男の贔屓をするぢやアねへが。惣体男といふものは表を勤る者だから。些づゝのつき合もありうちだアな。そこを女房も得心して居ねへぢやアならねへ。日が明ずに悪くやかましくばかり云て見ねへな。夫こそ猶さからつて出懸るはな。さうかと云てだまつてばかり居てもすまず。諸事塩梅物だによ。しかし又おらがかゝアだの。おらが山の神だのと云つて。かみさんをこはがる亭主も世間体の悪いものさ。なんぞの噺序にはてん〳〵の女房を譽ちぎるも氣障な奴さ。さうか迚。むごくあたるばかりが能にして。ひどいめにあはせる亭主もつらのにくいもの〻。何でも氣の合た夫婦が互の仕合。長い月日にやア好事ばかりもねへもんだから。兩方で不肖仕合ふのさ。隣の疝氣を頭痛とやらできついお世話だけれど。隣の太郎四郎※さんを見なナ。屋敷から下りたてのおかみさんに。持立の女房だ迚。間がな透がなお緣さんの傍へ倚て。のろけた顏を見な

○太郎四郎　楽屋通言にて馬鹿の事。
○麦藁の大蛇を云々　富士祭に賣る。そつとして置けば蛇の形なれど、引張りたる故、不恰好になりたる意か。
○五大力　流行のめりやすな

り。三編の跋にこの文句を用ゐたり。
○ひい〳〵たもれ　玩具の笛おくれ、幼兒の言葉。
○釆女原　木挽町。今の歌舞伎座の邊。
○風見の鳥　高くとまつてゐる形容に持出せるなり。
○楠生亭　楠生亭某酒。本所割下水住。庭に楠の大木あるを以て楠生亭と云ふ。細工手品の達者なりと「式亭雜記」に見ゆ。
○房齋　菓子屋。俳人小嶋大梅の家。御茶の菓子を拵へる店。
○ようかし　よくも。
○大ぶかし　太きふかしいも。
○身じんまく　身仕舞の訛。
○御そくさい　無事な人。
○指もの　髮飾、簪櫛笄等。
○お賴だの　お樂しみの略、燒餅半分の語。
○荒神樣の云々　二十八日は荒神樣の緣日にて、朝早くより松を賣りに來る、緣日々々といふ處へ持込む。

ナ。麥藁の大蛇を兩手で曳伸したといふ身で。ながアく寐そべつて居て。女房が五大力の爪彈を聽居るもヤンヤな沙汰ぢやアねへ。お緣さんもお緣さんだ。なんぼ屋敷出だ迚。あんまりあつかましいぢやアねへか　お山「まだおめへひい〳〵たもれだ物を。花嫁の内が花さ。おつつけ子小兒でも出來てみな。あゝはいかねへ　お川「ヘン穴嫁があきれるよ。ヤレ香をかぐの茶を食ふのと。大笠原か釆女原かのお諸禮を仕候迚。風見の鳥を見るやうに高くとまつてすまアして居るも小癪に障らア。人が行きやア豆猪口へきびしやうから茶をついで呑まして。本所の楠生亭とやらが拵た菓子簞笥から。目へ這入さうな菓子を出して。ひとつお取なさいまし。私どもは房齋をたべつけたら。外のお菓子はどうも口にあひません。なんのかのと作聲の猫撫さ。ようかし房齋もすさまじい。大福餅や大ぶかしをむしやり〳〵で居ながら　お山「さうさ花を活るの琴を彈くのと世帶もちのいらねへ事さ。飯を焚て着物を縫て。内外の者の身じんまくをして。物にすたりの出ねへやうにすりやア。女房の役は澤山だはな。それで氣にいらざア先さまの御無利だ　お川「アノお緣さんは亭主が御そくさいで持たものよ。芝居は代り目〳〵に丸三と越長二軒へ行くし。指ものはチツト來たりで。自由ざんめへにとり替引替買立るし。呉服屋へは夫婦連で見立にいくか　お山「ヘンお賴だの。ホンニあきれもしねへ　お川「なんの相談でもお緣や〳〵さ。朝から晩まで口づけにお緣やだ。荒神さまのお緣や〳〵が聞てあきれらア　お山「チホ、、、ふけいきや。きいたふうな。しかしそんな亭主といふものはやきもち深いもんだによ　お川「あの面でやきもちおちやア銅羅燒だアな　お山「お緣さんがお色白ときてるから。夫婦揃つたところはしら玉と金鍔燒をひとつ竹の皮に包んだといふもんだらう　お山「まだしも色白だから七難も隱すけれど。あれで黑からうもんならこち

とら組さ。さうだがの。亭主はあんな老實者がいゝよ。常住取替引替見立直しの女房を持人は氣がねへのう　お山「第一居る空がねへはな。ハテおめへ女房で候と打居て置れて。※賣藥屋の銅人形見たやうに看板にされたばかりもつまらねへぢやアねへか　お山「さうさ。そりやアこつちにも荒神さまがあるから。さう旨くはいかねへのさ。何にしろよその事は打遣つて置て。こつちのあたまの蠅を追て居よう。いつか一度は旦那さまのおぼしめしにかなふだらう。トせなかをながして小桶の湯をざぶり　お山「ア、さつぱりしたサア這入らう。這入らう。○二十三四のさしこみにてよめと見ゆる女　お室「お壁さん今し方表を通つたおかみさんを御覽か　おかべ「いゝへ　おいへ「とんだはなやかなお形さ。路考茶縮緬に一粒鹿子の黑裏で。下へ同じ一粒鹿子の黑の引返しを二ツ着て。緋縮緬の繻絆に白繻子の半襟で。鼠の厚板の帶のこり〳〵する九寸幅さ。脊恰好はすらりとして。故人米三を中年増に作つたといふ風だつたが。女でさへふるひ付くものを子。ましてや男は尤な事さのう。今もお聞ナ。髮結床の前を通つたら子。若者が大勢で其おかみさんの路考茶を見て子。あれ見な。とか。見ろとか云て。今の女は皆青い着物だナ。惜い女に馬糞の衣をかけたぜ。あつたら事をした。なんぞといふはな。男といふものはにくいことをいふもんだねへ　おかべ「さうさのう。それだから髮結床の前を通るのは恥かしいよ。先刻通つた人も立派な事さ。髮が上方風で化粧まですつぱり上方さ。鼠色縮緬だつけが伊豫染に黑裏さ。とんだ能上りだつた。あの着はずつと茶返しの比翼で緋縮緬の繻絆。やつぱり白えりをかけて黑繻子の帶。どうもいへねへ風俗だつけ。よそのおかみさん達は押返されねへ形でお正月を遊ばすが。こちとらはつまらねへものさ。あの衆はよく〳〵能月日の下で生れた人だらうよ。そりやアさうと一面に伊豫染だの　おいへ「アイサ。路考茶か。鼠か。伊豫染さ。みんな昔流行

○居る空がねへ　居る氣になれぬ。

○賣藥屋の銅人形　解剖人形なり。※印の字を當つべきか。

○九寸幅　腹合せの帶。

○故人米三　四代目團十郎の弟子、文化六年六月廿八歲歿、寫樂の大首にも描けり。

○馬糞の衣をかけた　青色を貶する意、生草を多く馬秣にすれば青き糞汁を排す、普通の馬糞にては人にかゝることなし、是は馬の糞下しなり。

○押返されねへ　遜色なき意。

○本面　張子ならぬ面を云ふ。

○いゝ利方　いゝ考。

たさうだが。段〳〵流行返るのだ　おかべ「さうさ。染色も案じ盡す物だから。一人ひねつた人が有て昔物を見付出すとテ。今の目には珍らしいから。サア能はと云て一人着い二人着いして流行出すのさ。しかし丁子茶から見ては。今の鼠や路考茶は近頃の物だッサ。いよ染はよつほど大むかしはやつた物だが相かはらず癈らねへ居て。今又ずつと流行のださうさ。私等が内の婆さんが話したつけ。そりやア能が。なぜあんなに上方風を嬉しがるだらうか氣がしれねへよ　おかべ「さうさ。あのまア化粧の仕様を御らんか。目のふちへ紅を付て置て。その上へ白粉をするから。目のふちが薄赤くなつて。少しほろ醉といふ顔色に見えるが。否な支たねへ　おいへ「そしておめへ。夫ばかりぢやアねへはな。顔の白粉と。生際の白粉と。襟の白粉とは。別〳〵に有ての。眉掃も三本入るとさ　おかべ「ヲヤ大騒らしい。私らは眉掃さへ遣ねへものをや　おいへ「夫だからあのざまをお見。本面屋ともいひさうに。顔がてら〳〵して。誠に本塗だはな。あんまりべた〳〵と化粧したのも。助兵衛らしくしつこくて見ッともないよ。諸事婀娜とか云て薄化粧がさつぱりして能はな　おかべ「そしての。鼻の先ばかり一段べた〳〵と濃くつける風があるが。あれは全体上方の役者が始たとだッサ。何とかいふ女形の鼻が人並だから舞臺ではえねへッサ　おいへ「成程のう。役者の鼻は人並より少し高みな方が見能い容だテ　おかべ「夫だから其女形の工夫で。鼻ばかり別に白粉を濃く付たら。ソレ鼻が高く見えて。舞臺顔が美く見えたさうさ　おいへ「なるほどいゝ利方だ　おかべ「それを町方の女中が眞似てする物だから。見やう見まねに江戸の女までが。此頃はちらほら眞似やす　おいへ「さういへば間に見かけるテ　おかべ「あれは役者といふものは拵物だから。遠見の能とばかり考たものさ。それだから鼻を濃くするも恰好が能けれど。平人がそのまねを

○勘三の芝居　中村座。

近來[illegible]とはかりにて鰐見物の余情をふくませたるは例の[illegible]

○本居信仰　本居宣長崇拜。

してば。側でしげ〴〵と見られるから見ざめがして穢らしいチエ　おいへ「目のふちへ紅を付るのも一体は役者から出た事らしいチ　おかべ「あれも大かたはさうだらうが。昔からする人が有から。あの方はまアゆるしもせうよ。しかし目のふちへ紅をつけた人は老て目のふちが黒くなるッサ。氣を付て御覧。目のふちの黒い人だ。大年増にあるものだ　おいへ「あります〳〵　おかべ「すべて上方の女中は役者のまねをしたがると見えて化粧下へはかほよ香といふ油を塗とさ　おいへ「江戸でも役者の化粧するのは。すき油を付るぢやアねへかヱ　おかべ「さうさ。其かほよ香といふ物も。すき油の様なものさ　おいへ「いやだのう氣味の悪い。夫よりは三馬が所の江戸の水をつけた方がさつぱりして。薄くも濃くも化粧がはげねへで能　おかべ「それだから今一面に流行るはな　おいへ「贋が出來たの　おかべ「あれは水の色を似せた計で。天花粉を入れたのだッサ。夫だから江戸の水とは付て見て違ふはな　おいへ「ヲヤほんにか　おかべ「夫はさうと暮に買ふのを忘れたから。けふは油を買にやらうヤ　おいへ「おまへ油をお買なら。本町二丁目の江戸櫻でお買あすこの油は夏もかはらず。いつそ能よ。そしての。目方がたんと有て。とんだ安いはな　おかべ「そんな咄を聞たつけ。チ、それ〳〵。去年の春勘三の芝居で。松助が弘た店だの　おいへ「ア、さうさ。あの時は白粉を撒たつけ　おかべ「さうさ　おいへ「おまへお上りか　おかべ「アイ一緒に行ませう　おいへ「わたしは歸り道で胡椒を買ねへきやアならねへおつき合ナ　おかべ「勿論さ　トいふ折ふし

本居信仰にていにしへぶりの物まなびなどすると見えて、物しづかに人がらよき婦人二人、おの〳〵玉だれの奥ふかく作るだらけの文章をやりたがり、几帳の[illegible]

未刻自鳴鐘

かほに[illegible]でもかざしてゐさうな氣位なり

けり子「鴨子さん。此間は何を御覧じます　かも子「ハイうつぼを讀返さうと存じてをる所へ。活字本を求ましたから幸ひに異同を訂してをります。さりながら舊冬は何角用事にさへられま

かも子「鳧子さ

して。俊蔭の巻を半過るほどで捨置ました　けり子「それはよい物がお手に入ました子　かも子「鳧子さん。あなたはやはり源氏でございますか　けり子「さやうでございます。加茂翁の新釋と。本居大人の玉の小櫛を本にいたして。書入をいたしかけましたが。俗た事にさへられまして筆を採る間がございませぬ　かも子「先達てお噂申た※庚子道の記は御覧じましたか　けり子「ハイ見ました。中〳〵手際な事でございます。しかし疑しい事は。あの頃にはまだひらけぬ古言などが今の如ひらけて。つかひざまに誤のない所を見ましては。挍合者の添削なども少しは有たかと存ぜられますよ　かも子「何にいたせ。女子であの位な文者は珍らしうございます。先日も外で消息文を見ましたが。いにしへぶりのかきざまは。手に入た物でございます　けり子「さやうでございます。何ぞ著述があつたでございませう子。世に殘らぬは惜いとでございます。ホンニ※怜野集をお返し申すであつた。永〳〵御恩借いたしました。有がたうございます　かも子「いへもうおゆるりと御覧なさりませ。わたくしは※うけらが花を一冊かし失ひましたが。トント行方がしれませぬ　けり子「イヱどうもかし失ふでこまりますよ。此間はお哥はいかゞでございます　かも子「何か埒明ませぬ。先日どなたにか承りましたがあなたは※ひなぶりをもお詠なさるさうでございます子　けり子「ハイサもう。お恥かしい事でございます。あまり本哥で對屈いたす時はなぐさみがてら俳諧哥をいたしますが何もうお恥かしい。お耳に入てはおそれ入ます　かも子「イヱサ萬葉の中にも。※大寺の餓鬼のしりへにぬかづきの哥。ヱ、夫から※夏痩によしといふものむなぎとりめせのたぐひ。その外あまた見えますし。殊には※續万葉に俳諧体と申す体がわかりましたから。無心体の哥もおなぐさみには宜うございます　けり子「イヱモウ。※松のおもはん事もはづかしでございます。此間子。あま

○庚子道の記　白拍子武女享保五年の紀行。實は架空の人物なりともいふ。

○怜野集　八代集の歌を清原雄風が類聚せるもの。

○うけらが花　加藤千蔭の歌集。

○ひなぶり　鄙ぶり、あづま歌の類か。

○大寺の餓鬼のしりへに　萬葉卷四「不相念人乎思者大寺之餓鬼之後尓額衝如」

○夏痩によしといふもの　萬葉卷十六「石麻呂尓吾物申夏痩尓吉跡云物曾武奈伎取食」

○續萬葉　古今集のこと。

○松のおもはん事もはづかし　「古今六帖」に「いかでなほ有りと知らせじ高砂の松の思はむことも恥かし」とあり。

りいやしい題でござりますが。おかちんをあべ川にいたして。去る所でいたゞきましたから。とりあへず一首致ました

　うまじものあべ川もちはあさもよしきな粉まぶして晝食ふもよし

といたしましたヲホヽヽ　かち子「ヲホヽヽヽ冠辭をふたつ立入て。至極面白うけ給はります。まぶしてなどが。どうか古言のやうにきこえましてヲホヽヽヽ　けり子「イヱもう。ほんのなぐさみでござります。先生などのお耳に入たらお叱り遊すでござりませうよ　かな子「何おまへさん。いづれ雅の道でござりますものをヲホヽヽヽ。うまじものあべ川とかゝい。あさもよし。きとうけて。晝くふもよしどうもいへませんヲホヽヽヽ。あなたお這入なさいますか　けり子「ハイまづおさきへ　トざくろ口へはいる　●引違へて六十ちかきばあさま小桶を二ツ両手でずつさ押ながら來り　ヲヤおばさんよく來なすつたの　こちらのばあさまも同年ぐらゐの人　▲ホヽヲ姉さん今來なすつたか

●何だな此おばさんは。他の心もしらずに。そんな元氣ぢやアねへはな　▲ヲヤ〳〵なぜよ　●マアおばさん聽なせへ　▲又初〳〵しく泣事か。おらア最うお正月の耳だから。泣事の聽役は否だよ　●泣事ぢやアねへがの。聽なせへ野良殿が又始つたはな　▲ヲヤ　●元日に禮に出候迚。袴羽織で吉の野郎を五種香にして年玉物を持せて出たと思ひなせへ　▲ヲヤ　●さうすると。元日の暮方になつて。吉ばかり歸つたから。金太はどうしたと聞たら。何所へか廻るから先へ歸れと云なさりやしたから。わつちばかり歸りやしたと。何かおめへ。うぬが指行た脇差も吉に指せて。袴もぐる〳〵とひんまいて年玉の箱の中へ入てよこしたのさ。サア又爺ざまの耳へ這入たら大事だが。併元日しまから這入所もあるめへ。追付歸るだらうとおもつて。待どくらせどサア歸るもんぢやアねへ。昨日になつても歸らねへから。親

○五種香　箱を首へかけ一年始廻りの御供に出るを云ふ。五種香賣る人の形に見立てしなるべし。和合人にも「やつぱり棧留の裃羽織で五種香供に成て」とあり。
○げほう　外法下駄、新和泉町平四郎方にて賣る、正徳度より名高し。
○留場　芝居の留場。見物の防ぎなり。
○あくせへ　齷齪の訛。
○車屋の大八　大八車より來る。
○蟹糞　赤ン坊の生後最初の糞。

○夜鍋　夜のべの義といふ。夜仕事をする事。

○踏込　入口。

○正月屋　服部普白氏は清元の鳥羽絵の文句にもあり、これをシヨウガチヤと唄ふ、守貞漫稿の汁粉賣の處に「夜賣のは三都ともに一椀十六文也、又三都ともに此賣を正月屋と異名す、行燈にも正月屋と書る者多し」といへり、京傳の廓の大帳（寛政元年版）に「さかい町をみましたか、瀧の屋と正月や」とあり、よつて伊原青々園氏に問ひて、「正月屋は坂田半五郎にて候、この時三代目かと存じ候、寛政元年度中村座へ門之助（瀧野屋）と共に出勤、佐野田沼と仕組みたる芝居に、淺間大膳印ち田沼をつとめ、相手の佐野は富士左近といふ假名にて、高麗藏がいたし居り候」といふ解答を得たり、半五郎の藝がむまいといふ意を移して、其屋號を汁粉屋に負はせたるなるべし。

○風鈴蕎麥　夜鷹蕎麥。

○とち食ふ　とち狂ふより轉じたるか。馬鹿食。

仁どのはわたしにばかり食てかゝる。わたしもどうも居たゝまらねへから。下駄屋のげほう様の所や。いかけ屋の鍋さん。花やの松さん。箔屋の金さん。留場へ出る傳坊が所まで探しあるいたが。友達はみんな内に居るのさあくせへ仕果て内に居るとの。ゆふべのろりと歸つた所が。内へは這入られねへから車屋の大八さん所へうせたのさうぬ一人で身じんまくでもする事かおめへ。いつでも私に尻をぬぐはせるだ　▲どこのもさうさ。此頃まで解糞の世話をしたものが。最う又金屎をたれかけるだ　●イヽエサ友が悪いからろくな所へは行やしねへ。いつでも附馬を曳連て。あたり近所の恰好も悪いに兎角外聞といふ事をしらねへだ　▲正月しまから馬だの牛だのと引連てとんだお性爺さまだ。眞菰に引包で送り火でたゝき出すが能のさ　●ほんにさ。打てもはたいても。糠に釘といふ奴だからやるせがねへ　▲それで内へ入なすつたか　●初〳〵しく騒動するも悪いから内へは入れたけれど。けふは平氣でそゝり節だ。間がありやアなまけちらして遊あるく。アノモウ家業をおろそかにして。なまける奴は一ばん癈り者さ。遊居てろくなとを仕出しやアしねへ。寄るも障るも錢を遣ふ算段ばかりで。友達めらが又ろくなものは一人もねへ。此中もあんまり夜遊に出るから異言したら。せうとなしに夜鍋をして居ると。ヤ寄たく〳〵。友達どもが集ッたときては踏込に下駄が重り合ッて足の立端がねへだ。サア夫からはや。指合構はずの女ばなしで。起て居られねへから。はづして寐たふりをしてゐたら。手〳〵に出しッこで奢かけるだ。大福餅から。ゆで鶏卵。お芋のお田。なんでも通るものを買うと云出して騒立るだ。御膳麥飯溫い。ソレ來たと買ふ。正月屋でござい。ソレ買へと呼ぶ。どこの國にかおめへ。按摩を六人まで呼込で。手〳〵に肩を揉せながら。風鈴蕎麥を惣仕舞にして。蕎麥屋に燗をさせてはとち食ふだ物を。

○片はづし

○部屋がた　町家より大名屋敷へ奉公に出る者。直接奉公にあらず、女中部屋に使はるゝ故、又者、部屋方と稱す。

○家守　地主より給金を貰ひて町役を勤むる者。

○おてんば物　土手の一番上をテンバと云ふ。土手の上といふことより飛上る、はね上るといふ意か。

有頂天になつて夜鍋仕事も手につくもんぢやアねへ。世間ぢやア餅を搗くの。煤を掃くのといふのに。其勘弁もなく。寒聲をつかふの。寒聲色を語るのと。毎晩年忘だ。あんまり年を忘れ過て大卅日の來るともしらねへのさ　▲いやはやこまつたもんだ。些と大屋さんでもお頼申て。異見して貰ふが能のさ　●そんなとにでもせざアなるめへ。ホンニ〳〵いつ苦勞が止む事か。子を持ば七十五度泣くといふが。あの野郎にかゝつては何百度か數がしれねへはな　▲息子だと思ふから悪い。郭公だと思つて居なせへ　●なぜ　▲八千八聲啼くといふから　●あの野良ぢやアねへ。こつちが泣くのだはな　▲そんなら。ふとゝぎすさ　●此をばさんは又はじまつた　▲●アハヽヽヽ　■おやしきから去年あたりおいとまをいたゞいた歟、但しは不斷でりやうがにでも下ッてる歟、二十四五のぼつこりもの、片はづしの髪の風も、にでなおやしきと見えて、人がらよくいきなかたちなり、おはしたのおはつは、いはねごしるき部屋がた風俗、おさなりのお娘御をさそひ合せて二人づれ留桶をひかへてべん〳〵との長湯　お初「あなたヱ　おさめ「なんだ　初「あの子おむすさんのお髪は。今日のはまとに恰好がよいぢやアございませんかねへ　おさめ「さうさホンニおむすさんのお髪はどなたがお結だヱ　おむす「これかヱ。是はあのウ。何でございますよ。おまへさんも御存の忠七ヲ　おさめ「ハイ　むす「あれは私のところの地面の※家守をいたしてをりますがヲ。其かみさんが結ましたよ　初「ヘヱ。なる程昨日からお手傳にお出ださうで。路次でお見かけ申ました。アノ奇麗なお女中でございませう　むす「ア、さやうさ　おさめ「まとにお上手だヲ根揃ひから何から極つたものだ　むす「ちつと髷が上つたぢやアございませんかヱ　おさめ「ナニサお人柄でまとに能うございますよ　初「ホンニまとに感心だヲヱ。私どもは百で調た米を一度にいたゞいても此眞似は出來ません　むす「ヲヤ廻りくどい事をお云ひだのう。百が米を一時に給てもとお云ひな　初「ヲヤおむすさん。いかな事てもヲホヽヽヽ。いゝそモウ感心なお子さんだねヱ　むす「私は名代の※おてん

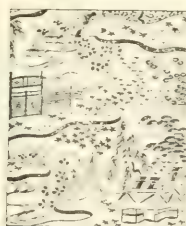
ばだ物を。ハイおちやつぴいとおてんばなネ。一人で脊負てをります。夫だから子。感心なおしやもじだよ　おさめ「ヲヤ〳〵おしやもじとは杓子の事でございますよネホヽヽヽヽ　むす「おさめさん。ほんにかへ。私は又おしやべりの事かと思ひました。鮓をすもじ。肴をさもじとお云ひだから。おしやべりもおしやもじでよいがネヱ　初「いかな事でもおまへさんネホヽヽヽ　おさめ「やがてお屋敷へお上りだとわかりますのさ　初「さやうさネヱ。おしつけ御奉公にお上り遊ばすと。夫こそ最う大和詞でお人柄におなり遊ばすだ。其時には私の旦那さまのやうに片はづしか。※勝山にお髪をおあげさせ遊ばして。さぞお美しからう。お規式の時にはお下髪で。お眉を遊して。地黒や地白や時々のお襠を召て　むす「お襠とはへ　初「お襠さ　むす「お屋敷では毎日うちかけを着ますかヱ　初「イヽヱ※出番と引番がござりますから。出番の時に不断も召すお屋敷がござります。又お規式の時ばかり召すのもござりますのさ。四月から九月迄は何方さまでも帯付でございますから。お襠はございません。みなお下帯でございます　むす「下帯とはお下髪の様なものかへ　初「イヽヱ。お下髪は五節句などのお規式でございますのさ。お年寄さま方は長かけと申て長をおかけ遊す。お傍さまがたは中をお掛遊すネ。お小性は童でございます。お眉をお付遊しても。さげ下地にお結遊ばすお屋敷もござりますのさ。ネヱあなた　おさめ「それは略したのさ。おむすさんのお聞の※下帯といふのはネ。心の厚く這入た　おむす「ア、しれました〳〵。蜻蛉が羽根をひろげたやうにしやつきりして。幅の狭い帯でございませう　初「あれも役者のいたすのはしやつきりして居るが。あのやうぢやアございません　おさめ「役者は狂言だから三月の節句などに下帯で出るけれどネ。眞は四月から九月までの間で袷と羅衣の時候に用るのさ。さうして。三月と十月は帯付が間白さ

○勝山

○出番と引番　御番繰といふことあり、二番の勤なり、一日出で二日休むを常とす。さなきは隔番即ち一日置きなり。出番とは出勤の日、引番は休みの日。

○長　長かもじの略。

○下帯　柳営にては提帯と書きてツヽオビといふ、提帯は並襴で幅二寸五分、長さ一丈、角のやうに両方へ突張つた所があります、突張つた所へは、板目紙を捲いて入れ、突張らない所へも、心に巻かすに、板目紙が這入つてゐるのです、詳しくは拙著御殿女中にあり。

○ちや屋つじ　模様の重りて十文字になるをツジといふ。

むすこ「間白とはヱ　おさめ「間白とは白綸子に紅絹裏をつけた衣裳さ　初「中白とは四方の味噌でございますよ　むすこ「アレ御覽。お初どんがあんなにお洒落だよ　初「お酒もじかヱヲホヽヽ　おさめ「ヲホヽヽヽ　おむす「そして三月のうちかけはヱ　おさめ「三月のかけは桃色さ　初「五月の御節句は綸子の惣模様でございますネ　おさめ「ア、綸子もあり。絽もあり。ちや屋つじもあるのさ　むすこ「ちややつじとはヱ　おさめ「さらしの惣模様さ。　むす「七月はヱ　おさめ「七夕も。やはり。ちや屋つじさ　初「縮は六月七月と。二月に限るやうでございますネ　おさめ「さうさ。縮の惣模様もあるが。大体はちや屋つじで間に合ふのさ。八朔が箔紋さ　むすこ「箔紋とは龍紋の様な物かネヱ　おさめ「イ、ヱ紋所や惣模様を摺箔でおいた物さ　初「縮緬は五月と八月でございますネヱ。そしてお玄猪から間赤になりましたネ　おさめ「さうさ。お玄猪はお正月のお規式のはじまりだと申すよの　初「ヘイさやうでございますとネヱ　むすこ「ヲヤ／＼むづかしいもんだネヱ。私のやうな。おてんばなぞんざい者は。御奉公が勤りさうもないねヱ　おさめ「ナニサそれでもけつかう勤りますのさ　初「おむさん。お脊中をお出し遊せ。お流し申ませう　むす「イ、ヱよろしうございます　おさめ「おむすさんお出しナ。流しておもらひ　初「サア／＼お出し遊ばせ　むすこ「ハイさやうならお出し遊しませう。ヲ、あつ　おさめ「ヲ、あぶないどうお仕だ　むすこ「此湯もじがあんまり熱もじだから。つい燒痕もじ　初「アレ又じやうだんをおつしやるよネホヽヽヽ　ト二人大わらひにわらふ　初「チツト水をうめませうか　むす「それはお憚もじだネ　おさめ「いかなや。おむさんの洒落には感心だネ　初「まとに／＼感心　おむす「私もまとにかん心　トこのうちおむすがせなかをながしゐる　おさめ「おむさんヤ　おむす「ハイ　おさめ「おまへ又今宵も私どもでお琴をおさらひナ　おむす「ハイおやかましくなくは　おさめ「おつしやるもんだネ

○山坐　山田檢校の事か。

むす「ほんにおまへさんもお彈なら參りませう　おさめ「夫は隨分ほんウとうウでございますよ　おさめ「アイほんとう迚ナニうそを申す物かヱ　初「チヤ嬉しいのう。今宵もお琴でございますかヱ。有がたうございますチヱ。おむすさんのお聲は無躾ながら。まとに〱感心なお聲でございますよ　むよ「ハイサさやうでございますよ。細くてお奇麗で。意氣で能く立て。なんのかのとお初どんおよしナ。能加減になぶつてお吳よウ　初「アレ勿体ない。何のつきにおなぶり申ませう。まとに〱。ほんとウチ、でございますよ。チヱあなた　おさめ「ア、夫は最うそつこではないのさ　むす「コウ〱お初どん。おまへのお好を當て見ませうか。お待よ。斯だによつて。ア、しれた〱。葉隱のめりやすだらうが　初「ハイさやうでございます。私はモウ〱〱〱。あれほど好たものはございません　おさめ「葉がくれは誰でも好た哥さ「ひと夜〱の仇枕。ほんにしみ〴〵憂やつらや。といふ所はまとに能のう　初「ア、モウおつしやいますな。あすこの所を承ると骸が解るやうに成ますよ。噂におつしやり出してもぞつといたしますはな　むす「お初どんは葉隱で氣違になりさうだよ。私が晩に唄ひませう　初「ハア有がたう　おさめ「山坐さんのお唄ひなさる所を初に聽せたいのう。ホンニまあどうしてあのやうな聲が出るか「おさめさん今宵はチ。斯さらひませう　おさめ「アイ　むす「まづ櫻狩さ　おさめ「アイ江の島チ　初「江の島〱。ア、有がたいチヱ。江の島はありがたいチヱ。江の島　むす「アレお初どんは弁天さまでも拜むやうだよ　初「それでもおまへさん。江の島はおもしろうございます物を。　おさめ「おむさんそしてチ。長恨哥も能はな　むす「ハイさらひませう。そんならさくらがり。江の嶋。長恨哥。とそれから住よし「それから那須野　むす「さやう〱。まアさう極て置ませう　初「チ、嬉しい〱。

○きさごの道中双六　鈴木南陵氏云勝負の數取に金砂子を用ゆ、一番上りは幾つ、二番上りは幾つと定め、金砂子多く取りたるに賞品を貰ふ。

○絶句　文句の間へること。

○ばりついた　優秀だ。

サアく\今宵は大だのしみく\。お店の衆ときさごの道中双六を致さうか。あなたと哥骨牌に致さうかと存たがお琴では何もいらず。まとにく\お琴なら最う　むす一チヤく\お初どんなんでございますナ。お琴といふものは手。笊をつるしてお琴煮。チヤおとにぢやアねへ従弟煮を。初「チツトく\云はれずは春永におつしやいまし　▲これは三十ぐらゐの婦人、義太夫のけいこ所の女房とおぼしく、勿論義太夫でおまんまをたべたる娘なりしが、今は太夫の妻となり、女の子のけいこは此かみさんのうけ取と見えたり、生国は御當地なれど、浄るりの口ぐせと、亭主のかみがた詞にかぶれ一、言語は大坂なまり、かはのうつくしいに似合ぬ、のどのふとさと、ゐらいどす聲は、かんばんにいつわりなし、ふとざをの一の糸もて、紐につけたる、ぬかぶくろを口にくはへて、かけざをからゆかたをはづして、ひらりと身にまとひながら十六七のむすめの子に向ひ　●小弦さん。おまへ今お出たか　▲チヤ住吉さんか。今さ　●おまへ所へ。煮売の天神は見えるかな　▲誰だの　●ソレなまりの天神のトグリおやはいな　▲ウ、ム、から、潜人がことか　●茶飯さんよ　▲さうさ。おめへの方ぢやア煮売の天神といふか。わつちの方ぢやアの。茶飯さんも生姜の癖に金びらなからをいふし。浄瑠璃ぢやア。なまる癖に味噌を揚るから。両方合せて。からら潜人といふはな。しかも三糸さんが諢名の號親さ　●ゐらいく\。煮売は花柄の天神と聞えるが。からゝ潜人はあらゝ仙人と聞えるナ。むごく太郎四郎にされるはい。可哀さうに　太郎四郎とはたはけの事　▲其筈さ。なまるに絶句するに。本が有ても讀ねへから無本同然。あれで床本を大騒に書せて持居るがをかしい　●其癖本持ちや。死んだ市右ヱ門はいふに及ず。あの人の若い時分ばりついた本書に。鍋喜といふが有たけな。我等とは時代違ぢやからしらん事ぢやがナ。　わしとはそか、こちらとはこかいふべきを、わたしらなどの詞まじるは江戸者の京談まじり、此外氣をつけてよみ給ふべし、江戸詞のおさとのしれる事あり　○鍋喜とは大坂下りの床本筆者之、江戸六くだり或ひは太夫ゆか本あまたをうつせり、正本にては本町そだちをはじめとして、あの時代の江戸淨るりにあまたあり、常の淨るり本の書体にかはり近松時代の書法に摸て一流なり、此鍋喜は章をさすとの名人神田紺屋町に住せしが天明中に没す、○市右ヱ門一流の上手之江戸六くだりは書ず、太夫のゆか本あまたをうつせり、正本は納大刀磨鑑を書たるのみ、中橋に住せしが寛政中没す、ゆか本近年の能筆なりし、そのゝちさまく\のゆか本書出たれども鍋喜市右ヱ門の右に出るものすくなし、○卯兵衛といふ人本町新道にありて太夫のゆか本をうつせしが、今はいかゞなりしやしら

ず　○龜喜市右ェ門卯兵衛おの／＼浪華の産なりし、因にいふ江戸板の九行并二六行の筆者多き中に中古の名人は古人金三なり、これにならびて小十郎、ふきや町に住す此人うまれつき綿密なるゆゑ文句ふし付とも一点をあやまつ事なし、その後浅くさかや町に住める直七といふ人あり、これは古人金三の筆法に拠ものと見えたり、おの／＼江戸本の六くだり并二七くだり、正本をうつすのみにて太夫のゆかな本を書くにあらず、なしいかな小十郎直七筆を廃してよりこのかた江戸六くだりの筆法并にふしづけの法をしるもの當時見る所になし、　それから後に吉兵衛どんかそないな人に。倚てこつて書せた本が。なんぼも有げな。アノをだまきはどうぢや。ハ、ハ、

▲あの苧環のいとめが切れくさつて　ト なまりのくちまね　●ハ、ハ、凧のやうにいふ内が能ぢやないか。凧とは にす○か○いかのぼりといふが上ミ方の詞なり　これら皆江戸者の生をあらはす所なり　▲茶飯さんに用があるかヱ　●ハ 返詞之　まだまア長い事ちやがナ。廿日頃に初會と翠簾開と。ごつちやにして。立會を致ますから。お頼申ます。トソシテあのナ。お宿を御遠慮申てわざとおしらせ申ませんさかい。よろしうお頼申ますと。此様に云ふてお呉れ　▲アイ／＼さう云ませう。何を出しなさる　●されば そこぢやて。連中が多いさかいに。一晩でも余る。マどないにしても三夜さ掛らんならんさかい。内でもほつとしてゐるはいな　▲なるほど夫ぢやア割るものがねへのう。稽古の入らねへ物にして。足らずめへには見取にするといふ物か。世話物でも跡へ付るか。二ツの内だの　●それいな。立會も稽古のかゝらん物といふたら。忠臣藏。ひらがな。菅原。千本。まア此様な物かい　▲どうも珍しくない子　●さいな。夫ぢやによつてこまるはいな　● ト上へ来る　▲ハイさやうなら　●おゆるりと　ト わかるゝ、折から時の鐘と共に

申剋自鳴鐘

男出来りて風呂のせんをぬく「コレ／＼三助どん。最う些と待なナ。邪見な人だのう　三助「わたしは斯して置たいが。松の内早仕舞といふお定りだから。しかたがございやせん。そりやぬけます「ヲ、情ねへのう。おれが斯だらうとおもつて氣がせいたけれど。禮者が永尻でヤット今來ました。せめて二度這入と能に。タツタ一遍「チヤ／＼それはお寒からう。私は仕合せと。浮世風呂もこれで三編。板元の金設。又ずつしりとぬけました。最

○翠簾開　石割松太郎氏云浄るりを語る背後の翠簾を初めて揚へたる披露の意。

○立會　大序から終りまで續けずとも、或程度まで筋を通した出し物で會をする事をいふ、是も石割氏の説なり。

こちのもほつとしこたざい　ふべきを内でもといふたゞひ江戸者のなま京談笑ふに縋たり

○見取　見せ場のある處のみを演ずる、見取狂言といふものあり。受のいゝところをやるならん。

○ずつしりとぬけました　儲かりしこと。

うぬきましたと番頭が。挨拶をする門口から。

●御慶申入まする。「忝いと名札をみれば。

年頭佳儀　本町二丁目延壽丹　式亭三馬

浮世風呂三編巻之下大尾

ぐつと捻て俗物なる跋

※「いつまでぐさのいつまでも」くだらぬ趣向の毫とりて。又三編はこじつけるとも看官の興はあらじ。と否む詞もきかばこそ。是非にと頼む發客に「なまなかまみえ物おもふ」。されども例の懶墮にて去年も竟に間に合ず。孰れことしの發市にと附に從たる居催促。「たとひせかれてほどふるとても」出來ぬ作なら詮方も。亡弟には繫りし「えんと」思へば外ならぬ此石渡が新板物。骨折甲斐のあれかしと。計る「じせつの」流行も。人氣に遇ば評判の猶彌增る「するをまつ」。しかはあれども博物の他の作者に引かへて。在下が拙作は「なんとせう」。繪師と作者と板元と「たがひの心うちとけて」仕立あげたる小冊の。「うはべはとかぬ」封めも。速く封切見たしとて。需る人の山なさば。其御贔屓の御蔭にて。京阪までも爲登荷の櫃に書遣る

○いつまでぐさ……メリヤスの文句。

五大力。さはさりながら前編にかはるいろなきおんふぜい。やがてあほぞへつちつまも。亦面白く四篇目に。残の條をかたろぞへ。書たい事の數〳〵に言れぬ穿ときまぜてをしき筆とめけると。としかいふ。

文化八年辛未五月八日。浮世風呂三編の稿を脱して淺湯に浴する刻。風爐の中の鼻唄を聴て一篇の狂文成る。仍て此書の跋に換るものなり。

たらり樓のあるじ　三馬しるす

門人　徳亭三孝書

諢話浮世風呂四編

浮世風呂四編白序

秋風起て白雲飛び。債券披て心先躍る盆前の閾を。ほと／＼とおとづるゝ者あり。誰曾也と見れば債主ならで。催促は彼に斉しき發客の主管なり。稿本たび／＼虐れど紺屋の明後日。作者の明晩。久しい分說と合點して。春と暮。夏と過。穐は來れども在官に未だ倦は來ぬ浮世風呂。初編の鏤版烏有となりて。製本最世に絕たり。嗣で二編三編あれども各女中湯の趣向なれば。男湯を人皆俟り。今宵け是非にと責懲られ。明朝迄との佗言さへ爲方案にむかひ酒。一杯機嫌に筆を採て。序とか何とかいふ物を態とばかりお祝まうし。這で好かと與たれば。主管忽ち莞爾となり。唯／＼として去りぬ。

式亭三馬戲題

浮世風呂四編自序
秋風起て白雲飛び。債券披て心
先躍る盆前の閾をおとづるゝ
者あり。誰曾也と見れば債
主ならで。催促は彼に斉しき發客
の主管なり。稿本たび／＼虐れど
紺屋の明後日。作者の明晩久しい

○秋風起て白雲飛び　漢武帝「秋風辭」に「秋風起兮白雲飛。草木黃落兮雁南歸」とあり。

○債券披て云々　昔は年二季勘定にて、盆前に種々なる掛取來るを以てなり。

○紺屋の明後日　諺。期限を誤ること常なるを云ふ。

○穐は來れども云々　秋の來ると、倦の來るとをかけて云へり。

○初編の鏤版烏有となりて　此事「式亭雜記」に見えたり。

○爲方案　爲ん方盡くにツクエをかけたり。

諢話浮世風呂第四編　巻之上

江戸戯作者　式亭三馬戯編

男湯再編

秋の時候

※秋來ぬと目にはさやかに見えねども。燈籠やく\とこ賣る聲に。おどろかれぬる盆前の怔忡も、※親の心子しらずとてお閻魔さまの日をたのしむ。娘子共の一群。これも浮世賦風呂屋の門に立ならぶを見るに。上を十にかかりより六ツぐらゐまでの小児をさきだちにならべ、十二三才より十四五歳の娘はそのつぎにならび、そのあとにだん\/いふものゝ、子もりいかな臈、十五六より十七八才まで、たゞ六人ならび、お乳母どのゝ軍勢に賴み、前後に備を配り、隊伍だん\/とくり出すは、江戸流の盆踊　他國の御見物にまうす　江戸は他國の盆をどりのごとく、對のゆかた音頭とりたるもあり、をどる事たえてなし、只ぼんうたといふものをうたひて、一円だんにならびてゆくのみ、▲こおしやべり「おてんば」「おちやつぴい」と、名うての子もり大ぜいの子どもにさしづして、いろ\/とせわをやく　おては「コウ\/お雪さん。おまへは脊が高いから先駆ちやア見つともねへ。中央にお並び。テヤ\/お霜さん。なんだヱ。おまへはそこぢやアないはな。お曉さんとお朝さんと手をお引かれ。アレサ。無器用なお子だ。そこぢやアねへといふにさ　おとな「コウおてばどん。あんまりひどくいふと。あのお子さんはお泣なさるよ　おては「夫だつても世話がやけてならねへから。じれつてへはな　おとな「さう云なさんな。まだ年のいかねへお子だから　トいひながらお霜が手をとりて　サア\/爰へお這入。おまへさんがた諠嘩をお爲でないよ。皆さんが中をよく手\/をひかれてお並びよ　おては「チイ\/八百屋のお大根さん。長しくしなナ。何をぐぢ\/いふのだ。是ほどの子どもの中でおめへ計だ。意地悪根性め　おでこ「なんだ此お

○秋來ぬと目にはさやかに云々　「古今集」藤原敏行の歌「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」

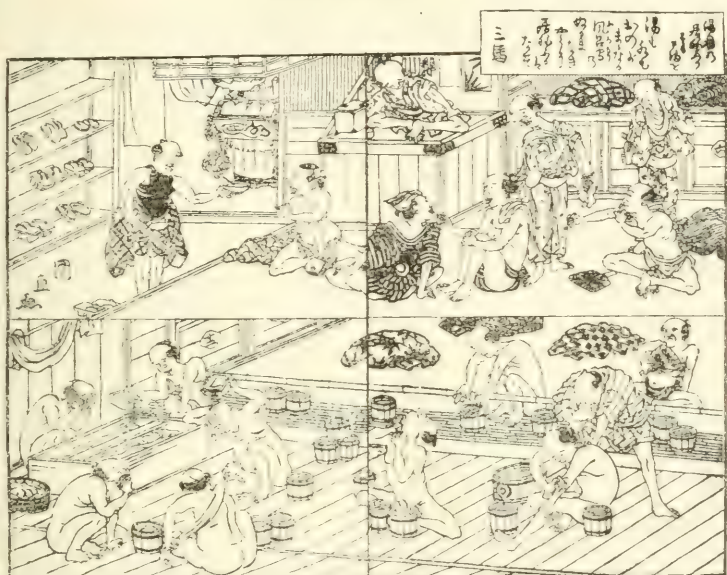
○親の心子しらず　親は盆の節季前に苦しむを子は知らぬなり。

てばの世話やき婆め。うぬが世話になるものか。鍛冶のお鉄さんは脂掌だから手ひかれてもねばくするは。夫だからおいらアおすべさんと手ひかれようといふのだ。夫が悪いか。悪かアうぬどうともして見たがいゝ。目腐女め　おてば「アレ見な。竈屋の御乳母どん。あの小娘の口を聴なナ。　うば「あきれた物だよのう。流行のおてばどんも閉口だの　おてば「何閉口するもんか。あの小娘はしんどきにするがいゝ　おでこ「ヱ、しんどきになんなら爲て見や。小娘ちす　さまじい。うぬは何だ。子守ぢやアねへか。おいらア是でも八百屋のお孃さんだよ。ヘン此と逢ひやす　おこば「なんだ。此涕垂しめ。　おでこ「涕垂もすさまじい。目腐の兀頭め　おこば「兀頭も氣が強い　おでこ「氣がつゑへもすさまじい　おてば「すさまじいも氣が强へ「コレサ〳〵おてばどん。マア默止なよ。　ト中にもおとなしき娘二三人ふたりが中をおしわけ　お大根さんも他のいふ事をお聽。其樣に情をお張でない。おてばどんも。あのお子は云出した事を引なさんねへか

○御免な菜箸　御免なさいましの洒落。

○番頭聽たか櫻丸　「何と聽たか櫻丸」車引の梅王の言葉。

ら不肖しな　ト兩方しづめる中へ十二ばかりの小むすめ、ひつつめに結ふたるうしろのおくれ毛が邪魔になるゆゑ、手ぬぐひをすつぽり卷て、鉢まきのやうにひたひでむすび、一人つるてんの古ゆかたも余程着つたと見えて、肩縫上をおろした跡が眞新しくわかり、襟かたから頸いおかん汁のかゝつた古跡ばつかり、前縫上の縫目に、お飯粒が二粒ばかり、干飯になりてこびついているかたち、脊中に負つたお坊さんは、首をがつくり橫にまげて、たはひもなく寐入たるを、腰帶で背に結付られ、五疳驚風貪着なし、飛だりはねたりの元氣者、此むれには一まいのごうけ役とおぼしく、いざこざのなかへ踊こむ、　おむく「ハイ／＼眞平／＼。御免な菜箸火吹竹。灰ならしも御座候ツ。先刻から承りましたが。おまへさんの御無利も御最。又おまへさんの御無利も御尤。ハテ御尤でございますから。今日はお仲をお直りなさいまし。結構なお天氣でございます。どなたさまもお揃ひ遊ばちばちまちて。御機嫌ようお出遊ばちばち　ト地上にべつたりと座し、ご奇妙な顏をしながら　矢はへんへこほんほこちやア。茶はへんぺこほんほこ矢。　ト手拍子をはやめてしそこなふゆゑこれにて一同に大わらひとなり和睦してみな／＼並ぶ　▲あさだちの小むすめ「サア／＼。皆さんよくお並びよ　ぼんうた「踊子はならべ。をチどり子はならべ。アレサ私ばかりおちやアいや。おまへがたはなぜお謳でない「サア／＼お謳／＼　ウタ「長い長い。兩國ばしや長い。おチ馬でやろか。おチ駕籠でやろか。おチ馬も否よ。おチ駕籠もいやよ。十引六七に手をチひイかアれエ。手をチひイかアれ「アレサ。もつと大きな聲をお爲な　あさだちウタ「先アきイだちイしゆうは　おチ聲が低い　さきだちウタ「大ぜい一同に大くちをあき　さアきイだちイしゆうは。おチこチゑがひくい　あさだちウタ「最う。ちと。高く。たアのウみイまアせう。たアのウみイまアせう。たアのウみイまア、しよ　さきだちウタ「もチチ、ゝちと。高く。たアのウみイまアせう。たアのウみイまアせう。たアのウみイまア、しよ　おうた「アレ／＼向ふから男の子が盆／＼をして來たよ　おこは「皆がきつウく手を引合て徃な。構ふ事アねへ。たゝきのめしてやらう　おうた「アレサこはい事はないからお迯でない。此方が迯るから惡いはな　ト大ぜいうたひつれてゆく、あとは野分せしあしたのごとし浮世風呂男湯の格子に上りて涼み居たる男、此ぼんをどりのありさまをつく／＼見て　甘次「番頭聽たか。今の盆／＼を　むだ助「※番頭聽たか櫻丸ぢやアねへか　甘「ひさしいもん

だ　ばんさう「さやうさ。女の子といふものは騒〳〵しい者でございます子。ソシテ江戸ぢやア踊ませんね。私どもの國では盆踊は大悤さ　甘「越後か　むだ「越後は盆踊の名代な所だ　甘「イヽエサ。江戸もむかしは踊たさうなが。繁花の地は流行が速いによつて。そこで後〳〵は踊らぬ様になつたものさ　ばんさう「なぜまた盆〳〵と云ます子　甘「あれは唱哥によつて盆〳〵と云來つたのさ　むだ「ばんとうしらずか。盆〳〵はけふ翌ばかり。あしたは嫁のしほれ草。といふ唄がある　ばんさう「なるほど　甘「おそらくはあの哥が盆唄の始だらうテ。夫をいろ〳〵に和したものであらう　むだ「それもいゝけれど。今うたふ盆唄といふものは悪態を衝くのだ子　甘「あれは情なき事さ。所謂田婢野娘の乳母子守等のたぐひが。出放題の文句を作るに仍て。あのやうに鄙くなるぢやテ　ばんさう「一体まづ女の子には。やさがたな事を教たいものでございます　むだ「しかし。成人しておしやらくをするやうになれば。自然とを

○堺町兩國邊　堺町は芝居町、兩國は見世物多く、三味線太皷の音に慣れたり。
○付目　博奕言葉。丁ならば丁、半ならば半を見當にして、いつも張るを付目といふ。
○本町に吐虛誕云々　當話。後に滑稽問答と云ふ。「一枚でもせんべいとは是如何」の類。
○おあんなんし　「おやんなさんし」か。乞食の言葉、それを諢名に呼びし女乞食あり。
○きん／＼　「金々先生榮華夢」の「きん／＼」に同じ。立派にして步く事。流行語。
○臍だツ　肝心かなめ。
○たひら一面　幅廣く、行渡つた。
○こうとう　意氣でこうとで人柄でと唄にうたへり、派手ならず奥ゆかしきさま。

となしくなるから邪魔にもならねへス　其「まづそんなものではあるが。ねがはくは幼少な時分から躾が大切さナ。其証據には。※堺町兩國邊に育ツ小兒は。鳴物の音におびえず。寺地近所の者は。葬禮の強飯を※付目にして。貰つて食ふはス。是等は自然と馴るのぢや。そこで孟子のお袋さまは。三たび轉居をさしつたとある。成程御尤なとさ子　むだ助「イヱさうもいへやせん。其証據にはス。※本町に吐虛誕もあれば。深川に淺い川もあり。是如何　其「コレサ／＼足下のやうに。さう意地わるく出られては。どうもかなはぬ　むだ「足下でも反歯でもいゝが。はゞかりながらおめへの了簡は狹い。ハヽテサ。今の女の子の中にも。※おあんなんしになる女もあれば。絹布にくるまつて。一寸出るにも定乘物で。※きん／＼になるもあらうス。されば云て盆唄の惡態がついてまはるもんでもなし。こりやア面／＼の性質さ。盛場の小兒だとて。鳴物におびえぬもあれば。おびえる子もあらうシ。寺地の者だとて。葬禮の强飯を食ふものもあらうシ。又食ふと限る事もねへ子　其「ハテさて。さうではないが。そこには聽所がある　むだ「爰一ばん聽所だいツ。おめへの了簡は※臍だツ。ハヽヽヽ。上戶は酒を飮むものだ。下戶は餅を食ふに限るとおもふのは。チト來つた代物だ子。おめへのやうに義利を堅く覺ちやア。今時は往ねへ。ハテ潮煮で飯を食ふ下戶と。唐茄子のあべ川を食ふ上戶は。※たひら一面の押物だ。眞田の腰帶は男がしめて羽織をはさむシ。晒の手巾は女中衆がかぶつて野遊に出る。厚ぼつてへ綿頭巾は。血氣盛の壯夫が。襟へ卷たり天窓を包だりする。さうかとおもへば。娵には※こうとうな形をさせて。押返されねへざまをする姑もあり　其「サア／＼そこだテ。それが此方のトント心に落ぬ所ぢや　むだ助「ハテサそれが了簡が小さい。昔から今まで流行といふものは。瞬をする間に後れるから。またいろ／＼になるはな　其「それは古今變

化の利で。今は昔に皈り。昔は今に變り。古往今來風俗の移る事は。桑田碧海ぢやが。其中にも　むだ「イヽ、ヱサ打遣て置くがいゝ。世話にもならねへとだ。世の中の放蕩ものが。親や親類の異見する間はきかねへ。ソコデ。己の氣から止つた時には大盤石となるぜ。其利屈は万事に通じる。ハテ拙い譬諭だ。惣体の事が一旦はかぶれるけれど。善惡は三歳兒にもわかるものだから。是は惡いとおもふ事は。ながく續かねへはな　甘「しからば色と酒で家國を傾け。角家敷を亡す筈はないか。和漢古今ともに。貴賤をいはずしてあまたあるはどうぢや　むだ「そりやア。うぬが氣で了簡のつかぬ者に逢ちやアしかたがねへ。早く云へば馬鹿者だから。是は論の外さ。チット馬鹿者といへば。アレ〱。向側を通る日傘を見なせへ　甘「ドレ〱。ハ、ア。夫婦とおぼしき者。相合傘で。しかも欣々然として通る　むだ「何だらうテ。男は凡中位の好男だが。頭へ青黛を泥つてチト否身たつぷりの拵へ。ソシテ女は。いづれあやしき者の果と見えるが。高慢な面をして相合傘は出來さねへテ。よつぽど鐵面皮やつらだ。人を人ともおもはぬ擧動だ　甘「かゝア自慢の膏肓に入た奴ぢや　むだ「女房膏肓の次第を御覽じろかツ。あれもあの女に入れ上て。漸々内へ引込の。晝も箪笥の環が鳴るといふ世界さ。しかし此道行はあまり氣恥しいテ。額の汗を下手に拭と。色男の面が藍隈になる　甘「しかし。土地の風俗といふものがあつて。あれも京都などで見ると見苦くないテ。すべて京の町は女と相合傘はおろか。娼婦哥妓などを引連て。手をひき合てあるくが。一向目だゝぬ。江戸で見たがいゝ。夫こそ口〱に毒づいて大忽だが。上方は人氣の和い所爲か。トント穩便さ。江戸ででんぼう。上方で。もうろくなどゝいふあばづれがあれど。夫さへも馴事になつ居る所爲か。更にかまはぬ　むだ「己〱の好〱だから他嫉はいらねへ事だテ。先誰でも

○青黛　月代を青くする爲に塗る。
○女房膏肓　「病膏肓に入る」と云ふ。前に「かゝア自慢の膏肓に入た奴」とあるを承けて、女房孝行に云ひかけしもの。
○晝も箪笥の云々　川柳「その高座晝も箪笥の環が鳴り」
○でんぼう　人の惡い奴のこと。
○もうろく　仕事師の事を「火方叢禄」といふ。江戸の傳法に同じ。
○あばづれ　アバレ摺レなり。

○薬の引札を云々　廣告團扇の古き所ならん。

○さるぼう　片手桶。

○よび出し　今の上り湯に相當するもの。四角な木より細き竹出づ。

口を出したがるテ　トいふ所へ風呂からあがつてくる男、大のひやうきんものとおぼしくヲ、あついくといひながら、近年の流行にて、妙薬の能書を兩面に張たる反古團をとりて、披露の薬名をよみながら　とび八「ヤどうだむだ公。大分早く來たの。イヤ甘次さん。しばらくお目にぶらさがらねへの。コウ見ねへ如在ねへ事をするぜ。※薬の引札を團扇へ張て。湯屋へ配るなどとは。五分も透ねへよノウ。番公どうだ。居眠りか。久しいものよ。番公の居ねむいはまだいゝが。湯汲の居睡るのがおそれるぜ。今時分はいゝけれど。冬。寒くてがたく震ふなもかまはず。小さな椅杓で。だらりくと汲やつさ。あんまり心いきがねへ　むだ「そのくせ夏は※さるぼうをつけて隙間に汲せる　甘「その筈さ。冬は湯が涌ぬ。夏は捨て置ても湧上るはさ　ばんとう「※よび出しの湯を。さつさと汲出されると。湯の涌く間がねへから。最至極だけれど。他はさう思ひませぬ　むだ「よび出しとは△の片小鬢に書てあるやつだの　甘「細見ぢやアあるめへし　とび「アノ淨湯をくむ升形の所を呼出しといふはな。湯汲の若者のことを。上り番と云て。大

○ほまち　帆待の意。船ぎれの際、次の船の入る間は、品物の値高くなる故、それだけ儲るより出づ。

○鐵炮　譃の事。空鐵炮ともいふ。

○大筒　鐵炮の大なるもの、卽ち法螺の大なるもの。

○お人柄　人品のよき。

○お先もの　戰の場合先鋒に進ませらるゝ者。御先に使はれるなど云ふ。

○八寸角　材木の大なるもの。

○中人　仲裁人の意。これを上中下の中に轉じて「おいらが樣な上人」と洒落しなり。

概何所の湯やでも。あがり番と焚番は毎日代り合ふ　むだ「がうせへにくはしいもんだの　とび「そりやア違ふはな。素灰と消炭を俵にしてうるは。おかみさんのほまちになる。糠の油を取て浸淫瘡のくすりにするシ。挟斬だ爪が喉痺の薬になるといふ事まで御存だはス　むだ「おそろしい。シタがおめへは虚誕の問屋だから的にならねへ　とび「コウ。よろしく申てくんな。大誓文。是ばかりは正直だ　甘「イヤ〱飛八ざんの話はいつも鐵炮だテ　むだ「しかしおかしくていゝテ　トいふ所へいさみはだの男入來る、これも名うてのうそばなしをする人にて、あだ名を鐵炮作と云ふ人、甘「イヤア噂をすれば影とやらだ。鐵炮先生御光來　作「なんだ。他の事を鐵炮だの何のと　むだ「鐵炮とは飛八が事。作公は大筒だ　とび「おきやアがれ　作「とんだ所へ浮膽がかゝるもんだぜ　ばんとう「作さん。きのふのいさくさはどうなりました　作「済だ〱　とび「なんだ〱　作「諠嘩よ　むだ「誰だぬしか　作「おれがけんかなんぞをするもんか。其樣のおやアねへ。お人柄だ　むだ「これもまづお鐵炮の内だス　とび「コウどういふ利屈だ　むだ「こゝの湯屋でか　作「ナアニ。爰ぢやアねへがナ。湯屋の諠嘩同然ス。猿田長屋の彦ナ。　むだ「ム、　作「あれと鼬岩よ　むだ「其筈だア。猿田の彦がお先ものに。鼬岩がはしッこいと來て居るから。どつちもむづかかしい　作「どいつも勇だア。鼬岩が八寸角をふり上て。此賊めといひながら彦が胻骨を。ほきイりと扑折くと。足が二本ぶらに爲たッけが。其足で溝端に在た四十貫目ほどの礫を打付たが。岩が脳天へ。ほかアんと中ッてっ頭が眞二ツ　むだ「コウ〱〱大筒〱。能加減に譃をつきな。虫の毒だ　作「なぜ　むだ「鼬岩には今朝逢たが。頭は割やアしねへ　作「ナニサ。あれほど割たものを。おらアしかも中人だア　むだ「中人の目には割たと見えるかしらねへが。おいらが樣な上人の目にはさつぱり無疵　甘「そしてサ。四十貫目といふ礫が何所にあらうぞ　作「ハテさう話さねへぢやア威

○けちりん　ほんの僅の意。

○長代さん　正しくは町代。名主に使はれる者にて、自身番に詰め居る物書き。

○万一云々　めつたに頼まぬ所へ、珍しからぬ喧嘩を持行くでもなしの意。

○遣た樣ぢやアねへ　骨を折つてやつた樣ぢやアねへ。江戸ッ子一流の略語。

○病犬　狂犬。

勢がねへ。そりやア夫にもして置うだ。夫から。岩の野郎が。やつきとして。扑き合たが。彦と取組で。彦が鼻を。岩めヱ。食搔たぜ　彦「何。猿田彦が鼻を。韋駄岩が食搔た　作「ム、　彦「コウ作公。あんまりだぜ〳〵。主が譃をつくと。おれが外聞にかゝはらアナ　作「よく此徒は譃だといふぜヱ。おれが濟すましを付たから。けちりんも間違はねへ。其跡を聴つし。ハテ斯云ちやア何だけれどナ。ひとつ鍋の物を食合ふ者だから。兩方で了簡すりやア。有や無やに行うといふもんだス。そこでおれが貰てナ。兩方から誤証文を出させてス。よしか。ソレ。和睦の濟だ上には。盃の跡で証文はおれが貰つて。目下で引裂て終うと云ふ利屈だから。ソレわかりきつ居やうぢやアねへか。双方にも引からんだ綾はねへから。すつぱり極つたといふ所で。証文の一段よ。いつもなら長代さんに頼うといふ所だが。珍しくもねへ諠嘩を。万一に持行でもねへから。おれが助言して。勝べいに書せたア　むだ「そいつは強氣だの　作「そこはソレ馴居るもんだから。遣た樣ぢやアねへス。ナアソレ。誤證文之事一ス。彦「ム、　作「我等事酒にたべよひ候上。口論を申かけス。そこは能がナ。おらア夫。そこもと樣と爲べい云つたら。勝がいふには。貴殿が能といふのよ。貴殿と云ッちやア二本佩やうで酒落臭から。そこが塩梅物だと。いろ〳〵に首を捻つたが。しかたがねへから。やつぱり貴殿ス。能かナア　甘「能とも　彦「貴殿ぢやア此方等めかねへが。爲方がねへ　作「ソコデ。貴殿御大切の御鼻たべ候段。一言之申譯御座なく候。（みな〳〵大わらひになる）作「ナゼおかしい　甘「ハテサ鼻を食搔たぢやアねへか　作「何さ。さう云ねへきやア威勢が悪いからよ。些ばかり食付たのだ　むだ「病犬のやうな諠嘩だナ　むだ「そんなら又。貴殿御大切の御鼻。少々食付候段とすればいゝ　作「馬鹿ア云な。文言の人柄が悪くなる。ソコデたべ候ス　むだ「夫ぢやア鼻を食てしまつた

やうに聴える　佐「ハテ。どうせ蹤は引裂く物だア。主達の様に云ちやアはじまらねへ　なだ「それで濟だか　佐「濟ねへでさ。そこは江戸ッ子だア　達「江戸ッ子もすさまじい。此唐人め、又ヅドンとやらかすナ。ト[illegible]　佐「彦か。ヱ、。悪い時來たナア　彦「おれが何時鼻を食付れた。此嘘ッつきめ　ばんとう「わたしも。きのふのけんかは對人を知居りますか。作さんが話出したから據なく。まじめで受居ました　みな〳〵「よく嘘をつく男だ。アハ、、、、　皆〳〵大笑ひ　其「しかし嘘がなくて能謡さ。アハ、、、。ハイどなたもおゆるり　ト甘次はゆかたをかへて立出る　道「おれが門口で小便しながら立聴をしてゐた。縁宜でもねへとを製るぜコウ作。髪結床へ行か　佐「ム、　道「一緒に行べい　佐「さう云ても贅公はよく結ぜ　彦「腕節が違はア　佐「たばねを結ふ中にも。あの仕手の利た者は雙ねへ。ト[illegible]　作「ざつと一風呂這入べい　彦「おらア。淦湯ウ浴るばかりだ　なだ「夏の内は行水が能ぜ　作「最う秋だ　なだ「秋でもまだ暑い　こんだ「それだから暑い中は這入人が少へ　彦「これからの湯も人が出て來る　佐「チットすべるぜヱ　彦「こつこいな　ト唐人風呂へ入る　なだ「鬢が話で思ひ出した　おいらも床へ行う。アイそんなら　ト出て行、此浮世風呂の隣に、浮世床といふ髪結床あり、此かみゆひ床のはなし、別に髪結新道浮世床と名づけ、[illegible]二編に遣さ打つゞき著述いたし候、[illegible]以上　○鬼角はかいしおぼしき坊主人[illegible]り來　鬼角「番頭まだ暑いの　ばんとう「ハイお出なさりまし　鬼角「ヤ飛八ぱさんか。暑のお障もなくて　とべ「これは先生さん久しくお見かけ申ません。又何國ぞお出なさいましたか　鬼「アイサ。越後の方へ行て。去年の暮から丁ど一年居ました　とべ「とんだ夕ぎりでござへますテ。雪におこまりなすつたらう　鬼「イヤハヤ。越路の雪ばかりは思つたよりも深いことさ　とび「爰に居る番頭も越後者だから。めつたな事は云れませんが。あれも所によつては。魚が澤山で直が安し。女が美しくて恰好といふもんでござへますか

○はじまらねへ　仕方が無い。

○唐人　罵語、わからぬ奴といふ意。

○腕節　技倆。

○たばね　髪を結ふこと。

○鬼角　其角のもぢりなるべし。

○とんだ夕ぎり　「夕霧阿波鳴渡」に「去年の暮から丸一年、二年越に」云々といふ夕霧の言葉あり。「去年の暮から丁度一年居ました」と云へるに對す。

○恰好　安直。

○一ッ話　代りの無い話。無類の話の意か。

ら。江戸から行てもふ自由はなし。其代には江戸へ金を持て歸るとは出來ません。あれば有限つかふといふ所さチ　鬼「金にもなるが金もつかひこむ所さ。おめへも往なすつたか　さび「參りましたとも。越後はズット下越後の方まで廻りました。イヤもし。私が一ッ話だが。おまへさん方も其樣なめにお逢なすつたかしらぬが。越後の雪ときたら大惣さチ　鬼「雪の名所だから尤ではある　トいひながらあひてにならずよこへ行く、　さび「番頭が證人。たつた今ござつた先生さんも御存だが。おれが雪の話をして聽せよう。直兵衛さん聞なせへ　そばにすゞみたかの大鋏で足のつめをとりてゐたる男　直兵衛「ハテチ　トまじめにうけてゐる　猿田の塗いをかい湯をつかひゐたりしが、さび八の方へ向ひて、にごり二ぶしいうごをのばして鐵炮い見えになり、ねらひすまして　彦「イヨヅドチン　こぶ八「うそおやアねへ　トまじめにつくろひ　まづ。おれがおそれた事にはの。越後の山家に五六十日も泊て居たが。タシカ所だによつてト。霜月の下旬かであつたよ。雪は一面に積つて大屋上より高いぜ。その間は。家毎に穴をあけておいて通用する。マアそりやアよしよ。夫から隣の内へ用が有て行うとする。マヅ隣といふ所が三里もあるやつだ。爰がおつりきさ。其時握飯を三ッ四ッ懐へいれて。長アい竹を持て出て行くは。サア雪が降ほどに〳〵。二町もあるく間には三尺位はたちまち積る。ソコデ。三里もある所へ行くのだから。段々雪に積られて。一里も行くと最う骸は埋るはナ。ナントおそろしからう。ハテ歩行くぜ。歩行ても歩負せねへ。何云て。雪が醬油樽ほどの大粒で降る事たもの。一粒降ると足が一尺五六寸づゝ隱れるから。其足を拔ては歩行。拔ては歩行する内に。丁ど足駄の歯へ雪の溜た樣に。股へ雪がはさまつて。ソレ辨慶立往生と來るは。ソコデ。しかたがねへから。彼長竿を眞直に立て。そこに居すくまると到頭あたまの上へ二丈も積る　直兵衛「ハテこはいチ。夫では死ませう　さび「そこが妙ス。馴た物さ。其雪に埋た中で彼握り飯を食居る。ソレ食があるから二日は大丈夫さ　直「ハテさて凍

○ほんく　ウソのことを鐵砲といふより、更にその音をいふ。

死に　とび「イ、エサ雪は積つてから凍てはつめたい物だが。降る間は暖いチ　直「それでも息がつまりやせう　とび「息のつまりさうな時は彼長竿を動かすと。上へ息出しの穴が明やす　直「夫でも積つた雪は重たいから。動ますまい　とび「ハテ。降たてのほやくといふ雪だから。まだ氷らずかたまらぬ内は。自由になりやす。とんだ和いものさ。ノウ番頭　ばんとう「ハイ。しかし二丈も積つてはどうでございませうか　とび「コウく。越後者が夫おやア納らねへ。貴様は越後に生れてもそんなめに遇ねへのだ。話せねへく。ソコデ其晩は一夜。雪の底で握飯を食てゐると。降立の雪は風が通らねへからがうてきと暖い。爰にて寝るだらう。ソリヤ翌朝。宿から迎の人が來ると。彼長竿がツイと出てゐるから。夫を目印にして鍬で掘起して。ハイお迎に參じましたス。ナント手軽いおやアねへか　直兵衛「どうやら實說らしくもあり。又譃らしい所もあるてナ　とび「番頭がしらずは。今來た先生さんに聽なせへ。夫よりまだく。手短なとがある。夫から迎の者と一緒に隣の内へ往て。用を達て皈る。ざつと三里もある道法の所を。山も谷も雪で埋るもんだから。雪車といふ物に乗とずるくくと辷り出して。三里の道を煙草一服の間に皈りやす。イエサどうも實に譃のやうさチ　（鐵砲作[illegible]）作「そりやアもし。飛公のいふに違ごぜへやせん。私も越後へは往やしたが。其大雪の降る間はいゝが。凍た後が寒くてたまりやせん。サア冷るはと云たらお溜りやアねへ。立居て小便をするに。其小便をひよぐる内。最う尖頭の方は氷りやす。夫だから鉸刀を離さず持居て。硝子をはさむ様に小便の尖頭をポキリポキリと斬ながら小便爲やす　ばんとう「サアく皆さま御用心なさいまし。作さんと飛八さんの掛合おやア。※ほんくほんくだ　直「つるべ打だチ　とび「作公。譃はつかねへもんだぜ。たまく實說の事をいつても請て呉ねへ　作「打

○屁でも撒合はう　極めて親しき意。こゝは夫婦になるつもりなるべし。

○小武井嶺、古越村　「寒い」「凍え」を字に當てゝ地名らしく云へるもの。

○定九郎の立場　溜場、追剝の立場。

○千里が竹　「國性爺」に在り。

○蒟蒻の幽靈　ぶる／＼してゐる。

遣ておかつし。コウ／＼夫よりか。ぬしは雪女を見たか　こびし「ウンニヤ　作「おらア見たぜ。流石のおれも寒栗とした　こびし「幽靈だの　作「雪の化物だア　こびし「大入道にでもなりさうな所を。女とは色氣があるぜ　作「そこは化物も愛敬だアス。何でも大雪の積つた寒い晩だつけが。些れこしきで譯があつてナ。末始終江戸へつれて來て屁でも撒合はうといふ　こびし「コウ／＼。おめへ雪女と色事か。おそろしい　作「ナニサ。さういふ譯の女が出來て。其女が所から皈路の話よ。悪い聽やうだ　こびし「悪い話やうだ。おらア又。江戸へ連て來て。觀物にでももくろむのかと思つた　作「べらぼう云や。雪女を連て來りやア。途中で解て終はア。その女の所から皈がけにナ。小武井嶺といふ嶺を一ッ越すのだ　こびし「ム、。あれから古越村へ取着く間が悪く寒いぜ　作「ぬしも知居るだらうが。凄い所だナア　こびし「凄いの何のと。あすこは虎や狼の巣で。晝は定九郎の立場だス　直「モシ／＼。雪の降る時は獸が殘らず穴へ籠ますぜ。そしておまへ虎は日本には住ませぬはさ　作「其住ねへ虎が住居る所だから凄いのス　こびし「其證據には嶺から半道も下ると。千里が竹といふ竹藪があるのウ　作「その竹藪の所で雪女に遇た　こびし「腰から下はねへか　作「ねへ　こびし「ハテナ　作「何でも天窓の髪毛から目鼻をかけて。惣体が眞白。　トかほをしかめてかごゑになり　おれもぞつとしたぜ。ハテ今でこそ話せ。その時は命勝負だ。ナニが氣もつかずにぶら／＼行くと。すウつくりと立て居たが。眞白にぼんやりとして女の形だ。只ぶる／＼ぶる／＼と震居るものだよ　こびし「蒟蒻の幽靈だらう　作「何さ。雪女に違ねへはな。おれも爰は一生懸命だと覺期をして。雪女にグットつかみかゝると。其つめてへ事が指が斬れるやうス。しばらく取組でゐたが。身が重くてしんまくにをへなんだを。漸く足を引倒して。どさりと轉んだ所を。グイと睾丸を締た　直「モシ／＼。おめへ今のお話で

○眉毛をぬらさつし　瞞されぬ用心。眉唾物などとも云ふ。
○あきれもしねえ　余　呆れ返るに同じ。
○氷水　氷の如き水の意。
○御前をしくじつた　御機嫌を取り損つた。
○本太白　紛れもない太白砂糖。

は。雪女とおつしやつたではごぜへませんか　作「雪女さ　こびこ「腰から下は無と云たぜ　直「雪女ならば陰嚢は有さうもねへものだ手　作「ハテそこが化物だ　ト少し行つまり「エ、。アノ。何さ。竪は雪女だつけが。抓合居る間に。丈五六丈斗の座頭になつたはな。ノよしか。そこでそれ。足も生れば。陰嚢も出來やうぢやアねへか。夫もの。其事もの。跡で聞たら随分ある事だと云つたよ。雪女が段々冷硬れば。氷坐頭となるッサ。　彦もトツー来たり手ぬぐひでからだをふきながら　彦「コウ／＼眉毛をぬらさつし。彼的が方が化物だぜ　なるほどさうも譃ばなしがしてへかナア。※あきれもしねへ　作「マア聴つし。それから到頭しめ殺して　どうせうかとあたりを見れば。一面の松原　彦「コレ／＼千里が竹藪だと云たぢやアねへか　直「イヤハヤ大きに化されました　こびこ「能加減にさつし　作「そんなら最う聴ねへか。聴すはよさう　こびこ「其マア雪女は。何を食居るだらう　作「氷蒟蒻へ氷おろしを附て食居るッサ。　トいふところへかざききにて「氷水あがらんか冷い　波立あがらんか冷い　彦「チ、能所へ水賣が來た。チイ水屋。雪女でも氷坐頭でも入て。四文がくだつし　水うり「ハイ／＼。道明寺を入れませうか　こびこ「道明寺といふ化物は越後にもあるめへス　作「お寺はある。おらアしかも参つた　彦「よせ。最う倦た。面白くもねへ　作「サア御前をしくじつた。チヨツおれも水でも飲べい。錢を忘れた。チイ番公。三十二文貸さつし　彦「水を飲に三十二文か　こびこ「四文が水で廿八文が髪結錢ス　作「馬鹿ア云や。そんな下直なお頭ぢやアねへ。一寸たばねが五十宛だ。チイ水や。そこにある砂糖をおもふさまぶちこんで一盃くだつし。三十二文やるべい　水うり「ハイ／＼　作「茶わんをさぢにてかきまはしながら中を見て此砂糖は糠でもまぜやアしねへか　水「本太白でござります　作「譃をつくぜ　彦「此水屋も作が仲間だぜ。コウ水屋さん。譃をつくなら此男と。あすこに團扇ア持居る男と結交てみな　水「へ、、、、　ト笑つて居る

○菰の餓人　雲の上人のもぢり。

○輕子　擔夫。

○眞鍮の瀧　水賣の周圍にかけたる簾。

○つむじだと云々　頭の旋毛の曲りしものは意地惡しと云ふ。「渦卷がおつりきに曲つたぜ」を承けて斯く云へるなり。

○硝子　これは催米に一作りしものと云ふ。

彦「此砂糖が本太白ぢやア。水やも下地があるはへ　直「能三幅對が出來ましたチ。ハヽヽ　とび「作が茶碗の中は砂糖の中へ水を入て飲のだ　作「呑ねへか　とび「水は毒だ　作「腹にあたる風か　とび「こつちは雲の上人だ　直「菰の餓人ではござりませんか　とび「おそろしい　彦「ヤ直兵衛さんも。だまり〳〵してゝ弓断はならねへ。チイ四文　ト水やにわたす　ばんとう「そりや三十二文よ。ア、高い砂糖だ　作「がうぎと設けるぜ。おいらも水賣になるべい　水うり「ナニサおまへさんがた。是でもお天氣都合が悪いと。休みが勝ますからチ。やつぱり引合ません。ホンノ輕子をするやうな物でございます　とび「其代に本錢はいらねへス。荷は借荷で損料を出すばかり　作「さういふのもあるさうでございますが。私共は手前で製ました　彦「さうだらう。眞鍮の瀧が規帳面にぶらさがつて。渦卷がおつりきに曲つたぜ。つむじだと余程意地が悪い　作「それでも此行燈は。錦絵を張たのぢやアねへ　とび「硝子の竿張だ　作「大分大破に及んだ。薜を巻付ればいゝ。犬がくゞるぜ　とび「竟は夜鷹が出る　彦「コウ水屋さん。早く持往ねへ。此徒の口に過ちやア協ねへ　ばんとう「三十二文で水屋さんのお荷物を棚下だチ　直「その錢も番頭さんの手から出てあるス　彦「ホンニ番公や。作に貸す錢は。証文取るがいゝぜ　作「卑劣な事を申上るぜエ。利を付て歸さア　とび「利はいらねへから元金を忘れねへがいゝ　作「金といふものはなぜ持ねへだらう　トいふうしろに隱居おいさきたてゐたりしが　晩右エ門「おめへがたは持ねへ〳〵　彦「チヤ晩右エ門さん。最うお上りでごぜへますか　晩「うそ話を澤山聽ました「皆〳〵　とび「晩右エ門さんエ。なぜ。私等には金が持やせんチ　晩「ハテ。おめへがたは麁末にしなさるから。金が迯て往ます。奉公人を置けば迚其通りさ。主人が憐ずに無慈悲をやつて。麁末な取扱をすれば。どのやうな者でも辛抱する氣が失て。竟には主を見限つて出る。ハテ万事が夫に順じ

○雪の日やあれも他の子樽拾ひ　安藤冠里侯の句といふ。
○我が子ならば　「我子なら供にはやらじ夜の雪」の句を踏へたるか。

るから。金銀は猶の事。世中に第一の寶だと思て。大切に取扱ひ。假初にもむだな事につかはず。又は遊興は勿論の事なり。都て費を省いてさへつかへば金の罰があたりませぬ。ハテつかふための金銀だから用向の事には遣ふがよし。つかはねば融通がどうもならぬといふ事にはつかふ。ナわかりましたか。悪い。夫を無益の事にパッパと湯水の様につかつては。コレたまらぬ道理であるまいか。雪の日やあれも他の子樽拾ひ。トいふ句がある。我が子ならば雪の中を素足では歩かせまい。他の子だから構はぬと云て奉公人をたゝきつかひ。雪をもいとはず想像がなければ。忠臣もおのづから出來ぬ。漸々調市一人をつかふ身なりとも。よく憐んでつかへば。ありがたい主人だと思ふから自然と忠義の心が起る。さすれば其奉公人が律義に守て呉れるゆゑ。主の家も繁昌する。其また恵によつて奉公人も末がめでたい。ナントわかりましたか。して見れば金銀も左の通りさ。金銀は神佛より利生が目前だ。神佛の御利生はよく〳〵信心したらあらうが。まづ目に見えぬが多い。何事も信心だから。金銀を信心したら金銀の利生がなくてはかなはぬ。お前がたのは浮虚信心だから。名ばかりの事。信心とは信心と書て。心を信にするが信心。わしが早い譬諭を云て聴せよう。隠居が又はじまつたとおもふだらうが。身の藥だから聴なさい。藥は毛でも苦い。さて神佛を信心するなではないよ。信心せねばならぬものだ。心を信にしてよいといふ事は。まづ親を信心して見なさい。親の利生が加ッて其身も安樂。主人を信心すれば万事主の意に叶ふゆゑ出世する。兄を信心すれば憐でくれる。弟を信心すれば弟が自然と敬てくれる。妻子を信心すれば。妻子がおのづと麁末にせず。貞孝をつくしてくれる。奉公人も則その通り。其証據の捷い所は。女郎を信心してみなさい。はじめは振詰た女郎も。到頭眞實に惚てくるはさ。其御利生

は家を失ひ身を傷る。夫も又浮虚で買て見なさい。御利生はない。ハテ此方に信心のないものに惚れる癡呆が何あるものか。しからば神佛の信心も其通り。此方が浮虚で居て拍手をポン〳〵ならして。鈴をコロ〳〵振立ても。小男鹿の八ツの御耳所か。半ある御耳でも。あつちら向て聽く事ではない。さすれば佛前にむかつて。鉦をたゝき立。數珠を摺切らうが。すつぱいだんぶつおなまめだんぶつの浮虚では。佛さまも不承知だ。金が持たい〳〵と口でいふばかり。金を信心せねば金の御利益はない道理さ。たまさかに來た金も。金づかひのあらい家だ。此樣な家に半日も居るは否だと。ズィと出て往から。ソリヤ宵越の錢金はない。まづ酒を呑者はろくでない。酒を信心すれば諠嘩を爲出し。婬亂となり。放蕩の媒となるゆゑ。此御利生も身体をたゝき滅す。ソレよしか。ナ。是等が捷く信心の目に見える事どもだ。神佛の御利生は行て目に見えず。金銀の御利生は忽ち目下に顯れる。神は此國を明かに照し給ふがお役。佛は後世を救ひ給ふがお役。その大切な神佛さまがたでさへ。金銀を御信心遊ばす。夫はなぜといふに。堂宮大破に及んでみなさい。何とやら大明神本社宮殿建立。或は何とやら寺の何やら堂。建立だの再建だのと。氏子や檀方はいふもさら。無緣法界ひりくるめに。一切衆生に救はれて。漸〳〵居所を製造てもらはつしやる。爰が則金銀の御利生を神佛も信心し給ふ所だ。しからば凡夫においては。金銀を信心し奉るが第一に近道さ。ハテありがたい世の中。しかも富貴な御國へ生れ出た事を思ひなさい。日に三度米飯を三膳づゝ頂いてるは天上の榮花だとおもつてるれば。何も不足はない。皆奢が勝から起る。金銀は澤山な世の中だ。アツアありがたい事だ。むかし賴朝公が南都の東大寺の奉加帳へ。金五十兩と御寄進遊した所が。其年あやにくに旱魃で。其御沙汰もなかつた　ト東鑑に記てある。賴

○小男鹿の八ツの御耳　中臣秡の詞、八は天地の全數とか、鹿は耳の敏きものなれはいふなり。
○半　半分。
○氏子や檀方　神佛兩方を指す。
○無緣法界　彼此の境を分別せず心の限りを盡すをいふ。
○東鑑に記てある　寄進のことはあり。五十兩云々は譏談なるべし。

○しげ坊とやら　楽屋落なるべし。

朝様でさへ僅五十兩の金が其趣だ。狂言とはいひながらも。ひらがな盛衰記の梅が枝が。金ならタツタ三百兩とぬかしたは罰のあたつたやつだ。ナントどうおもひなさる。今も聽てゐれば。冷水をあがるに他の錢を借ながら。三十二文で一盃とは勿体ないとだ。ア其錢がさぞ嘆たとであらう。君の御馬前で討死をねがふは。主のお役に立たいとおもふむかしの武士。只今の錢なども。三十二文で。薪か味噌の足にでもなりたいと心がけた所を。砂糖入れた冷水一盃が手にかゝつては。誠の犬死だ。ハテ一文で呑は途中往來で不自由な時の事。安坐して謔話をしてゐる間には。チヨイト井戸へ行けば。錢いらず釣瓶からのめます。それも面倒なら。アレ。あの水舟の水でもすむはさ。冷水といへど寒暖僅の相違で。水に熱水といふがあらうか。伊豆の熱海の外に熱水といふものはない。水は皆冷いに規した物だ。サアどうだナ。隱居が久しいものだといふだらうが。金がたまらぬの。持ぬのといふから。此講釋だ　作「イヱもう誤り入ました　遂「違ござへません　ごぜ「そりやア百も承知さ子。夫だけれど　遂「ヱ、コレだまつて居やナ　隱「ハ、、、まだ〳〵合点が行まいテ。どうでおれがお談義は。※しげ坊とやらの新内ぶしを聽くやうではないのさ。ハ、、、、　▲先刻ふろへ入たる俳諧師、水舟のわきにかゞみて升から直に水をうちかけて、坊主あたまをくる〳〵と廻しながら氣味のよささうに手であらひ居る　●商人体の男小桶を二ツ取て水舟のそばへ來り　点兵衛「これは〳〵鬼角さまお早うございます　鬼角「ヤ点兵衛子。どうなすつた　点「何やら多用でございまして。御不沙汰仕ります。御新造さまは御機嫌よろしう　鬼「ハイ忝うございます。些もしお手透にお出なさい　点「ハイ〳〵ありがたう存ますハ、、、。扨お羨しい事でございますナ　鬼「なぜで　点「イヱサ。お頭をお洗なさる所を見うけましては。私共もどうやら洗たう成ますハ、、、。鬼「坊主あたまは枕當の穢ぬのと是ばかりが能でごつす。さりながら冬季になると一倍寒いには迷惑さナ

○お梅粂之助の浄るり　高野心中。

点「成程。成程。へイ。〳〵。左様でござりませうテ。イヤホンニ。能い所でおめにかゝりました。一寸伺たいとがござります。此間私が京橋を通りかゝりますト。十二三の調市がちよろ〳〵と走て參りましたが。やがて鳶に油揚をさらはれました　鬼「ハテ〳〵　点「私は品川邊まで用談あつて參じましたが　鬼「フウ　点「彼只今の儀を見うけまして。なんぞ一句ありさうな物と存ましたから。種〳〵勘弁いたして到頭高繩までで。やつと出來ました　鬼「ハテ夫は御風流な事でごつす。へヱ何とナ　点「ハイ。マア。斯申ましたが。是でもよい事でござりませうか。ヱヽト。（卜目を瞑あふむいてしばらくかんがへ）京ばしの　鬼「フム京橋の　点「ヱヽ。鳶さらひけり揚豆腐　鬼「ハヽヽヽ　点（大のまじめにて）これで發句に相なりませうか　鬼「ハイ。イヤ。隨分ようござへせう　点「イヱサ。私は下手の横好で。兎角マア。あなたがたのやうな。俳諧とやら連哥とやら。哥は勿論。ホイ是ではお梅粂之助の浄るりになりました。ハヽヽヽ。シタガさやうなさみが好物でござります。どうぞ御覆藏なくおつしやつて下さいませ。それが私の爲になります。鬼角「ハイ（卜はかりこまりきつと居る）点「京ばしの鳶さらひけり揚豆腐　鬼「それは地口だテ。お待なさい。地口といふものでもない。雜俳の点者抔に見せたらわかりませう。タシカ。何とか唱てさやうな口調があるやうだテ。地口といふものも。發語の文字が同字なれば。冠と申て忌げにござる。是は此方の關ぬ事なれども。只まづおはなし申す。何の道にも式のあるもので。一寸むだくちにいふ地口なれども。点取地口となれば冠た文字は点にならぬと申す。夫ゆゑ常にぶい〳〵地口をいふ人も。点取ではいへませぬ　点「へヽヱ。さやうならば。堀江町の鰻鑵舗の亭主　鬼「ヱヽ山田庄藏かナ。何として〳〵。あの男の地口でも。なか〳〵点取はいけまい　点「能庄藏を御存でござりますハヽヽ　鬼「うなぎは能魚をつかふが。地口

○晋子　シンシを孫にかけて云へり。

○臺坐後光云々　佛像に就きこいふ、臺座も後光も無くしてしまつたとなり。

は悪地口。トント戯作者の口調だテヘ。戯作本には。語路の能廻つた地口はおかしくないゆゑ用ぬ。各その道〳〵だテ。わざとこぢ付た地口を書くが戯作本の意とする所。又行燈の地口は。繪地口と申て。あれは繪を表として。繪から拵る地口でごつす。これはあるきながら兩側を讀むものゆゑ。字數をすくなくして。早く解易く。ずつと口本でおかしく作るが本意ぢやげにござる　点「へヱ。なるほど。さやうなら私の申ましたのは俳諧にならず。地口にならず。左樣なら狂哥でござりませうか　鬼「イエ〳〵。狂哥ではない。ヱヽ。まづそれは。ト大きにこまりて　マア。マア何さ。只の十七字さ　点「へヽヱ。只の十七字。ハテ。ト小くびをかたむけてゐる　鬼「一体まづ主意とする所は晋子の句だテ　点「へヱ。絹張と一緒につかひます。彼何かナ　鬼「イエサ。寶晋齋　点「ヱヽなるほど。しう〳〵さいの坊さまの地口　鬼「是はどうしたもの。寶井其角の句に　点「へヽヱ　鬼「京町の猫通ひけり揚屋町といふがごつす　点「南無三寶。夫をあなた能う御存でござります。イヤモウそれを御ぞんじでは臺坐後光しまひつけました。ハヽヽヽ。さやうならば近口。トさがる　鬼「屏風の張交書などに書てある句さ　点「イヤ見通し。トント御推量の通。鬼「ハヽヽヽ。

諢話浮世風呂第四編卷之上畢

諢話浮世風呂第四編　巻之中

男湯之巻

江戸戯作者　式亭三馬戯編

●ぬきあげたる額にて髪は豆本田に結ふたる男もつさも近眼なり　鼓八　▲常持ゐむすこ放蕩ゆゑ若いんきよさせられたるとおぼしく、やぼでなき男をつくぐ見　鼓八「あなたはモシ。衰微さんではごぜへませんか　すい「ホウ鼓八公か　こ「ヤ是はおめづらしい　トゆうさんに横手を打　すい「一別來だの　こ「モシまあ。どヲうなさりました。きつい事でごぜへますチヱ。私も先刻からなんでも衰微さんだが。ト存ましたけれど。御存の近眼でごぜへますから。よつぽど思案致ました　すい「いつも若いぜ。おらア昔の俤もなし。當時おあてがひときてゐるからはなせねへはな。錢がつかへねへので據なく老實さ　こ「やツかましい　すい「へ、ひさしぶりで貴公のやツかましいを聽た　こ「アツハ、、、、。トキニまあ。お噂ばかり致てをりました。あなたは一頃。浦賀の方へ御出なすつたト　すい「さうさ。緣家が多いから方々へ左遷されたのさ　こ「ソコデ。御本家の方へは　すい「やつと一昨年立皈りの　こ「お跡は弟御さまで。あなたはマアお若隱居　すい「マアその赴さ　こ「しかし野暮でねへチ。ホンニ御新造さん御きげんよう。ソシテあなたが左遷の間は。御新造さんどうなさいました。お宿にかヱ。お里にかヱ　すい「土のかヱ。米のかヱ。ぢやアねへか　こ「やツかましい。どうもならねへ　すい「女房は尼將軍の差圖で里へ預たのさ　こ「おかはいさうに。おめへさんは金をつかつて。面白いおもひをなすつたから云分なしだが。御新

○土のかヱ米のかヱ　笠森稲荷の「土の團子か、米の團子か」と云へる言葉を洒落に持出せるもの。

○うまらねえ　埓がつかぬ、勞して功なしの意。
○頂なし　限無し。
○我見ても久しくなりぬ　「古今集」よみ人しらず「我見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いく世經ぬらむ」
○かみがられる　「かみ」は末社の意。取卷かれる事。
○百疋　一分。一兩の四分の一。
○廻り潮來　潮來節を順にうたふこと。

造さんこそうまらねへ役だネ。夫で只今は御本家から一切まかなひで。御家内お幾人すい「下女下男小僧を入て夫婦とも五人　三〆結構だネ。夫で年中は御本家から爲送りの。おめへさんばかりの小づかひ料として　よい「月〳〵タッタ十兩ヅヽ。三ハテ結構な御身分だ。モシ衰微さん。能月日の下でお生れなすつたネ。其上にまだ御不足か。ヤ欲には※頂なしだぞ。ハ、、、よい「コウ貴公はいつも同じ事だぜこ「我見ても久しくなりぬかネ。ハ、、、最うモシ。大きに來りましたテ。世の中に老耄で能ものはごぜへませんが。凡帮間の古く爲たばかりは。古物の會へもはまりません。諸事おさき眞暗な内が勝利を得ます。なんでも血氣盛な時分は。お客の腹が痛うが一向かまはずに。マア我から先へ面白く爲たものでごぜへます。そいつが段〳〵目前が見えて。少し明く爲て參ると。斯しちやアお客のお爲にならねへとか云て。客人をいとふ氣になりますから。ソコデ客人にも※かみがられるやつでごぜへます。ソシテまア。見る事聞く事が。万事古くなつて。己が氣で何所がおかしいかと。ゑつにひかへめになつて參ります。爰でソレ。氣で氣をしかるやうになりますから。する事なす事。若輩のやうにやア參りませんはス。ちよいとお辭儀の百疋が。あはよく三坐敷も重ると。てんと面白しで。サッサと乘出したもんでごぜへましたが。今ぢやアモシ。お辭儀でもあると。まア身上の足にせうと思ますシ。さうなるとお辭儀もなしネへ、。よくしたもんでごぜへます。イヱサ。客人も其通りでごぜへます。潮來を謳へとか。※廻り潮來にしろとかネ。聲色がいゝの歌祭文が好だのといふお客は取ようごぜへます。聲自慢で御自身に謳ふ客人などは。取つかまつた哥妓や。三絃ひきのみじめを見る斗。帮間高で見物。ハ、、、。おめへさんの前だが。最うモシ。おめへさんがたや穿星さんの様なお客ぢやア。骨がをれます。ハテ。

おつなお話ばかりしてゐるのだから。取外すと淋しくなります。イヱサ野幇間など丶申すけれど。野幇間でも。勤ぬける事は難うごぜへます。ハ、、、、すい「饅頭菴や。砂糖坊主はどうしたの　こ「此間ひさしく逢ません。モシ衰微さん。おめへさん一枚を。大勢の取巻で。通夜大飲といふ洒落が。度々ごぜへましたつけ于　すい「奢る者ひさしからずさ。今ぢやア手も出ねへ。トキニ。けふは何所へ往迚。此湯へ來た　こ「宿酔で　トむねをたゝき　爰が痛うごぜへますから。本町の方へ寄て。金勢丸を會所めかうと存ましたが。不圖此湯やが目に付まして。汗とりに這入ました　よい「爰であふも他生の縁だ　こ「悪縁ぢやアごぜへませんかッ　よい「うさアねへ一寸おらが内へ歩びねへ直に此横町だ。酒は相かはらず樽酒だから。些ばかり迎るがい丶　こ「それはおひさしぶりでありがたい。へヱ此横町でごぜへますヱ。ハテ于。不斷通りますが。ヱ。ヱ。覺あり。黑塀に磨竹の忍返しで。請地仕入の松がタッタ一本。外に何もなしの掃庭。見通しが平屋で後が樓造。成程。成程。製作が別だと存ました。如案おめへさんの　すい「ウンニヤ。あの家は泥醉が宅だ　こ「ホイ。大きに早まりました于　すい「あたらずといへども遠からずさこ「此間はモシ。お船といふ御趣向も　すい「なしさ。トント絕てなし　こ「三十人が揃の浴衣を頂戴で。綾瀨の月を觀た事がごぜへましたつけ于　すい「そんな事も有たつけの。ム、あの時は倘古が小舟で追て來た時だ　こ「あの時分の江戸鯨舍は子の二三人も持て。皆婆となりましたぜ。きついもんだ。是にて鼓八なども思ひ當ります　すい「最う一世一代といかねへかの　こ「イヱどうも。まだむづかしう。イヤモシ樓船でお供した中の出來は。大勢で仕退の料理が能ごぜへました于　すい「各はたく内が奇絕だの　こ「アノソレ。卷中秀逸といふ句は。平庵さんの案で。白玉餅の油揚さ于　すい「ム、　こ「ソレ。揚鍋に油の殘つ

金勢丸　一包百文半包五十文酒の醉をさまし酒をよくのましめもろ〳〵のごくけし氣つけはら一道の妙薬其外諸症に能あり別して淫慾にしるしありすべて卽功ある奇藥之
本町二丁目三馬製

○會所めかう　集會所のやうにして。

○迎るがい丶　迎酒の事。

○請地仕入の松　請地は向島の請地。請地の植木屋が仕立たる松の意。

○江戸鯨舍　鄧希者に對して云ふ。

○最う一世一代と云々　一世一代として隱居出來ぬかとの意か。

○仕退の料理　舊づくし。遊食會なり。

○はたく内　智慧袋をはたく内。

た所からの案じで。白玉の揚出しとして。こいつを大根卸で奇妙。トまづ能ヿ。錫鉢の水物に有た白玉を吸物椀へ引上て。ト。揚鍋の中へ。入れるとはねた。ヤはねたの候の。名にしおふ水鉢の白玉だから。是ははねさうな事。イヱサ。邊へ倚る者一人もなし。まづ一番にお手際を見せ付たス。トコロデ。一面彼白玉どのを見るト。爰がをかしい。ソレ。何でごぜへさアス。白玉を一齊に入レたやつだから。一面にどろ〳〵して。一向箸にもかゝらず。イヤどうもモウ。腹筋でごぜへました。イヱあの時代は※肥腹な事がいけへとごぜへましたよ　すい「それが。今ぢやア舟といふ所が。二文で渡舟に乗るばかりさ。兩國から施餓鬼船にでも乗やせうか　二「へやツかましい。衰微さん。どうもならねへ　すい「イヤ。ほんに跡月乗たはヱ。寺詣をかこつけに屋根舟で出やした。久しく向島へ行ねへから。舟を白髭へ着させて寺島の鞠宇和尚が庵へ倚やした　二「ヱ、成ほど※新梅屋しき　すい「アイ梅が屋さ　二「あの庭は大分よくなりましたヿ　すい「和尚が丹精するから園はよく備つた。四季ともに景物があるから。百花園と呼でもにくゝねへ　二「私も春の梅時分に。※和靖さんのお供で参つたが。茶碗を貰ましたツけ　すい「ム、。碗中一ぱいに梅の輪で　二「外に※堀の内さまの納傘といふ字行で。銘がごぜへましたぜ　すい「ナニサ。隅田河苍屋敷器ス。居底の中が。百花園梅屋菊塢　二「大明何とやらトある所でごぜへますヿ　すい「大明宣化年製かの。へ、。此間※七草考といふものを持て來て呉やした　二「へイ。何か焚物でごぜへませう　すい「ナニ。七草の考さ　二「ハテヿ。どんな笄でごぜへませう。まだ時花出ませんか。おそらく流行物なら私どもがしらぬといふ事はねへ筈だが　すい「イ、ヱ。それぢやアねへ。秋の七草の考さ　二「へヱ。秋もモシ。唐土の鳥と囃したもんでむかしあつたやつかヿ　すい「ナニサ〳〵。夫は春の七草。また秋の七草

○肥腹な事　下ツ腹の痛い、をかしな事。

○新梅やしき　向島の百花園。

○和靖さん　梅といへるより林和靖の名を用ゐしなり。

○堀の内さまの納傘　傘のまはりに字を書ける。堀の内様は妙法寺のこと。

○七草考　菊塢の著書。「考」といへるを、香の意に聞きて「何か焚物」と云ひしなり。

○遠通じ　通せぬを圓通寺にかけたり。此頃赤坂の圓通寺釣鐘一件につき寺社奉行半職せしことあり、それは寺社關係のことゆゑ、一般には縁も由縁もなし、構はぬことの意なるべし。

○切落から云々　舞臺の直ぐ前より半疊を入れらるる事。今日ならば大向より「罰當りめ」と來る所。

○けち兵衛　この名後に「けち助」となる。改名にあらず、作者の失念か。

○鼻紙代　傾性野群談に「當分ははな紙代に八百石などはつかはされうと存る」、當世芝居氣質「に鼻紙代と名付、一年に金五兩」、手當といふ意に聞ゆ。

といふがあるテ。其草が異説區々だから考訂た本で。しかも梅屋の藏板さ　こ「へ、エ。それはこつちの構には。チト遠通じ。ハ、、、、　すい「トキニ。最う上りやせう　こ「勿論　すい「けふは肴があればいゝが。魚甚が來たかしらん　こ「モシ〳〵。何がなくともサ。お久しぶりといふ句が有がたうごぜへます。アハ、、、。何ぞ當時のお慰がごぜへませう　すい「錢がなくなるとせう事なしの沖釣ス。其外は俳諧と庭いぢり。何も所在がなくてこまりやす。いつその事草鞋を作て。窓へつるして賣うかヱ　こ「久しいものさ。アハ、、、、。モシ〳〵。お手巾をしぼりませう　すい「ナニサ〳〵。切落から罰が當ると云はな。こ「よくいはつしやる。どうもならねへ。アハ、、、

▲かみがた下りの男ひとり住にて何か商ふ人とおぼしく七段目の由良之介といふ身になり下帶をよみて居たりしが

けち兵衛「けふもゑらい暑ぢやナ　はんとう「そんなに欲ばらずに晝寐でもなされはいゝ　けち「あほういはんすな。こちらは五十年の月日を百年に爲ならん。午睡したり朝寐したりする衆は。五十年の月日を寐て消すさかい。帳合して見ると二十五年にはかならんはい。早起て遲寐れば五十年が百年の割にならいでも七十五年活延る樣なもんぢやはい。又あはれん浮世ぢやさかい。なんぼも欲慾して溜たが能はい。ヤ番頭さん。おまへに賴で置く事があるは。別の事ちやないがナ。飯食ず。着物奢らず。所帶の爲になる女子はあるまいか。私が嬶に持たい。其代只はつかはぬ。鼻紙代として。錢五百ヅヽ月々に遣るはいな。ナント出來さうな相談ぢやがな。有たら世話して下んせ。ヤモ獨夫もほつとするはい。まだマア宿這入して六十日そこらぢやが。明ん〳〵。マア聞んせや。朝マア起るは。能か。ソコデ。お目覺があると殿さまお手づから手桶を下て。井戸ばたへお出があるぢやや。サア水汲で來ても盥はなし。杓から片掌へ水を請て。ごし〳〵とお顏の摘洗ぢやや。掛竿が一ツぢやによつて。手巾と雜巾と取違て。顏拭

土瓶の瓶は濟でよみ給へ

○雷槌　擂粉木。

○れきま　れきさまなり、レキはレコと同じ。

○はづみ　機會。

事がなんぼも有ぢや　はんとう「エ、きたな　けち「それから闇で引窓明るかい。まだ星明なら能がナ。雨など降て見やんせ。引窓に障子がないさかい。傘を。手でしかたして　ト上な方から窓へかぶせるはい。トツトマア。芝居で云なら闇試合の身振して。燧箱さがしてナ。まづマア火焚付るはい。恥いはにや利が聴えぬ。まだに茶釜も釜も買ぬ。天にも地にもかけがへない古鍋ひとつを賴とするぢや。茶は土瓶で拵りや一日さんがい余る。こりやマア能は。サア汁ぢや。こりや又ゑらう好ぢやけどナ。勿論雷盆なし。又有た迚。獨身だけの味噌なりや。※雷槌と雷盆へ皆付て仕舞はい。じやによつてお汁の代に。飯は味噌菜ぢや。ハテ味噌を甞て白湯を吞。はらの中で能加減のお汁になるぞい　はんとう「ハ、、、　けち「マア焚く分は焚にもせい。跡を取しまつするが術ないさかい其儘放遣して。ツイト商ぢや。サテ。夜さり戾つてからだ。こちの人待て居たはいなト。云て吳る嬶もなけりやナ。爺さん戾らんしたか。ト云ふものもないはい。ハイ只今戾りました。今宵もきつう蒸ますナアと。隣の家へ愛相いふて。預て置た鍵をうけとるは。此又。鍵を預るはと云ても。裏借屋は。ト口を指さして　※れきまが。うるさいはいナ。じやによつて折ふしは。あたりのある桃なら五ツか。ズツトはづめば。西瓜の安賣三十八文でも遣らんならん　はんとう「それが※はづみかエ　けち「はづみであるまいか。遣いでも能所へ遣るのぢやさかい。はづみぢや。イヤ又。人に施しや惡うは報ぬはい。向の嬶や隣の兒など對手にして。あほう口たゝけば。夫が愛に爲て。能氣付てくれるはい。ヤ茄子田樂（江戸にいふしぎやきの事）が出來たの。或はまた蛤焚たのといふて。平皿に一ぱいヅ、もありつくはい。ハ、、、、。わしは一体豆腐が大すきぢや。けどナ。小半挺買たら爲方がない。余て犬にや遣られずナ。さうぢや迚。皆食た所が。役立ん事ぢや。夫ゆゑ燒豆腐一ツ買て。腹を愈

○じつとり　篤實。

○一見参　一目での意。

○聲を上た　悲鳴を上げた。

○鴨瓜　冬瓜にあらず、白瓜の大なるもの。

○込でゐる　吞込むの略か。

してゐるぢや。ヤモ辛動といふたら。此樣な事覺んはい。早う喚呼たい。ハテ食物までは免すはいあまりはすはでない。※じつとりとした女子が有たら。世話してくだんせ。御當地の女子は言語のはけしいゆゑか。物事が荒うきこえるナ。可愛らしい口つきして。磔たら。べらぼうたら。いふ所見ちや。わしが樣なぐずつきは。一見參で辟易ぢやヽヤヤ。最う〳〵獨者は倦たく〳〵。最初は其樣にもおもやせなんだが。此頃といふたら。※聲を上たはい。ハヽヽヽ、ドリヤ。內へ往て晝飯の支度なとせうかい。ヤ能所へ八百屋さんが見えた。ヲイ。コリヤ〳〵。八百物屋さん。〳〵。ちよと待てくだんせ。トよべどもきこえず　はんこう「そんなことをいはずと。荷の中にあるものでお呼なせへ　けち「ハア。さうかい。ハテナ。じやてゝ。いろ〳〵な物があるはい。ハテ何を呼うな。ヤアあるは〳〵。※鴨瓜よ。〳〵　はんこう「鴨瓜といふ物は見えねへ。　けち「ハテあるはいナ　はんこう「どのやうな瓜だヲ　けち「青い色の丸い物で。白う粉のふいた物ぢや　はんこう「ムヽ。それは冬瓜だ　けち「とうがん。フム。とうがんぢやあるまい。冬瓜であろ　はんこう「マア〳〵。そんなことを云居る間に。前栽物賣は往過てしまふ　けち「ハテ往過たら買ぬだけの德ぢや　はんこう「ホイ〳〵。最う歸らねへ。今度から呼ぶなら。代物の名で呼かけなさいまし。幾品あつても其內の一種をよぶサ　けち「ヲツト皆までいはんすな。※込でゐる。トいふ所へ又一人青物うり來る　けち「ヲツト來たぞや。コリヤ〳〵生姜よ〳〵　青ものうりわからねど「アイ。わつちかヱ。トたちわざる　けち「ヘンゑらいナ。鶴の一聲ぢや　はんこう「生姜を生姜が買ふからいゝ　けち「生姜とは　はんこう「お前のやうなあたじけねへ人を。生姜と申ます　けち「又いふかい　青物うり「アイ。何を上やすヲ　けち「ヲツト待たり。待なされや。斯ぢやによつて。待てくだんせや。ト青物の荷をきよろ〳〵見まはしてはてしなきゆゑ、商人せきこみて　青物「何を上やす。生姜かヱ。こりやアおめへ。大束だア。大束がなんな

○撰だア　選取り。

○菊坐　花落ちをいふ。

○四ツ目　本所の青物市あるところ。

○本ぱやり　元直高の意。

ら。此下に小束もありやす。皆おめへ。撰だア孰にしなさる　けち「イヤ〱。まあ生姜は置てくだんせ　商人「白瓜はどうだチ。唐茄子十六大角豆。冬瓜丸漬瓜。柚茗荷青蕃椒。その外見なさる通りだ。たんと買てくんなせへ。けふはべらぼうに荷が勝たから重くツてならねへ　けち「チト爰に待居てくだんせ　商人「おかみさんを呼ぶのかチ　けち「食ぬ嗅なら呼ぶ氣ぢや　商人「おきやアがれ。何で待居るのだチ　けち「イヤ一寸取て來る　商人「器物かヱ　けち「イヤ〱　商人「なんだチ　けち「秤と算盤。○江戸者の商人は言するどく。上方者の買人は言やさしく聽ゆるゆゑ。物蔭より立聽けば。賣人と買人と取違さうなり　商人「秤や算盤で買居て間尺に合ふもんか。おてともねへ。おめへ知れ切た物だはナ。能加減に直を付て買なせへ　けち「商人が秤と算盤で買ふに。誰が叱らうぞい　商「そりやアおめへ。上方の事た。前栽物を買ふに。そんな眞似しちやアるねへ。上方で買なせへ。おらア賣ねへ　けち「コレ〱八百屋さん。其様に云た物ぢやない。ハテ氣短うしちや商は出來んはいの。そんなら能は。何なとマア。御當地に順つて秤も止るは。扨又算盤も持ぬは。能かヱ。しかしお直段はチト直切らにやならんぞい　商「そりやア。直切なせへな。賣物買物だア　けち「サアサ能は。腹立んすなヱ。此唐茄子なんぼ　商「アイ。是にしなせへ。こりやア砂村だア。いツくらも持て來るが。斯いふなアねへ。わつちらが持て來るのは。本の事たが。出が違はア　けち「ハアハ。そりや知居るはい。爰な菊坐の大きなが能けなナ。是なんぼ　商「アイ。夫で掛直のねへ所が。三十五文にして上やう　けち「ヨウ。トびつくりして　ゑらいな〱。三十五文とはゑらいぞ　商「そんなに悔りする直ぢやアねへ。四ツ目へ往て見ねへ。本ぱやりで。からツきり買附られねへ　けち「四ツ目はさうぢやろが。わしが方の相場は。斯ぢやによつてト。チヽ八文　商人「もげもいはずひつたくる

○周羅　大小つゝくるみの意。

けち「其様に悩りする付様ぢやあるまい。四ツ目へ往て見やんせ　商「ヘンあきれらア。ト荷をかたげんとする　けち「コリヤ〳〵待てくだんせ。八文にはゆかんかナ　商「買へるなら何百でも買て貰てへ　けち「ハテ其様に氣短くいはんすな。また相談があるはい。八文に引ざ九文か　商「外を聴て見るがいゝ　けち「外ぢや快うない。おまへのを貰たい　商「是でギリ〳〵が廿八文だ。夫で氣に入たら買がいゝ。あんまり賣たくもねへ。トかついでゆく　けち「コレ〳〵〳〵八百屋さん〳〵。まだまア相談がある。コレ〳〵またんせ　商「たちもどり　夫で買なはるか　けち「イヤサ。そこが御了簡物ぢや。モちつと御勘弁がありそな事ぢやぞや。おまへも商人ぢやないかいな。賣る氣がないなら宿にゐやんせ。賣る氣ぢやさかい。此様に暑さもいとはず。重い荷かついで出るは。ハテ。三十五文から二十八文に引置く。そりやはや現銀かけ直なし。おまへにはよかろ。けど此方にはチト工合が悪い。ササ思切て十文か　商人「だまつてさつさと行さうにする　けち「二三間おつかけながら　コリヤいそがしいは。コレ〳〵。八百屋さん。まだかいな。おまへ捨て行きや何所までも追へて往る。わしに見こまれたが因果ぢや。ト籠に手をかけて　コレあまり短氣ぢやはいの。十文に手をうたんせ　商「チヨツおめへには賣ねへ。他をちやうせい坊にするやうだ。まかりやせん　けち「ハテさう云たもんぢやないはい。エヽコレ何とせう。おまへに叱られてチトはまりぢやけど。エヽ何のコレ。清水の舞臺から飛だと思て。十二文か　商「まかりやせん　けち「なつこいきばり　チヨツ。最半文も遣れ。サどうぢやゆかんか。ソリヤ十三文　商「チヨツまけやせう　けち「ヤまかつた　トやう〳〵に籠の手をはなし　こひたひのあせをぬぐひ「ホウ引。ヤ。まかつてはゐらいはまりぢやつ　チヨツ。はづみになつて高い物春負込だはい。あほらしい　商「高けりやアよしなせへ。無利には賣ねへ　けち「ササ能はいな　商「こりやアおめへ。本が周羅で六ツに付居るから。斯いふ頭を廿八文にも賣ねへき

○落　その中の悪き物を云ふ。

○おかげはねへ　商賣してゐる御蔭は無いの意か。儲の無きを云ふ。

○頭割らした　苦勞したの意か。

○遣茄子　葉茄子。

やア。落へ行てしかたがねへ。是見ねへ。此等が落だけれど。これをおめへに買云たら高〳〵三文だらう。世間並に賣た所が十二文だス。爰で本直が四貫宛も引込アナ。あんまりうるせへからまけたけれど。おめへに頭を賣て。三文本が切れちやアおかげはねへ　けち「そりや氣のどくぢや。おまへに損かけちや。つらい場ぢやナ。何ぞ買て入合せをせうかい。此茄子はなんぼする　商「最う後生だから離してくんねへ。商人だから賣てへけれど。おめへにかゝつ居ると外の商を爲損ふ　けち「是はきつい御あいさつぢや。無錢でも貰と云やせまいシ。わしもおまへに逢ふて。先刻から頭割らした。いまだに心がドツキ〳〵と云て。腹な虫めがグイ〳〵ぬかすはい　商「サアそんなら下から這て直切るめへぜ。掛直は云ねへよ　けち「サアいはんすな。なんぼ　商「漬の方か　けち「イヤ〳〵焚のぢや　商「焚茄子もおかしいなんぞいふてかい。焚て食はいな　商「江戸では煮て食ふと云やす。サア〳〵遣茄子なら是がいゝ　けち「漬るぢやないといふに　商「遣茄子よ　けち「遣茄子といふぢや紛しはい。遣茄子といはんせ　商「なんでもいゝ。早く極ねへ。これが三十五文だ　けち「ヤ。又三十五文かいな。おまへは三十五文が好ぢやナア　商「それだつて三十五文だものを。其代り十で其直だ　けち「ハ、ア。あちは唐茄子で三十五文。こりや茄子十で三十五文。きつい逆さますナ　商「掛直はいひやせん。サア〳〵早くしねへ。晝前賣損つちやア此方の身上にかゝはらア　けち「ト先叱るかい　商「叱るぢやアねへが。おめへ達にかゝつ居ちやア日が暮らアな。あて事もねへ　けち「ハテそこが商ぢやはいな。商は倦ない様にせいといふ利屈ぢやはいな　商「サア〳〵何でも能から。否ならよすがいゝ。サア〳〵錢をくんなせへ。馬鹿〳〵しいはナ。とほうもねへ。物見遊山の慰物ぢやアねへ。ほんの事よ。何のあきれらア。賣物だからなぐさまれても。虫をさすつ

居るけれど。是が又。※地鐵同志の遣取で見ねへ。直さま横ぞつほうだ。ホンニヨ。何のつきに今まで打遣置くもんか。そつほうはりまけて。がんといふめにあはせて呉らア。野暮言も能加減につくもんだ。斯いつちやア何だけれど。此方にも夫相應に荒神さまア有ア。トかほを眞赤にして大きにのぼつたやうす　けち助「平氣にてにこ／＼しながら　ハテさて。おまへも何いふてぢやいな。旅は道連。世は情ぢや。一株の蔭。一ツの唐茄子。ハテ。賣るも買ふも他生の緣で有まいか。そりやもう。おまへに荒神さんがないとも云ふまいし。我等ぢやとて。お伊勢さんがないともいはんはい。ササはりまけられても大事ない。そりやもう茄子の十も。無錢くだんすなら。頭を夫へ差出してたゝかす。がまア。夫までもない買て上る。サ買て上るさかい。そこが相談物ぢや　商「又相談物か。おらア掛直は云ねへと先にこてへて置たア　けち「サそれも商の掛引。コリヤ※軍配といふもんぢや　商「さすがの氣はやなる商人もせんかたなくぐん／＼にやりこまる　けち助其所へつけこんで　けち「三十五文に買たらよかろさ　商「また現銀かけねなしか　けち「ササ夫ぢやはいな。トコロを。直切るも愛敬ぢや。またまけるも愛敬ぢや。三十五文ぢや買をれ。チ、三十五文か。おどれまけをれイヤおりや負ん。そんなら買てくりよ。トいふた時にや何でもないはい　商「サア／＼最う聽ちやアゐられねへ。早くかたをつけねへ　けち「ササつけるぞや。マア待んせ。トいふ所へ魚賣はんだいの上へ乾魚を並て來る　「八百屋番かけ　チイ傳公どうだ　傳「チ、勝んべいおぢい。賣れるかイ　勝「いかねへ。コウ聽ツし。先刻からナ。無躾ながら。此ぼくねんじんにつかまつて。みじめヱ見るぜ。ヱ、とほうもねへ　傳「※お猿が守だナ　勝「虛アねへ。能日を食ひ合せたア。けふはあるか　傳「何あるもんか。※川岸はん臺が土用ぼしだア。ヘンいゝくそだはけぢやアねへか　勝「けふら乾魚を賣居るやうぢやア納りやア悪いナ　傳「何も賣物がねへからナ。まんざら遊ぶも※こけこけとして居るシ。※四日市まはつて。此様

○地鐵同志　商賣氣を離れて、江戸者と江戸者とならば。

○軍配　計略。

○お猿が守　食時の故事。

○はん臺が土用ぼし　シケで。

○こけ／＼として居る　馬鹿けてゐる。

○四日市　鹽物のみを扱ふ所。

○頭で　大なる意。

○下物　安物。

○なまり　生節。

○精進がため　本願寺宗にては春秋彼岸の七日間、報恩講の七日間は精進する例にて、明日より精進する前日を精進がためといふよし。

○天津　房州の地名。鰹の本場。

○岬　三崎。

○がんぎ　南方で損する事。「がんぎに鐘でやりきれない」と云ふ。

○めら　房州の地名。

○ぞんき　粗暴。

なものを買て來たア。へ聽ッし。一昨日は鰹が頭で「だりがれん」（四百五十文）。落イ行て「やつこ」（二百五十文）位なやつが。けふは頭で「ばんどう」（八百文）から上だ。落で「めの字」（五百文）位よ。夫であたまの次を一寸程打遣らうといふやつだが。其くせ羽が生て飛ぶぜっ　おッそろしい　傳「下物もねへの　落「荒濕氣よ。下物賣みじめといふ日だ。鰺を一籠見當つたが。なか〳〵買付られねへ。能勘定して見ると。是ん計のやつが五枚手に付アス。あたまで賣やうがねへ　落「なまりはねへか　傳「如在ねへ。けふは精進がためだから。本直になりやア出入場へ持行てへが。無にやア協ねへス。きのふ天津のなまりを賣たら。方々で持來いといふから。川岸往て見るとお陀佛ス。銚子白里三浦岬が見えたつけが。高くておいらが手にはのらねえ。あいつも松葉いぶしの面の惡いやつはナアソレ　落「さうよ。大かた夕川岸が來べい　傳「ちつとばかり來た分にやア。氣骨チイソレの間にパラリだ。江戸前物は藥にしたくも無へ　落「盆はいつも濕氣だよ　傳「前栽がいゝ。氣骨がをれねへで　落「ナンノ癩病の瘡恨よ。今もいふ通り本ッぱやりの癖に。先が錢を出さねへときてゐるから。がんぎだアス　傳「そんなものよナア　落「精出しねへ　傳「アイ。ト さかなうりは行うとこふところをひきとめ　けち「チイ〳〵魚屋さん。その乾魚はなんぼ程するぞい　落「はじまつた〳〵。コウ傳公。つかまると終ねへぜ。めらの乾魚等。一生立ても食ねへ徒だ。かまはず行ッし。百性だ〳〵　傳「お百性か。ホイ　トだまつて行すぎる　けち「コレ〳〵待んせ。乾魚なんぼするぞい　傳「マアその青物から極なせへ。一寸向裏へ往て來やせう　けち「ハハそんなら能は。ハテさて。御當地の商人衆はゑらいぞんきナア　商「よしなせへ。所詮おめへたちに齒は立ねへ　けち「何で立んぞい。乾魚なら首から骨までむり〳〵と咬くだいて見しよ。何樣な役たゝん齒ぢやないはい　商「ナニサ錢づくの事さ　けち「なんぼ强ても錢は咬んはい　商「ハヽヽ、いよ〳〵百性だ

○べん〳〵と　手持無沙汰で待つ事。

○小便　値をつけて買はぬ事。

けち「わしや商人ぢや　商「みんな間違だ。サア〳〵茄子〳〵　けち「おまへの話するうちべん〳〵と※待たさかい。直切ても大事ないナ。ヘヱ待よ。こりやもうトット直切らんぞや。江戸子の物買ふ様に大風に買た所がと　トちいさな聲になり　半分直　商「いくらヱ　けち「半分直ぢやはいの。三十五文を二進が一十ぢや。ナント江戸子は素足ぢやろが。チトなまろかい。何のこんだとほうもない。おきやがれヱ　トかみがたことばの江戸なまりはおつた所をひつはりていふ之　商「ヘ、おそろしい。チヨツあんまりがうはらだ。まけてやるべい　けち「ヤまけた。ヤア〳〵。ヤア〳〵。そりやマアほんまかいやい。八百屋さん。おまへ實性か。テモさても直にならんしたナア。サテト。　トしばらくかんがへ　イヤ待よ。直にならんしたは能が。江戸子の聲色つかふたばかりに。高札で落した。ハツア情ない事ちやナア。わしが實正明白也といふ實〳〵ほんまの所は。七割引ぢや　商「たま〳〵直が出來たら小便か　けち「イヤ〳〵買ふて置く。なんぞいふてかい。君子二言なしぢや　商「百も算へようか　けち「ヤ。トびつくり　商「五十かヱ　けち「ヱ。トびつくり　其様に澤山買てどうせうぞい　商「ハテ安い物だア。此茄子はおめへ。駒込だアっほんの事よ。山茄子だから種はなしか　けち「コレ〳〵能う云ておかんせ。本所茄子持來るとナ。種はあれど焚て食たら山より能といふはいの。おまへがたの口も自由なもんぢやナア　商「ハテさういひなはんな。山の手のうめへ事は　けち「ササそんなら能にもせいさ。マア數の所ぢや。ヱ、ト。三十五文の二の段ぢやさかいにト。三十の十五に。五文の二文半で。十七文半となるナ。ム、能は〳〵。トかんがへて　さてその數は　商「いくつ　けち「二ツ　商「ヱ、。トあまりの事にびつくりする　けち「なんで其様に仰天しなさる　商人「あきれて　二ツヱ　けち「ヲイノ　商「たつた二ツかヱ　けち「さればいの　商「二ツばかり賣れるもんかナ。人を馬鹿にした　けち「二ツぢや迚。賣られんとはどういふもんぢやい。直の押合して。其

割で買ふに賣れんとは。チトきこえんはい　商「ハテ二ツヤ三ツは八百屋へ行て買ねへ。一ツ六貫宛もすらア　けち「おまへ魚屋ぢやなし。八百屋さんぢやないかい。トツトわからんお方ナア。コレおまへの方から變改か。變改なら手付損に。其茄子ひとつ置んセ　商「チヨツべらぼうらしい。隙取居るだけ損が立さうだ。チヨツ置徃う　けち「ヤ置徃く。アノ手附損か　商「ナアニばかばかしい二ツ賣やせう　けち「わしや又置徃くといふさかい。無錢かと思ふた。錢出せば。こりや置にや成まい。サア其中で壹厘なりと。目方のありさうなを二ツくだんせ。ヲ、。ヲ、。能は。ヤこりや其方のと替ておくれ。ヲツトよし〳〵。さて〳〵能う負なさつたナア。おまへは〳〵。折〳〵※毒性な事いはんすけれど。一体の性根は直なお方ぢやナ。併トツト江戸のお方は皆左樣ぢや。サア錢取ておくれ。一。二。三。四。ソリヤ※四文づきで四ツぢやから。四四の十六文。ソレ能かナ。唐茄子が十三文に。今のが二ツで三文五分ぢやが。半錢は爲樣がないはい。半分缺て上た所が。おまへの方にもしつくり繼合す欠錢もあるまいが。又わしが方にも後家錢はないはい。スリヤわしに五分の德があり。おまへに五分の損があれど。こりや是天地自然の損德。お互に五分〳〵のはからひをもつて。行司預り置ます。ナントゑらい物か。ササ十六文それへお取なされハ、、、。能う負さんしたナア。コレ〳〵錢を改めなされや。ひよつと古錢が交て。掘出したらおまへの※耳たぶ。ソレ。銹たれども破損はないぞや　商「アイ。ト錢をとり　ヤレ〳〵〳〵とんだめにあつたぜばか〳〵しい　けち「何の飛うぞい。是程とばんとはないに。ヤコレ〳〵。其籠の端にあるは何ぢやいナ。商「是かヱ。こりやア何茸とかいふものさ。ヲ、それ〳〵。舞茸とかいふ物を乾たのだツサ。こりやア前栽の籠にあつたのだから錢は出さねへ。ついぞ見たとはねへが。奇しい茸だから遣う思つて

○毒性な事　上方語。毒口を利く意か。
○四文づき　つき錢、握りたる錢を手中より突き出すこと。
○耳たぶ　福。福耳の者は果報ありといふ。

○吸口　吸物の中に香をつける爲に入れる柚子を云ふ。

○松もどき　「松もどきとは松茸に似せて切たるなり」（嬉遊笑覧）茄子料理の一。

持て來やした。おめへ欲かア上やう　けち「ヲ、夫くだんせ。無錢なら百でも貰て置はい　魚「サア見なせへ。おつな茸だぜ。しめじとも違ふが。椎茸でもねへ　けち「ササ舞茸なら違ふ筈ぢやはいの。コリヤ忝ない。ガ八百屋さん。最そつと負てくだんせ　魚「エ、。ト又びつくり　ハテおめへ。一ツある物を只遣つて。其上に負やうがあるもんか　けち「サそこぢやテ。此舞茸を貰て遣るかはりに。そこな柚なと一ツ。負に置て徃んせ。早速吸口と仕るぢや　魚「あきれもしねへ。ト荷をかつぎ行く、けち助あさより大ごゑあげて　八百屋さん忝い。能う負てくだんした。コレ礼は云ぬぞエ。ヲイ八百屋さん。心でおがんでゐるはいな。ハ、、、、　はんとう「けち助さん。大きな聲だチエ。私等が門首でどなる聲が二三町は響けやせう。八百屋だらうが。前栽賣だらうが。おめへにつかまつてはいかねへ。どうしても上方者は如在ねへぜ。人をばころりとさせるチ　けち「能うころりせうぞい。シタが何事も氣長うせにやゆかぬはい。コレ見やんせ。此樣な干茸を貰たがナ。こりや舞茸といふ茸ぢやがナ。宇治拾遺をはじめとして。其外の昔本に。能う書記てある物ぢや。どないな物やら試て見んならぬ。此マア茄子を※松もどきにして。其殘つた汁へいれて吸物にしてト。私が食はす人がある。チツト。うまし〱。

「ヤしからば　はんとう「ハイさやうなら。

譯話浮世風呂第四編卷之中畢

諢話浮世風呂第四編　巻之下

江戸戯作者　式亭三馬戯編

男湯之巻

○初編に出たるよい〳〵病人ぶた七、あせじみたる白地のゆかたに子ども腹がけをかけ、片ちんばのぞうりをはきていくぢなきかたち、片手に[illegible]、片手に[illegible]をさげてきたる　ぶた七「婆様だ〳〵。しよ。しよ。しよ。三途川の婆様だツ。ヤどつこいナ。ト入口をまたぎ　番頭様。どゝ〳〵。どうだ。大分大分。あち暑の。エヘエへゝゝゝ。昨日の様だ。〳〵のう。菖蒲湯。〳〵　はんとう「何と　ぶた「速云ふ事よ。菖蒲湯。〳〵　はんとう「寒いト　ぶた「ナ。何。何。菖蒲湯よ　はんとう「やう〳〵きゝわけて　ム、菖蒲湯か。さうさ。速い物だよ　ぶた「昨日。昨日。昨日様だ　はんとう「さうさ。昨日の様だつけ。盂蘭盆前と為た　ぶた「雛菖蒲に為な。直たまだ　はんとう「夫よ。雛が菖蒲に為のは直さまさ　ぶた「めつぽうだ〳〵。七夕様の跡。跡。跡の祭。性霊。性霊。性霊様だ。イヒ、イヒ、。イヒ、、、、、、　はんとう「澤山買込だの　ぶた「後生願だ。ヒ、。是だア。たまねへ〳〵。南無妙法蓮華經〳〵。なもほねぎよ〳〵〳〵。お題目の書有る燈籠だア。安かねへ御祖師様のお書遊ばつたのだ。安かねへ十二文だ。　はん「お星さまの書た蓮華なら。お月さまの書た泥亀が居るだらう　ぶた「勿体ねへ。罰が當るなもほんねんぎやう〳〵〳〵。お祖師様。〳〵。御免被成まち。あんな者にお構被成まつな。謗法罪だと〳〵。お上人様さう云た。謗法罪〳〵　はんとう「※謗法罪いらッしやい。評判で〳〵　ぶた「勿体無。〳〵。コウ〳〵番頭様これ其所へ預て呉ね。勿体無よ〳〵　はんとう「そんなに勿体ね

○三途川の婆様　三途川の奪衣婆。

○謗法罪いらッしやい　謗法罪は日蓮宗の者の何時もいふ言葉なれば、安く受けていへるなり。

へならねへがいゝス　ぶた「後生だ〳〵。　ト盛ものこあんごうこうらうを出す、手もとをぶる〳〵ふるはしながら　ソリヤ〳〵。よしか。大丈夫か〳〵。離すぜ〳〵。夫。夫。の。お題目。ぴん〳〵はね居ら。髭題目。お祖師様のお髭で。お書遊ばつた。の。髭題目。ぴん〳〵はね居ら　ばんとう「今とり立のお題目だから。ぴん〳〵はね居る　ぶた「勿体無〳〵。罰がたかる「これもはね物だの　トあがつて來るは十七八のわかもの　店助「どうだ色男　ぶた「うれしさうに　イヒ、イヒ、、、、。色男。納まんねへ。どうだ子。〳〵。小さ大屋様　店「べらぼうめ。最う直に小さ大屋をいふから色氣がねへぜ　コウ。家公。此ごろはほんとうに。呂律が廻つて來たぜ　ぶた「最能。〳〵。御題目。百日の日課。日課だから。おかげで。な。なつ治ら。足しやア。足しやア。大丈夫〳〵だ　店助「ひさしいもんだ。又大丈夫か。一体ぬしのはよい〳〵ぢやアねへ。他の病だらう　ぶた「よい〳〵。ナニよい〳〵ぢやねへ。醫者様はの。癎癪。〳〵だとよ　店「腎虚だらう　ばんとう「脾虚ぢやアねへか　ぶた「何の〳〵。おら氣ぢや。おら氣ぢやアの。色の病だ　店「ヘン洒落らア　ぶた「ほんによ。ヨイ〳〵ぢやア氣がきかね　店「よい〳〵ではあるめへが。鼻毛をチトぬいて眶を掃除すればいゝ。迚もの事に洟を拭で歯を磨てもらひてへナ。其スウ〳〵とすゝり込む音が何分氣障だ　ばんとう「ほんにさ。あつたら色男を最ちつと氣をつけるといゝ子。　ト口上にしたがひぶたしは目やにを袖でぬぐひ懐からちり紙を出してはなをふき氣まじめで居る　ぶた「鼻毛エ。伯母様にぬかせら。歯は塩で。〳〵。たわしを掛て。の。の。よかろ　店「たわしにも及ばねへス。三馬が所の歯磨にするがいゝ　ぶた「五十のか。〳〵　店「さう爲さつし。さうすりやア疵に玉だス。のう番頭。をしい色男を遊ばせておくぜ　ぶた「ほんに。惜か〳〵。おれも。惜いと。思ふよ。サア〳〵這入ろ〳〵　トよたり〳〵爲ながらざくろ口にいたり入口につかまつてかゞみながら、ざくろぐちのまいら戸に黒ぬりにてぴか〳〵光るゆゑふつと心づき、うぬがかほをうつしてしばらく見てゐる、此内のかほつきいろ〳〵さま〴〵にをかしみあり、トド、あふむいて鼻のあなをすかし見てはな毛を見る　店助「ぶた公。大分見え

○納まんねへ　承知しない。

○小さ大屋様　大屋さんの息子。

○疵に玉　玉に疵をひねりて云へるもの。

○まいら戸　眞平戸、細き桟を横に打ちし戸。

○氣のどく　きまり惡くなる。
○ばんとう舟漕云々　「式亭雜記」に「京大坂にて流行の唱歌、頃日江戸にも藝妓など常にうたひものすさびせり、されどあまねく人口に流布するにはあらず、そのうたに曰」とて左の唄を擧げたり。
ばんとう船漕ぐそりやせんど、せんどは撞木杖そりやけんぎよ、けんぎよは池にすむそりや金魚、金魚くや若うなるそりや人魚、にんぎよ月並に會所で押すのがそりやいんぎよ、いんぎよ樂なものそりや隱居、いんきよぶらうするそりや胥盧、胥盧てらでたくそりや沈香、ぢんこは金山ふもとそりやきんこ、きんこ大きうなつたり小さうなつたりそりやちんこ云々
○月並に會所で云々　町務所。
○金山ふもと　金華山。金海鼠の名所。
○瞽女節　浮世床にも「下越後あたりから出る瞽女の唄だの」と見えたり、米山を境にして東部の

ばるの。水かゞみといふはあるが。主のは塗板かゞ見だ　ぶた七「ふりかへりてにはかに※氣のどくになり　イヒヽ。イヒヽヽヽ。トくぶりながら「チイ御免ねへ。コウ〳〵。尻を除ねへ。己が御免ねへ云たら。返答しねか。〳〵。イヒ、イヒヽヽ。ウタ「返答は十文で這入る。そ。そ。そりや錢湯ッ　やみ吉「チヤ〳〵ぶた公。かみがた唄かたまらねへぜ　ぶた二「たまね〳〵。口々「返答は十文で這入る。そ。そ。そりや錢湯ッ　やみ吉「ウタ「錢湯は高みに居る。そりや番頭　月八「ウタ「ばんとう舟漕そりや船頭。船頭は撞木杖そりや撿挍　やみ吉「撿挍は池に住む。そりや金魚　月八「金魚食や若なる。そりや人魚　やみ吉「人魚月並に會所で押すのが。そりや印形　月八「印形樂なもの。そりや隱居　ぶた二「隱居。〳〵。ゑら。何。何とか。何とかだ　月八「胥居寺でたく。そりや沈香　やみ二「沈香は金山ふもと。そりや金海鼠　月「金海鼠大きうなつたり小さうなつたり。何とやら　ぶた七「アハヽヽヽ。おめ。おめ。おめへ達ア。おれが唄ふ所。みんな取つてしまつた。〳〵の。イヒ、イヒヽヽ　月八「ヤお早いの　ぶた「あい　やみ吉「月八ざんかみがたの時花唄は。どうも人がらがいゝの　月「やさしくて。どうもいへねへ。すべて上方唄は品がいゝ。江戸は半太夫河東此ふたつにとゞまるよ。流行唄も諸國のいりごみだから。下卑た田舍節のはやるはうらみだぞ　やみ「瞽女の唄などがはやつてはおそれるス　月「長唄めりやすなどは音聲が淸で。はなはだ淸音だからいゝ。瞽女節をはじめとして。すべての田舍唄は。濁音で音聲がだみてるやす。夫をうれしがつてうたふは。チト心得違だらう　やみ「ソシテ文句なども下卑きつて。つまらねへ事だらけ　月「さうさ〳〵。イヱまた。さうかとおもへば。潮來曲などゝいふものが。さのみヤンヤとも思ひやせんが癈らずにはやる。是も一抜通り過た人にはおもしろくねへが。若い人の目先の見えねへ内はまづうれしがるやつさ　やみ「さやうさ　月「潮

蒲原岩船三島古志郡を下越とし、西部の頸城刈羽魚沼郡を上越とす、瞽女節は下越の土音にて唄ふゆゑ、殊に耳立ちて卑陋に聞ゆるなり。

○詩は宋元の事　市河寛齋あたりを指せるか。

○唐詩選明詩選云々　南郭あたりを指せるか。

潮來は潮にあらず朝之朝來なりと云々

○お節句前しらず　盆前の苦勞なかりしを云ふ。

來ぶしは眞平だの。氣障だのといふ通り者も。若い時分はやつぱり好た組さ。詩は宋元の事だといふ人も。前髪のあつた時代は。唐詩選明詩選を讀で。唐詩礎や明詩礎で詩を作習つたもの。東坡米芾が妙だとか。奇絶だとかいふ人も。和様の一筆啓上で覺たものだから。潮來をきざがる通者も等類さ。イヤ潮來ぶしといへば。此ごろも爰の湯で聽ましたが。近頃の文句は冠辭のつく唄がある子　やみ「冠辭とはエ　目「冠辭と云て。俗にいふ枕詞の事さ　やみ「へエ。ハテ子　目「傘の骨になるまで何とやらといふ詞をうけて。下の句にはなれ〴〵とかいふ事をいひましたつけ。ソレ。傘のト冠辭をおいて。骨とつゞけて。下の句に。はなれ〴〵などゝいふ所が。イヤおそれ入ツた事さ子。眞淵さんが今時ござつたら。朝來風とかいふ哥をあつめて。別に冠辭考が出來やせう。ハ、、、　やみ吉「このこと根からわからずさやう〳〵トばかりうけこたへゐる所へ、おはい〳〵のお俳助といふあだ名のある男ざくろぐちより入來る、これは詞づかひにはなはだていねいをつくし、すべての事におの字と樣の字をつけてものいふくせあり　やみ「ヤ俳助さんお早うございました　はい「くらくてわからぬゆゑ顏をすかし見て　ヤ是は〳〵。闇雲屋の吉郎兵衞さん。お早うございます。扨はやお結構なお日和樣でございます。おまへさんはいつも御丈夫さまでお仕合樣でございますぞ。ハイ〳〵。此お天氣の御都合は申ぶんなしぢやが。お暑さはどういたしたものでございませう　やみ吉「さ樣でございます子。兎角殘暑がつようございます　はい「ハイ〳〵。さやうにございます。別しておまへ樣は御肥滿でお出なさるから。お暑のお凌はお大体樣ではございますまい。ハイ〳〵。トキニ。最早お盆が參じましたナ。おまへさんではお人ずくなで。さぞおとりこみ樣でございませう。ハイ〳〵。イヱもお大体樣ではございませぬ。ハイ〳〵。わたくし抔はお得意樣のお蔭樣で。まづナ。おまへさん。他人樣のお足をも歩せ申さず。ハイ〳〵。又外樣へお拂をいたゞきにもまゐらず。まことにナお前さん。ハイ〳〵。お節句前しらずでござ

○菩薩様　米の事を菩薩と云ふ。
○鶴吉婆さん　「式亭雑記」に「大傳馬町壹丁目新道鶴賀鶴吉老婆娘小鶴が持扇の賛」あり。詳し

ります。ハ、、、、　やみ吉「それは何より能うございますテ　ばゝ「イエハヤ。是と申スも御先祖さまの
お蔭様でございまして。ハイ〳〵。おありがたい事でございます　やみ吉「ほんに。お前で石臼がお入な
さるだらう。虎どんでもとりに遣さいまし。イヤ〳〵。此方からもたせて上やう　ばゝ「イエ〳〵。どう
いたしまして。やはりお宿様へさし置れまして。イエサ。最う。毎度お宿さまのお道具を御拝借いたし
まして。おかげさまでお性霊さまの御馳走が出来ますハイ〳〵。おまへさんでもハヤ。お盆の御客さま
でさぞおとり込さまでございませう。ハイ〳〵、お袋さまやお内さまが。ハヤ〳〵。お大体さまではご
ざりませぬ。イヤ御馳走で存出しました。一昨日に御深切さまに娘をおさそひ下さりまして。ヤモおか
げさまで。ハイ〳〵。大だのしみをいたしたと申て御吹聴申ました。其節はいろ〳〵御馳走さまになり
まして　やみ「何もうさつぱりおかまひ申ません　ばゝ「ハイ〳〵。ハイ〳〵。イエモお有がたい儀でござり
ます。ハイ〳〵。さやうならばおかごろおはゞかりさまながら。石臼をばお手近くへお出しなされて差
おかれますやうに。お店のお方〴〵へおつしやりおかれまして下さりますやうに。ハイ〳〵　やみ「ナニ
サ。持せて上ゲませう　ばゝ「イエ〳〵御勿体ない。どういたしておまへさん。アハ、、、、。イヤモ
シ。御覧じまし。此まづ糠をおこぼしなすつた事は。これもおありがたいお米から分身いたしたもので
ございます。申さば菩薩様をかやうにまづ。石榴口へまきちらしてお捨なさるといふは。どうした御了・
簡のお人さまでございませう。おつかひなさるほどならば。最そつとの事であそこの細溝へお捨なされ
ば。爰も穢ませず。湯の一流しも費になりませぬテ　やみ「さやうさテ　ばゝ「イヤハヤ御勿体ない。ト
手をのばしてざくろぐちのそこにある小おけを取り風呂の湯をくまんとする　やみ吉「これへつかはさいまし　ばゝ「ハイ〳〵。是は〳〵　ト小桶を出す　「やみ吉うけ取て、風呂の中

て「鶴吉は鶴賀新内の祖若狹掾の娘也」と云へり。

○右や左の旦那さん　新内の鼻に拔けるより、乞食の眞似に似たりといへるもの。

○亂會の床　淨るりの素人會でも「顔」を重んじ、その道に入つての年數を貴びます、そしてその順序によりて出場の高下のあるのが普通、然るに此「顔」を無視して順次不同の出場で語るを「亂會」と申しますと、石割氏に聞く。

○麥こがし野郎　田舍からのお土産には極つて麥こがしなり、大人の賞玩にはあらず、故に子供だましといふ意、此語は深川の漁人町には明治の初めまで使用されたり。

○あたけやアがる　猛ける。

○岩見銀山云々　當時呼び歩きたる鼠捕り藥。

○花火と川垢離が云々　兩國川開の見立。

○うろ〳〵舟　賣ろ〳〵舟。

○さわぎ舟　馬鹿囃子の騷ぎ舟。端午の梵天舟の類。

○矢場　楊弓場。

の湯をくみ出し、い助が手にわたす　はい「ハイ〳〵。ハイ〳〵。是は〳〵おはゞかり樣でござります。トぬかを流しこむ　風呂のすみの方にていさみはだの男大音に　新内ぶし「けふはとりわけいろ〳〵と。いふ事きく事たんとある。その約束で今朝はやうッ。そばにゐる男「エ、畜生めエ。新内だナ。こてへられねへ。鶴吉婆さんが出たやうだ「あの婆さんはうまくやるぜナア「あれは鶴賀新内の元祖の家元だとよ「道理だ品が上品だナア「やつぱり宮古路だぜてめへ何い。コウ。新内で女を迷はせようといふ腹か「最う迷つて居らア「ヘンむしのいゝ「新内が又はやり出したナア。闇の晩にあるいて見や。新内と新内がつきあたらア。新内ぶし※右や左の旦那さん「わわわん。トそばからはやすこ「何も後生とおぼしめし「わん〳〵　ぶんご「つひ手拭のほヲうかアむフフンりヒヒンヒン〳〵どう〳〵〳〵。此畜生め。豆計食つて屁計撒きやアがる。「酒計食つてなまけるからをさまらねへ。うたひをうたふ人「是は唐土かね金山のふもと。トうたふ折から、ちうッぱらの中六といふなまゑひ、大きにおこり出す　中六「ヤイ〳〵〳〵こいつらア。とんだ奴ぢやアねへかエ。湯の中は※亂會の床だと思つてけつかるか。あつちイ倚りやア。新内と豊後のはねがかゝるシ。こつちへ除きやア。謠だか淨瑠璃だか。腦天から雫を浴しやアがつた。サア〳〵どいつでも出やアがれ。あかるい所で勝負しべい。トいひながら風呂をまたぎてひよいと飛出し　ヤイ新内の※麥こがし野郎から先イ出やアがれ。誰だとおもやアがる。ちうッぱらの中六さんだぞ。コレヤイ。かね金山も爰へ出しやばれ。うぬは暗い所で※あたけやアがるから。かね金山もすさまじい。※岩見銀山鼠とり藥でも食ツたらう。猫が屎ぢやアすまされねへぞ。何所だとおもつて騷ぎやアがるか。とんちきめらア。湯の中は※花火と川垢離だねへ計だ。コレ番頭。氣をよくして置たらば。西瓜玉蜀黍の※うろうろ舟や。馬鹿囃子の※さわぎ舟が出やうもしれねへ。サア。どいつでもおれ樣が對人だぞ。コレヤイ※矢場の姉や水茶屋の小女を對人にし

てちやらツほこをぬかすとは的が違ふぞ。サア片端から出しやばれエ。※闇穴めエ。ト りきむそばからもえ木に火をさすおさきものあは民といふいさみ あは民「ドレ／＼どいつだ中六。てめへ又。氣が能過らア。片ぱしから※しよびき出して張くぢいてやりやアいゝ。全体また。いけッ大息に騷ぎやアがるぜ。※土地所に人もねへ様だ。昨夕おらが表の風松が※弟子子をぶちやアがつたも。あいつらだらう 中六「風松が所の野郎をどうしたイ あは民「小桶で打くぢいたア 中六「ふてへ野郎共だナ。夫を聞ちやア了簡ならねへ ト いひながらざくろ口をくゞるあは民もつゞいて風呂へ入ると風呂の中の人々／＼ぶつ／＼のこいにてさわぎ出す抑さいぢ／＼さわいだる男どもはこそ／＼と上へあがりうろたへ廻つてきものを着ながら早足ににげ返る 中六「尻腰のねへ奴等だぜ。中へ這入りやア外へ出やアがる あは民「迯やアがつても面は大概しれ居らア。塩押の茄子を地獄落しへ掛たといふひしやげた野郎と 中六「大坂炒の家臺ぼねへ地震といふしやつつらが あは民「なんだあばたか。ヘン。舞臺へ障るぜ 中六「ホイしめへつけた「兩人ハヽヽヽヽ。これにてけんくわにもならず笑つてしまふこと

▲大坂いりト八近來法會などに當座にはるまめいりのことなり

■十五六の山出し下女とおぼしきもの二歳ばかりの小兒をつれ來たり「旦那さんエ。お坊さんをお連申て参じました 福助「チイ來たか。ア、邪魔な坊主めだ。おッかアと這入ればいゝのに 山出し下女「御新造さんは今日はお頭痛がなさいますし。乳母どんはちつと。ト いひかねてゐる 母親 福助「サアく＼着物をぬがせや 下女「ハイ／＼。サア徳松さんエ。お衣をお脱なさいましよ 徳「お湯へ這入ようよ 下女「ハイサお湯へ子。おとつさんとお這入りでございますから子。お早くお衣をぬがせ申て。初がお上ゲ申ますのさ。そりやよし。ヲツトお腹掛の紐が引かゝりました。チヤ。能のだ子。徳さんは能お腹掛をお持だ子。初にお呉れ 徳「否 下女「お否かエ。緋縮緬のお紐で。錦裁の亀甲で。黒びらうどのお腹がけ。チヤ／＼／＼是はしたり。お守袋をお踏だよ。ソリヤ／＼。サアよし／＼。まづ爰は斯しておいて。おとつさん所へおつれ申ませう。サアお抱ッこお爲。ドリヤよいとこさ。ト竹すの子の所をまたぎてつれゆくふく助うけとり「サ

○闇穴　罵語。
○しよびき出して　引張り出す事。
○土地所に人もねへ　傍若無人。
○弟子子　職人の弟子なれど童年のものをいふ。
○尻腰のねへ　據りのない。
○地獄落し　鼠落し。ぶつ〆といふ。壓し附けて扁平になる。
○大坂炒の屋臺云々　あばた面を罵れる語。「あは民」に差障あるを以て、「舞臺へ障る」と云ひしなり。大坂炒は鹽大豆。

○迷子札　眞鍮の札。表に生れ年の十二支の一つを書き、裏に親の住所氏名を記す。

アお湯だ〳〵。ソリヤ留桶の中へ。イヤぶく〳〵ぶく〳〵。ア、いゝぞ〳〵。いゝお湯だの。坊はお湯が好だの。ソレ手拭をかしてやりませう。よくお顔をしめしなさい。コレ〳〵初や。一寸この桶へ湯を二はい汲んでくりや　下女「ハイ〳〵。ト高くはしよつて小桶をもち、よび出しの所へ行てをかゆをくんで置、扨上へあがりて着物をかたづける、男湯の中にゐるはゞかしきものゝゆゑ、小児のはだかけのひもを、しはをのしたり、のみをひろつたりしてうつぶきゐる之　福助「サア〳〵ちと洗ませうか。コリヤ〳〵。坊や。ヲ、否〳〵。おちんこをどうしたものだ。ヲ〳〵虫がおこる〳〵。おつかだ〳〵。およしよ。トかほをあらつてやりながら　ホ、ヲ上手〳〵。をとなしくなつたぞ。よく洗はせるぞ。けふはお行水のつもりで。中へは入ますまい。只留桶の中ばかりで。すぐに上にしませう。最う逆上る〳〵。ナア。最う上にしませう。何や。初や　下女「ハイ　福「サア浴衣をひろげたりよ　下女「ハイ〳〵　福「これはしたりどうしたものだ。兎角手拭のお湯を吸てならぬ。およし〳〵。お腹が瀉ての。腹が痛くなるよ。そりや上るぞよ。ソリヤ〳〵。イヤどつこい〳〵。ヲ、こはいこと。すでにころばうとした。ノウ。徳はつよい。泣ませぬ。そりやよ。初や。よく拭てくれよ。コリヤ〳〵又かけ出すか。どうしたもんだ。をとなしくして初に拭てもらひな。おとつざんはお跡から行くからお先へお出よ　徳「アイ　福「いゝお返詞だぞ。ドリヤいつはい這入て　ト風呂へ入る　下女「サア〳〵よヲく拭ませう。ネエお坊さん。サア仰向て〳〵。トしかたをしながら　ソリヤ斯お仰向。コレ〳〵腮の下の筋の間へ垢がたまつてをります。サアよしと。サア〳〵ちつとあをいで上ませう。お坊さん是はなんだヱ　徳「團扇　下女「ヲ、よく御存だネ。是は何　徳「お守袋　下女「迷子札さ。是は何と書てございますヱ。小判で能子　下女「サア〳〵何と書てあつたか初はわすれましたよ。おまへさんはお利口だからお覺だネヱ。與太郎町　徳「與太郎町　下女「何丁目だネ　徳「何丁目　下女「ナアニサ。與太郎町何丁目か。しつてお出ではな

いかヱ。　徳「與太郎町何丁目　下女「三丁目さ　徳「三丁目　下女「それから　徳「※叶屋福助。」忰。」徳松　下女「チヤよく御存だぞ。サア〳〵衣をめして。帶〳〵をしめて。是から通町の方へ出て皈りませう子。サアよいぞ〳〵　ト　いふ所へむかしのきほひとよばれたるごうらくぢゝい、年がよつてもあたまはちよきりとした本田に結ひ、からだにある何やらもしなべてのこりしありさま、役川町点に母の名はおやぢがうでにしゐびて居るトいへりしやうべなり、はゝあたまのしら髮きれいにまゆ毛は長く、今もりきみのうせざる風体。※うすがきの單じまのかたびらこんちりめんのひとつぶがのこの丸ぐけおび※京うちはを手にもちて入來たり　きも右ヱ門「ア、暑いぞ〳〵。年の老た所爲か。暑さも寒さも人一倍だ。がう腹なもんだぜ。サアと云たら今の※二才子共にも負ねへ氣だが。骸がやくに立ねへ。年はとるめへもんだぜ。耄だといはれるもむりぢやアねへよナア番頭　中六「きも右ヱ門さんお出なせへ　きも「チイ。中六か。早かつたナ。あば民か。コレ今しがた諠嘩アしたのはてめへたちか　二人「ナアニサ。何でもねへのさ　きも「フム。そんならいゝがナ。ぶい〳〵と小りき身に勇んで。木葉諠嘩はしやるな。ヨウ。お主たちも聞ておきやれ。男といふものはめつたな事に爭論するもんぢやアねへ。まかり間違つて爰はといふ時にやア。友子友達への面づくだ。そこぢやア※水盃でもしてかゝりやれナ。今の若者共が※達入だの犬の糞だのと※骨箱をたゝくが。おらが目から見ちやア※蚤の卵だとおもやれ。本の事よ。おらが若い時代の行作とは雲泥万里の違だア。※金神長五郎どんと。熱の白兵衛殿との立引なんぞときたら。ヘン虚のやうだ。あの時代のはなしをも聞ておきやれ。お主たちの後覺になることだ。ハテおらが若い時代が強敵かとおもやア。其又むかしをきくと変も大造なはなしよ。おらが親父どんの一ッ話だつけが。※釣鐘彌左ヱ門殿の子分に。半鐘市右ヱ門。その半鐘が子分に風鈴五郎七といふがあつたけなが。どれ〳〵も男一疋よナア。其はなしをしてきかせべいがマア待ちやれ。　トいふそばからむかしかたぎの律義おやぢたばこをすいつけながら　古右ヱ門「肝右ヱ門さんの云ひなさる通りすべての事が昔は違ます。芝居の狂言なども荒事だ

○叶屋福助　當時流行の人形を取入れしなり。

○うすがき　生平、江州産の緣物、

○京うちは　下り團扇。

○二才子共　馬より出でたる言葉。未だ十分に成長せざるを云ふ。

○水盃でもして　決死の覺悟で。

○達入　買つて出ること。

○骨箱　通言、口のこと。

○蚤の卵　小さな事。

○金神長五郎　俠客の名。熱の白兵衛も同上。

○釣鐘彌左衛門　俠客の名。「關東血氣物語」に見ゆ。

○出端　出際。
○つらね　長大獨白。
○惡態　惡對。惡口。
○引ばり合て　二人の見え。
○壬生狂言　物を云はねはなり。
○正脈　常の脈。本當の所。醫者の語より轉じたるなり。
○只の立役　荒事師ならぬ立役。
○助高屋　三代目か。

第一なものだつけ。今ぢやア荒事師も少いが。荒事を見る人もすくない。荒事師が一息フッと吹くと二十人ばかりのぱい〳〵役者が揚幕の方へ吹とばされる。イヤハヤすさまじく勢を取たものさ。今時そんな事をしてみなさい。見物がだまつてはゐないサむかしは男達などの※出端には。※つらねといふものが有て。※惡態をなが〳〵と云たものさ。男達にかぎらず。すべての役につらねといふものを長たらしくいふを見物耳をすまして聞居たもんだが。當時はきく人もないから。いふ役者もなし。兎角てきはきと早手まはしな事がはやる世の中。夫だから御覽じろ。團扇賣のせりふだの。たばこ賣のせりふだの。朝比奈のつらね。對面のつらねなどといふものが癈切た。今時の對面のつらねは短くつまんだものさむかしのやうに面白い文句をなが〳〵とは云てゐぬはさ　中六「むかしは優長だからつらねやせりふを掛合てゐたらうが。今ぢやア流行おくれだ　あは民「さうよ。其ひまにはだんまりの幕か何角で。三人の出合小きびがいゝぜ　古左ヱ門「それだから今の衆は對人になられぬ。役者が三人出てだんまりとかがんばりとかで。何かわからず※引ばり合て幕をちよいとしめる。とんと※壬生狂言を見るやうで何のまねか根からわからぬ　中六「あれがおめへ後の幕の條にならア　古「條になるといふが。こちとらには解せぬことだらけ。今おまへ敵役も實事師も出た所ではわからぬはさ。わたしらが若い時分は。敵役の面が藍隈とやらいつて子。彼ソレ隈ゑどりが　あは民「ヘン隈取といひなせへ。隈ゑどりだけ古風で素ッぽひ　古「ハテサ。爰が※正脈だはさ。ソコデ。藍隈でなければ赤ッつらさ。夫だから舞臺へ出るとすぐに敵役としれやすい。扨また立役の荒事師は赤い筋隈又は赤つら。ソコデ。※只の立役が目のふちへちよいと紅を付たものさ　中六「そりやア金魚隈といふのだが。いまぢやア目隈をいれる者はねへ。門之助や今の※助高屋が若盛

の頃までさ。わつちらがしつてまでも嫁風廣右ヱ門や天幸や勘左ヱ門などが敵は藍隈でしやした。嫁風は藍隈といつて青筋をチリ〳〵と縮らかして入たものさ。大秀鶴もはじめのうちは藍隈でしたさうだがわつちらが覺ちやア。マア秀鶴あたりから白面になりやした　㐂「それだから今は敵も立役も白い面や薄肉とやらでするゆゑ。孰が實か惡かわかりませぬ。かはつたことになるものだ子　きく右ヱ門「それにまだありやす。まだ〳〵おめへそんな事ちやアねへ。此方等が一才子共の時代にやア。大詰といふものが有たが。近頃はさつぱりやめた　㐂「さやう〳〵。ア大詰といふものははなやかな能物さ。惣座中の役者がのこらず出て。兩大將が馬に騎て左右に立ならぶ　きく「再會〳〵とかいふ事をいつて兩方がにらみ合ふ子　㐂「さやう〳〵。止なん〳〵で不動の押出しや。宇賀龍とか土蜘蛛とかいふものゝ押出し。イヤハやはなやかとも云はう樣がなかつた　きも「おめへはおらから見ちやア年下だからしりなさるめへ。大栢筵を見なすつたか　㐂「アイサかすウかに覺てゐます　きく「なんのか大詰だつけが。舞臺いつぺいの大島臺に役者のこらず乘て居ると。それが段〳〵せりあげになると。下から大栢筵が大荒事でせり出しさ。そのおめへ大島臺を大太刀の柄の先キへちよいとつつかけて。撮り拳をト腮へ當て。白眼ながらのせり出しだ　おは長「今時そんな狂言を誰が見て居る物か　きく「ハテお主たちはそれだからいかねへ。コレ聽きやれ。そこが狂言と云ものだは。地と狂言との差別はそこだはス　㐂「さやうさ。其栢筵は存ませぬが。やはり其形と見えて。わたしが見たのは家橘羽左ヱ門テ。名人だつた　中六「わつちらもしつて居やす三ツ人形の所作をしたつけ　おは長「近來坂東が度〳〵したのだの　中六「さうよ。坂東は羽左ヱ門の實子だアな　㐂「あれは子どもの頃は吉五郎といひました。扨其家橘がした時は。舞臺一面の寶船で。今おはなし

○嫁風廣右衞門　大谷廣右衞門。[illegible]
○天幸　二代目中島三甫右衞門。
○大秀鶴　初代秀鶴。
○大栢筵　二代目。
○地　自らで行くこと。
○家橘　九代目。
○坂東　三代目、樂善。

○拂扇箱を買ふ　年玉に貰ひしを買ひに來るなり、扇賣は賣る方なり。

の通り惣役者殘らず乘居て。せり上になるト。下から家橘が角鬘の荒事出立で。兩手をぐつとのばして。彼寶船をさし上ながらのせり出しさ。してみれば家橘が時分から最うよほど利發になりました子　きも「狂言と地との差別がかんじんだ　あは民「今ぢやア水も本水を遣ひやす。飯もほんとうに食ひ。芋もほんとうの芋を洗つて鍋へ入れて。ほんとうに煮て見せねへぢやア。見物が合点しねへ。何も角も本眞本式でなくツちやア見ても面白くねへはな　きも「それ見やれ。お主等がやうな人ばかり多いから役者も骨が折らア。後にはどうするつもりだ。眞劔をぬいて敵役の首をほんとうに斬て。濡事もほんとうに惚たらば。女形は只の女がするやうになるだらう。時の鐘も銅羅をたゝいた物が本鐘になる。鉄炮もはめをどんとたゝいたつけが。今ぢやア竹筒へ焰障を籠て。本鉄炮の音をさせる。万事が自由にはなつたが。なか／＼むかしの役者の眞似はできねへ　占「イエサ時の流俗とはいひながら。大卅日の天明に。扇子あふぎ／＼ト賣て來たが。アあの聲をきくと春めいてはつきりしたツけ。廿年來さつぱり扇賣なし　きも「夫よりかは元日の朝ぱら。沙魚賣。福壽草賣。などが來て。さも／＼元日めいた心もちだツけが。福壽草は今も少しはごぜへやす。沙魚賣の聲はいつが世にも聞た事がねへ　中六「そのかはり拂扇箱を買ふものが四日目から歩行やす　占「拂扇箱はございトいふ聲が松の内から聞こえるが。扇子／＼とは大きな違ひさ子　きも「何事も氣の早いとさ。納豆を見なせへ。わしらは冬でなくては食ねへもんだと心得居るに。ちかごろは八月のはじめから納豆汁だ　占「さやうさお前。霜月頃にたべたいと思つても。もはや納豆／＼ウの聲もしませぬ　イヱそれについておはなしがある。お江戸に産れた有がたい事には。年中自由が足る。初物は一ばんがけに食ふなり。その外青物にせよ。魚類にせよ。四季ともに是一

○植つけ　田植。

○はき場　はけ場。賣捌く場所。

○せきの山　行き止り。

○手之三陰云々　三陽は太

種無いといふものがございませぬ　きも「それだから榮曜にほけてさま〴〵のごたくをつくすだ　占「イエサ何なりとも四季に絶ず。扨又孔方さへ出せば一切用を足す所ゆゑ。お江戸に產れた衆は豆が何時出來る物やら。芋は何時に實の入るものやら。旬をしりませぬ。植つけがいつごろで苅時がいつだといふ事もむちや助さ。おまへ。わたしが先達て去る所へ參つたが其國は魚がめつさうに下直さ子。此位ある。イヤほんに魚尺は取らぬ物だといふが。何でも引立られねへ程の鰹が三十六文さ子。おまへ。肝の潰れた話だ子。なか〳〵五人や十人で食切らぬほどの大鰹が三十六文だから。片身骨付の方を二拾で買てさし身にした。サ爰がおつさ子。かんじんの大根おろしといふ所が大根がない子。不自由だて。爰らの所を江戸の衆に聽せたい子　きも「中六もあば民もよく聽きやれ。さういふ利屈だア　占「子。外の國は不自由だ子。それから大根を買ふには道の六里も行ねばないといふが。サア爰だて。ソレ人を雇ッて買にやつた所が其日の間に合ず。又合た所が日雇錢のすくな〳〵も百五十もやつて。大根の直が一本六十四文もせう。都合で二百二三十も出して大根を買ふに。鰹は一本三十六文だハ、、、。イヤこんな相違な事も無い物さ子。ぶり〳〵する鰹が一節九文さ。それで其土地が海へ僅一里あるどうもはき場がないから自然と安く賣る。そこは又お江戸のありがたさには。海へ一里ある所で御覽じろ。江戸前だと云てお直段が猶貴いさハ、、、。旅をして御覽じろ。たとひ錢金を積でさわいでも。ういつらいめを見るから身の藥さ。おまへがたは大山參に御神酒を納に行くか。成田さまへの旅位がせきの山だらう。歩て見なさい。修行になるとが大分ありますよつ　トいふをりから風呂の中にて學頭の坊の聲とおぼしく　●十四經をさらひながら八人藝の聲いろをつかふよほど氣の輕き座頭と見えたり　めくいち「手之三陰從藏走至手　手之三陽從手走至頭。足之三陽從頭下走至足　足之

三陰従足上走入腹ツ。テコテンテコ〳〵テン〳〵コレ権助ヤ。どなたかお出なすつたではないか　へんじ「ハアイトン〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵　トあし音のまねして風呂の中のはめをたゝき　トン〳〵〳〵トトトン「ハイ隠居爺が來ました「ナンダ隠居爺コレどうしたもんだ。あれほどいひつけておくのにぞんざいなやつだ。御隠居さんがお出なさいましたといふものだ。そりやアまアいゝが早く爰へお通し申せ「御隠居さんお出なさりまし　いんきよの聲にて「大分寒いの「お寒うござります「御隠居さん。いたこのさわぎはどうでござります　いんきよのこゑにて「いたこのさわぎはよからう〳〵。でつちの聲にてキイロナル聲　よからう〳〵ッ。いたこのさわぎも氣がつゐへ齒もなくつて「だまつ居ろ小僧。サア〳〵潮來のさわぎだ権助も來い　権助のこゑこゝ迄にて「いたこのさわぎイ。わしもうたひやせう「てめへもうたふかさわぎを。でつちのキイロ「権助がうたふもをかしいツ「隠居ぢゝいと云てしかられッ　小僧だまつ居ろよ。てめへどうもならねへ。でつちのキイロ「※だまりの天神ツ「よくしやれる小僧だ「ア。テコテンテンテコ〳〵テン〳〵「づなこい〳〵。でつちのキイロ聲「アこい〳〵こい〳〵。犬をよぶやうだツ「小僧だまつ居ろよ　でつちのキイロ聲「だまりの天神ツ　トいひながらてぬぐひを持かへてあたまをこすりながらまめ成に　手三陰從藏走至手。謂手太陰起中焦。至出大指之端　○手少陰。起心中。至出小指之端。ツ「テコテンテンテコ〳〵テン〳〵「アこりや〳〵〳〵〳〵「アトン〳〵トトントン。トはめをたゝいて大さわぎなり　古「御覧じろさま〴〵な藝者がある子　中六　湯の中で八人藝もをかしい　きも「打遣ツておきやれ。心がけのいゝ盲だ　あは氏「心がけの能といへばあの盲都ほど勘の能者はあるめへ。マア獨でさぐりながら月代を剃るし。それから二ツばかりの兒を抱て湯へ入るが。イヤ奇妙よ　中六「手巾を指に巻て口中を洗て遣る塩梅なんぞはうめへもんだ。目あきはかなはねへ　きも「盲目が京へ上ッて。

陽、少陽、陽明、三陰は太陰、少陰、厥陰、假名がきの十四經もあるが、漢方醫安西安周氏に通俗說明を求めしに、易說の陰陽を以て宇宙成生の原理を說明するので、大宇宙小宇宙の思想より、人間の氣血の全身運行を陰陽の二種として、それに各三種あつて、三陰三陽の六つが、手足の脈にあつて都合十二、其外奇絡が二つあつて、合せて十四經と申す、此三陽三陰を現代醫家の血管にあて、陰を靜脈とし、陽を動脈として說明する人もあるが、血管とは同じからずといへり。

○だまりの天神　鉛の天神のもぢり。

○「磨たら」の狂歌　一本亭芙蓉花の作。
○俳諧哥　狂歌。
○同字病　一首の中に「玉」の字いくつもあれはなり。
○かはかし　貪ること。

膝行松が讃岐の金毘羅さまへ參つたを見ちやア。此方等はいくらはねへぜ。てめへ等もちつと性根魂を磨きやれ。天明年中の狂哥に「磨たら磨ただけにひかるなり性根玉でも何の玉でも」トいふ狂哥があつた　トいふはから江戸風の俳諧うたをよむ男俳諧亭可詠といふ人「なるほど寶珠をべつたりと書て。性根玉の哥がござへやした。しかしあれは上方の狂哥で。ぐつと古風な体さ子。天明年中の哥でも江戸はあゝぢやアござせん。別して當時俳諧哥の調一面に行はれるから。其眼で見ちやア小兒の戯れ。一向取に足らぬ子。あの哥の返しに相應な哥をよみやした。讀人はしりやせんが。

「睾丸は磨たとても光りなし。こんにやく玉と屁玉人だまス。

同字病はあるが能返哥だ子。狂哥といふものはおそらく江戸にとゞまつた子。近年ます〳〵ひらけて來たから。いよ〳〵高上になつて來やした。上方のさる御方の御哥だがまことに甘心といふは俳諧哥で。

「一ツつきてあひだのあるは鐘撞も、心あり明の月や見るらんサ。

どうも妙だ子。兎角素人は狂哥も落首もおなじ様に心得るから是にてあやまる。儉約と悋嗇は水仙と葱の如く。形は似て非なるもので。則ち狂哥落首この通りでござへす。中にも地口を交て狂文を書たりに狂哥を咏だいする者があるから初心の者に毒を流しやす。トいふた、から風呂の中[illegible]　あくいち「コリヤ〳〵〳〵〳〵朝來出島はさて色所。アきた〳〵〳〵〳〵　うたよむ「ヤ是は殺風景だぞ。妓に俗事を談ずるよりよほど上なるものだ　トいふ所へかみ方ものけち勤わらひながら入り來る　けち「イヤア皆さんお揃ぢやナア。番頭さん。一寸一盃湯を仰付られませ、此薬鑵に半分ほど御無心ぢや　はんとう　又かはかしか。ひさしいものさ　けち「ハテ其様にいはんすな。なんぼも涌てある湯ぢやはい。私が内で涌すものなら六文が炭は入るはい。おまへ所では薪焚て

○壬生狂言のお助踊　壬生狂言は物言はざれど、お助踊は物言ふ。凶年に江戸附近の農村より來る物乞ひなり。

大込に涌すさかいなんぼもかゝらん　ばんとう「イ、エなりやせん　けち「ゑらい毒性なア。　トいひながらながしもとまでするりとすべる　南無三仕舞た。こりやもう辷り賃をこちへ取らんならぬ　トいひツヽよび出し口より湯をくみわけて持來り　ヤ番頭さん。其代に見やんせ。今に爰へ來うがナ。わしが隣の藥種屋の苦九郎めが。あまり毒性な奴ぢやさかい。最前の舞笋食した　ばんとう「何にして食はせなすつた　けち「最前の茄子を松もどきにしたはい。其あまりへ舞笋入れて振舞ふたら。ゑらふうまい云て食て仕舞た。まだマア酒飲居るさかい。ちやつと外した　トいふ所へ藥種屋の苦九郎入り來る　▲この男平生陰氣にてにが虫を食つぶしたるごとくわらひもせずものもいはずおもしろくもなんともない人なり　にが九郎「イヤけち助さん。おまへはいつの間に爰へ來なすつた。ヤレ〳〵〳〵酔たぞ〳〵。ゲイプウ。ア、只今は大きに御馳走。斯能心もちに酔た所を湯へ入て醒すは惜しいもんだス。ゲイ引ウツプウ。今から一寸往く所がある。チヤ〳〵此手がひとりでに上へあがる。ヲヤ。またこつちの手がアレ〳〵〳〵。足が上つた。ヲヤ〳〵〳〵。こいつはどうしたものだ　ばんとう「おめへの形は壬生狂言のお助踊ときてゐる　にが「アレ〳〵〳〵むせうやたらと踊る。コリヤどつこいな。是はしたり。止ようとおもつても。アレ〳〵〳〵どうも踊ッてならねへ。ヲヤ〳〵〳〵なぜ此様に踊るだらうか。おれにも氣がしれねへ。アレサ〳〵。をどるめへとおもふほど意地わるくアレ〳〵。手が〳〵。コリヤ〳〵〳〵どつこいさ　ト舞笋のきざくあらはれしきりに踊り出す、此まひたけを食ふたるものはかならず舞ひをどりて後に正体をうしなふよしいへり　▲此をりふし風呂の中はめくいちが八人げいのはやし　めく「よい〳〵〳〵よい〳〵〳〵きた〳〵〳〵これはいさ。権助の聲にて「さア。さア〳〵〳〵。テコテントン。テコ〳〵テン〳〵　トひやうしにつれてにが九郎いよ〳〵踊る　にが「コリヤ〳〵〳〵どつこいさ。サア〳〵〳〵最う〳〵をどるぞ〳〵。今では段〳〵おもしろくなつて來た　めく「コリヤ〳〵〳〵〳〵〳〵　にが「サア〳〵〳〵〳〵　めく「よい〳〵〳〵。よい〳〵よい〳〵　にが「きた〳〵〳〵これはいさ。

めくいち「テコテントン。テコ〳〵テン〳〵　めくいち「手三陰　にが「これはいな　めく「從藏走至手　にが「とことまかしてよやさのさ　めく「手三陽は　にが「がつてんだ　めく「手より走て　にが「よやまかせ　めく「足の三陽　にが「あれはさのさ。コリヤ合点だ　めく「頭が走つて手が踊る　にが「これから拍子でやつてくりよ　めく「ヲヽさてそこらは合点だ。足の三陰足もとから　にが「ひよこ〳〵をどつて腹に入る。ヨリヤおかげでわつちは腹が減る　めく「ソリヤおでゝこすてゝこおでゝこでん。と唄ふも舞ふも乗地の二人。狂言綺語の戯れも。三編すでに御意に協ひ、是非四編目の御望に。チツトまかせの早合点。作者も倶に浮き立て。

机上に筆を踊らすのみ。

譚話浮世風呂第四編卷之下畢

浮世風呂四編跋

式亭主人は鳩車竹馬の友なり。性素より拙辨。生平の茶譚殊に鈍し。故に人呼で面白くなき人とし。且話のなき人とす。賈客にして騷人。野暮にして在行。居は市中にありて自ら隱れ。躬は俗間にありて自ら雅なり。言語を通めかさず。妄に陳奮翰を吐ず。形容を睟がらず。假にも利屈臭を論ぜず。ごぜへすの

○唄ふも舞ふも乗地の二人　「歌ふも舞ふも法の聲」のもぢり。

○鳩車竹馬の友　幼時よりの友。

○在行　しにせ、仕做。

○陳奮翰　むづかしい事。

○ごぜへすの結交　ぞんざいな交際。

○茂叔　周茂叔。

結交。敬して闘け。来玉への招待。辭して到らず。陰物ならず陽氣ならず。かた〳〵よらずかたよらず。凡中位の好男なり。適硯にむかへば。滑稽舌上に溢れ。詼諧筆下に走る。嗚呼洒落たるかな。洒落たるかな。茂叔が胸中式亭の腹。恰も光風霽月の如し。云爾

花川戸の隱士　金龍山人書

昭和十一年二月十五日印刷
昭和十一年二月二十日發行

評釋 江戸文學叢書
滑稽本名作集

著者　東京市中野區文園町二十六番地　三田村鳶魚

發行者　東京市小石川區音羽町三丁目十九番地　野間清治

印刷者　東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ二　井上源之丞

印刷所　東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ二　凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市小石川區音羽町三丁目十九番地　大日本雄辯會講談社
（振替東京三九三〇番）
電話牛込(34)代表　五三〇〇番　六一〇〇番　六二〇五番

（天海地製本）

昭和十一年二月十五日印刷
昭和十一年二月二十日發行

不許複製

評釋江戸文學叢書
滑稽本名作集

著者　東京市中野區文園町二十六番地　三田村鳶魚
發行者　東京市小石川區音羽町三丁目十九番地　野間清治
印刷者　東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ二　井上源之丞
印刷所　東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ二　凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市小石川區音羽町三丁目十九番地　大日本雄辯會講談社
（振替東京三九三〇番）
電話牛込(34)代表　五六六〇〇〇番　三一二〇〇五番

（天海地製本）